

---

# 異世界日本近代史 ~ 第七独立機動艦隊奮戦記 ~

新米士官

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界日本近代史〜第七独立機動艦隊奮戦記〜

### 【Nコード】

N3636F

### 【作者名】

新米士官

### 【あらすじ】

ほぼ同じ歴史を歩んでいた異世界。しかし第一次大戦終結から徐々に変わっていく。そしてある少年少女の出会いが日本を世界を歴史を大きく変えていく!!

異世界日本近代史／第七独立機動艦隊奮戦記／プロローグ（前書き）

どうも、作者の新米士官です。新人なので誤字脱字があるかと思  
いますがそこはご愛嬌を。実は私は高校3年です。受験生なの  
に何してるんでしょうか…（苦笑）。新人ですが頑張っていきま  
す。よろしく。

## 異世界日本近代史〜第七独立機動艦隊奮戦記〜 プロローグ

ある世界、仮に異世界Aとするが、我々の世界と瓜二つのように似ている。

しかし、この異世界Aの太平洋の面積は我々よりも広く、なおかつ、オーストラリアとは別の大陸もある。

歴史は第一次世界大戦までは大きな違いはない。

しかし、第一次大戦終結を契機大きく変わっていく。

そして、この物語はある少年少女の出会いから始まる！

異世界日本近代史／第七独立機動艦隊奮戦記／プロローグ（後書き）

次から本編です。なおこの世界のごとは小説で順次説明していきます。

いよいよ主役の登場します。

1936（昭和11）年1月4日

神戸海軍士官学校

「お〜い、福本」

廊下で1人の生徒が前を歩くもう1人の生徒に声を掛ける。

「なんだ〜遠地」

「木村教官が呼んでたぞ」

「…わかった」

その生徒は踵を返すと、呼び出した主のもとへと向かった。

この生徒の名は福本大介<sup>ふくもとだいすけ</sup>2年生で年は16である。

この学校では成績も良く、素行や態度、挨拶など問題のない生徒で、軍人としての立場を十分理解していた。成績が良くてもそれを鼻に掛ける様子もなかった。ただ英語の成績は悪かったが…。それと時たま暴走する時があるがそれも後に解るだろう。家族は両親だけで農家出身。彼だけ特別に軍刀の携帯を許可されている。

コンコン

「どうぞ」

「失礼いたします」

ガチャ

パタン

「福本大介来ました」

「うむ」

「何のご用意でしょうか」

「実はなちよつとばかしたいへんなことになったぞ」

「はあ？」

なんだろう？と福本思っていた。「まあ、単刀直入に言うと明日見学者が来る」

これが視察だと言うなら解るがなぜ見学がたいへんなことなんだと思っただ。

確かに突然ではあるが？

「なぜ見学がたいへんなことなんですか？」

「うむ、実はエステロール王国の転学希望者が見学に来るのだよなるほど、それは確かにたいへんなことだと福本は思った。

「しかし、なぜ本校を？」

「まず第一に本校が男女共学だと言うこと」

「え、も…もしかして…」

「そう、女性だよ」

マ…マジかよ、おい…。

「しかし、なぜ本校に？それこそ江田島の方が…」

「第二に貴族だから」

「貴族だから？」

「本人の希望らしい」

わかるようなわからないような……。

「それで自分は何を？」

「うむ、彼女の御迎え及び案内だ」

「は…はい……」

福本は驚愕あまりすっとんきよな声をあげた。

次号へ



案内を任された主人公の苦悩し、（ある人）に相談する。

ご意見感想お待ちしております。

異世界日本近代史〈第七独立機動艦隊奮戦記〉 エステロール王国（前書き）

登場人物紹介

木村教官

本名木村昌福

きむらまさとみ

実史では「奇跡の作戦」のキス力撤収

作戦の活躍が有名な海軍将官。

この小説では福本の教官とゆう

設定から始まっている。

あだ名は（髭のシヨーフク）

八の字髭が特徴。

現在の階級は中佐。

「うーん？」

福本は困っていた。

「どうしたものか……」

あの後渋々承知したものの

「案内はどうしますか？」と聞いたなら木村教官は、

「きみに委すよ」

と言われた。

「はーはー」

彼は女性が軍人になることについて文句どころか奨励してもいいと思っていた。一応試験的と言うことで女性の軍人採用はしていたが数は少ない。

総力戦の観点から見て男女ともに士官は増やすべきだとも考えていた。

なお江田島は女性の生徒の数は神戸よりも少ないが入れれる。

「えーと」

彼は頭の中でエストロール王国の情報を出していた。

エストロール王国

第六大陸と今のところ定着しつつある大陸の半島国家で、日本とは第一次大戦中の頃から付き合いのある国家だ。

きっかけは大戦終結後この国が近代化を推進し初めたからだ。

1919年のヴェルサイユ条約の頃の王国の工業水準はイギリスのあの産業革命が終わったばかり、

と言う状況だった。

なぜ王国が近代化を図ったのか、と言うとこれには日本が大きく関わってくる。

日本海軍は南洋諸島を占領すべく艦隊を出していたのだが、その内の一隻が漂流中の小型艦艇を発見、乗組員を救助したのだが、この艦艇がエステロール王国の艦艇だった。

これによって王国と大陸の存在が明らかになった。

一方、救助された乗組員は自分達の艦艇と見比べ感じの違うので色々質問してきて初めて自分達の工業水準の低さを知ったのである。海軍は救助した乗組員をどうしたものかと考えた挙げ句とりあえず王国に送り返し、それとともに会談を持ち掛けることにした。

数日後、エステロール王国の港町、パトミナスに入港、艦隊司令が王国と会談をもちその後、両国は特使を派遣、大戦中は交渉し、日本は王国の近代化に協力、王国は資源の供給し、大戦終結後、日本が仲介し、連合国に王国を承認してもらえよう協力する事をお互いに約束した。つまり、近代化を推進しているわけは日本と出会ったことにより刺激を受け、日本に追い付こうとしているわけだ。

「う〜ん〜ん〜ん？」

福本は貴族が嫌いと言っわけではない。

彼は人柄を見て判断するタイプである。

しかし、今回はあまり接したくないことなのでどう接したものか？と困っている。変に接したら嫌に思われだろうし、丁寧過ぎても変に思われかもしれない。

「う〜ん〜ん〜ん？」

そして困った挙げ句、

(そつだ 『あの子』に相談してみよう)

そして彼は、『あの子』に会うべく棧橋に向かった。

棧橋には係の教官がいた。「なんだ、福本か、しかし毎日来ているな」

「ここに来れば考え事をまとめやすいし、一番のお気に入りの場所なんです」

そう言いながら彼は（入艦者名簿）に自分の名前を書いていく。

「じゃあ、失礼しまーす」そして、艦内に入って行った。

「おい、どこだー？」

福本は艦内で『あの子』を探す。他には誰もいないのに。

「おい、日進どこだー？」

そして彼は艦橋に向かった。

「あ、見つけた」

艦橋には一人の少女が立っていた。

腰には軍刀、服はなぜか士官用の軍服、髪の色は金髪で、肩のところで切り揃えている。着物を着せても十分似合いそうな少女だ。

「ここにいたのか、日進」福本が声をかけると

「うん」と返事が返ってきた。

彼女の名前は日進。

この装甲巡洋艦『日進』の艦魂である。

次号へ

作者「いや、やっと艦魂を出せました。」

福本

「遅くありませんか？」

作者「読者の為に説明文を書いたのですが、思ったより長く

なるとは……。」「福本「それでは仕方がないですよね。」

作者「さて、本編を初めましょうか。」

福本「そうですね、それでは皆さん」

作者「本編の始まり、始まり」

異世界日本近代史 第七 独立機動艦隊奮戦記 艦魂日進と相談

装甲巡洋艦『日進』

準同型艦として『春日』がある。なお彼女の髪の色が金髪なのはイタリアの造船所で造られた為だ。

日露戦争のあと、1922年のワシントン会議で海防艦籍に編入、1935年に除籍、同年、46センチ砲の標的の為に回航中転覆沈没。とゆうのは実史の話で、この世界では1935年の除籍協議中に神戸海軍士官学校の開校にあたり練習艦が必要になり日進の除籍延長及び練習艦籍編入が決まったのである。

「ところで、福本どうしたの？」

日進が聞いてきた。

「ああ、実はな……。」

そして彼は自分が来た理由を全部話、自分の考えや、見解を全部言っただけの答えを待った。

少し彼女は考えていたが、やがて顔を上げると、

「そうね、普段通りに接したらどうかしら。」

「だ、大丈夫かな〜」

「大丈夫、大丈夫そっちの方が案外いいかも知れないよ、だって同級生になるんでしょう？いつか話こともあるかもしれないし。」

「うん、わかったそうしてみるよ。ありがとう。」

「いえいえ、どういたしまして。」

「じゃあまた、明日。」

日進の

「じゃあ」の声を聞きながら彼は艦を出た。

福本は部屋（神戸士官学校は個人部屋式）に戻ると明日の事を確認すると、今日は早めに休もうと、考え食事をとるため食堂に向かった。

その頃、一機のダグラスDC-12旅客機が日本に向かって飛んでいた。翌日には運命の出会いが待っているとも知らずに。

次号へ



異世界日本近代史 第七独立機動艦隊奮戦記 艦魂日進と相談（後書き）

作者「艦魂の『日進』さんです。」 パチパチパチ 日進「ど  
…どうぞよろしくお願いいたします。」 福本「日進、そん  
なに緊張しなくても大丈夫だよ？」 日進「で…でも」

作者「日進さん気楽に行きましょうよ、気楽に。」 日進「  
はい、ところで作者さん次号は？」 作者「次

号は、本編の最初の目玉、福本君に運命の出会い編です！！」

福本「て…俺かよ!？」 作者「そりゃ、

主役だもん」 日進

「どんな展開になるかは次号のお楽しみに!!」 作者「それで  
は皆さんご意見ご感想お待ちしております」

異世界日本近代史〜第七独立機動艦隊奮戦記〜 運命の出会い（前書き）

登場人物

日進 にっしん

好きなもの

平和

話合い 春

日 山本五十六

嫌いなもの

の 戦争

装甲巡洋艦日進の艦魂

実は山本五十六のこと

とが好き

姉に春日

がいる

異世界日本近代史 第七 独立機動艦隊奮戦記 運命の出会い

1月5日 瀬戸内海上空

ダグラス DC-2 旅客機内

「はー…」

1人の16くらいの少女が座席でため息をついていた。髪は水色、今は後ろをゴムでまとめているが、解いてしまえば肩より少し下迄延びていそうだ。

彼女の名前は、アーネスト・レリル・マリーダ

エステロール王国出身の貴族のお嬢様である。

彼女には両親の他に2人の姉がいる。

父親は軍人貴族で、今は海軍の増強に熱心に取り組んでいる。

その父から、今年の12月の中旬によばれ、

「突然だが、日本に行ってくれ。」 「はあ？」

この後、ケンカ並みの論争をしたのだが、彼女が折れたため終了した。

なぜ、彼女が行く事になったかと言うと座学の成績がトップだったから。

彼女は親が軍人だから自分も軍人、と思っていたのだが父が海軍に熱心なのでそのとばかりを受けて海軍軍人を目指していた。

なお、彼女が日本に行く事にしたもう1つの原因は両親が婚約、婚約とつるさいから、そんな声を聞かなくて済むからだ。

そんな事を思い出していたがうつとうしいので消していると、

「本機はこれより神戸空港に着陸いたします。シートベルトをご確認ください」と放送がかかった。

いよいよ、日本の地を踏む、今回は下見だけど、どうでもいい、あんな声を聞かなくて済む。 と思っていた。

「あれだなあ」

福本は待機場から例の機体を見ていた。

その機は見事な着陸を見せながら機体待機場に向かってくる。

「さて、行きますか。」

彼は機体へと向かった。

シートベルトを外し、荷物を持って外にでる。

既に他のお客さんは機体の外に出ていく。

外に出ると青空が広がっていた。

そこに同じ年位の少年が走ってくる。

そう言えば、学校の方から生徒を1人寄越すと言っていたっけ。

そこで私は彼が来るのを待った。

あの子か？ 他には……いないな。さて、どんな子だろうか？

そして、2人はお互いの顔を見た。その瞬間お互いの顔から目が離せなかった。福本の方は彼女から出る口で説明出来ないオーラを見ていた。

マリィダは彼から出る信用できるだけでなく、今まで同年代から感じた事のない満たされなかったものを満たせてくれるオーラを見ていた。

「えーと、アーネスト・レリル・マリーダさんですよ……?」

「え…ええ、そうよ(照)」

「初めまして、福本大介です、よろしく(照)」

「こちらこそ、よろしく(照)」

「車を待たせているので行きましようか?(照)」

「ええ、そうね(照)」

お互い頬つぺたが赤く染まっていることにきずかず2人は車に向かって行った。

次号へ

異世界日本近代史 第七独立機動艦隊奮戦記 運命の出会い（後書き）

作者「お互い知らぬ間に意識しているようですね」「日進「密かにラブラブになってるね」

作者「さて、

次号は神戸士官学校案内編です。」「日進「学校がなぜ作ら

れたか説明します。」「作者「新キャラも出す予定

です。」「日進「それでは皆さん

ご意見ご感想お待ちしております。」「

## 神戸海軍士官学校の設立（前書き）

作者「今回は神戸士官学校がなぜ設立されたのかをかいつままで説明します。」日進「予定通り新キャラも出ます。お楽しみに。」

## 神戸海軍士官学校の設立

タクシー車内

「えーと……」

「なんですか？」

福本はマリィダを待たせていたタクシーに乗り込ませ士官学校へと向かっていた。

「名前のことなんですが……」

「名前？」

「言わずらいというか、長いから、そのー……」

「だから？」

「…マリィダ、でいいかな？」

「ええ、いいわよ」

マリィダはその申し出に喜んで承諾した。

なぜ、彼女がその申し出を承諾したかと言うと、彼女の家が貴族でも上級貴族のため、あの言いにくい名前をいつも呼ばれていたのが普通のようにマリィダと、呼ばれてみたいと思っていたからだ。( )  
なお、この事は在学中に福本達に話ことになる。( )  
そして、車は士官学校へと向かっていく。

### 神戸海軍士官学校

この士官学校は昭和10年に開校した学校だ。

第一次大戦に日本陸海軍はヨーロッパに士官を送り、新兵器と総力戦視察をすることにした。

これは、もし日本が戦争をする時の参考にするためだ。

この時、日露戦争の時と同じく士官不足に陥る可能性があるかと、報告も見受けられた。



余談だが、潜水艦と通商破壊とその防御方法の研究提案もされている。

しかし、昭和に入るまでこういった報告や提案は忘却され、日を見ることはなかった。

昭和に入り、1930（昭和5）年ロンドン海軍軍縮会議の報告において、報告資料の中に前記の報告・提案書が混ざっており、たちまち天皇の目に止まり、士官を増やすため神戸海軍士官学校設立となった。

「前方と右側は校舎、左側にあるいは寮になっています。」  
到着後、すぐさまマリダの荷物を持ち、案内を始める福本。

「どうしますか？先に荷物を置いて校舎を見ますか？」

「いいえ、このまま校舎を見ようと思うけど。」

「いいですよ。じゃあ行きましょう。」

と向かおうとすると、2人の人物が話ながらこちらに向かってくる。

「あ、遠地、市丸教官」

「あ、福本」

「おお、福本君か」

「どうも、教官おはようございます」

「うん、おはよう。ところでその子は？」

「はい、実は……」

ここで転学のことと、マリダのことを紹介する。

「そうか：おっと失礼、私はこの学校の航空教官の市丸だ」

「砲術科の遠地です。よろしく」

「こちらこそよろしく」

「おっと、校長に連れてくるよう言われていますので」

「ああ、またあとで」

「それでは失礼します」

福本とマリィダは校舎に向かっていった。

次号へ

## 神戸海軍士官学校の設立（後書き）

作者「新キャラの遠地君と市丸教官です。」遠地「福本に言われて来たけどなんで？」作者「だつて準レギュラーだもん。」市丸「ほー、ところで私は？」作者「教官はこの後も2人と遠地君とは付き合いが長いですから。」遠地「え、そうなの？」作者「はい。」

市丸「ふむ、なら栄光なことだな。」作者「さて、2人の学校案内編は続きます。」市丸「それでは読者諸君。」遠地「次号をお楽しみに、ご意見・ご感想もお待ちしています。」

## 短き時間（前書き）

登場人物

市丸教官 本名市丸利

之助（いちまるりのすけ）

実史では「ルーズベルト

に与フル書」で有名な海軍提督。

航空事故で重傷を負うも復活し

た人間。硫黄島で戦死。この小説では福本達の教官という設定か

ら始まる。現在は中佐。

遠地 本名遠地昇（たおちのぼる） 福

本とは入学からの縁で友達。学科は砲術科

（訂正） 福本達は2年生でなく、1年生で

す。4月に2年生になります。

## 短き時間

校長室に見学挨拶をした後案内を再開し、学校のほとんど案内し終えた福本にマリィダが話し掛けてきた。

「そういえば、あの2人つてなんなの？」

「遠地はこの学校に入った時からの友達で、市丸教官は言っていたように航空科の教官です」

「市丸教官つて足でも悪いの？杖ついてたけど。」

「若い頃、航空機事故で、だそうです。」

「そお……」

「これから、どうします？差し支えなければ僕の気に入っているとこがあるんですけど」

「ええ、いいわよ」

そして、あの場所に向かう。

「ここが、お気に入りの場所？」

「ええ、そうですよ。」

そこはもちろん装甲巡洋艦日進である。

今は2人とも、艦内だが。艦橋に向かうと、何故か話し声が聞こえてくる。

構わず、ドアを開けるとそこには日進と……

「木村教官！」

「おう、福本にマリィダさんか。」

何故か登場木村教官。

「木村教官は分かるけど、彼女は誰なの？」

このマリィダの言葉に驚く3人だった。

「解りましたか？」

「うん、3人が驚いた理由は自分が驚くぐらい解った」  
艦魂のことを教えた福本と木村教官。

「じゃあ、あらためまして装甲巡洋艦日進の艦魂の日進です。よろしく。」

「教官の木村だ、よろしく」

「アーネスト・レリル・マリイダです、こちらこそよろしく。」  
その後、何故か世間話にと発展する。

「もう夕方ですね」

「ほんとね」

「今日はもうこの辺にしときますか？」

「そうね、もう学校の方見ちゃったしね」

なお、見学は1日だけだ。「もう少し、生徒が居たら面白かったんですけど。」

「そうなんだ」

何故か会話が續かない。

「あー」

「はい？」

「明日は、町の方を見に行きましようか？」

「え、」

「あ、嫌ならいいですよ、時間無いようだし……」

「いいえ、行きます！」

「いいんですか？」

「ええ、車から見ていたけど、楽しそうだし」

「じゃあ、校長に挨拶した後に」

「ええ」

「じゃあ、明日」

「ええ、明日」

ここで2人は別れた。

明日に大きな楽しみを期待しながら。

次号へ

特別後書き（本編とは関係ありません。）

作者

「た、たいへんだ」福本

「どうしたんですか？新聞なんて持って」

市丸

「待て待て、なんかわしらの新聞と違うぞ」

遠地

「本当だ、天然写真を使ってますね」

木村

「えーと、何々、田母神幕僚長を更迭？」

福本

「論文で濡れ衣？」市丸

「どう言うことだ？」作者

「えーと、ですね…」太平洋戦争と自衛隊、今の日本の事を説明。

全員

「……………」

作者

「どう思います?」

木村

「不審な船舶が居ても何もしないで見逃すのか?」作者

「はい…」

市丸

「独立国なのにアメリカの脛をかじっているのか?」作者

「はい……………」

遠地

「首相が靖国行ったら中国とかが文句言うから行かないだど!」作者

「はい……………」

福本

「しかも、太平洋戦争のことが外国では好評価を受けているのに国民のほとんどがそのことを知らないなんて……………」

作者

「しかも国はなんの反論もせず、中国様が正しいです、て……………」

市丸

「うーん、いくら異世界のことと言えこれはあまりにも酷い。」

遠地

「よし、今夜はそのことについて語り合おう」 全員

「賛成」

さて読者の皆さんは、どう思いますか?

私は更迭は間違っていると思います。

そのことに、ついでに意見もお待ちしています。



## 短い時間（後書き）

作者「次号で案内編は終わりです。」 日進「次は何をやるんですか？」 作者「次は（あの事件）をやる予定です。」 遠地「（あの事件）てなんだよ？」 作者「それは言えません。」 遠地「うーん、気になる。」 作者「その内解ります。」 日進「それでは皆さんご意見ご感想お待ちしております。」 遠地「作者後でこっそり教えて？」 作者「ダメです。」

## 別れと約束（前書き）

作者「運命の出会い編最終話です。」遠地「そんな題名ついてっけ？」「日進「ついてましたよ。」「市丸「ついてたな。」「木村「ついてたな。」「遠地「じゃあ、知らないの俺だけ？」「全員「（こっくり）」「遠地「……………うわー」 全員（哀れだな。） 訂正・前作の前書きの（たおち）は（とおち）の間違いです。

## 別れと約束

1月6日 午前10時

「わあー」

まだ正月の雰囲気を残す商店街。

この時間帯だとお店も開いてだんだん賑やかになってくる。

学校で校長と教官、日進達に別れの挨拶をして出てきた。

そして、約束どおり今町の方を見ている2人。

「なんか、いい物有るかしら？」

「お金、持って来ていたんですか？」

「ええ、上手く抜け出して町を回ろうと思ってたから」

「はあ……」

けど、貴方のせいで抜け出せなかったわよ、と心の中でうれしそうに呟くマリィダだった。

「さて、どこから回り……」

「福本君……」

そう呼ばれ、そちらを向くと1人の男が走ってこちらに向かってくる。

「町内会長……」

「いやー、もうそろそろ来るんじゃないかと思ってたら、べつぴんさん連れて今から家に来い……」

そして、無理やり連れて行かれた2人だった。

そこは、八百屋だった。

しかし、何故か、人だかりができています。

「へえー、そうだったですか？」

何故か、町内会長とその奥さん、そのとりまき達と会話が弾むマリ  
ーダ。

「じゃあ、福本君が有名なのは……」

「そう、去年の夏祭りに出てくれたからだよ。」

「いやー、去年は大いに盛り上がった。」

「マリーダもうそろそろ……」

「あ、もうちょっとここで話しとく」

「じゃあ、外出とくね」

と、言い外に出て行く福本。 実はめちやくちや恥ずかしかったの  
だ。

「じゃあ、皆さんまた」

「おう、また来てくれ、何時でも歓迎するから」

「はい」

タクシーに乗り込む2人。 町内会の人達が手をふって見送って  
くれた。

空港に着くと、旅客機はまだエンジンをかけておらず待機状態であ  
った。

「じゃあ、ありがとう、案内してくれて」

「いえいえ、当たり前ですから」

「……………」

言葉が2人とも続かない。 言いたい事はある。

しかし、恥ずかしいし、もどかしくもあった。

「じゃあ、そろそろ……！！」 行こうとする彼女の右手を福本が掴

む。

そして懐から何かを取り出す。

「ハンカチ？」

「…もう会えないかも知れないから…」

神戸士官学校に来るかわ本人次第だから、行きたくないと言えばそれまでだ。

ちなみに、ハンカチは先ほどの商店街でマリーダが話しに夢中になっ  
っている時に買ったのだ。

「……そんな事ありません」

「え？」

「学校も商店街も……福本君も気に入ってしまったって……」

「……」

「だから、絶対に来ます！」

「……解りました、じゃあハンカチは約束のしるしと言っ事で」

「はい」

機体が飛び立っていく。

福本は敬礼を、マリーダは手をふって。

お互い見えなくなるまで。そして、胸に破れぬ約束を抱きながら。

次号へ

## 別れと約束（後書き）

遠地「この野郎」作者「仕方ないじゃありませんか設定なんですから。」福本「……………」遠地「設定でもうらやましい」作者「大丈夫です。ちゃんと遠地君にも彼女の設定してますから。」遠地「ラッキー」市丸「ところで、次はどんな話にするんだ。」作者「予定どおり（あの事件）を取りあげます。」遠地「（あの事件）て何？」作者「ヒント、日本史の年代の1936年の出来事のところを見てください。」日進「それでは皆さんご意見ご感想をお待ちしております。」遠地「よし、さっそく作者の資料集借りて調べよう。」作者「ご自由に。」

## 2・26事件 発生編(前書き)

作者「いよいよ始まりました2・26事件編です。」日進「異世界だから、どこか変わるんですか？」作者「はい、どう変わるかはお楽しみに。」

## 2・26事件 発生編

1936年2月26日 帝都東京

昨日からちらほら降っていた雪は今や大雪になり降っていた。そんな中を陸軍の兵士達が主に小隊規模で行動していた。この集団を見掛けた市民は多少疑ったもののどうせ満州に新たに送られる部隊だろうと考えていた。そして、未明帝都に多数の銃声が響いた。

神戸海軍士官学校

その時、福本はふと目が覚めた。  
一瞬悪寒のようなものが走ったからだ。  
しかし、それが何なのか分からない。  
周りを見回すが何の変化もない。  
そして、仕方なく通信室に向かうため着替え始めた。

コンコン

「どうぞ」

「失礼するよ」

「福本か、早いな？」

「目が覚めたからな、何かあったか？」

「いいや、なんも」

神戸士官学校は通信士官も養成しているため、技量向上のため、夜間は生徒が当直にあたる事になっている。  
その後、暇な当直の2人と世間話になった。



コンコン

「どうぞ」

「失礼するよ」

入って来たのは木村教官と市丸教官だった。

「どうしたんですか？こんな時間に。」

福本が2人に聞いた。

ちなみに今は7時すぎだ。

「いや、胸騒ぎがしてな」

「え！」

その時、通信が入った。

当直の1人が訳していく。「えーと、海軍省より、各地に打電で

す。内容は……！！」

驚愕の表情に変わった。「どうした？」

木村教官が聞いた。

「帝都駐留の陸軍部隊の一部が反乱を起こしました！！」

この時、部屋にいた全員の表情が氷ついた。

この時反乱部隊は、首相官邸や警視庁など標的を襲いほぼ手中に抑えていた。

しかし、これぐらしか情報がいらず海軍省は注意の呼び掛けと演習中の第一艦隊、第二艦隊を呼び戻すことしか打つ手がなかった。

後は、横須賀鎮守府（司令長官米内光政・参謀長井上成美）が海軍陸戦隊を編成、臨戦態勢を整えていた。

「福本」

「はい！」

「今すぐ、生徒全員を叩き起こせ。緊急事態だ！」

「わかりました」

「当直の2人はこのまま通信を傍受してくれ」

「はい！」

「市丸教官はここで待機してください」

「わかった、木村教官は？」

「わたしは校長と他の教官と連絡をとります」

「では、行って参ります」そう言うと福本は出ていった。

「福本、おはよー」

「あ、遠地！」

寮の出口で遠地と出会った。

「どうした？そんなに慌てて」

「馬鹿野郎！帝都で陸軍部隊が反乱起こしたんだよ！」

「なに！」

「生徒全員を起こすの手伝え！」

「わかった！」

後に2・26事件と呼ばれる事件の幕開けだった。

次号へ

2・26事件 発生編（後書き）

作者「一応経過は簡単に書きました。「日進」この後どう変わるでしょうか？」作者「さすがにそれは明かせません。「???」作者私の出番は？」作者「次号にはちゃんと出します。「日進」え！だ、誰ですか！？」作者「次号でわかります。「???」「ご意見ご感想お待ちしております。」

226事件 経過と新たな出会い(前書き)

長いです。めちゃ長い。飽きないでください。

## 226事件 経過と新たな出会い

「疲れたな、遠地」

「ああ、疲れたな福本」

あの後、生徒全員を起こすことに成功した。

ありがたいことに生徒の半数以上が起きており、その子達が手伝ってくれたからだ。

そして緊急朝礼で校長の口から帝都で陸軍部隊が反乱を起こしたと伝えられた。せのため、事件鎮圧まで、授業中止となった。

その代わり、福本と遠地は情報収集の手伝いをやらされた。

そして今や夕方になっていた。

しかし、その作業の過程で2人は多くの情報が手に入っていた。

反乱部隊は主に近衛歩兵第3連隊・歩兵第1、第3連隊・野戦重砲第7連隊の一部の部隊が青年将校に率いられ事を起こしようだ。

彼らの目的は昭和維新の断行、そして邪魔な重臣の排除だった。

これには、皇道派と統制派の争いも関係してくる。

皇道派は直接行動によって天皇親政を目指すグループで、統制派は軍部統制のもとで総力戦体制を目指すグループである。

今回は皇道派の青年将校が起こしようだ。

彼らは邪魔である岡田首相・斎藤内大臣・高橋蔵相・渡辺教育総監・鈴木侍従長を襲うべく彼らの自宅や首相官邸、行き付けの料亭を襲撃した。

しかし、この世界の反乱部隊は運に見放されていた。襲ったはいいがもぬけの殻だったからだ！

さて、襲われるはずだった人物はどこに居たのか？  
実は石原莞爾の要請で、彼らはある料亭で秘密会談が行われていた。  
内容は今回の事についてである！！

石原莞爾はこの世界でも満州事変を起こしていた。

そんな彼にある情報が入ってきた。

青年将校達が不審な密会や行動をしているとゆう内容だった。

彼は独自に調査を行い青年将校達が反乱を起こす事まで掴んだが、  
いつかは分からなかった。

とにかく、中間報告とゆう事で関係者に集まってもらったら反乱が  
起きたとゆう事だ。

余談だが、反乱発生を聞いて一番驚いていたのは石原莞爾自身だっ  
た。

何はともあれ、全員が無事だった訳だが、海軍としては岡田、斎藤、  
鈴木は海軍大将であり、いくら末遂とはいえ襲われかけたのだから、  
断固鎮圧すべし！だった。

陸軍の方は彼らを行動を支持する皇道派と鎮圧すべしの統制派が争  
っているため意見がなかまともらずとにかく、反乱部隊と接触  
中だった。

「遠地、どう思う？」

「そうだな、まあ、農家の貧困が彼らを動かした原因の一つだろ  
うな。」

世界恐慌により、金融恐慌状態だった日本に更なる打撃を受けるこ  
とになった。その為、日本は満州を生命線！と満州を占領、満州国  
を作ったのだが…。

「確かに、農家が満州占領の恩恵を受けてないな。」

「だろ、だからと言って、反乱起こしても、意味がない。」

「ああ、やるなら反乱じゃなく改革だ！」

「出たな、お前の持論。」

「だって、そうだろ？」

「まあ、間違っではないな。」

「日米が戦うことになってみる、今体制のままだと最初はいいかもしれない。しかし、最後は絶対日本が負ける！」

「しかし、大丈夫かな？」

「なにが？」

「これで皇道派は終わりだ、しかし統制派が暴走しないと見えるか？」

「大丈夫だよ、石原莞爾がいる。しかも、（あの人）がいるだろ。」

「ああ、（あの人）な。」

「それより、これからどうする？」

「そうだな、日進とこ行くか。」

ちなみに遠地は艦魂が見える。

「ああ、忙しくて行ってないからな。」

「じゃあ、行くか！」

日進艦内 艦橋前

何故か話し声が聞こえる。話し声は2つ。

一つは日進、しかし、もう一つは聞き覚えのない声。

「日進入るよ。」

「あ、福本、遠地。」

入ると1人の少女がいた。

「えーと、彼女は？」

「私が見えるんですか！」

「2人とも、見えるんだよ。」  
「そうなんですか、失礼しました。私は高雄型巡洋艦愛宕の艦魂の愛宕です。」愛宕との出会いであった。

次号へ



## 226事件 経過と新たな出会い（後書き）

作者「前作の後書きで出ました、愛宕さんです。」愛宕「作者、出番が少ない！」日進「落ち着いて」。作者「大丈夫です。次号は愛宕さんのトークにします。」愛宕「本当に？」作者「男に二言はありません、それに今回は長くなって出番が少なかったお詫びです。」愛宕「やった」日進「ふう、良かった。それでは皆さんご意見ご感想お待ちします。」

## 愛宕とトーク（前書き）

愛宕 高雄型巡洋艦二番艦愛宕の艦魂

高雄より早く完成し

たためお姉さんになってしまった艦魂。

好きな物・嫌いな物は

小説に書いています。

## 愛宕とトーク

高雄型巡洋艦二番艦愛宕

1930年に完成した妙高型巡洋艦の発展型で、特徴は現在のイージス艦を想わせる艦橋だ。

愛宕は一番艦の高雄より早く完成したため高雄型巡洋艦を愛宕型巡洋艦と呼ぶ人もいる。

容姿は髪の色は黒。

髪型はショートカット。

そして、日進と同じく、腰に軍刀、士官用の軍服に制帽を被っていた。

「初めまして。神戸士官学校の生徒の福本大介です。よろしく。」

「同じく遠地昇です。よろしく。」

「よろしく。けど、うれしいわ。」

「なにがですか？」

「私達が見える人がいたからよ。」

「ああ、なるほど。」

「ところで、何をしにこちらへ？」

「日進さんに今回の現状報告と世間話をしに。」

「そんな事してていいんですか？」

「大丈夫大丈夫。」

愛宕は第二艦隊の旗艦である。

「なんだかな〜。」

本当に大丈夫なのか？　と思う福本だった。

「そつえば、今回の事第二艦隊の艦魂はどう思っているんです？」  
福本がお茶を飲みながら聞いた。

なお、このお茶は日進が出したものだ。

艦魂達は欲しいと思っただら何も無い空間から、出す事ができる。食べ物だと味はするが、お腹いっぱいにはならない。まあ、一種の魔法のようなものだ。

「高雄達は断固鎮圧！って言うてたけど。抑えるのたいへんだっただわ、高雄なんか大阪でことがあつたら問答無用で射つて言うてた。」

「なんつー過激な……。」「

「いつもはそんなんじゃないんだけど。」「

「お姉さんもたいへんですね。」「

「ふふ、ありがとう遠地君。」「

「いえいえ。」「

「愛宕さん、好きな物は何かありますか？」「

「そうね、妹達かしらね。」「

「他には？」「

「甘い物。」「

「ちなみに嫌いな物は美味しくない物とお酒。」「

「日進さん（照）。」「

「まあまあ、落ち着いて。」「

まだまだ、話しが弾むのであった。

「いやー、愛宕さんと話せて良かったな。」「

「ああ、本当に良かったな。」「

そう言いながら寮へと向かう福本と遠地。

「しかし、明日もたいへんだろうな。」「

「明日には第一艦隊の帝都に、第二艦隊は大阪に入港するんだ、ち

よつとは進展があるだろ。」

「どうなるんだろっな？この事件。」

「わからん。上層部次第だろっな。」

次号へ

## 愛宕とトーク（後書き）

作者「どうでしたか？」愛宕「まあ、2人と話せて良かったわよ。」  
福本「ところで作者、こつちの2・26事件は29日に鎮圧するんですよね。」遠地「あと3日もあるのかよ（-|-）」作者「いえ、次号で急展開します！」日進「どう、展開するんですか？」作者「それは次号で。」愛宕「ご意見ご感想お待ちしてます。」福本「あと、艦魂や人物でこうして欲しい！とゆう要望も募集します。」遠地「作者ができるだけご要望にお応えします。」作者「待つてまゝです。」

## 2・26事件編 鎮圧勅命

2月27日

反乱が起きて丸1日が経ち戒嚴令が解かれぬ帝都は、反乱部隊と鎮圧部隊とのにらみ合いが続き、市民の間では戦闘になるのではないかと噂になっていた。

9時40分頃、海軍の第一艦隊が東京湾に入港し、戦艦長門・陸奥の40センチ砲が国会議事堂に標準を合わせた。

しかし、この反乱はあるお方の決断で急展開することになる！！

この日、岡田首相、斎藤内大臣など、この反乱で襲撃から辛くも逃れた5人が皇居に出向き無事であった事を伝えた。

昭和天皇は彼らの手を取り涙を流して無事である事を喜んだ。

その後、陸軍大臣から反乱部隊の決起文を読み挙げていたのだが、天皇はそれを制し、陸軍大臣にこう質問した。

「陸軍は何をやっておるのか！！」　しかも、声を荒げて。

これには誰もが驚いた。

あまり、声を荒げた姿を見た事がなかったからだ。

陸軍大臣はあまりの事に絶句していると。

「未遂だったとは言え朕の重臣だけでなく首相や陸軍軍人が危なく襲撃されるところだったのだぞ！　しかもまだこの帝都の臣民はいつ終わるとも知れぬ恐怖に怯えてもおるのだぞ！　陸軍に鎮圧の意思なくば朕が近衛師団を率いて鎮圧にあたる！！」

この言葉に陸軍大臣は鎮圧の意思を示し、反乱部隊鎮圧の勅命が下った。

正午過ぎ。

反乱部隊の上空にビラが蒔かれた。航空機によって蒔かれている。ビラには『勅命下る、原隊にもどれ!』と書かれていた。

この結果、反乱部隊は鎮圧部隊に投降、この反乱劇は幕を閉じた。天皇にある決意とある士官学校生に新たな改革の種を生み出して。そして、舞台は2年後に移る。

次号へ



2・26 事件編 鎮圧勅命（後書き）

作者「という、訳で舞台は2年後に飛びます。」福本「2年後と言  
うことは、僕達卒業ですか？」作者「はい。」遠地「どうなるんだ、  
俺達は？」作者「それは次号のお楽しみに。」福本「そういえばマ  
リーダは？」遠地「僕の彼女は？」作者「大丈夫です。物語はこれ  
からなんですから。」日進「それでは皆さん、ご意見ご感想お待ち  
してます。」

卒業式あとの宴会（前書き）

題名そのままです。あと新キャラも出ます。

## 卒業式あとの宴会

1938（昭和13）年 3月15日

神戸海軍士官学校

この日、学校では卒業式が行われてい。  
一期生、この学校の初めての卒業式だ。  
1・2年生が3年生と別れを惜しんでいた。

「「「「「乾杯！」「」「」「」

日進艦橋では5人の少年少女が乾杯している。  
卒業式はどうやら終わったようだ。

顔ぶれは福本・遠地・日進・マリィダに見馴れない少女。

「マリィダさん、晴れて日本海軍士官になれて良かったですね。」

「ありがとう、桜ちゃん。」

彼女は千歳桜ちとせざくら、福本達の同級生であるし、艦魂が見える1人でもある。

女性士官の試験編入の数少ない合格者であり、遠地の恋人である！！

「「ちよつと作者！！」「」

2人とも顔は真っ赤である。

ちなみに、マリィダはこのまま日本海軍士官になった。

本人は両国の友好の為と両親を説得した様だが、本命は福本君と一緒にになりたい為である。「ちよつと作者、いきなり出しといて余計なこと言わないでよ（<―>）。」  
こっちは2人に負けないくらい真っ赤であった。

「そういえば福本とマリィダは皇居に配属だつてな。」  
「ああ、白鶴宮明子様のご護衛の為にな。」  
「すごいですよね。女性天皇になるかもしれない人の護衛なんですから。」

この異世界の昭和天皇は白鶴宮明子内親王を生んでいた。

この時点で内親王は17歳であった。

実は昨年（1937）年12月に昭和天皇が急病で倒れ、政務を行うのは無理と判断、唯一の子、明子内親王に譲ることになった。もちろん、反対意見もでたが、昭和天皇の勅命により事態は収束した。

さて、何故福本とマリィダに護衛の役に就いたのかとゆうと。

「確か、同年代の護衛を付けて欲しいってゆう理由でしたっけ。」  
日進が聞いた。

「ええ、だから案外軍刀やら格闘技がうまい2人が選ばれた訳です。」

「マリィダさんは大丈夫だったんですか？」

「ああ、最初はいくら、友好国とは言え外国人が御所に入るのはって言うってただ内親王と天皇が推しきつたそうだよ。」

「もう、いいじゃないそんな話、飲も」

そして翌日、東京行きの汽車に2人は乗っていた。

次号へ

## 卒業式あとの宴会（後書き）

作者「新キャラの桜さんです。」桜「よろしくお願いします。」遠地「いや、春だ。」作者「はいはい。」福本「作者、次号は？」作者「次号は護衛着任の挨拶をちやちやと済ませて、福本君が石原完爾に会います。」マリータ「早速大物に会うわね。」桜「それでは皆さんご意見ご感想お待ちしております。」

## 挨拶（前書き）

前作の後書きで、石原完爾と会うと言っていました。が長くなり次号に変更いたしました。すいません。

## 挨拶

3月17日

御所内応接室。

「よろしいでしょうか？同年代とは言え次期天皇に……」

「わかっております。粗相のないようにいたします。」

「それでは少しお待ちください。」

侍従が出て行った。

昨日の夕方に着いた福本とマリーダは指定されていたホテル（部屋は別々）に宿泊、そして、宮内庁の車の乗り現在に至る。

「ああ、苦しかった。」

「しかたないですよ、御所は礼儀にうるさい所なんですから。」

「わかってるわよ。けどあの侍従しつこすぎよ。」

「わかりますよ。けど抑えてください。どうやら来たみたいですよ。」

「  
ガチャ

扉が開き1人の少女が入ってきた。

「わらはが明子内親王じゃ、よろしくたもれ。」

「失礼します。」

侍従がお茶を置き出て行った。

「……………」



「……………」

「……………」なぜか沈黙。

2人が喋れないのは緊張しているため。（度合いは違うが。）  
しかし、なぜか内親王も喋らない。

ここで福本がなにかを察したのか口を開いた。

「素で喋っていただけでよろしいですよ。」

すると、内親王は笑みをうかべた。

「ふふ、ありがとう。侍従がいるし、まる語使って気を使わせたくなかったからついつい黙っちゃて。」

「そんなことお気になさらずに良かったのに。」

会話がはじまった。

#### 一時間半経過

世間話をしていると、

「そういえば、福本君は民政に興味がおありとか。」

「ええ、まあ。」

「それでは、もしアメリカと戦争になったら勝てると思いますか？」  
2人は驚愕した。次期天皇と言われている内親王だから、最悪の事態を考えるのは当たり前である。しかしまさか直球でくるとは思っていなかった。

「……………」負けます。」

「そうですね、正直ですね。ご機嫌とりならあなたと反対のことを言うでしょうね。」

「あのー、それがなにか？」

マリーダが聴いた。

「あなた達なら石原完爾とつまが合うかもしれないと思ったからよ。」

「……………」

「え！！！」「……………」

「明日の夜、この料亭に行けば会えるようしといたわ。」  
机においてある紙を見てみる。

「明子様、石原完爾閣下とどういったつながりを？」

「実は、統帥権の事で相談したいことがあったの、そしたらあなた達の資料を見て、一度この若者と話してみたい、て言ったの。だから先に予約とらせてもらったわ。」

帝都に来て早々、陸軍の大物に会うことになるうとは、と2人は思っていた。

翌日午後8時

「ここよね？」

「ええ、そうですね。」

指定されている料亭の前で確認し合う2人。

そこに、女将らしき女性が近づいて来た。

「福本様とマリーダ様でしょうか？」

「はい」「はい」

「お連れ様がお待ちです。ご案内致します。」

そして、2人は料亭の中に入って行った。

次号へ

## 挨拶（後書き）

作者「すいません（土下座）。「福本「予約より長くなってしまっ  
たんですね。「作者「はい。「マリィダ「まあ、仕方ないわよ。と  
ころで次号は石原完爾と会つたのよね？「作者「はい。けれど、もう  
1人くる予定です。「福本「誰ですか？「作者「次号のお楽しみで  
す。「マリィダ「それではご意見ご感想お待ちしております。」

会談 上(前書き)

登場人物

白鶴宮明子内親王

お父さん(昭和天皇)が倒れたため、次期天皇に。

結構苦勞人。

好きな物 最近の流

行 お父さん

お母さん

嫌いな物 争いごと

千歳桜

福本達の同級生。

遠地の恋人。

好きな物

海 遠地

嫌いな物

2人の恋を邪魔するもの

## 会談 上

「では、ごゆっくり。」

そう言つて女将が出て行つた。

部屋に居るのは3人。

福本・マリィダ・石原完爾。

「今回お招きありがとうございます石原完爾中将殿。」

福本が礼を述べる。

「福本君、そうゆうかた苦しいのはなしだよ。今夜は陸軍の中将だの海軍の中尉だのなしの個人的な集まりだからね。」

石原完爾

大佐の時に満州事変を起こし、日中戦争には大反対した人物。現在には陸軍参謀次長に就いている。現

リベラル精神の持ち主であり、現陸軍の歩兵主義ではなく、過去に航空本部長に就いていた経験で航空機と戦車など機甲部隊の充実を主張している。

なおかつ、アメリカとの戦争にも反対している。

「そちらのお嬢さんは、アーネスト・レリル・マリィダさんだったね?」

「マリィダ、でよろしいです閣下。」

「さつき私はなんと言つたかね?」

「あ、すいません。」

「いやいや、謝る事はないよ。ところで福本君?」

「はい。」

「君は今の日本のどこを改革するべきだと思うかね？遠慮は要らん。言いたまえ。」

「それでは簡単に言わせて頂きます。まず年功序列の撤廃、陸海軍の相互協力体制の確立、士官制度の改定、女性士官の増員、陸海軍の技術相互交換及び協力開発、最新技術の早期開発、生産体制の確立、補給体制の確立、護衛艦隊の設立、新興企業の資金援助、航空機増産及び搭乗員の大量育成、連合艦隊の拡充、機甲部隊の拡充、特別海軍陸戦隊の拡充、人種を問わず優秀な人材の確保、諜報部の設立。」

ここでマリダと交代。

「そして、民政では、年金制度の確立、労働に関する法律の制定、女性に選挙権を与えること、女性議員が加えられるよう法改正、などと言ったことです。あと大介の付け足しで、ドイツ・イギリスの企業に技術提供の依頼、日英同盟の復活、資源の確保、自動車の増産及び品質の確保なども必要です。」

「しかし、真つ先にやらねばならぬのは、支那事変を早期解決し、その予算を先程言った事に回し、徴兵された、研究者や熟年工を研究室や生産現場に戻すべきです。」

「さすが、目の付け所が違うな。しかも、民政の事を考えつつ、共産主義運動を展開できないよう先手をうつようだな。」

隣の部屋から納得したような声が聞こえた。  
石原完爾がニヤリ、としておもむろに立ち上がり、襖を開けた。  
そこに立って居たのは…。

「永田鉄山参謀総長……。」

次号へ

## 会談 上（後書き）

福本「（あの人）て永田鉄山だったんですね。」作者「はい。」マ  
リーダ「しかし、陸軍の大物2人に会った事になるわね。」福本「  
作者、次号は？」作者「永田鉄山のことについてです。」マリーダ  
「それではご意見ご感想お待ちしております。」

## 会談 下

永田鉄山

現陸軍参謀総長にして陸軍大将。

2・26事件の後、主流となった統制派の舵取りを石原完爾と共に上手くとってきた人物だ。

史実なら1935年に相沢中佐に斬殺されるのだが、この世界では襲われた時に秘書官が持っていた鞆を相沢中佐に投げつけ、顔面に命中、怯んだところを取り押さえられ事なきを得た。

「ところで福本君？」

「はい。」

「なぜ、中国共産党との内戦で忙しい蒋介石が、盧溝橋で日本に戦争を仕掛けるような真似をしたんだろうかね？」

永田鉄山が聞いてきた。

「閣下、それについては2つの可能性があります。」

「何かね？」

「一つは両軍のどちらかが嘘をついているとゆう可能性。もう一つは中国共産党が仕掛けた罠である可能性です。」

「ふむ、それで2人はどちらの可能性があると思うかね？」

「私も大介も中国共産党の罠である可能性だと思っています。」  
マリーダが断言した。

「なぜかね？」

「理由は色々ありますが、そうすれば中国共産党は復活までの時間稼ぎができるからです。」

「なるほど、2人の考えはわかった。石原君。」

「はい。」



「2人に（あの事）を話してもいいんじゃないかな。」  
「閣下、（あの事）とは？」マリーダが聞いた。  
「うむ、盧溝橋事件の真相とでも言ったところかな。この事を君たちの身近で知っているのは山本さんと米内さん、明子内親王だけだ。くれぐれも他言無用にな。」  
「はい！」

その後、石原完爾、永田鉄山に礼を言い帰途についた2人。

「しかし、予測のほとんどが当たってたわね。」

「ああ、それ以外にも大変な情報だったな。」

2人が聞いたのは、犯人が中国共産党である事、実行犯の名前、中国共産党の狙い、石原完爾の情報網、そして、見え隠れするソ連とスターリンの影である。

「よけい、改革の早期実行が必要ね。」

「ああ、2人も協力してくれる事だし。」

夜は更けていく。

次号へ

会談 下（後書き）

作者「どうでしたか？」福本「改革に理解が得られ良かったです。」  
マリーダ「本当ね。」作者「さて、次号は架空戦記で必要不可欠な  
山本五十六が出ます！」福本「今は海軍次官ですよ。」マリーダ「  
何するの？」作者「それはお楽しみに。」福本「それでは読者の皆  
さんご意見ご感想お待ちしております。」

## 独立機動艦隊計画 1

3月24日

一台の車が海軍省から御所に向かっていて、車は海軍の公用車のようだ。乗っているのは山本五十六海軍次官である。なぜ彼が御所に向かっていているのかというと、明子内親王から海軍のことで相談があると言われたからだ。

30分後、皇居内応接室

「すまんな、山本。」

「いえいえ、次期天皇の相談事ですので、不肖この山本五十六参上しました。」山本五十六は明子内親王が素で喋られる数少ない1人である。

「早速ですが、相談事とは？」

「その前に、会わせたい2人がいるのだが。」

コンコン

「どうぞ。」

「失礼致します。」

扉が開く。

「「お久し振りです。山本閣下。」」

「おお、君たちか。」

福本とマリィダである。

山本五十六と福本・マリィダとは接点がある。

昨年6月に山本が講師として招かれた時に生徒代表として案内し

たのが2人である。

「いやー、2人とも元気だったかね？」

「はい。遠地も千歳も日進も元気ですよ。」

「そうか、日進も……。」「何かを思い出すかのように目をつぶる山本だった。

「君たちが出てきたとゆう事は、福本が言っていた改革案でもまとまったのかな？」

「はい。陸軍の方でも理解が得られました。」

「陸軍の！しかし、いつそんな事を陸軍に話した!？」

「つい1週間前に石原次長と永田参謀総長に。」

「私が会わせたのよ。」

「いやはや、素早いすな。それで私を呼んだのは？」

「この計画案を見てください。」

山本が受け取る。

その計画書にはこう書かれていた。

【艦艇計画書 主力艦艇】 「これは？」

「自分が考えた要求性能表だとお考えください。」

山本が計画書を見る。

播磨型戦艦

推定最大排水量

七万トン前後

最大速度 33ノット

兵装 46センチ主砲三連装 二基 連装 一基 15セ

ンチ副砲 三連装 四基

12.7センチ高角砲 連装 二十基 40ミリ機銃四連装

八基 連装 十六基 25ミリ機銃 三連装 二十基

連装 四十基  
航続距離 18ノットで12000海里を予定。  
ディーゼル・蒸気タービン機関使用。

#### 薩摩型戦艦

推定最大排水量

五万トン前後

最大速力 33ノット

兵装 42センチ主砲 連装五基 15センチ副砲 単装 十六

基 12.7センチ高角砲 連装 十八基 40ミリ機銃 四連装

十基 連装 十基 25ミリ機銃 三連装 十八基 連

装 四十四基

航続距離 播磨型と同等

ディーゼル・蒸気タービン機関使用。

設計図は加賀型戦艦のを使用。

#### 伊豆型戦艦

推定最大排水量

四万トン前後

最大速力 33ノット

兵装 38センチ主砲 三連装 三基 14センチ副砲 連装

六基 12.7センチ高角砲 連装十六基 40ミリ機銃 四連

装 十基 連装 十基 25ミリ機銃 三連装 二十基

連装 三十基

航続距離 播磨型戦艦と同等。

ディーゼル・蒸気タービン機関使用。

尚、播磨型・薩摩型戦艦は自艦主砲対応防御、伊豆型戦艦は40センチ対応防御とする。

「こ…これは！」  
「他にも、空母・巡洋艦・駆逐艦や艦艇改造計画、機動艦隊用の戦艦計画もあります。」  
「機動艦隊用？この艦たちはそうじゃないのかね!？」  
「その艦は、私が考えております、独立機動艦隊用のものです。」  
「独立機動艦隊！」  
「はい。」

次号へ

## 独立機動艦隊計画 1（後書き）

作者「やっとここまで来れた。」福本「そうですね、タイトルの独立機動艦隊がやっと出てきましたね。」マリーダ「さて私達はどうかなるか？」作者「次号は技術の話などの打ち合わせ話になりま

す。」マリーダ「まだ議会にも話し通してないのに早いわね。」福本「それでは皆さんご意見ご感想お待ちしています。」

山本は驚愕していた。

福本の考えている独立機動艦隊は第二の連合艦隊と言ってよい戦力だったからだ。

「しかし、空母8隻の建造でもたいへんなのに、播磨型4隻、薩摩型2隻、伊豆型4隻の10隻なんかとても無理じゃあないのか？」

「そのための対策も考えております。」

「対策？」

「旅順軍港に大規模ドックを建設します。他にも根室、台湾など候補地があります。」

「なるほど、しかし場所が確保できても建設に時間が懸かるぞ。計画では1942年の1月に全配備艦艇が揃うことになっているが無理があるんじゃないのかね？戦艦に至っては3・4年は懸かるぞ。」

「閣下、ドイツのドイツユランド型装甲艦はご存知ですよね？」

「ああ、まさか！」

「はい、溶接加工で建造します。現在、満州の堀製鉄所が溶接用鉄板の試験をしております。」

「堀！、いま堀と言ったな！！！」

「はい、閣下の親友である堀 悌吉社長です。」

堀 悌吉

山本五十六とは兵学校の同期生であり親友でもある。ロンドン軍縮会議時に艦隊派の策謀により予備役に編入、これを聞いた山本が海軍を退役しようとするのを堀が説得したのは有名だ。この世界では予備役編入後、製鉄会社と造船会社を設立し、現在は満州開発の一翼を担っている。



「堀社長とは2日前、満州でお会いしました。」  
「そうか…、元気だったか？」  
「はい。まだまだ山本には負けてられん！と言っていました。」  
「まったく、最近どこに行ったかと思っていたら満州にいたのか。」  
山本の顔は嬉しそうに笑っていた。

次号へ

## 独立機動艦隊計画 3

「ところで、福本。」

「なんですか？」

「空母の要求性能表を見せて欲しいんだが？」

「こちらです。」

マリイダが渡す。

### 【主力艦艇計画書 空母】

紅龍型空母

推定最大排水量

四万トン前後

最大速力 33ノット

兵装 12 / 7センチ高角砲 連装 十四基 40ミリ機銃 四

連装 八基 連装 十六基 25ミリ機銃 三連装 二十四基

連装 二十四基

搭載機数 120機 (予備含む)

航続距離 18ノットで10000哩

ディーゼル・蒸気タービン機関使用。

解放式甲板 艦橋・煙突の一体化構造採用。

剛龍型空母

推定最大排水量

三万トン前後

最大速力 34ノット

兵装 12 / 7センチ高角砲 連装 十四基 40ミリ機銃 四連

装 八基 連装 十六基 25ミリ機銃 三連装 二十基連装

二十基

搭載機数 83機（予備含む） 航続距離 紅龍型空母と同等  
ディーゼル・蒸気タービン機関使用。  
解放式甲板 艦橋・煙突一体化構造採用。

海龍型空母

推定最大排水量

二万トン前後

最大速度 36ノット

兵装 12.7センチ高角砲 連装 十二基 40ミリ機銃

四連装 六基 連装 十四基 25ミリ機銃 三連装 二十基

連装 連装 二十基

搭載機数 75機（予備含む） 航続距離 紅龍型空母と同等

ディーゼル・蒸気タービン機関使用。

解放式甲板 艦橋・煙突一体化構造採用。

戦鷹型空母

最大排水量

一万五千トン前後

最大速度 34ノット

兵装 12.7センチ高角砲 連装 八基 40ミリ機銃 四連

装 六基 連装 十基 25ミリ機銃 三連装 十四基 連

装 十四基

搭載機数 57機（予備含む） 航続距離 紅龍型空母と同等

ディーゼル・蒸気タービン機関使用。

解放式甲板 艦橋・煙突一体化構造採用。

尚、全型カタパルト装着。消火機材・不燃塗料は必須のこと。

「ふむ、この4種類の空母を2隻づつ建造するわけだな。」

「はい、それをお願いがあります。」

「解っているよ。この計画書を出して、関連予算を出して欲しいんだろ？」

「はい！ 私が出しても受け付けてくれませんので。」

「このことは米内さんに話させてもらうよ。あと、コピーが欲しいんだが？」

「こちらです。」

マリィダが渡す。

「よし。あとは任せてくれ、なんとしてみるよ。」

「よろしくお願いいたします。」

2人は頭を下げた。

一週間後、山本から「予算確保」の連絡が入った。

次号へ

### 独立機動艦隊計画 3 (後書き)

福本「予算が取れました」「作者「やっと始まったとゆいところで  
すね。「マリーダ」ところで作者、巡洋艦の方はなんで出さないの  
?」作者「あとのお楽しみとゆうところですよ。「マリーダ」納得  
いかないけど、あえて聴かないわ。「福本」ところで次号は?」作  
者「イギリスよりチャーチル緊急来日!日英同盟復活なるか!?  
お楽しみに。「マリーダ」ご意見ご感想お待ちしております。」

## チャーチル来日

4月9日 皇居内応接室

「おはようございます。吉田外交官。」

「おはよう、福本中尉。」吉田 茂

異能の外交官として有名。チャーチルとは個人的に友好がある。八バナ葉巻を吸っているのは彼の影響だと言われている。

「分かっているとは思いますがここは禁煙ですよ。」

「ああ、彼にはちゃんとやってあるよ。」

今回、接触はイギリスからだ。

新天皇に挨拶したいと、イギリス王室から打診があり、吉田外交官と交友のあるチャーチルが選ばれ、今に至る。

「サー・ウィンストン・チャーチルです。陛下と話せてとても名誉に思います。」

「はじめまして、白鶴宮明子です。日本語がお上手ですね？」

「いやー、吉田君に教えてもらいましたな。」

この会話を福本は普通に聞いていた。

しかし、頭の中ではあることを考えていた。

「その士官くん？、私に何か聴きたいようだね？、聴いてくれてかまわんよ。ついでにそのお嬢さんの名前も教えてもらいたいたんだが。」

「！！」

福本は驚いた。　どうやら顔に考えていたことが出たようだ。

「彼女はアーネスト・レリル・マリイダさん、エステロール王国出身の方です。」

明子内親王がマリイダを紹介する。

「はじめまして、マリイダです。」

「そして彼は、福本大介です。」

「はじめまして、福本です。」

「よろしく2人共。ところで聴きたいことはなんだね？」

「海軍大臣であるチャーチル卿がわざわざ挨拶だけに来たとは思えない。だから何を探りに来たのか？、です。」

「ほう、若い洞察力はしっかりとしているな。陛下、あなたはとても有能な臣下をお持ちだ。」

「いえ、彼もマリイダも私にとつては数少ない友達ですから。」

「友達ですか…。それは羨ましい。いいでしょう、私の目的をお話しましょう。」

「実はですね、私は日英同盟を復活したいと思っています。」

「…なぜですか！」「」

「我が大英帝国は世界中に権益を持つておるのはご存知ですね。そして、スターリンは満州を狙っている。」

「つまり、スターリンが満州を獲ればイギリスの権益に悪影響が及ぶ、と。」

マリイダが聴く。

「ええ、そうになると我が国はアジア方面に兵を派遣しなければならぬ。」

「しかし、それはドイツを喜ばす結果になる。だから日英同盟を復活させ、ソ連の南下を日本に抑えてもらいたい。ですか？」

「さすが、陛下だ。話が早い。もちろん、タダではありません。供給して欲しいものがあるなら出来るだけ準備致します。」

「これは、提案と受け取ってよろしいですね？」

「陛下…？」

「私は良いと思いますよ。ただ、国会の承認が要りますけど。」

一時間後

チャーチルはホクホク顔で帰って行った。

「ふふふ」

「どうしました？」

内親王とマリーダが応接室に残っていた。福本はチャーチルと吉田を送っている。

「福本が望んでいた日英同盟復活が思わぬ形で転がり込んで来たと思つて。」

「はあ。」

マリーダが答える。

「これから、どうなるのかしらね？あなたと福本君は？」

顔が真っ赤になっていたマリーダだった。

次号へ



## チャーチル来日（後書き）

マリーダ「……………（\*^^\*）」作者「マリーダさん、顔真っ赤ですよ？」マリーダ「な、なんでもないわよ！」福本「あれ、とうしたんですか？」作者「ああ、マリーダが…」マリーダ「いやー、見ないでー！」叫びながら逃走 福本「あれ!？」作者「とりあえず追い掛けたら。」福本「はい、マリーダ待ってくれ。」 追  
い掛ける

作者「やれやれ。 次号はいきなり6月に。明子内親王が天皇になります。お楽しみに。ご意見感想お待ちしております。」

## 新天皇就任

6月10日 帝都

この日の帝都は朝からお祭り騒ぎであった。

それもそのはず、白鶴宮明子内親王が天皇になるからだ。

大恐慌や支那事変など暗い事ばかり起きている国民にとっては久しぶりの明るいニュースだった。

新聞には、天皇が行う政策が書かれ、国民は大きな期待を抱いていた。

特に男女普通選挙法・労働基本法・自作農推進法など社会政策は大きな反響を呼んだ。

尚、年号は昭和のままになった。

「大丈夫ですか？明子さん。」

「ありがとう、マリイダ。私は大丈夫です。」

しかし、実は足がガクガク、手もガクガク、顔は仏像のよう固まっていた。

現在午後7時5分前。

7時に天皇のラジオ放送があり、明子天皇は緊張していた。

就任式典は既に終わっている。

しかし、ラジオとは言え国民に向かって喋るのだから緊張するものも当たり前だ。そんな時、2人にできる事は彼女に声をかけるぐらいだった。

「それでは、陛下からお言葉を賜りたいと思います。」

アナウンサーがマイクを渡す。

「臣民の皆さん、こんばんは。本日より父の裕仁天皇に代わり就任した明子天皇です。」

多少緊張しているがはつきりと喋っている。

「臣民の皆さんには支那事変や恐慌など暗い事ばかり起きて嫌気がさしている方もいるでしょう。私はそれほど大きな約束はできません。しかし、この事は約束出来ます。」

ここで、一端喋るのをやめて息を吸う。そして、

「臣民の皆さんを必ず幸せにしてみせます！ この決意を私の言葉とさせていただきます。」

マイクをアナウンサーに返し、自分の部屋に戻って行った。

## 明子天皇の部屋

「……かんぱーい……」

明子、マリィダ、福本が乾杯していた。

コップの中味はカルピス。しかし、3人は楽しく騒いでいた。

「すいません、ケーキとカルピスしか用意出来なくて……。」

「いいの、福本。こうやって誕生日を祝ってもらっただけでも感謝しているのに。」

実は本日、明子天皇の誕生日だが、就任式と重なり、困っていたところを、それを知った福本とマリィダがこうやって、祝って挙げたのである。

「そういえば私から2人にプレゼントがあるんだけど」

「……?」

そう言っつて、机に置いてあった紙を2人に渡す。

「え〜と、何々、福本・マリーダ両中尉を只今より……………?!」

2人は驚いた。

「只今より二階級特進し、2週間後に行われるエステロール王国女王就任式の特使に任命する。尚、これは勅命なり。わかった2人共？」

辞令を見ながら啞然とする2人であった。

次号へ

## 新天皇就任（後書き）

福・マ「……………」。「作者「あの、大丈夫ですか？」遠地「作者、久しぶり」。」「千歳「お久しぶりです。あれ、2人共どうかしたんですか？」作者「どうやら、本文の急展開についてこれないらしくて固まりました。」「遠地「やれやれ、僕達で進めるか。」「作者「そうですね。」「千歳「それで、次号は？」作者「はい、エステロール王国編が始まります。」「遠地「僕達も出るんですね。」「作者「はい。」「千歳「それでは読者の皆さん、ご意見ご感想お待ちしております。」

## エステロール王国滞在記

1

6月26日 パトミナス

「ここがエステロール王国の海の玄関ですか。」

そこには4人の男女がいた。もちろん、福本・マリィダ・遠地・千歳のメンバーである。

「これから、どうします?」

「とりあえず、私の実家に行きましょう。」

「『賛成。』」

パトミナス

エステロール王国最大の港にして、貿易の中心であり、この国の海軍の重要拠点である。

第一次世界大戦の頃、閑散としていたこの町も、20年以上がたち日本企業の進出と経済発展の為、賑やかな大規模都市になっていた。

「そつえばマリィダさんの実家てどこですか?」

千歳が聴いた。

「あそこ……。」

指差す方を向くと……

「『……!!』」

町を真ん中に走る道の向こうに、それこそ映画に出てきそうな豪華な貴族の館が見えた。

「ごめんね、無駄に目立つちゃって。m(\_\_\_\_)m」

3人にはマリィダがなぜ控え目に指差したのか理由が判った。

一時間後

「近くで見てもデカイな。」

「アーネスト家はこの国ができてからずっと軍人として仕えて来ましたが、だから格式が高いんです。」

「だから、家もデカイのか？」

「はい。」

「とにかく、入りま……」その時、館の中からドタドタと誰かが走る音が聞こえた。

そして、扉が開いたと思った瞬間……。

「マリーダ」

「パパ!!」

1人の男が飛び出して来た。

「おお、我が愛しき娘マリーダ、元気だったか？、日本でケガしなかったか？、道に迷いはしなかったか？、勉強に付いてこれたか？、辛くはなかったか？」

「パパ!!、友達が見てるんだけど!!」

そう言つて引き剥がそうとするマリーダ。

「え〜と、どちら様？」

千歳が聴く。

「私のパパよ。」

「いや〜、お恥ずかしいところを見せてしまった。失敬、失敬。」

「何時になったらその親バカは治るんでしょうね。ア・ナ・タ。」

「^・^」

「そうだな……。」

「あの〜。」

「あ、ごめんなさいね。マリーダの母親のナタリアです。よろしく。」

ほら、あなた。」

「マリーダの父親のベネディクトだ。今は軍務大臣を承っている。君達を歓迎するよ。よろしく。」

「天皇陛下より特使として派遣されました。福本大介海軍少佐です。滞在中どうぞよろしくお願いいたします。」

「同じく遠地昇海軍大尉です。よろしくお願いいたします。」

「同じく千歳桜海軍大尉です。よろしくお願いいたします。」

「滞在中はゆっくりとしてもらって構わんよ。我が家同然に使ってくれたまえ。」

次号へ



## エステロール王国滞在記 1（後書き）

エステロール王国滞在記の第一話どうでしたか？ 次号はマリィダの二番目のお姉さんが出ます。お楽しみに。ご意見感想お待ちしています。

エステロール王国滞在記 2 (前書き)

更新遅れてすいません。

## エステロール王国滞在記 2

「パパ、誰か来たの？」

階段の方から声が聞こえ全員がそちらを向くと、1人の女性が階段をゆつくりと降りて来るところだった。容姿は髪の色はマリィダと一緒に水色、髪の長さは肘まであり、体型はほっそりとしている。

「フィオナ姉さん」

「マリィダ!？」

マリィダが抱き付く。

「お姉ちゃん。」

「マリィダ、何時帰ってきたの？」

「先程こちらに到着しました。」

「あなた方は？」

「失礼しました。大日本帝国より特使として参りました、福本大介です。後ろの2人は同じく特使の遠地 昇と千歳 桜です。」

「ご迷惑お掛けします。」

「ああ、あなた達が例の特使さん達ね。初めまして、マリィダの姉のフィオナよ、よろしくね。」

「はい！」

「ところで特使としては皆さん若いような…。もしかしてマリィダと同じ年？」お互いに紹介が終わり、ナタリアさんのいれた紅茶を飲みながら世間話に華を咲かせていた時、フィオナさんが聴いていた。

「はい、みんな同期生ですから。」

「じゃあ、18で少佐なの!？」

「僕とマリィダだけですけど。それに今回は特例ですし。」

「けど、凄いわよ!」

「ところでマリィダ。」

「何、ママ?」

「あなたのお気に入りの人でその福本君のこと?」

「ママ!」

「!?!?!」

怒るマリィダ、驚いて蒸せる福本。

「マリィダ本当なのか!?」そして、驚きながらも確認する親バカ  
パパ。

「そ、それは、気に入ってるのは本当だけど……。だから婚約と  
かはしてないからね!」

「婚約……!?!」

もつと驚いたのか気の抜けたような声を出すベネディクトさん。

「福本君。さっきのは本当かね?」

「はい。そんな約束はしていません。」

「そうか……。」

安心したのか、ため息を吐くベネディクトさん。  
すると、何か閃いたのか顔を上げる。

「福本君。私と手合わせして貰えないかね?」

「いいですが、なぜ?」

「いやー、友好国の士官がどれ程のものかと思ってね。」

(実は婚約者に成るかも知れない人間を測る為ですか?)と福本は  
敢えて聴かなかった。

次号へ

## エステロール王国滞在記 2 (後書き)

マリーダ「作者、大変な事になっちゃたじゃないのよ!!」作者  
「そんなこと言われても…。設定なんですから。」マリーダ「大丈夫  
なんですようね?」作者「言えません。以上。ご意見ご感想お待ち  
しています。」マリーダ「こら、勝手に終わるな〜」。

### エステロール王国滞在記 3

マリーダの実家 裏の練習場

「こんなのがあったのか……」  
練習場と言うより、学校の運動場と言ったところか。しかも、ちゃんと整備されている。

その後、手合わせをどこでやろうか、となった時、案内されたのがここだった。

「大介はまだいいわよ。私なんかここで鍛えられたのよ。」  
(だから、体力あったんだ。) そう思う3人だった。

「やあ、待たせたね。」

声が聞こえ振り向くとベネディクトさんが立っていた。  
どうやら着替えたらしく、軍装になっている。

「さあ、初めようか？」

2人は練習場の真ん中にいた。

何故か見物人が多い。

格好からして、ここで働いている執事やメイドだろう。

しかし、そんなに主人が闘うのが珍しいことか？、と福本は思っていた。

その中から1人、年輩の執事が前に出る。どうやら彼が開始の合図をするようだ。

「それでは、双方準備はよろしいですね？」

「ああ。」 「はい。」

「はじめ！」 ガキイン！

お互いの得物がぶつかる！福本は士官学校時代から持っている軍刀、

ベネディクトさんはサーベル。  
そして、双方間合いをとるためにサツと離れる。

今回、福本は出来るだけ防御に徹し、隙が出来たら攻撃するつもりだ。

何せ相手は経験を積んだ軍人。こちらは士官学校を卒業して僅か3ヶ月の新米。勝てる訳がない。  
だからといって、あっさり負けるのは願い下げである。  
それなら勝てないまでも負けたくない闘いは新米でもできるからだ。

10分経過

「案外やるね。」

「それほどでも。」

この間、ベネディクトさんが攻撃し、福本がそれを防ぎ、隙が出来たら攻撃する。その繰り返しだった。

「本当だったら、お茶の続きをしているつもりだったんだけどね。」  
そう言うと、ベネディクトさんはサーベルを構える。

「まさか、パパあれをやるんじゃない。」

「(あれ)?」

気付いた時には遅かった。なんと、ベネディクトさんは剣術の『突き』で仕掛けてきたのだ。

しかも、軍刀で防ぐ暇はない。

シュー!

間一髪でサーベルを避ける!

この瞬間、福本は無意識の内に軍刀を滑り落としていた。

そして、今自分の目の前を通過しようとしたベネディクトさんのサーベルを持った右手を掴む!

驚くベネディクトさんを尻目に足を一步踏み出す!

そして、気合を込めて叫ぶ！

「トオリヤヤヤヤ！」

ドサ！

そして、見物人全員が見たのは、空を見るようにして倒れているベネディクトさんと何もなかったかのように立っている福本だった。

「いやー、参った。まさか日本の柔道の（背負い投げ）でやられるとは思わなかったよ。」

「そうですか。」

「ああ、久しぶりにいい勝負できてよかったよ。」

次号へ



### エステロール王国滞在記 3 (後書き)

作者「読者の皆さん、すみません！（土下座）」福本「どうしたんですか？いきなり。」作者「最近更新が遅くなっていることを謝ってるんです。」マリーダ「たいへんね。」作者「はい。」福本「ところで次号は？」作者「遂に、女王と会います。ついでに言つと、僕達と同一年です。お楽しみに。」マリーダ「ご意見ご感想お待ちしております。」

エステロール王国滞在記 4 (前書き)

訂正 エステロール王国滞在記 1の6月26日は6月16日の  
間違いです。 すみません。

## エステロール王国滞在記

4

6月17日

エステロール王国・首都

アルピオン 王宮内応接室

「いてててm( )m

「大丈夫ですか？」

「ありがとう、桜さん。」

「しかし、筋肉痛とは。」

「仕方ないだろ。遠地。」オチとして、翌日起きたら筋肉痛だった福本であった。

「陛下が参られました。」侍従がそう言って脇に退くと、そこには同年代の少女が立っていた。

容姿は髪が金髪のツインテール。

ほっそりとはしているが案外運動しているのか、元気少女が似合いそうな少女だ。

「はじめまして、エステロール王国、次期女王のベーグル・マーサー・シャルロットです。どうぞよろしく。」

「どうもはじめまして。大日本帝国海軍少佐の福本大介です。後ろに居るのは、遠地昇大尉と千歳桜大尉です。こちらこそよろしく。」

侍従がお茶を置いて出て行くと、次期女王様は一転普通に友達と喋る少女に早変わりする。

「マリーダ、会いたかったよ。( ^o^ )」

「私もよ。シャル。 ( ^ O ^ ) 」

「しかし、世の中解らん。マリィダの幼なじみが次期女王とは…。

」

「本当ですよ。ね。」

「んで、こつからまたどえらい事に巻き込まれる。」

「なんじゃそりゃ? 」

「最近、見た小説の展開。」

「あのー、ところで皆さん方はどうするおつもりで? 」

「一週間後の戴冠式に出席するので、それまで滞在する予定ですが

…、陛下なにか? 」

「陛下はやめてください。公式の場以外ではシャルで結構ですよ。」

「まあ、陛下がそう言われのでしたらそうします。」

「ありがとうございます。」

「これで、シャルは私以外の友達が初めてできた訳だ。」

「マリィダ! ( < | > ) 」

次号へ

遠地

「いや、陛下も喋ってみると、楽しい人だったな。」

千歳

「しかも、滞在中は遊びに来ていい、て言っていましたね。」

今、福本達が歩いているのは王宮の廊下である。

福本

「で、これからどうする？、マリータの家に戻る時間のことを考えるとゆっくりはそんなに出来ないぞ。」

マリータ

「そうね、まず…」

「そんな話到底受け入れられん！！。」

「……！！」「……」

「ベネディクト君、考えてみたまえこの話が通れば海軍関連予算を増やせられるんだよ？、もっとじっくりと考えて…」

「今の予算でも十分やって活けている、しかも当分は予算増額を要求するつもりはない！」

福本

「マリータ、あの声は…」

マリータ

「うん、間違いなくパパの声だね。」

遠地

「一体、誰と口論してんだ？」

声のしている部屋の扉のプレートを見ると。

『宰相室』

マリータ

「あれ？」

千歳

「どうしたんですか？」

マリィダ

「いや、宰相が代わったのかなと思って。」福本

「どうして？」

マリィダ

「だって、冬に帰った時、たまたま会ったけど元気そうだから…。」

「

福本

「なるほど。」

「失礼させてもらおう！」

その声が聞こえ、ベネディクトさんが出てきた。

ベネディクト

「やあ、マリィダ、なにをしているんだ？」

マリィダ

「特になにも。ねえパパ、いつの間に宰相が代わったの？」ベネディクト

「うん、そうだな、2ヶ月前かな。ハスラー宰相が突然倒れられてな、その後任がフェデリコ宰相だ。」

遠地

「なんで口論を？」

ベネディクト

「海軍関連予算を増額してやるから陛下を説得して権限を増やせと言ってきたやつだ。」

千歳

「なんと、まあ。」

ベネディクト

「だろ。だから私は彼を好かん。ところでひまかね？」

福本

「ええ、暇ですが。」ベネディクト

「それじゃ、街を回らないかね？」

「 「 「 は 「 「 「 「

次号へ

作者「昨日、アクセスが一万を超えました。読者の皆様、読んで頂いてありがとうございます。」福本「良かったですね。」作者「ありがとうございます。」マリーダ「けど、これからが大変なんじゃないの？」作者「はい。しかし、読んで頂いている方がいるだけで励ましになります。これからもどうぞよろしくお願いいたします。」



6月18日 首都アルピオン

王宮内廊下

遠地

「なあ、福本。まさか疑ってるんじゃないだろうな？」

福本

「何を？」

千歳

「昨日からハスラー前宰相の急病は策謀じゃないか？て言ってますね。」

マリィダ

「だからと言って、フェデリコ宰相が怪しいて、無茶苦茶じゃない？」

福本

「よく言うだろ。犯人は得をする人間だつて。」

遠地

「やっぱり無茶苦茶。」

福本

「無茶苦茶で結構。」

千歳

「で、今日はなにをするんですか？」

福本

「まあ、今日はその宰相の心意を探るために挨拶に行く。」

マリィダ

「まあ、大胆。」

福本

「まさか、日本の特使が自分のことを疑っているとは思ってないだろう。」

遠地

「そりゃそうだ。そこに漬け込む気か？」

福本

「ああ。」

福本

「ん？」

マリーダ

「どうしたの？」

福本

「あ、いや、宰相殿は誰かと話してるみたい。」

確かに、宰相室から何人かの喋り声が聞こえる。

しかも、その中の1人はフェデリコ宰相のようだ。

遠地

「なんか、怪しくないか？」

千歳

「ええ、普通の会議ならもうちょっと声が大きくてもいいのに。」

福本

「さて、一体何事をこそこそ相談しているのやら？」聞き耳を立てる4人だった。

フェデリコ

「首尾はどうだ？」

???

「上々です。宰相の方は？」

フェデリコ

「大丈夫だ。もう根回しは終わっておる。」

????

「しかし、聞いた時、驚きましたよ。前宰相を薬で倒れさせ、病院に監禁して、自分が宰相になる。」

フェデリコ

「そして、期を見てクーデターを起こし、独裁政権を作る。」  
????

「しかし、後が続くんですか？」

フェデリコ

「大丈夫だ。ソ連やアメリカがこの話に興味があるようだ。日本が切つてもどちらかが話を持ち掛けてくる。それより準備の進捗具合は？」

????

「既に、部隊の方は準備完了、戴冠式には決行出来ます。」

フェデリコ

「そうか、よしよし。」

福本

「（よし、皆戻るぞ。）」

小声で3人に指示を出す。そして、静かに立ち去って行った。

次号へ

マリィダ「ちょっと作者！、大変なことになっちゃったじゃないのよ！」作者「しよがないでしょ、設定なんですから。」福本「ところで次号は？」作者「はい、一気に戴冠式当日、さてどうなるかはお楽しみに。」マリィダ「大丈夫なんでしょうね。」作者「さすがにそれは……」福本「それではご意見ご感想お待ちしています。」

エステロール王国滞在記 7 (前書き)

い。 本作品初の2000字を超えました！ 長いですけど読んでくださ

6月24日 首都アルピオン

王宮内 シャルロット個室

シャルロット

「マリータ、本当に大丈夫なんですか？」

マリータ

「大丈夫。大介や皆が慎重に準備してたし。それより今日、婚約宣言するんでしょ？、そっちを心配したら。」

シャルロット

「うん。」

コンコン

マリータ

「どうぞ。」

ガチャ

遠地

「マリータ、シャル。ウェールズ王子が来られたよ。」

マリータ

「そお、ところであの件のことは？」

遠地

「王子からも許可は採った。大丈夫だ。」

ここでウェールズ王子について紹介させて頂こう。

ウェールズ王子は隣国ダリア王国の出身でシャルロットの婚約者である。

容姿としては金髪のイケメン青年と言ったところで、福本達とは同い年。

ダリア王国は内陸国で、その昔、エステロール王国を追われた貴族が国を起こしたのが始まり。  
面積はエステロール王国と同じぐらいで、二国を併せれば、大陸の4分の1を占める大きさになる。

王宮内 別室

福本

「初めまして。大日本帝国海軍少佐の福本です。」

ウェールズ

「ダリア王国のウェールズです。訳はシャルの手紙で了解済みです。けれど大丈夫ですか？」

福本

「はい。我々が責任を持ってクーデターを防ぎます。」

ウェールズ

「しかし、何故あなた方は自国ではないのにこんなことを？」

福本

「そうですね。まあ、理由は色々ありますが、あえて言うなら守りたい物があるからです。」

ウェールズ

「守りたい物？」

福本

「ええ、ここにはマリダの家族がいて、友達がいて、そして幸せに暮らす人々がいる。それを守りたいと思ったからです。」

ウェールズ

「それなら、あなた方が動く必要は無いのでは？」

福本

「ごもつともな意見です。しかし、それは友の危機を見て見ぬふりをしていることになります。それは武士道から外れる行為だからで

す。」  
「ウエールズ  
「なるほど、武士道ですか…、判りました。この件よろしくお願  
いたします。」  
福本  
「はい。」

数時間後

大広間で戴冠式が始まり、枢機卿がシャルロットの頭に冠が載せら  
れた瞬間、拍手が沸き起こった。

その後は戴冠式の会場はパーティー会場に早代わり。会場はあつと  
いう間に世間話の華があちこちに咲く。パンパン

侍従が手を叩くと、しんと静かになる。シャルロット

「本日は私の戴冠式に参加して頂きありがとうございます。さて、  
皆様にはもう一つご報告させて頂きます。」

シャルロットの招きに応えウエールズが彼女の隣に立つ。  
シャルロット

「この度、私はウエールズ王子と婚約することになりました！」

パチパチパチ

参加全員が温かい拍手で2人の婚約を祝う。

しかし

バーン！

一発の銃声が鳴り響いた。

「コッ！」「」

いきなりの銃声に驚きながらも聞こえた方を見る2人。

そこに居たのは…



シャルロット

「フェデリコ宰相！」

フェデリコ

「いや、めでたいですな陛下。」

そう言いながら彼は持っていた銃をシャルロットに向ける。

気が付けばフェデリコの隣に1人の男が立っており、彼はウエールズに狙いを定める。

フェデリコ

「陛下、私にも情と言うものがございます。今すぐ退冠して頂き全権限を私に委譲すれば命を奪うことは致しません。どうですか？」

シャルロット

「断わる！、お父様は民の幸せを何時も考えていた。お主のような権力の塊に全権を委譲すれば何を仕出かすか判らぬ。断じて拒否する。」

フェデリコ

「困りましたな。ウエールズ閣下、陛下を説得してくれませんか？」

ウエールズ

「断わる！、例え殺されても拒否する！」

フェデリコ

「そうですね、ならあなた方には死んで頂く！」

フェデリコがシャルロットを狙う。

ウエールズがシャルロットを庇う為前が出る。

そして…

ズダーン！

バーン！

銃声が響いた。

その瞬間、2人は目を瞑った。

ゴト

2人がその音を聞き恐る恐る目を開くと驚きの光景が広がっていた。なんと、フェデリコは持っていた拳銃を落とし、男は右肩を撃たれていた！

フェデリコ

「き、貴様ら……」

フェデリコが向いている先には、2人の男女が立っていた。

1人は儀礼用の純白な第一種軍装に腰には軍刀、1人はピンクを基調としたドレスを着ていた。

福本とマリィダである。

この時、福本はドイツ製9ミリモーゼルミリタリー大型拳銃、マリィダはアメリカ製コルトM1911拳銃を双方フェデリコと男に未だに構えていた。

福本

「残念でしたね、宰相閣下。」

フェデリコ

「はっはっはっ、もはや遅いわ。今私を止めても、外は既に部隊が展開してクーデターを成功させておるわ！」

周りの人間が驚く！

しかし、福本もマリィダも平然としていた。

福本

「果たしてそうでしょうか？」

フェデリコ

「なに!？」

その時、大広間の扉が開いた。

そこに居たのは遠地と千歳である。

遠地は福本と同じく第一種軍装、千歳は青を基調としたドレスだっ

た。

遠地

「宰相閣下、あなたが期待してる部隊の指揮官は彼らですか？」  
そして、合図するとエステロール王国軍兵士が捕らえていた人間を  
前に出す。

フェデリコ

「!!!」

明らかに驚きの表情が出ていた。

遠地

「ジャミトフ少将、バスク大佐、ジャマイカン少佐で間違いありませんね？」

この瞬間、フェデリコ宰相はガックリと膝を落とした。

こうしてフェデリコ宰相のクーデターは失敗に終わった。

次号へ

福本「長かったですね〜。」作者「はい。しかも、製作に3日かかりました。」マリーダ「結局、フェデリコのクーデターは失敗に終わったと言うことですね。」作者「はい。」福本「そういえば、なんで僕とマリーダで拳銃が違ったんですか？」作者「それは元々、拳銃などの個人装備は士官の自由裁量だったからです。」マリーダ「ねえ、作者。確か今、あなたテスト期間中だっけ？」作者「はい！、だから更新が遅くなります。ご了承ください。」マリーダ「とのことです。それでは読者の皆様ご意見ご感想お待ちしております。」

## 帰還と処遇（前書き）

期末試験中なのに書きちゃいました。

読んでください。

## 帰還と処遇

6月26日 エステロール王国 パトミナス 飛行艇乗場

シャルロット

「皆さん、今回はありがとうございました。」

福本

「いえいえ、そんな恐縮為さらずに。僕達は当たり前前の事をやった  
までですから。」

マリーダ

「そうよ、シャル。皆は友達であるあなたを助けただけなんだから。」

シャルロット

「ですけど…、ウエルズも助けてもらったのに…、本来なら勲章  
の1つでも挙げないと…」

福本

「良いんです！しかも、今回は完全な越権行為なんですから。」

遠地

「そうです！勲章なんて僕達には勿体無いですよ。」千歳

「シャルさん、気に為さらずに。私達は友達でしょ。助けるのは当  
たり前よ。」シャルロット

「……解りました。それでは皆さんまた会うまでお元気で。」  
マリーダ

「うん！」

十数分後 機内にて

遠地

「けど、案外勲章も良かったかも。」

「「「こら!」「」」

「冗談だつて。( < | > )」

突っ込まれた遠地であつた。

6月29日 帝都

皇居内応接室

福本

「福本以下3名只今帰りました。」

明子

「ご苦労様。けど向こうでは派手に動いたそうね。」マリーダ

「知つてたんですか?」

明子

「当たり前です。何せ4日間もあつたのよ? 大抵のことは伝わっ

てくるわ。」千歳

「ちなみにどうやって?」明子

「外交電文でお礼と一緒に詳細も送られて来たのよ。内容を読んだ瞬間、驚いたわ。」

その驚いた顔を想像する福本達だつた。

明子

「ところで、あなた達の処遇の件だけど…」

遠地

「しよ、処遇!？」

明子

「ええ、いくら越権行為とはいえ処遇はちゃんとしないと。」

そう言くと彼女は机の引き出しから一枚の紙を取り出すと、

「はい」と言つて福本に渡す。

福本

「……………ええ!？」

明子

「そ、あなた達の処遇は『昇進』よ。福本は大佐、マリイダ、遠地、千歳は中佐ね。わかつた?」

啞然とする4人。

マリイダ

「えっと、なんで私は中佐なんですか?」

明子

「ごめん( < | > )、実は大佐にする予定だったんだけど人事部がダメ!と言つちやて。」

マリイダ

「いえいえ、良いんです。皆と一緒に居れるんですから。」

明子

「ありがとう。マリイダ。」

笑つて喜ぶ5人であった。

次号へ



## 帰還と処遇（後書き）

福本「また昇進…」マリイダ「まだ少佐になって2週間位しか経ってないのにね。」作者「まあ、いいんじゃないですか？、しかも設定なんですから。」遠地「作者、次は？」作者「よくぞ聴いてくれました。次は日ソ激突、張鼓峰事件を簡単に取り扱います。」千歳「ご意見ご感想お待ちしております。」

## 日ソ激突 張鼓峰事件（前書き）

簡単に説明すると言って長くなり2000字以上になりました。す  
いません。しかも、試験中に……。長いですけど読んでください。

## 日ソ激突 張鼓峰事件

1938（昭和13）年8月7日

満州東南端 満朝ソ国境

張鼓峰

ドカーン！

ズドーン！

ズドドーン！

「くそ！」

周りにソ連軍野砲弾が着弾、炸裂し陣地を揺らす中、1人の陸軍士官が悪態を吐いていた。

彼の名は佐藤幸徳、階級は大佐で歩兵第六五連隊長である。

史実では、第三一師団長としてインパール作戦に参加、しかし、本作戦の司令官で悪名高い牟田口廉也中将が約束していた補給が届かず、要請するも届かない。それどころか進撃せよの一点張り。

要衝コヒマを占領するも第三一師団を含め、参加部隊は補給が届かず、疲労困憊の状態だったが、牟田口中将は作戦続行を命令、これに怒った佐藤少将は独断で撤退、その後更迭・予備役編入された。これが有名なインパール作戦『抗命』事件である。

軍制度上、抗命であるのは確かだが、私が思うに現場の状況を無視し、なおかつそれによって撤退した佐藤少将以下参加師団長を更迭して事を済ませた様だが、牟田口中将も更迭するなど処分する必要があったと思うのは作者である私だけだろうか？

失敬、話が逸れてしまった。とにかくそんな彼が後に『張鼓峰事件』と呼ばれるこの事件に連隊長として参加していた。

事の始まりは7月12日ソ連軍が空白地帯であった張鼓峰頂上に進出、陣地を構築し初めた。これに対し14日、15日に日本と満州がソ連政府に抗議したがこれを無視。

それどころか29日、ソ連軍は張鼓峰北方に進出、陣地構築を始めた。

これに対し、朝鮮軍（朝鮮駐屯の日本軍）第十九師団長が独断で撃退を決意、師団より一個旅団（五千から一万人規模、ちなみに師団は一万から二万人規模）を派遣、30日に夜襲を決行し翌31日朝までに張鼓峰を含めたソ連軍進出地域を奪取した。

しかし、翌8月1日にソ連軍は砲爆撃を開始、奪回しようとしたが失敗する。

一方、撃退に成功した日本軍も朝鮮駐屯軍指令部に増援と航空支援を要請するが、支那事変を抱えて為、これを拒否した。

そして、8月6日ソ連軍は再び攻撃を開始した。

ソ連軍の事前砲撃が終わり、佐藤大佐は双眼鏡でソ連軍の様子を見ていた。

すると、ソ連軍はT26軽歩兵戦車を先頭に歩兵が進撃してきた。

どうやら、昨日の戦闘で装輪装甲車が近距離まで引き寄せられ、37ミリ速射（対戦車）砲や75ミリ山砲で撃破されたのを見て今度は戦車を繰り出して来たようだ。

佐藤大佐

「戦車が出て来たか……。総員対戦車肉薄戦闘用意！」この命令が出されると準備が始まり戦車の接近を待つ。

その間、機銃と擲弾筒グレネード・ランチャーが発射され、弾幕を形成する。

これは歩兵を足止めするためである。

そして、歩兵を欠いた戦車が陣地に接近すると……、佐藤大佐

「よし、今だ。かかれー！」

歩兵が次々に地雷や火炎瓶、手製爆弾を抱えて陣地を飛び出し、戦車に向かって行く！

端から見れば無謀な行動だが、戦車の構造を知っていれば無謀ではない。

砲塔の死角から背後に回りこみ機関室に向かって火炎瓶を投げつける。

また、手製爆弾を履帯に押し込み点火したり、地雷を戦車の履帯の前に放り込んだりする。

火炎瓶の場合、ガソリンエンジンのT26は加熱気味であり簡単に発火炎上するし、爆弾や地雷の場合は履帯が破壊され、立ち往生してしまう。

立ち往生した戦車はただの鉄の塊だから、乗員は脱出するか、このまま戦車と運命をともにするかだ。

歩兵の肉薄戦法に弱い戦車は歩兵とともに進撃するのだが、上記の通りソ連兵は弾幕の為、追い散らされるか、立ち往生していた。

132

またもや砲撃が始まり、日本兵は陣地に退避した。

副官

「しかし、なぜソ連兵は地形を利用せず進撃してきたんでしょうか？」

佐藤大佐

「ああ、それなら簡単だ。赤軍大粛清のせいでは有能な士官達がいなくなっただからだろう。」

赤軍大粛清については別の機会に語らせてもらうが、この為、ソ連兵は指揮官や政治委員に促されるまま突進を繰り返すだけだった。

それにソ連軍は攻撃に失敗すると国境の向こう側から砲撃を開始して放置された死傷者もろとも粉碎するのであった……。

副官

「連隊長殿！、敵機が来襲しました！」

佐藤大佐

「来たか、総員対空戦闘よ……」

通信兵

「連隊長殿、指令部から入電。『我、航空隊派遣せり。』以上です。

┌

佐藤大佐

「なに！、あれだけ要請して派遣しないと云っていたのに……、何故だ！？」

実際、数分後上空で空中戦が始まった。

この航空隊派遣には裏があった。

7月29日の時点で、この紛争がスターリンの計画的紛争ではないかと疑っていた人間がいた。

それは、明子天皇、永田参謀総長、石原参謀次長、米内海相、山本次官、そして今や山本次官の秘書みたいな仕事をしていた、福本、マリイダ、遠地、千歳だった。

そして、彼らは秘密りに会合し、専守防衛に徹し、越境しての作戦は禁止、航空隊は進撃する敵機及び敵部隊迎撃にのみ使用することを条件に航空隊派遣を朝鮮軍指令部に許可した。

6月10日から始まった外交交渉が成功し、11日に停戦協定が結ばれ、この紛争は終結した。

被害及び戦果は以下の通り。

日本側 戦死 596名

負傷 914名

ソ連側 戦死 約800名

負傷 約3300名

約100両

戦車・装甲車の撃破・損傷

対空砲火（重機関銃使用）による撃墜

3機

航空機による撃墜 約20機

次号へ

## 日ソ激突 張鼓峰事件（後書き）

福本「今回、僕達は出番なしですね。「マリーダ」そうね。「作者」今回は張鼓峰事件の説明みたいな感じに書いたの…。「遠地」そう言えば実史と違うところがあるんだよな。「作者」はい、実史では航空機は出撃してませんし、航空隊派遣によってソ連側の損害が増えています。「千歳」ところで、作者さん。次号は？「作者」次号は新キャラが出ます！！「千歳」本当ですか？「作者」はい！！「マリーダ」それでは読者の皆さんのご意見ご感想お待ちしております。」



## 2人の亡命者

8月12日 満州帝国

南方 満州里 満ソ国境

2人の男女が身を隠しながら歩いていた。しかも、すでに夜だ。

更によく見ると2人とも若い。

年は16〜18といったところだろうか。

「大丈夫、ラフィール？」

「さつきからそう言っておろう、ジント！」

「そんなに大声挙げなくても……」

「だいたい、こんな夜に何をしてるか知らないが大声を出せば見つかる訳で……、」

「誰か！」

パトロール中の満州軍兵に見つかった。

翌13日 海軍省山本次官室

ジリリリン！

黒電話が鳴る。

福本

「はい、海軍省山本次官のお部屋ですが？」

石原

『ああ、福本君か？、丁度良かった。君に用があったからね。』

福本

「はあ……？」

石原

『実は昨日、満州の満州里でソ連から亡命者が出てな。』

福本

「それで？」

石原

『それがな……』

福本

「……と言つことです。」

山本五十六

「なるほど。その亡命者の2人が海軍将校だった訳だな？」

福本五十六

「はい。」

山本五十六

「で、どうしたいんだ？」福本

「マリィダと一緒に預かりに行きたいんですけど……」

山本五十六

「いいだろう。お前の事だ、見込みが有れば迎え入れる気だろ？」

福本

「やはり閣下には敵いませんな。」

山本五十六

「こつちやって秘書をしてもらっているんだ、考えていること位解る  
ようにもなるぞ。」

翌14日 満州 満州里

市街レストラン内

食事中の客の中に福本とマリダが居た。

2人の前には男女が居た。 福本

「初めまして、帝国海軍大佐の福本です。」

マリダ

「同じく少佐のマリダです。しかし、あなた方のような有名な人とも石原閣下は繋がっていたんですね。」

「??？」

「驚いたかね？」

福本

「ええ、満州映画協会の理事長甘粕正彦と『男装の麗人』こと川島芳子は日本でも有名ですから。」

甘粕正彦

「君達の事は石原閣下から聞いているよ。なんでも日本の未来を任せられる青年達だね。」

福本

「買い被り過ぎですよ。ところで亡命した将校の件は？」

甘粕正彦

「私が保証人になって預かっている。心配ないよ。」

数十分後 市街地のホテル

「元ソ連海軍少尉のラフィールです。」

「同じく元少尉のジントです。」

福本

「帝国海軍大佐の福本大介だ。よろしく。」

マリダ

「同じく少佐のマリダよ。2人共よろしく。」

「よろしくお願いします。」

福本

「じゃあ、突然で悪いけど話を聴かせて貰おうか。」そして、2人は喋り初めた。

次号へ

特別後書き（本編とは関係ありません）

【開戦日に対しての思い】

福本

「そう言えば、今日は開戦日でしたね。」

遠地

「なんの？」

千歳

「作者の世界の太平洋戦争の開戦日。真珠湾攻撃のあった日よ。」

マリイダ

「そして、大日本帝国が滅びる結果になった戦争の始まった日……」

「……」

作者

「けど、そうするしか日本が生き伸びる道はなかったのは事実です。」

福本

「それに、有色人種にとって新たな希望の光が見えた日でもあるし。」

遠地

「そうだよな。太平洋戦争が始まったからこそアジア・アフリカの

人達は真の民族自決を知った事も確かだ。」

千歳

「そして、戦争後期は守りたい物を守るため特攻などで散った人もいる。」

作者

「その通りです。そして靖国には100万を超える英霊が居ます。ですから、今回はそんな英霊に冥福の意を込めまして敬礼を行いましたと思います。」

福本

「それでは、きおーつけ！、けいれーい！  
ピシッ！

1分経過

福本

「やめ。解散。」

作者

「如何だったでしょうか？読者の皆様も手を合わせる、黙祷でも構いません。太平洋戦争で亡くなった英霊のご冥福を祈って下さい。」

## 2人の亡命者（後書き）

マリイダ「新キャラで、亡命したあの2人の事？」作者「はい。」  
福本「じゃあ次号は、あの2人がなんで亡命したかを書くんですね。」  
作者「そうなりますね。」マリイダ「それでは読者の皆様、ご意見ご感想お待ちしております。」

事情とこれから(前書き)

更新遅れてすみません。

## 事情とこれから

アプリアル・セルゲイ・ラフィール元ソ連海軍少尉（17）と、アントン・スユーヌ・ジント元ソ連海軍少尉（17）の話聞いた福本とマリィダは、明日、日本に連れて帰ることを伝え2人を部屋に帰した。

そして今、福本はポーと窓から満州里の街を見ていた。

コンコン

福本

「どうぞー。」

ガチャ

マリィダ

「山本次官に連絡しといたわよ。」

福本

「ありがとう。」マリィダ

「けど、次官は最初は疑ってたみたいだけど……」

福本

「そりゃ、そうさ。僕だって最初、亡命者の事を聞いた時、疑った

よ。」

マリィダ

「なんで!？」

福本

「ついこの間まで、張鼓峰で軍事衝突をやっていたんだ、神経質にもなるし、味をしめたスターリンが仕組んだ罠かもしれない。と考  
えてしまう。」

マリィダ

「あ、そっか。」

福本



「けど、2人の話しを聞いたら、そんな風には聞こえなかった。だから今は疑ってない。」そう言いながら2人の話の内容を思い出していた。

ラフィールとジントの2人が話してくれたのはこんなことだ。

2人共、元は欧州のクロシュタット軍港に着任してそこで出会ったこと。ラフィールの父親は、元は貴族で、ロシア革命でその地位をうしなつたが、真面目に働いていたこと。しかし、数年前にスターリンが推し進めた農業集団化が失敗した時に反革命派と烙印を押されて、殺されたこと。この時、農業集団化を反対していた地主のジントの父親も同じように殺されたこと。2人共苦勞して海軍に入ったこと。赤軍大粛清で海軍提督が全員殺されたこと。ラフィールの母親が最近亡くなったこと。幼い頃、母親が亡くなったジントも一緒に泣いてくれたこと。そして、亡命を決意したことだった。

福本

「あの2人、見込みあると思うんだけど。どう、マリィダ？」  
マリィダ

「うーん、相性はいいとは思うけど…。まだわかんない。」  
福本

「そっか。まあ目利きの方は山本次官にもやって貰おうかな。」  
マリィダ  
「ハイハイ。私、疲れたから寝るわ。」

福本

「おやすみ。」

マリィダ

「おやすみ。」

8月15日 帝都 海軍省

山本次官室

福本はラフィールとジントを山本次官に紹介した。

その後……

福本

「どうですか次官？」

山本五十六

「素質の方は未知数だが、いいコンビかもしれないな。」

福本

「そうですね。良かった。」

山本五十六

「どこかの誰かさんを見ているみたいだな。（^・^）」

福本

「……何かの当て付けですか？」

山本五十六

「いいや。ところであの2人はこれからどうするとか言っていたか？」

福本

「？」

「特には何も。ですから、こう持ちかけてみたんです。」

山本五十六

「ほう、なんと？」

福本

「日本海軍士官に成らないか、と。」

山本五十六

「で、返事は？」福本

「2人共それでいいと言っていました。ですから、神戸海軍士官学校

に入れようかと思っています。」

山本五十六

「そうか。なら、余計にどこかの誰かさんと似ているな。」

福本

「ですから、何の当て付けですか？」

「こう言いながらも、2人共顔は笑っていた。」

次号へ

## 事情とこれから（後書き）

マリーダ「事情の方は、ずいぶん簡単にまとめたのね。」作者「はい。普通に書くと二千字以上になりそうなので……。」マリーダ「ふん。」福本「ところで次号は？」作者「はい。次号は新兵器のお披露目です。なにが出てくるは楽しみに。」マリーダ「それでは読者の皆さん、ご意見ご感想お待ちしております。」

## 新兵器お披露目（前書き）

（登場人物紹介） アブリアル・セルゲイ・ラフィール（女性17） 髪……青色 髪の長さ……腰まで 元ソ連海軍士官。現在は日本海軍士官候補生として在職。マリィダ・千歳とは仲良し。好きな物……外国・海 嫌いな物……スターリン アントン・スユーヌ・ジント（男性17） 髪……薄茶色 髪の長さ……耳まで 元ソ連海軍士官。現在は日本海軍士官候補生として在職。ラフィールとは仲良し。好きな物……特になし 嫌いな物……スターリン

## 新兵器お披露目

1938（昭和13）年 10月20日海軍横須賀飛行場

一機の飛行機が飛んでいる。

特徴としては低翼単葉の機体だ。

そして、コックピットが小さいから戦闘機であろう。しかし、この時の日本陸海軍の主力戦闘機は低翼単葉ではあっても固定脚である。それが例の機体にはなかった。

地上には10人ほどの人間が双眼鏡片手にその機体を観ていた。

その人物構成はと言うと、まず海軍軍人が7人、陸軍軍人が1人、民間人が2人である。

まず、海軍からは、山本次官、福本、マリイダ、遠地、千歳のいつものメンバーに、ラフィール、ジントが来ていた。

陸軍からは、石原参謀次長、それに明子天皇（彼女はお忍び）、そして三菱の堀越二郎技師が来ていた。

明子天皇

「山本。あれが海軍の新型戦闘機か？」

山本次官

「その予定になっております。陛下。」

福本

「今は、十二試艦上戦闘機と呼ばれています。」

そう

後に、『零戦』こと『零式艦上戦闘機』の試作機が飛んでいた。

この世界では、十二試艦戦の開発指示が出たのは昭和11年（史実

では昭和12年)。その後、無茶な性能要求に悪戦苦闘しながら、なんとか完成に漕ぎ着けたのであった。

堀越技師

「スペックとしましては、高度3800mで474km/h。高度5000mまで7分15秒。武装は20mmが2挺、7.7mmが2挺、30Kgまたは60Kg爆弾が二発。航続距離は3000Kmを予定しております。」

石原参謀次長

「ほう！、我が陸軍にも欲しいな。」

堀越技師

「まだまだ改良の余地はありますが、案外それはいいかもしれないですね。」

翌21日 富士陸軍演習場

この日、山本次官、福本、マリイダ、遠地、千歳、ラフィール、ジント、そして明子天皇（またお忍び）は新型軽戦車のお披露目に来ていた。

今回、陸軍からは永田参謀総長、石原参謀次長ほか、十数人ほどの陸軍軍人が来ていた。

ただ、やはりと言うべきか海軍の人間が来ていることに、露骨には出さないが、いやーな顔をする人間はいた。

そんな人間をしり目に1人の陸軍軍人が近いて来た。

「海軍の山本次官ですか？」

山本次官

「そうだが、きみは？」

「申し遅れました。重見伊三雄<sup>しげみいさお</sup>中佐です。新戦車開発会議のメンバーの1人です。」

マリーダ

「じゃあ、今回の新型軽戦車の？」

重見中佐

「と言っても開発提案をしただけですが。」  
と会話していると一両の戦車が出てきた。

重見中佐

「あれが、新型です。正式名称98式軽戦車であります。」  
そう重見中佐が言っていると、98式軽戦車は走り初めた。

かなりのスピードである。重見中佐

「スペックを言いますと、最大速度40Km/h、行動距離250Km。武装は九五式37口径37mm戦車砲、

7,7mm機銃が2挺。装甲は車体及び砲塔前面40mmの30度傾斜装甲、同側面は20mmの30度傾斜装甲、同後面は10mmの垂直装甲です。前面装甲なら、現在ソ連軍が配備している45mm砲を500mまで防ぐことができます。」

遠地

「しかし、よくそこまで細かいデータを調査出来ましたね。」

重見中佐

「張鼓峰で、無傷な戦車砲と砲弾が回収出来ましたので。」

福本

「一つお尋ねしてよろしいでしょうか？」

重見中佐

「どうぞ。」

福本

「傾斜装甲、つまり被弾傾斜は一体どこで思いつかれたんですか？」  
重見中佐



「開発者の話ですと、海軍さんの戦艦の砲塔が、傾斜装甲を採用していることからそうしたようです。装甲厚を増やさなくても防御力が上がるそうです。」

福本

「なるほど。」

山本次官

「しかし、重見中佐。そんな事を我々に話していいのかね？」

重見中佐

「別に構いませんよ。ま、私としましても福本大佐に興味がありしてな。」

福本

「私にですか!?!」

重見中佐

「石原参謀次長が言ってましたよ。支那事変になんぞさつさとやめてその金を戦車開発や新兵器開発に宛てる。と言っていた海軍士官が居たと。」

山本次官

「なるほど。そう言う事か。」  
納得した山本だった。

次号へ

## 新兵器お披露目（後書き）

遠地「ところで作者。」作者「なんですか？」遠地「作中に出てきた重見伊三雄中佐で実在の人物なんだって？」作者「はい。」福本「けどあんまり聞かない人ですね。」作者「え〜とですね。宝島社の『太平洋戦争秘録・日本陸軍指揮官列伝』の75ページに書いてあります、史実ではフィリピンで戦死。戦死後中将に昇進。」千歳「戦死なさってるんですか。」マリーダ「なんか宣伝してない？」作者「それではご意見ご感想お待ちしています。」マリーダ「あ、逃げた。」

## ドイツ、政変！

1938年12月。

年の残りもわずか1ヶ月となり、新年をどう迎えようかと世界中の人間が考えていた時、そんな事を忘れてしまふ【歴史を変えた】出来事が起こった！

12月7日、政権不安定なフランスと友好条約をドイツは結んだ。この友好条約について色々な憶測や推測がされたが、主に言われたのがほぼ同族（主義的に）のスターリンとなんらかでケンカしたのではないかと言う事だった。

さて、条約締結後ヒトラーはパリからベルリンまで専用機で戻ると言い始めた。随行員は悪天候とあり、止めるよう説得したが聞きられず、ヒトラーは外相リンベントロップ、秘書のボルマンら数人と共に専用機に搭乗、他の随行員は列車で帰国した。翌日、列車で帰国した随行員はヒトラーの乗った専用機が到着していないことを知った。

その後の捜索によりベルリン近郊の森に専用機が墜落しているのが発見された。生存者なし。

もちろん、遺体の中にヒトラー総統の遺体もあった。

これによりドイツたちまち大混乱（主に政府）に陥った。

これは政府や議会をヒトラーが仕切っており、その本人が死亡した為だ。

何よりヒトラーの死で与党のナチス党が慌てた。

政権奪取の為、反ナチス政党などが動き始めたからだ。

この為、一刻も早い政権回復が望まれたのだが、そんな人物はいな

かった。

国会元帥のゲーリングは無能の上にモルヒネ中毒者、親衛隊長官ヒムラーは党内では実力者だが外部では無名、宣伝相ゲッペルスは国内外では有名だが人望がなかった。こんな人物ばかりしかいなかったから、後継者を出せなかった。

これに対し野党の動きは素早かった。

すぐに保守派勢力を結集し、強力な政治家を出してきた。

キリスト教民主党の政治家で、元ケルン市長のコンラート・アデエナウアーである。

史実では、彼は1949～1963年に西ドイツ（ドイツ連邦共和国）に就任している。その彼がこの世界で早くも新しいドイツの首相になるうとしていた。

その後アデエナウアーは国会議員になる補欠選挙以降国防軍が警護に乗り出した。

これに対しナチス党本部や内務省官僚は抗議したが、本来なら守るべき警察がナチス党の影響下にあったからだ。

この抗議は国外はもちろん、国内世論も相手にしなかった。

これはドイツ国民が一党独裁の弊害に気付いた現れだろう。

こういった国防軍などの協力により翌年の2月、アデエナウアーは首相に就任した。

次号へ

## ドイツ、政変！（後書き）

作者「次号は、日本で首相が代わります。ご意見ご感想お待ちしております。」

## 新内閣誕生

1939年1月

日本では年の始まりだと言うのに呆れ果ててしまう出来事が起きた。それは首相であった近衛文麿が政権をほうり出してしまったのである。

直ぐ様、新首相を就任させることになった。

この時、陸軍から阿部信行大将を推していたのだが、明子天皇は不安を感じていた。

陸軍から首相を出すのは陸軍内の強硬派を抑えると言う意味では良いのだが、それだけではダメな事情があった。

それは強硬派と近衛首相の失言の為、講和交渉に失敗した支那問題と、その裏で暗躍するソ連、悪化の一途を辿るアメリカとの外交関係があるからだ。

つまり、これらの問題に対応しなければならぬとゆう事はかなりの手腕を問う。

海軍の米内大將はこれに当てはまるが陸軍の強硬派辺りから反対がある可能性があった。

この為、明子天皇他、重臣達の相談の結果、ある人物に決定した。

数日後 帝都 ある料亭

福本

「どうも始めまして海軍大佐の福本大介です。」

マリーダ

「同じく中佐のマリーダです。」

「よろしく。ところで今や陸海軍でも異例の出世と異端とも取れそうな発言で有名な人間が、こんな老いばれの予備役大将に何の用かね？」

福本

「何を言いますか。2個師団を増設しておきながら、陸軍大臣の時に『明日の陸軍の為』と4個師団削減を行ったあなたの手腕を借りにきたのですよ。宇垣一成閣下<sup>うがきかずしげ</sup>。」

宇垣一成

史実では上記のとおり軍事課長の時に朝鮮2個師団増設案を作成、当時の内閣が反対すると陸軍大臣が辞任を強行、後任を出さなかった為、内閣が倒れ、後任の内閣に2個師団増設を可決させたが、その後、本人が陸軍大臣の時、4個師団削減など、有名な『宇垣軍縮』を決行した。

その後、大命降下によって組閣に取り組みも、陸軍が陸軍大臣を出さなかった為、首相にはなれなかった。現在は予備役大将。

宇垣一成

「なるほど、陛下は私に首相になって欲しいと？」

福本

「はい。陸軍内は永田参謀総長や石原参謀次長などが抑える手筈になっております。」

宇垣一成

「そうか…、ところで福本君？」

福本

「なんででしょうか？」

宇垣一成

「1カ月前のヒトラーの事故死なんだが、きみ達はどう見ているのかね？」

マリーダ

「非公式ですが、陛下はもとより陸海軍もスターリンの陰謀と言われいております。」

宇垣一成

「どうやら、前途多難だな、私の内閣は。」

数日後、大命降下により宇垣一成内閣が誕生した。



## 新内閣誕生（後書き）

作者「次は宇垣内閣の外交政策のついて書きます。ご意見ご感想お待ちしています。」

## 新内閣の外交

さて、誕生した宇垣内閣の初仕事は外交関係であった。まず、間延びのような事になっていた日英同盟の復活に取り掛かった。

これについては基本的な事は固まっていたので1月の下旬には調印できた。

条件は以下の通り。

- ・ 日本政府はソ連との戦争では参戦あるいは中立に徹する。
- ・ 2カ国以上と戦う場合は双方参戦する。
- ・ イギリス政府は日本政府に対し十分な資源及び技術提供を行う。
- ・ イギリス政府及びその連邦国政府は満州国を独立国と認める。

など

次に、着手したのは支那問題だった。

これは、明子天皇と宇垣首相が蒋介石に親書を送り、講和交渉の糸口を見出だした。

ちなみに蒋介石は、親日家で、日本で陸軍士官教育を修了しており、正直日本との争いに飽き飽きしていた。それよりも今は共同で戦っているが、本当の敵である中国共産党を倒したかった。そんな本人にとってこの親書は渡りに舟であった。

条件について多少揉めたものの2月の下旬には停戦協定が結ばれた。条件は以下の通り。

- ・ 日本政府は中華民国政府の正当性を認め、南京政府（首班 汪兆銘）との合併を推進する。
- ・ 中華民国政府は満州国を承認し、暫定的に国境線を定め、以後は日満支三者協議で決定する。
- ・ 日支双方、戦闘行為を一切停止する。
- ・ 日本政府は上海租界以外の地域から段階的に撤退する。
- ・ 日本政

府は中华民国政府に軍事援助を行う。

など

支那問題を解決した宇垣内閣は、次にドイツを日英同盟に引き込む事に着手した。

これはイギリスも賛成していた。イギリスにしてみれば、今や頼りないフランスよりは元は敵であったものの頼りになるドイツを味方に引き込んだ方が良いと判断したようだ。

日本の方はドイツの技術製品はイギリスから提供する技術及び資源と同じくらい喉から手が出るほど欲しかったからだ。

当初、交渉の糸口を見つけるのに苦労したものの、日本陸軍の人脈を使ってなんとかアデナウアー首相との三者会談を行った。

経過は省くが、ドイツにしてみればメリットが多いと判断したらしく、この話に乗ってきた。

こうして、後に『日独英対ソ連3カ国条約』が3月の中旬にベルリンで調印された。

次号へ

新内閣の外交（後書き）

マリ―ダ「そういえば最近出番ないわね。」福本「本当ですね。」  
千歳「作者さんどうなってるんですか？」作者「すいませんm（  
―）m、説明やらなんやらで出す隙間がなくて…」遠地「なんでも  
いいから早く出せ！」作者「はい！」福本「ところで次号は？」作  
者「はい、次号からシリーズでノモンハン事件を扱います。」マリ  
―ダ「それでは皆さんご意見ご感想お待ちしております。」

## ノモンハン事件 1 〈スターリンの陰謀〉

ソビエト連邦 首都モスクワ クレムリン宮殿 スターリンの私室

スターリンは夜型の人間だと言われている。

実際スターリンは夕食のあと私室で執務をとっている。

執務と言っても、肅清対象者の個人情報ファイルを見る事なのだが……。

しかし、その日はファイルではなく、数枚の地図と多数の航空写真だった。

航空写真は素人が見ても、判るように、専門家の手によって工夫がされている。その写真を見ながらスターリンは地図に赤丸の印を点けていく。

そして、拡大鏡を置くと、パイプを手にとると火を点けた。（なお、彼はかなりのヘビースモーカーだったそうだ。）

スターリン

「ヤポンスキー（日本人）共め、我がソ連と国境が接している部隊進出可能な地帯に要塞線を築いているな。これでは沿海州を含めた格方面からの侵攻は大損害を覚悟しなければならぬ……。」

なお、沿海州とはウラジオストクがある地域である。どうやら、スターリンは満州国侵攻を企んでいるようだ。

スターリン

「昨年は張鼓峰で、日本軍を相手にしたが……、日本兵の奮戦と航空隊の出勤は予想外だった……。どうやら日本軍には、高度な戦略的判断が出来る人間が組織がいるようだ……。」

そう言うのと立ち上がり壁に貼ってある満州付近地図を見た。

ふと、彼は地図のある地域を見た瞬間、何か考え始めた。

そして、机にあった軍の編成表を見ていたスターリンは、二、三度

確認するとニヤリとした。

スターリン

「なるほど、モンゴルと満州の国境には、要塞線も何もない。鉄道も一部通じているな。しかも、都合のいい事に我が軍の軍事顧問団と駐留部隊がいるか。」

スターリンはニンマリと笑った。

次号へ

ノモンハン事件 1 〈スターリンの陰謀〉（後書き）

作者「次号では戦闘になります。」ご意見ご感想お待ちしております。

「

ノモンハン事件 2 空戦 (前書き)

この当時、日本陸軍は3機一個小隊で運用したそうです。



## ノモンハン事件 2 空戦

1939（昭和14）年7月5日

満州 ノモンハン上空

この日、上空には97式戦闘機及び95式戦闘機が編成を組んで飛んでいた。

「しかし、露助の野郎はまだ懲りねえのか？」

「それだけ、スターリンが執念深いんですよ。田北大尉。」

田北大尉

「だがな多田上等兵、考えもみる。ただでさえヒトラーの事故死で疑われた人間が余計怪しまれる真似するか？」

「前回の第一次ノモンハン事件で味を占めたんでしょう。あ、ちなみに第一次ノモンハン事件とは5月11日から30日に発生した紛争で東搜索部隊もこのこの時、壊滅しました。」

田北大尉

「西岡軍曹、誰に喋っているんだ？」

西岡軍曹

「読者にです。」

田北大尉

「読者て…（…）」

多田上等兵

「大尉殿！。前方、敵です！」

そう言われ前方を見ると、ぽつぽつと黒い点が出てきた。

黒い点をよく見ると二種類。一隊は単翼単葉のイー16、もう一隊は復葉機のイー153、どちらも引き込み脚だ。それが、10機ほ

どの編隊が向かってくる。

『全機、【対ソ空戦心得】どつりに行動せよ。空戦開始!』  
中隊長の坂田少佐が編隊周波数で命令すると敵編隊に突っ込んで行く。

さて、【対ソ空戦心得】とは陸軍の航空本部が作製したものである。  
(噂では人事異動で、航空本部長になった石原莞爾中将が作製を命じたとか。)

この心得には、復葉のイー153は同じ復葉の95式戦闘機、単葉のイー16は97式戦闘機で対応する、などが書かれていた。  
最初は機種によって戦う相手を変更するのは面倒だと思われていた。  
しかし、空戦ではこの割り当てにより、技量の高い日本側が優勢であった。

田北大尉は一機のイー16と戦っていた。

最近のソ連機はコックピットの後ろに防弾板を溶接している為、パイロットを狙っても、一連射では墜ちなくなつた。

その為、数度の射撃でやっと本日一機目の敵機を撃墜できた。

田北大尉

「ふう、やっと墜ち。大尉!、危ない!」え!？」

この時、体は自然に反応していた。

反射的に操縦桿を倒して、機体を横滑りさせる。  
すると…

4つの曳光弾が先程大尉の機体あつたところを通過した。

そして、銃撃したと思われるイー16が大尉の横を通過した。

しかし、そのイー16は後ろから追い駆けてきた多田上等兵機から

多数の銃弾を浴びて撃墜された。

田北大尉

「ふゝ、危なかった。ありがとう、多田上等兵。」

多田上等兵

「いえいえ、大尉殿のお陰で一機撃墜出来ましたので。」

西岡軍曹

「大尉、どうやら粗方片付いた様です。」

田北大尉

「そうだな、よし。引き上げよう。」

『『了解』』

帰還途中

多田上等兵

「しかし、大尉。この無線と言うのは便利ですね。」田北大尉

「ああ。さつきはこいつのお陰で助かったからな。」西岡軍曹

「整備兵に聞いたんですけどね。なんでも、我々が使っているのはイギリス製だそうで。」

多田上等兵

「へえー、イギリス製なんですか!」

田北大尉

「これがあつたら支那事変の時にどれだけ便利だったか……」

なお、彼らはノモンハン派遣前は支那で戦っていた。西岡軍曹  
「そうですね。」

その頃  
モンゴルの首都 ウランバートル

「なぜ、制空権が獲れん！」  
1人の男が叫んでいた。

彼こそ、スターリンより、ノモンハン事件を任された、ゲオルギー・コンスタンチノウィチ・ジューコフ大将である。

参謀

「機数は足りておりますが、パイロットはほとんど新米で、指揮を執る隊長の数がありません。以前は揃っていましたが、ほとんどがGUGBに逮捕されているのです。」

ジューコフ

「判った。モスクワへ掛け合って熟練者を大至急派遣してもらおう。これは、相当苦戦するな。そう思ったジューコフだった。」

次号へ

ノモンハン事件 2 空戦 (後書き)

作者「どうでしたか？ 第一次ノモンハン事件は後に語らせて頂きます。ご意見ご感想お待ちしております。」

ノモンハン事件 3 〽戦車戦〽 (前書き)

戦闘場面、かなり短いです。

### ノモンハン事件 3 く戦車戦く

7月7日 ハルハ川東岸 満州將軍廟しょうぐんびやうから約10キロの日本軍陣地

その日、日本兵全員にとって目覚めの悪い日になった。

ほぼ毎日行われるソ連軍の制圧砲撃は勿論、この日、偵察に出た97式司令部偵察機が進撃中のソ連軍部隊を発見したからだ。

「大丈夫でしょうか？、山田少尉。」

山田少尉

「お前なあ…、自分の乗ってる戦車くらい信用しろよ。」

「そうですね、田宮上等兵。しかも、あなたが操縦手なんですから、自信を持たないと。」

田宮上等兵

「そりゃ、そうですね…。この戦車は初陣ですよ？乃木曹長。」

「大丈夫だって。しかもこの98式軽戦車は、97式中戦車よりも15mmも装甲が厚いだけ。」

田宮上等兵

「……陽気ですね。川本伍長。」

山田少尉の乗る98式軽戦車はハルハ川東岸の安岡正臣中将指揮下の戦車第四連隊に所属している。

戦車第四連隊は軽戦車3個中隊、中戦車1個中隊の編成である。

陸軍参謀総長の永田鉄山と石原莞爾はソ連との緊張度の高い満州の戦車連隊の軽戦車中隊の95式軽戦車から98式軽戦車に装備変換

を行った。

なお、山田少尉は軽戦車第二中隊第二小隊長である。

あれほど地面を揺らしていたソ連軍の制圧砲撃が不意に終わった。しかし、ソ連軍の攻撃はこれからである。

山田少尉

「やっと終わったか…。」川本伍長

「小隊長、連隊本部からです。『全車、応戦せよ。』以上です。」  
乃木曹長

「また、簡単に言ってくれますね。」

山田少尉

「まあ、新型だからな、仕方ないだろう。田宮上等兵。待避壕から出してくれ。」

田宮上等兵

「了解。」

ちなみに、98式軽戦車は4人乗り。

山田少尉は戦車長、乃木曹長は砲手、川本伍長は前方銃手兼無線手、田宮上等兵は操縦手だ。

そして、待避壕から出た瞬間…。

山田少尉

「来たな。」

数分後

乱戦になっていた……

山田少尉

「目標、10時の方向、距離1000、BT10装甲車、撃て！」  
ドゥーン！



ポカーン！

山田少尉

「仕留めた！、次弾急げ。」

乃木曹長

「了解。田宮上等兵、そのまま走れ！」

田宮上等兵

「はい！」

日本軍の戦車射撃は、行進射撃と言い、行進しながら射撃する。普通は一時停車して射撃するのだが、日本軍は砲手の微調整で行進射を可能にしたのである！

山田少尉

「む！、次はあれだ！。12時の方向、距離600、BT5……」  
ガキーン！

乃木曹長

「……」

山田少尉

「ち、川本伍長！、田宮上等兵！、大丈夫か？」

「大丈夫です。」

山田少尉

「乃木曹長！、方向、距離同じ、目標BT5戦車、撃て！」

ズダーン！

ポカーン！

山田少尉車を撃ったBT5戦車は砲塔を吹き飛ばし、炎上した。

ハッチを開け、炎上するBT5戦車を見ていた。ふと、右を見ると、距離500m位のところにBT5戦車がいた。しかも、砲塔が旋回していた！

山田少尉

「！！、乃木曹長、9時の方向、距離500、急げ！」

乃木曹長

「少尉、次弾まだです！」山田少尉

「なに！」

見るとBT5の砲塔はこっちを向いていた。

この瞬間、山田少尉は死を覚悟した。

しかし

ズボン！

爆発、炎上したのはBT5の方だった。

山田少尉は突然の事で混乱していたが…、

「おーい！、無事か？」

声のした方向を見ると、89式中戦車のハッチから戦車長が身を出して聴いてきた。

大丈夫と少尉が答えると、89式中戦車の戦車長は前を見ると、合図する。

前を見ると、ソ連軍が回れ右して退却するところだった。

山田少尉車はこの日、3両の装甲車と、1両の戦車の撃破した。

次号へ

ノモンハン事件 3 〱戦車戦〱（後書き）

作者「次号は第一次ノモンハン事件の経過と、第二次ノモンハン事件の日本軍の動きを書きます。〱ご意見〱感想お待ちしています。」

## ノモンハン事件 4 ～第一次ノモンハン事件と陸軍の動き～

### ・第一次ノモンハン事件

「ノモンハン事件 2 ～空戦～」に少し触れていましたが、説明いたします。

#### ・発端

5月11日にパトロール中の満州国警察隊が越境したと思われるモンゴル軍兵士の一団に発砲。

暫く後、今度はパトロール中の満州国警察隊にモンゴル軍が発砲。

これは双方の国境線の主張が違っていたから。

その為、双方とも【越境】しているものとして発砲した。

こうした双方の【越境】の為、撃ったり撃たれたりしたため事態が次第に拡大。

二度の紛争に拡大した！

作者

「簡単にまとめると、こうですかね。」

福本

「まあ、こうですね。」

マリーダ

「次は第一次ノモンハン事件の経過です。」

#### ・経過

ハイラル駐屯の第23師団に報告に報告が届く。

第23師団長、第23搜索隊と歩兵2個中隊を現地に派遣。【指揮あす官 東八百蔵中佐】

15日、現地に到着するもモンゴル軍、ハルハ河を渡って西に退却。派遣部隊、任務達成とみて引き上げる。

モンゴル軍、再度越境。

(この時、ソ連軍も参加)

第23師団、山縣武光大佐を指揮官に、総兵力1600名あまりを派遣。

(東中佐率いる、搜索隊もこれに参加)

先行していた東搜索隊、敵大部隊と接触。山縣大佐と無線連絡をとるも繋がらず。

29日、包囲された東搜索隊敵中に突撃。

全滅に近い損害を受ける。山縣大佐率いる本隊も、大損害を被る。

同日夜半、遺体收容を兼ねた夜襲を決行、31日を期してハイラルへの帰途につく。

遠地

「これが第一次ノモンハン事件の経過です。」

作者

「ちなみに、日本軍は参加兵力の約半数が死亡したただそうです……」

「……………」

千歳

「えーと、進めまていいんでしょいか？」

福本

「そうですね。進めましょう。」

千歳

「それでは、第二次ノモンハン事件の陸軍の動きを簡単に。」

### 【陸軍の動き】

#### ・航空隊

支那戦線で、戦っていた 航空隊を派遣。

これに伴い、野戦飛行場 を將軍廟付近に四カ所構 築。こ

れにより、制空権 確保、未帰還機数減少に 役立っている。

なお、空戦で損耗して部 隊はハイラルで人員の休 養、補

充、機材の交換、 修理を行い、休養期間が 過ぎると、飛行

訓練を再 会、パイロットの練度と 勘を取り戻させ、前線移

動に備えた。

#### ・陸軍部隊。

現在は第7師団、第23師団 の2個師団で戦闘中。

支那事変が終わった為、 3個師団の増援を準備中。 なお、

第7師団、第23師団 には支那戦線で鹵獲した ドイツ製37

ミリ、チェコ 製47ミリ対戦車砲を交換 部品、砲弾と共に

両師団 に配備した。

他にも、戦車連隊の一部 部隊の装備交換が行われ ている。

#### ・補給

現在、ハイラルから後方 の將軍廟までの鉄道線の 敷設工  
事を実施中。 工事 は南満州鉄道が行ってい る。

なお工事は、ハイラルから50キロ（ハイラルから將軍廟まで約190キロ、將軍廟からノモンハンまで約10キロ）の地点まで工事は終了している。

なお、現地ではハルハ河や支流のホルステン川を除けば容易に得られない。為、作井（井戸を作る）部隊と、水の煮沸処理部隊（中国では飲食に適した水よりも、一回煮沸しない）と飲食にも適さない水が（圧倒的に多い。）を配備している。

・ 関東軍

関東軍がおかしな真似をしないように永田鉄山が石原莞爾を派遣、協議（と言っても関東軍上層部を叱りつけに行つたそうだが）を行い、参謀本部主導の作戦指揮を現場に徹低させた。

ラフィール

「なんで、最後に関東軍に話があったんですか？」  
作者

「そりゃ、そうですね。だって関東軍には悪名高い辻参謀が居るんですから。」

ジント

「……なるほど。」

次号へ



ノモンハン事件 4 ㄱ 第一次ノモンハン事件と陸軍の動きㄱ (後書き)

ㄱ 意見ㄱ感想お待ちしております。

ノモンハン事件 5 シベリア鉄道爆撃作戦！ 前編（前書き）

補給体勢・補給路の構築や、防御体勢による持久戦法など、紛争の長期化に備える日本軍の次なる手とは？

ノモンハン事件 5 シベリア鉄道爆撃作戦！

前編

7月10日 ハイラル飛行場

この日、ハイラルには珍しい機体が並んでいた。それも二種類。一つは双発の爆撃機、もとい96式陸上攻撃機。もう一つは単発の戦闘機、十二試艦戦。十二試艦戦は実戦データを採るため。96式陸上攻撃機は爆撃任務のためだが、一部の人間を除いて爆撃目標を知らなかった。

「これが資料一式です。」そう言うラフィールは持って来た資料を渡す。

「ありがとう。しかし、すまないね、急かしてしまって。こう言うって山口多聞大佐は資料を受け取る。ジント

「いえいえ、これくらいなともありません。」

山口大佐

「そうか。ところで山本さんは元気かね？」

ラフィール

「はい、元気ですよ。」

「おい、山口。資料が届いたのか？」

そう言うって入って来たのは参謀役の大西瀧治郎中佐である。

(なお、山口多聞と大西瀧治郎は同期。)

大西中佐

「やあ、ご苦労様。ところであの若士官は元気か？」

ジント

「福本大佐ですか？」

大西中佐

「ああ、そうだ。」

ラフィール

「海軍省やあちこちを飛び回っています。」

大西中佐

「そうか、その様子だと元気そうだな。」

数時間後 格納庫内

今、ここでは作戦前のブリーフィングが行われていた。

山口大佐

「諸君、今回の任務は多少困難な夜間長距離爆撃任務である。」

この発言を聞いた搭乗員達がザワザワとしたが、大西中佐の『静粛に！』ですぐに静かになった。

山口大佐

「目標はソ連国内のウラン・ウデ近郊の鉄道施設。ここはソ連とモングルを結ぶ中継地点であり、ノモンハンへの補給を取り扱っている場所でもある。ここを叩けば、制空権を獲られ、補給に苦しむソ連軍に更なる打撃を被る事になる。」

そう言つて山口大佐は地図を使い説明する。

山口大佐

「距離は片道約900キロ、往復で約1800キロに達すると思われる。しかも、夜間飛行の為、多少の困難があると思うが、この爆撃を成功させ、他人の痛みが判らないスターリンを我々が行って殴つてこようではないか！」

「お〜〜！」×搭乗員全員

大西中佐

「全搭乗員、発進用意！、かかれー！」

バタバタバタバタ

搭乗員達が自分の乗機に駆け込んで行く。

そして、十数分後。

次々と96式陸上攻撃機が離陸して行く。

それを山口と大西は敬礼で見送った。

ノモンハン事件 5 シベリア鉄道爆撃作戦！ 前編（後書き）

作者「一話では、収められないので前後編になりました。」福本「  
そうなんですか。」マリーダ「次号は爆撃作戦本番。」千歳「さあ、  
どうなるのでしょうか？」遠地「ご意見ご感想お待ちしております。」

「

ノモンハン事件 6 シベリア鉄道爆撃作戦！ 後編

数時間後、ハイラル、ウラン、ウデ間上空

全機離陸してから20分もしないうちに日が暮れ、今は夜の闇の中を飛んでいた。

96式陸上攻撃機隊 1番機

「針路そのまま。」

「ヨーソ口。」

つい先程まで天測窓から星を眺め、星の角度を測って、機位と針路は確認していた航法員が操縦士に針路指示を出す。

それを指揮官の大川少佐は後ろの指揮官席で聞いていた。

「しかし、少佐。目標上空は大丈夫ですかね？」

操縦士が不安を紛らすためか聞いてきた。

大川少佐

「心配ない。ウラン、ウデ近郊に戦闘機は派遣されていないし、しかも爆撃目標は一晩中明々と照明をつけているそうだ。」

「へえ、そうなんですか。」

「しかし、少佐。なぜそんなことをご存知なんですか？」

爆撃手が聴いてきた。

大川少佐

「いや、それはな……」

大川少佐は作戦前のブリーフィング前から今回のウラン、ウデ爆撃作戦を山口大佐から聞いていたので知っていた。

その為、ウラン、ウデの近況が現場指揮官としてどうしても気にな

る。

その為、その事を言うと…山口大佐

「それなら、大丈夫だ。陸軍さんの調べでは戦闘機の派遣はないそうだ。それどころか明々と照明をつけて積み換え作業を行っているそうだ。」

大川少佐

「それは本当ですか？」

山口大佐

「事実だ。陸軍さんが諜報員を潜り込ませて確認した事だよ。」

爆撃手

「それで…。」

大川少佐

「ああ、だから今夜は大丈夫だ。」

数時間後

操縦士

「前方に光が見えます。」

この報告を聞いた大川少佐らコックピットにいた全員が前方を見た。すると、うっすらと光が見える。

大川少佐

「航法員、後何分だ！」

航法員



「爆撃目標まで、後10分！」

大川少佐

「爆撃手、爆撃準備。手空きの者は念のため周囲警戒。」

「了解。」「了解。」「了解。」「了解。」「了解。」

ここで大川少佐は無線をつとり編隊周波数に変え指示を出した。

「これより二手に別れる。第一中隊は我に続け。第二中隊は柄本大尉指揮の下、物質集積所を爆撃せよ。」

『了解。我、第二中隊指揮す。』

爆撃手

「少佐、爆撃準備完了。目標も視認しました。これより誘導行います。」

大川少佐

「おう、やってくれ。」

爆撃手

「針路よし。そのまま。」操縦士

「ヨーソロ。」

2人の声を聞きながら大川少佐は目標を見ていた。しかし、なぜか照明が消えない。エンジン音は聞こえている筈だから、普通は消す筈だ。多分、作業中でいきなり消せないのだろう。

爆撃手

「高度そのまま。軸線上に乗りました。爆撃まであと、1分………  
…50秒…」

爆撃手がカウントしていく。

そして、

爆撃手

「爆撃投下! ……全弾投下確認。」

今回参加した18機全機には250キロ陸用爆撃×2個と、60キ  
ロ陸用爆撃×4個が搭載されていた。

『こちら、柄本大尉機。我々も全機全弾投下しました。』

大川少佐

「了解。我々も全機投下した。早い事、ずらかるぞ。」

数時間後、大川少佐率いる爆撃部隊は全機無事帰還した。  
なお、戦果は鉄道施設は全損壊、物質集積所は弾薬にでも火がつい  
たのか一晩中燃えていたそうだ。

そして、彼らは翌日、シベリア鉄道の鉄橋のあるスポボドヌイを爆  
撃、無事帰還し、鉄橋を破壊している。

次号へ

ノモンハン事件 6 シベリア鉄道爆撃作戦！ 後編（後書き）

作者「眠いよ」。「福本「どうしたんですか？」作者「実は『シリーズ・激動の昭和』を見て更新が遅れました。」「マリーダ「しかも、地図帳とにらめっこしながら？」作者「はい。で、『シリーズ・激動の昭和』を見てこう思いました。多少の責任は日本にもあるが、日本を開戦に導いた責任は、アメリカにも大いにはあると。」「遠地「それが感想ですか？」作者「はい。」「千歳「それではご意見ご感想お待ちしております。」「作者「『シリーズ・激動の昭和』を見た人がいたら、その事についても是非お送りください。」「

## ノモンハン事件 7 〱 零戦初陣

さて、制空権を奪取した日本軍だが、これを取り戻す為、ソ連軍は戦闘機隊を出撃させる。

これを迎撃する為、日本軍も戦闘機隊を出撃させる。この為、空戦発生率が高い。

しかし、これは十二試艦戦隊にとっては朗報である。兵器とは実戦に出して欠陥や問題を見つけ、解決し、洗練されていくからだ。

7月20日 ノモンハン上空

この日、十二試艦戦隊は増槽を装着して哨戒飛行していた。

隊長の進藤三郎大尉が辺りを見回していると、1機の十二試艦戦がスツと前出た。

その十二試のパイロットの指差す方を見ると、20機程の機影が見えた。

西の方向から飛んで来ているから味方の97式戦闘機ではない。

第一に味方は双発機と十二試を除いて、固定脚が多いが、向かってくる単発の機影に固定脚がない。

とすれば、敵機しかない。進藤大尉は無線を取ると、全機に指示を出す。

進藤大尉

「カク、カク。これより空戦に入る。散々待たされたんだ、その鬱憤を晴らし来い。」

『了解!』×1 1

今回、派遣された十二試艦戦は12機（+予備機3機）は、10日前から実戦を心待ちしていたのだが、燃料不足の為か、一向に敵機が姿を見せなかった。  
その為、隊員達は多少イライラしていたが、今はそれが闘志となっていた。

進藤大尉は一機のイー16の後ろについていた。

進藤大尉を始め、十二試艦戦を操るパイロットは全員、日中戦争を戦ったベテランばかりである。

当然、イー16の性能や特徴を知っている者ばかりだ。

進藤大尉

「これでも、くらえ！」

パパパパパパパ  
ダンドンダンドン

ポバーン！

20ミリ機銃と7.7ミリ機銃を浴びたイー16は燃料に引火し、火達磨になって落ちていった。

ダダダダダダ

その時、一機のイー16が機銃を撃ちながら突っ込んで来た。  
進藤大尉はそれをヒラリとかわすと、追撃に出た。

速度差は50キロこちらが優速、差はどんどん縮まっていく。（この十二試艦戦には中島製の栄エンジンを搭載しており、性能は一型に準ずる。）

進藤大尉は100メートルまで近付き、射撃を開始する。これは搭載している20ミリ機銃がシオンベン弾になるからだ。

パパパパパパ

ダンダンダン

バキッ！

I-16は翼を叩き折られ落ちていった。

数十分後     ハイラル

無事帰還した進藤大尉達の戦果は敵I-16戦闘機24機全機撃墜。被害なしの一方的勝利であった。

なお、彼らは数日後、撃墜困難と言われた高速爆撃機SBI2、10機も撃墜している。

次号へ

ノモンハン事件 7 〱零戦初陣〱(後書き)

作者「〱ご意見〱感想お待ちしております。」

## ノモンハン事件 8 ノスターリンの困惑

7月25日 モスクワ クレムリン宮殿 スターリンの私室

スターリンは困惑していた。

ノモンハン事件が思い通りに行かないからだ。

最初（第一次ノモンハン事件）はうまくいっていた。しかし、第二次ノモンハン事件からは、つまりきばなっしだった。

最初に制空権が獲られ、進攻したら大損害で戻って来て、その上シベリア鉄道を夜間爆撃された。

今や、問題が山積みである。

まず第一の問題が補給。今や、ノモンハン上空に飛んでいるのは日本軍機ばかりだから、昼間に補給車列が通ろうものなら直ぐ様、日本機が降下、銃爆撃して来る。

今は夜間に補給隊を送っているのだが、効率は非常に悪い。

それに、ノモンハンと言うところは、水が容易に得られない（ノモンハン事件 4を参照）所でタンク車もこの車列に加わるから質が悪い。

しかも、シベリア鉄道を爆撃され補給効率が余計悪化、それにシベリア鉄道守備戦力を派遣しなければならぬからノモンハンに補充、増援の戦力を派遣するしかなかった。

第二に予想外の日本軍新兵器投入。

新型戦車、新型戦闘機の投入はスターリンにとっては寝耳に水であった。（この時、スパイ・ゾルゲは逮捕されていた。）

特に、新型戦闘機の方は、被害が増え、出撃すれば必ず撃墜されると士気が低下している。

対応策もなく、鹵獲して調べようにも、日本軍が進攻してこないか



ら、鹵獲しようにもできなかった。

スターリン

「ヤポンスキーめ、長期戦をやる気か……。さて、いつなるぞとぞいつしたものが……。」

次号へ

ノモンハン事件 8 〈スターリンの困惑〉（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

## ノモンハン事件 9 く世界の反応く

さて、こんな激戦が続くノモンハン事件を外国はどう見ていたのかを紹介しよう。

まず、イギリスは反共産主義を唱えているから、ロンドンタイムズをはじめ、新聞社は急いで特派員を送った。

そして、さっそく将校やパイロットにインタビューを開始した。

特に注目を集めたのはウラン・ウデを爆撃した96式陸上攻撃機隊で、山口多聞司令、大西瀧次郎参謀、大川少佐などが写真付で紙面を飾った。

他にも、陸海軍のエースパイロットや現場指揮官が紙面を飾っている。

ドイツでは、自分達の企業の製品が実戦で使われているし反共産主義国だから、こちらも新聞社は特派員を送った。

それだけでなく、ドイツ陸空軍より観戦武官を派遣、その中には、エルヴィン・ロンメル大佐、アドルフ・ガランド中佐（2人供当時）が参加している。

トルコやフィンランドでもノモンハン事件は新聞の紙面を飾っており、国中が『日本頑張れ！』と応援していた。

双方ともソ連以前のロシア帝国時代から南下政策で争っており、あの日露戦争で日本が勝ったことを自分達のことの様に喜んだ国々だ。こういったことから、ソ連の南下政策で苦しむ国々は日本のノモンハンでの奮戦は痛快であった。

アメリカでは、新聞社によって扱いは色々で、ほぼ客観的に書いている新聞社が殆どだった。

余談だが、ソ連の新聞【プラウダ】（意味は真実）には『我が赤軍、ノモンハンで奮戦』とかなんとか書いてあったそうだが、国内の殆どの人間が信じていなかった。

ロシア人の小話に『色々な記事を載せているが、唯一真実を載せないのは、共産党機関紙のプラウダだけ』と言うオチが全てを語っていた。

今回のノモンハン事件は、どうスターリンが言い訳をしても加害者はソ連軍とその手下のモンゴル軍であり、被害者は満州国である。日本は満州国を守るサムライと言うことで世界の支持を集めていた。この為、長期戦になれば、ソ連はじわじわと苦しむことになるのだ。

最後に陸軍のトップエースの篠原弘道しのは ひろみち准尉の8月27日のインタビューに対する答えである。

「今日は危なかったよ……。なぜかって？、3機ばかり撃墜した後、イー16に追っかけられてな……。あんどきゃ正直ダメかと思ったよ。けど、たまたま海軍さんの新型戦闘機が助けてくれてね。こうして

怪我はしたが帰ってこれたよ。」

次号へ

ノモンハン事件 9 世界の反応（後書き）

福本「気のせいでしょうか？、時系列が一気に1ヶ月も飛んでるよ  
うな気が…」マリーダ「ほんとだ。」千歳「何故ですか？」作者「  
すいません。そうしないと、いけない事情があります…」遠地「  
何その事情で？」作者「さすがにそれはちよつと…」「??？」あ、  
いたいた。」「??？」作者「ちよつと聴きたいことがあるから来い。  
」作者「て、襟つかまないで。」福本「なんか、連れて行かれた  
けど。」マリーダ「後にしましょう。それではご意見ご感想お待ち  
しております。」

ノモンハン事件 番外編 〱山本長官の着任と艦魂〱 (前書き)

ノモンハン事件を一時中断致します。

ノモンハン事件 番外編 山本長官の着任と艦魂

8月30日

山本五十六中将は連合艦隊司令長官に任命され、戦艦長門に将旗を掲げた。

数時間後 長門艦上

福本

「デカイよな。」

マリーダ

「軽く日進の倍はあるはね。」

福本

「まあ、建造年代が違うからな。」

なぜ彼らが長門にいるかと言うと、山本長官の事務官（と言っても長官の秘書みたいなもの）に着任した。じゃあ、なんで山本長官より遅れて来ているのかと言うと後片付けやらなんやらをしていたから。

福本

「さて、長官室にはどうやって行けばいいのかな？」

マリーダ

「長官室は普通、後ろでしょ。」

福本

「だから、後ろに行って適当な階段を降りて、はい、ありました。」



じゃないんだから。」

マリダ

「じゃあ、このまま上甲板うつろつく?」

福本

「人が居れば聴けるんだけど…。」

そう言つて周りを見回すが誰もいない。  
その時…

「きゃー!」

「!?!」

叫び声が聞こえた。

人の声。人が居るとゆうこと。

しかし、甲板ではなく、上に…。しかも女の子。

「「危ない!」」

2人は落ちてくる女の子を受け止めるべく前に飛び出す。  
そして…

ドサ

ドシーン!

福本

「いててて…。大丈夫、マリダ?」

マリダ

「大丈夫。それより、あなた大丈夫？」

???

「あ、はい。大丈夫です…。」

福本

「よかった。ところできみは…」

その時、2人の目の前に光が現れた。

光はすぐ人の形になった。これは艦魂が転移する時の現象である。

2人はその事を知っているから驚きはしなかった。

そして出てきたのはこれまた女の子。

???

「陸奥、大丈夫？、怪我しなかった？」

???

「うん、大丈夫。」

???

「そお。よかった。」

福本

「おーい…。」

「おーい…。」

なぜか、驚く女の子2人。まあ、だいたいの察しはつくが…

???

「あの一、私達が見えるんですか？」

マリィダ

「ええ、それもはっきりと。」

?????2

「もしかして、山本長官が待ってる事務官てあなた方ですか?」

福本

「そうだけど。」

?????2

「山本長官がお待ちになっておられます。お急ぎを。」

マリィダ

「お急ぎを、て言われてもどこをどう行ったらいいのかわからないのに?」

?????2

「では、直接お送りいたします。」

そう言うと彼女は福本の腕を掴む。

マリィダももう1人の女の子に腕を掴まれている。

福本

「え、ちょ、まさか!」

?????2

「それではお送りいたします」

1分後 長官室

山本長官

「遅れるから、長門と陸奥に君達が来たらここに案内するよう頼んでおいたんだ。」

福本

「それは、ありがとうございます。m( )m」

山本長官

「どうした？」

マリーダ

「まさか、長官室に直接入ると思っていなかったので…」

その後、転移はしたのだがその転移先は長官室の中だった。

山本長官

「まあ、いい。丁度君達の話をしよとしたところだ。自己紹介もついでにしておきなさい。」

長官室には士官服を着た16〜18ぐらいの少女達が10人いた。彼女らは、連合艦隊の戦艦の艦魂である。

福本

「本日より山本長官の事務官として着任しました、福本大介大佐です。」

マリィダ

「同じく事務官に着任しました、アーネスト・レリル・マリィダ中佐です。」

「福本！」

「マリィダ！」

なぜか驚く艦魂達。

そして2人に関する話題でワイワイ話はじめた。

福本

「…もしかして僕達で有名なんですか？」

山本長官

「案外そうかもな。」

「では、自己紹介初めまゝです。司会は私、艦魂連合艦隊司令長官、長門が担当します。」

パチパチ

長門

「それでは最初は、最古参の金剛さん、どしどし。」

金剛

「私が戦艦金剛の艦魂、金剛だ。よろしく。」

そう言って自己紹介した金剛は容姿は髪は色は金髪、長さは肩まで。目の色がイギリス出身の為か、青色だった。そんな金剛は『鬼の金剛』と呼ばれている為か怒らせたら怖そうだった。

長門

「次は比叡さん、どうぞ。」

比叡

「私が比叡の艦魂、比叡だ。よろしくな。」

比叡は元気少女と言うのが似合っている。容姿は髪は黒、長さは耳まで。

長門

「次は榛名さん。」

榛名

「えっと…榛名です。よろしく…。( \* ^ ^ \* )」「恥ずかしがりやの三女な榛名の容姿は髪は黒、長さはお腹のあたりまで。」

長門

「霧島さん、どうぞ。」

霧島

「霧島です。よろしく。」「堅物の学級委員長のような霧島。髪は黒、長さは肩よりちょっと下まで。」

長門

「次は…」

「は〜い、扶桑です。よろしく〜。」  
扶桑の容姿は、髪は黒、長さは腰まで。  
ちよつと軟らかなお姉さんと言った感じ。

長門

「次は我が海軍一番の剣豪の山城さん。」

山城

「山城です。以後、お見知りおきを。」  
剣豪の名に恥じない礼儀の正しさだ。  
しかしなして、『地獄の山城』と呼ばれるのか？  
容姿は、髪は黒、長さは扶桑と同じく腰まで。しかし後ろで髪を結んでいる。

長門

「次は伊勢さんです。」

伊勢

「伊勢です。よろしく。」伊勢は優しそうなお姉さんと言ったところ。  
容姿は髪は黒、長さは肘のところまで。あと山城と一緒に後ろで髪を結んでいる。

長門

「次は日向さん。どうぞ〜。」

日向

「日向です。よろしく〜。仲良くしてね〜。」  
人付き合いが上手いのか、お喋りの上手い女の子のようだ。容姿

は髪が黒、長さは耳が隠れるくらい。

長門

「じゃあ、次は陸奥よ。」

陸奥

「先ほどはありがとうございました。陸奥です。」

陸奥は、髪が黒のショートカットの眼鏡子。真面目な補佐役と言った感じ。

長門

「最後になりました。艦魂連合艦隊司令長官の長門です。御二人の着任、心より歓迎いたします。」

長門はさすが国民のアイドル戦艦と言うべきか容姿端麗である。髪は黒、長さは腰まで。後ろを大きめのリボンで髪を結んでいる。

長門

「今いる、艦魂は自己紹介したけど、質問は？」

福本

「特に何も…、出来ればこの後、長門艦内を案内してほしいんですけど…。」

長門

「じゃあ、みんなで案内していいですか？」

福本

「僕はそれでもいいですが。」



マリーダ

「別に、問題ありません。」

扶桑

「じゃあ、今から行きましょつか。」

「賛成！」x8

次号へ

ノモンハン事件 番外編 山本長官の着任と艦魂 (後書き)

作者「やっと出せたぞー。」福本「お疲れ様です。」マリーダ「まさか、こんなに後になるとはね。」作者「すいません。m( )」  
m「福本「ところで次号は？」作者「はい、特別編にして宴会の予定です。」マリーダ「宴会やるの。」作者「まあ、固い事は言わないで。」福本「それではご意見ご感想お待ちしております。」

特別編 宴会

深夜 戦艦長門艦内 使われていない会議室

長門

「それでは新長官の着任を祝って、乾杯！」

『かんぱーい！』

深夜に始まった盛大な歓迎会。いったいどこにこれだけの艦魂がいたのやらと思ってしまうくらい集まっていた。

福本

「…どうする？」

マリィダ

「さあ…」

なんせ、今いる艦魂に知っている艦魂（戦艦を除いて）はいない。

福本

「さて…」

「あ、福本君！？」

福本

「え、あ、愛宕さん！」

声をかけて来たのは愛宕だった。(愛宕とトーク参照)

愛宕

「うわゝ、久し振りだねゝ。元気だった？」

福本

「あ、はい、元気です。マリィダ、以前話したと思うけど愛宕さん。」

マリィダ

「どうも、マリィダです。よろしく。」

愛宕

「よろしく、愛宕です。けどなんで2人がここに？」

山城

「おや、愛宕殿。福本殿とは顔見知りか？」

ここで山城が愛宕に喋りかけてきた。

愛宕

「はい、海軍士官学校に在学していた時に一度だけお会いしました。ところで山城さん、なぜ2人がここに？」

山城

「新長官殿の事務官がこの御二人だ。」

愛宕

「そうだったんですか。」

山城

「福本殿、お主飲めるか？」

福本

「…未成年なんですけど。」

山城

「そうか、残念だ。なら話し相手になれ。」

一時間後

会議室はどえらいことになっていた。艦魂のほとんどが飲み過ぎで寝ていたし、かろうじて起きている艦魂はいまだばか騒ぎの真っ最中。

山本長官はいつの間にか自室に帰ったようだ。

そして、こちらは…

「スウー、スウー」

カルピスの入ったコップを持つ、福本とマリダ、愛宕。そして、寝ている山城。

しかも、愛宕に膝枕してもらって。

と、言うか飲んでる内に、酔って倒れたところが、愛宕の膝だっただけだが。

福本

「飲み過ぎ…なんでしょうかね？」

そう言っつて、山城の周りを見ると、一升瓶が何本か転がっている。

マリーダ

「そつ…でしよつね。」

愛宕

「山城さん、普段はチビチビと飲む方ですから。」

マリーダ

「あら、そつなの。」

福本

「ところで山城さんは『地獄の山城』と呼ばれていますけどいたって普通ですよね？」

愛宕

「普段はね。けど、訓練の時は厳しいの。実際、剣術の時は厳しいし。」

マリーダ

「剣術習われているんですか？」

愛宕

「ええ、習ってます。」

福本

「ちなみに、腕の方は？」

愛宕

「まあ、普段の人よりは強いと思います。」

マリィダ

「へえー。」

愛宕

「話を戻すけど、山城さんは訓練の時は厳しいの。」

福本

「艦が人に似たのか、人が艦に似たのか、どっちなんだろうかね？」

マリィダ

「さあ。」

愛宕

「どっちなんだろうかね？」

マリィダ

「しかし、みんなもよく飲むわね。」

愛宕

「じゃあ、私達はお開きと言っことば。」

福本

「そうですね。もう2時ですじ。」

マリィダ

「そうね。愛智さん、すいませんが山城さんのこと、お願いします。」

愛智

「はい、それではおやすみなさい。」

福本

「おやすみなさい。」

マリーダ

「おやすみなさい。」

次号へ



特別編 宴会（後書き）

愛宕「皆さん、お久しぶりです。愛宕の艦魂の愛宕です。」山城  
「戦艦山城の艦魂の山城。以後お見知り置きを。」作者「と言うわけ  
でよろしくお願いいたします。」福本「次号はノモンハン事件が  
いよいよ大詰めです。」マリーダ「ご意見ご感想お待ちしております。ま  
す。」作者「読者の皆さまには本作を読んでいただきありがとうございます。  
ざいます。新年もどうぞよろしくお願いいたします。」

9月8日 深夜 ハルハ河から約60キロの977（オボ）高地付近

夜の暗闇の中を、日本軍兵士の一団が匍匐前進で、あるいは足音を発てぬよう前進していた。そして、数分後、銃声が聞こえた。

この夜襲は第二師団所属の第十六連隊長宮崎繁三郎大佐が9月4日に計画したものである。第十六連隊は所属する第二師団と共に8月31日にドロト湖西方に進出、同地守備を任された。

9月4日、977（オボ）高地に進み、夜襲の計画を立てた。

宮崎連隊長は支隊長の片山少将に攻撃許可を求めた。彼には勝算があった。

ソ連軍は日本軍が終始防御にまわると思っている。そこに漬け込むつもりだ。ところが、6日に軍指令部から攻撃中止要請を伝達してくる。

だが、これはあくまで要請であって、命令ではない。そこで、片山少将は8日に至って作戦決行を命じたのだった。

翌朝、第十六連隊は高地奪取に成功。直ぐ様、軍指令部に成功と報告した。

この報告を聞いた軍指令部は慌てたが、石原莞爾中将が直ぐ様、同高地守備を命じ、航空隊などにはこれを支援するよう命じた。これは、なぜかと言うと今までの防衛戦で日本軍が粘り強いのは世界中が知っている。

しかし、守りに強くても攻めは弱いのではないだろうか考える人間もいた。

この為、そうではないと見せる必要があり、石原自身が限定ながらも攻勢を計画していた。

そんな石原にとって独断専行とは言えこの宮崎連隊の977高地の奪取は攻勢でも日本軍は強いと証明した。その為、日本軍の意地に掛けて守る必要があった。

これに対し、この報告を聞いたジューコフ司令は直ぐ様、奪回命令を出した。

実はこの1ヶ月、大攻勢準備の為、戦闘を控えていた。

ジューコフは日本軍が守勢に撤している為、攻めてはこないだろうと思っていたから、その隙を突かれた形になった。

しかも、海外の新聞は日本の奮戦が紹介されていたから、日本にこれ以上国際状況上有利になることは避けたかった。

その為の奪回命令ではあったが、この国際状況がジューコフから冷静沈着な判断力を奪ってしまったのかもしれない。

後に両軍に停戦命令がでる16日まで続いた977（オボ）高地消耗戦になることをこの時、ジューコフは知らなかった。

次号へ

ノモンハン事件 10 〱宮崎連隊の夜襲〱（後書き）

作者「明けましておめでとございます。」福本「皆さん、良い年末を過ごせましたか？」マリーダ「次号はオボ高地の消耗戦です。」愛宕「お楽しみに。」山城「ご意見ご感想を待っているぞ。」

午後より開始された977高地奪回戦は終始日本軍優勢に終わった。高地の戦いは日露戦争の203高地の戦いの様に、一度奪取されると奪回するのは難しい。

高地を奪回しようと斜面を登れば、頂上から銃砲弾が飛んできて、あつという間に死屍累々の状態になる。ソ連軍の支援爆弾も十二試艦戦や97式戦に阻止され大損害を出した。

この報告を受けたジューコフは、爆弾から昼夜支援砲撃に切り替え

た。さすがに、昼夜に砲撃を決行されたら戦意損失で高地を放棄するだろうと考えた。

しかし、これも失敗した。昼夜決行で砲撃すれば大量の弾薬を必要とする。

その補給車列を日本軍が攻撃したからだ。

それだけでなく日本軍は昼夜決行の重砲陣地爆撃を開始した。

この為、苦勞して弾薬補給しても重砲陣地ごと吹き飛ばされてしまった。

また、重砲陣地を治す為の材料も輸送しなければならぬし、運んだとしても、昼夜爆撃されれば治す暇もない。

じゃあ、制空権を取り返せばいいんじゃないかと言うことになるのだが、今やこれも難しくなった。

実は、海軍の全空母艦上機を派遣し、陸海軍の航空隊が共闘することになった。こにより、作戦参加機数を増やすことができた陸海軍は一気に攻勢に出た。

9月10日に、96式陸攻・97式重爆などが十二試艦戦・97式戦・96式艦戦の護衛の下、飛行場を爆撃した。この為、ソ連軍は航空作戦を大きく制限されることになった。

(ちなみに、十二試艦戦は9月になって新たに12機、予備機3機

を加えた15機を派遣した。)

さて、地上でもソ連軍は苦戦していた。

支援砲撃、支援爆弾共に封じられたソ連軍はとにかく、大攻勢の為に集めた戦力でがらむしやに突っ込みしかなかった。

これに対して、宮崎連隊は万全の体勢で待ち構えていた。

歩兵に対しては、重軽機関銃と擲弾筒による弾幕で接近を阻止し、戦車・装甲車に対しては、自国製あるいは鹵獲品の速射(対戦車)砲、山砲、歩兵砲、はたまた高射砲(対空砲)を持ち出して迎え撃った。

その結果、高地周辺にはソ連軍兵の死体や戦車・装甲車などの残骸が日が過ぎると共に増えていった。

この報告をジューコフより受けたスターリンはここが潮時だと考え初めていた。

次号へ

ノモンハン事件 11 〔977高地の激戦と影響〕（後書き）

作者「次号でノモンハン事件は最後です。」福本「長かったですね。」マリーダ「ところで次はなにやるつもり？」作者「ちよつと未定です。」遠地「大丈夫なのかよ。」作者「多分。」千歳「それではご意見感想お待ちしております。」



ノモンハン事件 最終話 〔協議結果〕

9月16日、日ソ両国は停戦に応じ、数ヶ月に及んだノモンハン事件は幕を閉じた。

その後、国境線画定協議において、双方一步も引かなかったがなんとか、日満主張の国境線になった。

(ちなみに、宮崎連隊が保持した977高地は部隊内の兵で石工だった人間に『日本軍占領』と付近の大石に刻み、これが証拠になり、この高地も国境線に含まれた。)

さて、この協議の終盤になっていきなり、北樺太を割譲するとソ連が言い出した。

慌てた日本政府ではあったが、樺太には資源がある為、喜んで割譲を承認した。こうして、日本にとって有利な主張を通せた上に、北樺太割譲とゆうオマケがついた結果になった。

福本

「…と言つことです。」

山本長官

「…そうか。」

福本は山本五十六に戦艦長門の長官室で協議の結果を報告していた。

山本長官

「…君は北樺太割譲をどう思う？」

福本

「…スターリンの考えは2つでしょう。」

山本長官

「続けてくれ。」

山本長官は椅子から立ち上がり、舷窓から外を見ながら言った。

福本

「スターリンは考えはこうです。我々に北樺太を割譲し、手なずけるつもりでしょう。多分1年以内にスターリンはヨーロッパ方面で行動を起こすつもりです。」

山本長官

「なるほど。しかし、そうになると北樺太を割譲したのはなぜだと思っ？」

福本

「スターリンからすれば北樺太を『貸した』と思っているでしょう。」

山本長官

「そうか『貸した』か…。スターリンならそう考えてもおかしくないな。」

福本

「はい。まあスターリンのことですから、『取り立て』に来るかも

「しれませんがね。」

山本長官

「『取り立て』に、か……。あり得るな。まあそれまでに万全の体勢を整えなければいけないがな。」

福本

「はい！」

コンコン

山本長官

「どうぞ。」

バタン

長門

「山本長官、福本君。宴会の用意出来ましたよ。」

福本

「わかりました。すぐに行きます。」

長門

「早く来てくださいね。」

バタン

福本

「ついこの間、歓迎会をやったばかりなんですけどね。」

山本長官

「まあいいではないか。遠地君や千歳さんもはれて私の事務官に着任したんだ。彼らの歓迎会を兼ねての宴会だ。楽しませてもいいじゃないかね?」

福本

「そう…ですね。」

山本長官

「さあ。私達も行くところ。待たせたら大変なことになってしまうぞ。」

福本

「はい。」

次号へ

ノモンハン事件 最終話 協議結果 (後書き)

作者「次号より当分の間、日常生活を書くことになります。」マリ  
ーダ・千歳「変なこと書かないでくださいね!」作者「書きま  
せんよ!」遠地「まあ、大丈夫だろう。」福本「スターリンよりは、  
信用できますからね。」作者「それではご意見ご感想をお待ちして  
おります。」

## 普通的生活（前書き）

感想で指摘してくださったので訂正いたします。『2人の亡命者』  
でマリーダの階級が少佐となっていました。が正しくは中佐です。

## 普通の生活

10月1日 早朝 戦艦長門 上甲板

福本

「うーん…」

なぜか日が昇る前に目が覚めた為、眠気覚ましに上甲板に出た福本。年の後半に入ったせいかな？、と思うようになってきた。

山城

「おや、福本殿。お早いですな。」

福本

「おはようございます、山城さん。朝練ですか？」

山城

「いや、朝日を見るのが日課でして…、こつやって1日の集中力を養ってるんです。」

福本

「そうなんですか。その格好だからってつきり朝練かと…。」

ちなみに、今の山城の格好は白の胴着に黒の袴。

山城

「あ、これは寝間着です。」

福本

「寝間着ですか。」

山城

「そうです。ところで福本殿は体を動かさないのでですか？」

福本

「動かしたいんですがね……。とくに軍刀の方は時々でも振るとかないかね。」

山城

「軍刀、持ってらっしゃるんですか？」

福本

「持ってますよ。今は部屋に置いてありますけど。じゃあ、もうそろそろ部屋に戻ります。」

山城

「ああ、また後で。」

数時間後 福本の個室

福本

「すみません、手伝ってもらって。」

愛宕

「ああ、いいのいいの。勝手に手伝ってるだけだから。」



榛名

「私もです。」

マリーダ

「けど、いったいどうゆう風の吹き回し？」

福本

「明日は上陸日だから、今の内に片付けておけば、ゆっくり出来るからね。」

マリーダ

「それだけの理由で？」

福本

「うん。」

マリーダ

「はあ〜。m ( ) ( ) m

日向

「福本君、外行くの〜？」

福本

「ええ、外に行きますよ。」

日向

「じゃあ、私も行く。」

愛宕

「日向さん!」

榛名

「日向ちゃん！」

日向

「別にいいじゃん。ああ、そうだ。皆で行こう」

福本

「それは、良いかもしれませんがね。」

マリーダ

「まあ、別にいいけど。」

愛宕・榛名

「「ちよ、2人共！」」

コンコン

福本

「どうぞー。」

ガチャ

山城

「失礼するぞ……なにをやっておる、お主ら？」

福本

「皆に僕の仕事を手伝ってもらっていました。」

山城

「何の仕事を？」

マリィダ

「これよ。」

そう言つてマリィダが渡した紙の束の上にごう書いてあつた。

『開発及び改良提案書』

マリィダ

「福本が今度出す提案書よ。今それをまとめるのを手伝つてもらつてたの。」

山城

「そうか。」

榛名・愛宕

「「山城さん！、日向ちゃんを止めてください。」」

山城

「どうした、2人して。」

榛名

「日向ちゃんが明日の上陸日に福本君とマリィダさんに付いて行くて、言つてるんです。」

愛宕

「だから、止めてください。」

2人は確信していた。

自分達がいくら言つても聞かない日向も、山城さんなら聞くだらうと。

しかし……

山城

「別にいいではないか。しかも丁度私も久々に外に出てみたいと思っていたところだ。」

日向

「さすが、山城お姉ちゃん。話がわかる。」

福本

「じゃあ、明日は皆ででかけましょうか。」

マリダ

「その前にこれ終わらせよ。」

山城

「大変そうだな。私も手伝おうかな。」

福本

「ありがとうございます。」

次号へ

## 普通の生活（後書き）

作者「次号は上陸日です。お楽しみに。ご意見ご感想をお待ちしております。」

## 上陸日

10月2日 呉の街

福本

「賑やかですねー。」

マリーダ

「上陸日だからね。」

端から見れば仲のいい男女2人。  
しかし、見える人が見れば……

山城

「本当だな。」

日向

「それよりさー、早く何か食べようよ。」

榛名

「日向ちゃん、福本君達は朝ごはん食べたばかりよ。」

日向

「あ、そっか〜。」

愛宕

「それより、買い物しません?」

マリーダ

「ええ、そうね」

すると榛名が紙を見ていた。

福本

「榛名さん、何ですかその紙？」

榛名

「えーとですね、皆さんから買い物頼まれてまして……」

福本

「見てもいいですか？」

榛名

「いいですよ。」

そう言って買い物リストを渡す。

福本

「えーと……………はい!？」

マリーダ

「どうしたの?」

そう言うと、福本はマリーダに買い物リストを渡す。

マリーダ

「えーと、長門さん・陸奥さんはお茶菓子、伊勢さんは紅葉饅頭、金剛さんはカステラ……………普通じゃない。」

福本

「問題は最後（――；）。」

マリイダ

「最後？、えーと、何々…霧島さんは、ガダムS EDのキヤト達の写真集。」

ズル〜！

愛宕

「売ってるわけないでしょ！」

マリイダ

「その前に時代が違いますよ！」

福本

「堅物委員長のイメージが今壊れました。」

日向

「霧島お姉ちゃん、まだ好きだったんだ。」

山城

「……………（ノーコメント）」

福本

「とにかく、買い物に行きましょうか。」

マリイダ

「そうね。行きましょう。」



数時間後

福本

「皆さん、あそこの茶店で休憩しましょう。」

マリーダ

「そうね、そうしましょ。」

日向

「お腹空いた〜。」

福本

「わかりました。すみません。団子6つ、お願いします。」

茶店のお婆ちゃん

「はい。少しお待ちくださいね。」

福本

「皆さん、今日はどうでした？」

榛名

「久しぶりの外は楽しかったです。」

愛宕

「また誘ってください。」

茶店のお婆ちゃん

「はい、どござ。」

そう言ってお婆ちゃんは、団子を愛宕達の横に置いていく。

福本

「あ、あのまさか……」

茶店のお婆ちゃん

「はい、見えますよ。珍しいね。海軍の人が艦魂と一緒に来てくれるなんて。」

マリーダ

「そうだったんですか、付き合っていた方が、海軍軍人だったんですか。」

茶店のお婆ちゃん

「ええ、それで時々、艦魂を連れて来てたんですよ。」

日向

「ところでお婆ちゃん、その付き合ってた海軍軍人さんは？」

茶店のお婆ちゃん

「フフフ、信じられないかもしれないけど、今はお団子を作ってるのよ。」

愛宕

「へえー。」

福本

「皆さん、もうそろそろ帰りましょつか。」

榛名

「ご馳走様でした。」

山城

「また寄らせていただきます。」

茶店のお婆ちゃん

「ええ、何時でも来てください。」

マリーダ

「それでは、お元気で。」

日向

「いいお婆ちゃんだったね。」

愛宕

「私達が見える人がいる茶店ですからね。」

山城

「あそこなら、他の艦魂にも薦められるだろう。」

福本

「そうですね。今度は他の艦魂と一緒に行きましょつかね。」

次号へ

上陸日（後書き）

作者「ご意見ご感想をお待ちしております。」

お礼のお誘い

10月8日 戦艦長門艦内 福本の個室

福本

「う〜ん？」

コンコン

「ど、どうぞ〜。」

長門

「福本さん……………何をなさってるんですか？」

福本

「ち、ちょっと考え事をしてまして、山本長官を見習って逆立ちして考えてます〜。」

長門

「あのね〜。(…)(…)」

福本

「あ、ところで僕に何の用ですか？」

長門

「あ、そうです。金剛さんが呼んでましたよ。」

福本

「こ、金剛さんが!？」

長門

「何でかは金剛さんに聴いてね。それじゃ。」

福本

「はい…。」

長門が部屋から出た後、福本は自室に置いてある時計を見た。

福本

「2時半か…。まさかイギリス人特有の紅茶の御誘いかな？」

30分後 戦艦長門の防空指揮所

福本

「あのー、金剛さん、何で僕を呼んだんですか。」

金剛

「まあ、そうゆう事はおいとして、まずは私が入れた紅茶を飲んでくれ。」

福本

「はあ…。」

言われて飲んだ金剛が入れた紅茶は…

福本

「美味しいです。」

金剛

「そうか、それは良かった。」

金剛は嬉しそうに笑った。

金剛

「しかし、時代も変わってしまったな。」

唐突に金剛が言った。

福本

「そうですね？」

金剛

「ああ、今やお前みたいな若手が国を動かしているじゃないか。」

福本

「それは確かです。けれど自分は何もしてはいません。」

金剛

「きみは大佐じゃないのかね？」

福本

「大佐です。けれど何もしてはいません。」



金剛

「榛名の話だと、この前も提案書を書いていたと言ってたぞ。」

福本

「しています。けれどそれで国を動かしていると言えるかは別です。」

金剛

「私は動かしていると思うが。それに…」

福本

「それに？」

金剛

「山本長官から聞いたが…、陛下に日英同盟の復活を進言したと…」

福本

「進言なんて…、自分は陛下に自分の意見を言ったまでです。第一、日英同盟の復活を申し出て来たのはイギリスだし、陛下はそれを承認しただけの…」

金剛

「しかし、陛下がお前の意見を含めて考えた結果、承認したことだろ？」

福本

「そうだと…思います。」

金剛

「それに、日英同盟の復活を連合艦隊の中で一番喜んだのは、私だ。」

福本

「金剛さんが！」

金剛

「…4カ国条約が締結された日、条約内容見た瞬間私アメリカを恨んだ。」

福本

「日英同盟を破棄させたからですか？」

金剛

「ああ、けれど悲しくもあつた。理由は判るか？」

福本

「生まれ故郷との繋がりが切れてしまったからでしょうか？」

金剛

「そつだ。今は日本の戦艦だが、元はイギリス生まれだからな…。」

福本

「……………」

金剛

「それに繋がりが切れただけならまだ良かった。しかし、もしイギリスとも戦うかもしれない考えたら、その日の夜は一晩中泣いたよ…。」

福本

「御心中お察し致します。」

金剛

「やめてくれ。それどころかきみには日英同盟の復活を進言してくれて感謝している。ありがとう。」

福本

「こ、金剛さんに感謝されるなんてもったいないです。（\*^^\*）

」

金剛

「まあ、今回誘ったのはお礼が言いただけだからな。たまに誘うかもしれないから付き合えよ。」

福本

「ヨーソロ！、お約束致します！」

次号へ

## お礼のお誘い（後書き）

作者「次号は艦魂では唯一の元帥が出ます。ご意見ご感想をお待ちしております。」

## 訪問

11月3日 戦艦長門艦内廊下

「おい、その海軍士官達。」

福本

「はい？」

廊下を歩いていた福本とマリダ。

そこで誰かに呼び止められて振り向くと、居たのは20歳位の艦魂。容姿としては、金髪のツインテール。

「ちょっと聴きたいんだが、高野のは居るか？」

マリダ

「高野？」

福本

「ああ、山本長官なら長官室に居られますが…、ご案内しましょうか？」

「頼む。」

マリーダ

「ところで、なんで高野で聴かれたのに山本長官になるわけ？」

福本

「それは山本長官の旧姓が高野だったから、ピンときた。」

マリーダ

「そうなんだ。」

コンコン

福本

「山本長官。お客様です。」

山本長官

「通してくれ。」

福本

「判りました。どうぞ。」

ガチャ

「やあ、高野いや、山本。久しぶりだな。」

山本

「！、三笠さん！」

福本・マリイダ

「「三笠さん！」」

そう、三笠と言えばあの三笠である。  
日露戦争では、連合艦隊旗艦を勤め、日本海海戦では先頭に立ち、  
日本海軍を勝利に導いた三笠である。

福本

「それでは失礼します。」

お茶を出して福本は長官室を退室した。

山本長官

「お久しぶりです。三笠さん。」

三笠

「2、30年ぶりだな。ところでさっきのが例の若手士官達か？」

山本長官

「ええ、福本大介、アーネスト・レリル・マリイダの2人です。」

三笠

「日進から聞いた話だと、福本は切れ者だと、言っていたがどうだ  
？」

山本長官

「確かに、切れ者ですね。色々と意見書や提案書も出しているし、意地や根性もあります。」

三笠

「じゃあ、未来はお前と一緒にで連合艦隊司令長官か？」

山本長官

「今でも、十分参謀や戦隊司令も勤まると見えています。もちろん艦長もですが。」

三笠

「つまり素質があるのか。ふむ……？」

山本長官

「どうなされたんですか？」

三笠

「いや、これも日進から聞いた話なんだが…、福本は士官学校で、何度か喧嘩をしたらしい。」

山本長官

「喧嘩？」

三笠

「日進も遠地と千歳と言う同期生の話を聞いたそうなんだがな、授業中に同期生と喧嘩したそうだ。」

山本長官

「初めて聞きました。」



三笠

「それで喧嘩の原因なんだがな、生徒の1人が無茶苦茶な作戦を計画して喧嘩になったそうだ。」

山本長官

「ほう。」

三笠

「おっと、要らん話してしまったかな？」

山本長官

「いいえ。ただこれで決意できました。」

三笠

「何の決意だ？」

山本長官

「あ、こちらの話です。」

三笠

「????？」

次号へ

## 訪問（後書き）

遠地「おい、作者。出番まだ？」作者「次号に出る予定。なお時系列は1ヶ月経過します。」千歳「それではご意見ご感想をお待ちしております。」

## 計画始動

12月15日 戦艦長門長官室

コンコン

福本

「山本長官、福本以下3名参りました。」

山本長官

「入りたまえ。」

ガチャ

パタン

福本

「山本長官、何の御用ですか？」

山本長官

「その前に福本大佐、きみは今日は誕生日だったね？」

福本

「？はい、そうですが…？」

山本長官

「なら、きみにとってはプレゼントになるかな。」

そう言つと山本長官は長官機の引き出しから4人分の辞令書を出す。

福本

「ええ！、自分は少将ですか！」

遠地

「で、僕とマリダ、千歳は大佐ですか。」

山本長官

「ああ。これから独立機動艦隊を編成するのだつたら、もうそろそろ着手する頃合いだろ。」

福本

「そうなると司令官は自分ですか?!」

山本長官

「そうに決まっているじゃないか。」

福本

「他に適任者はいなかったんですか？」

山本長官

「何を言つておる。元々、この計画を企画したのはきみじゃないか。」

「

福本

「しかし、自分には経験年数が少ないので、もっと経験豊富な人に……」

山本長官

「おいおい、年功序列撤廃を主張している人間が何を言う。経験ならこの編成作業で積めばいい。既にこの件は天皇陛下・宇垣首相・永田参謀総長・石原航空本部長・米内海相の了解を取り付けてもある。」

福本

「つまり、この計画は期待されているから頑張ってこいと言つことですか。」

山本長官

「そう言つことだ。しかも司令長官は全員一致でお前に決まつた。」

福本

「…いつ集まつて決めたかは聴きませんが、そつなつたなら司令長官の任、承ります。」

遠地

「自分も承ります。」

マリーダ

「同じくこの任を承ります。」

千歳

「私も承ります。」

山本長官

「諸君の働きに期待している。」

そつ言つて山本長官は敬礼する。

「「「は!」「」」

福本達も返礼で応える。

こうして、第七独立機動艦隊計画が本格的に動き始めた。

次号へ  
の前に…

後書き（本編とは関係ありません。）

作者

「もうそろそろかな?」

福本

「どうなされたんですか?」

作者

「いや、艦魂も出たことだし、そろそろ極上艦魂会に入りたいと思  
います。」

マリーダ

「そうね、私も他の作品の人達とも喋りたいです。」

山城

「私も、他の作品の自分とも会ってみたい。」

霧島

「私は他にガ ダムファンがないか気になります。」

千歳

「霧島さん。それは望み薄だと思っんですけど。」

遠地

「確かに会ってみたいよな。」

作者

「と言っ訳で極上艦魂会の皆さん、入会の仕方教えてください。」

次号へ

## 計画始動（後書き）

愛宕「ご意見ご感想をお待ちしております。」榛名「ま、待ってま  
す。」



年末宴会騒ぎ（前書き）

新登場人物紹介

赤城

空母赤城の艦魂。

お酒好き

な艦魂で、機会があれば金剛に飲み勝負を挑んでいる。

好きな物 お酒

航空機

嫌いな物

アメリカ

容姿

髪は黒のポニーテール

## 年末宴会騒ぎ

12月31日深夜 呉

今日は大晦日の為か、あつちこつちの艦では酒などが配給され無礼講宴会状態の年越しである。  
当然、艦魂達も…

戦艦長門 艦内会議室

「どうですか、金剛さん。私はまだまだ飲めますよ。」

金剛

「あらあら、そんな量は序の口ね。勝負はこれからよ赤城。」

赤城

「負けませんからね。」

…とこんな風に赤城と金剛が飲み比べをしており、その周りには艦魂達が集まって、ワイワイ騒いでいた。それに、既に何人が酔いつぶれて寝ている艦魂もちらほらいた。

さて、飲めない組+ちびちび飲む組は…

福本

「…ほつといて大丈夫なのかな？」

マリーダ

「大丈夫でしょう。ほつとけば勝手に酔いつぶれ、静かになるから。」

山城

「確かに、言う通りです。ほつときましよう。」

遠地

「今年は紅白は紅組です。」

山本長官

「いや、白組だ。」

千歳

「私は紅組だと思います。」

愛宕

「私は白組だと思います。」

福本

「いや、その前にこの時代に紅白歌合戦であったのか？」

マリーダ

「別にいいんじゃない。細かい事は気にしなくても。」

福本

「細かい事なのだろうか？」

…こんな風に、ラジオで紅白歌合戦を聞いておりました。

扶桑

「けど、寂しくなるわね。」

そう言いながら、酔っ払った扶桑が、福本に後ろから抱き付いた。ちなみに、これは扶桑の酔っ払った時の癖。

山城

「姉上、飲み過ぎです。」

扶桑

「あら、別にいいじゃない。年末なんだし。」

愛宕

「けど、確かに寂しくなりますね。」

千歳

「そんな大袈裟な。海軍省に異動じゃないんですから。」

山城

「確か、呉鎮守府の空き部屋を借りたんだろう。」

福本

「ええ、ですから正月が終われば引っ越しですよ。」

山本長官

「まあ、心配は要らん。3ヶ月後には皆と一緒に海に戻って来るよ。」

山城

「皆？、皆とはどつ言つ意味です？」

山本長官

「今はちよつと言えんな。しかし、人数が増えていることは確かだな。」

山城

「はあ……？？」

長門

『みんな、今からカウントダウン始めるよ。』

いつの間に出したのか手にマイクを持っていた。

長門

『10、9、8、7、6、5、4、3、2、1』

全員

「ゼロ！」

長門

『パンパカパン！、新年明けましておめでとつございまーす。』

福本

「さーて、新年頑張りますか！」

次号へ

年末宴会騒ぎ（後書き）

作者「次号は正月明けの福本達の引っ越しから始まる予定です。」  
愛宕「ご意見ご感想をお待ちしております。」

## 引越し(前書き)

作者「ここで読者の皆様に報告があります。」山城「ほう、なんだ？」作者「実はつい2日程前に黒鉄大和先生にメッセージを送りまして、制式に極上艦魂会に入会致しました。」愛宕「うわー、おめでとございます。」山城「うむ、これで他の作品の艦魂も呼べるな。」作者「残念ながら、いつ呼べるかは未定ですが頑張って呼ぶ予定です。」



## 引越し

1940（昭和14）年1月4日

呉鎮守府の一室

福本

「ふう〜。」

つい先程引越し（と言っても必要な物を置いただけ）を終え自分の椅子に座ってくつろいでいた。

マリダ

「何ため息吐いてるの？」

福本

「いや、今まで長門に居たからあんまり気が付かなかったんだけど、こうやって陸に上がってみるとなんか寂しいな〜と思って。」

マリダ

「何で？」

福本

「何て言えばいいのかな、近いんだけど遠くなっちゃった、みたいな…。」

マリダ

「ああ、なんとなく判った。長門さん達との繋がりが切れたみたいなの。」

福本

「うん、そんな感じ…。あゝダメだ！、このままだとホームシックにかかりそう。早く3ヶ月過ぎてくれ…。」

マリーダ

「そんなオーバーな…。」

コンコン

福本

「ど〜う〜ぞ〜。」

ガチャ

「お久しぶりです、先輩！」

福本

「福田！沖田！久しぶりだな！、元気だったか？」

沖田

「はい、元気でしたよ。けどまさか自分が塚原二四三少将のところに派遣されるとは思いませんでしたよ。」

福本

「塚原少将は海軍航空隊の権威の1人だ。将来航空隊の指揮をとる人間には先生としてうってつけの人物だろ。」

沖田

「はい。」

福本

「ところで、福田はどうだった。」

福田

「井上中將の事務官をしてましたが、何故井上成美中將のところになんか、色々政治について教わったんですけど。」

福本

「そりゃ、軍政を担当しているのは井上中將だから。」

福田

「は？」

沖田

「つまり、政治が疎い君にそれを体験させて来たと言つ事だよ。」

福本

「そう言い事だ。参謀になるんだつたら、政治や国際状況も考えて作戦を立案しなきゃな。」

福田

「はあ…。」

福本

「とにかく、明日からは人材探しやらなんやらで忙しいと思つが頼んだぞ。」

福田

「ちなみに何人で探すんですか？」

福本

「俺を含めた6人。」

福田

「…本当ですか？」

福田

「本当。」

福田

「う、うそ。」

沖田

「はい、了解しました。」

このようにして1日目を終了した。

ここで2人の事を紹介しよう。1人は福田ふくだ 一輝少佐かずき（19）  
福田の1つ下の後輩。熱血漢だが政治となると疎い。

好き 戦艦・美味しい物  
嫌い 不味い物

もう1人が沖田おきた 星輝少佐せいき（19） 福田の1つ下の後輩、福田  
と同期生。華族（貴族）出身で美男子ながらも威張る事を嫌う心  
優しい青年。神戸士官学校内で女子から恋人にしたい人ランキング  
No.1である。空に憧れ航空科へ。

好き 空・飛行機

嫌い 実力がないのに威張る人

次号へ

## 引越し（後書き）

作者「これから大変ですよ。」山城「確かに、人材を集めるのは大変だ。」作者「しかも、だった6人で探すからな。」山城「あてはあるのか？」作者「多分、神戸土官学校の人間だと思えますけど……さてどうなるか。」山城「ご意見ご感想を待っているぞ。」

## 新たな仲間

1月7日 呉鎮守府内

第七『教導』艦隊司令部

人材探しを初めて2日目。この日、1人の女性士官が訪れていた。

マリィダ

「暇ね。」

千歳

「確かに暇ですね。」

今、司令部の部屋に居るのはマリィダと千歳だけ。  
ちなみに福本と遠地は旅順の建艦状況を見に、福田と沖田は航空本部へ人材探しに出向いていた。

コンコン

マリィダ

「?どうぞー。」

ガチャ

「マリィダ先輩、千歳先輩、お久しぶりです!」

千歳

「あら、楠木さん。元気だった？」

楠木

「はい！先輩方はどうでした？」

マリーダ

「ええ、元気でしたよ。ねえ、千歳さん。」

千歳

「まあ、色々あったけど、元気だったよね。」

楠木

「それは、良かったです。」

ここで楠木さんの事を紹介しよう。

楠木くすのき 香里少佐かおり（19）。福田や沖田同様、1つ下の後輩。面倒見が良く、人を纏めるのがうまい。ご先祖様が戦国時代に瀬戸内海で水軍（海賊）の頭をやっていたと幼少の頃に聞いて、海に憧れ海軍へ。

好き 海・人の繋がり・祭り

嫌い 人を見下す人・努力しない人



楠木

「へー、じゃあ皆さん人材探して居ないんですか。」

マリーダ

「そう。大介と遠地は、旅順だけ。」

千歳

「そう言えば、楠木さんは何の用事で来たの？」

楠木

「おっと、忘れるところでした。用件は2つありまして1つは自分も第七……」

マリーダ

「それなら、大歓迎よ！さっきも言ったように人材はいくらいても足りないぐらいなんだから。それにあなたの事は大介も高く評価してたし。」

楠木

「そうですか！ありがとうございます。けど、大丈夫なんですか？」

マリーダ

「大丈夫、大丈夫。あとで連絡すればいいから。で、もう1つの用件は？」

楠木

「実はその事で……」

1月9日 戦艦長門長官室

福本

「…と言う事です。」

山本長官

「ふむ、つまり別の後輩が、最近父親と和解して、その伝から君の事を聞き、協力を申し出てきた。と言ったところかね。」

福本

「そうです。一応、海軍にも関係がある事柄なので報告に来たのですが…。」

山本長官

「そつだな、協力の度合いによるが…。一度話を聞く必要があるな。」

福本

「はい。」

次号へ

## 新たな仲間（後書き）

愛宕「最近新キャラ多いわね。」作者「そりゃ、多くもなりますよ。」山城「ところで、何人新キャラを出す予定だ。」作者「解りません。」愛宕「なんで？」作者「えーと、一部の艦の艦長、艦魂、これに下士官兵を加えると……」山城「わかった。もういいから。」愛宕「えーと、ご意見ご感想をお待ちしております。」

## 会合

1月11日 夕暮れ 呉市内の街中

この日、山本長官と福本はスーツ姿であった。

これは目立つ軍服よりも、スーツの方が色々と都合がいいからだ。

実際、山本長官と福本を見た人間は、年輩のサラリーマンが新米を連れて、契約先に向かう風にしか見えない。

これから、海軍の大物とある資産家の大物が会うとも誰も思わないだろう。

福本

「山本長官、もしかして楽しんでますか？」

山本長官

「なぜだね？」

福本

「いえ、格好が様になっていきますから…。」

今の山本長官の格好は、銀座の高級スーツにコート、一番のお気に入り帽子（山本長官の趣味は帽子集め）を被っている。

山本長官

「いやー、久しぶりに外に出たからな。つつい様になってしまった。」

福本

「はあ…。」

こう返事をしながらも、本当にそれだけ？と思う福本だった。

「あ、福本先輩！こちらです。」

そう言いながら今回の会合場所である料亭の前で、福本と山本長官に向かつて手を振る金髪縦巻きロールの少女が1人。

福本

「白河美鈴大尉、もう少し周囲の状況を見なさい。とマリーダに言われていなかったかね？」

白河

「あ、そうでした…。」

福本

「変わらないな。きみは士官としては優秀だが、外出日には素に戻ってしまうからな。」

白河

「は、はい。以後気よつけます。」

この光景を山本長官はニヤニヤしながら見ていた。

3人は女将に案内され会合相手の待つ部屋に向かう。そして、会合

部屋の襖を開けると、スーツ姿の男が2人。しかも福本と山本長官はその内の1人は知っていた。

福本

「おや、これはこれは萱場資郎社長。こんばんは。」

萱場社長

「おや、山本長官と福本少将ではありませんか！。しかし、おかしいな？白河社長のお嬢様の先輩に会う予定なんですが…。」

山本長官

「その先輩と言うのがこいつのことだ。」

そう言つて山本長官は福本を指差す。

萱場社長

「なんとまあ…。物凄い人間が先輩でしたね。」

「どうも始めまして。美鈴の父親、白河俊雄です。」

白河俊雄しらかわよしおは46、家族はアメリカ人の奥さんと娘（美鈴）が1人。彼は第一次世界大戦時に貿易会社を設立、大きな利益を得た。

その後、新大陸とエステロール王国発見の報を聞いた彼は日本へ新大陸間の通商航路を確立した。現在は神戸を拠点に貿易、造船業を手掛けており、最近では技術研究事業に着手しているそうだ。

萱場資郎かやばしろうが社長を勤める萱場製作所は海軍に航空機の着陸脚、空母の着艦制動装置、水上機の発艦カタパルトの製作を依頼しており、

航空派の山本長官ともそれなりに関係の深い会社である。

福本

「こちらこそ、始めまして。福本大介です。」

山本長官

「山本五十六です。今回お招きありがとうございます。ところでお話とゆうのはなんでしょうか？」

白河社長

「そうでしたね。それでは単刀直入に言います。我が社はあなた方海軍に輸送船・補給タンカー及びレーダー等の技術を提供したいと思っております。」

これを聞いた瞬間、山本長官と福本はお互いの顔を見ながら啞然としていた。

確かに海軍は輸送船舶が不足しており、戦時となれば民間からの調達しなければならぬからこの申し出は嬉しいし、無線は配線がいれば性能は上がるが、電探レーダーの技術は確かに出遅れており、イギリス・ドイツから必死に技術を吸収しているところだ。しかし、あまりに大盤振る舞いであるから逆に疑ってしまう。

福本

「…何か条件がありますか？」

白河社長

「ええ、戦時になれば直ぐにでも護衛艦隊を設立して欲しいのです。」

「

山本長官

「それは何故ですか？」

まあ、大体の理由は2人にも判るが。

白河社長

「我々経済人にとって通商航路の確保は食糧の確保と一緒にです。これを怠れば……どうなるか判りますよね？」

2人共うなずく。第一次世界大戦のイギリスを見れば直ぐに判るからだ。

白河社長

「私は日本でそれが起きないようにするためにこれらを提供します。ですから護衛艦隊の件よろしくお願いします。」

そう言つて頭を下げる。

白河（娘）

「パパ、まだ話でないことがあるでしょう。」

白河社長

「い、いや、あ、あれはその……」

白河（娘）

「もうパパたら……。福本先輩、パパは世界平和を願っているんです。」

「

これを聞いた山本長官と萱場社長を驚き、福本は平然としていた。

福本



「それは国際貿易ができるからですね。」

白河社長

「そうゆう事です。」

山本長官

「…どうゆう事だ？」

福本

「あ、すみません。実は士官学校生だった時に日本を繁栄させつつ世界が平和を維持するにはどうすれば良いかと考えまして…。」

山本長官

「その答えが貿易か…。」

福本

「はい。資源無き我が国が世界に誇れるのは人間の頭脳と産業です。大体、世界のどこに家内工場用の小型織機を開発した国が他にありませんか？」

萱場社長

「確かに、ありませんね。」

山本長官

「そういえば萱場社長。きみはなぜここに居るのかね？」

萱場社長

「おっと、忘れておりました。実はこれを見ていただきたい。」

そう言つて模型と設計図を机に置く。

福本

「?これは…?」

萱場社長

「これは陸軍から開発を依頼されました、カ号観測機。オートジャイロ機です。」

オートジャイロ機とは簡単に言えばヘリコプターの祖先みたいなものだ。

カ号観測機はノモンハン事件後、砲兵の機動化（自走砲の開発・ゴムタイヤを装着し砲架の強度を上げる、など）に着手した陸軍が着弾観測の為、萱場製作所に1939年の9月の下旬（史実では1940年の11月）に依頼した。

当初は専門外の依頼で苦悩した萱場製作所だが、石原莞爾がそれなりに手を回しイギリスのオートジャイロ製作会社である、シエルバ社やアヴロ社の協力を得て、現在試作機の製作中だと言つ。

山本長官

「しかし、戦艦にオートジャイロを載せても余り意味はないぞ。」

福本

「確かに、着弾観測でしたら水上観測機でもやれます。しかし…」

山本長官

「しかし?」

福本

「使い方によっては使えますね。萱場社長、この機に爆装は出来ますか？」

萱場社長

「そうですね。最大60キロといったところですかね。まあ、まだ発展余地がありますよ。」

山本長官

「福本、何を思い付いた？」

福本

「もしかしたらオートジャイロは対潜哨戒に使えるかもしれませんよ！」

こうして、新たな提案書の内容を思い付いた福本だった。

次号へ

## 会合（後書き）

作者「えー、テストやら色々ありましてなんとか時間がとれたので更新しました。」愛宕「まったく、本当なら主砲で富士山まで飛ばされても文句が言えないのに。」作者「20、3センチ10門も喰らえば富士山以前に消滅しちゃうよ。」愛宕「で次号は？」作者「次号は福本・マリイダが母校に行きます。『卒業論文発表会』をお楽しみに。」愛宕「ご意見ご感想をお待ちしています。」

## 卒業論文発表会

2月15日 神戸海軍士官学校

この日、福本・マリィダは母校に来ていた。

目的は勿論、人材探しの為である。

この時期、神戸海軍士官学校では卒業論文の発表が行われる。

神戸士官学校の場合、士官人数の確保が主眼だがそれゆえと言っべきか実力主義的などころがあった。

この卒業論文もその為だ。論文は表現力や文章力があるから報告書の作成に役に立つ。

しかも論文内容が良ければ希望配属先に学校推薦資料として送られ判断材料にもなるからだ。

福本

「お久しぶりです。教官。」

教官

「おお、福本とマリィダか！ いや、福本少将とマリィダ大佐かな？」

福本

「やめてください、教官。今まで通りで結構です。」

教官

「まったく、お前達は変わらんな。」

会場である講堂に向かう3人。  
世間話をしながら廊下を歩いていると、ふと、何かを思い出したのか教官が話題を変えた。

教官

「そう言えば、最近の若手士官候補生の話題を知ってるか？」

福本

「いいえ。何ですか？」

教官

「そうか、知らんのか。お前達の事だぞ。」

マリーダ

「私達の事ですか！」

教官

「ああ。大体、今までに20やそこらで少将になった人間が海軍史上あり得ないんだからな。」

福本

「確かに。」

教官

「だから、今やお前達は同世代の士官候補生の間じゃ憧れであり目標なんだと。」

福本

「それは…なんか恥ずかしいですね。」

会場である講堂は反響しやすいように扇状になっており、長椅子・長机の階段状になっている。

その右端上部の席にマリダと2人（自分達が来る事は生徒達には内緒）で静聴していたのだが……

福本

「マリダ、そっちは？」

マリダ

「全然。そっちの方は？」

福本

「こっちも同じ。」

優秀な人間はいるにはいるのだが、前に聴いた事のある内容が多かった。

つまり斬新性がない。

教官

「よう、どうだ？」

福本

「優秀な人間はいますが斬新な意見がありません。」

教官

「手厳しいな。さすが士官制度の改正や年功序列の撤廃を主張した

人間だな。」

福本

「…やめてください。」

教官

「すまんすまん。おっと、次は午前の部最後の発表だ。ちゃんと聴いといてあげろよ。」

福本

「?はい…?」

そう言うと教官はそそくさと自分の席に戻っていった。

マリーダ

「…なんか自信ありげだったよーな気が…」

福本

「含みがありそうな言葉だったよな…。」

そして、次の子が出て来た。

福本

「ほー、女の子か。」

マリーダ

「あの子が教官の自信の源?」

福本

「さー。」



教官

「よう、どうだった？」

発表終了後、教官が2人に話し掛けて来た。

福本

「教官が自信をあげた訳が判りました。」

マリダ

「わざと彼女を最後にしたんですね。」

教官

「ばれたか。で、感想は？どうだった。」

福本

「具体的な数値やデータを提示し、対策や意見をまとめて主張しています。彼女さえ良ければ、第七艦隊に入れても構わないと思います。」

教官

「そうか。入れても構わないか。」

マリダ

「あのー、あの子は教官の何なんですか？」

教官

「2人共、昼食はまだだよな？」

教官

「あの子は、俺の同期生の娘だ。」

マリータ

「教官の……」

教官

「同期生といっても親友であり、ライバルでもあった。だが……」

福本

「だが？」

教官

「第一次大戦の時に、そいつは地中海に行った。勿論無事に帰って来た。しかし、そいつの嫁さんの兄さんが死んだんだよ。」

福本・マリータ

「……………」

教官

「んで、退役して嫁さん連れて実家に引っ込んだんだよ。今は実家を継いで神主やってんだと。」

福本

「あの一。」

教官

「ああ、すまんすまん。脇にそれちまった。で、そいつとたまたま3年前に会ってな、娘が海軍に入りたいって言ったんだと。」

マリーダ

「その娘さんが…」

教官

「そう言うことだ。」

食堂では生徒達がワイワイと食事中である。発表の終わった生徒はホッとしたのかパクパク食べてるし、終わってない生徒は緊張で食事が喉を通らないらしく、箸が動いていない。それより論文を見ている事が多い。その中で丸テーブルにぼつんと座り、黙々と食べている女の子が1人。

教官

「神童しんどう神子候補生。」

教官が声をかけるとシュツタと椅子から立ち上がり敬礼する。教官も返礼する。

教官

「発表、良かったよ。」

神童

「ありがとうございます。しかし、良かったのでしょうか、通商路の事なんて発表して…。」

福本

「いや、そんな事はないよ。通商路の事を考えるのは島国としては当たり前だ。対米戦を考えるあまり海軍は戦闘方法を考え、通商路確保の方法を考えていなかった。これでは戦闘に勝っても、戦争には負けてしまう。だから少しもおかしくはないよ。」

神童

「教官、この方達は？」

教官

「君の先輩。君達が憧れ、また目標とする福本少将とマリーダ大佐だよ。」

これを聞いていた他の生徒達の反応は色々だった。

慌て立ち上がり敬礼する生徒、本人が確認する生徒、驚きのあまり喉を詰まらせる生徒。

しかし、彼女は驚きはしたものの先程と同じように背筋を伸ばし敬礼する。

そして2人も返礼で応えた。

福本

「先程、君の発表を聞かせてもらったよ。『通商攻防論』だね。具体的な数値を出している。いい論文だ。」

神童

「ありがとうございます。」

福本

「自分もそれなり通商路の確保は主張している。と言っても護衛艦隊の設立と護衛艦の量産、対潜哨戒機の開発、レーダーなどの哨戒機器の開発を提案はしているが、君のはもっと突っ込んでいるね。」

神童

「はい、暗号を解読し潜水艦を待ち伏せる、対潜兵器の開発、沈下ソナーを沖合に設置する、などです。」

福本

「この論文を山本長官に見せたらどんな顔をするか、興味が沸くよ。」

神童

「山本長官に…ですか？」

マリーダ

「ええ。山本長官は優れた意見はどんなに下の人間でも耳を貸す御方よ。」

福本

「ところで神童候補生。君の希望部署はどこかね？」

神童

「私は駆逐艦勤務希望です。」

マリーダ

「あら、意外。こんな論文を書くなら、護衛艦隊か潜水艦希望と思ってたのに。」

福本

「まあ、良いじゃないか。」

教官

「おっと。福本、そろそろ午後の発表だ。」

福本

「あ、本当ですね。じゃあ最後に一つ、神童さんは実家では巫女さんをしていらっしやいますよね？」

神童

「は、はい。」

福本

「じゃあ、艦魂を見たことは有りますか？」

神童

「はい。見たことが有ります。」

福本

「そうですね。判りました。お答えいただいてありがとうございます。しました。」

神童

「それでは、また今度。」

マリーダ

「ええ。」

次号へ

## 卒業論文発表会（後書き）

作者「次号は空母の艦魂を出す予定です。ご意見ご感想をお待ちしております。」



## 日本空母艦魂

3月12日 呉軍港

空母赤城の飛行甲板には暇をもてあましている赤城と空母の艦魂達。

赤城

「あゝ、暇だ。」

蒼龍

「そうですね。」

加賀

「……………」

赤城

「そう言えば飛龍ちゃんは？」

蒼龍

「自分の艦の飛行甲板で鍛練中です。」

赤城

「ふん。」

と、その時

福本

「あ、赤城さん。」

赤城

「福本君！なに、寂しくなってお姉さんに会いにきたの？」

福本

「いえ、残念ながら赤城さんではなく、小澤治三郎中将に会いに来たんですけど。」

赤城

「あら、そう。残念。小澤長官なら艦橋よ。」

福本

「そうですね。ありがとうございます。」

艦橋に上がると艦長の隣に立つ小澤長官がいた。

小澤長官

「やあ、福本少将。何の用かね。」

福本

「あ、はい。来月の事で打ち合わせに参りました。」

第一機動艦隊長官室

小澤長官

「そうか、来月には正式に海軍入りかね。」

福本

「はい。数日後には艦長、乗組員を乗艦させ、完熟訓練を実施予定です。」

小澤長官

「ところで、艦魂に会ったかね？」

福本

「はい。昨日会いました。」

小澤長官

「ふむ、その様子ではかなり美しい艦魂なんだろうな。」

福本

「…なんでその話になるんですか。」

小澤長官

「そ、そう言えば艦の名前を聞いて思い出したのだが、加賀がなぜ無口なのか知っているかね？」

福本

「（話反らそうとしてるよ）いいえ、知りません。」

小澤長官

「実は赤城に聴いたのだが…赤城には非常に判るそうだが…土佐が沈んでからだそうだ。」

福本

「…今回の事で元の加賀に戻ってほしいですね。」

赤城

「あ、福本君。用事終わったの？」

福本

「はい。終わりましたよ。」

そう言っつて飛行甲板を見回すと艦魂が1人増えている。

赤城

「そう言えば、福本君空母の艦魂は私以外は知らないんだよね。」

福本

「あ、はい。確かに赤城さんしか知りません。」

赤城

「じゃあ紹介するね。今あそこで手振ってるのが蒼龍。」

艦橋の前で蒼龍は手を振っている。

赤城

「で、あそこに…あれ飛龍は？」

飛龍

「私はここです。」

赤城

「え…きゃ！」

後ろにいた。

飛龍

「どうも初めまして。飛龍です。噂は山城さんと山口少将から聞いています。」

福本

「あ、どうも。」

飛龍と握手する。

赤城

「で、防空指揮所にいるのが加賀ね。」

確かに防空指揮所に加賀はいた。

視線は空、あるいは海に向いている。

まるで、今にも妹土佐の艦魂が現れるかの様に……

赤城

「福本君。加賀ちゃんは……」

福本

「小澤長官から聞きました。…加賀さんはまだ吹っ切れないんですね。」

赤城

「ええ……」

福本

「赤城さんは…吹っ切れました？」

赤城

「……時々思い出してしまっけどね。天城お姉ちゃんのことを……」

そんな赤城の瞳は……涙を堪えていた。

艦魂紹介

加賀

元は加賀型戦艦の一番艦。天城の代艦として空母に改装された。妹である土佐が死んでから心を閉ざし、無口になった。赤城とは付き合いが長く、赤城は少しの動作で加賀が言いたい事が判る。

好き 土佐 日本

嫌い アメリカ

蒼龍

中型正規空母の一番艦。

設計時には軍令部の無茶な要求で苦勞した。

射撃と銃剣術が得意で、いつも銃剣付き三八式騎兵銃を背中に背負

っている。

好き 射撃 飛龍

嫌い アメリカ 無茶な要求する人

飛龍

蒼龍の改良設計型。

ほぼ同型艦の為、蒼龍とは義姉妹。

槍の使い手で、毎日の鍛練を欠かさない。

山城とは仲が良く、山口少将ともいいコンビ。

好き 鍛練 新しい物

嫌い 古い考え

次号へ

## 日本空母艦魂（後書き）

赤城「ヤッホー。久しぶりに出ました、赤城だよ。実は作者から次号の予告を頼まれたからするよ」。次号は新艦魂、作者のオリジナル艦が登場』との事。じゃあ、新しい妹がくる訳だ。楽しみ。愛宕「え、赤城さんが自分の世界に入ったので、最後は私が。ご意見ご感想をお待ちしております。」



## 新型戦艦編入

4月15日 呉軍港

この日、呉の街はいつも以上に活気づいていた。  
まず人間の数が違う。

海軍関係者だけでなく、政府関係者、陸軍高官、メディア、見物人  
などでごった返していた。

なぜ、これ程人が多いのか？

それは今日、新型艦の公開日だからだ。

戦艦長門 上甲板

陸奥

「うっー、緊張するよ〜。」

長門

「ふふふ、そうね。陸奥としては初めての妹だからね。」

金剛

「私はもう慣れてしまったわ。」

扶桑

「ま、私は可愛ければどうでもいいけどねー。」

山城

「姉上、涎が垂れていますよ。」

榛名

「福本君、どんな妹連れて来るのかなー。」

同長門艦橋

明子天皇

「山本長官、後どれぐらいですか？」

山本長官

「もつそろそろ視認できるはず…。」

見張りの兵士

「あ、見えました！10時の方向です！」

見張りの声を聞き、双眼鏡を向けると、駆逐艦に先導されて二隻の戦艦が巡航速度で進入するところだった。

見張りの兵士

「戦艦長門以下、連合艦隊を視認しました。」

ラフィール

「判りました。そのまま監視を続けてください。」

見張りの兵士

「了解。」

ラフィール

「副長。司令に報告を。」

ジント

「了解。」

作戦室

ジント

「失礼します。司令、呉に到着しました。」

福本

「わかった。今行くよ。」

マリーダ

「じゃあ2人共、後でね。」

戦艦長門から10メートル程のところに停止した二隻に長門から内火艇が出され、福本達が乗る一番艦に乗り込む。

明子天皇

「皆さん、お久しぶりですね。」

福本

「お久しぶりです。陛下。」

マリーダ

「お元気で何よりです。」

明子天皇

「皆さんもお元氣そうですね。」

山本長官

「福本。皆様に艦の紹介を。」

福本

「はい。ラフィール、ジント。皆様に説明を。」

ちなみに、この時乗り移ったのは明子天皇、宇垣首相、永田参謀総長、石原航空本部長、米内海軍大臣など一部の人間。

この時説明された性能データは以下の通り

常備排水量	5,200トン
満載排水量	5,800トン
船体全長	238,6m
船体幅	36,8m
速度	33ノット
航続距離	18ノットで12000海里

兵装

主砲

17インチ(43センチ)45口径連装砲×5基(10門)

副砲

6インチ（15センチ）50口径単装砲×16基（ケースメント方式）

高角砲

5インチ（12.7センチ）45口径連装高角砲×18基

機銃

40ミリ4連装×10基

連装×10基

25ミリ3連装×18基

連装×44基

天皇陛下達の案内を艦長と副長のラフィールとジントに任せた（丸投げしたのではなく、天皇の希望）2人は第一主砲と第二主砲のある前甲板に向かうと、長門達艦魂が集まっていた。

長門

「福本さん、みんな集まっていますよ。」

扶桑

「なんでもいいから新しい艦魂を見せなさい。」

山城

「姉上、涎を拭きましょう。これでは福本殿が紹介出来ません。」

福本

「あの〜、呼びますよ〜。じゃあ、2人共出て来て良いよ〜。」

その時、彼女達の前が光り輝き、光は人の形になって少女が2人現れた。

マリーダ

「はい、2人共。自己紹介。」

「はい、薩摩型戦艦の一番艦、薩摩です。」

「お、同じく薩摩型戦艦の二番艦、土佐です。」

艦魂全員

「……え!!!」

驚く艦魂達の中で1人だけ驚かない艦魂がいた。

加賀

「と……さ?」

心を閉ざしいつも無口で暗いメガネ子の加賀が夢遊病者のようにフラフラと艦魂達を避けながら土佐に近づく。

土佐

「?????」

加賀

「ねえ……あなたの……名前……土佐……と言っの?」

土佐

「あ、はい！土佐と言います。」

土佐が答えると、加賀は右手をそつと顔に添える。

土佐

「はわわわ！？！あ…あの…」

加賀

「お姉ちゃんに…土佐お姉ちゃん…似てる…似てるよ…。」

そのまま加賀は抱きつき土佐の胸で大粒の涙を流して泣き始めた……

土佐

「あの……」

福本

「そのまま泣かせてあげな…。きみのお姉ちゃんだから。」

土佐

「はい…。」

長門

「ちよつと大変な事になったけど、連合艦隊旗艦の私長門が全艦魂に代わり、あなた達の連合艦隊入りを歓迎します。」

薩摩

「はい！これからよろしくお願いいたします。」

土佐

「お手柔らかにお願いいたします。」

比叡

「よし、これから飲もう。」

福本

「ダメ。今日はダメです。」

比叡

「なにー！何でだ？」

福本

「作者から止められてるんです。その代わり次号にたっぷり騒がせますから。」

比叡

「ううー、わかった。今日は我慢する。」

金剛

「ところで何で作者が止めたんだ？」

マリーダ

「それは後書き解ります。」

次号へ



## 新型戦艦編入（後書き）

作者「作中で宴会を止めた理由はですね。」比叡「ああ、なんですか？」作者「オリジナルキャラも出た事だし、極上艦魂会にも入った事だしそろそろ他の先生方の登場人物を招待しようかと思いつて。」山城「そうだな、いいかもしれない。」作者「てな訳で、他作品の登場人物を呼ぶことにしました。誰が出るかはお楽しみに。」愛宕「ご意見ご感想をお待ちしております。」

## 特別編 第一回交流会

異次元にある水交社（海軍将校倶楽部）。

福本

「うわ〜。」

ラフィール

「どうしました？」

福本

「薩摩と土佐の記事が一面のみならず二面、三面と使ってるんだよ。」

ジント

「紙面の見出しも派手ですね。『祝 19年ぶりの新型戦艦！』」

天皇陛下自らが発表！ 新型戦艦は【薩摩】【土佐】」

マリダ

「3人共、準備出来たの。」

福本

「出来てるよ。ところで作者は？」

マリダ

「会場の設営指揮中。もうすぐ終わるって。」

作者

「えー、それでは第一回交流会を始めます。」

パチパチパチパチ

比叡

「で、誰を呼んだんだ？」

作者

「はい。まずは艦魂で一番和服が似合うことで有名な独立機動艦隊『紀伊』登場の戦艦大和艦魂、撫子さんです！」

撫子

「ご招待して頂きありがとうございます。」

作者

「いやー、本当に和服が似合っていますね。」

長門

「（作者、誉めのは後にして、次）」

作者

「あ、すみません。えー、次は新太平洋戦争から椎名将斗少佐、鞍馬信一少佐、艦魂は蒼龍、飛龍に来て頂きました。」

蒼龍

「招待ありがとうございます。」

飛龍

「よ、喜んでないからね。呼ばれたから来ただけなんだからね。」

福本

「（ツンデレだ。）」

マリーダ

「（ツンデレね。）」

遠地

「（ツンデレは…うちにはいないキャラや。）」

信一

「新米士官、ありがとう！ほんまありがとう！」

作者

「腕痛い、腕痛い。」

金剛

「なぜこんなに喜んでるんだ？」

将斗

「呼ばれたからやる。」

作者

「あゝ、腕痛…。さて、気を取り直して撫子さん、プレゼントです。中身は京都の老舗店から取り寄せた着物です。」

そう言って紙袋を渡す。

撫子

「まあ、ありがとうございます。」

作者

「蒼龍さんと飛龍さんには将斗さんが自衛隊時代に着ていた軍装一式 + 自衛隊時代の写真集です。」

蒼龍

「うわー！ありがとうございます。」

飛龍

「ほ、欲しくないけど仕方なく貰っとくわ。」

将斗

「おい、新米士官！どうやって手に入れた？」

作者

「闇ルート。」

福本

「おいおい……。」「……。」

比叡

「そ・れ・よ・り、早く飲ませろー！」

作者

「そうですね。じゃあ、かんぱーい。」

『かんぱーいー！』

山城

「ほー、撫子殿は我らの妹なんですか。」

撫子

「ええ、そうなんですよ。」

榛名

「マリィダさん、こちらではどうなんですか？」

マリィダ

「こちらでも大和は建造中ですよ。まだ1年はかかりますけど。」

金剛

「しかし、無念だ。別作品とは言え日本が危機なのに何も出来ないなんて……」

マリィダ

「無理ですよ、金剛さん。例え応援に行けたとしても相手は未来技術で武装したドイツ軍。撫子さんと同程度の改装をしないとただの標的。足手まといになってしまいます。」

金剛

「うぐ…し、しかし!…」

撫子

「金剛さん、私はまだ会ったことは有りませんが、近江も大鳳も日本を守る為に戦おうとしています。私は彼女達を信じようと思いません。」

伊勢

「そつだよ、金剛。性格や作品が違っても日本を守る為に生まれたのは一緒だ。だから、私達も信じてあげよ。」

金剛

「うむ、そつだな。」

飛龍（新）

「ふむ、零戦の私はツンデレか。」

飛龍（零）

「す、好きでやってるんじゃないからね。あのアホ作者のせいなんだからね。」

霧島

「なら、変えて欲しい。と言えはすむことじゃないですか。そうしないと言つことは……実は気に入ってる?」

飛龍（零）

「ッ!……………」

赤城

「ありやありや。」

蒼龍（新）

「ふうん、じゃああつちは大変なんだね。」

蒼龍（零）

「そうなのよ、最近ライバルがまた1人増えちゃったからね。けど良いよね、こっちはライバル居なくて。」

千歳

「ライバル？」

蒼龍

「あれ？千歳さん、遠地君と恋人でしょ？ラフィールちゃんはジント君と仲良いし、マリィダさんは福本と仲いいんでしょ？けどライバルはいないじゃない。」

千歳

「うん、確かにいない…。（\*^^\*）」

ラフィール

「ジ、ジントは仲が良いのは認めるが、あれはパートナーとしてだぞ。（<|>）」

千歳

「マリィダと福本君はパートナーだけど、どうなんだろ？」

さてこちらは男性士官組

福本

「将斗さん、信一さん、どうぞ。お酒です。」



将斗

「お、ありがとう。」

信一

「美味しい酒やな、どこのや？」

遠地

「作者の地元の地酒だそうです。お土産に四本確保して有ります。」

将斗

「けど、世の中判らんもんやな。俺よりも若いのに少将と酒飲むなんて。」

福本

「いや、少将なんて名義だけです。増えた物は面倒なデスクワーク。」

福田

「確かに増えましたね。なんであんなに書類が要るのかと思う位。」

遠地

「そんな事言うたら、将斗さんが大変やろ。あんなに艦魂や翡翠達から好意持たれてハーレム状態だけど、本人大変だぞ。な、沖田？」

沖田

「ええ、大変ですね……」

将斗

「確かに大変や。時々身がもつか考える時があるわ。」

ジント

「お疲れ様です。」

いつの間にもやら作者司会で隠し芸大会？のような事をしていた。

一番手は撫子さん。

お礼に、と日本舞踊を舞い、二番手の蒼龍は得意の射撃を披露、三番手の飛龍は槍持って舞っちゃうし、山城は色々な物を一刀両断するし、長門は歌うし、薩摩と土佐は漫才をやった。

作者

「えーと、もう終わりやな…。」

ジリリリリリン

金剛

「おい、作者。赤電話が鳴ってるぞ。」

作者

「あ、はい。もしもし、こちら新米土官？」

『こちら第三見張り所！そ、そちらに高速で正体不明物体が接近中  
』！

作者

「…おいおい…（…）（…）」

山城

「作者殿、どうかしたか？」

作者

「あ、いや……」

ジリリ…

作者

「はい、新米士官！」

『こちら第六警備隊。正体不明物体は我が部隊の側を通過せり。なお、正体不明物体は護衛戦艦神龍の大和なり！』

作者

「いたたた……m( )m」

蒼龍(零)

「ねえ、新米士官先生。さっきからの電話はもしかして……」

作者

「はい、伊東椋先生の大和発見報告です……」

全艦魂＋女性士官組

「えええええ！！」

陸奥

「伊東先生の大和ってあのブラックリストに載った……」

愛宕

「大和(伊)って翡翠さん並みに重症の……」

金剛

「ええい、やめろ！総員戦闘態勢！早くしないと捕まってハアハアされるぞ！」

「「「「了解！」「」「」「」

マリーダ

「間に合う？」

福本

「大和（伊）の速さによるけど……多分間に合わない。」

作者

「ちよい待ち！」

金剛

「なんだ作者！」

作者

「この件は俺がなんとかするから。」

信一

「大丈夫なんか？」

作者

「大丈夫。」

バツカーン！

扉を破壊し、玄関に突入した大和（伊）。

そこにいたのは……

作者

「どうも、初めまして。新米士官です。伊東椋先生の大和さんですよね？」

大和（伊）

「男に用はない。用が有るのは可愛子ちゃんだ！」

そう言っつて脇を通ろうとする大和（伊）に作者はボソと呟く。

作者

「え え2次 戦（略）デ ック ……ゲームサイドブック付き……」

「

ピクッ

大和（伊）

「……有るのか？」

作者

「この紙袋の中に。」

大和（伊）

「もらっておこう。しかし……」

作者

「…案内します。」

飛龍（零）

「あの作者、裏切ったんじゃないの？」

交流会会場から監視カメラでモニターしている福本達。

福本

「いや、スターリンよりは信用できるとは思っけど…」

作者

「あ、ここです。」

大和（伊）

「ここにいるのか？」

その部屋は暗く椅子が1つ有るだけ。

作者

「椅子に座っててください。すぐ来ますから。」

大和（伊）

「ああ。」

椅子に座る、大和（伊）

すると上からヘルメットが下りてきて大和（伊）の頭に被せる。  
そして……

大和（伊）

「うわわわ〜」

作者

「だだいま〜。」

マリイダ

「作者、大和（伊）に何したの？」

作者

「いや〜、こんな事も有ろうかとシミュレーション・システムを持つて来て良かった〜。」

遠地

「…作者、まさかそのシミュレーションなんか細工したな。可愛子ちゃんの映像入れたとか…。」

作者

「なんの事やら。」

福本

「とにかく今の内に帰らないと後々大変な事になりますよ。」

撫子

「そうですね。今日はありがとうございました。」

作者

「草薙先生によろしく御伝え下さい。」

蒼龍（新）

「じゃあ、また会おうね。」

蒼龍（零）

「今度はこっちが招待するね。」

福本

「それでは御二人もお元気で。」

将斗

「ああ、そつちもな。」

信一

「元気でな。」

三時間後、シミュレーション・システムを満喫して帰って行ったのは別の話。

次号へ



特別編 第一回交流会（後書き）

作者「草薙先生、零戦先生、伊東椋先生。如何でしょうか？もし、登場人物が変になってたらすみません。m（――）m」薩摩「次号は『権力の執着者来る』をお楽しみに。」土佐「ご意見ご感想をお待ちしております。」

## 権力の執着者来る

4月18日

呉軍港

薩摩と土佐が編入されてから3日が経過したものの、連合艦隊にこれと言った変化もなく、訓練に励んでいた。  
そんな中……

旗艦長門艦内司令長官室

山本は一枚の報告書を読んでいた。

それは春日と日進の解体が終了したとの報告だった。

既に覚悟はしていた。

しかし、実際に起きるとやはり悲しいものだ。

5年前、本来除籍されるはずだったが、新設される神戸士官学校に練習艦として臨時配属されると聞いた時は人知れず喜んだ。

その2年後、講師として神戸士官学校に来校し、日進と再会した。つい昨日の事のように覚えている。

まあ、その時にいた人間がそれほど離れていないところに居るし、現在進行形で続いているからだろう。

「長官、海軍軍令部よりお客様ですが……」

従兵が知らせに来た。

山本長官

「わかった。通してくれ。」

その頃、戦艦薩摩では…

福本

「う〜ん？」

防空指揮所で折り畳み式の椅子に座りながら考え事。

榛名

「福本君、何してるの？」

福本

「あ、どうも。また提案書を書いているんです。」

蒼龍

「ふーん。今回はどんな提案？」

福本

「今回は、現有戦艦の改装案です。」

日向

「じゃあ、見せて〜。」

福本

「まだ、出来てないからダメです。」

マリーダ

「おい、みんな。お茶にしよう。」

福本

「わかった。今行く。」

福本、マリダ、ラフィール、ジント、金剛、榛名、日向、蒼龍のメンバーは誰もいない士官食堂で紅茶を飲んでいた。

ラフィール

「あ…お、美味しいです。」

ジント

「はい、美味しいです。」

金剛

「それは良かった。ロシア生まれの君達だから味の加減が判らなかったが…これでわかったよ。」

その時、光とともに長門が現れた。

長門

「福本君、マリダさん。山本長官がお呼びです。」

福本

「あ、今行き……」

長門

「あ、急がなくていいです。2、30分後に来て欲しいとの事です。」

「

30分後、長門によって転移した福本とマリィダ。  
長官室に向かおうと、廊下を歩いていると反対側から1人の男が歩いてくる。一瞬すれ違ったが、福本には誰だかわかった。

福本

「山本長官、お呼びでしょうか。」

山本長官

「うむ、これを見てくれ。」

そう言って渡されたのは提案書。  
さっそくマリィダと2人で拝見すると……

マリィダ

「！何このアホらしい提案書！」

山本長官

「やはり、そう思うか……それは先程、海軍軍令部からの遣いが置いて行ったものだ。名前は確か……」

福本

「柿宮……柿宮裕かきみやひろしじゃないですか？」

山本長官

「ああ、そうだ。柿宮……福本、なんで判った？」

福本

「先程、廊下ですれ違いましたか……」

マリーダ

「ああ！思い出した！あのハレンチの無能強欲男！」

山本長官

「……知っているのかね？」

マリーダ

「知ってるも何も士官学校じゃあ大介と反対の意味で有名でしたよ。作戦は無茶苦茶だわ、自己中心的だわ、権力欲求はすごいわ、女の子に差別発言するわ、セクハラするわ、大介と喧嘩するわ……知ってます？」

山本長官

「三笠から聞いた事がある。福本は何度か喧嘩した事があると。」

福本

「大した事では有りま……」

マリーダ

「もう、それは喧嘩の原因？それとも喧嘩の一部始終？どっち。」

山本長官

「まあまあ……。しかし、何故そんな人間が海軍軍令部に入れたんだ？」

福本

「どうせ、政治家の父親に駄々こねたんでしょ。」

マリーダ

「まったく……迷惑な話ね。」

山本長官

「それより……福本、これから注意した方がいいぞ。」

福本

「何故ですか？」

山本長官

「相手は軍令部の人間な上にお前に敵愾心を持っている。立場上前を殺ろつと思えば殺るぞ。」

福本

「……有り得そうですね。」

マリーダ

「経験者は語る……ですか。」

次号へ

権力の執着者来る（後書き）

榛名「何か、ヤバイ事に成りましたね。」作者「山本長官は次官の時に狙われましたからね。勘で判ったんでしょうね。」金剛「これで福本が死んだら……」作者「この物語、終わりますよ。」榛名「え」と、ご意見ご感想をお待ちしています。」



## 第二次世界大戦勃発！

5月10日 呉軍港

この日、山本長官は宇垣纏参謀長・黒島亀人主席参謀とともに戦艦薩摩の艦橋に居た。

薩摩・土佐には完成時からレーダー（故障が多い初期型）を搭載している。

山本長官は航空機がレーダーにどう映るのか見たいと言った為だ。しかし……

ジント

「山本長官！福本長官！大変です！」

福本

「なんだ、ジント？愛しのラフィールに恋人でもいたか？」

ジント

「ち、違いますよ！僕とラフィールはパートナーで……」

福本

「わかったわかった。で、大変で何が？」

ジント

「あ、はい！ソ連軍がポーランドに侵攻しました！」

後に第二次世界大戦と呼ばれる戦いが幕を開けた。

当初、ソ連軍上層部（と言っても主にスターリン）は1日でソ連・ポーランド国境を抜き、1週間目にはポーランドの首都ワルシャワを占領できると予測していた。しかし、その予測は侵攻開始一時間で崩壊した。

国境線を防衛する士気旺盛なポーランド兵の奮戦の前に、指揮官・政治将校に促され突進するだけのソ連軍は敗れるしかなかった。この為、今のところ膠着状態であった。

山本長官

「君の言った通りになってしまったな。」

福本

「はい…ですかポーランド軍だけでなくイギリス、ドイツも自分のよた話を聞いてくれるとは…。」

ちなみによた話とは一年以内にソ連がヨーロッパで戦争を初める、と言つ話。

山本長官

「まあ、ノモンハンで散々な目にあつたからな。戦力の回復やら何やらと計算して同じ結論に至つたんだろう。」

宇垣参謀長

「しかし、そうなりますと陛下はどう対応する気なのでしょうか？」

マリーダ

「多分、動かないでしょ。」

黒島主席参謀

「ほー、何故かね？」

山本長官

「黒島君、陛下との付き合いは彼らの方が長いんだ、陛下の考える事は大体分かるんだよ。」

福本

「まあ、それだけではありません。陸軍の準備が出来ていませんし、アメリカの動向も気になります。」

山本長官

「うむ、それを言えば海軍も準備万端と言える訳ではないし、確かにアメリカの事も気になるしな。」

宇垣参謀長

「では、陛下は中立を宣言する、と？」

山本長官

「多分な。」

艦魂紹介

薩摩

薩摩型戦艦の一番艦。

本作オ리지ナルの艦魂。

福本長官が独立機動艦隊計画で発案、建造された。  
歌好きで妹思い。

姉同士とゆう事で加賀と仲がいい。

最近は霧島からアニメ曲を仕入れている。

好き 歌 日本 (漫才)

嫌い 妹に変な事する奴

土佐

薩摩型戦艦の二番艦

薩摩と同じく本作オリジナル艦魂。

落語・漫才が大好き。

宴会の時に姉の薩摩とコンビを組んで漫才をする。

加賀には可愛がられている。

赤城達から詳細を聞きお姉ちゃん子になった。

好き 加賀 薩摩 落語 漫才

嫌い 戦争 争い事

次号へ

## 第二次世界大戦勃発！（後書き）

長門「遂に始まったわね。」作者「はい。しかし、日本は当分参加  
しません。」金剛「だが、結局は巻き込まれるのか……」作者「……  
…次号はちよつと明るいニュースになると思います。ご意見ご感想  
をお待ちしております。」

## イギリス・ドイツからこんにちは

5月12日 旅順軍港

ヨーロッパでの戦乱はソ連・ポーランド国境で膠着状態になったまままだ。

日本は中立の為、平和ではあるがいつ巻き込まれてもおかしくない。そんな中、独立機動艦隊の建造本拠地である旅順軍港では……

福本

「そうですね、来月には完成しますか！」

技術士官

「はい、来月の初旬には空母二隻が完成、順次独立機動艦隊配属艦が完成する予定です。」

マリーダ

「そうかですか……あ！大介、時間よ。」

福本

「え、あ、本当だね。行こう。」

大連<sup>タイレン</sup>

旅順軍港の近くにある街で現在は国際工業都市である。

主にイギリス・ドイツの工作機械、航空機、通信機器などの会社や工場が進出していたが、アメリカのフォード社が工場を進出させていた。

空港も整備され大連<sup>ターレン</sup>国際空港として機能していた。

ターレン  
大連国際空港

遠地

「後何分？」

千歳

「後10分。」

福田

「そう言えば先輩。いつの間にイギリスとドイツに人材派遣を頼んだんです？」

福本

「頼んだのは去年の12月初旬。イギリスやドイツから学ぶのは何も技術だけじゃない。戦術や戦法にも学ぶものがあるからね。」

沖田

「それなら、経験者を呼んで来た方が良く、と。」

福本

「ま、そう言う事だ。」

シンガポール発の旅客機からぞろぞろと乗客が出てくるが、なかなか目的の一団が出てこない。

最後の方になって出て来た一団が目的の一団だったので、すぐに向かった。

待ち合いロビーで目的の一団を見つけたと同時に向こうも気が付いた様だ。

福本

「君達がイギリス・ドイツが派遣将校だね？」

「はい、そうですが…失礼ですが、あなた方は？」

沖田

「これは失礼。君達の派遣先、第七艦隊の者だ。」

「あ、すみません。」

マリーダ

「ま、こんな所で集団で立ち話もなんだし、出張所に行きましょ。」



千歳

「それでは皆さん自己紹介をお願いします。」

「イギリス海軍より参りました、元駆逐艦艦長アンナ・ラディアアです。」

「同じく海軍より参りました、元駆逐艦副長のメアリ・サーストーンです。」

「同じく軍より参りました、ヴィルヘルム・フレーザーです。」

「イギリス空軍より参りました、アリソン・フェアリーです。」

「ドイツ海軍より参りました、ニーナ・シュトルベスです。」

「ドイツ空軍より参りました、クレア・ブリュンヒルデです。」

「ドイツ陸軍より参りました、フェルディナント・クレッチマーです。」

マリダ

「以上、男性士官二名に、女性士官五名です。」

福本

「ありがとう、マリーダ。え、こんなできたてな艦隊ですが、よろしく願いします。」

次号へ

イギリス・ドイツからこんにちは（後書き）

薩摩「また増えたわね。」土佐「しかも、男女のあの差は何なんですか？」作者「設定なんでお答えできません。当分は彼らの紹介になります。」薩摩「ご意見ご感想をお待ちしております。」

数日後……

5月18日

国境で奮戦していたポーランド軍であったが、昨日17日、遂に国境防衛線維持不可能になり、防衛線を下げることになった。しかし、大損害を被ったのはソ連軍だし、何より当初の作戦計画を頓挫させているのだ。

呉軍港 薩摩艦上

福本

「どうだ、ヴィル？少しは慣れたか。」

ヴィルヘルム

「あ、はい。まだまだ言い回しに慣れないところも有りますが……」

マリーダ

「大丈夫よ。私も最初は慣れてないから戸惑ったけど、その内に慣れちゃったから。」

土佐

「そうだよ。気楽に行こう。気楽に。」

ヴィルヘルム

「はい。」

同時刻 岩国海軍飛行場

飛行場上空で二機の零戦が模擬戦をしていた。

地上では沖田と気分転換にと出て来た山本長官が見物していた。

山本長官

「どうだね？イギリスとドイツから来たパイロットの方は？」

沖田

「はい。昨日零戦に乗ったばかりですが、もう手足ように操っています。」

山本長官

「そうか。ところで2人の経歴は？」

沖田

「えーと、アリソンは元輸送飛行隊所属で、操縦はお父さんに、空戦は部隊長に教えてもらったそうです。クレアは、14歳でパイロットライセンスを取得、空軍では予備パイロットとして在籍していたそうです。」

山本長官

「つまり、それなりの経験はあるんだな。」

模擬戦を終えた二機が滑走路に降りて来た。

沖田

「アリソンさん、クレアさん、どうですか零戦の乗り心地は？」

アリソン

「速度、旋回性能、操縦性、視界は良好、女の私でも扱い易いです。多分ハリケーンには圧倒的優位に、スピットファイアとは互角に戦えると思います。」

クレア

「アリソンとほぼ同意見です。特にヨーロッパの戦闘機より航続距離が3000キロと長いのは驚きです。しかし高度6000mから速度が500キロ以下、急降下速度が630キロと遥かに遅い事が問題かと。」

山本長官

「いやいや、中々手厳しい。」

アリソン

「……あの〜沖田少佐、この人は誰なんですか？」

沖田

「連合艦隊、実戦部隊の實質上の指揮官の山本五十六長官です。」

「「し、失礼しました!」「」

山本長官

「いや、いいんだ。気にしないでくれたまえ。」

クレア

「え、あ、し、しかし!」「」

沖田

「山本長官は気さくなお方だ、気にしないでいいんだよ。」

### 登場人物紹介

ヴィルヘルム・フレーザー（18） 性別 男性

派遣前はイギリス海軍士官候補生で、現在は大尉。皆からは（アリソンも）ヴィルと呼ばれている。

アリソンとは幼い時に施設で一緒になってからの縁。勉強家で、知識豊富で4ヶ国語（フランス、ドイツ、イタリア、ロシア）を喋れる（日本語は日常会話がなんかできる）がそれを自慢する気まったくはない。  
実は射撃が上手い。

好き 勉強 日本 文化

仲間

嫌い 人殺し 戦争

アリソン・フェアリー

（18） 性別 女性

派遣前はイギリス空軍伍長で、現在は大尉。

お母さんが生んですぐ、8歳の時に、お父さんが飛行機事故で亡く

なつた為、施設に入った。

ヴィル（ヴィルヘルム）とはこの時に出会った。

お父さんの影響も有つてか航空機の操縦が上手い。

実はヴィルのことが好きなのだが、当の本人は気付いていない。

好き 空 飛ぶこと ヴィル

嫌い 金持ち

クレア・ブリュンヒルデ

（18） 性別 女性

派遣前はドイツ空軍准尉、現在は大尉。

下級貴族の出身で、貧乏だったので幼い頃は苦勞した。

お父さんから若い頃、第一次大戦で活躍した話を聞いて、空に憧れた。

フェルディナントとは幼なじみ。

外国好きで、日本には非常に興味をもっている。

好き 空 外国 海 文学

嫌い いざと言う時に何も出来ない自分

次号へ



数日後……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 陸戦隊

8月19日 呉軍港 薩摩艦上

沖田

「えーと…」

薩摩

「あれ？ 沖田さん、何してるんですか？」

沖田

「はい、アリソンさんとクレアさんに昨日零戦に乗ってもらった感想を報告書に纏めてるんです。」

薩摩

「大変ですね。」

沖田

「福本先輩が出してる書類や報告書に比べれば、軽いほうだよ。ところで先輩は？」

薩摩

「福本さんなら、今日は富士の演習場に行くと言っていましたよ。」

沖田

「富士の演習場？……あ、陸戦隊の関係だな。」

薩摩

「陸戦隊の関係？」

沖田

「あ、そっか。薩摩さん達は知らないでしたっけ。実は……。」

同時刻 陸軍富士演習場

ハックション！

マリーダ

「大丈夫？大介？」

福本

「うん、大丈夫。多分誰かが俺に関する噂でもしてるんだろ。」

遠地

「変なことでないのを祈ろう。」

この日、福本達は特別編成された第七艦隊特別陸戦隊の視察に来ていた。

特別陸戦隊とは、上海事変<sup>シャンハイ</sup>を教訓に編成された常備の陸戦隊である。陸戦隊は元々、必要な時に艦内で編成され、陸上戦闘を行う臨時部隊である。

これに対し特別陸戦隊は十分な訓練と榴弾砲、カノン砲、戦車、装甲車など重火器を揃えており、アメリカの海兵隊とは実力は互角である。しかし、人口の違いでアメリカが海兵隊を師団編成に出来る

のに対し、特別陸戦隊は最大でも連隊編成であった。

福本

「どうだフェルディナント、陸戦隊は？」

フェルディナント

「ロンメル大佐から日本陸軍の事は聴いていましたが、陸戦隊も負けず劣らずの実力です。特に夜襲の技術は陸海問わず凄いの一言です！」

福本

「そうか…ところで機甲大隊との連携はどうかね？」

フェルディナント

「……ちよつと問題が有りまして……」

福本

「かまわない。言ってくれ。」

フェルディナント

「それでは言わせて頂きます。まず運転ができる人間が少な過ぎます！」

福本

「……やっぱり……」

遠地

「フェルディナント君、残念ながら我が国では運転免許は特殊技能

の1つだから持っている人は少ないよ。」

フェルディナント

「それでは仕方ないですけど……その前にトラックの数が少ないです。」

マリダ

「なんせ、トラックの生産数少ないし、価格が高いからね。」

千歳

「大量生産出来ればなんとかなるんですけどね。」

フェルディナント

「これをなんとかしてくれないと、97式中戦車改と連携がとれません。」

## 兵器紹介

### 97式中戦車改(チ八改)

重量	16,8 t
全長	5,54 m
全幅	2,33 m
全高	2,38 m
速度	38 km/h
行動距離	210 km
武装	48口径47mm砲×1 7,7mm機関銃×2

最大装甲 25mm + 20mm  
乗員 5名

ノモンハンの教訓と98式軽戦車の実戦データによる改良型。  
主砲は高初速砲に、装甲は従来型に20mm増加装甲を溶接装着し、  
防御力をアップさせた。  
主砲を変更した為砲塔も変更、新砲塔チ八とも呼ばれる。

### 登場人物紹介

フェルディナント・クレッチマー (18) 性別 男性

派遣前はドイツ陸軍少尉、現在は日本海軍少佐。

第七機動艦隊特別陸戦隊を機甲化するために福本が海軍と外務省を  
通じてドイツに頼んで派遣してもらった。  
グデーリアン少将、マンシュタイン中将、ロンメル大佐から機甲、  
歩兵戦術を直接学んだ。  
家は下級貴族で貧乏だった。  
クレアとはお隣兼幼なじみ。

好き 地図 家族 乗馬

嫌い 共産主義者

次号へ

陸戦隊（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。



実験（前書き）

前作『陸戦隊』の8月19日は5月19日の間違いです。

## 実験

5月25日 土佐湾近海

この日、山本長官、宇垣参謀長、黒島主席参謀などの面々が空母鳳翔に乗り込んでいた。そして、これからある実験が行われようとしていた。

「ふうう。」

飛行甲板に1人の少女がいた。お気付きの方も居るかも知れないが空母鳳翔の艦魂、鳳翔である。

福本

「おはようございます。鳳翔さん。」

鳳翔

「福本か…お前のせいで標的艦の真似をするなってしまったな。」

福本

「すみません。――」

鳳翔

「仕方がない、私はもう旧型艦だ。出来る事と言えば訓練艦か、標的艦位だ。」

福本

「…やめて下さい。そんな事言うのは…。」

鳳翔

「なんだ、私が抜けると大変か？それとも私の改装案でもあるのか？」

福本

「……………何で知ってるんですか？」

鳳翔

「蒼龍から聞いた。」

福本

「それではこれより実験を開始します。」

「その前に実験の内容を聴きたいのだが…。」

手を上げて質問したのは第二水雷戦隊司令官、たなか らいぞう田中頼三少将である。

福本

「あ、すみません。では説明させて頂きます。」

実験の内容は至って簡単。鳳翔はこれから敵潜水艦出没海域（仮）に進路をとり、巡航速度で海域を突っ切ってもらおう。そして、どこかに隠れている敵役の潜水艦が果たして雷撃できるか

どうかである。

福本は勿論、誰も潜水艦がどこに潜んでいるか知らない。潜水艦の事は全て艦長に任せただ。

二時間後…

何も起きていない…

山本長官

「まだの様だね。」

福本

「はい…。」

二時間も経過すると警戒心も緩くなる。

来ていた、将官や参謀などはお喋りを初めている。

アンナ

「警戒心散漫とはこの事ですな。」

福本

「アンナさん？」

アンナ

「福本長官、山本長官、通商破壊戦は我慢比べであることを覚えておいて下さい…。」

山口少将

「そつだぞ、福本。戦は我慢比べがほとんどだが、通商破壊戦はほど我慢比べが多い戦はないぞ。」

福本

「山口少将は経験が有るんですか？」

山本長官

「山口は前大戦、駆逐艦の航海長として地中海に行つたし、ドイツ潜水艦を回航した人間の1人だからな。」

それから、30分後…

メアリ

「アン、もうすぐ出ちゃうよ。」

アンナ

「もうそろそろ、仕掛けてくるはずよ。」

福本

「さて、駆逐艦が見つけるか？それとも雷撃されるか？」

軍令部員

「福本長官。どうやら実験は失敗…」

カーン！

全員

「」「！」「」「」

福本

「どうやら、雷撃されましたね……。」

同時刻 海中

二一ナ

「…福本長官の言ってた通りね。」

ドイツ人下士官

「あれほど雷撃しやすかったとは……あれでイギリスと同じ島国で  
しょうか？」

二一ナ

「だからでしょ。福本長官は今回の実験で、通商破壊戦の対策がど  
れだけ大切か上層部に解らせるつもりね。」

艦魂紹介

鳳翔

日本海軍最初の空母。

現在は訓練空母として使用。

旧型艦化した為、福本が改装案を出している。  
艦魂達の良き相談相手。

好き 日本 艦魂達 最近の話題

嫌い 最近のバカな上層部

### 登場人物紹介

アンナ・ラディア（18） 性別 女性

派遣前はイギリス海軍少佐現在は日本海軍少佐。身長が高く、大人びいた印象を持つ。

父親も駆逐艦艦長で、ニーナの父親と対決した。

タイプ of 少女や艦魂にキスしまくった為、後に『扶桑は抱き付き魔、アンナはキス魔』と言われた。

好き タイプ of 少女

嫌い ニーナ

メアリ・サーストン（18） 性別 女性

派遣前はイギリス海軍中尉、現在は日本海軍大尉。

アンナとは艦長と副長の関係（それ以上とも言われているが…）。

実はアンナのキス魔被害を一番（？）受けている。目が良い。

好き アンナ

嫌い アンナに近付く悪い虫

ニーナ・シュトルベス（18）性別 女性

派遣前はドイツ海軍少佐、現在は日本海軍中佐。  
ドイツ海軍の潜水艦戦術の普及を名目に派遣された。アンナとの仲  
は悪い。  
実は匂いフェチ。

好き タイプの少女の匂い

嫌い アンナ

次号へ



## 実験（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 会議

6月1日 帝都

山本長官

「ところで福本。今日は通商路確保の事を議題にするつもりかね？」

福本

「はい。直接突き付けないと、軍令部は解りませんからね。あの実験をやった意味も解らせないと。」

こんな会話を福本は軍令部に向かう車中で山本長官としていた。

30分後 海軍軍令部

この日、海軍軍令部では『（緊急）対ソ戦移項』、つまりソ連と戦争状態になった時の作戦移項を決める為に会議が開かれた。この会議の参加者は、海軍大臣米内光政、山本長官、宇垣参謀長、福本少将、永野修身軍令部総長ながのおさみなどが集まった。そして……

柿宮

「ふ、福本！ な、何故貴様がここにいる！」

福本

「山本長官に言われてついて来ただけだ。」

柿宮

「そんな訳ないだろー！ 貴様のような無能男を山本長官が誘う訳ない！」

福本

「はいはい。（まったく、無能はお前だつっの。負け犬の遠吠えは外でやってくれ。）」

2時間の会議はこれと言ったごたごたもなく、スムーズに進んだ。  
（何せ、海軍にやれる事は少ないからだ。）  
しかし、会議の終盤になり福本の発言がごたごたの始まりとなった。

福本

「1つ発言させてよろしいでしょうか？」

米内海軍大臣

「ああ、別に構わんよ。」

福本

「それでは発言させて頂きます。輸送船団の護衛はどうするのですか？」

この発言を聞いた瞬間、一部の人間を除いて福本が言おうとする事がわかった。この発言に対し嘔み付いた人間が1人。

柿宮

「福本、貴様、頭がおかしくなったか？」

福本

「残念ながら、正常だ。」

柿宮

「ほー、正常か……なら、そんな事を言うのはお前が無能だからだ！ 何が輸送船団の護衛をどうするだと？ 何故、護衛する必要がある。輸送船団なんぞほっといても勝手に目的地に着くわ。」

福本

「……その言葉をそっくりそのままお返しするよ。」

柿宮

「なんだと！ 俺が貴様より無能だと言うのか？」

福本

「その通りだバカ野郎！ 何がほっといても勝手に到着するだと？ ふざけるな！ 前大戦のイギリスがどうなったか思い出してみろ！」

柿宮

「あれはドイツが相手だったからで、スターリンがやる訳がない。」

福本

「スターリンだってバカじゃあないんだ、日露戦争のロシア太平洋艦隊の輸送船襲撃を聴けば、それを実行しないとは限らないだろ！」

柿宮

「例えそうだったとしても輸送船の護衛など女子供の仕事だ。我々の仕事じゃあない。」

福本

「……なんだと?……」

柿宮

「だから、輸送船や商船の護衛は女子供の仕事だと……」

福本

「貴様! その言葉を商船や輸送船の船員や船長、その家族に言うてみやがれ! 殺されても、文句は言えんぞ!」

山本長官

「福本、興奮し過ぎだ。」

福本

「す、すみませんでした。」

米内海軍大臣

「ふむ、福本少将がそれほど言うには、何か理由が有るのかね?」

福本

「はい。1週間程前に空母鳳翔を使い、ある実験をしました。」

柿宮

「ああ、確か実験に潜水艦ならまだましも、魚雷も使わせると言うてやつだな。」

福本

「魚雷使えなかったので、アクティブソナーのピンを雷撃の代わりに使いましたが、潜水艦は駆逐艦に見つからずに鳳翔を『雷撃』しました。なお、駆逐艦は六隻を円陣になるよう配置し、鳳翔は円陣の真ん中に配置しました。」

柿宮

「それはソナー員の怠慢か、精神力の不足だろうか？」

福本

「残念ながら違う。ソナー員は全員、軍楽隊の耳の良い人達でした。3時間30分の間、交代しながら警戒していた艦もありましたが、誰も探知出来ませんでした。これは何故か？ 原因が機材に有るからです。」

米内海軍大臣

「機材に？」

福本

「はい。ソナーなどの機材が旧式化しております。他にも対潜水艦戦術、通商路確保の方法、対潜水艦兵器などの研究が行われておりません。これでは対米戦になった時は、どれだけ優勢でも最後に勝つのはアメリカに決まっています！」

柿宮

「おい、福本！それは海軍大臣を脅しているのか？」

福本

「このバカ。警告してるんだよ。アメリカは精神力云々で勝てる相

手じゃない。」

柿宮

「バカだ……」

米内海軍大臣

「わかった。1週間後に君や、君の部下達の意見書を纏めて提出してくれたまえ。これで良いかな？」

福本

「は！ありがとうございます！」

## 登場人物紹介

柿宮 裕かきみや ひろし（20） 性別 男性

福本を毛嫌いする海軍大佐。

親が貴族院の議員でそのコネで海軍軍令部に配属した。士官学校では嫌われ者だった。

無能で、精神論ばかりを主張している。

好き 権力 自分の思い通りいくこと

嫌い 福本 自分の思い通りにいかないこと

次号へ



## 会議（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 5月の風は恋を運ぶ

5月9日 呉軍港

この日、第七艦隊に空母二隻が編入された。  
艦名は『戦鷹』『勇鷹』。二隻共、独立機動艦隊計画で設計・建造された艦である。

同日 昼過ぎ 戦鷹艦橋

「申告致します。若杉晋作航海科少尉只今着任致しました。」

艦長

「うむ、ご苦労。明日からはごたごたな日が続くから今日はゆっくり休んでくれ。」

若杉

「は。」

自分とは1、2歳上の艦長に挨拶をして自分の部屋に向かった。

若杉

「えーと…あ、ここか。」

あれから20分後、自分の部屋を見つけ、やっと寝転がれると思

ドアを開けた瞬間……

若杉

「!?!?!?!?!」

部屋の中には少女がいた。その少女はベッドに本を何冊か置き、その隣で本を読んでいた。

本来、女性が海軍艦艇に乗っている訳がない。(第七艦隊は別として。)

しかも、第七艦隊にしても女性士官兵の数は少ない。(まだ四隻だから。)

「あの一、誰ですか?」

若杉

「きみこそ誰? ここは航海長室、僕の部屋だよ。」

「私? 私はこの『戦鷹』の艦魂、戦鷹よ。」

若杉

「艦魂……なら、何か証拠見せて。」

戦鷹

「証拠?……ちょっと待って。」

そう言って指をパチンと鳴らすと……

ゴーン!

若杉

「い、痛い…（…）」

金だらい直撃……

戦鷹

「ごめんなさい！」

若杉

「大丈夫。気にしてないよ。」

頭を擦りながら答える。

その時…

「お姉ちゃん、遊びに来たよ。あれ、お姉ちゃんもう人と仲良くなつたの？」

戦鷹

「…喋ってただけ。」

若杉

「誰？」

「戦鷹型空母二番艦『勇鷹』の艦魂、勇鷹です。お姉ちゃんがお世話になっております。」

若杉

「はあ……」

戦鷹

「勇鷹、私達今日編入されたばかりなんだけど……」

勇鷹

「もう、お姉ちゃんたら、ノリ悪い〜。気分だよ、き・ぶ・ん」

勇鷹

「そう言えば、お姉ちゃん。宴会行くの？」

戦鷹

「もちろん行くわよ。行かない理由なんてないし。」

若杉

「その前に宴会てなんだよ？」

戦鷹

「新人歓迎会。私と勇鷹の歓迎会です。」

勇鷹

「そつだ、お兄ちゃんも行くこつ。」

若杉

「俺も？」

戦鷹

「大丈夫かしら？ 金剛さん達が何か言わない？」

勇鷹

「大丈夫、大丈夫。それに人数が多い方が楽しいって。だから行く。」

「

若杉

「ああ……」

勇鷹

「よし、行こう！」

そして、3人は転移した。

どし〜ん！

若杉

「いてて……」

戦鷹

「だ、大丈夫ですか？」

若杉

「ああ、大丈夫……けど、誰だ？ こんなところにビール瓶置いたのは。」

「すまない。気の早い人が先に飲み初めてね、まだ何本か転がって

る様だから、気よつけてくれ。」

若杉

「あ、はい。お気遣い……！」

目の前にいたのは、今や同世代の間では希望であり目標である福本少将、その後ろにはマリーダ、遠地、千歳大佐、山本長官がいた。

若杉

「し、失礼しました！」

福本

「おや、見ない顔だな…今日着任した士官だね？」

若杉

「はい、本日戦鷹に着任しました、若杉晋作航海科少尉であります。」

「

沖田

「ああ、戦鷹に着任した航海長ですよ。」

福本

「なんだ、戦鷹。お前もう見える奴を見つけたのか。」

戦鷹

「別にいいじゃないですか。」

福本

「ま、良いか。それより若杉少尉、宴会出るよな？」

若杉

「あゝ、えゝ…」

福本

「なんだ、はつきりしないな…命令しようか？それとも山本長官に命令してもらおう？」

若杉

「いえ、結構です。参加します。」

登場人物紹介

わかすぎ しんさく  
若杉晋作

(19)

性別

男性

神戸海軍士官学校航海科卒業の士官。航海術の成績が良い為、戦鷹の航海長に。

妹がおり、女の子の扱いには慣れている。

趣味は読書。

好き 読書

嫌い お酒

艦魂紹介

戦鷹



戦鷹型空母の一番艦。

冷静沈着で、クールな印象がある。

読書家で、暇があれば読書をしている。

好き 読書

嫌い ネズミ

勇鷹

戦鷹型空母二番艦。

妹キャラで、ムードメーカー。

実は料理が上手い。

好き 料理 お菓子

嫌い 辛いもの（カレーを除く）

次号へ

## 5月の風は恋を運ぶ(後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 演習 上

5月17日 日向灘近海

ジント

「長官、偵察機より入電！『ワレ敵艦隊ヲ発見セリ』。」

福本

「数は？」

ジント

「空母4、戦艦6、重巡6、軽巡1、駆逐艦多数、との事です。」

マリイダ

「対し、こちらは空母2、戦艦2、重巡4、軽巡1、駆逐艦16。」

遠地

「おいおい、圧倒的に不利だな。」

福田

「どうします、先輩？」

福本

「まず、空襲に備えよう。沖田に戦闘機を増やすよう命じてくれ。」

この日、第七艦隊を中核に編成された混成艦隊は日本近海に侵入し

たアメリカ太平洋艦隊……ではなく、そう設定された仮想敵艦隊を  
迎撃するべく出撃した。  
つまり、演習である。

空母戦鷹艦橋

士官

「沖田司令、旗艦より入電、『戦闘機ヲ増ヤセ』です。」

沖田

「さすが先輩だな。よし、戦闘機を上げれるだけ上げるんだ。急げ  
！」

士官

「はー！」

甲板では発艦作業で大忙しだ。

今回、戦鷹・勇鷹に搭載されているのは戦闘機ばかりである。だから、多少は楽ではあるうが…。

ヴィル

「アンソン。」

アンソン

「あ、ヴィル。何か情報聞けた？」

ヴィル

「うん、演習相手の数は戦艦6、空母4、重巡6だって。」

クレア

「空母の搭載機数は？」

ヴィル

「赤城、加賀が80機以上、蒼龍、飛龍が70数機です。単純計算で約300機。」

クレア

「そこから予備機と直衛機を差し引いても、220機はいるわね。」

アンソン

「対し、こちらは戦闘機が約90機…ちょっとキツイな。」

ヴィル

「そんなアンソンに朗報かどうか判らないけど、情報がある。」

アンソン

「何、情報て？」

ヴィル

「沖田司令に聞いたんだけど空母四隻の総戦闘機数は72機だって。」

クレア

「…と言う事は、空母一隻に戦闘機は18機…直衛と二回の攻撃用の護衛機を引いていけば……」

アンソン

「一隊24機…いける！」

30分後、敵偵察機に発見されたがあえて迎撃しなかった。  
そして、1時間後……

士官

「レーダーに反応。敵編隊です！」

無線に誘導された戦鷹・勇鷹の戦闘機45機は護衛隊を避け、後方の攻撃隊を襲撃した。  
この日は、雲が多く、戦闘機隊と艦隊が連絡しあいながら誘導したからこそ出来たのだ。

その後、引き返して来た護衛隊と戦闘になったが、攻撃隊は大損害を被った。  
その攻撃隊も艦隊に攻撃を仕掛けたがほとんどが未帰還（と判定）だった。

ジント

「福本長官、零水観より緊急入電です！」

マリーダ

「どうかしたのジント君？」

ジント

「警戒中の零水観が敵編隊を発見したんですが、どうやら戦闘機が増えている、と報告が…」

福本

「多分、直衛にあてるはずだったのを護衛隊に回したんだな…。」

マリーダ

「で、どうするの？」

福本

「戦闘機隊は敵編隊を攻撃するよう命じてくれ、出来るだけ攻撃隊を迎撃するようにもな。」

30分後、防空ラインに到達した攻撃隊を迎撃したが、護衛隊に阻まれ大部分を取り逃がしてしまった。

ジント

「レーダーに反応有り！ 敵編隊接近中！」

福本

「第一次攻撃隊みたいにはいかないからな…気を引き締めていくぞ。」

「

遠地

「全艦全速！ 対空戦用意！」

ラフィール

「両舷全速！ 対空戦用意！」

ジント

「両舷全そーく！ 対空戦よーい！」

マリータ

「敵編隊、もうすぐ射程内に入ります！」

ラフィール

「本艦、戦闘準備完了。」

遠地

「全艦、戦闘準備完了。」

マリータ

「敵編隊、射程内に入りました！」

福本

「全艦、撃ち方始め！」

次号へ



演習 上(後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 演習 下

### 第二次攻撃隊による被害

空母 戦鷹 爆弾三発命中……中破 飛行甲板使用不能

現在修理中

空母 勇鷹 爆弾四発命中……中破 飛行甲板使用不能

現在修理中

戦艦 薩摩 爆弾一発命中……小破

戦艦 土佐 爆弾三発命中……小破

重巡 青葉 爆弾二発命中……中破 主砲塔一基使用不能

重巡 古鷹 爆弾一発命中……小破

戦闘機……損失20機

上記と判定する。

福本

「手酷くやられたな……」

福田

「80機以上の攻撃隊に襲われたにしては少ない方ですよ。」

遠地

「そりゃ、ありったけの弾幕を張ったかな。」

空母戦鷹・勇鷹を中心に、薩摩・土佐を空母の左右に配置、古鷹・加古・青葉・衣笠を前後に配置し輪陣形を形成、弾幕を張った。（古鷹型・青葉型は最近までドックに入り、防空改装を行っていた。）

マリーダ

「で、これからどうする？」

福本

「戦鷹、勇鷹、青葉は駆逐艦一個戦隊を付けて下がらせよう。あとは本艦と共に小澤さんの所に殴り込みに行くぞ。」

ジント

「な、殴り込み！」

福田

「先輩、正気ですか?!」

福本

「正気だよ。空母機なら心配ない。二度の攻撃で大分消耗してるからね。」

福田

「戦艦はどうするんですか？ 六隻もいるんですよ！」

福本

「一撃離脱。最大速で斬り込んで、逃げる。」

マリダー

「ま、やればっなしじゃあ退くに退けないわね。」

福田

「と、遠地先輩。福本先輩を止めて下さい。(´・`・´)」

遠地

「最大速で標準を合わせれるか試すには良い機会だからな、反対する理由がない。」

福田

「そんな〜。(´――`)m」

30分後 損傷艦と護衛を分離、離脱させ、小澤艦隊に向かって  
進路とつた。

三時間後……

ジント

「レーダーに反応有り。小澤艦隊です。」

その頃、小澤艦隊では……

空母 赤城艦橋

小澤長官

「偵察機の報告でわかってはいたが……まさか本当にやるとはな〜。

」

士官

「どうします？ 我々は？」

小澤長官

「まあ、戦艦の邪魔にならない様、退避しよう。」

マリーダ

「空母退避します。」

福田

「く〜、逃がしたか。」

福本

「お前、まさか空母狙う気だったのか？」

福田

「いけませんか？」

マリーダ

「2人共、戦艦の登場よ。」

福本

「艦種、速度は？」

遠地

「長門、陸奥に金剛四姉妹…速度は25ノット。」

福本

「長門に合わせてるんだな……遠地、20斉射ほどしたら退くぞ。」

遠地

「わかった。」

福本

「よし、まずは間合いをとって砲撃しよう。撃ち方始め！」

次号へ

## 演習 下（後書き）

本日よりバイトの為、更新が遅くなります。読者の皆様にはご迷惑  
おかけして申し訳ありません。      ご意見ご感想をお待ちして  
おります。

## 演習終了後の宴会

### 砲撃戦の結果

#### 混成艦隊

薩摩…… 40センチ砲弾二発、36センチ砲弾六発命中。中破・砲塔一基射撃不能。

土佐…… 40センチ砲弾一発、36センチ砲弾四発命中。中破。

#### 小澤艦隊

長門…… 43センチ砲弾二発命中。

中破・電路切断により斉射不能。

陸奥…… 43センチ砲弾一発命中。

小破・煙突に被弾、排煙効率悪化により速力低下。

金剛…… 43センチ砲弾二発命中。

中破・砲塔一基破損。

比叟…… 43センチ砲弾二発、魚雷二発命中。

大破。（ちなみに、魚雷は加古が発射したもの。）

上記と判定する。



五時間後 薩摩艦内

『かんぱい！』

福本

「なんで皆、こんなに宴会……と言っかどんちゃん騒ぎが好きなのかね……。」

マリーダ・遠地・千歳

「さー。」

山本長官

「ま、悪い事ではないからね。そう言う君も祭り好きだと聞いたぞ。」

福本

「…地域行事が好きなのです。まあ、一緒な事には変わりありませんかね。」

金剛

「よゝ、遠地。飲んでるか？」

遠地

「あ、はい、飲んでます。一応……。」

金剛

「なんたく、含みがある返事だな……まあ良い、注げ！」

遠地

「了解しました。どうぞ。」

金剛

「おっとっと、ありがとう。そう言えば薩摩と土佐から聞いたが、2人の砲術員達を鍛えたのはお前らしいな？」

遠地

「はい。それが？」

金剛

「案外、やるもんだなく、と思ってな。なにせ私に二発も当てたんだからな。」

遠地

「あ、ありがとうございませす。( \* ^ ^ \* )」

蒼龍

「戦鷹：ごめん、若杉君とイチヤイチャ中ね。」

戦鷹

「違います！ イチャイチャなんかしてません。若杉とは最近読める本について話してるんです。」

若杉

「え〜と…蒼龍さん、何の御用ですか？」

蒼龍

「あ、そうそう。若杉君、薩摩達にレーダーの他に何を積んでるの？」

若杉

「これと言った物は何も…あ、40ミリ機銃なら積んでますけど…それが何か？」

蒼龍

「うん、ちょっと気になってね…、なんで積んでるか知ってる？」

若杉

「いいえ。それは福本長官に聴いて下さい。」

蒼龍

「福本君、なんで40ミリ機銃を積んだのか、教えて。」

福本

「軍機密ですよ。」

蒼龍

「そこを何とか…お願い！」

福本

「…冗談ですよ。40ミリ機銃設置の件ですか？艦艇の防空能力

「上がるからですよ。」

蒼龍

「……どう言っ事？」

福本

「つまり25ミリ機銃と127高角砲との間が空きすぎなんですよ。」

蒼龍

「……うん??」

福本

「急降下爆撃を例にとりますと高角砲だと間合いに入らなくて、25ミリ機銃だと、ぎりぎり射程内だけど威力に疑問が残るんです。まあ、他にも色々あって設置したんですけどね。」

ラフィール

「……聴いて良いですか？」

マリーダ

「ん、良いわよ。何が？」

ラフィール

「山城さんって宴会で飲み過ぎて寝ちゃった時、愛宕さんに膝枕してもらってますよね？」

千歳

「ええ、そうね。」

ラフィール

「山城さんは…愛宕さんの事が好きなんですかね…?」

マリータ

「…え?」

千歳

「…いや、それは無いでしょ。」

ラフィール

「いえ、でも…」

マリータ

「たまたま、愛宕さんの膝が気持ち良いだけよ。それだけの事じゃないの。」

次号へ

**演習終了後の宴会（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 巫女艦長と艦魂

5月20日 呉軍港付近の海域

一隻の駆逐艦が呉に向かっていた。  
艦名は『神波』。

第七艦隊配属艦で独立機動艦隊計画で設計された大波型駆逐艦の四番艦である。

大波型駆逐艦は、日本海軍が設計してきた特型駆逐艦などの艦隊型駆逐艦の性格を受け継ぎつつ、凡庸性をもたせた駆逐艦である。改良点としては、対潜能力の底上げ、主砲の高角度化、40ミリ機銃の設置、レーダーなどの新装備等々である。データは以下の通り。

### 大波型駆逐艦

基準排水量	2352トン
満載排水量	3170トン
全長	125.7m
幅	11.6m
速度	36ノット
航続距離	18ノットで8000海里

### 武装

12.7センチ連装砲×3基  
61センチ四連装魚雷発射管×2基  
40ミリ機銃 連装×2基  
単装×4基  
25ミリ機銃 三連装×4基 連装×2基  
Y字型爆雷投射機×2基  
爆雷投下機×2基

### 神波艦橋

狭い駆逐艦の艦橋内では、男女士官兵問わずに忙しく動き回る中、1人の女性士官が直立不動で正面の海を見ていた。

神童神子である。

ちなみに、彼女はさぼっているのではない。

実は、彼女はこの艦の艦長である。

何故何もしてないかと言うと、する事が無いからである。

今回の旅順軍港から呉軍港までの回航は簡単なもので、皆は訓練航海の様だと言う程だ。

まあ、それ以前に乗り組んでいる全員が、何故かしら自分が何をすれば良いか判っているから、余計な言葉が要らないからだろう。

さて、何故『神波』だけが第七艦隊に配属されたかと言うと、熟練度の問題である。

四隻が完成・慣熟訓練をしていたのだが、三隻は新型の機関や新装備等々の慣れない要素が多く、乗組員達は悪戦苦闘していた。

そんな中、神波の乗組員はまるで隠されていた才能を発揮するかの



様に使いこなしていった。

この為、神波は他の三隻より早く熟練度に達した判断され、第七艦隊配属が決定された。

誰も居ない防空指揮所。

しかし、気晴らしに上がって来た神童が見ると、1人の少女が居た。水兵服装の少女……彼女こそが神波の艦魂、神波である。

神童

「神波、何してるの？」

神波

「あ、神童さん。良いんですか？ 現場ほつといて？」

神童

「大丈夫。皆、何すれば良いか判ってるから。で、質問の答えは？」

神波

「風景を……日本の風景を見ました。これが私の守る日本の風景なんだな、と思ってる。」

神童

「そう……。」

2人は仲良しだ。

友達になったのは完成したてで、神童が1人で艦内巡回をしていた

時だ。

ちなみに艦内巡回とは表の目的で、本当は艦内お祓いが目的だった。その為、最初は自分の部屋である、艦長室をお祓いしようと艦長室に入ると、彼女もとい神波が居た。

この時、神童は巫女服姿、神波は水兵服姿、そんな格好で2人が出会えばが驚かない訳が無い。

こんな事があり、2人は仲良しだった。

神波

「あ！ 神童さん、見てください！」

その叫び声に、神童は神波の指差す方を見るとそこには……

神童

「薩摩と……福本長官……。」

どうやら、福本長官が気を利かせて薩摩で出迎えに来た様だ。

下の艦橋が騒がしい。

まあ、世界最大の戦艦と憧れの先輩に出迎えてもらえば騒がしくならない訳が無い。

しかも、よく見ると主砲塔に艦魂達が立っている。

神波を出迎えに来たのだろう。

ドン！

薩摩の高角砲が空に向けて空砲を放つ。

「艦長、どうします?」

神童

「礼砲なら返すのが礼儀ですよ。」

「はい。」

数秒後、主砲が空砲を放ち返礼する。

こうして、第七艦隊に新たな仲間が加わった。

## 登場人物紹介

神童しんどう神子みこ（18）

性別

女性

海軍中尉

実家が神社で、巫女をしている。

靈感が強く、艦魂などは普通に見えるので、気にしていない。

それよりも、艦魂が見える人間が自分の他にも居ること嬉しく思っている。

好き 実家の神社 艦魂達

嫌い 無茶苦茶言う人

神波

大波型駆逐艦四番艦。

神童とは仲良し。(『神』が名前に入ってるのも一因)  
神童と出会った時の影響からか巫女さんに憧れている。  
得物は弓矢。

好き    お姉さん    巫女さん日本

嫌い    ホラー

次号へ

巫女艦長と艦魂（後書き）

作者「いや、久し振りに出てこれた。」遠地「呑気やな。」  
福本「ほんまに…ヨーロッパでドンパチやってる最中に、日本だけ呑気な話が続くな。」山本長官「そうでもないぞ。」マリーダ「や、山本長官！」山本長官「特命だ。第七艦隊はエステル王国への親善測量航海を命じる。」千歳「特命係長・只野仁？」福本「おいおい…。」

## 親善測量航行 1

6月4日

よく晴れた南太平洋の海を二隻の戦艦、二隻の空母、一隻の巡洋艦、数隻の駆逐艦がゆっくりと航行していた。なお、ゆっくりと航行している理由は2つ。1つは真ん中にある測量船に合わせて航行している事。そして、もう1つは……

戦艦薩摩 艦橋

ウェールズ

「これが……日本の戦艦と空母ですか…。」

シャルロット

「これに比べたらモンブランなんか小船ね。」

ウェールズ&シャルロットダリア・エステロール連合王国国王夫妻が薩摩の艦橋に居た。

2人はつい3日前、第七艦隊が到着した6月1日に結婚したばかりだ。

そんな2人の初仕事がこれだった。

マリィダ

「楽しんでる、2人共？」

シャルロット

「あ、マリィダ久しぶりね。」

ウェールズ

「お久しぶりです。マリィダさん。」

マリィダ

「うん、2年ぶりね。」

シャルロット

「約2年だけどね…会えて嬉しいわ。」

ウェールズ

「そう言えば君のパートナーの福本少佐…じゃあなかつた福本少将は何処に？」

マリィダ

「言つて信じて貰えるか判ないけど…艦魂同士の交流中かな…。」

薩摩艦内 会議室

「は、初めまして！ ダリア・エステルール連合王国海軍旗艦、重巡洋艦モンブランです。全艦魂に代わりあなた方を歓迎致します！」

薩摩

「大日本帝国海軍第七艦隊旗艦、戦艦薩摩です。歓迎ありがとうございます！」

「ございます。」

その時、会議室の扉が開いた。

福本

「2人共、自己紹介は終わった？」

薩摩

「はい、終わりました。」

モンブラン

「えーと……どなたですか？」

福本

「おっと、すまない。紹介がまだだったね。大日本帝国海軍第七艦隊司令長官、福本大介少将だ。」

モンブラン

「福本……大介……あ！ し、失礼しました！ 2年前に我らの国王夫妻を助けて下さったお方なのに……」

福本

「そんな、大層に言うことじゃ無いのに……友達の危機を越権行為で覚悟で助けただけなんだけどな……。」

ここでモンブランの説明。モンブランはモンブラン型重巡洋艦の一番艦である。モンブラン型は旧エステル王国の造船所で建造された国産艦である。



と言つても日本、イギリス、ドイツの技術援助が有つて完成したため、準国産艦と言わざるおえないが…。データは以下の通り。

基準排水量	12000トン
最大排水量	17000トン
全長	200m
幅	19m
最大速	33ノット
航続距離	14ノットで8000海里

#### 武装

- 20、3センチ50口径三連装砲×3基
- 53センチ三連装魚雷発射管×4基
- 12、7センチ50口径連装高角砲×6基
- 40ミリ連装機銃×4基
- 25ミリ連装機銃×14基
- 水偵×2機

船体は高雄型重巡洋艦をモデルにし、三連装主砲を採用、弾薬庫などのスペースを縮小し、主に防御面を重視している。

マリーダ

「大介。居る？」

福本

「居るけど…、おやおや。」

会議室の扉を開けると入って来たのは……

シャルロット

「お久しぶりです。福本さん。」

ウェールズ

「久しぶりだな。福本少将」

福本

「2人共、結婚おめでとう。で、何しに来たの？」

シャルロット

「マリーダから、聞いたんですけど、今艦魂達同士で挨拶してるって言ったんで見に来たんですが……」

そう言ってキョロキョロと部屋を見回す。

予想はしていたが、どうやら見えないらしい。

福本

「あゝ、見えますか？」

シャルロット

「いいえ……」

福本

「え〜と、筆談なら話せるかもしれませんが。」

そう言つて、福本はモンブランに紙と鉛筆を渡す。

2人は何も無い空中に紙と鉛筆が浮かんでいる事に驚いている。

そして、書き終わった紙を見た瞬間、ついついニンマリしてしまっ

た。  
その紙を2人に渡す。  
その紙には……

『結婚おめでとございます。 モンブラン』

艦魂紹介

モンブラン

モンブラン型重巡洋艦の一番艦。

ダリア・エステロール連合王国海軍初の一万トン艦。現在は連合王国海軍旗艦。慣れてない長官職に悪戦苦闘中。

好き 人の幸せそうな顔      ダリア・エステロール連合王国

嫌い 慣れない長官職

次号へ

親善測量航行 1 (後書き)

戦鷹「作者に質問。モンブランのネタ元は？」作者「ガンダムのサラミス改巡洋艦（エウーゴ所属）がネタ元。」勇鷹「なーんだ、お菓子のモンブランがネタ元かと思った。」作者「……次号はちょっと大変なことになります。ご意見ご感想をお待ちしております。」

海と言うのは解らない。

地球上の生物は全て海から生まれた。

これだけでも凄い。

しかし、海は時として自然の猛威を見せる時もある。津波は自らが生み出したはずの生物に襲い掛かる。

そして、海には不気味で不思議な話にも事欠かない。今回の作品は、そんな不気味で不思議な話の1つである。

その報告が入ったのは昼食が終わって一時間後の事だった。

念のため、前路哨戒と言う事で薩摩・土佐から零水観を、戦鷹・勇鷹から九七艦攻を発進させ哨戒に当たらせていた。

報告は、土佐の零水観からであった。

そして、その報告とは……

福田

「軍艦が漂着しているだって!？」

ジント

「はい。」

マリダ

「何かの見間違いじゃあないの？ まあ、商船と軍艦の見間違いは有り得ないと思うけど。」

ジント

「実は気になる事が1つ。艦のシルエットが古いそうです。偵察員の話では、三笠とか、日進とかに印象が似ているそうです。」

福本

「……ま、議論しても何もならないし、調べに行きますか。」

旧エステロール王国近海の海域には、島や群島が多い。

そして、そのほとんどが未調査だ。

一部の島には小規模ながら調査隊が派遣され、調査が行われたが、無人島かどうかの調査であり、島の面積や水深などの本格的な調査はなされていない。

だからどこに何があるかさえもほとんど解らない。

今回の親善測量航海の目的の1つであった。

報告を受け、進路を『謎の軍艦』が発見された島に向かった。そして、一時間後……

遠地

「うーん、案外大きい島だな。」

千歳

「そう言う事じゃあ無いでしょう。」

福本

「……ふむ、後ろ姿だが確かに明治時代の海軍艦艇のシルエットだな……。」

マリィダ

「で、どうするの？ 上陸して調べる？」

福本

「そつだな。上陸して調べよう。で、人選だが……。」

福田

「先輩！ 自分も連れてって下さい！」

福本

「……残念だが福田、今回君は留守番だ。」

福田

「せ、せんぱい……！」

福本

「人選だが、俺とマリィダ、遠地、千歳、神童、クレア、ヴィル、アリソン、そして、艦魂達を連れて行く。」

遠地

「艦魂もか？」

福本

「相手は軍艦。なら艦魂を同行させた方が、何かと役に立つ。」

用意が整った8人と艦魂達は内火艇に……あれ？

福本

「予想はしていましたが……付いて来るんですか？」

シャルロット

「うん、もちろん」

マリータ

「あのね、遠足に行くんじゃないんだからね。」

ウェールズ

「大丈夫です。シャルは私が守ります。」

遠地

「……そういう問題でもないんですけど……。」

島は丸形、湾があり、形は半月形であった。

しかし、湾は海流の関係か、渦潮が発生しており、湾への上陸は無  
理と判断、湾の左端に上陸。

海岸に沿って歩いて行き、『謎の軍艦』に向かった。

ヴェイル

「これ……ですか。」

アリソン

「これね……。」



彼らの前には確かに軍艦があった。  
しかし、長年放置されていた為か、塗装が剥げたり、苔が付着したりしている。

遠地

「こりゃ、放置されて1、2年とかの話じゃあないな。」

千歳

「10年…いや、20年以上経過しているわね。」

船尾の方を見ていた福本は苔や錆などでほとんど読めなくなった船名を解読していた。

結局、甲板に上がろうとする間に解読できたのはわずか一文字。

しかし、一文字でも十分だった。

一文字でも、歴史が得意な福本なら、ある確証が出てきたからだ。

甲板に上がった福本達。  
もちろん、誰も居ない。

福本

「艦内を検索しましょう。数人一組で行動、検索してください。」

そう言い終わった瞬間……

「誰だ、貴様らは？」

声のした方を振り向くと、そこには1人の少女、もとい艦魂が居た。

格好は福本達が着ている士官服に似ているが、明治の印象を残す士官服だ。

そして、一番の特徴が明治の日本海軍に多かった外国産艦の証である、髪の色。彼女は金髪だった。

「もう一度問う。貴様らは何者だ？ 答えなければ……」

そう言っただけで彼女は腰にあるサーベルの柄に手を添える。

福本

「ま、待ってくれ！ 自分は日本海軍連合艦隊所属第七艦隊司令長官、福本大介少将です。」

それを聞いた瞬間、その艦魂はサーベルに添えていた手を離し、その場でへなへなと膝を付いてしまった。そして、泣きながら……

「やっと……やっと見付けてくれたんですね……。」

一時間後 戦艦薩摩会議室

「先程は失礼した。私は日本海軍巡洋艦敵傍だ。」

遠地

「う、敵傍だつて！」

福本

「やはり…そうでしたか…。」

マリーダ

「大介、判ってたの？」

福本

「ああ、船尾の船名が気になって解読してみたんだ。『う』の文字しか解読出来なかったけど、『う』の平仮名名で錆具合から2、30年以上経過しているとすると、畝傍ぐらいしかないからね。」

千歳

「なるほど…。」

薩摩

「けど、おかしくありませんか？ 畝傍が行方不明になったのは南シナ海ですよ。何で正反対のここで見付かるんですか？」

福本

「それは本人に聴きましょう。」

この言葉に全員が畝傍に注目する。

畝傍

「それは…私にも解らない。」

土佐

「解らない？」

畝傍

「ああ。私は12月3日にシンガポールを出港したんだが、その翌日、嵐に遭遇した。乗組員全員が一致団結して立ち向かったんだが……」

神波

「だが？」

畝傍

「何回目かの大波で、船体が海面から1メートルほど浮き上がったところまでは覚えているんだが……気が付いた時には、私はこの島に居た。艦内を探したが、乗組員は誰も居なかった……」

ジント

「そんな……海面から1メートルも浮き上がったのでさえ驚きなのに……」

ラフィール

「気が付いた時には、この島に居て、乗組員が誰も居なかったなんて……。」

ヴェイル

「自分は似た様な話を聞いた事がありますが……。」

福本

「俺も聞いた事がある……もしかしたら、海はまだまだ解ってない事だらけなのかも知れないな……。」

その後、畝傍が行方不明になった1886年から今までの54年間

の歴史を手短に説明した。

畝傍

「なるほど…私がここに居た間にそんな事が…。」

福本

「はい。今の世界情勢はあなたが発注された時よりも混乱しております。ロシアは共産主義により南進をより一層進め、今はイギリス・フランス・ドイツと戦争中。我が国とも対立しています。アメリカは、中国から手を引いたのに未だに我が国を警戒しております。」

こんな事を話しながら夜はふけていく。

次号へ

親善測量航海 2 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

親善測量航海 3

6月5日 戦艦薩摩会議室

福本

「実は昨晚、畝傍さんと今後について協議しました。」

マリイダ

「うん、それで?」

福本

「協議の結果、日本に連れて帰ろうと思います。」

薩摩

「本当ですか!」

福本

「ええ、畝傍さんもそれで良いと。」

ヴィル

「しかし、どうするのです? 軍艦とは言え半世紀前の性能でも  
ても……」

福本

「その事ですが、考えがあります。実はある計画艦の二番艦の予算  
が採れなくて……」

福田

「それって……まさかZ100艦の話ですか？」

福田

「ああ、そうだ。」

遠地

「ちょっと待て！ あれは基準排水量だけでも14000トンにもなるやつだぞ！」

福田

「……どうせ、船体延長やら全幅延長なんやらで改装するんだから構わないだろう。」

遠地

「……あ、確かに。」

福田

「ま、どうするにせよ、敵傍をあそこから引き出さないと話が始まらないからな……。今すぐ準備に取り掛かってくれ。」

「……………了解！」「……………」

二時間後……

ジント

「長官。モンブランより連絡、ワイヤー固定が完了したそうです。」



千歳

「上陸班から連絡、敵傍のワイヤー固定が完了したそうよ。」

福本

「ありがとう。…本当は日本の問題なんだが、王国を巻き込んでしまったな。」

マリーダ

「戦争に巻き込んだならともかく、敵傍を引っ張り出すのを手伝ってもらってるだけの事よ。」

実は敵傍を引っ張り出すのは良かったのだが、湾の水深を調べたところ、空母や戦艦では進入不可能、駆逐艦では進入可能ながらも、渦潮が発生した場合の事を考え、巡洋艦のモンブランに白羽の矢がたった。

まあ、本来なら複雑で面倒な要請や許可が必要なのだが、国王夫妻が即決したので必要なかった。

作業は順調に進行した。

モンブランは慎重にワイヤーを引っ張って行き、敵傍を島より出して行く。

そして、作業開始一時間後……

福田

『こちら福田です。只今敵傍、湾を出しました。艦内に異常ありません。成功です！』

その声が無線機より、聴こえた瞬間、日本艦、連合王国艦問わずに万歳三唱の嵐が起こった。

そして、その報告は日本へ……

宇垣参謀長

「た、大変です！ 山本長官！」

山本長官

「どうしたんだね宇垣君？黄金仮面の君がそんなに慌て？」

宇垣参謀長

「親善航海に出ていた、第七艦隊の福本より連絡です！ 幻の巡洋艦、畝傍を発見！ 先程救出作業を終了し、親善航海終了後に共に帰還するそうです！」

山本長官

「あいつめ……騒ぎを起こすのは何時もお前らしいな……。」

6月8日に親善航海を終了した、第七艦隊は日本に帰還するべく、パトミナス港より出港した。  
その中にはもちろん、畝傍が居た。

次号へ

## 親善測量航海 3 (後書き)

作者「畝傍さんの救出完了。けれど、当分新キャラのオンパレードなので、読者の皆さん覚悟して下さい。」ご意見ご感想をお待ちしております。」

## 出会いと復活？

6月20日 呉軍港

この日の呉軍港は第七艦隊に配備される伊豆型戦艦の四隻が旅順軍港より到着した。

戦艦薩摩 会議室

光とともに現れたのは長門と山本長官だった。

山本長官

「いや、すまんすまん。こっちに来ようとしたら、宇垣君や黒島君がいきなり引き留めて来るから遅れてしまった。」

福本

「いえいえ、これから自己紹介なので遅れていませんよ。」

遠地

「出来ればもうちょっと引き留めて欲しかったんだけどな。」

山本長官

「？何か言ったかね？」

遠地

「い、いえ、何も言ってますんよ。」

福本

「それでは、自己紹介どうぞ。」

「初めまして、伊豆型戦艦の一番艦の伊豆です。よろしくお願います。」

福本

「え〜と、次は……あれ？伊賀？どこに居るんだ？」

シュン！

「ここです。福本さん。」

何時の間にか福本の横に居た。

福本

「何処に居たかは後にして…ほら、自己紹介。」

「初めまして、同じく二番艦の伊賀です。以後よろしくお願ひします。」

山本長官

「…？福本、今回配備されたのは四隻のはずだが…二人しか居ないぞ。」

福本

「あ、それは……」

その時、会議室のドアが少し開き、そこから何かが二つ転がって来た。

ボン！

くぐもった爆発音、そして煙。

福本

「は、発煙筒！？」

長門

「みんな、落ち着いて！」

マリーダ

「誰か、山本長官を避難させて！」

「了解！」

誰かが返事した。

「山本長官、こちらへ！」

山本長官

「ああ……」

山本は言われるがまま、別のドアから会議室を脱出した。

そのまま、山本は薩摩の上甲板に出てしまった。

「大丈夫ですか？」

山本長官

「ああ、大丈夫だ。心配を……！」

自分を避難させた人物を見た瞬間、山本は驚いた。何故なら……

山本長官

「春日！ な、なんでここに居る？ き、君は2ヶ月前に解体された筈じゃ……。」

春日

「ええ、そうよ。まあ、あの世から帰って来た、と言ったところかしらね。」

山本長官

「な……。」

春日

「それより、私以上にあなたに会いたがってる人が防空指揮所に居るんだから、早く行って、会ってあげなさい！」

防空指揮所に上がった。

そこには、春日が言った通り、会うべき人が居た。

山本長官

「久しぶりだね…日進。」

日進

「うん、久しぶりね…二年半ぶりかしらね、高野。」

ちなみに、日進は山本を旧姓の高野で呼ぶ。

山本長官

「ああ…しかし、どうしたんだ？ 最後まで看取らなかった男に会いに来るとはな。」

日進

「あら、せつかくあの世から帰って来たのに、そんな事聴くの？」

山本長官

「……どうやら、俺も歳を録ってしまったな…。素直に喜べないとはな…。」

日進

「ま、いいや。とにかく、これからは会える回数も時間も増える訳だし、またよろしくね。」



山本長官

「それについて聴きたい。春日も帰って来た、と言っていたが……どう言う事だ？」

日進

「そうね。まず先に言つとかないとね。伊豆型戦艦の三番艦と四番艦は、お姉ちゃんと私なの。」

山本長官

「な！……し、しかし、いつたいどうやって？」

日進

「簡単だよ。まず、元の船体を解体すると同時に旅順で、今の船体を建造する。後は、ぎりぎりの所で今の船体に転移すれば良いだけの事よ。お姉ちゃんも方法は一緒。あ、ついでに言うけど思い付いたのは福本君よ。」

山本長官

「……まさか、会議室のあれも福本のやらせか？」

日進

「そうよ。発煙筒を投げ込んだのは宇垣参謀長と黒島参謀だけど。」

山本長官

「……後で福本をシバかなきゃいけないな。」

日進

「アハハ、そうね。」

何時の間にか、夕暮れだ。夕陽がゆっくり沈む。

日進

「ねえ……高野……キスして。」

山本長官

「……………はあ?!」

日進

「驚く事じゃ無いでしょう。昔はしてくれただじゃない。」

山本長官

「あのかな……………m(——)m」

日進

「で、するの?しないの?」

山本長官

「……………わかった……。」

お互い見つめ合い、ゆっくりと顔を近付ける。

そして、唇が触れ合い……………

『チュ  
』

その後、春日と共に会議室に戻った山本と日進は、クラッカーに迎えられた。

そして、横断幕には……………

『歓迎！ 伊豆・伊賀！ お帰りなさい 春日・日進！』と…。

### 伊豆型戦艦データ

基準排水量	35800トン
最大排水量	41600トン
船体全長	235.8m
船体全幅	31.6m
最大速度	33ノット
航続距離	18ノットで12000海里

### 兵装

15インチ（38センチ）50口径三連装砲×3基
6インチ（15センチ）50口径連装砲×6基
5インチ（12.7センチ）45口径連装高角砲×16基
40ミリ機銃 四連装×10基 連装×10基
25ミリ機銃 三連装×20基 連装×30基

ドイツの巡洋戦艦、シャルンホルスト型を見本に、日本版に仕上げた。

排水量や主砲などを拡大した為、外見が大和型戦艦のミニバージョンになってしまった。

## 艦魂紹介

### 伊豆

伊豆型戦艦の一番艦。

動物好きで、時々猫やカモメなどと戯れている。

動物系のコスプレが似合う。

好き 動物

嫌い 争い事 戦争 殺し合い

### 伊賀

伊豆型戦艦の二番艦。

名前の性が、忍者になってしまっている。

連合艦隊で一番（今のところ）すばしい。

その為か、神出鬼没である。

好き 忍者 忍術

嫌い 特になし

### 春日

伊豆型戦艦の三番艦。

元は春日型装甲巡洋艦の一番艦。日進とは義姉妹。  
実は、二人を転移させる為に完成を急いだ為、戦後資料によっては、  
二隻を『春日型戦艦』と分類する場合がある。  
伊豆・伊賀の実質的な姉である。

好き 日本 日進

嫌い ロシア スターリン

次号へ

出会いと復活？（後書き）

日進「読者の皆さん。お久しぶりで。日進だよ。」作者「  
やっぱり、嬉しいですか？ 久々に出られて。」日進「うん」「春  
日」ところで作者。次は80話だから何かするのか？」作者「はい。  
誰か呼ぼうかと。誰かは決めてませんが。」春日「そうか。」日進  
「ご意見ご感想をお待ちしております。」

80話だよ！ 全員(?) 集合！(前書き)

日進「ドリフネタのパクリだ！」 作者「別に言いじゃん！」

80話だよ！ 全員(?) 集合！

異次元にある水交社（海軍将校倶楽部）イントラック諸島

『これから、随分と忙しくなりそうだから、今の内に休暇でもとってゆっくりしたらどうだね。』

と言う山本長官の忠告を聞き入れ、休暇をとった第七艦隊の面々。作者の誘いで、のんびり水交社で過ごす事にした。

水交社 中庭

伊豆

「ほくら、ゴロゴロゴロ」

猫

「ニャ〜ゴ〜」

日進

「フワ〜、ウ〜ン…」

伊豆

「あ、おはようございます。日進お姉さん。」

日進

「おはよ〜、伊豆。…あれみんなは？」



伊豆

「え〜と、春日お姉さんと薩摩さん、土佐さん、アリソンさん、クレアさん達はビーチで遊んでいます。」

ちなみに、この水交社の下はビーチになっている。

日進

「達は、と言うことは別の人もいるの？」

伊豆

「はい。作者さんと福本さん、マリィダさん、沖田さん、ヴィル君、フェル君、神童さん、神波ちゃんは買い物だそうです。」

日進

「買い物？」

伊豆

「はい。あ、お昼は中庭でバーベキューだそうですよ！」

同時刻 市場

福本

「作者。この位でいいか？」

作者

「あ、はい。その位で…、えーと、薩摩芋、玉ねぎ、とじもろこし、ピーマン、……」

沖田

「あれ？ マリーダ先輩達は？」

作者

「マリーダ達には、別の買い物頼んでる。」

マリーダ

「どっちが良いと思う？」

神童

「私は猫の抱っこ枕が良いと思います。」

神波

「私はテディベアの方が良いと思います。」

マリーダ

「うーん、参ったわね。こんな事になるんだったら、先に伊豆に訊いとくんだった。(････)」

……伊豆のお土産を選んでいた。

神波

「いっそのこと、二つ共買っちゃったらどうですか？」

マリーダ

「そうね　そうしましょ。」

そして、三人はレジへ。

作者

「まだかな？」

沖田

「女の子の買い物は長い、と言いますから。」

福本

「俺は慣れてる。」

フェルデナント

「自分も…慣れてます。」

沖田

「あ…そうです(ドン)おわっと!」

「あ、すみません!」

沖田

「いえいえ、こちらも余所見をしていましたから。」

作者

「あ、あなたは『異文 太平洋戦争秘録 改『伊勢』激戦記』艦魂の伊勢さんと日向さんじゃありませんか!」

日向

「あれ? 私達を知ってる?」

伊勢

「えーと、今回招待下さった、新米士官さんですか？」

作者

「はい、そうです。」

福本

「おーい、ちょっと待て。どういう事だ？」

作者

「今回80話記念として、招待したゲスト。」

フェルデナント

「ああ、なるほど。」

福本

「なーんだ、それやったら先に言わんかい。」

作者

「ところで、伊勢大尉と加藤大尉は？ あの二人も呼んだはずだけど。」

日向

「実は…おじさん達とはぐれた。」

作者

「は、はぐれた？」

沖田

「大方、加藤大尉が勝手に行動した為、伊勢大尉が連れ戻しに行っ

たら、はぐれた…と、言ったところではないでしょうか？」

マリダ

「さて、あちこち回ったし、皆と合流しましょう。」

神童・神波

「はい。」

「すみません、その髪が水色のお嬢さん。」

マリダ

「え、私？」

「そうです。これから僕と一緒にお茶でも（ゴン）（ウゲム）（  
」

「なんで、場所を訊くのがお茶のお誘いになってるんだ？」

マリダ

「あの一？」

「ああ、すまない。私は伊勢洋紀、こいつは下等だ。」

「下等じゃない。加藤だ、加藤昇。」

神波

「ああ、二等海士長さんの伊勢さんと加藤さんですね。」

マリーダ

「ところで、何を訊きたいんですか？」

伊勢大尉

「新米士官が居る、水交社の場所を訊きたいんだが…。」

マリーダ

「あ、それなら……」

神童

「あのー、マリーダさん。福本さんから無線が…」

マリーダ

「あら、そうですか…はい、もしもし？」

福本

「あ、マリーダ。そっちに伊勢大尉と加藤大尉が居るかな？」

マリーダ

「うん、居るけど…なんで判ったの？」

福本

「加藤大尉の行動パターンを考えたら、なんとなく判った。」

その後、マリイダ達と合流した福本達は水交社に向かった。

そして、一時間後……

薩摩

「それでは……かんぱい！」

『かんぱい！』

艦魂＋女性士官組

伊勢（二等）

「そういえば、この作品の私はどこに、居るんですか？」

マリイダ

「現在、呉にて改装中です。」

伊勢（二等）

「改装？」

マリイダ

「えーと、船体延長して、機関を取り換えて、レーダー搭載して、40mm機銃搭載して……」

伊勢（二等）

「わ、判りました。も、もういいです……。」

薩摩

「ふーん、そっちも大変なんだね。」

日向（二等）

「そうなんだよ。おじさんとは離れ離れだし、出番無いし……。」

勇鷹

「あははは……。」

日向（二等）

「けど、そっちは良いよね。まだ平和で。」

土佐

「平和、と言っても微妙なラインですからね。」

神童

「薄氷の平和、と言ったところですね。」

千歳

「そうね。」

変わりました、男性士官組

加藤大尉

「お前達のところは、良いよね。」



遠地

「何ですか？」

加藤大尉

「だつてさ、この作品は男1人に女の子1人みたいだよな。」

遠地

「んな訳ないない。」

福本

「そうです、そうです。」

加藤大尉

「うるせい！ 女の子とパートナーな奴と、恋人がいる奴に言われたくないわ！」

福本

「あなただつて、最近そうなたでしょう。」

加藤大尉

「お前らは、最初からだろう！」

福田

「どうします、伊勢大尉？」

伊勢大尉

「…酒大量に飲まして潰せばいい。」

福本

「そう言えば、伊勢大尉。」

伊勢大尉

「なんでしょう？」

福本

「はい、技術についてご意見が欲しくて……」

……こんな感じで夜更けまで宴会が続いた。

次号へ

80話だよ！ 全員(?) 集合！ (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 車魂

7月1日 呉軍港

夏本番とばかりに暑い中、一隻のイギリス船籍の貨物船が入港した。この貨物船には、空母用カタパルト、マウザー砲、イギリスの商会ルートを通じて入手したアメリカ製最新式の工作機械などが積み荷であつた。

そんな積み荷の中で、一つだけ、違う物があつた。重厚で威圧感すら感じられる鉄の塊……戦車である。

一週間後 呉鎮守府内 第七艦隊陸戦隊格納庫

「おはよう、マチルダ！」

格納庫の扉が開き、一人の少年兵が入つて来て、物言わぬ戦車……イギリス製マチルダ Mk I 歩兵戦車に挨拶する。

マチルダ戦車に挨拶した少年兵は大沢おおさわ 慧けい二等水兵（17）である。『二等水兵』と言っても、彼の所属は第七艦隊陸戦隊戦車部隊の操縦士である。もちろん、彼は（歳を考えても）運転免許なんて持っていない。（何せ、運転免許自体が特殊技能扱いの時代だ。）では、何故彼は運転できるのか？

実は、彼の実家が車や機械の修理工場だからだ。

だから、彼はメカに強い。しかも、戦車の点検や整備も出来たから、陸戦隊にとつても貴重な存在である。その為か、マチルダ戦車を任すには十分だった。

大沢

「はあ〜」。

マチルダ戦車の点検を一通り終え、格納庫から出して、日向ぼっこしていた。  
まだ朝方だから、多少ましだが、それでも暑い。

大沢

「もうそろそろ、中入れるか…。」

そう言つて、砲塔を撫でた瞬間……

「誰ですの？ 私の体を撫でているのは？」

大沢

「おわ!？」

驚いて後ろを振り向くと、自分が座っている車体に自分と同じ位の少女がいた。特徴としては、髪は金髪の縦巻きロール、瞳は青、である。

しかし、なんと言つても、目立つ体つき。  
俗に言う、ボン、キュ、ボンである。

大沢

「誰！ 君誰?!」

「私？ 私はこのマチルダ戦車の車魂、マチルダですわ。」

大沢

「車魂?!……………ああ、先輩から聞いた事がある艦魂に似た物か？」

マチルダ

「艦魂……………まあ、そう考えて頂いて構いませんわ。」

車魂とは、007先生の作品で出た為、詳しい説明は割けるが、まあ、艦魂の戦車版と言っていい。  
ただ、艦魂との違いは宿っている車両が破壊されても同型車が有れば、それに転移できる点である。

大沢

「それより、マチルダ？」

マチルダ

「なんですの?」

大沢

「その喋り方は癖？」

マチルダ

「癖と言うか……………生まれつきですわね。」

大沢

「そ、そうなの……。」

フェルディナント

「お邪魔させてもらっつよ。」

大沢

「少佐殿！」

フェルディナント

「やあ、大沢君。君の話し声がしたから、寄ってみたんだが……。」

さて、どうやって説明したものか……。

そう大沢が考えていると……。

「まあ、そこに居るお嬢さんと話してたんだろつ。自己紹介してもらおうかな？」

大沢

「！ちよ、長官！」

フェルディナントの後ろに居たのは福本達。

メンバーは福本、マリィダ、若杉、土佐、伊豆、戦鷹のメンバーだった。

福本

「『車魂』ねえ……」

大沢

「信じ……ます？」

若杉

「いや、見えて、喋ってるんだから、信じるしかないから。」

土佐

「福本長官、マチルダさんを紹介しに行っていていいですか？」

福本

「ああ、別に構わんが……」

土佐

「なら、戦鷹、伊豆行くわよ。」

戦鷹

「はい。」

伊豆

「マチルダちゃん、行こう」

マチルダ

「ちょ、私は……」

言い終わらない内に転移してしまった。

福本

「……大沢二等水兵……明日から大変だぞ。」



若杉

「自分も、そう思います。」

登場人物紹介

大沢 慧 (17)

所属 第七艦隊特別陸戦隊戦車部隊操縦士 二等水兵

実家は修理工場の為、手先が器用。

時々、時計や扇風機の修理をしている。

好き 機械いじり

嫌い 精神主義

マチルダ

所属 第七艦隊特別陸戦隊戦車部隊

イギリス製マチルダ Mk I 戦車の車魂。

別名『マチルダ姫』『戦場の女王』。

いつも、尊大な態度をとっているが、これは生まれつき。

その態度や高貴な振る舞いから近寄り難い印象を受けた為、友達がいなかった。日本に来て、最初はそうだったが、三笠や金剛など

の助けでなんとか克服した。

一人称は  
「わたくし私」

好き 紅茶 イギリス 日本

嫌い 共産主義 スターリン

次号へ

車魂（後書き）

薩摩「そう言えば、最近更新が遅く有りませんか？」作者「うーん、バイトで忙しいから、昼間は書く暇無いんだよね。」春日「その代わり、昼間に構想を練ってるんだろ？」作者「はい。」マチルダ「と、言うことで、ご意見ご感想、お待ちしておりますね。」作者・薩摩・春日「勝手に終わるなー！」

## 福本の悩み

7月10日 薩摩艦内長官室

福本

「はあ~~~~m(\_\_\_\_)m」

机の上にある、縦に積まれた書類を一枚一枚丁寧に処理していく。そして、やっと最後の十枚程になった時、その一枚を見た彼の表情が変わった。それは、諜報部の近況報告である。書いてあるのはアメリカの国内報告だった。

どうやら、アメリカ政府は日本が中国からほぼ手を引いたのに、未だ日本を警戒している様だ。

福本

「.....」

いや、それだけでは無い様な気がする。

福本はそう思った。

中国を餌に戦争に引きずり込み、日本を叩き潰す積もりだったのが、自分の主張のせいで、瓦解したから、次の機会を狙っている様だ。

福本

「はあ~~~~.....」

ため息を一つ吐くと、立ち上がり、窓から外を見た。そこからは、マチルダと話す、薩摩や土佐などの面々が見えた。笑顔が絶えない。

いつも、笑っている。

みんな、薄氷の平和ながらも楽しそうに過ごしている。

ふと、思った。

アメリカの艦魂達も、同じ様に過ごしているのだろうか？

こんな風に、姉妹で、友で、仲間で……過ごしているのだろうか？

ズキリ

その途端、心が痛みだす。もう、慣れてしまった痛み……けれど、慣れてもいけない痛み……。

士官学校に入って直ぐ考えた事……。

果たして、自分は戦争になった時……人を撃てるだろうか？

それが、自分は艦魂が見えると知って、また考えた。

果たして、自分は彼女（艦魂）達を撃てるだろうか？

艦隊司令に着任しても未だ悩み続けている。

今や艦魂Ⅱ人の構図が自分の中で出来てしまっているから、余計だ。戦争で、命を奪い合うのは当たり前。

しかし、自分はそんな事をしたくない。

福本

「はあ……」

本日、何度目か判らないため息を吐く。  
アメリカ政府は何を考えているのか？

日本政府も、天皇も、国民も、軍人も、艦魂も、誰も戦争なんて望んでいない。もしかしたら、アメリカの艦魂や国民も戦争なんて望んでいないのかもしれない。

けれど、アメリカ政府の一部の人間が、自らの欲望や傘下企業の利益の為に、望みもしない戦争を初め様としている。

これで、自分達の戦争が正義の戦いだと言ってれば、戦争に正当性も出て、士気も揚がるだろう。

しかし、戦争は結局、悲しみと憎しみのしか生まない。

人命と、利益とを秤にかけて選べと言われたら、自分は人命を選ぶ。悲しみと憎しみしか生まない戦争を見れば、利益なんて、とれない。

福本

「はあ〜」…」

日進

「福本？」

福本

「おわっ！」

日進

「な、何も驚く事無いじゃないでしょ。」

福本

「お、驚きますよ！ 誰も居ないと思ってたんですから。」

日進

「それより…：あんだ、まだ、迷ってるの？」

福本

「……はい……」

日進

「で、答えは見つかった？」

福本

「いいえ……もしかしたら、答えなんて無い、問題なのかもしれない  
せん……」

その後、

「気分転換して来ます。」と言って福本は司令長官室を出て行った。

数分後 呉鎮守府内臨時連合艦隊司令部

山本長官

「どうしたんだい、日進？」

日進

「あのバカの事で悩んでるの。」

山本長官

「あのバカ……ああ、福本の事が。で、なんで悩んでいるんだ？」

日進

「福本はね、戦争を理由に人を…艦魂を殺したく無いのよ…。」

山本長官

「……………」

日進

「あいつ、人や艦魂に直ぐ感情移入しちゃうんだよ。だから、誰でも優しいんだよ。それこそ余程、嫌いな奴以外は優しいよ……。だから、見たことも無い癖にアメリカの艦魂や人に感情移入して、いつも迷って苦しんで……。ねえ、高野…私達は何が出来ると思う？」

山本長官

「日進…多分我々が出来る事は少ない…それにこれは福本自身の問題だ…私達が手伝っても本人の迷惑になる…福本自身で答えを見付けるしかないよ…。」

次号へ



## 福本の悩み（後書き）

次号は時系列を一年、進めます。ご意見ご感想をお待ちしております。

## 第二次世界大戦の経過と演習前夜

### 第二次世界大戦途中経過

1940年

5月10日

ソ連軍、ポーランドに侵攻開始。これを受け同日、イギリス、フランスがソ連に宣戦布告。

5月28日

ポーランド東部都市ブレストでソ連の傀儡政権。ポーランド人民共和国が樹立。

6月10日

ソ連軍、ポーランド全土をほぼ占領。

6月14日

ソ連軍、ポーランド北部ドイツ領東プロイセン・リトアニア地方に侵攻。同日、ドイツもソ連に宣戦布告。

8月22日

ロンメル少将率いるドイツ陸軍の奮闘も虚しく、東プロイセン・リトアニア地方から連合軍撤退。

9月7日より

ソ連・フィンランド国境上空においてソ連軍機による越境侵入が頻発。

9月27日

ソ連軍機、フィンランド軍陣地を越境攻撃。  
この日より、フィンランド軍との空戦激化。

10月18日

ソ連軍、フィンランドに侵攻開始。

1941年

3月1日

ソ連、フィンランドと休戦講和。フィンランドなんとか独立を保つ。

同日、フランスで政変。急進左派人民戦線（社会党系）が政権を奪取。フランス、連合国を離脱。数日後、ソ仏中立条約調印。

4月1日

ソ連軍、ギリシャ王国に侵攻開始。

同日、イタリアもギリシャ王国に侵攻。イギリス、ドイツに宣戦布告。

5月20日

ソ連軍、ギリシャ王国全土占領。

6月21～22日

21日深夜、ソ連軍空挺部隊がクレタ島に降下。

なお、ソ連軍がクレタ島を占領したのは7月12日。

そして日本では……

1941（昭和16）年 7月1日 夕方 横須賀軍港 戦艦薩摩  
艦内司令長官室

遠地

「いよいよ、明日は演習だな。」

福本

「ああ。張り切るか？」

遠地

「当たり前だ。また、金剛さん達と撃ち合っただ、演習相手に不足なし！」

福本

「そう言えば、皆張り切ってるな。福田や楠木や…沖田まで張り切ってるな。なんでだ？」

遠地

「そりゃ、当たり前だ。自分の思い通りにやれるんだ。張り切るしかないよ。」

福本

「それだけか？」

遠地

「後は……そうだな、あんまり無様な姿をお前や上に見られたくないんだよ。」

福本

「なるほど。それは良いんだが……張り切って事故だけは起こさない様、皆に伝えておいてくれ。」

遠地

「おう、わかった。」

そう言っ出て行く遠地と入れ換わりに入って来たのはマリダ。

マリダ

「2人で何話してたの？」

福本

「明日の演習、皆張り切ってるって言う話。」

マリダ

「確かに、皆張り切ってるね。」

福本

「だから、事故だけ起こさない様になって遠地に言っといた。」

マリダ

「そうね……なんか眠いや、明日に支障が出ると大変だからもう休む。おやすみ。」

福本

「ああ、おやすみ。」

次号へ

**第二次世界大戦の経過と演習前夜（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

演習ⅠⅠ 1

7月2日 横須賀軍港

演習前の数時間。

司令長官室に居ても仕方ない、と軍港内を散歩する福本。勿論一人で。

たまたま、正門の方に向かうと、衛兵2人と誰かが口論している。ほっといても、どうにも成りそうに無いので、止めに入る事にした。

福本

「おい、どうした？」

衛兵1

「あ、これは……散歩中でしたか？」

福本

「ん、ああ。で、この騒ぎは何だ？」

衛兵2

「は、実はこの女性が、自分は海軍省より許可を得た新聞記者で、今回の演習取材する為に来た、と言っているのですが……」

福本

「なるほど……」

そう言って、その女性記者を見た福本の第一声は……

福本



「……中学生ですか？」

女性記者

「違います！」

そう言わざるおえないような顔と身長……。

女性記者

「それに、ちゃんど海軍省からの許可書も有るんですから！」

そう言つて、ごそごそと鞆から一枚の書類を取り出す。

それを受け取つた福本。

演習の取材は一ヶ月前の打ち合わせ会で聞いている。その時に、許可書類の見本を見ている。

だから、書類の要点もわかっている。

福本

「（ふむ、海軍大臣と海軍省広報部の判子が有るな。）なるほど、偽物じゃあないね。」

女性記者

「当たり前です！」

福本

「ああ、すみません。大丈夫、本物だ。入れて構わないよ。」

衛兵1

「わかりました。」

数時間後……

小笠原諸島近海

戦艦薩摩を先頭に、戦艦、空母、巡洋艦、駆逐艦を従え、南下する。既に、六隻の空母の飛行甲板では、艦上機の暖機運転などの作業をしている。

戦艦薩摩艦橋

マリーダ

「大介、沖田君がいつでも行けるって。」

福本

「やる気満々だな……。偵察機から報告は？」

福田

「いいえ、まだです。」

今回の演習は表向き、前回同様混成による艦隊で演習。違うところは新型艦による混成で有ること。

裏の目的は、第七独立機動艦隊の総合演習である。

ちなみに、第七艦隊は未だに『訓練』艦隊と表記されている。

福本

「やて……」

「あの〜……。」

いきなり、別の声が聞こえたので、声のした方を向くと……

マリーダ

「ちょ、あ、あなた誰?!」

「わ、私は……」

福本

「あ、朝の新聞記者。」

福田

「新聞記者?」

福本

「今回の演習の取材。」

ジント

「けど、取材は小澤艦隊の方では?」

ラフィール

「うん、そのはず……。」

全員が、女性記者に目を向ける。  
本人も…物凄く困っている。

福本

「ま、大丈夫でしょう。どうせ、検閲でヤバそうなところは削除さ

れるんだ。マリダ、すまないけど、この女性記者さんを……」

女性記者

「あ、自己紹介がまだでしたね。私は尾崎春奈です。」

福本

「では、尾崎さん。このマリダに案内してもらってください。マリダ、後よろしく。」

マリダ

「了解。」

次号へ

演習ⅠⅠ 1 (後書き)

薩摩「今回の話って、何かのパクリですか？」作者「某マンガを参考にしたのは事実。」土佐「パクリだ。」春日「ところで、次号は？」作者「次号は、第七艦隊空母四隻の登場です。」土佐「ご意見ご感想をお待ちしております。」

## 演習ⅠⅠ 2

第七艦隊空母部隊旗艦『剛龍』艦橋

士官

「偵察機より報告！ 『我、小澤艦隊発見セリ。戦艦6、空母4、重巡洋艦6、軽巡洋艦4、駆逐艦多数。』」

沖田

「いよいよですね。ヴィル君、各艦の状況は？」

ヴィル

「各艦、発進準備完了。いつでもいけます。」

沖田

「わかりました。それでは攻撃隊全機発進して下さい。」

士官

「了解。」

飛行甲板に並んでいた、艦上機が次々とエンジンを始動させる。

ドウッ！

準備のできた零戦25型からカタパルトによって発進して行く。これに続き、99式艦爆、97式艦攻が同じ様に発進して行く。

そして、編隊を組むと小澤艦隊に向かって行った。

「頑張つてね」

一人の少女が剛龍の防空指揮所に居た。  
彼女が剛龍の艦魂、剛龍である。

沖田

「おいおい、剛龍。これは訓練だよ。」

剛龍

「けど、攻撃しに行く事には変わりませんよ?」

沖田

「まったく……。」

「そうですよ、姉さん。」

いつの間にもやら、出てきた少女。

彼女は、剛龍の妹、豊龍である。

ヴィル

「あの、豊龍さん。あなたも、いつになったらそのメイド服を着替えるんですか?」

豊龍

「そ、それは、海龍姉さんの……。」

「うん？ 私が何？」

豊龍

「海龍姉さん！」

沖田

「海龍、また、お前か…。」

海龍

「あら、あれは私の趣味ですよ。」

ヴィル

「趣味はいいんです。問題はそれで他人を巻き込む事ですよ。」

海龍

「ああ、そっち。」

「ごめんなさい。お姉ちゃんがまた迷惑かけてしまって。」

沖田

「大変だね、神龍。」

神龍

「はい、大変です。」

戦鷹

「なんか…半分、お祭り騒ぎね…。」



勇鷹

「あはは、そうだね。。。」

と、その時……

『敵偵察機、レーダーにて探知!』

沖田

「みんな、自艦に戻って下さい!」

一時間後……

戦艦薩摩艦橋

士官

「レーダーに反応。敵攻撃隊、来襲!」

福本

「全艦、対空戦闘用意! 空母を中心に、輪陣形を形成、来襲した敵機に対応します!」

遠地

「さーて、一年前と違つところを見せてやる!」

福本

「艦隊直衛隊は、半数は敵制空隊に、半数は敵攻撃隊に向けて攻撃してください!」

士官

「敵攻撃隊、接近！」

福本

「全艦、各個で撃ち方始め！」

次号へ

## 演習ⅠⅠ 2 (後書き)

薩摩「あれ？ 何時もの登場人物紹介は？」作者「実はその事でお知らせ。この『演習ⅠⅠ 2』からの登場人物&兵器は『異世界日本近代史』第七独立機動艦隊奮戦記』 登場人物&兵器集』にて紹介致します。」土佐「何ですか？」作者「このまま行くと、戦争が始まる前に、100話に成っちゃうんで……あと、書くのが面倒なんで……。」春日「個人的過ぎだ。」作者「頑張って書きますから許して〜。」勇鷹「ご意見ご感想、待ってるよ〜。」

## 演習ⅠⅠ 3

空襲から一時間後……

福田

「先輩。被害判定が出ました。」

福本

「お、ありがとう。」

そう言って判定結果を見る。

判定結果

空母

剛龍 爆弾一発命中。被害軽微。

豊龍 爆弾一発命中。被害軽微。

海龍 爆弾一発命中。被害軽微。

神龍 爆弾二発命中。飛行甲板損傷。修理可能。

戦艦

薩摩 爆弾二発命中。被害軽微。

土佐 魚雷一発命中。速力若干低下。

伊豆 爆弾・魚雷一発ずつ命中。

他、数艦に至近弾などで被害を出すも、軽微。

福本

「損害は、軽微だな。」

福田

「はい。これより空母に護衛を付け離脱させようかと思いますが…。」

「

福本

「そうしてくれ。遠地、お前の出番だぞ。」

遠地

「おっ！」

その頃、小澤艦隊では……

士官

「被害判定が出ました。」

小澤長官

「ありがとう。……うむ……。」

被害判定

空母

赤城 爆弾三発命中。飛行甲板使用不能。火災発生。

加賀 爆弾四発命中。魚雷二発命中。速度低下。飛行甲板使用不能。火災発生。

飛龍 爆弾一発命中。

戦艦

長門 爆弾三発命中。被害軽微

陸奥 爆弾二発命中。被害軽微。

金剛、比叡、榛名、霧島  
爆弾一発命中。被害軽微。

その他、被害有るも省略。

小澤長官

「…第二次攻撃隊は出せそうかね？」

土官

「無理でしょう…赤城、加賀は飛行甲板がズタズタです。飛龍、蒼龍は被害は軽微ですが艦載機が足りないそうです…。」

小澤長官

「第一次攻撃隊も合わせてもか？」

士官

「はい。第一次攻撃隊自体の被害も凄いそうです。」

小澤長官

「そうか…仕方ない、空母は退避だ。後は、戦艦達に任せよう。」

数時間後……

福田

「小澤艦隊、レーダーにて探知。」

福本

「全艦砲戦用意。指揮は遠地砲術参謀に任ず。」

遠地

「了解。指揮預かります。」

嬉しそうに遠地は指揮を預かる。

福本

「さて、行きますか！」

次号へ



演習ⅠⅠ 3 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 新聞報道

砲戰結果……

### 第七艦隊

戰艦

薩摩 40cm砲彈十發命中。砲塔一基損傷。

土佐 40cm砲彈十發命中。

伊豆 36cm砲彈十發命中。

伊賀 36cm砲彈十發命中。

春日 36cm砲彈八發命中。

日進 36cm砲彈八發命中。

### 小澤艦隊

長門 43cm砲彈八發命中。速度低下。

陸奥 43cm砲彈十發命中。砲塔一基損傷。

金剛 38cm砲彈十發命中。後部砲塔使用不能。

比叡 38cm砲弾八発命中。速度低下。

榛名 38cm砲弾十発命中。前部砲塔使用不能。

霧島 38cm砲弾十二発命中。砲塔一基損傷、沈没。

他艦の損傷は省略。

福田

「先輩、演習終了だそうです。」

福本

「そうか、全艦横須賀に向けて進路をとれ。それと、皆、お疲れさん。」

一週間後……

呉軍港 早朝

福本

「ふわっ、ん、ヴィルか？」

ヴィル

「あ、おはようございます。福本長官。朝の散歩ですか？」

福本

「ああ、そうだ。ウイルスは…新聞？」

ウイルス

「はい。日本のことを知るには、新聞が一番ですから。」

福本

「そうか、じゃあ、早いけどちょっと読んじゃお。」

ウイルス

「あはは、そうですか。けど自分が先ですよ。」

福本

「どうぞ、どうぞ。」

そうやって、ウイルスは新聞を見た瞬間……

ウイルス

「え、えエエエエ!!」

福本

「うお！ ど、どうした？」

慌て、新聞を見ると……

福本

「な、なにイイイイ！」

1時間後……

連合艦隊旗艦 長門

宇垣参謀長

「長官！ 山本長官！」

山本長官

「どうしたんだね、宇垣君？ アメリカが宣戦布告でもしたかね？」

笑いながら冗談を言っていた。

宇垣参謀長

「なに、恐ろしい冗談を言ってるんですか。これ、これを見て下さい！」

そう言って、新聞を渡す。

その頃、第七艦隊旗艦 戦艦薩摩

朝も早い時間から、第七艦隊全体は大騒ぎ。

なんせ、いつの間に撮られたのか、演習時の福本長官の写真が一面でかかと掲載されてるは、他にも何人が写真に撮られているから、自分が写ってないか兵員が探していた。

長官室

沖田

「大変な事になっちゃいましたね。」

福田

「あ、遠地先輩。先輩が写ってますよ。」

遠地

「お、福田。お前も写ってるぞ。」

薩摩

「あ、マリダさんも写ってますよ。」

マリダ

「あ、ほんとだ。」

千歳

「私は？」

土佐

「まだ見付かりませ〜ん。」

……長官室に集まって、自分が写ってるか探していた……。

福本

「一体、どうなってるんだ〜。完全に検閲が入っていてもおかしくない写真だぞ〜。」

そう言った瞬間……

山本長官

「ふむ、良い写真写りではないか。」

福本

「や、山本長官！ い、いつの間にか？」

山本長官

「ついさっき、日進に転移させてもらったのだ。」

福本

「そうですか……て、この新聞は何なんですか?!」

山本長官

「ああ、その事なら、先程米内さんに聞いたら、米内さんが許可したそうだ。」

福本

「米内海軍大臣の仕業ですか!」

山本長官

「まあ、良いではないか。これで君は、有名人だ!」

福本

「山本長官！ 他人事だと思つて〜。」

その頃、海軍軍令部の一室。

福本の写真が載る新聞を、怒りに震えながら見ている柿宮少将が居た。

柿宮

「何故だ？ 何故あいつが新聞に載るんだ？ 俺は親が貴族院議員で、金持ちで、有能なのに……何故だ？」

そう言つて、新聞をビリビリに破いて、丸めて捨てる。

柿宮

「何故、あの、平民で、無能で、異端児で、おかしい事しか言わない奴が、俺より早く新聞の一面に載らなきゃ、ならんだー！」

そして、彼は机の電話の受話器をとり、電話しはじめた。

柿宮

「ああ、私だ。例の件だが多少予定を早めよう。これ以上、福本に荒らせたく無いからな。」

次号へ



## 新聞報道（後書き）

日進「最後の場面は一体何なんだ？」作者「流石に、ネタバレするから言えません。」春日「ご意見ご感想をお待ちしております。」

## 連絡将校

8月31日 呉軍港

戦艦薩摩司令長官室

福本

「ふむ…軍令部からの派遣か。」

「はい。」

福本は一人の青年士官と、話していた。

福本

「まあ、遠いところをご苦労さん。お昼頃に紹介するから、部屋で休んでいてくれ。」

「分かりました。失礼します。」

そう言つて、青年士官は長官室を出て行った、直後に遠地が入つて来た。

遠地

「軍令部からつて、本当か？」

福本

「聞き耳たててたのか……本当だ。」

遠地

「怪しいな。俺達を監視する為に軍令部が派遣したんじゃないのか？」

福本

「あるいは、別の目的か……ま、考えてもしょうがない。」

遠地

「ほつとくのか？」

福本

「ああ、下手に騒げば、向こうが警戒するからな。その内、向こうからボロを出すさ。」

数時間後、艦内会議室

福本

「と言う訳で、軍令部から連絡将校として、赴任して来た、新澤武志大尉だ。」

「新澤武志です。よろしく。」

簡単に自己紹介。

参謀や戦隊司令はニコニコ笑っている。

しかし、新澤が自己紹介を終え、会議室を出ると、直ぐ真剣な顔になる。

福田

「先輩を嫌っている、軍令部が、連絡将校を派遣するなんて、妙です  
ね。」

沖田

「どうせ、柿宮先輩が、長官を見張る為に送り込んだんだろう。」  
そう言つと皆、うんうん、と頷く。

福本

「まあ、何が目的にしろ、皆、普段通り接してくれ。あまり警戒し  
ない様に。」

福田

「先輩の命令ですから、従いますけど……何故ですか？」

遠地

「こいつは、向こうがボロを出すのを待つつもりなんだよ。」

マリーダ

「大介らしいわね。」

福本

「と、言う訳で、皆よろしく。それでは解散。」

「「「「了解。」」」」」

福本

「さて、昼寝しよ〜。」

沖田

「自分も、明日の訓練の打ち合わせを…。」

マリーダ

「私も、用事があるし…。」

次号へ

**連絡将校（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 陰謀

11月25日 深夜 某所

「少将殿、やはり自分は賛成しかねます。」

「少尉、自分が何を言ってるかわかっているのかね？」

「わかっています。しかし、こんな事をしたら、日本は滅びます！」

「何を言う！ 福本中将のやっている事は、日本を駄目にして  
んだぞ！」

「そうだ。奴を野放しにすれば、今の軍制度が崩壊しかねん！」

「自分はそう思いません！ それよりも今の日本の軍制度が時代遅  
れだと思います！」

「な、なんだと！」

「自分はい先日、陸軍の友達に誘われて演習を見てきました。新

型戦車を多数揃えての演習でした。」

「それがどうした？」

「友達は言っていました。海軍の福本中將が上層部に意見具申してくれたから、戦車が大量配備出来たと。」

「一体、何が言いたい！」

「福本中將のやり方は多少荒っぽいかもしれませんが、やっている事は間違っていない、と自分は考えます！」

「貴官は騙されているんだ、少尉！」

「なら、少將はクーデターの後、何を為さるんですか？」

「……………」

「お答え下さい！」

「……………少尉、考えは変わらんか？」



「はい。」

「……仕方ない。少尉、君には……！」

気が付くと、小石が飛んで来た。

それを間一髪で石を避けたが、少尉は居ない。

「探し出して殺せ！ 計画がバレる訳にはいかん。」

その場に居た人間が、拳銃を抜き、探し始めた。

「はあ、はあ、はあ……」

何とか、自慢の足で、逃げ切る事が出来たが、いつまでも、こっちは  
してられない。

「ちて、どじ……」

チャキン

はっ、と後ろを向くと、そこには、拳銃を構えた一人の男。

「先輩……」

「少尉、考えは変わらないな？」

「先輩こそ判っているはずですよ！ 少将殿がやるつもりでいる事が、間違っている事を！」

「……………」

ガチャ

「すまん……」

ズダーン！

「始末して来たか？」

「はい。」

「死体は？」

「海に捨てました。抜かりは有りません。」

「そうか、流石だな。」

「……………」

「うーん……は！」

目が覚めると、天井……軍艦の医務室の中に居た。

「ん、目が覚めた？」

「はい……ところでここは何処で、あなたは誰です？」

「私は、第七艦隊潜水艦部隊の司令兼艦長、ニーナ・シュトルベス。階級は大佐。そしてこの艦は、機密に属するから詳しくは言えないけど、第七艦隊の潜水艦よ。」

「第七艦隊!…痛 (<|>)」

二一ナ

「大丈夫? 貫通銃創だけど無理は出来ないよ。」

「ありがとうございます…ところで艦は何処へ?」

二一ナ

「訓練を終えて、呉に帰還中。福本長官に用が有るならまだ時間があるから、ゆっくり休んだら?」

「はい、そうします。」

次号へ

## 陰謀（後書き）

この少尉の正体は次号で分かります。ご意見ご感想をお待ちしております。

## 陰謀発覚

11月29日 呉軍港

第七艦隊旗艦戦艦薩摩艦内長官室

福本

「な、なんだとー！　そ、それは本当なのか?!」

福田

「は、はい…。」

事の起こりは、一時間前に、訓練で出ていた二丁艦長指揮下の潜水艦が帰還信号として送った電文の最後の行の言葉。

『伊豆の海にて怪我した侍を拾う。』

まあ、意味そのまま。

詳しく聞くため、第七艦隊専用回線で聞いたら。

『詳しくは言えない。ただ海軍病院にて話す。個室を護衛付きで用意して欲しい。』

まあ、それぐらいはいいだろう、と思って用意した。そして、潜水艦が到着し、事情を訊いたら……

「3日前、伊豆半島で空気入れ換えの為に浮上中、浮かんでいた、海軍将校を発見した。右脇腹を撃たれていたが、貫通しており命に

別状なし。」

そして、最初に戻る。

福本

「今すぐ、長門の山本長官に連絡しろ！ 緊急事態発生！ 呉海軍病院にお出で願う！ 宇垣参謀長と黒島参謀も同行されたし！ 急げー！」

この言葉が波乱の始まりと言つべきか？

とにかく、海軍病院へ……

一時間後 海軍病院の一室

個室の中には八人の士官がベッドを囲むように居た。

「は、始めまして、海軍少尉、石田幸村です。」

ちよつと緊張気味な様だ。

福田

「申し訳ないが石田少尉、何故君は、伊豆半島の近海で漂流していたのかね？」

石田

「その事で、皆さんに来て頂いたんです。実は……」

福本

「柿宮の大馬鹿鹿野郎！ そんなに俺が嫌いなら、正々堂々と言いに来やがれ！」

遠地

「柿宮が嫌いなのは知ってたが……まさかその挙げ句がクーデターとは……」

マリーダ

「だいたい、今の軍制度やなんやらに問題が有るから大介が変えようとしてるのに……何処まで無能なのよ！」

宇垣参謀長

「その上、山本長官や米内大臣まで辞任させようとは……。」

福田

「先輩！ 先手必勝です！ 柿宮少将とその取り巻きを今すぐ、逮捕しましょう！」

黒島参謀

「いや、今は動かない方が良い。」

福田

「何故ですか！？」



山本長官

「果たして、彼らは、私や米内さんを辞めさせるだけだろうか？」

福田

「え…？」

福田

「俺は陸軍にも敵が居るからな…。」

福田

「…あ！」

遠地

「柿宮の事だ。陸軍の方にも手を回している筈だ。」

千歳

「柿宮の奴、そこらへんの頭の回転は早いからね。」

マリーダ

「しかも、未だ陸軍には宇垣首相、永田陸軍大臣、石原参謀総長を辞めさせようとする勢力も居るし。」

黒島参謀

「だから、動けない。」

福田

「じゃあ、このまま指食わえて見とけ、と言っんですか！」

福田

「馬鹿。表向きは知らないふりして、裏で動くんだよ。」

福田

「ああ、なるほど。」

福本

「石田少尉、君の護衛は、第七艦隊陸戦隊が受け持つ。安心して、傷を治してくれ。」

石田少尉

「はい、ありがとうございます。」

次号へ

## 陰謀発覚（後書き）

次号はクーデター…しかも日にちが……。ご意見ご感想をお待ちしております。

## クーデター

12月8日 帝都 早朝

まだ、夜も明けきらぬ時間に行動する一団。  
しかも、トラックで移動している。  
この一団が向かう場所、そこは……

「各隊、準備完了しました。」

「よし、初めてくれ。」

「は。」

午前6時、配置に就いて居た分隊、中隊規模の部隊が首相官邸、参謀本部、陸軍省、警視庁、海軍省・軍令部などの制圧目標に殺到、短時間で制圧した。  
一ヶ所を除いては……

柿宮

「どうですか、辻中佐？福本中将の鼻を空かした気分は」

辻中佐

「いや、良い気分ですな」

辻中佐……あの悪名高い独断専行男の辻政信中佐である。もちろん、陸軍の中で一番、福本を嫌っている。

「中佐、陸軍省制圧完了したそうです。」

「同じく、参謀本部も制圧しました。」

そんな彼らに次々、朗報が入る。しかし……

「た、大変です！」

柿宮

「どうした？」

「海軍省・軍令部周辺に中隊規模の部隊が展開しています！」

辻中佐

「な！」

「ぞ、続報です！海軍省・軍令部に展開する部隊には、戦車が二両います！」

柿宮

「そんな馬鹿な！ 一体何処の部隊だ?!」

海軍省・軍令部

マチルダ

「まあ、まあ…私達を見て驚いていますわね」

大沢

「そりゃ、そうだろね。」

マチルダ・大沢達は今、クーデター部隊と対陣中である。読者はこれでお分かりだろう。

海軍省・軍令部に展開しているのは第七艦隊陸戦隊である。もちろん、陸戦隊の戦力はもつといる。

ただ、早く展開できる部隊から展開した為、今は中隊規模しか居ない。

マチルダ

「ま、攻めて来ても、私が優雅に撃退して差し上げますけど」

大沢

「動かすの、僕なんだけど…。」

密かに突っ込みつつ多少焦りを感じていた。後続部隊は、まだだろうか？

その頃 晴海埠頭では……

フェルデナント

「揚陸後、集結できた部隊から予定通り配置に就け！ 急げー！」

フェルデナントの周りには忙しさの剩り右往左往する将兵。

集結を完了した歩兵部隊、砲兵部隊がトラックや牽引車に乗り込み配置場所に急ぐ。

戦車部隊も負けじと、揚陸艦から発進すると、無線で僚車を確認し、分隊・小隊単位で配置場所に向かって行く。

フェルデナント

「全く…福本長官も中々意表を突いた作戦を考えますね。」

そう言うと沖にいる旗艦を見た。

その頃 旗艦薩摩艦橋

艦橋の中は……一触即発の状況だった。

回想

10分前

ダン！

新沢

「福本長官！」

福本

「うん？　なんだ、新沢大尉？」

新沢

「あ、あれは何ですか！」

そう言つて、揚陸中の陸戦隊を指差す。

福田

「……見りゃあ分かるだろう。」

新沢

「そうではありません！　なんで、陸戦隊が揚陸しているんですか？！」

福本

「それは……一番君が判っているのではないかね、新沢大尉？」

新沢

「な……！……！」

マリーダ

「どつやら、図星の様ね。」

その瞬間

カチャ



新沢大尉は正対している福本に銃を向けた。

そして、現状は……

物凄い緊張状態にある艦橋。

新沢

「いつ、本官が見張り役だと気が付かれたんですか？」

福本

「監視役だと思ったのは君が配属された日から、確信を持ったのはつい最近。」

新沢

「やはり、油断出来ないお人だ……。」

福本

「次は、こつちから質問だ。何故こんな馬鹿げた事を仕出かした？  
こんな事をすれば日本中が大混乱に陥るだけじゃない。対米戦になれば日本は焦土になるぞ！」

新沢

「それは……長官が統帥権を潰そうと……。」

遠地

「馬鹿者！ 統帥権を内閣に移譲するのは、今までの陸軍の暴走を考えた結果だ！」

福本

「それに、ろくに対米戦を考えず、現場を考えず、国力を考えず、

大戦略を考えない輩が多すぎる！」

マリーダ

「それに、軍令部は、艦隊決戦で勝てると思ってるらしいけど、それだけでは勝てない時代よ。」

千歳

「陸軍にも、精神主義だけで勝てると思っている輩が居るらしいけど、大馬鹿ね。」

福田

「大尉、貴官に問う！ 貴官が守りたいのは、国と国民か？ それとも自分の利益と体制と組織か？ どっちだ！」

完全に孤立している大尉。

その時……

尾崎

「あの〜、皆さん一体何が……！！」

新沢

「な、なぜ、民間人がここに……！」

何が起こっているか、判らず、艦橋に上がったら騒動が起こっている場面に来た新聞記者と、何故、民間人が居るのか判らない大尉。そして、福本はこの瞬間を見逃さなかった。

福本は常に携帯している愛用の軍刀を抜き、新沢の右手にある拳銃に向かって斬りつけた。

これに対し、新沢は何も出来なかった。

いきなり現れた尾崎に気をとられ狙いを外し、その隙を突いて、福

本が斬りつけてきたのだから、対応出来る筈がない。  
結局、新沢は福本に拳銃を撥ね飛ばされ、怯んだところを取り抑えられた。

福田

「どつします?」

福本

「縛って、猿ぐつわ噛ませて、物置に放り込んでけ。」

次号へ

## クーデター（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 自滅への道

午前7時 陸軍省

陸軍省に司令部を置いたクーデター部隊。  
しかし、刻一刻と状況は悪くなっていった。  
海軍省・軍令部以外の制圧は完了している。  
しかし……

「たいへんです！ 零戦が飛来しています！」

柿宮

「ち、福本の奴だな。と言う事は展開している部隊も第七艦隊陸戦隊だな……」

報告では次々に陸戦隊が配置に就いている。

こちらの最大武器は重機関銃。

しかし、向こうは戦車、山砲、速射砲、高射機銃、迫撃砲などなど重火器を投入している。

その上、零戦などの艦上機で制空権を完全に掌握された。

東京湾には、戦艦薩摩以下計六隻の戦艦が定位置に付き何時でも砲撃可能だ。

それだけではない。

10cmカノン砲、15.5cm榴弾砲が陸戦砲兵隊によって配置しており、こちらも何時でも砲撃可能だ。

つまり福本の回答はこうだ。

抵抗するなら一地区を吹っ飛ばす。

しかし、柿宮にはまだ逆転可能だと思っていた。

天皇と言う名の切り札が……

さて、何故第七艦隊（陸戦隊を含め）がタイミング良く、帝都に現れたのか？

実はギリギリまで、クーデターの日時が不明だった。しかし、ボロを出したのは向こうだった。

7日の夜中に、新沢大尉が電文を使い、第七艦隊の状況を報告した。その返電が……

『了解。大化の改新を実行する。動きがあれば阻止せよ。』（文章は別の艦が傍受したもの。）

この返電により翌日だと判断した福本は、直ぐ様、横須賀を出港、晴海埠頭に陸戦隊を揚陸させた。

陸戦隊が居たのは翌日に硫黄島で上陸訓練をする予定だったからだ。

549

その頃 海軍省の一室

臨時に措かれた鎮圧司令部では、宇垣首相、米内大臣、石原参謀総長、永田大臣、そして、第七艦隊の関係者が集まっていた。

宇垣首相

「それでは、今すぐにも鎮圧は可能なんだね？」

フェルデナント

「はい、陸戦隊は何時でも攻撃可能です。向こうの兵力は二個大隊から一個連隊程。こちらは、一個師団ですから十分有利です。」

福田

「第七艦隊も既に砲撃可能です。これに艦上機を合わせれば、クーデター部隊を全滅可能です。」

米内大臣

「しかし、そうはしないんだろ。福本中将？」

福本

「はい。クーデター部隊の全てが、辻中佐の偽造命令書によって動いていると思われます。ですからちよつと揺さぶれば、投降して来るでしょう。」

石原参謀総長

「ところで、誰が揺さぶるのかね？」

全員

「……………」

……沈黙。

実際、福本や米内大臣、宇垣首相が揺さぶっても良いのだが、柿宮や辻中佐が何かの形で妨害するに決まっている。と、なると……………」

マリーダ

「陛下しかいませんね……………」

遠地

「なら、膳は急げだ！ 急いで陛下の身柄を……………」

ヴィル

「た、大変です！」

ヴィルが部屋に飛び込まんばかりに入って来た。

遠地

「どうした？」

ヴィル

「偵察機より、報告！ クーデター部隊、皇居を包囲中！」

遠地

「ち、遅かったか！」

フェルデナント

「いえ、まだ間に合います！ 近衛連隊と連絡をとって、奪回すれ……長官？」

皇居が包囲されているにも拘らず、考え込む福本。

マリイダ

「どうしたの？」

福本

「いや…なんで近衛連隊が動かないんだろう？ と思って。」

全員

「え？」



「それは、私が居ない事を知っているからです。」

全員が声がした方を向くとそこにいたのは明子天皇だった。

明子天皇

「クーデター発生の報を聞いて、直ぐ様、皇居に居た全員を避難させたんです。」

福本

「なるほど、そう言う訳ですか。」

遠地

「じゃあ、奴らはもぬけの殻を包囲しているのか。こりゃ、傑作だな。」

宇垣首相

「これで、役者は揃った様だな。」

福本

「はい。福田、フェルデナント、ヴィル！」

3人

「はい！」

福本

「これより、瓦解作戦を開始する。配置に就け！」

3人

「了解！」

次号へ

## 自滅への道（後書き）

次号で終結（の予定）。さて、100話までに戦争に入れるかな？  
ご意見ご感想をお待ちしております。

## クーデターの終結

それは、唐突に起きた。

周りを海軍陸戦隊の一個師団に囲まれ、空には零戦が舞い、東京湾の戦艦がここを狙っている状況のなか、クーデター部隊は、昼食をとっていた。

ほとんどの兵が、これが最後の食事だろうと思っていた。

彼らは、辻中佐の命令書に従って行動しただけで、クーデターなんて知りもしなかった。

これでは、何の関係もないのに、死ぬだけである。

そう思うと、兵士達の気分は重かった。

その時……

『……部隊に……つ……クーデター部隊に……』

ラジオ放送が突然、呼び掛けに変わった。

その声は聴いたら忘れる事のできない天皇の声。

明子天皇

『クーデター部隊に告ぎます。もし、このクーデターが間違っていると思うなら、今すぐ原隊に戻りなさい！』

柿宮

「くそ、福本の奴め！」

陸軍省でラジオ放送を聴いていた柿宮は、焦っていた。

これで切り札はなくなった。  
さて、この状態からどう逃げ出そうか、と思っていた柿宮に、ラジオは追い討ちをかけた。

明子天皇

『私は個人的に統帥権を考えてみました。明治に出来た統帥権は大正までは良かったでしょう。しかし、昭和に入り、この統帥権を自分勝手に解釈し、独断専行を行い、果ては軍内で、陸軍内、海軍内で内輪揉めを起こす事になりました。』

今や誰もがラジオに聞き入っている。

明子天皇

『しかし、そんな中でも、国を思い、国民を思い、立場の違いを越え、間違いを正し、国を守り、繁栄させようと努力する人達が居ます！しかし、このクーデターは、自らに有利な体制や、保身、利益など、国民の事を考えない、愚かな輩が起こした反乱です！もし、間違っていると思うのなら、20分の猶予を与えます。今すぐ、投降しなさい！』

最後は半場、叫び声になっていた。

明子天皇

『最後に、あなた方を待っている人は居ますか？守りたい人は居ますか？私が願うのは、平和であり、人々の笑顔であります。無事を願う人々に…笑顔を。』

海軍省

福田

「天皇陛下の想いは伝わったでしょうか？」

福本

「伝わったさ。後はこのまま無事に終わってくれたらいいんだが…」

陸軍省

柿宮

「くそ！ ヤバい、ヤバいぞ…。」

先程のラジオ放送で、兵士達は動揺している。士官の一人が見に行っている。

ラジオ放送を止めることも出来ただろうが、兵士が妨害しただろう。

ドタドタドタ

廊下が騒がしい。

士官の一人が様子を見ようとドアを開けた瞬間……

ボカ！

入って来た兵士に、銃床で殴られた。

柿宮

「き、貴様ら！ 何のつもりだ!？」

士官

「柿宮少将、あなたを拘束させて頂きます!」

柿宮

「馬鹿な! 貴様らの何処にそんな権限がある?」

士官

「そんなのありません! しかし、あなたは陛下の意思に背いたではありませんか!」

柿宮

「く……………」

士官

「連れて行け!」

20分後…………

フェルデナント

「長官! 各部隊より連絡! クーデター部隊、次々と投降して来ます」

福本

「そうか! 良かった」

福田

「陸軍省に本部を措いていた柿宮少将、辻中佐も逮捕できましたか

らね。」

福本

「よし、作戦終了。後片付けに入ろう。」

次号へ



## クーデターの終結（後書き）

ところで、真田少尉を撃つた人物は誰なんですか？ 次号は『償いの方法』ご期待ください。 ご意見ご感想をお待ちしております。

## 償いの方法

『本日発生しました、クーデターは、陛下の説得により、一人の怪我人を出すこと無く、鎮圧しました。次の……』

鎮圧のニュースを聞いた後、ラジオのスイッチを切った。まあ、予想はしていたから別にいいのだから……。

「ちとと……。」

既に覚悟は出来ている。

そう、言いそうな顔であった……。

海軍省

福本

「で、柿宮はなんて？」

遠地

「相変わらず、自己中心的な発言だった。」

福本

「そうか。」

クーデターの後片付け（？）中の福本達。

既に、4時頃になっている。

遠地

「な、一つ気になる事があるんだけど。」

福本

「なんだ？」

遠地

「大谷は…何処に行つたんだろうか？」

福本

「そう言えば、居なかつたな……。」

大谷とは、福本達の同級生の大谷良治大佐である。彼は、柿宮の取り巻き達の中では良識派で、柿宮とその取り巻き達が傲慢なのに対し、一人だけ信頼できる人物であった。今は、柿宮に引つ張られ、柿宮の相談役兼参謀だった。

福本

「ん？ 福田、何してるんだ？」

福田

「あ、先輩方。実は人を探しております…。」

遠地

「人？ 誰だよ？」

福田

「はい、真田少尉を撃つた人物が、判明しまして…。」

福本

「で、誰だったんだ？」

福田

「はい、先輩方の同級生、大谷大佐だと判明しまして…。」

遠地

「あれ？ 大谷は射撃の成績は良かった筈だけど…？」

福田

「はい。だから本人に訊いてみようかと思いましたが…。」

福本

「……………まさか！…遠地、大谷の家は？」

遠地

「？浅草だけど…。」

福本

「福田、車を用意しろ！ 急げ！」

福田

「は、はい！？」

車中

遠地

「お、おい、福本！ 一体どうしたんだよ？」

福田

「そうですね、先輩！ どうしたんですか？」

後部座席から遠地が、運転座席から福田が訊いてくる。

福本

「なあ、遠地。大谷って責任感が強かったな？」

遠地

「ん、ああ……まさか！」

福田

「まさか、死ぬ気とか！」

福本

「そうかもしれない。だから急げ！」

キキイイイ！

福本

「大谷！ 勝手に入るぞ！」

遠地

「おいおい。」

そう言って、玄関からズカズカと（もちろん靴を脱いで）進んで行

く。

そして、居間に入ると……

3人

「!!!!!!!!!!」

今まさに、自らのこめかみに拳銃を突き付け、自決しようとしている大谷がいた!

福本

「馬鹿野郎!」

直ぐに拳銃を取り上げようとするが、大谷も抵抗する。

大谷

「!離せ!」

福本

「離せるかい!」

これに、遠地、福田が手伝い、何とか拳銃を取り上げた。

遠地

「なんで、自決なんかしようとした?!」

大谷

「……後輩殺した上に、クーデターを起こして、陛下に叛いたんだから、償うのは当たり前だ……」

バキイ！

福本の平手打ちが大谷の左頬に命中。

福本

「大馬鹿野郎！ なにが『償い』だ？ ふざけるな！」

そう言つて襟首を掴む。

福本

「償いの方法なら幾らでも有る！ なのに、何故短絡的に死を選ぶ？ 何故だ！」

遠地

「そつだよ、大谷。死んで償う事は無いよ。しかも真田少尉は死んで無い。ちゃんと生きてるよ。」

福田

「そつですよ、大谷先輩！あなたの様な、有能な方を死なせては、帝国にとって大きな痛手で有ります！」

大谷

「………わかつた……。」

結局、大谷の証言により、12月15日迄に、軍人、政治家、民間

人、合わせて40人以上の人間が逮捕された。本土は即日。満州、台湾など、外地の人間は多少の時間はかかったものの逮捕された。結果、改革反対派は完全に沈黙した。

次号へ



## 償いの方法（後書き）

次号は12月16日の話です。ご意見ご感想をお待ちしております。

12月16日

12月16日 呉軍港

日本中の国民と軍人と全艦魂が注目する中、五隻の戦艦、二隻の空母、二隻の重巡洋艦が新たに配備された。

ラジオ放送

『本日、新たに配備された戦艦大和に今、山本長官が乗り移りましと同時に、将旗が翻りました。新たな連合艦隊旗艦は長門から大和になりました……。』

新沢

「良かったんでしょうか？大和を一般公開して。」

福田

「ま、全てを全て公開している訳じゃあないし、これでアメリカが戦争を諦めさせる狙いも有るんだ、構わないだろう。」

千歳

「それにクーデターの後なんだから、国民にも嬉しい話題の一つ位良いんじゃない。」

さて、史実では戦後まで国民に知られる事が無かった戦艦大和。それを、この世界では国民に……いや、世界中に公開した。

まあ、反対もあつたが、一週間前のクーデターでそのほとんどが逮捕され、残つた反対派も沈黙した。公開の理由は、アメリカに戦争の意図を放棄させる、天皇陛下がクーデターの不安を払拭するためだ。実はこの前後に噂された事だが、艦魂が見える福本中将が大和の艦魂の願いを聞いて、公開したとか、しなかつたとか…。

#### 戦艦大和 会議室

「大和以下八名、本日より連合艦隊に配属されました。これからよろしく願ひいたします！」

長門

「配属、確認しました。新旗艦、大和！」

大和

「はい！」

返事をして、一步前が出る大和。

長門は、陸奥から旗を受け取る。

長門

「これは、連合艦隊艦魂長官旗です。連合艦隊旗艦の艦魂が受け継いできたものよ。」

そう言い長門が長官旗を大和に渡す。

受け取つた大和は思った。それほど重い筈ではないのに……重い。

長門

「重い？」

大和

「はい…。」

長門

「私も、初めて持った時は重たく感じたわ。」

そう言つて長門は一步下がる。

長門

「大和新長官に、敬礼！」

長門達の敬礼を、大和は返礼で応える。

長門

「次、播磨。」

「はい。」

播磨が一步前が出る。

薩摩が第七艦隊長官旗を新長官の播磨に渡し、引き継ぎ式終了。

比叡

「よし、宴会だ！」

福本

「まだ、準備が……」

大和

「じゃあ、かんぱい。」

『かんぱい。』

福本

「はや！」

次号へ

12月16日(後書き)

ご意見感想をお待ちしております。

## 第七独立機動艦隊出撃！

1942（昭和17）年 2月4日午前4時 呉軍港

まだ起床ラッパには早い筈なのに、動いている艦隊がいる。そして艦隊は比較的音を出さない18ノットで航行しながら、静かに呉を出港して行った。

二時間後……

第七艦隊旗艦 播磨艦橋

ジント

「長官。瀬戸内海を抜けました。」

福本

「全艦に通達。総員配置を解いて下さい。」

ラフィール

「了解。」

福田

「先輩。交代ですよ。」

福本

「ん、そんな時間か。じゃあ、後は頼んだ。」

福田

「了解。」

マリイダの部屋

マリイダ

「はあ〜〜……。」

「どうしました？ マリイダ様？」

マリイダ

「河内か……。うん、ちょっと複雑なのよ。」

河内

「複雑……ああ、仲介の件ですね。」

マリイダ

「うん。このままだと、私のせいで日本が戦争に巻き込んだ事になっちゃうし……。」

河内

「福本様が言っていましたけど、あまりお気になされない方が良くないと。」

「そつだよ、マリイダ。戦争になるのは、どの道時間の問題だったんだから。」



河内

「和泉、微妙にフォローできてませんよ。」

和泉

「ありゃ、これは失礼。」

上甲板

尾崎

「はあ〜〜。」

クーデターを直に取材した次は、戦争に従軍取材。大丈夫だろうか？

「尾崎さん」

ボフ！

尾崎

「近江ちゃん？ 何してるの？」

近江

「ネタ探し」

尾崎

「良いね、不定期新聞は……。」

近江

「あと、作者から伝言。『状況説明よろしく』で。」

尾崎

「うそ！ そんなの有り?!」

有り！ つーか、君、新聞記者でしょ？

尾崎

「うう……。」

尾崎

「え〜と、そう言う事で、状況説明を行いますね。事の始まりは、昨年の12月23日。マリィダさんの実家のある、第六大陸で起きました。」

近江

「第六大陸には、ダリア・エステロール連合王国の他に、二つの国があります。一つは、サブルム帝国。もう一つは、ヴィントラント王国です。」

尾崎

「近年の10年間は、両国は友好関係にありましたが、昨年12月23日、サブルム帝国がヴィントラント王国に侵攻。もちろん、圧倒的兵力差に国境守備隊は撤退しましたが。」

近江

「態勢を整えたヴィントラント王国軍は、1月7日、レーゲン平野

で両軍が激突。」

尾崎

「有利に思われた、ヴァイントラント王国軍。しかし、近代兵器を揃えた、サブウム帝国軍に敗退、これを切っ掛けに、国土の4分の3を失う事になりました。」

近江

「これに対し、ヴァイントラント王国の同盟国、ダリア・エステロール連合王国は停戦を提案。まあ、聞いてもらえませんでしたけど。」

尾崎

「困った、連合王国は同盟国の日本に助けを求めた訳です。これに対し日本は天皇の言葉も有り、これを承諾。」

尾崎

「早速、サブウム帝国と停戦仲介を行った訳ですが、相手にされないどころか、馬鹿にされた訳で。」

近江

「更に、停戦を進めてきた天皇を馬鹿にされた、日本政府は謝罪を要求。現在も交渉中。」

尾崎

「で、いざ戦争に備えて、第七艦隊が派遣される事になりました。」

近江

「これで、読者には解ったかな？」

次号へ

**第七独立機動艦隊出撃！（後書き）**

ご意見感想をお待ちしております。

開戦！

2月24日 サブルム帝国領海内

第七艦隊旗艦 播磨艦橋

ジント

「長官！ 外務省から連絡。つい先程、サブールム帝国に宣戦布告書を渡したそうです！」

福田

「いよいよ、開戦ですね…。」

遠地

「ああ、腕が鳴るぜ。」

「失礼します。」

福本

「神谷大佐か。何かね？」

神谷

「はい。偵察機より報告です。『目的地に目立つ動きなし。』」

福本

「そうか…、よし！ マリーダ、空母部隊に連絡。第一次攻撃隊発艦せよ！」

マリーダ

「了解！」

福本

「千歳航海参謀。進路そのまま。遠地、対艦対地艦砲戦用意。」

千歳・遠地

「了解！」

空母部隊旗艦紅龍

ヴィル

「沖田司令。福本長官より連絡。『開戦なり第一次攻撃隊を発艦せよ。』」

沖田

「わかった。あと、全艦放送に切り替えてくれ。」

搭乗員待機所

『諸君。長官の福本だ。昨日、最終交渉が物別れで終わった事は周知の通りだが、つい先程、帝国政府はサブム帝国に宣戦布告を通知、開戦となった！』

ザワザワと騒がしくなる待機所。

福本

『これより我が艦隊はヴィントラント王国との共同戦線に成るが、諸君達の活躍が多いだろう。』

活躍が多い、と聞いて喜ぶ搭乗員達。

福本

『まあ、あまり長く訓辞をするのも悪いから、最後にしよう。特に搭乗員に聴いて欲しい。絶対に死ぬな！諸君達のような、若く有能で未来のある人間を育てるのは、一朝一夕で出来る事ではない！機体は棄てても構わない。最後の最後まで生きる事に努力してほしい。これに伴い、自決や自爆を厳禁する。これは私だけではない、山本五十六連合艦隊司令長官及び天皇陛下のご意志でもある！』

全員、真剣な表情になる。

福本

『最後になったが、民間人及び住宅地、民間施設、病院などの民間人の生命・財産に対する銃爆撃も厳禁する。これもまた、山本長官及び天皇陛下のご意志である。それでは諸君達の活躍を期待する。以上だ。』

全員が敬礼すると、直ぐ様、艦内放送で『総員搭乗。掛かれー！』  
と言われ、待機所を出て行った。

ヴィル

「アリソン！」



アリソン

「あ、ヴィル！ どうしたの？」

ヴィル

「いよいよ、出撃だね！」

アリソン

「なぐんだ、私を心配して来たのね。大丈夫！ 初出撃で撃墜なんかされないって！」

クレア

「そうですねよ、ヴィル君。アリソンさんは簡単には落とされませんよ。」

「そうですね。なんせ、僕らが居るんですから。」

「そうそう。大佐殿は大船に乗った気分ですんで下さい。」

クレア

「吉田中佐、片山少佐。ちょっと威張り過ぎね。腕は認めるけど。」

吉田

「別に威張るつもりはないんですけど。」

片山

「これは、すみません。」

ヴィル

「じゃあ、皆さん、アリソンをよろしくお願いします。」

クレア

「了解。」

吉田

「分かりました。」

片山

「お任せあれ。」

ドン！

カタパルトから次々と艦上機が発艦して行く。

そんな姿を、紅龍の防空指揮所から見ると、長身で髪長の一人の少女。

「皆様、お気を付けて…。」

沖田

「やはり、心配か…紅龍？」

紅龍

「はい…。」

「お姉ちゃん…。」

紅龍

「あら、白龍。どうしたの？」

沖田

「白龍も心配なんですよ。ね？」

白龍

「うん。」

沖田

「大丈夫ですよ。必ず、無事に戻って来ますよ。」

次号へ

開戦！（後書き）

作者「緊急募集します。「金剛」何をだ？」作者「実はキャラネタが少なくなりまして。「遠地」おいおい、備蓄分はどうした？」作者「ほぼ、無くなってもうたわ！」薩摩「ありやありや。」作者「と、言うことで、読者の皆様に広く募集します！」土佐「もちろん、ご意見ご感想もお待ちしております！」

## 本拠地奇襲！

午前8時10分

サブールム帝国海軍本拠地 サームイール軍港

朝の起床ラッパを聞き、起き始めていた将兵の耳にサイレンが響き渡った。

最初の一報は飛行場にある見張り台からの有線電話からだった。

兵士

『南の空から、飛行機の大編隊が接近中！』

士官

『今日、飛行隊の派遣は聞いていないぞ。見間違いじゃあないのか？』

兵士

『あ！ 国籍表示が見えました。えーと…赤い丸？』

士官

『ば、馬鹿な！ 日本軍機が何故ここに居るんだ！？ついさっき、宣戦布告したばかりだぞ！』

士官2

『そんな事はどうでもいい！ 早く警報を鳴らすんだ！』

第一次攻撃隊隊長機 97艦攻

艦攻搭乗員

「大宮隊長。どうやら奇襲成功の様です！」

大宮

「よし、信号銃をくれ、合図を出す。」

信号銃を受け取ると、キャノピーを開き、信号弾を放った。

アリソン機

信号弾：一発！

奇襲攻撃。

確認したアリソンは無線を取ると指示を出す。

アリソン

「戦闘機隊、飛行場銃撃！我に続け！」

クレア

『了解！』

吉田

『よーそろー！』

片山

『承知!』

3人の返事を聞くとそのまま降下。

降下すると、駐機場にはF2バッファロー、P39エアコブラ、P40ウォーホークが一行に並んでいる。

サイレンを聞いて待機所からパイロットが機体に向かうが、もう遅い!

アリソン

「いけ!」

ダダダダ

パパパパ

ボカーン!

ゴワーン!

爆発するP40とP39を見ながらアリソン達、戦闘機隊は銃撃を続ける。

99艦爆隊

艦爆搭乗員

「大熊兄貴! 戦闘機隊は派手にやってますよ!」

大熊

「そつだな。よし! 艦爆隊全機、作戦通りに二手に別れて攻撃を

開始！ 俺に続け！」

『おう！』

一隊は飛行場へ、一隊は軍港へ。

大熊

「よしやあ！ あの格納庫を狙う！」

高度3000mからのほぼ90度の急降下爆撃！

キヤヤヤヤン！

格納庫から無事な機体を出そうとしていた整備員達はこの音を聴いて一目散に逃げて行く。

そして、高度1000m程のところ……

大熊

「よーい、てええい！」

カチッ

ヒュユユウ……

ズガン！

大熊

「よし、命中！」



あちこちで、黒煙が上がる。

97 艦攻隊

大宮

「全機突撃！」

雷装の97艦攻が停泊している五隻の戦艦に対し攻撃を開始した。敵戦艦からの対空射撃は……無い。

大宮

「よし、良いぞ！……てえー！」

チツ

サバン

シヤアアア……

ズドドーン！

艦攻搭乗員

「やりました！ 命中、命中です！」

大宮が振り向くと、次々に命中を意味する水柱が確認できた。しかし、外側の戦艦は撃沈できても、内側の五隻は撃沈できない。その時……

ヒュユユウ……

ストーン！ ストーン！ ストーン！

雷撃隊の離脱を見計らって高度3000mで待機していた水平爆撃隊が必殺の800kg 爆弾を命中させる！  
これには、内側の五隻も黒煙を吐いている。

大宮

「任務完了！」

クレア機

何回目かの銃撃を終え、一度上昇したクレア搭乗の零戦25型。上空から見回すと、あちこち黒煙だらけである。ふと、北の空を見ると、黒点がポツポツと見えた。彼女は直ぐに無線を掴むと、無線に叫ぶ。

クレア

「全機銃撃中止！ 北からお迎え委員会の皆さんの登場よ。」

それだけ言うと、直ぐに優位に立つため上昇する。高度4000m程のところまで水平飛行に移る。敵機はP40、20機程の編隊。

彼女は

「我、突撃する。」と無線に言うと、急降下で降下し、あらかじめ

決めていた一機に銃撃する。

ダダダダ

パパパパ

そのまま降下しながら、一瞬振り向くと、主翼を折られ、降下していくP40が一機。

撃墜確定だ。

仲間が撃墜され混乱しているところに、後続の零戦8機が襲い掛かる。

クレア

「よし、もう一度。」

そう言うと、彼女は敵編隊に襲い掛かった。

艦長

「急げ、急げ！ 早く逃げるんだ！」

兵士

「了解！」

奇襲を受け、軍港から脱出しようとする、サブム帝国海軍戦艦『ザイリス』『リバルス』の二隻。

二隻は、比較的湾の出入口に近い所に停泊しており、航空攻撃からは逃れる事ができた。

だが……

兵士

「艦長！ 前方にて、敵戦艦！」

艦長

「なに！」

第七艦隊 第二戦隊旗艦薩摩

士官

「司令、前方に敵戦艦！」

楠木

「偶然とはいえ、鉢合わせになるなんてね……。」

第二戦隊は戦艦薩摩、土佐、伊豆、伊賀、春日、日進で編成された戦隊である。今回、福本直率の第一戦隊（戦艦播磨、河内、摂津、近江）と共に、湾内に侵入、大陸側にある北側の飛行場及び港内施設を砲撃する作戦である。

サムイル軍港は大陸にUの字形になった湾に出来た軍港である。まあ、鹿児島湾と桜島を大きくした物と考えるとくれれば良い。

島側の飛行場はほぼ破壊したが、大陸側の飛行場は艦砲射撃で破壊しようと言っているのである。

薩摩

「どつします、楠木さん？」

楠木

「福本先輩や遠地先輩には悪いけど、砲撃で沈めます。対艦砲戦用意！」

ちなみに第一戦隊は反対側の出入口から侵入している。

士官

「敵戦艦、発砲！」

ズバーン！

士官

「遠弾です。」

楠木

「初弾から下手くそね。日本海軍の腕を見せてあげなさい！」

士官

「てえー！」

前方に展開している薩摩、土佐が発砲する！

戦艦ザイリス

兵士

「遠弾です。」

艦長

「次弾急げ！ 撃つてくるぞ！」

兵士

「て、敵戦艦発砲！」

ズバーン！

兵士

「な！ 初弾から夾差です！」

艦長

「馬鹿な！ アメリカ人の話だと日本人は猿だから、日本軍の技量は低い筈だぞ！ そんな奴等が初弾から夾差なんて…あり得ない！」

兵士

「敵戦艦発砲！…うわー！」

ズバーン！

3時間後

第七艦隊旗艦播磨艦橋

マリーダ

「全機、全艦損害なし。」

福本

「そうか、良かった。」

遠地

「惜しかったな。楠木に対艦戦をやられたぜ。」

福田

「大丈夫ですよ、先輩。まだまだ、出番はありますって。」

次号へ

本拠地奇襲！（後書き）

作者「改めて、緊急募集です。」土佐「前話でも募集したんじゃないですか？」作者「えーと、キャラ募集の件ですが、艦魂のキャラ募集を特に募集します。もちろん、一般キャラも募集しますので、よろしく願います。」千歳「ご意見ご感想もお待ちしております。」



## 陸上戦闘（前書き）

本日、4月7日は戦艦大和が沈んだ日です。祖国を…家族を…日本の未来を守ろうとした英霊の皆様の冥福を祈って…敬礼。

## 陸上戦闘

尾崎春奈氏 取材ノート（抜粋）

日本軍被害

これと言って無し

サブム帝国軍被害

戦艦10隻が撃沈あるいは大破。

戦艦『ザイリス』『リバルス』薩摩・土佐の砲撃により撃沈。

撃墜 20機

地上破壊 160機以上

飛行場 二ヶ所 完全に破壊

港湾施設及び燃料タンク

大部分を破壊

5日後 2月29日

現サブム帝国領（旧ヴィントラント王国領）商港都市ミサリア近

郊の海岸

空爆により破壊されたトーチカの陰から様子を見る10人程の兵士達。

その視線の先には、戦車、カノン砲、榴弾砲、山砲、速射砲等を揚陸している日本軍がいた。

彼らを驚かせたのは、戦車、車両、大砲、人員が直接船から出て来ている事。

もうそろそろ引き上げようとした時……

チャキ

日本軍のパトロール隊に、捕まった。

海軍陸戦隊司令部

福本

「どうかね、揚陸状態は？」

フェルデナント

「順調です。まあ、敵から見たらどう見えるかは判りませんがね。」

そう言うのと、すぐ横を見る。

そこには偽装幕に覆われた戦車やトラック、弾薬等の物資があった。

その時、エンジン音と共に、双発の機影が見えた。

フェルデナント

「あれは…アメリカのB18ボロ爆撃機ですね。」

福本

「そうだな。大方偵察だろう。零戦が追っ払うさ。」

直ぐ様、零戦4機が飛んで来て、追っ払った。

福本

「さて、敵はどう判断するかな？」

ミサリア守備隊司令部

司令官

「それは本当か！」

参謀

「はい、敵は揚陸中で、戦力はそれほどでは有りません。」

司令官

「よし！ 司令部直衛小隊を除いた全部隊を出撃させろ！」

「お待ち下さい。この情報は怪しい、畏かもしれません。」

司令官

「何故かね、次席参謀？ 偵察機からの報告だぞ。」

「と言っても、戦闘機に追い掛けられながら報告した事です。余り

にも怪し過ぎる。」

参謀

「馬鹿な。有り得ない話だ。例え罠だとしても、日本人など猿の集団。武器も低性能に決まっている。」

参謀2

「そつだ！ だから奴等は奇襲で彼我の劣勢を補っているのだ。」

参謀3

「敵に見付かれば奇襲など出来ない。日本猿の集団などあつという間に殲滅してくれるわ！」

司令官

「と言うことだ。心配ない、次席参謀。」

「……………わかりました。しかし、もしも、と言うことも有り得ますので、部隊に同行させて下さい。」

司令官

「ああ、構わんよ。しかし次席参謀も心配性だね。」

「全く、馬鹿な奴等が多すぎる！」

先程、反論していた次席参謀こと、ランス中佐は文句を言いながら、廊下を歩いていった。

彼があれほど警告したのには理由がある。

実は彼、二年前に日本に行った事が有るのだ。

そんな彼が日本で感じた事……

日本人の教養の高さ 国土の豊かさ 歴史の深さ

京都に寄ってみたが、到底猿などごときが作れる物ではない、町や建築物。

ランス

「あれを油断と言わずとして、何を油断と言うのか……。」「

2時間後

出撃態勢を整えていた一個師団＋一個連隊は海岸まで後1時間の所で、奇襲を受けた。

最初の一撃は前を進んでいたM2軽戦車がいきなり爆発炎上した。

そして、驚く将兵の先には……マチルダを先頭にした戦車部隊の姿。

「よし！ 撃破！」

マチルダの車長、大島少尉の言葉に…

マチルダ

「これが私の実力ですわ！」

新沢

「いや、マッド・サイエンティスト野口のお陰だろ。」

突っ込む新沢。

大島

「何してる、次だ、次。」

新沢

「了解！」

サブム帝国軍の戦車連隊が距離を詰めようと前進するが、一式中戦車、一式中戦車改、一式機動速射砲、二式機動速射砲の猛射を浴びて、次々に爆発炎上する。

さて歩兵一個師団も猛攻を受けていた。

二式砲戦車の援護の下、陸戦隊は有利な状態で戦いを進めていた。

ランス

「何が猿の集団だ…ざまあ見やがれ！」

乗っていたジープの陰に隠れながら叫んでいた。

その頃、ミサリアでは……

参謀

「司令官！ 出撃部隊、苦戦しています！」

司令官

「馬鹿者！ それなら、こっちも大変だ！」

部隊の出撃で手薄になったミサリアは、陸戦隊の上陸用舟艇（大発）

による奇襲攻撃で大混乱になっていた。守備の為に残っていた二台のM2軽戦車は、陸戦隊の持っていた一式75mm対戦車噴進砲の攻撃を受け撃破。迎え撃った小隊もあっという間にズタズタにされた。

一時間後……

福田

「先輩。ミサリア守備隊司令部制圧。ミサリア解放しました。」

福本

「ご苦労様。向こうはどうなった？」  
マリーダ

「はい、ほとんどの部隊が投降あるいは退散しました。死者なし、負傷者は出たものの、軽傷です。」

福本

「それは良かったよ……。」

次号へ



## 陸上戦闘（後書き）

戦鷹「更新が遅いですね。」作者「すみません。大学生になったから、更新が遅くなります。」薩摩「で、次は？」作者「100話記念です！」春日「ご意見ご感想をお待ちしております。」伊賀「キャラネタの募集も続行中です。」

100話記念 花見のしながら大宴会！

作者

「ついにー！100話だぜ！」

遠地

「えらい、ハイテンションだな。」

福本

「ま、確かに。」

マリダ

「今日、私達は、京都の嵐山に来ています。」

千歳

「そう言えば、作者さんの大学も京都なんですってね？」

作者

「おう、京都市郊外だけだな。」

神童

「で、今日は？」

作者

「4月で、嵐山で、桜なんだから、花見だ〜！」

大和

「と、言ひ事では、ハハハはちゃんと持って帰りましょね。かんぱーい！」

『かんぱーい！』

作者

「うーん、何処かな〜？」

山城

「どうしたのだ、作者殿？」

作者

「いや、100話記念に3人程お呼びしたんですが……まだかな？」

「うう……ここなんだけど……。」

「花見客が多い……。」

作者

「おお、居ました、居ました。ここです。ここ……。」

作者、キョロキョロしている2人を発見、誘導。

播磨

「誰をお呼びになったんですか？」

作者

「お一人は『キティホーク・極東の The First Nay Jack』のヒロイン、キティホークさん、もうお一人は、神龍さんです。」

キティホーク

「キティホークです。よろしく。」

神龍（伊）

「神龍です。よろしく。」

神龍（新）

「え！ 私と同じ名前……護衛戦艦神龍のヒロイン、神龍さんですか？」

神龍（伊）

「ええ、そうよ。」

神龍（新）

「キヤー 私『護衛戦艦神龍』のファンなんですー！ サインしてください、握手してください」

キティホーク

「何ですか、これ？」

作者

「この世界では、他の先生方の作品を許可とって小説化してるんですよ。」（設定上）

金剛

「ちょっと待て！ まさか、この展開は……」

「はっはっはっ！ 待っていたかね、可愛子ちゃん達 可愛子ちゃんは愛でるのがモットーの大和の登場だ！」

マチルダ

「誰ですよ、あの方は？」

大沢

「艦魂界では、ブラックリストに入る位の変態艦魂、大和（伊）だつて。」

新沢

「何を言うか！ 貴様の様な変態を誰が待っているか！」

福田

「新沢、あんまり言い過ぎんなよ。」

大和（伊）

「男に用は無い！ 用が有るのは可愛子ちゃんだ！ さあ、私と一緒にハアハアしようではないか！」

全女性士官

「キヤーー！」

全艦魂

「来ないでー！」

新沢

「く、撃てえ！」

遠地

「何を撃つねん！」

突っ込まれた、新沢。

まあ、実際人が多すぎて、拳銃も小銃も使えない。

作者

「ふっふっふ、馬鹿め！ 元剣道部員を舐めるな！ こんな事も有ろうかと、準備万端！ 迎撃隊、掛かれー！」

作者は持っていた無線機に叫ぶ。

『了解！』

返事と共に前に躍り出る4つの影。

福本

「ん？ 海龍に、豊龍に、伊豆に、伊賀？」

大和（伊）

「ふ、私を4人で止めようなどと……！！！」

余裕の顔をしていた、大和（伊）。

しかし、向かって来る4人を見た瞬間、驚きの顔に変わる。  
何故なら……

4人

『大和（伊）様、ご奉仕します！（だニヤー）』

こう言いながら、大和（伊）に抱き付く、メイド服を着た海龍、豊龍、伊豆、伊賀。

作者

「どうだー！ 目には目を、歯には歯を、ハーレムにはハーレムを！ 夜寝ないで一時間かけて考えた変態迎撃隊、その名も『コスプレ歓迎戦隊』！」  
メイドハーシジョン

福田

「…生け贄じゃありませんよね？」

作者

「んな訳ないやろ！ 大体、みんな大和（伊）のペースに乗せられすぎや！」

マリーダ

「なら、逆にこちらのペースに大和（伊）を乗せれば良い、と？」

作者

「そー言う事。」

キティホーク

「ある意味、凄い作者ね…。」

遠地

「そつでなきや、こんな作品書かないよ。」

福本

「ま、うるさい奴が静かになつたし、再開だ！」

神龍（伊）

「賑やかですね、皆さん。」

神龍（新）

「それはそうですよ。皆が皆、若いし、ばか騒ぎ好きだし、仲良しだし。」

沖田

「はは、そこまで言われたら、反論のしようがないな。」

片山

「全くです。」

神龍（伊）

「ふふ、久し振りだわ、こんなに騒ぐ人達を見るのは…。」

勇鷹

「じゃあ、神龍さんもこっちに来たらいいよ！ 第七艦隊なんか、毎日こんなだから。」

薩摩

「こら、勇鷹。神龍さんが困るでしょ。」

土佐

「それに、神龍さんが来たら、設定が大変じゃない！」

勇鷹



「それは、作者さんがなんとか……」

作者

「絶対に無理！」

神龍（伊）

「ふふ、本当にここは楽しいところね。」

さて、こちらは大和（伊）と接待（？）中の海龍達。

海龍

「大和様、揉み具合はどうですか？」

豊龍

「あら、大和様。肩が物凄く凝ってますね。」

大和（伊）

「あ、もうちよっと右……そうそう、そこ……肩は本当に凝ってるの……最近、可愛子ちゃんとかんな風に触れ合ってないからな。」

伊賀

「まあ、普段はクールな大和様にも悩みはありますのね。」

伊豆

「大和様、デザートにカステラは如何かニヤ？」

大和（伊）

「ああ、貰おう。」

新沢

「凄いですね…完全にこっちのペースに乗っけてる…」

マリダ

「海龍の手腕なのか、作者の作戦が当たったのかは別にして……かなり本格的ね…」

実際、海龍達のコスプレは……

海龍〓チャイナ服メイド

豊龍〓普通のメイド

伊豆〓猫メイド

伊賀〓和風メイド（大正時代の女学生仕様）

新沢

「作者。まさかPC18禁ゲームをやってませんよね？」

作者

「やってませんよ。新沢少尉。あなた、次の戦闘で名誉の戦死に致しましょうか？」

新沢

「うげ！」

福本

「新沢、やってなくても、その質問は地雷だぞ……。」

金剛

「うむ、どう見ても、アメリカの艦魂には見えないな。」

山城

「確かに。特に髪が黒だとゆうのが意外だな。」

キティホーク

「よく言われます。」

播磨

「ところで、そちらの作品の日本の艦魂はどうなんです？」

キティホーク

「……………」

長門

「む、無理に答え無くていいから！」

金剛

「やはりか……………」

キティホーク

「すみません……………」

金剛

「いや、気にしないでくれ。元はと言えば、平和病とアメリカ依存症から治ろうとしない日本の責任だからな……………」

キティホーク

「はい……ところで三笠さんは今日、居ないのですか？」

長門

「残念だけど……その代わりに、春日さんと日進さん、山本長官がい  
らっしゃるわ。」

キティホーク

「アドミラル山本閣下がいらっしゃるんですか！」

大和（新）

「え〜と、丁度あそこで逆立ちしている人が山本長官です。」

キティホーク

「さ、逆立ち……？」

千歳

「山本長官、逆立ちが得意なのよ。昔、川舟で同級生と花見してた  
ら、いきなり逆立ちしたらしいわ。」

長門

「へえ〜、理由は？」

千歳

「そっちの方が綺麗にみえるから、だって。」

花見は続く。

だから、酒を飲む人間も出て来る。

近江

「山本お姉ちゃん。その缶ジュースに取って。」

大和（新）

「あ、これね。はい。」

近江

「ありがとう。」

そう言っただけジュースを受け取り飲む近江。しかし、缶の半分程飲んだところで……。

近江

「あれ？　なんか…視界が…回る？」

いきなりフラフラしだした近江。勢い余って……

バフ！

福本

「おっと、大丈夫か？　近江？」

近江

「あ、ごめんなさ〜い。福本お兄ちゃん。」

マリーダ

「ちよっと！　近江が酔ってるじゃない！」

播磨

「大和ちゃん、近江ちゃんは何飲んだの？」

大和（新）

「え、この缶ジュースだけど……」

そう言いながら、皆に缶ジュースを見せた瞬間……

播磨

「ちょ！ これお酒じゃない！」

作者

「おい、誰だ？ 缶酎ハイなんて買った奴は?!」

和泉

「ん？ 私だが？」

全員

『お前か！ 紛らわしい物買うんじゃないねえ!』

全員で、和泉に総突っ込み。

そんな事やっている間に……

近江

「あゝ、暑い暑い暑い……!」

そう言って、着ていた軍服の襟ボタンを外し、開襟する  
そして、そのままフラフラと歩いて行き……

近江

「ん、きゃー!」

大和（伊）

「ん、おわ!？」

大和（伊）の前で足が絡まりこけて、そのまま座っていた大和（伊）に受け止められる近江。

大和（伊）

「だ、大丈夫か？」

近江

「ふみ、大丈夫です。」

実はこの時の、大和（伊）は座っていないながら近江をお姫様抱っこ状態。

だから……

大和（伊）

「（うわ！ 襟ボタンが外れてるから胸が見えてる！ 案外、胸があるんだな……。）」

顔を真っ赤にしながらそんな事を思っていると……

近江

「？ 大和さん、顔真っ赤ですよ？」

そう言い大和（伊）の顔の覗き込む近江。

結果、胸を大和（伊）に押し付けることになり……

大和（伊）

「!!!!!!」

プバーー!

盛大に鼻血を吹き出した。

新沢

「な、なんだ?」

福本

「うわ! 大和(伊)が鼻血出してる!」

マリイダ

「ねえ、鼻血って言う量かしら?」

遠地

「そんな事いいから。衛生兵。衛生兵を呼べー!」

神龍(伊)

「大和さーん!しっかりしてー!」

近江

「大丈夫ですかー! 気を確かにー!」

沖田

「誰か! 担架も持ってこーい!」

……まあ、こんな事も起こりつつ、花見の1日は過ぎて行きました



ルカ。

次号へ

100話記念 花見のしながら大宴会！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 反撃の防衛線

4月8日

ミサリアより南西に1000kmサブウム帝国軍及びヴィントラント王国軍前線

ズダーン！ズダーン！ズダーン！

ヒューーン……

バゴーン！バゴーン！バゴーン！

サブウム帝国軍陣地より発射される75mm野砲の前にヴィントラント王国軍は沈黙するしかなかった。

「く、これでは攻めも退くも出来ない……」

そう言って、この塹壕で何度も見ている、空を見た瞬間……

グオーーン……！

通り過ぎる、飛行機の編隊……

## 第七艦隊零戦隊

アリソン

「全機、目的地に到着。攻撃開始！」

『了解！』

今回、アリソン達零戦隊は昨日完成した簡易飛行場から500kmを飛行して、ヴィントラント王国軍を支援する為に飛来したのである。

ギューーン！

突如現れた零戦に戸惑いを隠せないサブウム帝国軍兵士達も、爆弾を抱いて降下するのを見て慌てて逃げ出す！

アリソン

「よーい…てえー！」

チッ

ヒューーン…

ドカーン！ ドカーン！

たちまち、ヴィントラント王国軍を悩ませていた75mm野砲が陣地ごと吹き飛ばされる。

こんな光景がサブウム帝国軍陣地からあちこちで見られた。

「な…なんと…凄い…」

さつきまで自分達を悩ませていた野砲群が飛来した日の丸標示の飛行機によりあつという間に破壊されていく。

結果、サブム帝国軍の砲撃は止まった。

夕方

少年騎士

「カリン教官。昼間の空襲は誰の手によるものでしょうか？」

この部隊の隊長で、先程の空襲部隊を見ていた、カリン教官は答える。

カリン

「多分、空襲したのは日本軍だろう。だから、友軍はすぐ近くまで来ている。」

確証はない。しかし、わざわざ空襲したと言う事は、ここを見捨てるつもりが無いと言う事……。

まあ、こうでも言わないと士気が落ちてしまうからだが……。  
その時

少年騎士

「教官！ 教かーん！」

カリン

「どうした？ 敵か！」

少年騎士

「違います。ゆ、友軍です！ 日本軍が来てくれました！」

フェルデナント

「この隊の指揮官は誰でしょうか？」

移動指揮車として使っている一式半装軌装甲車（日本製ハーフトラック）から降りて、近くに居た少年騎士に訊いたが、周りを見るだけでも、このヴィントラント王国が弱体化している事は認めざるおえない。

なにせまだ16〜18歳の少年少女を戦場に出しているからだ。

フェルデナント

「（しかし、ここはマシな方だ。彼らは騎士学校の生徒達…他の方じゃ、右も左も解らない農民の少年少女を徴兵している位だ…。」

そんな事を思っていると…

カリン

「済まぬ！ 私がこの第120騎士隊隊長のカリンだ！」

そう言って走って来る年長者女性が見えた。

フェルデナントは、一瞬驚いたが、第七艦隊の状況とマリーダ参謀長のレクチャーで事前に知っていたので直ぐに応える。

フェルデナント

「初めましてカリン隊長。本官は第七艦隊陸戦隊指揮官のフェルデナント中将です。どうぞ、よろしく。」

カリン

「こちらこそ、援軍感謝する。」

翌日

フェルデナント

「それでは、昨夜打ち合わせた通りお願い致します。」

カリン

「うむ……しかし、僅か一個連隊程度でサブウム帝国軍三個連隊に敵うのか？」

フェルデナント

「ええ、十分です。まあ、任せて下さい。」

そう言うと、フェルデナントは無線に『全部隊進め！』と命じた。

サブウム帝国軍

兵士

「司令官殿。日本軍が来ます！」

司令官

「慌てるな！ たかが一個連隊。数は上だ！」

今回フェルデナント指揮下の一個連隊は歩兵二個大隊に戦車一個大隊編成。

これに対するサブルム帝国軍は歩兵二個連隊に戦車一個連隊編成。  
まあ、普通は敵わない。普通は。  
だが……

キヤーーン！

兵士

「！！！！ て、敵機！」

司令官

「なに！！！」

陸戦隊支援の為に現れた大熊中佐率いる艦爆隊である。

カチッ

ヒューーウ…

ズガーン！

兵士

「うわー！」

指揮官

「落ち着け！ 大丈夫、爆撃機など我が軍の戦闘機が……」



ポカーン！

は、と空を見た瞬間、指揮官は愕然とした。

制空の為呼んでいたP40、P39合わせて46機が、半分程の敵機に、一方的に追い立てられていた。これは、クレア率いる零戦20機が艦爆隊護衛兼対地支援の為に飛来したからである。

ダダダダ

ババババ

ドドドド

ドパーウ！ ドパーウ！

ダン！ ダン！ ダン！

パン！ パン！ パン！

双方、地上と空中で否応なく撃ちまくるが、数が多い筈のサブルク帝国軍の旗色が悪くなってきた。

零戦により制空権を得た日本軍は、大宮中佐率いる艦攻隊も投入、サブルク帝国軍を徹底爆撃した。

陸戦隊も、戦車や撃破した敵戦車を遮蔽物に使い、二式砲戦車、航空機、一式対戦車噴進砲、九七式自動砲（日本製対戦車ライフル）などの援護の下、着実にサブルク帝国軍を圧倒していく。

戦車に関してもM2、M3軽戦車を圧倒する。

それどころ、陸戦隊は日々の訓練で、戦車の弱点や協同が出来ているが、サブルク帝国軍はそういった事に皆無で、歩兵の援護無しで突出した戦車が陸戦兵にタコ殴りにされたり、戦車の援護無しで突出した歩兵部隊が戦車の榴弾射撃によりズタズタにされた。

歩兵同士の戦闘も、同じ事が言えた。

陸戦隊は部隊同士で、無線や手信号で連絡しあい、協力し、的確に

射撃するのに対し、サブム帝国軍は部隊勝手に行動し、連携がとれておらず、小銃も機関銃もただぶっぱなすだけでしかなかった。つまり、統制がとれていない。結局、兵数では圧倒しているのにも関わらず、統制がとれていない為、各個撃破され、無惨にも敗退するしかなかった。

### 三時間後

つい朝方まで、サブム帝国軍のだった陣地に、日の丸とヴィントラント王国国旗の甲冑騎士の旗がたった。そして、翌日。

そこから100km先の小都市『スカピア』を奪還した。こうして、ヴィントラント王国領土奪還が始まったのである。

次号へ

## 反撃の防衛線（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ヴィントラント王国の現状

『ヴィントラント王国国内状況』

(尾崎春奈氏取材ノートより抜粋。)

これは4月12日に『スカピア』にて第120騎士隊のカリン隊長から聴いた話を纏めたものである。

### ・内政

12年前に国王夫妻が国内視察中にサブム帝国軍と思われる一団に殺害(そう言われている)されてから内政は大混乱、あちこちで不正、治安悪化が頻発、そんな中でのサブム帝国軍の侵攻の為、内政瓦解寸前の状況。

地方内政にいたっては、地方を治める貴族の不正が相次ぎ、税の私財化、役人の不正・横暴など頻発した。皮肉にも、サブム帝国軍の侵攻により、占領された地域での貴族の不正はなくなったものの、状況は一向に改善していない。

それどころか、一部の貴族は、サブム帝国に寝返り甘い汁を吸っているそうだ。

### ・軍事

これも12年前から停滞。

国王夫妻が薦めていた軍の近代化も国王夫妻の死とそれに伴う保守

派の台頭により、白紙撤回された。

これにより、現在のヴィントラント王国軍の装備は戦車、機関銃、航空機など開発されておらず、装備も剣・サーベル、槍、旧式小銃と言つ有り様である。

ちなみに小銃見た福本長官は……

福本

「戊辰戦争の幕府軍装備で戦っていたのか……」

と語っていた。

現在日本軍はエステロール・ダリア連合王国軍と武器支援を検討中。兵士についても、レーゲン平野の戦いで、多くのベテラン兵を失つた為、騎士学校や、強制徴兵に頼っているのが現状。

・課題

現在のところ、ヴィントラント王国奪還が最優先事項だが、王国の将来を考えると、改革の必要があり。

但し、現状では到底無理な為、日本軍としては12年前に国王夫妻死亡と共に行方不明のお姫様の早期発見が必要だと、参謀長のマリーダさんは語った。

次号へ

## ヴァントラント王国の現状（後書き）

次号は久し振りに艦魂が出来ます。お楽しみに。ご意見ご感想をお待ちしております。

## 対潜水艦戦！

4月14日 ミサリア近海

駆逐艦『神波』 艦橋

神童

「ふう〜……。」

ちよつと溜め息を吐く神童。

実は、何か飲みたくなつたのである。

しかし、自分は艦長、我慢我慢、としていたところ……

「はい。」

そう言つて後ろから渡された硝子コップ。  
中身は…氷を入れた紅茶。

神童

「ありがと…!!」

「どういたしまして。」

渡した相手、それは……

神童

「福本長官！ マリーダ参謀長！」

あ、ちなみに、彼女は2人が乗っているのは知っているので、2人が居るのに驚いたのではなく、2人が紅茶を持って来たのに驚いたのである。

福本

「まあまあ、喉渴いてるんだろ？ 早く飲まない和不味くなるよ。」

そう言いながら艦橋要員に紅茶を配ってゆく。

神童

「すみません…。」

福本

「なぐに、気にしない気にしない。ちょうどなんか飲みたかったとこだし…神波、はい。」

神波

「あ、ありがとうございます」

さて、神波が何故こんな所を航行しているかとゆうと最近、この付近で潜水艦の出没が確認されているからだ。

確認されているだけでも二隻の潜水艦がいると思われ、つい2日前にも単独航行していた貨物船が、魚雷攻撃にあったものの、発見が早く、事なきを得た。

この報告を受けた福本は、一個駆逐隊だったパトロールを、一個水雷戦隊に変更、警戒強化に乗り出した。ちなみに、福本とマリーダがわざわざ、神波に出張った理由は、士気高揚と後学の為、そして



……

神童

「船団に用が有るんですか？」

福本

「ああ、野口博士設計の新兵器、『特野式内火艇』第一期生産、五両が野口博士と一緒に二等輸送艦（揚陸艦）に積み込まれてる。」

マリーダ

「で、水雷戦隊司令部に問い合わせたら、あなたの艦が輸送船団に最も近いって知ったのよ。」

神童

「で、私の…神波に乗り込んだと…ま、良いんですけど。」

福本

「ま、潜水艦が出たら頼むよ。」

神童

「お任せ下さい。」

数時間後……

士官

「長官！ 参謀長！ 艦長！ 大変です！」

神童

「落ち着きなさい。どうしたの？」

士官

「はい、第一護衛戦隊より入電！ 『我、浮上中ノ敵潜水艦ヲ捕縛セリ』以上！」

福本

「ほお、初出撃で初戦果とは……海上護衛総隊も幸先が良いな。」

第一護衛戦隊は空母『大鷹』を旗艦に、松型駆逐艦八隻で編成され、今回の輸送船団『ア01』船団五隻の護衛を受け持っている。なお、潜水艦捕縛の詳細は、対潜哨戒中の96式艦爆が浮上中の潜水艦を発見、搭載の60kg対潜爆弾を叩き込み潜航不能にし、事前連絡を受けたいた松型駆逐艦二隻がこれを捕縛したのだった。

マリーダ

「ま、これであと一隻だけど……もう浮上航行してないでしょうね。」

福本

「ああ、何かしらの形で知っているはずだ……長期戦になるな……。」

士官

「艦長。10時の方向、ア01船団と第一護衛戦隊です！」

そちらに双眼鏡を向けると空母と捕縛した潜水艦、五隻の船団を中心に八隻の松型駆逐艦が円陣を組んで航行している。

士官

「あ、発火信号です。『我、大鷹。貴艦ノ所属ヲ述ベヨ。』」

神童

「返信、『我、第七艦隊所属、駆逐艦神波ナリ。』」

福本

「ついでに、『第七艦隊長官ヨリ、護衛ご苦労様。』とも打ってくれ。」

士官

「分かりました。」

そう言つて担当士官が出て行く。

神波

「読んだ瞬間、驚きますね。」

福本

「要らぬお節介だったかな？」

神童

「いえいえ、向こうも喜ぶでしょう。」

マリーダ

「ミサリアまで、あと少し。このまま無事に……」

その時！

ソナー担当員

『こちらソナー室！ 魚雷発射管注水音並びに魚雷発射音を探知！』

兵士

「2時の方向より、魚雷二本接近！」

まさにこの二つの報告を背定するかの如く、進む二本の魚雷。狙いは…輸送船団！

神童

「機関全速、取り舵一杯！対魚雷戦、機銃撃ち方始め！」

ダダダダダ！

ドドドドド！

魚雷に向け唸る25、40mm機銃！

ズバア！

どちらの機銃かは判らないが、一本の撃破に成功する。残り一本……

士官

「ダメです。深いところを走っていて止められません！」

福本

「いや、大丈夫だ。船団も全速で退避してるし、松型が居るから迎撃できるだろう。」

神童

「ソナー室。敵潜水艦の位置は判る？」

ソナー担当員

『……ダメです。見失いました。』

士官

「艦長。魚雷は船団を逸れたとの事です。」

神童

「そう……けど、このまま輸送船団について行ってもらつ訳にもいけないし……。」

ソナー担当員

『ソナー室です。9時の方向に反応……敵潜水艦！ 距離300m！』

神童

「取り舵一杯！ 対潜水艦戦よーい！」

高速の駆逐艦はあつという間間合いを詰める。

ソナー担当員

『艦長。敵潜深度20、距離50！』

神童

「爆雷投下よーい……てえー！」

ザバン！ザバン！ザバン！  
ズバア！ズバア！ズバア！

神童

「ソナー室、敵潜は？」

ソナー担当員

「……敵潜浮上中！」

神童

「砲戦よーい！」

ズザアア！

福本

「どうやら、損傷して浮上した様だな。まさか砲戦なんか挑まないだろうな？」

挑んだところで勝てるわけが無いが。

士官

「あ、艦長！ 敵潜から発火信号、『我ニ投降ノ用意有リ。』！」

神童

「返信、『乗員ヲ甲板ニ集メヨ。変ナ動キヲシタラ発砲スル。』あ  
と、曳航準備！」

こうして、ミサリア近海を騒がせた二隻の潜水艦は捕縛され、ミサリアにおいての通商破壊は失敗に終わった。

次号へ

**対潜水艦戦！（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしています。

## 空襲阻止！

4月14日 スカピア近郊の飛行場

アリソン

「じゃあ、陸軍航空隊の派遣はもうちよと後になるのね？」

ヴィル

「ああ、陸軍第64戦隊並びに『かわせみ』隊の派遣は決定しているし、爆撃機、襲撃機の派遣を予定しているんだけど、ちよと時間がかかる様なんだ。」

吉田

「陸上部隊の方はどうなんですか？ いくら陸戦隊でも、戦線全部は無理ですよ。」

ヴィル

「陸上部隊は山下大将を総指揮官に3〜4個師団＋1個連隊を派遣するそうです。」

片山

「そうになると、大分楽になりますね。」

クレア

「じゃあ、後はどうやってサブルクム帝国軍をヴィントラント王国から追っ払うかね。」

ヴィル



「そうですね。」

その時……

ヴウーーーーー！

アリソン

「！空襲警報！？」

『レーダー室より、各戦闘機搭乗員に連絡！ 東の方向より敵爆撃隊が接近中！至急迎撃せよ！』

カタンカタンカタン……  
ブロロロロ……

アリソン

「ヴィル、敵爆撃隊はどっち向かってるって？」

ヴィル

「どうやら、街の方に向かってる！」

クレア

「都市爆撃するつもりね……皆！ 一機たりとも見逃さ無いでよ！」

『了解！』

片山

「整備員！ 発進出来るか？」

整備員

「何時でも行けます！ 少佐達の機体は最優先で整備しておりますので！」

吉田

「よし！ 直ぐ発進する！ チョーク外せ！」

整備員

「了解！ 中佐殿、ご武運を！」

直ぐ様、飛び上がったアリソン、クレア、吉田、片山。  
僚機も直ぐに上がって来る。

アリソン

「じゃあ、私と吉田中佐は戦闘機、クレアと片山少佐は爆撃機をお願いします。」

クレア

「了解。」

吉田

「分かりました。」

片山

「承知。」

さて、50機程上がって来た時……

片山

『こちら片山。敵爆撃隊発見。 10時の方向。』

アリソン

『了解。全機打ち合わせ通りに行動。攻撃開始！』

今回、サブلم帝国軍が送り込んだ爆撃隊は、P38が30機、B18爆撃機20機、B25爆撃機10機の編隊である。

P38は零戦より高速の為に闘牛の如く、立ち向かって来る。

迎え撃つは、アリソン、吉田率いる零戦隊30機。さて、空中戦は速さだけでは勝てない。

彼我の機体の短長所を知り、機体に合った戦法で戦い、なおかつ、パイロットの技量も求められる。

そう言った場合、零戦隊の方が有利だった。

まず、P38の性能及び弱点はイギリスを通じて知っていたし、パイロットの技量も高い。

対し、サブلم帝国軍は、零戦の正確な性能も知らず、パイロット技量も怪しいところがある。

そんな双方が戦えばどうなるかはだいたい予想が付く。

P38は一方的に追われ、撃墜された。

さて、爆撃隊の方はちょっと違った。

B18爆撃機は簡単に落とせたが、B25はアメリカ軍自慢の12、

7mm50口径機銃をぶっぱなして進む。

しかも厄介な事にボックス隊形を組んで進んでいく。実際、後方から攻撃すると多数の機銃の迎撃を受ける。

この編隊に挑んだのは、クレア、片山である。

クレアはドイツ空軍お得意の上昇・降下の一撃離脱、片山は居合い切りに似た正面からの高速攻撃である。これを受けたB25二機が撃墜される瞬間、編隊が乱れ攻撃しやすくなった。

結果〓サブム帝国軍空襲失敗。

P38 20機撃墜

B18 18機撃墜

B25 6機撃墜

被害〓無し。

次号へ

空襲阻止！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 改造話

4月14日 スカピア お昼過ぎ 車中

野口博士

「ところで、福本よ。」

福本

「何ですか？」

野口博士

「わざわざ、わしを内地から呼んだ理由は何じゃ？ まさか、街観光なんかにわしを呼んだんじゃ無かるう。」

福本

「もちろん。戦車の天才設計家をお呼びしなければならない事ですから。」

野口博士

「なんだね、これは？」

そこには飛行場にある格納庫の様な建物。

福本

「はい、アメリカの援助で造られた、野戦工廠です。この街を奪還した時に無傷で占領しました。現在は陸戦隊の工廠として使用して

います。」

そう言いながら、福本は警備兵に身分証を出す。警備兵も相手を確認し、扉を開ける。

福本

「どうぞ。」

中では、戦車や車両の点検、整備が行われている。その中を福本は脇目も振らず歩いて行く。その時…

大沢

「福本長官、野口博士。どちらへ？」

福本

「ああ、大沢一水。どうした？ マチルダはほつといて良いのか？」

大沢

「マチルダは今点検中です。長官こそなぜこちらに？」

福本

「いや、あの鹵獲品を野口博士に見せようかと思ってね。」

大沢

「なら、自分もいきます。」

そこにはフォードのトラックやジープ、M3軽戦車が並べられていた。

福本

「これらは全て鹵獲品です。」

野口博士

「じゃあ、あの鏡餅みたいなんも、そうか？」

福本

「はい。あれはM3リー中戦車。アメリカの中戦車です。ここを占領した時に、整備中だったのを鹵獲しました。」

そう言いながらも、歩みを止めない。

そして……

福本

「これが、博士を呼んだ理由です。」

そこには首の無い人間ならね、砲塔の無いM3スチュワート軽戦車が1両。

福本

「上には、アメリカ製戦車が多いので、今後の参考になる。と言ったときでしたが、本命はこれです。」

野口博士

「それで、わしにどうして欲しいのじゃ？」



福本

「それはお任せします。M3軽戦車は扱いが簡単で防御力も高いので、偵察車両などに使用する予定です。ですから、砲塔が無いとは言え、使える物は改造してでも使わないと！」

次号へ

## 改造話（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております！

## 新たな展開

4月16日 ミサリア 第七艦隊旗艦播磨

福本

「こりゃ、本当かい？ 新沢。」

新沢

「はい。外務省と海軍省に二回確認をとりましたから。」

福本

「ふーむ、イギリスとドイツが義勇軍名義で艦隊を派遣するか……。」

遠地

「ふーん、地元が危ないのに、よくもまあ……。」

千歳

「仕方ないでしょ。ロシアは陸軍国だし、イタリア海軍は出て来ないんだから。」

マリダ

「で、艦隊編成は？」

福本

「イギリスは、戦艦プリンス・オブ・ウェールズを旗艦に巡洋戦艦フッド、レパルス、空母インドミタブル、ハーミズを基幹とした艦隊。ドイツは、戦艦ビスマルク、空母グラーフ・ツェッペリンを基

幹とした艦隊、だそうだ。」

福田

「戦艦四隻とは、また豪勢な…。」

沖田

「砲戦力に問題は無いでしょう。しかし、空母の数の割には搭載機数は少ないですね。」

福本

「ま、ハーミズは小型空母、グラフ・ツェッペリンが図体の割には搭載機数が少ないからな、仕方がないと言えば仕方がない。」

マリーダ

「で、艦隊は何時来るの？」

新沢

「は、両艦隊、昨日スカパフローを出港したとの事です。」

千歳

「じゃあ、単純計算で到着は一ヶ月後位ね。」

福本

「なら、その間に制空、制海権をしっかりと確保しとかないとな。」

遠地

「そうだな。特にここは敵海域に近い。何時敵艦隊が来るか判らないからな。」

福本

「そこでだ、警戒強化の為、第3、第4、第5戦隊の出撃を許可したいんだが……」

福田

「良いかも知れませんよ。巡洋戦隊の連中が出たがってましたから。」

遠地

「巡洋戦隊の能力なら、不意に戦艦が出て来たとしても、二・三隻位沈めれるからな。」

福本

「それじゃあ、全員賛成で決定だな。」

マリーダ

「じゃあ、あとで命令書を出しとくわね。」

第3戦隊旗艦 六甲

「ふむふむ、成る程……」

「どうしたんだ、六甲？」

六甲

「あ、畝傍姉さん。播磨さんから命令書です。」

畝傍

「ふむ、成る程。明日の今頃は海の上か…あとで伊吹と石狩に伝えなければな。」

次号へ

## 新たな展開（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 初月奮戦！

4月18日 夜中 ミサリアから300kmの海域

第一、第二護衛戦隊の護衛の下、第26戦車連隊・第64戦隊の交換部品等を積んだ輸送船八隻が航行している。

そして、四方50kmに秋月型駆逐艦が配置されていた。

船団の左側（つまり東側）に配置された秋月型駆逐艦四番艦『初月』。

防空指揮所に立つ1人の少女……初月の艦魂、初月である。彼女ら秋月型は今回が初陣である。

本来なら、防空直衛艦である秋月型が哨戒任務に駆り出されたのに、は最新型のレーダーを搭載しているからである。

現在、連合艦隊ではレーダー搭載に躍起だが、駆逐艦等の末端艦艇で搭載しているのは第七艦隊配属艦か松型・秋月型駆逐艦等の一部艦艇である。

その中で、秋月型は対艦・対空レーダー共に探知範囲が広く、速度が速いので白羽の矢がたった。

初月

「……………つまんない。」

ただ、闇夜の海を眺めるだけ……飽きるのは当然。

近くに誰か居ればマシだろうが単艦行動だから誰も居ない。

初月



「あゝあ、初任務って聞いたから張り切ってたのに……ただ眺めるだけ。」

何度吐いたか分からない溜め息を吐いた瞬間……

初月

「ん？……船？」

初月艦橋

士官

「艦長、レーダーに反応……艦船が接近中、重巡クラス。」

兵士

「目視でも確認。重巡が見えます。」

艦長

「ふむ……、第七艦隊の重巡ではないのかね？」

士官

「あ、レーダーに新たな反応。重巡クラスと軽巡クラスの二隻。」

兵士

「艦長。重巡ですがアメリカ艦のシルエットに似ています。」

艦長

「なに！」

その瞬間！

スドーン！

ヒューーン……

ズシャア！

サブウム帝国軍が撃ってきた。

この時、サブウム帝国軍は重巡二隻、軽巡四隻、駆逐艦十隻で、輸送船団を攻撃するべく接近していた。

しかし、初月は約二万メートルの時点で気が付いたのに対し、サブウム軍は約八千メートルのところであつと気が付いたのだ。

まあ、そんな近距離で撃って当たらないと言うのもおかしいものだが……。

ミサリア 第七艦隊旗艦播磨艦橋

神谷

「た、大変です！ ちょうか〜ん！」

マリーダ

「落ち着きなさい、神谷大佐。どうしたの？」

よほど急いだのか、せえせえと呼吸を繰り返しながら、電文を福本

に渡す。

受け取った福本は、一読すると顔が険しくなり、電文をマリーダに渡す。

そして、電文を読み上げる。

マリーダ

「『発初月 我、重巡二隻を基幹とする敵奇襲艦隊十六隻と遭遇せり。防戦せりも撃沈は必至。輸送船団は退避せよ。祖国の栄えを祈る。』……………」

決別電としかとれない電文内容。

誰も何も言えない。

余りにも遠すぎる……………。

そんな中、福本は窓から外を見ながら祈っていた。

『間に合ってくれ。』と……………。

二時間後……………

サブールム帝国軍奇襲艦隊旗艦

指揮官

「まだ沈められないのか！相手はたかだか一隻だぞ！」

初月の予想外の奮戦で、二時間も足止めされ怒り心頭の指揮官。しかし、怒鳴ったところで弾が当たらにや、意味は無い。

と言うのも、玄人操艦と夜戦能力で初月は相手を翻弄しているが、サブールム帝国軍は夜戦に慣れておらず、砲術も下手くそだった。

その上、駆逐艦二隻が原因不明により撃沈されたため、余計及び腰

砲撃になってしまった。

初月

「…痛…」

いくら当たらないとは言え、彼女の体は至近弾の為、擦り傷、切り傷だらけだった。

しかし、圧倒的不利な状況で駆逐艦二隻を酸素魚雷で撃沈し、敵艦隊を二時間も引っぱり回したのだ。

だが、撃沈も時間の問題……

初月

「…初任務で撃沈なんて……妹の顔もまだ見てないのに……」

諦めかけた、その時！

ズガン！ズガン！

敵重巡の砲声とは違う…重い砲声…

ヒューーン……

ザバン！ザバン！ザバン！ザバン！ザバン！ザバン！

標準は……敵艦隊。

重巡洋艦 敵傍

畝傍

「ふむ、夾差か。悪くはないぞ、小浜。」

「当然（＾）（＾）。誰がこの砲を使ってると思ってるの？」

畝傍

「そうだな。海軍一の女性艦の女性砲術長が使っているんだってな  
！」

そう言うと、畝傍は腰のサーベルを抜く。

畝傍

「我が名は畝傍！ 我がサーベルの錆に成りたければかかって来い  
！」

旗艦六甲

兵士

「篠森司令。畝傍の弾着は夾差です。」

篠森

「艦長、本艦も射撃開始。伊吹、石狩は射程に入り次第射撃開始。  
航続の駆逐隊に連絡。突撃せよ！」

この時現れたのは、重巡洋艦、六甲、畝傍、伊吹、石狩で編成され

た第3戦隊と島風型高速駆逐艦四隻で編成された一個駆逐隊のパトロール隊である。

初月の決別電を受信したパトロール隊は最大速度で急行したのだ。

パトロール隊の介入により一気に日本側が有利になった。

第3戦隊が自らの砲火で敵を惹き付け、突撃した島風、松風、弓風、早風が自慢の61cm五連装魚雷発射管3基から酸素魚雷を発射する。

第3戦隊はこれまた自慢の25.4cm三連装砲を発射して敵重巡を抑えこむ。

撃たれる方にとっては最悪であろう。

防御力が有る方の重巡洋艦でも、巡洋戦艦級の砲弾が降ってくれば撃沈確実だ。そうこうしているうちに島風型が発射した魚雷が命中、駆逐艦四隻、軽巡二隻が撃沈された。

そして、敵傍が発射した25cm砲弾が二番艦に命中、轟沈。

六甲も敵一番艦を攻撃し、沈む頃には敵艦はスクラップ状態であった。

軽巡二隻も、伊吹、石狩と撃ち合っていたが、軽巡と重巡と撃ち合って勝てる筈もなく、一隻は沈没、一隻は大破しながらも離脱した。駆逐艦は六隻が撃沈、四隻が離脱したが二隻大破、二隻中破。

対し、日本海軍は、初月中破、弓風小破とワンサイドゲームとなった。

次号へ

**初月奮戦！（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 艦隊編成表

河内

「おや、作者様。今回は物語では無いのですか？」

作者

「ええ、もうそろそろ、艦隊編成を紹介しようかと思ひまして。」

近江

「確かに、読者の皆さんには誰が何処に居るのか分かりませんからね。」

作者

「と言つ訳で、どうぞ。」

### 第七独立機動艦隊

司令長官 福本大介大将

参謀長 マリィダ中将

副参謀長 福田一輝少将

砲術参謀 遠地 昇中将

航海参謀 千歳 桜中将

情報参謀 神谷 操大佐

連絡将校 新沢武志少尉

従軍記者 尾崎春奈

### 第1戦隊

司令官 福本大介大将（司令長官直率）



戦艦 播磨（旗艦） 河内 和泉 近江

播磨艦長 ラフィール少将 同副長 ジント大佐

第2戦隊

司令官 楠木香里中将

戦艦 薩摩 土佐 伊豆 伊賀 春日 日進

第1航空戦隊

司令官 沖田星輝中将

参謀 ヴィル大佐

空母 紅龍 白龍

紅龍航空隊パイロット

戦闘機隊 アリソン中佐

クレア中佐

吉田正則中佐

片山信吾少佐

艦爆機隊 大熊和也中佐

艦攻機隊 大宮一輝中佐

第2航空戦隊

空母 剛龍 豊龍

第3航空戦隊

空母 海龍 神龍

第4航空戦隊

空母 戦鷹 勇鷹

勇鷹航海長 若杉晋作少佐

第3戦隊

重巡 六甲 畝傍 伊吹 石狩

第4戦隊

重巡 高隈 雲仙 吾妻 石鎚

第5戦隊

軽巡 筑後 吉野 九頭竜米代

第6水雷戦隊

軽巡 遠賀

第1 駆逐隊

大波 小波 津波 神波

神波艦長 神童神子少佐

第2 駆逐隊

滝波 風波 山波 沖波

第7 水雷戦隊

軽巡 天神

第3 駆逐隊

水波 突波 潮波 朝波

第4 駆逐隊

闇波 天波 初波 騒波

第8 防空戦隊

軽巡 武庫

第5 駆逐隊

零月 宮月 早月 北月

第6 駆逐隊

星月 闇月 丸月 刻月

第9 防空戦隊

輕巡 十勝

第7 驅逐隊

高月 豊月 靄月 島月

第8 驅逐隊

寺月 谷月 城月 徳月

第9 驅逐隊

島風 松風 弓風 早風

第10 潜水戦隊

司令官(兼艦長) 二十十少将

第1 潜水隊

潜水艦 四隻

第2 潜水隊

潜水艦 四隻

第3 潜水隊

潜水艦 四隻

第4 潜水隊

潜水艦 四隻

第七独立機動艦隊所属特別陸戦隊

司令官 フェルディナント中将

第七艦隊陸戦機械化師団

第七艦隊陸戦機甲連隊

第1戦車大隊

マチルダMKII戦車

同戦車操縦士 大沢 慧一等水兵

第2戦車大隊

第3重砲大隊

作者

「とまあ、こんな編成。」

近江

「あれ？ 潜水艦の艦名が無い。」

福本

「機密事項なので、今は公開出来ません。まあ、いつか公開します  
が。」

マリーダ

「名前を出した人は作品内で出た所属明確な人です。」

日進

「ところで艦名、かぶってるのは無いでしょうね？」

作者

「大型艦は大丈夫です。けど駆逐艦は……確信有りません。書いた後、調べたら何隻かかぶってました。」

薩摩

「大丈夫なのかしら？ この物語は……。」

次号へ

## 艦隊編成表（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ある日の駐屯地

最初は『祖国存亡の危機！』とまで言われたヴィントラント王国。辛くも日本軍の介入により存亡の危機は脱したものの、国土全部を取り返した訳でもなく、問題山積みである。そんな中……

4月28日 スカピア郊外 日本軍駐屯地

パン パン パパン パン  
ダダダダダ

あちこちで鳴る銃声……しかしどこか陽気に聞こえる銃声。それもその筈、撃ってる人間が日本兵ではなく、カリン隊長率いる120騎士隊の少年少女達だからだ。

カリン

「まったく…不思議なものだ…。」

つい20日前まで、自分達がこんな風に日本軍と一緒に居て、一緒に訓練しているなんて事が……。

フェルデナント

「おや、カリン隊長。どうしました？」

カリン

「これは、フェルデナント中将殿。いや、ここは学ぶべき物が多い所だと思ひましてね。」

フェルデナント



「この国の男勝りの女性教官にそう言っただけで貰えると光栄です。」

カリン

「しかし、日本兵は何故あんなに強いのだ？」

フェルデナント

「うん…難しい質問ですね。」

カリン

「もちろん、装備の違いや訓練の違いも有るだろう…だが、それとは違う、根本的な違いが有ると思うのだが…。」

フェルデナント

「そうですね…日本兵は識字率が高いし、武芸の国ですし、後は…技術力が高いです。」

カリン

「識字率？」

フェルデナント

「ええ、日本人の皆さんは全員読み書き出来ますよ。なんせ、農村に学校が有る国ですから。」

カリン

「…本当か?!」

フェルデナント

「本当ですよ。いや、陸戦兵にそれを聞いた時は驚きましたよ。…そして自分の知識の浅はかさを知りました。」

カリン

「ふむ……その気持ちは私にも分かる。」

フェルデナント

「さて、対戦演習でもやりましょうか。」

カリン

「ああ、受けてたとう。負けはしないぞ！」

その日の夜 ミサリア付近の海岸

海岸に一隻のゴムボートが乗り上げる。

「中佐、着きました。」

「ああ……全員居るな？」

「はい。」

「よし、行動開始だ。」

次号へ

ある日の駐屯地（後書き）

春日「おい！ 最後のはなんだ？」作者「さー？」近江「え、作者  
さんも知らないんですか？」作者「知らん。何にも知らん。」土佐  
「えーと、ご意見ご感想をお待ちしております。」

## 2つの変化

5月8日 ミサリア 第七艦隊旗艦播磨司令長官室

カチ…カチ…カチ…カチ

時計の秒針の進む音が奇妙に大きく聞こえる中、仕事中の福本達。その横で、マリーダが静かにカウントダウンする。

マリーダ

「4…3…2…1…」

カチ

その瞬間…

ガチャ

福田

「先輩。お昼行って来ますね。」

福本

「うん？…ああ、良いぞ。行って来い。」

福田

「はい。行って来ます。」

ガチャ

福本は時計を見る。

現時刻：11時30分。

福本

「きつちり、同じ時刻だな。」

マリダ

「うん、ここ一週間毎日同じ時刻ね。」

遠地

「首尾の方は？」

千歳

「バツチリ。2人に尾行させてる。」

その頃…ミサリア街中

ランラン気分の福田副参謀長を尾行する2人…久しぶりの登場の播磨艦長ラフィールと同副長ジント。

ラフィール

「うう、久しぶりの登場が尾行とは……作者は酷いぞ。」

ジント

「ラフィール、残念だけど、僕達文句言えないよ。」

ラフィール

「お前は呑気で良いな…ジント。」

ジント

「ラフィールが神経質なだけだよ。さ、行こう。」

その頃…播磨司令長官室

コンコン

福本

「ん？ どうぞ。」

神谷

「失礼します。」

福本

「やあ、神谷情報参謀。第3戦隊司令、篠森蒼紫中将とデートかね？」

神谷

「いやん 長官、そんな夢物語みたいな事言わないで下さい」

そう言いながら腰をクネクネ……突っ込まないでおこう…福本はそう思った。

篠森

「操、やめなさい。長官、ふざけるのはやめて下さい。」

福本

「すまんすまん。で、氷のプリンスと情報参謀…第七艦隊の情報畑の2人が何の用かね？」

篠森

「はい、実は……」

その頃…尾行中の2人は…

ラフィール

「お、ジント。副参謀長はあの店に入ったぞ。」

ジント

「えーと…レストラン…誰かと待ち合わせかな？」

ラフィール

「待ち合わせなら街中でもいいんじゃないの？」

ジント

「知らないよ。人の勝手だから。」

そう言いながら双眼鏡で、店を覗く2人。

ラフィール

「普通に注文しているな。」

ジント

「ウエイトレスと…笑いながら喋ってる。」

ラフィール

「……ねえ、副参謀長の目当てであのウェイトレスさんじゃあ……」

ジント

「……ああ、成る程。」

その頃…播磨艦内士官食堂

福本

「怪電波を受信する?」

神谷

「はい。ここ3・4日の夜中に傍受しています。」

遠地

「付近の味方艦は? ここ3・4日なら輸送船団からの通信とかじやあ無いのか?」

篠森

「いえ。傍受しているのが通信能力の高い、播磨型戦艦だけです。」

福本

「うーむ、播磨型は艦隊旗艦だけではなく、情報収集艦の側面も有るならな…怪電波の発信源は特定出来たのかね?」

神谷

「いえ……どうやら、日ごとに場所を変えてるらしく……もともと微弱な電波ですから……。」



マリーダ

「神谷参謀、気にする必要は無いわ。」

福本

「その通り。しかも、さっきの話で相手の目的は分かった。」

千歳

「目的？」

福本

「ああ、相手は諜報員、しかも、なかなか頭のキレる人間が指揮をとる、諜報グループだな。」

遠地

「おいおい、なんで諜報グループなんだ？ 1人の可能性だってあるだろ。」

福本

「この広い街のあらゆる所から情報を収集しようと思ったら1人じやあ、到底無理な話だ。それとも、そんな方法があるのか？」

遠地

「すまん、悪かった。」

福本

「後でスカピアのフェルデナントに連絡してくれ。そっちも諜報される可能性が有るってな。」

神谷

「分かりました。」

福本

「さて、後は……」

ラフィール

「長官。ただいま、戻りました。」

千歳

「あ、ラフィール、ジント。お帰りなさい。どうだった？」

ジント

「福田副参謀長の件ですが、どうやらあるレストランのウェイトレ  
スさんが目当ての様です。」

福本

「ふーん……春だね。」

次号へ

## 2つの変化（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 賭け

5月10日 お昼頃 ミサリア街中

ウキウキ気分の福田副参謀長。

今や行き付けのレストラン『港の猫』亭。

10日程前に街を散策していた時に見付けた、レストラン。

小さなながらも、店は綺麗、飯は旨い。

しかし！ 目当てはもちろん…。

福田

「ミアは元気かな」

そう言いながら、レストランの扉を開ける。

福田

「おばさん。いつもの……!?!」

福本

「やあ、福田。お先」。

福本、マリィダ、遠地、千歳のメンバーがいた。

福田

「先輩達に来るなんて聞いてませんよ。(怒)」

福本

「当たり前だ。言っていないんだから。」

「ふふふ、面白い先輩達ね。」

マリーダ

「あら、綺麗で可愛い人ね。お名前は？」

「あ、初めまして。ミアといいます。このレストランでウェイトレスをやっています。」

遠地

「へえー、ミアちゃんか…(ニヤニヤ)」

千歳

「良い名前ね。(ニヤニヤ)」

福田

「……………何ですか？」

遠地・千歳

「別にー。(ニヤニヤ)」

ミア

「??？」

福本

「あ、ミアさんは気にしなくていいから。」

マリイダ

「…じゃあ、ミーアちゃんは、今1人なんだ。」

ミーア

「はい。今回の戦乱で、家族がバラバラになってしまっ…。」

千歳

「大変だね…大丈夫？」

ミーア

「はい。こうやって生きてますし、家族がどこかで生きていますから。」

マリイダ

「…頑張ってるんだ。」

ミーア

「けど…いつサブルクム帝国軍を追い出せるんですか？」

福本

「うーん、今のところ、陸軍一個師団に一個連隊が到着しているが……さて、何時になるやら…。」

遠地

「まあ、あと一週間程すれば、新たに一個師団と爆撃機隊が到着するしな〜。」

ミア

「へえ、そうなんですか……。」

その夜…播磨通信室

通信兵

「電波傍受……解析開始します。」

神谷

「ヤマを賭けたら……どうなるでしょうか？」

福本

「さあ。どうなるかな。」

通信兵

「解析終了……電文内容です。」

福本

「ヤマは賭けたが……結果が……嫌な結果になったな……。」

次号へ

## 賭け（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしています。



## 結果と亀裂

5月11日 戦艦播磨艦内会議室

福本

「諸君、朝の早い時間に集ってもらったのは、どうやら、このミサリアに諜報グループが潜入している様だ。」

ザワザワザワ

室内がざわめきに包まれる。

福本

「静粛に。神谷情報参謀、説明を。」

神谷

「はい。つい昨日の夜中、通信電波を傍受しました。電文内容は皆さんの手元に有ります。」

そう言うと、電文内容を読み始める。

神谷

「『発ミサリア、宛アーテス。調査の結果、ヴィントラント王国に日本軍一個師団及び一個連隊駐留中、さらに一週間後に一個師団と爆撃機隊が到着する。なお、信憑性は高い……』とまあ、こんな内容です。」

沖田

「しかし、これではどこで漏れたか判りませんか？」

福本  
「いや、これを流したのは俺だ。しかも、特定の場所でしか、話していない。」

福田  
「待つて下さい！ それじゃあミアの可能性だってあるじゃないですか！」

マリーダ  
「いえ、可能性があるじゃなくて、ミアちゃんが諜報員の可能性があるわ。」

福田  
「どう言ってますか？ 説明して下さい！」

福本  
「副参謀長、特定の場所とゆうのは『港の猫』亭でしか話していないんだ。」

福田  
「そんな……じゃあ！」

福本  
「……残念ながらそう考えるのが妥当な……」

ガタツ！

福田  
「認めません！ 認められません！」

そう言い出口の方へ。

福本

「福田！ どこに行く？」

福田

「自分の手で確かめて来ます！」

そう言うと、福田は出て行った。

福本

「はあ〜〜……」

結局、福田不在のまま中間報告終了。

そのまま、播磨の防空指揮所に上がった。

畝傍

「おや、福本長官。どうして、ここに？」

福本

「畝傍さんですか。ちょっと考え事を。」

畝傍

「……播磨長官から聞きました。大変ですね。」

福本

「なーに、司令官職なんて、どこでも一緒ですよ。」

畝傍

「そうか……そうだ、戦鷹に行かないか？」

福本

「ええ、良いですよ。」

第4空母戦隊 戦鷹

福本

「やあ、若杉航海長。戦鷹も元気だったかね？」

若杉

「長官！」

戦鷹

「福本長官！ どうしてこちらに？」

福本

「ん、いやなに。気分転換にな。」

畝傍

「私が連れて来たんだけどね。」

福本

「ところで、戦鷹で何かあるのかね？」

戦鷹

「はい、飛行甲板を使って昼食会をやってるんですよ。」

お昼頃……

勇鷹

「あ、福本長官。」

福本

「ああ、勇鷹。料理担当は君か。」

勇鷹

「えへへへ。( ^ー^ )」

「「福本長官！」」

福本

「ああ、伊吹。石狩。伊吹姉妹の侍姉妹も昼食会に？」

伊吹

「は、畝傍さんに誘われまして。」

石狩

「お姉ちゃん、ぐずぐずするから、引っ張って来ちゃいました。」

福本

「ハハハ、大変だね。伊吹も。」

若杉

「長官。そろそろ食べまじょう。」

次号へ

## 結果と亀裂（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 嘘か事実か

5月12月 ミサリア近郊の丘

ミア

「どうしたの、福田さん？」

福田

「い、いえ…ただこうやってあなたと歩きたかったの…。」

昨日、あんな事を言い、会議室から出て行ったが…

福田

「（結局…本人に訊いて反応で決めるしかないか…。」

ミア

「よかったです。今日、休日だったんで、何しよっかなーと思ってたところだったんで。」

福田

「そ、そうですね。それは良かったです」

ぎこちない会話が続く……

ミア

「ここでお弁当食べません？」



福田

「ええ、良いですよ。」

丘の上で仲良くお弁当……普通ならラッキーフラグなのだが……

ミア

「すみません。日本のお弁当がどんなのか解らなかったのですが、おにぎりとサンドイッチです。」

福田

「うわー！ 美味しそうですね。」

そう言い、おにぎりを一つ食べる。

ミア

「どうですか？」

福田

「……美味しいです。」

ミア

「うわー！ 良かった。」

福田はこの時、ちょっと嘘をついていた。

実は、彼女がスパイかどうか気がなくなって味なんて判らなかったのだ。

福田

「え〜と、ミーアさん？」

ミーア

「はい？」

福田

「まさか、スパイ……」

ミーア

「!!!」

福田

「……なんかじゃありませんよね〜。」

ミーア

「もう、福田さん！ ふざけ過ぎですよ。」

福田

「すみません。な〜んか、最近色々あって、ちっともふざけてないんですよ。」

ミーア

「まあ、あんな面白い先輩達が居るのに？」

福田

「本当ですか？ まあ、馬鹿騒ぎの好きな人が集まった事は確かですけど。」

会話は続く……しこりを残しながら……

夕方……

ミーア

「ありがとうございました。今日は楽しかったです」

福田

「あ、いえ。こちらこそつまらない男に付き合ってもらって……。」

結局、あの一言以後、スパイに関する事に触れていない。

福田

「（何やってんだよ、俺は！ 嘘か本当か確かめる為に、誘ったんだろ！ なのに……俺は馬鹿か！ えーい、こうなれば……）ミーアさん？」

ミーア

「はい。なんですか？」

福田

「あの〜、スパイじゃあ……」

ミーア

「もう、同じ手には乗りません……」

福田

「真面目に聞いて下さい！艦隊上層部では、『港の猫』亭でしか話していない事が怪電波を傍受、解読して分かりました。」

ミア

「それで……もし、スパイなら？」

福田

「あなたを……拘束する権利が……自分には有ります。だから……正直に答えて下さい。」

ミア

「私は……！！！」

ミアの驚いた顔を見た福田だが、それが何を意味するかは、判らなかつた。

しかし、次の瞬間、頭を強打されやっと解つた。

そして、意識が暗転した。

夜 旗艦播磨

福本

「なに？ 福田が帰っていない？」

ジント

「はい。昨日、自分が話しかけた時は、夕方だったので、当直の誰に訊いても、知らないと……」

福本

「嫌な予感がするな……」

新沢・尾崎

「長官！ 大変です！」

福本

「見事にハモツてるな……で、何が大変なんだ？」

尾崎

「さっき、街に出てたら、ミアさんとぶつかって……そしたら、この紙がポケットに入ってたんです！」

その紙を受け取り、一読すると……

福本

「……済まないがジント。マリーダ達を呼んでくれ。新沢は、守備隊に連絡……急げ！」

次号へ

嘘か事実か（後書き）

捕らわれた福田の運命は？！  
ご意見ご感想をお待ちしております。

## 真実の断片

前号最後より時系列をちよっと遡りまして……

ミサリアから数キロの地点

福田

「ううう…頭は痛い、部屋は暗いは……情けねえ。」

そう言いながら辺りを見回すが、自分が捕まり、何処かの牢屋に放り込まれた位しか、判らない。  
もちろん、拳銃と短剣もとられ、手足も縛られてる。

福田

「ちくしよ、先輩が見てたら笑い物だな、こりゃ。」

その時

ガチャ

「フッフッフ、しかし、ここを引き払おうとしたら、こんな獲物が引っ掛かるとはな！」

福田

「なるほど…お前が諜報グループの親玉か！」

「そうだ。私はキリング中佐。ここ一帯の諜報網を預かっていたが……まさかこんなにも早くバレるとはな。」

福田

「当たり前だ！ 艦隊を率いているのは、山本司令長官に並ぶと言われている、若き名将だ。そんな事に感ずか無い訳無いだろ！」

キリング

「ふん、そんな事はどうでも良い。貴官には、明日の朝、回収船に乗って、我がサブム帝国首都アーテスに来て頂こう。」

福田

「で、その次は拷問か？ それとも見せしめ物にするか？ どちらにしても良い未来じゃあ無いな。」

キリング

「いや、貴官の対応次第では、待遇は良くなる…どうだ？」

福田

「ふん。何処ぞの国の落ちぶれ貴族と違って、日本海軍士官を舐めるんじゃない！」

キリング

「まあ、良い。考える時間は有る。」

5月13日

福田



「くそ…逃げ出す方法考えてたら朝になっちまった…。」

小さな窓から、朝日を見て、自分の不甲斐なさを呪いたかった。  
その時……

ガチャ

福田

「（チツ、もう来やがったか…。」

しかし、入って来たのは……

福田

「ミアさん！」

ミア

「（シー!!）」

ハッと思い出した、ここ敵地だった……。

福田

「（ど、どうしたんです?）」

ミア

「（助けに来たの。）」

福田

「（だ、大丈夫なのか?……て、その前にミアさんは……）」

ミア

「（…この前、家族がバラバラの話しましたよね？）」

福田

「（ええ、しました。）」

ミーア

「（実はあれにちょっと嘘が有るんです。）」

福田

「（え、どこに？）」

ミーア

「（家族とは…：12年前からバラバラなんです。）」

福田

「（え！）」

ミーア

「（私、8歳位の時に、あのキリング中佐に連れて来られて…。家族の下に返す条件で、任務に出たんですが…。）」

福田

「（で、今に至ると。）」

ミーア

「（うん…：今回が最後の任務と言つ事です…：紐解けましたよ。）」

福田

「（ありがとございます。ところでここは何処ですか？）」

ミア

「（元は国王領と貴族領との境界線を見張る見張り所だと。）」

福田

「（なるほど、日本で言う関所みたいな物が……。とにかく出まじょう。）」

つくづく、自分に呆れてしまう。  
運が無いだけでは無いだろうが。

福田

「チツ……。」

地下牢から上がって来たら、見透かされていたのか、諜報グループ  
20人程に囲まれていた。

福田

「なるほど…予想済みでした…て訳か。」

キリング

「まあね。さて、ミア覚悟は出来てるね？」

福田

「ふん、何が『覚悟は出来てるね？』だ。最初から殺す積もりだった癖に。」

キリング

「ほー。何を根拠に……。」

福田

「ミアの家族に会わせない……いや、家族は死んでるからだ！」

ミア

「……嘘……。」

キリング

「……よく分かったな、小僧。」

福田

「さっき聞いた、ミアの話……丁度12年前にこの国の国王夫妻が殺されているからな。」

キリング

「ハッハッハ、そこまで当てるとは驚いたものだ……そうさ、12年前、ミアの両親とヴィントラント国王夫妻を殺したのは俺の部隊さー！」

福田

「やっぱりな、そうだと思った。」

キリング

「ミアの両親は国王夫妻に仕える侍従とメイドだった……手引きさせるためミアを誘拐したが……最後は無様だったぜ。」

ミア

「そ、そんな……。」

福田

「ひでー野郎だな！ 血も涙も無い…クソツタレだ！」

キリング

「なんとでも言いたまえ…君達はここで死ぬんだからな！」

チャキ

キリングが拳銃を構えた瞬間！

パン！パン！パン！

拳銃とは明らかに異なる銃声。

しかし、1人だけには聴き慣れた銃声。

福田

「あれは…38式歩兵銃！」

キリング

「な、なんだと！」

ドアを蹴破らんばかりに出た瞬間、彼の目に飛び込んで来たのは見張りの死体3つ。

しかも、見張りはトンプソン短機関銃を持たせたが、それを使う前に殺られている。

「残念だったな。ミアの裏切りは予測出来ても、何時裏切るかを予測出来なかったのが貴様のミスだ。」

キリング

「誰だ、貴様は?!」

福本

「大日本帝国海軍第七艦隊司令長官福本大介。後輩とミーアさんを取り返しに来た!」

キリング

「なに!」

ミーア

「嘘! 先輩さんが司令長官?!」

福本

「おやおや、捕まえた人間の価値も分かって無かったのかよ。」

キリング

「えーい、撃て! 撃ち殺せ!」

パン!パン!パン!パン!

キリング中佐が言った瞬間、日本軍が先手を取り発砲、4人を射殺する!

これを引き金に、撃ち合いが始まる。

パン!パン!パン!パン!

ダン!ダン!ダン!ダン!

ダダダダダダ！

双方撃ち合うが、諜報グループは不利だった。  
拳銃と短機関銃に対し、一個小隊40名の人数と、短機関銃、小銃、  
軽機関銃で対抗、どんどん撃ち減らす。

キリング

「クソ…こうなれば！」

ガチャ

ミーアに向け拳銃を構える。

しかし……

福田

「！やめろー！」

ダン！ダン！

福田が放った拳銃弾は見事にキリング中佐の心臓を貫いた。

キリング

「グハ…！」

「！貴様！」

ダン！

「グワ……！」

福田

「ミリアさん！」

ミリア

「あ……そ、その条件反射で……。」

福田

「条件反射で……。」

ダン！ダン！

また撃たれたため、急いで机に隠れる。

ミリア

「あと何人？」

福田

「2人。」

ミリア

「じゃあ、1、2、3で。」

福田

「了解。」

ミリア

「1。」



福田

「2」

福田・ミア

「「3！」」

ダン！ダン！

これが最後の銃声となった。

数時間後……

旗艦播磨司令長官室

福田

「福田、入ります。」

福本

「おう、今回はご苦労さん。」

福田

「いえいえ、1人で捕まって、1人で拘束されていただけなんで。」

福本

「そうか…諜報グループはミアを除いて全滅、ミアも知ってる事は少ないし、収穫といえば、隠れ家に残っていた書類とミアの身の上話、そして、お前の話位かな。」

福田

「はい？　なんで、自分とミアの話が収穫なのですか？」

福田

「12年前の国王夫妻殺害の実行犯は分かった。」

福田

「ところで、その事は公表するんですよね？」

福田

「いや、しない。」

福田

「え！」

福田

「よく、思い出してみる。ミアを誘拐したのは手引きの為だ…  
…彼らはどうやって行動日程やミアの家族構成を知った？　王宮  
には何十人、何百人も居るのにどうやって探り当てた？」

福田

「……あ！」

福田

「だから当分は公表しない。それより、お前も疲れただろう、もう  
休め。」

福田

「はい……ところで、ミアは？」

福本

「普通は、国際法基準で銃殺刑だな。」

福田

「そんな!」

福本

「……だが、彼女は情報収集……つまりざる役だ。被害も出てないし、お前のは彼女が知らずに尾行されていたからだし……本人さえ良ければ、このまま艦隊入りだな。」

福田

「ほ、本当ですか?!」

福本

「ああ、山本長官の許可もとったぞ……ほら、なにを突っ立ってる! さつさと行ってやらんか!」

福田

「あ、はい!…先輩、ありがとうございます!」

慌て、長官室から出ていった。

播磨

「良かったですか? 国際法から外れてますけど。」

福本

「国際法と言っても、結局は判断基準みたいなものだ……播磨は反対か?」

播磨

「いいえ…福本長官らしい判断かと思います。」

福本

「さつき、山本長官もそう言ってたよ…電文でな。」

次号へ

真実の断片（後書き）

作者「いかがでしたか？」六甲「これ、実際アリなの？」作者「知らん。」敵傍「はあ…作者、次号は？」作者「英独艦隊到着…：…なんだけど…ヤバイ。」薩摩「え、なんで？」作者「次号を読めば分かる。ご意見ご感想をお待ちしております。」

**英独艦隊の危機！（空母部隊編）**

5月16日 ミサリアより西部の海域

敵艦隊接近により、戦艦部隊と分離し、退避している空母部隊。  
ちなみに編成は以下の通り。

イギリス

空母 インドミダブル

ハーミズ

巡洋艦 コーンウォール

ドーセットシャー

エイジャックス

アキリーズ

駆逐艦 10隻

ドイツ

空母 グラーフ・ツェッペリン

装甲艦 アドミラル・グラーフ・シユペー

巡洋艦 ケーニヒスベルク      カールスルーエ

駆逐艦 8隻

イギリス艦隊

「世の中わからないよね。」

「何が？ ドーセットシャー。」

ドーセットシャー

「つい4年前はドイツ・日本と対立してたけど、日本の天皇陛下が変わって……今は同盟国ですよ、インドミダブル司令。」

インドミダブル

「そうね……世の中わからないわね。」

「ま、元々日本とは元同盟国だし、ヤンキーより何倍もましよ。」

ドーセットシャー

「ハーミズさん、機嫌悪いですね？」

インドミダブル

「アメリカが、スターリンのやってる事を容認してるからね。」

ハーミズ

「……戦艦部隊は無事に来るよね？」

ドイツ艦隊

「リンく。どこだく？」

空母グラーフ・ツェツペリンの飛行甲板で誰か探す1人の青年。彼は、グラーフ・ツェツペリンの戦闘機パイロット、ミハエル・ホルツマン(20)、階級は少尉である。

「ミハエルく。誰を探してるの？」

ミハエル

「やあ、シュペー。リンを知らないか？」

シュペー、こと装甲艦アドミラル・グラーフ・シュペーの艦魂、シュペーである。

シュペー

「それなら、防空指揮所に居たわ。一緒行く。」

そして、2人は防空指揮所へ……

ミハエル

「リンく、居るだろく？」



「……私はここだ。」

ミハエル

「なんだ、そこに居たのか……機嫌悪い？」

「シュペーさんならまだましも、貴様に馴れ馴れしく『リン』と呼ぶな！ ツェツペリンと呼べ！」

リン、もとい空母グラフ・ツェツペリンの艦魂、ツェツペリン）  
あるいはリン）

シュペー

「……シンガポールまで、『私の事は、グラフ・ツェツペリンと呼べ！』て言ってたのに……今度はツェツペリンか」

ツェツペリン

「何か言いました、シュペーさん？」

シュペー

「ん、何にも言っていないわよ。」

こんな平和そうな会話も……

『レーダーに反応！ サブルム帝国軍機接近！ 総員戦闘配置に就け！』

グラーフ・ツェッペリンの飛行甲板には、ドイツの誇るFW190  
戦闘機が発艦準備におわれている。

ツェッペリン

「ミハエル！」

ミハエル

「リン。敵機は？」

ツェッペリン

「ヤンキーの陸海軍機、数はおよそ180機。」

ミハエル

「腕は別として、数で来たか。」

ツェッペリン

「ミハエル、大丈夫？」

ミハエル

「ん、大丈夫。ちゃんと守るから。」

ツェッペリン

「ば、バカ！ 自分の身位自分で守るわよ。そうじゃなくて、あんなの事！ 無事に帰って来るんでしょっかね？」

ミハエル

「さすがに、初出撃で戦死はしないよ。」

ツェッペリン

「本当に？」

ミハエル

「本当に。約束する。」

ツエツペリン

「約束よ！」

ミハエル

「ああ！」

そう言った後、彼の乗るFW190はツエツペリンから飛び立った。

シユペー

「ねえ、リン。あなたみたいな子をなんて言うか知ってる？」

ツエツペリン

「いいえ。」

シユペー

「ツインデレて言うのよ。」

ツエツペリン

「シユペーさん！！（<|>）」

今回、サブム帝国軍が投入したのは、P40…40機、F4F…40機、SBDドントレス…40機、TBDデバステイター…40機、B18ボロ…20機の編隊である。

対し、英独の迎撃隊は、シーハリケーン…25機、ファイアフライ…10機、FW190…20機。

ミハエル

「クソ！ 数が多すぎる！」

80機の戦闘機に阻まれ攻撃隊に手が出せない。

2・3機落とせたかも知れないが、ほとんどが無傷だ。

ダダダダダ！

迎撃させない為に、F4Fがミハエル機に銃撃して来る。

ミハエル

「チツ…後は艦隊の防空火力が頼りか。」

士官

「敵機、約100機。接近！」

イギリス指揮官

「対空戦開始！ 撃てー！」

ドン！ドン！ドン！ドン！ダダダダダダダ！  
ババババババババ！

英独艦から高角砲、ポンポン砲、対空機銃を撃ちまくる！

士官

「敵B18爆撃機、爆撃投下！」

ドイツ艦長

「取り舵一杯！」

ヒューーウ……

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！

士官

「左舷より、敵雷撃機接近！」

イギリス艦長

「面舵一杯！回避！」

士官

「対空砲、撃ち落とせ！」

ドン！ドン！ドン！ドン！ダダダダダダダ！

ガガツガガガ

ボバーン！ズカーン！

兵士

「やったー！2機撃墜！」

兵士

「ごまあ見やがれ！」

ドーセットシャー

「ハの、ハの！」

インドミダブル

「墜ちなさい、カトンボ！」

シユペー

「墜ちろ、墜ちろ！」

ツエツペリン

「私を沈めようなんて、100年早いわ！」

奮闘する、将兵と共に戦う艦魂達。

だが……

キヤーーン！

士官

「！敵機直上、急降下！」

艦長

「回避！急げー！」

ハーミズを狙う3機のドントレス！

ハーミズ

「イ、イヤー、来ないでー！」

恐怖に顔を引きつらせながら、持っている拳銃を乱射するが当たらない。

カチッ

ヒューーウ……

ザバーン！ザバーン！

二発は避けれた、しかし……

ズカーーン！

ハーミズ

「キヤアー！」

インドミダブル

「ハーミズさん！」

防空指揮所から、見えた光景……悲惨だった。

命中箇所は後部飛行甲板。爆弾は甲板を貫通、内部で炸裂し、飛行甲板は目茶苦茶だった。

しかし、幸運だったのが、命中した爆弾が500ポンド（225kg）一発だった事。

複数命中、あるいは1000ポンド爆弾だったら、確実に轟沈である。

だが、軽空母のハーミズにとっては、一発の命中はヤバイ。  
しかも……

士官

「新たな編隊が接近！一隊は南から、もう一隊は西からです！」

ハーミズ

「カハ…ゴホ…。」

彼女の周りは…血の海だった。

着ている軍服は、真っ赤に染まり、咳と共に口から血を吐く。  
仰向けに倒れている彼女には、憎たらしく思える青い空……

ハーミズ

「ハア…私、死んじゃうだよね…まだ…生きていたいのに…。」

青い瞳から流れる、一筋の涙。

ハーミズ

「今度、生まれる時は…戦争の無い…客船の艦魂に成りたいな。」

秃鷹の様に飛んでいた、ドントレスがハーミズに止めを刺すべく、  
急降下する。

最後を覚悟し、目を閉じた瞬間！

ダダダダダ！



パパパパパ！

ズカーン！バカン！ゴワーン！

ハーミズ

「え……！？」

ハーミズに急降下していたドントレスが、いきなり乱入した、戦闘機3機に撃墜された。

ハリケーンよりスマートで、落ちていた士気を高めるが如く振られる翼には、太陽をモチーフにした日の丸、胴体には、海軍旗をモチーフにした旭日マーク。

インドミダブル

「あ…それは…日本のゼロ?!」

ドーセットシャー

「司令、応援ですよ！ 日本軍の応援ですよ！」

アリソン

「間に合ったー！」

そう叫ぶと、無線を取り、指示を出す。

アリソン

「全機、攻撃開始！ハーミズは最優先で防御！掛かれ！」

『了解!』

応援に現れた零戦80機が一斉に増槽を切り離し、空戦に入る!

この瞬間、サブム帝国軍に変化が起こった。

今や彼らの意識では、日本軍は戦上手の悪魔。

なんとか数で戦っていたサブム軍にとって、そこに現れた80機の戦闘機編隊は、彼らの闘志を挫くには十分だった。

しかも、同時に現れたF4F、SB2ビンディケーター、40機は真つ先に狙われあっという間に落とされた。

なんとか防ごうとしたサブム軍であったが、軽快な零戦にかわされ、ハリケーンやファイアフライ、FW190に落とされていく。

激闘40分。

凱歌が上がった。

日本軍の応援もあり、英独艦隊はなんとか、サブム帝国軍の攻撃を退く事が出来た。

被害

空母 ハーミズ…中破

シーハリケーン…被弾10機

…撃墜2機ファイアフ

ライ…被弾5機

…撃墜2機FW190

…

被弾10機零戦

：被弾20機

……：ちなみに、撃墜機パイロットは救助したため、人員損失無し。

戦果

F4F：撃墜40機

P40：撃墜30機

ドントレス：撃墜30機

デバステイター：撃墜40機  
ビンディケーター：撃墜20機

B18：撃墜15機

戦果は、日英独の集計。

次号へ

英独艦隊の危機！（空母部隊編）（後書き）

次は戦艦部隊編。ご意見ご感想をお待ちしております。

英独艦隊の危機！（戦艦部隊編）

その頃……戦艦部隊では……

イギリス艦隊旗艦プリンス・オブ・ウェールズ

「なに！ それは本当か？」

士官

「はい。空母部隊、サブーム軍の航空攻撃を受けました。」

「ウウム……。」

唸る、『親指トム』ことトム・フィリップス大将。

フィリップス長官

「……被害は？」

士官

「空母ハーミズ中破のみ。日本のゼロが来なければ沈んでいたでしょう。」

フィリップス長官

「ふむ、日本軍には感謝しなければな。」

士官

「長官！ レーダーに反応、敵艦隊です！」

士官

「リンデマン艦長、敵艦隊は、戦艦8隻、重巡4隻、軽巡4隻、駆逐艦多数！」

戦艦ビスマルク艦長、エルンスト・リンデマン大佐はニヤリと笑うと、長官に話かける。

リンデマン艦長

「リュツチェンス長官、相手にとって不足はありませんな。」

リュツチェンスこと、ギュンター・リュツチェンス中將が答える。

リュツチェンス長官

「ああ。艦長は知ってるかね？ 情報によると、サブلم帝国軍は、アメリカ軍の艦艇をベースにしてるそうだ。」

リンデマン艦長

「ほう…それはまた。」

「けど、世の中わからないわね。」

リュツチェンス長官

「やあ、ビスマルク。なにがだね？」

ビスマルクこと、戦艦ビスマルクの艦魂、ビスマルク。

ビスマルク

「4年前まで、敵はイギリス艦隊だったのに、今、居るのは南にある大陸よ。」

リンデマン艦長

「ハハ、確かに。」

リュッチェンス長官

「さあ、ビスマルク。これから砲撃戦だぞ。」

ビスマルク

「大丈夫！　へなちよこサブルム軍に負ける私じゃ無い！」

さて、戦艦部隊の編隊は以下の通り。ギリス艦隊

戦艦　プリンス・オブ・ウェールズ　フッド　レパルス

重巡　エクセター

軽巡　ネプチューン

駆逐艦　8隻

ドイツ艦隊

戦艦　ビスマルク

重巡 プリンツ・オイゲン

軽巡 ケルン

駆逐艦 8隻

「プリンス」。居る？」

「フッドさん、レパルスさん、どうしたんですか？」

プリンスことプリンス・オブ・ウェールズの艦魂、プリンス。

フッド

「ふふ、戦闘前に新人の様子を見に来たの。」

レパルス

「特に、あなたは名前にコンプレックスがあるからね。」

プリンス

「まあ、大丈夫ですよ。2人共、心配しすぎです。」

フッド

「そう……そうかも知れないわね。」

レパルス

「じゃあ、プリンス……頑張ってね。」



プリンス  
「はい！」

士官

「敵戦艦部隊接近！ 快速部隊突撃して来ます！」

フィリップス長官

「こちらも快速部隊を出して迎え撃て！」

直ぐ様、エクセター、ネプチューン以下駆逐艦8隻が速度を上げ、これを迎え撃つ。

ドイツ艦隊からも、プリンツ・オイゲン、ケルン以下駆逐艦8隻が速度を上げる。

双方、あっという間に間合いを詰める！

「『射撃開始！』」

ドーン！ドーン！ドーン！バーン！バーン！バーン！

海戦の幕が上がった。

さて、英独艦隊とサブلم艦隊との快速部隊の戦いはやはりと言っべきか、英独艦隊が奮闘している。  
7つの海を支配したイギリス海軍、技量と闘志は引けを取らないドイツ海軍。

対し、近代海戦さえ経験した事の無い素人のサブلم帝国海軍は動

きが鈍い。  
海軍ほど、経験の蓄積や伝統が（陸軍も一応そうだが）ものを言う軍隊である。  
だから、海上自衛隊など海軍力はアメリカ海軍に並ぶと言われている。

閑話休題。

とにかく、数の差を吹き飛ばすが如く戦っている。  
そして、いよいよ戦艦同士の大砲戦へ……

士官

「敵戦艦、距離2万メートル。」

フィリップス長官

「艦長。砲撃始め！」

プリンス・オブ・ウェールズ艦長、ジョン・リーチ艦長に命じる。

リーチ艦長

「イエッサー。全砲砲撃開始！」

ズドン！ズドン！ズドン！

これに続き、フッド、レパルス、ビスマルクも砲撃する。

サブールム帝国艦隊旗艦バーザム

士官

「着弾、来ます！」

ザバーン！ザバーン！ザバーン！

指揮官

「ふむ、悪くは無い。艦長、本艦も砲撃開始だ。」

艦長

「は、砲撃開始！」

ドドーン！ドドーン！ドドーン！ドドーン！

バーザムはアメリカのコロラド型戦艦をベースにしている。

そのため、主砲は40cm連装砲である。

ちなみに、戦艦8隻の内、4隻が40cm砲戦艦、4隻が38cm砲戦艦である。

士官

「着弾します！」

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！

リュッチェンス長官

「ふむ、敵の主砲は40cmと38cmの混同だな。」

リンデマン艦長

「危ないですね。本艦は別として、フッドやレパルスにはキツイでしょう。」

リユツチエンス長官

「うむ、今の内に敵戦艦を何隻か削っておく必要があるな。」

双方、砲撃開始から20斉射程しているが、中々決定打が出ない。射撃精度なら、英独が勝っているのだが、サブلم軍は頑丈な船体と数で拮抗している。

だが……

士官

「！着弾：来ます！」

リーチ艦長

「総員衝撃に備えろ！」

スガーン！！

士官

「うわー！」

プリンス

「キヤーーー！」

リーチ艦長

「く…被害報告！」

「左舷両用砲被弾、2基使用不能！」

フィリップス長官

「プリンス、大丈夫か?!」

プリンス

「はい…なんとか…。」

「あ！ フッド被弾しています！」

「同じく、レパルス被弾！」

「フッドより連絡！ X砲塔（第3砲塔）に被弾、使用不能！」

フィリップス長官

「な、なんだと！」

3隻一気に被弾…しかも、砲塔が使用不能と言う事は、この状況下だと大きな戦力ダウンである。

プリンス

「あ…わ…私の…私のせいだ…。」

フィリップス長官

「？プリンス？」

プリンス

「私が…私が呪われてるから…だから…フッドさんが…レパルスさんが…」

リーチ艦長

「プリンス、落ち着け！ 君のせいじゃ…」

プリンス

「嫌！ そんな事聞きたく無い！ 来ないで！ 近づかないで！」

悲鳴の如く叫ぶプリンス。

「艦長！ A砲塔（第1砲塔）とX砲塔が故障！」

フィリップス長官

「なに！」

タイミングの悪い故障。

余り信じたく無いが、呪われていると思わざるおえなかったフィリップスだった。

士官

「プリンス・オブ・ウェールズ発砲！ ……あれ？ 第2砲塔しか発砲してない？」

リンデマン艦長

「なに!？」

リュッチェンス長官

「……そうか、四連装砲塔が2基とも故障したのか。」

ビスマルク

「じゃあ、大変じゃない!」

リンデマン艦長

「何が大変なんだ?」

ビスマルク

「プリンスは、一種の被害妄想に陥ってるの! フッドさんが言った! 自分が呪われている!」

リュッチェンス長官

「……艦長、本艦を前に出せるか?」

リンデマン艦長

「はい、出せますよ。」

リュッチェンス長官

「よし! フィリップス長官に連絡! 本艦が前に出る!」

士官

「ビスマルク、前に出ます!」

指揮官

「はっはっは、ビスマルクが出ようが、どう成ろうが関係無いわ！」  
「どうやら、まだ一隻も沈めていないのに勝った気にいるサブールム艦隊。」

「……これを怠慢と言つべきか？」

指揮官

「さあ、このまま一気に……」

ザバーン！ザバーン！

士官

「……」

指揮官

「な、なんだ！？」

士官

「う、うわー！ 英独艦隊の後方より、に、日本艦隊……！」

指揮官

「な、な、なんだと……！」

臨戦隊旗艦和泉

士官

「初弾、夾差！」



遠地

「よーし！ 良いぞ！」

英独艦隊救援に現れたのは、遠地中将指揮の戦艦和泉、近江、春日、日進、第4戦隊、第6水雷戦隊で編成された部隊である。

和泉

「遠地、見る！ サブルム艦隊め慌てているぞ。もう勝った気でいたようだな！」

遠地

「そつだな。よし、日本海軍が教育してやろう！」

和泉

「授業料は高いぞ。まあ、日本流鉄拳制裁付きだからな！」

遠地

「全艦に連絡。フッド、レパルスを援護しつつ、攻撃開始！ 敵は戦艦8隻！ 技量を磨くはこの一戦！ 総員、気合い入れろや！」

『おおお！…！』

日本艦隊の救援に、隻数で優位に立っていたサブブルム艦隊は一気に崩れた。

重巡同士の砲撃戦に乱入した第4戦隊は20cm砲15門の火力をフルに使い、次々にスクラップに変えていく。第6水雷戦隊も日本海軍ご自慢の酸素魚雷と戦技で押しまくっている。

そして、戦艦も……

ズガガーン！

ヒューーウ……

スバーン！スバーン！スバーン！

士官

「うわー！！」

指揮官

「ひー！！」

和泉、近江から放たれる46cm砲の前にサブールム艦隊は手も足も出ない。

まず射程距離、そして技量に難があるから余計だ。

士官

「指揮官、ご、ご指示を！」

指揮官

「か、艦長！ どうにかならんのか？」

艦長

「無理です！」

こんな事やってる内に……

ズガガーン！

士官

「わ、敵戦艦発砲……来ます！」

ズガーン！ズガーン！ズガーン！

バーザムに命中したのは、3発。

1発は艦橋を、1発は船体中央部を、最後は第2砲塔防盾を貫いた。

遠地

「よし！」

和泉

「命ちゆ……」

チカツ！

ズガガガーン！

遠地

「うわっ！」

和泉

「うそ！」

弾薬庫に引火誘爆したバーザムは、船体を真っ二つにしなから、海の底に引き込まれた。  
英独攻撃艦隊旗艦の呆気ない最後であった。

さて、こうなると、しめたものである。

指揮官を失った為、サブム軍は指揮系統が大混乱となった。

ビスマルクは、戦艦アルケオに一斉総射で半身不随にした後、止めを刺した。

フッドも、自らの砲塔を破壊した、戦艦シュトラール徹底的に追い詰め撃沈した。

## 損害

### 戦艦

プリンス・オブ・ウェールズ……小破

フッド……中破

レパルス……中破

### 重巡洋艦

エクセター……中破

プリンツ・オイゲン……小破

### 駆逐艦

英……2隻中破 2隻小破

独…… 2隻中破 3隻小破

日…… 風波・津波小破

戦果

戦艦…… 3隻沈没 4隻大破 3隻中破

重巡洋艦…… 4隻沈没

軽巡洋艦…… 3隻沈没

駆逐艦…… 4隻沈没 5隻大破 4隻中破 5隻小破

次号へ

英独艦隊の危機！(戦艦部隊編)(後書き)

作者「あゝ、疲れた」。播磨「お疲れ様です。」作者「流石にキツイぜ。4000字は。」和泉「その前に、今回の2作品の艦艇はなんだ？」作者「一部艦艇を除き、史実の1939〜1942年の間に沈没した艦艇です。」播磨「ところで、プリンス・オブ・ウェールズが呪われているって本当？」作者「それは別の機会に。」和泉「ご意見ご感想は何時でも待っているぞ。」

## 渡河作戦（前書き）

前号訂正 戦果の戦艦部分で、大破4隻、中破、3隻と書きました  
が、大破3隻、中破2隻の間違いです。

## 渡河作戦

5月20日 ユーラス河西岸の橋の手前

朝日も昇っていない時間……だが俺はこうして、戦車に乗っている。

大沢

「ふわ〜」。

本来ならまだ寝てる時間なのだが……今日は違う。

マチルダ

「……眠いんですか？」

大沢

「何時もなら寝ている時間だ。当たり前だろ……なんだ、心配してくれてるのか？」

マチルダ

「ち、違いますわ！　ね、寝不足で居眠り運転なんてされて、何処かにぶつけられたら、たまったものじゃありませんもの！」

大沢

「そつでっかい。」

まあ、こんな事に成ったのは、この河のせいと言っべきか？  
そつ、昨日の昼頃の事だ……



19日 ユーラス河西岸の日本軍陣地

大沢

「失礼します。」

フェルデナント

「やあ、大沢一水。ご苦労様です。」

大沢

「はい。ところで、何故自分とマチルダを呼んだのですか？」

フェルデナント

「まあ、慌てないでください。実はもう1人呼んでいる。」

「失礼します。」

フェルデナント

「やあ、識名。整備は終わった？」

識名

「はい。」

識名はマッド・サイエンティストの野口博士開発『特野式内火艇』の車魂である。（詳細は感想を見てくれ。）

大沢

「識名がここに来たと言うことは、いよいよ実戦に？」

フェルデナント

「ああ。その為に3人に来てもらった。」

そう言うと、フェルデナントは机に地図を広げる。

フェルデナント

「ここが、我が軍の陣地。反対側にある、ギザギザ線がサブルム軍の防衛線、そして、この太い線が、ユーラス河だ。」

大沢

「で、我々が足止めをされている原因は、河が増水期にだから。」

フェルデナント

「ああ。普段なら気よつけてさえいれば、人の足でも渡れる河も、増水期だと渡河装備が必要だ。」

マチルダ

「だから、私達はここで待機中……でしたわね。」

フェルデナント

「ええ。しかし、事情が変わりました。」

大沢

「え、どうゆう風に？」

フェルデナント

「理由は2つ。1つは3日前の英独艦隊との戦闘で、サブルム軍の立場が、ヤバく成った事。」

識名

「英独艦隊を撃退し、英独両政府にこの件から手を引かせる……積もりが、日本軍に花を持たせる結果に成った。」

フェルデナント

「そうです。そして、2つ目が渡河問題の解決と、新たな問題の発生。」

大沢

「え！」

マチルダ

「本当ですか?!」

フェルデナント

「はい。つい先日、偵察部隊がサブルム軍が架けたと思われる、橋を発見しました。ある程度の重量物でも渡れそうです。」

大沢

「じゃあ、問題は？」

フェルデナント

「偵察部隊の話だと橋の周囲に、重火器が配備されています。」

識名

「ああ、なるほど。」

橋を巡る戦いは、防御側に有利である。

基本的に、敵を渡らせなければいいのだから、最終的には、橋を爆破すれば良いからだ。

橋を爆破し無いにしても、橋と言う狭い場所は防御側には有利であ

る事には変わり無い。  
つまり、勢いで橋を渡れば、まな板の上の鯉……されるがままと言  
う事だ。

まあ、日本軍にそんな事に気付かないバカは居ないが。

フェルデナント

「と、なると、橋は無傷で確保したい。なら、橋を渡らずに部隊を  
送り込むのが手です。」

大沢

「だから、識名が必要だと?」

マチルダ

「まさか、敵弾が嵐の様に降ると真ん中に、義妹いもつとを放り込むんじや  
無いですわね?」

そう言う、マチルダの目は怖い。

フェルデナント

「そんな事しません。ちゃんと作戦は練っています。」

マチルダ

「それは、良かったですわ。」

大沢

「で、作戦は?」

フェルデナント

「ああ、簡単に説明すると……」

そんな事を思い出しているよ……

マチルダ

「大沢、時間よ。」

腕時計を見ると、6時ちょうど。

大沢

「もう、そろそろか……。」

それは始まった。

まず、サブム軍はいきなり空襲を受けた。

自分達の味方が居る方向から飛んで来た機体を、友軍機だと思っていたから、それは驚いたであろう。

しかし、よく見れば機体には、2つのフロートを装着している。

まあ、そんな事に気付く人間はいないだろうが。

大島少尉

「よし、エンジン始動。」

ゆっくりと動き出すマチルダ。

向かうは、対岸へ……。

識名

「よし、いくぞ。」

特野式内火艇のエンジンが始動し、増水していた河を渡り始める。今回、作戦に参加したのは10両。計120名の兵士が、特野式内火艇に搭乗している。河の中程に来ると流石に気付いたか、小銃を撃ってきたが、そんな程度で撃ち抜かれる装甲では無い。そここうしてる内に、今度は迫撃砲で応戦してきたが、曲射弾道の迫撃砲が動く車両に当てるのは難しい。

ダダダダダ！  
シュパーン！

こちらも12.7mm機銃と105mm噴進砲から焼夷榴弾を撃って応戦する。  
サブム軍も埒があかないと見たか、山砲、対戦車砲野砲で応戦しようとしたが、援護に駆け付けた陸軍の99式襲撃機が銃爆撃で攻撃する。

一台の損失も無く、対岸に上陸した。

乗員

「対岸に着いたぞ！」

分隊長

「よし、全員下車。急げ！」

既にフロートを外し、兵員も下車するや、陣地を奪取していく。

識名

「ふう、取り敢えず一仕事終わり。」

一息いれようとしたその時！

ズカーン！

識名

「ひ！？」

自分より数メートルで着弾した砲弾。

目の前には……M3軽戦車。

装甲も35mm有るが戦車とタイムン張れるかは怪しいし、105mm噴進砲にも、対戦車弾も有るが間に合わない。

識名

「ひええー！」

ドン！

ズカーン！

識名

「へえ……？」

撃破されたのは……M3の方だった。

識名

「あれ？……ど、どうなってんの？」

マチルダ

「識名、無事ですか?!」

識名

「義姉様! (おねえさま)」

いつの間にやら、マチルダが居た。

どうやら、M3を撃破したのはマチルダの様だ。

マチルダ

「ああ、識名。怪我は有りませんわね…良かった。」

そう言うと、マチルダは識名に抱き付く。

それを大沢はハッチチから見ている。

あれが(義理とは言え)姉妹愛と言うやつか?  
それとも、過保護…親バカならぬ姉バカか?

そう思っていると、凱歌があがった。

マチルダ戦車が現れたので、本隊が到着したと思ったか、サブブルム軍は退却して行く。

大沢

「作戦は…成功だな。」

朝日に照らされた日章旗を見ながら呟いた。

次号へ



渡河作戦（後書き）

春日「ん、作者はどうした？」日進「バイトが忙しくて、出れない  
そつです。」春日「全く…ま、仕方がないか。」日進「それでは、  
ご意見ご感想をお待ちしております。」

## 日独御挨拶

5月30日 ミサリア港

2週間前の海戦で、損傷の少なかったドイツ海軍が一部修理中の艦艇を除いてミサリア港に入港した。

戦艦ビスマルク、空母グラーフ・ツェッペリン、装甲艦アドミラル・グラーフ・シュペー、重巡プリンツ・オイゲン、軽巡ケルンなどを基幹とする艦隊である。第七艦隊から見ればちよつとした空母機動艦隊だが、ドイツ海軍にとっては未来を担う艦隊である。

イツ艦隊旗艦 ビスマルク

福本

「どうも始めまして。大日本帝国海軍第七艦隊司令長官、福本大介大将です。」

マリーダ

「同じく、参謀長のマリーダ中将です。」

遠地

「同じく、砲術参謀の遠地昇中将であります。」

リュツチェンス長官

「ドイツ艦隊司令長官、ギウンター・リュツチェンス中将です。どうぞ、よろしく。」

福本

「いえいえ、こちらこそ。遠いところをわざわざ、ありがとうございます。」

リュッチェンス長官

「いえ。こちらも先日助けて頂きましたから。」

遠地

「なに、仲間を助けるのは当たり前のことですから。」

同じ頃……空母紅龍では……

ツエツペリン

「ホントに、知ってる人いるの?」

ミハエル

「ああ、いるよ。」

こんな会話をしながら、空母の飛行甲板を歩く2人。

ツエツペリン

「だいたい、シユペーさんが指示でこうしてるけど、なんで、あんなに行かなきゃいけないの!」

ミハエル

「リン……きみに妹いないでしょ。」

ちなみに、妹と言うのは空母の事である。

ツエッペリン

「……リンじゃなくてツエッペリン……」

吉田

「やあ、ミハエル！ 久しぶりだな、元気だったか？」

ミハエル

「シンゴか！ ああ、元気だったよ。そっちはどうだ？」

吉田

「相変わらずさ……隣の子は艦魂か？」

ミハエル

「ああ、俺の乗ってる空母グラフ・ツエッペリンの艦魂、ツエッペリン……俺は言いくいから、リンって呼んでるけど。」

片山

「……ミハエル、今後ろを見ないほうが良いぞ。」

ミハエル

「……ああ、俺にも、理由はよく分かるから。」

今のツエッペリンを一言で言うと……キレていた。

片山

「と、と……で、何しに来たんだ？」

ミハエル

「あ、ああ、実は、ツェツペリンに、皆を紹介しようと思ったんだが。」

吉田

「いや、今行くのはやめといた方が良さぞ。」

ミハエル

「なんで？」

吉田

「うむ、実は……」

その時

海龍

「やあ、ミハエル。久しぶりだな……誰、その子は？」

ミハエル

「ああ、この子は、グラフ・ツェツペリンで……」

海龍

「……ミハエル、この子を借りるぞ！」

そう言うと、ツェツペリンを脇に抱えて、走り出す。

ミハエル

「え？え！え？！」

吉田

「言わんこつちやない！ 海龍が新しいコスプレを開発したから、

試着させる気だったんだよ！」

ツエツペリン

「そんな事いいから、助けなさい！」

ミハエル

「海龍く、待てく。」

その頃…戦艦薩摩では……

ビスマルク

「あ、あの、スーパーさん？」

スーパー

「はい。」

ビスマルク

「あの…えーと、なんでスーパーさんが日本の艦魂方を知ってるんですか？」

スーパー

「それは、一回日本に行った事が有るからですよ。」

ビスマルク

「え！ 何時？」

スーパー

「一年くらい前かしらね、技術交流とかで、ツエツペリンのミハエ

ル君達とは一ヶ月位遅れて日本に到着したけど、楽しかったわ」

ビスマルク

「へえ〜」。

薩摩

「あら、シユペーさん！ お久しぶりですね。」

シユペー

「あ、薩摩さん！ お元気でしたか？」

薩摩

「ええ、みんな元気よ。新しい仲間も増えたし…その子が、ビスマルクね。」

ビスマルク

「あ、はい！ ドイツ艦隊司令のビスマルクです！ は、始めまして！」

薩摩

「うふふ、そんなに緊張しなくていいのよ。ね、播磨？」

播磨

「そうですね。薩摩さん。」

シユペー

「あ、その子が有名な新しい仲間ね。」

播磨

「はい、播磨です。シユペーさんの事は薩摩さんから聞いています。」

「

シユペー

「そう。薩摩、時間ある？」

薩摩

「大丈夫。これから、ビスマルクを紹介しないとね。」

次号へ



## 日独御挨拶（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしています。

## 行方

もう12年……

あの悲劇で……父上、母上を失った……

おぼろげにしか、思い出せないけど……尊敬できた存在……

ああ……いつまで黙っていれば良いのだろうか？

父上、母上……お許し下さい……。

6月2日 ミサリア港 戦艦播磨

福本

「うゝむ……。」「

一枚の写真を見ながら、福本は唸っていた。

尾崎・近江

「失礼します。」「

福本

「あ、おはようございます。お二人共。」「

近江

「あれ？ 福本お兄ちゃん、何見てるんですか？」

福本

「え、ああ、この写真ですね。今のところ、唯一現存するヴィントラント王国一家が写った写真です。」「

尾崎

「幸せそうな家族写真ですね。」

福本

「ええ…そうですね。」

さいはて、いったい何処に居るのやら？  
それとも…裏切り者が居るからか？

福田

「先輩。二一ナ潜水司令が参りました。」

福本

「ああ、通してくれ。」

二一ナ

「失礼します。」

福本

「やあ、二一ナ司令。この前の渡河作戦では、ご苦労様です。」

二一ナ

「いえいえ、お役に立てて良かったです。」

さて、二一ナは潜水戦隊の司令の筈なのに、何故渡河作戦の話が出てきたかと言うと、彼女指揮下の潜水戦隊が一部から『戦略潜水戦

隊』と言われる所以である。

潜水戦隊は通常潜水艦伊700型8隻と、『潜水空母』こと伊400型の8隻で編成されている。

福本

「航空隊の皆には、嫌な思いをさせたな。初舞台が陸戦隊の援護になっちゃって…。」

二一ナ

「いいえ、皆喜んでましたよ。久しぶりに飛べたって。」

福本

「そうか…良かった。」

二一ナ

「そうだ。このあと、潜水戦隊に行きますか？」

福本

「そつだな。皆の労をねぎらいたい。」

二一ナ

「わかりました。あとでお迎えに参ります。」

夕方……

福本

「ふう〜」。

潜水戦隊に行き、労をねぎらったあと、そのまま司令長官室に直行。

福本

「ん、諜報部からの定時報告か…どれどれ。」

一読してみると、どうやら、ルーズベルト大統領辺りが日本非難をしている様だ。

福本

「早くこつちを片付けたいけど……そう、思う通りには成らないよな…。」

次号へ

## 行方（後書き）

作者「……………」薩摩「作者さん！ 後書き始まってますよ。」  
作者「ん、わ！ やってました！」薩摩「さつきまで、何を読んで  
たんですか？」作者「さつき読んでたのが、アムコス発行の『国防  
論』、今読んでるのが、双葉社発行の『田母神塾』、面白いぞ。」  
薩摩「…好きですね。」作者「うん。ご意見ご感想をお待ちして  
おります。」

## 首都飛行作戦！

6月10日 朝方

何も無い、海面に一本の棒が現れた。  
その棒は一回転すると海面に消えた。  
しかし、次の瞬間、棒が現れた海面から、比喩物にならない位の巨体が姿を現した。

しかも一つではない、八つも……

ドイツ人女性水兵

「艦長。周り異常有りません。」

ニーナ

「僚艦は居るわね？」

ドイツ人女性水兵

「はい、次々と浮上しています。」

ニーナ

「よし。みんな、準備開始！」

「『了解！』」

次々に組み立てられていく水上機……晴嵐22型水上攻撃機である。しかし、別の艦では、違う機種が発進準備をしていた。主フロートと補助フロートの単発機……強風22型水上戦闘機である。

「長官の思い付き……当たるかな？」

二一ナ

「ヤンキーならやりそうな事は確かね。零。」

潜水戦隊旗艦伊400の艦魂こと零である。

日本人女性下士官

「二一ナ艦長。発進準備完了しました。」

二一ナ

「わかったわ。搭乗員搭乗！ 作戦開始！」

伊400から晴嵐一番機が発進し、僚艦からも、晴嵐、強風が発進する。

24機全部が上がり、編隊を組み飛んで行く頃、潜水空母はその巨体を波間に沈めて行く。

零

「みんな…大丈夫でしょうか？」

二一ナ

「信じるしかないわね。そして、私達は、帰る場所を守らないね。」



零

「はい。」

『全機、ちゃんと付いて来てるわね?』

『はい。』

『来てます。』

『右に同じ。』

「付いて来てます。」

僚機の緊張感の無い応答に苦笑しつつ、無線に答える、伊406搭載強風三番機を操縦する、平沢啓二等飛行兵である。

平沢

「（今思えば、あの時、横空で無茶やったからこうなったんだよね……世の中わかんねえな。）」

『全機、今回の任務はサブム帝国の首都、アーテスでピラ蒔きが任務よ。』

『ピラ時はチンドン屋の仕事ではないでしょうか？』

『あんな、日本のチンドン屋が、どうやって敵国の首都でピラ時けつてんだ？』

『はい、喋らない。私達が首都上空を飛んでるだけで、敵も焦る筈よ。』

『つまり、心理的效果を狙った作戦ですね。』

『そう言う事。いい、間違っても、攻撃はしない事。これは福本長官直々の命令よ。』

『『『了解。』』』

平沢

「了解。」

そう言い、地図を見る。

平沢

「あと50キロ……。」「

サブلم帝国首都アーテス城壁

城壁の上では、サブلم軍兵士がババ抜きをやっていた。

サブلم軍兵士1

「うっっん……」

サブلم軍兵士2

「おい、まだかよ?」

サブلم軍兵士1

「五月蠅い。考えてんだ。」

サブلم軍兵士3

「早くしてくれ…腕が痛い。」

サブلم軍兵士1

「……よし、右だ!」

そして、トランプを引くと……

サブلم軍兵士4

「残念、ジョカーだ。」

サブلم軍兵士3

「やったー」

サブلم軍兵士1

「くそー、チキショー！」

サブム軍兵士2

「よし、今度の休暇はお前がオゴリ役だ！」

サブム軍兵士1

「給与が消える〜。」

……至つて暢気だ。

サブム軍兵士4

「ハツハツハ…ん？ 何か来るぞ？」

その言葉に、他の3人が空を見る。

サブム軍兵士2

「飛行機……だな。」

サブム軍兵士1

「おい、今日、演習とか聞いてないか？」

サブム軍兵士3

「いや、聞いてないぞ。」

飛行機はお構い無く進む。そして……

グオーーン！

サブム軍兵士達

「!?!?!?!」

翼を見ていた1人が、間抜けな声で。

サブلم軍兵士1

「あ、赤い丸？」

サブلم軍兵士3

「に、日本軍だ〜！」

サブلم軍兵士2

「な、何でだ？ いったい何処から現れた!？」

サブلم軍兵士1

「し、知るかそんなもん！」

タタタタタ

サブلم軍兵士4が近くに有った7.7mm機関銃を撃つ。

サブلم軍兵士2

「やめろ。今さら無駄だ。」

サブلم軍兵士4

「そ、それもそうか…。」

サブلم軍兵士1

「おい、司令部に連絡だ！」

サブلم軍兵士3

「こちら、見張り所！ 日本軍機が今、我々の頭上を通過しました

「え…撃ち落とせ？もう行っちゃいましたよ！」

『隊長。どうやら見付かった様です。』

『首都の中に入れば、こっちのものよ。戦闘機は護衛よろしく。』

平沢

「了解。」

返事をする、速度を上げ、晴嵐隊の前に出る。

『よし、ビラ蒔き開始！』

晴嵐の防風が開き、機内に積んでいた、ビラを蒔き始める。  
ちなみに、ビラの文面は……

『この戦争のきっかけは貴国が、ヴィントラント王国に侵攻した事が原因である。もし、貴国がヴィントラント王国から手を引き、大日本帝国に対する非礼を詫びるなら、こちらも講和交渉の用意がある事を伝えておく。これ以上の戦争継続は貴国を滅ぼすだけである。貴国の賢明なる判断を期待する。』

そうこうしている内に、晴嵐隊はビラを蒔き終えていた。  
しかし、ちょっと物足りないと思った平沢は無線を取る。

平沢

「隊長。ちょっと曲芸飛行をやって良いですか？」

『曲芸飛行？……そうね、多少燃料に余裕が有るから良いわよ。但し、程々に。』

平沢

「了解！」

直ぐに高度を100mに下げ、低空飛行、宙返りを4回した後、編隊に戻る。

『よし。作戦成功！ 全機帰還！』

城の中で、半分監禁生活を送っていたから、久しぶり抜け出して、街を歩いていた……幼馴染みメイドと一緒に。

「ひ、姫様、だ、大丈夫でしょうか？」

「あなたね……良いじゃない。王族でも、人形じゃないの。楽しんでらダメなの？」

「い、いえ…。」

まあ、彼女は気が弱いと言っか、心配性であるから、こんな会話からしか始まらないのだが。

「ふう…え？」

グオーン！

飛行機が通り過ぎた。

ビラをばら蒔きながら…。空中に舞うビラを掴み…。嫌になった。

「やっぱりか…。」

「あ、あの…姫様？」

「ん、何でも無いわ。」

「はあ…。」

グオーン！

また、飛行機が通り過ぎた。

今度は低く飛んでいた。

そして、一回、二回…と宙返り。



四回やって帰って行く。

「もう…終わらせないと。」

「?????」

この時、少女は覚悟を決めた。

次号へ

## 首都飛行作戦！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## サブールム軍、動く

7月10日 ミサリア港

旗艦播磨長官室

神谷

「長官！長官！大変です！」

福本

「どうしたんだね、神谷参謀？」

神谷

「り、陸軍の1000式司偵が再建なったサームイル軍港を偵察した結果、戦艦10隻、空母8隻を確認致しました！」

福田

「なに！？」

福本

「落ち着け。神谷、済まないが、リュツチエンス中将与フィリップス大将をお呼びしてくれ。福田はみんなを集めてくれ。」

福田・神谷

「了解！」

リュツチエンス長官

「それは、本当ですか！？」

福本

「はい、間違いありません。」

ここは、旗艦播磨の会議室。サームイル軍港を偵察した結果を英独艦隊長官と参謀、戦隊司令に報告している。

神谷

「分析の結果、空母はレンジャー型空母のコピー、それが8隻です。」

「

沖田

「となると、単純計算で搭載機数は560機か…。」

遠地

「いったい、何処から集めて来たのやら。」

マリイダ

「それは、アメリカから大量購入したんでしょう。」

楠木

「数は良いとして…技量は大丈夫なんですかね？」

沖田

「まあ、空母に乗らせる位だ、それなりには有るだろう。」

福本

「とにかくだ、サブム軍は近いうちに出撃する筈だ。となると、どう対応するかが…。」

篠森

「まず、偵察と警戒。偵察機と潜水戦隊による監視を提案します。」

福本

「それについては、既に準備させている。他には？」

沖田

「近日に到着する、輸送船団のルート変更、あるいはパトミナス港への避難勧告もお願い致します。」

遠地

「ああ、いくら対空戦に強い松型や海防艦でも、1000や2000に襲われたら太刀打ち出来ない。」

福本

「わかった。念のため、山本長官にも、連絡しておこう。」

フリリップス長官

「我々イギリス、ドイツ艦隊は何をすればよいかな？」

福本

「そうですね…。」

福田

「サームイール軍港をもう一度砲撃していただいては？ 我々がサブルム艦隊と戦っている間に。」

遠地

「成る程、こつちが敵を引き付けてる間に、港湾施設を壊すのか…。」

「

福田

「はい。そうすれば、損傷しても修理する場所がありません。戦力回復に時間がかかります。」

リュッチェンス長官

「待ってくれ、それだと日本艦隊が危ないのではないかね？」

福本

「いえいえ、引き腰気味の敵に殺られる日本海軍では有りませんよ。」

帰りの内火艇で、リュッチェンス中將はフィリップス大將に話かけた。

リュッチェンス長官

「フィリップス大將。」

フィリップス長官

「なんですか、リュッチェンス中將？」

リュッチェンス長官

「もしかして、日本軍が強いのは、無謀を無謀と思わないからではないでしょうか？」

フィリップス長官

「それも有るかも知れないが、もしかしたら、他にも有るんじゃないかね？」

リュッチェンス長官

「え、例えば？」

フィリップス長官

「それは解らない。しかし、彼らを見てみると、そう思っただよ。」

その頃…艦魂達はと言つと……

フッド

「困ったわね。」

レパルス

「困りましたね。」

そう言いながら、フッドの甲板をうろつろ。

彼女らを悩ませている物……それは、プリンスの事である。

あの海戦の後、修理は完了したが、心の方が癒えておらず、ずっと部屋に籠りつきりである。

フッド

「はあ。」

悩みは早々解決しない様だ。

播磨防空指揮所

マリダ

「いよいよね。」

福本

「ああ、いよいよだな。」

この戦争が終われば、いよいよアメリカとの戦争……全員がそう考えている。

マリダ

「ねえ。」

福本

「ん、なんだ？」

マリダ

「戦争が……終わったらどうするの？」

福本

「そうだな……あんまり考えて無いな……海軍には残るけどね。」

マリダ

「ふーん……そうなの。」

福本

「じゃあ、マリダは？」

マリダ

「うーん、私もあんまり考えて無いわね……結婚はしなきゃいけない



けどね。」

福本

「ふーん、そうか。」

次号へ

## サブコム軍、動く(後書き)

ご意見感想をお待ちしております。

## 前哨戦

7月18日 深夜 サームイル軍港 湾出口

戦艦10隻、空母8隻の艦隊がサームイル軍港から出撃する。日本海軍に見付からない為に深夜に出撃した様だが、既に察知されていた。

潜水戦隊旗艦 伊400

ニーナ

「ふん、大層な行列ね。」

潜望鏡を覗きながら、そんな事を言うニーナ。サブーム艦隊の出撃を、ソナーで捉え、ゆっくりと近付いたが、まだ見付かってはいない様だ。

ニーナ

「はい、交代よ、副長。」

「は……確かに、盛大ですね……我々には見慣れた光景ですけど。」

ニーナ

「うふふ、そうね。宮木副長。」

伊400潜の副長、宮木吉香中佐のことである。

二一ナ

「ところで、宮木副長。電文は組んである？」

宮木

「はい、組んで有りますが…何か？」

二一ナ

「うふふ、魚雷発射管用意！」

宮木

「…!!本気ですか？」

二一ナ

「大丈夫。艦隊で動いているから、向こうはソナーは使えないわ。」

宮木

「…しかし！」

二一ナ

「日本が誇る酸素魚雷…興味があるわね。」

宮木

「はあ…。」

二一ナ

「決まりね。水雷長、用意は良い？」

『はい！ 装填完了、用意よろし！』

二一ナ

「オツケー。魚雷戦を行う！ 1番から6番用意。目標敵艦隊。方位12時、速度18、距離6500。」

『調整完了!』

二一ナ

「魚雷発射!」

シュパパー!

宮木

「急速潜航!」

その頃、サブールム艦隊は……

指揮官

「どうだね、参謀長! 良い眺めではないかね?」

参謀長

「はあ……。」

昼間ならそう見えるかも知れないが、夜に言っただけで見えないんだから仕方がない。やっと、星明かり、月明かりで艦の輪郭が判る位だ。

指揮官

「これで日本艦隊なんぞ、一撃だ！」

参謀長

「……………」

そんな簡単にいくだろうか…と参謀長が思った瞬間！

ズガン！ズガン！ズガン！

指揮官

「！！！！！」

参謀長

「どうした！何があった？」

士官

「く、空母ベネスに魚雷が命中！」

指揮官

「なに！被害は？」

士官

「右舷に魚雷3本命中！被害不明！」

指揮官

「敵だ！敵潜水艦だ！近くに居るぞ！撃沈しろ！」

そんな指揮官の命令に駆逐艦が走り回り潜水艦を探す。

だが……

ズガン！ズガン！

参謀長

「今度はなんだ!？」

士官

「空母タニアに魚雷2本命中！」

指揮官

「くそ、潜水艦は何処に居るんだ？魚雷の射程から見ても3000mかそこらにいるはずだ！」

駆逐艦も、そこら辺に爆雷を叩き込むが、効果は無かった。

806

二一ナ

「どお？」

聴音手

「はい、命中音を3つ確認。それに続いて2つの命中音を確認しました。」

二一ナ

「うーん、5本命中なんてあり得るのかな？」

宮木

「魚雷の速度と敵速を考えれば、後者の2本は、伊700潜のでは

ないでしょうか。」

二一ナ

「そうね。そっちの可能性が大きいわね。」

零

「それにしてもサブールム軍も見当違いの所に爆雷をばら蒔いてるよね。」

二一ナ

「ま、酸素魚雷なんて物の存在自体知らないし、知っても日本海軍が保有してないと思ってるわね。」

宮木

「はあ……。」

なんで、艦長も艦魂も呑気なんだ？

それとも、自分がそう思っているだけなのか？

そうな、色々な思いを載せつつ、伊400は離脱して行った。

伊400と伊700が離脱した20分後、空母ベネスとタニアは、酸素魚雷により大穴が開き、排水が追い付かず、転覆沈没した。突然の前哨戦は日本海軍に軍配が上がる結果となった。

次号へ



## 前哨戦（後書き）

作者「はっ、と気付けば122話…。」福本「前置きが長かったかならなう。」「マリーダ」そして、何話で終わるかも見当もつかないと。  
「作者「あはは…お恥ずかしながらもその通りです。」「福本「はあ…大丈夫なんですか？」「作者「あゝ、多分。」「マリーダ」で次号は？」作者「『海戦前の大宴会』お楽しみに。」「福本「ご意見ご感想お待ちしております。」「

## 海戦前の大宴会！

7月25日 夕方 第七艦隊旗艦播磨會議室

播磨

「じゃあ、皆！ 明日の勝利を祈って… かんぱーい！」

『かんぱーい！！』

福本

「こんな、時間から… 宴会なんて…… まあ、俺は良いけどさ。」

遠地

「ははは… 酒が飲めない奴にとってはどうかは知らないがな。」

さて、ここで艦魂達の話している事を聴いてみよう。

春日

「やあ。フッド、レパルス。」

フッド

「これは、春日様と日進様、それに畝傍様。」

日進

「もう、2人共。いくら私達が古参だからって、様なんてつけないですよ。」

レパルス

「いえいえ、春日様、日進様は、色んな意味で我々の先輩です。もちろん、畝傍様もですが。」

畝傍

「もお、そう言うのはなし。無礼講で飲もう！」

ビスマルク

「シユペーさん、いよいよ明日ですね。」

シユペー

「ええ…本拠地に砲撃なんて、あまり機会は無いわね。」

ビスマルク

「一度日本海軍が砲撃している所を砲撃するんですけどね。」

薩摩

「それでも、良い経験になるわ。」

播磨

「そうそう。」

ツエツペリン

「そう言えば皆さん、新型機が配備されたそうです。」

アリソン

「ええ、艦戦、艦爆、艦攻の第一期生産機と艦偵の試験運用です。」

インドミダブル

「へえー、良いわね。私達なんか待っても待っても新型機なんか来ないのに。」

ハーミズ

「そうそう、いつまで経ってもソードフィッシュよ。呆れて何も言えないわ。」

インドミダブル

「あゝあ、羨ましいな。理解のある上官と上層部と優秀な開発部が有って！」

ミハエル

「何せ、連合艦隊司令長官が航空隊育ての親ですからね。」

クレア

「山本長官には、何度かお会いした事が有るけど、気さくなお方よ。」

片山

「そして、その下で短期間ながらも事務官をしていたのが、福本長官です。」

吉田

「そりゃ、僕達も最初は驚きましたよ。自分達とそんなに歳が離れない人間が長官なんて。」

ハーミズ

「けど、受け入れた。」

吉田

「ええ、福本長官は話の判る人ですから。」

プリンス

「はあ……。」

溜め息を吐く、プリンス。ちなみに、彼女が居るのは播磨の防空指揮所だ。

さて、なぜ、彼女がこんな所に居るかと言うと、宴会に呼ばれたのだが、呪われている自分が行くのはやめた方が良いと思ったからだ。じゃあ、なんでここに居るかと言うと、フッド・レパルスに連れて来られたためだ。(うまーく、抜け出したが)

プリンス

「もお、フッドさんもレパルスさんも余計なお世話なんだから……。」

和泉

「ん、誰かそこに居るのか？」

プリンス

「ヒャア！」

誰も来ない、と思っていたから余計驚いたプリンス。

和泉

「なんだ、プリンスか。」

プリンス

「えーと、あなたは……。」

和泉

「和泉だ。あの海戦の後、遠地と一緒に挨拶に来た。」

プリンス

「あ、ああ……あの時の……。」

和泉

「そんな事より、何してる？」

プリンス

「あなたこそ、なぜここへ？」

和泉

「月見酒だ。ここは見晴らしが良い。」

気付いてみれば、とっくに日は沈み、空には満月。

プリンス

「……酒好きとは聞いてたけど……ここまでとは……。」

和泉

「五月蠅い……お前こそこんな所に居るのは、また『呪い』の事だ  
る。」

プリンス

「…………なぜ、その事を？」

和泉

「フッドさんから聞いた。名前の『プリンス・オブ・ウェールズ』が『王位を掛けた恋』とか何とかで、嫌われてる名前とか。」

プリンス

「ええ、そうよ…。」

和泉

「で、建造中に、小火ホヤが起きたりとか、造船所が誤爆されたりとか、トラブルばかりとか。」

プリンス

「…………そうよ。」

和泉

「今回は、今回でハーミズさんとフッドさんとレパルスさんの事も『呪い』て言うし。」

プリンス

「…………何が言いたいの？」

和泉

「あなた、馬鹿？」

プリンス

「…………はあ?!」

和泉

「結局、名前のせいと言うか、呪いのせいにしてるけど、あなた次第じゃない？ 私の知ってるウエルズは、ダリア・エステロール連合王国の国王だけど、変な事になってないわよ。」

プリンス

「……他人で、関係ないと思っんですけど。」

和泉

「ありゃ、そう？……まあ、いいや。で呪いの事だけ。」

プリンス

「はい…？」

和泉

「…ちょっと待っててね。」

そう言い、和泉は一升瓶を置いて、どこかに転移した。

和泉

「はい。お待ちどうぞさま。」

そう言って連れて来たのは、神童と神波。

プリンス

「え？え？いったい何なの？」

人間と艦魂…呪いといった何の関係があるのやら？



和泉

「神童。さっき話した通り、お被いお願いね。」

神童

「わかってます。プリンスさん、ちょっと体を借りますよ。」

プリンス

「え！ち、ちょっと！オハライて何なのよ?!」

神波

「大丈夫ですよ、プリンスさん。神童さんのお被いはよく効きますから」

プリンス

「あなたに保証されても、意味ない！その前に、オハライて何なのよー!」

さいはて、お被いが効いたかは……後の話。

次号へ

海戦前の大宴会！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## サブールム艦隊壊滅！（空母戦）

5月26日 9時00分

旗艦播磨

神谷

「長官！ 2式艦偵三番機、サブールム艦隊発見しました！」

福本

「数は？」

神谷

「戦艦10、空母6、重巡8、軽巡6、駆逐艦多数。」

福田

「先輩！」

福本

「沖田司令に連絡。第一次攻撃隊発艦。次いで、全艦戦闘態勢に移行。サブールム海軍最後の艦隊だ。気を引き締める！」

神谷

「了解！」

ラフィール

「総員戦闘態勢に就け！」

士官

「司令、播磨より発火信号です。第一次攻撃発艦せよ。」

沖田

「よし、許可が出たぞ。発艦せよ！」

士官

「了解！」

ヴィル

「アリソン、無事に戻って来てよ。」

アリソン

「大丈夫。そっちこそ、母艦をよろしくね。」

ヴィル

「ああ、わかってる。片山中佐、よろしくお願いします。」

片山

「大丈夫ですよ。大佐は肩の力を抜いて待ってて下さい。」

ドン！

カタパルトが零戦を発艦させる。

そして、99式艦爆、97式艦攻が続く。

しかし、その中に、新型機が混ざっている事は一部の人間しか知ら

ない。

その頃、サブールム艦隊も、6隻の空母から攻撃隊を発艦していた。第七艦隊に遅れること20分、偵察のドーントレスが発見したからだ。

双方初の空母戦の幕が上がった。

艦攻搭乗員

「敵艦隊発見！」

大宮

「よし！ 全機突撃！」

無線に叫ぶと零戦隊と艦爆隊が真っ先に突撃した。

アリソン

「全機、敵の技量は判らないは。冷静に対処し、攻撃隊を護衛すること！」

『了解！』

言い終わり、前方を見るとF4Fが闘牛の様に突進してくる。

その数、30機程。

直ぐ様、増槽を投下すると空戦に入る。

アリソン

「何機でも掛かって来なさいよ。全部落としてあげるから！」

片山

「よし、撃墜！」

黒煙を出しながら墜落するF4Fを見ながら、歓喜の声を挙げる。

片山

「（しかし、スゲーな、この54型は。今までの25型とは違っぜ。）」

今、アリソンや片山が乗っている54型は、史実なら『幻の零戦』とか『金星零戦』などと呼ばれ、試作で終戦を迎えた零戦である。

片山

「さあ、来るなら来い！ 今日の俺は一味違っぜ！」

大熊

「艦爆隊、突撃！ 続け！」

『おっ！』

サブム艦隊は対空弾幕をはって対応するが、第七艦隊の弾幕に比べれば小雨だ。

大熊が乗る艦爆が爆弾体勢に入る。

キヤーン！

大熊

「（さすが、新型の彗星だ！ 彗星みたいに急降下…惚れ惚れするぜ）よーい、てえー！」

カチッ

ヒューーウ……

ズガン！

彗星から投下された、500kg爆弾は見事に空母の飛行甲板を貫通し、甲板を捲り上げる。

艦爆搭乗員

「後続も爆撃しています！」

大熊

「よし、引き上げるぞ。」

大宮

「我々の出番だな！」

今まで、好機を狙い旋回待機していた艦攻隊が必殺の魚雷をひっさげ雷撃体勢に入る。

大宮

「よーし、良いぞ。そのまま…。」

もちろん、サブム艦隊も対空弾幕で対応するが、やはり……シヨボい。

大宮

「そのまま……よい、てえ！」

カチン

ザバン

シャー……

魚雷を投下したら、戦果確認は通信員兼後方銃手の役目である。空母を飛び越える途中、下向きの13mm後方銃が吠える。

艦攻搭乗員

「やりました！命中！命中です！」

振り向くと、命中を示す水柱がたっている。

一本……二本……三本……

五本は命中しただろう。

他の空母も、傾いたり、火災が発生している。

大宮

「こんなもんか……よし、引き上げるぞ。」

攻撃を終えた天山、97艦攻が引き上げる。第一次攻撃隊の攻撃は終わった。



その頃、第七艦隊では……

福田

「先輩。沖田から第二次攻撃隊の発艦が完了したそうです。」

福本

「そうか。」

神谷

「長官！レーダーに反応。敵攻撃隊接近中！」

福本

「間一髪と言ったところかな。機数及び距離は？」

神谷

「機数120機程、距離は100kmです。」

福本

「戦闘機隊を前に出して、迎撃させる！艦隊は輪陣形を出来るだけ狭めるんだ！」

福田・神谷

「了解！」

福本

「遠地、試制弾の準備は？」

遠地

「バッチリだ。あとは…神谷、レーダーの情報もこっちにまわしてくれ。」

神谷

「はい、分かりました。」

遠地

「とまあ、こんな感じだ。」

福本

「…そうか。」

クレア

「全機突撃！一機足りとも抜けさせないでよ！」

『了解！』

50機の零戦が敵攻撃隊に襲いかかる。  
ちなみに、クレア・吉田の搭乗機は零戦54型だ。敵攻撃隊も戦闘機隊が前に出て立ち向かってくる。

タダダダ

ババババ

ゴワーン！

吉田

「さすが13mm。防弾重視のF4Fが簡単に落ちるな。」

あちこちで空戦に成っているが、零戦隊が有利だ。  
だが……

吉田

「こちら、吉田。敵攻撃隊60機程抜けました。迎撃お願いします  
！」

神谷

「長官！」

福本

「遠地、準備はいいか？」

遠地

「ああ。ラフィール、砲撃開始！」

ラフィール

「了解、目標敵攻撃隊。てえー！」

ズガン！ズガン！ズガン！

播磨の46cm砲から放たれた砲弾は敵攻撃隊に行く。  
戦艦の主砲が航空機に当たる訳がない。  
そう、普通の砲弾なら……

チカッ

ババババババババババババババババババババババババン！！！！

そう……普通の砲弾なら……

ジント

「やりました！ 半分は落ちましたよ！」

福本

「試制弾…採用名称3式弾…使えるな。」

遠地

「ああ。ただ……信管調整が難しいのが困ったとこだな。」

福本

「そこら辺は新型信管が出来ないと何とも言えないな。」

福田

「敵攻撃隊30機程、突撃して来ます！」

福本

「全艦対空射撃始め！」

ドン！ドン！ドン！ドン！  
ダダダダダダダダ  
ババババババババ

攻撃隊にしてみれば、地獄だったかも知れない。

何せ、自分達の艦隊の対空砲火が小雨程度に思える程の砲火。この砲火に捉えられ、ドントレスが、デバステーターが火を吹き、あるいは機体を刻まれ落ちてゆく。

結果……サブلم艦隊から放たれた攻撃隊はわずか十数機しか戻って来なかった。しかし…彼らを迎える母艦はなかった。

第七艦隊の第一次攻撃隊にボコボコにやられたサブلم艦隊。間の悪い事に、第二次攻撃隊の準備をしていたところに第七艦隊の攻撃隊が来襲したため、火災が発生、消火に時間がかかっていた。第二次攻撃隊が到着したのは、そんな時だった。なんとか、傾斜を回復させた空母2隻から戦闘機を出撃させたが、第一次攻撃隊とほぼ同数の200機の前に、あつという間に撃墜された。

戦闘機の妨害も無く、対空砲火もほとんど無い状態では、損傷空母6隻はあつという間に撃沈された。

次号へ

**サブールム艦隊壊滅！(空母戦)(後書き)**

ご意見感想をお待ちしております。

## サブールム艦隊壊滅！（艦隊戦）

旗艦播磨艦橋

福本

「攻撃隊の被害は？」

神谷

「未帰還機はありません。しかし、被弾機が多く、修理に時間がかかるそうです。」

福本

「なるほど……じゃあ、第三次攻撃は延期だな。」

福田

「…では！」

福本

「航空戦隊は、一個防空戦隊を護衛に付けて離脱。残りは、敵艦隊を攻撃する。」

遠地

「よし、砲術科の出番だな。」

福本

「神谷、偵察機から連絡は？」

神谷

「今のところ、何も。」

遠地

「艦隊戦を挑むか、あるいは撤退するか、迷ってるかな？」

指揮官

「な…何と言うことだ…。」

6隻の空母が、あちこちで燃えて…あるいは沈没していく。

指揮官

「…こうなれば、艦隊戦だ！ 空母の処分が完了次第、艦隊をまとめて、日本艦隊に艦隊戦を挑む！」

参謀長

「待ってください！ 日本艦隊の技量は未知数ですが、我々よりは高い筈。ここは一度撤退してはどうです？」

指揮官

「何を言うか、参謀長。戦艦さえ撃破すれば、無防備の空母が居る。それさえ、撃沈すれば、逆転できる！」

参謀長

「……………」

そんな、簡単にいくだろうか？

手負いならまだましも、無傷の戦艦と空母がいる。

艦載機だって、ほぼ無傷の筈だ。

そんな、日本艦隊に仕掛けたところで…勝てる訳が無い。



参謀長

「はあ……（王弟殿下が実権を握ってから、何かがおかしく成っている……そんな気がするのには気のせいだろうか？）」

神谷

「長官！ 偵察機より報告。敵艦隊、本艦隊に接近中！」

福本

「来たな。まあ、撤退しないで向かって来たのは誉めてやろう。」

遠地

「ああ。皆、これがサブールム海軍最後の水上打撃艦隊だ。気合い入れるいこう！」

福田

「了解！」

ラフィール

「わかりました！」

ジント

「はい！」

福本

「千歳、会敵は？」

千歳

「敵速によるけど…4・5時間後と言ったところね。」

福本

「となると、遅くても1700（ヒトナナマルマル）時か…夕方だな。」

マリイダ

「全艦に夜戦準備も命じておきます。」

福本

「ああ、頼む。」

そして、一時間半後……

神谷

「レーダーに反応！ 敵艦隊、捉えました！」

福本

「よし。敵艦隊とは、間があるな？」

神谷

「はい。敵水雷戦隊もまだ突撃していません。」

福本

「わかった……遠地、アウトレンジ砲撃をやるっ。」

遠地

「よし、距離は35000で良いか？」

福本

「任せる。」

遠地

「心得た。神谷、後続に連絡。アウトレンジ砲撃用意！ 各艦に観測機を飛ばすよう言ってくれ。」

神谷

「了解！」

士官

「敵艦隊との距離、35000m。」

指揮官

「よし、快速部隊を突撃させよ。多少でも良いから、戦艦にダメージを与えるんだ！」

士官

「は…！敵一番艦から四番艦発砲！」

指揮官

「馬鹿め！ そんな距離から届く訳が無い！」

そう、普通の主砲なら。

ヒューーウ……

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！

指揮官

「な、なにー！！！」

艦橋よりも高い水柱。

それが40本…。

士官

「や、奴らの主砲は化け物か?!」

指揮官

「と、突撃しろー！ 本艦も突撃するんだ！」

士官

「は、はい！」

福田

「近弾です。」

福本

「まあ、遠距離射撃だ。そうそう、当たらんだろう。」

マリーダ

「敵巡洋戦隊及び水雷戦隊、突撃してきます！」

福本

「こちらも、巡洋戦隊と水雷戦隊を出して迎撃せよ！」

神谷

「はい！」

篠森

「突撃！」

士官

「はい！」

ズカーン！

第三戦隊の六甲・畝傍が自慢の25cm砲が火を吹く！

巡洋艦同士の砲撃戦も、白熱する。

神童

「撃てー！」

ダーン！ダーン！ダーン！

駆逐艦同士の砲撃戦は、戦闘機のドックファイトの様に、機動して撃ちまくる！既に魚雷を発射し、混乱したところを突撃した日本軍水雷戦隊は敵を徐々にだが圧倒していく。

ヒューーウ……

ザバーン！ザバーン！ザバーン！

カガガーン！

士官

「ああ！アマテラス轟沈！」

46cm主砲の直撃を受けたアマテラスは、弾薬庫に引火、船体を真っ二つにし沈んでいく。

参謀長

「（間違っていたんだ。だいたい、日本の天皇を馬鹿にするなんて……日本に喧嘩を仕掛けて、無事にいた国なんて無いじゃないか！）」

「

ズガガーン！

指揮官

「今度はなんだ！」

士官

「ムスペルヘイム、大破！」

見ると、艦橋などの構造物が、スクラップ山の様な状態だ。

士官

「敵との距離、25000m！」

指揮官

「撃てえ！」

ズガン！

サブールム艦隊もやっと発砲する。だが……

ドガン！

ヘル・アーチエに土佐の放った42cm弾二発が命中。  
籠型マストがへし折れ、砲塔の防盾を貫通し、破壊する。

指揮官

「くそ！このままでは……。」

士官

「あ、敵水雷戦隊が突撃してきます！」

指揮官

「なに！」

乱戦の中、突撃して来たのは第6水雷戦隊と、島風型駆逐艦で編成した第9駆逐隊である。

つい先程まで、敵水雷戦隊と撃ち合っていた、両隊であったが、敵水雷戦隊に出来た隙間を突いて戦艦に迫る！

戦隊旗艦 遠賀

「突撃ー！突つ込めー！」

そう言い、軍刀を抜いて指示を出すのは、第6水雷戦隊司令、上杉真里少将。

そして、隣に居るのは、幼なじみ兼参謀、直江愛大佐。（ちなみに2人供女性士官だ。）

上杉

「愛。距離は？」

直江

「6000m。」

上杉

「よし、魚雷発射！」

シュパパー！

遠賀搭載の四連装61cm魚雷発射管一基+大波型駆逐艦搭載の四連装61cm魚雷発射管二基×8+島風型駆逐艦搭載の五連装61cm魚雷発射管二基×4………128本。  
つまり、戦艦一隻に10本以上が向かう訳だ。

上杉

「全艦、牽制しつつ、離脱！」

指揮官



「何がしたかったんだ、奴らは？」

突撃して来た、敵快速部隊は 自艦搭載の火器で牽制しつつ、離脱して行く。

参謀長

「（いや、そんな筈は無い。あそこまで来て何もやらない訳が……）まさか！」

指揮官

「どうしたのかね参謀長？」

その時

ドゴゴーン！

鈍い爆発音が響いた。

福田

「やりましたよ、先輩！」

福本

「ああ、後で感状を出さないと！」

第6水雷戦隊と第9駆逐隊の見事な雷撃で、サブールム戦艦に命中の水柱が立つ。戦艦一隻につき3・4本…命中率は2・3割だが、酸素魚雷を受けて無事である筈が無い。

ジント

「敵1番艦、傾斜してます!」

神谷

「各艦から連絡。敵2番艦、速度低下。4番艦、火災発生。5番艦、傾斜。6番艦、速度低下。」

福本

「よし! 敵は大損害だ!」

遠地

「そうだな。このまま……」

ズガガーン!

マリーダ

「!!どうしたの?」

神谷

「か、春日より連絡。敵9番艦、轟沈!魚雷命中により弾薬庫誘爆した模様! 同時に日進より連絡。敵10番艦、大傾斜後、転覆沈没!」

福田

「先輩、敵隊列が乱れていきます!」

福本

「敵の足並みが乱れたぞ!一気に叩いてしまえ!」

闇の中、あちこちで炎上している艦は、サブム艦ばかりである。既に戦艦4隻が沈没し、残りの6隻も撃ってはいるが、完全に不利だ。

士官

「ダメです。装甲が違い過ぎます！」

指揮官

「くそ……」

ズガガーン！

士官

「ベルズフリード、大破！」

指揮官

「……進路変更、敵旗艦にぶつける！」

参謀長

「な……正気ですか?!」

指揮官

「正気だ。何をしている！早く進路を変えんか！」

士官

「は、はい！」

福田

「敵2番艦、主砲沈黙。4番艦、火災延焼中。5番艦、浸水により傾斜。」

神谷

「敵6番艦、艦首より沈没中。8番艦、機関停止漂流中。」

福本

「そうか…。」

遠地

「しかし、敵旗艦は中々沈黙しないな。」

ジント

「ええ…あれ？敵旗艦進路変更！」

福本

「なに？」

遠地

「逃げるか？」

ジント

「……いえ！敵旗艦、本艦に向け接近！」

遠地

「まさか、刺し違えるつもりか?!」

福本

「その勇気は称えよう。だが、播磨に沈める訳にはいかん。」

マリーダ

「全艦、敵旗艦に砲撃集中！」

ズガン！ズガン！ズガン！

他の艦も、敵旗艦の意図に気付いたのか、直ぐ様、旗艦に砲撃が集中する。

ガガン！

その内の一発が艦橋に命中する。

ガガン！ガガン！ガガン！ガガン！

速度が遅くなつた敵旗艦に砲撃の猛打が飛ぶ。  
そしつ……

チカツ！

ドゴゴーン！ドカガーン！

弾薬庫に命中したのか、誘爆轟沈する。

福田

「敵旗艦、轟沈！」

福本

「撃ち方止め！戦闘はどうだ？」

神谷

「敵大型艦はほとんどが沈没。軽巡2隻と駆逐艦が逃走した模様。我が方の損害は軽微。」

福本

「戦闘止め！全艦救助作業に入れ！」

全員

『了解！』

再び慌ただしくなったのも他所に、福本は未だに炎上中のサブールム戦艦に、静かに敬礼をしていた。

参謀長

「ぐ……ん、ここは？」

気が付いたら、海に浮かんでいた。しかも、いつの間にか板切れに掴まっていた。

参謀長

「（そうか…あの時、艦橋に敵弾が命中して……上手い具合に、海に吹っ飛ばされたのか…。）」

周りを見ると、居るのは、日本艦隊しかない。勝敗は言わなくても判る。

参謀長

「さて、どうしたものか…。」

既に夜になっている。  
見付かるかは、怪しいところだ。

パシヤツ

日本駆逐艦が探照灯で、漂流中の兵士を探すために海を照らす。  
照らされた時、眩しく感じたが、直ぐに手を振ると、気が付いたの  
か、カッター（ボート）を下ろして、こっちに来る。

参謀長

「なんとか…助かったな…。」

次号へ

サブールム艦隊壊滅！（艦隊戦）（後書き）

作者「キツいな：4000字は。」福本「お疲れ様で。」マリーダ  
「大学の講義中でも、このままね。」作者「うん、いちいち、サイ  
ト行くの面倒臭い。」マリーダ「……講義大丈夫なの？」作者「そ  
れ位、自力で抑えられる。」福本「え、ご意見ご感想お待ちしております  
。」



人も歩けば……

双方損害

サブールム艦隊

戦艦……10隻撃沈

空母……8隻撃沈

重巡……8隻撃沈

軽巡……4隻撃沈、2隻中破  
駆逐艦……8隻撃沈、8隻大破、8隻中破、  
2隻小破

日本艦隊

戦艦……全艦小破

重巡……雲仙・吾妻小破

軽巡……吉野・天神・武庫小破

駆逐艦……山波・突波・風波・潮波中破、宮月・北月小破

なお、損傷艦はパトミナス港にて修理済み。(一部を除く)

サームイール軍港砲撃成功。

再建に暫しの時間がかかる模様。

8月3日 ミサリア港

第七艦隊旗艦播磨

福本

「しかし、サブلم帝国は何をやっているんだ？」

マリダ

「ええ、いくら何でも10隻の戦艦と8隻の空母を殺られたのよ。休戦交渉でもしてきてもいいはずよ。」

遠地

「確かに、これ以上放置しても、サブلم帝国の立場が悪くなるだけだ。」

千歳

「なのに、何もしてこない……おかしいわね。」

沖田

「我々も、何時までもヴィントラント王国に留まる訳には参りませんからね。」

福本

「アメリカの動向も、気になる。中国と一緒に言い種で我が国を批判している。」

遠地

「侵略しているのは、日本帝国だ、と言ってやがる。主に、民主党系列の新聞だな。」

福田

「何ですかそれ？ ルーズベルトが言ってるのと一緒にじゃないですか！」

マリィダ

「落ち着きなさい。けど、確かに問題ね。」

新沢

「イギリス・ドイツを初めほとんどの国、我が国の行動を支持しています。アメリカがここまでやるとなると、本気で戦争をする気で  
すよ。」

福本

「そつだな…ん、おっと、時間だ。今日はここまでにしよう。」

ミサリア街中

福本

「…久しぶりだな。」

マリィダ

「ええ、こんなにゆっくり歩くのも久しぶりね。」

街中を歩く、2人。

（ちなみに、デートではないぞ。）

カリン

「おお、お二人供、お久しぶりです。」

マリィダ

「カリンさん。お久しぶりね。なぜここに？」

カリン

「数日前に前線から引き上げて来まして…今は息抜き中です。」

福本

「そうですね。あ、お昼まだですか？ まだなら一緒に食べませんか？」

カリン

「そう言えば…。」

福本

「どうしました？」

食事を終え、紅茶で一息いれていた時に、カリンが呟く。

カリン

「サブム帝国はなぜ、何も言っていないのだ？ 戦況は不利な筈…。」

マリダ

「さあ…それは何とも…。」

福本

「……自分が思うに、我々が戦っているのは、サブム帝国ではないのかもしれませんが。」

マリダ

「へえ？」

カリン

「と、言いますと？」

福本

「…分かりません。ただ、そう思うんです。」

カリン

「ふむ…。」

その時

ガシャーン！

福本

「なんだ？」

マリータ

「外で…騒ぎみたいね。」

立ち上がり、窓から外を見る。

すると、2人の少年少女と、妙に派手な格好した5人組。

カリン

「あ…あれは…。」

マリータ

「知り合いですか？」

カリン

「プリーシアとハヤウエイ……私の教え子だ……。」

まさに、またやったか……。みたいな顔をするカリン教官。

福本

「……ちょっと行ってきます。」

カリン

「え、あ、いや！私の問題です……。」

福本

「多分、カリンさんが行っても解決しませんよ……では！」

一発即発……その言葉が似合いそうな状況だ。

「そなた達が悪いのだぞ！」

「何を言つか、下級騎士は黙ってる！」

少女と5人組の言い合いは埒が空きそうにない。  
と、言う事で……

福本

「（ハヤウエイくん。）」「

少女の近くで老婆さんを介抱している少年の名を呼ぶ。  
本人も気付いたのか、老婆さんの娘さんらしき女性に介抱を頼み、  
こちらに近付く。

(ちなみに、120騎士隊の人間は福本達の顔を知っている。)

福本

「(どうしたの?)」

ハヤウエイ

「(あ、どうも。実は……)」

そう言つて、指差す方を見ると、半壊状態の出店。  
見た瞬間、大体の事情は理解出来た。

福本

「成る程、そう言う訳ですか…分かりました。ハヤウエイ君はプリ  
ーシアさんをお願いします。」

ハヤウエイ

「あ、はい。」

福本

「まあまあ、双方、落ち着いて。」

お互いの間に入った福本。とにかく、この状況をどうにかしないと、  
話は始まらない。

少女…プリーシアは声の主を知っているから、直ぐに頭を下げる。

福本

「ここは通りだ。通りの真ん中で喧嘩は、通行人の邪魔……」

「うるさい！ すっこんでろ。」

……なしてそう成る？

「大体、我々を誰だと思っている？ 親衛騎士団の者だぞ！」

フリーシア

「だからと言って、金も払わず、食べて良いことではないぞ。その上、払えと言われて出店を半壊にする理由ではない！」

福本

「やっぱりか……。」

居るんだよね。こつ言うバカが。  
ん、親衛騎士団？

福本

「ああ、思い出した！ 貴族のバカ息子で編成した、逃げ足だけは早い、大威張り騎士団！」

親衛騎士団5人組

「……………」

カリン

「そ、そうなのか?!」



マリーダ

「ええ。そちらでは、なんと言われているかは、わかりませんが。」

「

親衛騎士団員1

「き、貴様！ よ、よくも我々を馬鹿にしたな！」

福本

「本当の事でしょう。言われなくなったら、最前線で戦って来い。」

「

親衛騎士団員2

「に、日本人が！ 偉そうに威張るな！」

福本

「なら、日本なしでサブルム帝国に勝ってくれ。大体、あんたらは街の人間から嫌われてるよ。『貴族の息子は威張って、わしらを虐める。』と。」

親衛騎士団員3

「北洋の蛮族が！ 調子にのるなー！」

そう言い殴りかかるが……

バシッ！

親衛騎士団員3

「！……」

福本

「…遅い！」

バキッ！

殴りかかった拳をつかみ、親衛騎士団員3にアッパーを喰らわす。

ドシャ！

親衛騎士団員5

「！！！！」

親衛騎士団員1・2・4

「「貴様！」「」

そう言い剣を抜き、斬りかかってくる。

福本

「まったく。北洋の蛮族とは…勝てない筈だ。」

不敵に笑うと、愛用の軍刀を抜く。

福本

「でりゃー！」

親衛騎士団員1・2・4

「！！！！！！」

僅か…僅か一瞬…

ドサ！ドサ！パキン、ドサ！

カリン

「な…なんと…3人を…一瞬で…しかも…剣まで折ってる…」

マリイダ

「久しぶりに出したわね。」

福本

「さて、あとは…」

親衛騎士団員5

「う、動くな！」

福本

「…そう成るか…」

フリーシアを人質にとった親衛騎士団員5。

福本

「…そんな事をしてても意味無いぞ。」

親衛騎士団員5

「う、うるさい！は、早く武器を捨てる！」

福本

「…そーだな、まずは上を向いて考えたらどうだ？」

親衛騎士団員5

「へえ…??？」

ガァァン！

顔面に直撃したのは……フライパン。

福本

「よくやったな、ハヤウエイ。」

ハヤウエイ

「ありがとうございます。福本長官。」

福本

「さて、フリーシア。大丈夫かね？」

フリーシア

「あ、はい……。」「

カチャ

福本

「ん、時計？」「

足の先に当たったのは、年代物の懐中時計。

福本

「フリーシア、君のか？」「

フリーシア

「え、あ、はい！」「

福本

「？何をそんなに……」

時計を取った瞬間、この時計を見た事がある気がした。  
そう……これは……！！

福本

「まさか…君が?!」

フリーシア

「……………」

数時間後

播磨会議室

マリダ

「それでは、フリーシアさんは…12年前に……。」

カリン

「ああ…すまぬ！ 皆さんに黙っていて！」

福田

「いえ、福本長官が言っていた様に、裏切りの心配が有れば、そうなるのは当然です。」

沖田

「今回、あなたが話された事は、我々は絶対、戦争終結まで黙って

おきます。」

カリン

「重ね重ね、すまん！」

遠地

「まあ、なんとかこれで復興の兆しが見えたな。」

福本

「ああ……あとはサブルム帝国だけだな。」

マリータ

「ねえ、なんでプリーシアがお姫様で判ったの？」

福本

「時計さ。」

マリータ

「時計……あの年代物の懐中時計？」

福本

「前に、国王の家族写真を見たんだ。王女様が似た懐中時計を首から下げていた……それだけだよ。」

次号へ

人も歩けば……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 亡命の姫君

8月12日 サブルム帝国領内 エリエント

エリエントはサブブルム帝国最大の造船の街である。

実にサブブルム帝国の90%以上の造船を担っている街だ。

戦略上、こういった街は空爆対象に成りえるのだが、アメリカに介入の口実を与える、サブブルム帝国の造船期間が日本よりも長く、それほど脅威がない、などの理由で手をつけていなかった。

深夜

「こらー！待てー！」

「誰が、待ちますか！」

「ひ、姫様。待ってくださいよ。」

「もう、仕方ないわね。」

持っていた鞆から、丸い物を、追跡者に投げつける。



ボン

「うわ！なんだ？」

「え、煙幕だ。」

「流石、姫様！」

「ほら、今の内に逃げるわよ。」

「くそ、どこに隠れやがった？」

「おい、あつちを探せ！」

あちこちで、男達の声が聴こえる。  
自分達を血眼になって捜している様だ。

「姫様……。」

「大丈夫。とにかく、隠れ場所を探さないと……。」

「ねえ、あなた達。ここで何してるの？」

「「ひゃあ！」」

誰も居ないと思って飛び込んだ倉庫に人が居たから、2人は飛び上がらんばかりに驚いた。

「そ、そんなに、驚かないでよ！」

「「いや、驚く！」」

「おい、ワルキューレ！さっきの叫び声はなんだ？」

「あ、アルファーニ。ここ、ここ。」

現れたのは、童顔の青年士官。

「えーと……あなた方は？」

「私がここに居たら、勝手に入って来たの。」

「いや、君の場合、普通の人は見えないから、解らないよ。」

「おい、そのこの2人！ 2人だけで、話を進めるな！その前に、お前達は何者だ？」

「あ、そっか、自己紹介がまだだったよね。僕はサブム帝国海軍大尉のアルファーニ。」

「私は、ワルキューレ。アルファーニが乗艦してる艦の艦魂。」

「艦魂？」

アルファーニ

「えーと……どこから説明したらいいかな？」

「おい、さっき悲鳴が聴こえなかったか？」

「あれを悲鳴と言うかは知らないが……確かに聞こえたぞ。」

「この近くだ！ よく探せ！」

アルファーニ

「もしかして…追われてる？」

「はい…。」

アルファーニ

「…どうする、ワルキューレ？」

ワルキューレ

「ここじゃあ見付かるわね。艦に行きましょう。」

5日後……ミサリア近海

六甲

「姉さん。」

畝傍

「なに、六甲？」

六甲

「福本長官は…どう思っているのでしょうか？」

畝傍

「この戦争は……福本長官も早く終わらせたい…けど、相手次第だからね…。」

六甲

「……………」

石狩

「六甲さん！畝傍さん！篠森司令がお呼びです！」

篠森

「すみません。ちょっとした緊急事態が発生したものですから。」

畝傍

「それで、緊急事態とは？」

篠森

「つい先程、偵察機がサブールム帝国艦艇、五隻を発見しました。」

六甲

「……………緊急事態ですが、それが？」

篠森

「実は、五隻の先頭…戦艦とおぼしき艦影が、撃たれているんですよ…サブールム艦艇に。」

六甲・伊吹・石狩

「…「な、なんだって！」」「」

畝傍

「……………まさか、離反艦……………」

篠森

「可能性はあります。福本長官も、その可能性を考えて、判断・行動せよ、と。」

畝傍

「現場判断ですか…。」

篠森

「現状なら、そちらが効率がいい、と言う事です。」

六甲

「それで…司令は？」

篠森

「離反艦と考え、行動します！全艦全速！」

ヒューーウ……

ザバーン！ザバーン！ザバーン！

アルファアーニ

「くう………（まさか、巡航速中に見付かるとは………）」

行き当たりばつたりで逃げ出したため、燃料不足が目に見えていたから、巡航速で航行していたが、それが仇になった様だ。

「アルファアーニ、逃げられそうか!？」

「姫様！危のうございます！」

追われる原因を作った2人が艦橋に飛び込んできたが、文句も怒鳴る気もない。そう、この人…セシリーさんがやるうとしている事は、正しい事だから。

アルファーニ

「難しいです。主砲或いは副砲が使えれば、逃げ切るかも知れませんが…。」

「なら、早く使いましょうよ。」

セシリー

「ルシニア、この艦には500人程しか居ないので…艦を動かさせても、艦全体は動かせないの！」

ルシニア

「そんな〜。」

アルファーニ

「ワルキューレ。あとどれくらい逃げられる？」

ワルキューレ

「もって一時間…あとはご想像にお任せするわ。」

アルファーニ

「うう、救いの手は何も無しか…。」

しかし、救いの手とは意外なところから現れるものだ。

ワルキューレ

「ん…！前方に日本艦！」

士官

「サブルム戦艦及び、追跡艦四隻、視認！」

篠森

「戦闘用意！」

士官

「了解！」

六甲

「戦艦は…撃つて来ませんね。」

篠森

「サブルム艦艇に撃たないのはわかるが、我々に撃たないのは…亡命か、或いは人員が居ないのか…どちらかだね。」

六甲

「もちろん、私達が撃つのは追跡艦ね。」

篠森

「ああ。」



士官

「司令、戦闘用意完了。」

篠森

「よし、今回は敵追跡艦を追っ払っただけだが、手を抜くな。速度そのまま、撃ち方始め！」

追跡艦艇は、重巡と軽巡の四隻であったが、日本艦四隻が出て来たのを見るや、反転、逃走した。  
第3戦隊も、追っ払うのが目的の為、あえて追尾せず、サブム戦艦の回収に向かった。

アルファーニ

『先程はありがとうございます。本官はサブム帝国海軍戦艦『ワルキューレ』大尉のアルファーニです。無線でのお礼申し訳ありません。』

篠森

「いえ、構いません。本官は大日本帝国海軍第七艦隊第3戦隊司令の篠森蒼紫中将です。ところで、貴艦が追われていたのは、なぜでしょうか？」

アルファーニ

『それについては、本人が喋りたいそうなので、代わってもよろしいでしょうか？』

篠森

「よろしいですよ。」

返事を聞いて、無線からガサゴソ聴こえたが、直ぐに声の主が変わった。

セシリー

『先程の事は、私からも、お礼を申し上げます。私はサブブルム帝国皇帝の娘、セシリーです。』

次号へ

## 亡命の姫君（後書き）

金剛「聞いたぞ。「作者」「何をですか？」金剛「最後に出てきた娘とメイドは『首都飛行作戦！』で出ていたと言っ事を！」作者「ええ、それが？」金剛「あっさり認めたな…まあ、いい。ご意見ご感想を待っているぞ！」

## 姫君の目的

8月18日      ミサリア港

福本

「お初にお目にかかります。大日本帝国海軍第七艦隊司令長官の福本大介大將です。」

マリィダ

「同じく、参謀長のマリィダ中將です。」

セシリー

「サブムルム帝国第19代皇帝のセシリーです。昨日は助けて頂き、ありがとうございます。」

福本

「いいいえ、義務ですから。お連れする時に、部下に粗相はありませんでしたか？」

セシリー

「いいえ。皆さん、礼儀正しい人達ばかりでした。」

福本

「それは良かった。何かあれば日本海軍の恥ですからね。」

マリィダ

「ところで、セシリー殿下。殿下はなぜここへ？」

セシリー

「単刀直入に申し上げます。この戦争を終わらせる為に、参りました。」

福本

「解けませんね。なぜ、あなたが撃たれたのが。」

セシリー

「それは、私が帝国の正式な使者ではないからです。」

マリィダ

「詳しく、お話下しますね?」

その頃、ワルキューレ艦上

播磨

「へえ、じゃあ、3日間は隠れてたの?」

ワルキューレ

「そう。けどね、4日目の夜いきなり、憲兵が踏み込んで来てね  
…あゝ大変だった。」

近江

「どうやって撃退したんですか?」

ワルキューレ

「簡単 憲兵の頭上に木材を落とすだけ!」

全員

「……………」

遠地

「ふう、終わった終わった……おい、どうした？」

ワルキューレの艦内調査に行っていた、遠地・楠木・沖田・ヴィル、そして案内役のアルファ二達が戻って来た。

和泉

「お、遠地。調査は終わったか？」

遠地

「ああ。さすがサブラム海軍の新型戦艦。30ノットの高速、40cm50口径三連装3基の主砲……アメリカの新型戦艦を模倣しただけはあるな。」

楠木

「金剛型を意識した高速戦艦……本当なんでしょうか？」

沖田

「アメリカなら、簡単に設計するでしょう。しかし、なぜ金剛型なんでしょうかね？」

ヴィル

「金剛型が、当時としても最強であったのが、アメリカに残っているんでしょう。」

福本

「なるほど……帝国が何も言わない訳が解りました。」

セシリー

「…信じてくれますか？」

福本

「似た様な話は、日本史、世界史を問わずに調べれば出てくる話です。」

マリィダ

「けど、戦略見直しが必要になるわよ？」

福本

「そうだな……プリーシアさんはどう思います？」

マリィダ・セシリー

「…え!?!」

扉が開き、現れたのは今や未来のヴィントラント王女のプリーシアだ。

福本

「どうだ？殴る気になったか？」

マリィダ

「え、どう言う事？」

福本

「サブム帝国の姫君が来た。と聞いたら俺の所に来て、『サブム帝国の姫に会わせろ!』と言ったんだ。もちろん、拒否したけど。」

「あの勢いでは、人を殺しかねない。そう思った程だ。」

福本

「で、今回は出てきたところを、どうにかしようとも思ってたら……話は聞いただろ？」

フリーシア

「……はい……。」

福本

「さてと、作戦を練るとしますか。」

次号へ



## 姫君の目的（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 報告会議

8月25日 ミサリア港

この日、日本海軍が軍用地としている区画は騒がしかった。と言っても上層部だけだが……。なぜなら……。陸軍の有名人が来るからだ。

福本

「総員、山下大将以下陸軍の方々に、敬礼！」

タラップを登って来るのは、ヴィントラント王国救援派遣軍総司令官、山下奉文大将。

その後からも、陸軍の有名人が続く。

佐藤幸徳、宮崎繁三郎、水思源蔵、栗林忠道と言った派遣軍4個師団の師団長にバロン西こと、第26戦車連隊長西竹一中佐、第64戦隊長加藤建夫中佐などの史実上でも有名な面々である。

10数分後 播磨会議室

福本

「それでは、報告及び作戦会議を行います。」

山下司令官

「ところで福本長官。ヴィントラント王国関係者にも秘密とはいいたい…」

福本

「それについても、お話いたします。まず、この国の姫君が見つかりました。」

宮崎師団長

「それは本当かね！」

福本

「はい。そして、サブウム帝国より、姫君が参りました。この戦争を終わらせたいと。」

山下司令官

「ふむ。しかし、サブウム帝国にその意思は無さそうだが？」

福本

「その事についてですが…重大な詳言が有りました。」

栗林師団長

「何かね？」

福本

「現サブウム帝国、エドアルド皇帝は監禁されており、その弟、レムスが宰相として実権を握っております。」

佐藤師団長

「…つまり、この戦争はそのレムス宰相が仕組んだと？」

福本

「はい、しかも12年も前から。」

水上師団長

「なるほど、ヴィントラント王国夫妻殺害も、知らねところで進んでいた訳か。」

福本

「ええ。そして今、レムス宰相及びエドアルド皇帝は、旧ヴィントラント王都ウエスタディアに居るそうです。」

西連隊長

「：読めました。王都を奪還、そのまま講和に持ち込もうと。」

福本

「はい。詳しくは、参謀長が説明致します。」

マリーダ

「それでは、王都奪還作戦の説明を行います。」

次号へ

## 報告会議（後書き）

遠地「なんだ、作戦内容明かさないのか？」作者「明かしちゃった  
ら、面白くないでしょ？」遠地「まあ、確かに。」作者「ご意見ご  
感想をお待ちしております。」

王都奪還！（前編）

9月2日 深夜 王都ウエスタディア近くの河原

カリン

「確か、ここら辺の筈……あつた。」

福本

「ここですか、裏口は。」

カリン

「はい。近衛騎士隊の頃のままなら……開きました。」

福本

「よし、あとの案内もよろしくお願いします。」

その頃…ウエスタディア近くの陣地

フェルデナント

「……………」

大沢

「眠れませんか、司令？」

フェルデナント

「大沢一水。ええ、明日の事を考えると、眠れません。」

大沢

「自分が言うのはなんですが…福本長官なら、無事に会えますよ。」

フェルデナント

「……そうですね。」

「おや、私以外にも眠れない人間が居ましたか。」

その声に振り向くと、そこに居たのは……

大沢

「に、西竹一中佐！」

フェルデナント

「バロン西！」

西連隊長

「君達が……眠れないかね？」

大沢

「ええ、なぜか気持ちが昂ってしまって。」

フェルデナント

「同じく…バロンもですか？」

西連隊長

「まだバロンと言われているのか、私は？」

フェルデナント

「はい。ドイツ人のほとんどがあなたを知ってますよ。ベルリンオリピックでは、あなたの事が話題になりました。」

西連隊長

「ふむ、女の子の追っかけにはあっていたからな。」

大沢

「なんでそう言う話しになるんですか？」

その頃……福本達は抜け道を進んでいた。

福本

「やはり……しっかりしてますね。」

カリン

「ウエスタディアを整備する際に、石で補強しました。およそ10年前だと聞いています。まあ、この道事態は、もっと古くからあった様ですが。」

マリーダ

「へえ。そうなんですか。」

カリン

「ええ……着きました。」

その声の前に前を見るとあったのは……

福本

「……壁ですね。」



カリン

「えーと……確かこの石を押せば……。」

ゴゴゴゴ!

マリーダ

「成る程、隠し扉ですか。」

マリーダ

「ところで、ここは…地下牢?」

先に出ていたマリーダがカリンに訊く。

カリン

「はい。いざと言う時は地下牢から逃げる様、近衛騎士隊では言われていました。」

福本

「ん、誰か来た! 皆、隠れる!」

サブム兵

「ニヒヒヒ、こっち来いや、ねーちゃん。」

メイド

「い、いやです!」

サブム兵

「な〜に、変な事はしないよ〜。」

メイド

「いやです！大声出しますよ〜！」

サブルム兵

「ここは地下牢だ。大声出しても、誰にも聞こえないよ〜。」

チン

サブルム兵

「デヘヘヘ……ん？」

バキイ！

ドサ

メイド

「キャア……ムグムグ……。」

マリーダ

「ふう……間一髪。」

福本

「よし、皆、出て来て良いぞ。」

福本が愛用の軍刀でサブルム兵を峰打ちで張り倒し、空かさずマリ  
ーダがメイドの口を塞ぐ。

福本

「もういいよ、マリーダ。」

マリーダ

「うん。ごめんね、いきなり口塞いじゃって。」

メイド

「う、ううん。こちらこそありがとうございます…ところで、あなた達はなんなの？」

カリン

「ヴェイントラント王国第120騎士隊と日本軍だ。」

メイド

「…うそ！もう奪還しに来ちゃったの?!」

カリン

「ああ…済まないが、王都奪還に協力して欲しい。」

メイド

「良いですよ！皆、サブルム兵相手に嫌気がさしてきたところですから」

次号へ

王都奪還！（前編）（後書き）

作者「遂に来たか……。」「遠地「何が？」作者「新型インフルエンザ」。」「遠地「あゝ、作者は京都の大学だったな。」「作者「喜んで良いんか、悪いんか……。」「判らん。」「遠地「……。」「ご意見ご感想をお待ちしております。」「

王都奪還！（後編）

さて、王都奪還の為に、王宮に潜入したのは、福本・マリーダ・カリン・第120騎士隊・陸戦隊一個小隊・セシリーの面々だ。  
潜入した部隊により奪還は静かに、そして着実に行われていた。

王宮内サブム軍通信室

サブム士官

「ふわ〜」。

サブム兵1

「すー、すー」。

サブム兵2

「ぐ〜、ぐ〜」

……内規緩過ぎ。

コンコン

サブム士官

「む、誰だ？」

メイド1

「お夜食です〜」。

サブلم土官

「待つてくれ、今開ける。」

土官が扉を開けた瞬間……

サブلم土官

「ん……!!」

バキイ!

ドサ!

サブلم兵2

「ん……?」

サブلم兵1

「なんだ……!!」

ボカ!バキ!ゴン!

日本兵1

「石田中尉、通信室制圧完了。」

石田

「よし。メイドさん、ありがとうございます。」

メイド1

「いえいえ。」

ピー、ガー

サブム兵<sup>3</sup>

『こ、こちら城門！て、敵だ！日本兵が（ゴン！）……。』

石田

「城門も制圧したな。後は水門と弾薬庫、それに……」

日本兵<sup>2</sup>

「中尉、捕虜はどうします？」

石田

「縛ってさるぐつは嘸ませとけ。」

一時間後……

フェルデナント

「……………」

先程から……いや、30分以上前から腕時計を見ている。感覚として10分経ったと思っても、1分位しか経っていなかったりと、気が狂いそうな程遅い時間の経過。

日本士官

「司令、夜が明けます。」

うつすらと明るみを帯びてきた空。

まだか！と叫びたくなったその時……

日本士官

「司令！発煙弾です！」

シウルシウルと上がっていく発煙弾……色は赤…奇襲成功の合図！

フェルデナント

「通信兵！全部隊に攻撃命令！運転手、発進！」

指揮車にしている一式半装軌車の中で矢継ぎ早に指示を出していく。

マチルダ・識名と一緒に攻撃命令を待っていた大沢は空に上がる赤の発煙弾を見た。

識名

「義姉様、あれは……」

マチルダ

「ええ、合図の発煙弾。」

大沢

「じゃあ！」

大島少尉

「大沢、攻撃命令が出た。発進！」

先程、無線で命令を聴いていた大島少尉が命じる。

大沢



「了解！」

マチルダ

「さあ、識名。行きますわよ！」

識名

「はい！義姉様！」

キヤタピラー音も高らかに、マチルダと特ノ式内火艇隊は王宮に通じる橋を渡る。

いつの間にやら、城門が開き、潜入していた一個分隊が手を振って迎える。

勝てる！そう思った大沢だった。

王宮内

サブム士官2

「大変です！日本軍が侵入しました！」

サブム指揮官

「く、外の師団に命じて、日本軍を攻撃しろ！」

サブム士官3

「は！」

そう言い出て行くこととした時。

バン！

サブブルム士官2

「な！」

タタタタ！

石田

「動くな！大日本帝国軍だ！王宮は、我々がほぼ制圧した！」

サブブルム士官3

「なに！」

サブブルム指揮官

「バカな、例えそうだとしても、外に5個師団が……」

石田

「さて、それはどうでしょうか？」

西連隊長

「撃て！」

ドン！

ドガン！

M3リーの側面に一式中戦車改の75mm砲弾が命中、爆発する。

王都郊外にいたサブム軍5個師団は、日本軍4個師団+1個連隊と戦闘の真つ最中だった。しかし、サブム軍には不利過ぎた。陸海軍の早朝空襲で混乱したところに、日本軍が攻撃したため、混乱に拍車をかけ、組織的反撃が出来なかった。

西連隊長

「ふ、よし！一気に叩くぞ！」

福本

「でやあああ！」

マリーダ

「はああああ！」

鬼神の如く……と言うのは言い過ぎかも知れないが、2人の前に立ち塞がった20人のサブム兵にとっては解らない。と言つても、斬つてると言つより峰打ちを多用し、敵兵を張り倒す。10分もしない内に、廊下には張り倒されたサブム兵が転がる。

福本

「張り合い無いな。」

マリーダ

「そうね。」

カリン

「いや…お二方、恐ろし過ぎます……。」

福本

「さて、悪人の面を見ますか。」

バン！

大広間の扉を開けると、そこには2人の男。しかし、1人は知っている。

セシリー

「レムス叔父様、覚悟は出来ていますね？」

レムス宰相

「小娘が、やはりあの時に殺しておけば……。」

セシリー

「私を殺したところで流れは変わりません。いずれ日本軍があなたを追い詰めたわ。」

レムス宰相

「ふん、北洋の蛮族に追い詰められる訳がない。」

福本

「その北洋の蛮族に負けてるんじゃないやあ、はったりにも聞こえないな。」

マリィダ

「ところで、その男は何者？」

カリン

「あ、あなたは！」

福本

「カリンさん、知っているんですか？」

カリン

「知っているも何も、あの方はプリーシア様の親戚……前々代の王の弟の息子……外務卿コルネリオ様！」

マリーダ

「……え〜と、プリーシアの両親から見たら……従兄？」

福本

「ややこしく成りそうだから置いといて……外務卿が何故ここに？」

コルネリオ

「……………」

福本

「ま、見て解らん物は訊いても解らん……なら種明かししてもいいや  
ろ。」

プリーシア

「た、種明かし？」

ハヤウエイ

「????？」

カリン

「ど、どう言う意味ですか？」

福本

「……12年前の国王夫妻襲撃殺害事件…フリーシアの両親を殺害を計画したのは…外務卿、あなたでしよう？」

カリン

「福本長官、いくら一緒に居たからと……」

コルネリオ

「…よくわかったな。」

カリン

「な、なに！」

フリーシア

「え！？」

コルネリオ

「ふふふ、本来なら俺が王座に座る筈だったんだ。それをあの女が騎士に成って……」

マリイダ

「フリーシアのお母さんね…けど、王座って……」

カリン

「陛下には体の弱い弟君がおられたそうです。陛下が18歳の時に亡くなったそうですが……。」

福本

「なるほど…つまり、2人共恨みか。」

ハヤウエイ

「しかし、それと今回と何の関係が？」

マリーダ

「王国と帝国……元はお互いが対立し、王座に就けなかった人間が己の欲の為に協力した……と言ったところかしら。」

福本

「つまり、この戦争は王座に就きたい個人的な理由で始めた戦争…  
…エドアルド皇帝を殺して王座に就いて、はい終わり……そのつもりだったんだろ！」

レムス宰相

「よくわかったな。」

福本

「ふん。そんなの関係無いな。その個人的理由でどれだけの人間が傷つき、涙を流し、亡くなったか…解っているのか！」

チン

愛用の軍刀が抜かれる。

コルネリオ

「馬鹿な、次期王国を殺そうと言うのか？」

福本

「ああ。正確に言えば、次期王国と次期皇帝をな。」

レムス宰相

「わ、私を殺してみろ！あ、アメリカが黙っていないぞ！」

福本

「…それがどうした！」

抜刀した軍刀が妖しく光る。

コルネリオ

「う、動くな！」

プリーシア・セシリーに銃を向ける外務卿。  
だが……

福本

「バカ？」

コルネリオ

「な………」

気付いた瞬間、意識がなかった。  
なぜなら、心臓にサーベルが刺さっている。

福本

「周りをちゃんと見るべきだったな。」

レムス宰相

「う、うわー！」



ダン！ダン！

福本に向け発砲するが……

福本

「ちゃんと狙え。」

ザシューウ！

レムス宰相

「グハ……」

ドサ！

福本

「まったく……ハヤウエイ、見事だぞ。」

カリン

「ああ、絶妙なタイミングだった。」

ハヤウエイ

「えっと……無我夢中でしたので……。」

プリーシア

「ハヤウエイ！」

ハヤウエイ

「な、なに、プリーシア？」

プリーシア

「お主、もう少し考えなさい！あの時は良かったが、あとちょっと遅ければ、お主の方が危なかったのだぞ！」

マリーダ

「あゝあ、また始まっちゃた、フリーシアのお説教。」

カリン

「どう考えても、フリーシアがお説教する理由が解らん。」

福本

「まあ、良いじゃないですか。」

結局…フリーシアのお説教(?)は10分程続き……

フリーシア

「最後に！」

ハヤウエイ

「はい！」

フリーシア

「……ありがとう。( \* ^ ^ \* )」

ハヤウエイ

「はい！……え？」

フリーシア

「に、二度は言わぬぞ……」

石田

「長官！」

福本

「お、石田。どうだ？」

石田

「はい、王宮内は制圧完了。王都の外のサブルム軍5個師団は壊滅敗走しました……て、そうじゃあ無くて！」

福本

「どうした？慌てて？」

石田

「は、検索中の分隊が、エドアルド皇帝を発見しました。しかし……」

マリーダ

「しかし？」

石田

「その……末期と言うか……危ない状態で……。」

福本

「わかった！セシリーさん、プリーシアさん行きましょう。」

王宮内の一室。

扉を開けると、弱りながらも、レムス宰相と違う威厳を帯びた人物

がベッドで横になっていた。

セシリー

「父上！」

エドアルド皇帝

「おお、セシリー……久しぶりじゃの。」

セシリー

「父上、気を確かに！」

エドアルド皇帝

「嬉しいのお……だが、もうよい……自分の体じゃ、よくわかる。」

セシリー

「父上……」

医師から聞いた話では、帝都アーテスから、病弱な体を無理矢理運ばれて来たため、更に弱ってしまったそうだ。

エドアルド皇帝

「セシリー……わしのあとを継ぐのはお主だ……弟の様な奴を出してはならぬ。そして、わしの様になるな……。」

セシリー

「はい……父上……。」

涙を必死に堪えるセシリー。

エドアルド皇帝

「うむ…済まんが、ヴィントラントの姫君を呼んでくれ。」

セシリー

「はい。」

そう言い、プリーシアに場所を代わる。

プリーシア

「私がヴィントラント王国の次期女王、プリーシアです。」

エドアルド皇帝

「プリーシア殿…済まない。私の管理が甘いばかりに、辛い思いをさせてしまった。」

プリーシア

「いいえ、陛下。もう気にしておりません。陛下もお気に為さらぬ様に。」

エドアルド皇帝

「そうか……これからは娘を頼む…ダリア・エステロール連合王国と三国仲良くしてほしい。」

プリーシア

「はい、お約束致します。」

エドアルド皇帝

「うむ……セシリー、済まんがそこにいる日本軍指揮官を呼んでくれ。」

いつの間に気付いていたのか……しかし、呼ばれたからには、行か

ねばならない。

福本

「初めまして、エドアルド陛下。本官は大日本帝国海軍第七艦隊司令長官福本大介です。」

エドアルド皇帝

「北の海洋国であり、アジアの国の御方…弟のせいであなた方も、イギリス、ドイツ、ダリア・エステロール連合王国にもご迷惑をかけた…申し訳無い。」

福本

「いえ、プリーシア殿同様に気にしておりません。」

エドアルド皇帝

「そうか…ところで貴官にと言うより貴国に頼みたい事がある。」

福本

「なんででしょうか?」

エドアルド皇帝

「済まないが…我が国を御願いたい。」

福本

「わかりました。本国と相談する事になりますが、出来るだけの事は致します。」

エドアルド皇帝

「よろしく御願います。」

そう言うと、一つ溜め息を吐くと目を閉じた。  
ふと気付くと、呼吸がなかった。

セシリー

「父上……？」

医師が脈を測る……が直ぐに首を横に振る。

セシリー

「父上……父上ー！」

その寝顔はちゃんと跡を託せたのを喜んでいるかの様に微笑んでいた。

次号へ

王都奪還！(後編)(後書き)

作者「うーん…」遠地「どうしたの？」作者「前編と文字数のバランスがとれてないからね…。」遠地「ああ、成る程。」作者「また4000字超えだよ。」遠地「お疲れさん。」作者「ご意見ご感想をお待ちしております。」



## 条約調印

9月12日

この日、王都ウェスタディアでは講和条約の調印式が行われていた。当事者のヴィントラント王国とサブルム帝国はもちろんのこと、日本、イギリス、ドイツ、ダリア・エステロール連合王国が条約に調印した。

調印後、ヴィントラント・サブルムの新君主の若き女王2人が、フラッシュが光る中、握手をする。

福本

「終わったな。」

マリィダ

「ええ。」

遠地

「ああ。けど、これから大変だぜ。」

福本

「わかってる。だが、1つの争いが終わったのは事実だろ?」

遠地

「それもそうだな……帰ったら、宴会だな。」

マリィダ

「そうね。和泉なんか、一升瓶抱いて待ってるかもね。」

王都郊外の墓地

神父に案内されミアと福田は歩いていった。  
そして、ある墓の前に来ると、案内してくれた神父にお礼を言つと  
持ってきていた花を供える。

福田

「ごめん。もつと時間が有れば、親戚も探せたんだけど……。」

ミア

「ううん。両親のお墓だけでも見付けてくれて、ありがとう。」

そう言つと、お墓の前に身を屈め喋り始める。

ミア

「お父さん、お母さん、ミアです。お墓参り遅くなりました…申し訳ありません…。」

墓の中にいる両親に話かけている様だ。

自分は場違いでは無いか？と思えてしまう福田。

ミア

「見えますか？ 12年もかかりましたけど…姫君も見つかった…戦争も終わつて…やっと平和になりましたよ。」

そう言つと無言のまま、手を合わせると、立ち上がる。

ミア

「ありがとうございます、福田さん。戻りましょう。」

福田

「はい。」

調印を終え、立ち去ろうとする福本達を、報道陣が取り囲む。

記者1

「福本長官、今回の条約内容はどのような中身ですか？」

記者2

「条約内容は双方の女王のみで決めたのは本当ですか?!」

記者3

「サブムルム帝国から、賠償金を求め無いとは本当ですか？」

記者4

「福本長官、教えてくださいよ。」

遠地

「はいはい、退いた退いた!」

マリーダ

「あとで、サブムルム・ヴィントラントの女王が会見するから、そっ  
ちで質問して!」

福本

「マリーダ…多分これはちよつとでも答えないと抜けられないよ。」

マリーダ

「そ、そうね。」

遠地

「うん、確かに抜けられ無いな。」

福本

「あゝ、記者諸君。まあ、ちよつと位なら答えてもいいだろう。」

記者1

「では、条約内容を！」

記者2

「いや、条約内容の舞台裏を！」

記者3

「いやいや、賠償金の事を！」

福本

「あゝ、わかったわかった。諸君落ち着いて！」

ちなみに、今回の条約内容は以下の通り。

1 ヴィントラント王国・サブム帝国の国境線は戦前の通りとする。

- 2 サブルム帝国に対し、ヴィントラント王国以下各国は賠償金を求めない。
- 3 この条約調印後は、双方速やかに戦闘を終結させる。
- 4 ヴィントラント王国復興に際して、日本・イギリス・ドイツ・連合王国・サブブルム帝国は協力してあたる。

以上

さて、条約の舞台裏……それは、サブブルム帝国も、ヴィントラント王国も大臣等が協議に加わっていない事。

これは、サブブルム帝国は日本参戦まで優勢であり、ヴィントラント王国は日本参戦で優勢になった事実である。

これでは協議時に、双方の意地がぶつかる結果となり、最悪講和自体が立ち消えになってしまう。

仮に、サブブルム帝国が黙ってもヴィントラント王国の大臣達が勢いにのり、領土割譲を求める筈だ。

これでは、ナチスドイツのサブブルム版を生む事になる。

これを警戒した福本は、セシリーとプリーシアに事情を説明、首脳協議で内容を決定し、条約を調印、既成事実にしてしまう手段に出た。

既に、イギリス・ドイツ・連合王国に大体の内容は伝えており、あとは双方の了解だけである。

これについては、双方共に無能な大臣に飽き飽きしているのもあり、直ぐに了解が得られ、早期条約調印となった。

次号へ

条約調印（後書き）

作者「本日、北朝鮮が核実験やりました。「遠地「お、おう…で？」  
作者「…もうそろそろ日本もキレていいんじゃないですか！」作  
者「あゝ、そう言う事ね。」作者「核実験までやられたんだぞ！ナ  
メられてんだよ！こうなったら次なんかあったら、『イージス艦に  
巡航ミサイルを載っけて撃つぞ！』ぐらい言わないと！」作者「あ  
あ、わかったわかった。ご意見ご感想をお待ちしています。」

## 第七艦隊帰還ス

9月20日 ミサリア港

埠頭に並ぶ人々。

その中には、ヴィントラント王国のプリーシア女王、サブルム帝国のセシリー女帝の姿が見える。

プリーシア

「皆さん、今回は本当にありがとうございました。」

セシリー

「我が国からも、日本が参戦してくれなければ、どうなっていた事かわかりません…ありがとうございました。」

福本

「いえいえ。大国故、元常任国故の責務。お気になさらず。」

マリダ

「それよりも、あなた方が大変ね。国内の大掃除…頑張っ

プリーシア・セシリー

「はい！」

プリーシア

「みなさん、お元気でー！」

セシリー

「またお会いしましょう！」

戦艦播磨以下第七艦隊の艦艇が出港して行く。

手空きの乗組員が上甲板に出て、手を振って別れを告げる。

福本

「……よし、全艦進路日本へ！」

千歳・ラフィール

「了解！」

10月1日 呉軍港

第七艦隊の姿を見ようと民衆が呉の街だけでなく、見えそうな所に殺到しているとか。

まあ、紀伊水道 大阪湾 播磨灘 燧灘 呉軍港の間で、多くの人間が見えそうな所に殺到したので、馴れたが……。

戦艦大和艦内長官室

福本

「第七艦隊、本日ヴィンセント王国より帰還いたしました。」

休憩などを後に回して、マリィダ・遠地・千歳・福田を率いて山本長官に帰還の挨拶をする。



山本長官

「うむ、ご苦勞。ヴィントラント王国・サブム帝国からも外交筋を通じて感謝の言葉を頂いた。」

福本

「いえ、当初の目的を達成したまでの事です。」

山本長官

「堅調なのか恥ずかしいのか……まあ、いい。」

そう言つと、視線を福田に変える。

山本長官

「福田少将、聞いたぞ。」

福田

「はい？」

山本長官

「引き取つたお嬢さんに溺愛だそうだな？」

福田

「な、何言つてんですか山本長官！ど、どこからそんな根も歯も無い噂を……」

山本長官

「ふむ。本当らしいな。」

福本

「福田……反応で判りやす過ぎだぞ。」

福田

「ガーン……………」

山本長官

「大丈夫かね？」

福本

「そつとしいたら…なんとか…。」

山本長官

「そうか……………ところで、そのお嬢さんはどうする気かね？」

福本

「はい。電文でも言いました様に、本艦隊で預かるうかと…。」

山本長官

「そうか、確か今は軍属待遇だったな。」

マリータ

「はい。ただ…。」

山本長官

「ただ？」

遠地

「どこに配置したものと、困っております。」

千歳

「本人の意思は出来るだけ尊重しますけど……………」

山本長官

「わかった。手配はこっちですから、配置が決まったら私に報告してくれ。」

福本

「わかりました。」

次号へ

## 第七艦隊帰還ス（後書き）

作者「今回はあっさりと言わせて頂きました。」播磨「確かに…あつさりね。」作者「次号ですが…今じゃあどうかは知りませんが…『アメリカ訪問』です。」播磨「誰がアメリカを訪問するの？」作者「えーと、誠に言いにくいのですが…」遠地「早く言え。」作者「実は…です。」全員「な、なんだって!!」作者「…」

…「ご意見ご感想をお待ちしております。」

## アメリカ訪問

10月7日

呉軍港では……多分、他所もだが……騒がし1日目の幕開けとなつた。

何故なら……

天皇陛下がアメリカ訪問を訪問しているからだ！

戦艦播磨

手空きの乗員達がラジオ放送に聞き耳をたてている。播磨型は通信能力も高いが、傍受能力も高い。その為、アメリカのラジオ放送を傍受するのも簡単である。それを艦内放送で流している。

福本

「やっぱり、心配になるよな。」

遠地

「ああ、なんせ周りも『危ない!』と止めてたからな。」

マリーダ

「で、私達に説得するよう言っただけ来たのよね。」

ミリア

「じゃあ、なんで止めなかったんですか？」

ミリアがお盆に紅茶をのせてやって来た。

福本

「今回、アメリカ訪問の目的は大統領との会談。陛下はこれを機に関係改善を行うつもりなんだよ。」

ミリア

「けど、福田さんはアメリカとの関係改善は難しいと言っていましたよ。」

マリイダ

「ええ。確かに難しいわね。けど、陛下の狙いはそれだけじゃないのよ。」

和泉

「で、別の狙いつてなに？」

……何処から現れたのか、和泉登場。

福本

「年寄り政治家より若手政治家に注目が集まるのは世の常……陛下は若すぎかもしれませんが。」

遠地

「そして、アメリカ国内のユダヤ人層の獲得……だったけ？」

和泉

「政治家の話は置いて……ユダヤ人層を獲得してメリットがあるの?」

福本

「あります。ユダヤ人はアメリカ経済・メディア等に大きな力を持っています。そして、世界中に散らばっている。」

ミア

「えーと……つまり?」

マリダ

「ユダヤ人を日本側に引き込めば、いざ日米戦になっても、早期講和も出来る可能性があるの。」

千歳

「アメリカは国民の支持でもっている国。国民の支持を失えばどれだけ有能な大統領でも政策変更をしなければならない。」

ミア・和泉

「あ、なるほど。」

播磨

「じゃあ、危ないと言っつのは?」

福本

「アメリカの反日状況なら暗殺されるかもしれないから。」

マリダ

「けど、大介はそれは無いって言ったの。」

播磨

「根拠は？」

福本

「そんな事になれば、ルーズベルトの首がとびます。一国のゲストも護れないのか…と国内外問わず批判の嵐でしょう。」

播磨

「けどアメリカが日本の陰謀だと言ったら？」

福本

「まず日本人でそんな事をする人間なんていませんよ。それにゲスト周辺の警備は訪問国の仕事。結局は自分の首を締める結果になります。」

播磨

「なるほど。」

遠地

「しかし…どうなるかね。」

次号へ



## アメリカ訪問（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 大統領の思惑

10月                    ホワイトハウス

つい先程、日本の天皇……プリンセス・アキコとの会談を終えたところだ。

ルーズベルト大統領

「ふう……日本の小娘が、私の考えが読めたのか？」

彼がそう言う程、明子天皇の発言は的を射ていた。  
なにせ……

明子天皇

「大統領、我が陸軍の報告によりますと、ソ連軍には大量のアメリカ製トラックが供給されているとか。」

ルーズベルト大統領

「それがどうかいたしましたか、陛下？」

明子天皇

「矛盾していますね。あなたはアメリカを『民主主義の武器庫』にする<sup>1</sup>と仰っていますが、なぜ敵であるソ連に物質を供給しているのか。」

ルーズベルト大統領

「……………」

明子天皇

「申し上げておきますが、ソ連と仲良くしても、何のメリットもありませんよ。まあ…我が国を滅ぼしたがつている大統領閣下から見ればどうかは、わかりかねますがね。」

そして、会談を終え部屋を出る時に……

明子天皇

「そう言えば……これは噂ですが……大統領は『日本の百年計画』なる日本が世界征服を実行していると信じていらっしやるのか？」

ルーズベルト大統領

「ま、まさか…確証の無い噂だ。」

明子天皇

「そうですね。まさか日本人が邪悪なのは白人よりも頭蓋骨の発達が2000年遅れているなんて信じていませんよね……失礼致しました。」

ルーズベルト大統領

「ハル。ハリーの強硬案は出来ているかね？」

ハル 國務長官

「はい。出来ております。」

ルーズベルト大統領

「よし…何時でも出せる様にしておけ。」

明子天皇

「ふう……。」

士官

「お疲れ様です、陛下。」

侍従兼護衛として付いて来ていた士官が労う。

明子天皇

「ううん、外交官の苦勞に比べれば軽いわよ。」

士官

「そうですか…ところでアメリカ…大統領はどうですか？」

明子天皇

「無理ね。ルーズベルトは日本との戦争を望んでいる。アジア利益だけの問題じゃない、誇大妄想にかられて日本人を邪悪だと思っている。」

士官

「打開は無理ですか……。」

明子天皇

「ええ…そうなる後は内閣と軍の仕事よ。もちろん外交も。」

士官

「はい。」

明子天皇

「さあ、今日はもう休んで明日に備えましょ。」

次号へ

## 大統領の思惑（後書き）

作者「因みに：ルーズベルトが『日本の100年計画』なる日本が世界征服を考えていなんて言うヨタ話を本気で信じていたとか。」「播磨「本当ですか?!」作者「それに作中に出てきた頭蓋骨云々もルーズベルトは信じてたそうですけど。」「全員「な、なんだって!」作者「ご意見ご感想をお待ちしております。」「

## 作戦会議

10月18日 呉軍港

### 戦艦大和会議室

明子天皇が昨日帰国して、会談内容が明かされた。

山本長官

「と、言うことだ。」

小澤中将

「では、アメリカ……ルーズベルト自身は交渉で解決する気はないと。」

福本

「そう見ていいでしょう。」

会議室の空気が微妙に重くなる。

山口少将

「そうになると、我が国はどう転がるにしても、アメリカと開戦になる。」

井上中将

「だとすると、日本が対等に戦えるのは二年間しかない。」

いくら、サブム帝国との戦争を一個艦隊と五個師団＋二個連隊、陸軍航空隊の一部しか出さず、戦費を抑えたとは言え、資源がない

のと、生産能力には流石に限界がある。（いくら史実より底上げしているとは言えた。）

福本

「いえ、事はそう単純ではありません。我々の背中にはスターリン率いるソ連がいる事をお忘れなく。」

三川中将

「なぜかね？我々の敵はアメリカの筈だ。」

伊藤中将

「福本長官の言っているのは的を射ています。もちろんアメリカは敵ですが、真の敵はソ連です。対米戦だけで国力を磨り潰す訳にはまいません。」

山本長官

「福本大将・伊藤中将の言っているのは事実だ。」

山本長官は立ち上がると、言葉を続ける。

山本長官

「アメリカはまだ良い。しかし、スターリンは欲張りで危険だ。対米戦が終われば我が国は、対ソ戦になるだろう。その時に国力は出来るだけ温存しておきたい。そうすると、対米戦は一年で決着をつける必要がある。」

五藤少将

「しかし、一年でアメリカを負かす事が果たして可能でしょうか？」

福本



「出来ます！と言っより出来なければなりません！」

今度は福本が立ち上がり、発言する。

福本

「陸海・軍民問わず協力し、戦争計画・作戦をしつかり立て、外交戦・情報戦・宣伝戦を制すれば出来ます！」

その光景をニヤニヤしながら見ていた。

福本

「後は…我々現場の仕事です。出来るだけ損害を抑え、敵に被害を与えるか…です。」

山口少将

「うむ、その通りだ。いくら交渉でうまくいっても、我々の被害が大きければ、アメリカは戦争の長期化をはかるつもりだ。」

山口少将の言葉に全員が頷く。

小澤中将

「ところで、福本。君は対米戦をどう言っふうに戦うべきだと思う？」

福本

「簡単に言っな、と言っかも知れませんが…攻めて攻めて攻めまくる…山本長官が言った様に、ワシントンに行って、降伏調印を叩き付けるまで戦っ…本官はそう思っております。」

福本

「ふう……。」

大和から播磨に帰る内火艇で溜め息を吐く。

福本

「（さて、帰ったら対米戦時の作戦を考えないと……訓練・対策も必要だな…：新兵器の装備と開発も。）」

当分は暇になりそうに無い…：そう思った。

次号へ

## 作戦会議（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 物事は常に変化する

10月24日 戦艦播磨会議室

福本  
「さて、皆。いよいよ対米戦が迫ってきた。」

福田  
「確かに。アメリカは大西洋艦隊を太平洋に移動させていると言われているからですからね。」

遠地  
「そこでだ。第一戦は何処になるか？どれぐらいの戦力で来るか？どう戦うかを決める。」

神谷  
「まず、米艦隊進行ルートは大まかに言えば2つ。ウェーク島を通る日本直通ルート。あるいはマーシャル諸島 ミクロネシア パラオのフィリピンルートです。」

沖田  
「自分はフィリピンルートだと思います。」

福本  
「理由は？」

沖田  
「フィリピンは台湾に近く、なおかつマッカーサー元帥がいます。」

フィリピンの防衛の底上げを図る必要もあり、必ずこのルートを通ります。」

福本

「うむ、他の意見は？」

福田

「ありません。」

楠木

「その意見に賛成です。」

福本

「ふむ。じゃあ次は……」

この様に会議は続いた。

福本

「じゃあ、この案件で山本長官に提出する。解散。」

そう言うと、各々立ち上がり、会議室を出ていく。

福本も会議室を出て、上甲板に出ると……眩しかった。

福本

「ああ、夕陽か……。」

どうやら1日を、会議で消費してしまった様だ。

山城

「やあ、福本殿。これからどちらに？」

福本

「山城さん。いえ、これから大和に行こうかと。」

山城

「山本長官に用事ですね。私がお送りしましょう。」

福本

「すみません。助かります。」

山本長官に案件を提出した帰り。

福本

「くう、疲れた。」

1日中、艦内に籠りつきりだったから、当たり前か？

福本

「さて…ん？」

話し声がした。

1人は山城さん、1人は愛宕さんだ。

しかし…気のせいだろうか…山城さんの声が上がっている様な気が…？

だから、物陰から見る事にした。

山城

「あ、愛宕……。」

愛宕

「どうしたんです？山城さん？」

山城

「あ、ゆ、夕陽が綺麗だな。」

愛宕

「え、ええ、そうですね。」

な…なんじゃあこりゃ…。まるで告白前の……おいおい！

山城

「愛宕…あのね…。」

愛宕

「山城さん、本当にどうしたんです？」

山城

「あ、うむ、えーと……。」

愛宕

「あ！すみません、山城さん！私、これから用事が有るので失礼します！」

山城

「あ、ああ……。」

光と共に愛宕は転移する。

山城

「ああ…愛宕…。」

福本

「山城さん…。」

山城

「は！福本殿！み、見ないでくれ〜。 (<|>)」

福本

「少女サムライ士官の恋ですか？」

山城

「変か？おかしいか？間違ってるか？」

福本

「な、なんでそう言う事になるんですか？」

山城

「うっ、これでは陛下に合わす顔がない…。」

福本

「や、山城さん？」

山城

「こっちは士官らしく…腹を切る！」



そう言い山城愛用の軍刀を抜く。

福本

「うわー！うわー！うわー！や、止めて下さい！うちの作者じゃないんですから！」

山城

「離せ！停めるな！もう、生きていけぬ！」

福本

「大げさ過ぎますよ！」

その前に、艦魂が切腹なんてしたらどうなるんだろうか？

…… やっぱり、弾薬庫爆発？

…… じゃあ無くて！

大和

「あら、福本さん。何してるんですか？」

神か、仏か、天使様か……とにかく大和登場。

福本

「大和さん！ちょっと手を貸して下さい！」

大和

「え？…ええ！山城さん！何をしてるんですか！？」

山城

「やめろ！2人共止めるな！」

福本・大和

「止めます！」

激闘（？） 10分……なんとか止めた。（す巻きにして）

大和

「何があつたんですか？」

福本

「まあ、覗き見た自分も悪いんですが。」

大和に一通りの事情を説明。

大和

「あちやく、それは痛いわ。」

福本

「すみませんが山城さんをお願いします。」

大和

「いいけど……福本さんは？」

福本

「播磨に迎えに来てもらいます。それでは。」

次号へ

物事は常に変化する（後書き）

作者「どうなってんだ、この国は！」福本「どうしたんです？」遠地「『新報道2001』を見てからこの状態。」作者「敵基地攻撃論を封じ込める様な事、言いやがって、ロシア・中国と日本と状況が丸つきり違うつーの！あんな人間呼ぶより、田母神閣下を呼べ、閣下を！」福本「あゝ、これ以上言ったらヤバそうなので……」ご意見ご感想をお待ちしております。」

## 車魂の皆さん

11月1日 戦艦播磨

福本

「……山城さん。」

山城

「なんですか…福本殿？」

福本

「あの…その、この間の事ですが…。」

山城

「いや、いいのです。取り乱した上に迷惑をかけた…申し訳ない。」

福本

「い、いえ…あの、自分は、女の子同士の恋愛は気にしておりませんので…作者の影響かは解りませんが…。」

余計な事は言わんでいい！

山城

「作者殿が文句を言ったな。」

福本

「言いましたね。」

ほらほら、次が詰まってるんだから、早くいきなさい！

福本

「はいはい。」

所変わり、呉の陸戦隊格納庫

大沢

「うう、寒々。m ( ) m

11月になると中国地方と言えど寒くなる。

大沢

「こう言う時こそ、お汁粉とかが恋しくなる」

マチルダ

「ストープがあるだけでもありがたいと思いなさい、贅沢者。」

識名

「お汁粉か。食べたいな」

????

「私は温泉がいい」

????

「私達はお鍋物」

????

「なに、この展開？」

福本

「よう、大沢…って人数増えてないか？」

大沢

「あ、どうも。今週に入って装備改変が有りましたから、野口一家が揃いまして…。」

福本

「野口一家…ねえ。」

大沢

「はい。ところで、長官は？」

福本

「様子見。差し入れ付きで。」

大沢

「え、何も持ってませんよ？」

福本

「それは……」

マリーダ

「ちよっと、大介。手伝ってよ。」

福本

「と、言う事だ。」

大鍋の蓋を開けると、ほんわかと湯気が立ち上る。

識名

「わあ〜！お汁粉だ〜」

整備兵達が、目を輝かせて大鍋の周りを囲む。

福本

「おかわり自由、焼き芋付きだ。どんどん食べ！」

整備兵達

「「「おー」

福本

「そう言えば……。」

マリィダ

「なに？」

福本

「新しい車魂…読者は知らないよな。」

大沢

「…あ！」

福本

「と、言う事でマチルダ、紹介頼む。」

マチルダ

「なんで私なんですか？」

福本

「君、野口一家の長女でしょ。」

マチルダ

「う……わかりました。」

識名

「じゃあ、スチュワートからね。」

「M3対空偵察戦車『スチュワート』。破損したM3軽戦車の改装したのが私よ。」

識名

「義姉様とは仲が悪いのが、悩みの種。」

マチルダ・スチュワート

「「そうね。」（怒）」

識名

「次は仲良し3人姉妹の……」

「一式半装軌自走砲の『里奈』です。」



「四式中戦車の『瑠奈』です。」

「五式重戦車の『玲奈』です。」

里奈・瑠奈・玲奈

「『3人合わせて量産3人姉妹!』」

福本

「……なんかの戦隊もの？」

里奈・瑠奈・玲奈

「『違っ!』」

マチルダ

「で、次が……」

「あ、えっと、六式重戦車車魂の『由香里』です。よ、よろしく……」

「

識名

「由香里は、普段は物知りなんだけどね。」

マチルダ

「焦ったらドジになるのがね……」

由香里

「は……」

「一式軽駆逐戦車の車魂、『里香』だ。よろしくな！」

マチルダ

「こら、里香！言葉遣いはちゃんとしなさいといつも言ってるでしょ！」

里香

「げ、姉貴。(････)」

マチルダ

「今日と言つ今日は、逃がしませんよ！」

里香

「に、逃げろっ！」

マチルダ

「待ちなさい！」

福本

「いつも、ああか？」

識名

「はい…言葉遣いになって無いつて義姉様が……」

大沢

「走り屋で、気性は少し激しいですけど、根は優しいんですよ。」

福本

「走り屋ねえ……まあ、車体があんなだからな。」

識名

「最後はマチルダ義姉様と付き合いの長い……」

「一式自走無反動砲こと改造ユニバーサルキャリアの車魂、『キヤリー』です。好きな物は温泉」

福本

「お、温泉って……今度、良い温泉名所教えてくれ！」

マリーダ

「なんでそうなるのよ？」

福本

「いや……なんとなく……」

識名

「これが野口一家のほぼ全員です。」

マリーダ

「含みが有るけど……機密だからね……。」

福本

「それではまた次号で！」

次号へ

車魂の皆さん（後書き）

車魂のプロフィールですが……要望があれば公開します。（当事者  
との相談のうえ） ご意見ご感想をお待ちしています。

## ハル・ノート

1943（昭和18）年1月26日

ルーズベルト大統領は日米戦を望んでいる……それが明白になっても、戦争回避に必死だった日本に対し、アメリカ政府は実質的最後の通告……後のハル・ノートを突き付けた。  
予想はしていたものの、現実を突き付けられた日本政府高官・軍人達の顔には困惑の色が見られた……。

呉軍港 戦艦播磨艦橋

福田

「くそ！」

力任せに壁にパンチをするが……怒りのあまり痛く無い様だ。

遠地

「予想はしていたが……ついに来たか……」

千歳

「この様子だと……開戦は避けられないわね」

新沢

「しかし、許せないのはこの内容です！」

ハル・ノートの内容は簡単にすると下記の通り。

- ・支那（中国）大陸より陸海空戦力及び警察力の全面撤収。
- ・支那大陸に保有する日本の権益及び治外法権を放棄する。（つまり日露戦争以前どころか義和団事件以前に戻れと言つ事。）

以前よりアメリカが文句を言っていた事に加え……

- ・太平洋安全保障の為、南洋諸島及び台湾の領土及び権益を放棄する。（これはグアム、フィリピンが近くにある為）

・日本はサブム帝国、ヴィントラント王国、ダリア・エステロール連合王国に保有する権益を放棄する。

・サブム帝国、ヴィントラント王国、ダリア・エステロール連合王国等々と結んだ保障（講和）条約を破棄する。

（史実と状況が違う為、ハル・ノートの内容も変化している）

福田

「言えてるな！アメリカお得意の自分の都合を押し付けだ！」

楠木

「いくら何でも、無茶苦茶な要求です！断固拒否すべきです！」

福本

「もちろん、拒否するさ……こちらもアメリカ国民に言いたい事があるからね」

沖田

「福本先輩に…山本長官！」

福本とマリィダの後ろに何時来たのか、山本長官が居た。

山本長官

「諸君も知っているように、アメリカが遂に最後通告を突き付けて来た…無論、我が国は断固拒否する」

福田

「当然です！支那大陸にしろ、台湾にしろ、我が国の先人達が血と涙と汗で掴んだ物…それを何もしていない自己中心のアメリカにやれるものですか！」

ヴィル

「それに、満州を日本が守っているからこそ、ソ連と対等にイギリス・ドイツが戦えています…もしソ連のものになればパワーバランスが崩れ、ユーラシア大陸のほとんどがソ連のものです！」

山本長官

「それも百も承知だ…福本、第七艦隊は出撃可能か？」

福本

「いつでも行けます…なあ、みんな？」

沖田

「航空部隊はいつでも行けます！」

福田

「水雷戦隊、巡洋戦隊共に出撃可能！」

二一ナ

「潜水戦隊全艦、戦闘航行可能です！」

フェルデナント

「陸戦隊、全装備を輸送船に積んでいます！」

楠木

「第一、第二戦隊の士気は最高潮です！」

マリーダ

「山本長官、艦隊の出撃準備は既に完了しています」

山本長官

「……第七艦隊は呉を出港、トラックにて次の指示あるまで臨戦待機を命じる」

「「「「「了解！！」「」「」「」

二時間後……

第七艦隊は呉を出港。それと同時に、日本はハル・ノートを世界中に公開。

同時に明子天皇自ら声明を発表した。

明子天皇

「我が大日本帝国は、明治より常に欧米列強の認可の下、支那大陸にある諸権益及び領土を保有して来ましたが、今回のハル・ノート



はアメリカの自分勝手な都合による強引なものであり、日清、日露戦争、第一次大戦で流した英霊の血によって得られた物を放棄する事になります。我が大日本帝国は断固拒否致します!」

この放送を福本達は艦橋で聞いていた。

福本

「いよいよ、退くに引けなくなつたな……」

福田

「覚悟のうえです!このままアメリカの言いなりよりましです!」

千歳

「妥協の可能性は低いけど……外交交渉は続けて行くそうよ」

遠地

「ん、陛下の声明が続いている……ちょっと静かにしてくれ、放送が聞こえ無いよ」

明子天皇

『アメリカを含め、全世界の人々にお伝えしたい事が有ります……今回出されましたハル・ノートを起草した人物は財務次官補のハリ・ホワイトですが……諜報部の調査の結果、大統領周辺に居る約300人のソ連共産党スパイの一員で有ることが判明しました!』

「……………な、何だつて!!」「……………」

まさに衝撃の事実!

福田

「せ、先輩は知ってたんですか？」

福本

「スパイの事は知っていた……しかし、300人と言うのは初耳だ」

明子天皇

『これで明白な通り、ルーズベルト大統領はソ連共産党によって……あるいはスターリンによって操られています……平和を望む皆さん、どうか、これ以上の惨劇を防ぎましょう……これが私の願いです！』

次号へ

## ハル・ノート（後書き）

作者「因みにハル・ノートの起草者がハリー・ホワイトで有り、彼がソ連のスパイだった事は事実です」播磨「証拠は？」作者「1995年にアメリカ中央情報局が公開した『ヴェノナファイル』に書いて有ります。」播磨「……次号は？」作者「140話なのでちょっと特別編を書きます。ですから更新が遅れます。」播磨「それでは、ご意見ご感想をお待ちしております。」

特別編 危機一髪……かな？（前書き）

設定上の都合により時系列を合わせて有りますが、本編と別物です。  
それではどうぞ！

特別編 危機一髪……かな？

2月6日 トラック諸島より北へ500キロの海域

福本

「なあ」

遠地

「なんだ？」

福本

「いったい何でこうなった？」

遠地

「俺に訊かれても……」

福本

「だよな……作者は？」

作者

「俺にも訊くな……こんな事態すら予測してなかったのに」

福本

「……ですよね」

3人

「はあ……」  
「……」  
「……」

事の始まりは5日前、ドイツのグラフ・ツェッペリンの艦魂、リンが消えたときシュペーが教えてくれたのだ。その時は誰も気にしなかった。2日前にマリィダとミアアが拐われる迄は……

福田

「誰でしょうかね、ミアアとマリィダ先輩をさらって、作者にこんな送り付けて来たのは」

そう言い机の上にあった手紙を指差す。

神谷

「『ああ、第七艦隊の諸君。突然だがリンとマリィダ・ミアナを預かっている。返してほしくば、2日後、トラック諸島より北500キロの海域に來い。 Y & Hより』」

遠地

「なんで、その手紙が作者の所に來たんだ？」

作者

「知らん。つーか、Y & Hってが気になる」

千歳

「確かにね……」丁寧なのかなんなのか」

福本

「指定海域だな…神谷、レーダーは？」

神谷

「……今のところ、何もありません」

遠地

「呼んだ本人が来て無いつてどうゆう事だ？」

福本

「時間指定はしてない。こちらが早く着いただけだろう」

神谷

「あ、反応がありました……あれ？」

福田

「どうした？」

神谷

「反応はしているんですが…ノイズが入ってはつきりしません」

作者

「（ノイズ……？）」

福本

「故障…な訳ないか。方向は？」

神谷

「北です」

作者

「（レーダー画面にノイズ……似たのがあったよな、確か……）」

神谷

「…ノイズ動いてます。どうやら目的の人間が乗る船ですね」

作者

「（ノイズが動く？…ノイズが動く……ノイズが！）超兵器！」

和泉

「わあ！」

播磨

「さ、作者さん？」

作者

「逃げろ！シャアが来たじゃないけど逃げろ！」

福田

「ちょっと待ってください。先に説明して下さいよ」

遠地

「そつだ。なんだよ、超兵器って？」

作者

「『鋼鉄の咆哮』シリーズで出てくる、ボスだよ！通常艦艇じゃあ無理だ！かないっこない！」

和泉

「おい、大和型戦艦に並ぶ播磨型が通常艦艇だって？聞き逃せ無いな」



作者

「なら、戦ってみろ！次元が違つんだよ！」

千歳

「まあまあ、落ち着いて」

福本

「……神谷。警戒警報出せ」

神谷

「信じちゃうんですか？」

福本

「いやゝな予感がする……特別編だからだけじゃないけど」

神谷

「わかりました……！神波より連絡！ノイズ発生海域に巨大艦！」

遠地

「な、なに！」

千歳

「巨大つて……どれくらい！？」

神谷

「……播磨が巡洋艦に見えるくらい、と……」

福田

「な！……」

????

『やあ、諸君！驚いているかね？』

新沢

「その声は、大和（伊）！」

大和（伊）

『覚えていたかね、可愛子ちゃんは愛でるがモットーの大和だ！』

福田

「五月蠅い！お前みたいな変態なんか、覚えたく無くても覚えてまうわ！」

大和（伊）

『……傷付くな』

????

『ちよつと、大和！私にも喋らせなさいよ』

遠地

「げえ！その声は、翡翠！？」

翡翠

『あら、私も有名になつたわね』

福本

「……ブラックリストの二大巨頭がなんでここに居るんだ？」

大和（伊）・翡翠

『『もちろん、可愛子ちゃん目当て』』

作者

「帰れ！今すぐ帰れ！」

大和（伊）

『可愛子ちゃんが多い、と誉めているんだが？』

作者

「ありがとう。けど、帰れ！」

翡翠

『あら、いいのかしら？リンとミアとマリーダを預かってるんだけど』

福田

「お前達の仕業か！今すぐ返せ！」

大和（伊）

『まだ愛でていないが？』

作者

「愛でんな、変態！」

翡翠

『ハアハアもして……』

全員

「「「「すんな！」「」「」「」

大和（伊）

『まあ、いい。二二二で取り引きと二二二』

作者

「一人も一銭も出さんぞ！」

大和（伊）

『そうではない。まあ、勝負と言ったところだ』

遠地

「勝負？」

翡翠

『そつちが勝ったら、3人を返して、大人しく引き揚げる。そのかわり私達が勝ったら……』

播磨

「勝ったら？」

大和（伊）・翡翠

『そつちの女性キャラ全員出す』

福本

「……結局それが」

遠地

「どつする？やるか？」

福本

「やるしかないだろ」

遠地

「作者……」

作者

「勝手にやってくれ」

大和（伊）

『ふむ。まあ、私達の勝ちが決まっているが』

作者

「……まさか！」

神谷

「神波からです。敵超兵器の砲身が光って……」

福本

「全艦散開！急げ！」

ズシャアアアア！

福田

「うお！」

千歳

「きゃあ！」

作者

「ち、波動砲か……となるとヴォルケンクラッツァーか！」

大和（伊）・翡翠

『『違う！』可愛子ちゃんは愛でる』『あー！』『』

和泉

「悪趣味な名前つけんな！」

遠地

「どじするっ。」

福本

「一時後退！退いて策を練る！」

ヴォルケンクラッツァー艦内

マリータ

「翡翠に大和（伊）……なんで居るのよ」

そう言いながら、隠し持っていたカッターナイフの刃でロープを切っていく。

リン

「マリータさん……あなたいったいどこに隠してたの？」

マリータ

「袖の中」

ミア

「準備いいですね」

マリダ

「よし…切れた」

リン

「やった」

ミア

「マリダさん、こっちもお願いします」

マリダ

「はいはい」

播磨艦橋

新沢

「作者、対応策は？」

作者

「46cm砲で倒した事無いから、効くかどうか…」

福田

「なら、水雷戦隊だ！水雷戦隊で……」

神谷

「作者の攻略本には、152mm速射砲を搭載していると書かれています…無理に突っ込めば全滅します」

遠地

「それに、61cm砲や100cm砲なんぞと、どっやって撃ち合えって言うんだ？」

福本

「うゝむゝ……」

神谷

「あ、沖田司令から連絡です。椎名将斗中佐が来られたそうです！」

将斗

「久しぶりやな」

遠地

「お元気そうです」

福本

「昇進、おめでとじいぞいます」

将斗

「そつちこそ、大将とはえらい出世やな」

福本

「いやゝ、苦勞だけは増えています」

作者

「ところで将斗さん、用事は？」



将斗

「うちの翡翠が迷惑かけて様やな」

福本

「まあ、確かに。けど、本人のせいなのでお気になさらず」

新沢

「用は、翡翠さんを連れ戻しに来たと」

将斗

「そつちや」

福本

「そうですね。わかりました、どうぞ、ご同行がまいりますよ」

将斗

「すまん」

福本

「いえいえ」

その頃……

リン

「あの、マリィダさん？」

マリィダ

「なに？」

ミア

「どこに向かってるんですか？」

マリーダ

「武器庫。あるいは大和（伊）か翡翠の部屋」

リン

「あれ、逃げるんじゃない？」

マリーダ

「私は貴族の娘よ。やられたらやり返さないと！それに……」

ミア

「それに？」

マリーダ

「私達だけで済むと思う？」

ミア・リン

「……思えません」「

マリーダ

「でしょ。だからお仕置きしないとね」

ミア・リン

「（怖い！）」「

ミーア

「あれ？」

マリータ

「どうしたの？」

ミーア

「あの…独特の笑い声が…」

リン

「??？」

マリータ

「……あ、聴こえた」

ミーア

「……医務室から聴こえてきますね」

マリータ

「……まさか…ねえ」

ガチャ

識名

「あ…マ、マリータさん？」

マリータ

「……こつゆつオチなのね……」

野口博士

「ヒエヒエヒエヒエ、珍しい所で会いましたな」

マリィダ

「そうですね」

マチルダが入れた紅茶を飲みながら…状況把握中。

ミーア

「じゃあ、なんでここに居るかもわからないんですか？」

マチルダ

「そうですね。いつの間にやらここにいたので…」

里香

「姉貴もこんなんぞ」

マチルダ

「里香…」

里香

「げ、しまった(････)」

リン

「さて…どつしたのか…」

全員

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

ふと、マリィダの視線が野口博士でとまる。

マリィダ

「野口博士。ここの薬品で爆弾造れます?」

野口博士

「うん?時間は掛かるが可能じゃぞ」

マリィダ

「そうですか。お願いします。さてと……」

ミア

「マ、マリィダさん!どこに行くんですか?」

マリィダ

「武器よ。武器が無くちゃ始まらない!」

2時間後

女性オペレーター

「第七艦隊、レーダーに捉えました」

大和(伊)

「ほう、逃げなかったか」

翡翠

「まあ、こっちには人質がいるしね」

大和（伊）  
「よし。波動砲用意」

翡翠

「さーて、どの子からいこうかな 山城？ 敵傍？ やっぱり、マリー  
ダ……」

ポーン！

大和（伊）・翡翠

「「！！！？？」」

ドアがいきなり吹っ飛んだ。

リン

「ケホ、ケホ」

ミア

「い、威力が強すぎです（＜|＞）」

マリーダ

「…鍵だけ壊せば良かったのに…さすが野口爆薬…」

翡翠

「う、うそ！？」

マリーダ

「あら、翡翠に大和（伊）。やっぱり艦橋に居たのね」

大和（伊）

「い、いったいどうやって……」

マリダ

「正直に言うと、身体検査が甘過ぎ。私が貴族の三女って忘れてた？」

翡翠

「まあいいわ。で、なに？私にハアハアされに来た？」

マリダ

「ごめん、私、そっちの趣味は無いから…あなたこそ椎名さんはなんなのよ？」

翡翠

「それとこれとは別腹よ」

マリダ

「一度死んで…って一回死んでたわね」

バチバチバチ

双方、火花を散らす。

大和（伊）

「そ、それでは、し、失礼しよう（…）」

ガシ

逃げようとする大和（伊）の襟をリンとミアアが掴む。

リン・ミアア

「大和さん、まさか逃げようとか思ってたませんよね?」

大和(伊)

「アハハハ、ま、まさか(怖い!)(……)」

里奈

「リンちゃん」

瑠奈

「ミーアちゃん」

玲奈

「持ってきたよ」

ミーア

「あ、ありがとう!」

大和(伊)

「そ、それは私のコスプレコレクション!」

リン

「どうせ、私達に着せようと用意したんでしょ。代わりに着てもら  
うわよ」

カメラを見せながら言うリン。

大和(伊)

「や、やめろ。着せるのは得意だが、着せられるのは……きゃあ  
~~~~~」



……後は読者のご想像にお任せしよう。  
一方……

翡翠

「あら、仕掛けて来ないの？」

マリィダ

「ええ、既にあなを抑えてますからね」

翡翠

「な……!!」

動かない……いや……動けない!!

里香

「へへん、バツチリ」

翡翠は里香に羽交い締めに使われていた。

翡翠

「い、いつの間に!？」

マリィダ

「さーて、翡翠のツボはどこかな？」

そう言いつつ、じーと見るマリィダ。

マリィダ

「……やっぱり、脇ね」

脇を擦り始めた。

翡翠

「ち、ちょっと、や、やめてー！くくく、擦りたいよ〜」  
…

2時間後

将斗

「うちの翡翠が……」

マリーダ

「いいの、いいの。気にして無いから」

翡翠の代わりに将斗。

肝心の翡翠は……

福本

「しかし……す巻きは置いといて……なんで、本人は静かなんだ？」

マリーダ

「さあ？」

何か知ってそうだが……誰も訊か(け)ない。

将斗

「ところで、大和(伊)はどないするんや？」

福本

「46cm砲で送り返します」

将斗

「へえ？」

福本

「冗談ですよ。今、作者が伊東先生に連絡していますから」

将斗

「そうか。じゃ、またな」

福本

「はい」

遠地

「皆さんによろしく」

播磨

「今度は呼んでくださいね」

里香・和泉

「「呼ばなかったら、張つ倒す、って伊東に言っといで」」

マチルダ・河内

「「こらー！」」

ゴン！ゴン！

マリーダ

「ところで、あの艦……どうする？」

千歳

「邪魔だから、自沈処分」

野口博士

「ヒエヒエヒエヒエ、と言う訳で、ガチャとな」

ドガーン！ドゴーン！ドカガガーン！！

福本

「……どの爆薬使いました？」

野口博士

「わしお手製の薬品高性能爆薬じゃ！」

次号へ

特別編 危機一髪……かな？（後書き）

作者「如何でしたか？私は…疲れました」播磨「5000字到達により？」作者「はい。それに更新に一週間かかりました。すみません。あと、零戦先生に伊東先生、キャラがおかしくなってます」播磨「ところで、次号は？」作者「いよいよ、日米開戦！どちらが大義名分を獲るのか？お楽しみに！」播磨「ご意見ご感想をお待ちしております」

## 日米開戦

2月10日

僅か12日程で、世界情勢は変わっていた。

日本のハル・ノート公開とルーズベルト大統領周辺の共産党スパイの発覚、そして後日発覚したルーズベルト大統領の共産主義を容認する発言……これにより、世界のほとんどの国は日本を支持する声明を発表、アメリカを支持したのは、ソ連・イタリア・フランスのみだった。

さらに世界を驚かせたのは、樺太をユダヤ人に渡譲、『ユダヤ人共和国（仮称）』を建国すると発表。

一気にユダヤ人達の支持も集めた。

この様に孤立していくアメリカ……そして、ついに……

ホワイトハウス

ルーズベルト大統領

「くそ！くそ！日本猿どもめ！」

交渉を引き延ばし、最後にハル・ノートを突き付け、戦争に……とのシナリオの筈が、今やシナリオ自体が崩れ、立場が逆転してしまった。

共産党のスパイや容認発言だけでも痛い話なのに、樺太渡譲・ユダヤ人共和国の建国と、ユダヤ人の支持を獲ている。

これは非常に不味い。

アメリカでは、ユダヤ人はマスコミや経済に大きな影響力がある。

これに野党の共和党が、大統領を本格的に批判してきた。

今や、ルーズベルト政権の土台は揺れまくっている。

ルーズベルト大統領

「こうなれば…宣戦布告だ!!」

9日、昼の事だった。

時系列を戻しまして……  
皇居では……

士官

「陛下ー！大変です！」

ドアを蹴破らんばかりに入って来た士官を、明子天皇は目を丸くして見る。

明子天皇

「いったい、どうしたの？そんなに慌てて？」

士官

「あ、アメリカが、つい先程、我が国に宣戦布告しました！」

明子天皇

「……わかりました。御前会議の準備を！」

士官

「はい！」

また、慌てて出ていく士官を見ながら呟く。

明子天皇

「ついに…始まってしまいましたね…」

ギルバート諸島より500キロ西の海域

アメリカ・フィリピン派遣艦隊旗艦  
エンタープライズ艦橋

「なあ」

士官

「はい？」

「この命令は日本軍を攻撃しろ、と言う事だな？」

士官

「はい。それが何か？」

「いや…なんでもない」

士官

「はあ…？」



ムツとしたまま、攻撃準備を命じるブルドック顔の提督。

「ご機嫌斜めですか？ハルゼー提督」

エンタープライズ艦長、マレー大佐が訊いてくる。

ハルゼー提督

「……気のせいだ」

マレー艦長

「なに言ってるんですか、提督。提督との付き合いは長いんですよ…  
見れば判ります」

ハルゼー提督

「むづ……そうか？」

マレー艦長

「はい」

ハルゼー提督

「……人の気も知らないで、勝手な事を言いやがって！ルーズベル  
トの糞野郎！」

マレー艦長

「て、提督!？」

士官

「あ、あの、提督……」

ハルゼー提督

「なんだ?!」

士官

「に、日本軍の偵察機は……」

ハルゼー提督

「攻撃命令が大統領から出てるんだ! さっさと叩き落とせ!」

士官

「は、はい!」

その頃……アメリカ艦隊上空

艦偵搭乗員

「……なあ」

艦偵パイロット

「なんだ?」

艦偵搭乗員

「福本長官の予想……当たるかな?」

艦偵パイロット

「今日辺り仕掛けてくる……つうあれか?」

艦偵搭乗員

「ああ」

艦偵パイロット

「あり得んじゃないか？福本長官、そこら入んの事はよく当てるから」

艦偵搭乗員

「うっむ〜」

しかし、暢気な会話はここまでだった。

艦偵搭乗員

「ん？あれは…F4F？」

艦偵パイロット

「なに！ちっ！」

すぐに機体を傾ける。

すると、F4F2機が撃ってきたが、当たらない。

艦偵パイロット

「バカめ、間合いが遠いんだよ！」

この間、後席の搭乗員は必死に打電する。

艦偵パイロット

「おい、まだか?!」

艦偵搭乗員

「待ってくれ…よし、終わった！」

艦偵パイロット

「よし、離脱する！」

この時、あまりに当たらない事に業を煮やしたのか1機のF4Fが不用意に接近する。

艦偵搭乗員

「この野郎！さっきまでのお返しだ！」

ババババババババババ

12.7mm旋回銃が吼える！

いきなりの反撃に対応できなかったF4Fは空冷エンジンをやられ、墜ちてゆく。

艦偵搭乗員

「やったぜ！ざまあ見る！」

艦偵パイロット

「急降下で振り切るぞ！吐くなよ！」

クサイエ島より南、600キロの海域。

戦艦播磨艦橋

神谷

「たいへんです、長官！」

福田

「どうした、神谷？」

神谷

「アメリカ艦隊を見張っていた2式艦偵が戦闘機の攻撃を受けました！」

遠地

「なに！？」

マリダ

「で、艦偵は？」

神谷

「発見が早く、撃墜を免れました。その際、F4F1機を撃墜。無事離脱しました」

福田

「そうか…良かった」

千歳

「けど、宣戦布告の報告はまだよ」

新沢

「アメリカ艦隊には、通知がいつているのかも知れませんよ」

福本

「……神谷、連合艦隊司令部に打電。『我が艦偵、戦闘機の攻撃を受ける。我が艦隊これより応戦す。』以上」

神谷

「はい！」

福本

「全艦に通達。艦偵の旨を通知し、戦闘態勢に移行！航空戦隊、攻撃隊準備！」

全員

「了解！」「了解！」「了解！」

「し、失礼します！」

その時、1人の通信兵が入って来た。

すると、直接の上官である神谷を素通りし、福本に報告内容を書いた紙を渡す。福本は一読すると、マリイダに渡す。

マリイダ

「えーと、『発 連合艦隊司令部 宛 第七艦隊旗艦播磨 つい先程、アメリカが、我が帝国に宣戦布告せり。これより戦闘を開始せよ。』！！」

この瞬間：艦橋に居た全員が艦偵が攻撃されたのが誤射でも何でもない、敵対攻撃だと改めて認識した。

福本

「……神谷、連合艦隊司令部に返電。艦偵の事も入れてくれ」

神谷

「了解」

福本

「それと、全艦放送の用意も頼む」

福本

「諸君、福本だ。つい先程、アメリカ艦隊偵察中だった2式艦偵が攻撃を受け離脱したと報告を受けた。と同時に連合艦隊司令部よりアメリカが宣戦布告したとの通知があった」

全艦が騒然となった。

何せ、超大国アメリカと戦うのだから当たり前である。

福本

「これより、第七艦隊はアメリカ・フィリピン派遣艦隊に攻撃を開始する！皇国の興廃この一戦にあり！総員の奮闘に期待する！以上だ」

次号へ

## 日米開戦（後書き）

短く纏めようと思ったんですが……長くなりました。次号はいよいよ、海戦です！最初は空母戦でいきます。お楽しみに。ご意見ご感想をお待ちしております。



## ギルバート諸島沖海戦（第一次攻撃隊編）

空母紅龍艦上

飛行甲板には零戦54型・彗星・天山が並んでおり何時でも発艦可能な状態だ。

ヴィル

「……早いね」

アリソン

「何時でも行ける様に、朝から甲板に並べてたからね」

吉田

「これは大佐。戦闘前の見回りですか？」

ヴィル

「そうじゃありませんよ……いよいよですね」

片山

「はい。ルーズベルトの野郎に目にも見せてやりますよ！」

吉田

「その代わり、母艦の方、頼みましたよ」

ヴィル

「わかりました。」

アリソン

「大丈夫。私とクレアがいるから」

クレア

「そつちこそ、ちゃんと戻って来なさいよ」

吉田

「わかってます」

片山

「了解」

ダン！

カタパルトにより攻撃隊機が次々に上げられて行く。ちなみに第一次攻撃隊は……

零戦 66機

彗星 82機

天山 72機

計220機

一度艦隊上空で編隊を組むと、アメリカ艦隊に向かって行った。そして、アメリカ艦隊もエンタープライズ・ヨークタウン・ホーンネット・レキシントン・サラトガより攻撃隊が発艦していた。海戦の幕が上がった。

先に攻撃したのは、準備も早けりや速度も速い日本軍だった。

大宮

「全機突撃！」

吉田・片山

『了解！』

攻撃隊を見た直衛のF4Fが阻止にかかる。  
そこに零戦が割って入りあちこちで空戦になる！

吉田

「落ちろ！」

ダダダダ

ババババ

ゴワーン！

瞬く間に1機を撃墜する。獲物を探す必要もなく、向こうからつつ掛かって来る。

吉田

「よし、良いぞ。戦闘機さえ引きずり出せばいい」

エンタープライズ艦橋

士官1

「て、敵機、防空網突破！数、約150！」

ハルゼー提督

「バカ野郎！戦闘機隊は何をやってやがる！」

士官2

「敵戦闘機と戦っている様です」

ハルゼー提督

「なら、早く呼び戻せ！あいつらの仕事は戦闘機じゃなくて爆撃機や雷撃機を殺るのが仕事だろうが！」

士官1

「来ました！」

ハルゼー提督

「糞、全艦対空戦！撃て！」

ドン！ドン！ドン！ドン！ダン！ダン！ダン！ダン！バババババババババ！

必死に弾幕を張るアメリカ艦隊だったが、そんなもので引く日本軍ではなかった。

まず、彗星による爆撃。

一本棒になって、割り当てられた空母に急降下する。

キヤーーーーン……

カチッ

ヒューーウ……

ズガンン！ゴワーン！ドゴーン！グワーン！

最初に被弾したのはヨークタウンとホーンネットだった。

いくら開放式甲板を採用しているとは言え、500キロ爆撃を4・5発受ければ大変である。

飛行甲板が捲り上がり、火災が発生する。

次に狙われたのはレキシントン・サラトガである。

2隻共、その巨体をくねらせ必死に回避したが、技量高い日本軍に敵うはずなくたちまち爆撃が命中する。そして、その矛先はエンタープライズに向いた。

キャーーン……

この音を聞いた瞬間、ハルゼーは度胆を抜かれた。丸で体当たりせんばかりに突っ込み……

カチッ

ヒューーン……

ズガーン！

……爆撃を投下した。

もちろん、高度600m程で投下しているのだが、それ以上の迫力と気迫がある。

ハルゼー提督

「な……」

士官2

「提督、空母は全艦被弾！第二次攻撃隊用の艦載機は壊滅！」

ハルゼー提督

「な、なんだと！」

士官1

「ヨークタウン・ホーンネットで火災発生！現在消火中」

マレー艦長

「本艦にも爆撃3発命中。飛行甲板使用不能です」

僅か数分間の爆撃で空母全艦が被弾し、火災が発生している。

士官3

「あ、戦艦も被弾！」

見ると、テネシー・カリフォルニア・メリーランド・ウエストヴァージニアの旧式戦艦が爆撃されていた。爆撃隊を援護すべく戦闘機が銃撃している。

しかし、真打ちはこれからだった。

大宮

「よし！雷撃隊、攻撃開始！」

火災を消す為、速度を落としていた空母は絶好の標的である。

大宮

「良いぞ…そのまま…」

向こうもこちらの意図に気付いたのか、再び弾幕を張り、速度を上

げよつとする。

大宮

「…良いぞ…よいい…てえー！」

カチッ

ザブン

シャー…

ズガン！ズガン！ズガン！

艦攻搭乗員

「やりました！ヨークタウン型に3発命中！」

大宮

「他の艦攻隊は？」

艦攻搭乗員

「攻撃を終了。離脱しています」

大宮

「よし、我々も引き上げる！」

士官1

「ヨークタウン・ホーンネットに魚雷3発命中。レキシントン・サ  
ラトガは2発命中」

マレー艦長

「本艦にも2発命中」

士官3

「カリフォルニア・テネシー・ウェストヴァージニア・メリーランドに魚雷2発命中しています」

ハルゼー提督

「……あとは我が攻撃隊の戦果頼みか……」

その頃、第七艦隊では……

播磨艦橋

福本

「攻撃隊から連絡は？」

神谷

「今きました。ヨークタウン型空母2隻大破、レキシントン型空母2隻及びヨークタウン型1隻中破、戦艦4隻小破」

遠地

「おいおい、攻撃するのは構わないが、戦艦の出番を無くさないでくれよ」

マリーダ

「呆れた、アメリカの新型戦艦6隻の獲物だけでも贅沢なのに……」

遠地

「いいだろ、別に」



福本

「全く……」

神谷

「長官！レーダーに反応！敵攻撃隊接近！約180機！」

福本

「全艦対空戦用意！直衛隊は前に出て迎撃！」

ラフィール・神谷

「了解！」

アリソン

「クレアさん。戦闘機は我々が引き受けますから、敵攻撃隊を！」

クレア

『了解！僚機、我に続け』

28機の零戦が分離し、攻撃隊に向かう。

アリソン

「さあ来なさい！1機も逃がさないから！」

アメリカ軍搭乗員1

「ジャップの戦闘機が出て来ました！」

アメリカ軍隊長

「猿の物真似だ！我が軍より高性能な訳がない！落ち着いて攻撃しろ！」

アメリカ軍搭乗員2

「来やがれ猿！皆殺しにしてやる！」

士気旺盛（？）に突っ込んで行くF4F30機。

だが……

アメリカ軍搭乗員1

「な、なんだ、あの戦闘機！は、速いぞ！」

アメリカ軍隊長

「ば、馬鹿な！こんな戦闘機がいるなんて聞いてないぞ！」

アメリカ軍搭乗員2

「なんて小回りの利く戦闘機なんだ！？糞、後ろをとられた！」

クレア率いる戦闘機隊が攻撃隊に向かうと、見慣れない機影がある。

クレア

「こちら、クレア。敵編隊の中に見慣れない機影を発見。特徴は…  
…太い胴体の中翼機」

神谷

『クレアさん。それはアメリカ軍の新型艦攻『アベンジャー』です』

クレア

「わかった、ありがとうね。全機突撃！掛かれー！」

『『『了解！』』』』

さて、襲われる方の攻撃隊は最悪だった。

太陽を背にし、真上からの一撃を喰らわせ、編隊を乱す。

そして、バラバラになったところを1機つつ確実に撃墜していく。

これに、戦闘機を片付けたアリソン隊も加わる。

しかし、150機を片付けるのは容易ではない。

クレア

「流石に時間がかかりますね」

アリソン

『そうね…その前に弾薬が微妙なのよね…』

神谷

『アリソンさん、クレアさん！今すぐ、退避して下さい！3式弾を使います！』

福田

「敵編隊接近！距離三万五千メートル」

遠地

「了解。ラフィール、オツケーか？」

ラフィール

「はい。発射準備完了」

遠地

「よし！3号信管付き3式弾、てえー！」

福本

「ややこしいな」

ズガン！ズガン！ズガン！  
ズガン！ズガン！ズガン！

播磨に続き、河内が発砲する。

チカッ

ババババババババババババババババババババババババン！

福田

「炸裂！」

遠地

「さすが、レーダー信管！これで3式弾使用の対空戦はバッチリだぜ！」

神谷

「敵攻撃隊の半数を撃墜！」

福本

「40機程か…全体で100機位か…敵編隊は？」

神谷

「…敵編隊、半数は反転しましたが、半数が突っ込んで来ます！」

マリーダ

「全艦対空戦！てえー！」

ドン！ドン！ドン！ドン！ドドドドドドドド

ババババババババ

新沢

「やりました！敵艦攻撃滅！」

福田

「敵艦爆、突破！第4航空戦隊に向かっています！」

士官

「敵艦爆隊接近！」

艦長

「撃てー！」

ドン！ドン！ドン！

ドドドドドドドド

ババババババババ

第9防空戦隊、第9駆逐隊、戦鷹、勇鷹の搭載火器が火を吹く。

グワーン！ゴワーン！ズガーン！

突破した6機のうちの3機を撃墜したが……

士官

「敵機、急降下ー！」

若杉

「しまった！」

戦鷹

「こ、来ないでー！」

艦長

「く、取り舵一杯！回避ー！」

操舵手が必死に舵をきるが……

士官

「ダメです！直撃コース、当たりまーす！」

誰もが当たる、と思ったその時……

若杉

「そうだ！砲術長、あれ！」

砲術長

「おっと！すっかり忘れてた。新兵器、てえー！」

命令が発せられた瞬間、前部飛行甲板から壮大な煙が出た。

しかも、その付近から煙を出しながら敵機に向かう物体が多数。

すると、その物体は敵機の周りで次々炸裂し、ドーントレス3機をジューラルミンの塊に変えてしまった。

戦鷹

「た、助かった〜」

若杉

「新兵器、12.7cm 28連装噴進砲（3号信管弾頭）……派手  
だけど、威力は凄いな……」

結局、米攻撃隊は散々な目に会いながら、これと言った戦果をあげる  
ことなく終了した。  
しかし、彼らが帰る母艦は大変な事になっていた。

次号へ

ギルバート諸島沖海戦（第一次攻撃隊編）（後書き）

予定では、三話で終わらすつもりでしたが……長くなったので急遽、一話増やしました。ご意見ご感想をお待ちしています。



## ギルバート諸島沖海戦（第二次攻撃隊編）

旗艦エンタープライズ艦橋

ハルゼー提督

「か、壊滅だと!？」

士官1

「は!現在30機程が帰還中との事で……」

ハルゼー提督

「それで戦果なし、とはどういう事だ!？」

士官1

「本官に訊かれましても…あ、あと……」

ハルゼー提督

「なんだ？」

士官1

「我々が攻撃しているのは艦影から見まして、第七艦隊の様です」

ハルゼー提督

「それを早く言わねえか!！」

そう言うと、ハルゼーは考え始めた。

どこかの糞大統領や陸軍のアホ（一部を除く）はどう思っているか知らないが、海軍上層部では、日本の第七艦隊は噂の種だった。

何せ、サブーム帝国とヴィントラント王国の戦局を覆し、終結させ

たのは日本であり、第七艦隊である。

主戦力は連合艦隊と同等、しかし、それ以外は人員構成も、装備も不明のブラック艦隊。

唯一分かるのは司令長官がフクモトダイスケと言う名だと言うこと。だが、新聞写真を見た上層部は『若すぎる』として、影武者説や、敵の流したデマ説が囁かれているそうだが……

士官2

「て、敵攻撃隊、来襲！」

マレー艦長

「機数は!?!」

士官3

「200機以上！」

ハルゼー提督

「出せる戦闘機は!?!」

士官1

「我が艦の10機のみ！」

ハルゼー提督

「何でもいい!とにかく出せ！」

第七艦隊の第二次攻撃隊は大熊率いる、220機。  
編成は……

零戦 64機  
彗星 84機  
天山 72機 計220機

戦闘機だけなら6倍、全体で見ると22倍と、到底F4F10機で敵う訳がない。それでも、突っ込んだF4F隊であったがあつという間に瞬殺された。

大熊

「よし！まずは損傷が大きいヨークタウン型からだ！突撃！」

『『『『『おっ！』』』』』

第一次攻撃隊で、魚雷3発を喰らった、ヨークタウンとホーンネット。

速度が落ちている為、絶好の獲物である。

もちろん、それはアメリカ軍もわかっているからエスコート艦が固めている。

だが、エスコート艦の相手は零戦だった。

本来なら、対空砲火を黙らせるのは機銃だが……

シュパパパン！

ドガガガガン！

第二次攻撃隊の零戦には、3式航空用噴進弾が1機に6発搭載され

ている。

この攻撃により、エスコート艦の対空砲火は半減した。それどころか、艦によっては艦橋で炸裂した艦もあった。そして、彗星と天山の共同同時攻撃を仕掛ける！今や18ノットでしか航行できない2隻……

カチッ

ヒューーウ……

シャー……

ズガン！ズガン！ズガン！  
ゴワン！ゴワン！ゴワン！

ヨークタウン…500キロ爆弾5発、魚雷6発  
ホーンネット…500キロ爆弾6発、魚雷5発

これには耐えられず、2隻は沈み初めていた……。

エンタープライズ飛行甲板

「そんな…ヨーク姉<sup>ねえ</sup>！ホーンネット！」

飛行甲板で、沈みゆく姉妹の名を叫ぶ、エンタープライズの艦魂、エンタープライズ。

総員退艦が命じられたのか、乗組員が脱出して行く。

エンタープライズ

「……許さない…許さないよ、ジャップ！」

腰のM1911コルトを抜くと上空の彗星、天山に向け乱射するが、当たらない。

そんな彼女の目は……復讐鬼の目だった。

そして……彼女は直前まで気付かなかった。

彼女の頭上から……

キヤーン……

エンタープライズ

「……」

彗星が迫っていた。

大熊搭乗の艦爆が、エンタープライズに迫る。

大熊

「よし、急降下！」

キヤーン……

爆撃標準しつつ、ちょっと目を向けると、飛行甲板に少女……エンタープライズの艦魂……の背中が見えた。

しかし、次の瞬間、こちらに気が付いたか、顔が見えた。

それも一瞬……

大熊

「（南無）よい、てえー！」

カチッ

ヒューーウ……

ズガーン！

ヒューーウ……

ヒューーウ……

ズガーン！ズガーン！

急降下爆撃に続き……

ギューーン……

カチッ

シャーア……

ズガーン！ズガーン！ズガーン！

艦爆搭乗員

「決まりましたね！同時攻撃！」

大熊

「ああ……まあ、あの様子では、沈みそうにはないがな」

艦爆搭乗員

「けど、大打撃ですよ」

大熊

「そつだな。攻撃は？」

艦爆搭乗員

「終わりました」

大熊

「よし、引き上げるぞ！」

士官1

「提督、被害の集計終わりました」

ハルゼー提督

「……報告しろ」

士官1

「は、ヨークタウンとホーンネットは総員退艦を終了。レキシントン・サラトガは機関室がイカれ復旧の見通しはたっておりません。戦艦はテネシー、カリフォルニア、メリーランド、ウェストヴァージニアが中破です」

マレー艦長

「本艦は18ノットですが、航行可能です」

ハルゼー提督

「後方の輸送船団は？」

士官2

「すでにハワイへ引き返しています」

士官3

「提督、我々はどうします?」

ハルゼー提督

「そつだな……」

ズガン！ズガン！ズガン！

士官1

「!!!」

士官2

「な、なんだ?どうした?!」

士官3

「戦艦テネシーとカリフォルニアが被雷！敵機の攻撃を受けました  
！」

ハルゼー提督

「な、なんだと!」

慌てそちらを見ると、1機の水上機が離脱して行くところだった。

ハルゼー提督

「水上機だと!?!」

士官2

「提督！テネシーとカリフォルニア、魚雷6発命中！浸水量大！手



「がつけられないそうです！」

ハルゼー提督

「……………」

旗艦播磨

神谷

「長官。ニーナ司令より、『戦艦2隻に水攻効いた！』以上です」

遠地

「ニーナ……余計な事を……」

マリーダ

「…贅沢ね」

福田

「先輩、どうします?」

福本

「予定通りにアメリカ力艦隊を追撃する。全艦全速！」

神谷

「了解」

ラフィール

「敵艦隊を追撃する。機関全速！」

福本

「航海参謀。接触は？」

千歳

「そうね…攻撃隊収容の為に前進したから…4時間後、1800  
(ヒトハチマルマル)ごろ…夜戦準備を進言します」

福本

「わかった。神谷、全艦夜戦準備。あと、出来るだけ交代で休憩する様に伝えてくれ」

神谷

「わかりました」

次号へ

ギルバート諸島沖海戦（第二次攻撃隊編）（後書き）

作者「さあ、次は艦隊戦！」播磨「張り切ってますね」作者「艦隊戦こそロマン！播磨vsワシントン、和泉vsサウスダコタ！勝つのはどっちだ？お楽しみに！」播磨「ご意見ご感想お待ちしております」

ギルバート諸島沖海戦（艦隊戦編）

18:12 戦艦播磨艦橋

神谷

「長官！レーダーに反応！アメリカ艦隊です！」

レーダー画面の前でじっと見ていた神谷が叫ぶ。

遠地

「いよいよだな」

福本

「ああ、お前の腕の見せどころだな」

遠地

「任せとけ！」

福田

「先輩、どうします？」

福本

「…3式弾は？」

ジント

「すでに装填していますが…なぜですか？」

遠地

「その時になれば解るさ。それまでは教えられない」

ジント

「はあ……」

ラフィール

「じら、ジント。黙ってやることをやる」

ジント

「はいはい」

播磨

「うう……」

マリーダ

「播磨？」

播磨

「なんか……怖くなってきた……」

福本

「……この中で怖く無い奴なんかいないさ」

播磨

「……平気そうだよ……見ると」

福本

「そうだな……逃げられ無いしな、ここまで来ると……だからかもな」

播磨

「え？」

神谷

「艦影確認！戦艦8、巡洋艦12、駆逐艦多数！」

福本

「零観は？」

神谷

「すでに敵艦隊上空で待機中」

福本

「……砲戦用意！」

マリーダ

「全艦、砲戦用意！」

神谷

「了解！」

福本

「距離は？」

福田

「三万二千メートル……！敵一番から六番艦発砲！」

新沢

「遠距離射撃ですよ！？」

遠地

「馬鹿、レーダー射撃だ！」

福本

「来るぞ、衝撃に備えろ！」

ザバーン！ザバーン！ザバーン！

ラフィール

「被害報告！」

ジント

「本艦、異常無し」

遠地

「やりやがるな」

福本

「水雷戦隊、巡洋戦隊突撃！主砲まだか？」

ラフィール・神谷

「発砲準備完了！」

福本

「遠地！」

遠地

「おう！主砲、撃ち方始め！」

ドゴーン！ドゴーン！ドゴーン！

「どうだ？」

士官

「……近弾です。リー提督」

アメリカ艦隊戦艦部隊司令官であり、レーダー射撃の権威のウィルス・リー少将……口の悪さでも有名である。

リー少将

「ん、何か言ったか？」

士官

「いいえ、何も」

リー少将

「そうか」

士官

「あ、敵艦隊発砲！」

チカッ

ババババババババババババババババババババババババババババババババババババン！

リー少将

「な、なんだ!？」

士官



「炸裂弾です!?!」

リー少将

「ふん、奴ら、艦が木造だとも思っているのか?」

士官

「敵快速部隊、突っ込んで来ます!」

リー少将

「こつちも快速部隊を出して、ぶっ飛ばせ!」

士官

「は!」

第6水雷戦隊旗艦 遠賀

直江

「敵水雷戦隊、突っ込んで来る!」

上杉

「追っ払うわよ、各艦撃ち方始め!」

ズドーン!ズドーン!ズドーン!

ダーン!ダーン!ダーン!ダーン!ダーン!ダーン!ダーン!ダーン!ダーン!ダーン!ダーン!……

旗艦遠賀の発砲を切っ掛けに指揮下の駆逐艦が発砲する。

向こうも、オマハ型軽巡、ベンソン型駆逐艦が発砲するが、訓練度

合いと気合いが違う。

それに……

ガガン！ガガン！

オマハの15.2cm砲12門に対し、遠賀は15.5cm砲9門。砲門数では劣るが、最上型が軽巡時代に搭載していた高威力砲である。

直江

「距離6000」

上杉

「魚雷発射！全艦回避！」

シュッパパー！

魚雷発射と間髪入れずに第6水雷戦隊全艦が、回頭する。

これに気付いたアメリカ水雷戦隊も魚雷を発射するが、夜戦訓練なんてやって無いから何もかもバラバラだ。

ガガン！ガガン！ガガン！ガガン！ガガン！

そこに、日本海軍自慢の酸素魚雷が命中した。

ちなみに、アメリカ側が発射したのは当たらなかった。

上杉

「よし、次は戦艦よ！全艦続け！」

第3戦隊旗艦 六甲

士官

「敵重巡6隻、接近！」

この報告を受けた篠森は隣に居る六甲を見た。すると彼女も、視線に気付いたのか振り返る。

六甲

「大丈夫！お姉ちゃんがない分、私が頑張るから！」

重巡に対応するのは第3戦隊と第4戦隊。

この内、第3戦隊は畝傍が抜けていた。

この言葉を聞いて一瞬、フツと笑うと指示を出す。

篠森

「撃て！」

士官

「主砲、撃ち方始め！」

ズダーン！ズダーン！ズダーン！ズダーン！

ズダーン！ズダーン！ズダーン！

六甲の発砲に続き、伊吹、石狩、第4戦隊が砲門を開く！

篠森

「探照灯、照射！」

スウツと、探照灯の光がアメリカ重巡を写し出す。

この行為は非常に危険で、照射した艦は集中射撃されるリスクを伴う。

これを踏まえて照射を命じたのは、篠森は六甲型の防御力に自信があったからだ。

士官

「着弾、来ます！」

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！

士官

「おかしいですね？もう三斉射はしてるのに……」

篠森

「……なるほど、そうゆう事が」

士官

「え？」

篠森

「六甲の大きさに惑わされて、標準があまいのかもしれない」

士官

「ああ……なら今のうちに片付けましょうー！」

篠森

「つむ。魚雷は？」

士官

「すでに完了」

六甲

「標準は任せてね」

篠森

「よし、次の着弾と同時に発射する」

士官

「は……………着弾、来ます！」

篠森・六甲

「「魚雷発射!!」」

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！  
シュパーパー！！

距離は一万五千米トル。多少時間はかかるが……

士官

「時間です」

ストップウォッチで測っていた士官が言った直後……

ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！

士官

「敵艦、沈黙」

篠森

「……………第1戦隊と第2戦隊は？」

福田

「3式弾、発砲完了」

遠地

「よし、本番だ！徹甲弾、装填！」

福田

「敵弾、来ます！」

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！

新沢

「弾着、乱れてます！」

マリイダ

「レーダーは封じたわね」

ジント

「えー？いつの間？」

ラフィール

「さっき迄の、3式弾射撃の目的のこれよ」

ジント

「……対空用弾をレーダー潰しに使ったんですか！」

福本

「別に使ってはならないとゆう規定は無いぞ」

ジント

「その発想に驚きですよ」

ラフィール

「徹甲弾装填完了」

遠地

「レーダー標準と目視標準の併用射撃だ。当てろよ！」

ラフィール

「了解。撃て！」

ズガン！ズガン！ズガン！

日本艦隊の空中炸裂弾の射撃を受けた戦艦部隊。  
最初は気にもしていなかったが、二回目の射撃後に……

リー少将

「レーダーがやられたと!？」

士官

「はい！日本艦隊はレーダー射撃を封じる為に散弾を……」

リー少将

「そんな事はどうでもいい！レーダーは使える見込みは有るのか？  
無いのか？」

士官

「完全に使用不能！」

リー少将

「なら、目視射撃に切り替える！」

ズドーン！ズドーン！ズドーン！

士官

「……ダメです！弾着がバラバラです！」

リー少将

「糞！」

ズガン！ズガン！ズガン！

士官

「敵弾来ます！」

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ガガン！

士官

「！！！！！」

リー少将

「な、なにー！！！」

初弾から当てた……いや、この威力はいつたい……



士官

「たいへんです、提督！第1砲塔が！」

先程の砲弾の威力を示すかの様に……第1砲塔は直撃を受け、破壊されていた。

リー少将

「や、奴らの主砲は…化け物か!？」

新沢

「やりましたよ！初弾命中！」

遠地

「よし、良いぞ！その意気だ！」

福本

「全艦、敵のレーダー射撃は封じた！敵の目視射撃の錬度は低いぞ！一気に畳み掛ける！」

その後、双方20斉射したが、未だに決まらず……

遠地

「さすがアメリカ艦。頑丈を売りにするだけはあるな」

福本

「ああ」

ガガーン！

新沢

「うわ！」

千歳

「きゃあ！」

ラフィール

「く、被害報告！」

ジント

「1番砲塔に一発命中！さねど被害無し！」

福本

「播磨、大丈夫か！？」

播磨

「は、はい。ちょっと痛いけど……」

実際、軍服の脇腹辺りに血が滲んでいる。

福本

「……出来るだけ短時間で終わらせたいが……」

さて、ここで和泉とサウスタダコタの撃ち合いに目を向ける。

ガガーン！

和泉

「！お姉ちゃん！」

播磨の方を見ると当たったが、目立った損傷は無い。

和泉

「良かった……二倍返し！」

ズガン！ズガン！ズガン！

ガガン！ガガン！

和泉の執念か、砲術員の執念か…はたまた両方か…サウスダコタに二発命中した。

この内、一発は艦橋付近で炸裂、艦橋要員を死傷させた。

この中には、操舵手も含まれていた。

重傷を負った操舵手はそのまま舵輪に寄り掛かってしまい……

和泉

「あー！！」

ガガガガン！

後続で、直進していたインディアナとぶつかった。

しかも……

ガガン！ガガン！ガガン！ガガン！

そこに、近江の放った砲弾が四発がインディアナに命中、第1・第

2 砲塔を破壊し、艦上構造物は後部艦橋以外無茶苦茶になっていた。そんなところに突っ込んで来たのは第6水雷戦隊である。距離6000ほどで魚雷を発射し、離脱する。

これが決め手となった。

戦艦一隻に魚雷三・四発。頑丈な戦艦でも、あちこちで浸水により、速度が低下した。

これに、とどめとばかりに伊豆・伊賀の38cm砲がメリーランド・ウエストバージニアを乱打撃ちにした。

士官

「メリーランド・ウエストバージニア、沈没！」

リー少将

「ぐ…不味いな…」

38cm戦艦と思い二隻に任せたが……侮り過ぎた様だ。

士官

「提督、これ以上は…」

リー少将

「撤退だ！全艦撤退！」

士官

「り、了解！」

リー少将

「（あとは…無事に残存艦艇が逃げられるか…だが）」

神谷

「敵艦隊、撤退します」

福本

「全艦撃ち方止め」

新沢

「長官！敵艦隊は！？」

遠地

「ほっとけ。あの様子じゃあ、当分は出て来れないよ」

マリーダ

「今回は、アメリカ艦隊のフィリピン派遣阻止が目的よ。十分目的は達せられたわ」

新沢

「はあ……」

福本

「全艦、救助作業に入れ。その後、沖田達と合流する」

次号へ

ギルバート諸島沖海戦（艦隊戦編）（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしています。

ギルバート諸島沖海戦（追撃編）

遠くの方で落雷の様な音……砲声が聞こえるなか、アメリカ駆逐艦は魚雷発射の用意をしていた。

その魚雷発射管の向く先には雷撃処分の空母レキシントンがいた。

レキシントン艦橋付近の飛行甲板

「う……ごめんなさい…（泣）」

涙で顔をくしゃくしゃにしながら駆逐艦の艦魂が謝る。

「良いのよ…さあ…艦に戻りなさい」

「は、はい（泣）」

泣きながら返事をする と 転移した。

「そう…あなたは…何も悪くない…」

そう言いながら背中を艦橋の壁に預けるレキシントンの艦魂、レキシントン。

（ちなみに今の彼女は…三角座りをしている）

レキシントン

「エンターも、ハルゼーも、アメリカも、日本も…悪くない…」

日本は自存自衛、アメリカは国の為に…戦っているから恨む気持ちは無い。  
だが……

レキシントン

「悪いのは……大統領だけ……」

ふと見ると、発射準備を終えたのか、駆逐艦の艦魂が泣きながら敬礼していた。

静かに目を閉じる。

この後、直ぐに魚雷が発射され、この船体に当たるだろう。  
それが、この世の最後の痛みになる……  
そして、こう思った。

レキシントン

「（私は…何に生まれ変わるのかしら？）」

ザバーン！ザバーン！ザバーン！

レキシントン

「……………あれ？」

着弾音が聞こえた……………筈なのに……………



レキシントン

「生きて……る？」

その時、光と共に艦魂が転移してきた。

先程の駆逐艦の艦魂では無い……が日本の艦魂？と疑うぐらい見事な金髪。

「あなた、大丈夫？」

レキシントン

「え、わ！（ガン！）痛……」

いつの間にか相手の顔が目の前に有り、驚いて壁に頭をぶつけたレキシントン。

「まあまあ……大丈夫そうね」

そう言うと胡座をかいてレキシントンの前に座る。

「私は伊豆型戦艦の三番艦春日、あなたは？」

レキシントン

「レキシントン型空母のレキシントン……駆逐艦は？」

春日

「私が一発撃つたら逃げたわ……大丈夫」

レキシントン

「そう…あなたの艦は？」

春日

「そうね…10分位後で来るかな」

レキシントン

「なら、もうちょっとはお喋り出来ますね」

その頃、エンタープライズでは……

ハルゼー提督

「どうだ、砲戦は？」

士官

「…和が軍の不利の様です」

ハルゼー提督

「やはりか……」

マレー艦長

「何がですか？」

ハルゼー提督

「これは噂だが…と言っても、信じる人間は少ないが…日本海軍には、17インチ砲を備えたのが居るらしい」

マレー艦長

「なんですって!」

ハルゼー提督

「糞大統領は、それを聞いた瞬間、あり得ない。って言ったんだとさ…最も、今の状態を見て言えるかどうかは知らねえがな」

さすがのハルゼーもそれが3年前の話で、今や18インチ砲戦艦を日本が保有しているとは知らなかっただろう。

士官

「あ、レーダーに反応。」

ハルゼー提督

「なに?」

マレー艦長

「敵か?」

士官

「数は……約20!敵です!」

ハルゼー提督

「馬鹿な!日本艦全部が、リー達と戦っているんじゃないのか!?」

マレー艦長

「最大速度で逃げろ!戦闘用意!」

空母紅龍艦橋

ヴィル

「正直言つて……」

沖田

「ん？なんだ、大佐」

ヴィル

「空母とその護衛で、アメリカ空母を追う…前代未聞、海戦史上最  
初で最後でしょうね」

沖田

「うーん、前代未聞は置いといて、最初で最後にはならないかもね」

ヴィル

「え？」

沖田

「まあ、日本の諺に『立っている者は、親でも使え』と言うものがあるから……福本先輩ならまた有りそうだね」

ヴィル

「……その諺、今の僕達にぴったりですね」

さて、ハルゼー提督の乗るエンタープライズを追うのは、第七艦隊  
の空母8隻と護衛の第8防空戦隊と敵傍。

沖田

「先鋒の敵傍に連絡。砲戦始め！」

敵傍

「九鬼さん。沖田司令からです。砲戦始め」

九鬼

「わかりました。小浜、砲戦始め！」

小浜

「了解！撃ち方始め！」

ズドーン！ズドーン！

ちなみに、敵傍は女性のみで運用されている艦である。

日本海軍内（と言っても第七艦隊だが）では女性運用艦は他にも有るが、潜水艦や駆逐艦などの小型艦艇であり、軍艦では敵傍のみだ。（日本では、菊の御紋章を付けていないと『軍艦』では無い）おっと話が横にそれてしまった。

必死に逃げるエンタープライズと4隻の駆逐艦だったが、18ノットしか出ない。対し、日本艦艇は33ノットの高速で迫ってくる。

ハルゼー提督

「もつと速度は出ないのか!？」

マレー艦長

「これ以上は無理です！」  
その時…

ガガーン！

敵傍の放った25cm砲弾が艦橋下に命中した。

マレー艦長

「く、被害報告！」

士官

「艦橋下に被弾！」

ハルゼー提督

「け、これで文句事が増えたな」

士官

「敵艦艇接近」

マレー艦長

「護衛の駆逐艦はどうした!?!」

士官

「追い散らされました……」

マレー艦長

「な……」

士官

「敵巡洋艦より発光信号、『降伏せよ、さすれば発砲せず』」

ハルゼー提督

「…艦長、白旗を上げる」

マレー艦長

「提督！」

ハルゼー提督

「ルーズベルトの糞野郎が始めたんだ、俺がどう終わらそうと勝手だろう？」

マレー艦長

「しかし…」

ハルゼー提督

「それに、こんなアホな戦争に、これ以上犠牲を出したくない」

マレー艦長

「……わかりました」

マレー艦長とハルゼー提督の前に現れたのは、意外や意外、自分達より若い女性士官。

九鬼

「本官は、敵傍の艦長の九鬼中佐であります……あのー？」

マレー艦長

「あ、すまない。本官はエンタープライズ艦長、マレー中佐だ」

九鬼

「そちらに居られるのはハルゼー中将ですね？」

ハルゼー提督

「ああ。しかし、ジャパニーズガールが来るとは思わなかったぜ」

九鬼

「本官も、ハルゼー中将のような方と、お会いするとは思いませんでした」

ハルゼー提督

「ほお、そうか。降伏の件だが…」

九鬼

「ご心配なく。ジュネーブ条約通りに皆さんを保護致しますので」

次号へ



ギルバート諸島沖海戦（追撃編）（後書き）

本来なら、昨日更新する予定だったんですが……。ご意見ご感想を  
お待ちしております。

## 台湾防空戦（結果と影響）

第七艦隊がギルバート諸島沖で戦っている頃……

台湾 台南海軍飛行場

「た大変でーす！」

「どうしたんですかー。笹井中尉？」

笹井中尉

「開戦です！アメリカが宣戦布告したんです、坂井一飛曹！」

坂井一飛曹

「なんだって！」

笹井中尉

「あと、第七艦隊の偵察機がアメリカ艦隊の攻撃を受けたそうで……」

その時……

ウウ~~~~！

『敵機来襲！フィリピン方面よりアメリカ機来襲せり！これは演習では無い！繰り返し！これは演習では無い！……』

ゴオンゴオンゴオン……

台湾の南沖合いを飛ぶアメリカ陸軍自慢の『空の要塞』B17フラ  
イングフォートレスの大編隊。  
それを護衛するP38の編隊。  
彼らの向かう先は、日本軍の飛行場。

爆撃機隊長

『もつすぐ台湾だ。迎撃が来るぞ。用意しろ』

爆撃機搭乗員

『ジャップの戦闘機なんて俺が落としてやる！』

戦闘機搭乗員

『そんな手間は掛けさせねーよ！ジャップのボロ戦闘機なんか俺が  
落としてやる！』

ここでも、日本軍をなめている。

爆撃機隊長

『隊長！ジャップの戦闘機です！11時の方向！』

戦闘機隊長

『ジャップのボロは任せとけ！行くぞ！』

『加藤隊長。敵戦闘機です！』

加藤隊長

「よし！敵戦闘機を釣り出すぞ。掛かれ！」

加藤健夫中佐率いる隼戦闘機隊がP38に挑む。

加藤隊長

「よし、良いぞ」

巧みな指揮の下、P38との空戦を有利に進めていく。

加藤隊長

「喰らえ！」

ダダダダ

ババババ

ゴーン！

加藤隊長

「さすが20mm。米軍機も一撃だな」

加藤達、隼隊が乗っている隼は、零戦54型を基礎にして創作した、陸軍仕様零戦である。

正式名称『隼4型』。だから、零戦54型に似ているのも頷ける。

加藤隊長

「ペロハチめ。覚悟するんだな」

坂井一飛曹

『やってますね、陸サン』

笹井中尉

『出遅れた様ですね』

坂井一飛曹

『なーに、まだまだ獲物は有りますよ』

笹井中尉

『そうですね。全機突撃！』

海軍の零戦隊の介入で、P38隊との空戦は熾烈差を増す。

一方、B17爆撃機隊は……

爆撃機隊長

『コマンダー！前方にジャップ！』

見ると、単発機と双発機の混成隊だ。

爆撃機隊長

『落ち着け！ボックス隊形を維持したまま続け！』

無敵のボックス隊形。

しかし、日本軍にはサブルム戦の戦訓と、その後の研究で対策を立てていた。

このB17に挑むのは陸軍の若松幸義や樫出勇、海軍の赤松貞明など史実でも有名なパイロット達が率いる鍾馗、雷電、屠龍、月光の混成編隊である。

しかし、海軍の雷電、月光は史実の姿とは違い、陸軍の鍾馗、屠龍と瓜二つだ。

それもその筈、雷電と月光は鍾馗と屠龍の海軍仕様である。

これは二機種が同じ用途で開発されている事に気付いた航空戦隊司令の沖田が、福本に報告し、福本が陸海の開発部に協同開発を依頼したのである。

最初は双方共に反対したが……

福本

「これからアメリカやソ連と戦わなければならない時に、何を無駄な意地張ってるんですか！相手は人間もおおけりや、生産力も高いんですよ！陸海が同じコンセプトで別々に開発する…時間と資材と人と資金の大きな無駄です！！」

……と一喝。

これに、山本長官や石原参謀総長などが乗り出して、協同開発を実現。

これを機会に『統合生産整備計画』の実施に至る事になる。（隼4型の方は、もっとスムーズだったが）

……余談が過ぎた。

まず、鍾馗と雷電が3式航空噴進弾や、対空炸裂爆弾で機銃の射程範囲外から攻撃し、ボックス隊形を崩すと、屠龍と月光が37mm砲か斜め銃で攻撃する。

狙うは爆弾倉か主翼。  
主翼を断ち切れれば飛べないし、爆弾倉なら、爆弾に引火 誘爆 消  
滅(?)だ。

爆撃機搭乗員 1

『ちきしょう！速すぎて狙えねえ！』

爆撃機搭乗員 2

『ジャップの戦闘機がこんなに速いなんて聞いて無いぞ！』

爆撃機機長 1

『双発機に気をつける！大砲を積んだ奴が居やがる！』

爆撃機隊隊長

『全機、上昇しろ！』

爆撃機機長 2

『ダメだ！付いて来やがる！』

爆撃機機長 3

『ガツデム！ジャップの奴、俺の機の主翼に大穴開けやがった！』

爆撃機機長 4

『うわー！助けて(ゴワーン!)……………』

爆撃機隊隊長

「バカな…ジャップにこの『空の要塞』を落とされるなんて……悪夢を見てるのか!?!」

その時、上空から隊長機を狙い、1機の屠龍が降下して来た。その屠龍は37mm弾を数発撃ち込むと離脱した。その内の一発はコックピットを直撃していた。すると、B17はカクンと落ちていった。

結局、米軍の爆撃作戦は失敗に終わり、出撃したB17100機の内、60機が撃墜、20機が帰還後廃棄となった。

護衛のP38も大部分が撃墜されてしまった。

これは、他地域で戦闘になっておらず、台湾に陸海軍の主力航空隊を一カ所に集められたからだ。

結果、マッカーサー元帥は第二次を中止したが、その後の対応が不味かった。

昼過ぎに、陸海軍戦爆連合がフィリピンの飛行場を空襲。

まさか往復2000キロ飛べる戦闘機（零戦や隼）があるとは思わなかった米軍は奇襲を受け、フィリピン米航空隊は、その後2日間にわたる空襲により壊滅……全滅に近い損害を被ったのであった。

次号へ



**台湾防空戦（結果と影響）（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

一夜明けて……

一夜明けて……

第七艦隊旗艦播磨

ハルゼー提督

「1つ訊いてもいいか？」

福田

「なんででしょうか？」

ハルゼー提督

「この艦隊の平均年齢は何歳だ？」

福田

「そうですね…はつきり調べていませんから大体…20歳前後かと」

ハルゼー提督

「な、な、なんだと！」

若い…若すぎる！

この様子では、艦隊司令は何歳なんて想像出来ない。

福田

「先輩。ハルゼー提督をお連れしました」

福本

「入れてくれ」

福田

「は、どうぞ」

福田が長官室の扉を開け、ハルゼーが入ると、そこには新聞写真で見たことがある顔がいた。

福本

「初めまして、ハルゼー提督。本官が第七艦隊司令長官の福本大介大将です」

ハルゼー提督

「!!!!!!」

福本

「驚きますよね。よく言われます。『若すぎだ。』と」

ハルゼー提督

「確かに…俺の半分位か？」

福本

「今年の12月で23歳です」

ハルゼー提督

「な！半分より下かよ！」

ちなみにハルゼーは60歳。(1943年時点)

ハルゼー提督

「け、大統領が見たらなんて言うか…想像できん」

福本

「あはは…確かに…」

ハルゼー提督

「それに…こんな若すぎる提督がアメリカ海軍の噂の種とはな」

福本

「……………」

ハルゼー提督

「ところで…俺達の身柄は？」

福本

「一度トラックに寄港した後、エンタープライズ・レキシントン・サラトガを日本に回航します。その際、アメリカ大使館で身柄の無事を申告して頂きます。」

ハルゼー提督

「……………大使館は封鎖していないのか!？」

福本

「はい。陛下と内閣の決定です。こんな馬鹿げた戦争で、大使館を封鎖なんてしませんよ。それに、こんな戦争を長期間やるつもりなんでしょうかありません」

ハルゼーとの会談を終え、会議室に向かう福本。  
途中、沖田と会った。

福本

「よう、沖田。来てたのか」

沖田

「ええ。先輩はハルゼー提督との会談は？」

福本

「今終わったよ。昨日はご苦労さん」

沖田

「先輩も、まだ休んでらっしゃらないんでしょう？」

福本

「ああ。だから用事が終わったら寝る」

そう言って会議室の扉を開けると……

和泉

「こら！神妙にしやがれ！」

エンタープライズ

「うるさい！ジャップなんか…皆殺しよ！」

まさに、非友好的な会話……と言つより喧嘩していた。

福本

「おいおい…なんだ？」

河内

「あ、福本様。現状報告致しますか？」

沖田

「してくれないと解んないよ」

河内の説明では、この会議室まで来たのはいいが、たまたま入って来た尾崎が襲われかけたとか……。

福本

「尾崎さん。大丈夫ですか？」

尾崎

「あはは…艦魂にいきなり襲われたのは…初めてだから、腰が抜けちゃって…」

福本

「とにかく無事で良かったです」

まあ、こっちはいいとして……問題はあっち。

レキシントン

「エンター、止めなさい！」

サラトガ

「そんな事しても、何にもならないよ！」

エンタープライズ

「離して！ヨーク姉も…ホーンネットも…ジャップのせいだ！」

播磨

「残念ですけど……これが戦争です！これが現実です！」

エンタープライズ

「うるさい!! ジャップが…猿が、偉そうに言つな!」

福本

「……………播磨の言っているのは偉そうな事ではありません」

エンタープライズ

「……………なんか言つた?」

福本

「ええ、言いました。これが戦争の現実です。それに……………我々は誰も殺したくなんてないんですよ!」

エンタープライズ

「……………何よ? 殺しておいて、殺したく無かった? ふざけないでよ!」

福本

「……………本官が攻撃命令を出しました」

エンタープライズ

「……………ジャープ!!」

そう叫びながら福本に襲いかかったが……………

和泉・伊吹

「「確保!!」」

上から、和泉と伊吹が降って来てエンタープライズを取り抑えた。

和泉

「おい、誰でもいいからロープ持って来てくれ。す巻きにするから」

福本

「……………」

レキシントン

「あ、あの……………」

福本

「あ、えーと、レキシントンさんとサラトガさん……………ですよ？」

レキシントン

「は、はい……………すみません。うちのエンターがとんでもない事を……………」

福本

「仕方ありません。家族が殺されたら、誰だってあなになりますよ……………あ、自己紹介まだでしたね。初めまして。本官がこの第七艦隊司令の福本大介大将です。よろしく」

サラトガ

「嘘！若すぎ！」

福本

「……………よく言われます……………」

その日の夜……………

( 展開早っ！！ )



戦艦播磨艦内はエンジン音は響いている以外は静かだ。  
それは長官私室も同じ。

さすがに疲れたか、ぐっすりと寝ている福本。

そこに、光と共に転移して来たのは…エンタープライズ。  
彼女の目は…復讐に駆られた人間の目…。

エンタープライズ

「ヨーク姉…ホーンネット…今からあなた達を殺したジャップを地獄に送るね…」

そう言うと、近くにあった福本の軍刀を抜き……

エンタープライズ

「フッフ…気持ち良く寝てなさい…永眠させてあげるから」

そして、軍刀を心臓に……

「すまないが、福本を殺させる訳にはいかない」

エンタープライズ

「！誰!？」

いつの間に現れたのか、敵傍が転移していた。

エンタープライズ

「いつの間に……」

それ以上、言葉は続かなかった。

畝傍が彼女のみぞおちに一発入れて気絶させたからだ。  
そのまま畝傍はエンタープライズを抱き抱えたまま転移した。

エンタープライズ飛行甲板

レキシントン

「エンター！どこに居るのー！」

サラトガ

「出て来なさい！エンター！」

日進

「あら、2人共。どうしたの？大声出して」

レキシントン

「日進さん！大変です！エンターが居ないんです！」

春日

「あら、それは大変ね」

サラトガ

「春日さん！何を暢気な事を…」

畝傍

「エンターならここよ」

畝傍がエンタープライズを抱き抱えたまま転移して来た。  
サラトガ

「エンター！」

レキシントン

「いったい、どこに？」

敵傍

「長官私室だ。危うく福本を殺しかけたぞ」

レキシントン

「やっぱり……」

春日

「ま、そんな事は置いといて。今から月見酒と洒落込まないか？」

「いったいどこから調達したのか、酒瓶二本を掲げながら言った。」

日米古参同士の細やかな酒宴が人知れず行われていた。

サラトガ

「こんな戦争…早く終わらないかな」

レキシントン

「昨日始まった戦争が、簡単に終わる訳無いでしょ」

敵傍

「まあ、長くて一年だろっね」

レキシントン

「あら、根拠は？」

春日

「そのつもりで、日本政府も、軍も計画を立てている。それに……」

サラトガ

「それに？」

日進

「福本が…誰かが死ぬのを一人でも減らしたいから……」

サラトガ

「え？いや、それは普通じゃあ……」

日進

「そうじゃ無くて、アメリカの人間も、艦魂も死んでほしくないのよ」

畝傍

「福本の私室には位牌が置いてある…自分なりの供養だってね」

レキシントン

「供養……」

畝傍

「ええ。それに関心に対する戒めでもあるの…死者の思いを忘れてはならないって言うね」

日進

「あの馬鹿…感情移入し過ぎなのよ…それが良いところでもあるん

「だけどね」

……そんな事を話しつつ、夜は更けていく。  
その話が聞かれながら……。

次号へ

一夜明けて……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## トラ・トラ・トラ

第七艦隊がトラック諸島へ向かっている頃……

ハワイ 真珠湾軍港

つい昨日、日本に宣戦布告したアメリカだが、ハワイでは陽気であった。

何せ戦場は南太平洋でありハワイには何の関係もない事だった。

人々は起き始め、朝の清々しい空気を吸っていた。

軍艦の艦上では、国旗の掲揚が行われていた。

まだ、ハルゼー率いるアメリカ艦隊が大敗北したことは一部上層部の人間にしか知らされていない。

そして……それは起こった……

グオングオングオン……

飛行機のエンジン音を聴いた兵士達が上空を見ると航空機の大編隊だった。

「陸軍の演習か？」

「こんな朝っぱらから？」

そんな声があちこちから聞こえた。

すると、航空機が降下してきて……

カチツ  
ザブン  
シャアアー……

ズガーン！ガガーン！ドガーン！

攻撃した。

これを切っ掛けに、島の軍事施設が攻撃を受けた。  
リーダー施設が、ホイラー飛行場が、戦艦群が、やられていく。

「よっしゃ！奇襲成功！」

上空を飛ぶ天山艦攻の中で叫ぶ、総隊長の淵田美津雄中佐。  
後部座席では電信員が『トラ・トラ・トラ』の暗号電を打っている。  
この電文は第一機動部隊でも、連合艦隊でも、第七艦隊でも受信しているだろう。

淵田中佐

「それもこれも、第七艦隊のお陰だな」

さて、なぜ第一機動部隊が真珠湾を奇襲出来たかと言うと第七艦隊のお陰だ。

前々から、アメリカ力軍による通信・暗号傍受の疑いがあり、開戦時の空っぽ真珠湾奇襲作戦を中止しようとした時に、待ったをかけたのは福本だった。

なんと福本は、第一機動部隊の通信コードを第七艦隊に預ける事を



思いついたのだ。

つまり、第七艦隊が第一機動部隊の振りをして、ハルゼー艦隊を迎え討ち、第一機動部隊は真珠湾を奇襲する、と言うものだった。じゃあ第七艦隊の通信コードは？と言うと、呉に新設された『通信謀略隊』が第七艦隊の通信コードを使ったのである。このような偽装作業が効をそうした、奇襲成功だった。

土官

「電信来ました！『トラ・トラ・トラ』です！」

狭い赤城の艦橋の中で、たちまち参謀、土官が喜びの声が上がる。

源田中佐

「やりましたな！」

小澤長官

「ああ、これも皆のお陰だ」

源田中佐

「しかし、本番はこれからですな」

小澤長官

「うむ。金剛に合図を出せ」

榛名

「姉さん。小澤長官から砲撃開始の合図です！」

金剛

「わかったわ。撃ち方始め！」

ズドーン！ズドーン！ズドーン！ズドーン！  
ガガーン！ガガーン！ガガーン！ガガーン！

金剛、比叡、霧島、榛名に利根、筑摩が艦砲射撃を開始した。

これに続き金剛達の上空を第二次攻撃隊が通過する。第二次攻撃隊の標的は討ち漏らした艦艇とドックなどの港湾施設。

しかし、港湾施設に関しては……

『当分使え無いようにするだけで良い』

との命令が出ていた。

ちなみに、艦砲射撃の標的は攻撃隊を妨害する対空 火器と、飛行場だ。

「……まさか……こんな事が……」

海軍司令部の窓から見ていたキンメル大將は驚きのあまりで声が出なかった。

まさか本当に遠路はるばる真珠湾を攻撃するとは思っていなかったからだ。

キンメルは夢では無いかと思った。

コロラドが、ネヴァダが、オクラホマが、ペンシルヴァニアが、アリゾナがやられ、黒煙を上げている。

悪夢。

この言葉しか思い付かない。  
ヒューーン……

ゴワーン！

しかし、夢では無く現実だった。

結局、ハワイ真珠湾の陸海軍はろくな抵抗も出来ず、太平洋艦隊の戦力と真珠湾軍港は壊滅。

在陸海ハワイ航空隊も壊滅した。

これに最も衝撃を受けたのは、陸海軍では無くルーズベルト大統領だった。

実は彼、昨日の開戦時の演説で……

『日本にアメリカ本土はもちろん、ハワイを襲う事は不可能です！』

と、言ってしまったのだ。この影響が戦争へ徐々に始めるのであった。

次号へ

## トラ・トラ・トラ（後書き）

へ、本来なら細かくやるべき何ですが……申し訳ありません。  
ご意見ご感想をお待ちしております。

## ウエーク島攻略戦

さて、第一機動部隊により真珠湾軍港が奇襲を受けている頃……

2月11日 ウエーク島沖合い

戦艦二隻を先頭に井上中将率いる第四艦隊がいた。すでに所属艦艇の砲身はウエーク島に向いている。更に角田少将率いる隼鷹、飛鷹、龍驤の航空部隊がウエーク島上陸部隊の支援を受け持っている。

戦艦山城防空指揮所

防空指揮所からじつとウエーク島を見る山城。  
そこに姉の扶桑が転移して来た。

扶桑

「なーに見てるの？山城」

山城

「ウエーク島に決まってるでは有りませんか。姉上」

扶桑

「ふーん、本当かなー？実は愛宕の……」

山城

「姉上！！」

ちなみに、山城が愛宕のことが好きな事は大和と福本しか知らない。

扶桑

「あら、なんで知ってるかって？それは見てればわかるわ。お姉ちやんだもん」

……居ますよね。

こつ言う時だけ、お姉ちゃん顔とかする人。

山城

「……姉上」

チン

扶桑

「や、やめなさい、山城！なぜか殺る気満々なんですけど!？」

「あ、あのー……」

見ると、いつの間にやら夕張の艦魂、夕張が来ていた。

扶桑

「ゆ、夕張！助かった……」

夕張

「え？」

山城

「気にするな。用事は？」

夕張

「はい。隼鷹から、攻撃隊が発進したとの連絡です」

山城

「そつか……うむ、殺気！」

『敵機来襲！全艦対空戦闘用意！』

ウェーク島から来襲したのはF4F7機。

たかが戦闘機……と油断すると痛い目にあつたのが史実のウェーク島上陸戦だが。

さて、こちらではどうだろうか？

士官

「敵機接近！」

井上中将

「全艦対空戦闘始め！」

ドン！ドン！ドン！ドン！  
ダダダダダダ  
ババババババ

船体、船幅延長などの改装により史実より大量の対空火器を備えた扶桑と山城。他にも、夕張や天龍、龍田、旧型駆逐艦も改装が行わ





井上中将

「全艦射撃中止！」

士官

「撃ち方止め！」

どうやら艦砲射撃と空爆が効いたらしい。

井上中将

「陸戦隊を持ってくるまでもなかった…かな？」

次号へ

## ウェーク島攻略戦（後書き）

作者「ハツハツハ！どうだ米軍！戦艦二隻の艦砲射撃は！」福本「さすがに、扶桑と山城が加われば！ウェークなんて月面になりますね」作者「フツフツフ！しかし、これも序の口！ハワイ、ウェークを超える艦砲射撃が待っているのだよ！」福本「それでは皆さん、ご意見ご感想をお待ちしております」

## トラックにて

2月13日 トラック諸島

福本

「どうだ。レキシントンとサラトガは？」

マリィダ

「調査の結果、機関にちょっと手を加えれば、自力航行は可能だそうよ」

福本

「そうか…良かった」

マリィダ

「…ねえ？」

福本

「なに？」

マリィダ

「…敵傍から聞いたんだけど、エンタープライズに殺されかけたって、本当？」

福本

「ああ、事実だ」

マリィダ

「もう（怒）。もう少し、重大に受け止めなさいよ」

福本

「いや、そう言われてもだな……」

マリィダ

「ねえ、まさか死に急いでる？」

福本

「……なんでそこに至る？」

マリィダ

「だって……」

福本

「死に急いで何になる？つーか、部下に死ぬなと言っというて死に急ぐ上官っているか？」

マリィダ

「……そうよね。私の考え過ぎね」

福本

「まあ、それは置いといて……エンタープライズはなんとかしないと行けないのは確かだ」

その頃……エンタープライズ艦上

尾崎

「皆さん。撮りますよ」

艦橋を背景に、5〜6人の士官と一緒に新聞用の写真を撮っていた。

尾崎

「……はい、ありがとうございます」

新沢

「尾崎さん、取材は捗ってますか？」

尾崎

「あ、新沢さん。はい、捗ってますよ」

案外仲の良いこの2人。

一部では、付き合っていると、どちらかの片思いだとかで噂になっているそうなの…。

尾崎

「新沢さんこそどちらに？」

新沢

「エンタープライズの所です。『人手が足りないから、お前が行って来い』と言われてまして」

尾崎

「ありゃ、それはたいへんで」

新沢

「ま、仕事ですから」

コンコン

「どうぞぞ」

新沢

「失礼します」

新沢と尾崎がエンタープライズの私室に入ると、エンタープライズと白衣姿の艦魂。

新沢

「どうですか、三原さん？」

「新沢君。それは患者本人に訊く事ですよ」

赤十字の腕章に、白衣姿…とくれば軍医。

艦魂で軍医…工作艦の艦魂である。

今、エンタープライズを担当している明石型工作艦二番艦の三原である。

史実では、戦局悪化で建造されなかったが、この世界では別である。

エンタープライズ

「……ねえ、そこのジャップ」

新沢

「……なんですか？」

ジャップと言われて応えたくないが、ある種の耐性がついているので、そこはスルー。

エンタープライズ

「あなたは……アメリカの事どう思う？」

新沢

「一言で言うなら……世界一自分勝手な国」

エンタープライズ

「な！」

新沢

「……しかし、日本にとっては大事なパートナーです。イギリス、ドイツに並ぶね」

エンタープライズ

「じゃあ……なんで戦争なんか……」

新沢

「はい？何を言っているんですか？始めたのはお国ですよ」

エンタープライズ

「え、だって、日本が先に宣戦布告したから始まったんじゃない……」

新沢

「宣戦布告もアメリカ。最後通告のハル・ノートも貴国から、支那事変に介入したのもあなた方。はい、これ以上言うことは？」

エンタープライズ

「……アメリカは正義の……」

新沢

「正義の国なら……もっとやり方があった筈。我が国も戦争回避の為に必死だった。何回も外交交渉を行い、妥協案も出した。天皇陛下とも会談した……なのにハル・ノートはその努力を無にした」

エンタープライズ

「……」

新沢

「……ですけど、そんな事言っただって今更どうにもなりませんから」

尾崎

「そうそう。福本長官も『今は一刻も早い戦争終結が先だから』で、何時も言ってるからね」

三原

「それより。あなた達、こんな所で油売ってていいの？」

新沢

「あ、様子見で来たんですけど……元気そうですね。失礼しました」

尾崎

「じゃあ、私も」

三原

「あ、ちょっと待って」



そう言うと、一枚の紙を新沢に渡す。

新沢

「カルテですか？」

三原

「エンタープライズのカルテよ。福本長官と播磨長官に渡してほしいの」

新沢

「長官に？」

三原

「そう。2人に頼まれてただけで、忙しいから渡せなくて」

新沢

「そうですか。良いですよ」

三原

「じゃあ、お願い」

新沢

「はい」

エンタープライズ

「…ねえ？」

三原

「なに？」

エンタープライズ

「福本長官…どんな人？」

三原

「そうね…よくは知らないけど…とても良い人とはきくわね」

エンタープライズ

「良い人？」

三原

「うん。英語は苦手だけど、頭は良くて、武芸達者で、仲間思いで…て言うのはよく聞くわね」

エンタープライズ

「…そう…」

次号へ

## トラックにて（後書き）

更新遅くなっていますみません！ご意見ご感想をお待ちしております。

グアム島にて……

2月15日 グアム島沖合い

春日、日進、敵傍の三隻は全航空戦隊、第7水雷・第8防空戦隊と陸戦隊を載せた船団と共にグアム島に来ていた。グアム島はアメリカ軍基地であり、現在でも海兵隊の基地として有名である。

戦艦春日

士官

「全艦、配置完了しました」

楠木

「航空隊は？」

士官

「先程攻撃隊が発艦しました」

楠木

「そう……けど、島一つに空母八隻はやり過ぎよ」

春日

「……アメリカなら重要と決めた所にこの倍以上の戦力で来るだろうな」

楠木

「そう言っもんですか？」

春日

「そう言っものだ…とレキシントンとサラトガは言っていた」

楠木

「そうですか」

士官

「司令。準備完了」

楠木

「わかつた。全艦撃ち方始め！」

ズカーン！ズカーン！ズカーン！  
ズカーン！ズカーン！ズカーン！  
ズカーン！ズカーン！ズカーン！ズカーン！

三艦の発砲に続き、第7・8戦隊も発砲する。

揚陸艦艦上

大沢

「うわ……」

識名

「…あんな所に居なくて良かつた」

瑠奈

「あゝ、アメリカ軍じゃ無くて良かった」

玲奈

「本当だね」

マチルダ

「こら！あなた達、準備は出来てるの？」

瑠奈・瑠奈

「出来てるよ」

識名

「同じく」

大沢

「右に同じ」

マチルダ

「…あなたは良いのよ」

大沢

「ん、なんか言ったか？」

マチルダ

「いいえ…さあ、上陸するわよ。戻りなさい」

瑠奈・玲奈

「はい」

識名

「わかりました、義姉様」

マチルダ

「ほら。私達も戻るわよ」

大沢

「はいはい」

30分間の艦砲射撃を終え、マチルダ達の乗った揚陸艦が浜に近づく。

もちろん、たかだか30分程の艦砲射撃で全滅したとは思っていないから、上空には零戦、駆逐艦は再度発砲できる様になっている。戦車が揚陸できる所まで来るとランプを降ろし先にマチルダ戦車を降ろす。

大沢

「……静か過ぎるね」

マチルダ

「……所かにいますわ。気よ付けて」

大島少尉

「よし。四式、五式を出せ」

マチルダに続き、四式中戦車と五式重戦車が揚陸する。

瑠奈

「瑠奈。異常無し」

玲奈

「玲奈。周りに異常無し」

マチルダ

「……異常な静かさですわね」

大沢

「少尉。識名と後続を揚陸させては？」

大島少尉

「……いや、もう少し様子を……」

ドン！

ガン！

マチルダ

「！！！！」

大沢

「な、なんだ！？」

瑠奈

「姉さん！十二時の方向、発砲炎！」

マチルダ

「玲奈！撃ちなさい！」



玲奈

「は、はい！」

ダンダンダンダン！

車体の20mm連装機関銃が火を吹く！

ガンガンガン……

グワーン！

玲奈

「やっつけた？」

瑠奈

「……多分」

大島少尉

「……後続を揚陸させよう」

それ以後反撃も無く無事後続が揚陸された。

結局翌日の昼頃にアメリカ軍は降伏し、アジア方面におけるアメリカ軍はフィリピンのみとなった。

次号へ

グアム島にて……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## フィリピン攻略戦 1

2月17日 フィリピン

北部の都市 アパリ

司令部に使っているホテルのロビーでフィリピン攻略軍の首脳がいた。

その顔触れは、サブム帝国戦で活躍した山下奉文大将に、史実のフィリピン攻略司令官の本間雅晴中将、史実のジャワ攻略で有名な今村均中将の3人。

山下大将

「既に制空権はこちらにある。いざというときは航空支援が受けられる」

今村中将

「山本さんの話では、制海権も確保済み、艦隊からの支援も可能との事です」

本間中将

「そうなること…マツカーサー元帥もマニラには籠らないでしょう」

今村中将

「ならば、コレヒドール要塞に籠る気だ」

山下大将

「うむ、ならばバターン半島も半要塞化しているだろう……落とすのは容易じゃないな」

本間中将

「サブルム帝国戦の王都奪還の様にいかないでしょう」

今村中将

「そこで、山本長官から打診がありました。コレヒドール要塞は海軍に任せてほしいと」

山下大将

「理由は？」

今村中将

「マニラ軍港の早期奪取の為だと」

本間中将

「よろしいではありませんか？陥落させるには海軍も必要ですし」

山下大将

「うむ、マツカーサーの事もある。海軍さんに任せよう」

今村中将

「わかりました。それでは我々はバターン半島を包囲します」

山下大将

「それでは当面の目標として、マニラの確保を優先する」

キュラキュラキュラ……

キヤタピラー音を響かせながら四式・五式戦車、一式半装軌車、一式自走無反動砲などが進んで行く。  
これを率いるのは島田豊作中佐である。

通信員

「中佐殿、三式連絡機からです」

指揮車に使っている五式重戦車の通信員が報告する。

島田中佐

「内容は？」

通信員

「『敵戦車10両以上、接近せり』」

島田中佐

「……総員戦闘用意」

フィリピンにはM3リー・グラントが42年の12月に配備されていたが、それでは足りないと思ったマツカーサーの要請により、M4戦車が新たに配備されていた。

戦車搭乗員

「鏡餅（M3リーの事）接近！」

島田中佐

「いいか、出来るだけ近付ける！」

戦車搭乗員

「距離900m！」

島田中佐

「まだまだ」

戦車搭乗員

「距離850m！」

島田中佐

「あと、100m近付ける！」

戦車搭乗員

「はい！距離80…敵発砲！」

ガキーン！

島田中佐

「馬鹿め！五式の装甲が撃ち抜かれるものか！」

戦車搭乗員

「距離750m！」

島田中佐

「よし！全車発砲！」

ズドン！ズドン！ズドン！ズドン！ズドン！ズドン！ズドン！  
ガガン！ガガン！ガガン！ガガン！ガガン！ガガン！ガガン！

四式・五式の射撃を喰らいたちまち撃破・炎上するM3リー。

島田中佐

「さすが、88mm！アメ公戦車も一撃だぜ！」

戦車搭乗員

「あ、後方より後続！鏡餅じゃありません！新型です！」

見ると、明らかにM3リーとは違う型の戦車が接近して来る。

島田中佐

「かまわん！新型同士だ！堂々と撃ち合ってやる！」

ドン！

ガン！

島田中佐

「75mmか？この距離で撃ち抜かれる程柔な装甲じゃない！」

ズドン！

グワーン！

島田中佐

「なんだ。張り合いの無い新型だな……」

数時間後……

マニラ アメリカ軍司令部

マッカーサー元帥

「なに、それは本当か？」

副官

「は、間違いありません」

マッカーサー元帥

「M4戦車を加えた部隊が壊滅しただと？」

副官

「はい。帰って来たのはM3グラント2両にM3スチュワート数両だけです」

マッカーサー元帥

「……………」

副官

「閣下？」

マッカーサー元帥

「マニラ防衛を諦める。全軍にコレヒドール要塞に移動と伝える」

副官

「はい」



次号へ

## フィリピン攻略戦 1 (後書き)

作者「更新遅くなりまして、すみません」福本「ああ。なったな」  
作者「えーと、それから、いきなりではありませんが、テストの関係  
により更新が遅れます」福本「……おいおい」作者「まあ、時間が  
出来たら更新しますけど」福本「……ちゃんと勉強しろよ」作者「  
するよ」マリーダ「それでは、ご意見ご感想をお待ちしております」

## フィリピン攻略戦 2

2月24日

アメリカ軍の妨害に合いつつ、マニラに到達した日本陸軍。  
だが……………

山下大将

「やはり、マッカーサーはコレヒドール要塞に逃げたか」

本間中将

「はい。ケソン大統領を連れ、コレヒドール要塞に籠ったそうです」

山下大将

「うむ、予想はしていたが厄介だな……………」

実は、2日前にリングエン・ダグパンに増援が揚陸している。  
しかし、コレヒドール要塞・バターン半島の永久陣地を攻略するのは中々の困難事だ。

山下大将

「まあ、コレヒドール要塞は海軍の山本大将の担当だ。我々はバターン半島の根元に一個師団を置いて、レイテ・ミンダナオ島の攻略に掛かるぞ」

今村中将

「わかりました」

その頃……

連合艦隊旗艦 大和

山本長官

「コレヒドール要塞に逃げたか……予想通りだな」

宇垣参謀長

「は……しかし、福本の作戦は当たりますかな？」

山本長官

「元とはいえ、アメリカ陸軍の重職を担っていた人物だ。捕らえられればこれ以上のインパクトも無い。それに、マッカーサーは大統領候補の噂も有るからな」

宇垣参謀長

「しかし、大和の主砲で要塞攻略とは……」

山本長官

「大和達がふて腐れるかな？」

宇垣参謀長

「その時は、福本に責任をとってもらいましょう」

山本長官

「ところで、その福本達はどこだ？」

宇垣参謀長

「今頃、第一機動艦隊を見送っているでしょう」

その頃……

日本本土 呉軍港

福本

「ハックション！ イックション！」

マリーダ

「…大丈夫、風邪？」

福本

「いや、違う。誰か知らんが、俺の話をしてたみたい」

赤城

「今の季節の風邪には気お付けた方がいいよ」

福本

「いや、只のくしゃみですから」

土佐

「じゃあ、お姉ちゃん。行ってらっしゃい」

加賀

「（コクン）」

相変わらず無口だが、初めて会った時よりは表情豊かになった加賀。

沖田

「それではお二方、戦果期待しております」

蒼龍

「うん！」

飛龍

「帰ったら、君の許嫁を教えてよね」

沖田

「は…はい」

…何かとんでもない約束をしている、沖田と飛龍。

神童

「いい、2人供。いくら敵機が来ないからって、油断しちゃだめよ」

「「はい！」」

神童

「…ちゃんと解ってるのかしら…翔鶴・瑞鶴」

初登場の翔鶴・瑞鶴。

金剛

「赤城。行くぞ」

赤城

「はい」

福本

「金剛さん。皆さんをよろしく」

金剛

「ああ、任せてくれ」

福本

「総員、第一機動艦隊に敬礼！」

出撃する第一機動艦隊に第七艦隊の将兵が敬礼で見送る。

第一機動艦隊も返礼で答える。

さて……コレヒドール要塞はどうやって攻略されるのか？

次号へ

## フィリピン攻略戦 2 (後書き)

ご意見感想をお待ちしております。



### フィリピン攻略戦 3 コレヒドール要塞陥落

2月27日 フィリピン近海

カタンカタンカタン………バルルルン………

空母赤城の飛行甲板では、第一次攻撃隊の準備がほぼ完了していた。零戦には噴進弾、彗星・天山には爆弾が装着されている。

赤城艦橋

源田中佐

「いよいよですな」

小澤長官

「ああ。空海共同でコレヒドール要塞を落とす」

源田中佐

「しかし……山本長官も無茶ですな。1日でコレヒドール要塞を陥落させるとは……」

小澤長官

「その事なら裏がある。福本がコレヒドールを1日で落とせる、と言ったらしい」

源田中佐

「あの若僧が？…またとんでも無い事を……」

小澤長官

「航空参謀は彼が嫌いかね？」

源田中佐

「戦艦に関してはともかく、航空に関しては認めます」

小澤長官

「はっはっは、そうか」

士官

「長官。山本長官より攻撃命令が出ました」

小澤長官

「どつやら出番の様だな。攻撃隊を発進させる」

数分後……

コレヒドール要塞

ウウー！！

『敵機来襲！総員配置に就け！』

けたたましいサイレンを鳴らし、館内放送が敵機の来襲を伝える。要塞内にある対空火器に慌て兵員が向かう。

士官

「閣下、こちらへ！」

マッカーサー元帥

「家族はどうした？」

士官

「すでに防空壕に避難しております。さあ、早く！」

マッカーサーが防空壕に駆け込むと同時に対空火器が火を吹いた。

淵田中佐

「全機、各個に掛かれー！」

『『『了解！』『』』』

戦闘機隊は対空火器を潰す為先に降下する。

ギューーン……

ドン！ドン！

ダダダダダダ

零戦の接近を許すまいと弾幕を張るが、今の零戦にはロケット弾がある。

シャパパパパン！

ドガン！グワン！ババーン！

ロケット弾は対空陣地に着弾するか、対空陣地の真上で炸裂する。これにより対空火器はほぼ壊滅。

これに前後し、艦爆隊が砲台に爆弾を叩きつける。艦攻隊はコンクリートの戦艦と化した、フォート・ドラムやロック島に800kg爆弾を命中させ、瓦礫の山に変える。

淵田中佐

「よし。全機、引き上げるぞ」

第一次攻撃終了。

しかし、間髪を入れずに第二次攻撃隊が来襲した。

夕方……

マッカーサー元帥

「何回空襲を受けた？」

士官

「6回です。日本軍はクラーク基地から双発爆撃機隊を飛ばしている様です」

マッカーサー元帥

「ぐ…無線アンテナもやられては…ここに居る目的も無い」

史実同様、コレヒドール要塞に籠って、日本軍に対し奮戦している事をラジオでアピールする……筈が空襲でアンテナが吹っ飛ばされたのだ。

どうやらマッカーサーは大統領の座を今も狙っている様だ。

兵士



そして、入っていた紙を渡す。

マツカーサー元帥

「……………」

士官

「元帥？」

マツカーサー元帥

「…海軍の山本五十六大将から私宛てだ。今の内に投降しなければ、コレヒドール要塞を徹底的に破壊するそうだ…更地にするぐらいな」

士官

「元帥…」

マツカーサー元帥

「……………白旗を上げてくれ」

宇垣参謀長

「山本長官。白旗が上がりました！」

双眼鏡で見守っていた宇垣参謀長が報告する。

山本長官

「戦闘配置のまま待機。いつでも発砲できる様にしておけ」

……結局、史実では散々日本軍を困らせたコレヒドール要塞だが、  
僅か1日の空海からの攻撃により陥落した。

次号へ

フィリピン攻略戦 3 コレヒドール要塞陥落(後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。



## 勝利の宴会・苦悩の大統領

3月2日 夜 呉軍港

大和

「それでは、緒戦の勝利を祝って！」

全員

「「「「「かんぱい！」「」「」」」」

福本

「ほんと…宴会好きだな」

マリーダ

「そう言ってる私達もね」

遠地

「ははは…確かに」

福田

「特に先輩はどんちゃん騒ぎとか好きでしたからね」

福本

「余計な事は言わんでいい」

大和

「福本君」

福本

「あ、大和さん」

大和

「聞いたよ！空母3隻鹵獲したですって？凄いね！」

福本

「あー、いえいえ。たまたまですから。たまたま」

日向

「うわー、福本君照れてる」

福本

「照れてません」

金剛・赤城・和泉

「「「ミアア、酒のおかわり！」」」

ミアア

「はいはい」

沖田

「またやってますね。飲み比べ」

楠木

「まあ…2人はプライドがあるからね」

飛龍

「ところで、沖田君。許嫁は誰？」

沖田

「う…言わなきゃいけませんか？」

飛龍

「うん」

困惑する沖田。

流石にそれは言いにくいだろう。

楠木

「あら、飛龍。なんで、沖田君の許嫁が気になるの？」

飛龍

「あのね、この間沖田君が写真見てたの。それで声をかけたら、慌て隠したの」

楠木

「ああ。なるほどね」

まあ、相手が相手だけに言いにくいわね。

楠木

「うーん、私の知ってる範囲だと、同じ皇族の出の筈よ。名前は知らないけど」

飛龍

「なーんだ、やっぱり。ま、恥ずかしくて言えないよね」

そう言うと飛龍は大和達の所に向かって行った。

沖田

「ふうー、助かった。サンキュー、楠木」

楠木

「いいのいいの。相手が相手だけに言いづらいでしょ」

沖田

「ああ。皆が知ったら、引っくり返るからな」

楠木

「知ってるのは、私と福本長官、山本長官、マリーダ先輩とかの一部の人が知らないからね」

福本

「相変わらず、ちびちび飲みますね」

山城

「福本殿か…」

福本

「隣、良いですか？」

山城

「かまわん」

それでは、と言いつつ山城の隣に座る。

山城

「…姉上にバレた」

福本

「愛宕さんの事ですか？」

山城

「ああ」

福本

「ま、何時かはバレます。特に姉妹にはね」

山城

「…そうだな…ところで、福本殿はマリーダ殿には…」

福本

「まだです…と言うか、こんな時にそんな事言えませんよ」

山城

「ふ…それもそうだな」

福本

「艦隊じゃあ、女性の間で合い言葉ですよ…『結婚しません 勝つまでは』とね」

山城

「…長官殿の悩みは絶えぬ…か」

福本

「はい」

こんな会話が続きつつ、夜は更けてゆく。

一方、アメリカでは……

首都ワシントンDC

ホワイトハウス

ルーズベルト大統領

「糞！日本め、猿め、ジャップめ！」

大統領執務室で、声を張り上げながら暴言を吐いていた。  
開戦から僅か20日。

これ程の短期間で太平洋艦隊が壊滅、ウエーク島・グアム島占領、  
真珠湾軍港壊滅、フィリピン陥落…と敗退ばかり。

手痛いのは、貴重な空母3隻が日本軍に鹵獲された事。

真珠湾軍港のドックが使えない為、戦力回復は進んでいない。

国内外のメディアがこの戦争に注目している。

日本が勝てば、ソ連は迂闊に対ソ連合に手出し出来ない。

逆にアメリカが勝てば、世界はソ連が征したも同然である。

しかし、アメリカ国民には、この戦争の受けは良くない。

何故なら、新聞のほとんどがこの戦争に否定的、あるいはルーズベ  
ルトを批判している。

何度も言う通り、今やユダヤ人はアメリカ社会の中枢を担っており、  
殆どが親日的である。

そんな彼らが書く新聞は、アメリカ国民に受けが良い。

その影響か、毎日ホワイトハウスの前では反戦デモが行われている。

『大統領は直ちに戦争を止めろ！』

『ジャパンと戦うより、世界を狙うソ連と戦え！』

『戦争しないは、嘘じゃないか！』

『日本の天皇の言い分が正しいじゃないか！』

……等々。

もちろん、これを少数派と捉える事もできる。

しかし、この戦争に国民が疑問を持ち始めたのは事実だ。

だから、ルーズベルトは勝利が欲しかった。

どんなに小さくても良い。メディアに大きく報道してもらい、大勝利に見せ掛ければ良いからだ。

ルーズベルトは電話を取ると、ダイヤルを回す。

かけた先はハル国務長官。

ルーズベルト大統領

「ハル。今すぐ、チャーチルと話がしたい。外務省を通じて取り計らってくれ」

次号へ

**勝利の宴会・苦悩の大統領（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。



## 良いニュース・悪いニュース

4月2日 呉軍港

連合艦隊旗艦大和

福本

「山本長官。福本、参りました」

山本長官

「入れ」

福本

「失礼します」

長官室の扉を開き、室内に入る。

福本

「何のご用でしょうか？」

山本長官

「うむ。その前に君は、良いニュースと悪いニュースのどちらから聞きたいかね？」

福本

「……悪いニュースから聞きましょう」

山本長官

「そうか。私もそちらの方が話し安い…これを見てくれ」

そう言い、執務机の引き出しから一束の書類を出して福本に渡す。

山本長官

「どう思う？」

福本

「…えーと…あの、老後と言うか…引退後の事を考えるのは構いませんが…職権乱用して、モナコとラスベガスの事を調べるのはどうかと……」

山本長官

「しまった！間違えた。こっちだこっち」

そう言って、別の書類を渡す。

福本

「成る程。ルーズベルトがチャーチルと会談していましたが……なんと、まあ……」

山本長官

「援助を増やすから、パプアニューギニア方面の基地と交換と言う条件だそうだ」

福本

「で、チャーチルは苦虫百匹を噛み潰す思いで受け入れ、天皇に連絡して来た……と」

山本長官

「…よくわかったな」

福本

「まあ、そうゆう設定を好む作者ですから」

おい！

山本長官

「そうか…ところで、アメリカの狙いはなんだと思う？」

福本

「オーストラリア・第六大陸間の通商路遮断と、我々を消耗戦に引きずり込む気でしょう」

山本長官

「ふむ。日（日本）オーストラリア豪陸（第六大陸）遮断と消耗戦か…筋が通るな」

福本

「2つ共、帝国にとって手痛い話しです。特に消耗戦に入られると、工業力が上がっているとは言え、我が国には大変不利です」

山本長官

「うーむ…アメリカはまだ、本格的に部隊を派遣してはいない。しかし、ほっておくと言つのもな」

福本

「…もうちよつと情報が集まらないと何とも言えませんが…基地機能を整つまでアメリカ軍に任せたらどうでしょう？」

福本

「そして、基地機能が整ったところで奪取する…タイミングが重要な博打だな」

福本

「博打打ちの長官に言われたのでは、何も言い返せませんな」

山本長官

「となると、陸さんの力が必要だな」

福本

「こうなると、第七艦隊も出撃確定ですね。機動艦隊は出せますか？」

山本長官

「第一機動艦隊は出せるだろう。だが本土の事が有るから、全部は出せん」

福本

「雲龍型は？」

山本長官

「一番艦があと1ヶ月で完成する。搭乗員の確保もすんでいる」

福本

「そつですか…ところで良いニュースは？」

山本長官

「おお、そつだな。2つある。1つはエンタープライズの修理が完了した」

福本

「本当ですか！で、配属先は？」

山本長官

「君のところだ」

福本

「は……………はい!？」

山本長官

「なんだ、奇声を上げて？配属先は第七艦隊だぞ」

福本

「……………長官、それなら第一機動艦隊に配属されては？うちには8隻あるんですよ」

山本長官

「相性とか、慣れとか、あるだろう？」

福本

「まあ、分からなくもありませんが…で、2つ目は？」

山本長官

「うむ。川西航空機の紫電改がロールアウトした」

福本

「本当ですか！それは良いニュースですね」

紫電改…制式名称紫電21型強風水上戦闘機を陸上機（局地戦闘機）に改修したのが紫電11型。

しかし、紫電は中途半端なものになってしまった為、これを改修したのが紫電改である。

史実では、源田大佐（当時）率いる343空で奮戦し、日本海軍航空隊の意地を見せた事で有名である。

山本長官

「で、紫電改の艦上型がエンタープライズに配備されている」

福本

「そうですね。重ね重ねありがとうございます」

山本長官

「その代わり、紫電改の運用報告を頼む。我が海軍も近い内に2000馬力戦闘機を配備するだろう。その時は一足早く配備した第七艦隊の運用データが役に立つだろう。しっかり頼むよ」

福本

「は！第七艦隊はしっかり励ませて頂きます！」

次号へ

良いニュース・悪いニュース（後書き）

ご意見感想をお待ちしております。

## 第七機動艦隊 南へ

4月14日

トラックに向け出撃した第七艦隊。

その編成の中に1隻だけ感じの違う船がいた。

修理・改装が完了したエンタープライズである。

旗艦 播磨

福本

「エンター…じゃあ無くて、遠龍はついて来てるか？」

福田

「はい。ちゃんとして来てます」

福本

「ふう、良かった」

マリダー

「大介ったら、まるで子供を心配する親みたい」

千歳

「あははは、確かにね」

福本

「う、う、うんさい」



遠地

「大変だな。福本」

……いたって陽気である。

福田

「しかし…戦力増加は良いのですが、そうなると補助艦艇を増やさないといけませんね」

福本

「そうだな。今度、山本長官に意見具申しておこう」

新沢

「そういうえば、今更ですけど、この艦隊、多国籍化してませんか？」

神谷

「本当ですね。我が艦隊の人も艦魂も多国籍化してますね」

遠地

「言われてみるとそうだよな。春日さんと日進はイタリア生まれだし、畝傍はフランスの生まれ、エンタープライズはアメリカ生まれだし」

マリーダ

「車魂には、マチルダとスチュワートがいるし」

福田

「人材なら、イギリス、ドイツ、ロシア……っていますからね」

福本

「気付かぬ間に…凄い事になってるな」

「E」エンタープライズ  
空母遠龍艦橋

「ねえ。ちゃんと付いて行けてる？」

「大丈夫ですよ。お嬢様」

「もう。職務中は艦長でしょ、副長」

なんか微妙にイチヤイチャ感の出しているこの2人。お嬢様と呼ばれた艦長は、久しぶりに登場しました、白河美鈴中佐。(59話『  
会合』参照)

そして、その副長、富田隼人少佐。

彼は元々、白河の執事の息子で、彼女とは幼なじみだ。

「E」エンター  
遠龍

「あなた達、私の艦橋でイチヤイチャしないでくれる(････)」

2人に呆れつつ、苦言を漏らすエンター！

白河

「あら、イチヤイチャしてる気なんて無いけど？」

遠龍

「あのね……イチヤイチャモード満開なのよ」

白河

「あはは、ごめんね」

遠龍

「もう。ハヤト、あなたも遠慮しなさいよ」

富田

「え、いや、そんな事言われても……」

毎日がこんな感じの遠龍艦橋であった。

空母紅龍艦橋

通信兵

「司令。航空参謀」

沖田

「ん、どうした？」

通信兵

「は、紫電改の一機が、機体異常で着艦したい、と言ってきましたが……どうしましょう？」

沖田

「うーん、紫電改は新型機だからね……わかった着艦を許可しよう」

ヴィル

「整備兵が喜びますよ。毎日、紫電改の整備マニュアルに目を透していますからね」

沖田

「ほう、そうか。ま、パイロットも気が気でないだろう。早く知らせてやりなさい」

通信兵

「了解しました」

ガッ！

着艦フックが制動索を掴み紫電改にブレーキがかかる。

そして、甲板員が慣れた手付きで制動索から離し、紫電改をエレベーターまでもって行く。

その間にパイロットが降りて、駆け寄る整備長に異常箇所を報告する。

「それでは、よろしくお願いします」

整備長

「おう。任せてくれ」

そう言うと整備長は下に降りて行った。

「さて、整備が終わるまで何をしようかな」

何せ、やる事が無い。

初めて来た艦だから、勝手も知らない。

ヴィル

「君だね？紫電改のパイロットは？」

「あ、はい。そうですが…えーと…」

ヴィル

「ああ、すまない。この艦隊で航空参謀をやっているヴィルヘルム・フレーザ。階級は大佐だ」

「し、失礼しました！自分は杉田庄一 一等飛行兵曹であります！」

杉田庄一。

史実では山本長官が戦死した時、一式陸攻を護衛していた零戦パイロットの1人で、戦死するまでに最終スコア120機を記録したエースである。ちなみに彼は1943年時点で18歳である。

（戦死時20歳）

ヴィル

「まあまあ、そんな硬くならずじやあ、階級なんてあって無きが如しですから」

杉田

「は、はあ……」

ヴィル

「ま、こんな所で立ち話も何ですから、中に入りましょうか」

一時間後……

整備長

「うーん……」

ヴィル

「あ、整備長」

整備長

「これは、航空参謀」

ヴィル

「どうしたんです、整備長？何かお悩みで？」

整備長

「……航空参謀、あなたは『飛魂』を信じますか？」

ヴィル

「『飛魂』……一部のエース機にのみ現れる精霊ですね」

整備長

「ええ。まあ、ある種の伝説みたいな話ですが……どうです？」

ヴィル

「整備長。確か前に、僕が艦魂と車魂が見えると話しましたよね」

整備長

「…そうでしたね。愚問でした」

ヴィル

「いえ。それが？」

整備長

「先程の杉田一飛曹機なのですが…我々が見たところ、異常はありませんでした」

ヴィル

「…計器にも燃料タンクにもですか？」

整備長

「ええ。ですから、自分の見方としては人為的だと思っんです」

ヴィル

「え、ちょ…あ、だから『飛魂』ですか」

整備長

「はい。まさか、遠龍の整備員がそんな真似をする訳ありませんから」

ヴィル

「しかし…なぜ、そんな悪戯めいた事を？」

整備長

「それは…あれですよ。相手に気付いてもらいたいんですよ…大佐にもいるでしょ」

ヴィル

「…………え？」

整備長

「おっと、野暮ったい話でしたな。それでは、自分は整備が有りますので」

ヴィル

「ええ。では、また」

そう言つて、送り出したヴィル。

ヴィル

「『飛魂』か…………」

戦況が新たな段階に動こうとする中、ヴィルは新たな仲間の出現を予感していた。

次号へ



## 第七機動艦隊 南へ（後書き）

杉田一等飛行兵曹は第七艦隊に配属された唯一の存在した人です。  
（今のところ）ご意見ご感想をお待ちしております。

ラバウルを獲ったぞ！

4月29日 ラバウル

史実ならば、日本軍の基地として使用しているラバウルであるが、今はアメリカ軍の反撃拠点として整備中であつた。

「ふう。やっと整つたか」

そう言いつつ、海兵隊大尉はタバコに火をつける。

現在ラバウルには、1200人程度の海兵隊員とシー・ベース（海軍設営隊）が駐屯している。

ブーーン……

「ん？航空隊が来たのかな？」

滑走路の整備が終わつたから、派遣隊が来る予定である。  
だが……

「…違う！日本のゼロだ！」

ウー……！！

今さら遅い空襲警報が鳴り響く。

全員が急いで防空壕に入る。  
ちなみに、対空火器はまだ届いてさえない。

カチッ

ヒューーウ……

バン！バン！

一機の零戦が、小型爆弾を二発投下するが、様子見なのか、離れた所で爆発する。

「糞。ゼロがいるって事は、近くに空母がいるって事か？」

その頃……

ラバウル近くの海岸

フェルデナント

「六式重戦車を先頭に先鋒隊、前進！」

六式重戦車に続き、特野式内火艇、一式自走無反動砲が進撃する。  
今や、時間との勝負。

後続の揚陸なんて待てない。

海兵隊員

「大尉！日本軍です！」

海兵隊大尉

「なに！」

見ると、戦車を先頭にぞろぞろと日本軍がやって来る。

しかし、戦車は先頭の1両だけ。

あとは、装甲車とタンケット（豆戦車）ぐらいしかない。

つまり、戦車さえ殺ってしまうばいい話である。

幸い、ドーザーブレード付きのM4戦車三両が配備されている。

キュラキュラキュラ……

待避壕に入れていたM4戦車三両が、直ぐ様引き出され、敵に向かって行く。

1155

識名

「新型…三両接近」

キャリアー

「戦車が出て来たわね。対空火器はまだなのに」

由香里

「う、う、撃ちます！」

その前に……

ドン！ドン！ドン！

ドガン！ガン！キーン！

M4戦車が発砲した。

一発は手前で、一発は車体前面、最後は砲塔前面に命中するが、弾いてしまう。何せ車体・砲塔前面は20度と45度の傾斜に170mmと200mmの重装甲。

加えて、M4戦車の初期型は歩兵戦車の為、75mm榴弾砲であるから、貫通力も怪しい。

まあ、距離は800mを切ってはいるが。

識名

「大丈夫！由香里？」

由香里

「は、はう〜」

キャリー

「…それだけ言えれば無事ね」

そんな車魂同士の会話を他所に、海兵隊員達は驚いていた。

僅か1両…と発砲したら、一発当てたのに、けろりとしている。

そうこうしているうちに……

ドパワー！

六式重戦車が発砲した。

ガギーン！

真ん中にいたM4戦車に命中。  
距離が近かったのか、車体を貫通してしまった。  
つまり、前から入って後ろに抜けた…のである。  
これに海兵隊員は啞然とした。

海兵隊員

「日本の戦車は…化け物か！」

M4戦車はこれではダメだと六式に接近するが、六式が先に発砲した。

今度は、左のM4に命中。キャタピラーを吹き飛ばした。  
しかし、三両目が……

ドガン！

3人

「「「え！？」「」」

……撃破された。

里香

「ふう、間に合った」

識名

「里香！」

一式軽駆逐戦車と後続（一部）が到着。

里香

「さあー！私の敵はどこ？」

キャリー

「あー、えーと……いない」

見ると……あっちこっちから白旗が振られている。

識名

「戦闘終了。これより事後処理に入ります」

里香

「嘘、暴れ足りないよ」

キャリー

「はいはい」

次号へ

ラバウルを獲ったぞ！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。



## ラバウル空襲サル！

5月7日 ラバウル

ゴウウウン……

ラバウル飛行場に一式陸攻、銀河、零戦、雷電、月光が進出していった。

対空火器も既に設置され、擬装を施した陣地で空を睨んでいる。

福本

「僅か一週間だけど…基地らしくなったな」

沖田

「はい。我々は対空火器とレーダーを設置しただけですけど」

マリーダ

「当分はここが主戦場ね」

遠地

「ルーズベルトはどう出てくるか…」

ウウウー！

福本

「……どうやら、あちらさんが仕掛けて来たか」

沖田

「暢気な事言ってるんで、避難しますよ！」

沖田にそう言われつつ、福本達は防空壕に避難する。

グオオオオン……

ラバウルに迫る機影。

パツと見は飛行艇かと思うが、そうでは無い。

この爆撃機の名前。

B24リベレーター

史実では、B17爆撃機と共に、ドイツ本土を爆撃した事でも有名である。

なおかつ、航続距離の長さもあり、太平洋方面で主力爆撃機として使用されている。

ちなみに、『リベレーター』の意味は『解放者』。

戦略爆撃を行い、都市を破壊する爆撃機には『解放者』より『破壊者』が似合うと思うのだが……。

話が逸れた。

ラバウルに迫るB24は30機。

これはポートモレスビーに現在展開している爆撃隊の半数にあたる。そして、これを迎え討つは空母遠龍搭載の紫電改15機。

現在、第七艦隊はラバウル周辺で待機中、いざと言う時に備えている。

だからといって、航空隊を遊ばせる訳にはいかず、戦闘機隊は艦隊

直衛を兼ねてラバウル警戒に当たらせているのだ。

『全機、紫電改の初陣だ！敵は爆撃機のみ。存分に暴れて来い！』

『『了解！』』』

杉田

「了解！」

若き海鷲達が敵機に襲い掛かる。

もちろん、B24も黙っていない。

ダダダダダダダダ！

ダダダダダダダダ！

ダダダダダダダダ！

旋回銃座は必死に弾幕を張る。

しかし、そんなところに突っ込む馬鹿はいない。

杉田

「焦るな…もうちょい」

標的のB24を上空から攻撃しようと、降下する杉田搭乗の紫電改。

四発爆撃機は、機体が大きく距離感が狂いやすい。

そのため、ぶつかる、と言うところまで近付けと教えられている。



杉田

「さて、還りますか」

そう思い、速度を上げようとした。

その時……

「後ろ！回避！」

杉田

「え！？」

声が聞こえた。

単座の紫電改だから、他に乘っている者はいない。

しかし、無線からでも無い。

無線の声よりもはっきりした声……。

だが、一瞬の思考を終えると、直ぐ様回避行動に入る。すると……

ドドドドド！

ダダダダダダダ！

銃撃しながら突っ込んで来たのは……

杉田

「ペロハチ！！（P38の事）」

P38が二機降下しながら撃ってきた。

しかも、上には20機以上のP38がいた。

杉田

「ち、いったい何処から現れたんだ？」

悪態を吐きつつも、自分を襲った二機を追い、狙いを定める。

杉田

「さっきのお返しだ！」

ドドドドドド！ドドドドドド！

バキッ！

ゴワーン！

瞬く間に二機を撃墜する。しかし、まだ20機以上もいる。他の紫電改も気になる。

杉田

「ん……あ！」

その時、P38の編隊が乱れた。

襲い掛かったのは、胴体に旭日軍艦旗の零戦。第七艦隊の零戦である。

杉田

「…さて…もういつちよやりますか！」

結局、B24は全滅、ラエから発進したP38も20機以上が撃墜

された。

なお、杉田庄一飛曹はこの空戦において初陣ながらも5機を撃墜している。

次号へ

ラバウル空襲サル！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。





特二式砲戦車の車魂、美夏。

ラエ攻略前に配備された、新たな仲間である。

(要塞好きさん、ありがとうございます)( )

里奈

「ねえ、さつき変な車両が通ったけど…」

フェルデナント

「やっと来ましたか」

里奈

「???」

美夏

「やっと?」

フェルデナント

「陸軍から、伐開車と伐掃車、TG機を提供してもらったんですよ」

伐開車、伐掃車、TG機は史実でも日本陸軍が対ソ戦に備え開発した機材で、伐開車は密林の樹木を車体前取り付けた巨大な鉄の角で薙ぎ倒し、伐掃車はその後始末をするもので、TG機は架橋作業を行うものである。

フェルデナント

「まさか、対ソ戦に備えて、こんな機材あるとは思ってはいませんでした。まあ、曲がりなりにも、南方で役立ってますね」

里奈

「ところで、海岸沿いは?」

フェルデナント

「多分、福本長官と一緒に前進中でしょう。駆逐艦と巡洋艦、航空支援がありますから大丈夫だと思いますよ」

里奈

「けどさ、こんな暢気に進んでて良いの？」

美夏

「確かに。いつアメリカ艦隊が来るか判らない状況下なのに」

フェルデナント

「仕方ないよ。作業速度にも限界があるからね……まあ、福本長官の事だから、手は打ってあると思うよ」

ビスマーク海 旗艦播磨

福田

「先輩。第一機動艦隊がトラックに到着したそうです」

福本

「そうか……これでちょっとは楽になる。ところで、潜水部隊から連絡は？」

神谷

「フェニックス諸島、ライン諸島、ソシエテ諸島、何処も異常は無しです」

新沢

「ダリア・エステロール連合王国、サブム帝国からもこれといって何も有りません」

福田

「だが、メキシコ政府から、大西洋艦隊が移動したのは確かだろ？」

遠地

「まさか、まだハワイか、サンフランシスコにいるってのか？」

福本

「有り得そうだな。アメリカ国内じゃあ、不満が有りすぎて本気が出せないそうだ」

マリーダ

「アメリカはアメリカで大変ね」

神谷

「…長官！ポートモレスビーより敵編隊来襲！」

福本

「重い腰を上げた行き先はうちかい…対空戦闘用意！」

フェルデナント

「何処まで進みました？」

士官

「は、2・3キロといったところです」

フェルデナント

「まだまだ先は長いですね」

いくら伐開車が有るとは言え、そうそう伐採作業が進む訳が無い。まあ、ちよつとづつではあるが、道路が出来ている事は確かだが。

フェルデナント

「当分は伐採作業が続くか…ラエまでは遠いな」

ラエ攻略を目指す第七艦隊。

アメリカはいつ動くのだろうか？

次号へ

ラエに向かって道を造れ！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしています。

アメリカ艦隊発見セリ！

5月11日 フェニックス諸島近海

「見つけたぞ！」

第七艦隊所属の伊703潜水艦の艦長が歓喜の声を上げた。  
福本長官の命により何日もここで見張ったかいがあった。

艦長

「副長、暗号文を組んどけ」

副長

「はい」

潜望鏡を覗きながら指示を出す。

艦長

「さーて、空母が……二隻か……ん、いや待て、小振りがあるぞ……四・五隻いるな。戦艦は……六隻だな。しかも旧型か」

副長

「艦長、もつそろそろ」

艦長

「うん、潜望鏡下げ。深度40」

水兵

「よーそろ」

艦長

「聴音手、敵速は？」

聴音手

「…18ノット前後だと思われます」

艦長

「旧型を連れてるせいかな遅いな…よし、一旦離れるぞ！」

ビスマーク海 旗艦播磨

福田

「先輩！先ばーい！」

マリータ

「どうしたの、福田君？」

福田

「フェニックス諸島で警戒中の伊703潜水艦が、南下中のアメリカ艦隊を発見しました！」

遠地

「遂に来たか！」

福本



「福田、皆を集める。神谷、トラックの山本長官に連絡。あつちにも電文はいつてるとは思うが念の為だ」

福田・神谷

「了解！」

トラック 戦艦大和

宇垣参謀長

「長かーん！山本長官！」

山本長官

「どうしたのかね、宇垣参謀長？ヘタリアのイタリアが降伏したかね？」

宇垣参謀長

「何言ってますか。アメリカ艦隊の南下を第七艦隊の潜水艦が捉えたんですよ！」

山本長官

「…遂に来たか。よし、全艦出撃準備！」

宇垣参謀長

「は！」

沖田

「福本先輩！アメリカが動いたと言うのは、本当ですか！」

福本

「ああ、本当だ。やっとアメリカ艦隊も重い腰を上げたよ」

福田

「ところで、今回自分達は…」

福本

「ん、後方支援だ」

福田

「そうですね、後方……えー！」

沖田

「後方支援？」

福本

「ああ。前回、うちは活躍したからな。今回は第一機動艦隊に手柄を譲るよ」

福田

「はあ……」

福本

「不服そうな顔するな。だいたい、サブールム戦からいけば充分暴れてると思っつがな」

福田

「…わかりました」

福本

「それでだ。第1戦隊と第1航空戦隊と第2航空戦隊はここで待機。第2戦隊と第3航空戦隊、第4航空戦隊、遠龍は楠木指揮下で第一機動艦隊の間接護衛にあたってもらう」

楠木

「間接護衛…ですか？」

福本

「山本長官や小澤さんの事だから、大丈夫だと思うが…いざと言うことがあるかもしれない。その時、楠木達の間接護衛が役に立つさ」

福田

「ですけど、播磨は待機でしょ？と言うことは通信は…」

福本

「第七艦隊は待機します、とは山本長官に打電するが、それ以外は第一機動艦隊も、間接護衛隊も無線封止だ」

楠木

「それでは、第一機動艦隊の位置が…」

福本

「何の為の連絡将校だ。既に新沢を山本長官の所に遣っている。まあ、今日・明日中には艦隊と合流出来るだろう」

千歳

「だからね。最近、新沢君見ないと思ったら」

福本

「うん。さて、楠木中将、護衛隊の編成を任せる。出来るだけ、バ  
ランス良く頼むよ」

楠木

「は、了解しました」

福本

「新沢が帰って来たらまた集まってもらうけど、それまで各自待機」

全員

「了解」

3時間後……

トラックから第一艦隊、第一機動艦隊が出撃した。  
ちなみに、両艦隊の編成は以下の通り。

第一艦隊

山本長官直率

旗艦大和

戦艦 大和 武蔵 長門 陸奥

空母 鳳翔 瑞鳳 祥鳳 龍鳳

重巡洋艦 青葉 衣笠 古鷹 加古

軽巡洋艦 北上 大井 川内

駆逐艦 16隻

第一機動艦隊

司令長官 小澤中将

旗艦赤城

戦艦 金剛 榛名 霧島 比叡

空母 赤城 加賀 飛龍 蒼龍 翔鶴 瑞鶴

重巡洋艦 利根 筑摩 高雄 愛宕 摩耶 鳥海

軽巡洋艦 五十鈴 阿武隈長良 名取

駆逐艦 28隻

これらの艦艇の上空を一機の輸送機が通り過ぎた。  
機内には、連絡事項を受け取った新沢が窓から艦隊を見ていた。  
現在編成中の第二機動艦隊を除いた連合艦隊の主力が集まっている。  
これなら負けない!...と思うのだが……。

新沢

「だけど…油断出来ない。窮鼠猫を噛む…何をするか判らない」

福本達の下で働いていたせい、思量深くなったようだ。

新沢

「さて…アメリカはどう出るか。そして、山本長官はどう対抗する  
のか…」

次号へ

アメリカ艦隊発見セリ！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 珊瑚海海戦 1

5月14日 珊瑚海

士官

「攻撃隊より打電。『我がダルカナル島空襲ニ成功セリ』」

小澤中将

「うむ。ところで、アメリカ艦隊はまだ発見できんか？」

士官

「まだです」

小澤中将

「そうか」

そう言いつつ、飛行甲板を見る。

飛行甲板には、攻撃準備を終えた攻撃隊が並んでいる。

もし、こんな状態で敵襲を受けたら、非常に危険である。（史実のミッドウエーの例があるし）

空中待機を考えた、その時…

士官

「いました！利根の水偵がを見つけました！空母七隻、戦艦六隻からの艦隊です！」

源田中佐

「長官！」



小澤中将

「うむ。攻撃隊、発進せよ！」

源田中佐

「は！」

ズン！

カタパルトによって、零戦・彗星・天山が発艦して行く。  
15分後、約150機の攻撃隊が敵機動艦隊に向かっていった。

間接護衛隊 旗艦薩摩

士官

「司令、敵機動艦隊を発見した様です」

楠木

「なら、今頃は攻撃隊発進で大忙しね」

薩摩

「じゃあ、今襲われたら……」

楠木

「まあ、まだ見付かって無いから大丈夫よ。けど、いざと言つ時に備えて、もう少し接近するわ」

士官

「わかりました。速度33ノットに上げます」

楠木

「お願いね」

一時間後……

アメリカ機動艦隊上空

村田少佐

「見付けたぞ、全機突撃！」

ギューン……

F4Fが攻撃を阻止する為に突っ込んで来るが、直衛隊の零戦が割って入る。

ドン！ドン！ドン！ドン！ババババババババ！  
ドドドドドドドド！

今や、二隻しかない正規空母レンジャー、ワस्पを守る為、エスコート艦が必死に弾幕を張るが、闘志に勝る日本軍は止められない。

江草少佐

「よーい……てえー！」

カチッ



ズガン！ズガン！

彗星・天山の同時攻撃にワスプも大破した。

村田少佐

「よし。引き上げるぞ！」

赤城艦橋

士官

「長官。村田少佐からです。『第二次攻撃ノ要アリ』」

小澤中将

「よし。第二次攻撃隊、急いで発艦せよ！」

実はこの時、敵攻撃隊の接近をレーダーで探知したのだ。

そこで小澤中将は、攻撃隊は発艦させる事にした。

飛行甲板に危険物を置いとくよりも、被害軽減の為に出击させる方が無難である。

そして、第二次攻撃隊が全機発進したと同時に敵攻撃隊が来襲した。

士官

「第一機動艦隊に敵攻撃隊が来襲しました！」

楠木

「戦闘機は！？行けるの！？」

士官

「零戦から紫電改まで、全機行けます！」

楠木

「オツケー！全戦闘機は緊急発進……」

薩摩

「待って下さい！新たな編隊です！」

楠木

「え！？」

(レーダーを搭載しているから艦魂は目が良くなっている)

士官

「本当です！北の方角から別の敵編隊！ちくしょう、別の機動艦隊がいたのか！？」

楠木

「……………まさか、福本長官はこの事を予測して間接護衛を……？」

士官

「司令？」

薩摩

「楠木さん？」

楠木

「…戦闘機発進と同時に艦偵と水偵を出せるだけ出して…敵別動隊を検索します!」

士官

「は!」

楠木

「艦長!機関が故障して良いから速度上げて!」

艦長

「無茶ですが…わかりました!」

直ぐに返事をする、機関室に通じる伝声管に叫ぶ。

艦長

「機関長、機関がぶっ壊れていい!速度を上げろ!なに?無理だ?あのな、第一機動艦隊の危機なんだって!」

押し問答が続くので、薩摩を見る。

薩摩

「楠木さん。赤城さん達の危機ですから、多少の無理ぐらい大丈夫ですよ」

楠木

「そうね。艦長!機関長に『艦は多少の無理は大丈夫』と艦魂が言ってるって伝えなさい」

艦長

「はい！機関長、司令の言葉を聞いたる？速度を上げる！」

ドン！ドン！ドン！ドン！ガガガガガガガガ！

ドドドドドドドドドド！

ババババババババババ！

ダダダダダダダダダ！

対空戦闘で忙しい中……

小澤中将

「なに！それは本当か！？」

士官

「はい！北の方角から新たな敵編隊です！それにその後方から別の編隊が……」

源田中佐

「まさか……奴らは、正規空母を囷に使ったのか！？」

小澤中将

「有り得るな。今、アメリカ……ルーズベルトが欲しいのは勝利だけかな」

いくら工業力を上げたとはいえ、日本にとって正規空母を失う事は大きな痛手である。

それに対しアメリカは本気を出せないだけで、本気を出せば正規空母二隻くらい簡単に補充出来るどころか、倍以上生産出来る。

士官

「長官！敵編隊来襲！」

小澤中将

「零戦はどうした！？」

士官

「ダメです！敵が多すぎて対応出来ません！」

源田中佐

「く、対空砲、撃ち落とせ！」

先程から必死に対空砲は撃っているが……

士官

「抜けられました！あ、敵機直上、急降下！」

艦長

「面舵いっぱい！」

艦長が必死に回避運動をとる。

ヒューウ…

ズバーン！ズバーン！ズバーン！ズバーン！  
ズガン！ズガン！

士官

「ひ、被弾！」



艦長

「被害報告！」

士官

「爆弾二発命中、火災発生！あ、加賀も被弾！火災発生しています！」

飛龍艦橋

士官

「赤城、加賀被弾！」

水兵

「敵機直上！急降下！」

山口少将

「回避！かわせー！」

加来大佐

「取り舵3分の2！」

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！

赤城・加賀同様に襲われた飛龍・蒼龍の第2航空戦隊であったが、加来艦長・柳本艦長の操艦と、飛龍・蒼龍の性能で避ける。

山口少将

「5 航戦はどうか？」

士官

「は、上手い具合に雲の下におり、翔鶴・瑞鶴共に無事です」

加来艦長

「しかし、この敵機の多さわどうにかなりませんか！これではいずれ赤城も加賀もうちも殺られます！」

士官

「敵第2波急降下！狙いは…赤城・加賀です！」

士官

「敵第2波急降下！」

今まさに、六機のドーントレスが赤城を狙い急降下する。そして、誘導架によって爆弾が離れ、投下体勢に入った。

次号へ

珊瑚海海戦 1 (後書き)

赤城・加賀の運命は如何に!?  
ご意見ご感想をお待ちしております。

珊瑚海海戦 2

そして、誘導架から爆弾が外れようとした時…

ダダダダダダダダダ！

ゴワーン！

先頭を飛んでいたドーントレスが爆発したと同時に後続五機も爆発した。

同じ光景が加賀上空でも見られた。

赤城艦橋

小澤中将

「いったい…何が起きた？」

士官

「さあ…」

ブローン！

一機の戦闘機が赤城の艦橋目前を通過した。

源田中佐

「あれは…紫電改ではありませんか!？」

小澤中将

「それに…胴体の旭日旗…あれは第七艦隊ではないかね」

源田

「しかし、第七艦隊は今回ビスマーク海でラエ攻略支援に回っている筈では?」

小澤中将

「うむ…確か…」

士官

「敵後続隊、接近!」

見ると100機程の攻撃隊が接近して来る。

小澤中将

「く、こんな時に!」

だが……

ズガン!ズガン!ズガン!ズガン!ズガン!ズガン!  
ズガン!ズガン!

いきなりの砲撃音、そして……

チカッ



小澤中将

「うむ、今回は助かった。君達には礼を言う。ありがとう」

楠木

『いえ。間接護衛の件は福本長官によるものですので…』

小澤中将

「まったく、上官が堅調なら部下も堅調だな」

楠木

『はい？なにか？』

小澤中将

「いや、こつちの事だ。ところで用件は？」

楠木

「はい。赤城・加賀は大丈夫ですか？我々も消火のお手伝いをお願いします」

小澤中将

「わかった、ちょっと待ってくれ。艦長、赤城の火災はどうだ？」

艦長

「現在消火中です。出来れば応援が欲しいんですけどね」

小澤中将

「そうか。加賀はどうだ？」

士官

「現在も炎上中です」

小澤中将

「うむ。楠木中将、赤城も加賀も応援がいる。すまんが、消火を手伝ってくれ」

楠木

『了解しました』

楠木

「総員に通達！手近な消火栓からホースひいて、赤城と加賀に放水。艦長、艦を赤城に接舷して。」

艦長

「はい」

楠木

「薩摩、土佐。赤城さんと加賀さんの所に」

薩摩・土佐

「はい」

返事をする、2人は転移した。

「……………ぎ、あ……………か……」

赤城



「…だれ？私を呼ぶのは？」

赤城は暗闇を歩いていた。ついさっきまでは防空指揮所に居たのだが……

赤城

「……ど……」

「あ……ぎ、……かぎ、あか……」

赤城

「私を呼んでる……だれなの？」

「あ……か……ぎ、あかぎ」

赤城

「この声……天城姉さん！」

その時、光と共に誰かが転移して来た。

「久しぶりね。赤城」

赤城

「天城姉さん……天城姉さんなの！」

天城

「あら、いつも、過保護姉って言うってたの誰？」

赤城

「姉さん…姉さん！」

嬉しさのあまり、泣きながら天城に抱き付く赤城。

赤城

「ところで姉さん。ここ、どこ？」

天城

「うーん、まあ、三途の川の手前…かな」

赤城

「あ、そっか…私、爆撃されて……じゃあ、姉さんがお迎え？」

天城

「…いいえ、その反対。あなたを追い返しに来たの」

赤城

「へえ？」

天城

「これを見なさい」

そう言うと、水溜まりに何かが映る。

赤城

「これって…」

天城

「そう。今のあなたの映像よ」

飛行甲板が燃える中、必死に消そうとする赤城の乗組員達。  
そして、その増援として加わる、第七艦隊第2戦隊の乗組員達。

天城

「あなたは、今多くの人達が救おうとしている。死ねには早すぎよ。それに…」

赤城

「それに？」

天城

「ほら…若くて堅調で軍刀持ちの彼よ」

赤城

「あ…福本君か」

天城

「彼なら、あなたが死んだと聞いたら悲しさのあまり死ぬかもね」

赤城

「……完全否定は出来ないわ」

天城

「それに…赤城には私の分まで生きて欲しいの」

赤城

「姉さん…」

天城

「さあ、仲間が呼んでるわ…じゃあね」

防空指揮所

赤城

「姉さん！」

薩摩

「わあ！」

金剛

「赤城！？」

赤城

「え…薩摩に…金剛？」

金剛

「ふう、良かった。意識がなかったから危ないところだったわ」

加賀防空指揮所

日進

「加賀！」

一番に駆け付けた日進が叫ぶ。  
加賀の軍服は血に染まっていた。

日進

「加賀！加賀！大丈夫、しっかりして！」

加賀

「…うん…」

日進

「良かった…って、喋った!？」

土佐

「お姉ちゃん！」

春日

「加賀！生きてるか？」

加賀

「うん…生きてるよ」

春日

「そうか、良かった…って、ええ！」

土佐

「うそ！お姉ちゃんが喋った！」

「…まあ、今まで喋らなかつた人間がいきなり喋ったら、そりゃ驚くよね。」

春日

「ま、喋る元気が有るから大丈夫か…」

楠木

「じゃあ、2人共大丈夫なのね」

春日

「ああ。まあ、加賀が喋ったのは驚いたが…大丈夫だろう」

楠木

「艦魂が大丈夫なら、二隻も大丈夫か」

士官

「司令！艦偵が見付けました！小型空母10隻の別動隊です」

楠木

「わかったわ。赤城に無線をつないで」

士官

「は！」

小澤中将

『わかった。しかし、1航戦は戦闘不能だ。2航戦の山口君に指揮権を委譲する。対応してくれ』

楠木

「わかりました。山口少将に連絡いたします。あと、1航戦の艦載機は我々も回収します」

小澤中将

『すまんが頼む』

楠木

「はい。それでは失礼します。」

士官

「しかし、1航戦の艦載機は多いですよ」

楠木

「仕方ないでしょ。次は2航戦につないで。」

士官

「了解」

飛龍艦橋

加来艦長

「司令。楠木中將からです。」

山口少将

「うむ。山口だ。何かね？」

楠木

『は、艦偵が敵別動隊を発見しました。小澤中將は1航戦が戦闘不能の為、第一機動艦隊の指揮権を少将に委譲するそうです』

山口少将

「了解した。すまんが、赤城達を頼む」

楠木

「はい。少将殿も御武運を」

そう言つと、無線がきれた。

山口少将

「よし。艦隊を再編する！状況を知らせ！」

次号へ



珊瑚海海戦 2 (後書き)

ご意見感想をお待ちしております。

### 珊瑚海海戦 3 (前書き)

作者「明日は8月6日です」遠地「おう……それで？」作者「…広島に原爆が落とされた日であり、18試局地戦闘機『震電』が二度目の飛行した日です」マリーダ「もしかしたら、震電が、エノラ・ゲイを追い払ったかも…運命を感じるわ」作者「そんな日に、広島で田母神元幕僚長が講演をなさる！できれば行きたいけど…行けない(色んな理由で)」福本「残念ですね」作者「うん…一度でいいから、講演聴きに行きたいな…」

### 珊瑚海海戦 3

山口少将指揮の下行われた敵別動隊の攻撃は、攻撃に艦載機を使い果たしたアメリカ別動隊を壊滅させて終了した。そして、この時点で夕暮れとなった為、山本長官率いる第一艦隊が追撃に入った。

大和艦橋

山本長官

「そうか…1航戦は壊滅か…」

宇垣参謀長

「は、艦載機はほとんどを回収しましたが、飛行甲板がやられましたので…」

山本長官

「しかし、危なかった。二隻の損傷ですんだけマシか」

宇垣参謀長

「そうですね。第七艦隊の間接護衛が無ければ、損傷だけですんでいなかったでしょう」

山本長官

「うむ。彼らに感謝しなければならないな」

士官

「長官！敵艦隊、レーダーに探知！」

山本長官

「よし。全艦砲戦用意！」

士官

「了解！」

30ノットの優速で敵艦隊に迫る第一艦隊。  
一方、追われるアメリカ艦隊は何とか頑張っても、20ノットが限界だ。

士官

「敵艦隊反転。向かって来ます！」

山本長官

「射程に入るのは？」

士官

「あと少しで入ります」

山本長官

「そうか…参謀長、砲戦の指揮を頼む」

宇垣参謀長

「！よろしいのですか？」

山本長官

「うむ。餅は餅屋だ。海軍砲術の誉を見せてくれ」

宇垣参謀長

「は！」

士官

「敵艦隊、射程圏内に入りました！」

宇垣参謀長

「電探・目視標準射撃用意！」

艦長

「用意よろし！」

宇垣参謀長

「てえー！」

ズガン！ズガン！ズガン！  
ズガン！ズガン！ズガン！

大和・武蔵の46cm砲が吠えた。

士官

「弾着、いまー！」

ザバーン！ザバーン！ザバーン！

宇垣参謀長

「うむ。中々当たりませんな」

山本長官

「福本も書いていたではないか。3万5000メートル以上の命中は簡単ではない…」と」

宇垣参謀長

「はあ」

山本長官

「なに、まだ2斉射だ。感覚さえ掴めば当たる。焦る事は無い」

士官

「次弾装填完了」

宇垣参謀長

「てえー！」

ズガン！ズガン！ズガン！

ヒューーウ……

士官

「弾着、いまー！」

ザバーン！ザバーン！

ガガン！

士官

「命中！」

宇垣参謀長

「よし！この調子でいくぞ！」

距離が3万2000をきると長門・陸奥も射撃に加わった。

これに対し、アメリカ艦隊は何も出来なかった。

何せ、アメリカ戦艦の36cm主砲の射程は最大2万7000メートル。

しかし、レーダー射撃をもつてしても、当て難い。

その面を除いても、後5000メートルは接近しなければならぬ。この間、アメリカ戦艦は何も出来なかった。

さて、巡洋艦・駆逐艦同士の戦いも日本が優位だった。

二度にわたる航空攻撃により、アメリカ巡洋艦は大なり小なりの損傷しており、重巡洋艦にいたってはボロボロであった。

それでも、果敢に立ち向かったが、酸素魚雷の前に壊滅。

駆逐艦にいたっては、基本的に馴れない夜戦に引きずり込まれたアメリカ駆逐艦を、日本駆逐艦が一方的に叩き潰した。

いくらレーダーを備え付けても、接近戦となる駆逐艦同士の戦いは、レーダーは使い物にならない。

しかも、夜戦は敵味方の識別を困難にし、敵味方識別装置などの機材がない状態では、実際は人間の目に頼る他無い。

そこにくると、日本海軍は夜戦の訓練はみっちり行っており、夜間視力が良い人間が揃っている。

結局、馴れないアメリカと慣れている日本が戦ったら、慣れている日本が勝つのは当たり前であった。

戦艦同士の対決に目を向けると……やはり、アメリカは不利だった。今回、アメリカはテキサス型二隻、ニュー・メキシコ型三隻、アーカンソーの計六隻で挑んだが、越えられない壁が多過ぎた。

六隻共、旧型であり、速度も遅く、36cm戦艦（アーカンソーは30cm戦艦）なのに対し、大和・武蔵は46cm砲、長門・陸奥は40cm砲であり、四隻共、30ノットの高速艦。

なおかつ、ダイタルパートは36cm砲・30cm砲を受け付けない。

そして、その結果は明らかだった。

大和・武蔵のアウトレンジ射撃を喰らい、テキサス型一隻が沈没。その後、やっと射程に入ったが、大和達の砲撃を受け、ボロボロになっていた。結局、テキサス型、ニュー・メキシコ型と順番に撃沈・大破・沈黙させられた。そして……

山本長官

「ん？ 宇垣君、見たまえ。アーカンソーが白旗をあげたぞ」

宇垣参謀長

「あ、本当ですな。撃ち方止め！」

艦長

「撃ち方止め！」

山本長官

「これで、アメリカ艦隊は壊滅か……」



次号へ

### 珊瑚海海戦 3 (後書き)

明日よりバイトに行くので、更新が遅くなります。休みは火水日かな？ご意見ご感想をお待ちしております。(もし、読者の中で田母神元幕僚長の講演を聴きに言った人がおりましたら、ちょっとでいいので、内容を教えて下さい)

## 孤独な少女

5月15日 未明

ザバアアア！

暗闇の海上に浮上したのは、帰還途中の伊400潜水艦。

宮木

「……ねえ、本当にこの近く？」

零

「間違いないよ！絶対この付近！」

宮木

「疑わしいわね。だいたい、聴音手が推進音を捉えてないのに、艦がいるなんて思えない」

零

「あのね、私は艦魂、あなたはただの人間。人間に気付かない事が、気付けるんです！」

宮木

「ただの人間？私は海軍士官よ！」

零

「海軍士官でも、人には変わりありません！」

宮木

「なんですって！」

二一ナ

「はい、そこまで！それ以上言い合いするなら、2人仲良く海水浴の刑よ！」

宮木・零

「は、はい！」

伊400潜水艦は、哨戒任務を終えトラックへの帰還途中、零が『誰かが呼んでる』と言った為、その言葉に従い、検索に入ったのだが……

宮木

「見付かりません」

二一ナ

「一回転しただけでしょ」

…まだ見付からない。

宮木

「艦長。そろそろ引き上げないと……」

二一ナ

「大丈夫大丈夫。ここは敵地じゃないんだし」

宮木

「はあ〜…」

…副長の気苦労は絶えない。

ドイツ人水兵

「あ、レーダーに反応有りました!」

日本人水兵

「こちらにも視認しました!」

宮木

「うそ!」

二一ナ

「よし!そこに向かいますよ」

向かった先にあったのは……

二一ナ

「…空母ね」

宮木

「艦影から見て、アメリカの護衛空母クラスですね。ですが…なぜこんな海の真ん中に?」

二一ナ

「…いま、軽く計算したけど、第一機動艦隊が敵別動隊を攻撃したのはこの辺の筈よ」

宮木

「ああ、なるほど」

二ーナ

「…うん、よし。副長、手空きの乗組員を武装させて、5分以内に集合させて」

宮木

「…まさか、空母に乗り込んで、艦内を検索するおつもりですか」

二ーナ

「ええ、そのつもりよ。じゃ、あとの事よろしくね」

それを聞いた宮木は、二ーナが艦橋を降りた後、胃の辺りを痛そうに抑えていた。

1221

二ーナ

「これより、空母の艦内検索を開始する。もし、生存者がいたら、ちゃんと保護する事…いいわね？」

女性将兵

「……………はい!」「……………」

(ちなみに、伊400潜水艦は女性運用艦である。)

二ーナ

「さて、私達はどこを検索する？」

零

「防空指揮所に…行きたいです」

二一ナ

「そっか…じゃあ、行こう」

二一ナ

「ここ……よね？」

零

「ここ…だと思えます」

当然……誰も居なかった。

二一ナ

「うーん、水上艦だけあって、視界が高いわね」

零

「…本当にそうですね」

…そりゃ、潜水艦って視界低いからな。

（ん、いや、まてよ。二一ナは潜水戦隊司令だから、播磨とかに行ってるじゃあ……まあ、いいか）

「だれ…そこに居るの？」

物陰から出て来たのは、アメリカ海軍士官服装を着た少女。  
しかし、士官服も体も見るからにボロボロだ。

ニーナ

「あなたは…この艦の艦魂ね？」

「そうよ。この『ロングアイランド』の艦魂よ…」

零

「じゃあ、あなたが私を呼んだの？」

ロングアイランド

「ええ…お願い…私を殺して」

ニーナ

「えー!!」

零

「な…なんで!？」

ロングアイランド

「私達は使い捨てよ…今日だって、沢山の仲間が死んだ…勝利の為  
と向かわされて…結局、私達は捨て駒なのよ」

ニーナ

「……………」

零

「……………」



ロングアイランド

「けど、どうせ日本軍に鹵獲されても、同じ様に使われて……」

零

「違う！福本長官や山本長官はそんな人じゃ無い！」

ロングアイランド

「……どうだが」

零

「絶対違う！特に福本長官はそんな人じゃない！あそこまで人にも、艦魂にも接してくれる人はいません！」

いつもはお気楽者の彼女が、こんなに声を張り上げるのは珍しい。

零

「いつもいつも、皆の無事を祈ってるし、敵であつたはずのエンター達に気軽に話してるし、エンターに殺されかけたのに、気にしてないし」

二ーナ

「零、最後は余計だと思うよ」

零

「あ…、と、とにかく、死ぬのはダメ！絶対にダメ！」

ロングアイランド

「……え、でも」

零

「あゝも、私が保証する！だからさ、一緒に行こ…ね？」

ロングアイランド

「……うん……」

宮木

「無理です」

零

「宮木さん、そこを何とか……」

宮木

「潜水艦で空母を曳航するなんて、無理な話です」

零

「お願い！ロンちゃんと約束しちゃったんだよ」

宮木

「だから、無理なものは無理……」

石狩

「あら、先客がいたの」

突然ながら、石狩登場。

二一ナ

「あら、石狩に伊吹に六甲、畝傍まで…どうしたの？」

敵傍

「いや、水偵が小型空母を発見してね、我々は小型空母を回収に来たの」

二一ナ

「ああ、助かった。これでロングアイランドを曳航出来るね」

石狩

「あら、あなた達、もう仲良くなったの？」

零

「うん」

次号へ

## 孤独な少女（後書き）

明日は長崎原爆投下の日……日本はこのまま、アメリカに押し付けられた平和憲法で良いのだろうか？私はこのままではダメだと思います。ご意見感想をお待ちしております。

## 総合戦果

5月20日 ビスマーク海

旗艦播磨

福本

「そうか…赤城と加賀は1ヶ月のドック入りか」

福田

「は、ですから、当分は2航戦の飛龍と山口少将が指揮を執るそうです」

福本

「たいへんだな……しかし、まさか正規空母を圏に使うとは…ルーズベルトめ！そんなに自分を正当化したいのか！」

遠地

「ああ、もうこんな戦争止めてくれ、と国民が言っているのに…」

福田

「奴の事です。誇大妄想で存在しないはずの艦隊か何かが、日本軍を叩き潰す、とでも思ってるんじゃないですか」

マリーダ

「まさか…艦隊一個を簡単に吹き飛ばす新型爆弾の開発を待ってるとか…」

全員

「……………」

福本

「あゝ、やめだ、やめだ！こんな所で愚痴っても、アメリカが講和をしてくるんじゃないやあるまいし…とにかく、ラエ攻略が現在の目標。いいな？」

全員

「了解！」

その頃……

トラック諸島では……

旗艦大和

山本長官

「そうか…アメリカからは何もないか…」

宇垣参謀長

「はい、残念ながら…」

山本長官

「ルーズベルト……太平洋・大西洋の両艦隊は壊滅し、今や修理中の新型戦艦のみの状況で何をしようとするのか…」

宇垣参謀長

「……………」

ちなみに、これまで戦果及び損害はとゆつと……

ギルバート諸島沖海戦

戦果

沈没

戦艦 テネシー カリフォルニア ウェストバージニア メリーランド

空母 ヨークタウン ホーネット

重巡洋艦 アストリア クインシー ヴィンセンス ペンサコラ  
ソルトレイクシティ シカゴ

軽巡洋艦 オハマ型6隻

駆逐艦 12隻

大破

戦艦 ワシントン サウスダコタ インディアナ

駆逐艦 8隻

中破

戦艦 ノースカロライナ マサチューセッツ アラバマ

駆逐艦 6隻

損害

小破

戦艦 播磨 河内 和泉 近江

重巡洋艦 六甲

駆逐艦 大波 山波 滝波

真珠湾攻撃

沈没

戦艦 コロラド ネヴァダ オクラホマ ペンシルヴァニア アリ  
ゾナ

その他、沈没艦・損傷艦有り。

損害

無し

珊瑚海海戦

沈没

戦艦 ニューヨーク テキサス ニューメキシコ ミシシッピ  
イダボ

空母 レンジャー ワस्प護衛(小型) 空母14隻

重巡洋艦 ノーザンプトンポートランド インディアナポリス  
ウ



イ  
チ  
タ

軽巡洋艦 才ハマ型2隻  
ブルックリン型4隻

駆逐艦 10隻

大破

ブルックリン型2隻

駆逐艦 8隻

損害

中破

空母 赤城 加賀

駆逐艦 2隻

小破

戦艦 陸奥

重巡洋艦 青葉 古鷹

軽巡洋艦 川内

駆逐艦 8隻

鹵獲艦

ギルバート諸島沖海戦

空母 エンタープライズ レキシントン サラトガ

フィリピン攻略戦

重巡洋艦 ヒューストン

軽巡洋艦 ボイス マーブルヘッド

駆逐艦 4隻

水上機母艦(元空母) ラングレー

(ラングレーはP40戦闘機をフィリピンに輸送後、マニラ軍港で帰還準備中開戦。機雷封鎖により出港不能となり、そのまま鹵獲された)

珊瑚海海戦

戦艦 アーカンソー

護衛空母 ロングアイランド

上記を見れば解る通り、中核である戦艦・空母をほぼ失っており、アメリカ両洋艦隊は壊滅している。

こんな状況なら、アメリカも外交交渉の1つや2つはしてくる筈だが、何も無い。

宇垣参謀長

「長官。まさか、ルーズベルトは誇大妄想に取り付かれたままでは？」

山本長官

「それはそれで利用するさ……当分は南太平洋にいるアメリカ軍を追っ払うのが目標だ」

宇垣参謀長

「は」

大和

「山本長官。宇垣参謀長と何を喋ってたんですか？」

山本長官

「ん、大和か。何々、野暮ったい話だ。ところで、赤城と加賀は元気だったか？」

大和

「はい。あ、加賀さんが喋ってました」

山本

「それは日進から聞いたよ。まあ、その様子なら元気そうだな」

次号へ

## 総合戦果（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 対空戦闘

5月22日 ラエ付近

南方のジャングルを切り開き道を造り…あるいは海岸沿いに道を造り…第七艦隊陸戦隊はラエに迫っていた。

ドーン！ドーン！ドーン！ズガン！ズガン！ズガン！

一式半装軌自走砲・特2式砲戦車が砲撃を開始する。

フェルデナント

「さて、今日中に飛行場を獲れば楽になるんだけど…」

ジャングルより支援射撃をしている、フェルデナント率いる部隊。ちなみに、海岸沿いの部隊はラエの一步手前で待機中だ。

里奈

「何でもいい、早くこの蒸し暑いジャングルから出たいよ」

美夏

「お姉さん…ちゃんとやってください」

里奈

「だつて、暑いんだもん」

フェルデナント

「まあ、蒸し暑いのは認めますけどね」

そう言いながら首にまいているタオルで汗を拭う。実際、伐採作業や道路敷設で工兵の何人かが熱中症などで倒れ、後送されている。

ちなみに、マラニアに関しては、イギリスとオーストラリアの情報提供により、事前に対策をしている為、被害はない。

フェルデナント

「あとは…このまま無事に攻略出来ればいいんだけど…」

まあ、そんな願望通りにいく訳もなく……

士官

「司令！ラエ飛行場を偵察中の二式艦偵より連絡！飛行場から敵機発進しました！」

フェルデナント

「向かった先は？こつちに向かっているのか？」

士官

「はい。北西の方向に向かったとの事です」

フェルデナント

「北西か…こつちだな。よし、総員対空戦闘用意！」

この号令がかかると、慌ただしくなる。

一式半装軌自走砲・二式砲戦車は砲撃地点より後方の退避壕に避難し、偽装幕や偽装網を掛けられる。

しかし、逆に偽装幕や偽装網を払い除ける壕がいくつかある。

そこから出てきたのは、対空火器である。まず、一式半装軌装甲車に今や陸海軍の標準装備になった零式（陸軍名百式）25mm機銃を連装銃架に装着した一式半装軌対空機銃車。

次に現れたのはドイツのFlak 88mm高射砲を日本でライセンス生産した九九式8cm高射砲。

そして、野口博士開発の新型の一式対空戦車。

砲塔に37mm四連装機銃を搭載した新型車両である。

これら対空火器に加え、M3スチュワート対空偵察軽戦車を配置し、敵を待ち構える。

スチュワート

「ふう…やっと出番ね」

やっと戦闘場面で出せましたスチュワートの車魂、スチュワート。

フェルデナント

「スチュワートさん、大丈夫ですか？」

スチュワート

「フェルデナント司令！何してるんですか！早く避難しないと…」

フェルデナント

「わかってますよ。スチュワートさんと鈴音さんの様子を見に来たんです」

鈴音は、一式対空戦車の車魂。

今回はスチュワートと組んでいる。

スチュワート

「大丈夫です！ね、鈴音？」

鈴音

「（コクン）」

フェルデナント

「そうですか…」

士官

「司令！何してるんですか！早く避難して下さい！…」

フェルデナント

「わかってる！じゃあ、あとお願いします」

スチュワート

「はい！任せて下さい！…」

陸戦隊兵

「敵機来襲！」

士官

「いいか！敵機を出来るだけ近付けてから撃て！」

陸戦隊兵達

「『了解！』」「『了解！』」



陸戦隊兵

「敵機種確認！P39…カツオブシ…機数10機」

士官

「よし、良いぞ。もっと近付け……そのまま……あともうちょい……よし、今だ！撃て！」

ドン！ドン！ドン！ドン！ドドドドドドドドドドド！  
ダダダダダダダダダ！

ドゴーン！グワーン！ゴワーン！

不意の対空砲火に3機が爆発・墜落する。

やっと敵の位置をつかんだP39だったが、VT信管付き88mm弾を浴びるか、25mm機銃に翼を断ち切られるか、37mm四連装機銃の弾幕に絡め捕られて落とされるかだった。

1240

士官

「やりました！敵機逃げて行きます！」

爆弾を捨て、慌て逃げる2機のP39。

フェルデナント

「これで、当分は静か…かな？」

次号へ

## 対空戦闘（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ラエ占領

同日昼頃 ラエ飛行場付近

マチルダ

「これで…最後！」

ドン！

グワーン！

第二次改造により強力になったマチルダが、最後のM4戦車を撃破した。

これにより、3分前まで阻止しようとして来た12両全部が殺られた訳だ。

大島少尉

「よし。敵は一掃した。前進再開！」

マチルダを先頭に前進を開始する。

一方……

フェルデナント

「今だ！撃てー！」



指揮官

「く、ダメだ…後退！後退しろ！」

ついには後退したが…さて、後退できる所があるかどうか…。

指揮官

「な、なに！？」

必死こいて逃げて来たは良かったが、彼らが見たものは、あんまりな現実だった。

既に、『玄関』から突入した陸戦隊が、飛行場も基地も占領していたからである。

結局、残存部隊も前後から挟まれ、降伏するしかなかった。

数時間後　ハワイ真珠湾　アメリカ太平洋艦隊司令部

「ニミッツ長官。スプルーアンスです」

「レイか。入りたまえ」

「失礼します」

入って来たのは、スプルーアンスこと、レイモンド・スプルーアンス中将。

ハルゼーとは性格は正反対ながらも、親友として有名な提督である。そして、ニミッツ長官こと現アメリカ太平洋艦隊司令長官、チエスター・ニミッツ大将。

ドイツ系で、真珠湾攻撃で解任された、キンメル大将の後任として着任した提督である。

現在、この2人が太平洋艦隊の指揮を執っている。

ニミッツ長官

「聞いたか、レイ。ラエが堕ちた」

スプルーアンス中将

「はい。次の狙いはポートモレスビー、その次にガダルカナル島」

ニミッツ長官

「そして、最後はハワイか……まったく、大統領は何を考えているのか……」

スプルーアンス中将

「？大統領がどうかしたんですか？」

ニミッツ長官

「……第6大陸から日本への通商路を途絶せよ……と命令が出た」

スプルーアンス中将

「な、なんですって!？」

そう言うのも当たり前だろう。

戦況はアメリカが不利。

そして、第6大陸は親日ながらも中立を宣言している。

しかし、通商破壊なんてやったらどうなるか？

多分、最初は成功するだろう。

しかし、日本や第6大陸だって対策をたてるに違いない。

その内、アメリカ艦隊と第6大陸の艦隊とで撃ち合いになるだろう。そうなれば、下手をしたら中立を宣言している第6大陸がアメリカに宣戦布告してくるかも知れない。

結局、アメリカを不利にするだけである。

スプルーアンス中将

「もちろん、止めましたよね？」

ニミッツ長官

「ああ。キング作戦部長が止めたさ。しかし、聞いちゃいない。それどころか、第6大陸にそんな戦力があるはずない、と言っていたそうだ」

スプルーアンス中将

「そんな、大統領は…何を考えているんでしょうか？」

ニミッツ長官

「日本を潰す事しか眼中に無いよ。例え汚い手を使ってでも…な」

次号へ

ラエ占領（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。



輸送船団護衛（前書き）

本日は8月15日：終戦記念日です。国を、天皇を、家族を、愛すべき人を守る為に戦った英霊に感謝し、ご冥福を祈ります。

## 輸送船団護衛

6月1日 ダリア・エステロール連合王国 パトミナス港

駆逐艦を先頭に大小50隻以上の輸送船が出港する。

これに護衛の連合王国海軍とサブウム帝国海軍、あわせて64隻の駆逐艦と8隻の軽巡洋艦、4隻の重巡洋艦、6隻の正規空母、4隻の護衛用軽空母、そして戦艦4隻ががちりと周りを固めている。この大規模輸送船団を日本海軍の主要港トラックまで彼らが護衛する。

ちなみに、輸送船団の中身は、資源や工場で生産された機材類などである。

こんな船団を、戦艦や正規空母が護衛するとは、ある意味贅沢だ。しかし、そうせざるおえなかった。

戦艦ラー・カイラム

士官

「長官。全艦出港準備完了しました」

「うむ。全艦輸送船団に合わせ、18ノットで航行せよ」

士官

「は。全艦18ノットで航行」

士官に命じると連合王国海軍将官フェイリス・ワツケイン中将は司令長官席に座る。

ワツケイン中将

「まったく…アメリカもバカなものだ」

士官

「なにがですか？」

ワツケイン中将

「日本との通商路を途絶しても意味がないのに、攻撃命令を出す大統領…勝利の為なら、どんなに汚い手でも使う…寒い時代だと思わんか？」

士官

「……長官の言う通りですね」

ワツケイン中将

「ああ…ところで、サブルム艦隊は付いて来てるか？」

士官

「はい。負けてから、こつてりと日本海軍に絞られましたからね」

ワツケイン中将

「そうか。しかし、これからが気を抜けん。何時アメリカの襲撃を受けるか分からない。警戒は厳重だな？」

士官

「は、リーダー・目視監視は怠っておりません」

ワッケイン中将

「うむ。さて……何時来るか…それとも来ないのか…」

戦艦ワルキューレ艦内

アルファーニ

「お〜い、ワルキューレ。入るぞ」

ワルキューレ

「あ、ダメ！」

アルファーニ

「おいおい。着替え中じゃないだろ…好物のカルピスとカステラ持って来たぞ」

ワルキューレ

「入っていいよ」

アルファーニ

「……単純な奴」

相棒の単純さに呆れつつ、部屋に入ると…俗に言うハーレム状態！

（アルファーニは興味無いけど…）

モンブラン

「おじやましています、アルファーニさん」

アルファーニ

「いえいえ。慣れましたから」

久し振りに出しました、モンブラン。

アルファーニ

「けど…日本と戦って以来ですね…こんなに艦魂が集まるのは…」

「あら、では、日本の方をご存知なんですね」

アルファーニ

「ええ、まあ…あなたは？」

「失礼、ご紹介が遅れました。連合王国海軍アーケエンジェル級戦艦二番艦のエターナルです」

アルファーニ

「エターナルさんですか。どうぞ、よろしく。知っていると言っても、ちよつとですよ。えーと、畝傍、六甲、伊吹、石狩、播磨、和泉、近江、河内…」

エターナル

「ああ！河内様をご存知で!？」

アルファーニ

「え、ええ、名前だけですけど…」

エターナル

「ああ、河内様…」

「あらあら、まあまあ。エターナルったら自分の世界に入ってしまったわ」

アルファアーニ

「は、はあ……」

「自己紹介まだでしたね。アークエンジェル級一番艦アークエンジェルです。アルファアーニさんですね。よろしくお願いします」

アルファアーニ

「いえいえ、こちらこそよろしくお願いします」

…いつの間にやら、自己紹介の場になっている。

ワルキューレ

「あ、ところでアルファアーニ？あなた、艦長の仕事は？」

アルファアーニ

「ん、副長に丸投げしてきた」

ワルキューレ

「うわ、ひどー！」

アルファアーニ

「…な、訳無いだろ。休憩中。副長に代わってもらった」

ワルキューレ

「なーんだ、びつくりした」

アルファーニ

「…びつくりすることか？」

ちなみに、今回の艦隊編成は……

ダリア・エステロール連合王国海軍

戦艦

ラー・カイラム

アークエンジェル

エターナル

正規空母

ホワイトベース

トロイホース

アーガマ

ネエル・アーガマ

軽空母

ガンペリー

ガルタ

重巡洋艦

モンブラン

ガウンランド

軽巡洋艦

アスピエテ

ガーベラ

クストー

ゴンドワナ

駆逐艦

32隻

サブールム帝国海軍

戦艦

ワルキューレ

正規空母

アウドムラ

ドミニオン

軽空母

ガウ

ギャロツプ

重巡洋艦

ドロス

ドロワ

軽巡洋艦

ケルゲレン



サチワヌ  
シノーペ  
ナスカ

駆逐艦  
32隻

連合王国海軍とサブム帝国海軍から均等に戦力を抽出しているが、船団護衛なら破格の護衛である。

しかし、今回はアメリカが艦隊で襲う可能性があるなら、これです通なのである。

戦艦ラー・カイラム艦橋

「けど、よくこれだけの戦力を出せたな」

ワッケイン中将

「国王夫妻も、サブム皇帝も日本には恩義があるからな。だからだろう、ラー」

「……その名を呼ぶな…恥ずかしいではないか…」

ラーこと、戦艦ラー・カイラムの艦魂、（ラー）・カイ（ラ）ム。どうやら、彼女はワッケイン中将に激ラブらしい。

ワッケイン中将

「しかし、アメリカもまさか、輸送船団襲撃がバレているとは思っ

ていないだろう」

さて、なぜアメリカの輸送船団襲撃がバレたかとゆくと、ことは単純である。

実は、アメリカの軍用通常暗号がサブム帝国軍にそっくりそのまま傍受されていたからだ。

と言っても、内容解読が出来たのは最近で、その第一号が日本に向かう輸送船団襲撃だった。

なぜ、暗号が解読出来たかとゆくと、サブム帝国海軍の元々の装備はアメリカ軍のを多用しており、暗号形態などもその一つだったからだ。

暗号解読により、輸送船団襲撃を知ったサブム帝国は、直ぐ様、連合王国と秘密協議に入ったが、ここで出た選択肢は3つ。

1 輸送の中止或いは輸送路の変更

2 日本に応援を要請する

3 自力で何とかする

1 に関しては、中止したら利益は無いし、それどころかお得意先を失う事になる。

輸送路変更はしたとしても根本的には解決しない。

2は前回の珊瑚海海戦で身動きが取れなくなっており、第七艦隊は、ポートモズビレー攻略の準備中。

結局、第3案に決定した。

ラー・カイラム

「アメリカ軍の襲撃：防げるでしょうか？」

ワッケイン中将

「…戦力による。戦艦が二隻なら防げる。四隻なら、苦しい、六隻なら…船団の半分は沈むだろう…」

戦力のわからない、連合王国・サブールム海軍の連合艦隊。

連合艦隊は、アメリカ軍を防げるだろうか？

そして、アメリカ軍はどれ程の戦力を送り込んで来るのか？

次号へ

## 輸送船団護衛（後書き）

お気付きの方もいらっしゃると思いますが：艦船名の元ネタはガンダムです。（笑）次号は特別編の為、更新が遅れます。それと、明日中に、『新生日本海軍の決断』を更新致します。お楽しみに。  
ご意見ご感想をお待ちしております。

**夏だ！夏祭りだ！（前書き）**

作者「よし、浴衣は揃った。出店もオツケー。花火もよし。招待もした。準備完了！」マリーダ「作者。男性陣に秘密で女性陣集めたわよー」作者「あ、ありがとうございます。さて、始めますか」

夏だ！夏祭りだ！

作者

「みんなー！夏だぜ！」

福本

「いや、わかってますから」

遠地

「っーか、だから？」

野口博士

「…それより、なぜわしが呼ばれなきゃならんのじゃ！わしは戦車開発で忙しいんじゃない！」

作者

「まあまあ。夏なんですからちよつとぐらい息抜きしないと！」

ヴィル

「あの〜、アリソンはどこ行ったんですか？」

大沢

「マチルダ達もさつきからいないんですけど」

野口博士

「なに！？そりゃ本当か！？」

大沢

「は、博士…お、落ち着いて！首が絞まる〜」

福田

「作者！ミリアをどこにやったんですか！」

沖田

「…そう言えば…ここにいるのは男ばかりですよ」

遠地

「うお！本当だ！」

ジント

「作者さん！これどう言う事ですか！」

作者

「いや、とにかくみんな、落ち着いて…」

ゴオオオオオオ！

吉田

「ん、地震？」

片山

「…違う。地響き！？」

若杉

「なんだなんだ！？」

福本

「…総員一時退避！」

ドゴオオオオオン！！

作品の壁をぶつ壊し、出てきたのは、巨大な戦車。

フェルデナント

「な…何ですか？あれ？」

大沢

「6式重戦車より、余裕にデカイですよ！」

遠地

「おい、誰か状況を説明してくれ！」

野口博士

「ふむ、あれは要塞じゃな」

福田

「野口博士？」

野口博士

「あいつはの、登場する時はド派手に入って来る奴なんじゃよ」

沖田

「あの要塞好きさんが…」

その時、巨大戦車のハッチが開き、1人の人物が出てきた。

要塞好き

「野を越え山越え作品を越え、マチルダ様の半殺しを切り抜けて、ついに来ました要塞好き！あら、驚きの二回日本編ご招待！トウ



ッ！」

砲塔から飛び降りた要塞好き。  
空中で一回転し、着地した瞬間……

ドオオオオオオン！

上空に向け空砲が一発。

要塞好き

「本日のお招きありがとおおおおお！！！」

野口博士

「お前は新体操の選手か！！！」

福田

「（いや、つつこむとこそこー！）」

大沢

「（巨大戦車は気にならないの！？）」

新沢

「（つーか、なぜ要塞好きがここに？）」

作者

「あゝ、要塞好きさん…作品の壁壊し過ぎ…」

福本

「誰が元通りにするんだ？」

フェルデナント

「…工兵でしようね」

「おいおい！作者に呼ばれて来たはいいが、壁が壊れてるぞ！」

「さっきの巨大戦車のせいでしょ」

「お祭り、お祭り」

「慌てると転ぶよー」

遠地

「おい、向こうから誰か来るぞ」

作者

「お、来たか。おい、松田！こっちだ、こっち！」

「あ、作者さん！言われた通り、みんな連れて来ましたよ」

遠地

「いや…だから…だれ？」

作者

「『新生日本海軍の決断！』の登場人物。主人公とその仲間3人」

遠地

「…微妙な紹介だな」

松田

「どうもはじめまして。『新生日本海軍の決断！』主人公の松田大和。階級は中将です」

山本

「同じく、松田相棒兼参謀の山本高雄。階級少将」

鈴原

「鈴原エミリー。階級技術中佐」

三河

「イージス戦艦三河の艦魂、三河です。階級は…」

松田

「三河、君に階級は（今のところ）ないよ」

「あら、福本さんに遠地さん。お久しぶりです」

福本

「おお、撫子さん！お久しぶりです。ところでなぜこちらに？」

撫子

「はい、こちらの作者様から夏祭りのご招待を受けまして」

遠地

「夏…祭り？」

作者

「え、ここで女性陣には男性陣とわかれてもらいます。では、女性陣は付いて来てくださーい」

福本

「…何の誘導だ？」

全員

「「「「「夏祭り？」「「「「「」

作者

「そつちや！ちよつどいい具合に170話だし、息抜きにいいと思っ  
てな！」

福本

「それは構いませんが…なぜ、女性陣がないんです？」

作者

「それはだな……お！ちよつどいい時に終わったな」

遠地

「？何が？」

作者

「さあ！愛しき人の姿、とくと見よ！」

バサッ！

ステージの幕が上がり、ステージに居たのは……

福本

「マリーダ!？」

遠地

「千歳!？」

沖田

「おやおや……」

さつきから居ない居ないと騒いでいた女性陣がいた。しかも、浴衣を着て。

作者

「ははは!夏と言えば夏祭り!夏祭りと言えば浴衣と花火と出店!」

要塞好き

「張り切ってると思ってたら、こんな事考えてたの?」

作者

「おう!」

沖田

「なんで秘密にしてたんですか?」

作者

「いや、だってさ、そっちの方が面白いじゃん」

沖田

「はあ〜……ま、別にいいんですけど」

明子天皇

「なに溜め息吐いてるの？」

沖田

「うわ！へ、陛下！なぜこちらに！？それに浴衣！」

明子天皇

「あら、私もこの作品の1人よ。作者さんからご招待されたの。夏祭りなんて初めてだから、こっそり来ちゃた」

沖田

「侍従長に怒られますよ……」

千歳

「ねえ、昇。似合う？」

遠地

「似合う！似合い過ぎる！」

戦鷹

「若杉…に、似合う？」

若杉

「うん、似合う似合う」

勇鷹

「お兄ちゃん、私は？」

若杉

「似合うよ」

ラフィール

「ジント…似合うか？」

ジント

「あ、うん、浴衣姿は初めて見たけど…似合う」

作者

「ほら、男性陣！回りたい人と回りなさい！」

福本

「…ねえ、マリータ」

マリータ

「なに、大介？」

福本

「あんまりこつ言う事は言いたく無いんだけど……引っ付き過ぎて歩きづらい」

マリータ

「あら、でも、歩けない事は無いでしょ？」

福本

「まあ、それはそうだけど…」

マリダ

「…ねえ、浴衣姿…似合ってる?」

福本

「…………お世辞無しで…似合ってる…綺麗だ」

マリダ

「…ありがとう…」

福本

「…どういたしまして…」

福田

「あ!先輩!」

ミア

「マリダさん!」

福本

「お、福田にミアか」

マリダ

「ミアちゃん、似合ってるわよ」

福本

「2人共、お似合いだな」

福田

「やめて下さいよ、先ばい」



尾崎

「新沢さん、夏祭りには？」

新沢

「あははは…実は自分、一度も行った事無くて…」

尾崎

「へー、意外です」

新沢

「いや、自分は生真面目の堅物なので…」

……と、まあ、友達以上恋人未満（と周りは思っている）の2人はたわいの無い会話をしていた。

尾崎

「あれ？山城さん？」

新沢

「あ、本当だ。山城さん」

山城

「ん、ああ、新沢殿と尾崎殿か」

新沢

「どつとも」

尾崎

「うわゝ、山城さん、似合ってますよ」

山城

「ありがとうございます。尾崎殿も新沢殿も似合っているぞ」

新沢

「え？尾崎さんは解るけど、なぜ自分が？」

山城

「おや、私は尾崎殿は浴衣も似合うが、御二人共似合っている、とゆう意味で言ったのだが？」

尾崎

「いやゝん、やめて下さいよゝ、山城さん！」

新沢

「（山城さんって…超堅物だと思ってたけど……意外だ）」

愛宕

「山城さゝん」

山城

「あ、愛宕殿！」

愛宕

「山城さん、これからみんなと回るんですけど、山城さんも一緒に回りませんか？」

山城

「ああ、回る！それでは御二人共、あとで」

そう言うと、山城は愛宕の所に向かう。

新沢

「…ねえ、尾崎さん。もしかしたら山城さんって…」

尾崎

「…偶然ね、私もそう思った」

……新たに2人が気付いた様だ。

識名

「御父さーん、綿菓子食べたーい」

里奈・瑠菜・玲奈

「…私達はかき氷が食べたーい」

里香

「親父、焼きそば食べたい！」

由里香

「あ、私はタコセンで…」

美夏

「ちよっと、姉さん達、待ってよー」

鈴音

「……………（クスツ）」

野口博士

「これこれ、幾らわしでも身は一つじゃぞ〜」

愛娘達に引つ張りだこにされている、野口博士であった。

大沢

「なんか…絵になる光景ですね」

マチルダ

「そうかしら？」

スチュワート

「そうね」

キャリー

「そうですね」

それを見守る年長組。

スチュワート

「さ〜て、私達も何か食べに行こっか」

キャリー

「そうですね。マチルダ姉さんの邪魔になる様だし」

マチルダ

「あ、あなた達！」

スチュワート・キャリー逃亡。

マチルダ

「もう！」

大沢

「…そう言えばマチルダ。きみ、丸くなったね」

マチルダ

「え？」

大沢

「だってさ、出会った頃は高飛車だったけど……今は普通のおしとやかな女性になったなー、と思って」

マチルダ

「……………」

大沢

「わー！ごめん、マチルダ！あ、あと、浴衣姿綺麗です！嘘じゃありません！」

マチルダ

「……………ばか……………」

大沢

「わー…え、何か言った？」

マチルダ

「に、二度は言いませんわよー！」

作者

「要塞好きさん。まずは一杯！」

要塞好き

「これはこれは、すみません」

とりあえず乾杯！

(ペットボトルジュースで)

作者

「いや、今まで野口博士と共に、我々に技術支援をありがとう」「  
ざいます。そして、これからもよろしくお願いします」

春日

「作者、まるで汚職とか賄賂の話に聞こえるぞ」

作者

「…そんなつもりで言ったわけじゃ無いのに…なして？」

要塞好き

「あ、だ、大丈夫ですか？」

春日

「…まあ、大丈夫だろう。高校時代は剣道部だし」

要塞好き

「そつゆう問題…かな？」

薩摩

「お久しぶりです。撫子さん」

撫子

「あら、薩摩さんも土佐さんも元気そうね」

土佐

「はい！妹も、仲間も増えて、毎日楽しいです」

撫子

「そう…良かったわね」

土佐

「あ、ごめんなさい…」

撫子

「あら、いいのよ。別の作品だもの。仕方ないわよ」

薩摩・土佐

「……………」

和泉

「暗い！暗すぎるー！」

近江

「ちよ、お姉ちゃん！」

和泉

「暗いのなんか、酒飲んでぶっ飛ばしちゃえー！」

薩摩

「こら、和泉！お祭りだからって飲み過ぎよ！」

撫子

「…本当、愉快的な方達ばかりですね」

畝傍

「そうか、君達の日本ではやっと抜け出せたか」

松田

「はい。なんとか」

山本

「まあ、左翼のバカとか、共産・社民は何とか抑えましたけど…これからですよ。北のバカもいるし、ミサイル向けてる共産国もいますし」

畝傍

「うむ。しかし、戦艦や重巡洋艦も復活させたのか？」

松田

「ええ、ミサイル時代の軍艦は基本的に打たれ弱い。ならば、打たれ強い戦艦ではそう簡単に機能を損失しませんからね」

山本

「それに…やっぱり戦艦で撃ち合うのは男のロマン！」



三河

「あははは、山本君そればかり」

鈴原

「はあ…もうちょっと考えなさいよ。そこまでに至るまでの情報処理はどつするの?」

山本

「あ…」

鈴原

「馬鹿」

山本

「うるせい!」

松田

「と、まあ…こんな感じですよ。毎日が」

三河

「えへへ、毎日楽しいですよ」

作者

「おっい、みんな、盆踊りするよ」

作者

「さ〜て!夏のメインイベント!」

松田

「何ですか？」

作者

「いや、松田。君はわかりなさいよ……ま、それは置いて……てえー！」

ヒューーウ……

ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！

和泉

「おおー！花火か！」

三河

「わあ、綺麗！」

作者

「いや、東京近辺の花火職人あたってただけあるわ」

ヒューーウ……

ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！

エンター  
遠龍

「独立記念日の花火は聞いてたけど……さすが本場……負けた」

福本

「やっぱり、夏はこつでなきちゃー！」

マリーダ

「本当ね」

遠地・千歳

「「たーまやー!」」

ヒューーウ……

ドーン!ドーン!ドーン!ドーン!ドーン!……

松田

「あ、もう帰る時間か」

三河

「うそ!もうちょっと居たい!」

山本

「駄目だ。帰るぞ」

鈴原

「それではマリィダさん。また今度」

マリィダ

「うん」

作者

「要塞好きさん。また機会がありましたらお呼びします」

要塞好き

「楽しみにしています」

撫子

「それでは皆さん…あ、この浴衣…」

福本

「あ、浴衣はお土産としてお持ち帰り下さい…と作者の伝言です」

撫子

「なら、遠慮なく持って帰ります」

福本

「それでは…草薙先生によろしくお伝え下さい」

次号へ

**夏だ！夏祭りだ！（後書き）**

ご意見感想お待ちしております。『新生日本海軍の決断！』のご意見感想もお待ちしております。（要塞好きさん・草薙先生、キヤラがおかしくなったらすみません。あと、最近『新生日本海軍の決断！』を必死に更新しています。ご感想をお待ちしております！）

## 護衛艦隊奮戦セリ 1

6月3日

戦艦ワルキューレ艦橋

アルファーニ

「速度18ノットを維持。警戒を緩めんな！」

士官

「は！」

早朝からワルキューレ…いや、護衛任務中の全艦艇がピリピリしていた。

これは、連合王国海軍通信傍受部が、アメリカ軍の通信を傍受し、警戒レベルが上がったからだ。

ワルキューレ

「そういえばアルファーニ。この船団の最高速度は？」

アルファーニ

「えーと、巡航速度で18〜20ノット…最高で25ノットぐらいかな」

ワルキューレ

「割りと速いね」

アルファーニ

「けど、アメリカ艦隊に追い付かれたら終わりだよ。日本海軍から

の情報だと修理が完了した戦艦は27、28ノットだとゆう事だし」

ワルキューレ

「…追い付かれたら終わりだね」

アルファーニ

「だから、こっぴやって……」

水兵

「！左舷より雷跡2つ！」

アルファーニ

「なに！」

水兵

「あ、その後方より新たに雷跡2！」

ワルキューレ

「！！！」

アルファーニ

「付近の輸送船に回避指示！機銃班、迎撃せよ！」

ダダダダダダダ！

ドドドドドドドド！

命令直下、機銃が吠え魚雷に向かって撃つ。

アルファーニ

「魚雷は！？」

士官

「大丈夫です！迎撃出来ました！被害無し！」

アルファーニ

「そうか…魚雷発射位置を送って駆逐艦か対潜哨戒機を派遣しても  
らえ」

士官

「はい」

ブオオオオン……

3機の彗星艦爆…第六大陸ではBMスイセイ…が、魚雷発射位置に  
向かっていた。

隊長

『全機、付近を検索しろ。近くに潜水艦がいる筈だ。見つけ出して、  
二度と船団に近付かせるな！』

『『了解！』』

返事と共に、2機は散開した。

彗星3番機



「アスハ、いた？」

「いないわ。ルーシュは？」

「こつちもダメ」

暢気そうな会話をしている彼女達は、サブム帝国海軍空母ドミニオン所属の艦爆隊所属の、パイロットのアスハ上等兵と通信員ルーシュ一等兵のペアである。

ルーシュ

「んー……いた！11時の方向！」

アスハ

「了解！」

キヤーン……

潜水艦は駆逐艦を警戒しているのか、彗星に気付いていない。

アスハ

「よーい……てえー！」

チツチツチツチツ

彗星の爆弾倉から60kg対潜爆弾4つが放れる。

ヒューーウ……

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！

アスハ

「…どう？」

ルーシュ

「……油が浮いてきた。最低、損傷したわね」

アスハ

「じゃあ、駆逐艦に確認してもらいましょ」

その後、確認に現れた駆逐艦が海上で回収したのは、英語の書類と海図。

この2つにより、潜水艦撃沈と判断した。

護衛艦隊旗艦ラー・カイラム

ワッケイン中将

「そうか、潜水艦の襲撃を受けたか」

ララ（ラー・カイラム）

「はい。発見が早く、被害は無し。逆に潜水艦を撃沈したとの事です」

ワッケイン中将

「うむ…アメリカ軍が一回の襲撃で終わるとは思えない。引き続き警戒してくれ」

ララ

「わかりました」

そう答えると、ララは転移した。

士官

「司令。よろしいですか？」

ワッケイン中将

「ん、ああ、すまん。なにかね？」

士官

「いえ、特には。司令はラー・カイラムと仲が良いんですね」

ワッケイン中将

「ああ。2年前まで、艦長として乗り組んでいたからな」

士官

「なるほど。ワルクューレの艦長みたいですね」

ワッケイン中将

「ワルクューレ…ああ、アルファーニといった彼だね」

士官

「ええ、確か彼は大佐でしたが、実質上のサブーム艦隊の指揮をとっています」

ワッケイン中将

「そうか…この作戦が終わったら、ゆっくりと話してみたいな」

その後、昼頃まで5回の潜水艦による襲撃を受けたが、被害は無く、  
反対に潜水艦を三隻撃沈している。

（護衛艦隊の集計）

だが…アメリカ軍はまだ手を残していた。

次号へ

**護衛艦隊奮戦セリ 1 (後書き)**

ご意見ご感想をお待ちしています。

## 護衛艦隊奮戦セリ 2

お昼頃……

護衛艦隊旗艦ラー・カイラム

士官

「司令！緊急事態です！」

ワッケイン中将

「どうした？何があつた！？」

士官

「北東の方角を偵察中の艦偵が、アメリカ艦隊を発見しました！」

ワッケイン中将

「それで！？」

士官

「は、アメリカ艦隊は小型空母を伴っており、航空攻撃の準備中だ  
そうです！」

この瞬間、誰もがアメリカ艦隊の意図を悟った。

この付近に、日本海軍の艦艇は一隻もない。

つまり、攻撃隊の行き先は、この日本行きの輸送船団だけである。

そう思うと、士官達の顔が微妙に暗くなる。

何せ、片や世界第2位の海軍国、片や新興国の海軍…差は歴然として  
いる。

ワツケイン中将

「何暗い顔をしている！我々は毎日、日本海軍流の訓練をしてきたではないか！訓練の成果を出せば絶対に切り抜けられる！」

こうでも言わないと、士気に影響する…そう思ったワツケイン中将は士官達を励ます。

ワツケイン中将

「約50年前、日本海軍は同時世界最強だった鎮遠・定遠を鹵獲・撃沈し、その10年後、今度は世界最強だったロシアバルチック艦隊を敗った。その間日本海軍は何をしていた？戦訓を調査研究し、1年分の弾薬が僅か10日で無くなる程の猛訓練だ！その海軍から我々は教えを受けた！大丈夫、全員が本気を出せば絶対に勝てる！」

士官達

「……おう！」「……」

まだ不安が残るが、とりあえず、士気は上がった。

一方……

戦艦ワルキューレ

ワルキューレ

「…来たね」

アルファーニ

「ああ、いよいよだ」

くるりと振り向くとそこには共に学んだ下士官将校達がいた。

アルファーニ

「みんな、聞いているとは思いが、アメリカ艦隊が接近中、狙いは護衛中の輸送船団……戦闘は必至だ」

童顔に似合わず、しっかりした事を言っている。

まあ、そうゆう設定で出してんだし……。

それを聞いている下士官将校達は連合王国海軍士官達と違ってやる気満々、闘志に燃えている。

アルファーニ

「僕達は負けたとはいえ、実戦経験済みだ。その後、日本海軍に日本海軍流で仕込まれたんだ！そんな僕達が、連合王国海軍に遅れをとってはならない！この戦いで奮戦して、ヘタリアの名を返上、世界を見返してやろう！」

下士官将校達

「おう！！」

水兵

「艦長！敵編隊接近！距離150キロ！」

アルファーニ

「よし！幕が上がった！全空母、艦戦発艦！」

「サブールム海軍に負けるな！早く発艦させろ！」



「連合王国海軍に負けるな！実戦経験の差を見せてやれ！」

連合王国・サブム帝国海軍の正規空母・軽空母からFTレイVI<sup>シックス</sup>  
…零戦64型の第6大陸名称…が次々と発艦する。  
双方共に闘志を燃やし、アメリカ軍攻撃隊に向かって行った。

無線の声

『敵攻撃隊発見！これより攻撃します！』

迎撃に出た艦戦隊から、報告が入る。

ワッケイン中将

「輸送船団はどうか？」

士官

「は、速度を上げています。護衛艦隊は陣形を固めています」

水兵

「司令！敵攻撃隊、我が方に接近！戦闘機隊、追撃しております！」

ワッケイン中将

「よし！全艦対空戦闘用意！」

士官

「はい！」

水兵

「敵機、40機程が接近！」

ワルキューレ

「100機が阻止されたわね」

アルファーニ

「初陣にはなかなかやってるよ…零戦の戦闘能力なのか…皆の頑張りなのか」

ワルキューレ

「2つともだよ」

アルファーニ

「だよね」

水兵

「敵機、来ます！」

アルファーニ

「全艦各部署対空戦闘始め！」

ドン！ドン！ドン！ドン！バババババババ！  
ドドドドドドドドドドド！

連合王国・サブム帝国海軍各艦艇が搭載対空火器を撃ちまくる！

ちなみに、突破した40機のほとんどが戦艦や正規空母…つまり大物…に食らい付いて、本来襲う筈の輸送船団に僅か数機しか襲わなかった。

ワルキューレ

「！アルファーニ、左舷の輸送船に爆撃機！」

アルファーニ

「機銃座！左舷の輸送船を護れ！」

ドドドドドドドド！

ババババババババ！

ガガガ、ガガガン

ゴワーン！

ワルキューレ

「やったー！」

士官

「艦長！右舷より雷撃機2！」

アルファーニ

「回…いや！主砲撃て！」

ズガン！

主砲の40cm50口径三連装砲が微調整を行い、発砲する！

チカッ

ドガガガガガガガガガン！！

3式弾の砲撃で、2機の雷撃機が叩き落とされる。

ララ（ラー・カイルム）

「馬鹿か、奴等は？輸送船団では無く、戦艦狙うとは……」

ワッケイン中将

「どうやら、ルーキーが多いからだろう。しかし、F4Fとドーン  
トレス…旧式機だね」

ララ

「ふん、アメリカ軍は新鋭機を揃える暇が無いのか？既に日本海軍  
は2000馬力級戦闘機を配備運用していると聞いているぞ」

ワッケイン中将

「開発しているさ。ただ数が揃わないだけだよ」

結局、アメリカ軍の攻撃は失敗に終わった。

10機程が逃げ帰って行った。

しかし、アメリカ軍の不幸は終わってはいなかった。直ぐ様、空母  
から待つてましたとばかりに攻撃隊が発艦する。

連合王国・サブム帝国海軍による攻撃が始まるうとしていた。

次号へ

護衛艦隊奮戦セリ 2 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

### 護衛艦隊奮戦セリ 3

20分後……

アメリカ艦隊旗艦ワシントン

「たった…たったあれだけか…」

全力出撃で140機を出して戻って来たのは10機程…。

「どうなっている、参謀長！？連合王国もサブルム帝国も、航空機は日本海軍のお下がりではなかったのか！？」

参謀長

「そ、そう言われましても…ゴームリー提督…」

ゴームリー中将、史実のガダルカナル島戦初期のアメリカ南太平洋戦域の指揮官である。しかし、その軟弱姿勢が祟り、更迭された指揮官である。

参謀長

「と、とにかく、今後の方針を…」

士官

「て、敵機来襲！」

ゴームリー中将

「な、なに!？」

この時、来襲したのは連合王国・サブム帝国の合同攻撃隊150機。

アメリカ軍の140機とはそんなに差はないが、状況が違っていた。アメリカ艦隊の護衛空母はカタパルトにより全力出撃しており、ほぼすっからかんの状態……だが8隻の護衛空母は予備機を除いても戦闘機60機はあった。

しかし、飛んでいたのはたった12機。

まあ、こんな状況で当たれば当然……

無線の声

『戦闘機は任せろ!それより空母を殺れ!』

『了解!』

零戦64型が戦闘機を防ぎ、彗星・天山が向かう。

アスハ

「あ、あれはね……」

ルーシュ



「確かに…邪魔ね」

2人の乗る彗星の下にいるのは、盛大に対空火器を放つ二隻の巡洋艦。

アトランタとジユノーの二隻である。

この対空巡洋艦に味方は苦戦している。

アスハ

「じゃあ…やるよ！」

ルージュ

「了解！」

ギューーン……

狙いを定めた巡洋艦…アトランタ…の真上に接近する。

そして……

キヤーーン……

カチッ

ヒューウ……

この時、やっとアトランタの見張りが気付いたが、時既に遅し、必殺の爆弾は……

ズガガーン！

アトランタを直撃。

500kg爆弾は第2砲塔を破壊し、炸裂。

しかも、弾薬庫付近で火災が発生。

この影響で、残りの前部砲塔は射撃を中止した。

これがアトランタの運命を決めてしまった。

機会を狙い、旋回していた天山3機が射撃をやめた船体前部に向かって攻撃を開始。

アトランタの機銃座が気付いて攻撃したが、既に魚雷は放たれていった。

シャーア……

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！

軽巡洋艦に魚雷3発はキツイ。

アトランタの沈没は確定だ。

この防空網に出来た穴を攻撃隊は見逃さなかった。

次々に殺到、護衛空母を攻撃し始めた。

貧弱な船体構造である護衛空母は上手くすれば500kg爆弾1発でも撃沈できる。

殺到されれば終わりである。

これを守る筈のジュノーは零戦・彗星・天山の攻撃され身動きが取れない……どころか、既に被弾している。

アメリカ艦隊の不利は決定的だった。

30分後……

連合王国・サブム帝国の攻撃隊は引き上げて行った。

しかし、護衛空母は8隻は大破・沈没し、防空の要であったアトラ  
ンタとジュノーも撃沈された。

旗艦ワシントン

ゴームリー中将

「ば、馬鹿な……あ、悪夢を見ているのか？」

そう言いたくなるのは解るが、残念ながら現実である。

日本海軍のお下がり……96式艦戦辺りでも考えていたのだから……

……だと思っていたら、日本海軍の現有使用機を使ってきたのだ。  
これはアメリカ軍にとって予想外であった。

参謀長

「提督……これからどういたしますか？」

ゴームリー中将

「……艦隊を再編、輸送船団を攻撃する」

次号へ

護衛艦隊奮戦セリ 3 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

護衛艦隊奮戦セリ 4

夕方……

士官

「偵察機から報告です。戦艦2、重巡4、軽巡6、駆逐艦多数」

ワッケイン中将

「そうか……来たか」

ララ（ラー・カイルム）

「どうするのだ？少ないとはいえ相手に不足は無いが？」

ワッケイン中将

「迎え撃つ。このまま付いて来てもらっても困るしね」

ララ

「そうか……なら、どう迎え撃つ？」

ワッケイン中将

「うん、戦艦はきみとワルキューレで対応する。アークエンジェルとエターナルには巡洋艦と共に快速部隊を防いでもらうよ」

ララ

「二隻で大丈夫なのか？」

ワッケイン中将

「二隻で大丈夫だよ。それより、僕としては敵の快速部隊が突破して輸送船団に向かう方が大変だよ」

ララ

「そうね。元々私達の任務は輸送船団の護衛だからね」

ワッケイン中将

「ああ。参謀長！2個水雷戦隊を付けて、輸送船団と離れる。アメリカ艦隊を迎え撃つ！」

参謀長

「了解！全艦艇に通達致します！」

1時間後、連合王国・サブム帝国の空母と2個水雷戦隊の護衛を付けた輸送船団と分離、アメリカ艦隊を迎え撃つべく変針した。

そして……数時間後。

双方のレーダーが相手を探知した。

旗艦ワシントン

ゴームリー中将

「敵戦力は？」

士官

「は、戦艦クラス4、巡洋艦クラス10、駆逐艦は…40以上…」

ゴームリー中将

「グッ……」

事前の偵察でも同じ結果が出ている。

ちなみに、アメリカ海軍の作戦前の分析では戦艦1隻、空母6隻、重巡4隻、軽巡8隻、駆逐艦48隻……と言っのがサブルクム帝国海軍戦力との話だった。

しかし、これは『サブルクム帝国海軍戦力』であって、『第六大陸全体の海軍戦力』ではない。

これが、ニミッツとスプルーアンスの2人が反対したもう1つの理由である。

しかし、ルーズベルト大統領が聞く筈なく、ほぼ強硬的に行われた。

参謀長

「提督？」

ゴムリー中将

「…何でもない……砲戦用意」

参謀長

「了解！」

戦艦ワルキューレ

士官

「敵艦隊接近中」

アルファーニ

「では、手筈通りをお願いします」

士官

「了解」

ワルキューレ

「けどさ、戦艦2隻ならこっちも2隻でいいのかな？」

アルファーニ

「まあ、普通の海戦ならこんな回りくどい方法はとらないね。けど、今回はワツケイン中将のやり方は理にかなってるよ」

ワルキューレ

「……なんで？」

アルファーニ

「今回は戦艦の撃沈よりも、輸送船団の護衛だからね。敵が2隻ならこちらも2隻、残りは快速艦艇の抑えに回る……とにかく、敵艦隊を抑えきれれば、こっちの勝ちって事さ」

ワルキューレ

「おお、分りやすい」

士官

「艦長。ラー・カイラムから発灯信号、『手筈の通り我に続け』」

アルファーニ

「『了解』と返信して下さい」

士官

「はい」



アルファーニ

「さあ…いよいよだ」

本来なら、快速艦艇が突入し、その後、戦艦が砲戦…なのだが、今回は反対だった。

戦艦が先行し、その後、快速艦艇が突入する…といった状況だ。

ワッケイン中将

「やはり、戦艦を先行させたか…よし、目標敵戦艦！てえー！」

士官

「てえー！」

ズガン！ズガン！ズガン！  
ズガン！ズガン！ズガン！

ラー・カイラムの発砲を合図に、ワルキューレも同時に発砲する。すると、アメリカ戦艦も発砲する。

ワッケイン中将

「どうやら誘いにのつたな…各艦に通達、戦艦は任せろ！」

ワシントンとノースカロライナがラー・カイラムとワルキューレと砲戦を始めると同時にアメリカ快速艦艇が突入した。

これに対しアークエンジェルとエターナル、連合王国・サブールム帝

国快速艦艇が迎え撃つ。

アークエンジェル・エターナル

「撃て！！」

ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！

ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！

ヒューーウ……

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！

必死に突破しようとするアメリカ艦艇に38cm砲弾が降り注ぐ。

そして、ここで威力を発揮したのが、日本海軍直輸出の61cm酸素魚雷と日本海軍の夜戦戦技である。

アメリカ艦隊にとって悲劇だったのは、連合王国・サブム帝国海軍が日本海軍の直弟子だった事だろう。夜間視力は日本海軍に及ばないものの、夜戦訓練はみっちりやっている。

しかし、アメリカ艦隊はそんな訓練やる暇が無い。

何せ今回参加のボルチモア級重巡4隻の乗組員は訓練期間2週間とゆう短期間。

これ程、アメリカ海軍は追い詰められていたのである。

当初はどうかなる筈だった……が今や突破さえも困難だった。

参謀長

「駄目です！敵戦艦に阻まれ、突破出来ません！」

ゴームリー中将

「く……嵌められたか……」

戦艦を釣り出した時点でなんとかかなると思われたが、敵の方が一枚上手だった。

ヒューーウ……

ガガン！

士官

「第1砲塔被弾！砲撃不能！」

参謀長

「ノースカロライナより連絡！第3砲塔被弾！旋回不能！」

ゴームリー中将

「馬鹿な……連合王国海軍なら解るが……サブلم帝国海軍のこの命中率はなんだ！？」

日本海軍に敗れて一年しか経っていない……いや、僅か一年でここまで鍛え直したとゆうのか！？

参謀長

「提督！もはや作戦は失敗です！撤退を！」

ゴームリー中将

「く……全艦反転！撤退だ！」

参謀長

「敵艦隊、撤退して行きます!!」

士官1

「……勝ったのか？」

水兵1

「勝ったんだよ、俺達が！」

士官2

「初の海戦で…勝ったんだ！」

水兵2

「ヤッホー！やったぜ！」

士官1

「れ、連合王国、ば、万歳！」

士官・水兵達

「『『『『『万歳！国王夫妻に栄光あれ!!』』』』』」

水兵1

「アメリカ艦隊、反転撤退して行きます！」

士官1

「やったぞ！」

水兵2



護衛艦隊奮戦セリ 4 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

報道は電光石火の如く……

『連合王国・サブム帝国海軍、アメリカ海軍に勝利!!』

このニュースは電光石火の如く世界を駆け抜け、世界を驚かせた。それは、日本海軍が日露戦争の日本海海戦でバルチック艦隊を敗った時程の驚き様だった。

そんな日本海軍が育てた新興海軍がアメリカ海軍に勝利したのである。

特に、サブム帝国は日本海軍に指導を受けてからまだ1年しか経っていないのだから、驚きもするだろう。

さて、ここで世界各国の反応を簡単に書いておこう。

日本

日本では友好国とゆう事もあり、大々的に報道された。

数日後、トラックに入港した護衛艦隊を、山本長官が出迎え、急遽来航した明子天皇が、ワッケイン中将とアルファーニにお誉めの言葉を直接贈ったとゆう。

イギリス・ドイツ

こちらでは関係無さそう……と思いきや、意外に大きく扱っている。イギリス・ドイツの新聞紙面の見出しは……

『第2の海軍国アメリカ、地に墮ちる』

『羊を襲う筈が、猟犬に襲われた狼』

『輸送船団の食い方：教えましょうか？』

『舐めすぎたアメリカの自殺行為』

……等々、アメリカを扱った（？）見出しが多い。  
ちなみに、サブム帝国については……

『サムライになったサブム帝国』

『日本海軍との出会いで強くなったサブム海軍』

『日本の強力な友好国』

……とまあ、賛辞の声が多い。  
ちなみにあるイギリス人記者は……

「サブム帝国はヘタリアを返上しましたが……今度はアメリカが  
ヘタリアになった様ですね」

……と。

アメリカ

さて、当事者のアメリカはとゆつと……



『連合王国・サブム帝国海軍の卑怯な奇襲に云々……』

とゆつのは民主傾倒の新聞で、共和傾倒あるいはユダヤ人経由で情報を貰える新聞社は……

『ルーズベルトの無茶が生んだ海戦!』

『中立船舶を襲う非道者ルーズベルト!』

『第6大陸諸国を敵にまわす気が!?!』

『ルーズベルトは今すぐ辞任せよ!』

……等々、ルーズベルト、あるいは民主党批判が紙面を占めた。

ロシア・イタリア他……

これと言って報道していない。

その他

さて、この連合王国・サブム帝国の勝利は意外なところで波及していた。

それは、トルコ、フィンランド、メキシコなどロシア・アメリカを脅威とする国々と欧米植民地、アメリカ国内の黒人達である。

メキシコはアメリカに散々な目にあっている為、今回の勝利はメキシコ人にとっては痛快であったであろう。

トルコ・フィンランドはロシアの脅威があり、今やソ連の半場手先と化したアメリカが日本に敗れたどころか新興国に敗れたのが痛快であり、新たな希望を見た為である。

そして、欧米植民地とアメリカ国内の黒人達には絶大な影響を与えた。

元々、日本がアメリカとの戦争に突入した時、植民地と黒人達はこの戦争が人種戦争であると思っていた。非白人国家の日本と白人国家であるアメリカ……白人コンプレックスのある植民地と黒人達は非常に注目していた。

すると、ギルバート諸島沖海戦からアメリカは敗北続き。

そして、今回の海戦でのアメリカ敗北は新たな衝撃を与えた。

最初は……

『日本がアメリカに勝った!』

『白人は無敵の半神では無い!』

『我々も日本の様になろう!』

そして、今回の海戦で……

『日本が手を懸けた新興国家が勝った!』

『日本と第6大陸諸国は我々の目標だ!』

……となった。

この為、欧米植民地では独立運動が盛んになり、アメリカ国内では黒人による反戦運動や選挙権取得運動などの差別撤廃運動が盛んに

なった。

これがルーズベルト政権を更に追い詰めていった。

さて、この勝利に最も湧いたのは当事者の連合王国とサブム帝国である。

初の外国海軍との海戦に勝利したのだから当たり前だろう。

後に6月3日は双方祝日に認定され、戦勝祭が行われる事になる。

そして、今回の海戦で両国はヴィントラント王国を交えアメリカに対し共同宣言を発表した。

『もし、これ以上、日本あるいは日本船舶に対し、敵対行為を続けるならば、安全保障条約の合意条件により、アメリカに対し宣戦布告する用意が有ることを事前通知いたします』

次号へ

報道は電光石火の如く……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

あえて言おう　であるよ！

6月7日　トラック諸島

遠地

「なあ、福本。この間の海戦の戦果聞いたか？」

福本

「ああ、確か…護衛空母8隻、重巡2隻、軽巡5隻、駆逐艦6隻が沈没。重巡1隻、軽巡1隻、駆逐艦8隻大破。戦艦ワシントン・ノースカロライナ、重巡1隻、軽巡1隻、駆逐艦8隻中破、駆逐艦8隻小破…だったけ？」

遠地

「細かいとこまで覚えているんだな…ああ、そうだ」

福本

「連合王国は置いて…サブム帝国の成長ぶりもすごいな」

マリーダ

「ええ、本当……どうやったらあそこまでなったのかしら？」

千歳

「あとでアルファ―二君達に訊いてみましょう」

福田

「ところで…なんで自分達は呼ばれたのでしょうか？」

福本

「いや、山本長官に来てくれと言われて来たのだが……」

沖田

「じゃあ、福本先輩も知らないんですね」

福本

「ああ」

福田

「まさか…山本長官いきなり引退とか！」

遠地

「あのな…もう少しマシな考えは浮かばないのか？」

新沢

「その前に、山本長官が引退する訳ないでしょう…こんな時に」

福田

「あははは……」

これが僅か一時間前の状況である。

そして、今は……

山本長官

「諸君、開戦から僅か4ヶ月、アメリカ海軍は戦力の半分以上、主

戦力なら3分の2以上を本日までの海戦で失った。今やルーズベルトに残る戦力は烏合の衆に過ぎない！アメリカにどれ程の戦力が残っているかとあえて言おう…カスであると！」

壇上の上で、山本長官は演説していた。

山本長官

「なぜこれ程の被害を出したのか？それはルーズベルトが我々を舐めすぎていたからだ！まあ、日本人が邪悪なのは白人より頭蓋骨の発達が2000年遅れているとゆう珍説を信じる幼稚な頭なら仕方無いがね」

その後、約20分に渡って山本長官の演説は続いた。

戦艦大和艦内長官公室

山本長官

「ふう…いくら謀略放送だと言えども…疲れたぞ」

福本

「お疲れ様です」

山本長官

「うーん…すまんがマリーダ中将、肩を揉んでくれ」

マリーダ

「わかりました」

返事をする、直ぐに肩を揉むマリダ。

山本長官

「ところで…あの事は進んでいるんだな？」

福本

「はい、既に現地に連絡をしてありますし、こちらの準備も終わっています」

山本長官

「そつか…それなら良いが……」

福本

「?どうかいたしましたか？」

山本長官

「いや…実はこの事が山口君にバレたんだよ」

宇垣参謀長

「すまん。私が口を滑らしてしまった」

マリダ

「ああ、そういえば宇垣参謀長と山口少将は同期生でしたね」

福本

「まあ…いつかはバレますから仕方無いですけど……まさか、ここに来ませんよね？」

山口少将

「山本長官。山口です」



ノックと共に山口少将の声。

山本長官

「噂をすればなんとやらだな。いいぞ」

山口少将

「失礼します」

山本長官

「やあ、多聞丸。いったいどうした？」

山口少将

「どうしたではありません！ いったい何を考えとるんですか！？」

山本長官

「ああ、ブーゲンビル島に行く件だな」

山口少将

「そうです！ 先程、あんな演説をやったばかりですよ！ アメリカがどういった手段をとるか！」

そう言うと、今度は福本に視線を向ける。

山口少将

「福本！ 貴様もだ！ 今回の事は貴様の提案だと聞いたぞ！ もし、山本長官の身に何かあったら切腹ものだぞ！」

見ると宇垣参謀長がすまん！ と言う身振りをしている。

まあ、間違っではないのだが…。

福本

「……それでは切腹の為に軍刀の手入れをしないと……」

山口少将

「福本！ふざけるな！」

山本長官

「…参謀長、すまんが2人にしてくれんか？」

宇垣参謀長

「わかりました」

山口少将

「まったく」

山本長官

「まあまあ、そうあいつを責めるな」

山口少将

「長官、解っているでしょう！あなたが死んで、福本が切腹すれば連合艦隊が成り立たんのですよ！」

山本長官

「…多分私が死んでいたら、彼も死ぬだろう」

山口少将

「いや、ですから……」

山本長官

「すまん、言葉が足りんな。私が死んでいたら、福本も一緒に死んでいるだろう」

山口少将

「な、なんですと！」

山本長官

「参謀長がどこまで話して、君がどこまで聞いているかは解らないが、提案してきたのは福本だ。しかし、最初は福本だけが行く予定だった。それに私が相乗りしただけだ。もちろん、福本も参謀長も止めたがね」

山口少将

「な……」

山本長官

「ま、福本の事だ。大丈夫だと思うがな」

次号へ

あえて言おう　であると！（後書き）

作者「有権者の皆さん！本日は大事な投票日です！ちゃんといきま  
しょうね」福本「ところで作者は何歳？」作者「18歳です」マリ  
ーダ「支持政党は？」作者「あゝ、いえ、幸福実現党とかみんなの  
党とかです……」遠地「じゃあ、政権を取って欲しくない政党は？」  
作者「民主！共産！社民！」福本「……即答ですね」作者「いや、最  
近もし、あの3党が政権取ったら……って考えると背筋が寒くなる  
んだよな……」ご意見感想をお待ちしております！

## 飛魂（前書き）

作者「選挙から2日経ちました。民主党政権誕生に中国・韓国は大歓迎だそうです…まあ、当たり前か…」遠地「…作者、どうしたんだ？」福本「世界は腹黒から、中国・韓国に好都合な友愛外交で歴史教育問題や領土問題とかで民主党が妥協するじゃないか……だとさ」遠地「確かに……しかも、共産・社民がいるからな」作者「共産・社民……売国奴政党は消えて欲しい」福本「……敵を作らないで下さいよ」

## 飛魂

6月7日 深夜 ビスマーク海

空母遠龍（元エンタープライズ）艦内

エンタープライズ

遠龍

「ふあ〜…眠い…」

本日も艦長副長のイチャイチャをたっぷり見せられてお疲れ気味。

遠龍

「う〜ん…ん？」

その時、遠龍は廊下で少女を見た。

しかし、第七艦隊で今や少女や女性は珍しくない。

遠龍が気になったのは彼女が見たこと無い少女だったからだ。

遠龍

「（あれ？あんな子居たっけ？）」

何度、艦魂と乗組員の顔を思い出しても一致しない。

遠龍

「ねえ、あなた。こんな時間に何の用？」

すると少女は光と共に消えた…。

翌日8日 旗艦播磨

福本

「…幽霊？」

遠龍

「ええ！だって見知った人にあんな子いないのよ！絶対に幽霊！」

福本とマリータはお互いの顔を見て…クスツとお互い笑う。

遠龍

「な、何よ！笑う事ないでしょ！」

福本

「ごめんごめん。けど遠龍、そんな事を言ったら君も幽霊やそう言った類いの1つだよ」

マリータ

「それに、光と共に…と言つのなら、艦魂とか車魂じゃないの？」

遠龍

「じゃあ、いったいどこの誰なのよ？」

福本

「うーん…」

マリータ

「…誰でしようね？」

ヴィル

「失礼します。福本長官、報告書です」

福本

「お、早いな」

ヴィル

「はい。あ、エンター、おはよう」

遠龍

「おはよう、ヴィル」

ヴィル

「あれ？なんで、エンターがいるんですか？」

福本

「ん、実はだな……」

遠龍の話ヴィルに話す。

ヴィル

「……あのー、それって……」

福本

「ん、心当たりがあるのか？」

ヴィル

「はい。もしかしたら……飛魂ではないでしょうか？」

マリーダ

「飛魂？」



福本

「一部のエース機に現れる精霊…それが飛魂だ…しかし、それだとの機か解らないぞ？」

ヴィル

「いえ、1つ確実なのを自分は知っていますので…なんなら今から行きますか？」

福本

「ああ、仲間の顔は早めに知っときたい」

ヴィル

「わかりました。じゃあ、エンター、行こうか？」

遠龍

「…3人一辺に行けるかしら？」

空母遠龍艦橋

遠龍

「はい。到着」

福本

「3人一辺にいったな」

白河・富田

「「ち、長官！」」

慌て2人が敬礼する。

どうやら、イチャイチャ中だった様だ。

福本

「やあ、2人共。朝からお熱いイチャイチャ振りで」

2人の顔は真っ赤である。

士官

「あ、あのー、福本長官。な、何のご用でしょうか？」

艦橋に居る全員の疑問を士官の1人が代表して訊く。

福本

「ん、いやなに、艦魂から艦長と副長があまりにもイチャイチャするから困っている、と聞いた観に来たんだよ」

士官

「そんなんですか」

艦橋の中が笑いに包まれる。2人の顔はトマト並みに真っ赤だ。

ヴィル

「まあ、せっかく来たんですし、艦内でも回りましょうか」

マリィダ

「そうね。じゃあ、艦長と副長、借りていくわよ」

士官

「あ、どござ」

白河

「もう！長官！」

福本

「すまんすまん」

富田

「しかし、長官。なぜ本艦に？」

マリーダ

「この艦で幽霊が出た…と遠龍は言ってるの」

白河

「あ、朝、エンターから聞きました」

ヴィル

「僕は飛魂じゃないかと思うんです」

富田

「……なら、うちで候補といえは杉田では？」

福本

「ああ、杉田庄一飛曹の事だな」

富田

「ご存知で？」

福本

「当たり前さ。配属2ヶ月で40機撃墜：数じゃあ一歩劣るが今や戦闘機4人衆に近付いている程の腕前だしな」

ちなみに、戦闘機4人衆とは、アリソン・クレア・片山・吉田の事である。

白河

「今じゃあ、女の子の間で噂ですよ」

福本

「：色んな意味で居そうな気がしてきたよ」

格納庫甲板

整備兵

「一飛曹。整備終わりましたよ」

杉田

「ああ、すまない」

整備兵

「いえ、それでは失礼します」

整備兵が去ると、先程まで整備していた紫電改に近付く。

杉田

「紫電改…お前は俺の最高の相棒だ」

訓練生時代は96式練戦や零戦21型を使っていたが、腕を見込まれ第七艦隊に配備される際、新型の紫電改と共に配備される事になった。

この為、機種転換で紫電改に乗った時、最高の相棒と感じ、惚れ込んだ。

富田

「杉田一飛曹」

杉田

「これは副長に艦長…航空参謀に…参謀長、長官！」

福本

「杉田庄一飛曹、噂は聞いているよ」

杉田

「お、恐れ入ります！」

ヴィル

「杉田一飛曹、硬くならず」

杉田

「はあ…しかし、自分に何か？」

福本

「いや、実は君の紫電改に用があつてね」

杉田

「……………はい？」

福本

「マリーダ、どう思っつ？」

マリーダ

「うーん、いるとは思っけど……」

「なんだ、私の事か？」

その声と共にコックピットから少女が出てきた。

「よっと」

そして、コックピットから飛び降りる。

遠龍

「あー！あんた、昨日の！」

「ふむ、遠龍の艦魂か」

福本

「じゃあ、君が飛魂だね」

飛魂は軍服に、左右の腰に軍刀を持っている。

「はい。杉田庄一飛曹機の飛魂です」

杉田

「え、自分の!？」

「はい。私はあなたが搭乗した時に生まれました。身体をもったのは最近ですが」

杉田

「じゃあ、時々聞こえるあの声は…」

「はい、私です」

白河

「ところで、あなたお名前は？」

「い、いえ、それが……ありません」

マリイダ

「あら、不便ね。大介、考えてあげたら？」

福本

「いや、それは杉田が考える事だろ」

杉田

「すみません、お願いします」

福本

「おいおい……うーんと……そうだな……紫電改の紫の字をとって、紫音はどうだ？」

紫音

「紫音……いい名前です。ありがとうございます」

こうして、第七艦隊に新たな仲間が加わった。

次号へ



## 飛魂（後書き）

作者「紫電改の飛魂…紫音は、姉御タイプ設定ですが…微妙だな」  
紫音「出すのが遅すぎるのに…死にたいか？作者？」作者「あは  
はは…紫音、やり過ぎだよ。あ、ちなみに、紫音の下着は水着です  
！（紫電改の基礎は水上戦闘機強風だから）」紫音「…作者」作  
者「は、ご意見ご感想をお待ちしております！それでは！」紫音「  
待て！作者！」福本「おいおい…」

## 襲撃（前書き）

「通りすがりの愛読者」とゆうお方から質問メッセージを頂きましたのでお答えします。今回の民主党が政権を奪取した事ですが、まあ、一言で言うなら心中複雑です。社保庁の問題やなんやらを変えたいと思う国民の気持ちは解ります。しかし、外交問題や防衛問題に消極的ですし、まず考えの違う社民党と連立していますから……多分4年は続かんと思います。続いたとしても、自民党の4年間状態かと思えます。自分としては防衛問題と外交問題はもつと積極的であってほしい。友愛外交では世界（特に中国と韓国）は変わらな  
いと思います。

## 襲撃

6月8日 ブーゲンビル島付近上空

一機の2式大艇が護衛の零戦6機と共に飛行していた。

機長

「長官。もうそろそろ、ブーゲンビル島に到着します」

山本長官

「うむ、」苦労「」

宇垣参謀長

「案外早くつきましたな」

福本

「いえいえ、予定通りですよ」

マリーダ

「はい、時間通りです」

今回の視察はブーゲンビル島とラエの視察である。

ラバウルで2式大艇に搭乗しラエを視察、その後、ブーゲンビル島に向かった。ちなみに今回のメンバーは、山本長官、宇垣参謀長、福本、マリーダの4人である。

宇垣参謀長

「しかし…アメリカは来ますかな？」

山本長官

「わざわざ情報を流してやったんだ、来るだろう」

福本

「しかも、自分と山本長官がいるのですからね」

宇垣参謀長

「ところで、なぜ、マリータ中将がいるのかね？」

福本

「『自分は副官だから』と言って聞かんもんですから連れて来ました」

山本長官

「ふーん」

宇垣参謀長

「ほーう」

福本

「…なにか？」

山本・宇垣

「「いや、別に」」

マリータ

「…綺麗な海ね」

そして、噂の本人は暢気に窓から海を見ている。  
と、その時…

機銃手

「4時の方向より双発多数！」

機長

「総員戦闘配置！長官！少し揺れますがお許しを！」

2式大艇が降下体勢に入り、6機の零戦は援護に入る。

福本

「機種はP38…数は16機…妥当な機体で来ましたね」

宇垣参謀長

「暢気な事を言うなあ」

福本

「そりゃ、自分でたてた作戦なので」

機銃手

「P38、接近！」

機長

「全機銃座、撃ち方始め！」

タタタタタタ！

トトトトトトトト！

7.7mm機銃4挺、20mm機銃5挺が弾幕を張る。  
零戦も必死に奮戦するが、機数が多く止められない。

宇垣参謀長

「大丈夫か？」

福本

「大丈夫ですよ。2式大艇は頑丈ですから」

その時…

ガン！ガン！ガン！

「ぐっ！」

山本長官

「！なんだ？」

福本

「見てきます！」

そう言うとシートベルトを外し、後部銃座に向かった。

福本

「おい！無事か？」

機銃手

「く…は、はい」

福本

「待て、傷を見る…ほ、良かった」

どうやら、跳弾が腕を掠めた様だ。

マリイダ

「大介!？」

福本

「マリイダ!機銃手の手当てを!」

機銃手

「!し、しかし、自分は…」

福本

「大丈夫!機銃手は替わる!」

P38部隊

「機銃は沈黙した!一気に叩け!」

無線に叫ぶのは史実同様、山本長官を襲ったミツチエル少佐。

4機のアタック隊が2式大艇に向かう。  
もちろん、山本長官と福本を殺る為だ。

ミツチエル少佐

「さあ、ヤマモトにフクモト…首を洗って待ってる！」

今や2人はアメリカの仇である。

ドドドドドドドド！

いきなり、沈黙した筈の後部銃座が再び発砲し始めた。

ミツチエル少佐

「なに？誰が撃っている？」

そして、よく見て見ると……

ミツチエル少佐

「あれは！アドミラルフクモト！」

標的の1人が機銃座についてぶっぱなしている。

ミツチエル少佐

「よし！アタック隊、チャンスだ！アドミラルフクモトを殺せ！」

『『『ラジャー！』『』』

ミツチエル少佐を含め4人共がこの瞬間、成功を確信した。  
だが、ミツチエル少佐が標準器を覗くと……

ミツチエル少佐



「!」

福本はしてやったり、とばかりにニヤリと笑っていた。  
この時、ミツチエル少佐は疑問を持った。  
なぜ、あんな読んで下さいとばかりの暗号を送ったのか？  
なぜ、日本軍の新型機が護衛していないのか？

そして、不安を感じ後ろを見ると……

2機の戦闘機がいた。

杉田

「紫音!いくよ!」

紫音

「ああ!我が双刀の切れ味、受けてみよ!」

ドドドドドドドドドド!

ドドドドドドドドドド!

ゴワーン!

ドガン!

ドワーン!

杉田機により2機、僚機は1機がたちまち落とされた。

最後の1機は上昇して逃げようとしたが、2式大艇の後部銃座に撃ち落とされた。

杉田

「長官！」

後部銃座を扱っていたのが福本と知り慌て敬礼する。すると、福本も返礼する。20機の紫電改が飛来し、16機いた襲撃隊は半数以上が撃墜され、慌て逃げて行った。

さて、なぜタイミング良く紫電改が飛来したとゆうと実は紫電改隊は2式大艇より1000メートル上空を付きつきりで飛行しており多少時間はかかったものの、対応できた。

では、なぜ紫電改隊が付きつきりだったのかとゆうと、このブーゲンビル島視察自体がアメリカを誘うための囮作戦だった。

これはルーズベルト大統領の焦りを手玉にとった作戦である。つまり、ルーズベルトを更に追い込む作戦であった。

福本

「ふうっ」

山本長官

「お疲れ様」

福本

「やめて下さい。それを言うなら、紫電改隊と護衛の零戦、この機の乗組員に言っして下さいよ」

山本長官

「はっはっは、そうだな。ところで、あの機かね？飛魂のいる機は？」

そう言いながら、1機の紫電改を指差す。

福本

「あ、はい。杉田庄一 一等飛曹機です…見えますか？」

山本長官

「うむ、はっきり見えている。いま、キャノピーの上に居るな」

福本

「あとで紫音になにか届けてやろう」

機長

「長官、ブーゲンビル島に着陸します」

次号へ

## 襲撃（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ポートモレスビー攻略戦 前編

6月12日 パプア湾ポートモレスビー付近

福田

「先輩！全艦艦砲戦準備完了！」

旗艦播磨の艦橋で、準備完了を待っていた福本達に完了の知らせがきた。

福本

「よし…全艦砲戦始め！」

遠地

「撃てー！」

ズガン！ズガン！ズガン！  
ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！  
ズガン！ズガン！ズガン！

戦艦10隻、重巡洋艦8隻、軽巡洋艦8隻、駆逐艦36隻の艦砲射撃＋空母9隻の航空機……とゆう膨大な戦力である。  
小島程度なら一瞬で吹き飛ばさるだろう。  
もちろん、これには理由がある。

ポートモレスビーはアメリカ軍により強化されていた。  
もちろん、第七艦隊の海上封鎖により、多くの輸送船が鹵獲され、旧型駆逐艦を改造した高速輸送艦や駆逐艦に大きな被害が出た。  
ちなみに、このポートモレスビー及びガダルカナル島で行われた緊

急輸送を日本海軍では『ワシントン急行』『ネズミ輸送』と呼ばれた。しかし、その封鎖前にかんりの物質が運び込まれたと思われ、これ程の戦力投入となった。

福本

「よし、一時射撃止め！」

遠地

「撃ち方止め！」

福本

「フェルデナントに連絡！上陸開始せよ！」

神谷

「了解！」

士官

「司令！旗艦より連絡！上陸開始です！」

フェルデナント

「わかった。全揚陸艦上陸開始！」

士官

「は！」

待機していた揚陸艦は海岸に殺到する。  
揚陸艦はランプを下ろし揚陸作業を始めた。  
その時、無事だった陣地から一斉に発砲し始めた。  
と言っても、ほとんど無事では無いから僅かな数しかなかったが…。  
だが……揚陸艦から出て来たのは歩兵では無く、戦車だった。

マチルダ

「総員！ポートモレスビーに突撃！皆…死なないでよ！」

車魂全員

「………了解！」「………」

大沢

「少尉。野口一家は勢揃いですね」

大島少尉

「ああ。今回は敵の前線本拠地を襲うからな…対空戦車、自走砲、最新型の指揮戦車や自走噴進砲も投入するそうだ」

大沢

「へえ…あ、突撃命令です！」

大島少尉

「よし！全車前進！」

ランプが下りたと同時に生き残っていた陣地から銃砲弾が飛んでく

る。

大島少尉

「全車発砲！射撃をしつつ突撃！」

必死に発砲する米軍だが、ほとんどが機関銃で、対戦車砲などの重火器はほとんど破壊されている。しかも、対戦車砲は37mm級しかない。それでも奮戦するが……

指揮官

「う、撃てー！」

ドン！

ガン！

兵士

「き、効いてねー！」

当たり前だ。

マチルダ戦車にしる、四式中戦車にしる、五式重戦車にしる、前面装甲は70mmを超えるものばかりだ。

いくら何でも37mm砲では到底装甲は貫通出来ない。六式重戦車に至っては問題外である。

指揮官

「じ、次弾装て……」



ドワーン！

そして、位置がバレた陣地は戦車砲の餌食になる。

これを免れても、駆逐艦の支援射撃か、後続の歩兵に制圧された。

ポートモレズビーには、40輻のM4戦車が配備されていた。

M4は艦砲射撃の前に穴を掘ってダックインしていたが偽装の甘さが祟り、零式水上観測機の管制を受けた戦艦群の艦砲射撃で半分が破壊された。

戦車長

「く、前進！」

ダックインしていた穴から出たM4戦車隊ではあるが、向かって来る相手はM4戦車より強力な物ばかりだ。

戦車長

「撃て！」

大島少尉

「撃ってきたな！大沢、左だ！砲手、撃て！」

大沢

「はい！」

砲手

「了解！」

ドン！

マチルダ戦車が左に曲がった瞬間、主砲が火を吹く！

ゴワーン！

マチルダ

「あら、アメリカの戦車はブリキですね」

全員

「……いや、君が強力過ぎただけだから」「……」

突っ込まれたマチルダであった。

各個撃破されるM4戦車を見た司令官は砲兵隊に援護射撃を行うよう命じた。

しかし、肝心の砲が艦砲射撃で被害を出していた。それでも、援護しようとして準備していたが……

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！……

砲兵隊指揮官

「なんだ？」

ヒューウ……

砲兵隊員

「…敵の支援射撃だ！」

砲兵隊指揮官

「た、退避！」

ドガン！ドガン！グワン！ドガン！グワン！ドガン！  
ドガン！グワン！グワン！

砲兵隊指揮官

「くそ！艦隊からの支援射撃か！」

砲兵隊員

「違います！艦隊は撃っていません！」

砲兵隊指揮官

「なに！じゃあ、奴らは短時間で重砲まで揚陸したのか！？」

美夏・里奈

「撃て！」

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

海岸に自走砲を揚陸・展開した一式半装軌自走砲と二式砲戦車が射撃を続ける。その後ろで、砲兵指揮官達が一台の戦車に集まる。今回初登場の一式情報管制指揮戦車である。

無線能力が強力な為、観測射撃に頼る砲兵隊にとっては頼もしい存在である。

「姉さん、観測情報」

美夏

「あ、ありがとう」

里奈

「あはは、優衣ちゃん、実戦だと人が変わるね」

美夏

「…里奈姉さんも少しはみらなってほしいわ」

里奈

「ん？」

美夏

「何でもない」

優衣は一式情報管制指揮戦車の車魂である。もちろん、野口博士設計・開発である。

海岸の仮設司令部

福本

「そつか…抵抗は弱いか」

フェルデナント

「はい。攻略に時間はかからないかと」

福本

「……………」

無言のままポートモレズビーを見る。

砲撃か、あるいは空爆による火災で上がった黒煙をじっと見つめる。

福本

「……………なあ……フェルデナント」

フェルデナント

「なんででしょうか？」

福本

「俺達は……………いつまでこんな無駄事をしなければならいんだろっかな？」

フェルデナント

「……………」

次号へ

**ポルトモレスビー攻略戦 前編（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ポートモレスビー攻略戦 後編

ポートモレスビーに上陸した第七艦隊特別陸戦隊。

基地の約七割を占領した時点で日が暮れた為、双方戦闘を中止、野営に入った。だが……

深夜 アメリカ軍陣地付近

闇の中を、匍匐前進で接近する影……石田大尉率いる一個分隊の夜襲隊である。基本的に日本陸海軍は夜襲や夜戦が得意だが、夜襲については日本陸軍は当時はトップクラスであった。

参加人員は古参兵から選出され、徹底した迷彩と擬装に装備品の雑音対策を施してから、少数部隊で行われる。

ちなみに、日本海軍で夜戦訓練が当たり前の様に、日本陸軍では夜襲訓練は当たり前なのだ。

さて、石田率いる夜襲隊はアメリカ軍陣地の20メートル程の所まで近付いた時、見張りの存在に気付いた。ただし、木に背を預け寝ていたが、厄介である。

すると、石田は部下を待機させると、静かに見張りに近づく。

そして、見張りが目を開けた瞬間、みぞおちに一発入れて気絶させる。

そして、再び匍匐前進で接近する。

石田

「もつそろそろだな」

蛍光塗料の針が示す時間を確認した石田が一言呟いた時、ポンと言  
う音が聞こえた。

ポーン！ポーン！ポーン！ポーン！ポーン！ポーン！  
後方の89式擲弾筒隊が支援攻撃を開始する。

石田

「今だ。突貫！」

いきなりの爆発音に混乱したアメリカ軍に、石田隊他夜襲隊が襲撃  
した。

突然の襲撃に、アメリカ軍全体が大混乱に陥り、指揮官の統率も効  
かなくなった。

夜襲隊は2・3分して引き上げたが、アメリカ軍の混乱が収まる事  
は無く、あちこちで同士討ちが多発した。

翌朝

司令官

「…なんと言つ事だ……」



昨夜の襲撃の被害報告を聞いた司令官はあまりの事に驚いた。M4戦車は4両のうち2両、死傷者は残存部隊の30%にのぼっている。

参謀

「はい。練度の低い新人兵が多かったものですから…」

司令官

「……参謀、君はどう思う？」

参謀

「……負けますな。この戦争は」

司令官

「そつだな…敵は日本では無い、真の敵は世界を乱す国……」

参謀

「……ソ連ですな」

司令官

「ああ…大統領は何時それを理解出来るのだろうか…」

士官

「司令官！参謀！大変です！」

その時、士官が慌て入って来た。

司令官

「どうした？何があった！？」

士官

「は！日本軍の軍使が2名来ております！」

福田

「本官が軍使の福田少将であります」

こう紹介すると、全員が驚いていた。

そりゃあ20歳そこそこで少将なんて、驚きもするだろう。

あとは…後ろのミーアが原因か？

司令官

「……何の用だね？」

福田

「司令官殿も解っていらしゃるはず。我が軍もこれ以上の犠牲は望みません…お願いします！」

ミーア

「お願いします！」

司令官

「一時間…一時間、時間をくれないか？」

福田

「…わかりました」

一時間後……  
日本軍陣地

フェルデナント

「大丈夫でしょうか？」

福本

「福田とミアアが？それとも交渉が？」

フェルデナント

「どちらもです」

福本

「大丈夫さ。いくらアメリカ軍でも、軍使を殺害する事はない……ルーズベルトじゃあるまいしな」

そう言うと、アメリカ軍陣地の方を向いた。  
そして……

福本

「……そろそろだな」

フェルデナント

「え？」

パシューーン……

アメリカ軍陣地から、赤い煙幕弾が放たれた。

福本

「交渉成功だ。行くぞ」

次号へ

**ポルトモレスビー攻略戦 後編（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ガダルカナル島制空戦

6月16日 ガダルカナル島付近の上空

第七艦隊の空母から飛び立った、240機以上の攻撃隊がアメリカ軍ガダルカナル島飛行場に向かっていった。

ウー！

ガダルカナル島の飛行場では、日本軍の接近をレーダーにて探知、駐留していた80機の戦闘機が発進して行った。

攻撃隊

紫音

「杉田、来たぞ」

杉田

「わかった。アリソン中佐！」

アリソン

『いつもながら、紫音は早いわね。全機警戒態勢！』

クレア

『いたわ、アリソン！11時の方向！逆ガル翼！F4Uコルセアもね！』

片山

『新型機、ござんなれ！…ですか？』

吉田

『新型機でも、何でもいい。俺達は攻撃隊の道を切り開くだけだ！』

アリソン

『そう言う事！紫電改はコルセアに、あとは各個に対応。全機、掛かれー！』

全員

『了解！』『』『』

F4Uコルセアに当たるは、紫電改エースの杉田機率いる紫電改隊である。

杉田

「紫音、行くよ！」

紫音

「ああ！我が双刀の切れ味…受けてみよ！」

F4Uコルセアは高速を生かし突っ込んで来る。

対し、紫電改も正対で突っ込む。

コルセアは最大速670km、紫電改は596kmだからみるみる

距離を詰めて行く。  
するとコルセアに動きがあった。  
衝突を恐れて、上昇あるいは下降に転じたのである。

杉田

「馬鹿め！訓練飛行でお茶を濁していたな！喰らえ！」

紫音

「はあ！」

杉田が引き金を引くのと同時に、紫音の双刀が斬撃を放つ！

ガガガガ！ガガガン！

バキッ！

20mm機銃を受けたコルセアは、両翼を切断され墜ちて行った。

実はコルセアに乗るパイロット達も殆どが、実戦経験が無かった。その為、コルセアの速度感覚が掴めず、空戦感覚も掴めなかった。もちろん、パイロット達の訓練時間が足りなかった事もあるのだが…。  
対し紫電改隊は、全員が二度以上の実戦経験をしており、ラバウル上空ではラバウル航空隊のベテランパイロット達に散々しごかれたパイロット達ばかりである。  
つまり…最初からある程度、勝負は決まっていたのである。



アリソン

「ん…何機か抜けたわね」

F4Fを撃墜したアリソンは、コルセア4機が、紫電改隊を突破していた。

アリソン

「クレア！吉田！片山！行くよ！」

クレア

『了解！』

吉田

『ござんなれ！』

片山

『承知！』

戦闘機四人衆と言われる4人が新型機に立ち向かう。相手は2000馬力の高速戦闘機。対し、零戦64型は1500馬力。しかし、スペックでは決まらないのが空戦である。

ダダダダダ！

コルセアが機銃を乱射しながら突っ込む。

アリソン

「もう！下手くそなのにじつじいのよ！」

そう言いながら、タイミングを計る。

ダダダダダ！

アリソン

「今！」

直ぐに操縦桿を動かす。

すると、零戦が消えた。

コルセアのパイロットは驚いたであろう。

ハッと後ろを振り向くと……

アリソン

「じつこい男は嫌われるの！喰らいなさい！」

ドドドドド！

ゴワーン！

クレア

「さあ、来なさい！」

急降下を続けるクレア機。それに必死に付いて来ようとするコルセア。

その内、海面に近付くとコルセアのパイロットは操縦桿を引いた。

「コルセアの高速では零戦より早く対応しないと、海面に激突であるが……」

クレア

「度胸が無さすぎ！」

ドドドドド！

コルセアの機体下から一撃離脱で銃撃する。

ゴワーン！

吉田

「さあさあ！付いて来い！」

上昇力の高い零戦がコルセアと上昇勝負を挑む。

グオオーン……

最初は付いて来れていたが、その内、コルセアの方が息切れしたのか、付いて来れなくなった。

吉田

「まったく…上昇力無さすぎなんだよ！」

ドドドドド！

バキッ！

ゴワーン！

片山

「さあーて！度胸試しといきますか！」

真っ正面で近付く零戦とコルセア。  
まさに、度胸試しである。

ダダダダダダダダダダ！  
ダダダダダダダダダダ！

コルセアが機銃を乱射するが、絶妙な操縦テクニックで避ける。

片山

「間合いが遠いぜ！喰らえ！」

トトトトト！

トトトトト！

ガガガガ！

ゴワーン！

1人1機のコルセアを撃墜するのに僅か1〜2分。  
やはり凄い戦闘機四人衆である。

アリソン

「さあ！ガダルカナルに向かうわよ！」

次号へ

## ガダルカナル島制空戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ガダルカナル島爆撃

ガダルカナル島飛行場

兵員が慌て機銃座や高射砲に配置に就く。

迎撃に失敗し、日本軍機の大群がやって来るのである。

兵士

「敵機来襲！」

指揮官

「撃てー！」

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

高射砲が放たれる。

大熊

「け、そんなしょぼしょぼ対空砲火で引くものか！」

ギューーン……

大熊率いる彗星艦爆隊が一気に急降下に入る。

大熊

「よし…そのまま…てえー！」

カチッ

ヒューウ……

チカッ！

ドガガガガガガガガガガガガガガガガ！

地上から約70メートルのところでききなり炸裂した。これが対空用3式弾を改造して爆弾にした、3式爆弾である。効果絶大で、あちこちで火災が発生、対空火器は沈黙する。

天山隊

大宮

「ち、飛行場は空っぽか」

確かに、戦闘機以外の機種がいる筈の飛行場には何も見当たらない。

大宮

「まあ、いい。全機用意」

後部座席で爆撃手が爆撃標準器を見ながら、指示を出す。

爆撃手

「ちよい右…もうちよい左……そのまま……よし、てえー！」



カチッ

ヒューウ……

ズガン！ズガン！ズバーン！ズバーン！ズバーン！ズバーン！

滑走路に250kg爆弾と60kg爆弾が炸裂する。

大宮

「……嫌な予感がするな……旗艦に電文。内容は……」

旗艦播磨艦橋

福田

「『ガダルカナル飛行場に敵機影見ず。警戒されたし』以上です」

福本

「……ただ空中退避した……にしては何故か不気味だな」

播磨

「事前偵察では戦闘機の他に、爆撃機がいましたよね？」

マリーダ

「ええ、B17とB25が合わせて60機程ね」

福本

「……念の為だ。全艦に警戒……」

神谷

「長官！神波から打電！『我、レーダーにて機影を捕捉。反応大、敵重爆と思われる』！」

福本

「言ってるそばでこれか…全艦対空戦闘！」

空母紅龍

土官

「総員対空戦闘用意完了！」

沖田

「まさか、敵機が来るとは思わなかったが…飛んで火に入る夏の虫だな」

ヴィル

「ええ、そうですね。しかし…」

沖田

「しかし？」

ヴィル

「…敵重爆が気になります…杞憂であればいいのですが…」

土官

「敵機視認！B17とB25です！……ん！？」

沖田

「どうした？」

士官

「は…敵重爆が低空飛行で接近します！」

沖田

「なに！？」

ヴィル

「……まさか、スキップボバミング！？」

士官

「スキップ……何ですか？」

ヴィル

「スキップボバミング！ほら、川で石投げすると跳ねちゃう事あるじゃないですか、あれですよ！」

沖田

「詳しい事は後にしよう。今は撃退するのが先だ！福本長官に連絡してくれ」

士官

「はい！」

迎撃の零戦と紫電改の大半はB25の迎撃を行った。

しかし、B17には僅かな紫電改が迎撃したにすぎない。それでも必死の攻撃で1機を落としたが、まだ9機もいる。もう一度！と攻撃しようとした紫電改…だが、直ぐ様退避してしまった。

いきなり退避した紫電改に疑問を抱きつつも、今がチャンスと突っ込むB17。

だが……それは間違いだった。

B17の標的であった紅龍と白龍の前に薩摩と土佐が立ち塞る。

そして、薩摩・土佐のケースメント副砲が火を吹いた！

薩摩・土佐の副砲は片方8門…それが2隻で16門…装填弾は3号信管付き3式弾である。

これを受けては堪らない。いくら頑丈な重爆といえ、これだけの攻撃を受ければ只では済まない。

実際、ある機は機体中を穴だらけに、ある機は機体をへし折られ、ある機は機体同士をぶつけ、波間に突っ込んでいった。

結局、アメリカ軍最後の攻撃もB17・25全滅に終わった。

次号へ

## ガダルカナル島爆撃（後書き）

明日より大学の為、更新速度が多少落ちます。あしからず。ご意見  
ご感想をお待ちしております。

## ガダルカナル攻略戦 前編（前書き）

そう言えば…P51ムスタングとかはどうした？って訊く人居ないよな…まあ、いいけど。あと、『ミリタリークラシック（MC）あくしず』の最新号を買っちゃいました！読者の中にもファンはいるかな？小説を書くときに重宝してますよ。

## ガダルカナル攻略戦 前編

6月17日 ガダルカナル島沖合い

福本

「よし。全艦砲戦始め！」

遠地

「てえー！」

ズガン！ズガン！ズガン！

ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！

ズガン！ズガン！ズガン！

主力艦艇はルンガ岬より東側を砲撃する。

しかし、陸戦隊はクルツ岬から上陸を行う。

もちろん、巡洋艦や駆逐艦の支援射撃の下でだが。

里奈

「何時も思っけど…」

瑠奈

「私達、日本軍で…」

玲奈

「本当に良かったと思います」

車魂全員

「……………その意見に全面的賛成」……………

大沢

「まあ…毎回あんなの見てたら…本当にそう思つよ」

フェルデナント

「どんな頑丈な戦車でも…海に浮かぶ戦艦と飛行機には敵わない…」

上陸地点から、ルンガ岬の艦砲射撃を見ていた陸戦隊の面々は全員、  
そう思つたに違いない。

フェルデナント

「さて、ここでポーとしている訳にはいけません。行きましょう」

ガダルカナル島守備隊地下司令部

司令官

「敵の艦砲射撃はまだ続いているのか？」

士官

「は、未だ止んでいません」

司令官

「……………まさか、ルンガ岬から上陸しないのか？」



士官

「しかし、飛行場を奪取するにはルンガ岬から向かった方が速いですよ」

司令官

「さて…敵の指揮官がそんな読みの浅い人間とは思えん。短距離ルートに我々が何か仕掛けていると思う筈だ」

士官

「そうなりますと、敵は何処から？」

司令官

「……クルツ岬からだろう。道があるし、尚且つ上陸しやすい」

士官

「…なら、どうしましょうか？あそこには余り兵力が…」

司令官

「ルンガ岬からパーシングを回す。それまで、新型で対応しよう」

ゴゴゴゴゴ！

里香

「突撃、突撃、突撃！全車突撃！最大速で突っ走れー！」

識名

「里香ちゃん、待ってよ」

由香里

「そつだよ、私の速度も考えて」

優衣

「お姉ちゃん、速すぎ」

（あ、ちなみに優衣は訓練や実戦で真面目だが、普段はゆるキャラ）

スチュワート

「まったく…我ながら凄い妹を持ったわ」

里奈・瑠奈・玲奈

「」「さあ！どんどん行こう！」「」

美夏

「……煽らないで下さい」

麻里

「お姉ちゃん凄いや！速い！」

（麻里は野口博士開発の一式自走噴進砲の車魂です）

鈴音

「……………（クスッ）」

（ちなみに鈴音は無口キャラです）

マチルダ

「これでは……止めようもありませんわ」

里香（一式軽駆逐戦車）を先頭に最大速で前進する。

そして、戦車の後ろからは兵員を乗せた、半装軌装甲車や日本製・アメリカ製のトラックが続く。

それはまるで、史実のドイツ軍による電撃戦のような速さ。

これを止める者は誰もいない。

（つて、誰もいないのだから当たり前か…）  
だが……

マチルダ・美夏

「！停車！！」

実戦経験豊富なマチルダと眼鏡を外せば視力が4〜5の美夏がいきなり叫ぶ！

大沢

「え！？」

フェルデナント

『停車！全車停車！』

大島少尉

「停車！」

大沢

「は、はい…」

キキーン！！

全車両、急ブレーキで止まる。

里香

「大沢ー！なんで止めたー！」

大沢

「え、だって命令だもん」

典型的な答えだ。

里香

「け、何があつたか知らねえが、私は…」

ヒュン！

ズガン！

全員

「『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』』」

いきなりの砲撃に驚く面々。

マチルダ

「…今までの戦車とは、砲の威力が違いますわ！」

フェルデナント

『新型か…気を付けろ！アメリカの事だ、なにを送り込んだか解らないぞ！』

マチルダ

「全車警戒！相手の正体…見極めますわよ！」

次号へ

## ガダルカナル攻略戦 前編（後書き）

マチルダ達の前に現れた戦車の正体とは！？次号をお楽しみに。  
ご意見感想をお待ちしております！

ガダルカナル島攻略戦 後編（前書き）

アメリカが投入した新型戦車の正体が明らかに！

## ガダルカナル島攻略戦 後編

その頃……アメリカ軍

戦車長

「ち、運の良い奴らだ…しかし、この新型は良いぞ」

そう言いながら、戦車内部を見回す戦車長。

この戦車の名は、M28重戦車『ブラック』。

ノグチシリーズ（野口博士開発）の六式重戦車に対抗する為、M26パーシングの改良発展型として開発した新型戦車である。

最大装甲は140mm、主砲は90mm80口径砲を搭載する戦車だ。

『ブラック』は『パーシング』3両と共にガダルカナル島に配備されていた。

本来なら、『ブラック』も『パーシング』も増配備が決まっていたのだが、日本海軍の海上封鎖により、輸送船全てがガダルカナル島手前で追いつ返されてしまったのだ。

この為、ガダルカナル島には『ブラック』1両、『パーシング』3両、M420両の機甲戦力しかいなかった。

戦車長

「まあ、こちらとしては、時間さえ稼げばそれでいい」

その頃…日本軍は…



美夏

「……はい、出来ました」

大沢

「へえー、絵が上手いね」

実は美夏は絵が得意なのだ。

美夏

「ありがとうございます」

フェルデナント

「うーむ…アメリカ軍もついに野口博士に対抗してきたな」

いきなりの砲撃で停止した陸戦隊は美夏に頼んで、見えた戦車を絵にしてもらっていた。

マチルダ

「しかし、ここに何時までも止まる訳にはまいりませんわ」

大島少尉

「だからといって、無理に突っ込めば大損害だぞ」

フェルデナント

「うーん…手詰まりだな…」

士官

「し、司令！た、大変です！」

フェルデナント

「どうした？」

士官

「は！石田大尉が……」

数分前……

石田

「おい。どうして前に進まない？」

陸戦隊兵

「は、敵の新型戦車が前にいて進めないそうです」

石田

「……そっか、ここは一本道だからな」

陸戦隊兵

「ですから、司令も困っている様です」

石田

「……よし！第6中隊、総員下車！」

陸戦隊兵

「……どうするんですか？」

石田

「ジャングルに入って迂回、奇襲を仕掛けるのだ」

陸戦隊兵

「…大丈夫ですか？」

石田

「大丈夫だ」

キャリー

「その話のつた！」

石田

「ん、キャリーか」

(ちなみに、石田も見えます)

キャリー

「マシンガンキャリバーならこれくらいのジャングルなんか何ともないよ。それに無反動砲なら足回り位は破壊できるし」

石田

「…つつ訳だ！総員下車しなくて良いぞ！第6中隊は付いて来い！」

そして、現在……

石田

「よし…戦車の回りに歩兵はそれほど居ないな…自走無反動砲とマシンガンキャリバーの機関銃は援護…総員突っ込め！」

軍刀を抜くと、石田を先頭に敵歩兵隊に突撃する！

ダダダダダダ！  
ダダダダダダ！

ズバーン！ズバーン！

パーン！パーン！パーン！

タタタタタ！

タタタタタ！

援護の為、重軽機関銃に無反動砲、それに陸戦隊兵の短機関銃や3  
8式歩兵銃を乱射する。

これに驚いたのが、『ブラック』の近くにいたアメリカ軍である。  
まさか、ジャングルから敵兵が来るとは思っていなかったのである。  
これには、アメリカ兵達が浮き足立つ。

そして、白兵戦になると日本軍は無類の強さを誇る！

石田

「敵兵を張り倒せ！戦車をぶん盗るぞ！」

そう言いつつ、自らも軍刀で敵兵を薙ぎ倒す。

これに『ブラック』の戦車長は困ってしまった。

実は『ブラック』の車載機関銃は車体の関係上、前にしか撃てない。  
だから、歩兵と戦うと多少分が悪い。

この為、戦おうにも機関銃は撃てないし、主砲は使え無い。  
とにかく拳銃で応戦しようとしたが時遅し。

2人の陸戦隊兵が砲塔に駆け上り、戦車長を引きずり出した。

そして、ハッチから煙幕弾を投げ込み、乗員を追い出して、戦車を  
無傷でぶん盗った！

石田

「よし！誰か、信号銃を撃て！」

大沢

「ん？あれは……信号弾ですよ！」

大島少尉

「なに！」

フェルデナント

「本当だ！石田大尉がやったのか！全車始動！突撃せよ！」

里香

「突撃、突撃、突撃！全車突撃！」

マチルダ

「今が好機ですわ！全車突撃せよ！」

識名

「一気に飛行場まで駆け抜けよう！」

結局、これによりアメリカ軍のかけなし防衛線が崩壊、陸戦隊は前進を再開した。

そして、途中で後続のM4・M26パーシングと遭遇したが、『ブラック』が鹵獲されているのを見て、さっさと白旗を上げた。

これを聞いたガダルカナル島守備隊もこれ以上の抵抗も意味無しと

みて、その日の内に降伏した。  
このによりアメリカは、南太平洋最後の拠点を失ったのであった。

次号へ

**ガダルカナル島攻略戦 後編（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

一息吐きまして……（前書き）

前号の新型戦車の『ブラック』は『ブラッグ』の間違いです！申し訳ありません！



一息吐きまして……

夕方 ガダルカナル島飛行場

大沢

「あれが今回鹵獲したM28『ブラッグ』、試験運用の為に派遣された様です。その隣がM26『パーシング』、そしてあれがM4A3E8…アメリカ兵の間では『イージーエイト』と呼ばれています。それが試験運用で1両、あとはM4A1です」

福本

「まあ、A1はおいとくとして…あとの3車種は野口博士の格好の研究材料だな」

大沢

「そうですね…そう言えば、第七艦隊は内地に帰還すると聞きました。が？」

福本

「本当だ。空母部隊に新型機を配備する事になってな…それに修理と改装の済んだアメリカ艦が第七艦隊に配備されるから、その受け取りも兼ねてな」

フェルデナント

「いよいよハワイですか？」

福本

「早いな、フェルデナント。そうだ。ま、その前にミッドウェイ島

や何やらが有るが…それほど手間はかからんだろっ」

フェルデナント

「そして、アメリカと講和…次に欧州…」

福本

「……最近、ヨーロッパでソ連軍は動いていない…トルコ方面もだ…俗に言う膠着状態だよ。イタリア軍はアフリカ方面でばこぼこだそうだが」

大沢

「欧州でも、アフリカでも、どこでもいいですよ。早くこの戦いが終わるならどこへでも行きますよ」

福本

「…そうだな」

航空機用待避壕内

福本

「お、早速やつてるな」

簡単に擬装網を被せた航空機用待避壕の入り口を開くと、車魂達（+見える人）で細やかな戦勝祝いが行われていた。

美夏

「！福本長官に…」

福本

「そのまま、そのまま。誰も敬礼なんてしないよ」

美夏

「はぁ…」

里香

「よお、福本！飲みに来たか？」

マチルダ

「こら！長官に向かって名字呼びなんて！」

福本

「いや、別に自分は…」

マチルダ

「いいえ！いけませんわ、長官！この子を甘やかすと…」

里香

「別に気にしねえって言うてんじゃん、マチ姉！」

マチルダ

「マチ姉…ってちゃんと名前で呼びなさい！」

里香

「うるせ〜！こうなりゃ、喧嘩だ！喧嘩！」

マチルダ

「挑むところですよ！」

遂には、姉妹喧嘩に発展してしまった。

福本

「はあ……」

溜め息を吐きながらちよつと空いたスペースに座る。

由香里

「と、止めなくていいんですか？」

福本

「生身の人間が止めに入って、止まるんだつたら止めるけど？」

残念ながら艦魂程ではないとはいえ、車魂同士の喧嘩に止めに入つたら、まず無事ではすまない。

「その方が懸命だよな」

いつの間にやら、隣で怪しげな薬品調合書物（英語）を読んでいる少女が1人。

福本

「……誰？」

スチュワート

「えーと……M4戦車の車魂、シャーマンです」

福本

「あ、なるほど」

どおりで、訳の解らん英語本を読んてる訳だ。

福本

「…で、何で居んの？」

キャリアー

「私達と対談しに来たんですが…そのまま宴会に参加しちゃって…」

福本

「……………納得」

もう彼女達との付き合いは長いから、大抵の事は納得出来てしまう。

シャーマン

「…ところで質問ですが」

福本

「は、はい？」

シャーマン

「ノストラダムスの大予言を信じますか？」

福本

「……………はあ？」

シャーマン

「いえ、ですからノストラダムスの大予言を信じますか？」

福本

「え、いや、予言自体信じて無いので…」

その後、一時間もシャーマンの質問攻めにありましたとさ……。

一時間後…

福本

「シャーマンが来てるって事は、ブラッグとパーシングの2人も来てるんじゃないの?」

識名

「えーと…最初は居たんですが…」

スチュワート

「…いつの間にか…転移して消えちゃいました」

福本

「そっか……シャーマン。2人が何処行ったか解る?」

シャーマン

「最初に戻る……2人はそこに居る」

識名

「……意味解らないです」

福本

「最初に戻る……あぁ、そう言う事ね」

スツと立ち上がり、待避壕から出て行った。

福本

「最初に戻る……やっぱり、ここか」

そこは、ブラッグとパーシングが置いてある場所。

福本

「おい、ブラッグ、パーシング。居るか？」

すると、一台のパーシングの陰から2人の少女が現れた。

「あ、あんた！」

「あ、えーと……陸軍広報に載ってた……」

容姿が似ているから、姉のパーシングと、妹のブラッグに間違いない。

パーシング

「そうだ！ブーゲンビル島で陸軍航空隊が殺し損ねた！」

ブラッグ

「そうそう、アドミラル・フクモト！」

福本

「……僕も有名になったね…嫌な意味でだけど」

パーシング

「あなたと話す気にはなれません！」

ブラッグ

「そうです！あなたはアメリカの敵！ノグチシリーズ共々何時か正義の刃の錆にしてやるわ！」

やはり…… 険悪だ。

福本

「……なるほど、正義か……その正義が間違っているとしたら？」

パーシング

「あり得ない！」

ブラッグ

「アメリカの正義が間違っているなど……戯言だ！」

福本

「…そうか……お休み」

次号へ



一息吐きまして……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。



「ほっほっほ。君や福本の活躍はわしも聞いておるぞ」

沖田

「ところで市丸教官。今は何を？」

市丸少将

「うむ。少将に昇格して、第七艦隊に配備されるパイロット達の訓練航空隊の司令をやっておる」

沖田

「そうなんですか？初耳です」

市丸少将

「まあ、そんな話はあとにしよう。早くパイロット達に新型機を見せてやらんとな」

沖田

「そうですね。お願いします」

市丸少将

「これが新たに配備される零戦の後継機『烈風』だ」

パイロット達

「『烈風！』」「『烈風！』」

史実であれば試作で終わった『烈風』であったが、この世界では違う。

烈風のスペックは……

### 烈風22型

|      |                            |
|------|----------------------------|
| 全幅   | 14 m                       |
| 全長   | 10,98 m                    |
| 全高   | 4,23 m                     |
| 全備重量 | 5660 kg                    |
| 速度   | 700 km/h                   |
| 上昇限度 | 12000 m                    |
| 航続距離 | 2500 m (増槽付き)              |
| エンジン | 三菱『竜』11型 (2200馬力×1) 排気タービン |
| 付き   |                            |

### 武装

25 mm機関銃×4基 (弾数350発×4)

500 kg爆弾×1 + 60 kg爆弾×2あるいは3式噴進弾×6

乗員 1名

備考 紫電改から発展させた自動空戦フラップを装備。

…といったところだ。

市丸少将

「この戦闘機は日本の航空技術と英独の技術支援…それに第6大陸からの資源…それらをたっぷり使った最高傑作だ!」

片山

「…これなら、世界のどんな戦闘機と戦っても負ける気がしませんよ!」

クレア

「格闘戦に、一撃離脱…案外何でもできそう」

アリソン

「そうね」

吉田

「少将！乗ってもよろしいですか！」

市丸少将

「無論だ。それにこれは第七艦隊に配備される物だからね。さて、艦攻隊と艦爆隊はこっちだ」

この後の細かい事は割愛するが、艦攻隊には流星艦攻が、艦爆隊には、ヨーロッパ派遣の事を考え、彗星35型が配備された。

スペックは……

彗星35型

全幅・全長・全高はそのまま。

全備重量 4600kg

速度 590km/h

上昇限度 10700m

航続距離 2560km

エンジン 『アツタ』52型（1760馬力×1）

## 武装

30mm機関銃×2基(250発×2)  
13mm機関銃×3基(600発×3)  
800kg爆弾×1+60kg爆弾×2あるいは3式噴進弾×6

乗員 2名

戦闘爆撃機仕様として完成。(と言っても爆撃機傾向)対地襲撃にはもってこいである。

## 施設内

沖田

「そういえば、紫電改も一度空母から降ろすと聞きましたが…」

市丸少将

「ああ。紫電改のエンジンは排気タービンを装備していないから、そこら辺をいじるんだそうだ」

ヴィル

「では、機動部隊の戦闘機は烈風と紫電改に統一されるんですね」

市丸少将

「うむ…情報部の情報では最近、アメリカ軍も2000馬力艦戦を配備したそうだ」

沖田

「！本当ですか？」

市丸少将

「確からしい……2人共、もうすぐ、日米戦は終わる。となると、第七艦隊はヨーロッパに派遣される筈だ……パイロット達を頼む」

沖田・ヴィル

「了解しました！」

次号へ

内地にて… 1 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。



内地にて… 2

その頃…呉軍港では…

整備兵1

「オーライ、オーライ」

整備兵2

「誰か、レンチ取って」

整備兵3

「おい。四式の転輪が1つ足りないぞ」

第七艦隊陸戦隊の整備兵達が戦車の整備・点検を行っていた。

大沢

「あれ？おい、パーシングとブラッグは？」

整備兵4

「知りませんよ」

大沢

「あれ、何処に行ったんだろう？」

マチルダ達と共に、パーシングやブラッグの車体を拭いていた大沢が、いつの間にかやら2人が居ないのに気付く。

美夏

「ほっとけばいいです。私達とろくに話そうとしないのに」

大沢

「そりゃ無いだろう。一応身柄は第七艦隊で預かってるんだし」

シャーマン

「不仲は悲劇を生む……フクモト長官は望まないよ」

大沢

「うお！びっくりした〜」

拭くのを手伝っているシャーマン（彼女の身柄も預かっている）のいきなり発言で、存在に気付いて驚く大沢。

大沢

「シャーマン、2人は何処に行ったか知ってる？」

シャーマン

「アメリカの艦魂が連れて行った」

大沢

「アメリカの？……ああ、なるほどね」

大沢の視線の先には、第七艦隊に配備されるアメリカ艦艇があった。

空母連龍（元レキシントン）艦内 レキシントンの部屋

「レキシントンさん、ポープです。お二人をお連れしました」

レキシントン  
連龍

「そう、入って」

ポープ

「はい。失礼します」

ポープが扉を開けると、テーブルの上には4つのティーセット。  
そして、椅子に座る、レキシントン、サラトガ、エンターの3人。

レキシントン  
連龍

「パーシングにブラッグね。あなた達の事は聞いてるわ」

パーシング

「はあ……」

ブラッグ

「……………」

ポープ

「では、失礼します」

レキシントン  
連龍

「ええ、ありがとうございます。さて、お茶にしましょう」

パーシング

「あの……私達に何の用ですか？」

エンター  
遠龍

「福本長官にあなた達の事を聞いてね」

ブラッグ

「…あのアメリカに刃向かう者から頼まれたんですね」

サラトガ

「いいえ。私達が勝手にやってるだけよ。それと彼はアメリカに刃向かっていない…日本を守る為に戦っているにすぎないわ」

パーシング

「……随分と彼の肩を持ちますね」

レキシントン  
連龍

「あら、私達は感じた事を言っているだけよ」

サラトガ

「それに、あなた達だって同じでしょう？あなた達はアメリカを守る為に戦っているでしょう？」

パーシング

「……」

ブラッグ

「……裏切り者」

エンター  
遠龍

「な、何ですって！」

ブラッグ

「そうじゃないですか！日本に下って、敵の戦列に加わって、日本艦として戦っているじゃないですか！」

エンター  
遠龍

「ううー、私の事ならまだましも、レキシントンさんやサラトガさんの事までー！」

サラトガ

「やめなさい！エンター！」

喧嘩腰のエンターの襟を掴んで引寄せらる。

レキシントン

「……確かに今は日本艦よ。けどね、裏切り者じゃないわ」

ブラッグ

「……どうだか」

パーシング

「ブラッグ！」

「裏切ったんじゃない。見切っただけ」

サラトガ

「ロング……」

ロングことロングアイランドが入って来た。

ロングアイランド

「ポープから、車魂の2人が来てるって聞いたから来た」

遠龍

「そ、そうなの」

すると、ロングアイランドは2人の方を向く。

ロングアイランド

「3人は違つかも知れない…けどね、私はアメリカを見切った」

ブラッグ

「な、なぜですか！アメリカは正義の為に…」

ロングアイランド

「その正義の為にどれだけの命が犠牲になったか解る?!正義、正義と簡単に言うけど、その為に囷にされてボロ雑巾の様に死んだ妹達の気持ち解る?...どうなのよ?!」

パーシング・ブラッグ

「...」

ロングアイランドの気迫に押されて何も言えない2人。

エンター  
遠龍

「私も姉と妹を失った…」

レキシントン  
連龍

「ロングとエンターの言う通り…アメリカ…いえ、ルーズベルトは日本を敵視した為に無理をしたわ…その結果がこれよ」

サラトガ

「あなたは生まれたばかりだから解らないかも知れないけど…  
そいゆうものなのよ、世の中って」

次号へ

内地にて… 2 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。



内地にて… 3

これまたその頃……

呉軍港 戦艦大和

山本長官

「そうか…厄介な2人を預かったな」

福本

「他人事だと思って……はあゝあ……」

山本長官

「はっはっは、まあ、その事は置いておこう。君を呼んだのは、実は陸軍から一個師団と一個連隊を第七艦隊陸戦隊との共同作戦を行うて欲しいと要請があつてな」

福本

「陸軍と…そうなりますと、ミッドウエー島・ハワイ島占領作戦です。ね。しかし、その後我々はヨーロッパに派遣されますが？」

山本長官

「いや、その部隊と共にヨーロッパに派遣する」

福本

「なんとまあ…大所帯になりますね…今度、陸軍に挨拶に行かないと」

山本長官

「いや、その必要は無い。向こうから来てくれたからな」

福本

「…はあ？」

コンコン

その時、誰かが長官室の扉をノックした。

山本長官

「来たな。入ってくれ」

入って来たのは、陸軍の軍服を着た2人。

山本長官

「紹介しよう。1人は君も知っているだろう、サブルクム帝国戦で派遣軍の1人として戦った宮崎繁三朗中将だ」

福本

「お久しぶりです。あの時はお世話になりました」

宮崎中将

「いやいや。君達の噂は陸軍でもよく聞くよ。特に陸戦隊はね」

山本長官

「もう1人は今度新設された戦車第54連隊の連隊長、ながの長野 ひかり光君だ」

長野

「長野 光です。階級は大佐。陸戦隊については戦車の集団運用で多大なる貢献をしてもらいました」

福本

「いえいえ。たまたまですよ、たまたま」

福本

「では、宮崎師団と長野連隊は第七艦隊が形式上、預かる…と、言う事ですね」

山本長官

「ああ。第七艦隊なら、輸送艦の質が良いからな」

福本

「…そう言う事ですか」

宮崎中将

「まあ、我々としても、世界最大の海上火力と世界最大の海上航空戦力を持つ艦隊の援護を受けられるなら、心強い限りです」

長野

「いくら陸上の最強兵器と言えども、戦艦の巨砲と航空機の前には、戦車は敵いませんから」

確かに、それは何度も第七艦隊がアメリカ力軍に対して実証している。

福本

「確かに、我が艦隊は最強ですが…陸上になるとその能力は限られます」

いくら世界最強の艦隊でも、陸上全部を確保する事は出来ない。

宮崎中将

「うむ。では、これからよろしく頼む」

福本

「こちらこそ。よろしく願います」

2人が帰った後……

福本

「うーん…」

山本長官

「どうした？」

福本

「いえ…連隊長の長野さんですが……似た様な感じをどっかで感じたような…?」

山本長官

「ほう…さて、日進と飲みに行くか」

福本

「…山本長官?」

次号へ

内地にて… 3 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

内地にて… 4 (前書き)

『内地にて… 1』で烈風のスペックデータの航続距離が2500 kmのkが抜けてました！すみません。





福田

「先輩。ヒューストン…箱根以下元アメリカ艦の乗組員の乗り組み、完了いたしました」

福本

「お、そうか。じゃあ、箱根に行かないとな」

福田

「既に内火艇の用意は出来ています。行きましょう」

内火艇

マリィダ

「なあ…大介？」

福本

「なに、マリィダ？」

マリィダ

「…疲れぬか？」

福本

「…疲れるよ」

実は福本の背中には、艦魂が付いているのだ。

福本

「ねえ…武蔵…いつまで背中に居るの？」

武蔵

「うーん？あともうちよっただけ…お兄ちゃんの中は気持ち良いの…」

福本

「はあ…」

武蔵は大和型戦艦の二番艦武蔵の艦魂で、普段はとっっても甘えん坊だ。

最初に会った時から福本を『お兄ちゃん』と呼び、最初では福本に抱っこさせている。  
ちなみに福本も周りもほぼほっとしている。

マリーダ

「…羨ましいな…」

福本

「ん、何か言った？」

マリーダ

「べ、別に…」

福本

「???.」

重巡洋艦箱根艦上  
ヒューズトン

福本

『やあ、新人諸君！今や日本にも世界にも知らぬ者はいない無敵の第七艦隊にようこそ！諸君達は少数選抜された幸運者である！』

第一主砲の前でマイクを使って長官挨拶中。

福本

『今や日米戦の戦局は我が方にある。しかし、世界はどうか？ヨーロッパではソ連と膠着状態にある。残念ながらソ連を倒さぬ限り平和は来ないだろう……。まあ、そんな話はまたの機会にしよう。今日は艦内探検でもして、ゆっくり休んで、明日からの慣熟訓練に励むように。以上だ』

艦長

「長官に、敬礼！」

艦長以下乗組員の一斉敬礼に、福本は返礼で返しつつ特設壇上から降りて行く。

しかし、世界はどうか？ヨーロッパではソ連と膠着状態にある。残念ながらソ連を倒さぬ限り平和は来ないだろう……。まあ、そんな話はまたの機会にしよう。今日は艦内探検でもして、ゆっくり休んで、明日からの慣熟訓練に励むように。以上だ』

艦長

「長官に、敬礼！」

艦長以下乗組員の一斉敬礼に、福本は返礼で返しつつ特設壇上から

降りて行く。

福本

「ん…？」

と、その時、改装の際、艦橋前に設置された40mm連装機銃座のところ、一瞬だが見えた少年水兵に何かを感じた。しかし、急いでいたため、そのまま内火艇に向かった。

内火艇

福本

「うーん…」

マリィダ

「どうしたの？」

福本

「いや…もしかしたら、箱根の乗組員の中に、見える奴がいるよう何だけど…」

マリィダ

「そう？根拠は？」

福本

「直感」

マリィダ

「…ニュータイプにでもなったの？」

武蔵

「マリーダお姉ちゃん。ガンダムじゃないんだから…」

マリーダ

「わ、解ってるわよ」

艦長以下乗組員の斉敬礼に、福本は返礼で返しつつ特設壇上から降りて行く。

福本

「ん…？」

と、その時、改装の際、艦橋前に設置された40mm連装機銃座のところ、一瞬だが見えた少年水兵に何かを感じた。しかし、急いでいたため、そのまま内火艇に向かった。

内火艇

福本

「うーん…」

マリーダ

「どうしたの？」

福本

「いや…もしかしたら、箱根の乗組員の中に、見える奴がいるよう何だけど…」

マリィダ

「そう？根拠は？」

福本

「直感」

マリィダ

「…ニュータイプにでもなったの？」

武蔵

「マリィダお姉ちゃん。ガンダムじゃないんだから…」

マリィダ

「わ、解ってるわよ」

ヒューストン艦上

少年水兵

「くうー！福本長官を生で初めて見たぜ！」

新城

「みんなそうだよ」

今や誰もが憧れる福本長官（女子の間ではマリィダ参謀長）自らの

歓迎は少年水兵達にとっては嬉しい限りである。

少年水兵

「さて、艦内探検でもするか。新城、お前は？」

新城

「ん、このまま、ここにいますよ」

少年水兵

「そっか。じゃあな」

新城

「あゝ、ちょうど良い日陰だ」

ヒューストン艦上

少年水兵

「くうー！福本長官を生で初めて見たぜ！」

新城

「みんなそうだよ」

今や誰もが憧れる福本長官（女子の間ではマリーダ参謀長）自らの歓迎は少年水兵達にとっては嬉しい限りである。

少年水兵

「さて、艦内探検でもするか。新城、お前は？」

新城

「ん、このまま、ここにいますよ」

少年水兵

「そっか。じゃあな」

新城

「あゝ、ちょうど良い日陰だ」

6月の日射しはそれほどきつくは無いが、7月に近いせいかわる。だから、ちょうど良い日陰は……

新城

「気持ちいい……寝ちやいそう……」

「……私の甲板で寝るなんて……いい度胸ね」

新城

「ふえ！？」

なんと、目の前に女性士官が立っていた。しかし……士官はどうもおかしい。

女性……どちらかと言うと少女……は金髪だった。

しかも、『私の甲板』？



新城

「きみ…もしかして艦魂？」

「…よく解ったわね。そうよ、私はヒューストン…今は箱根だけどね」

新城

「やっぱり」

ヒューストン  
箱根

「…まあ、今度から気を付けなさいよ」

新城

「え、行っちゃうの？」

ヒューストン  
箱根

「ええ、あなたが寝ようとしたから、止めただけよ」

新城

「あ、ちよ…」

引き止めようと、腕を掴んだら…

ヒューストン  
箱根

「きゃあ！」

ボフ！

勢い余つて、新城は自分の胸に引き寄ってしまった。

ヒューストン  
箱根

「お、お、お前は〜!!」

いつの間に出したのか、手には精神入魂棒。

新城

「な、な、な、なんで〜!!?」

実はヒューストン、あまり男性に興味がなかったので、「こう言ったシチュエーションは慣れて無い…なんて新城は知らない。今はとにかく……」

新城

「に、逃げろ〜!!」

ヒューストン  
箱根

「待ちなさい!!」

結局、新城は残りの半日を艦内中を逃げ回ったのは別の話…。

次号へ

内地にて… 4 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

内地にて… 5 (前書き)

登場人物

新城 泉 しんじょう いずみ

年齢 18歳

階級 一等兵

重巡洋艦箱根の第一機銃座(40mm連装機銃)の操作員。いたって真面目な青年水兵だが…それが災いする事も…。

箱根(元ヒューストン)

フィリピン攻略戦で鹵獲された重巡洋艦ヒューストンの艦魂。

現在は改装が終了し、重巡洋艦箱根として第七艦隊へ。

男性に対して免疫が少なく(ツーカー、無い)、抱こすものなら、顔を真っ赤にしながら暴れる。

新城に対しては、ツンデレ。

6月28日 横須賀飛行場

烈風の慣熟訓練をしていた第七艦隊のパイロット達。

片山

『いや、大柄ですけどなかなか素直な機体ですね』

吉田

『空戦フラップがあるからだろうな。しかし、まさに零戦の後継だな』

クレア

『排気タービンのお陰で高高度も飛行可能だしね』

アリソン

『後は…この邪魔な酸素マスクが無くなればね』

片山

『あはは、そうですね』

吉田

『そう言えば、聞きました？今度、レキシントン達に配備されるパイロット達の事』

クレア

『確か、男女関係無しで集めたって聞いたけど』

吉田

『ええ。また航空隊が大所帯になるって、沖田司令が言ってましたよ』

アリソン

『福本長官なんかもっと大変ね……よく体が保つわ』

片山

『ま、長官は18歳で将官になりましたから、苦労慣れしてるんでしょ』

吉田

『そうだな』

……とまあ、のんびりした飛行が続く。

クレア

『…あれ？』

アリソン

『どうしたの？』

クレア

『いえ…さっきBf109が見えた様な気が…』

片山

『…クレアさん、メッサーシュミットが日本の空を飛んでる訳無い

でしょう』

クレア

『え、だって…』

吉田

『隣に居る奴か？』

クレア・片山

『『え？』』

なんと、いつの間にやらメッサーシュミット……では無く、陸軍の3式戦闘機『飛燕』が並んで飛んでいた。

アリソン

『あら。なんで陸軍の戦闘機がここに居るの？』

片山

『…今思い出したんですけど…整備兵が、飛燕の改良型が横須賀に来るとか言ってた様な…』

吉田

『それでか』

『こちら、陸軍の荒時義次少佐です。海軍さんですか？』

アリソン

『あ、はい。第七艦隊空母戦隊所属のアリソン中佐です』

『こちら、陸軍の荒時義次少佐です。海軍さんですか？』

アリソン

「あ、はい。第七艦隊空母戦隊所属のアリソン中佐です」

荒時少佐

『第七艦隊ですか！お噂はかねがね…慣熟訓練中ですか？』

アリソン

「はい。そちらは？」

荒時少佐

『テスト飛行です。水戸の飛行場から飛んで来ました。それですね…』

アリソン

「はい？」

荒時少佐

『模擬空戦をやりませんか？新型機同士、一戦ほど』

アリソン

「…わかりました。では一戦お願いします！」

地上では……



ヴィル

「た、た、た、大変で〜す!!」

沖田

「どうした？」

扉を蹴破らん限りに飛び込んで来たヴィルを、沖田は普通に迎えた。

ヴィル

「あ、アリソン達が、ひ、飛燕と模擬空戦を…」

沖田

「ああ、その事か。別にかまわないよ」

ヴィル

「の、暢気ですね〜」

沖田

「あ、そうだ、紹介しよう。川崎航空機の土井武夫技師だ」

土井技師

「やあ、こんにちは」

ヴィル

「…いつの間にか、話についてたんですね」

沖田

「そう言う事です。さあ、見に行きましょう!」

尾崎

「…どうなってるの?」

助手を引き連れ、横須賀飛行場に來た尾崎御一行。

尾崎の目の前には、陸海の整備兵やパイロット達が騒いでいる。

その時、見知った顔が見えた。

尾崎

「ヴィルクくん、沖田さくん、どうしたんですか?」

ヴィル

「あ、尾崎さん。取材ですか?」

尾崎

「ええ、で、皆さんどうしたんですか?」

沖田

「いや、陸軍の飛燕と烈風が戦ってまして…」

尾崎

「…うそ!スクープじゃない!助手!八ミリ!カメラ、カメラ!」

助手

「は、はい!」

慌て八ミリカメラを回す助手。

尾崎

「さあ!シャッターチャンスを狙うわよ!」

ウイル

「…燃えてますよ」

沖田

「気合いだな」

陸軍整備兵

「負けるな、飛燕！」

海軍整備兵

「そこだ！烈風！」

パイロット

「負けないで下さいよ！中佐達！」

……結局、飛燕4機・烈風4機は双方燃料がギリギリになり引き分けになった。その日の夕食は、荒時少佐・土井技師を初めパイロットや整備兵達を交えて大宴会になった。

ちなみに、尾崎達が撮った映像と写真は検閲で引っ掛かってしまった……が、烈風と飛燕が活躍しだすと解禁され、全日本国民が知る事となる。

次号へ

内地にて… 5 (後書き)

### 登場兵器

3式戦闘機『飛燕』2型

全長 9,16 m

全幅 12 m

全高 3,75 m

上昇限度 11000 m

速度 688 km/h

エンジン 川崎ハ-150 (1760馬力×1)

(彗星35型の『アツタ』エンジンの陸軍版)

航続距離 1900 km (増槽付き)

### 武装

20 mm機銃×2基 (400発×2)

13 mm機銃×2基 (600発×2)

250 kg爆弾×2

乗員 一名

補講 排気タービン付き

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 輸送船団護衛戦

7月3日 日本近海

搭乗員

「機長！KMX（3式1号磁気探知機）に反応有り！」

機長

「よし。僚機に連絡。マーキング用意」

3機の対潜哨戒機『東海』が見事な編隊飛行をしつつ、潜水艦が潜む付近にマーキングする。

機長

「あの真ん中だな…逃がしはしないぜ。対潜爆雷投下用意！」

搭乗員

「用意よろし」

機長

「てえー！」

カチッ

バシャーン！バシャーン！

ドガン！ドガン！

機長

「戦果確認」

搭乗員

「……やりました！油と…浮揚物を確認！撃沈です！」

機長

「よし！基地と付近の輸送船団に連絡だ」

通信員

「はい！」

数々の戦いで敗れたアメリカ海軍は何としてでも、日本にダメージを与えたかった。

そこで実施したのがドイツがイギリスにやった、通商路破壊である。いくら本気を出せなくても数は出せるアメリカは、日本の通商路に多数のガトー級や新S級などの潜水艦を派遣した。しかし、日本海軍が一枚上手だった。

サブム戦で鹵獲した潜水艦を教育材料に提供し、聴音員を徹底的に教育した。なおかつ、イギリス・ドイツから通商路破壊・対策の資料を提供してもらい、将校教育に取り込んだ。

これを真っ先に受け入れたのが神戸海軍士官学校である。比較的最近に創立され、なおかつ、艦隊決戦などに余り縛られない、自由で柔軟な校風の生んだ結果である。

そして、サブム戦時に設立した護衛戦隊は今や、護衛空母10隻、松型駆逐艦80隻、海防艦120隻を持つ部隊へと発展していた。もちろん、護衛空母・松型・海防艦の量産は続けられている。

また、東海だけでなく、96式陸攻や97式艦攻に磁気探知機などの各機材を搭載している。

対潜兵器、磁気探知機の開発・改良も進められている。

特に3式1号磁気探知機は日本海軍が東海と共に世界に先駆けて先鞭をつけた秘密兵器である。

今まで目視と聴音のみで探していた潜水艦を、磁気の変化で捕捉でき、史実ではこれを装備した東海が10日間で、5〜7隻の潜水艦を捕捉・撃沈あるいは撃破している。

これら兵器・機材の早期開発により史実以上に船団護衛に成果を上げていた。

## ヒ65輸送船団

「大鷹さ〜ん、雲鷹さ〜ん、那覇空の東海隊から連絡です」

大鷹の防空指揮所で、テーブルの上に羊羹と抹茶でお茶を楽しんでいる大鷹と雲鷹。

そこに電文を持って来た松。

大鷹

「ありがとう」

雲鷹

「松ちゃんも羊羹どう?」

松

「食べます」



…いたって暢気だ。

大鷹

「……この近くでアメリカ潜水艦を撃沈したって」

雲鷹

「襲撃も無駄だと思っけどね。この周りも対潜哨戒機が随分飛んでるから、出来るはず無いと思っけど」

松

「先月だけでも20隻以上が発見されて、その半数が撃沈破してますからね」

大鷹

「まあ、これだけ嚴重じゃあねえ……」

今回のヒ65船団は南方から20隻の輸送船を2隻の護衛空母と16隻の松型駆逐艦、32隻の海防艦が護衛していた。まあ、こんな護衛に喧嘩を売る馬鹿なんて普通は……

水兵1

「！9時の方向に潜望鏡！」

3人

「「「え！？」」」

水兵2

「5時の方向より雷跡！」

水兵3

「1時の方向！潜望鏡！」

雲鷹

「しまった！隙を突かれた！」

大鷹

「対潜戦闘！」

松

「は、はい！」

松艦橋

艦長

「出力最大！取り舵3分の1！」

水兵

「よーそろ！」

艦長

「聴音手！位置は？」

聴音手

「……前方500mに推進音！」

艦長

「よし！新型爆雷用意！」

水雷長

「用意よろし！」

松型は最大速度25ノットだが、潜水艦に対して脅威であることは間違いない。

聴音手

「敵潜水艦、射程内！」

艦長

「新型爆雷、てえー！」

パシユ！パシユ！パシユ！

新型爆雷こと、史実で日本潜水艦を散々困らせたヘッジホッグが投射される。

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

艦長

「どうだ！？」

聴音手

「…推進音、消えました」

水兵

「重油と浮揚物を確認！撃沈です！」

対潜警戒中の97式艦攻が搭乗員が悔しがる。

機長

「畜生！隙を突かれたか！探知機に反応は？！」

搭乗員

「……いました！直ぐそこです！」

機長

「よし！行くぞ！」

ギューーン……

97艦攻が降下する。

搭乗員

「探知機、反応大！」

機長

「よし……喰らえ！」

カチッ

ヒューウ……

ザバーン！ザバーン！バシャーン！バシャーン！バシャーン！バシャーン！バシャーン！

搭載していた250kg爆雷×2 + 60kg爆雷×6が投下される。

ゴワーン！ゴワーン！

搭乗員

「やりました！撃沈です！」

水兵

「1時の方向より雷跡！」

艦長

「付近の輸送船に連絡！」

アメリカ軍の魚雷は空気魚雷は性能的には酸素魚雷に劣るが、輸送船には脅威だ。（まあ、最新型の輸送船ばかりなのだが）

水兵

「わあー！魚雷一本接近！」

艦長

「く、衝撃に備えろ！」

ガアーン！

大鷹

「…………あれ？不発？」

……史実でも通商路破壊初期はアメリカ軍の魚雷は故障不具合は当たり前前のしの物でやっと思える様になったのは1943年の事だった。まあ、この世界では開戦が遅れているから余計時間がかかるだろうが……。

雲鷹

「姉さん！大丈夫？」

大鷹

「うん…大丈夫」

結局、最後に雷撃した潜水艦も駆け付けた松型駆逐艦に撃沈された。この後も潜水艦による通商路破壊が続いたが、打撃を与える事は出来ずに講和を迎えるのであった。

次号へ

**輸送船団護衛戦（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 平凡な日（前書き）

### 登場人物紹介

#### 大鷹

護衛部隊所属の軽空母。

第一護衛部隊（空母2、松型駆逐艦16、海防艦32）の司令官。  
元が客船改造空母の為、この任務に誇りを持っている。  
普段はおっとり系お姉さん。

#### 雲鷹

護衛部隊所属の軽空母。

第一護衛部隊の副司令官。大鷹同様客船改造空母で姉妹でもある。  
常にお姉さんのサポートに回っている。

#### 松

松型駆逐艦の一番艦で、護衛部隊設立からの古参の1人。

大鷹・雲鷹とは仲良し。

緊急告知！

詳しい事は後書きにて！



## 平凡な日

7月4日 呉軍港

戦艦播磨艦内長官室

福本

「うっっん、流石にデスクワークは疲れるな」

静かな艦内で1人黙々と仕事をする福本。

因みに、第七艦隊全艦（慣熟訓練中の元アメリカ艦を除く）の乗組員全員に1週間の休暇を出している。

播磨

「そうですね。デスクワークは嫌いじゃないんですけど、続くとね」

同じ様にデスクワークをしていた播磨が手を止めて伸びをしながら応える。

福本

「ま、早くこんな物終らせないと、体が鈍っちゃうよ」

そして、デスクワーク再開。

播磨

「...ところで、長官。マリーダさんと何時結婚するんですか？」

ゴン!

福本

「W / What!？」

余りの事に、机に頭をぶつけた。

播磨

「え、まだしないんですか？」

福本

「あ、当たり前でしょう！結婚するなら戦争終わってから！」

播磨

「マリィダさんの結婚は否定しないんですね」

福本

「……………まだ告白すらしてないけどな」

播磨

「へえー…ところでマリィダさんは？」

福本

「朝早く起きて、出掛けたよ」

海龍

「ぶつ、ここまで来れば大丈夫」

福本

「何が大丈夫なんだ？」

いきなり転移して来た海龍にデスクワークをしながらつつこむ福本。

海龍

「わあ！居たの？」

福本

「居たよ…で、またコスプレの事で神龍に追い掛け回されてるのか？」

最近、アメリカ艦の艦魂や車魂、野口一家が入って来たりして、新しい子が来ると決まってコスプレ衣装を持って、その子の下へ急行してしまう。

まあ、どこぞの女色の2人よりはマシだとは思うが。

海龍

「そ、そんな事無いよ〜」

じゃあ、小脇に抱えている『月刊 兵器乙女のコスプレ』ってのはいったい何なんでしょうかね？

播磨

「海龍さん……見えています」

海龍

「へ？……うわ〜！違う、違う！これはね……」

福本

「隠しても無駄だぞ。黙つといてやるから、さっさと読むなり何なりとしなさい」

人の趣味に文句をつけるつもりは無いが、余りにも酷い時は考慮する、それが福本の方針の1つだ。

福本

「まつたく…ん？」

たまたま見えたページ…多分、読者投稿欄だろう…に見慣れた人がちらほら…特に……

福本

「か、か、加賀さん!!？」

投稿欄の一角に、普通にメイド服を着て、普通にお喋りしている加賀の姿が…。しかも……金賞!!

播磨

「あ、あのー…海龍さん、これは？」

海龍

「え、あ！これ、私が投稿したのだ〜 しかも、金賞！」

この瞬間、福本はこう思った。

彼女をヨーロッパに連れて行って良いものかと……。

福本

「くう、疲れた…何をするか？」

そう言いつつ、艦後部の航空機運用甲板をぶらつく。  
本来なら、誰もいないが…

福本

「やあ、吉野じゃないか。何をしているんだ？」

「ひゃあ！」

いきなり声をかけられた少女…吉野…はびっくりして双眼鏡を空中にほおってしまいが…福本がキヤツチ。

福本

「まったく…また、伊吹の事を見ていたな」

吉野

「あははは…」

吉野は軽巡洋艦時代の最上型の改良型として開発された、筑後型軽巡洋艦の二番艦である。

彼女は4姉妹の二番目のだが…なぜか、伊吹に一目惚れして、時々ストーリー紛いの事をしている。

まあ、伊吹より後で生まれたからかも知れないが…。

福本

「はあ…普通に観れば良いものを…」

なぜか、こう言う奥手な人が多い…山城さんとか…。さて、その伊吹と山城は紅龍の飛行甲板で鍛練中だ。

吉野

「きゃ〜！伊吹様、素敵です〜！」

福本

「…追っかけかよ…」

まったく…どうにかならないものか……。

長官私室

福本

「あゝ、目が重い感じがする……デスクワークのせいだな」

そう言つと、ベッドに寝っ転がる。

福本

「……………結婚か…」

結婚するとしたら……………やっぱり、マリーダだよ……………本人が了解するかは別だけど……………すると…いつも、台所に立って朝食作ってくれるんだろっな〜…弁当も……………あゝ、未来が見える……………その台所に立って、エプロン着て…何つくってるんだろっ？…目茶苦茶リアルに……………ん!?

ガバツ！

福本

「あれ…やっぱり…夢だよな…」

マリイダ

「あら、起きたの？」

いつの間に入って来たのかマリイダが帰っていた。

福本

「あ、お、お帰り。どこ行ってたの？」

マリイダ

「買い物だ」

福本

「買い物…」

マリイダ

「ええ。それでお茶にしようと思って来たの」

福本

「そうなの」

マリイダ

「うん。そのかわり、みんなとお茶飲む為に手伝ってね」

福本

「はいはい」

次号へ



## 平凡な日（後書き）

緊急告知ですが……伊勢型戦艦は航空戦艦として有名です。その伊勢型戦艦二隻の改装案に困っております。

ですので、読者の方々よりどちらが良いか投票を行いたいと思います。

改装案ですが……

### 伊勢対空強化型

船体全長を延長し、機関を強化、対空火器を増強し、最強の動く対空艦に改装する。

### 伊勢航空・火力強化型

船体全長・全幅を延長、機関を強化、主砲を36cm三連装砲塔に取り換え、航空運用能力を強化する為、Vの字飛行甲板を採用し本格的に艦上機運用を目指す。  
カタパルトはもちろん設置。

…とゆうものです。

このどちらかに一票を入れて頂き、感想にお書き下さい。  
もし、よろしければご意見もお書き下さい！

ご意見ご感想、投票をお待ちしております！

## 第二機動艦隊設立！（前書き）

登場人物

吉野

筑後型軽巡洋艦の二番艦の艦魂。  
伊吹に激ラブで、時としてストーリーカー紛いの事をする事も…。

武蔵

言わずと知られる、大和型戦艦の二番艦の艦魂。  
性格は俗に言う、妹タイプ。  
福本の事を『お兄ちゃん』と呼び、いつも引っ付いている。  
引っ付かれている福本本人は言っても無駄なので、放置気味。

## 第二機動艦隊設立！

7月7日 呉軍港

慣熟と錬成が完了した艦艇が集結し、第二機動艦隊が編成された。

赤城

「ねえ、加賀？」

加賀

「なに、赤城？」

赤城

「…なんで目隠ししなきゃならないの？」

加賀

「うーん、ある人からの指示だから」

神波

「加賀さん！準備万端ですよー！」

加賀

「わかったわ。赤城、あともう少しだけそうしててね？」

赤城

「あ、はい」

翔鶴

「加賀さん！」

瑞鶴

「お連れしましたよ〜！」

加賀

「ありがとうございます。さ、目隠しとってもいいわよ、赤城」

赤城

「は、はい」

目隠しを外す…が、直ぐに誰かが手で目隠しをする。

加賀

「だーれだ？」

赤城

「もう、手で目隠ししても解りますよ、加賀さん」

「残念でした…赤城」

赤城

「え？？」

振り向くと……

赤城

「あ、あ、天城姉さん！」

珊瑚海海戦で赤城を追い返しに来た天城だが……死んでる筈では？

神童

「それはね」

赤城

「神童さん！ いったい……？」

神童

「実はね、雲龍型空母の二番艦は『天城』と決まっていたの。だから、天城さんを翔鶴と瑞鶴、神波、私の4人で呼んで来たの」

赤城

「ほ、本当ですか！」

加賀

「……本当はね、本人は黙っててくれ、て言ってるんだけど……これは福本君の提案なの」

赤城

「……福本君が？」

天城

「ええ、福本君は何もしていないからって言うてるけど……巡洋戦艦として掲げられる筈だった軍艦旗を探して、私の受け皿を見付けてくれたのも福本君だしね」

赤城

「そ、そうなんだ……お姉ちゃん……う、うわーん！（；'；）」

天城

「まあまあ…大きくなった割には、まだ泣き虫なのね」

赤城

「だ、だつで、ず、ずっと、あ、会いだがつだつんだも〜ん」

天城

「うふふ、ごめんね、赤城。そして、ありがとう、加賀」

加賀

「私は何もしていません。お礼を言うのなら、彼女達と福本君に言うて下さい」

福本

「加賀さん…余計な事を…」

こんな事を言いつつ、赤城が泣きなが天城にらすがり付く光景を見て、福本も嬉しくなる。

福本

「…ま、いいか」

伊勢

「何がいいんだ？」

福本

「伊勢さん」

普通は軍服の多い艦魂の中で、伊勢は神話に出てくる女神様衣装。

(伊勢神宮だから…かも?)

伊勢

「まったく、君と作者のせいで私と日向を航空戦艦に改造されたのだぞ」

史実同様、航空戦艦に改造(日向の砲塔爆発事故は起きて無い)された伊勢と日向は第二機動艦隊に配備された。

福本

「まあ…改装案出したのは自分ですが…読者が望んだ結果でもありますし」

伊勢

「…最近、どこぞの国のへり空母の…二番艦が『ひゅうが』と『いせ』になったからか?」

福本

「…その影響もあるかと…」

伊勢

「まあ、いい。今さらじたばたしたところで意味は無いしな」

福本

「そうですね」

ちなみに、第二機動艦隊の編成は……

空母 大鳳（旗艦） 飛鷹 隼鷹 龍驤 雲龍 天城 葛城 笠置  
千歳 千代田

航空戦艦 伊勢 日向

戦艦 扶桑 山城

重巡洋艦 妙高 那智 足柄 羽黒

軽巡洋艦 大淀 仁淀 阿賀野 能代 矢矧 酒匂

駆逐艦 32隻

艦隊司令長官  
角田覚治中将

戦艦隊司令  
西村祥治少将

航空戦艦隊司令  
松田千秋少将

水雷戦隊司令（阿賀野）  
木村昌福少将

…と、言ったところだ。



夕方……

福本

「…お前らなあ…」

大和の会議室に山本長官やマリイダ達と行くと、既に新人歓迎会は始まっていた。

遠地

「…和泉あたりが辛抱に耐えきれなくて飲んだな」

福本

「はあ、まったく…まだ主役が1人来て無いだろう」

武蔵

「…お兄ちゃん、殺っちゃていい？」

いつの間にやら、武蔵が軍刀抜いてるし！

マリイダ

「ダメよ、武蔵」

大和

「お姉ちゃんが許しません」

武蔵

「むう…」

まあ、武蔵がこんな事をする理由を知ってるだけに…つついっ笑っ

てしまう。

そこへ……

春日・日進・畝傍

「「「あんた達！何主役をほつといて、勝手に飲んでるの！」「」

現役最古参三人組が飲んでいた人間を取り抑え始めた。  
まさに現行犯で逮捕だな。

福本

「すみません、お三方。今から仕切り直しますので」

畝傍

「ん、ああ、気にしなくていい。仕切り直して」

福本

「あー、ゴホン。それでは、第二機動艦隊設立と……」

その時、光と共に少女が福本の隣に転移してきた。

福本

「戦艦信濃の艦魂、信濃の編入を祝って、乾杯！」

全員

「「「「「「「「「「「「「「乾杯！！」「」」」」」」」」」」」」」

あとは……無礼講の放置状態。

福本

「まったく…山本長官も人が悪いや」

本来音頭を撰る筈の山本長官は日進達と飲んでいた。その為…この場で二番目に階級の高い、福本にお鉢が回って来たと言う訳だ。

信濃

「すみません…わざわざ、私の為に…」

福本

「あゝ、気にしない気にしない」

武蔵が妹なら…信濃は気を使うタイプ…か？

マリーダ

「そうそう、今夜は無礼講よ」

遠地

「あっはっは、そうそう！」

福本

「…あとあと保つかない？」

山本長官

「諸君。今より重大発表を行う」

つい先程まで、日進達と飲んでいた、山本長官がいきなり（小さいながらも）壇上に上がり、真面目な話を始めた。

山本長官

「実はだ、次期作戦の日取りが決まった」

全員の目の色が真剣なものに変わった。

山本長官

「次期作戦名は『電号作戦』。作戦目的はミッドウェー島、ハワイ諸島を電撃的に占領・確保。作戦開始は一ヶ月後だ」

全員

「「「「「「「「「「「「「「「「」

いよいよ決戦である！

まさに日本の運命が決まる…講和の道を切り開く為の戦いである！

新城

「しかし、なぜ一ヶ月の間を明けるのですか？」

艦魂が見えるからこそ参加している新城。  
まず、平の海兵が質問できる訳無い。

山本長官

「うむ、その一ヶ月の間、各地に派遣した通信謀略隊に偽通信をして、敵を出来るだけ攪乱してもらう。そして、第二機動艦隊を使いダッチハーバー付近をフェイント攻撃をしてもらう」

神谷

「つまり、準備期間ですね」

山本長官

「そつだ。それまで、第七艦隊はトラック諸島へ。第一艦隊・第一機動艦隊は待機。第二機動艦隊は数日後ダツチハーバーへ…それぞれ出撃・待機。そして、期日にミッドウェー島を占領する」

沖田

「そして、ハワイ諸島…次は、講和…」

山本長官

「ああ。諸君、次の作戦の成否が日本の運命を決める…明日の日本の為に…皆の奮闘を期待する！」

全員

「了解！！」「」「」「」「」「」「」「」「」

次号へ

## 第二機動艦隊設立！（後書き）

投票の結果、航空・火力強化型に決まりました。投票ありがとうございます。  
ざいます。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ダッチハーバー空襲（前書き）

登場人物

天城

雲龍型空母の二番艦の艦魂だが、元は天城型巡洋戦艦の一番艦の艦魂で、赤城のお姉さん。  
関東大震災の被害で廃艦解体にされた際、お亡くなりになっていたが……福本の提案により、雲龍型空母の二番艦の艦魂として、蘇らせた。

信濃

大和型戦艦三番艦の艦魂。史実では空母に改装、完成（大部分が未完成）数日後に撃沈された不運の艦だったが、この世界では戦艦として完成した。  
優秀だが、その為か人に気を使うタイプである。

## ダッチハーバー空襲

7月20日 ダッチハーバー付近の海域

荒れ模様の中、猛将角田覚治中将率いる第二機動艦隊はダッチハーバーに進路をとっていた。

旗艦大鳳

角田中将

「荒れるな…」

冬よりはマシかも知れないが、航空攻撃を制限される事は間違いない。

まあ、第四艦隊事件を経験した日本海軍としては、艦隊行動はなんとかなるのだが…。

角田中将

「もう、そろそろパイロット達のしびれが切れる頃だからな……晴れてくれんかな…」

軽巡洋艦阿賀野

木村少将

「…晴れるな」



阿賀野

「え？」

木村少将の隣で前を見ていた阿賀野が反応した。

阿賀野

「わ、わかるんですか？」

木村少将

「勘だよ、勘。水雷屋の人間はこうゆう時に勘が働くんだよ…特にビリの奴はな」

そう言うと自慢の髭をしごきながら豪快に笑った。

そして、本当に晴れてきた。

木村少将

「角田長官に電文。これを逃せば攻撃は出来ず。攻撃隊発進を進言す」

果たして……数分後、満を持していた攻撃隊が空母より発艦した。

ダッチハーバー基地

ウー！

『日本軍機来襲！総員戦闘用意！』

パイロット1

「なんだ？ジャップの奴らここをハワイと間違えたのか？」

パイロット2

「違うに決まってんだろ！奴らはここを占領する為に予備空襲に来たんだよ！」

パイロット3

「んな事はどうでもいい！早くあがるぞ！」

待機していたパイロット達がP40、P39、P38に乗り込み発進して行く。

地上要員は対空火器に向かう。

隊長

「全機突撃！」

迎撃に来た戦闘機に対し、紫電改隊は真正面から突っ込んで行く。まあ、設計が新しいだけに紫電改が圧倒しつつある。この隙に本命の攻撃隊がダッチハーバー基地に攻撃を開始する。

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！  
キーン……

カチッ

ヒュー……

ドガーン！

艦爆の攻撃に続き……

カチツ、カチツ、カチツ

ヒューーウー……

ドガーン！ドガーン！バーン！バーン！バーン！

艦攻の水平爆撃が続く。

先程まで打ち上げられていた対空砲はいつの間にか沈黙している。

攻撃隊長

「よし！全機引き上げる！」

阿賀野艦橋

木村少将

「…不味いな」

阿賀野

「どうしました？」

木村少将

「また天気が崩れる…艦上機の回収が困難になるぞ」

確かに、悪天候の多い北方海域ではあり得る事である。

阿賀野

「！なら、早くどうにかしないと……」

木村少将

「待て。ここは敵海域だ。角田さんの判断に任す」

阿賀野

「……………」

角田中将といえば山口少将に並ぶ猛将として有名である。だから、阿賀野の心配もわかるが……杞憂に終わった。

士官

「司令。旗艦から艦上機に対して誘導電波が出ています」

先程、木村少将が言った通り、ここは敵海域である。不用意に電波を出せば敵が来てしまうが……

木村少将

「心配するまでもなかったな。警戒は継続せよ」

結局、敵の逆襲を受ける事も無く、無事に艦上機を回収離脱した。

次号へ

## ダッチハーバー空襲（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## エセックス型雷撃セリ（前書き）

登場人物

阿賀野

軽巡洋艦阿賀野の艦魂。

第二機動艦隊所属の水雷戦隊の戦隊長の1人。  
木村少将とは教官と生徒みたいな関係。

## エセックス型雷撃セリ

8月4日 ミッドウェイー島付近の海域

伊400潜水艦

二一ナ

「只の哨戒任務も暇ね〜」

宮木

「司令！只の哨戒任務でも真面目にやって下さい！..」

零

「宮木さ〜ん、そんなに怒ると、余計に皺が増えちゃうよ?」

宮木

「そんなに老けて無い!」

ちなみに、これが伊400潜水艦の何時もの日常である。

宮木が怒っている横で、日独の乗組員達がクスクスと笑っている。

今のところ、この3人コンビの周りに関しては、笑いが絶える事は無い。

聴音手

「艦長。機関音複数探知」

二一ナ

「数は?」

聴音手

「大型1、中型6、小型10以上」

宮木

「アメリカ艦隊でしょうか？」

二一ナ

「味方にしては小規模ね……そう考えた方がいいわね」

宮木

「では、早速打電を……」

二一ナ

「待つて。確認できたのは小規模な敵艦隊だけよ。もう少し詳細を掴むわよ」

零

「了々解！」

宮木

「…はあ」

数時間後……

宮木

「司令。音源の敵艦隊です」



潜望鏡を見ていた宮木が、二ーナに場所を譲る。

二ーナ

「ふうん…エセックス型空母が一隻、インディペンデンス型空母一隻に…巡洋艦二隻に多数の駆逐艦ね」

零

「じゃあ、反対側にもう半分がいるんですね」

二ーナ

「そうね」

宮木

「…敵はそれほど警戒していません。一撃加えますか？」

二ーナ

「あら、珍しい。副長が攻撃進言なんて」

零

「…明日は嵐だね」

宮木

「…五月蠅い」

二ーナ

「まあ、いいわ。水雷長、雷撃戦用意！」

水雷長

「用意よろし！」

二一ナ

「一・二番管のみを使用。目標、1時の敵艦隊中心のエセックス型空母。敵速19ノット。距離8000メートル」

水雷長

「調整完了」

二一ナ

「てえー!!」

ゴバウ!

宮木

「潜望鏡下げ!反撃が来るよ!急速潜航!」

ゴワーン!

宮木

「魚雷一本命中」

二一ナ

「時間的にエセックス型…小破と言ったところね」

聴音手

「駆逐艦来ます…爆雷投下!」

宮木

「衝撃に備え!」

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！

零

「上で炸裂しました」

二ーナ

「もう少し下に落とさない、下手くそ」

宮木

「速度そのまま、ゆっくり離脱」

宮木

「その後、伊400潜水艦は無事に離脱しました。エセックス型？その時点で乗組員の誰もが軽い損傷だと思っただわ……あの報告を受けるまではね……」

戦後、宮木副長自らが執筆した『伊400潜水艦副長備忘録』のインタビューに答えた一部。

次号へ

## エセックス型雷撃セリ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## エセックス型空母発見！？

8月7日 早朝 ミッドウエー島付近の海域

播磨艦橋

福田

「先輩、いよいよですね！」

福本

「ああ」

遠地

「この作戦が成功すれば、ルーズベルトの立場は崖っぷちだ」

千歳

「国内外から批判を受ける……あとは、ルーズベルトが何処まで持つか、ね」

マリーダ

「開戦から早半年、アメリカは各地で敗北続き…国民は相当参ってる筈よ」

播磨

「日本が何処まで追い詰めるかにもよりますね」

福本

「まあ、どちらにしろ、太平洋の戦いは終わるな」

ラフィール

「そして…ヨーロッパ…ロシア…」

ジント

「…先は長いですね」

福本

「…だからと言って、悲観もしていられ無いしな」

福田

「今やれる事をやるしかありませんしね」

ミア

「福本長官。彩雲から連絡です」

（ちなみに、ミアはオペレーターとして、第七艦隊に所属しています）

福本

「彩雲から？ミッドウェー島に何かあったか？」

ミア

「…いえ、周辺索敵をしていた彩雲からです」

福本

「……内容は？」

ミア

「『我索敵中にエセックス型空母を発見。エセックス型は単艦漂流

している模様』」

この報告を聞いた福本達は首を捻るか、お互いを見るか……とにかく共通していたのは、頭には疑問符がついている事。

福田

「……どう言う事でしょうか？」

ジント

「……文面そのままだと思っんですが」

播磨

「けど、私達まだ何もして無いです……よね？」

マリーダ

「ええ、私達も、作戦参加艦隊もまだ何もして無いわ」

遠地

「じゃあ……誰がやったんだ？」

全員

「」「」「」……「」「」「」

ラフィール

「……こう言う時は敵の罠と考えた方が良いのでは？」

千歳

「じゃあ、その罠は？」

福田

「その前に、貴重な空母をそんな事に使うでしょうか？」

ミーア

「確かに、アメリカにとって空母は戦艦以上に貴重です。そんな事は……」

遠地

「なら、例の原子爆弾じゃあないのか？あれなら、空母一隻の犠牲で艦隊一つは葬れるぞ」

ジント

「ですが、完成したとも、爆発実験もした様な報告もありません。もし載せたとしても、爆発するか解らない物を使うでしょうか？」

ラフィール

「それに、下手をすれば我々の手に渡ります。そんな事をやらないと思いますよ」

それぞれ自分の意見を出してみるが、どうにもこれと言った結論は出ない。

福本

「……そう言えば、2日前の深夜に、ニーナが空母を雷撃したのはこの辺じゃあなかったっけ？」

マリダ

「！ちよつと待って。ミーア」

ミーア

「あ、はい……」



2人は慌て報告電の束から、探し出す。

マリーダ

「あつたあつた。えーと、確かに4日の深夜…と言っても5日になつてたけど…に雷撃報告があつたわ。丁度あの海域ね」

ミーア

「ちなみに、命中は一本です」

福田

「じゃあ…何か？一本の命中で空母を放棄したと？」

ジント

「…あり得そうです。現在のアメリカ軍の練度は低いですから」

遠地

「まあ、それは置いといて……どうする？」

福本

「そつだな…せつかくアメリカ軍が使える物を放棄してくれたからな…回収しよう」

マリーダ

「じゃあ、各艦に通達するわね」

レキシントン  
連龍

「福本長官」

福本

「おや、皆さんお揃いで」

福本が振り向くと、連龍、遠龍を始めとしたアメリカ艦魂達が居た。

サラトガ  
砂龍

「エセックス型空母を回収しに行くのは本当ですか?!」

福本

「え、ええ、このまま漂流させとく訳にもまいりませんし…」

ロングアイランド  
勝鷹

「では、この件は私達元アメリカ艦に任せて下さい」

福本

「別に構いませんが……なぜ?」

エンター  
遠龍

「エセックス型は私達の妹だから……これ以上、誰が泣くのは見たくありません!」

ヒューستن  
箱根

「それに、私達なら余り摩擦は起きません…お願いします!」

確かに、箱根の言っている事は理にかなっている。

しかし、あえて言うならみんなが遠龍と同じ思いなのだろう。

福本

「…わかりました。しかし、敵の襲撃もあり得ますので、第二戦隊

と第三戦隊、第六水雷戦隊と第九駆逐隊を同行させます……後の事、  
よろしく願いします」

エンター  
遠龍

「了解！」

十数分後……

回収艦隊を分離し、後を託した。

福本

「……………」

福田

「大丈夫ですよ、先輩。あとは回収艦隊がやり易い様に自分達が頑  
張るだけです」

福本

「ああ……」

マリーダ

「大介。攻撃準備完了よ」

福本

「よし、第一次攻撃隊発艦せよ！」

神谷

「了解！」

次号へ

エセツクス型空母発見！？（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 不運のエセックス

時系列を戻しまして…

8月4日 深夜

空母エセックス

ドゴーン!!

艦長

「な、なんだ!？」

士官

「右舷に被雷! 敵潜による雷撃です!」

艦長

「な… 駆逐艦は何をしていた?! 被害状況は!？」

士官

「現在調査中! お待ち下さい!」

この時、エセックス率いる艦隊はミッドウェー島に航空機の輸送任務にあたっていた。

士官

「た、大変です! 浸水量が増えています! このままでは転覆の可能

性が……」

艦長

「く、総員退艦！急いで退艦しろ！」

慌て退艦を始めた乗組員達に、1人の少女の叫びなど聞こえなかった。

8月7日 エセックス

シーンとした艦内に1人の少女：エセックスの艦魂エセックス……が居た。

この2日間、艦内を探し回るか、飛行甲板に出て誰かが見付けてくれないかと？海を見つめる事の繰り返し。

普通の人間なら気が狂いそうだが、彼女は気力で耐えていた。

さて、なぜエセックスが浸水量が増えているのに沈んでいないかと言つと……実は乗組員の練度にあつた。確かに、酸素魚雷は命中し、浸水は発生したが、頑丈なエセックスでは微々たるものだった。

しかし、本来なら排水作業をする筈が、操作間違いで注水作業をしてしまった。これが、浸水量の増えた原因である。

もちろん、ベテランが確認していれば直ぐ解つた事なのだが、報告が上がつた艦上層部が誤つた情報により（彼らも新米）さつさと退艦命令を下した為、ベテラン達も確認する暇がなかった。

これがエセックス漂流の真実であつた。

エセックス

「…誰か…早く見付けて…」

ポツリと呟きつつ眺めていた時、一機の単発機が見えた。

無駄だと思いつつも、手を振ると……単発機はエセックスの周りを旋回し始めた。

見たこと無い機体であったが、彼女にとっては久しぶりに見た『物』であった。ちなみに、これが周辺索敵中にエセックスを見つけた彩雲である。

しかし、実はこの時、ミッドウエー島から索敵に出ていたPBYカタリナ飛行艇もエセックスを発見していた。

ただし、彩雲よりはスピードが遅いため、10分程後に確認したのだが…。

もちろん、この報告はハワイの太平洋艦隊司令部経由でワシントンに届いた。

ハワイはなんとか回収出来ないかと考えたが……そんなの無理である。

一方、これを聞いたルーズベルトは、これ以上アメリカの醜態を曝さぬ為、なおかつ、アメリカ艦を鹵獲されない為にエセックス撃沈を命令した。

数時間後……

エセックス

「……迎え……まだ……」

彩雲が飛び去った後も、海を眺め続けていた。



と、その時、彼女は接近する多数の機影を見つけた。だが……

エセックス

「え??？」

何故かエセックスに向かって来た。

そう……エセックスを沈める為にミッドウエーから飛来した爆撃隊であった。

次号へ

不運のエッセックス（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

差し伸べられる救いの手 前編（前書き）

登場人物

翔鶴

空母翔鶴の艦魂。

神波や神童と仲良しで、その影響が、巫女さんである。

瑞鶴

空母瑞鶴の艦魂。

翔鶴の妹で、姉同様、神波や神童と仲良し。

姉の影響もあり、彼女も巫女さん。

## 差し伸べられる救いの手 前編

その頃……回収艦隊

戦艦薩摩艦橋

楠木

「まだ見付からないの？」

士官

「まだです。もう少しすれば、駆逐艦のレーダーに反応するかと」

楠木

「そう」

回収艦隊の指揮を任された楠木は少し焦っていた。

なぜなら、エセックス型が漂流している事をアメリカが知ればどんな手をうつかわからない。

一刻も早くたどり着き、エセックス型を守ってやらなければならない。

楠木

「死んじゃったら……後味悪いもんね」

薩摩

「楠木さん……」

尾崎

「失礼します」

ある種の間違った声と共に、尾崎が艦橋に上がって来た。

尾崎

「あ、あれ？私空気読めてませんか？」

薩摩

「うーん……多少」

尾崎

「うう、ごめんなさい。 m ( ) ( ) m」

楠木

「私としては、なんで余裕なのかを知りたいわ」

尾崎

「え、だって回収は福本長官の命令ですよね？」

楠木

「ええ」

尾崎

「なら、大丈夫ですよ。だって福本長官の指揮で一度も失敗した事無いですし」

楠木

「…その自信が一体どこから出てくるのか」

薩摩

「…ですけど、事実ですね」

士官

「司令！神波から打電！『レーダーに反応有り！エセックス型と思われる』」

楠木

「良かった。無事だったのね」

薩摩

「もう少し行けば、視認できます。急ぎましょう」

士官

「あ、神波から再度打電！『レーダーに多数の反応有り！ミッドウエー島からの空襲と思われる！数は……！200以上！』」

尾崎

「エセックス型一隻にしては多すぎですね。一挙両得でも狙ったんでしょうか？」

楠木

「そうね……空母に連絡！艦上機は全部上げて！全艦最大速！対空戦闘用意！エセックス型を何としてでも守るわよ！」

士官

「了解！」

重巡洋艦箱根

艦長

『対空戦闘用意！総員配置に就け！！』

ドダバタドダバタ！

初陣ながらも1ヶ月以上の厳しい訓練に耐えてきた若き少年・少女水兵があつという間に配置に就く。  
そんな中、箱根は第二砲塔ヒューストンに立っていた。

新城

「おーい、箱根」

箱根

「ん、新城か…今は戦闘配置だぞ」

新城

「僕の戦闘配置はそこだよ」

そう言つて40mm連装機銃座を指す。

箱根

「…そうだったね」

新城

「…エセツクス型が心配か？」

箱根

「…元で義理だが…私達にとっては大切な妹だ」

新城

「…そっか」

箱根

「…………余計な事を言い過ぎた…口を封じるか」

新城

「うお、やべっ！配置に戻ろう」

空母遠龍

富田

「薩摩より連絡！全艦上機発艦せよ！」

白河

「全艦上機！発艦急げ！！」

飛行甲板では紫電改だけでなく、彗星35型や流星の発艦準備に追われていた。

迎撃に使える彗星や流星も使う腹だ。

エンター  
遠龍

「ごめんね、ミスズ」

白河

「そんな事無いよ。私だって同じ立場なら、あなたと一緒に福本長



官に頼みに行くわ」

富田

「後は…僕ら次第だよ。ね、美鈴」

白河

「そつね」

飛行甲板

整備兵

「杉田一飛曹、紫電改の整備完了！異常はありません」

杉田

「ありがとうございます」

直ぐ様、紫電改に乗り組む。

杉田

「紫音、いけるかい？」

紫音

「ふ、私はいつでも全快だ」

杉田

「そつか、良かった」

紫音

「ただ、まさかアメリカ空母を守る事になるとは思わなかったな」

杉田

「不満？」

紫音

「いや。遠龍達の気持ち解る。それに、私は戦えればそれでいい」

富田

『杉田一飛曹。準備は完了しているか？』

杉田

「副長、はい、いつでも行けます！」

富田

『楠木司令から、敵機発見により緊急発艦が命じられました。艦隊防空及びエセックス型の防衛せよとの事です』

杉田

「了解！先陣きって敵機迎撃にあたります！」

富田

『お願いします…御武運を！』

直ぐ様、甲板要員が杉田機をカタパルまで押していく。

杉田

「さあ、行こう！紫音！」

紫音

「ああ！敵幾千万あろうとも、我退かん！」

ズドン！

杉田機が発艦した。

この時、ミッドウェー島から飛来したのはB17が60機、B25が100機、A20ハボック40機、護衛のP38が120機の大編隊。

本来ならA20でエセックスを爆撃するつもりだったが……回収艦隊を敵先鋒隊と間違えたミッドウェー島の基地司令が大編隊での攻撃命令を出したのである。

士官

「司令！砲戦準備完了！」

楠木

「全砲門！撃てー！」

ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！  
ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！  
ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！  
ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！  
ズガン！ズガン！ズガン！  
ズガン！ズガン！ズガン！

薩摩、土佐、伊豆、伊賀、春日、日進の砲撃に続き、六甲、畝傍、



巻き込まれると弱い。

特に烈風に格闘戦を挑まれると、700kmの速度と俊敏性、旋回性に翻弄されて25mm機銃の火力で瞬殺される。

一撃離脱にしても、今や殺る方から殺られる方に変わっていた。

彗星と流星は爆撃隊に向かった。

最初は何の脅威も感じていなかった爆撃隊も銃撃を受けるまでだった。

特に彗星の対地支援用に取り付けた翼内30mm機銃は強力で、一発喰らえば間違い無く大穴が空いた。

慌て弾幕を張るが、零戦並みに運動性能が良い彗星はサッと回避する。

負けじと流星もB25やA20を攻撃する。

そして……爆撃隊はエセックス型・回収艦隊上空に差し掛かった。

次号へ

差し伸べられる救いの手 前編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。



遠龍に群がらんばかりに接近する敵機。

ドン！ドン！ドン！ドン！タンタンタンタン！  
ドドドドドドドドドド！

そんな敵機に対空火器が火を吹く。

ゴワーン！  
ズガーン！

二機のB25が弾幕に捉えられ爆砕された。  
回収艦隊の艦艇は、艦の周りが赤く染まっていた。  
つまりそれほど対空砲火が強力だった。

下手に近付けばあっという間に爆砕である。  
それでも、爆撃隊は回収艦隊に襲い掛かる。

水兵

「B25、爆弾投下！」

白河

「取り舵！回避！」

ヒューウ……

ザバーン！ザバーン！ザバーン！

タンタンタンタンタン！  
ドドドドドドドドドド！

ゴワーン！



水平爆撃を行ったB25が火を吹きながら落ちていく。

白河

「よし、総員その意気！第七艦隊の恐ろしさ、見せてやりなさい！」

この時、P38を片付けた烈風と紫電改が爆撃隊に襲い掛かった。只でさえ、彗星や流星に苦戦しているのに、本命の戦闘機に襲われれば堪ったものではない。

特に、烈風は脅威であった。

4基の25m機銃は、頑丈である筈のB17爆撃機をあっという間にジュラルミンの塊に変え、B25の胴体を切断する。

これ以上の爆撃は犠牲を増やすだけだと判断した爆撃隊の指揮官は、エセックスの撃沈を命じた。

その頃エセックスは複雑な気持ちで戦闘を眺めていた。

見た目は、日本軍とアメリカ軍との単純な戦闘ではあるが…中身は複雑だ。

日本軍の中には明らかに元アメリカ艦の姿が見え、爆撃隊と戦っている。

それに、日本軍は自分の事を回収しに来た様で、回避しつつも自分の所に向かって来ている。

それを妨害しようとしてミッドウェー島基地から爆撃隊が来て爆撃している。

アメリカ軍人としては敵に使われるのは嫌だが、なぜそこまでする

のかが解らない。

だが……思考にふける時間はなかった。

何機かのB25、A20がエセックスの所に向かって来た。

エセックスは攻撃を終えて帰るのだらうと思っていたが、自分の手前で爆倉が開いた瞬間、エセックスはなぜ攻撃されるか解らなかった。

まさか、自分の知らない上のところで自分の処分が決まっていたとは思わなかっただろう。

それに自分を守る筈の爆撃隊が攻撃してくるとも思っていなかった。

エセックス

「い、い、いやー！来ないで！なんで！？なんで、攻撃するの？！あっち行ってよ！」

しかし、非常にもB25、A20は爆弾を投下する。

カチッ

ヒューウ……

エセックス

「い……いや！嫌よ！死にたく無い！やめて！いやー！」

この瞬間……彼女の中で……何かが崩壊した……

駆逐艦神波

士官

「敵機、エセツクス型に爆弾投下!!」

ヒューウ……

ザバーン!ザバーン!ザバーン!ザバーン!ザバーン!ザバーン!  
ザバーン!ザバーン!ザバーン!ザバーン!

エセツクス型と神波の間を爆撃で出来た水柱が遮る。

神童

「エセツクス型は?!」

士官

「待つて下さい……だ、大丈夫です!被弾しておりません!」

水柱のカーテンから出てきたのは、先程までと一寸も変わらないエセツクス型空母の姿。

神童

「…機関出力最大!このまま直進!全銃砲、銃砲身が焼き付くまで撃ち尽くせ!!」

士官

「了解!!」

この瞬間、神波の速度が1ノット上がった。

つい先程、最大速度で走っていたところに出力最大で速度が上がったのだ。

当然、神波に爆撃機が集中する。

だが……

ダン！ダン！ダン！

ゴワーン！

攻撃の機会を狙い旋回していたB25が神波の1番砲塔の連射に捉えられ撃墜される。

ダダダダダダ！

カガガ…カガガ！

バキッ！

25mm機銃の弾幕に翼を叩き折られるA20。

士官

「左舷よりB17！スキップボバミングをやる気です！」

神童

「左舷機銃座、B17を狙え！」

神波

「撃て！」

タンタンタンタン！

ダダダダダダ！

ダダダダダダ！

ビシビシビシビシ！

ビシビシビシビシ！

ザバーン！

40mm機銃と25mm機銃の集中射撃を受けたB17が波間に突っ込む。

巫女艦長こと神童艦長の指揮か、神波の最古参艦の意地か、乗組員の技量と気迫か、あるいは3つ共かも知れないが、確実に神波はエセックス型に近付いていた。

重巡洋艦 敵傍

敵傍

「九鬼艦長、神波が妨害されている。援護したい」

九鬼

「わかりました。小浜？」

小浜

「いけるよ！まかせといて〜」

九鬼

「わかった。弾種3式弾。撃ち方用意」

小浜

「…標準完了。用意よし」

九鬼

「撃て！」

ズドーン！ズドーン！

25 / 4 c m三連装砲が放たれる！

チカッ

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガン！

九鬼

「千賀航海長！進路そのまま、出来るだけ回避運動はせずに」

千賀

「了解」

敵傍

「小浜、砲撃は任せた！」

小浜

「了解！女性砲術長の腕、見せてやるうじゃないの！」

激闘40分…回収艦隊に凱歌が上がった。  
300機以上の敵機に襲われたものの目立った被害もなく、逆に200機以上を撃墜し、見事敵爆撃隊を撃退した。

空母エセックス

神童

「じゃあ、艦内検索にあたって」

水兵

「了解！」「了解！」「了解！」

あっという間に水兵達が散らばって行った。

神波

「し、神童さん！」

神童

「どうしたの、神波?!」

神波

「え、えーと……と、とにかく、早く来て下さい！」

神波と急いで防空指揮所に向かうと、そこには……

神童

「あ！ちよ、ちよっと！あなた、大丈夫?!」

そこに倒れていた少女は……大変な事になっていた。まず、青の目は生気を失っており、綺麗だった筈の顔や周りには涙なのか、鼻水なのか、涎なのか解らないが、汚れていた。そして、虫の息だった。

神童

「神波、タオル出して！」

神波

「は、はい！」

すぐに艦魂の能力でタオルを出すと、神童に渡す。

神童は慣れた手つきで、少女の顔や周りを拭いていく。

エセックス

「あ……あ……あ……」

神童

「気が付いた?!もう大丈夫だから!」

エセックス

「あ……あ……な……た……は?」

神童

「私は日本海軍の神童神子。隣にるのが、私の艦の艦魂の神波」

神波

「あなたの名前は?」

エセックス

「……………あ……り……が……と……う……」

少女はそう言うと、意識を失った。

神童

「ちよ、あなた?!」



神波

「……大丈夫です。気を失っただけです」

神童

「そう……良かった」

こうして第七艦隊は空母エセックスの回収に成功した。

次号へ

差し伸べられる救いの手 後編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ミッドウェー島を占領セリ

その頃……

ミッドウェー島付近上空

第七艦隊第一次攻撃隊

グオングオングオングオン……………

2200馬力の『竜』エンジンが音を響かせて、烈風はミッドウェー島に向かっていった。

片山

『そう言えば、アメリカもやっと2000馬力戦闘機を配備したそうぞうで』

吉田

『ああ、確かF4Fの発展型だって言ってるな』

クレア

『日米の新型機同士の初陣ね』

アリソン

『そうね。出会えたら一戦やりましょうね』

片山

『いいですね』

『こちら彩雲。ミッドウエー島に到達します』

アリソン

『全機聴いたわね？これからミッドウエー島から迎撃が来るわ。烈風の初陣よ、思いつきり暴れてやりましょー！』

ミッドウエー島基地

ウウー！

『敵機来襲！戦闘機は迎撃用意！』

パイロット1

「ジャップめ、今日こそ目にも見せてやる！」

パイロット2

「ああ、今日からゼロはカモだぜ！」

パイロット3

「このF6Fにゼロが敵うわけ無いんだからな！」

パイロット4

「今日からゼロのパイロット達は厄日の始まりだぜ！」

次々にパイロット達がF6Fに乗り込み、飛び立って行く。

吉田

『中佐、敵機です!』

片山

『あれが例の新型ですか?確かに印象はF4Fの発展型ですね』

クレア

『F4Fの2000馬力版とはよく言ったものね。あれじゃあ、  
—  
撃離脱特化型ね』

アリソン

『まあ、敵機である事には違い無いわ。行くよ!』

3人

『『了解!』』』

パイロット1

『敵発見!ジャップだ!』

パイロット2

『今までの借りをF6Fで返してやる!』

パイロット3

『ゼロの無敵も今日までだ!』

パイロット4

『行くぞ!突撃!』

ギューン……

アメリカ軍は自信満々に攻撃隊に襲い掛かった、が……

ババババババババババ！  
ババババババババババ！

アリソン

『全機散開！』

F6Fの攻撃をかわすと……

パイロット達

「「「「「！！！！」」」」」

ドドドドドド！

ガガガ…ガガガ！

ゴウーン！

バゴーン！

パイロット1

『な！なんだと？！』

パイロット2

『くそ！奴はゼロじゃない！』

ドドドドドド！

パイロット3

『ジョージ（紫電改）でも無い！新型だ！』

パイロット4

『くそ！後ろに喰い付かれた！助けてくれ！』

アリソン

『敵機は引き受けました。爆撃お願いします！』

大熊

『わかった！野郎共、続け！』

艦爆隊員

『『『『『おっ！』『』『』『』』

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

大熊

『け、これでも喰らいやがれ！』

シュパパン！

ドガガガガン！

主翼に装備していたロケット弾の炸裂により対空砲火が減少する。

大熊

「よし、そのまま……てえー！」

カチッ

ヒューウ……

ドガン！

投下された800kg爆弾は滑走路に大穴をあける。

ヒューウ……

ヒューウ……

ヒューウ……

ズガン！ズガン！ズガン！

攻撃隊は滑走路やかけなしの陣地やトーチカを破壊していく。  
ミッドウェー島の運命は決まった。

数時間後……

大和、武蔵、信濃率いる第一艦隊の艦砲射撃と大田<sup>おおた</sup> 実少将<sup>みのる</sup>率いる  
特別陸戦隊により、ミッドウェー島は占領された。



次号へ

ミッドウェー島を占領せり(後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 電号作戦内容(前書き)

作者

「え〜と、本来なら続きを書きたかったのですが……色々な都合上の理由により、(主に)参加部隊の説明になりました」

チンッ

和泉

「…どうゆう事だ?」

作者

「…和泉さん、軍刀下ろして頂けませんか?」

和泉

「元剣道部だろ?」

作者

「関係無い!」

和泉

「…わかった。早く話せ」

作者

「実は、連絡がとれなければいけない読者と連絡が……」

和泉

「ああ、要塞好きだな」

作者

「……YES」

和泉

「別に良からう。戦力はこっちが上何だし」

福本

「…海上戦力と航空戦力に関してはな。艦艇数は圧倒的、航空機は作者の世界のミッドウェー作戦を余裕で上回る1200機以上を使う…けどな…」

和泉

「??？」

作者

「史実のノルマンディー上陸作戦を見ると解りますが、ある程度とは言え防備の備わった場所に味方を上陸させる訳でして……」

日進

「被害はうなぎ登り。上陸地点は血に染まるわ」

作者

「その辺の対策は出来てるんだけど……肝心の物の様子を訊かないとどうにもこうにもね…」

和泉

「…なんでもいい。私は早く酒が飲みたい」

福本

「時々ちびちびと飲んでるくせに…」

## 電号作戦内容

### 電号作戦

#### 目的

ミッドウェー・ハワイを電撃的に占領し、ルーズベルト政権に講和を迫る。

なお、講和に至らなければ次作戦の拠点としてハワイを使用する為の占領作戦でもある。

#### 参加部隊

##### 海軍

第一艦隊 第一・第二機動艦隊 第七独立機動艦隊 ミッドウェー  
派遣基地航空隊 特別陸戦隊 第七艦隊特別陸戦隊 護衛艦隊

##### 陸軍

6個師団 宮崎歩兵師団 長野戦車連隊 陸軍船舶隊

#### 艦隊編成

##### 第一艦隊

戦艦 大和 武蔵 信濃 長門 陸奥

空母 地龍 黒龍（二隻は雲龍型空母） 鳳翔 祥鳳 瑞鳳 龍鳳

重巡洋艦 古鷹 加古 青葉 衣笠 最上 三隈 鈴谷 熊野

輕巡洋艦 大井 北上 川内 神通

驅逐艦 32隻

第一機動艦隊

空母 赤城 加賀 飛龍 蒼龍 翔鶴 瑞鶴 天鳳 雷鳳（二隻は改大鳳型空母）

戰艦 金剛 比叡 榛名 霧島

重巡洋艦 利根 筑摩 高雄 愛宕 摩耶 鳥海

輕巡洋艦 阿武隈 長良 五十鈴 名取

驅逐艦 32隻

第二機動艦隊

空母 大鳳 飛鷹 隼鷹 龍驤 雲龍 天城 葛城 笠置 阿蘇  
生駒 千歲 千代田

航空戰艦 伊勢 日向

戰艦 扶桑 山城

重巡洋艦 妙高 那智 足柄 羽黑

軽巡洋艦 大淀 仁淀 阿賀野 能代 矢矧 酒匂

駆逐艦 32隻

第七独立機動艦隊

〃〃省略〃〃

護衛艦隊

第二護衛艦隊

空母 冲鷹 海鷹

駆逐艦 16隻

海防艦 32隻

第三護衛艦隊

空母 天鷹 高鷹

駆逐艦 16隻

海防艦 32隻

その他：補助艦艇・輸送艦

参加艦隊総指揮官

山本五十六大将

第一機動艦隊指揮官

小澤治三朗中将

第二機動艦隊指揮官

角田覚治中将

第七独立機動艦隊指揮官

福本大介大将

特別陸戦隊指揮官

大田 實少将

陸軍参加部隊

歩兵3個師団

戦車2個師団

砲兵1個師団



陸軍総指揮官

今村 均大将

第一戦車師団

重見伊三雄中将

砲兵師団第二連隊第三大隊長

金光恵次郎少佐

軍機密 改大鳳型空母

|       |               |
|-------|---------------|
| 基準排水量 | 30600t        |
| 最大排水量 | 36800t        |
| 全長    | 257.0m        |
| 全幅    | 28m           |
| 速力    | 33ノット         |
| 航続距離  | 18ノットで10000海里 |

武装

10cm65口径連装高角砲×8基

40mm四連装機銃×10基

同連装機銃×10基

25mm三連装機銃×22基

同連装機銃×10基

搭載機数 76機

その名の通り、装甲空母大鳳型の改良型。

装甲飛行甲板の為、窮屈になった大鳳の全長・全幅を延ばして完成した装甲空母。

現在、天鳳・雷鳳が完成し、第一機動艦隊に配属されている。

次号へ

**電号作戦内容（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ミッドウエー島にて

8月9日 ミッドウエー島

戦艦播磨

福田

「あ、先輩！来ましたよ！」

福本

「お、来たか！」

第二・第三護衛艦隊に護衛された陸軍師団及び、福本達にとって待ちに待った新兵器の到着である。

福本

「さて、これから打ち合わせに行ってくるよ」

フィルデナント

「あ、そうですね」

福田

「では、野口博士はお任せを」

戦艦大和会議室

山本長官

「お久しぶりです。今村さん」

今村大将

「これは山本さんに小澤さん。いえいえ、フィリピンではありませんと  
うございました」

小澤中将

「いやいや、昔ならいざ知らず、今は協力するのは当たり前ですよ」

福本

「これは、重見少将！お久しぶりです！」重見少将

「これはこれは、福本長官！今や海軍の一角を成す若き名将与聞いて  
おりますよ」

福本

「まあ、端っこの一角ですがね。あ、紹介します、彼が我が第七艦  
隊特別陸戦隊指揮官のフィルデナント中将です」

フィルデナント

「初めまして、第七艦隊特別陸戦隊を率いています、フィルデナン  
トです。どうぞ、よろしく」

重見少将

「いやいや、こちらこそ。そうか、君か、サブلم戦で陸戦隊の戦  
車集団運用を指揮したのは？」

フィルデナント

「はい。少将殿も、日本戦車界では推進派の1人と聞いていますが  
？」

重見少将

「長年疎まれてきたがね、サブム戦の君達の活躍でやっとバカ達も解った様だよ」

フィルデナント

「あはは…それは良かったです」

陸海それぞれの挨拶が終わったところで、海軍は机の右、陸軍は机の左に座る。

山本長官

「さて、今後の作戦の最終確認を行います。説明を…福本大将にしてもらいましょう」

いきなり指名された福本であったが…最近こんなばかりだったので、馴れてしまった。

福本

「では、不肖ながら自分が務めさせて頂きます」

そう言うと、前に出て簡単に作戦内容を説明する。

福本

「本日より数日後の上陸日…つまりXデイに我が軍はハワイオアフ島のワイキキビーチに上陸、早期オアフ島占領を目指します。その間、海軍は艦砲射撃で援護しつつ、迎撃に来るアメリカ艦隊に備えます」

今村大将

「航空援護はどうなのかね？」

福本

「上陸前に空母機による事前空襲を実施します。攻撃隊はハイワレ、ホイラー、カネオへ、ヒツカム、エワ、ベローズ、パーパースポイントの七ヶ所の飛行場を攻撃、制空権を確保します」

重見少将

「ワイキキビーチに上陸すると言ったが、それは向こうも気付いているだろう？となると、下手に上陸すれば被害が大きくなるが？」

福本

「その点はご心配無く。上陸は指揮下の第七艦隊特別陸戦隊と宮崎師団、長野連隊にやってもらいます」

これを聞いた陸軍の面々ではざわめきが起こった。

それもそうであろう、陸戦隊だけならまだ良いが、宮崎師団や長野連隊まで被害が大きければ、ヨーロッパに派遣出来ない。つまり、第七艦隊に預けた意味が無い。

今村大将

「……第七艦隊に何か考えがあるのかね？」

福本

「…はい」

今村大将

「ならば、この事は第七艦隊に任せよう」

陸軍士官

「閣下!!」

今村大将

「大丈夫だ。天皇陛下だけで無く、3国の国主から信頼を寄せられ、陸海軍に改革を巻き起こした人間なんだ。ちゃんと考えているよ」

陸軍士官

「は、はあ……」

福本

「え、他に質問はございますか？」

工作艦三原

コンコン

三原

「どござ〜」

新沢

「失礼します」

三原

「あら、新沢君。どうしたの？」

新沢



「え〜と、エセックスがどうなっているかと思ひまして…」

三原

「ああ、彼女ね…」

そう言うつと、机にあつたカルテを見ながら、頭をかく。

三原

「体には異常は無いわ。至つて健康体ね。ただ……」

新沢

「ただ？」

三原

「…心がね…精神的に参つちやつてのよ」

新沢

「…心ですか」

三原

「ええ……これはどんな名医でも治すのは難しいわ……周りの助けも必要だしね」

新沢

「…そうですね…」

三原

「……けど、新沢君も変わったわ」

新沢

「へ？なんで？」

三原

「だって、配属された時は誰とも話そうとしなかったのに、今じゃあこつやって敵なのに心配して様子を訊きに来るじゃない」

新沢

「……不思議ですよね……」

三原が出したコーヒーを受け取りながら、呟いた。

新沢

「自分は12月8日に福本長官に銃を向けた、本来なら背任行為だなんだで裁判にかけられている筈なのに……その長官の下でまた働いています」

三原

「そつね」

新沢

「働いてたら……なんか、自分達がやろうとしていたクーデターの意味が解らなくなりました。福本長官がやろうとしていたのを目の前に見せられると、失敗して良かった気がするんですよ」

三原

「なんで？」

新沢

「……お恥ずかしながら、自分達は『自分』と言う小さい所から見て文句言っていた……でも福本長官達は『日本』とか『世界』とかか

ら見ていた…だから、対米、対ソ戦に備えて改革をしようとした」  
一度区切ると、コーヒーを飲む。

新沢

「…で、今や我々はハワイを攻略しようとしている…もしクーデターが成功していたら…果たして、今自分はここに居たかどうか…」

三原

「ふーん…まあ、私も福本長官の意見具申で生まれたから…結局一緒ね」

新沢

「そうだね。さて、もうそろそろ戻ります…エセックスの方…よろしく願います」

三原

「了解」

次号へ

ミッドウエー島にて（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

アメリカ艦隊接近セリ！！

その日の夜

ミッドウェー島近海

二隻の戦艦が巡洋艦と駆逐艦を従えてミッドウェー島に向かっていった。

もちろん、日本海軍では無く、アメリカ海軍の艦隊である。

戦艦ワシントン艦橋

リー中将

「け、大統領も馬鹿な作戦を考えやがって」

口の悪さはハルゼー並み…のリー中将はムスツとした顔付きで艦橋に居た。

こんな事を言うには、理由がある。

今回の作戦…それは、ミッドウェー島を占領した日本艦隊の規模を把握する…威力偵察を行えと言うものだった。

もちろん、アメリカお得意の暗号解読を行ったが…一ヶ月に及ぶ通信謀略と事前連絡で行動していた日本艦隊により、どれ程の戦力を投入したか不明だった。この為、小艦隊を出して、日本艦隊の規模を威力偵察によって探ろうと言う事になったらしい。

噂ではルーズベルト大統領が海軍に無理矢理に実施するよう命じたそうだが。

リー中将

「ハルゼーじゃないが、あの糞大統領め…あの野郎に人間の心はあるのか？」

今や、ルーズベルト大統領に対する不満は陸海軍にもあった。

ただ、誰も表だって口にしないだけだ。

今のルーズベルトは史実のヒトラー並みに軍内部に不満を持っている様だ。

その頃……

戦艦和泉艦橋

遠地

「……………」

艦橋に陣取り、無言のままハワイのある方向を見つめる遠地砲術参謀。

「先輩、ハワイの方向なんて見て楽しいですか？」

そう言いながら近付くのは戦艦和泉艦長の滝沢竜也たきざわりゅうご大佐、神戸士官学校3期で、遠地達の後輩であり、根っからの砲術屋だ。

なおかつ、酒屋の次男坊生まれのせいか、豪腕で酒に強かった。

遠地

「…今思えばな…もし福本と出会ってなければ、俺が第七艦隊の砲術参謀なんて成ってなかったと思うんだよな」

滝沢

「あははは、それはそうでしょう。それにそれは福本先輩にも言えた事ですよ」

遠地

「ん？」

滝沢

「福本先輩も先輩と出会わなかったら、こんなコンビは出来ませんでしたよ」

遠地

「…微妙に説得力に欠けるな」

和泉

「なんだ？酒の話か？」

いきなり、和泉登場。

遠地

「和泉、君は酒の話から1cmで良いから離れられないのか？」

和泉

「無理だ」

滝沢

「即答ですか（笑）」

和泉

「大体、なぜ私が哨戒任務に就かねばならんのだ？」

遠地

「仕方ないだろう。河内の命令だ」

近江

「姉さんがだらしないからだよ」

和泉

「：五月蠅い。その前に、なんで近江と一緒に哨戒任務をしなきゃいけないんだ？」

近江

「私？私は見張りだよ」

和泉

「……はあ〜」

Bannon!

通信長

「参謀長！艦長！緊急事態です！」

ドアを蹴破らんばかりに入って来た通信長に滝沢は……



滝沢

「なんだ？大和の主砲でも暴発したか？」

通信長

「違います！哨戒中の二式大艇から入電！『我、アメリカ艦隊を発見せり！戦艦二隻を伴う！』」

遠地

「滝沢、速度最大！通信長、発灯信号で大和と播磨に連絡！」

通信長

「は、はい！」

近江

「しかし、なぜ発灯信号で連絡を？」

遠地

「下手に打電すると、戦力を測られる恐れがあるからね」

和泉

「ふっふっふ、久しぶりの戦闘！一戦やろっじゃないの！」

滝沢

「和泉…君は酒が好きなのか？戦闘が好きなのか？」

いきなりながらも、哨戒任務についていた艦艇は和泉・近江を中心に  
出撃した。ただ、出撃したのは艦艇だけではなかった。

ブオオオオオン！

和泉

「なんだ？」

遠地

「ミッドウエー島に進出していた銀河隊だ。流石に速いな」

滝沢

「まさか、獲物を取られませんよね？」

遠地

「大丈夫だよ。まあ、銀河隊も新兵器を腹に抱えているらしいがな」

近江

「新兵器？何ですか？」

遠地

「いや、沖田から聞いた話だからよく知らない」

和泉

「ふーん」

次号へ

アメリカ艦隊接近セリ！！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

野中一家見参！！（前書き）

登場人物

滝沢竜也<sup>たきざわりゅうや</sup> 年齢 21歳 階級 大佐 配属 戦艦和泉艦長

酒屋の次男坊生まれで、遠地の後輩で、豪腕。

酒に強く、本人いわく、『酒樽の匂いを嗅いで育った』との事。  
和泉とは仲良しで、共に酒を飲む仲。

野中一家見参！！

アメリカ艦隊付近上空

ブロンブロンブロン……

20機の銀河がアメリカ艦隊に向かっていった。

銀河隊隊長機

搭乗員

「野中隊長。レーダーに反応……敵艦艇です」

野中隊長こと野中五郎少佐：史実では最初の『桜花』攻撃隊隊長……は報告を聞いてニヤリと笑う。

野中少佐

「いい按配だ。全機付いて来てるな？」

搭乗員

「はい。問題ありません！」

野中少佐

「よし、今まで散々待たされたんだ、この調子でいっちょ、俺らのながーいイチモツつっこんで、吉原の嬢ちゃんみたいにアンアン言わせてやるっぜー！」

搭乗員

「……ガッテン承知の助でさあ！」「」

野中少佐が好んで使う俠客じみた言葉に合わせる様に、搭乗員達は威勢良く答えた。

野中少佐率いる752空はミッドウェー島派遣航空隊の一隊として着任していた。

本来、一式陸攻を装備していた752空だが、銀河の配備により縮小（乗員3人だから）していた。

だが、書類上は一式陸攻装備時の規模で記されていた。

これを見た野中少佐は、司令である大西瀧治郎中将に訊きに行った、すると……

大西中将

「うむ、陸さんで新型爆撃機を開発している事は知っているかね？」

野中少佐

「はい」

大西中将

「実は、陸さん達と協議の結果、その新型爆撃機を一式陸攻の後継に採用する事に決まった」

野中少佐

「…では」

大西中将

「陸軍での新型爆撃機の採用が早まるだろう。近い内に機種転換を行われる。そんな時に規模が縮小しては意味が無いだろ？」

……と、言う事で電号作戦が終われば、機種転換が決まっていた。

戦艦ワシントン

士官

「れ、レーダーに機影！」

リー中将

「け、来たか…対空戦用意！」

ウィーン……

12.7cm両用砲が旋回し、銀河隊に標準を定める。

リー中将

「しかし、まさか日本軍に夜間攻撃が出来る奴らがいたとはな……」

途中、敵の飛行艇に接触したから、敵が出てくる事は予想していたが……まさか航空隊まで出て来るとは思わなかった。

士官

「司令。対空戦用意完了」

搭乗員

「見えました！アメリカ艦隊です！報告通り戦艦もいます！距離二万メートル！」

野中少佐

「よし！俺達野中一家の目でえお披露目だ！心して掛かれ！ここが奴らの湊川だ！野郎ども、仕置き道具の準備はいいか！」

搭乗員

「「「委細承知！！」」」

士官

「敵機接近！機種は日本海軍のギンガ！」

リー中将

「撃て！いくら20機でも魚雷を喰らったら終わりだ！撃ち落とせ！」

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！タンタンタン  
タンタン！

ドドドドドドドドドドドド！

ドドドドドドドドドドドド！

戦艦ワシントン、ノースカロライナを中心に重巡洋艦、軽巡洋艦、  
駆逐艦が一斉に銀河に向けて発砲した。もちろん、銀河を接近させ  
ない為に。  
だが……

士官

「あ、敵機次々と離脱していきます！」



リー中将

「なに?!?!」

双眼鏡をひっ掴み、直ぐに見ると、確かに離脱していた。

リー中将

「馬鹿な！日本軍が何もしないで引き上げる訳がない！」

士官

「し、しかし、実際引き上げてますよ？」

だが、リー中将の期待（？）は裏切られてはいなかった。  
なぜなら……

士官

「!!!!!! 正体不明物体が接近中?!?!」

リー中将

「な、なんだと?!?!」

野中少佐

「どうだアメ公！俺達、野中一家の仕置き道具は！」

銀河が離脱する直前に放った物……それは『桜花』だ。

だが、史実の『特攻ロケット 桜花』ではない。

実際、史実の桜花より一・二回り小さい。

野中隊が放ったのは紆余曲折の末、開発された『誘導弾 桜花』だ

った。

これは、史実の桜花より少ない500kg（特攻用桜花は1.2t）徹甲爆弾を搭載し、陸軍の無線誘導技術によって完成した誘導弾である。

野中隊はこの新型誘導弾の実験隊としてミッドウェー島に派遣されたのだ。

敵艦艇から30km手前で、銀河から切り放された『桜花』は648kmの速度で敵艦艇に向かう。

このロケットエンジンも、苦心の末に開発された物だ。

だが、20発の内2発はロケットに点火せず海に落ちた。

また、4発は誘導装置が故障したのかあらぬ方向へ飛んで行ってしまった。

しかし、残りの14発はアメリカ艦艇に向かう。

もちろん、アメリカ艦艇も必死に対空火器を乱射するが精細を欠いている。

それに、小さな『桜花』にそうそう当たる訳がない。そして……

ドガン！ドガン！ドガン！ドガン！ドガン！

ドガン！ドガン！ドガン！ドガン！ドガン！ドガン！

ドガン！ドガン！

ドガン！ドガン！

搭乗員

「やりました！命中！命中です！」

見ると、二隻の巡洋艦が炎上しており、戦艦にも多少はダメージを与えた様だ。これを見た野中少佐は……

野中少佐

「この槍、使いやすしだぜ」

戦艦和泉

滝沢

「先輩、銀河隊もう仕事を終えた様ですよ」

遠地

「ああ…しかし、攻撃して来たにとしては、無傷なのは気のせいかな？」

滝沢

「…まあ、いいじゃないですか、犠牲も無く帰って来たんだし」

通信長

「参謀長。銀河隊から打電です。『巡洋艦二隻が沈没。戦艦は少破、後は頼む。野中一家』以上です」

遠地

「野中一家？そんな隊あったけ？」

滝沢

「…敵艦隊を叩いてから考えましょう」

次号へ

野中一家見参！！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ミッドウェー島沖海戦

数時間後……

戦艦和泉艦橋

滝沢

「先輩！敵艦隊視認！」

直ぐに双眼鏡を覗くと、二隻の戦艦が煙を吐いているのが見えた。

遠地

「どうやら、銀河隊の攻撃で、火災が発生した様だな」

和泉

「ここで会ったが百年目…殺ってやるつもりじゃないの！」

遠地

「いや…殺らなくていいから……」

滝沢

「先輩、弾種徹甲弾でよろしいですか？」

遠地

「ああ…だが、多少加減しろ。戦闘不能にするだけでいい」

滝沢

「え、撃沈するのでは無いのですか？」

遠地

「正式に命令は出てないが……福本なら何か作戦を思い付くだろう。だから鹵獲する」

滝沢

「解りました。手加減します」

通信長

「参謀長。阿賀野からです。『これより採点を行う』以上です」

滝沢

「木村教官ですね。いやはや、戦場で抜き打ち試験ですか…」

遠地

「あははは…確かにな。だが、教官の前だ、無様な姿は見せられないな」

滝沢

「はい！」

士官

「艦長、参謀長、砲戦準備完了しました」

遠地

「よし、和泉は敵一番艦、近江は敵二番艦を狙え。砲戦開始は3000M」

士官

「了解」

阿賀野艦橋

士官

「司令、和泉からです。『30000mにて砲撃す、突撃用意』」

木村少将

「あいつらしい判断だな」

司令席で自慢のカイゼル髭をしごきながら、ニコニコ笑っていた。

阿賀野

「木村さんは遠地砲術参謀長をご存知何ですか？」

木村少将

「ああ、あいつと福本は俺の教え子だ」

阿賀野

「え？けど……」

木村少将

「確かに、遠地は砲術、福本は将校課程だが、航海術や操艦術を教えたのは私だ」

阿賀野

「へえ…知りませんでした」

木村少将

「しかし、世の中解らんものだ…まさか一時的とは言え、教え子の指揮下に入るとはな…」

阿賀野

「…嫌ですか？」

木村少将

「いや。それどころか頼もしいよ！」

士官

「司令、距離3000mです！もうそろそろ、撃ちます！」

木村

「うむ、指揮下の水雷戦隊に連絡。突撃開始！」

士官

「は…」

戦艦ワシントン

士官

「敵艦隊接近！戦艦2、巡洋艦1、駆逐艦8！」

リー中将

「く…砲戦用意！」

桜花の攻撃は確かに効いていた。

実際、攻撃を受けたバルティモア型重巡洋艦二隻は桜花の直撃をも



るに受け沈没した。

また、ワシントン・ノースカロライナは戦艦だから大丈夫……かと思いきや、左舷対空火器は壊滅しており、大なり小なりの被害があった。

士官

「砲戦準備完了！」

リー中将

「よし、撃て……！」

ズガン！ズガン！ズガン！

士官

「て、敵艦発砲！」

ヒューーウ……

ザバーン！ザバーン！ザバーン！

士官

「うわわわ……！！！」

リー中将

「慌てるな！当たってはおらん！！！」

しかし、リーはわかっていた。

これは46cm砲だ。

しかも、こいつらはギルバート諸島で戦った奴だ！

リー中将

「早く撃ち返せ！撃ち返すんだ！」

士官

「近弾！」

遠地

「よし！良いぞ！」

初弾で近弾とは…さい先が良い！  
もう二・三回撃てば絶対当たる！

士官

「敵戦艦、発砲！」

ズダーン！ズダーン！

ズダーン！

遠地

「ん？」

ヒューーウ……

ザバーン！ザバーン！

ザバーン！

遠地

「…見たか？」

滝沢

「ええ、第三砲塔の砲撃が一拍遅かったですね」

遠地

「ああ…銀河隊がどんな攻撃をしたかは解らないが、敵さんは一斉射撃が出来ない」

滝沢

「チャンスですね…一気に叩きますか」

ズドン！ズドン！

ヒューーウ……

ザバーン！ザバーン！

木村少将

「また外れだ」

木村少将率いる水雷戦隊は軽巡洋艦2隻と駆逐艦10隻と撃ち合っていた。

だが、日本側が阿賀野の15.5cm連装砲三基に対し、相手のクリーブランド型軽巡洋艦は15.2cm三連装砲四基……2隻で24発の投射で苦戦していた。

しかし、木村少将は余裕そのもので指揮を執る。

阿賀野

「よ、よく余裕に指揮を執れますね？」

木村少将

「なーに、アメリカ軍とは潮っ気が違うからね」

答えになっているかどうかは解らないが……余裕は有るようだ。  
そして…その『時』がきた。

士官

「距離6000m！」

木村少将

「よし、全艦魚雷発射！緊急回頭！！」

阿賀野

「撃て！」

シュパウ！

カランカラン……

魚雷の発射と同時に、操舵手が舵輪を回す。

そして、全艦が綺麗に回頭を終えた時……

ドガガン！ドガガン！ドガガン！ドガガン！

魚雷の命中音が響きわたった。

ズガン！ズガン！ズガン！

ヒューーウ……

ザバーン！ゴワーン！ザバーン！

リー中将

「ち、被害報告！」

士官

「第一砲塔被弾！旋回出来ませーん！」

状況は非常に不味かった。あの新兵器の攻撃で、第三砲塔との電路が途絶したのだ。

これでは一斉射撃は出来ない。

第三砲塔は砲塔標準で撃つしかない。

しかし、今や脱出できるかも怪しい。

後は、快速艦艇が敵快速艦艇を潰してくれば……

士官

「し、司令！」

リー中将

「なんだ?!」

そう言いながら、士官が指差す方向を見た瞬間……リーは頼みの快速艦艇の現状を知った。

そこには、魚雷発射管をこちらに向けた快速艦艇……木村水雷戦隊が

いた。

リーは愕然とした。

つまり、快速艦艇は全滅、或いは壊滅したのだ。  
逃げ道はない。

このまま魚雷を喰らうか、降伏するかだ。

そして……リーは決断した。

滝沢

「！先輩、あれを！」

遠地

「ん……やったぞ！撃ち方止め！敵さんが白旗を上げたぞ！」

先程、木村少将から敵艦の反対側に回ったと連絡を受けたばかりだ。  
まだ、魚雷再装填が終わって無かったが……敵がそんな事知る訳無  
い。

士官

「やったぞ！」

水兵

「万歳！」

滝沢

「やりしたね」

遠地

「ああ……だが、これからが大変だぞ。警戒を緩めるな」

滝沢  
「はい！」

次号へ

## ミッドウェー島沖海戦（後書き）

もうすぐこの小説も一周年！

次号は回想編物みたいなをやります。更新は26日を予定。

なお、本日と明日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新予定。  
ご意見ご感想をお待ちしております。



一周年記念 日進の回想(前書き)

作者

「皆！一周年だぜ！」

ドンドン！パフパフ！

福本

「まさか、一年で二百話以上いくとはな〜」

マリーダ

「まだ、何話で終わるかも決まって無いのにね」

遠地

「ところで、何人くらい読んでるんだ？」

作者

「えーと、PVが507315アクセスで、ユニークが103939人だそうです(26日現在)」

近江

「10万人も読んでたんだ」

神波

「最初は大丈夫かな？と思っていましたが、ほぼ毎日更新されるのと、昭和の日本ながら異世界様相を取り入れた特異性と、バッド系が無く、ハッピー系な作風が良かったからだと思います」

作者

「それもこれも、毎日楽しく読んで頂いている読者と、タキシード  
仮面さんを初めとした感想を送ってくれている方々、そして！戦車・  
車両の開発に当たってくれている、要塞好きさんと野口博士の多大  
なる貢献のお陰です！ありがとうございます！！！」

マリーダ

「で、今回は日進さん視点？」

作者

「ええ。福本と遠地が出会った時の事などを書いています」

播磨

「それでは、どうぞー！」

一周年記念 日進の回想

ある日の事……

戦艦播磨会議室

播磨

「…ねえ？」

河内

「何ですか、お姉様？」

播磨

「私達つてさ、福本長官に設計されたんだよね？」

薩摩

「ええ、そうですね」

播磨

「それで遠地参謀長と福本長官は仲良しで、私達の設計にも関わっているんだよね？」

土佐

「はい、多分」

播磨

「…私達つて福本長官と遠地参謀長が何で仲良しか知りませんよね？」

全員

「「「「「.....」」」」」

マリィダ

「みんな、お茶にしよう。...あれ？」

日進

「ん、どうしの？.....なんでみんな静かなの？」

播磨

「あ、マリィダさんに日進さん。どうしてここに？」

マリィダ

「みんなとお茶にしようと思ったんだけど.....なんで静かなの？」

ここで、播磨は2人に今までの事を話した。

マリィダ

「あ、私は途中編入だから.....」

日進

「私は知っているわ。何せあの2人とは士官学校に入学してからの付き合いだしね」

土佐

「そう言えば、日進さんの前の船体は士官学校で練習艦を  
していましたね」

播磨

「日進さん。その時の事、話してくれませんか？」

マリーダ

「私も興味があります」

日進

「…そうね。この艦隊設立にも関係している事だしね」

そう言うと、日進は静かに語り始めた。

1935（昭和10）年 4月6日

神戸海軍士官学校

日進

「ん…ふあ…うーん…」

まだ眠そうにあくびをしつつ、伸びをする日進。

しかし、次の瞬間にはすっきりした顔をして、ベッドから抜け出す。

そして、寝間着から軍服に着替え、寝ている間に乱れた髪を整える。

毎日やっている事だが、今日は念が入る。

何故ならば、今日は士官学校の入学式だからだ。

日進

「今日は良い日和ね…昨日はあんなに曇ってたのに」

そう言いながら、きちんと整理された校内を歩く日進。

桜が舞う、桜並木の道は何時見ても飽きる事は無い。そして、この桜並木の道は今日から生徒達が寝泊まりする生徒寮に続いている。

日進

「まさか、最後に高野達の後輩を面倒看るなんて……考えてもみなかったわ」

本来なら、標的として沈められる筈が、偶然空いていた為に練習艦になった日進である。

日進

「まあ、最後のご奉公だもんね。しつかりやんないと……」

「ぐうっ……ぐうっ……」

日進

「あら、酔っ払いても寝ているのかしら？」

偶然、校門の前を通りかかった日進は誰かのいびきを聴いた。

このままほっとけば生徒達の邪魔になると思い、壁の登って確認したら驚いた。なんと、門柱に背を預け寝ているのは、軍服を着た少年……つまり、士官学校生であった。しかも……一般的に士官学校生は短剣が多いのだが、その少年は短剣の代わりに日本刀を腰に帯びていた。

日進

「あら……色んな意味で意外……」  
まさか、寝ているのが生徒だったとは……日進も思っていなかった。  
その時……

「よし！一番……じゃあ無いのかよ……」

また一人、同じ格好で腰には短剣の生徒がやって来た。

「……寝てるのか？おゝい、起きろ」

「んが……今何時？」

「えーと……8時」

「まだ、校門開いて無い？」

「ああ、開いて無い……何時来た？」

「えーと……6時30分ぐらい」

「……早すぎじゃあないか？」

日進

「……………」

日進は壁の上で黙って見ていた。

薩摩

「もしかして……その2人が……」

日進

「そう、福本君と遠地君」

マリーダ

「……大介と遠地君らしい出会い方ね」

播磨

「で、その後は？」

日進

「……恥ずかしながら、直ぐ後、壁から落ちちゃって……で、2人が騒いでいたら、教官に気付かれて、その時2人は『この子が壁から落ちてきました！』って私を指差しながら言ったの。けどね、その教官、私が見えなかったのね、『お前ら、目を開けて寝ているのか？！』って怒られたの」

土佐

「ありやありや、大変ですね」

日進



「まあ、その時に偶然、木村教官が通りかかって、2人を助けてくれたんだけどね……その後、私の正体をついでに明かしちゃった」

河内

「では、福本様と遠地様、日進様が仲が良いのは、その事があったからですね」

日進

「ええ……けど、2人が更に仲良くなったのは、あの出来事ね」

播磨

「あの出来事??」

日進

「ええ……忘れもしない、5月13日の図上演習の時間……」

5月13日

生徒1

「お、おい！大変だ！」

生徒2

「どうした？」

生徒1

「柿宮のクラスが次の兵棋演習の時間に勝負挑んできたぞ！」

生徒3

「嘘やる！」

生徒1

「本当だ！」

あつという間にクラス中が騒がしくなった。

もちろん、柿宮が勝負を挑んできた事には驚いたが、それ以上に柿宮の軍師役の大谷がいた事だ。

大谷は柿宮の影響もあつてか、校内でも指折りの軍略家だった。

この大谷がいる限り、絶対に兵棋演習で勝てる訳ないのだ。

その時……

福本

「おいおい。まさか、大谷がいるからって負けると思ってないだろうな？」

生徒3

「馬鹿！相手は金持ちだぞ！今までの戦いの資料なんか一杯持つてる相手に勝てる訳無いだろう、福本！」

生徒2

「そつだ！だいたい、相手は指折りの軍略家やで？始めから勝負なんて決まってるよ！」

福本

「そんなもん、やってみなきゃ解らないだろう？」

生徒1

「お前なあ…大体なんか策があるのかよ？」

福本

「大筋は決まってるけど、中身は無い。現場を見てみないと解らん」

生徒3

「なんだよ…それ…」

一気にシューンとした空気になるが……

遠地

「はあ…やめだやめだ！どうせ敵わないにしてもだ！このまま引き下がったんじゃ、海軍士官の名折れだ！一丁、最後まで暴れてやるうぜー！」

生徒3

「よーし、言ったな！なら、ボロ負けしたら、どうする？」

遠地

「そつだな…」

福本

「ええい！面倒だ！煮るなり、焼くなりどつにでもせい！」

遠地

「いや、それ俺のセリフ…」

福本

「馬鹿！言い出しっぺは俺だ！」

遠地

「なら、乗り掛かった船だ！2人纏めて好きにしる！」

薩摩

「うわゝ…本当ですか、それ？」

日進

「本当よ。だって窓から全部見てたもの」

播磨

「それでそれで、どうなってんですか?!」

日進

「詳細は省くけど、福本君の作戦勝ちね。数で押して来た敵を誘い込んで、アウトレンジ射撃で壊滅させて、待機していた潜水艦で後ろにいた戦艦四隻を襲撃、旗艦沈没、二隻が中破……結局、柿宮チームはボロ負け」

土佐

「へーえ」

マリーダ

「あれ？大谷君はどうしたの？」

河内

「それに、戦艦が潜水艦に襲われたのは何故です？」

日進

「柿宮君は相手を舐めて掛かったのね。大谷君の意見を無視して、

先に駆逐艦と軽巡洋艦を突入させたの。潜水艦が襲撃出来たのはそう言う訳……多分、福本君は柿宮君が大谷君の意見を無視する事もちゃんと考えて作戦を考えたのね」

播磨

「うわ、凄い」

日進

「けどね……後がヒヤリとしたわ。終わった後、福本君どう言う訳か柿宮君と所に行ったの、それで『何で駆逐艦と軽巡洋艦を突入させたのか?』と訊いたら……」

5人

「……………訊いたら?!」「……………」

日進

「柿宮君曰く『駆逐艦や軽巡洋艦は量産できる……いわゆる捨て駒や。だから突入させたんだ』って」

薩摩

「うわ、非道!」

土佐

「……人間ですか?」

播磨

「それとも只のエリート馬鹿?」

日進

「けど、その後がすっかりしたわ!福本君ね『貴様はそれでも海軍

士官か！』って叫びながら、右頬殴って、左頬殴って、最後にアッパー喰らわせたわ」

播磨

「うわ〜」

土佐

「もっとやっちゃえば良かったのに」

薩摩

「つーか、殺れば良かったのに」

日進

「まあ、遠地君も二発ほど喰らわせてたけどね」

河内

「自業自得です」

マリーダ

「…よく何も起こりませんでしたね？」

日進

「私が慌て2人を逃がしたからね。それに木村教官も見ってたけど、『サンドバック殴ってたんだろ？』って口裏合わせてくれたしね」

播磨

「だから福本長官、口裏合わせるの上手いんだ」

日進

「その後よ、この艦隊の事を明かしたのは…」

日進艦上

福本

「実はさあ、俺、ある事を考えてるんだよ」

遠地

「なんだ？」

福本

「どうせ、どう転んだってアメリカと戦争になる……なら、どうするか？俺は戦艦とか空母とかを一つの艦隊に集めて強力な艦隊にしようと思ってるんだ」

遠地

「けど、連合艦隊には10隻しか戦艦はないぞ？それに速度だって……」

福本

「そんなもん、新しく造ればいい。現有戦艦も改装する。それにこの艦隊は連合艦隊の指揮下には入らん……あえて言うなら、連合艦隊司令長官の指揮下に入る」

日進

「……矛盾して無い？」

福本

「いいえ。つまり、連合艦隊司令長官から指揮を委託された指揮官

が指揮を執って作戦に参加する…独立機動艦隊構想です」

遠地

「ふーん…よくは解らないが…面白そうだな」

福本

「実は艦隊配備の艦艇を設計中なんだ」

遠地

「なら、砲術科員として手伝ってやるうじゃん！」

福本

「ほ、本当か?!」

日進

「…私も手伝ってあげるわ…ただ、その頃には、解体されてるでしょうけど」

福本

「なら、建造するどれかに『日進』って名付けますから、そっちに移って下さいよ！」

日進

「うふふ、出来たらね」

日進

「けど、まさか本当にやっちゃおうとはね…しかも本人が指揮官だし」



マリーダ

「本当ですね」

福本

「失礼するよ」

遠地

「俺達もお茶しに来たぞ」

播磨

「ありや、噂をすればなんとやら」

福本

「噂???何を話してたの?」

マリーダ

「大介と遠地の昔話だ」

遠地

「昔話?」

日進

「ええ、あなた達が出会った時の事とか」

福本

「うわ、やめて下さいよ、めちゃくちや恥ずかしいんですから…」

すると、遠地を含めて、部屋に居た全員が笑い出した。

終わり

次号へ

一周年記念 日進の回想（後書き）

作者

「いや、ギリギリ、26日に更新する事が出来たよ」

福本

「では明日から、ハワイ戦に？」

作者

「ええ。いよいよアメリカとの最後の決戦です。まだまだ、ヨーロッパ編がございますが、この小説に最後までお付き合い下さいませ  
！」

福本

「ご意見ご感想をお待ちしております！」

**ハワイ攻略戦！ 制空権を奪取せよ！**

8月13日 深夜 ハワイ・オアフ島 北方 カフク岬  
レーダー施設

アメリカ兵1

「眠い」

アメリカ兵2

「我慢しろ」

アメリカ兵3

「あと少いで交代だ。耐えろ」

日本軍による夜間襲撃の可能性が有るため、連日の24時間の厳戒態勢である。

コンコン

「おい、交代だよ」

アメリカ兵1

「うお、ラッキー」

そう言いながら、扉を開けた瞬間……

バキッ！

アメリカ兵1

「ウゲ?!」

見事なアッパーを喰らった。

アメリカ兵2・3

「「な、なんだ?!」」

その人物は、電光石火の如く2人に近より、1人は脇腹に拳を叩き込み、1人を背負い投げで壁に叩き付ける。  
この間…僅か30秒。

二一ナ

「…宮木副長…あなた道場破りでも昔してたの?」

宮木

「はい?なんでですか?」

何せ……大の男2人をはっ倒している時、眉一つ動いていなかったのだから…。

宮木

「まあ、最近、厄介事が中々片付かないものですから…。」

二一ナ

「ふ、ふ〜ん…そ、そうなんだ…」

なんだか、危ない感じが…。

少女水兵

「艦長、副長。レーダー施設の制圧はよろしいですか？」

二ーナ

「え、ええ。バレないようにね」

少女水兵

「はい」

宮木

「あと6時間……」

8月14日 午前6時

真珠湾 ヒツカム飛行場

整備兵

「おい…あれはなんだ？」

清々しい朝を迎え、機体の整備に当たろうとしていた整備兵の1人が上空にある機影を見つけた。

その言葉に見張りの兵や、整備兵達が目をこらして見ていると……

カチッ

パシューウ……

ドガン！

見張りの兵

「じゃ、ジャップだ〜！」

ロケット弾が命中してからでは遅すぎる気もするが……とにかく、見張りの兵や整備兵達、たまたま滑走路に出ていた兵士達が、慌て退避壕に飛び込む。

パシューウ！パシューウ！パシューウ！パシューウ！

ドガン！ドガン！

ドガガガガガガガガガガガ！

通常弾頭と三式弾頭が混ざった三式航空用噴進弾が、飛行場に駐機している機体に飛び込み炸裂する。

あるいは、空中炸裂だ。

もちろん、対空火器が応戦するが、奇襲であり、なおかつ、寝起きと言ふ事で初動が悪い。

しかも、応戦できた対空火器はあっという間に制圧された。

そして、これはヒツカム飛行場だけで無く、オワフ島にある、他の七ヶ所の飛行場でもほぼ同じ状況だった。

もちろん、数機の迎撃機が上がったが……10機以上の護衛を引き連れて来る攻撃隊を防ぐ事は無理だ。

日本軍は徐々に制空権を奪取していた。

神谷  
「ヒツカム飛行場の制圧はほぼ完了。他の七ヶ所も駐留機は潰しました」

福本  
「そうか…念のため、道路も気よ付けてくれ。道路に飛行機を置かれたら面倒だ」

神谷  
「わかりました」  
返事をする、通信室に戻って行った。

マリーダ  
「なんとか、第一段階と第二段階は成功ね」

遠地  
「ああ…あとはアメリカ艦隊の動きだな」

福本  
「今頃慌ているだろうな……ルーズベルトは頭の血管が切れてるかもな」

千歳  
「ふふふ、そうかもね」

ミア  
「あとは…アメリカ世論が何処まで押してくれるか…ですね」

新沢



「大丈夫ですよ。こつちには稀代の名将がいますから！」

福本

「おいおい……」

福田

「先輩、第二次攻撃隊の準備完了しました」

福本

「よし、目標はオワフ島にある要塞施設及び砲台、陸上部隊も出来るだけ叩いておく事」

福田

「了解！」

数分後、11隻の空母から第二次攻撃隊が発艦した。

ヒューウ……

ズカーン！ズカーン！ズカーン！ズカーン！

パールハーバーの湾口にあるカメハメハ、ウエーバ、ダイヤモンドヘッド要塞を爆撃していた。

こういつた箇所は、籠られると、とてつもなく面倒だ。だから爆撃している。

ちなみに、市街地及び住宅地の銃爆撃は御法度だ。

これは山本長官以下、参加艦隊の司令官によって通達されている。



ゴワーン！

あっという間に撃墜する。

宮本

「まあ…当たり前か」

ついでに、僚機が地上にある機体を銃撃する。  
その時……

「…危ない！」

宮本

「え？……な！」

自然に聞こえた叫びに不信感をもちつつ振り向くと……とんでも無い物を見た。P38同様双発機だが、機体が黒く塗られており、なおかつ……まるで爆撃機の様に機体上下に付いている銃塔。

宮本

「何なのあの機体?! 識別表に載ってなかった!」

ダダダダダダダ!

ドドドドドドド!

ダダダダダダダ!

ドドドドドドド!





**ハワイ攻略戦！ 制空権を奪取せよ！（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ハワイ攻略戦！ 上陸敢行！（前書き）

登場人物

宮本かすみ 年齢 18歳

階級 少尉

空母連龍所属の戦闘機パイロット。

戦闘機隊の1小隊の指揮を預かっている。

初陣のエセックス防衛戦でP38を5機、A20を2機、B25を2機、B17を1機を撃墜している。

実は本人は仲間に『出撃中に時々声が聞こえる』と語っている。

ハワイ攻略戦！ 上陸敢行！

午前11時40分

戦艦播磨

ラフィール

「長官。砲戦準備完了しました」

遠地

「福本。第七艦隊の砲戦準備は完了した」

福本

「よし。神谷、他の艦隊は？」

神谷

「全艦準備完了しました……大和より打電！攻撃命令です！」

福本

「うむ、全艦撃ち方始め！！」

遠地

「撃てえー！！」

ズカーン！ズカーン！ズカーン！  
ズカーン！ズカーン！ズカーン！  
ズカーン！ズカーン！ズカーン！  
ズカーン！ズカーン！ズカーン！  
ズカーン！ズカーン！ズカーン！





遠地

「砲撃止めー！」

福本

「神谷。龍ヶ岳に連絡、新兵器を出してくれ」

神谷

「はい」

特別輸送艦 龍ヶ岳

水兵

「野口博士！福本長官から出撃命令です！」

野口博士

「ヒエ~~~~ヒエヒエヒエ！やっとこの子の出番なのじゃい！  
さあ、菊華、気よ付けて行ってくるのじゃぞ」

この時、水兵は野口博士を見ながら、首を捻っていた。  
なぜなら、この兵器の制式名称は『日本尊武やまとたけのみ』であって、『菊華』  
と言う名前ではなかった筈だが？……と思ったからだ。  
その時、ふと思いついた噂があった。

水兵達の間で、『福本長官を含めた艦隊上層部全員は艦魂が見える』  
と言うものだ。

まあ、あの若さで長官になれたのだから、そんな物の一つや二つ見  
えてもおかしく無いのだが…。

水兵

「……まさか…野口博士もそんな類いの物が…見えるのか？」

ワイキキビーチ

アメリカ兵1

「おい！ジャップが上陸するぞ！」

その声に、アメリカ兵達が海を見る。

すると、艦艇の間から1両の水陸両用戦車が向かって来る。

アメリカ兵2

「なんだありや？ジャップの奴らたった1両でビーチを獲る気か？」

アメリカ兵3

「け、舐められたもんだぜ！返り討ちだ！」

アメリカ軍指揮官

「いいか？十分に引き付けろ。ビーチに上がったら撃て！」

艦砲射撃を生き残った陣地が迎撃準備を行う。

日本軍も待機していた大発（上陸舟艇）や、揚陸艦が例の水陸両用戦車を先頭に後から続く。

この時、何人かのアメリカ兵が気付いたのだが、戦艦が近くにあるせいか、先頭の水陸両用戦車が異様に大きく見えた。

もちろん、近付い来ているからだが、それを差し引いても大き過ぎる。

その疑問は、近付いて来るごとに大きくなり、多くのアメリカ兵が疑問に思い始めた。

そして、あと100m程になった時……

アメリカ軍指揮官

「なんだ、あのデカさは?!…モンスターか!!」

アメリカ兵4

「う、撃ちますか?!」

アメリカ軍指揮官

「撃て!計画変更!先頭の水陸両用戦車を狙え!ファイヤー!」

ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ダダダダダダダ!

ダダダダダダダ!

ザバーン!ザバーン!ザバーン!ザバーン!ザバーン!ザバーン!

「うひゃあゝ…さすがハワイ。ワイキキビーチに防衛線を張ってたな」

そう言いながら巨大な砲塔のハッチから双眼鏡を覗きつつ、呟くのは、五十嵐真人少佐(いがらしまさひと)(20)。

この最大最狂の水陸両用巨大戦車『日本尊武』の戦車長だ。

まあ、データ化すると……

全長 35.8 m

全幅 20.5 m

全高 17 m

重量 約2700 t (270 tの間違いではありません)

速度 15 km/h

航続距離 600 哩 (水陸両用なので)

エンジン 艦船用エンジン (燃料はもちろん、重油)

#### 武装

25.4 cm 50口径連装砲×1基  
12.7 cm 45口径連装高角砲×10基 (前面5基、後面5基)  
25 mm 連装機銃×6基 (前面3基、後面3基)  
火炎放射器×6基 (両側面に3基づつ)

装甲 280 (170 mm)

……と、奇才野口博士しか考案・開発しない様な代物だ。

五十嵐

「なあ、菊華。大丈夫……だよな？」

五十嵐は隣に居る『日本尊武』の車魂、菊華に話を振る。

菊華

「あのね…御父様が設計したの。大丈夫に決まっていますでしょう」

五十嵐

「乗ってる方としては心配なんだけどね…ぶつつけ本番だから」

菊華

「大丈夫。御父様曰く、動かない物は作らない……って」

五十嵐

「……不安だ」

しかし、そんな事を言っただけでも仕方がない。

水兵

「艦長。（日本海軍では水陸両用戦車は艇扱いだが、日本尊武は色んな意味で特別な為、艦扱い）敵が撃ってきましたので応戦します」

五十嵐

「ああ。駆逐艦にも伝えてくれ」

水兵

「はい」

五十嵐

「さて、中に入ろう」

日本尊武に対して撃ってきた陣地は既に、位置を暴露している、だから射撃は容易だ。

ズガン！

ドン！ドン！ドン！

主砲の25 / 4cm連装砲の射撃に続き、副砲の12 / 7cm連装

高角砲も砲撃を開始する。もちろん、後方の駆逐艦もだ。

ゴワーン！ゴワーン！

ボワーン！ボワーン！ボワーン！ボワーン！ボワーン！ボワーン！  
ボワーン！ボワーン！ボワーン！ボワーン！ボワーン！ボワーン！  
ボワーン！……

ワイキキビーチが煙に包まれる……。

石田

「うわ……キャリー達じゃないけど……日本軍で良かった」

大発の上でワイキキビーチを見ていた石田が呟いた。

石田

「よし……みんな、俺達はいよいよアメリカの太平洋の根拠地、ハワイ・オアフ島に上陸する」

大発に乗る陸戦隊兵達が一斉に相づちをうつ。

石田

「歩兵として一番槍は名誉な事だ。山本長官や福本長官が言っていたが、ハワイを抑えれば日本はアメリカと講和できる。日米戦を終わらせる事の出来る大切な一戦であり、日本の未来を懸けた一戦だ」

そこで一度息を吸う。

石田

「だからこそ、俺達はハワイに来た！日米戦を終わらせ、真に平和を乱すソ連を倒す為にだ！だから、ここで死ぬな！福本長官では無いが、死ぬなら日本の未来を見てから、日本で死のう！いいな！」

陸戦隊兵全員

「ooooooooooooooooooooooooooooooooooooo！」

艇長

「中尉！上陸します！」

石田

「総員着剣！上陸用意！」

陸戦隊兵全員が身構える。

艇長

「乗り上げます！」

ズサアアアア！

バン！

大発が砂浜に乗り上げる音、ランプが降りる音…

石田

「総員！突貫！！」

陸戦隊兵全員

「ooooooooooooooooooooooooooooooooooooo！」



ズダダダダダ!

上陸した陸戦隊兵で軽機関銃を持つ隊員は、直ぐ様砂浜に伏せて援護射撃を行う!

キャリー

「石田!」

石田

「お、早いな、キャリー!」

隣の大発に載っていた、キャリーが駆け寄る。

石田

「良かった!一式自走無反動砲が有れば、陸戦隊兵だけでも大丈夫だ!」

キャリー

「マチルダ姉さん達も、もう直ぐ上陸するよ!」

そう言つて指差す方を見ると、搭載している25mm機銃や8cm高角砲を乱射して接近する揚陸艦達が見える!

石田

「よし!いいぞ!この戦いは勝つた!」

ビーチ付近の敵は、ほとんどが日本尊武を狙い撃つて位置を暴露し、日本尊武か駆逐艦の射撃を喰らつて制圧されていく。

この為、後続の大発も被害を受ける事なく、砂浜に向かつて来る。

陸戦隊兵

「中隊長！敵のM4戦車です！3両接近！」

日本尊武を止めに来たか、あるいは上陸部隊を叩きに来たか、どちらかは解らないが、敵のお出ましだ！

石田

「キャリアー！側面見せてる馬鹿に一発叩き込め！」

キャリアー

「オツケー！」

ボガン！

ゴワーン！

石田

「重火器分隊！噴進砲で残りを片付ける！」

陸戦隊兵

「了解！」「了解！」

返事と共に、2人の陸戦隊兵が噴進砲を担ぎ、2人が急いで砲弾を装填する。

装填を終え、噴進砲を持つ隊員の鉄兜をポンッと叩くと、噴進砲が発射された！

バシユーウ……

ゴワーン！ゴワーン！

石田

「よし、敵陣地を制圧する！突撃！」

瑠奈

「石田くん…早っ！」

マチルダ

「私達も遅れる訳にはまいりませんわ！」

大島中尉

「大沢！前進しろ！」

大沢

「はい！」

揚陸艦から降りたばかりの戦車隊も歩兵に負けじと前進する。

五十嵐

『こちら、日本尊武！大島中尉！九時の方向からブラッグとパーシング！』

大島中尉

「了解！2号車、3号車！いいな？」

戦車長1

「こちら2号車！オッケーです！」

戦車長2

「こちら3号車！何時でもいけます！」

戦車長3

「こちら第2小隊！3両共に準備万端です！」

2号車、3号車は対ソ戦に備え各所を改良した四式中戦車2型、第2小隊は3両共同様の改良を行った五式重戦車2型だ。

大島中尉

「よし。2号車、3号車は側面に回れ！第2小隊は続け！」

戦車長

「了解！」「」

指示された通りに動く。

大島中尉

「よし！撃て！」

ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！

ゴワーン！ボワーン！

大島中尉

「パーシング1、ブラッグ1撃破…気付いたな…大沢！移動！」

大沢

「了解！」

残りのパーシングとブラッグが応戦しようとするが……

ドーン！ドーン！

ゴワーン！ボワーン！

側面に回っていた四式中戦車の射撃を受けたパーシングが撃破される。

大島中尉

「よし！五式、もう一撃喰らわせ！」

ドーン！ドーン！

グワーン！ゴワーン！

大島中尉

「よし！」

大沢

「中尉も戦車指揮に慣れましたね。」

玲奈

「ほんとだね。」

次号へ

ハワイ攻略戦！ 上陸敢行！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

ハワイ攻略戦！ 進撃！（前書き）

登場人物

いからしまさと  
五十嵐真人 年齢 20歳 階級 少佐

日本尊武の戦車長。  
実は電号作戦前に、結婚したばかりの新婚さん。新妻を日本に残しての出撃である。

ハワイ攻略戦！ 進撃！

午後2時2分 ワイキキビーチ

宮崎中将

「現状は？」

参謀

「は、第七艦隊特別陸戦隊は既に指揮下の一個戦車師団と二個歩兵師団を揚陸し、進撃中です。長野戦車連隊は我が師団の先鋒隊と共に前進中です」

宮崎中将

「そうか…ところで、あの『日本尊武』はどうした？」

参謀

「現在、パールハーバーの重油タンクを抑えるべく、西進中です。ついでに報告ですが、ホノルルはオープンシティになっていると、第七陸戦隊のフェルデナント中將から連絡が入っています」

宮崎中将

「そうか、出来るだけ民間人の犠牲は避けたかったからな…それは良かった」

そう言つと近くにあったジープに乗り込む。

宮崎中将

「さて、我々が海岸にいても始まらない。前線に行こう」



参謀

「はい」

砲兵隊指揮官

「くそ、ジャップめ！だが、貴様らの幸運もここまでだ！」

彼の後ろでは、203mm榴弾砲、155mm榴弾砲『ロング・トム』の砲撃準備をしていた。  
狙いは……もちろん、ワイキキビーチで揚陸作業をしている日本軍である。

砲兵

「指揮官！準備完了しました！」

砲兵隊指揮官

「よし！全砲っ……」

石田

「突貫！！」

砲兵隊指揮官の声をタイミング良く遮るかの様に、石田大尉率いる第六中隊が襲い掛かった！

ダン！ダン！ダン！ダン！パン！パン！パン！パン！タタタタタタ！  
タタタタタタ！

直ぐ様、銃撃戦に成るが、白兵戦になると本職の歩兵にも劣る砲兵

が敵う筈無く、あっという間に制圧された。

石田

「いや…まさか偵察中に砲兵陣地を見付けるとは……砲撃される前で良かったよ」

頭に手の後ろ置き、座っている捕虜達を見ながら、呟く。

陸戦隊兵

「中隊長。この砲兵陣地には大量の弾薬が置いてありますよ！」

石田

「そりゃいい。陸戦砲兵隊にいい土産が出来たな」

砲は二種類で20門、大量の弾薬付きだ。

石田

「まあ、同士討ちは嫌だな…日章旗か何か、味方が解る物を掲げてください」

陸戦隊兵

「了解」

ゴワーン！

アメリカ軍戦車長

「ば、バカな！あの戦車に悪魔でも乗っているのか!？」

乗車のパーシングを撃破されて脱出した戦車長が、逃げながら言い放った。

その戦車は砲塔に『666』と書かれていた。

長野

「次、一時の方向、距離600mのパーシング！」

砲手

「はい！」

ズドン！

ゴワーン！

正面装甲を撃ち抜かれたパーシングの砲塔が、飛び上がる。

今や道路の両脇には、長野車によって破壊された戦車が打ち捨てられている。

長野

「まさか、先鋒隊と共に前進していて、遭遇戦になるとはな」

一通り敵を一掃すると、彼の乗る六式重戦車は敵を追撃すべく再び前進する。

そして、砲塔には『666』のナンバーが書かれていた。

ダダダダダダダダ！

ダダダダダダダダ！



今度は一式対空戦車が四連装37mm機銃をブツ放して援護する。

小隊長

「突撃！」

ワイキキビーチ

一隻の内火艇がワイキキビーチに到着した。

そこから降りて来たのは……陸戦隊服に鉄兜を被った福本とマリィ  
ダだった。

マリィダ

「大丈夫かな……」

福本

「今さら気にしたって、仕方ないよ。一応、遠地と千歳には伝えてあるし」

マリィダ

「…不安だ。色んな意味で不安だ」

福本

「そう言われても…さて、こんな所でボケーと出来ないし、車つかまえて、さっさと行こう」

次号へ

**ハワイ攻略戦！ 進撃！（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ハワイ攻略戦！ ホノルルライン

ホノルル市郊外から25kmの地点

フェルデナント

「うーん…さすがに抵抗が激しくなってきたな…」

テントを張っただけの仮設司令部で、各部隊から入ってくる報告を持ってきた黒板に副官達が記入する。

優衣

「各地でアメリカ軍が防衛線を張っています。占領遅延を狙ったものかと」

一式情報管制指揮戦車の車魂の優衣がフェルデナントに報告する。

フェルデナント

「さすがに、歩兵と戦車じゃあここまでか……航空支援と砲兵の支援砲撃が必要だな」

福本

「航空支援なら何時でもいけるぞ」

フェルデナント

「そうですね……って！福本長官！？」

いきなり話に入ってきた福本を危うく流しかけたフェルデナントだが、ギリギリのところまで気が付いた。



福本

「よう、フェルデナント。マリータもいるぞ」

フェルデナント

「な、何やってんですか？こんな所で！」

福本

「ん、何って、前線視察」

フェルデナント

「前線視察って……」

視線をマリータに移すと、マリータが『止められない』と首を横に振っていた。

石田

「失礼します…って、長官!？」

福本

「……そんなに驚くか…」

石田

「あれ、何か悪い事言いましたか？」

マリータ

「…気にしないで」

フェルデナント

「…そうですね…あ、石田大尉、何か？」

石田

「あ、現状報告です」

そう言うと、机に置いてある地図を使い、報告し始めた。

石田

「奴さん、道路沿いに防衛線を形成しています。それも、二重三重に。これを破るには航空支援と支援砲撃、戦車を先頭にして一斉突破しないと破れません」

フェルデナント

「なるほど」

マリダ

「艦砲射撃は？あれなら大分楽にあるけど？」

石田

「自分も最初はそう思ったのですが、よくよく見てみると、道路や民家を破壊する恐れがありましたので……」

福本

「適切な判断だな。さてと……」

優衣

「！どちらに？」

福本

「将校斥候だ。現場を見ておきたい」

優衣

「な！き、危険です！」

福本

「危険は承知の上だ。それに戦場なんて元から危険地帯だし」

優衣

「！ですが、長官に何かあったら…」

福本

「大丈夫だよ。それに僕が死んだところで、流れは変わらない」

優衣

「しかし…」

それでも反論しようとする優衣の頭を撫でてやる。

福本

「わかってる、優衣は優しいよ。けどさ、僕もこの戦争を始めた人だ。それなりの償いが必要なんだよ」

石田

「長官。前線に参られるのでしたらご一緒にいかがですか？」

福本

「ああ、そうさせてもらおうよ。な、マリータ」

マリータ

「……ん、あ、ああ。それでいい」

石田

「わかりました。こちらへ」

石田が2人を案内し、福本とマリーダは仮設司令部から出て行った。

優衣

「…フェルデナントさん。私が頭を撫でられてた時、マリーダさん、羨ましそうに見てたんですけど？」

フェルデナント

「…多分、本当に羨ましかったんだと思うよ」

福本

「うーん……確かに強固そうな防衛線だな」

土囊で固めた機銃陣地、ダックインした戦車が道路を狙える様配置されている。

マリーダ

「コンクリート陣地になって無いだけマシね。けど、あまり時間は浪費出来ないわよ」

福本

「ああ、ヒツカム飛行場付近に上陸する特別陸戦隊を支援しないといけないしな」

石田

「捕虜にした砲兵将校が言ってました。『ホノルルラインなら、お

前達を1ヶ月足止め出来る』と、ほざいてました」

福本

「その根拠がどこにあるんだか……」

そう言うと、また双眼鏡で偵察をする。

1ヶ月とまではいかないが、1週間程なら保ちそうだ……普通なら。

福本

「こりゃあ、浸透戦術の出番だな」

陣地を見ながら呟いた時、福本はそれに気付いた。敵の偵察隊である。

一個分隊程度の部隊がこちらに向かって来ている。

福本

「敵の偵察だ。退避しよう」

石田

「はい」

マリーダ

「あら、マチルダさんに大沢君じゃない」

大沢

「あ、長官に参謀長！なぜこちらに？」

福本

「前線視察さ。2人こそ、ホノルルラインの攻略か？」

大沢

「ええ。敵が防衛線張ってるので、ここに集結せよとの命令を受けまして」

福本

「その防衛線だが、戦車がダックインしてた、航空支援がいるぞ」

大沢

「うわ…キツイ」

福本

「そこでだ、ある作戦を考えた。のるか？」

石田

「いつの間に…」

大沢

「まあ、自分はいいですよ。大島中尉が聞くかは知りませんが」

マチルダ

「作戦を聞いて判断しますわ」

次号へ

## ハワイ攻略戦！ ホノルルライン（後書き）

明日と明後日は、『士官候補生異世界奮闘記』を更新いたします。  
ご意見感想をお待ちしています。

ハワイ攻略戦！ ホノルルラインを突破せよ！ 前編

午後7時頃……

そこには出撃準備を整えている戦車隊や歩兵隊の姿があった。

福本

「まさか…この作戦に皆がのるとは思わなかったな」

そう言いながら、出撃を待つ部隊を回る、福本とマリイダ。

マリイダ

「そうね。戦車と歩兵による夜襲突破…考え様によっては、無茶な作戦なのよね」

長野

「そうは思いませんよ」

福本

「長野連隊長。どうしてですか？」

長野

「長野で結構です。こういった防衛線を突破するには時間が掛かります。一気に突破するには、数少ないチャンスをいかすしかありませんから」

福本

「あははは…今まで海で戦った人間が、陸戦に口を出して、フェル



デナントに気を使わせてしまいましたかね？」

長野

「気ですか？多分使っていませんよ。あとは夜襲と浸透戦術がどこまで効くかですね」

福本

「ええ、そうですね」

さて、福本長官が考えた作戦……それは簡単に言えば、戦車隊を先頭に敵防衛線を敵中突破し、その間に宮崎師団と第七陸戦隊により、防衛線を制圧すると言うもの。

最初は歩兵中隊と戦車中隊から話が始まったのだが、人を伝う内に拡大し、福本が仮設司令部に戻って来た頃には第七陸戦隊と宮崎師団、長野連隊も巻き込んでいた。

とにかく、ホノルルラインに有効な手段を模索中だった部隊にとって、福本が出した作戦はやってみる価値はあった。

長野

「……そろそろか」

夜光塗料の塗ってある秒針が、作戦開始の時間を告げた。

長野

「カク、カク。こちら長野だ。これより前進を開始する。時速8km、無灯火で前進。車体機銃は小隊長車しか撃つな」

無線でそう言うと、操縦士に前進の命令を出し、前進を開始する。もちろん、後続の第七陸戦隊の戦車隊、随伴歩兵隊も前進を開始する。

ちなみに、同じ命令は第七陸戦隊の戦車隊にも出ており、随伴歩兵隊には発砲禁止の命令が出ている。

福本

「さてと、僕達も行くのか」

石田

「はい。第六中隊、前進！」

仮設司令部

優衣

「報告。長野連隊長、突撃を開始しました！」

フェルデナント

「よし、第七陸戦砲兵隊、支援砲撃開始！」

士官

「撃てー！」

ドンー！ドンー！ドンー！ドンー！ドンー！ドンー！ドンー！ドンー！ドンー！

……

ヒューウ……



その何秒かもしない内に、銃弾が飛んできた。  
それが合図かの様に左右から一斉に銃砲弾が飛んできた！

長野

「全車、戦闘許可！ただし、小隊長車以外は車体機銃は撃つな！」

ドーン！ポーン！

ゴワーン！ゴワーン！

ダダダダダダダ！

タタタタタタタ！

あとは物凄い撃ち合いである。

無灯火で前進するため、シルエット上目立つ戦車に銃砲火が集中した。

しかし、機銃にしる、37mm対戦車砲にしる、日本軍に配備された戦車の側面装甲は撃ち抜けない。

（損傷させる事は出来るが）しかも、夜戦とゆう事もあり、自然に火線が高くなり、日本軍に撃ち込んだ銃弾が、反対側の友軍陣地に飛び込む……自然と同士討ちの状態になった。

これに修正を加えた陸戦砲兵隊の支援砲撃も加わり、アメリカ軍も指揮系統が混乱し始めた。

そして、突破隊が通過した陣地に後続の陸戦隊と宮崎師団が制圧していった。

福本

「今のところは上手くいつてるな」

銃弾が上の方で飛び交う中、99式軽機関銃を持ちながら進む福本。

石田

「すみません、機関銃を持ってもらって」

福本

「ん、別に。気にして無いから」

マリーダ

「それが戦場の真ん中で話す事か？」

そう言いながら、身を屈めつつ前進するマリーダ。

福本

「しかし、まさかここまでえらい事になるとはな」

先ほどから銃弾は飛んでくる、しかし、そのほとんどが戦車に向けて撃っているものばかりだ。

その為、戦車の陰に隠れている歩兵や一式自走無反動砲、ユニバーサルキャリアには余り飛んでこない。

キャリアー

「それはいいんですけど……福本長官は大丈夫ですか？」

福本

「ん？何が？」

キャリアー

「いえ、艦隊司令長官がこんな所に……」

福本

「大丈夫、大丈夫。こんな所で死んでたら命が幾つあっても足りないよ」

キャリアー

「はぁ……そうですか……」

次号へ

ハワイ攻略戦！ ホノルルラインを突破せよ！ 前編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

ハワイ攻略戦！ ホノルルラインを突破せよ！ 後編

ダダダダダダダダ！

ダダダダダダダダ！

ダダダダダダダダ！

タタタタタタタタ！

タタタタタタタタ！

ドパーン！ドパーン！ドパーン！

ダーン！ダーン！ダーン！

銃声、砲声が辺りに響き渡る。

しかし、突破隊が通った後は、だんだんと銃声も砲声もしなくなっていた。

後続の部隊が陣地を制圧しているからだろう。

長野

「9時の方向、アカ（対戦車砲）、撃て！」

ドパーン！

ゴワーン！

榴弾の直撃を受けて吹き飛ばす対戦車砲もあれば……

大島

「3時の方向！敵戦車！てえー！」

ズドン！



グワーン！

徹甲弾をぶち込まれたシャーマン戦車が爆発する！

福本

「長野連隊長も、陸戦戦車隊も暴れてるな」

石田

「歩兵隊は暴れてませんがね」

多少不満を込めつつ呟く石田。

キャリアー

「まあまあ、随伴歩兵がいるから、マチルダ姉さん達が暴れる訳だし」

石田

「むづ〜」

確かに、石田の不満も解らん訳では無いが、随伴歩兵の発砲は禁止されているから仕方がない。

マリーダ

「はいはい。無駄話してないで、ちゃちゃと歩く！」

福本

「……………元気だな」

突破開始から2時間後、突破隊はホノルルラインの第一ラインを突破し、第二ラインに入った。さすがに、奥に行けば行くほど抵抗の方は強くなるが、前進していた陸戦砲兵隊が支援砲撃を開始し、抵抗を抑えていった。ちなみに、着弾観測は突破隊に随伴する観測隊が行っている。

さて、突破隊が前進するに連れて、第二ラインを防衛するアメリカ軍に混乱が起き始めた。第一ラインを制圧され、撤退して来た第一ラインの守備隊を第二ラインの守備隊が日本軍と誤認し、陣地によっては友軍に発砲し始めた。

これに対し、撤退してきた部隊も、日本軍に奪取されたものと思い応戦した。

この為、あちこち同士討ちが発生。日本軍お得意の夜襲と、情報不足による同士討ちにより、アメリカ軍は知らず知らずの内に傷口を拡げていった。

優衣

「報告！アメリカ軍、第一ラインから撤退した部隊と同士討ちを始めました！」

この報告を受けたフェルデナントと宮崎中将は互いに、ニヤリと笑った。

フェルデナント

「これはチャンスです。敵の混乱に乗ずれば、ホノルルラインを一

拳に崩せます！」

宮崎中将

「うむ、敵はホノルルラインに部隊の大半を置いている様だ。ここで叩いておけば、ハワイ攻略がやり易くなるな」

2人は直ぐに……

フェルデナント・宮崎中将「全部隊に連絡！この混乱に乗じ、ホノルルラインを攻略せよ！！」

副官

「了解！！」

賭けに近かった突破作戦は、今やホノルルラインだけでなく、ハワイ攻略に大きく影響する作戦になっていた。

1674

マチルダ

「福本長官！」

福本

「やあ、マチルダ。どうした？血相かえて？」

マチルダ

「後続部隊に一齐攻撃命令が出ましたわ！混乱に乗じて、ホノルルラインを攻略するつもりですわ！」

福本

「…アメリカ軍が相当混乱しているからな……2人共、チャンスは今しかないと判断したな」

マリイダ

「あら、それを狙ったんじゃないの？」

福本

「いや。ただ、防衛線をごじ開ける切っ掛けにするつもりだったんだけど……いやはや、世の中は解らん」

石田

「いや……そう言う問題でしょうか？」

マリイダ

「まあ、私達は予定通り突破するだけよ」

キャリアー

「そう言う事！じゃあ、行こう！」

第二ライン突入から3時間後、第二ラインを突破隊は突破した。

そして、第三ラインに突入する前に、第二ライン突破の一報を伝えると、待機の命令を受けた。

長野

「どつゆつ事でしょうか？」

大島

「まさか、このまま、ここで退却して来るアメリカ軍を叩けっ言  
うんじゃないでしょうね？」

大沢

「それはないでしょう。そんな事をさせるより、第三ラインに突入  
させてますよ」

なぜか、福本の周りに集まり、随伴していた炊事トラックから供給  
されたお湯で眠気覚ましの暖かい紅茶を飲む面々。

石田

「言えてますよ。こんな所で待機させる理由があるんですよ。長官  
はどう思います？」

福本

「ん、そうだな……」

そう言つと、紅茶を一口飲み、見解を言う。

福本

「宮崎中将も、フェルデナントもこんな所で待機させるには理由が  
あるんだよ。まあ、砲兵隊を待つてるとか、何とかで」

マリーダ

「まあ、その待機命令で、私達も休憩している訳だしね」

そう言った会話をしつつ、突破隊は待機していた。

実はこの待機の間、フェルデナントは海軍無電を使って航空支援を頼んでいた。さすがに第三ラインは強固だろうと考えたからだ。最初はダメ元だったが……直ぐに返事が返ってきた。まず第一機動艦隊第二航空戦隊の山口多聞少将、次に第二機動艦隊の角田覚治中将から返事が返ってきた。実は山口少将と角田中将は後輩と先輩の関係で、密かに独断夜間空襲を仕掛けるつもりで準備をしていたが、フェルデナントの支援要請を受け、直ぐ様、指揮下の航空隊を総動員し、支援に当たらせるべく攻撃隊を発艦させた。

グオングオングオングオングオン……………

福本

「フェルデナントめ……航空支援をする為の待機か」

マリーダ

「けど、どこの航空隊？」

福本

「まあ、猛将の2人じゃないかな」

そう言いつつ、福本達が眺めていると、照明弾が投下された。すると、第三ラインに空爆が開始された。

福本

「…よし！」

チンツッ！

軍刀を抜くと……

福本

「敵は崩れたぞ！突撃！」

石田

「総員、突貫！！」

陸戦隊兵達

「……………おう！！」

……本来なら、指揮系統だ、指揮権限だ、何だか文句が出そうだが……何故か出なかった。

長野

「全車、突っ込め！蹂躪せよ！」

大島

「行けー！突撃！」

突破隊が第三ラインに突撃する！

空爆で混乱しているところに、夜襲と白兵戦が得意な日本軍が突撃すると、あつという間に乱戦になった。しかし、勢いは日本軍にあり、そして、止まらない！福本も99式軽機銃を乱射しつつ、味方の先頭に立って戦う。

こうなると陸戦隊兵も長官を守れと奮闘する！

戦車隊もブレンガンキャリアー、一式自走無反動砲も踏み潰せとばかりに進撃し、戦車や機銃陣地を潰して行く！

……ホノルルライン、最後のラインの運命は決しかけていた。

翌朝……ホノルルラインの第三ラインには日章旗が掲げられていた。

次号へ



ハワイ攻略戦！ ホノルルラインを突破せよ！ 後編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ハワイ攻略戦！ 夜襲のあと

8月15日

福本

「おはよ〜」

フェルデナント

「あ、おはようございます」

福本

「何時間ぐらい寝てた？」

フェルデナント

「えーと…5時間程ですね」

福本

「つーと、今は11時頃か…」

そう言うと優衣から、ミルクティーを受け取り、一口飲む。

フェルデナント

「ところで、参謀長は？」

福本

「ん、マリーダなら、気持ち良さそうに寝てたから、そのまま寝かしてある」

フェルデナント

「へへえ…そうですか」

福本

「マリィダに何か用事があったのか？」

フェルデナント

「い、いえ、別に用事は…」

福本

「そうか…ところで戦況は？」

フェルデナント

「はい、現在、宮崎師団、長野連隊と共に待機中です」

福本

「待機？今村さんが後続師団を率いて来るのかい？」

フェルデナント

「はい。歩兵師団と戦車師団を率いてここに来るそうです」

福本

「いつ？」

フェルデナント

「11時半頃に到着予定です」

福本

「…今、何分？」

優衣

「えーと…11時15分です」

福本

「……急いでマリイダを起こしてこよう」

優衣

「あ、私が起こして来ます」

福本

「そうか、じゃあ頼むわ」

優衣

「はい」

15分後……

今村大将

「やあ、福本くん。昨夜は眠れたかね？」

福本

「…それは何かの皮肉ですか？」

今村大将

「あつはつはつは、冗談だよ。昨夜は大変だったそうだね。最後は先頭に立って突撃したとか」

福本

「…いつの間にそんな噂が作られたのか、本官にも全く解りません」

今村大将

「そうか…まあ、火の無い所に煙は起ため…それに近い事でもあったのかな」

そう言い、テントの仮設司令部に入ろうとした時……

今村大将

「そつだ、確か途中で君の連れを拾ったが…」

福本

「連れ？」

尾崎

「あははは……」

マリーダ

「尾崎さん？」

今村大将

「ここに来る途中で、とぼとぼ歩いていたら、乗せてやったのだが……」

福本

「あ、ありがとうございます」

尾崎

「あははは…すみません」

福本

「別に構いませんよ。ですが、来るんだったら、連絡してくれれば良かったのに」

マリイダ

「そうそう、連絡してくれれば、迎えぐらい出したのに」

尾崎

「いえ、福本長官もマリイダさんも疲れてお休みになっていると思っ…」

優衣

「なら、フェルデナント司令に繋がれば良かったのでは？」

尾崎

「……………あ！」

福本

「…まあ、過ぎた事だし…ところで、なぜこちらに？」

尾崎

「もちろん、取材です！」

マリイダ

「まあ……………それもそうね」

石田

「会話中失礼します」

福本

「ん、どうした、石田？」

石田

「は、ヒツカム飛行場奪取をこれから開始するそうです！我が中隊はその支援に向かいます」

福本

「そうか…石田、すまんが鉄兜あるか？」

石田

「ええ、ありますよ。でも、長官は持つてるでしょっ？」

マリーダ

「違う、尾崎さん用」

石田

「あ、はいはい。わかりました」

次号へ

ハワイ攻略戦！ 夜襲のあと（後書き）

作者

「明日は休み 大学休み」

新沢

「…作者、とうとうずる休みを…」

作者

「違うわ！」

和泉

「ん、違うのか？ならポケたか？」

作者

「もっと違う！」

新沢

「え、明日は平日ですよ」

和泉

「ちなみに昨日は文化の日だ」

作者

「そんな事は解つとる！」

新沢

「なら、なんで休みなんだよ」



作者

「入試だ！入試！明日と明後日は入試なんだよ！だから、家でゆっくり、この作品を更新する（出来れば、『士官候補生異世界奮闘記』も）」

新沢

「ふ〜ん、そう何ですか」

和泉

「ご意見ご感想は何時でも待っている…誰か一緒に私と飲まんか？飲み比べなら大歓迎だぞ」

作者

「ああ！俺のセリフを盗るな〜！」

## ハワイ攻略戦！ ヒツカム飛行場確保

ヒツカム飛行場 南の方角

福本

「石田、どう思う？」

石田

「飛行場の奥にアメリカ太平洋艦隊司令部があります。それに燃料タンクも……これは一気に制圧しないと、燃料タンクを爆破されてしまいますよ」

マリダ

「その意見に賛成ね。ここは一気に力押しでいくしかないわ」

揃って双眼鏡でヒツカム飛行場を偵察する3人。

尾崎

「けど、戦車いますよ？」

石田

「それぐらいなら何とかありますよ。こっちだって持ってるんだし」

尾崎

「戦車で燃料タンクを撃つたら？」

石田

「う……」

福本

「なら、日本尊武で戦車を吊り出すしか無いな」

マリーダ

「そうね。それなら戦車も全部寄って来るわね」

福本

「よし、なら、日本尊武に連絡しよう」

石田

「1時10分：時間です、長官」

福本

「ん、そうだな」

ズドーン！

その時、雷鳴の様な轟音が響いた！

ヒツカム水路から日本尊武が上陸して来たのだ！

それだけでは無い。

高雄、愛宕、摩耶、鳥海の重巡洋艦が対岸の急造陣地に艦砲射撃を行っていた。大田少将率いる特別陸戦隊の上陸を援護する為だろう。

そして何より…戦車は日本尊武に集まりだした！

福本

「よし、石田、すまないが、一個分隊でいい、貸してくれ」

石田

「どちらに?」

マリダ

「太平洋艦隊司令部。行っても、ニミッツ大將は居ないと思うけど、家探しはしといた方がいいから」

石田

「わかりました。キャリー、君も長官と行ってくれ」

キャリー

「オツケー」

福本

「マチルダ、瑠奈。石田達を頼む!」

瑠奈

「了解!(^^)」

マチルダ

「任せて下さいですわ!」

福本

「総員、攻撃開始!」

大島

「全車、撃て!」

マチルダ・瑠奈

「ファイアー！」

ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！  
ゴワーン！

いきなりの横槍に、ジャーマン戦車が数両爆発する！

石田

「撃て！」

ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダタタタタ  
タタ！  
ダタタタタタタ！

99式歩兵銃が乱射し、99式軽機関銃が援護射撃を行う！  
その間に、重火器分隊が迫撃砲や擲弾筒の曲射弾道兵器が遮蔽物に  
隠れた敵を制圧してする。  
また、一式75mm噴進砲や新たに配備された三式105mm噴  
進砲を持った陸戦隊兵が戦車を破壊していく。  
こうなると、陸戦隊を追い出すのは難しい。

戦車長

「う、撃てー！」

ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！ド  
ーン！ドーン！

カン！キン！カーン！キーン！カン！カン！キーン！キーン！キン！

先程から日本尊武を相手に撃ちまくっているが、全然効いている様子は無い。

戦車長

「や、奴は化け物か!」

日本尊武

五十嵐

「菊華、大丈夫か?」

菊華

「痛いよ…十分」

五十嵐

「あ、ごめん」いくら厚い装甲でも、その衝撃までは防げない。そして、その衝撃は車魂にくる。

五十嵐

「もうちょっと待ってよ、とつとと片付けるから」

そう言いつつ、12、7cm連装高角砲の射撃指示を出す。12、7cm砲弾を喰らえば大抵の戦車は撃破できる。すると、戦車が退却し始めた。

無線に耳をすますと特別陸戦隊が無事上陸出来た様だ。

それに、第七陸戦隊も横合いから支援してくれている様だ。

五十嵐

「さてと……どうしようかな?」

バタタタタタ!

福本

「ち、あのM2機銃が邪魔だな!」

やはりと言つべきか、司令部の前には防御陣地があり、M2機銃を据えている。

マリータ

「どうするの?」

尾崎

「どうするんですか?」

キャリー

「なんで、こっちに付いて来ちゃったの、尾崎さん?」

尾崎

「それは!取材の……」

福本

「わ!馬鹿!立つな!」

慌てマリータとキャリーがこかす。

プーン!

ベシヤッ!

尾崎

「きゃう〜」

福本

「はあ〜」

ため息を吐くと、拳銃の装弾を確認する。

マリィダ

「ちょ、どつするの?!」

福本

「囿になる。その間に、あの陣地に一発叩き込め!」

キャリー

「了解」

マリィダ

「わかった、イザとなったら援護する」

福本

「じゃあ、お願い」

パン!

そう言うと、一発発砲して注意を向けさせる。



バタタタタタ！

マリーダ

「キャリアー！」

キャリアー

「オツケー！撃て！」

ドン！

ドワン！

福本

「今だ！突撃！」

数十分後……

陸戦隊兵

「長官の予想した通り、ニミッツの姿はありませんでした」

福本

「やっぱりか…そのまま検索を続けてくれ」

陸戦隊兵

「はい」

敬礼すると、再び検索に戻って行った。

マリーダ

「さっき連絡があったわ。ヒツカム飛行場を確保したそうよ」

福本

「お、そうか。それは良かった」

次号へ

**ハワイ攻略戦！ ヒツカム飛行場確保（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

ハワイ攻略戦！ 決戦用意

戦艦播磨

福本

「ただいま」

遠地

「お帰り、で、なんか収穫あった？」

福本

「ん、まあな…神谷」

神谷

「はい、何でしょう？」

福本

「全戦隊司令を播磨に集めてくれ。どうやら、アメリカ軍が動く様だ」

神谷

「！解りました！」

直ぐ様、通信室に向かうべく、艦橋を出ていった。

遠地

「どうしてわかった？」

福本

「司令部に、まだ焼却仕切れて無い通信文を探したら出てきた」

遠地

「山本長官には？」

福本

「すでに知らせてある」

遠地

「そうか…なら、砲の掃除でもさせとくか」

会議室

福田

「アメリカ・ハワイ救援艦隊の陣容は、戦艦12隻、空母12隻、巡洋艦・駆逐艦多数…との事です」

福本

「さて、アメリカもようやく重い腰を上げた様だが……どう思う？」

楠木

「私としましては、敵戦艦が気になります」

福本

「それについては…マリーダ」

マリーダ

「はい。では、配布された資料のA3を見て下さい」

全員が資料を捲る。

マリーダ

「まず、戦艦の内2隻は新型の艦隊戦用戦艦モンタナ型です。また、6隻はアイオワ型戦艦で有ることが判明しています。艦景は添付写真をどうぞ」

尾崎

「あの…どうやって写真なんて手に入れたんですか？」

本来なら、こんな会議に出れる訳無い、唯一の民間人が質問する。

福本

「あまり詳しい事は言えませんが…この際いか…この写真はメキシコ政府からの提供です」

この瞬間、一部を除く誰もが驚いた。

福本

「昔、メキシコはアメリカ・メキシコ戦争で、カルフォルニアを奪われた経緯があります。ですから、日米がきな臭くなった時に打診したら、情報提供を申し出てくれました」

尾崎

「…なるほど…」

遠地

「ところで、モンタナ型の主砲は？」

マリーダ

「40cm三連装砲四基12門…但し、アメリカ軍独自で開発した、大重量砲弾があるから、打撃力は大和と並ぶわね」

遠地

「ふーん…アイオワ型にも載っけてるのか？」

マリーダ

「多分…」

遠地

「そうか…まあ、砲弾なんか当たらなければいいし、アイオワ型は脅威じゃないな」

新沢

「なぜですか？同じ40cmですよ？」

遠地

「写真を見てみる。大和より全長は長い。まあ、元々大和がデカイのは射撃精度を重視してだ。しかし、アイオワ型は速力重視、巡洋艦の様な設計だ…つまり…」

新沢

「……横波を受ければ射撃精度に影響が出る…と？」

遠地

「そつだ。それに、エセックスの事もある」

沖田

「練度：ですか？」

遠地

「ああ。戦艦なんて大型艦を建造しようとするとかかる。モントナ型は大和並みにデカインだろう？なら、完成して直ぐ太平洋に回した可能性がある」

上杉

「なら、訓練をやってる暇なんてありませんね」

遠地

「だろ。だから、今回はうちの様に名人技はやれない。なら、リーダー射撃を重視してくるぞ」

福本

「うーん、なるほど…」

沖田

「えーと、空母の編成は？」

マリィダ

「エセックス型空母6隻、インディペンデンス型空母6隻……と言ったところね」

千歳

「前みたいに、別動隊の可能性は？」

マリィダ

「今のところは、まだ確認されていないわ」



福本

「……他に質問は？」

全員

「……………」

マリーダ

「では、会議を終了します大介、何かある？」

福本

「じゃあ、2・3言わせてもらおうよ」

そう言っつて立ち上がる。

福本

「まず、今回の海戦ではアメリカ艦は出来るだけ撃沈しないでくれ。戦闘不能とみたら、その艦の攻撃は中止。もちろんいつもの事だが、沈没艦の乗組員は救助する事」

福田

「これまた、いったいどうしてです？」

篠森

「……………これ以上血は見たくない……………ですか？」

福本

「……………贅沢な事を言えばな……………あ、山本長官には話してあるから」

新沢

「難しいですね……………まあ、この海戦で決着はつきますから、出来る

限りの人間を助けたい長官の心中は解ります」

尾崎

「え、えーと…私みたいな半人前の新聞記者が言える事では無いですけど…」

その言葉に、会議室に居た全員の視線が尾崎に集まる。

尾崎

「福本長官は…人が泣いてるより、笑ってる方が好きだから…だからですよ？」

福本

「…理想ですがね」

マリイダ

「で、他に言う事は？」

福本

「ああ、すまん。みんな、今まで付いて来てくれてありがとう。対米戦が終われば、次は対ソ戦だ。色々あるかも知れないが、これからもよろしく頼む」

遠地

「まったく、当たり前じゃないか」

福田

「そうですね。先輩が居ないと艦隊が動きませんから」

上杉

「大食いの私を認めてくれたんですから」

千歳

「遠地の相棒だもん。当たり前よ」

沖田

「福本先輩の下なら、大手を振って指揮ができます」

楠木

「一個戦隊を与えられたんです。当たり前です」

篠森

「……操がお世話になってますので」

神谷

「蒼紫様、それは無いでしょ」

マリイダ

「もう……」

福本

「では、みんな戻って、今の事を各担当者に通知、決戦用意をしてくれ。解散！」

全員

「了解！」「了解！」「了解！」「了解！」

次号へ

**ハワイ攻略戦！ 決戦用意（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ハワイ攻略戦！ 情報公開

戦艦伊豆

伊豆

「お姉ちゃん！」

春日

「ん、伊豆か。どうした？」

伊豆

「聞いた？アメリカ艦隊が出て来たって話」

春日

「やはりか…ハワイはアメリカの要所、いつか来るとは思っていたが…：いよいよ決戦だな」

伊豆

「大丈夫かな？…アメリカも相当数の戦力で来るみたいだよ？」

春日

「ふ、大丈夫だ。我が軍には名将が揃っているし、それに福本長官がいる。そうそう簡単に負けはしないさ」

伊豆

「そう…だよね」

多少の不安はとれたのか、伊豆は軍帽を脱いで、うちわ代わりに扇

ぐ。

春日

「……本日、晴天なれども波高し……」

日露戦争の最終決戦と言われた日本海海戦において、勝利の一因として言われる電文。

世界を半周する航海を終え、遙々日本海に遣つて来たバラチック艦隊は、航海中に蓄積した疲労と、それに伴う士気・練度の低下、日本海軍が開発した下瀬火薬や伊集院信管、日本海軍の士気と練度の前に敗れた。しかし、それだけで無く、バラチック艦隊の艦艇は波の穏やかな地中海や黒海での使用を前提にした設計だった為、荒波の日本海で標準が定まらず、被弾により空いた破孔から浸水し、沈没した艦艇もある。

あれから約40年…今度は日本海軍が太平洋を越え、ハワイでアメリカ海軍と決戦を行う……と立場が逆転している。だが、状況も逆転している。

攻め手の日本海軍は士気・練度共に旺盛だ。対し、アメリカ海軍は半年でほぼ全海軍力を磨り潰され、士気・練度共に低い。

春日

「だが…戦場では何が起こるか解らない……」

日本海軍で日露戦争から在籍している最古参だからこそ言える言葉。

春日

「高野…福本…頼んだぞ」

自分が命を預ける2人の友が乗る二隻の戦艦を見ながら、春日は呟

いた。

空母紅龍 搭乗員待機室

ヴィル

「…と、いった陣容だ」

大宮

「なるほど…空母12隻ですか」

アリソン

「まさに、アンソン海軍最後の主力部隊ね」

クレア

「搭載機数は約900機…戦闘機だけでも約300機はあるわね」

片山

「ですが、今や我が日本海軍に敵う訳ないですよ。戦艦にしろ、空母にしろ、こちらが多いんですから」

吉田

「バカ。そんな風に油断していると、爆弾が頭上に降ってくるぞ」

大熊

「ところで、敵別動隊の有無は？」

ヴィル

「全力を挙げて調査中ですが、今だ確認には至っていません」

大熊

「ふ〜ん、ま、あったとしてもろくに扱えるかどうか……」

大宮

「確かにな、使える奴は本隊にまわしているだろうからな」

開戦から半年、アメリカ海軍は慢性的な人員不足に陥っていた。

これは、日本との開戦の遅れや、反戦ムードによる志願者不足も原因だが、僅か2回の海戦でここまでボコボコにやられるとは思っていなかったからだ。

もちろん、史実より日本海軍が增強されているのも原因だが……。

ヴィル

「…それよりも…」

アリソン

「それよりも？」

ヴィル

「ん、いや…未確定情報なんだけど…」

6人

「……………なんだけど!？」……………」

ヴィル

「いやね……アメリカ陸軍が新型爆撃機を採用したと言う情報が入ってるんだよ」

片山



「爆撃機ですか？ならあんまり関係ないような…」

ヴィル

「問題はサイズだよ。未確認情報だけど、全長30、18m、全幅43、05mと言う大きさだ。それに上空10000m以上で飛べるそうだし」

大熊

「おいおい！B17よりデカイじゃないかよ！」

片山

「え〜と、それだけ大きいんだと…航続距離は…」

ヴィル

「簡単な計算だけど、無給油でアメリカ本土からハワイまで飛べるかと思う…」

吉田

「そ、そんな化け物が襲って来たら…大変な事ですよ！」

クレア

「幸か不幸か、烈風は12000mまで飛べるから、迎撃できるわね」

アリソン

「けど、あんまり想像したくないわね」

大宮

「まったくだ。そんな奴に公算爆撃されちゃあ、目もあてられないよ」

ヴィル

「僕もあまり考えたくありませんよ」

次号へ

**ハワイ攻略戦！ 情報公開（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ハワイ攻略戦！ 攻撃隊来襲せり！

8月17日 ハワイ沖

戦艦播磨

福本

「どうだ？」

神谷

「現在、どの索敵網に入っていません」

福本

「そうか…」

昨夜、哨戒任務中だった伊700潜が『戦艦を含む敵艦隊を発見せり』と打電してきた。

これを聞いた山本長官は直ぐ様、出撃命令を出した。

遠地

「まあまあ、そんなに焦りなさんなって」

福本

「あんまり焦ってないつもりなんだけど…」

遠地

「10分間に10回訊いてる奴がよく言うよ」

福田

「数えてたんですね」

遠地

「暇でな〜」

……まだまだ余裕がある様だ。

マリィダ

「はい、そんな人達の為に、ミルクティーは如何？」

遠地

「お、サンキュー」

マリィダと千歳が持ってきたバスケットに入っていたティーセットを取り出しながら言う。

福本

「そつだな。ティータイムにするか」

神谷

「長官！彩雲6番機より連絡！敵艦隊です！」

福本

「陣容は!?!」

神谷

「戦艦12、空母12、巡洋艦20、駆逐艦多数！」

福本

「よし、作戦通りにやるぞ。艦戦発艦！」

神谷

「了解！」

ヴィル

「司令、長官から発艦命令です」

沖田

「よし、いよいよ決戦だな。艦戦発艦せよ！」

ヴィル

「はい！」

直ぐ様、艦内電話によりパイロット待機室に伝わる。

アリソン

「うん、了解。作戦発動ね」

そう言うと、受話器を戻す。

アリソン

「みんな、作戦発動よ」

片山

「しかし、今回は囿ですか」

吉田

「文句言うな。それに、第七艦隊の方が目立つんだよ」

クレア

「はいはい、みんな行くわよ」

戦艦播磨

福田

「先輩、レーダーに反応…敵索敵機です！」

福本

「おし、見つけたな。迎撃するなと直衛隊に連絡しろ」

福田

「了解」

福本

「神谷、なんか言ってるか？」

神谷

『ちょっとお待ち下さい……はい、敵艦隊発見を打電しています』

福本

「よし、福田、迎撃を命じろ。ただし、落とすな。追っ払うだけだ」

福田

「はい」

すると、4機の紫電改が迎撃に向かった。

神谷

『長官、彩雲6番機からです。アメリカ艦隊、攻撃隊発艦しました』

福田

「ありがとうございます。よし、聞いた通りだ。総員対空戦用意！」

マリーダ

「全艦対空戦用意！」

対空戦用意の号令の下、第七艦隊の空母12隻から次々と艦戦が発艦した。

神谷

『長官、哨戒中の零式水上観測機からです！敵攻撃隊発見しました』  
『！』

福田

「わかった。艦戦を前に出して迎撃せよ」

神谷

『了解』

マリーダ



「敵艦戦はどのぐらい出てくると思うっ？」

福本

「まあ、90機前後はくるんじゃないかな……」

福田

「大丈夫ですよ。今回は迎撃一本に絞りましたから。艦戦は余って  
ますし」

マリィダ

「…そうね。さて、艦隊も堅めましょ」

福本

「ああ、全艦防備を固めろ！敵機が来るぞ！」

杉田

『こちら、杉田！紫音が見付けました！直ぐそこです！』

アリソン

「了解。全機解つてると思うけど、第七艦隊は困よ」

片山

『つまり、困らしく暴れろって事でしょう！』

吉田

『…困らしく防戦に徹しろと言っ事ですね』

アリソン

「その言いつ事…まあ、暴ねろって言いつのも間違っって無いけど」

クレア

『ともかく了解！』

紫音

『一機足りとも、投弾はさせぬ！』

杉田

『同じく！』

アリソン

「では、全機迎撃開始！」

アメリカ攻撃隊指揮官

『全機、もうすぐ敵艦隊だ！迎撃が来るぞ！注意しろ！』

パイロット1

『了解！』

パイロット2

『ジャップめ！今日こそ打ちのめしてやる！』

パイロット3

『合衆国に喧嘩をついた事を後悔させてやる！』

隊長

『キャッツアイ、大丈夫か？』



隊長が無線に叫ぶが、ほとんどがヒヨッコの為か、動きが鈍い。

ギューーン！

更に先程の4機の後続が襲い掛かる！

しかも、完全な奇襲な為、攻撃隊は混乱している。

隊長

『全機落ち着け！格闘戦に引き込まれるな！日本軍は格闘戦が得意だ！』

必死に無線に叫んでいるが、最早統制はとれておらず、格闘戦に巻き込まれていた。

クリス

「く、戦闘にならないわ！」

その時、彼女の直ぐ側を日本機が通過した。

クリス

「旭日軍艦旗！挑発してるの！？」

そう言うと、一気に操縦桿を引く。

隊長

『なに！？旭日旗だと！』

何かを思い出したのか、無線に叫んだ。

隊長

『手を出すな、クリス！こいつらはDevil the 7 fleet（悪魔の第7艦隊）だ！』

緒戦のギルバート諸島沖海戦の数少ない生き残りである隊長が無線に叫ぶ。

だが、その叫びは彼女の耳に届いていなかった。

クリス

「喰らえ！」

ババババババババ！

ババババババババ！

一機の紫電改に狙いを定め引き金を引いたが……ヒョイと避けてしまふ。

クリス

「な！」

ドドドドドド！

ガンガンガンガン！

クリス

「キャア！」

銃撃を受けたクリス機は、墜ちていった。

次号へ

**ハワイ攻略戦！ 攻撃隊来襲せり！（後書き）**

ご意見感想をお待ちしております。





「敵攻撃隊、散会！攻撃態勢に入ります！」

マリーダ

「対空火器、撃ち方始め！」

ドン！ドン！ドン！ドン！タンタンタンタン！

ドドドドドドドドドド！

重巡箱根

艦長

『全対空火器、撃ち方始め！』

ドン！ドン！ドン！

タンタンタンタン！

ドドドドドドドド！

この号令が発せられた瞬間、一斉に対空火器が唸りだした。

機銃指揮官

「二番機銃座！担当域に艦攻！」

新城

「了解！」

旋回手が機銃を旋回させ、俯仰手が機銃の角度を調整する。  
そして、射撃手の新城の出番だ！

新城

「喰らえ！」

タンタンタンタン！

40mm弾は4発のクリップ弾帯であり、速射性の高い40mm機銃だから、たちまち足下に空薬莖が転がる。

ガガガ！ガガガ！

ゴウーン！

新城

「よし！」

なんとか戦闘機の迎撃を突破できたアメリカ軍攻撃隊だったが、次に待っていたのは、第7艦隊の嵐の様な弾幕だった。

何せ、25mm機銃はベルト給弾式、40mm機銃は速射性に優れたボフォース社製の製品だ。

それに艦隊自体が第一線で戦い続けた人間がほとんどだ。

これには攻撃隊も堪らない。

それでも、空母に接近する機もいた。

空母紅龍

士官

「敵機接近！」



グワーン！

銃撃音と共に、一機の烈風が通過した。

ヴィル

「あれは…連龍の宮本少尉機ですね」

沖田

「ん、知り合いか？」

ヴィル

「ええ。連龍のエースとして有名ですよ」

沖田

「そうか…そんなエース達に守られているなら大丈夫だね」

ヴィル

「ええ、ですから、任せても大丈夫ですよ」

敵攻撃隊来襲から30分後…：敵わぬと見たのか、アメリカ軍攻撃隊は撤退していった。

福田

「先輩、敵攻撃隊、撤退していきます」

福本

「全艦、戦闘態勢をとりつつ救助作業に入れ！1人でも多くのアメリカ兵を救い出すんだ！急げ！」

マリーダ

「了解！急いで！」

福田

「了解！」

神谷

「はい！各艦に通知します！」

空母遠龍

水兵

「11時の方向にF6Fが浮かんでます！」

救助作業に入り、検索していた遠龍の見張りが見付け報告する。

白河

「カッター（ボート）用意！」

士官

「了解！」

白河

「隼人。あとお願い」

富田

「うん、わかった」

白河

「じゃあ、遠龍。行きましょう」

遠龍<sup>エンター</sup>

「ええ」

カッターに乗り込んだ白河と遠龍は救助隊に同行した。

本来なら、部下の士官に任せるべきだが…まあ、福本の真似だ。

近付いてみると、パイロットは気絶しているのか、動く様子は無い。そのまま、カッターをF6Fに接岸すると、2人の水兵がパイロットを引きずり出す。

パイロットを回収し、同行していた女性軍医が診ると……

軍医

「あら！」

白河

「どづしたの？」

軍医

「艦長…このパイロット…女の子です」

白河

「えー！」

遠龍<sup>エンター</sup>

「う、うそー！」

軍医

「いえ、本当です…念のため、医務室に連れて行きますね」

白河

「ええ、お願い」

次号へ

**ハワイ攻略戦！ 艦隊防空戦（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。



## ハワイ攻略戦！ 第二機動艦隊空襲せり！（前書き）

作者

「え〜と……25 / 4cm砲をここに配置して……」

福本

「おい、作者。その…えーと……」

作者

「PSPP？」

福本

「ああ、そうそう。で、何してんの？」

作者

「ふっふっふ、本日発売の『ウォーシップガンナー2 ポータブル』で筑波を作っていたのだよ！」

福本

「……ああ、作者が3つも持つてる、『鋼鉄の咆哮』シリーズね」

作者

「ああ。ちなみに、この筑波は25 / 4cm55口径連装砲8基16門、15 / 2cm55口径連装砲6基12門、10cm55口径連装高角砲10基20門、20mm連装機銃12基の戦艦だ！」

福本

「……明治の戦艦じゃあ無いんだから……そう言えば、作者の世界じゃあ、天皇陛下の皇位20周年だったとか？」

作者

「ああ。しかし、天皇なんて要らんとおっしゃっている人間は解らん。だいたい、2万人が記帳に来たんだぞ。天皇無くして日本じゃあ無いんだ。そんな事を言う奴は銃殺け！」

福本

「ストップ！ヤバそうな話は止めましょう！では、本編をどうぞ！」

ハワイ攻略戦！ 第二機動艦隊空襲せり！

その頃……第二機動艦隊では……

旗艦大鳳

士官

「長官！第七艦隊より連絡！敵偵察機に発見された模様！」

角田中将

「そうか……」

すると、猛将角田中将はニヤリと笑う。

今回は作戦は第七艦隊が囷になり、攻撃隊を引き受ける。

その間に第二機動艦隊が敵機動艦隊を攻撃する、と言う単純なもの。つまり、敵攻撃隊は余り気にしなくて良い！

角田中将

「全攻撃隊発艦せよ！」

士官

「は！」

カタンカタンカタン……

ブロロロロ……

攻撃準備を既に終えていた攻撃隊は、カタパルトで発艦し行く。

角田中将

「艦隊は一里でも肉薄し、諸君らを収容する。安心して行って来い！」

この時、第二機動艦隊だけでなく、ハワイのヒッカム飛行場など、日本軍が確保した飛行場から、ミッドウェー派遣航空隊が進出しており、航空攻撃の準備を終えて発進していた。

一時間後……

第七艦隊の彩雲の電波を頼りにアメリカ艦隊に向かっていた第二機動艦隊の攻撃隊とハワイに進出していた基地空はアメリカ艦隊と接触した。

この時、直衛にしていたF6F隊が迎撃に来たが、第二機動艦隊の護衛隊と、基地空護衛の為に途中で合流した第一艦隊の烈風・紫電改がそうはさせないと突入し、空戦になる。

だが、F6Fの紫電改とは互角、烈風とは圧倒的に差があり、押され始める。

野中少佐

「さすが、烈風隊と紫電改隊のアンちゃん達だ。これで心置き無く敵艦隊を叩けるぜ！」

先陣を任された基地空にとっては敵機の迎撃は嫌な物だが、今や戦闘機隊が抑えている。

野中少佐

「置き道具の準備はいいか？」

搭乗員

「「「委細承知！」」」

乗り組む搭乗員の威勢のいい声が聞こえる。  
意気も上がる筈だ。

機種転換を終えた後続部隊が配備され、士気が上がっているのだ。

野中少佐

「3式陸攻隊も付いて来てるな？」

搭乗員

「はい！同高度で付いて来ています！」

3式陸攻……後の陸軍爆撃機『飛龍』の海軍バージョンであり、『靖国』の名称がある。

この60機の銀河と靖国は5機づつに分かれ、12隻の戦艦に向かった。

もちろん、戦艦も弾幕を張った……が、5機共さつさと離脱する。アイオワ型やモンタナ型の乗組員達はせせら笑った。なんだ、ジャップは何の事はない……と。

だが、サウスダゴダ型の乗組員達は嫌な予感がした。そして、それは的中した。離脱した後、正体不明の物体が接近してきたのだ。もちろん、これは桜花である。

直ぐ様、桜花に対し対空火器が火を吹いたが、小さいうえに砲員の練度に問題があった。

そうこうしている内に、桜花が命中した。

ゴワーン！ガガーン！ボワーン！グワーン！ズガーン！

ちなみに当たったのは、ほとんどが船体中央……つまり装甲の厚い所だ。

しかし、対空砲を始め、艦上構造物の被害は酷かった。

そこにF6Fを片付けた烈風・紫電改がやって来た。烈風・紫電改には対空火器を黙らせる為に、3式弾型3式航空噴進弾が主翼に装着されていた。

これが一斉に発射された！

シユパパパパパン！

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガン！

これは効いた。

露天銃座が多い為、頭上で炸裂した弾片や焼夷弾子が飛び込み、人員を殺傷し、銃弾に引火、火災を発生させた！

この瞬間、戦艦の左舷の対空火器は殆ど使用出来なくなった。

これを守ってましたと言わんばかりに攻撃隊が襲い掛かった！

もちろん、アラスカ・グワムが戦艦に成り代わり対空砲をブツ放すが、こちらにも練度が怪しい。

それどころか、噴進弾をまだ残していた烈風・紫電改に狙われる羽目になった。

狙われた空母はマシな方だったかも知れない。

インディペンデンス型空母は、彗星の噴進弾で飛行甲板と収納していた艦上機を潰された。

エセックス型空母は6隻共、500kg爆弾数発で飛行甲板を潰し、魚雷で速度を落とした。

しかし、やはり最悪だったのは戦艦だった。  
左舷対空火器を潰され、急降下爆撃で右舷をボコボコにやられた。  
巡洋艦はそれ程叩かれ無かったが……外見的に目立つアラスカ・グ  
ワムは叩かれた。

結局……第二機動艦隊の攻撃隊は損傷艦を出しただけで終了した。  
だが、日本軍にとっては作戦通りであった。

次号へ

ハワイ攻略戦！ 第二機動艦隊空襲せり！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。



## ハワイ攻略戦！ 迫る決戦

戦艦播磨

神谷

「長官。アメリカ艦隊、空母に駆逐艦を付けて退避させています」

福本

「そうか……戦艦と巡洋艦で突破する気が……予想通りだな」

遠地

「おし、主砲の出番だな！」

福田

「先輩。角田中将からです。航空戦隊を預かってくれるそうですよ」

福本

「それは助かる。後でお礼をしないと」

福田

「そのお礼ですが、交換条件として、木村水雷戦隊の同行させてほしいとの事です」

福本

「木村教官を……別に構わないよ。まあ、変わりにこちらからも一個水雷戦隊を空母護衛につけるし……差し引きゼロだな」

福田

「では、そう打電しておきます」

福本

「さて、こちら山本長官と合流しますか」

千歳

「はい。では、合流海域に向かいます」

福本

「ふう……うん……」

全艦に交代で休むように命じると、防空指揮所に上がり、今までガチガチになっていた体を伸ばす。

福本

「…決戦…か…」

アメリカとの決戦……今や太平洋の覇権だけで無く、世界の運命を決める戦いだ。

準備も充分、士気も高く、作戦も予定通りに進行している。

だが……最後まで解らない。

もしかしたら、大和や播磨が沈没してしまうかも知れない。

山本長官や自分も戦死するかも知れない。

アメリカが原爆をモンタナ型にでも積んで、自爆戦法に出るかも知れない。

人間追い詰められた時程何をするか解らない。

今のルーズベルトなら尚更有り得る。

『ジャップに天罰が下った』とでも国民に言うつもりだろう。

結局……不安事だらけだ。

日進

「なーに、悩んでるの?」

福本

「日進さん…どうして?」

日進

「下で神谷さんに聞いたら、ここだって言ってたから」

福本

「そつですか…」

日進

「で、何悩んでるの?」

…最初から解ってはいしたが、この人をはぐらかすのは無理らしい。

福本

「指揮官職なんて、悩み事の宝庫ですよ…今みたいな時は特に…」

日進

「あら、ここに悩み事持ち込んだのは初めてね」

福本

「はあ…」

溜め息を吐きつつ、頭に手をあてる。

福本

「…………お見通し…ですか？」

日進

「……………言ってみなさい」

福本

「……………今回は不安材料が多いんですよ」

そう言いながら、頭を掻く。

福本

「どうも…慎重と言うか…不安になるんですよ……………自分としては…太平洋最後の戦いですから…」

日進

「…うふふ」

福本

「笑う事はないでしょう…」

日進

「ごめん、ごめん…けどね…まるで、東郷長官と一緒にだな、と思つて」

福本

「東郷長官と？流石に元帥と比べるのはどうかと……………まあ、確かに東郷元帥は日本海海戦で、対馬を通るかどうかで悩んでいたのは有名ですが……………」

日進

「ほら、根本的には不安から悩んでるでしょ？」

福本

「……あ」

上手く言いくるめられた感はあるが……。

福本

「お腹が空きましたね……ご飯でも食べに行きますか」

日進

「賛成！」

数時間後……

山本長官率いる第一艦隊と合流し、航空戦隊を第二機動艦隊に預け、合流した艦隊はアメリカ艦隊に向かって行った。

福本

「さあ……いよいよ、決戦だ！」

遠地

「ああ……皇国の興廃はこの一戦にあり……だな」

福本

「……上手くいけば良いんだが……」

マリーダ

「あら、珍しい。心配なの？」

福本

「…随分アメリカは追い詰められてるからね」

遠地

「大丈夫、大丈夫。お前が指揮するんだからな！」

福本

「…頑張ってみるよ」

次号へ

## ハワイ攻略戦！ 迫る決戦（後書き）

いつもの通り、土日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新いたします。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

ハワイ攻略戦！ 決戦！ハワイ沖海戦！ 前編

午後6時30分頃……

戦艦大和

通信士官

「長官！アメリカ艦隊発見しました！」

宇垣参謀長

「距離は？」

通信士官

「は、ここから1000km先です」

山本長官

「…見付けたのは零式水偵か？」

通信士官

「はい、そうです」

山本長官

「そうか…」

となると、敵は夜戦を挑むつもりだろう。

まあ、ある程度は予測出来た事だから、別に気にしないが…。

山本長官



「全艦に通達、夜戦用意」

宇垣参謀長

「わかりました」

戦艦播磨

神谷

「大和より、夜戦用意の命令が出ました」

福本

「そうか…遠地、第七艦隊の砲戦準備は？」

遠地

「さつき確認したら、全艦準備は完了している。砲員の士気も高い。昼間に休ませておいたからな」

福本

「…弾種の方は？手順も大丈夫か？」

遠地

「大丈夫だ。この日の為に、第一艦隊所属艦の砲術長にも集まってもらって何度もミーティングしたんだからな」

福本

「そうか…まあ、後は砲術員達を信じよう。マリダ、戦闘配食を全員に出してくれ。今の内に食べさせとかないと、戦闘中に腹を空かす人間が出てくるからな」

マリーダ

「わかった」

今回、第一艦隊と合流した第七艦隊は戦艦部隊を少し改編していた。まあ、順番を変えたただけだが……。改編後の順番は以下の通り。

大和 武蔵 信濃 播磨 河内 和泉 近江 薩摩 土佐 長門  
陸奥 春日 日進 (ちなみに伊豆・伊賀は第二機動艦隊に空母護衛として預けた)

なぜ、長門・陸奥を後ろに下げたかとゆうと、いくら熟練者が乗る熟練艦であり、改装したと言っても、アイオワ型戦艦と撃ち合うのは危ない。

この為、播磨・薩摩型戦艦を前に出した。

ちなみに、日進・春日をもって来たのは、数合わせ的要素もあるが……艦隊戦に出ていない二隻に福本が気をつかったのだ。

午後9時48分

士官

「電探に反応！敵艦隊です」

宇垣参謀長

「来ましたな」

山本長官

「ああ」

そう静かに答えた山本長官の表情には余裕があった。なにせ、隻数はほぼ互角、士気・練度共に高い。

何より、自分に何かあっても任せられる若手がいる…とゆうのも、一つかも知れないが。

山本長官

「参謀長、砲撃手順は大丈夫かね？」

宇垣参謀長

「ええ…しかし、福本達はいったいつの間にあんな物を開発させていたのでしょかね？」

山本長官

「本人達曰く、戦艦の大砲と装甲の関係だそうだ」

宇垣参謀長

「…つまり、相手が同じ手段を使ってきた時に対抗する事を予想してた？」

山本長官

「アメリカはその傾向が高い。良いと解れば、組織も変えるからな」

宇垣参謀長

「いやはや…私の頭では彼らの考えに付いていけませんわ」

山本長官

「仕方がないよ。彼らは神戸、我々は江田島出身だからね。校風が違うよ」

福田

「敵艦隊、射程内に接近中」

福田

「水雷戦隊の突撃命令はまだか？」

神谷

「まだです」

福田

「そうか…」

今回は山本長官が指揮を採っている為、福田達は命令待ちである。

福田

「距離30000m…！敵艦隊…いや、敵戦艦部隊進路変更！敵水雷戦隊及び巡洋戦隊、突っ込んで来ます！」

神谷

「大和より打電！水雷戦隊及び巡洋戦隊に突撃命令！戦艦は我に続け！」

福田

「アメリカは同航戦をやる気だな。山本長官も受けてたつ気だ」

遠地

「ラフィール！標準合わせ！」

ラフィール

「了解！砲術長！標準合わせ！」

突撃命令が出された瞬間、待つてましたと言わんばかりに、水雷戦隊と巡洋戦隊は突撃した。

第一艦隊と合流した為、日本艦隊は駆逐艦72隻、軽巡洋艦14隻、重巡洋艦17隻が参加。

対するアメリカ艦隊も駆逐艦70隻、軽巡洋艦22隻、重巡洋艦20隻をかき集めたが、この内駆逐艦10隻、軽巡洋艦4隻、重巡洋艦2隻がアラスカ・グアムと共に別行動を採っていた。

しかし、総数200隻を越える艦艇が参加した海戦はそうそう無い。まさに日米の運命を懸けた戦いだからこそだろう。

さて、そんな日本艦隊の先鋒な一つは第七艦隊所属の第6水雷戦隊と第二機動艦隊から派遣された木村水雷戦隊、篠森中将率いる第3戦隊。

快速同士の水雷戦隊はあっという間に距離を詰め砲火を交える！

直江

「阿賀野より打電。『我、左の敵を引き受ける。貴戦隊は右を頼む』

」

上杉

「さすが、木村教官！こつちの考えも解ってるのね。全艦右舷砲戦、撃ち方始め！」

ドーン！ドーン！ドーン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！

統制のとれた一斉射撃に、練度の怪しいアメリカ水雷戦隊も慌て発砲する。

だが：バラバラに発砲した為に脅威に感じない。

そのまま数度撃ち合ったが、頃合いを見ていた上杉は魚雷発射を命じると直ぐ様、離脱した。

これにアメリカ水雷戦隊は付いていけず、魚雷も各艦の判断で発射した為、日本艦の魚雷を喰らう結果になった。

士官

「敵巡洋戦隊です！」

篠森

「事前通知した通り、敵艦を戦闘不能にするだけでいい…砲戦始め！」

士官

「撃てー！」

ズゴーン！ズゴーン！ズゴーン！ズゴーン！ズゴーン！ズゴーン！ズゴーン！ズゴーン！ズゴーン！ズガー！ズガー！ズガー！ズガー！ズガー！ズガー！ズガー！ズガー！ズガー！ズガー！

練度も高い砲撃に、アメリカ巡洋戦隊も応戦するが……大型艦ゆえに練度が低く、砲撃精度は悪い。

ガガン！ガガン！

ガガン！ガガン！

砲撃精度の良い日本艦の25cm、20cm砲弾を受けた巡洋艦はたちまち大破する。

篠森

「よし…味方艦を援護する。通信開け」

士気・練度が高い日本艦が徐々にアメリカ艦を押しゆく。

そうこうしている内に、真打ちである戦艦が接近する。

日米の運命を決める真打ち同士の砲撃戦が始まるとしていた。

次号へ

ハワイ攻略戦！ 決戦！ハワイ沖海戦！ 前編（後書き）

大和型VSモンタナ型！播磨型VSアイオワ型！

打倒大和型を目指したモンタナ型に大和型は勝てるのか？！

大和型に対抗できるアイオワ型に播磨型戦艦はどう挑むのか？！

海戦ファンなら一度は夢見るライバル艦の撃ち合いは果たしてどち  
らが勝つのであろうか？！

福本達が開発させた『ある物』とは…？

そして、日米の運命は！？次号をお楽しみに！！

ご意見感想をお待ちしております！



ハワイ攻略戦！ 決戦！ハワイ沖海戦！ 後編

戦艦大和

「標準急げ、砲戦用意！」

ここは大和のトップ（艦橋最上部）…つまり、防空指揮所。  
大和艦長の有賀<sup>あるが</sup>幸作<sup>しゆく</sup>大佐は何時ものとおり、草履履きに煙草を燻らせながら指示を出す。

有賀大佐

「しかし、わかんね〜もんだな〜」

彼がそう言うには訳がある。

彼の同期の桜<sup>やましたのぶえ</sup>…森下信衛大佐が戦艦信濃艦長、猪口敏平大佐大佐<sup>いのくちとしひら</sup>が戦艦武蔵艦長として参加している。

世界で最も強力な大和型戦艦（播磨型戦艦を除く）を親友3人が指揮している。

確かに世の中解らない。

大和

「有賀艦長…」

有賀大佐

「ん、大和か。どうした？」

大和

「…煙草止めて下さい」

そう言いながら、灰皿を差し出す。

有賀大佐

「け、良いじゃないかよ」

そう文句を呟きつつ、煙草を灰皿に押し付ける。

大和

「私、煙草は嫌いなんです。なんであんな物を吸うんだか…」

有賀大佐

「それはあれだ…男の味だからだ」

大和

「………そうですか」

戦艦播磨

播磨のトップには、第七艦隊の艦隊幹部が勢揃いしていた。

遠地

「ふう…南のハワイだから良いが…ヨーロッパに行ったら寒いだろうな」

戦闘中であるはずなのに、暢気な事を言う砲術参謀。

福本

「遠地…他に話題は無いのか？」

遠地

「今のところ、ない」

マリイダ

「…ちゃんと指揮しなさいよ」

そう言った瞬間、アメリカ戦艦が先手をとって発砲した！

福田

「敵艦、発砲！」

福本

「撃ち方始め！」

神谷

「え！発砲命令は…」

福田

「大和、発砲しました！続き、武威・信濃も発砲！」

ラフィール

「てえー！」

ドゴーン！ドゴーン！ドゴーン！

播磨発砲に続き、河内、和泉、近江も一斉に撃ち出す！

遠地

「砲撃手順は打ち合わせた通りだ！徹甲弾は3射目からだ！」

ジント

「はい！」

福田

「！敵艦第2射！」

ラフィール

「うそ！まだ15秒しか…」

福本

「敵の新手だ！自動装填装置と投射量で勝負する気だ！」

ジント

「ど、どう言う事ですか！？」

遠地

「敵は練度で勝てない！だから、砲門数と投射量…つまり、アメリカお得意の数で勝負する気だ！」

福田

「…それじゃあ、着弾観測は?!」

マリーダ

「そんなみみっち事はしない！特にモンタナ型は三連装砲4基で、均等な交互射撃ができるわ！」

福本

「だが…それ故にレーダーに頼る！ラフィール！手順通り続ける！」

ラフィール

「了解！」

戦艦モンタナ

士官

「司令！敵艦発砲！」

「落ち着け。敵は今まで通り、斉射による試射だ。慌てる事は無い」

そう言い部下を落ち着かせるのは、ハワイ救援艦隊司令官、トーマス・キンケイド中将。本来なら、スプルーアンス中将が着任していないはずだが…ミニッツ大将と共にハワイに残っている。

キンケイド中将

「しかし、日本軍も驚いているだろうな」

実はモンタナ型は46cm砲を載せる事は考えていたが……んな時  
間も技術も無い。しかも、全体的に練度が怪しい。

だからこそ、今回アメリカ艦隊は投射量で勝負に出たのだ。

そう、投射量が多ければ命中率も上がり、敵の被害も増える。

なおかつ、敵の着弾観測も妨害できる。

ガガン！！

有賀大佐

「ち、被害報告！」

士官

「右舷高角砲群壊滅！」

有賀大佐

「大和、大丈夫か?!」

大和

「は、はい…大丈夫です…」

しかし、有賀が見る限り、大和の右脇腹は黒…いや…赤かった。

有賀大佐

「次弾はまだか?!」

士官

「待つて下さい！次から徹甲弾射撃に移ります！」

ヒューーウ……

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！

遠地

「ち、一方的に撃たれるのは好きじゃない」

福本

「誰も好きじゃないよ…さっきから塩水被ってるしな」

播磨

「ラフィール、反撃まだ?！」

ラフィール

「待つて!今第2射を終えるから!ジント!」

ジント

「ああ!砲術長、次弾から徹甲弾だぞ!」

砲術長

『わかっておりますよ!任せて下さい!』

福田

「しかし、本当に効いてるんですか?!向こうは相変わらず連射してますよ!」

福本

「あれは即効性じゃあないからな…とにかく様子を見るしかない」

ジント

「第2斉射、撃ちます!」

ズガン!ズガン!ズガン!

砲術長

『徹甲弾装填！いよいよ本番だぞ！』

日本軍が2斉射目（アメリカ力軍は8射目）を撃ち終えた時、アメリカ艦隊に密かな変化があった。

それは各艦のレーダー担当者が始めに気付いた。それは……

キンケイド中将

「なに？レーダーが?!」

レーダー担当者

「はい！敵艦の周りだけ、探知不能に……」

キンケイド中将

「レーダーの故障か？」

レーダー担当者

「そんなはずは……」

キンケイド中将

「とにかく原因を調べる！急げ！」

キンケイド中将は焦り出す。

なぜなら、この交互射撃は練度の低いアメリカ艦隊には敵を圧倒できる手だ。

しかし、最低限敵の位置が解らなければ意味が無い。

つまり、レーダーこそが位置を調べる唯一の方法だった。



これがレーダー統制射撃……レーダー射撃だ。  
つまり……レーダーが使えなくなれば……

福本

「ん……」

この時、福本は微妙な空気の変化に気付いた。

マリィダ

「?どうしたの?」

福本

「あ、いや……」

ザバーン!ザバーン!ザバーン!ザバーン!ザバーン!ザバーン!

その時、同航するアイオワ型戦艦のミズーリが放った40cm砲弾が着弾した。

福本

「……ラフィール!もう敵弾は気にするな!撃って撃って撃ちまくれ!」

ラフィール

「え!りよ、了解!」

福田

「え!あの……何ですか?!」

遠地

「やっと効き始めたぜ！チャフ弾がな！」

チャフ弾……福本達が開発させた、三式弾を改造し、中にアルミ箔を入れた単純な物だ。

しかし、レーダーを使えなくするには一番効果がある。

これを主砲に装填し、ほぼ目の前で炸裂させ、アルミ箔を散布する。そうすれば、あとは勝手にアルミ箔が舞ってくれる。アルミ箔が艦の周りを舞ってくれば、レーダー波が反射し、レーダー画面は真っ白になる。

それを狙い、開発したのだ。

そして、チャフ弾は福本達の狙い通り、艦の周りで舞い、アメリカ艦のレーダー画面は日本艦の周りが真っ白になった。

レーダー担当者は故障かと思いついたが、元々無いのだから調べても無駄だった。

何人かの士官やレーダー担当者は、日本軍がマジックをやったと感付いたが、それが何なのか解らないから対処のしようが無い。

この時、砲撃戦が行われている中、日米は電子戦もやっていた。

だが、初めての事態にアメリカ軍は対処する事が出来なかった。

対し、第七艦隊を始めとした日本軍は、アメリカ軍がレーダー射撃を挑んでくる事は解っていたから、レーダーを封じる方法を必死に編み出したのである。

そして、これは絶大な効果を生んだ。

レーダーを頼りにしていたアメリカ戦艦は観測データが得られず、適当に砲撃するしかなかった。

対し日本軍はレーダー観測よりも、ベテラン砲術員達の勘と、光学

測距儀による観測・標準…など非電子機材と人間によって撃つていた。

確かにレーダーも使ってはいるが、それほど重視していない。

つまり、日本軍は自分達の得意領域にアメリカ軍を引きづり込んだ訳だ。

それとアメリカ軍は忘れていた。

レーダーもアンテナも、元は日本人が開発した物だとゆう事を…。

そして、キンケイド中将に急報が入った。

それは別動隊のアラスカ・グアム率いる重巡洋艦2隻、軽巡洋艦4隻、駆逐艦10隻の部隊が敵別動隊と交戦しているとゆうものだった。

この別動隊とは、第二機動艦隊の戦艦扶桑・山城、航空戦艦伊勢・日向以下重巡洋艦4隻など20隻以上の部隊だった。

山城

「ふ、まさか、待機中に敵別動隊と出会うとはな…」

敵新型戦艦が多い為、砲戦に参加できなかった山城…福本が出来るだけ犠牲を出したく無いと言って土下座した…だが、思わぬ所で敵と出会った！

山城

「我が名は山城！帝国海軍の最古参艦なり！ハワイに近付きたければ、我を倒してみせよ！」

西村祥治中将率いる部隊は今までの鬱憤を晴らすべく、突撃する！  
ジェス・オルデンドルフ中将率いるアラスカ・グアムも応戦するが  
……日本最古参艦相手では、大型巡洋艦の2隻でも敵わない。  
別動隊はハワイに突入し、浜辺に乗り上げてでも味方を支援せよ、  
との命令を受けていたが……そんな事、もはや無理だった。

そして、海戦はいよいよ、たけなわとなってゆく……

次号へ

**ハワイ攻略戦！ 決戦！ハワイ沖海戦！ 後編（後書き）**

次号で決着がつきます。

お楽しみに！

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ハワイ攻略戦！ 決着！

10時17分

最初は有利であったアメリカ戦艦であったが……チャフ弾によりリーダー観測を妨害した為、射撃精度にブレが見え始めた。

特にモンタナ型やアイオワ型戦艦は日本軍によるハワイ攻略を阻止するべく、突貫工事で完成させた為、乗組員の練度は低い。

これは当たり前だが、戦艦の主砲には癖があり、この癖をどこまで自分の物にするかである。

そういった面では、日本軍各艦はこの癖をちゃんと物にしていた。

さて、この砲撃戦でアメリカ艦隊を驚かせたのは、長門・陸奥に春日・日進の4隻が奮戦している事だった。

長門・陸奥は今回参加した戦艦の中では最も古い大正生まれの戦艦だ。

これは裏を返せば、最も使い込まれている戦艦であるから、乗組員の練度は参加戦艦の中で最も高い。

春日・日進は艦魂が最古参であり、日本海海戦を戦い抜いた2人である。

今や船体にも馴染んだ2人は日露戦争で鍛えられた戦闘感覚を最大限に発揮して奮戦した。

格下と思って戦っていたインディアナ、マサチューセッツ、アラバマの乗組員にとっては驚きであった。

戦艦大和

山本長官

「見るみる、参謀長。アメリカ艦隊は足並みが乱れ始めたぞ」

宇垣参謀長

「…本当ですな。どうやら彼らの策に、アメリカはまんまと嵌まりましたな」

先程から弾着が乱れているとゆう事は、チャフ弾が効き始めた証拠である。

宇垣参謀長

「では、反撃させてもらいましょうかな」

山本長官

「ああ、最初はリードされたが、今からは我々のターンだ。しかし、沈めん程度にな」

宇垣参謀長

「はい」

この瞬間、日本戦艦は一斉反撃に出た。確かにレーダー観測と速射射撃に翻弄されたが、レーダーさえ使えなくなればこちらのターンである！

有賀艦長

「反撃する！撃ちまくれ！」

ズガン！ズガン！ズガン！

ヒューーウ……

ザバーン！ザバーン！ザバーン！

リーダー観測に頼らない日本海軍は最初から正確である。  
そのまま何度か射撃を続け、修正を加えながら当てていく。  
実際、アメリカ戦艦の速射射撃が鈍くなると、日本戦艦の射撃精度は上がっている。

ズガン！ズガン！ズガン！

ヒューーウ……

ザバーン！ザバーン！ゴワーン！

有賀艦長

「よし！一気に決着をつけるぞ！」

ちなみに、この時の各艦の対決相手は……

大和VSモンタナ

武蔵VSメイン（モンタナ型）信濃VSアイオワ

播磨VSミズーリ

河内VSニュージャージー

和泉VSウイスコンシン

近江VSイリノイ

薩摩VSケンタッキー



土佐VSサウスダコタ  
長門VSインディアナ  
陸奥VSマサチューセッツ  
春日・日進VSアラバマ

……で同航戦を挑んでいた。

そして、戦いが動いた。

アラバマと撃ち合っていた春日・日進の艦長が、埒が空かないと速度を上げ、アラバマに接近した。

そして、2隻が12000mまで来た途端、アラバマの砲塔に標準を合わせていた38cm砲18門が一気に火を吹いた！

そして、春日や日進、その乗組員達が見たものは、砲塔が破壊され、あるいは砲身をねじ曲げられたアラバマの姿だった。

薩摩でも動きがあった。

アイオワ型戦艦6番艦ケンタッキーと撃ち合っていた薩摩。

5回目の徹甲弾射撃で、一挙に6発の42cm砲弾がケンタッキーに命中！

ケンタッキーは突貫工事で完成させた為、これは大ダメージになった。

あっという間に砲塔との電路が切れ、一斉射撃が不能になった。

それどころか、第一・第二主砲塔の間で火災が発生、ダメージコントロールチームが駆け付けたが、火の勢いが強く、弾薬庫に引火する可能性が出てきた為、艦長は注水を命じた。

これにより、第一・第二主砲塔が使用不能になってしまった。

『アラバマ、砲塔全損により戦闘不能!』

『ケンタッキー、火災の為、注水!第一・第二主砲使用不能!』

キンケイド中将にこの報告がきた時、彼は悪夢だと感じた。

只でさえリーダーが原因不明で使用不能な状況下で、戦艦2隻の損傷は自らの不利の通告であった。

しかし、反撃を開始した日本軍がこんなものでは終わらなかった。

アラバマを片付けた春日・日進は長門・陸奥を援護すべく、マサチユーセツ・インディアナの反対側に周り込むと2隻に向けて一斉射撃を行った!

いきなりの攻撃に驚いた2隻の乗組員に、今度は長門・陸奥の一斉射撃が襲い掛かる!

長門・陸奥の射撃は正確で、散々痛め付けた砲塔に命中、砲身を叩き折り、旋回器を故障させた。

2隻つつの戦艦を相手にしてどこまで保つか……それは誰も解らない。

和泉とウイスコンシンの撃ち合いでも変化があった。双方、一步も退かず撃ち合っていたが、大和型戦艦同様46cm対応防御である播磨型戦艦の耐性が勝ってきた。

そして、和泉が放った8斉射目がウイスコンシンの第一砲塔を破壊し、電路途絶させ、第三砲塔付近で火災を発生させた!

この瞬間、ウイスコンシンは戦闘を中止するしかなかった……。

士官1

「司令！ウイスコンシン、第一砲塔破壊！第三砲塔付近での火災により戦闘を中止！」

士官2

「マサチューセッツ・インディアナが、敵艦のめった打ちにあっています！」

キンケイド中将

「ぐ……」

完全に状況が逆転していた。

つい20分程前まで自分達は日本軍を圧倒していた……が、僅か20分で逆転していた。

理由は簡単だ。

日本軍は練度が高いから目視標準でも戦える。

だが、こちらは練度が低い。

だからこそレーダーなどの機材でそれを補おうとしたが……日本軍が一枚上手でそれを潰したただけだ。

キンケイド中将

「ち、まるでこの戦争みたいじゃないか……」

この戦争が始まるまで、アメリカの中で日本が勝てるという人間はいなかった……だが、それは只の驕りだったのだ。

だから、アメリカが有利だと思われたのは最初だけ……あとは負け続けである。

士官1

「司令！別動隊、敵部隊に阻止されました！」

キンケイド中将

「……………」

ガガン！ガガン！

士官2

「どうした?!」

艦長

「第二、第四砲塔に命中！第二砲塔、旋回器破損！第四砲塔破壊！」

キンケイド中将

「……………そうか」

そう言つと、ゆっくり司令官席に座る。

さて、どう逃げるかを考え様とした時……………

士官1

「あ！敵艦隊砲撃止めました?!」

キンケイド中将

「な、なんだと?!」

山本長官

「……………撃ち方止め！」

宇垣参謀長

「撃ち方止め！」

士官

「長官！なぜ止めるのですか?!」

山本長官

「我々の目的は敵艦隊の阻止だ。敵艦は殆ど戦闘能力を失っている。ならば、目的は果たした」

士官

「…ですが、今なら敵艦隊を撃滅できます！」

山本長官

「それでどうする？アメリカ本土を攻めるのか？補給はどうする？  
言っておくが本土は攻めんど」

士官

「……………」

山本長官

「参謀長。全艦に引き上げ命令を出してくれ」

宇垣参謀長

「わかりました」

アメリカ艦隊が見守る中、日本艦隊は見事な艦隊運動で回れ右をす

ると、引き上げて行く。

キンケイド中将

「…いつたい…何がどうなっているんだ？」

その時、敵艦の1隻から発灯信号が瞬いた。

士官1

「『これ以上の犠牲は日米共に必要無し 貴艦隊の無事帰還を祈る  
大日本帝国海軍大将 山本五十六 福本大介』」

士官2

「な…なぜでしょうか？」

キンケイド中将

「……武士道だ。日本人には武士道がある……だからとどめを刺さ  
なかつたんだ」

福田

「アメリカ艦隊、引き上げて行きます」

福本

「そうか……なんとか決着はつけたな」

遠地

「ああ…あの様子じゃあ当分は出て来ないだろうな」

シント

「ですが、なぜ沈めなかったのです？確かに沈めるなどの命令でしたが…」

マリーダ

「1つは大介のこれ以上の犠牲を出したく無いと言う事。そして、もう1つ。アメリカの国民感情よ」

ジント

「へ??？」

福本

「つまり、全滅させてしまえば敵愾心を煽る事になる。だが、逃がしてやればどうだ？」

ジント

「…そうか！アメリカ艦隊の乗組員によって話は広がる…ならば講和させやすくなる！」

福本

「そう言う事だ…あとはアメリカ国民次第だ」

次号へ

ハワイ攻略戦！ 決着！（後書き）

ご意見感想をお待ちしております！



## ハワイ攻略戦！　ハワイ遂に陥落せり！

8月20日

パールハーバー周辺を確保した日本軍は、北はパールシティ、東はカネオヘ飛行場を、西はワイアナエを確保し、防御線を作ってアメリカ軍と睨み合っていた。まあ、日本軍としてはパールハーバーを確保しておけばいいだけだから、あとは持久戦にもっていけば勝手に降伏してくる。

それを待てばいいだけだ。だが、第七艦隊や山本長官、今村大将達はそう考えてはいなかった。

下手に延びると、ルーズベルトが宣伝に活用するのは明らかだ。

時たま、基地空や機動艦隊から攻撃隊を発進させているが……ほぼ様子見に等しい。

ならば力攻めに出ると……これはこれで犠牲が多く、アメリカ軍が全滅すればルーズベルトが宣伝に活用するだろう。

となると、犠牲を出さずに状況を打開する方法は……

カアラ山北東　シヨーフィールド兵営

パールハーバーの太平洋艦隊司令部検索の際見付からなかったニミッツ達はここで指揮を採っていた。

スプルーアンス中将

「ニミッツ長官。ワシントンからです」

ニミッツ大将

「内容は？」

スプルーアンス中将

「数日後に潜水艦を派遣するから、それまで奮戦せよとの事です」

ニミッツ大将

「ふん…味方を捨てて逃げろだと…無駄な事を…」

今や日本軍にハワイ周辺の制海権を獲られているのだから、潜水艦を送ったところで途中で殺られるに決まっている。

スプルーアンス中将

「確かに…こんな事をやったって根本的な解決になりませんからね」

ニミッツ大将

「さて…どうしたものか…」

その時……

士官

「た、大変です！」

スプルーアンス中将

「どうした？何があった！」

士官

「は、日本軍から軍使が参りました！」

ニミッツ大将

「そうか…まあ、話す事は大体解るが…話を聞こう」

士官

「あ、あの…、それと…」

スプルーアンス中将

「ん、どうした？」

士官

「は、実は……」

スプルーアンス中将

「は、ハルゼー！」

ハルゼー

「やあ、レイ。久しぶりだな！」

そこにはハルゼーの他に数人の日本兵と、3人の士官、そして……

「レイ、奥さんは元気か？」

スプルーアンス中将

「まさか…セイイチか!？」

「ああ、そうだ」

セイイチこと、伊藤整一中将……渡米しており、スプルーアンスとも親友なのは有名である。

スプルーアンス中将

「まさか…2人が来るとは思わなかった…」

伊藤中将

「ぼくもだよ、レイ。まさか戦場で再開するとは思わなかった」

スプルーアンス中将

「ああ…だが、2人共用事があってここに来たんだろう？」

伊藤中将

「…そうだ。出来れば中で話したい」

スプルーアンス中将

「うむ、こつちだ。付いて来てくれ」

ある一室…

ニミッツ大将

「では、用件を聞こう」

伊藤中将

「単刀直入に言います。ニミッツ長官、ここで矛を収めませんか？我が軍は天皇陛下を含め、これ以上の犠牲は望んでいません」

ニミッツ大将

「それは解る。だが、大統領の命令は死守だ」

ハルゼー

「け、あんな糞大統領は大統領じゃねえし、人間でもねえ」

スプルーアンス中将

「止める、ハルゼー。残念ながら、我々は軍人だ。命令は絶対だ」

ハルゼー

「あんな、ソ連の独裁者と組んだ野郎の命令なんか、糞くらえだ」

ニミッツ大将

「例えどんな国と組んだとしても、大統領は大統領だ。そして死守命令が出ている以上、守らねば……」

石田

「ちょ、ちょっと待って下さい！確かに、命令は守らねばならないでしょうが、兵士の命はどうなるのですか！」

護衛役として随行していた石田が反論する。

ニミッツ大将

「我々は軍人だ。軍人は死を覚悟で戦っている」

石田

「そんな事は自分もよく解っています。ですが、明らかにこの戦争は間違っている！この間違った戦争で多くの命を犠牲にさせるんですか?!」

ニミッツ大将

「何を言う！軍隊は国の力、凶器だ！凶器がその戦争の正否を判断しては軍隊は成り立たん！」

石田

「確かにそうです！ですが、我々は軍人である前に国民であります！ならば、国民が……」

「石田、もうそこら辺で……」

石田

「何を言っています！これは長官あなたの持論ではありませんか！」

そう言った直後、慌て石田は口に手をあてたが……時既に遅し。ニミッツもスプルーアンスも、先程の言葉を聞き逃さなかった。

スプルーアンス中将

「セイイチ……その2人は……」

「……バレては仕方ないですね」

そう言うと士官は立ち上がり、深々と被っていた軍帽を脱いだ。

福本

「初めまして、ニミッツ大将、スプルーアンス中将……本官が第七艦隊司令長官の福本大介です。隣にいるのは参謀長のマリィダです」

この瞬間、ニミッツもスプルーアンスも驚いた。まさか、あの悪魔の第七艦隊司令官が立っているのだ。

福本

「先程言おうとしていた持論は、自分の持論です。国が間違った方向に行きそうな時、それを止めるのは国民しか出来ない事だと思います」

そう言つと、一度言葉をきる。

そして……

福本

「私もこれ以上、犠牲が出るところも、血も見たくありません！ですからお願い致します！矛を収めましょう！」

福本もマリィダも石田も、一気に頭を下げた。

ニミッツ大将

「……すまないが、ハルゼーと3人にしてくれないか？」

その後、一時間ばかりした後、ハルゼーが出て来て陸軍とも協議するむねを伝えて来た。

承諾すると、ハルゼーは残り、伊藤中将以下一行は帰って行った。

8月21日 パールシティ郊外

山本長官

「本当に来るのかね？」

福本

「はい。お昼までに方針を決めると言っておりましたから」

山本長官、今村大将を始めとした面々が集まっていた。もちろん、アメリカ軍の返答を聞くためだ。

福田

「…あ！来ました！ニミッツ大将達です！」

見ると、ハルゼーを先頭に、スプルーアンス中将、ニミッツ大将、陸軍の面々と共にこちらにやって来る。急いで向かうと、ニミッツ大将が出て来て、山本長官・今村大将と正対する。

ニミッツ大将

「ミスター山本。我々は昨夜一晩をかけて、陸軍と協議しました」

山本長官

「それで…返答は？」

ニミッツ大将

「…これ以上の戦闘は、日米双方にとって意味無いものと判断しました…とにかく、停戦したいと思うのですが如何でしょうか？」

山本長官

「そうですね…後の事は協議するとして、まずは戦いを止めましょう」



今村大将

「あなた方の賢明な判断に感謝します」

山本長官と今村大将が握手を求めると、ニミッツ大将はグッと握った。

こうして……ハワイ攻略戦は終了した。

次号へ

ハワイ攻略戦！　ハワイ遂に陥落せり！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

鹵獲品を見よう！

8月23日 パールハーバー

占領してから2日……オアフ島ではアメリカ軍の武装解除が進んでいたが……やはり、人数が多く時間が掛かっていた。

それに、マウイ島やカウアイ島など付近の島々で抵抗するアメリカ軍部隊があり、これの武装解除にまた時間が掛かる様だ。

そんな中、パールハーバーを抑えた日本海軍は早速ハワイ沖海戦で損傷した艦艇の修理を始めていた。

トントントントントン……カンカンカンカン……ババババババババババ……

修理機材の音が響く中、明石型工作艦3隻……艦魂達の間では明石女医3姉妹……は忙しく治療……もとい修理に奔走していた。

そんな中、何とか時間を作った三原は、第七艦隊臨時旗艦伊豆に来ていた。

三原

「はあ……疲れる」

マリーダ

「はい、お疲れ様」

三原

「ありがとうございます〜」

お礼を言いながら、三原はマリーダの入れてきたミルクティーを飲む。

福本

「その様子じゃあ、猫の手も借りたいみたいだね」

三原

「みたいじゃなくて、本当に借りたいんです！猫でも、鳩でも、狸でも、狐でもいいから借りたいです！」

伊豆

「三原ちゃん、それは無理だよ〜」

そう言いながら、お気に入りの狐の縫いぐるみを持って伊豆登場。

三原

「…あなたの暢気さが羨ましいわ〜」

机にベッタリとへばり付く。

福本

「あはは、まあ、後少しの辛抱ですよ。数日後に支援艦隊が到着しますから」

三原

「支援艦隊？」

マリダ

「遠龍の白河艦長は知ってるでしょ？彼女の実家、白河財閥に依頼して、設計したドック工作艦で編成した艦隊よ」

福本

「まあ、直訳すれば修理屋艦隊だ。戦艦や正規空母は無理だけど、巡洋艦位なら修理できるよ」

三原

「…私達にとっては朗報ね」

そう言いと、ミルクティーを一口。

福本

「ところで、エセックスとワシントン・ノースカロライナの修理状況は？」

三原

「エセックスの修理はほぼ完了しているわ。排水して、穴を塞ぐだけだから。心配してた艦魂の失語症や精神ダメージも、遠龍や連龍の元アメリカ艦魂達や加賀さんのお蔭で大丈夫だね。ワシントンとノースカロライナは砲塔取り替えと改装が必要だから、時間が掛かるわね」

福本

「…そうですか」

三原

「ただ、艦魂の方は元気よ。あのまま戦場に出してもいいぐらいね」

福本

「それは…不味いですよ」

三原

「あはは、だよな。じゃあ、私戻るね。ミルクティー、ありがとう」

マリイダ

「いえいえ、お粗末様でした」

その頃……ヒツカム飛行場

アリソン

「これがあの時撃墜した双発機？」

片山

「なんとまあ……けつたいな形ですねえ」

ヴィル

「P61ブラックウイドウ……夜間戦闘機として開発された機体で、機首にリーダー、胴体下部に20mm固定銃4挺、胴体上部にリーダー連動の旋回式12.7mm銃4挺を装備している」

クレア

「双発機故か…アメリカ故か解らないけど、贅沢装備ね」

吉田

「昼間ならこの黒は目立ちますが、月の無い夜に襲われたく無いです  
すね」

ヴィル

「その意見に賛成せざるおえないよ」

片山

「ですが、こんなブン獲って何するんですか？」

ヴィル

「もちろん、日本に持ち帰って分解、調査を行います。そうすれば  
敵技術を得る事が出来ますからね」

吉田

「結局…敵技術を得るには、敵機材を鹵獲するのが手っ取り早いと  
…」

これまたその頃……真珠湾の一角

整備兵

「オーライ、オーライ」

大沢

「また大量に集まったな」

マチルダ戦車や四式中戦車・五式重戦車・六式重戦車等々…第七陸  
戦隊の戦車及び装甲車両の整備を行っていた大沢達の前に、武装解  
除によって摂取した車両類が集まっていた。

玲奈

「ブラッグ、パーシング、ジャーマンとかだけじゃないよ…あれは」  
スチュアート

「まあ、オワフ中から集めたからね…ハワイ近辺の全部の島からも集めたらもつと多くなるわ」

長野

「そうですね。現在確認されている限りでは、M10対戦車自走砲やM7プリーストンを捕獲しています」

大沢

「あ、長野連隊長。しかし、なぜ一カ所に？」

長野

「いえ…どうやら、第七艦隊所属の研究工作艦『未来』に戦闘車両を集める様に指示されたそうです」

大沢

「はあ…そうなんですか。（福本長官の事だからな、研究材料に何両か出すつもりなんだろうな…）」

次号へ



**函獲品を見よう！（後書き）**

明日・明後日は土曜・日曜です！ いつも通り、『士官候補生異世界奮闘記』を更新致します！

ご意見ご感想をお待ちしております。

エセックス・ノースカロライナ・ワシントン

8月24日 パールハーバー

福本とマリイダは空母エセックスの艦上……正確には飛行甲板に居た。

福本

「ふうう…やっとうさ、間が出来たよ」

マリイダ

「そうね」

加賀

「ごめんね。待たせた？」

福本

「いえいえ、さっき来たばかりですから」

その時、光と共に少女が転移してきた。

エセックス

「加賀さん……あれ？」

多分、加賀に呼ばれて来たのだらうエセックスは、見知らぬ2人に驚いている。

福本

「初めまして、第七艦隊司令官兼大将の福本大介。隣に居るのが、参謀長のマリーダ」

マリーダ

「よろしく」

エセックス

「あ、え、エセックスの艦魂、エセックスです！よ、よろしくお願  
いします！」

福本

「あはは、よろしく、エセックス」

スツと右手を出すと、エセックスも躊躇いがちに握手する。

エセックス

「あ、あの…こんな時に質問する事では無いんですけど……」

福本

「ん？」

エセックス

「…私を救ってくれたのは、私がほぼ無傷だったから……ですか？」

そうであるなら、あの時点で穴を塞ぐだけで早期戦力化ができるエセックスは願ってもない物だった。

エセックスは、ある意味痛い点突いてきたが、福本は首を振った。

福本

「いいえ。例えあなたがどれだけボロボロの状態にあっても、浮か

んでいる限り、僕はあなたを助けに行かせたでしょう……じゃあ、マリーダ、あとお願い」

そう言うと、逃げるかの様に艦橋の中に入って行った。

マリーダ

「うふふ、大介ったらキザな事言っちゃって」

エセックス

「え？」

マリーダ

「大介は、苦しくても生きてて欲しい。生きてれば良いことがある……と考えてるから……あ、もちろん、あなた達艦魂もね」

加賀

「彼は人命第一……敵も味方も無い、早くこんな戦争終わらせて、世界の人達に笑顔と平和が戻ってきてほしい……センチメンタルかも知れないけど、彼が願うのはただそれだけ」

エセックス

「平和に……笑顔……」

戦艦ワシントン

福本

「それで、ワシントンとノースカロライナの艦魂は？」

エセックス

「…実は私もどこに居るのか…」

福本

「…ごめん」

その後、戻って来た福本と共に、ワシントンとノースカロライナの艦魂に会いに来たのだが……どこにも居ない。

マリイダ

「一番手っ取り早いのは、艦魂の部屋を探せば済む事なんだけどね……」

加賀

「ねえ、なに、あれ？」

3人

「……え？」「……」

加賀の指差す方を見ると、少女……もとい艦魂が仰向けに倒れていた。

マリイダ

「ち、ちよつと！だ、大丈夫？」

福本

「おゝい、生きてるか？」

福本が揺ると、その艦魂も気が付いたのか、目を覚ました……だが……

「……………キ…」

福本

「??？」

「…キヤア—！！！」

ゲシヤ—！！

福本

「グゲ—！！」

……………いきなり頭突きをされた。  
この瞬間、福本は思った。自分は一度も婦女子に危害を加えた覚えは無い。

それどころか、紳士的に対応してきた。

なのに……………ナニコレ？

そして、こつも思った。

やっぱり艦魂の頭突きは並みじゃねえ……………と……………。

「し、ごめんなさい—！！」

福本

「い、いや……………も、もう良いから」

土下座しながら謝るのは、ノースカロライナの艦魂、ノースカロライナ。

なぜか日本通で、土下座も様になっている。

ノースカロライナ

「いえいえ！あの第七艦隊司令長官を知らなかったとはいえ、頭突きするなんて切腹もの！今から戻って弾薬庫に…」

福本

「止めなさい！！」

こんなのでいちいち死なれたら、こっちの身が保たない。厄介事と、頭突きされた痛みでおでこを擦る。

マリーダ

「頭突きで切腹なんて……海軍初ね」

ノースカロライナ

「え、責任を撰るなら、切腹じゃ無いんですか？」

加賀

「……あなた、日本で有名なものは？」

ノースカロライナ

「え」と…ハラキリ、芸者、東京、皇居、天皇陛下、銀座、新宿、大阪、富士山、AKB48…」

福本

「…最後のは除いて、まともな答えだね」

ハラキリは別だが。

エセックス

「ノースカロライナさん。ワシントンさんは何処ですか？」

ノースカロライナ

「ワシントン？彼女なら自分の部屋よ。付いて来て」

ワシントンの部屋に近づくにつれ、おかしな事に気が付いた。

福本

「……気のせいかな？臭いぞ」

マリダ

「……なんか、大量の奈良漬の匂いが……」

加賀

「……防毒マスクがいるわね」

そう言うと、艦魂の能力で防毒マスクを3つ出す。  
エセックス、ノースカロライナも続いて出す。

福本

「よし……行くぞ」

防毒マスクを被り、ゆっくりと扉を開けた。  
すると……



加賀

「……………」

マリィダ

「……………」

エセックス

「……………臭い」

福本

「…なんで、和泉が居るんだよ！」

床には酒瓶が何本か転がり、ベッドには和泉とショートカットの少女……多分、ワシントンの艦魂……が酒瓶を抱いて寝ていた。

和泉

「……………」

加賀

「……………」

マリィダ

「……………」

福本

「…和泉。何時までも黙ってても仕方ないぞ」

和泉

「あはは……」

……現在、和泉・ワシントン説教中。  
ちなみに、ワシントンは隣で姉のノースカロライナとエセックスに怒られている。

福本

「いやな、僕は酒が苦手だから偉そうな事は言えないよ。しかも、今は任務中じゃ無い。けどね……ワシントンの部屋が酒臭く成る程よく飲んだな」

マリーダ

「怒るを通り越して、呆れるわ」

加賀

「しかも、ウイスキーと日本酒を交互に飲んでだって……」

和泉

「別に良いじゃ〜ん。それに、私の取り柄はその位だし」

福本

「はあ〜……さて、どうしたものか……」

山城

「福本殿、居るか？」

福本

「……グッドタイミングです、山城さん」

白朧着に白袴…剣道の練習着姿の山城が現れた。

山城

「ん？何の事だ？」

福本

「あ、いえ、こっちの事です…何か？」

山城

「いや、もし、時間があれば相手になって欲しいと思ったが…無理そうだな」

福本

「あ、あと少し待って下さい。この問題が片付いたら…！」

この時、福本はある事を思い付いた。

福本

「山城さん、お耳を拝借」

そう言つと、山城に今までの経緯を話す。

山城

「成る程…それは良い考えだ」

すると山城は、いきなり和泉とワシントンの首根っこを掴む。

山城

「それだけ酒を飲んだんだ。もうさるそろ酔いを覚ましても、良い頃だろう」

そう言つと、悲鳴を上げながら助けを求める2人を引きずって行つ

た。

福本

「さて、お仕置きは『地獄の山城』に任せて…僕達も練習に行こうか」

マリーダ

「そうね」

次号へ

エセックス・ノースカロライナ・ワシントン（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 飛魂とパイロット（前書き）

エセックス

空母エセックスの艦魂。

回収された後、暫くは精神的ダメージが酷かったが、第七艦隊に配属されていた元アメリカ艦の艦魂達や加賀等の助けもあって立ち直った。

争い事は嫌い。

ノースカロライナ

戦艦ノースカロライナの艦魂。

アメリカ海軍で最も日本通で、日本の事をよく知っている。今回の戦争も、日本とはあまり争いたく無いと考えている。

ワシントン

戦艦ワシントンの艦魂。

とにかく酒好き。

日本酒だろうと、ウイスキーだろうと、酒なら敵味方無しに飲んでしまっ。

和泉とは仲が良い。

## 飛魂とパイロット

8月28日

福本

「どころで、白河中佐」

白河

「はい？」

書類整理にせいを出している福本と、書類を出しに来た白河中佐。

福本

「例の…マツケンジー准尉だったかな…は元気か？」

白河

「はい。昨日、外出許可書類を持って彼女の家に行って来ました…  
…双方、喜んでましたよ」

福本

「そつか…良かった」

そう言いながら書類を片付けていると、ふと、気が付いた。

福本

「どころで、彼女は今も遠龍に？」

白河

「はい…女の子ですから」

福本

「女の子…だからか…」

確かに、ハワイの捕虜収容場は男性傾向【まさか女性が紛れ混むとは想定外】だから、女性に対するケアが整っていない。  
と言う事で、第七艦隊で身柄を預かっている。

白河

「別に破壊工作の危険性も無いので、艦内を自由に歩かせています」

福本

「遠龍の見張りを付けて…か？」

白河

「はい」

福本

「ま、仕方ないか」

そう言つと書類整理を再開する。

連龍

「た、大変です！福本長官！」

福本



「どわっ！」

いきなり転移してきた連龍レキントンが机に現れ驚く福本。

マリーダ

「ど、どうしたの！机に転移する程大変なの？！」

連龍

「は、はい！と、とにかく来てください！」

福本

「あ、ああ。マリーダ」

マリーダ

「はいはい」

連龍

「では、行きます！」

.....

ドンガラガッシャーン！

福本

「痛〜」

マリーダ

「痛た……」

紫音

「だ、大丈夫ですか？」

福本

「ああ、紫音：君が来てるなら、飛魂が出たのか」

紫音

「ええ、宮本かすみ少尉機です」

多分、連龍の格納庫だろう、そこには艦魂の面々が集まっていた。

福本

「あれ？その宮本少尉は？」

「えっと…私がコックピットに居たのを驚いて…足を踏み外してしまいました…」

マリィダ

「……あなたは？」

「あ、失礼しました！宮本かすみ少尉乗機烈風の飛魂、烈です！名前は皆が考えてくれました！」

福本

「…だから、皆で集まったた訳か…よろしく、烈」

烈

「よろしくお願いします！」

マリーダ

「さて、宮本少尉を見舞いに行きましょう」

医務室

福本

「失礼するよ」

軍医

「ちよ、長官！」

いきなり現れた福本に、軍医も衛生兵も近くに居た将兵達も慌て敬礼する。

福本

「そのまま、そのまま。宮本少尉は？」

衛生兵

「は、こちらです！」

ガチガチに成りながら、衛生兵が案内する。

宮本

「ちよ、長官！なぜこちらに？！」

マリーダ

「たまたまよ。たまたま」

そう言うと、マリーダは人払いする。

福本

「大変だったな宮本少尉。大丈夫か？」

宮本

「あはは…ちょっとした心の乱れが起こりまして…」

マリーダ

「その心の乱れの事だけ…」

その時、光と共に烈が転移してきた。

マリーダ

「彼女が原因でしょ？」

宮本

「きゃわ！」

ベッドの上なのに、体が浮く程驚いている。

福本

「お、おい！大丈夫か？」

宮本

「い、いえ！コックピットで会った時は、素っ裸だったもので…」

烈

「あはは…あの時、私は生まれたばかりだったから…何も着て無くて…」

福本

「なるほど…宮本少尉。彼女は烈。君の乗機烈風の飛魂だ。飛魂は知ってるな？」

宮本

「ええ…先輩や教官から聞いた事はありませんが…本物を見たのは初めてです」

マリィダ

「まあ、この艦隊で飛魂がもう1人居るけど…あなたに腕がある証拠ね」

宮本

「え…そんな事は…」

福本

「なーに、若くても能力がある人間はいるもんさ」

マリィダ

「そうよ。さて、後は相棒同士でお話しなさい」

宮本・烈

「は、はい…」

次号へ

## 飛魂とパイロット（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

裏で何かが動いている（前書き）

烈

宮本かすみ少尉搭乗の烈風に宿った飛魂。

烈風の烈の字をとって命名された。

お調子者だが、がんばり屋。

案外射撃を得意とする。

裏で何かが動いている

9月1日

元アメリカ太平洋艦隊司令部（現在、日本軍が使用中）

山本長官

「アメリカだが……講和交渉の場に出る気は無いらしい」

福本

「そうですね……ルーズベルトめ、そんなに血を見たいのか！」

よもやここまで押され、アメリカ国民からも批判されているのに、徹底抗戦を布告できるのが不思議な位だ。

早期講和を望む1人である福本が憤るのは無理ない。

山本長官

「これは噂だが……裏でロシアンマネーが動いているらしい」

福本

「本当ですか？なら、スターリンの真上に爆弾を落としたいですよ！」

同じ大将とは思えない発言だが……ある意味正直である。

山本長官

「さて、講和交渉の席に就かないとなると……西海岸に上陸するか？」



福本

「山本長官、ふざけないで下さい。そんなのはやりません」

山本長官

「わかってている。これ以上の攻勢をかけない……君は博打に向かない。直ぐに顔に出る」

そう言いながらいたずら小僧の様に笑う。  
実際、将棋でポコポコにやられている。

山本長官

「それで、配備は何時かね？」

福本

「10月10日……ハワイ時間で9日になるかと」

山本長官

「1ヶ月先か……随分後だな」

福本

「仕方ありません。新型誘導弾の調整に時間が掛かるそうです。それに……本邦初なんです」

山本長官

「そうだな……ところで、『アーカンソー』は何時到着するのかね？」

福本

「『アーカンソー』ですか？明日、支援艦隊と共に到着します」

山本長官

「…聞いたぞ。艦景が丸つきり変わったそうだな」

福本

「はい。六基中四基を取っ払って飛行甲板を装備し、残りの二基も36cm三連装砲に変換しました」

山本長官

「航空戦艦化……と言っより備砲が無くなったからだろうか？」

福本

「ええ、30cm砲は有りませんし、無理をしたら転覆しますから……それに、珊瑚海海戦でアーカンソーはボロボロでしたし」

山本長官

「ふむ……彼女達には話したのか？」

福本

「……何の事ですか？」

山本長官

「惚けるな。元アメリカ艦艇の返還も講和条件の一つにしているだろう？」

福本

「……ええ、これ以上日本軍で戦わせるのも、辛いでしょっから」

山本長官

「…自分勝手だな」

福本

「自分勝手ですね……」

そう言いながら苦笑する。

山本長官

「……本心か？」

福本

「……出来れば残って欲しいですけど……無理させるのもどうかと……」

山本長官

「……」

福本

「……」

……双方沈黙。

山本長官

「……ならば、今夜にでもいいから話しておけ」

福本

「……はい」

いつの間にかこんな話になったのか……と思いつつ、協議を再開しようと口を開けかけた時……

山本長官

「まったく……この世界のどこに位牌を懐に入れて持ち歩く士官が

いるのか…しかも、そいつは供養の為だと言ってるが、死者の呪いが自分に振り掛かる様にする自分勝手ときたものだ」

福本

「あ……」

山本長官

「ん？どうした？」

福本

「あ、い、いえ…次の議題…なんでしたっけ？」

山本長官

「おいおい、若いのに大丈夫か？じいさんになったら大変だぞ」

空母遠龍

白河

「あ、クリスマスちゃん！」

たまたま廊下を歩いていたクリスマスこと、マッケンジー准尉に声を掛ける。

クリスマス

「はい？なんですか？」

白河

「ねえ！これから皆で飲みに行かない？」

クリス

「……はい？」

白河

「え、だから飲み…」

クリス

「あの…私、捕虜ですよ？」

白河

「定義上はね」

クリス

「……私、敵国の人間ですよ？」

白河

「そうね……で？」

クリス

「で……て言われても……」

白河

「今の私達には関係無い事よ。さあ！行きましょー！」

クリス

「あ、あの！ちょ、ちょっと！？」

この様に、暢気に飲み誘う陽気な空気。  
しかし、裏で何か起きてる事に誰も気付かなかった。

次号へ

裏で何かが動いている（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 迫る危機 前編

ハワイの夕暮れは陽気だ。『アロハオエ』の音楽が流れる中、日本艦隊の乗組員達は酒場に繰り出し陽気に騒ぐ。

最近は収容所から許可を貰い、親しくなったアメリカ兵と飲んでいる将兵もいる位だ。

そんな中、福本達は元太平洋艦隊司令部でラジオ放送を聴きながら会議中だった。

福本

「『アロハオエ』か…陽気ながら、悲しい歌だな…」

福田

「？なんでですか？」

山本長官

「知らんのか？『アロハオエ』はハワイ王国の女王、リディア・リウオカラーニが作曲した歌で、ハワイがアメリカに併合された時、悲しみの中で作った歌だ」

沖田

「その時、巡洋艦『浪速』が寄港していたのも有名な話ですよ。当時の艦長は東郷元帥でしたし」

マリーダ

「……知らなかった」

福本

「さて、お喋りもここまで。本題に戻ろう」



福田

「あ、はい」

マリイダ

「第七艦隊の出撃は11月15日。スカパフローには12月初旬に到着します」

楠木

「なら、イギリスで年を越しますね」

福本

「ああ…多分、一年程ヨーロッパで戦う事になるだろうな」

遠地

「一年か…スターリンがさっさと死んでくれたら、助かるんだが…」

新沢

「また革命でも起きてくれれば楽なんですがね」

福本

「そう言った事は諜報部の仕事だ…まあ、噂じゃあある程度準備しているそうだが」

新沢

「へえ…」

篠森

「連合艦隊は？」

山本長官

「うむ、講和がなり次第、連合艦隊は日本へ帰還。対ソ戦に備える。今村さんに聞いたら、陸軍の準備は大分整っている様だ」

福本

「そうですね…あとはアメリカが講和してくれたら万々歳なんです  
がね…」

福本達が協議している頃、外では密かに異常が起きていた。

オアフ島のアメリカ軍が投降している為、日本軍の警戒は緩んでいた。

まあ、これは仕方がない。だが、密かに準備を終えていた特殊部隊が司令部に迫っていた。

狙いはもちろん、山本長官と福本。

彼らはルーズベルト大統領の密命を受け、今までホノルル市民として潜伏していたのだ。

ちなみに、この事はニミッツ達も知らない。

ハワイにいるアメリカ軍将兵は誰一人として彼らの存在を知らなかった。

特殊部隊は人知れずに司令部の周りを固めていく。

部隊は2個分隊：20人。

装備は消音器付き拳銃、トンプソンマシンガン、銃剣、予備弾倉の軽装備。

しかし、人を殺すには充分だ。

近くに警備の兵はいない。どうやら、飲みにいっただらしい。

すると、5人の兵士が司令部の中に入って行った。

コンコン

新沢

「? 誰でしょうか？」

福本

「あ、僕が出るよ」

いきなりのノックに、新沢が出ようとする。ドアの近くに居た福本が出る。

福本

「どちらさま?!」

バスッ!

ドンガラガッシャーン!

福田

「! 先輩!？」

マリーダ

「! 大介!！」

遠地

「な、なんだ!？」

福本が吹っ飛ばされたのを見て、全員の視線がドアに集まる。

隊長

「まさか、アドミラルフクモトが出てくるとは…手間が省けた」

入って来たのは、顔を迷彩柄に塗った男3人。

篠森

「敵の特殊部隊か」

山本長官

「狙いは私と福本だな」

隊長

「よくご存知で…では…」

山本長官

「待て。狙いは私だけの筈だ。彼らは関係無い」

隊長

「残念ながら…第七艦隊の人間は特に狙うよう言われているので…」

福田

「け、それがルーズベルトの答えか!」

遠地

「ち……」

ここには、4人の男（福本・山本長官を抜く）が居るが、向こうは

トンプソンマシンガンを構えた兵士2人が居るから、下手に手を出せない。

隊長

「さて…恨むなら、アメリカに挑んだ自分を恨め」

そう言うと、拳銃を向ける。

ズダーン！ズダーン！ズダーン！

次号へ

迫る危機 前編（後書き）

絶体絶命のピンチ！

山本長官・第七艦隊の面々は大丈夫なのか？！

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 迫る危機 後編

ダーン！ダーン！ダーン！

石田

「な、なんだ?!」

たまたま巡回していた石田が、銃声を聞いた。

遠いのか銃声は小さい。

直ぐ様、零式拳銃の装弾を確認すると走り出した。

向かうは司令部。

福本達が会議をしている事を石田は知っていたからだ。

箱根

「うう〜…」

新城

「…大丈夫か？」

飲み過ぎて、酔い醒ましに外に出ていた、箱根と新城。よほど酔っているのか、箱根の足下がおぼつかない。

箱根

「むう、大丈夫だ！」

新城

「いや、足下フラフラだから」

箱根

「大丈夫…きゃあ!」

ズーン!

……遂には転けた。

新城

「今度こそ、大丈夫じゃ無いね」

箱根

「大丈夫だ! 貴様の助けなんかいら無い!」

そう言って立ち上がるが、やっぱり足下フラフラ。

新城

「はあ…ほら」

このまま埒が空かないので、彼女をおんぶする為にしゃがむ。

箱根

「むづ、誰が貴様の世話になるか!」

……とか言いつつ、新城の首に手を回す。

箱根

「か、勘違いするな! も、もし、変なことやったら絞め殺すから!」

新城



「はいはい」

もちろん、そんな事はしないが。  
と、その時……

「誰か！」

いきなり誰何された。  
しかし、新城はその人物を知っていた。

新城

「石田大尉？石田大尉ではありませんか」

石田

「その声は……新城か？」

ある種の飲み友達である石田と新城はお互い顔見知りだった。

石田

「と、なると……おぶってるのは箱根か」

箱根

「そつよ！文句ある？」

石田

「……飲み過ぎだな」

新城

「……ところで……どうしたんですか？拳銃なんて抜いて」

石田

「ん、いやこれは……！伏せろ！」

ズダーン！ズダーン！

新城

「い、い、いきなり撃たないで下さいよ！」

箱根

「…酔いが醒めました」

石田

「バカ、後ろを見る、後ろを！」

2人

「へへ？」

言われて後ろを見てみると、手にナイフを持った男が2人……心臓を撃ち抜かれていた。

石田

「敵の斬り込み隊か……ヤバイな」

新城

「へ？どうしてですか？」

石田

「あのな…敵がたった2人で彷徨ってる訳無いだろう」

箱根

「ねえ…あなたは何してたの？」

石田

「は！しまった！こんな事してる場合じゃあ無かった！」

新城

「あ、あの！どうしたんですか？！」

石田

「こいつらの目的は福本長官と山本長官だ！今夜、司令部で会を議してるんだよ！」

新城

「あ、待って下さいよ！」

トンプソンマシンガンを拾うと、石田を追い掛ける。

箱根

「ちよ、ちよっと……もう！2人共行っちゃったら、誰が報せるのよ！」

そう叫ぶが聞こえていない。

ため息を吐きつつ、彼女は転移した。

車魂達のもとへ……

司令部の一室

全員、時間が止まったかの様に固まっていた。  
なぜなら……

ドサッ！ドサッ！

隊長

「ぐ……バカな……心臓を狙った筈なのに……」

ドサッ！

2人の兵士は眉間を、隊長は心臓を射ぬかれていた。

福本

「それなら……ちゃんと死んでるか確認しやがれ……」

右手にモーゼル大型拳銃を握りながら呟く。

マリィダ

「大介！」

山本長官

「福本！大丈夫か？！」

福本

「……お陰さまで……大丈夫です」

バン！

兵士

「なんだ！」

兵士

「あ、隊長が殺られているぞ！」

先程の銃声を聞いた敵兵が入って来たが……

ダダダダダダダ！

兵士

「うわ！」

兵士

「ぐげ！」

射殺した兵士からトンプソンマシンガンを拾い上げていた新沢が乱射する。

マリーダ

「けど、大介！あなた、胸を……」

福本

「ああ……けどな……」

そう言って取り出したのは……

マリーダ

「あ、それ……位牌……」

福本

「ああ…怨念が僕にくる様に持ってたのに…まさか、守ってくれるとはね…」

山本長官

「やはり、その為に持ってたのか…立てるか？」

福本

「ええ、立てます」

マリーダに手を貸してもらったが、体に異常は無いようだ。

石田

「山本長官！福本長官！ご無事ですか！」

福本

「石田に新城…お前ら、何してる？」

新城

「何って…長官達を救いに来たんですけど」

マリーダ

「残念、一步遅かったわね」

福本

「まあ、とにかく、ご苦労様」

フェルデナント

「御二人共、ご無事でしたか！」

福本

「ああ。山本長官も俺もぴんぴんしてるよ」

フェルデナント

「そうですね…すみません。警戒を緩めていました」

福本

「仕方無いさ。そんな事言ったら、僕も油断してたし」

新沢

「しかし、敵特殊部隊がいたとは…ニミッツのめ!」

マリイダ

「…多分、ニミッツ大将も知らなかったんじゃないの」

新沢

「!なぜですか?」

福本

「知ってたら、別に停戦する必要は無い。多分、ルーズベルトが単独でやったんだろう」

遠地

「ところで、敵特殊部隊の残存は?」

フェルデナント

「逃げた様です。念のため、検索隊を出しておきました」

福本

「そうか…あと、頼むわ」

フェルデナント

「はい」

次号へ



迫る危機 後編（後書き）

明日・明後日は定期通りに、『士官候補生異世界奮闘記』を更新いたします。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## それぞれの決意

9月2日

支援艦隊・輸送船団がパールハーバに到着した。  
支援艦隊は応急修理で終わっていた巡洋艦以下の損傷艦艇の本格的修理が始めていた。

輸送船団は分解梱包していた機体や運んで来た人員を降ろしていく。そんな中、支援艦隊・輸送船団に同行していた航空戦艦『アーカンソー』……今は『出雲』……が入港した。

さて、元アメリカ艦魂達は戦艦ノースカロライナの会議室に集まっていた。

ノースカロライナ

「福本さん。みんなを集めました」

福本

「ありがとうございます」

丁寧にお辞儀をして、前を向く。

福本

「すみません。集まってもらって」

ワシントン

「ほんと！和泉とお酒飲む約束したたのに！」ついこの間飲酒で怒られたばかりだと言つのに……いったいどこまで好きなのか…。

レキントン  
連龍

「福本長官、なぜ我々を集めたのですか？」

福本

「…皆さんに伝えたい事があります」

サラトガ  
砂龍

「なんですか？あらたまつて？」

福本

「…実は内々に話を進めていましたが、講和の際、あなた方をアメリカに返還しようと思ひます」

全員

「……………え?!」「……………」

福本

「アメリカとの戦争も後少しですし、これ以上日本海軍艦艇として戦つのも辛いと考えて返還を「結構です!」「…え?」

福本の話をして拒否したのは、エンターだった。

エンター  
遠龍

「福本長官。話がそれだけなら、私は戻らせて頂きます」

そう言つと、誰かが止める暇も無いほど素早く転移した。

レキシントン  
連龍

「福本長官。お心遣いありがとうございます。ですが、我々も今や日本海軍の一員。このまま日本海軍で戦わせて下さい」

福本

「……無理をなされていませんよね？」

サラトガ  
砂龍

「いいえ。それどころか私達は今頃撃沈・除籍されています。返還されても、居場所は有りません」

福本

「……………」

ノースカロライナ

「それに、福本長官には救って頂いた恩があります。まだ、その恩は返しておりません」

福本

「いや、それは……」

ノースカロライナ

「わかっております。ですが、助けてもらった恩や義を返すのが日本の侍ではありませんか？」

ロングアイランド  
勝鷹

「私は零に説得されて、日本海軍に来ました。もう、アメリカに未練はありません」

ヒューストン  
箱根

「…フィリピンで死ぬ筈が、曲がりなりにも日本海軍艦艇として生きていますから……今のままで構いません」

結局、ワシントン以下アメリカ艦魂達も日本海軍所属で良いとゆう事で纏まった。

福本

「……本当にそれで良いんですね？」

レキシントン  
連龍

「はい！」

全員を代表して、連龍が答える。

福本

「……わかりました。すみません、お時間を取らせてしまって」  
そう言つと、待ってましたと言わんばかりに、ワシントンが飲みに行こうと艦魂達を誘いながら出て行った。  
他の艦魂達もそろそろと出て行く。

福本

「ふっー……」

アーカンソー  
出雲

「福本長官」

福本

「あれ？アーカンソーさん？」

アーカンソーはどちらかといえば古風な人だ。珊瑚海海戦後、トラックで会った時は所々包帯を巻いていたが、腰にはサーベルを帯びていたのが印象的だった。日本海軍で近いのは山城さんだろう。

アーカンソー  
出雲

「あなたはトラックで初めて会った時、『僕は戦争を始めた1人だから終わらせる責任がある』と言いましたよね」

福本

「ええ…実際そうです」

アーカンソー  
出雲

「なら…私達も同じです。この戦争を戦ったからこそ、終わらせる責任がある。例えば日本海軍艦艇に成ろうとも…いえ、戦争を始めた国の人間だからこそ…これが私の決意です」

福本

「…わかりました。これからもよろしくお願いします」

ハワイ司令部

福本

「…と、言う事で鹵獲艦艇の返還は白紙と言う事になりました」

山本長官

「そつか…結局、要らぬお節介になったか」

福本

「はい……」

山本長官

「良かったな。残ってくれて」

福本

「ええ……報告を終わります」

そう言い退室すると、部屋の前で遠龍が居た。

福本

「遠龍？」

遠龍<sup>エンター</sup>

「……時間ある？」

福本

「あ、ああ。あるよ」

遠龍<sup>エンター</sup>

「なら、付き合って」

遠龍<sup>エンター</sup>

「……襲われた事、聞いた」

福本

「ああ、特殊部隊に襲われた事ね」

遠龍<sup>エンター</sup>

「位牌……ヨーク姉とホーネットもいる？」

福本

「もちろん……いますよ」

パールハーバを歩きながら話をする2人。

遠龍<sup>エンター</sup>

「なら……2人はあなたを曲がりなりにも護ったんだ……」

福本

「……………」

遠龍<sup>エンター</sup>

「本来なら……文句もあるし、殴りたいところだけど……2人が護った事だし止めときます」

福本

「……言いたかったはそれだけ？」

遠龍<sup>エンター</sup>

「はい……あ、これからもよろしくお願いします」

福本

「ああ、よろしく」



次号へ

## それぞれの決意（後書き）

昨日更新する筈だったのに……申し訳ございません。本日中にもう  
1つ更新します。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 鍛練の合間に（前書き）

登場人物

アーカンソー  
出雲

航空戦艦出雲（元アメリカ戦艦アーカンソー）の艦魂。  
アメリカ海軍の古参で、騎士道が（アメリカに）まだあった第一次  
大戦前に生まれた為、サーベルを腰に帯びている。  
ちなみに、出雲になったのは、航空戦艦の伊勢・日向が偶々、神様  
関係地であった為、出雲大社のある出雲になった。

## 鍛練の合間に

9月4日

パールハーバでは相変わらず、日本海軍艦艇がひしめいていた。ハワイ陥落から既に一週間程経過していたが、アメリカが講和に応じる気配は無い。

兵士達の間からも、自然に次の作戦の話題が多く出て来た。ある者はパナマ運河だと言い、ある者は西海岸だと言う。

または東海岸に出てニューヨークかワシントンDCを攻撃するのでは無いかと言う者も出て来た。

そんな話をしながらも、将兵は訓練に励んでいた。

そんな中、艦魂達も鍛練に励んでいた。

中でも、山城が行っている剣道練習は活気だった。

日本海軍の艦魂達の間では昔から有名だが、山城は剣道が得意だ。

そんな山城が数人の艦魂を誘い剣道練習を始めたのが、今や福本やマリーダ、第七艦隊の艦魂達も加わったものだから、巷では『山城剣道場』と呼ばれている。そして今日は……

アーカンソー  
航空戦艦出雲の飛行甲板

飛行甲板の上では恒例の剣道練習が行われていたが……異様な雰囲気だった。

なぜなら……

福本

「……………」

「……………」

マリダ

「……………」

山城

「……………」

全員

「……………」

福本は少女と一足一刀の間合いで正対し、それ以外の誰も彼もが黙っていた。

双方、微々とも動かず正対していた。

そんな状況を変えたのは、正対していた少女だった。いきなり、猛然とした勢いで突きを繰り出してきた。対し、福本はギリギリのところを避ける。

しかし、少女も慣れたもので、直ぐに体勢を立て直し再び突きを繰り出してきた。

どうやら少女はフェンシングが得意の様だ。

そのまま、突く、避ける、突く、避ける……この繰り返し。

フェンシングは基本的に突き殺すのが主で、斬り殺す剣道とは速さが違う。

福本も切っ先が擦れるか擦れないかの間一髪で避ける。

……よほどの手練れだろう。

それが何度も続き、膠着状態になりかけた時……

福本

「せい！」

「！！！」

ビシッ！

山城

「一本！！！」

審判役の山城の声に周りの異様な雰囲気もやっと消し飛ぶ。

福本

「ふう……」

愛宕

「凄いですよ！福本長官！」

福本

「いやいや……さすがフェンシング。あの突きは凄いよ……勝てたのは偶々だよ」

山城

「どつであつた、福本殿？」

福本

「なかなかの手練れです。何回もヒヤリとしましたよ」

「あなたもなかなか出来る。私はまだまだ」

山城

「紹介しておこう。M10戦車のリッジだ」

リッジ

「M10対戦車自走砲の車魂のリッジです。よろしく」

福本

「よろしく、リッジ。僕の紹介は…要らないか」

リッジ

「はい。第七艦隊司令長官の福本大介。時には敵の目の前に入る程の司令官」

福本

「あはは……」

マリーダ

「うふふ」

伊吹

「ところで福本長官。昨日到着した蒼空と二式大艇の事ですが…」

福本

「ん？」

鍛錬を終え、勇鷹の作ってくれたおにぎり各種（鮭、鰹、梅干し、焼おにぎり等）を食べていると伊吹が話し掛けて来た。

紫音

「そう言えば、外国人が乗っていたな」

福本

「ああ、外国人義勇兵ですね」

石狩

「外国人…義勇兵？」

福本

「まあ、外国人志願兵でもあるんですが…言葉の定義はおいとしましよう。つまり、日本、あるいはその領域である台湾、朝鮮、大連、満州に在住している外国人が日本軍に志願しているんですよ」

アーカンソー  
出雲

「ですが、アメリカとの戦争は終わるですよね？」

マリーダ

「ええ。アメリカとはね」

リッジ

「？アメリカとは？」

福本

「僕達第七艦隊の次の戦場…ヨーロッパですよ」



山城

「…なるほど、ソ連か」

福本

「はい。前々から第七艦隊のヨーロッパ派遣は決まっていたし、陸軍も対ソ戦に備えていました。そしたら噂が広まって志願者が出て来たそうです」

紫音

「ならば…あちこちから人が？」

マリーダ

「うん。朝鮮人や中国人、白系（亡命）ロシア人、亡命していたポ  
ーランド人、フィンランド人、イタリア人等々…あっちこっちから  
志願しているわね」

石狩

「…よほどソ連の加害力は凄いですね」

福本

「世界大恐慌の時、ソ連は五カ年計画で発展している様に見えてい  
た……が裏では農業改革の失敗とそれを帳消しにする粛清で推定で  
も10万人が死んでいるそうです」

リツジ

「…!!」

山城

「な、なに?!」

伊吹

「そんな…バカな！」

福本

「…さつきも言いましたが『推定』です。その後のソ連軍粛清や周辺諸国に対する侵略まがいの行為を含めれば、どれ程の犠牲者が出ているか……スターリンはそう言った意味では魔王ですね」

アークシー  
出雲

「…大統領はそんな国に援助していたんですね…」

マリイダ

「ええ。ルーズベルトは日本を叩き潰す事に神経がいつてしまつて、それ以上に厄介なものを考えなかつたのね」

愛宕

「そう言えば、彼らはどこに配属されるんですか？」

福本

「主に航空隊と陸戦隊ですね。あとは通信部に何人が」

石狩

「…どんどん、国際艦隊化してませんか？」

福本

「仕方ありませんよ。現地で戦うとなると、ある程度の人材は必要ですから」

次号へ

**鍛練の合間に（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

## アメリカの苦悩・日本の道筋（前書き）

登場人物

リッジ

M10 対戦車自走砲の車魂。アメリカの車魂の中でも一番の熱血漢。一番得意なのはフェンシングだが、格闘系や銃剣道も上手い。（本人はまだまだ弱いと主張）

そんな反面、お化け類が大の苦手。

最近では山城達の練習相手（互角に戦えるのは数人）になっている。

## アメリカの苦惱・日本の道筋

9月5日 ホワイトハウス

ルーズベルト大統領

「さて、諸君。日本政府はハワイを奪取したからといって講和を持ち掛けてきたが、我々には敗北の二文字は無い。例え西海岸に上陸して来ても講和をする気は無いと突っぱねておいた」

これを聞いた閣僚も軍人も反応しなかった。

なぜなら、西海岸に上陸でもされたら、あっという間に大統領は終わりだからだ。

今や世論は『日本と講和』が大勢を占め、大統領支持率も20%をやっと維持している程落ちている。

新聞も八割がたが大統領批判に回り、あとの二割が民主傾倒で保っている状況だ。

それをルーズベルトが知らない筈はないだろうが……。

ルーズベルト大統領

「キング大将。海軍は何時日本軍に挑む事が出来るのかね？」

キング大将

「は、現在ハワイ沖海戦で損傷した艦艇の修理を突貫工事で行っております。また、新造艦の方も出来るだけ急がせています」

ルーズベルト大統領

「そんな事は訊いておらん！何時日本軍に挑めるのか訊いているんだ！」

キング大将

「来年です」

ルーズベルト大統領

「遅い！遅すぎる！今年中に挑める様にしろ！」

キング大将

「…努力します」

キング大将は拳を震わせながら答えた。

戦力化するなら今年中に出来る。

だが、リーダー統制射撃を封じられ、15秒射撃でも敵わなかった日本軍に対抗するには練度があまりにも足りないのだ。

それにだ、全滅できる筈だった艦隊を戦闘不能程度で日本軍が留めたのは意図的だ。

もし、日本海軍がアメリカ艦隊を全滅させていたら、アメリカ海軍は存在していないし、更に戦力化が遅れていたのだ。

日本軍からしてみれば、その絶好のチャンスを自ら捨てたのである。この事を考えたキング大将は、日本軍は講和の為にアメリカ艦隊を見逃した、とゆう結論に至った。

この為、キング大将としては大統領に講和を薦めたいのだが、今の大統領が聞くかどうか……。

ルーズベルト大統領

「陸軍はどうかね？」

マーシャル大将

「はい。例の作戦の準備は進んでいます。焼夷弾の開発も完了し、B29の搭乗員訓練も始まっております」

ルーズベルト大統領

「そうか！日本をアツと言わせる作戦だ。しっかり頼むよ」

マーシャル大将

「…はい」

ルーズベルト大統領

「さて、予算だが……」

会議終了後……

マーシャル大将

「やあ、キング」

キング大将

「マーシャルか」

帰ろうとするキング大将にマーシャル大将が声をかけた。

マーシャル大将

「どうだ、海軍は？」

キング大将

「…残念ながら、士気は最低だ。ハワイ沖海戦のが効いたんだろう」

マーシャル大将



「そうか…陸軍もだよ」

キング大将

「…例の作戦はどうした？」

マーシャル大将

「失敗するさ。新型戦闘機や誘導弾を使ってきた日本軍なら、阻止出来るよ」

キング大将

「…やはりか」

マーシャル大将

「大統領は何を考えているのか…すでにアメリカ国民には戦う意志が無いとゆうのに…」

キング大将

「…仕方ないさ、大統領は既に現実と妄想との区別がついていない」

マーシャル大将

「…我らからしてみれば日本と講和したい。これ以上、無駄な戦いで若者を失いたくない」

キング大将

「日本政府や天皇もそうだろう。そうでなければ、イギリスやスイス、バチカンまで通して接触している理由が解らん」

マーシャル大将

「…潮時かな」

キング大将

「潮時だろつな」

その頃、日本政府では……

宇垣首相

「うーむ…ルーズベルトは応じないか…」

永田陸相

「陸軍としては、これ以上アメリカに介入したくは無いのですが…」

米内海相

「それは海軍としても同じ事です。護衛艦隊があるだけマシですが、ハワイへの補給は相当キツいですよ」

宇垣首相

「一刻も早く講和したいのだがな…」

永田陸相

「諜報部によりますと、連日ホワイトハウスの前では講和デモが行われているそうです」

米内海相

「多分、原爆の完成を待っておるのでしょうか……そうは問屋が降りませんよ」

宇垣首相

「……彼ならどうするかな？」

永田陸相

「彼？彼と言つと福本大将ですな？」

米内海相

「彼なら……そうですね、自ら空挺作戦でワシントンに殴り込み、ルーズベルトに日本刀を突き付けて、『戦争を止めて講和しろ！』と言つかも知れませんか」

宇垣首相

「なるほど、それは痛快だ」

永田陸相

「彼ならやりかねませんね」

米内海相

「今思えば、福本大将以下第七艦隊の幹部達が日本に生まれた事はある意味幸運でしたな」

宇垣首相

「ああ、1人だけ違うが……この際構わん……アメリカに生まれていたら日本は終わっているな」

永田陸相

「彼らはこれからの日本を担っていく大事な若者です。我々は彼らの道筋を作つてゆかねば……」

宇垣首相

「ならばなおさら、早期戦争終結が必要だな…」

次号へ

アメリカの苦悩・日本の道筋（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 福本は将棋・マリーダは料理

9月15日 パールハーバ

真つ青な大空の下、戦艦播磨の防空指揮所で福本と山本長官が将棋を打っていた。

山本長官

「アメリカは講和を拒否し続けているな」

パチッ

福本

「そうですね。アメリカが動かないのも気になりますね」

パチッ

山本長官

「新型のB29が出て来ないのも気になるな」

パチッ

福本

「もし戦果が欲しいなら、ここを爆撃するとかしてくるんですけどね」

パチッ

山本長官

「あるいは…何かをやる為に静かなのか」

パチッ

福本

「…嵐の前の静かさ…不気味ですね」

パチッ

双方、腹の探り合いをしながら打ち合っているが、亀の甲より年の功、場馴れした山本長官だけあつて的確に攻めてくる。対し、福本も必死に防戦するが……

福本

「……負けました」

山本長官

「わっはっはっは、やはり君には博打に向かんよ。顔に出してしまうからな」

そう言うと、近くにあったやかん…いつの間に置かれたかは知らないが…のお茶を湯飲みで飲む。

山本長官

「しかし、作戦的博打なら君も得意だな」

福本

「あはは、確かに」

福本もやかんのお茶を飲む。

山本長官

「おお、そうだ。ニミッツ大将達高級将校の返還だが、10月1日に決まったそうだ。イギリス経由でな」

福本

「そうですか。良かったです」

山本長官

「これでアメリカの態度が変わればいいが…」

福本

「最低限、アメリカ議会の揺さぶる位は出来ますよ」

負けた福本が将棋と将棋盤を片付けながら言う。

山本長官

「…福本、もし日本の生産ラインにダメージを与えようと思つと、君ならどうする?」

福本

「生産ラインですか?そうですね……」

少し考えると、直ぐ様意見を出した。

福本

「アメリカなら大工場で一括生産かも知れませんが、日本は反対に小中零細工場が部品を作って大工場に納入するシステムですから…」



…資源の供給を断ち切り、日本全部を焼け野原にしないかぎり生産ゼロは難しいですよ」

山本長官

「そうか……」

福本

「…どうなされたんですか？」

山本長官

「いや…最近変な夢を見る」

福本

「変な夢…？」

山本長官

「私がブーゲンビル上空で戦死し、マリアナ・レイテで負け、本土は連日の無差別爆撃で焼け野原…：沖縄で住民を巻き込んだ悲惨な地上戦…多くの若者が特攻隊として空や海に散り、大和が沖縄に向かう途中に沈没し、広島・長崎に原爆が投下され、1945年8月15日ポツダム宣言を受け入れ敗戦を迎えた」

福本

「…長官、そ、それは夢ですか？」

山本長官

「解らん。ただ、私は夢だと思っている。リアルだったかな」

福本

「…まるで別世界の日本を見て来た様な話ですね」

山本長官

「そうかもな…まあ、見るならもつとマシな夢が見たかったがな」

福本

「それもそうですな」

山本長官

「ああ…話は変わるが、遠龍で預かっているパイロットはどうする？ニミッツ達と共に帰国させるか？」

福本

「家族はハワイに居ますから、本人に訊いてみないと何とも言えません」

山本長官

「出来るだけ早く訊いてくれ。出発直前はいくらなんでも無理だからな」

福本

「はい」

マリーダ

「防空指揮所に？」

神波

「はい。山本長官と将棋をしてましたよ」

マリダ

「もう、暇なら手伝って欲しいと思ってたのに」

勇鷹

「お昼ご飯を作るのをですか？」

包丁を握り野菜を切るマリダ。

その隣では料理本を見ながら勇鷹がうどんの茹で具合を見ている。  
神波は牛肉を切っていた。

マリダ

「違うわよ。お昼から義勇兵の視察に行こうと思ってたの」

神波

「本当ですか？」

ミア

「怪しいですよ」

マリダ

「…五月蠅いわね」

戦鷹

「…ところで、なんでカレーうどんになった訳？」

若杉

「ごはんと肉じゃがもあるよ？」

戦鷹

「ごはんと肉じゃがの組み合わせはいい。私はなんでカレーうどん

なのかを訊いてるの」

勇鷹

「うーん……私の気分」

戦鷹

「……そうか」

そう言いながら、玉ねぎを切る。

若杉

「あれ？泣いてるの？」

戦鷹

「た、玉ねぎが目染みるだけだ〜！」

若杉

「ああ、それは目じゃ無くて鼻を摘まめばいいんだってさ」

戦鷹

「え、本当？」

若杉

「本当。お袋が言ってた」

マリーダ

「は〜い、そこ。イチヤイチャしな〜い」

勇鷹

「イチヤイチャで思い出しましたが、山城さんは愛宕さんの事好

きなんですよ」「

神波

「へえ〜……ええ!」

マリィダ

「うっそー!」

ミア

「……え〜と、確認しますね。山城さんは戦艦山城の艦魂で、愛宕さんは重巡洋艦愛宕の艦魂の愛宕さんですよね?」

勇鷹

「そうですよ」

戦鷹

「……意外中の意外」

若杉

「……ノーコメント」

マリィダ

「それ、山城の片想い?」

勇鷹

「そうみたいですよ」

神波

「……日本海軍始まって以来の珍事決定ですね」

若杉

「ネタ元どこ？」

勇鷹

「扶桑さんです」

全員

「『『『決定的事実だわ』』』」

次号へ

福本は将棋・マリータは料理（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 衝撃

10月2日（ハワイでは1日）パールハーバ

福本

「な、なんだとー!!」

戦艦播磨の司令長官公室で事務仕事をやっていた福本に届いたその報告は、大音響の叫び声を上げさせるには充分過ぎるものだった。そして、叫び声は艦内を爆風のように駆け巡り、当直明けでぐっすりと眠っていた水兵を飛び起こす程だった。だが、それをもろに受けたのは報告に来たジントと、隣で同じ様に事務仕事をしていた播磨で、2人共その衝撃波（？）でひっくり返ってしまった。

福本

「あ、ごめん！2人共、大丈夫か？」

ジント

「ええ…窓ガラスが無くて良かったです」

播磨

「耳がキンキンする」

福本

「ごめんごめん…しかし、これは本当か?!」



ジント

「間違いないと思います。念のため、ラジオ傍受をさせていますが……」

福本

「……すまない、ジント。戦隊司令を召集してくれ。30分後に会議室で。ごめん、播磨。大和に行かせてくれ」

ジント

「わかりました」

播磨

「了解！」

30分後……播磨会議室

福本

「すまない、みんな。アメリカに動きがあったから伝えておこうと思っただけ。マリィダ」

マリィダ

「先程、イギリス経由で送られてきた情報によりますと、ニミッツ大将以下昨日帰国させた高級将校達が利敵行為により逮捕されたとの事です」

福田

「な、なんですって?!」

遠地

「本当か?!」

福本

「……事実だ。ラジオ放送を傍受したが…少しだったがその事に触れていた」

沖田

「そんな…ハルゼー中将やリー中将なら理由は解りますが…なぜニミッツ大将まで?!」

マリーダ

「利敵行為…の一言で説明がついてるけど…確かにそうよね」

千歳

「ハルゼー中将はエンタープライズとレキシントン・サラトガを私達に渡した事ね。リー中将はノースカロライナ・ワシントンを鹵獲された事…なら、ニミッツ大将はハワイを渡した事?」

楠木

「ですが、レキシントン・サラトガは処分を我々に妨害されたのが原因です。ノースカロライナ・ワシントンはルーズベルト自身が命令を出してやらせた事。それに3人共、部下の命を考えて出した結果ですよ?アラモ砦みたいに玉砕しろとも言ってますか?」

上杉

「そうね。そんな事を言ったら、人命重視のアメリカ軍規定から外れる事になるし…」

福田

「もしかしたら、ハルゼー中将とかから余計な事を言われ無い為…  
口封じではありませんか？」

遠地

「なるほど、ある種の情報統制か…ルーズベルトならやりそうな手  
だ」

沖田

「いったい奴は何がやりたいんでしょうか？そんな事をやったって  
アメリカ国民の気持ちなんか変わりませんよ」

福本

「うっ…む…人間的心も解らないからな」

いくらなんでも、帰って早々捕虜になっていた高級将校を逮捕する  
とは…福本でも予想出来なかった。

新沢

「長官！こうなればしかたありません！雷号作戦を早期実施しまし  
よう…」

雷号作戦はハワイ攻略でアメリカが講和に応じない事を考えて電号  
作戦と同時に立案された作戦だ。

遠地

「それは無理だろう。作者の構想予定も有るし、第一、参加部隊の  
調整が必要だ」

沖田

「それに、滑走路の拡張が間に合わない。いまは大方完了しているが、実際に来てみないと解らないし……」

新沢

「ありやりや……」

福田

「……そう言えば、後任人事はどうするのでしょうか？」

マリーダ

「そうね……早めに決めないと、海軍全体の士気に関わるからね」

沖田

「……あまりパツとした人物は思い浮かびませんね」

福本

「スプルーアンス中将が有力候補だが……ルーズベルトが着任を許すか微妙だな」

篠森

「日本海軍の将官と親友なんてルーズベルトが知っていたなら、確実に許可しませんね」

遠地

「……じゃあ、誰だ？」

福田

「……知りませんよ」

第七艦隊幹部も予想外の展開であーだこーだと論議を展開させるが、

アメリカの考える方向性が見えない。とにかく、アメリカに近々動くかもしれないと注意を喚起すると解散となった。  
だが……

同じ頃、ホワイトハウス

ルーズベルト大統領

「マーシャル大将、陸軍の準備は完了したかね？」

マーシャル大将

「は、実施日は10月9日。日本時間では10日。既に設営隊を進出させて滑走路の拡張に努めております」

ルーズベルト大統領

「そうか。ルメイ中將がアイデアを持ってきた時は心配したが……実行可能か」

ニヤニヤ笑いながら……それはもう、まるでクリスマスプレゼントを見た子供の様に……だが、その笑いはどこか狂気やどす黒い物を含んだ笑いだった。

マーシャル大将

「……大統領、本当に構わないのですか？」

ルーズベルト大統領

「構わん。ジャップをバーベキューの様に焼き殺せば良い」

マーシャル大将

「…もしかしたら、アメリカ国民を巻き込む可能性も…」

ルーズベルト大統領

「勝利の為の小さな犠牲だ。彼らも文句は無いだろう」

マーシャル大将

「はあ………」

そんな事をして果たしてアメリカは勝てるだろうか？マーシャル大将はこの作戦に着手した時からそう思っていた。

例え成功しても、今度は自分達が地獄の業火で焼かれるのでは無いか？

そんな心配を夜にする事がある程だ。

そういった意味で内心、マーシャル大将はこの作戦が失敗する事を祈っていた。そして、こんなバカな戦争が早く終わる事も…。

次号へ

## 衝撃（後書き）

次号、いよいよアメリカが作戦開始！

攻撃目標は何処なのか？

そして、日本軍に手立てはあるのか！？

ご意見ご感想をお待ちしております！

**銀翼の驕敵を討て！ 前編（前書き）**

今回は時間が有ったため連続投稿致します！



## 銀翼の驕敵を討て！ 前編

10月10日 日本本土

事の始まりは日本海で操業していた漁船団とそれを護衛する二隻の松型駆逐艦のある発見報告だった。漁船団はいつもの様に漁をしていた。

この日はどうゆう訳か晴れてはいたが、雲の多い日だった。しかし、そんな事は漁師に関係なく漁を続けていた。ふと、ある漁師が空を見上げると、雲間に鳥を見た。だが、鳥が飛ぶにしては高く、不思議な事に鳥は雲を引いていた。

その頃には他の漁師達も手を止め、『鳥』を見ていた。漁を止めて上空を見ている漁師達を不審に思った近くの松型駆逐艦の乗組員が訳を尋ねると、漁師達は変な鳥が飛んできると言い始めた。この時、この松型駆逐艦のレーダーにも『鳥』が反応していた。物理的に考えて、鳥がレーダーに反応する訳が無い。しかも、レーダー画面上に現れる輝点は大きな物だった。

レーダーの扱いに精通する特務士官はこの輝点は大きさは違えど、四発機の反応だと判断した。そして、打たれた打電は……

『四発機と思われる機影を多数確認せり。進路は…日本本土なり』  
後に『日本本土防空戦』と呼ばれる戦いの幕開けだった…。

この報告を受けた本土防空司令部（陸海軍共同）は最初こそ驚いた

が、その対応は早かった。  
直ぐに各関係省庁に連絡を入れ始めた。海軍省は米内大臣が、陸軍省は永田大臣が速急に対応、全国の陸海軍基地では警戒警報が出され、迎撃機の準備が始まった。もちろん、この報告は宇垣首相にも届き、20分後には日本本土各地で空襲警報が鳴り響いた。

皇居

ウウー！！

明子天皇

「！空襲警報！！」

執務室で何時もの様に執務をしていた明子天皇は突然の空襲警報に立ち上がった。

士官

「へ、陛下！一大事にございます！」

明子天皇

「どうしたの！？」

士官

「は！日本海にて南下中の四発機の機影を多数確認！現在進路を変えず本土に接近中！」

明子天皇

「迎撃命令は？避難も始まっているの？！」

士官

「はい！敵の目的が掴めない為、各地の都市に避難及び迎撃命令が出されました！」

明子天皇

「そう、わかったわ！」

そう言つと、近くに架けてあつた軍服を急いで着ると、これまた近くにあつた鉄兜を掴むと執務室から飛び出して行つた。

士官

「ちよ、陛下！どこに参られるんですか?!」

士官も慌て、明子天皇を追い掛けて行つた。

さて、一報の後に各地の航空基地から偵察機が発進した。とにかく機種と機数、国籍を確認しない事には始まらない。だが、意外にも第二報は佐渡島に配備していたレーダー基地だった。直ぐに佐渡島レーダーの誘導に従い索敵していた百式司偵が確認した。  
それは……………

『敵機種は新型のB29爆撃機なり！機数は80！国籍は白星なり！繰り返し、国籍は白星なり！』

白星……………アメリカの白い星。

これを聞いた防空司令部は予想外であり予想内であつた。

空襲は赤星のアメリカ軍機……ソ連軍がアメリカから買い取ったアメリカ軍機で来ると思っていたが……アメリカ軍が乗り込んで来るとは思っていなかった。  
だが、迎撃態勢は万全だった。  
相手が変わっただけで、基本的には同じだからだ。

士官

「へ、陛下！屋根に登って何をなされているんですか？！」

明子天皇

「何もして無いわよ」

士官

「なら早くお降り下さい！危のうございます！」

明子天皇

「それよりも、機種はわかったの？」

士官

「新型のB29爆撃機であります！」

明子天皇

「そう……迎撃部隊に打電して！文面は……」

新潟の海軍基地

『敵機種はB29スーパーフォートレス！機数80が南下中！帝都  
に向かう恐れあり！迎撃隊、迎撃せよ！』

「よし！行くぞ！」

鶴野正敬少佐率いる10名のパイロット達が直ぐ様滑走路にある機  
体に取り込む。滑走路に駐機する普通の機体とは明らかに違う機体。

三式局地戦闘機『震電』

史実ではB29を叩き落とす為に日本の技術者達が魂を込めて開発  
した幻のエンテ型戦闘機。

この世界の日本は全力を上げて三式局地戦闘機として開発したのだ。  
迎撃に出た震電隊は上空12000mまで上昇、百式司偵の誘導に  
従い飛ぶ。

その時、無線が響いた。

『こちら、新潟基地。天皇陛下から迎撃隊に伝言だ』

鶴野少佐

「！伝言?!」

『読み上げるぞ。』天皇から迎撃隊へ 皇国臣民の生命は貴君らの  
双肩にあり 各員奮起し銀翼の驕敵を撃滅せよ！』以上』

この瞬間、鶴野少佐以下震電隊のパイロット達は奮い立った。確かに、B29がどこを爆撃するかは知らないが、もしここで逃げればそれだけ国民を死なせる事になる！  
しかも、天皇陛下直々の伝言まで頂いたのだから！

『こちら、百式司偵。貴隊を確認した。もうすぐそこだ。武運を祈る』

鶴野少佐

「了解」

返事をしたほんの30秒後。部下の一機が大型四発機を見付けた。B17、B24を見た事がある鶴野少佐は記憶から引き出して比べてみる。  
確かに大きい。  
B17が子供に見えそつだ。つまり、B17より大量の爆弾を腹に抱えている訳だ！

鶴野少佐

「全機！震電の初陣だ！一機たりとも逃がすな！逃せば国民が危ない！」

パイロット

『『『『『『『『『『『了解！』『』『』『』『』『』』

次号へ

銀翼の驕敵を討て！ 前編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております！

## 銀翼の驕敵を討て！ 後編

### B29編隊の一機

「ジャップめ…今日こそお前らに地獄を味あわせてやるぜ」

そう言いながら、笑うのはカーチス・ルメイ中将……史実では東京大空襲などの無差別爆撃を指揮し、日本家屋を燃やすために焼夷弾を開発させた男……鬼畜のルメイである。

今回の作戦…ヘルファイヤ（地獄の業火）作戦の提案者兼指揮官だ。B29隊はソ連のウラジオストク付近の飛行場から飛び立ち帝都に向かっていた。ウラジオストクから帝都まで約1000kmとちよい。

航続距離5600kmのB29には余裕だ。

なおかつ、ソ連と日本は中立だ。（建て前だが）

それに、ルメイ中将（とその他）は日本に高度10000mを飛べる航空機は無いと信じていた。

もし、ハワイ戦で烈風と戦っていればそんな暢気な事は言っていられなかっただろうが、知らないのだから仕方がない。

しかし、そんな認識も直ぐに打ち消された。

『上空に敵機！』

『バカ野郎。俺達は高度10000mを飛んでいるんだぞ！ジャップに俺達より高く飛べる航空機が…』





「バカな…10000mを飛べる上に30mm機関砲を持ってるだ  
と!？」

鶴野少佐

「どうだ、B29!」

一撃を掛けた鶴野少佐はちらりと見たが、一機のB29が落ちてい  
くのを皮切りに、数機のが続け様に落ちていく。  
まだまだ残弾があり、もう二・三撃は掛けられる。

『こちら烈風隊。遅れてすまない!獲物は残っているか?』

鶴野少佐

「ああ!まだ一撃しか掛けていない。獲物はごろごろいるぞ!」

『わかった!陸軍さんの飛燕・屠龍隊も直ぐ来る!一機たりとも逃  
がすな!』

国会議事堂の執務室

宇垣首相

「そうか…アメリカのB29か」

永田

『はい。とうとうアメリカは痺れを切らした様ですね』

永田陸相から電話で報告を受ける宇垣首相。

宇垣首相

「現状は？」

永田陸相

『海軍の震電・烈風隊に飛燕・屠龍隊が迎撃を行い、60機を撃墜……彼には感謝しなければなりませんね』

宇垣首相

「福本君だな…日英同盟後からソ連やアメリカの本土爆撃に備えるように言っていたからな」

永田陸相

『ええ、震電の早期開発、飛燕・屠龍の早期改良から日本各地にレーザー監視網の設置推進や防空・避難体制確立を主張のしていますからね』

宇垣首相

「ああ…ところで、残存機は？」

永田陸相

『諦める気は無い様ですね。帝都に向かっています』

宇垣首相

「…今の状態なら何をするか解らん。もし皇居にでも突っ込めば…」

永田陸相

『はい。ですから、試験中の新型戦闘機隊と第一対空噴進砲大隊の  
出動を要請します』

宇垣首相

「うむ。もし皇居に何かあればルーズベルトは宣伝に活用する。な  
んとしてでも阻止してくれ」

永田陸相

『了解しました』

ルメイ中将

「くそ…何機残った？」

「は……20機です」

ルメイ中将

「ち……ジャップめ、あの変な機体の他にも10000mを飛べる  
やつがいたのか…計算外だぜ」

しかし、ルメイ中将は諦めていなかった。

いくら半分以下に減ったとはいえ、皇居やその周辺を燃やす事は出  
来る。

「見えました！東京です！」

ルメイ中将

「よし！爆撃用意！」

あと少し…もう少しで焼夷弾を叩き込める…そうルメイが思った時…  
キイイイイン！

ルメイ中将

「！なんだ！？」

「で、敵機です！ですが…」

ルメイ中将

「なんだ?!」

「プロペラが無い高速機です！」

ルメイ中将

「なに!!」

直ぐに近くの窓から外を見ると機体が見えた。  
その機体を見た瞬間、ルメイは驚いた。

ルメイ中将

「バカな！ジャップはジェット機も持っていたのか！」

皇居

明子天皇

「あれは…火龍！」

屋根に登り、双眼鏡で上空を眺めていた明子天皇は残存機を迎撃しようとする機体の名前を口にした。

ジェット戦闘機『火龍』

史実ではドイツのメッサーシュミットMe262ジェット戦闘機のコピー+日本のオリジナルを加えて開発していたジェット戦闘機である。

結局機体は完成出来なかったが、海軍の橘花と共に曲なりにもジェット機を研究・開発させた日本の凄さである。

この世界では、イギリス・ドイツの技術支援やユダヤ人研究者が加わった事によりジェットエンジンを早期に開発できた。

この時、火龍は5機が完成し、試験飛行を行っていた。

士官

「陛下！降りて来て下さい！」

明子天皇

「大丈夫！迎撃隊がいるから！」

しかし、彼女の本心は別だった。

天皇がおめおめ逃げる訳にはいかない。

ただ、それだけ。

彼女はこの戦争が始まった時から覚悟は決めていた。イザとなれば国際裁判にでも何にでも出る決意があった。

だからこそ彼女は逃げる訳にはいかなかった。

ババババババババババ！  
ババババババババババ！  
ババババババババババ！

必死に旋回機銃が弾幕を張るが、ジェット機には効かない。  
いや…速すぎて機銃手が付いてこれない。

トトトトトトトト！

トトトトトトトト！

ガガガガ！

ゴフーン！

ルメイ中将

「くそ！なんでジャップだけジェット機や新型戦闘機の開発に成功してるんだよ！」

一機…また一機…と徐々に減らされていく。

「中将！前の部隊が爆撃進路にのりました！」

ルメイ中将

「よし！ジャップにプレゼントを落としてやれ！」

焼夷弾さえ落としてしまえばいい。

そうすれば勝手に燃えてくれる。  
そう燃えて……

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！

ルメイ中将

「な、なんだ今度は?!」

「爆撃進路に入っていた5機が突然殺られました!」

ルメイ中将

「なに！ジェット機に殺られたんじゃないのか?!」

「い、いいえ！突然爆発しました!」

ルメイ中将

「バカな…!」

その時、ルメイが見たのは信じられない物だった。  
下から、ロケット弾を大きくした物が飛んできて、B29に命中した瞬間、B29が爆発した。

ルメイ中将

「まさか…またジャップの新兵器なのか?!」

確かにそうだった。

だが、ルメイ中将はそれを確認する事は無かった。



キイイイーン！

ルメイ中将

「！ー！」

ジェット機独特のエンジン音が上から響き……

ドドドドドド！

ドドドドドド！

ガシャン！ガシャン！ガシャン！ガシャン！

30・20mm機銃がコックピットを貫いた。

ルメイ中将はコックピットのガラスが割れた瞬間、意識が途絶えた。操縦士を失ったB29はゆっくりと堕ちていった。

士官

「…さっきのは…いつたい？」

明子天皇を引きずり降ろす為に登って来た士官があまりの出来事に啞然としながら空を見ていた。

明子天皇

「奮龍対空型……陸海軍が対大型爆撃機用に開発した大型噴進弾」

士官

「へ、陛下！なぜそんな事をご存知で？」

明子天皇

「皇機よ、皇機」

土官

「はあ……」

ヘルファイヤ作戦……帝都を火の海にする作戦であったが……一機も任務を果たさず事無く全滅した。

次号へ

銀翼の驕敵を討て！ 後編（後書き）

新米士官

「明日は8日か……」

春日

「どうした？ 作者は？」

福本

「明日は作者の世界では大東亜戦争の開戦日なんですよ」

日進

「ああ、真珠湾攻撃ね。あと、マレー上陸、フィリピン空襲……」

畝傍

「日本は超ギリギリまで迷って戦争に突入したからねえ」

新米士官

「……それに比べたら今の日本はどうなってんだ！ 政治家も公務員も、覚悟も大和魂も日本人としての誇りも無い！ 国防意識は全然無い！」

マリーダ

「リミッターが解除されたわよ？」

福本

「……言わせてやるっ」

新米士官

「だいたい！中国や北朝鮮がヤバいつて時に暢気な事をぬかしやがる鳩首相め！米軍の基地移転をさっさと解決して、国防に力注ぎやがれ！」

春日

「は、鳩首相？」

日進

「ほら、最近お金の問題で騒がれてる鳩ポツポ男」

畝傍

「山首相ね……」

新米士官

「つーか、昨日の『たかじんのそこまで言っつて委員会』で田母神さん出てたし！」

リッジ

「あの、『日本は良い国だ』って言っつて辞めさせられた現場トップ？」

福本

「…知っつてたんだ」

リッジ

「あの人は真っ直ぐだから。冗談も言っつけど」

新米士官

「田母神さんは言っつていたぞ！緊急経済対策として、『国防費増額』と！俺は大賛成だ！」

日進

「…ハイテンションになってるよ」

新米士官

「日本を支えているのはどこか？日本が世界に誇る中小零細工場だ！戦闘機一機作るだけで何千何百の工場が動くんだ！今こそ、中国・北朝鮮対策&経済対策として国防費を増額すべきだ！」

春日

「……中国が怒らないのか？」

福本

「その中国が軍拡やってるからね…もし外務省に肝っ玉据わった人が居れば、一言でケリがつくよ」

畝傍

「…なんて？」

福本

「『おめえらが軍拡してるから、対抗して軍拡してんだよ』」

春日

「…なるほど」

新米士官

「さて！次の話を書こう！」

## 空襲の翌日（前書き）

登場兵器

ジェット戦闘機『火龍』

全長 13.70 m

全幅 11.50 m

全高 4.05 m

全備重量 7000 kg

エンジン ネ130ターボジェットエンジン（推力908 kg）×2

最高速度 852 km/h

航続距離 980 km

武装 30 mm機関銃×2 20 mm機関銃×2

爆弾 500・800 kg爆弾 ×1

乗員 一名

本土防空戦で初陣を飾った日本初のジェット戦闘機。本土防空戦では訓練中の火龍5機が迎撃している。

本格的配備は1944年から。

奮龍対空型

奮龍は誘導ロケット弾として開発を開始。

最初は海軍単独で対艦誘導ロケット弾として開発されていたが、これに陸軍も参加する事になる。

奮龍は陸海軍が培ってきた能力……標的艦損津の遠隔無線操縦など

……を応用し、開発された。

本土防空戦で使用されたのは対空型であり、後のミサイルの原型となる。

対艦誘導弾『桜花』にも奮龍の技術が取り入れられている。

## 空襲の翌日

10月11日 パールハーバー

播磨艦橋

福本

「どうやら、昨日のB29はウラジオストクから飛んで来たらしい」

遠地

「やっぱりか。そうでなきゃ、日本海の漁船団の近くを通過しない  
しな」

福田

「ですが、なぜウラジオストクから飛び立てたんでしょうか？」

ラフィール

「大方スターリンが黙認したんですよ」

ジント

「帝都が潰れて得をするのはルーズベルトでスターリンですから」

マリーダ

「まったく…バカな事をしたわね」

神谷

「ですが、正直危なかったですよ。もし、本土に航空隊やレーダー  
網が無ければ……」



ミア

「帝都は…火の海…」

福本

「ああ…確かにな…」

千歳

「けれど、捕虜の数も凄いいんじゃないの？」

マリダ

「一機に10人前後乗ってるしね」

福本

「今のところ確認された捕虜は40名以上だ。現在も搜索中だからまだ増えるよ」

播磨

「ですが…あまりやりきれませんね」

千歳

「…そうね」

遠地

「死者の数はわかって無いのかよ？」

福本

「何せな…空中爆発とかしているからな…多分400名以上かな…」

福田

「400人以上が死んだんですね…こんな無駄な作戦で…」

河内

「日本人に死者がいなかったから良かったが……どうもな……」

福本

「……皆、やりきれないよな……」

空母遠龍

遠龍の防空指揮所にマッケンジー准尉は居た。

昨日、遠龍の艦長白河中佐より東京空襲の事を聞いた。

最初は心配したが、福本と山本長官が直ぐ様手を打ち捕虜のアメリカ兵に対する報復行為は無かった。（帝都に被害が無かったのも良かった）

クリス

「……………」

彼女は解らなくなっていた。

アメリカに正義はあったのか？

日本は果たして悪なのか？日本は一般人は真珠湾攻撃でも、ハワイ占領でも攻撃しなかった。

だが、今回の東京空襲は明らかに一般人攻撃を主眼に置いた作戦だ。

解らない。

解らない解らない解らない……

もう何が本場で何が嘘なのか解らない。

本当に……解らない……

白河

「クリスちゃん」

クリス

「あ……どうも……」

白河

「悩み事？昨日の空襲話からその顔よ」

クリス

「……解らなくなりました……この戦争の意義が……」

白河

「そうね……そもそもこの戦争に意義なんて無いのかもね……ただ  
ど……」

クリス

「………？」

白河

「誰も彼も何かを守りたいから戦うのよ……日本人もアメリカ人も  
……あなたは両親を守りたかったからでしょう？」

クリス

「……はい」

白河

「みんな、何かを守る為に戦うのよ……ルーズベルトやスターリン

は別だけど」

クリス

「……………」

白河

「私も、早くこの戦争が終わってほしいわ。まだ人生計画立てて無いのに……」

大和長官公室

福本

「しかし、空襲の話聞いて一瞬ヒヤリとしましたよ」

山本長官

「雷号作戦がバレしていると思ったのか？」

福本

「ええ。月日の偶然の一致とはいえ、あれが来ましたからね」

山本長官

「あれは雷号作戦の目玉だからな」

福本

「しかし、やりきれませんね。この戦争は」

山本長官

「ああ。最終的にはアメリカ兵の死者は600名を越えるかもしれ

ん。手放して喜べんな」

福本

「ですが、ルーズベルトもいよいよ追い込まれてきましたね。今回の事はアメリカ国民が黙っていませんよ」

山本長官

「ラスト5分前か…それでもルーズベルトが講和にのる事は無いだろうな」

福本

「奴の周りにはロシアンスパイがいますから……できる事なら、そいつ等も一緒に爆殺したいんですけどね」

山本長官

「そのロシアンスパイだが……情報元はどこだと思う？」

福本

「情報元ですか？…そんなに特殊なんですか？」

山本長官

「特殊も特殊だ。君も聞いた事が有るだろう？ ジョン・E・フーバーの名前を」

福本

「…フーバー？…ジョン…E…フーバー…ジョン…E…ん！ ジョン・E・フーバー！あのFBI局長のフーバーですか？！」

山本長官

「ああ。そのフーバーだ」

福本

「しかし、FBIはルーズベルトにより権限強化がなされたはず。そのルーズベルトを裏切る事になりますよ？」

山本長官

「君もニミッツに言ったではないか、軍人は指導者に忠誠を誓うのではない。国に忠誠を誓うのだ」とな。フーバーも一緒だ。大統領に忠誠を誓ったのでは無い、合衆国に誓ったのだとな」

福本

「いやはや…ルーズベルトは獅子身中の虫を飼っていたわけですか…権限強化の踏み台にされた感じですね。まあ、哀れにも思わないし、自業自得なわけですから」

山本長官

「あはは…そうだな。しかも、彼は新聞に僅かづつだが、ロシアンスパイの事を流しているそうだ」

福本

「もし、ルーズベルトが死ねば一気にロシアンスパイはヤバいですね。今頃、逃げる算段でもしてるんでしょうが」

山本長官

「そうかもな…さて、雷号作戦はどうする？」

福本

「もうちょっと待って下さい。どうやら、我々だけヨーロッパに行く訳では無い様なので……」

次号へ

空襲の翌日（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしています。



## 援軍到着せり

10月29日 パールハーバー

福本

「痛たた……」

福田

「大丈夫ですか？先輩」

マリダ

「仕方ないわよ。だって責任重大なもの」

沖田

「今度は味方として戦えますね」

遠地

「本格的な国際艦隊の指揮官だな、福本！」

福本

「……胃が痛くなるよ……」

さて、福本が胃が痛くなる程の事。  
それは……

播磨

「あ！来ましたよ！ララさん達が！」

見えてきたのは90隻の軍艦、800隻の輸送船である。ダリア・エステロール連合王国、ヴィントラント王国、サブム帝国……一般的に第六大陸からやって来た大艦隊兼大輸送船団である。

上杉

「うわ……さすがだわ」

フィルデナント

「第六大陸から八個師団……陸戦隊と宮崎師団、長野連隊だから、合計は……」

篠森

「1250隻だ」

神谷

「さすが蒼紫様！」

福本

「うう……胃が……胃が痛い……」

マリィダ

「……いくら何でもオーバー過ぎ」

福本

「……僕にとっては胃を手術して欲しい程痛いんだけど……」

なぜこれ程福本が困っているのか？

なぜなら、第六大陸からの派遣部隊も預かるからだ。つまり、彼は第七艦隊の97隻（鹵獲艦・潜水艦を含む）と第六大陸からの90隻……合計187隻を預かるのだ。

山本長官

「まあ、福本！頑張れ！」

福本

「はあ~~~~~……」

これからの事を考えると、とてもだが喜べない福本だった。

ワッケイン中将

「お久しぶりです！山本長官！」

アルファーニ

「お元気そうで何よりです！」

山本長官

「やあ、君達も元気そうだな」

福本

「はあ……」

アルファーニ

「……どうしたんですか？福本長官は？」

山本長官

「あはは……君達を預かる大変さに半分潰れかけているのだよ」

ワッケイン中将

「…………お疲れ様です」

福本

「あ、ごめん。2人共元氣そうだね…：僕は大変だよ…：責任に押し潰されそうで…」

2人

「……………」

播磨

「ワルキューレ！久し振り〜！」

ワルキューレ

「お久し振りです！皆さん！」

薩摩

「聞いたわよ。あなた達も第七艦隊に臨時編入されるって」

ララ（ラー・カイラム）

「はい！皆さんと一緒に戦います」

河内

「うん。意気込みはよしだ。よろしく頼む」

アークエンジェル

「はい。こちらこそ」

エターナル

「河内様！お会いしたかったです」

モンブラン

「畝傍さん、お久しぶりです」

畝傍

「やあ、モンブラン。久しぶり」

福田

「挨拶の場になってますね」

遠地

「福本は心労なりかけで大変なのになあ」

沖田

「まあ、大丈夫ですよ。慣れの問題です」

千歳

「慣れねえ……私達もいつ回ってくるか」

神谷

「……笑っていられるのも今のうちって事ですね」

ラフィール

「……いよいよ、ヨーロッパね」

ジント

「……うん。いよいよだね」

海龍

「さ〜て！誰から着せようかな〜」

神龍

「お姉ちゃん！コスプレは許可とってよね！」

近江

「また始まった…」

薩摩

「誰か〜、金剛さんが、春日さん達呼んできて〜」

エンター  
遠龍

「みんなは元気ね〜」

ノースカロライナ

「…今度は味方で戦うのね」

ワシントン

「酒好きはいるかな〜」

アーカンソー  
出雲

「レキシントン。ワシントンには酒しか頭にないのか？」

レキシントン  
連龍

「あの様子だと、今のところはそうかと」

サラトガ  
砂龍

「はあ〜…福本長官じゃないけど、溜め息が出るわ〜」

「第六大陸からどれだけ出してくれたんですか？」

ロングアイランド  
勝鷹

白河

「ダリア・エステロール連合王国とサブム帝国から歩兵・戦車師団を一個づつ、ヴェイントラント王国からは二個歩兵師団と二個戦車師団の合計八個師団」

ヒューズトン  
箱根

「…よくかき集めてくれましたね」

マリイダ

「日本の要請に直ぐ対応出来る様に事前準備していた部隊だって」

土佐

「さすがマリイダ参謀長。第六大陸の事情に明るいですね」

マリイダ

「まあね」

福本

「はあ〜……」

アルファーニ

「大丈夫ですか？福本長官？」

福本

「あはは……遂には下にも心配される様になっちゃったか…」

司令部で簡単な打ち合わせを終えた福本とアルファーニは乗艦に向かって歩いていった。

福本

「まあ、仕方ないとして我慢するよ。だけど、まさか、4カ国の総代表にされるとは……… いったい、いつの間に決まったんだ？」

アルファアーニ

「え〜と……… その、福本長官が派遣されると聞いて総員一致で……」

福本

「……… 明子陛下も知ってたの？」

アルファアーニ

「……… 多分……… 知ってるかと」

福本

「あはは……… みんな、ひとが悪すぎ〜。 m (——) m」

アルファアーニ

「あはは……… あ、ところで、サブム艦隊に指揮官を派遣すると言  
うのは………」

福本

「ん、ああ……… 本当ならアルファアーニに任せても良かったんだけど、  
流石に艦の指揮と艦隊の指揮は執れないだろう？ だから、1人派遣  
する事にしたのさ」

アルファアーニ

「はあ……… 誰ですか？」

福本



「福田だ。まあ、あいつは政治は苦手だが、僕の下にいたし、そっ  
ちの状況を加味するよう言っといたから大丈夫だと思っけど、もし  
馬鹿やったら遠慮無く言ってくれ」

アルファーニ

「わかりました…いよいよですね」

福本

「ああ、いよいよだ」

次号へ

## 援軍到着せり（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

（ちなみに、輸送船の数はあまりつつこまないで下さい。一個師団

＝100隻の計算です……史実のサイパン攻略のアメリカ軍から算  
出いたしましたので……）

**雷号作戦発動！**

11月10日 ガラパゴス諸島より1200kmの海域

第二機動艦隊旗艦大鳳

士官

「司令。全艦戦いつでも発艦できます」

角田中将

「そうか…作戦だから気が抜けんな」

士官

「そうですね。まあ、目立つ様に行動するのでしょうか」

角田中将

「ああ、そうだな。偵察機を発艦してくれ」

士官

「はい」

ドン！

カタパルトによって打ち出される彩雲。  
作戦は既に始まっていた。

今回の第二機動艦隊の任務はパナマ運河攻撃……では無く、パナマ運河攻撃すると見せ掛ける事である。つまり囷だ。角田中将他上層部では承知していたが、別の作戦が行われていた。

ジリリリン！

キング大将

「キングだ。どうした？」

士官

『は！パナマ運河周辺で日本軍の偵察機の飛来を確認しました！』

キング大将

「わかった。手筈通り、攻撃はするな。陸軍には私が連絡する。いな？」

士官

『は！』

電話が切れると、直ぐ様ダイヤルを回した。

マーシャル大将

『やあ、キング。その様子だと日本軍が来た様だね』

キング大将

「ああ。予定通りパナマ運河に来たよ。そっちは？」

マーシャル大将

『パナマ運河周辺に陸軍航空隊を集中配備してある。あとあつちにもな』

キング大将

「そうか…さて、あとは日本軍に任せるしかないな」

マーシャル大将

『ああ。上手くいく事を神に祈ろう…日本軍に祈る事になると思わなかったがな』

キング大将

「仕方ないさ。大統領の狂気を止めるにはこれしか無い…じゃあ、そつちも頼むよ」

マーシャル大将

『ああ。それじゃあ』

ガチャ

受話器を置くと彼はタバコを一本取り出すと火をつける。  
今の彼…いや、彼ら…は大統領を裏切ろうとしていた…。

日本本土空襲…ヘルファイヤ作戦が失敗した2日後の10月12日の会議で、ルーズベルトはキング達の前である事を明かした。

それは……開発中の原子爆弾の事である。

ルーズベルトは誇らしげに語っていたが、キングとマーシャルは背筋に悪寒がはしった。

ルーズベルトから出てくる言葉が悪魔の囁きの様に聞こえたからだ。

「大統領はパンドラの箱を開けようとしている」

2人はそう思った。

確かに原爆があれば勝てるかも知れない。

しかし、日本本土空襲は世界から批判を呼んだ。

今や世界のほとんどが日本支持に回っている。

その日本ではルーズベルトは批判されたが、戦死したB29の乗組員達はちゃんと葬られ、捕虜もちゃんと取り扱われている。

それどころか、イギリス経由で身元判明ができた乗組員の遺品がアメリカ軍に渡されている。

この事も効いて、国内世論も日本との早期講和論が叫ばれている。

ホワイトハウスの回りには毎日1000人以上の人間が講和デモを行っている。ここに原爆を持ってきてどれ程効果があるか疑わしい。

それに完成まで一年が必要だが、保つかはもつと疑わしい。

2人としては日本と講和し、ソ連と戦った方がアメリカの為であると思った。

しかし、ルーズベルト大統領がそんな話を聞く筈も無い。

何せ原爆とゆう最終兵器が彼にはある。

こんなパンドラの箱を開けては戦争は長引いてしまう。

そんな時、接触してきたのがFBI局長のフーバーだった。

フーバーは2人に、自分に任せてくれたら、日本の高官に接触できると言ってきた。

2人は接触を頼むと、数日後に返事が返ってきた。

10月20日に2人はイギリスにいた。

周りには、イギリスとの軍事援助協議と言っていたが違った。

2人はチャールズを通して、吉田茂外交官と接触したのだ。

吉田もまさかアメリカ陸海軍のトップと会う事になるとは思ってい

なかったが、そこは外交官、顔には出さない。  
これ以上の戦争継続を望んでいない事を確認した吉田は、2人に協力を要請した。  
さすがに即答は控えたが、後日承諾してくれた。  
2人なら軍事関連は動かせるし、ルーズベルトは原子爆弾とゆう名の美酒に酔いしれており、なおかつ、徐々にだが衰弱してきている。  
まさに今しかなかった。

その頃……パールハーバー

戦艦播磨の防空指揮所で福本は仁王立ちのまま、アメリカの方向を眺めていた。

山本長官

「やはり、心配か？」

福本

「山本長官」

いつの間に来たのか、山本長官が後ろにいた。

山本長官

「吉田君の話は信用出来ないかね？」

福本

「いえ…なにせ初めてやる事ですから…」

山本長官

「そうか…親が子を待つ心境か？」

福本

「……やめて下さい」

ある意味恥ずかしいので……。

山本長官

「顔が赤いぞ？まあ、それは置いといて……身内がいるからな心配もするだろう」

福本

「身内の身内ですがね」

山本

「沖田中将の従妹…だったかね？」

福本

「はい。沖田優里少佐です。従兄である星輝と空に憧れて同じ様に海軍にきたんですよ」

山本長官

「それが今や部隊の指揮官か」

福本

「ええ……志願したそうです」

山本長官

「なるほど……危なっかしい後輩程心配になるか」



福本

「なりますね〜身内だから余計に」

山本長官

「信用して待つしか無いな」

福本

「はい」

次号へ

**雷号作戦発動！（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 雷落ちゆ

アメリカ西海岸上空

グオングオングオングオングオングオングオン……

上空10000mを我が物顔で飛ぶ大型機……機体の旋回銃座から突き出た20mm連装機銃、特徴的な六発エンジン、そして、B29を越える大型機体……。

超重戦略爆撃機『富嶽』

史実では中島飛行機が開発を担当し、戦局の推移によりペーパープランに終わった幻の日本初重戦略爆撃機。陸軍の持つちやちな爆撃機ではなく、20トンの爆弾搭載量、日本とアメリカ間の往復を可能とする航続距離を備えた日本陸海軍の秘密兵器である。そして、いま日本が誇る大鷲は雷号作戦の目標へと向かっていた。

富嶽一番機

搭乗員

「沖田隊長。西海岸に入りました」

沖田（優）

「OK！予定より少し早いけど時間通りね」

前話に名前だけだが出ていたが、彼女こそ雷号作戦の部隊指揮官兼

実行隊指揮官の沖田優里中佐（20）。  
沖田星輝中將の従妹であり、昔、女性パイロット＋星輝に憧れて海軍に入った少女である。

沖田（優）

「全機付いて来てる？」

搭乗員

「はい。後続の9機も共に進軍中」

作戦参加機は10機。

護衛の無い敵中突破に近いが、アメリカ軍の迎撃は無い。

沖田（優）

「どうやら、第二機動部隊のパナマ運河陽動作戦に目がいってるのね」

「そうね。優里ちゃん」優里が座る指揮官席に1人の少女が喋り掛ける。

その少女は優里同様飛行服を着ている。

搭乗員

「中佐、何か言いました？」

沖田（優）

「あ、こっちの事よ」

搭乗員

「あ、そうですか」

搭乗員は簡単に納得した。その時、優里と少女は密かに笑っていた。

沖田（優）

「しー、ね。富嶽ちゃん」

「はい、優里ちゃん」

もうお気付きの方もおりだろう。

飛行服の少女……富嶽の飛魂、富嶽である。

富嶽

「けど、レーダーに探知されているはずなのに迎撃機が来ませんね」

沖田（優）

「多分、B29爆撃機と間違えるのよ」

富嶽

「あー、なるほど」

確かに、富嶽の言う通り作戦部隊はレーダーに探知され、優里の言う通りB29と誤認していた。

ただし、これには裏がある。

マーシャル大將が既に各レーダーサイトに対して、以下の通告を出していた。

『本日10機のB29による飛行訓練を行う』

つまり探知したレーダーサイトは富嶽10機が、訓練中のB29と  
思っていたのだ。

ニューメキシコ州　ロスアラモス原爆研究所

グローブス少将

「オツペンハイマー博士」

オツペンハイマー博士

「グローブス少将。どうしました？」

グローブス少将

「いえ…実はマーシャル大将からイザと言う時に備えて避難訓練を  
実施するよう指示がきまして…」

オツペンハイマー博士

「マーシャル大将から？避難訓練？また唐突ですね」

グローブス少将

「ええ…どうやら、日本海軍の機動部隊がパナマ運河周辺に現れた  
と情報がありますし…」

オツペンハイマー博士

「そうですね…まあ、上層部の指示ですし、イザと言う事もありま  
すからね」

グローブス少将

「それでは今から避難訓練を実施致します。館内放送もかけて皆に伝えましょう」

こうして、唐突ながらも避難訓練が始まった。

最初は避難訓練と聞いて驚いた職員もいたそうだが、別段混乱もなく、職員やその家族の避難は順調に進んだ。

富嶽隊

搭乗員

「中佐。もうすぐ目標のロスアラモス研究所に到着します」

沖田（優）

「そう。爆撃手、爆撃用意」

爆撃手

「了解」

直ぐに爆撃標準機に取り付く。

この爆撃標準器はイギリス経由で手に入れたノルディン標準器を日本で生産・改良された三式標準器である。

だが、高々度から爆撃すればいくらノルディン標準器を日本で改良した物でも、当てるのは難しい。

これについては、2つの方法で解決した。

1つは猛訓練で命中率を上げた。

もう1つは………

爆撃手

「ちよい右……行き過ぎ、少し左……流された、ちよい右……そう、そのまま……」

爆撃手の言う通りに、操縦士が操縦桿を少しづつ動かして、微調整を加える。

富嶽

「まさか、あんな小さい所で町1つ潰せる爆弾を造れるんですね?」

沖田(優)

「富嶽ちゃん。ここ上空10000mだよ」

富嶽

「あ、そっか……それじゃあ小さく見えちゃうよね」

爆撃手

「よーそろ……よーい……てええ!」

カチッ

爆弾架から切り離されたのは桜花3型。

2、1tの爆薬を積めた桜花で、主に重要目標破壊の為に製作された桜花である。

その桜花が10機の富嶽より放たれた。

沖田(優)

「全機、標準OK?」



通信士

「はい！全機無事投下！標準もOKです！」

沖田（優）

「さて、さっさと逃げるよ！全機反転！」

富嶽

「三六計逃げるに如かず。さっさと帰ろう！」

「あれは…なんでしょうか？」

避難訓練途中の職員が1人が異変に気付いた。

それは火を吹きながら落ちて行き、見えなくなった瞬間大轟音を響かせた。

オツペンハイマー博士

「…まさか…日本軍の攻撃か?!」

グローブス少将

「バカな！日本軍はパナマにいるんだぞ！いったいどうやって飛来したと言うんだ?!」

誰も答えられなかった。

そんな中、次々と火を吹きながら何かが落ちてきて大轟音を響かせる。

10個目が当たった時、火山の噴火に近い大爆発が起こった。

それはロスアラモス研究所の薬品や何やらに引火して起こったものだ。

避難訓練を行っていた全員がただ呆然と研究所があつた方向を眺めていた……。

ホワイトハウス

ルーズベルト大統領

「な、な、なんだと！そ、それは本当か？！」

グローブス少将からロスアラモス研究所が爆撃されたと言う報告を聞いたルーズベルトは慌て聞き返した。

グローブス少将

「はい！いきなり攻撃を受けました！研究員は全員無事でしたが、研究所は完全に破壊され、再建のメドも……」

ルーズベルト大統領

「放射能は？！放射能は漏れていないのか？！」

グローブス少将

「は、オツペンハイマー博士によりますと臨界量を越えていない為、大丈夫かと……」

ルーズベルト大統領

「わかった！今すぐ調査を開始せよ！再建のメドが立つたら報告せよ！」

そう言うと一方的に切った。

ルーズベルト大統領

「ジャップめ！糞猿め！イエローモンキーめ！！我々より頭蓋骨の発達が遅れている癖に、私に刃向かいおって！！」

車椅子に乗りながら、日本人が聞いたら聞くに耐えない罵声を叫び出す。

ルーズベルト大統領

「陸海軍は何をやっていた！パナマ運河に目がいつて警戒を緩めていたのか？！そうだ、そうに違いない！！秘書官！」

秘書官

「は、はい！」

ルーズベルト大統領

「今すぐキング大将とマーシャル大将を連れてこい！逮捕してやる！」

秘書官

「はい！」

秘書官が慌て出て行くと、ルーズベルトはまた罵声を言い始める。

ルーズベルト大統領

「日本人め…こうなれば皆殺しだ！この世界から抹殺してやる！見ている、1人残らず探し出してブチ殺してやる！必ずグツ？！」

その時、ルーズベルト大統領に異変が起きた。

苦しみながら、左胸を抑える。

しかし、収まる様子は無くさらに苦しみだした。

キングとマーシャルは秘書官の後から付いて行く。

コンコン

秘書官

「大統領。お二人を連れて来ました」

………返事が無い。

コンコン

秘書官

「大統領？言われた通りお二人を連れて来ましたが…大統領？」

中から全く返事は無い。

異変を感じたキングとマーシャルが秘書官押し退け扉を開ける。  
するとルーズベルトは確かに居た。

キング大将

「大統領？」

3人が近付くと…驚いた。ルーズベルトは左胸を抑えながら息を  
していなかった。

秘書官

「は、早く医師を！」

マーシャル大将

「…ダメだ、脈は無い…死んでいる」

午後8時29分……フランクリン・ルーズベルトは心臓発作により死亡した。

3人の証言によると、ルーズベルトは右手で心臓を抑え、左手は宙を掴みかけていた。

なぜそのような格好になったかは解らない。

死後硬直のせいとも考えられる。

だが、もしかしたらルーズベルトは死ぬ寸前に神を見て、神に見捨てられたのかも知れない。

そう言う事なら、あの左手は神の裾を掴もうとして伸ばしたのかも知れない。

だが、これまでの事を考えれば神に見捨てられたのは仕方ないのかも知れない。

次号へ

## 雷落ちゆ（後書き）

明日・明後日は毎週同様『士官候補生異世界奮闘記』を更新致します。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

全艦出撃！ヨーロッパへ！

11月15日 パールハーバー

ラフィール

「長官。本艦は何時でも出撃出来ます」

神谷

「全艦出撃準備出来ています」

マリイダ

「連合王国艦艇、並びにサブム帝国艦艇も何時でも出撃可能よ」

福本

「そうか…じゃあ、行くとするか。全艦出撃！」

3人

「了解！」「」

ポオーー！

出撃合図汽笛と共に、埠頭に並んだ軍楽隊の演奏、軍艦マーチや君が代が歌われる。

山本長官達連合艦隊幹部や艦魂達が敬礼で送り出す。もちろん、派遣艦隊艦艇の艦魂や福本達も返礼で返す。

187+3隻の艦艇、1250隻の輸送船がゆっくりと真珠湾から出撃していく。

空母陣龍（元エセックス）

エセックス  
陣龍

「…ねえ、本当に良かったの？」

クリス

「うん…一度入ったから、中途半端なところで抜けられ無いよ」

儀礼用の第一種軍装を着たエセックスとクリス。

実はクリス、ロスアラモス研究所爆撃の後、白河を通して日本海軍に志願を申し出た。

最初は白河も福本も再考を進めたが意思は固く、福本は山本長官に相談したが……

『本人が良いので有れば、良いんじゃないか』

…と言った為、晴れて第七艦隊の一員として配属された。

クリス

「…まあ、この艦隊には女の子も多いし、ホッとしてるんだけどね」

空母陣龍には外国人義勇兵や日本人兵が混ざっている。

艦はアメリカ、艦載機は日本、乗組員は日本人と外国人の混合……国際色の濃い空母である。



ある揚陸艦

新沢

「次はヨーロッパか…マチルダやキャリーの故郷だね」

マチルダ

「…何年振りでしょう」

キャリー

「みんなは元気かな」

シャーマン

「知ってる？イギリスは幽霊に関する話に事欠かないんだって」

リッジ

「やめて、シャーマン！お化けの話は苦手なのよ」

里香

「落ち着け、リッジ。只の話だけだからな」

優衣

「え、その話は有名だよ。他にもドラキュラの話とか…」

里香

「やめろ、優衣」

スチュアート

「…私は良いんだけど…」

周りがワイワイ騒ぐ中……

ブラッグ

「……なんで私達も載せられているんですか!?!」

超堅物2人の内の1人であるブラッグが叫ぶ。

美夏

「仕方ないでしょう。ハワイでM26とかM28とか大量に鹵獲したんだから」

麻里

「福本長官が鹵獲した兵器も活用しないと!?!…って言ったからよ」

パーシング

「…勝手に鹵獲した拳銃、勝手に輸送船に載せて」

ブラッグ

「…お姉ちゃん。今からあいつ、殺してこようよ!」

瑠奈

「あゝ…多分無理」

玲奈

「ほら、福本長官強いから」

里奈

「それに、福本長官殺したら只じゃあ済まないから」

由里香

「そうですよ。播磨さんとか、春日さんとか、日進さんとか、畝傍

さんとか、伊吹さんとかが怒って殺しに来ますよ?」

ブラッグ

「関係無い!あのジャップの下で…」

「あら、ジャップは差別語よ。使用は禁止ね」

優衣

「あ、プリーストさん」

現れたのは、M7自走砲の車魂プリースト。  
彼女をあえて言うなら……牧師さんである。(牧師の着る服を着てるから)

パーシング

「あ、あの…どなたかは知りませんがこれは私達の問題で…」

ブラッグ

「本当です!部外者は口を挟まないで下さい!」

プリースト

「…スチュアートさん、この御2人を連れてって良いかしら?」

スチュアート

「え、ええ…いいですけど…」

プリースト

「そう、それじゃあ、連れて行くわね」

そう言うと、パーシングとブラッグを連れて転移…連れて行ってしまった。

新沢

「…あの2人…大丈夫かな？」

マチルダ

「あら、どうして？」

優衣

「これは噂だけど…要塞好きさんは五時間説教されたらしいよ」

キャリアー

「…大丈夫かな？」

全員

「……………」

その後、パーシングとブラッグがボロボロになっていたとか、六時間以上説教されていたとかゆう未確認情報が出てきたのは別の話である。

戦艦ワルキューレ艦橋

アルファーニ

「福田司令。紅茶いかがですか？」

福田

「あ、ああ。もうっよ」

そう言いながら、ぎこちなくもうっ福田。

福田

「…うう、ダメだ。全然慣れん」

アルファーニ

「あはは…大変ですね」

福田

「はあ…今さらながら、先輩の胃痛がよくわかるよ」

アルファーニ

「大丈夫です。1週間か10日したら慣れますよ」

福田

「…不安だよ」

アルファーニ

「まあ…頑張るしか無いですよ」

副参謀から（仮にとはいえ）艦隊司令を仰せ付けられた福田少将。  
当然、苦惱が続くだろう…。

次号へ

**全艦出撃！ヨーロッパへ！（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ヨーロッパ派遣艦隊編成表（前書き）

### 登場人物

クリスチーナ・マツケンジー 年齢 18歳

所属 アメリカ海軍准尉 日本海軍少尉

ハワイ生まれのアメリカ人少女。

第一次真珠湾空襲（真珠湾攻撃）を目撃、両親を守る為、性別を偽り海軍に入隊。

同い年の男子パイロットよりは操縦技量は高ったが、実戦慣れした第七艦隊のパイロット達に落とされ捕虜に。

ずっと遠龍の白河艦長に預かってもらっていたが、雷号作戦後決心を固め第七艦隊に志願・配属された。

沖田優里 おきた ゆり 年齢 20歳

所属 日本海軍重爆隊司令 少佐

沖田中将の従妹で、戦前の女性パイロットに憧れて海軍に入隊。

雷号作戦では自ら志願し富嶽隊を率い、ロスアラモス研究所を爆撃する。

富嶽の飛魂、富嶽と仲がいい。

富嶽

超重爆撃機富嶽の飛魂。

今まで秘密兵器として開発された為、初めて出会った沖田（優里）少佐とは仲良し。

艦魂・飛魂・車魂を問わず、新入りとして可愛がられている。



## ヨーロッパ派遣艦隊編成表

『第七独立機動艦隊及び第六大陸部隊（ダリア・エステロール連合王国、ヴィントラント王国、サブルム帝国）合同編成ヨーロッパ派遣部隊編成』

アルファーニ

「名前が大層ですね」

新米士官

「五月蠅い」

福田

「ここは『ヨーロッパ派遣部隊編成』って纏めればいいのに」

新米士官

「2人共、最初の戦闘で戦死決定」

アルファーニ・福田

「うそ！！」

福本

「アホな話はやめて、続けて下さい」

新米士官

「了解」

派遣部隊

日本海軍代表兼司令長官 福本大介大将

副代表兼参謀長 マリーダ中将

砲術参謀 遠地 昇中将

航海参謀 千歳 桜中将

連絡将校 神谷 操大佐

連絡将校 新沢武志中尉

連合王国代表兼司令長官 ワツケイン中将

サブルクム帝国代表兼司令長官 アルファーニ大佐

専属オペレーター ミーア少尉

従軍記者 尾崎春奈

#### 第七独立機動艦隊

##### 第一戦隊

(司令 福本大介大将)

戦艦 播磨 河内 和泉 近江

播磨艦長 ラフィール少将 同副長 ジント大佐

和泉艦長 滝川竜也大佐

##### 第二戦隊

(司令 楠木香里中将)

戦艦 薩摩 土佐 伊豆 伊賀 春日 日進

##### 第三戦隊

(司令 篠森蒼紫中将)

重巡洋艦 六甲 畝傍 伊吹 石狩

##### 第四戦隊

重巡洋艦 高隈 雲仙 吾妻 石鋌

第五戦隊

軽巡洋艦 筑後 吉野 九頭龍 米代

第一航空戦隊

(司令 沖田光輝中将)  
空母 紅龍 白龍

航空参謀 ヴィル大佐

紅龍パイロット

艦戦 アリソン中佐

クレア中佐

吉田正則中佐

片山信吾少佐

艦爆 大熊和也中佐

艦攻 大宮一輝中佐

第二航空戦隊

空母 剛龍 豊龍

第三航空戦隊

空母 海龍 神龍

第四航空戦隊

空母 戦鷹 勇鷹

勇鷹航海長 若杉晋作少佐

第五航空戦隊

空母 遠龍 陣龍

(元エセツクス) 遠龍艦長 白河美鈴中佐

同副長 富田隼人少佐

遠龍パイロット

艦戦 杉田庄一上飛曹

(上等飛行兵曹)

陣龍パイロット

艦戦 マッケンジー少尉

第六航空戦隊

空母 連龍 砂龍

連龍パイロット

艦戦 宮本かすみ少尉

第七航空戦隊

航空戦艦 出雲

軽空母 勝鷹

第六水雷戦隊

(司令 上杉真里少将)

軽巡洋艦 遠賀

戦隊参謀 直江 愛大佐

第1駆逐隊

大波 小波 津波 神波

神波艦長 神童神子少佐

第2 駆逐隊

滝波 風波 山波 沖波

第七水雷戦隊

軽巡洋艦 天神

第3 駆逐隊

水波 突波 潮波 朝波

第4 駆逐隊

闇波 天波 初波 騒波

第八防空戦隊

軽巡洋艦 武庫

第5 駆逐隊

零月 宮月 早月 北月

第6 駆逐隊

星月 闇月 丸月 刻月

第九防空戦隊

軽巡洋艦 十勝

第7 駆逐隊

高月 豊月 靄月 島月

第8 駆逐隊

寺月 谷月 城月 徳月

第十潜水戦隊

(司令兼艦長 二一十少将) 第1潜水隊

伊400 伊401 伊402 伊403

伊400副長 宮木吉香少佐

第2潜水隊

伊404 伊405 伊406 伊407

第3潜水隊

伊700 伊701 伊702 伊703

第4潜水隊

伊704 伊705 伊706 伊707

第十一戦隊

戦艦 美濃 (元ノースカロライナ)

飛騨 (元ワシントン) 重巡洋艦 箱根

軽巡洋艦 隅田 (元ボイス)

箱根機銃員 新城 泉一等水兵

第十二水雷戦隊

軽巡洋艦 狩野 (元マーブルヘット)

第9 駆逐隊

島風 松風 弓風 早風

第10駆逐隊

灘波（元ジョン・D・フォード）

海波（元アルデン）

豊波（元ポープ）

白波（元スチュワート）

特務艦

研究工作艦 未来

特別輸送艦 龍ヶ岳

工作艦 三原

未来主任研究者

野口 轟技術少将

ダリア・エステロール連合王国艦隊

第1戦隊

（司令 ワッケイン中将）

戦艦 ラー・カイラム アークエンジェル エターナル

重巡洋艦 モンブラン ガウンランド

第2航空戦隊

空母 ネエル・アーガマ ホワイトベース トロイホース アーガマ

第3航空戦隊

軽空母 ガンペリー ガルタ

第4水雷戦隊  
軽巡洋艦 アスピーテ

第1駆逐隊  
駆逐艦 4隻

第2駆逐隊  
駆逐艦 4隻

第5水雷戦隊  
軽巡洋艦 ガーベラ

第3駆逐隊  
駆逐艦 4隻

第4駆逐隊  
駆逐艦 4隻

第6水雷戦隊  
軽巡洋艦 クストー

第5駆逐隊  
駆逐艦 4隻

第6駆逐隊  
駆逐艦 4隻

第7水雷戦隊  
軽巡洋艦 ゴンドワナ



第7 駆逐隊  
駆逐艦 4 隻

第8 駆逐隊  
駆逐艦 4 隻

サブルクム帝国艦隊

第1 戦隊

(艦隊司令兼艦長 アルファード大佐)  
(臨時司令 福田一輝少将)

戦艦 ワルキューレ 重巡洋艦 ドロス ドロワ

第2 航空戦隊

空母 アウドムラ ドミニオン 軽空母 ガウ ギャロップ

第3 水雷戦隊

軽巡洋艦 ケルゲレン

第1 駆逐隊

駆逐艦 4 隻

第2 駆逐隊

駆逐艦 4 隻

第4 水雷戦隊

軽巡洋艦 サチワヌ

第3 駆逐隊  
駆逐艦 4 隻

第4 駆逐隊  
駆逐艦 4 隻

第5 水雷戦隊  
軽巡洋艦シノーペ

第5 駆逐隊  
駆逐艦 4 隻

第6 駆逐隊  
駆逐艦 4 隻

第6 水雷戦隊  
軽巡洋艦 ナスカ

第7 駆逐隊  
駆逐艦 4 隻

第8 駆逐隊  
駆逐艦 4 隻

新米士官

「……とまあ、これが派遣艦隊の190隻」

福田

「自分の立場って微妙ですね……」

アルファーニ

「あはは……申し訳ありません」

福本

「サブラム帝国が将官を派遣してくれたら、話がややこしくならなかったただけだね」

福田

「……つまり、自分は身元保証人ですか？」

マリーダ

「…そうゆう事ね」

新米士官

「つ、次は、陸上部隊！」

遠地

「…無理やりだな」

陸上派遣部隊

日本陸軍代表兼師団長

宮崎繁三郎中将

第七特別陸戦隊司令

フェルデナント中将

第57戦車連隊司令  
長野 光大佐

第54機械化歩兵師団  
宮崎繁三郎師団長

(輸送船100隻)

第七特別陸戦隊  
司令 フェルデナント中将

特別陸戦隊第1機械化歩兵師団

第6中隊長 石田幸村大尉

特別陸戦隊第2機械化歩兵師団

特別陸戦隊機甲師団

第1機甲連隊

(2個戦車大隊 + 1個砲兵大隊)

第1戦車大隊所属

マチルダMK2魔改造戦車 同戦車操縦士 大沢 慧一等水兵

第2機甲連隊

(2個戦車大隊 + 1個砲兵大隊)

(輸送船300隻)

特別陸戦隊水陸両用車隊

日本尊武

同戦車長 五十嵐真人少佐

輸送艦 龍ヶ岳

第57戦車連隊

司令 長野 光大佐

(輸送船50隻)

連合王国陸軍

1個歩兵師団

1個戦車師団

(輸送船200隻)

サブム帝国陸軍

1個歩兵師団

1個戦車師団

(輸送船200隻)

ヴィントラント王国陸軍

2個歩兵師団

2個戦車師団

(輸送船400隻)

輸送船 計1250隻

新米士官

「…とまあ、こんなところかな」

フェルデナント

「これで12個師団+1個連隊ですね」

福本

「ヨーロッパに送るのは大変だよ」

マリダ

「けど、ロシアに対抗するならこれでも怪しいわよ」  
遠地

「あとは、航空戦力と艦隊砲力で埋めるしかないよな」

新米士官

「あ、もう1つ忘れてた」

ヨーロッパ派遣航空戦隊

司令沖田優里中佐

富嶽超重爆撃機10機

(増派予定)

新沢

「富嶽もヨーロッパに…」

大沢

「…間違っても富嶽の爆弾は浴びたくありません」

フェルデナント

「確かにな」

新米士官

「次は本来軍機密ですが、ラー・カイラム、アークエンジェル、ネル・アーガマ、ホワイトベース型のデータを公開！読者の皆さん、もちろん軍機密ですから口外なさらぬ様に」

ワルキューレ

「口外したら、憲兵隊が来るよ」

アルファーニ

「ワルキューレ。嘘を言わないの」

ラー・カイラム型戦艦

船体全長 260m

船体全幅 35,6 m  
基準排水量 60580 t  
最大排水量 65700 t  
最高速度 32,6ノット  
航続距離 18ノットで12000 浬

#### 武装

43cm45口径三連装砲×4基  
15,5cm50口径連装砲×8基  
12,7cm45口径連装高角砲×12基  
40mm四連装機銃×10基  
同連装機銃×10基  
25mm三連装機銃×12基  
同連装機銃×20基

航空機 6機

同型艦 ラー・カイラム

連合王国が建造した弩級戦艦。  
空母護衛も視野に入れた為、32ノットの高速艦になった。  
決戦艦であるためか、一隻の建造で終わっている。

アーケエンジェル型戦艦

船体全長 246 m  
船体全幅 33,2 m



基準排水量 38800 t  
最大排水量 45400 t  
最大速度 33ノット  
航続距離 18ノットで11800 哩

#### 武装

38cm50口径三連装砲×3基  
15.5cm50口径連装砲×1  
0基  
12.7cm45口径連装高角砲×1  
4基  
40mm四連装機銃×8基  
同連装機銃×10基  
25mm三連装機銃×12基  
同連装機銃×16基

航空機 6機

同型艦 アークエンジェル エターナル

連合王国で設計・建造を行った最初の戦艦。  
空母護衛を視野に入れた高速戦艦である。  
主砲は小降りながらも、威力の高い砲を搭載している。

ネエル・アーガマ型空母

船体全長 265 m  
船体全幅 38.9 m  
基準排水量 62000 t  
最大排水量 67680 t

最大速度 30ノット  
航続距離 18ノットで12000浬

### 武装

12.7cm 45口径連装高角砲×20基  
28cm 12連装噴進砲×12基  
40mm 四連装機銃×12基  
同連装機銃×12基  
25mm 三連装機銃×16基  
同連装機銃×20基

航空機 96機

同型艦 ネエル・アーガマ

連合王国海軍が完成させた排水量世界一の空母。  
搭載機数は紅龍型空母に劣るが、60mmの装甲飛行甲板と戦艦並みの防御を備えた（史実の信濃型空母に似ているが、最初から空母として設計したので搭載機数は多い）空母。  
なんと、上手くすれば双発機の運用も可能だとか……。

ホワイトベース型空母

船体全長 257m  
船体全幅 26m  
基準排水量 25700t  
最大排水量 29800t  
最大速度 34ノット

航続距離 18ノットで10000哩

### 武装

12.7cm45口径連装高角砲×16基

28cm12連装噴進砲×8基

40mm四連装機銃×10基

同連装機銃×8基

25mm三連装機銃×8基

同連装機銃×16基

航空機 84機

同型艦 ホワイトベース トロイホース アーガマ

連合王国海軍建造の翔鶴型空母のコピー。

連合王国航空戦隊の中核であり、日本海軍同様、使い易い・大型・速度が早い、の三拍子が揃っている為、連合王国海軍からも人気が高い空母でもある。

新米士官

「どつじゃー！」

福本

「…また、とんでもない空母を作りましたね」

マリーダ

「けどさ、双発機なんて運用出来るの？」

新米士官

「大学の友達で一回話に出たんだよ。『信濃型ならギリギリ双発機は運用出来る』ってさ」

沖田

「まあ、発艦だけなら、史実の東京初空襲の例がありますから…結局一緒になると思いますけど」

福本

「まあ、運用出来ても銀河辺りだろうな」

新米士官

「俺もそう思う」

マリーダ

「けど、戦術幅は広がるでしょう?」

福本

「まあね」

新米士官

「今回はこの辺で!」

次号へ

ヨーロッパ派遣艦隊編成表（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ワシントンの空を大鷹が飛ぶ

12月1日 ホワイトハウス

「…この艦隊は本当にイギリスに向かっているのかね、キング大将？」

キング大将

「はい。トルーマン大統領」

新たにホワイトハウスの主となったトルーマン大統領。

ルーズベルトが急死し、副大統領であったトルーマンが急遽就任した。

ちなみに、ルーズベルト急死に際して日本政府から弔電が送られてきている。

ちなみに、史実でもルーズベルトが死んだ時、日本は弔電を送っている。

トルーマン大統領

「なぜそう言えるのかね？もしかしたら東海岸に上陸する為の艦隊かもしれないだろう？」

キング大将

「そうであるなら、わざわざハワイにいた記者達に出撃を知らせ、新聞にさせるでしょうか？私はイギリスに向かう艦隊と思います」

トルーマン大統領

「そうか…マーシャル大将。輸送船に載っている総兵力は？」

マーシャル大将

「1250隻とありますから…総兵力は20万以上かと」

トルーマン大統領

「ううむ……攻撃は出来ないか？」

キング大将

「！何を言っているんですか、大統領！」

トルーマン大統領

「確かにイギリスに向かう艦隊かも知れない。だが、あえてそう思わせる敵の策略かもしれん」

マーシャル大将

「大統領！率いているのはあのアドミラル・フクモトダイスケです。アドミラル・ヤマモトより若く、頭のキれる人物ですよ。それにもしこれがイギリスに行く艦隊で、攻撃すれば世界中から総スカンを受けますよ！」

トルーマン大統領

「そ、そうか…」

さすがに、陸海軍のトップが止めては止めるしか無い。

キング大将

「ところで大統領。日本と講和するのですか？」

トルーマン大統領

「な、なに？講和だと?!」

マーシャル大将

「どう見ても、この戦争は我々の不利です。今すぐ日本と講和すべきです」

トルーマン大統領

「…いくら我々が仕掛けたと言っても、まだ我が国は戦える」

キング大将

「大統領！それは表だけです！すでに我が国民は疲弊しており、これ以上日本と戦うのは愚策です」

マーシャル大将

「それよりも、日英独と共にソ連と戦うべきです。国民はそちらを支持するでしょう」

トルーマン大統領

「しかしだな…相変わらず抗戦を叫ぶ声もある…それにルーズベルト大統領の遺志も…」

会議は講和を望む陸海軍トップと、抗戦支持の大統領の押し問答になっっていた。

秘書官

「だ、大統領…」

トルーマン大統領

「どうした？」

会議が白熱する中、大統領秘書官が入って来た。



秘書官

「駐日大使のグルー大使が参りましたが…」

トルーマン大統領

「なに？グルーが？わかった。入ってくれ」

秘書官

「はい」

ジョセフ・C・グルー。

史実でも開戦時に駐日大使をしていた人物である。

1932年に駐日大使に就任、日米がキナ臭くなる中、親日家であった彼は出来るだけ戦争を避けようとしたが、ルーズベルト大統領が戦争をやる気だったから聞くわけが無かった。

ちなみに、この世界の日本はアメリカ大使館を封鎖していない。出来るだけ短期戦で終らすつもりだったから封鎖はしなかった。しかし、ルーズベルト政権下では影の薄い部署であった。

トルーマン大統領

「グルー君。日本に居た筈だがどうしたのかね？」

グルー駐日大使

「トルーマン大統領。大統領にお聞きします。あなたは日本と講和する意思はありますか？」

つい先程まで軍トップと話していた事だった。

トルーマン大統領

「…残念ながら今のところはない。第一、南米を北上する艦隊をどう説明するのかね？」

グルー駐日大使

「日本の新聞でも、その艦隊はヨーロッパ派遣艦隊と言っておりま  
す。それにイギリスの新聞にも同様に書かれています」

トルーマン大統領

「…そうか。だが、日本と講和する気はない。我々は敗れたわけ  
はない」

グルー駐日大使

「…私は明子天皇と宇垣首相の親書を持っていますが、それでも  
すか？」

トルーマン大統領

「…くどい」

グルー駐日大使

「…そうですね。日本も私もあまりこんな手は使いたく無かったの  
ですが…」

トルーマン大統領

「な、なに？」

バン！

その時、一人の士官が会議室に飛び込んで来た。

士官

「大統領！に、日本軍機がワシントンに！」

グルー駐日大使

「来ましたか」

全てを知っているグルーは落ち着きながら言った。

グルー駐日大使

「それでは大統領。外に参りましょうか」

グオングオングオングオングオングオングオン……

ワシントンDC上空を飛ぶ大型機。

沖田優里中佐率いる富嶽爆撃隊である。

富嶽隊は雷号作戦後、ハワイに帰還、新たに配備された5機を加えた15機で、事前打ち合わせに従い、11月29日にハワイからカナダに移動、カナダからグルー駐日大使到着に合わせてワシントンDCに飛来した。

富嶽爆撃隊隊長機

搭乗員

「司令。ワシントンDCです！」

沖田（優）

「米英戦争以来じゃないかな。敵が首都に来たなんて」

富嶽

「アメリカは焦りますね。本当なら勲章ものだけど」

沖田（優）

「それは言わない約束よ。さあ、ばら蒔くわよ！爆倉扉開け！」

搭乗員

「了解！」

ウイイイイン……

外に出た面々は最初に敵機の大きさに驚いた。

B29を知っている人間から見たら、B29が小さく見えてしまうだろう。

その大型機の爆倉扉が開いた時、誰もが爆弾を投下すると思った。だが……

バサアアアア！

ホワイトハウスの真上からばら蒔かれたのは爆弾ではなく……

キング大将

「…紙…だと？」

マーシャル大将

「…宣伝文のようだな」

ばら時かれた紙を拾い上げた2人が呟く。  
今や15機の爆撃機がばら時く『紙爆弾』はワシントンDCの空を舞っている。

キング大将

「『今やスターリン率いるソ連はヨーロッパにその手を伸ばし、いずれ世界を我が手にしようと考えている。世界がスターリンのものになれば、自由は奪われ、逆らう者は家族親類まで殺され、独裁者の一声で大勢の人々が殺される。これほどの事態にアメリカは日本と戦いソ連に利を成す行為を続けている。今こそ正義を信じるアメリカ国民は日本と講和し、真の敵であるスターリンに正義の剣を向けるべきなのだ！こうしている内にも政府内にいるスターリン狂信者がアメリカを乗っ取るうとしている！今すぐアメリカ国民は立ち上がるべきだ！真の敵に対して！』……なるほど、誰が書いたかは解りませんが、国民には受ける内容ですな」

トルーマン大統領

「な、なんだと?!」

グルー駐日大使

「大統領。先程のは日本が開発した『富嶽』…我々なら『マウントフジ』ですが…とゆう名の爆撃機です。航続距離は日本からアメリカを往復できる機体です」

トルーマン大統領

「…それは私に対する脅しかね?」

グルー駐日大使

「いえ。単なるデモンストレーションです。それとも、このまま続けて後世の人間から後ろ指を指されますか?もしかしたら、ビラを

見たデモ隊がホワイトハウスに押し寄せて来るかも知れませんか？」

トルーマン大統領

「ぐ……」

キング大将

「大統領。我々もグルー大使を支持します」

トルーマン大統領

「な……！」

マーシャル大将

「もしお気に召さないなら解任してもよろしいですよ。まあ、解任してもこの現状を打破するのは難しいかと」

トルーマン大統領

「……………日本の条件は？」

グルー駐日大使

「ハワイは当分日本が占領しますが、その後の協議で返します。賠償金もハワイ以外の領土割譲も無し。ただ、スターリンと戦う事を約束する、日英独や欧州諸国を支援する事。僅か4つの事です」

しばしトルーマンは黙っていたが、直ぐに結論を出した。

トルーマン大統領

「…わかった。議会に提案してみよう。ただ賛成するか…」

「それはお任せ下さい」

その時、FBI局長のフーバーが声を上げた。

フーバー局長

「反対する奴はどうせスターリン狂信者と取り巻きでしょう。イザとなればスキャンダルを新聞に流せばいい」

トルーマン大統領

「そうか……すまんがグルー大使。日本政府にコンタクトをとってくれ」

グルー駐日大使

「わかりました。明日にでも協議出来るよう準備しましょう」

『司令。全機ビラ時き終わりました』

沖田（優）

「了解。全機、カナダ経由でイギリスに向かうわよ！」

反転し、ホワイトハウスを通った時、優里と富嶽は気付いた。富嶽に向かって手を降る軍服とスーツ姿の3人を……

次号へ

ワシントンの空を大鷹が飛ぶ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。



## 給油中

12月2日 トリスタン・ダ・クーナ群島

福本

「給油はいつ頃終了する？」

マリーダ

「午後には終了するわ。けどさすがね」

遠地

「ああ、イギリス海軍はちゃんとタンカー船団を用意してくれてたな」

給油（主に駆逐艦）を行っているヨーロッパ派遣艦隊。トリスタン・ダ・クーナ群島とゆうイギリス領の島で、アフリカのケープタウンに近く、現在派遣艦隊は群島の中でも一番大きいトリスタン・ダ・クーナ島付近で給油をしていた。

播磨

「ですが…断崖で囲まれた島ですね」

新沢

「こつ言つものって…ほら、鬼ヶ島みたいですね」

福本

「ああ。聞いた話じゃあ、北西部の浜辺以外は人間が上陸できそうな場所は無いそうだ」

新沢

「それじゃあ港も狭いわけですね」

千歳

「だから、タンカーと港で順番に給油しているんでしょう」

ワッケイン中将

「ですが、何故か心踊りませんか？昔の海賊の宝とかがありそうで

遠地

「お、するとワッケイン中将は海賊に憧れて海軍に入ったくちですか？」

ワッケイン中将

「ええ、まあ。そう言えば最初はケープタウンで給油する筈だったのでは？」

福本

「そうです。ですが、情報によるとイタリア海軍の潜水艦数隻が彷徨っている様です」

ララ（ラー・カイラム）

「だが、基本的にイタリア海軍は弱いのではないのか？」

遠地

「ところがどっこい、違うんだな。イタリア人は個人的名誉を重視するからな。小型艦艇とか潜水艦は案外活躍しているんだよな」

マリーダ

「まあ、人間は甘くみたら痛くいしつぺ返しがくるもんだからね」

海龍

「ふん ふん ふん」

福田

「やあ、海龍。えらくご機嫌だな」

海龍

「あ、福田君。実はね、ワルキューレの会議室が撮影場所に使えるんだ」

福田

「あはは、それは良かったね」

最近、海龍は忙しい。

だが、事務仕事が忙しいわけではなく、彼女の趣味……コスプレで忙しい。

何せ一気に1000隻以上に増えた艦隊の艦魂達に次々コスプレ衣装を着せ始め……今だ終わっていない。

ただ、この海龍のコスプレ衣装撮影は意外な効果を生んだ。

いったいどうゆうルートを通じたかは知らないが、ここ最近出される近江の不定期新聞に掲載されると、この話で持ちきりになり、艦魂達の交流の一端になったのは皮肉なのか何なのか……。

ピキーン！

海龍

「ん！」

福田

「どうした？新しいコスプレでも思い付いたか？」

海龍

「違う！この海龍コスプレリーダーに掛かって無い子がいた！」

福田

「…はあ？コスプレ…リーダー？探知機の間違いじゃないの？」

そこじゃないだろう。（笑）

海龍

「ふんふん。こっちな！」

福田

「はあ…」

溜め息を吐きつつ海龍に付いて行く福田。

これ以上何かされて、自爆艦なんか出されたら目もあてられないからだ。

海龍

「いたー！！」

福田

「あれは……シャーマン？」

ワルキューレの船体後部でシャーマンと楽しそうに喋っている少女。最も特徴的な白衣姿から工作艦の三原だと思っただが、印象的に違う。福田も必死に記憶を探るが三原以外白衣姿の少女は知らない。しかし、海龍にそんな事は関係無い。

海龍

「ゲッツツツト!!」

まるで獲物を襲う虎かライオンの様に飛び掛かる。

ドンガラガツシャーン!

ワルキューレ

「ど、どうしたんですか?!」

何かの異常を察したのか、ワルキューレが現れた。

福田

「丁度良かった。ワルキューレ、海龍が暴走した。抑える」

ワルキューレ

「了解」

シャーマンを加えた3人で海龍を少女から引き剥がす。

シャーマン

「大丈夫、ミライ?」

この瞬間、福田も少女の正体がわかった。

福田

「ああ、研究工作艦未来の艦魂かあ」

「あ、はい。そうです」

海龍

「キヤア〜 涼宮ハルヒにそっくり!」

福田

「黙んなさい」

ゴン!

海龍

「つづ〜〜〜」

「あはは…申し遅れました。研究工作艦未来の艦魂の未来です」

福田

「よろしく。えーと、自分は…」

未来

「福田少将ですよ。福本長官の後輩」

福田

「…その通りです」

ワルキューレ

「で、海龍どうする?」

福田

「そつだな…」

神龍

「…お姉ちゃん」

福田

「あ、丁度良かった。神龍…!?!」

現れた神龍に海龍を頼もうと福田が振り向いた時、固まってしまった。

なんと、神龍はニコニコ笑いながら両手に99式軽機関銃を持ち、3式105mm噴進砲を背中に背負っていた。

神龍

「海龍お姉ちゃん 何時もいつてるけど、コスプレはほどほどにね、つて言ってるよね?」(怒)「

福田

「あはは…神龍…めちゃくちゃ怖いよ。」(汗)「

これは…あれだ。

ヤンデレ妹が兄に怒っている構図だ。

神龍

「お姉ちゃん 自粛しようね」(怒)「

福田

「そ、総員退避!!」

ワルキューレ

「りよ、了解!」

ワルキューレが未来とシャーマンの手を掴むと、福田と共に全速力で退避し始めた。

4人共、乱射音が響いていたが決して後ろを振り向かなかった。否、振り向きたくなかった。

翌日、ワルキューレと共に、近江が出している新聞を見ていた。一面には……海龍が妹の神龍に散々撃たれた話が載っていた。ただ……あれが軽いと言っている神龍の笑顔は怖かった。

次号へ



給油中（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## イギリス到着！（前書き）

登場人物

未来

研究工作艦未来の艦魂。

いつも白衣を着ている。（研究者だから）

海龍が言っていたが涼宮ハルヒ似で、普段は普通だが、不思議や研究対象を見付けると兎に角調査する。

ジャーマンとは仲が良く、野口博士とも仲良くなりたいたいのだが……。

イギリス到着！

12月14日 大西洋（イギリス付近）

千歳

「さあ。もうそろそろイギリスよ」

マリイダ

「予定に反して1ヶ月も掛かっちゃったわね」

福本

「なーに、年内に着けたんだ。まだマシだよ」

遠地

「フッドやレパルス、プリンスは元気かな？」

播磨

「イギリス艦隊の皆さんとは1年振りですね」

新沢

「いや、1年と3ヶ月だ」

尾崎

「まあまあ。細かい事は気にせずに」

陽気な会話が弾む播磨艦橋。

ミア

「長官。レーダーに反応。航空機です」

ラフィール

「多分、イギリス空軍の航空機ね」

ジント

「さすがにイタリア軍機やソ連軍機はここにいないでしょう」

ブロロロン！

新沢

「スピットファイアですね」

手空きの甲板員達がスピットファイアに手を振る。

マリーダ

「いよいよイギリスね」

福本

「ああ、いよいよだ」

ラフィール

「前方に艦艇。艦影から見て……キング・ジョージ5世型です」

神谷

「その艦艇から打電。『我プリンス・オブ・ウェールズ。プリマスに先導する。我に続け』」

福本

「返電。『了解。貴艦の先導に感謝す』。ラフィール。プリンス・オブ・ウェールズに従え」

ラフィール

「了解」

プリンス・オブ・ウェールズに先導されプリマスに入港すると、イギリス軍楽隊の演奏とイギリス国民の君が代合唱、そして、子供達の国旗を振りながら出迎えられた。派遣艦隊も乗組員は全員儀礼用の第一種軍装の上に防寒服を着て蒼然と敬礼したまま歓迎を受ける。

新沢

「…物凄い熱烈な歓迎ですね」

福本

「政治的セレモニーだが…：それだけイギリスも苦しいだよ」

遠地

「まあ、政治的だか何だか知らないが歓迎されるのは嫌じゃない」

千歳

「そうね。ぼつぼつだけど在邦人の姿も見えるわね」

ラフィール

「ジント。ゆっくり接岸」

ジント

「了解」

慣れた手付きで慎重に港に播磨を接岸させる。

ジント

「接岸しました」

福本

「タラップ降ろせ。さて、歓迎を受けて来ますか」

マリーダ

「うわ、寒！」

福本

「12月のイギリスは防寒服は必須だね」

タラップを降りながら、話す福本とマリーダ。  
その後ろから宮崎中將が続いて降りて来る。

マリーダ

「み、宮崎中將はへ、平気何ですか？」

宮崎中將

「こんなもの満州の極寒を比べれば軽いもの。それに私は東北出身  
ですから」

福本

「あはは。それなら平気な筈だ」

3人共にタラップを降りきると……

「捧げー銃！」

ガチャ！

タラップの前にイギリス兵が左右20人が並び、捧げ銃で迎えられた。

それを敬礼しながら抜けると、福本とマリィダには久し振りに見た顔。

福本

「お久しぶりです。チャーチル閣下」

チャーチル首相

「久しぶりだな。あれから…5年かね？太平洋では随分活躍したそうじゃないか」

福本

「お元気そうで何よりです。あと、太平洋ではそんなに活躍していませんよ」

チャーチル首相

「わっはっはっは、そうか。活躍していないか。しかし…」

そう言つて、播磨や派遣艦隊の方を見る。

チャーチル首相

「どの艦艇も良さそうな物ばかりだ。我がイギリス海軍の艦艇がボロく見えてくる」

福本

「は、はあ……」

さて…謙遜していいのか、否定した方がいいのか、はたまたつこみを入れるべきなのか？  
困惑する福本だった。

歓迎セレモニーを終えた後、福本達は艦内で一息ついていた。

マリダ

「ところで、乗員達はどうする？」

福本

「両舷上陸にする事にしたよ。ついでに、輸送船団の方も上陸させる」

遠地

「さすがに、1ヶ月も海の上じゃあへたり込んでいる奴もいるからな。俺は賛成だ」

マリダ

「私も」

千歳

「私も賛成」



その時……

コンコン

福本

「ん？どうぞ」

新沢

「失礼します」

遠地

「なんだ、新沢か。どうした？」

新沢

「は、吉田茂外交官が来られました」

福本

「吉田さんが？いつたいなんで……」

吉田外交官

「アメリカとの後詰め協議をイギリスでやっているからだよ」

まるで計ったかの様に顔を出す吉田茂。

マリーダ

「あ、そうなんだ」

遠地

「で、外交官。なぜこちらに？」

吉田外交官

「君達がイギリスに到着したと聞いて駆け付けたんだよ。福本君、山本長官から書面を預かってきた」

福本

「書面？」

吉田外交官から受け取ると直ぐに書面を読む。

福本

「えーと、何々、『やあ、福本。これを読んでいるとゆう事はイギリスに到着したとゆう事だろう。実は前々から私に元帥称号授与の打診があつた。別に私は構わない。まあ、これが半分負け戦で終わっていたら、こんな恩恵は要らなかつたが…。』」

遠地

「まあ、当然といえば当然だな。あの人がいなかったら第七艦隊も無かつた事だし」

福本

「続きを読むぞ。』しかしだ、問題なのは君達だ。ヨーロッパに派遣されたら向こうは元帥が指揮を採っている。下手をするとイギリス海軍の指揮下に入る事になる。それだと即決即応を好む君は動きづらいただろう。また、イギリス海軍と第六大陸艦隊との間に摩擦も発生するだろう。そこで君の元帥授与を打診したところ、天皇陛下も賛成した。』…つて、ええー!!」

マリーダ

「元帥！大介が?!」

遠地

「うお！いいな！羨ましい〜」

新沢

「長官が…元帥…」

千歳

「つ、続き。続きはあるの？」

福本

「あ、ああ。『ついでに、ヨーロッパ派遣とゆう事で第七艦隊及び派遣部隊員は一階級昇進となった。階級証は後送する。最後に、福本大将、元帥授とおめでとう。山本五十六大将』……まじ？」

遠地

「…つー事は、俺達は大將？」

マリーダ

「…あ、本当ね」

千歳

「大將かあ…嬉しい」

新沢

「福本長官！元帥授とおめでとうございます！」

福本

「……………僕、明日からどうしろちゅうねん…！」

次号へ

2019

## イギリス到着！（後書き）

明日明後日の土曜日・日曜日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新  
致します！

お楽しみに。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 日米、遂に講和せり！

12月24日

1943年12月24日……それは後に歴史を動かす日にちになった。  
その結果はある程度予想されていたが、実際に起きると世界が驚愕した。

日米戦終結！ハワイにて講和調印式！東洋のサムライ、歴史を塗り替える！！

開戦当初こそ、双方互角：あるいは第七艦隊のある日本が少し有利：と思われたが、僅か半年で太平洋を掌握、10カ月でソ連に並ぶ大国アメリカとの戦争を終結させた。  
もちろん、これは日本の事前準備と基本的戦略を固めた為である。  
だが、日露戦争に続く快挙を日本はアメリカ相手に再現したのである。

ちなみに講和調印が12月後半になったのは、双方の反対派を鎮める必要があったからだ。アメリカは民意で鎮め、日本は陸海軍を米内海相・永田陸相が抑え、政界や世論は有力者によって抑えた。それでも反対する人間は出てくる。

彼ら曰く、「なぜ日本が勝っているのに賠償金・領土割譲はないのか！？」や「講和条件がアメリカに有利過ぎる！！」と言って反対した。

しかも、これに乗じたクーデターの噂まであった程だ。  
これに対し、講和推進者の1人であった明子天皇は断固たる意志を  
見せた。

明子天皇

「日米戦は終わります。ですが、戦争は終わった訳ではありません  
！これからスターリン率いるソ連と戦わなければいけない時に、ア  
メリカとの講和に時間を掛けて勝機を逃す気ですか？！反対意見が  
あるなら私に直接言いなさい！もしクーデターが起きた場合は、私  
自身が近衛師団を率いて直接鎮圧にあたります！」

こう言われては反対派も沈黙するしかなかった。

その頃……

イギリス プリマス港

第七艦隊では日米講和を聞いてホツともしていたし、喜んでもいた。  
特に福本は元アメリカ艦と元アメリカ兵を抱えていたから心底ホツ  
とした。

これで少しは肩の荷が降りた訳だ。

しかし、これで終わった訳ではない。

これからソ連、イタリア……いや、状況によってはフランスとも戦わ  
なければならぬ。

やっと折り返しに入っただけだ。

だから、気は抜け無いのだ。しかし、気が抜ける内には抜いておく  
ものだ。

戦艦播磨 会議室

福本

「それでは、日米講和を祝って、乾杯！」

全員

「……………かんぱーい！！……………」

いつも同様、播磨の会議室に集まり、早速飲み始める面々。

和泉

「良かったな、ワシントン！これで心置き無く酒が飲めるな！」

ワシントン  
飛驒

「そうね、和泉！」

ノースカロライナ  
美濃

「あのね…2人共今まで気にせず飲んでたでしょう」

近江

「まあまあ、ノースカロライナさん。そのへんで…」

勇鷹

「え〜と、誰ですか？お酒のアテ注文したの〜」

春日

「あ、私だ。誰か取ってくれ」

土佐

「あ、私が取ります」



戦鷹

「若杉！注いで！」

若杉

「はいはい」

伊吹

「…吉野、引っ付き過ぎでは無いか？」

吉野

「いいえ、伊吹様。引っ付き過ぎてはいませんよ」

遠地

「お〜い。イチャイチャバカップルがいるぞ〜」

遠龍<sup>エンリウ</sup>

「あのね…私の隣にもいるんですけど〜」

白河

「え、誰の事？」

富田

「…多分、僕達の事だと…」

石狩

「ところで、ヒューストーン。新城君とどうなの？」

箱根<sup>ヒューストーン</sup>

「ブツ…そ、そんな関係ではありません!！」

日進

「あら、それにしても新城君とラブラブねえ？」

ヒューズトン  
箱根

「ち、違います！誤解です〜」

新城

「あれ、誰か自分の話が聞こえた様な…」

新沢

「気のせいだろう。まあ、とにかく飲め」

新沢

「あ、いただきます」

神谷

「えへへへ…蒼紫様〜」

篠森

「こら、操。飲み過ぎだ」

楠木

「あらあら、操ちゃんは篠森君にデレデレね」

マリーダ

「……羨ましいわ。操ちゃんが」

千歳

「あ、そっか。マリーダは…」

マリーダ

「うう…それ以上言わないで…」

畝傍

「ふむ…操と篠森もそうだが…福本、マリーダとは大丈夫か？」

福本

「はい？何がですか？」

畝傍

「…ちゃんと相手をしているか？プライベートでだ」

福本

「…実はちょっと相手に出来なくて…元帥を授与されてから、どうも相手にしにくくて…」

畝傍

「…公の目があつてか？」

福本

「はい…自分も相手をしてやりたいんですがね」

無礼講で騒ぐのだから、普段出来ない相談をする事もある。  
まあ、それだけ人間悩みは多いのだろう。

和泉

「福本ちよ〜か〜ん！」

福本

「ん、なんだ、和泉？」

飛驒フシント

「飲みましょよ〜」

そう言つて一升瓶をドンと置く。

福本

「あ、いや…お、俺酒飲めないから…」

和泉

「そう言いながら、敵傍さんと陰気臭く話すんですか〜？」

福本

「…陰気臭くて悪かったね」

飛驒フシント

「とか言つて、実は飲めるんでしょ〜？」

福本

「いや、飲めないから」

和泉

「顔が笑ってますよ〜」

福本

「…君が酔ってるからそう見えるだけ」

ワシントン  
飛驒

「もお、飲みなさい！」

福本

「いや、だから……！」

その瞬間、福本は気が付いた。

いつの間にか和泉が自分を羽交い締めに行っている事に……！！

福本

「お、おい！和泉……」

和泉

「ワシントン！今の内に飲ませなさい！」

ワシントン  
飛驒

「了解にや〜！」

一升瓶を持つといつの間にか栓を開け、いきなり一升瓶を福本の口に突っ込め、頭を上げさせた。

よく、マンガで見る酒の飲み（飲ませ？）方だ。（笑）

ゴクゴクゴクゴクゴク……

バタン！キュ〜〜ウ……

飛驒

「キャハハハハ マンガみたいに目回してる〜」

畝傍・美濃

ノースカロライナ

「「あんだ達！何してんの！！」

ガン！ゴン！

古参+姉のダブルげんこつ！（笑）

和泉・飛驒ワシントン

「「い、痛~~~~い！（泣）」

マリィダ

「ちよ、大丈夫!？」

福本

「.....」

春日

「いや、どう見ても大丈夫では無いだろう」

マリィダ

「はぁ.....春日さん。あとお願いします」

春日

「ああ、わかった」

福本

「う~~~~」

マリィダ

「大丈夫…でも無いか」

女の子が男の子背負うと言つ逆転現象。

マリーダ

「もう……普通は反対でしょ」

少々呆れながら長官私室まで運んだ。

長官私室（兼寢室）

マリーダ

「よいしょ」

ドサッ！

ベッドに福本を寝かす。

マリーダ

「もう……」

文句を呟きながら福本の上着を脱がして、その上着を近くに掛ける。そして、福本に布団を被せる。

マリーダ

「はい、終わり」

そう言うと、自分の部屋に戻ろうとした時、ある事に気付いた。

マリーダ

「（そういえば私…大介の寝顔なんて見たこと無いわね）」

よほど一升瓶の酒が効いたのか気持ち良さそうに眠っている。  
知らず知らずの内にベッドに近付き、顔を覗き込む。

マリータ

「（もう…憎たらしい程気持ち良さそうに寝てるわね……バカ）」

直ぐに誰も居ない筈の部屋を見回す。

そして……

チュ！

僅か2・3秒の事なのに2・3分に思えた。  
そして顔を上げたマリータは真っ赤だった。

福本

「うううん……」

マリータ

「!!--」

起きた!と思つて動揺したが寝言と解りホツとする。

マリータ

「ふう…フアアア…眠い」

自分の部屋に戻るのには面倒くさい。

マリータ



「ごめんね、大介。隣に寝るわね」

上着を掛けると福本の隣に潜り込んだ。

マリーダ

「お休みなさい…大介」

ちなみに、翌日起きた福本が隣に寝ているマリーダに気づき、起こしに来たジントに見付かって、赤面しながら弁明（ジントは昨日の事は知っている）したのは別の話。

次号へ

日米、遂に講和せり！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 新たな嵐が迫る

12月26日 プリマス

戦艦播磨長官公室

福本

「ふーん…なるほど…」

マリイダ

「あら、日本の新聞？」

福本

「ああ、近江が持って来てくれたのさ」

マリイダ

「で、なんて書いてあるの？」

福本

「えーと、講和調印はアメリカ戦艦ミズーリで、その後の日米英独対ソ4カ国同盟調印は戦艦大和でやったんだと」

マリイダ

「ふーん…そうなの」

福本

「まあ、調印式をミズーリでやったのはアメリカに気を使ったんだろっね」

マリーダ

「そうね。これからアメリカと協同で戦うって時にゴタゴタを起したく無いしね」

福本

「うん。それより気になる報告が2つ」

マリーダ

「え？なに？」

福本

「1つは、満ソ国境のソ連軍の動向が怪しい事。もう1つは仏印（フランス領インドシナ：現在のベトナム・ラオス・カンボジアの一部）の植民地駐留軍の動向が怪しい事さ」

マリーダ

「ソ連の動向は解るけど、仏印はどうゆう訳？」

福本

「解らない。だが、フランスと戦う事を想定しといた方が良くかも知れない」

マリーダ

「なら、ロンドンに行ってフランス軍資料を提供してもらわないと」

福本

「ああ。出来るだけ細かいのを提供して貰おう。あと、ドイツにも提供願いを出してくれ。念のためだね」

マリイダ

「わかったわ。大使館を通じて要請してみる」

その時、光と共に少女が転移して来た。

「突然で失礼した。日本海軍代表者と副代表者がここに居ると聞いて来た。そなた達がそうか？」

福本

「は、日本帝国海軍代表者兼ヨーロッパ派遣艦隊司令長官の福本大介大将元帥です」

マリイダ

「同じく、副代表者兼参謀長のマリイダ大将です」

「…若いがしつかりしているな。失敬、私の紹介が遅れた。大英帝国海軍戦艦ネルソンの艦魂ネルソンだ。よろしく」

福本

「はい、よろしくお願ひします」

戦艦ネルソン……40cm三連装砲を前部に集中配置した戦艦で、イギリス海軍で最も有名な提督ネルソンの名を頂戴したビツクセブンの一隻である。

だが、今や大和や播磨といった強力な高速戦艦（ネルソン型は23ノット）の前に少々影が薄くなっている。

ネルソン

「君達2人の噂は聞いている。特に福本元帥の噂は色々とな」

福本

「名前だけで結構です。元帥も派遣期間中だけです」

ネルソン

「…そうか。まあ、フッド達から聞いた話だと、サブلم戦では生意気な貴族の若僧を2・3人張り倒したとか…」

福本

「…そんな事もありましたね」

ネルソン

「他にも、貴族院議員の息子を5回以上鉄拳制裁、市内で迷惑を掛けた陸軍軍人三名を張り倒した後、憲兵に引き渡し、近くのお祭りに出る事10回以上、恋愛相談の多くは何故か女性…」

マリーダ

「あ、あの………いたいどこでそんな情報を…」

ネルソン

「…情報の海に浮かぶ我が大英帝国は、情報内容は明かしても、情報出所は明かさないものだ」

福本

「あはは……さすがイギリス……情報で生きる国だけあるわ…」

マリイダ

「ところで、ネルソンさん。仏印方面の不審な動きをどう思いますか？」

簡易テーブルと折り畳み椅子を用意し、紅茶を用意するマリイダがネルソンに訊いた。

ネルソン

「やはり、君達のところにも届いていたか…確かに、今は友好国では無だけ仏印方面の動きは不気味だ」

福本

「東アジア方面のイギリス軍は？」

ネルソン

「海軍は無に近い。居留地保護に砲艦と警備艇があるだけだ。陸軍は詳しく知らないが、警備隊程度の戦力しか無い…君達はどう思う？」

福本

「現状を踏まえ、フランスが採る采配は3つ」

ネルソン

「3つ？」

福本

「1つ、北上し香港・中国方面に侵攻。2つ、タイ王国に侵攻する。3つ、その両方…といったところですね」

ネルソン

「ま、待て！タイに攻め込むのは解るが、両方は無理があるのでは無いのか？」

福本

「まあ、両方は多少無茶ですね。ですが、それはそれで効果は絶大ですよ。私ならタイ王国の可能性が高いと思います」

マリイダ

「なんで？」

福本

「タイ王国が存続出来たのはイギリス・フランスの緩衝地帯だったから」

ネルソン

「なるほど……ミリタリーバランスが崩れ、ビルマ・マレー半島・インド……か」

マリイダ

「……イギリスにとっては最悪のシナリオね」

福本

「同じ理屈は中国方面でも有り得ます。香港をとられれば、イギリスも困るが、日本も困る」

マリイダ

「前門の虎後門の狼ね。前門がソ連、後門がフランス……それはそれで最悪ね」

ネルソン



「そうなるよ、アフリカ方面での戦局…いや、この戦争自体の戦局が暗くなる」

マリイダ

「フランスはアフリカとインド洋のマダガスカルを植民地で持っているから…本当に厄介ね」

福本

「念のために第二機動艦隊をインド洋に回してもらおうか…進言しておくか」

ネルソン

「…となればうかつかしていらねえ。艦に戻る」

福本

「ええ…あ、また、お茶を一緒に飲みましょう」

ネルソン

「ああ…そうだ。フランス海軍及び艦艇の情報は後で部下に届けさせよう」

マリイダ

「…良いんですか？」

ネルソン

「これから共に戦う仲間に情報を与えないなど、バカのやる事だ。共に戦う仲間だからこそ、情報を提供するのだ」

福本

「…ありがとうございます」

次号へ

新たな嵐が迫る（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

**激震！仏印駐留軍、タイ王国に侵攻セリ！（前書き）**

ネルソン

イギリス戦艦ネルソンの艦魂。

いつもクールで、サーベル着装のイギリス海軍艦魂達の指揮官。  
ビッグセブンの1人である為か威厳がある。

福本曰く『イギリスの山城さん』。

激震！仏印駐留軍、タイ王国に侵攻セリ！

1944年1月5日 早朝

タイ王国・仏印国境

並べられた重砲。

エンジンを吹かし、何時でも出撃出来る態勢にある戦車。

前進命令を待つ歩兵。

まるで戦争の前触れの様……実際そうだ。

そして、指揮官が手を下ろした瞬間、重砲独特の響きが轟いた……。

その頃……

イギリス プリマス

福本

「っ！！」

ジント

「??どうしました、長官？」

福本

「い、いや。何でも無い……」

艦橋でジントと軽くお喋りをしていた福本はいきなり首に痛みを感

じた。

針で一瞬ちょっと刺された様な痛みだった。  
首筋を擦りながら、先程の痛みが何だろうと思った時……

バン！

神谷

「ちょ、長官！！」

福本

「どうした？神谷」

その時、光と共にネルソンが転移して来た。

ネルソン

「大変だ！福本！」

ジント

「ど、どうしたんですか、2人揃って？」

神谷

「ふ、フランスが仏印より……」

ネルソン

「あなたが予想した通り、フランスがタイ王国に侵攻したの！」

ジント

「な、何ですって！？」

福本

「ちい……まさか…さっきの痛みは…」

ついさつき、痛みがはしつた首筋を撫でながら呟いた。

早朝、仏印駐留軍はGPF-T155mmカノン砲などの重砲を仏印側より発砲、続きルノーR35、オチキスH39軽戦車、ソミュアS35中戦車、シャルルB1bis重戦車が突撃を開始した。その後ろをMAS36小銃を持った歩兵が続く。

さて、タイ王国軍は何をしていたのか？

もちろん、事前に日本やイギリスなどから情報提供を受け準備・警戒していた。そして、攻撃を受けると……一斉に住民を避難させつつ退却した。

もちろん、この退却は事前に決められて退却しているのである。タイ王国軍の方針はこうである。

『出来る限り引き付け、奥地で迎え討つ』  
戦力温存の為の退却である。

再び…プリマス

戦艦播磨会議室

福本

「それで、タイ王国軍は？」

神谷

「は、タイ軍は戦力温存の為、住民を避難させつつ退却しています」

沖田

「情報によりますと、フランス軍は夜が明けると航空支援を開始したそうです」

マリータ

「まあ、当然と言えば当然ねえ」

アルファーニ

「それで、タイ王国軍の対応は？」

沖田

「直ぐに保有する零戦64型で迎撃を開始。各地で激しい空戦になっている」

福本

「まあ、今のところはタイ王国軍に任せるしか無いな」

ワッケイン

「大丈夫なんですか？いくら植民地駐留軍とはいえ、陸軍国フランスですから…」

福田

「それなら心配ありません。タイ王国軍は陸海空で日本軍の訓練及び武器の提供を受けていますから」



楠木

「確かに一世代前の武器とはいえ、訓練は充分だし、士気もあるしね」

篠森

「当然、フランスの動向が気になりますね」

福本

「ああ。下手をしたら宣戦布告する可能性もある」

遠地

「ち、なんでフランスにマシな政治家はいないんだよ」

福本

「知らないよ。ただ、スターリンはもしかしたら笑ってるかもな」

ジント

「嫌ですね。あのバカが笑っている姿を見るのは」

新沢

「俺だつてお願い下げだ。そんなもんより、チャップリンの映画を見た方がマシだ」

福本

「ああ、確かに。それよりはあいつの目の前で軍刀を抜いて、あいつの首を斬ってやりたいよ」

ヴィル

「…過激ですね」

遠地

「その代わり、独裁者なんだから本気で泣く奴は居ないよ」

福本

「自分で言つといてなんだが、その話は置いといて、なんで味方が増えたら敵も増えるかね…」

千歳

「そうね…これじゃあ地中海はイタリア・フランス海軍が抑えたも同然よ」

遠地

「それはそれで嫌な話だ。だからと言って、理由無しにフランス海軍を叩く訳にはいかないしな…」

沖田

「チャーチル首相、早まってフランス軍を撃て…なんて言いませんよね？」

福田

「…あり得そうで怖いな」

アルファーニ

「遠いアジアの紛争が、まさかヨーロッパに波及するとは…」

マリーダ

「その逆も然りね…特に相手はイギリスに並ぶ植民地保有国なら尚更ね」

遠地

「難しくなるぞ……この戦争は……」

福本

「ああ……」

次号へ

**激震！仏印駐留軍、タイ王国に侵攻セリ！（後書き）**

ご意見感想をお待ちしております。

## 泰仏紛争の行方

1月10日 タイ王国国内

最初、フランス軍は快進撃を続けていた。

しかし、7日の午後から散発ながらも遅延を狙った抵抗が出始め、8日の午後には各地で進撃が停滞した。ある部隊は先頭の戦車を地雷で損傷したところを襲われた。

また、ある部隊はいきなり戦車が破壊され、驚いている内に四方八方から撃ちまくられた。

しかし、襲撃は短時間であり、あっという間に終わる。

タイ軍は一撃離脱のゲリラ戦で進撃を妨害していた。

そんな中、真つ先に反撃したのがタイ空軍である。

今や日本でも訓練隊でしか見られなくなった零戦64型でフランス軍に挑んだ。

タイ各地の空で激しい空戦が行われたが、徐々に圧倒していった。これには色々理由がある。

確かにタイ空軍のパイロット達は日本陸海軍の指導を受けた者達で、機体も一世代前ながらもまだまだ使える零戦64型である。

しかし、フランス軍の方はパイロット達の腕は置いとくにしても、機体が悪すぎた。

仏印に配備されていたのはモラヌ・ソルニエMS・406戦闘機。

データは……

全長 81.7m

全幅 10.62m

|      |              |      |         |
|------|--------------|------|---------|
| 重量   | 2426kg (全装備) | 最高速度 | 486km/h |
| 航続距離 | 800km        |      |         |
| エンジン | 水冷860馬力×1    |      |         |

#### 武装

20mm機銃一挺

7.5mm機銃二挺

……と言つもの。

残念ながら、速度600km以上が当たり前の戦闘機から見れば完全に二線級戦闘機である。

64型の速度が568km/h……完全に敵う訳が無い。

しかも、肝心の20mmモーターカノンが高初速で命中精度は良いのだが、周辺装置に欠陥があった。

(実際、フランス軍機が上空で戦闘をやると20mm機銃が凍って使え無い等があったそうだ……。)

この為、二挺しか無い7.5mm機銃で戦う事になるのだが……どうみても威力不足である。

これでは勝負なんかやる前から決まっている。

実際、零戦と戦ったモラヌ・ソルニエはバタバタ落とされた。

そして、制空権はタイ空軍が確保していった。

仏印駐留軍 前線司令部

#### 指揮官

「何をやっている！3日後にはバンコクを奪取する予定ではなかつ

たのか!?!」

テントと机だけの前線司令部で指揮官が吠えていた。

士官

「タイ軍はゲリラ戦で我々を止めています。今までとは違って苦戦しています」

指揮官

「ゲリラだろうが何だろうが、さっさと排除しろ!早くしないと」

兵士

「敵機来襲!」

その声に全員が振り向くと、空にポツポツと黒い点……。

指揮官

「総員退避!森に逃げ込め!」

全員が慌て森に逃げ込む。最初は鼠をいたぶる猫だった筈が、今や自分達が鼠になっていた。

制空権を確保したタイ空軍は日本から購入した97式重爆や99式軽爆、99式襲撃機(全て初期生産型)を総動員してフランス軍を叩き始めた。

今や直衛のモラヌ・ソルニエを出しても叩き落とされるだけである。つまり、出すだけ無駄だった。

ギューーン……

ビュービュービュービュービュービュービュー……

ズカーン！ズカーン！ズカーン！ズカーン！ズカーン！ズカーン！ズカーン！ズカーン！

指揮官

「糞！タイ空軍め！調子に乗りやがって！」

指揮官が叫ぶが……何の効果も無かった。

制空権を確保したタイ陸軍は一気に反撃に出た。

タイ各地に散らばっていた部隊（仏印国境で戦闘中の部隊を除く）を一度バンコクに集結させ、再編成後戦闘地域に派遣した。

タイ王国陸軍も日本陸軍に習い、歩兵の高機動化に着手していた。この為、歩兵隊にトラックが配備されていたが……全部には行き渡っていないかった。

しかし、ここでタイ軍が目にしたのが、日本陸軍がフィリピン戦で使った自転車部隊……銀輪部隊だった。自転車ならタイでも生産出来た為、トラックが行き渡っていないかった歩兵隊には人数分の自転車が配備された。

これにより、トラックの無い部隊でも徒歩より早くバンコクに集結、再編成後トラックや自転車で戦闘地域に送られた。

タイ軍士官

「突撃！フランス軍から祖国を守れ！」

タイ軍兵士達





## 泰仏紛争の行方（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 欧州情勢異常あり（前書き）

### 登場兵器

#### 98式軽偵察戦車改

|      |                   |
|------|-------------------|
| 全長   | 5'1m              |
| 全幅   | 2'3m              |
| 重量   | 16'7t             |
| 全高   | 2'30m             |
| 最高速度 | 56km/h            |
| 行動距離 | 250km             |
| エンジン | 統制型100式発動機（250馬力） |

### 武装

40mm60口径戦車砲×1  
7'7mm機銃×2

### 装甲

車体・砲塔前面 60mm30度傾斜装甲  
側面 30mm20度傾斜装甲  
後面 30mm垂直装甲  
上面 10mm装甲

乗員 4名

ノモンハン事変で活躍した98式軽戦車だったが、日進月歩の戦車開発の前には敵わず、偵察戦車として改良が続けられていた。

泰仏紛争ではタイ陸軍の数的主力としてフランス軍に奮闘した。  
日本軍でも日ソ戦で偵察・歩兵援護・支援に活躍。

## 欧州情勢異常あり

1月15日 <sup>タイ</sup> 泰仏国境

ズガンー！！

指揮官

「た、退却！たいきやーく！！」

最後の戦車であったシャルルB1bisが99式襲撃機の攻撃で撃破された瞬間、フランス軍指揮官は退却命令を出した。

タイ王国に侵攻してから10日……制空権を確保され、タイ陸軍はゲリラ遅延から一斉反撃に移り、多数の戦車と歩兵・航空機の連携戦法で侵攻軍を各地撃破していった。

そして、15日。

最後まで抵抗していたフランス軍部隊は遂にタイ王国領土より撤退した。

後に『泰仏紛争』と言われる事になる紛争はここに終結した。

結局、いったいフランスが何をしたかったかは解らないが、タイ王国侵攻は失敗に終わった。

しかし、これ以後フランスと日本の仲が悪くなった。タイ王国侵攻失敗後、フランスがタイ王国軍に日本軍が混じっていたと主張し始めたからだ。

その根拠は日本製武器を多数目撃したから。

これを聞いてフランスを支持したのはソ連とイタリアのみ。

理由はドイツ・イギリス他欧米諸国からしてみれば、武器売買により外貨を得るのは当たり前だ。その他の国からしてみれば、タイ王国に侵攻しておいてポコポコにされた……ある種の日本対する負け惜しみであり、耳を傾ける気にもならなかったからだ。

それから1週間後……

1月22日 プリマス

戦艦播磨

ジント

「今頃、日本は大変だろうね」

ラフィール

「当たり前であろう。フランスが文句を言っておるのだ。大変の一言で済む訳がなかるう」

ヨーロッパ派遣の為、少将と中将に昇進したジントとラフィール。ついか、戦艦の副長と艦長が将官って……。

ラフィール

「ん？何か言ったか？」

ジント

「ん、ああ、何でも無いよ。多分作者の独り言」

ラフィール

「そうか…」

おいおい……

福本

「よう、御二人さん。イチャイチャはしてないが、仲が良いようで」

ジント

「あ、長官」

ラフィール

「長官…一言多いです」

福本

「あはは、済まない。どこで、異常は無いな？」

ラフィール

「は、異常はありません」

ジント

「ところで、フランスとはどうですか？」

福本

「事態が事態だけに、双方意地張って纏まる様子も無いよ。まあ、向こうが勝手に言ってるから余計かも知れないけど」

ジント

「そつですか…残念です」

福本

「…これが外交だからな。それに今のフランスは社会党左派が実権を握っているからタチが悪い」

ラフィール

「…スターリンさえ殺つてしまえば…」

福本

「確かに終わるな。まあ、手っ取り早い方法としては富嶽でモスクワを絨毯爆撃すればいいんだが…」

ジント

「無理…ですよね」

福本

「ああ。軍事作戦的には良いが、人間的には絨毯爆撃は賛成出来ない」

マリィダ

「まったく。やりきれないわ」

福本

「やあ、マリィダ。お疲れ様」

マリィダ

「ええ、疲れてる。フランスが余計事を起こしてくれたお陰で、余計な仕事を増やしてくれたわ」

ジント

「あはは……」



マリダ

「ねえ、絨毯爆撃がダメなら、桜花3型を富嶽に載せてモスクワのクレムリンに叩き込めば？」

福本

「…出来ない事は無いけど、歴史的建造物の問題も……ねえ」

遠地

「いつその事、スターリンを外に出して、三式弾を叩き込んだらどうだ？」

ラフィール

「焼き殺し……私は構いません」

マリダ

「同じく。他国の独裁者ですから」

ジント

「……2人共、言ってる事が怖い」

福本

「……まあ、それはその時まで置いておこう。あと遠地、お前どこから出てきた？」

遠地

「ん、暇だったから、普通に部屋から艦橋に上がって来ただけだが」

福本

「さよか」

マリーダ

「はあ〜あ、ソ連軍共々スターリンがロシアから出て来ないかしら?」

福本

「そんな無茶な……」

ラフィール

「そうなれば三式弾乱打して、スターリン共々焼き殺せるのに……」

遠地

「……今更ながら言った事を後悔するよ」

ジント

「あの……話が戻ってますよ?」

福本

「……本当だな」

こんな半分危なっかしい会話が交わされていた時……

神谷

「ちょ、長官!」

福本

「ん、どうした、神谷?その様子だと、悪いニュースか?」

神谷

「悪いも悪過ぎるニュースですよ！フランスが国交断絶を発表！日本に宣戦布告を通知！！」

遠地

「な、なんだと！！」

福本

「ちい…とつとつ最悪の事態になったな」

ジント

「…とゆう事は、イギリス・ドイツ・第六大陸・アメリカを敵に回しますよ！！」

マリーダ

「多分近日中に続けて宣戦布告するわね」

福本

「欧州情勢極めて深刻なり…って言うのかね…この状況は…」

次号へ

欧州情勢異常あり(後書き)

明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新致します。  
ご意見ご感想をお待ちしております。

## ブレスト軍港空襲

1月24日 午後10時 イギリス海峡

1月の波の荒い中、連合王国海軍旗艦ラー・カイラム率いる艦隊が進む。

既に空母の飛行甲板にはエンジンの掛かった艦上機が待機していた。

戦艦ラー・カイラム

ワッケイン

「…荒れるな」

ララ（ラー・カイラム）

「冬の大西洋も荒れると聞いていたが……ここまでとは……」

初めての地、初めての海、初めての環境……。

それは、日本軍将兵はまだましも、まだ交流回数のない連合王国軍やヴィントラント王国軍、サブム帝国軍は戸惑いつつも段々と慣れていった。

ララ（ラー・カイラム）

「しかし、ヨーロッパの一番槍が我々連合王国海軍に御命じになるとは……福本元帥も意気な計らいをしてくれたな」

ワッケイン

「まあ…夜間襲撃なのが残念だけどね」

士官

「長官！電波受信。誘導電波きました！」

ワッケイン

「よし。第一次攻撃隊発艦せよ！」

士官

「は！」

ズン！

飛行甲板で待機していた烈風・流星・彗星が発艦する。  
ヨーロッパ派遣艦隊最初の攻撃隊が放たれた。

フランス ブレスト軍港

「おい。エンジン音が聞こえるぞ？」

「おいおい、寝惚けてるのか？こんな真夜中に…」

ギューン！ギューン！ギューン！

「「！！」」

2人のフランス水兵の真上を何かが通過した。

ヒューウ……

ズガン！！

突然、近くの倉庫が爆発した。

それに続き、さらにあちこちで爆発音が轟く。

「な、なんだ！？」

「じ、事故か！？」

「そ、総員落ち着け！被害を報告しろ！」

「サーチライトを灯せ！」

怒号が飛び交う中、サーチライトが点灯しあちこちを照らす。

「お、おい！見る！」

1人の水兵の声に誰もが振り向くと、そこには……

「ひ、飛行機??」

「国籍表示を見る！赤丸だ！」

「ば、馬鹿な！なぜ日本軍機が夜間飛行してるんだ!？」

そうこうしている間も、倉庫や施設が爆撃される。

「日本軍の夜間爆撃だ！」

「応戦しろ！急げ！」

ブレスト軍港入り口付近

宮木

「奇襲は成功ですね」

二ーナ

「航空隊も久々だから、結構暴れているわね」

零

「本当だね」



海面に浮上している伊400潜水艦は、暗闇を利用しつつ待機していた。

現在、ブレスト軍港を爆撃しているのは全て第七艦隊潜水部隊所属の航空隊だ。待機中の日本で新しい機材を乗り込ませたが、出番はヨーロッパで回ってきた。

宮木

「晴嵐55型、強風改の空襲は成功です。あとは本艦の誘導電波を辿って来た連合王国海軍の攻撃隊がやってくれるでしょう」

二ーナ

「あら、一つ忘れてるわよ?」

零

「撃墜機の救助だね」

宮木

「わかっております…あ、来ましたね」

伊400潜水艦の上空を攻撃隊が通過した。

攻撃隊は飛行場、ドックなどの主要施設を攻撃した。夜間攻撃と言うハンデはあったが、事前の潜水航空隊の攻撃により周囲が明るかったのが良く、2回にわたる攻撃は成功した。

宮木

「攻撃隊回収完了。連合王国部隊も無事帰還しました」

二ーナ

「そう。さて、引き上げましょう」

零

「りょくか〜い！」

宮木

「はあ……」

いつもの暢気さに呆れ溜め息を吐く宮木。

宮木

「本当に……潜水艦艦長とその艦魂なのかしら」

士官

「攻撃隊、全機無事収容しました！」

ワッケイン

「そうか。さて、第七艦隊と合流しよう。全艦回頭！」

士官

「了解！」

ララ（ラー・カイルム）

「次は地中海か……」

ワッケイン

「ああ…アフリカ回りでだけどね」

ララ（ラー・カイラム）

「マダガスカルは大丈夫なのか？」

ワッケイン

「大丈夫さ。日本海軍がどうにかしているよ」

次号へ

## ブレスト軍港空襲（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## マダガスカル島占領（前書き）

### 登場兵器

晴嵐55型

|      |                          |
|------|--------------------------|
| 全長   | 11.7 m                   |
| 全幅   | 12.26 m                  |
| 全高   | 4.58 m                   |
| 全備重量 | 4750 kg                  |
| 最高速度 | 540 km/h                 |
| 発動機  | 愛知『鷹』12型液冷エンジン（2050馬力）×1 |
| 航続距離 | 2000 km                  |

### 武装

25 mm機銃×2（400発×2）  
13 mm機銃×1（600発）  
爆弾・魚雷800 kg

フロート 脱着式

第七艦隊潜水航空部隊の攻撃機。  
イギリス製グリフォンエンジンを日本でライセンス生産した『鷹』エンジンを搭載。  
機種転換により載せ代えられた。

強風改

|      |                          |
|------|--------------------------|
| 全長   | 10'58m                   |
| 全幅   | 12'00m                   |
| 全高   | 4'78m                    |
| 全備重量 | 3950kg                   |
| 最高速度 | 620km/h                  |
| 発動機  | 三菱『虎』12型空冷エンジン(2080馬力)×1 |
| 航続距離 | 2150km                   |

武装

20mm機銃×4(450発×4)

爆弾60kg×2

ロケット弾×6発

晴嵐55型同様、機種転換時に載せ代えられた強風改。20mm機銃4挺の重火力に強化、自動空戦フラップにも改良を加えた。ちなみに、主・補助フロートは春嵐同様。

## マダガスカル島占領

2月10日 マダガスカル付近

第二機動艦隊旗艦大鳳

角田中将

「ウエーク…ダッチハーバー…ハワイ…次はマダガスカルか…」

士官

「どうしましたか、司令？」

角田中将

「ふ、私は島の攻撃に相変わらず縁があるようだ」

士官

「ああ、なるほど」

角田中将

「まあ、曲がりなりに福本達を支援する事になった。あとでケイプタウンにでも寄るか」

士官

「しかし、今彼は元帥ですが？」

角田中将

「あつはつはつは！彼は渋々元帥を授与したんだ。しかも、彼はちやんと年輩者をたてる」

士官

「はあ……」

角田中将

「さて、我々も始めよう。全艦砲戦用意！空母は艦載機を発艦せよ！」

士官

「はー！」

航空戦艦伊勢・日向、軽空母千歳・千代田の艦隊直衛戦闘機が見守る中、攻撃隊が発艦する。

マダガスカル島 フランス軍基地

ウウウウウウ！

『敵機来襲！戦闘機、迎撃急げ！』

滑走路に並んでいたモラヌ・ソルニエMS・406やドヴォワチヌD・520などの戦闘機にパイロットが駆け込む。

しかし、上がったところで攻撃隊の戦闘機烈風や紫電改とぶつかった。

いくらドヴォワチヌD・520がフランス最良の戦闘機でも、飛び上がったところではただのカモである。

しかも、パイロットの質が違う。

場馴れした日本軍パイロットに対し、ひよっこ同然のフランス軍パ



イロツト。

多少の抵抗を見せたものの、バタバタと落ちていった。

味方機がバタバタ落ちていくのを啞然としながら見ていたフランス軍。

そんな事はお構い無しに攻撃隊は軍港や防衛陣地を攻撃した。軍港では停泊している艦艇を攻撃。

仮装巡洋艦他十数隻を撃沈破。

砲台などの防衛陣地にも損害を与えた。

数時間後 マダガスカル島沖 戦艦山城

山城

「ハワイの次はマダガスカル…ふ、福本達とは縁が切れん様だ」

不敵に微笑む侍艦魂山城…だが、周りを一度見回すと懐から一枚の写真を取り出した。

その写真には……着物姿の愛宕。

山城

「…愛宕」

天城

「ふ〜ん、やっぱり撮ってたんだ」

山城

「わあー!!」

いきなり天城が現れた。

山城

「あ、あ、天城か…びっくりさせないでくれ」

天城

「あら、私が生まれた時には『侍士官』なんてあだ名があった山城さんが油断するなんて…」

山城

「つう……」

天城

「もう…福本に愛宕ちゃんの事話すんでしょ？」

山城

「むっ……」

実は山城、昨年の大晦日（あるいは今年の元旦？）に愛宕に告白していた。

最初は愛宕も驚いたが、素直に受け入れてくれた。だが、この事は姉の扶桑によってたちまちハワイ中の艦魂達に知れ渡った。

山城は恥ずかしさの余り弾薬庫に火をつけかけた。これは大和が必死に止めたから事なきを得た。

天城

「まあ、その話はあとね。さっさと仕事を片付けましょう」

山城

「あ、ああ……」

そんな会話をしている内に攻撃命令が出された。

山城

「さて…全砲撃て！！」

ズドーン！ズドーン！ズドーン！ズドーン！ズドーン！ズドーン！ズドーン！ズドーン！ズドーン！ズドーン！

扶桑・山城の砲撃を手始めに第二機動艦隊が一斉砲撃を開始した。

初めて艦砲射撃を受けた8000人のフランス軍はパニックに陥った。

数回の砲撃を終えると直ぐ様、後方の輸送船団が上陸舟艇や揚陸艦が海岸に殺到、上陸を開始した。

部隊は佐藤幸徳中将率いる第31師団2万と池田末男大佐率いる第11戦車連隊である。

空襲と艦砲射撃、強襲上陸に驚いたマダガスカル島守備隊は現地のマダガスカル人兵が大半だった事もあり、あっさりと降伏した。

結局、マダガスカルの主要都市アンタナナリボをその日の内に無血占領。

その後、1週間かけてマダガスカル島内の残敵検索を行った。

こうして、地中海に向かうヨーロッパ派遣艦隊の障害は一応排除された。

その後、マダガスカル島飛行場に対潜哨戒飛行隊を始めとした基地

空が進出した。

## マダガスカル島占領（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## アレキサンドリアにて…1

2月20日 アレキサンドリア

播磨

「砂…砂…砂…砂しかありません」

福本

「さすがエジプト…砂が目立つな」

マリーダ

「今まで両岸が砂なのは初めてね」

アレキサンドリアに寄港し、播磨・マリーダとぶらりと歩く福本。本来ならイギリス軍責任者と先に会うのが筋だが、午後から会う事になっている。

福本

「う〜ん…やっぱりどれだけ上位についても、外を出歩くのは止められない」

播磨

「どこかの王さまじゃないんですから…」

マリーダ

「うふふ…そうね」

市場通りに差し掛かり、人混みを掻き分けながら進む。

その時……

クイクイ

福本

「ん？」

誰かに裾を引っ張られたと思い振り返ると、自分の足元に少年がいた。

マリィダ

「…子供？」

播磨

「…だね」

福本

「ん、どうした？」

福本がしゃがんで聞いてみると、何も言わず指差した。その指差す先を見ると、果物屋がある。

福本

「…なるほどな。マリィダ、播磨。リンゴ食べる？」

マリィダ

「私は良いわよ」

播磨

「右に同じ」

…空気を読んだのか、あるいは物欲…と言うか食欲？…に誘われたか…とにかく少年が指差した果物屋に向かう。

福本

「親父、リンゴ6つ」

「あいよ」

(本来なら英語ですが、面倒臭いので日本語で進めさせて頂きます)  
すると、少年は男に走り寄る。

男は少年の頭を撫でる。

どうやら男と少年は親子のようで、子供に客引きさせてる様だ。

「あなた、日本人かい？」

福本

「ああ、そうだ」

リンゴの入った紙袋を受け取りながら答える。

「あんたら凄いよ！アメリカに勝っちゃうなんてよ！」

いきなり凄いと叫ばれて3人は驚くしかない。



「あんたらロシアに続いてアメリカまで倒しちゃったんだからな！いや〜最初聞いた時はスカツとしたよ！まさにザマア見るだったよ！ありがとうな！」

福本

「…ありがとうございます」

代金を渡し、少年の頭を撫でてやり、親子に手を振って別れた。

その時、福本はなぜあの親父さんがあんな事を言ったのか解った気がした。

エジプトはイギリスの植民地。

この事実だった。

イギリスにいる時、吉田外交官から聞いた話では日本の対米戦勝利（と世界は認識している）は特に欧米の植民地やソ連の脅威が強い小国では日本や第六大陸、タイ王国の様になると日本などに留学する人間が増えている。

また、植民地では独立運動が盛んになりつつある。

これを聞いた福本は吉田外交官に聞いた。

福本

「これは日本…いえ、僕達がやった結果なんでしょうか？」

これに対して吉田外交官はこう答えた。

吉田外交官

「確かにそうです。ですが、これも時代の流れです。歴史に明るいあなたならよく解ると思いますが、日本は唯一欧米諸国と対等の立場に立てたアジアの国です。そんな国と戦えば自然と人種問題が絡

んでくる』

福本

『ならば…ある意味当然の結果…と』

吉田外交官

『ええ…ですから、この戦争は日本が終わらせる必要があるんですよ。新しい世界を担うの一員として…』

…つつい、吉田との会話を思い出す。

播磨

「長官 リンゴ下さ〜い」

福本

「あ、ごめんごめん。はい」

紙袋から1つ取り出し、播磨に渡す。

播磨

「ありがとうございます〜す〜」

受け取ると嬉しそうに一口食べる。

そんな光景を眺めつつ、クスリと笑う福本だった。

次号へ

アレキサンドリアにて…1（後書き）

すみません！

昨日はバイトが忙しく、更新出来ませんでした！

ごめんなさい！

もしかしたら今年最後の更新になるかも……。

ご意見ご感想をお待ちしています。

## アレキサンドリアにて…2（前書き）

新米土官

「読者の皆様、明けましておめでとございます。昨日は昨日分の更新が出来なくて申し訳ございませんでした…」

福本

「昨年はお世話になりました。今年もよろしくお願いいたします」

マリィダ

「去年も色々あったよね。野球で世界一になって、政権交代があつて、新型護衛艦が完成して…」

新米土官

「……小沢が中国・韓国行ったり、社民党は基地問題で騒ぐし、韓国貨物船に護衛艦壊されたり、天皇は無理矢理中国の副首相に会わされたり、その事に小沢は無茶苦茶言つし…」

福本

「あ、あの…暗いですよ」

新米土官

「社民党党首の福島顔見ると、思わず日本から出てけって言いたくなる」

マリィダ

「危ない、危ない」

福本

「鳩ポツポは役立たず、小沢は無茶苦茶の左翼、福島は売国奴……  
経済対策もろくに出来ない……馬鹿ばかり」

福本

「……今年一年、良い事ありますように……」

## アレキサンドリアにて… 2

その日の午後

新沢大尉の運転する車でイギリス軍司令部に向かう福本、マリーダ、そして、宮崎師団長。

宮崎師団長

「イギリス陸軍の指揮官をご存知ですか？」

福本

「ええ。ただ、自分としてはあの数頼みの戦術はどうも…」

宮崎師団長

「確かに：あの消極的な戦法ではイタリア軍には対抗出来るでしょうが、ソ連軍相手には無理でしょうな」

司令部に向かう車の中での2人の会話。  
これはある意味重要な会話であった。

イギリス軍司令部

副官

「閣下。日本軍代表者が来られました」

「うむ、わかった。会議室に通してくれ」

副官

「はい」

返事をする副官は部屋を出ていった。

この閣下と言われた男…バーナード・モントゴメリー大将である。

昨年まで、イタリア相手にアフリカ戦で指揮を採っていた。

そんな時にフランスが日本に宣戦布告、続きイギリス、ドイツ、第六大陸にも宣戦布告を行った。

この為、アフリカ情勢は緊迫しているが、アレキサンドリアに今のところ変化は無い。

モントゴメリー元帥

「まったく…チャーチル閣下の指示だから仕方ないが、東洋の小国に頼るとは……」

会議室

会議室に通された福本、マリダ、宮崎師団長の3人。  
ちなみに新沢は外で車番だ。

福本

「……まだかな？」

堪らず、そう一言呟いた時……

モントゴメリー大将

「いやいや、済まない。遅れてしまった」

そう言って入って来た。

福本

「始めまして、日本海軍元帥の福本大介です」

マリダ

「同じく、日本海軍大将のマリダです」

宮崎師団長

「日本陸軍代表の宮崎繁三郎大将です」

モントゴメリー大将

「そうか…イギリス軍指揮官のモントゴメリーだ。よろしく」

この時、福本には聞こえたが、モントゴメリーは密かに舌打ちをしていた。

何せ相手は日本人、それも若いのに自分とより上の元帥……舌打ちもしたくなる。

しかし、それはそれ。

ここは気にしないでおう。

福本

「よろしく願います。それでは早速であります。今後のイギリス陸軍としての予定をお聞きしたいのですが……」

モントゴメリー大将から聞いた予定では、アメリカ軍と合流後に



地中海の制海・制空権奪取、クレタ島奪還後、イタリアのシチリア島に上陸し奪取、そのままイタリアに攻め込み降伏させる……と言  
うもの。

これに関しては3人共反対はない……イギリス海軍もその方向で動  
くからだ……問題はシチリア島攻略である。

イギリス本国ではシチリア島攻略は決まっているが、誰がどうする  
とも決まっていない。

だが、モントゴメリーの話を知ると、モントゴメリーが主役の  
様に話が進んでいる。

どうやらモントゴメリーは、まだ決まってもいないが自分に都合  
の良い様にもっていくつもりの様だ。

残念ながら、陸は陸戦隊と陸軍の仕事ではある。

しかし……さすがに個人的事情で作戦展開されてはとんでもない事  
になりかねない。

もう少し突っ込んで訊いてみようと思つた時……

バタン

「いや、申し訳ない。日本陸海軍の代表者がこちらにいると聞いて  
来たのだが……」

いきなりドアが開き、男が入って来た。

まさか、この男が波乱を巻き起こす事になるとは……

次号へ

## アレキサンドリアにて…2（後書き）

土曜・日曜は定期通り『士官候補生異世界奮闘記』を更新いたします。  
す。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

## アレキサンドリアにて… 3

その頃……

アレキサンドリア港

士官

「司令。指示通り集めましたか…」

フェルデナント

「ご苦労様。しかし…また、大量に集まりましたね…」

フェルデナントの前には、牽引されて集められた大量の戦車。

フェルデナント

「エンジン故障が多いクルセイダー戦車、捕獲したイタリアのタンケットや戦車……随分と集まりましたがさいはて、福本は何をやらかすのやら…」

アレキサンドリア港に入港して早々、福本から奇妙な命令が下された。

『地元のイギリス軍より鹵獲したイタリア軍タンケットや戦車、故障した戦車を回収せよ』

始め見た時は、おかしな命令だな……程度。

しかし、命令は命令である。

そこで、出来る限り人を出して回収に向かわせた。

すると、案外簡単に出してくれた。

どうやら、イタリア軍戦車は邪魔だった様だ。

それどころか、故障したクルセイダー戦車も簡単に譲ってくれた。ただその時、戦車兵や整備兵は口を揃えてこう言った。

『その十字軍騎士様はいつも機嫌が悪いぞ』

『36時間エンジンが故障せずに動いたら奇跡だよ』

……などなど。

その為、まるで棄て場が見付かった様に日本軍に預けてくれた。確かに理由は解る。

実際、整備兵達の話では、あちこち欠陥だらけだそうだ。

クルセイダー戦車はポーランド戦でボコボコにやられて急いで製作した戦車だから、試験も何もしていない。

だからだろうが……

フェルデナント

「まあ、野口博士のところに持ってって改造させるんだろうな」

まあ、使えない物が曲がりなりにも使える様になるのだから、別に悪くはないのだが…。

フェルデナント

「当分『未来』は忙しいな」

その頃……

イギリス軍司令部

突然入って来た男に4人共注目していた。ただ、福本は直ぐに記憶の中から該当人物を探し出す。

男はアメリカ陸軍の軍服、腰には象牙グリップのピースメーカー（拳銃）。

そして、顔の特徴から出てきた1人の人物。

しかし、答えは本人が出した。

「アメリカ・ヨーロッパ派遣軍中将ジョージ・S・パットン中将であります！」

…なるほど、覚えている訳だ。

イギリスにいる時、陸軍派遣部隊の上級指揮官の名前と顔を覚えておこうと、アメリカから資料を回してもらったのが役に立ったらしい。

福本

「初めまして、日本海軍ヨーロッパ派遣艦隊司令兼海軍代表の福本大介元帥であります！」

ならば負けじと福本も挨拶する。

パットンは一瞬驚いたが、ニヤリと笑った。

パットン中将

「よろしくな」

福本

「はい」

福本

「ふうっ…」

イギリス軍のモンテゴメリー元帥とパットン中将への挨拶を終えて  
帰る車内。

一時ヒヤリとする場面があり、必死に場を収めた。

宮崎師団長

「…あのパットンと言う男…中々やりそうだな」

福本

「ええ、彼は第一次世界大戦では戦車隊隊長として参戦しておりま  
すから」

マリーダ

「あら、そつなの？」

福本

「ああ、だから戦車の扱いは上手いと思うよ」

次号へ

アレキサンドリアにて… 3 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

特別編 年が明けたので…（前書き）

新米土官

「読者の皆様、先週は本当に申し訳ございませんでした！！この特別編執筆の為、全然更新出来ませんでした！すみません！！」

福本

「まあまあ…だからって桜花に乗り込まないで下さい」

桜花（史実の特攻ロケット）型に乗りうつする新米土官。

新米土官

「やっぱりダメか…」

福本

「ダメに決まってるでしょう。では、どうぞ！」



特別編 年が明けたので…

新米士官仮想世界

作者の世界でも年が明けた為、初詣に来た第七艦隊の面々。

神童

「皆さん。ちゃんと順番守って下さいよ」

女性陣

「……………はい！」  
「……………」

遠地

「朝から女性陣は元気でよろしいな」

新沢

「みんな振り袖ですから……仮想世界ゆえ出来る事でしょうが」

沖田

「しかし、初詣が作者の仮想世界と言うのは…いいんですかね？」

福田

「別にいいんじゃないの。作者が決める事だから」

千歳

「あれ？福本君とマリーダは？」

ヴィル

「設定の関係で先に初詣を済ませましたよ」

遠地

「なんだよ、つまんね」

海龍

「何が？」

巫女さん衣装を着た海龍登場。

福田

「なんだ、海龍。神童や神波を手伝ってるのか？」

遠地

「こいつの事だ。巫女さん衣装や振り袖姿を撮影出来るとかの交換条件付きだろ」

海龍

「よくわかったわね！」

沖田

「だいたい解るよ」

長年の付き合いだ、解らない訳が無い。

遠地

「しかし…いったい何で早めに参拝したんだ？」

その頃……

ある温泉旅館

福本

「ふうっ……」

先に初詣を終えた福本は宿泊している旅館の温泉に入っていた。作者の意気な計らい（？）で朝風呂と洒落込んでいる。

福本

「しかし……いったい何でこうなったんだ？」

キャリアが早く参拝したのは温泉の為だろう……ネルソンは偶々だろう……じゃあ、作者の企み？

福本

「……馬鹿らしい」

せっかくゆっくり出来る時に頭使うのもアホらしい。

キャリア

「やっぱり温泉はいいよね」

マリーダ

「そうね」

ネルソン

「そうだな」

福本

「ぶつぐが!?!?!」

いきなりの3人の声に驚いた。

だって、ここ、男湯の筈じゃあ……

まさか…作者の小細工に騙された?! (おい!)

福本

「ま、マリーダ!?!」

マリーダ

「あ、大介。居たの?」

この時程湯煙があつたのを感じする事は無いだろ。  
見えてたら殺されていたから……

福本

「いや……居たのって…ここ男湯じゃあ……」

マリーダ

「あれ?聞いて無いの?脱衣場は分けてあるけど、温泉は仕切りが無いのよ」

福本

「…聞いて無いわ!?!」

ネルソン

「まあ、別に良いではないか。昔は混浴だったそうだし……」

福本

「それは江戸時代の話です！」

何だか頭が痛くなりそうな状態である。

福本

「まったく…作者の野郎」

適当に背を預け、湯に浸かる福本。

ふと、上を見ると何かがキラリと光った。

福本

「ん……流れ星…じゃあ無いよな」

ヒュユユユユユウ……………

ズガーン！！

マリダ

「な、なに?!」

福本

「…………波乱の始まりか」

温泉から直ぐ上がり、脱衣場に戻り急いで服を着た。

新米士官

「あゝあ…大丈夫ですか？要塞好きさん？」

要塞好き

「い、イエス……」

新米士官

「……出来れば普通に来て頂きたいんですけどね」

そう言いながら、要塞好きに肩を貸す新米士官。

今やクレーターになった着弾地から要塞好きを引きずり出す。

福本

「おお、作者。要塞好きさんも……また派手にやりましたね」

要塞好き

「それでも無事だぞ」

福本

「……頑丈なのは知ってます」

マリーダ

「大介！」

キャリー

「要塞好きさん発見……！」

ネルソン

「戦闘用意……！」

要塞好き

「おお！希望通りの振り袖姿！ネルソンさんも……！」

福本

「ヤバっ！ふ、伏せろ！！」

新米士官

「…マジですか」

慌て要塞好きから離れる新米士官。

要塞好き

「へえ??？」

3人

「『喰らえ！乙女のトリプル飛び蹴り！！』」「『

ゲシヤヤヤヤヤ！！

要塞好き

「ブゲラ！！！！」

ズシヤヤヤヤヤ！！

ゴワワワワワン！！

………何故か要塞好き爆発。

3人

「『正義は勝つ！！』」「『

新米士官

「…どうしたの？」

福本

「せつかくの温泉を邪魔されたから」

新米士官

「……キャリーが股間蹴つてたぞ」

福本

「……まあ、気絶していますから……大丈夫でしょう」

新米士官

「……大丈夫じゃないだろう」

温泉旅館

カーン！カーン！カーン！カーン！……

マチルダ

「はあ！」

里香

「せい！」

卓球台で激しく打ち合うマチルダと1式軽駆逐戦車の車魂里香。

大沢

「飽きないね〜…2人とも」



識名

「初詣に帰って早々だからね……f (^ ^ ;」

福本長官の後に続いて面々より先に初詣をした、マチルダ・里香・大沢・識名。大沢と識名が初詣が終わって振り向くと、既に卓球台に向かつて全力疾走するマチルダ・里香の姿。

大沢と識名が卓球台に行くと激しく打ち合うマチルダと里香が居た。

福本

「こつちも派手にやってるな」

大沢

「あ、長官！」

福本

「この音響じゃあ外の音なんか聞こえ無いよな……」

識名

「へえ？」

新米士官

「おゝい、誰か手伝え〜」

要塞好きを背負って来た新米士官が呼ぶ。

大沢

「あれ？要塞好きさん？」

福本

「ほら、ネルソンさんのサインを取りに来たんだ……人間大砲で」

識名

「あ、そのソフアーに……」

新米士官

「了解」

マリータ

「もう、最悪」

ネルソン

「仕切り直しにもう一回入ってくるか」

キャリー

「賛成」

福本

「……お前らな……最悪なのは要塞好きさんの方だぞ……」

後で要塞好きさんに謝罪しておこう……人として。

要塞好き

「復活……!」

新米士官

「早……!」

大沢

「……時々、この人は人間?と疑いたくなってくるんですけど……」

識名

「…き、気にしない方がいいよ…」

新米士官

「え〜と、では、こちらがネルソンさんのサインです」

要塞好き

「いやいや、どうも、ありがとうございます」

福本

「…次は普通に来てくださいね」

未だに、マチルダと里香の白熱した打ち合いの音が響く中、目的の物を渡す作者。

しかし、話がこんな所で終わる訳が無い！

神谷

「ちよ、長官、長官、長官長か〜ん！！」

福本

「なんだ、神谷？伊東先生の大和が攻めて来たか？零戦先生の翡翠か？それとも両方か？」

あの2人にとっては今なんか最大のチャンスだろう。（ハアハアするの…）

神谷

「違います！蟻です、蟻！」

大沢

「蟻??蟻つてあの蟻ですか？」

神谷

「その蟻よ！ただ、人並みに大きい蟻の集団がこちらに接近中!!！」

福本

「……………そんな大きい蟻がこの世界にいる？」

新米士官

「居たらこんな休養地が作れるか」

識名

「なら、今物凄く怪しいのは……………」

全員の視線が要塞好きに集中する。

要塞好き

「……………俺？」

福本

「ほら……………前回の禿鷹ヤーボの事があるし……………」

新米士官

「…いや、そんなまさか……………」

ドガシャーン!!

マチルダ

「な、なんですか?!?!」

里香

「爆発事故でもおきたか?!」

やっと止まった2人が叫ぶ。

新米士官

「……なあ、音の方向からして露天風呂の方だけど……」

福本

「…しまった!!急げ!!」

福本

「マリーダ!無事か?!」

マリーダ

「大介!!」

男の脱衣場から入った福本達。

福本が誰何すると、浴衣姿のマリーダが抱き付く。

マリーダ

「お風呂からあがって、着替えてたら音がして…見たら大きな蟻が…」

福本

「ちっ、思った通りだ…ネルソンさん!キャリー!無事ですか!」

ネルソン

「無事だ！」

キャリー

「な、なんとか…」

ネルソンは悠然と、キャリーは腰を抜かしたのか、へたりと座っていた。

ダーン！ダーン！

ネルソン

「く、拳銃は効かないか」

要塞好き

「げ！あれは庶民アリ！」

大沢

「何ですか、それ?!」

要塞好き

「人間を捕まえて、巢に持ってて粘液で保存しちゃう最悪のアリだ！」

新米士官

「保存?!人間を食料にしてんのかよ！」

福本

「なら、これでどうだ！」

バーン！バーン！

福本の愛銃、モーゼル大型拳銃が火を吹く！  
発射した二発は見事に庶民アりに命中。  
だが、多少弱った様だが、効果は薄い。

マチルダ

「福本長官！退いて下さい！」

この叫びに、福本は直ぐ様左に飛び退く。

ドン！ドン！

重い発射音…吹き飛ばすアリ…。

いつの間に具体化したのか、97式自動砲（対戦車ライフル）を構えていた。

神谷

「先走ったアリの最後…ですね」

福本

「さて、要塞好きさんが知ってるって事はあれは要塞好きさんの世界の物って訳ですね」

要塞好き

「……多分」

新米士官

「まあ、人間大砲で開いた穴に入り込んだらうな」

微妙に殺気のある視線（特に女性陣）が要塞好きに注がれる。

要塞好き

「すみませんでした!!」

土下座で謝罪する要塞好き。

福本

「謝罪は後にしましょう。今は害虫駆除を優勢します。マリダ！」

マリダ

「了解！神谷、大沢君、キャリー、マチルダ、里香、識名。皆を呼び戻すわよ！」

6人

「……はい!」

新米士官

「要塞好きさん、知ってる事は出来るだけ全部喋ってくださいね」

要塞好き

「……はい」

1時間半後……

戦艦播磨

遠地



「初仕事が害虫退治かよ」

福本

「仕方無いだろう。それとも、アリの餌になるか？」

遠地

「…………絶対嫌だ」

福本

「だろう？」

神谷

「長官。全艦砲戦準備完了しました」

ミア

「全機攻撃準備完了しました」

福田

「陸戦隊準備完了しました」

マリダ

「じゃあ、殺っちゃいましょう！」

福本

「……………」

遠地

「……………う、撃ち方始め！」

ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！



「さすがに、それは……設定がおかしくなりますよ」

陸戦隊兵

「着弾来ます！」

ヒューウ……………

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！  
ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！  
ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！  
ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！  
ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！

石田

「さすが艦砲射撃……………いくら何でもアリは吹き飛んだでしょう」

フェルデナント

「さて、どうかな。観測機、どうだ？」

観測機搭乗員

『……………やはり、何匹か抜けました』

陸戦隊兵

「味方機飛来！空襲開始します！」

戦艦播磨

マリーダ

「艦砲射撃、航空攻撃……富嶽の掃射機型まで投入したわ」

神谷

「それでも、全滅するどころか、逆に増えています」

福本

「やっぱり、民衆アリと兵士アリは殺せるが、後ろの女帝アリを殺らないと焼け石に水か……」

新沢

「何せ、人間を餌にした女帝アリが民衆アリと兵士アリを無数に生むんですからね……しかも、8メートルとゆうビックサイズ」

遠地

「さつきから女帝アリに当ててるが、怯んだ様子もないぞ」

播磨

「二発当たりましたがこれといって変化は……」

福本

「陸戦隊は？」

神谷

「もうそろそろ、撃ち合いになるかと……」

福本

「うーん、やっぱり、あの女帝アリだな……」

マリーダ

「……ところで、作者は？」

千歳

「さあ？」

神谷

「あ、その作者さんから通話です。一番でございぞ。」

福本

「お、そうかい。はい、こちら福本？」

新米士官

『おし、やっと繋がった』

福本

「何してるんですか！？今、アリと陸戦隊が撃ち合ってた時に？」

新米士官

『俺だって遊んでた訳じゃないぞ！』

ネルソン

『はあ…どけ！あゝ、あゝ、マイクテスト中…』

福本

「……………切りますよ」

ネルソン

『ああ、すまん。こちらは今列車砲の準備をしている。観測データと、足止めを要請する』

福本

「列車砲……？」

遠地

「…お前、列車砲の事知ってるよな？」

福本

「当たり前だ。俺が聞きたいのは、何を使うかだ！」

ネルソン

『いや…私も良く知らないがドイツが史実で使用した80cm列車砲だとかで…』

福本

「…すみません。聞き間違いですよね？80cmがどうだとかってのは？」

新米士官

『いや、聞き間違いじゃあ無いぞ。ドイツが開発した人類最大の大砲、80cm列車砲『グスタフ』・『ドーラ』の2門！』

福本

「…あ、わかりました。とにかく、足止めと観測データを送ります」

そう言いつと通信を切る。

遠地

「80cm砲なんぞ…ヒトラーぐらいしか作らんだろっ」

福本

「まあ、戦艦の大砲で殺れ無いなら、化け物列車砲ぐらいしか殺れんだろう」

神谷

「では、陸戦隊に連絡します」

その頃陸地では……

フェルデナント

「撃てー！ー！」

ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！  
ダダダダダダダダダダダダダダダ！

ダダダダダダダダダダ！

ドドドドド！ドドドドド！ドーン！ドーン！ドーン！ドーン！……

小銃、重軽機関銃、各種大砲、噴進砲等々…ありとあらゆる火器が  
アリに向かい放たれる。

民衆アリには小銃は効いていた。

だが、兵士アリには戦車砲や爆弾しか効いていない。それどころか、  
前に置いていた鋼鉄のバリケードを噛み砕く始末だ。

石田

「なんか…アメリカ版ゴジラを見てる様な気が…」

要塞好き

「え、ゴジラ？」

先程からAK47を乱射している要塞好きが弾倉を交換していた。

石田

「ほら、色んな火器を持って来ても倒せなくて、結局橋のケーブルに絡ませてからミサイル撃ち込んで死んだあのゴジラですよ」

フェルデナント

「……………その何がこの状態に似ていると？」

石田

「ほら、何もして無いのに卵産んでたじゃ無いですか」

大沢

「ああ…そうでしたね」

フェルデナント

「……………あの女帝アリはゴジラですか…はあ…」

溜め息を吐きながら、M1ガーランド……………どこで手に入れたんだよ……………に新しい弾を装填する。

マチルダ

「司令。福本長官からです。女帝アリを列車砲で殺るから雑魚は任せたと」

フェルデナント

「列車砲？普通クラスの列車砲ではあの女帝アリは殺せないのに…」

石田

「作者の事ですから、何かとてつもない物を持ってきたのでは？」



フェルデナント

「期待するしかありませんね。早くして頂かないと兵士アリの酸な  
んか掛かりたくありませんから」

そう言いながら、アリに向け一発撃った。

その頃……

新米士官

「よし、グスタフ！ドローラ！用意！！」

後ろで80cm砲を微調整し、観測機のデータをパソコンにかけて  
正確な座標を弾き出す。

ネルソン

「発射用意完了！総員退避！！」

わらわらと退避壕に飛び込む要員。

新米士官

「わっはっはっは！女帝アリ！いくら戦艦の主砲は効かなくても、  
人類最強の大砲には敵うまい！なぜなら！こいつはあるロシア要塞  
の地下弾薬庫を撃ち抜いた大砲なのだからな！！」

ネルソン

「いくぞ！ファイヤ！！」

ドゴーン！ドゴーン！

発射ボタンを預かっていたネルソンがボタン押した瞬間、物凄い轟音が響きわたった。

石田

「撃ちましたね」

轟音に気付いた石田が呟く。

しかし、フェルデナントは一度顎手をあて……直ぐ様ハツとなった。

フェルデナント

「しまった！総員伏せる！！塹壕に入れ！！」

この命令に訳が解らないながらも陸戦隊兵達は塹壕に飛び込む。

そして、全員が入った瞬間……

ゴワーン！ゴワーン！

着弾と同時に衝撃波が民衆アリや兵士アリを襲う。

もちろん、陸戦隊兵達にも襲ってきたが、塹壕に隠れていたから大丈夫だった。

『列車砲からの砲撃……着弾しました……』

福本

「アリは…特に女帝アリはどうなった？」

『待つて下さい…今から確認します』

艦橋に居た全員が、次に発する無線の声を待つていた。  
80cm砲でダメなら、陸戦隊も自分達も終わりである。

『あ…や…やりました！8メートルの女帝アリ確認出来ません！ただ、デカイ足や何やらは見えますが……』

福本

「そつか！他のアリはどうだ？」

『着弾時の衝撃波などで吹き飛ばされた様でピクリとも動いていません』

福本

「うむ、わかった。陸戦隊に命じて、残りのアリを駆除してくれ」

マリーダ

「了解」

要塞好き

「本当にすみませんでした！」

福本

「もう良いですよ。それどころか、ちゃんとしたおもてなしも出来なくて、申し訳ありません」

要塞好き

「いやいや、帰りは富嶽に送って貰えるだけで十分です」

新米士官

「また、人間大砲で何かあったら大変なんで…」

福本

「…余計ですよ」

富嶽

「要塞好きさ〜ん！行きますよ〜」

要塞好き

「それでは！また今度！」

新米士官

「今年もよろしくお願いいたします！」

次号へ

特別編 年が明けたので…（後書き）

新米士官

「要塞好きさん、もしおかしくなってたら申し訳ございません」

福本

「まあ、大丈夫ですよ。ご意見ご感想をお待ちしております」

## クレタ島奪還作戦 1

2月23日 クレタ島付近

戦艦ワルキューレ

福田

「うゝゝん……」

アルファーニ

「どうしました？」

福田

「いやな…日本海軍が地中海に来るのは二回目なんだよな」

アルファーニ

「へえゝ、それは知りませでした！ちなみに一回目は？」

福田

「第一次大戦の時に、イギリスの要請で巡洋艦と駆逐艦で編成した派遣艦隊を送った事がある。派遣艦隊は主に船団護衛で活躍したんだ……まあ、犠牲も多かったけどね」

アルファーニ

「……すみませんでした」

福田

「謝る事はないよ。ま、本来ならマルタ島の戦没者の碑に行きたい

ところだが……先にトルコだな」

アルファアーニ

「そう言えば、トルコのボスポラス海峡攻略は何時になるんですか？」

この言葉に福田は驚く。

福田

「…その話、いったいどこから出た？」

アルファアーニ

「いえ…一部のイギリス海軍関係者の言い様なので…」

福田

「そうか…ボスポラス海峡なんぞ、トルコに何かあれば簡単に手に入るのに…」

アルファアーニ

「トルコの事が解るんですか？」

福田

「まあ、トルコとは日露戦争後からの友好国だからね」

アルファアーニ

「へえ……しかし、どんな経過で？」

福田

「日露戦争の数年前だったかな？和歌山県の沖合いでトルコ海軍駆逐艦エルトゥール号が遭難沈没したんだよ。で、近くの漁村がその

乗組員を救助・治療に死体の埋葬までやったんだ」

アルファアーニ

「それは一度聞いた事があります。『エルトウール号遭難事件』です  
すね」

福田

「ああ。救助された乗組員は日本海軍が責任をもってトルコに送り  
届けた。そして、日露戦争さ」

アルファアーニ

「日露戦争は自らを助けた国日本が勝利した……悲劇がきっかけだ  
つたんですね」

福田

「トルコがロシアの南下政策で難儀していた事もある。だけど、あ  
の勝利がなかったらトルコは日本と友好だったかな……」

ふと周りを見ると、艦橋にいる全員が福田の話に聞き耳を立ててい  
た。

福田

「聞き耳を立てるのは構わないけど、しっかり職務はこなせよ」

この言葉に全員がハッと職務に戻る。

アルファアーニ

「あ、すみません」

福田



「いいさ。先輩の受け売り話を聞く奴なんてそんなにいないし」

こんな和やかで陽気な空気もあつという間に吹き飛ばす。

士官

「司令！艦長！レーダーに敵影を多数探知！」

福田

「来たか！昨日ソ連に宣戦布告しといたからな！全艦対空戦闘用意  
！」

アルファーニ

「対空戦闘用意！地中海からの反撃はこの一戦にあり！！」

サブム艦隊＋第七艦隊からの派遣部隊……遠龍・陣龍に勝鷹・出雲、第十一戦隊及び第十二水雷戦隊。

クレタ島攻略に向かう艦隊は今のところ変化はない。そんな中、穏やかな地中海の海を陣龍はコンビを組む遠龍と共に進む。

空母陣龍飛行甲板

クリスは飛行甲板を歩いていた。

飛行甲板には彼女が乗る戦闘機……新たに配備された戦闘機『陣風』が置かれていた。

陣風は史実でも開発された局地戦闘機で、結局エンジン開発が遅れ開発中止になったが、この世界では違う。

因みにデータは……

|      |                                           |
|------|-------------------------------------------|
| 全長   | 10,12 m                                   |
| 全幅   | 12,50 m                                   |
| 全高   | 4,13 m                                    |
| 最大重量 | 4373 kg                                   |
| 最高速度 | 685 km/h                                  |
| エンジン | 中島『隼』12型空冷発動機(2300馬力)×1航続距離 2300 km(増槽付き) |

#### 武装

30 mm機銃×2(250発×2)  
20 mm機銃×4(400発×4)

3式航空機用噴進弾×12発

乗員 1名

……と言うもの。

これを艦上機型に改修した物が、陣龍と出雲に搭載されている。

クリス

「うっっん……」

背伸びする彼女の後ろで、同じく甲板で待機する陣風のパイロット達。

日本人もいれば、ポーランド人やフィンランド人などが喋っている。それも男性だけでなく女性もその輪に加わっている。

エセックス  
陣龍

「クリス〜」

クリス

「あ、エセックス」

同国人だからこそ仲が良い2人。  
だが……

『レーダーに敵影多数！総員対空戦闘用意！』

クリス

「いきなりね。じゃあ、エセックス。行ってくるわ」

エセックス  
陣龍

「気よつけてよ！」

航空戦艦出雲

防空指揮所に陣取った出雲。アーカンソー

出雲に搭載されていた陣風は直ぐに上空に駆け上がる。

その素早さに感心しつつ、直ぐに前を見据える。

僅か半年程で自分はアメリカ戦艦アーカンソーから、日本の航空戦艦出雲に変わった。

12門の30cm砲も今や前部の36cm砲6門だけである。  
空いた後部のスペースはV字の飛行甲板になっている。

珊瑚海海戦では奮闘……いや、余りの性能差にスタボロに負けた。次々と妹達が沈む中、自分は何も出来なかった。そして、最後には艦長の判断で降伏……鹵獲された。その後、トラックで応急修理のしたが……担当した三原の話では、使え無いから溶かして新造艦の材料にしようとも意見が出たらしい。しかし、その意見に真っ向から反対した福本だった。

『溶かして、材料にする？ぶさげるな！そんな時間の掛かれ事がやれるか！』

そんな事をするより、旅順軍港に回航して改装する方が安上がりだ！対米戦は今年中に決着を付ける！

なら次はソ連……ヨーロッパだ！

日本の足の長い航空機は大いに役に立つ！

空母でも、航空戦艦でも良いから改装しろ！』

多少無茶苦茶な言い種だったが、これは正式にアーカンソーを自分が預かる事を言っていた。

結局、アーカンソーは旅順に回航され航空戦艦に改装される事になった。

アーカンソー  
出雲

「ぶ、ならば、やれる事をやるまでだ！」

そう言うと、勢い良くサーベルを抜く出雲。

剣先は……もちろん敵攻撃隊に向ける。

すでに三式弾を装填した主砲は敵に向いている。

いや、出雲だけでは無い。ワルキューレ以下サブールム海軍艦艇、美濃・飛騨・箱根以下日本海軍艦艇は向けれる火器を敵攻撃隊に向ける。

しかし、まだ撃たない。

敵は大編隊、一斉に撃たないと敵は撃退出来ない。

アーカンソー  
出雲

「まだまだ……まだまだ……」

人も艦魂もはやる気持ちを抑え、必死に引き付ける。そして……

福田

「全砲撃ち方始め!!」

アーカンソー

「いくぞ!ファイヤ!!」

次号へ

クレタ島奪還作戦 1 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

## クレタ島奪還作戦 2

接近する敵艦隊。

前日、生意気にも宣戦布告してきた日本とその傀儡国家（第六大陸）

敵機の迎撃も無く、あと30kmで攻撃出来る……と誰もが思った瞬間、それはおきた。

一番前を進んでいた戦艦が主砲を発射した途端、周りにいた戦艦が一斉に主砲を発射した。

そして……

チカッ！

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガン！！

多少違うが何時もの通り。そう、紫電改に乗る杉田は思った。

直衛隊は前で迎撃し、接近したら三式弾・高角砲・機銃で迎え討つ。しかし、今回はあえて迎撃せず、三式弾による砲撃を先に行った。

そして……案の定である。三式弾を知らないソ連軍機は自ら三式弾に突っ込む形になった。

炸裂する三式弾……モロに喰らい落ちるソ連軍機……バラけた編隊。それを見逃さなかった。

ソ連軍編隊より上空で待機していた烈風や陣風・紫電改が一斉に急降下で襲い掛かった。

杉田

「行くぞ！紫音！」

紫音

「ああ！ソ連機、我が双刀を受けてみよ！」

いきなりの襲撃にソ連軍の戦闘機ラボーチキンLaGG-3も挑み掛かるが、編隊もバラバラで、奇襲に近い襲われかたをしたのだから、態勢が立て直せ無い。

しかも、ヨーロッパの機体に多い航続距離の短さがあった。

ラボーチキンLaGG-3は1100kmと長いが2000km飛べる日本機と比べて戦闘時間は短い。

しかも、慣れない海上飛行が祟って後手に回っている。

それに、危険度の高い満ソ国境やポーランド方面にベテランを引き抜いた為、全体的練度も低く、やっと飛べる様なパイロットが配属されている始末だ。

これに一度は実戦を経験したパイロットが多い第七艦隊とサブールム艦隊の前では赤子の手を捻る様なものだ。

しかも、そうこうしてる内に護衛目標である攻撃隊が大変な事になっていった。

ツポレフSB-1が高速爆撃機だったのは今や昔、あちこちで叩きのめされ、イリュージンIL-4は雷撃も出来る機体だが、戦闘の護衛が無いなら只の力毛である。

ペトリアコフPe-2は急降下爆撃を仕掛け様としたが、烈風や陣風・紫電改に阻まれる。

しかし、戦闘機の妨害を潜り抜けた機体も無事では無い。

戦艦を始めとした対空弾幕である。

史実のアメリカ艦艇並み……いやそれ以上か……の対空弾幕は近づくソ連軍機を叩き落とす。



パイロットにしてみれば、今まで浴びた事の無い対空弾幕には腰が引ける。  
なんとか雷撃を勇行したイリュージンイー-4であったが陸攻や艦攻の低空雷撃に比べれば高空である。

士官

「敵陸攻接近！」

福田

「敵は艦艇攻撃に慣れていない！腰を据えて対応すれば何の事はないぞー！」

アルファーニ

「は！対空火器、落ち着いて撃て！」

ダダダダダダダダダダ！タン！タン！タン！タン！ドン！ドン！ドン！  
ドン！ドン！

各艦の落ち着いた対応は余計にソ連軍機の攻撃を阻む。

水兵

「敵機急降下！」

その報告に直ぐに急降下するイリュージンイー-4を見る。

白河

「ふん、あんなのが急降下？60度は確かに急降下ね」

富田

「まあ…日本海軍の急降下に比べれば緩降下だけどね」

白河

「そうね。対空砲！撃ち落とせ！」

ドン！ドン！ドン！ドン！タン！タン！タン！タン！タン！タン！  
ダダダダダ！シュパパパパパパパン！

カチッ

ヒュユユユウ……

ザバーン！ザバーン！

ガガガガ…ガガガガ！

ゴワーン！

弾幕を張る対空火器、盛大な煙を吹く噴進砲、投下される爆撃、被弾し墜落する攻撃機……。  
対空戦は熾烈を極める。

40分後……

急降下爆撃を勇行したイリュージンイー-4が帰り際に撃墜され対空戦は終わった。日本艦艇、サブールム艦艇共に被害は無い。  
次々と迎撃を終え、着艦する烈風・陣風・紫電改。

そんな中、前部・中部や側面エレベーターがフル回転で彗星や流星を飛行甲板に上げる。  
クレタ島奪還作戦は始まったばかりだ。

次号へ

クレタ島奪還作戦 2 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

### クレタ島奪還作戦 3

クレタ島ソ連軍飛行場

戻って来た機体を見た基地要員は啞然とした。  
出撃前より数が少なく、戻って来た機体の殆どが損傷していた。  
無事着陸する機も有るが、着陸に失敗する機も出てくる。  
飛行場はてんやわんやの大騒ぎだ。  
無事な機体そつちのけで着陸に失敗した機体からパイロットや搭乗員を引きずり出す。  
やっと全員を引き出した時……

「て、て、て、敵機だー!!」

見張りの兵が大声を張り上げる。  
基地要員も、パイロットも、搭乗員も慌てて避難する。

「何をしている！迎撃しろ！ヤポンスキーを撃ち落とせ!!」

政治将校が叫ぶが誰も聞かない。  
だいたい、燃料も無い戦闘機で日本機と戦うなんぞ馬鹿げている。  
それに……誰が政治将校の命令を聞くものか……。

クリス

「送り狼で奇襲ね…これは」

攻撃して来た攻撃隊を彩雲で追跡し、その後を攻撃隊が追い掛ける。敵の飛行場の位置はそうすれば解るし、敵情も解りやすい。そして、案の定敵は迎撃準備が整っていないところを襲えた。

クリス

「全機、掛かれー！」

一斉に降下する戦闘機隊。狙うは地上に置いてある機体と基地施設。対空砲火も無く完全にやりたい放題である。ふと見ると、1人の男が何かを叫んでいる。

クリス

「あれが噂の政治将校ね」

艦隊の中にいるノモンハン事件で撃墜され亡命したロシア人パイロットから何度も聞いた悪名高い政治将校である。まあ、どうせ、撃墜しろ！と言っているのだろうが…。

シュパパパン！

ドガガガガガガン！

駐機していた機体が爆発し、滑走路に穴を穿つ。ロケット弾の爆発で飛行場が煙に包まれる。

クリス

「さて、監視は彩雲に任せて、引き上げるわよ」

戦艦ワルキューレ

アルファアーニ

「そうか、わかった。ありがとう」

そう言うと無線を置く。

アルファアーニ

「福田司令。事前情報通り、レロス島他魚雷艇基地とおぼしき箇所の攻撃は成功しました」

福田

「そうか。こつちも飛行場攻撃は成功したよ。まあ、ロケット弾は触発式信管だから、穴を穿った程度だと思うけど」

アルファアーニ

「ですが、上陸部隊に対する危険度は低くなりました。後は潜水艦に注意するだけです」

福田

「いや、ギリシャ方面の飛行場から応援が飛来する可能性もある。まあ、どっちにしる、後数時間でクレタ島に上陸さえしてしまえば良い話だ」

そう言って時計を見るとちょうど12時。  
空襲から2時間程経過している。

福田

「さて、頃合いも頃合いだし、腹ごしらえでもするか」

アルファーニ

「そうですね。腹が減っては戦は出来ぬ…と、申しますから」

福田

「よし、決まりだ。誰か、食堂までひとつ走り行って来て来れ」

次号へ



クレタ島奪還作戦 3 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

クレタ島奪還作戦 4（前書き）

新米士官

「読者の皆様、申し訳ございません」

福本

「今度は何ですか？」

新米士官

「いや、自らの不徳と言っか……とにかく、大学の課題やテストで更新速度が低下いたします」

福本

「はあ……ちゃんとして下さいよ？レポートとかあるんでしょっつ？」

新米士官

「あははは……その通りです……」

## クレタ島奪還作戦 4

揚陸艦の一隻

第57戦車連隊もこの作戦に参加していた。

クレタ島の陸上兵力は一個大隊程度（基地要員・パイロットなどを除く）との情報だ。

しかし、やはり戦車の援護があつて歩兵も働けると言う事で、長野連隊から二個中隊を引き抜き、長野が直接指揮を執る事になった。

長野

「ふっ…」

ヒョイ

パク

揚陸艦の上甲板で暇を持て余す長野。

いつも持っている金平糖袋から一個をつまみ口に放り込む。  
実は長野は甘い物好きだ。

「長野さん。下さいな」

長野

「ん？ 葵か。ほら」

そう言つて、少女に金平糖を渡す。  
この葵と呼ばれた少女は、今回初陣の1式重偵察装甲車の車魂、葵である。

葵

「ありがとう」

長野

「まったく……甘い物が好きだな」

あ、長野は車魂は見えます。

艦魂・飛魂は見えませんが……。

葵

「けどさ、私を一個中隊も連れて来て良かったの？」

長野

「仕方無いよ。クレタ島は狭くて、戦車よりも小回りの効く装甲車とかがいいんだよ」

葵

「そうなんだ……大型過ぎるのも大変なんだね」

長野

「そう言う事」

まあ……その前にこの装甲車の開発を命じたのは福本元帥らしい。  
今や日本陸海軍で使用されている戦車の殆どが、福本元帥が案を出し、海軍お抱えである野口博士が開発させた物ばかりだ。

まあ、元帥が博士を知っているのは、山本元帥の事務官時代にアポ無し面会で来た野口博士を覚えていたかららしいが……。しかし、海軍士官の彼がどうゆう経緯で戦車に興味を持ったのだろうか？

長野

「ふっ…どうでも良いか」

どうゆう経緯にしる、アメリカの重戦車さえも互角以上に戦える戦車を開発させてもらったのだ。

それで戦うのだから、どうでも良い話だ。

数時間後……

クレタ島のある港街

それはソ連軍にとっては突然の出来事であった。

数名のソ連兵が港を警戒していた時、4隻の揚陸艦が接近して来た。ただ、ソ連兵は揚陸艦なんて艦種は知らない。

しかし、その船が敵である事はわかった。

だが、ソ連兵は通報する事は出来なかった。

いきなり、一番前の揚陸艦から多数銃火が彼らを襲った。

実は揚陸艦の上甲板には完全武装の日本兵一個小隊が待機しており、ソ連兵に向けて撃ちまくったのは彼らだ。

そのまま、誰の邪魔も無く揚陸艦は港に入り、適当なところでランプを降ろす。



しかし、イギリスやドイツは現象維持に必死で祖国奪還は夢のまた夢と思われた。

だが、アメリカに勝利し、ヨーロッパにやって来た日本海軍の福本元帥からクレタ島奪還作戦が提案され、地元慣れたギリシャ兵の派遣を打診された。

これに対し、ギリシャ亡命政府は一個中隊を派遣した。

日露・ノモンハンでソ連の大軍を叩きのめし、アメリカ相手に10ヶ月で勝利した日本……ギリシャ亡命政府は日本に祖国奪還を賭けたのだ。

とにかく、勢いがあるギリシャ兵は戦車や装甲車の援護を受けつつ、着実にソ連軍を制圧していた。

しかも、一個大隊程度の戦力のソ連軍も島中に散らばり、この街には僅か一個小隊しか展開していない。たちまちソ連軍一個小隊も沈黙した。

翌日、ソ連軍も兵力を集め反撃に掛かった。

しかし、集まったのは僅か二個中隊。

砲は76mm野砲二門、装甲車両も機銃しか載せていない僅かなタンケットだけ。

戦車や57mm60口径砲を搭載している1式重偵察装甲車にはどう考えても対抗出来ない。

しかも、制空権は連合軍に握られ、日本・第六大陸ヨーロッパ派遣艦隊の主隊も到着。

大量の空母機を使い、クレタ島に向かうソ連軍機を片っ端から叩き落とした。

そんな、相手が絶対的有利なところに突っ込んだソ連軍クレタ島守備隊は日本・ギリシャ軍の防衛線に阻まれ、大出血を強いられた。

これを機にクレタ島守備隊は鳴りを潜め、一週間掛けて日本・ギリ

シャ軍は残敵を掃討。  
クレタ島は再び連合軍の手に渡った。

次号へ



クレタ島奪還作戦 4 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

動く時には物事は一斉に動く

3月3日 地中海海上

マリイダ

「大介。新しい情報よ」

福本

「良いニュース？悪いニュース？」

マリイダ

「…どちらかと言えば悪いニュースね。ソ連の要請でイタリア海軍が動くそうよ」

新沢

「まあ、当然ですね。今まで地中海はイタリア海軍の縄張りだった訳だし」

福本

「となると…イタリア海軍は主力のリットリオ級を出してくるな」

遠地

「来るなら来てみよ、リットリオ。世界最強の播磨が御相手するぜ」

海龍

「そして捕えて、コスプレだ〜!!」

全員

「『『『いや、それはダメ』』』」

海龍

「…なんで皆でツッコミ入れるの〜。 (<|>)」

福本

「はいはい。それで、出て来そうな戦力は？」

マリダー

「まず、リットリオ級戦艦のリットリオ、ヴィットリオ・ヴェネト、ローマ、それにイタリアね」

遠地

「ん？リットリオ級は三隻じゃあ無かったのか？」

マリダー

「最近完成した四番艦よ」

遠地

「ふ〜ん、空母は？」

マリダー

「今のところは一隻しか確認されてない」

福本

「まあ、イタリアは航空支援なら近くの基地から頼めば良いしな」

海龍

「陸上に近いからね〜、地中海は」

福本

「確かにな」

マリーダ

「ソ連にとつては、クレタ島と言う蓋にボスポラス海峡の出口を塞がれた様なものだしね」

新沢

「それに、イタリア海軍はイギリス海軍と戦っていませんからね。必ずこの艦隊に挑んで来ますよ」

福本

「なら、ご希望通り相手になってあげよう。ただ、航空支援されない様に、航空基地を先に叩くか」

マリーダ

「そうね。陸上の航空基地はある意味厄介だからね」

福本

「ああ。さて、皆を集めてくれ。皆で迎撃作戦の立案を行う」

新沢

「了解」

播磨甲板

尾崎

「…で、福本長官達は会議中？」

ミア

「ええ。皆さんで作戦経過を決めるそうです」

これといった用事も無く、暇をもて余す2人は、仲の良い同士でお喋りしていた。

尾崎

「だけど、一介の従軍記者がこんな機密満載の艦隊に乗ってこんな話が出るのもおかしいものね」

ミア

「そんな事を言ったら、私も人の事は言えませんよ。私は元スパイですから」

尾崎

「そうだね。あ、そう言えば、アメリカ艦隊は何時到着するの？」

ミア

「うーん…よくは解らないけど、この一週間中にアレキサンドリアに到着するみたいね」

尾崎

「そう…あゝあ、早く戦争終わらないかな…暗い話題ばっかじゃあ、やる気出ないよ」

ミア

「ほんと…そうよね…」

長官公室

福本

「ふうふう……」

長官公室に戻って来た福本。  
軍帽を公務机に放り、ソファーにドカリと座る。

福本

「まったく…海龍はどうにかしないとな」

会議終了後に入ってきて来て、いきなりコスプレファッションショーをやると言いつ出した。  
もちろん、許可は出さなかったが……。

福本

「海龍め……最近写真の出来が良いって零戦先生の翡翠さんに褒められたからだな」

まあ、暴走しない様にはするが、他人の趣味にケチを付ける気は無  
い。

しかし……最近マリィダを狙っている様子だ。

福本

「マリィダのコスプレ姿か……興味は有るが……しかしな……」

確かに興味はある。

メイドさんなんかやられたひにゃ鼻血を出すかも知れない。

つーか、独り占めしたい！

福本

「……………って、何考えてるんだよ……………」

エロ男の妄想じゃあないか……………

福本

「は……あ……………」

気を取り直すべく、公務机の書類置きに手を伸ばした時……………

河内

「福本様」

福本

「ん？河内か？」

なぜか河内が現れた。

普段の河内は用事がなければこの長官公室には現れ無い。

姉であり艦隊司令である播磨が執務を執るのは福本の公務机の隣の予備机を使っているからだ。

福本

「どうした、河内？播磨ならワルキューレの方に行ったけど……………」

河内

「い、いえ……お姉様では無く、福本様に用事が……………」

福本

「俺に??？」

この艦隊の参謀であり、艦隊一の男装が似合う艦魂として有名な河内が俺に用事??？」

……正直見当が付かない。

福本

「なんだ?どこぞの誰かみたいに変な事はやってないぞ」

まあ、真面目な河内だから、こう言った内容だろう……

河内

「い、いえ……そうだった内容では……」

福本

「え?違うのか?」

……ますます見当が付かなくなった。

福本

「じゃあ……いったい何の用事だ?」

河内

「あ、あの……ね、ネルソン様から聞いたのですが……」

福本

「何を?」

河内

「え、あ、し、士官学校時代に、恋愛相談をな、なされてい、い



たとか……」

福本

「ああ。まあ、していたって言うよりは自然になったってところかな」

士官学校時代、二年になって転入して来たマリィダとの間柄が噂になり、何故か恋愛相談が来る様になった。

しかも…相談者の多くが女子だった。

なおかつ、相談したカップルは上手くいってるんだから、世の中解らん。

福本

「……それがどうした？」

河内

「あ、え、い、いえ…そ、その……」

福本

「??？」

いつもは妹でさえもづけつけ言う筈の河内が口ごもるとは……個人事か？

河内

「じ、実は…え、エターナルの事で……」

福本

「ああ、お前の男装姿に一目惚れした艦魂だね」

噂では、海龍から河内の男装写真を買っているらしいが……

河内

「そ、そのえ、エターナルの事で…そ、その…」

福本

「……………」

…埒が明かないな。

福本

「なんだ、エターナルの事でも好きになったか？」

河内

「っうー!!」

福本

「……………凶星か」

さいはて…どうしたものか……。

播磨甲板

海龍

「そう言えば河内は大丈夫かな？」

マリーダ

「？なんで河内が心配なの？」

しかし、海龍の口から出るから意外だ。  
何せ、ある意味危険人物の人間の口からである。

海龍

「だって、最近エターナルのコスプレ写真を大量購入してるんだもん」

マリィダ

「……………ええ！！！」

海龍

「わーい、いきなり大声出さないでよ」

マリィダ

「嘘！本当なの？！か、河内がエターナルのコスプレ写真を？！ええ！！！」

意外も意外……………エターナルが河内を好きなのは知っていたけど……………

マリィダ

「…バットエンドだけは止めてほしいわ」

海龍

「あゝあ、その内、福本長官が…」

マリィダ

「海龍、あんた、そんなに消えたい？（怒）」

笑いながらサーベルの柄に手をかけるマリィダ。

海龍

「う、う、う、うめんなさい……！」

マリィダ

「もう、度が過ぎるわよ」

……いくら何でもサーベルで斬ろうとするのもどつかと思っが……。

マリィダ

「……まさか、大介の所に……急がなきゃ！」

海龍

「ちょ、ちょっと！マリィダ！転移した方が早いよ！」

ズサアアア！

マリィダ

「そ、そう言えばそつね」

次号へ

動く時には物事は一斉に動く(後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 悩みは尽きず

播磨 長官私室

福本

「ふっ…」

夕食を終え、ベッドに転がり込む福本。  
転がりながら、河内の事を考える。

福本

「…河内とエターナルか……」

エターナルの河内好きは護衛作戦の時にトラックに寄港していたワルキューレから幾度か聞いていたし、ハワイで彼女の河内好きはたつぷりと見た。

しかし、河内にこの恋風邪(?)が伝染するとは……

福本

「しかも…惚れ方がな……」

エターナルは写真で、河内は生で一目惚れ……。

福本

「腫れた惚れたは良いけれど、河内の性格じゃあ言い出せ無いだらうな………どうしたものか……」

男装…しかも執事服を着せたら似合うと海龍が言ったが、もし人間

なら絶対一流執事だろう。

注意・助言・命令以外の事は余り口に出さず、常に裏方に徹する。だから、正面きってエターナルに自らの心情を語るなどは……

福本

「夢のまた夢……と、言う事が」

「何がまた夢のまた夢なのだ？」

福本

「え、春日さん？」

いつの間にか春日が居た。

春日

「その様子だと、河内の事だな」

福本

「耳が早いようで」

春日

「当然だ。君の三倍長く軍にいるのだからな」

そりゃそうだ。

士官学校時代合わせて8年ちょいしか軍にいない福本と、約30年の春日。

春日から見れば福本はペイペイである。

春日

「あの2人を見ると日本海海戦前の日進と高野を思い出す」

福本

「ははは、何となく解ります」

春日

「…そして、今のお前とマリーダかな？まあ、少しマシだと思うが…」

福本

「…厳しいですね」

春日

「妥当な評価だと思うが？」

福本

「まあ…確かに」

自分より軍歴の長い相手の辛口批評には逆らえない。

春日

「しかし、おかしなものだ。何故河内が今頃惚れた事に気付いた？」

福本

「まあ…恋愛事に疎い人はたまにいますから…」

春日

「…なるほどな。まあ、河内は疎そうだな……あの2人をどう見る



？」

福本

「そうですね……外国のお嬢様と日本人の男装執事……ですかね」

春日

「……今の流行りか？」

福本

「……作者に訊いて下さい」

播磨後部甲板

河内は後部甲板にいた。

普段ここは航空機運用甲板だが、今は誰もいない。

大和型同様播磨型も主砲発射時の爆風・衝撃波を避ける為、航空機は一段下の航空機格納庫に収納されている。

そんな誰も居ない後部甲板で河内は1人で居た。

マリィダ

「かわ〜ち〜」

河内

「マリィダ様！」

マリィダ

「もう、職務時以外は様は付けなくていいと言ってるでしょう」

河内

「はあ……」

まあ、これは慣れの問題であろうが。

マリータ

「何悩んでるの？やっぱり、エターナルの事？」

河内

「……いえ、自分の様な人間擬きが恋などして良いのか……と……」

マリータ

「なるほど……ね」

ごくまれにこういった子はいるものだ。

特に超真面目な子は。

マリータ

「……もう、いい歳した女の子が『擬き』なんて使っちゃいけません」

そう言うと、河内のおでこを指でグリグリ回す。

マリータ

「いい？あなたは河内の名前がある女の子。みんなと一緒に、笑います、泣きもする、ご飯も食べる、恋もする……感情もあるんだから、悲観的になっちゃダメ。わかった？」

河内

「は…はい」

マリーダ

「さて、今日から早く休まないといざと言う時に大変よ」

そう言うとマリーダは去って行った。

河内も直ぐに自分の艦へと戻って行った。

次号へ

悩みは尽きず（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

その頃…イタリア海軍では……（前書き）

新米士官

「今回はイタリア海軍にスポットを当ててみました」

福本

「俗にヘタリア…って呼ばれてますよね」

マリーダ

「作者の世界じゃあ、国が擬人化したマンガがあるそうで…」

遠地

「とにかく…一部を除いていい話は聞かないな。笑い話が多い様だが」

新米士官

「と、とにかく、どっぴろどっぴろ」

その頃…イタリア海軍では……

3月4日 タラント軍港

イタリア海軍の主要軍港であるタラントではソ連からの要請により、出撃準備を行っていた。

「じ、ゴリツィア…や、止めといた方が…」

「ザラ姉さんは黙ってて下さい」

イタリア海軍の士官服を着た2人が長官室に向かっていった。

1人はザラ級重巡洋艦の一番艦ザラの艦魂ザラ。

もう1人はザラ級重巡洋艦四番艦ゴリツィアの艦魂ゴリツィア。

ザラ

「ゴリツィア…多分無駄だと…」

ゴリツィア

「私は私の意志で行きます。ここは一度ガツンと言わないといけません」

そうこうする内に長官室の前に来る。

ザラ

「もっ…知らないよ」

そう言うとザラは転移する。

ザラが転移した後、ゴリツィアは長官室のドアをノックする。

コンコン

「どっぞっぞっぞ」

ゴリツィア

「失礼します」

長官室に入ると、何時もの様に密かに溜め息を吐く。この長官室の間の抜けた空気に……

「どっしたの？ゴリツィア？」

目の前の公務机に座り公務……いや、雑誌を読んでいる少女……リットリオの艦魂リットリオ…がゴリツィアに間抜け声で聞く。

ゴリツィア

「リットリオ長官……少しは仕事して下さい」

本当は怒鳴りたいところを必死に理性で抑え込む。

リットリオ

「別に良いじゃない。そんな直ぐに出撃するんじゃないんだからさっ」

ゴリツィア

「……………（暢気過ぎだ！）」

日本海軍と戦わなければならないとゆう時に、いくらなんでも暢気過ぎる長官の様子。

「ところで、ゴリツィア。何の用事で来たの？」

その横でパスタを食べている少女が聞いた。

ゴリツィア

「ヴェネト参謀長……………朝からいたい何皿食べてるんですか？」

ヴェネトこと、ヴィットリオ・ヴェネトの艦魂、ヴィットリオ・ヴェネト。

ヴェネト

「だつてさ、直ぐお腹減るんだもん」

ゴリツィア

「…はぁあ…」

……………これがこの長官室の毎日の光景である。  
ちなみに三女のローマはリットリオのベットで夢の中だ。

ゴリツィア

「…あのですね…長官に参謀長…」



リットリオ

「なに？」

ゴリツィア

「…なにやってんですか！！」

遂に我慢の限界とばかりにゴリツィアがキレた。

ゴリツィア

「日本海軍と一戦やらなきゃいけない時に、なに暇そうに雑誌読んで、パスタ食べて、暢気に寝てるんですか！！」

リットリオ

「いや〜ね、ゴリツィア。私は愛読の『月刊 兵器乙女のコスプレ』を読んで…」

ゴリツィア

「一緒だ！！」

ヴェネト

「わ、私は直ぐお腹…」

ゴリツィア

「よく噛んで食べればお腹一杯になります！あと、ローマ！早く起きなさい！！」

これが世界に誇るイタリア海軍の戦艦の艦魂か？

ゴリツィア

「いいですか！相手は日本海軍ですよ！アメリカ両洋艦隊を真っ向

から叩き潰した海軍です！しかも相手は精鋭中の精鋭、第七艦隊なんですからね！！」

リットリオ

「そんな事位は…」

ゴリツィア

「なら！真面目に仕事して下さい！ヴェネト参謀長も！ローマも！」

リットリオ・ヴェネト

「は、はい！」

ゴリツィア

「それでは、失礼します」

そう言うと、ゴリツィアは丁寧に退室した。

ゴリツィア

「ぶっ……」

頭を掻きながら廊下を歩くゴリツィア。

ちなみにゴリツィアは現在タラント軍港のイタリア海軍の纏め役と言っている。リットリオ級以外にも戦艦はいる事にはいるが、残念ながら別方面にいる。

ゴリツィア

「まったく…これじゃあ、小型艦艇の皆に申し訳ないよ……」

地中海の戦いが始まり、クレタ島が占領されると、イギリス海軍はマルタ島との輸送ラインを維持したが、アレキサンドリアに退去した。

この為、駆逐艦等の小型艦艇が投入され、戦艦や重巡洋艦は待機状態にあった。纏め役であるゴリツィアは戦闘分析の為、小型艦艇に話を聞きに行っているからよく愚痴を聞く。

ゴリツィア

「はあ……本当に大丈夫なのか…我が軍は…」

その後、駆逐艦や巡洋艦達を周り、自分の部屋の前まで戻って来たゴリツィア。今やすっかり日が暮れている。

ゴリツィア

「まったく…あの3人がしっかりしてくれればな…」

そう言いながら、ドアを開けた時……

グッ

ゴリツィア

「ん？うわっ！！」

いきなり右手を掴まれ、中に引き擦り込まれる。

そして、ドアに押さえ付けられ……ゴリツィアの唇に暖かい物が触れる。

「お帰り。ゴリツィア」

ゴリツィア

「……もうちよっと普通に出来ないか？イタリア？」

「あら、恋人のキスで迎えられるのは嫌い？」

ゴリツィア

「嫌いじゃないよ。ただ、いきなり引き擦り込むのはどうかと……」

「ふふふ、ごめんね」

さて、この暗いゴリツィアの部屋に潜んでいたのは、リットリオ級戦艦四番艦イタリアの艦魂イタリア。

本当なら『インペロ（帝国）』と名付けられる筈が、艦名変更でイタリアになった。

ゴリツィア

「何をしていたんだ。私の部屋で？」

イタリア

「ゴリツィアが集めた戦闘資料で勉強してたの」

ゴリツィア

「そうか……お前の姉さん達も、お前を見習ってくれたらな……」

イタリア

「うう…ごめん」

ゴリツィア

「イタリアが悪い訳じゃあないんだけどね」

こんな風に話すイタリアとゴリツィア。  
実は2人は恋人として付き合っている。  
もちろん、周りには秘密だ。

ゴリツィア

「はあ…当分静かにならないな」

イタリア

「仕方ないよ。今戦争中だもん」

ゴリツィア

「だけどな…あゝあ、なんでもいいから早く終わってほしいよ」

イタリア

「そうだよね…そうなれば私達の事も明かせるのにね…」

ゴリツィア

「いや、それはヤバい。絶対にヤバい」

イタリア

「…そうかな？」

ゴリツィア

「うん」

次号へ

その頃…イタリア海軍では……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 伊豆の情報網（前書き）

ゴリツィア

ザラ型重巡洋艦四番艦の艦魂で、タラント方面の実質的指揮官。頼り無いリットリオ型戦艦の三姉妹に代わり指揮を執っており、小型艦艇達からは人気がある。イタリアとは恋仲。

イタリア

リットリオ型戦艦四番艦の艦魂。  
上の三姉妹と違いゴリツィアが教師役を勤めた為、しっかりした艦魂に成っている。  
ゴリツィアとは恋仲。



## 伊豆の情報網

3月6日 クレタ島付近の海域

戦艦播磨長官公室

福本

「ふむ…まだイタリアは動かない…か」

パチッ

ジント

「そうですね」

パチッ

福本

「…マリーダに見付かったらなんて言うかな…」

パチッ

ジント

「あははは、長官公室で仕事もしないで将棋ですからね」

パチッ

……飽きもしないで将棋打つ2人。

福本

「なら、作者。テレビとゲームを出せばいいだろう？」

時代背景がおかしくなるからそれはダメ。

ジント

「長官。それはそれで無茶ですよ」

福本

「言ってみただけだ。はい」

パチッ

ジント

「ほう。そうきましたか」

パチッ

伊豆

「失礼します」

福本

「その声は……伊豆か？」

パチッ

ジント

「伊豆ですね」

パチッ

福本

「随分久し振りだな」

パチッ

ジント

「ハワイ沖海戦ぶりですね」

パチッ

福本

「本当に…で、何の用事？」

パチッ

伊豆

「あ、あの…、イタリア海軍の近況を聞きますか？」

ピタッ

2人

「「もちろん」」

伊豆

「…息がぴったりですね」

福本

「それは、どうも」

そう言うと福本は執務机にあったビスケットと紅茶入りのポットを  
応接机に置く。

福本

「しかし、伊豆。いったいいつの間に独自の情報網を作ったんだ？」

伊豆

「え、あの……カモメさんの情報なんですけど……」

ジント

「…カモメさんって…鳥のカモメさんですか？」

伊豆

「は、はい……」

ちなみに、伊豆の特殊能力(?)は動物の言う事が解る事。

福本

「まあ、何でもいいや。とにかく聞かせてくれ。ある意味こっちも  
情報無くて手詰まりなんだよな」

伊豆

「はい。あ、その前に一つ……」

そう言うと、ビスケットを一枚摘まみ口に放り込む。

伊豆

「美味し〜い〜」

福本

「あははは、それは良かった。そのビスケットはネルソンさんが勧めてくれたビスケットさ」

伊豆

「へえ、そうなんですか」

そして、また一枚。

ジント

「こちら。食べるのもいいけど、先に言う事があるでしょう」

伊豆

「あ、はいはい」

言われて直ぐ様、丁寧に折り畳んだ紙をポケットから取り出す。

伊豆

「え、とですね、カモメさん達の話によりますと、イタリア海軍は出撃準備中です」

福本

「そうか…多少タイムラグがあるとしても、重要な情報だな」

しかし…いくら何でも遅い様な気がする。

第七艦隊に恐れを成したか？

それとも、イタリア海軍お得意の特殊部隊か何かの結果待ちか？

ジント

「ふーん…他には？」

伊豆

「え、え〜とですね……」

福本

「ん、どうした？」

伊豆

「あ、あの……リットリオ型戦艦四番艦の艦魂に関する情報なんですが……」

ジント

「四番艦……となると今年に入って完成したイタリアですね」

福本

「で、イタリアの艦魂がどうしたって？」

伊豆

「つ、付き合っている人がいるそうで……」

ジント

「恋人ですか……まあ、有り得ない訳では無いですし……」

伊豆

「い、いえ……そ、その、カモメさん達の話だと、ザラ型重巡洋艦に四番艦ゴリツィアの艦魂と付き合っているそうで……」

2人

「……ど、どんだけ……!!」「」

「……いたい何人居るんだ？この世界は……」

ジント

「イタリアにもいるもんなんですね。山城さんと愛宕さんみたいな人が」

福本

「あ、ああ、そうだな……」

実は身近にもう一組いるのだが……

福本

「で、そのゴリツィアの事は？」

伊豆

「カモメさん達の話だと、タラント方面で一番影響の大きい人だとの事です」

福本

「…なるほど、戦艦の代わりに重巡洋艦の艦魂がしっかりしているのか」

つまり、ゴリツィアを討つてしまえばタラント方面は勝手に瓦解する。

だが、そういった人間を討つのは諸刃の剣だ。

討てば士気的大幅低下を見込めるが、下手をすると仇を取らんと士気上昇に繋がる場合がある。

ブーゲンビル上空で叻作戦をやった事があるから、余計に解る。

しかし、反対にこちら側につかせる事が出来るならどうだろうか？ 短期間での地中海掌握を望む自分達としてはイタリア海軍さえ黙ってくれれば、シチリア島攻略・イタリア早期降伏も望め、両軍の犠

性を抑える事も出来る。  
となると……

福本

「うっ〜ん……」

唸りながら福本は立ち上がると、部屋の中をグルグル歩き始めた。

伊豆

「ちよ、長官？」

ジント

「大丈夫。今長官は福本式算出術で色々考えているのさ」

伊豆

「歩き回るのがですか？」

ジント

「福本長官はじっとして考えるよりも、動いて考える方だからね」

果たして、伊豆の情報は地中海戦線を変えられるのか？

次号へ



## 伊豆の情報網（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 作戦開始に向けて

3月7日

クレタ島を奪還した日英軍は直ぐ様、戦闘機部隊を進出させた。他にも日本から一式対空戦車やVT信管付き通常弾・三式弾を提供し防空体勢を整えている。

その為、防空戦ではソ連軍側の不手際もあり有利に進んでいた。

二一ナ

「…と言つのが、今のクレタ島の現状ね」

宮木

「はい。ポーランド・満ソ国境周辺に戦力を集中しているので地中海方面の練度は41年より全体的に低下しております」

二一ナ

「なら、イタリア海軍は暢気に何してるのかしら？」

宮木

「どうせ暢気にパスタでも食ってるんでしょう…：だいたい、ここに日本の潜水艦が交代で張り付いている事にすら気付いていないんですから」

伊400はタラント軍港の近くで、第七艦隊所属の潜水艦と交代しながら見張っていた。

零

「けどさ、福本長官も何を待ってるのかな？」

二ーナ

「まあ、タラント軍港を空襲する位なら戦力は充分有るのにね」

宮木

「あえてそうしないだけでしょ。今後の為に……まあ、我々現場が考える事ではありませんから」

その頃……

戦艦播磨長官公室

コンコン

福本

「どござ」

「失礼します」

入って来たのは随分久しぶりに登場しました、アンナ・ラディア大佐とメアリ・サーストン中佐の2人。  
……覚えてる人がいるかね？

福本

「随分出番を待たせてしまいましたね」

アンナ

「いえ。作者のせいなので」

……否定はしないよ。

メアリ

「あ、あの…私達に何か？」

福本

「はい。たしか御二人は日本に来る前は地中海方面に配属されていたとか？」

アンナ

「ええ、マルタ島周辺を始め、地中海はある程度航海しています」

福本

「それは好都合です。実は吉野に水先案内として先行してほしいのです」

メアリ

「水先案内…ですか？」

福本

「はい。今回第七艦隊はマルタ島に輸送作戦を実施します」

アンナ

「しかし、マルタ島はイタリアに近く、輸送自体が困難では……」

福本

「……と、イタリアに流します」

メアリ

「…じゃあ、偽情報を流してイタリア海軍を誘き出すんですか？」

福本

「そう言う事です。もちろん、事前に航空基地を叩き、それらしく行動します」

アンナ

「なら、イギリスから水先案内を…」

福本

「時間がありません。それにこれは迎撃作戦ですから、敵にバレない様にしなければなりません」

メアリ

「……つまり、敵が想定する以外の海域を通過する事も？」

福本

「下手をしたら無茶苦茶な航路になりますので」

アンナ

「わかりました。道案内はお任せ下さい」

福本

「はい」

……普段は姉さん（あねさん）風のこの人が、キス魔（女の子専門）

だとは……。

またその頃……

アレキサンドリア軍用飛行場

沖田（優）

「みんな、注目！」

整備所で整備兵と共に点検にあたっていた富嶽の搭乗員達が隊長の出現に振り向く。

沖田（優）

「第七艦隊経由でイギリス軍からの要請でギリシャ方面に出撃よ」

男性搭乗員

「ギリシャにですか？」

沖田（優）

「ええ。ギリシャにいるレジスタンスに武器を輸送するそうよ」

女性整備兵

「なら、イギリス軍の爆撃機か輸送機で……」

沖田（優）

「残念ながらイギリス軍機は被弾に弱い。だから、富嶽に出動要請が出たの」

女性搭乗員

「出撃は？」

沖田（優）

「2400に現地到着。出撃は2200。全搭乗員は出来る限り休む様に。以上」

全員

「……………はい……………」

富嶽

「優里ちゃん、聞いたよ、出撃だった？」

沖田（優）

「うん。ギリシャだった」

富嶽

「大変だよ。福本長官も、紫音さんも、烈さんも、地中海でイタリア海軍と戦っし……………」

沖田（優）

「仕方無いよ。戦争中だもん……………」

富嶽

「うん……………で、積み荷は？」

沖田（優）

「主に小火器ね。小銃に短機関銃、軽機関銃とその弾薬ね……………あ、少数だけど噴進砲も届けるみたい」

イギリス軍から受け取ったリストを見ながら確認する。

富嶽

「じゃあ、私も出撃の為に昼寝してくる。」

沖田（優）

「え、ええ。ごゆっくり……」

次号へ



作戦開始に向けて（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 始動

3月9日 深夜 イタリア軍航空基地

グオングオングオングオン……

イタリア兵

「ん？エンジン音？」

夜警にあたっていたイタリア兵がエンジン音を聞いて足を止める。  
その瞬間……

パアッ！

イタリア兵

「！！！」

いきなりの閃光に慌て目を庇うイタリア兵。

ヒューウ……

ババン！ババン！ババン！ババン！ババン！ババン！

滑走路に落ちる爆弾……連続する爆発音……

イタリア兵

「くそ！空襲だ！敵の夜間空襲だ！」

大宮

「ドンピシャだな」

流星艦攻を率いて、彩雲の誘導に従い大宮隊。

彩雲の照明弾の発光を合図に爆弾倉に抱えた60kg爆弾6発を投下する。

艦攻搭乗員

「そのまま…そのまま…よい…てえー！」

カチッ

ヒューウ……

ババン！ババン！ババン！ババン！ババン！ババン！

パシューウ……

ゴワーン！

護衛の烈風が噴進弾で駐機を破壊する。

大宮

「よし！全機攻撃終了後、帰還せよ！」

翌日 タラント軍港

ゴリツィア

「なに、夜間空襲だと？」

「はい。マルタ島付近の航空基地は全て空襲を受けました」

ゴリツィア

「うむ…被害は？」

「小型爆弾でしたが、大量投下されたうえ、時限爆弾も混ざっており処理に時間が掛かっています。また、機体の方もほとんど破壊されています」

ゴリツィア

「うーむ……厄介な話だな、アーキィラ」

「はい」

先程から報告をしている少女……イタリア海軍唯一の空母アーキィラの艦魂アーキィラである。

アーキィラ

「我々の利点は陸地に近く、陸上航空基地から援護を受けやすい事です」

ゴリツィア

「そうだ。しかし、敵艦隊はその利点を潰した」

アーキィラ

「……リットリオ長官にお知らせしますか？」

ゴリツィア

「あのアホ三姉妹に何を言っても無駄だろう。既にマルタ島輸送妨害作戦は決定している」

アーケイラ

「…その作戦も大いに怪しい作戦ですが…」

コンコン

イタリア

「ゴリツィア。入って良い？」

ゴリツィア

「イタリアか？良いよ」

イタリア

「じゃあ、失礼します…あ、アーケイラ、おはよう」

アーケイラ

「おはようございます、イタリア。また、カモメを連れてきましたね」

イタリア

「えへへへ…」

笑いつつ、抱いているカモメを撫でる。

イタリア

「だって、この子怪我してるから定期的に様子を見ないといけない

の

アーケイラ

「はあ……」

ゴリツィア

「なあ、イタリア。昨夜の空襲の話は聞いたか？」

イタリア

「ええ、各航空基地で日本海軍による夜間空襲が行われたってね」

ゴリツィア

「……正直、どう思うっ？」

イタリア

「輸送妨害防止……と思うけど……余りにも当たり前過ぎて怪しい」

ゴリツィア

「うむ……確かにな」

戦艦播磨艦橋

神谷

「長官。連合王国艦隊、配置に就きました」

福本

「よし、始めるか……全艦作戦通り。出撃！」

全員

「了解！」「了解！」「了解！」

福本

「戦闘は多分、タラントの目の前…イオニア海だろうな」

マリータ

「ええ、囿役の連合王国艦隊がマルタとの正規コースをとるから、イタリア艦隊は南下コースね」

遠地

「しかし、俺達がその前に出て、イオニア海でイタリア艦隊を迎え撃つ」

新沢

「なおかつ、時間差になっても大丈夫な様にサブム艦隊が控えています」

千歳

「これでイタリア艦隊を完全に抑える…あとはナポリの艦隊だけ…」

福本

「ナポリ方面も伊700潜隊が待機している。出て来た瞬間、酸素魚雷の痛撃だ」

マリータ

「後は航空機で片付けられるわね」

遠地

「なら、次はフランス海軍か……さっさと片付けて対ソ戦に集中したいね」

新沢

「満ソ国境でのソ連側の動向が活発化しています。近々ソ連は満州に……」

福本

「だが、心配する事はない。最初はソ連側が優位だが、がっちり固めれば日本は勝てる」

新沢

「…そうですね」

福本

「さて、こっちはイタリア海軍との戦闘に集中しよう」

遠地

「おう」

イタリア

「あ、まただ」

ゴリツィア

「ん、何が？」

カモメの包帯を換えていたイタリアが呟く。



イタリア

「実はね、3日おきにこの子は来てるんだけど、包帯が新しいのに換わってるの」

アーケイラ

「…何処の世界にも世話好きな人は居るんですね」

ゴリツィア

「…と言うより、動物好きだろうな」

春日

「今回も、手を抜くのか？」

福本

「はい。イタリア艦隊を出て来させない様にするだけです」

春日

「ふ、やはり君は非情にはなれないな」

福本

「なってしまったら、人間失格ですよ」

春日

「人間失格か…やはり、君には現場が似合う」

福本

「そうですね、私も大臣室の椅子に座るなんて願い下げですけど」

春日

「そうか…ところで私と日進に何の用だ」

福本

「あれ、日進さんは？」

春日

「日進は勝鷹で食事中」

福本

「ああ…実はですね、御二人にはイタリア艦艦魂の説得を頼みたいのです」

春日

「…なるほど、何処の世界にも頑固者はいるからな」

福本

「はい…ですから…」

春日

「わかった。任せてくれ。出来るだけはやってみよう」

福本

「お願いします」

次号へ

## 始動（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## アーキライラ離脱ス（前書き）

アーキライラ

イタリア海軍唯一の空母アーキライラの艦魂。

地中海で空母の必要性がない為、アホリットリオ三姉妹（ゴリツィア命名）他大型艦からは相手にされないが、ゴリツィアやイタリア、小型艦達とは仲が良い。

元は建造中の客船ローマからの改造の為、料理や接待が上手い。ちなみにイタリア海軍での立場はゴリツィアの隠れた副官。

## アーケイラ離脱ス

タラント軍港

ゴリツィア

「それでは、リットリオ長官。お言葉を……」

リットリオ

「じゃあ！適当にやって、全力で逃げましょう！以上！」

ズデーノン！！

余りにも力抜け……と言っかなんと言っか……する言葉にズツ転けるイタリア艦艦魂達……。

ゴリツィア

「リットリオ長官！！……って居ないし！！！」

いつの間に転移したのか……

ゴリツィア

「あゝのゝへタレ！！一回修正したるかあ！！！」

アーケイラ

「お、落ち着いて下さい、ゴリツィア！！！」

イタリア

「わあゝ！止めて、ゴリツィアゝ！みんなも手伝ってゝ！！！」

艦魂達

「……は、はい!」「」「」

駆逐艦の艦魂達が慌て抑えに入る。

ゴリツィア

「はあ、はあ、はあ……全く、あのヘタレは!」

アーケイラ

「いつの間にか、ヴェネト参謀長もローマもいませんよ」

ゴリツィア

「はあ……私が居なくなったら大変だな」

アーケイラ

「はい……幸先が不安です」

イタリア

「はあ……我が姉ながら……嫌になるよ……」

戦艦播磨艦橋

神谷

「福本長官。イタリア艦隊出撃しました。陣容は空母一隻を加え、四隻の戦艦を中心にした艦隊です」

福本

「予想通りの展開ですね。わかりました、彩雲には監視続行を命じて下さい」

神谷

「はい」

遠地

「空母一隻か…まあ、仕方ないけどな」

マリータ

「どうせ、防空空母だから脅威にはならないわ」

千歳

「それより、戦艦ね。まあ、イタリア艦だから大丈夫だと思うけど」

遠地

「けどな、イタリアの艦魂は別だからな。ゴリツィアとイタリアの師弟関係の件もあるし」

福本

「ああ…出来れば彼女達とは戦いたく無かったが…」

マリータ

「大介…」

遠地

「わかるよ…お前は優しいからな」

千歳

「うふふ、そうね」

福本

「さて、攻撃隊の準備は？」

神谷

「はい、長官の指示通り噴進弾装備の戦闘機隊、準備は完了です」

福本

「そうか……今何時？」

マリィダ

「1632（ヒトロクサンニ…16時32分）ね」

福本

「…よし、もうちょっと後にしたかったけど、地中海は狭いからな…攻撃隊発艦せよ！」

神谷

「了解！」

空母紅龍

ヴィル

「司令、長官より攻撃命令です」

沖田

「出ましたか。まあ、当然ですけどね」



ヴィル  
「ええ…では」

沖田  
「攻撃隊発艦せよ！」

ヴィル  
「はい！」

ズドン！

カタパルトによって発艦する烈風や紫電改。  
向かうは…南下するイタリア艦隊。

イタリア艦隊

ゴリツィア  
「……おかしい」

アーケイラ  
「何がですか？」

ゴリツィア  
「我々が出撃した事は知っている筈だ…なのに何故何もしない？」

イタリア  
「……………」

アーキイラ

「……………」

『で、敵機来襲！数は不明！！繰り返す！敵機来襲！数は不明！！』

ゴリツィア

「やはり来たか！2人共、戻れ！」

イタリア・アーキイラ

「了解！！」

ゴリツィア

「な……………」

対空戦闘の為に防空指揮所へ転移し、空を見た瞬間、ゴリツィアは絶句した。

100機を越える攻撃隊に襲われるなど、ゴリツィアでさえ未経験だからだ。

ゴリツィア

「く…護衛戦闘機は何をしている！？」

アーキイラから増援の戦闘機が駆け上がる。

しかし、アーキイラの搭載数は最大51機。

今上空にいるのは僅か20機。

これがイギリス重装甲空母なら不足も無かつただろうが……。

紫音

「杉田、イタリア艦隊だ」

杉田

「ああ…出迎えも来た様だし…行くか！」

紫音

「うむ！」

クレア

『全機、ロッテを崩さないように！続け！』

攻撃隊長のクレアが命じると、全機が続く。

イタリア側もマツキMC205ヴェルトロの艦載型で応戦する。

基本的にイタリア軍は格闘戦を得意とする。

しかし、無線機の有無が勝負を分けた。

ロッテを組む日本海軍は二対二でイタリア軍に応戦した。

これでは、後ろをとつても中々撃墜出来ない。

そここうしている内に残る60機の戦闘機が襲い掛かる。

ゴリツィア

「まさか…全部戦闘機だと…！」

普通は戦爆連合で来る筈が戦闘機単独の攻撃……。

ゴリツィア

「く、そんな事は後だ！対空砲火撃て！！」

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

直ぐ様対空砲火で応戦するが……通常攻撃と違い、戦闘機の動きは不規則である。

ゴリツィア

「く、しまった！抜けられた！」

ゴリツィアの対空射撃も虚しく、日本機が抜ける。

シュパパパパパン！

ドガガガガガン！

ゴリツィアの弾幕を抜けた烈風がアーキイラの飛行甲板に向けロケット弾を放つ。

ゴリツィア

「アーキイラ！！」

アーキイラ防空指揮所

イタリア

「アーキイラさん！」

アーキイラ

「えへへ…大丈夫」

アーケイラの被弾に直ぐ様駆け付けたイタリア。

アーケイラ

「ロケット弾を喰らったのは初めてだけど…案外痛いわね」

ゴリツィア

「アーケイラ！無事か！」

アーケイラ

「はい…大丈夫です」

ゴリツィア

「もう大丈夫だ。敵はロケット弾を使い果たして引き上げていった」

アーケイラ

「……可笑しな話ですね」

ゴリツィア

「??？」

アーケイラ

「日本海軍には私より搭載数の多い空母が10隻はいます……なのに来襲したのは100機前後……しかも戦闘機……可笑しいですよね…」

イタリア

「アーケイラさん？」

アーキイラ

「大丈夫…ゴリツィア…この戦闘はみんな生きて帰れるから…」

ゴリツィア

「なに？」

アーキイラ

「もし私なら…こんな時間に戦闘機だけで空襲しないわ…多数の戦爆連合で叩けばいいだけだから…」

イタリア

「……………」

ゴリツィア

「……………」

その後、飛行甲板を損傷したアーキイラは駆逐艦の護衛を付け、タラント軍港に帰還した。

そして…イタリア艦隊は囷の輸送艦隊へ進路をとる……。

次号へ

## アーキテラ離脱ス（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 砲煙包む地中海

戦艦播磨艦橋

福本

「そうか……空母が離脱したか」

神谷

「はい。しかし、戦艦以下艦艇はそのまま進んでいます」

遠地

「まあ、噴進弾の攻撃じゃあ、戦艦にとっては蚊に刺された程度だからな」

マリイダ

「そうね……まあ、潰せて対空砲ぐらいかしらね」

千歳

「本気で掛かったら空母どころか、戦艦も沈めてるのにね」

福本

「まあまあ……さて、敵のコースを絞るとするか……」

軽巡洋艦吉野

メアリ



「アンナ、夜食だよ」

アンナ

「ん、ありがとう」

既に日も暮れ、戦闘配置に就いたままな第七艦隊。先行誘導する吉野は前にいるだけに、気が抜けない。

吉野

「はあ〜…伊吹様とは別れ別れ……」

メアリ

「お〜い、吉野、食べないの？」

アンナ

「そつとときな。愛しき人と離れて悲しんでるのさ」

メアリ

「…そんなに離れて無いんだけどね」

吉野

「はあ〜…伊吹様……」

メアリ

「ダメだ、こりゃ」

数時間後……

播磨艦橋

ジント

「ん……！長官！南下する艦影多数！」

レーダースクリーンを見ていたジントが叫ぶ。

福本

「よし、始めるか…遠地！」

遠地

「おつよ！戦艦は同航戦、巡洋艦戦隊及び水雷戦隊は突撃せよ。撃ち方よい！」

ウィーン……

主砲塔が旋回するモーター音が鳴り響く。

福本

「地中海の制海はこの一戦にあり…か…」

重巡洋艦六甲艦橋

畝傍

「我々三戦隊の獲物はザラ級か…相手にとっては不足無し」

篠森

「ザラ型は重装甲の重防御艦です。我が戦隊とはいえ、油断大敵で

す  
」

伊吹

「大丈夫だ。福本長官が設計した船体：柔である筈が無い」

篠森

「頼もしいですね」

士官

「司令！敵艦隊、播磨の射程に入りました！」

篠森

「そろそろ…か」

士官

「敵艦隊、射程内！」

福本

「手筈通り、レーダー標準で射程ギリギリで行う」

遠地

「主砲、レーダー標準射撃！撃ち方始め！」

ラフィール

「撃てえ！」

ズガン！ズガン！ズガン！

ゴリツィア

「んー」

いきなり目前に出現した閃光にゴリツィアはハツとなった。

ゴリツィア

「しまった！日本海軍か！」

ヒューウ……

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！

ゴリツィア

「く、レーダー標準の遠距離射撃か！」

何せ四万メートルを飛ばす砲はイタリアにもあるが、ここまで正確に飛ばすならレーダー標準しか無い。  
それに日本海軍も抜かりは無い。

ドゥーン！ドゥーン！

ズバーン！ズバーン！

ゴリツィア

「く、日本海軍の快速部隊か！」

待つてましたとばかりに、巡洋艦戦隊、水雷戦隊がイタリア艦隊に

向かって来る。

ゴリツィア

「くそ！リットリオ長官の命令なんて待てるか！快速部隊は私に続け！」

深夜、静かだった地中海は砲煙に包まれる。

次号へ

砲煙包む地中海（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 水雷戦隊同士の殴り合い

重巡洋艦六甲

士官

「敵巡洋艦戦隊及び水雷戦隊接近！」

篠森

「ザラ型は三戦隊に任せろ。他の戦隊は各個に対応！」

艦長

「撃てええ！」

ゴワーン！ゴワーン！

六甲の25cm三連装砲が火を吹く。

今まで防御重視のアメリカ巡洋艦を潰してきた主砲。重装甲のザラ型にはどこまで効くだろうか？

重巡洋艦敵傍

敵傍の艦長、九鬼宮子大佐（ヨーロッパ派遣により昇進）は敵傍と共に立っていた。

敵傍

「ザラ型ゴリツィアか……相手にとっては不足は無い！」

チン！

抜かれたサーベルは闇を切り裂き妖しく輝く。

九鬼

「小浜、主砲は？」

小浜

『準備万端！何時でもいけるよ！』

伝声管から伝わってくる頼もしい砲術長の声。

九鬼

「全砲！撃ち方始め！」

ズバーン！ズバーン！

ヒューウ……

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！

ゴリツィア

「これが…25cm砲か…」

六甲と敵傍……ゴリツィアは名前は知らない……の射撃を受けるゴリツィア。

ゴリツィア



「特に二番艦：人間の腕が良いのか…あるいは艦魂が古参なのか…上手い」

一方的に撃たれている現状下でこれ程冷静にいられるのも凄いものだ。

ゴリツィア

「さて…水雷戦隊はどうだ…」

日伊の水雷戦隊も徐々に距離をその高速で詰めていく。

艦隊・戦隊単位の運動なら月月火水木金金の日本海軍だが、イタリア艦隊もゴリツィアの指導と地中海で戦ってきた自信から綺麗な形で日本艦隊に迫る。

そして、彼我の距離が5・6000メートルになった瞬間、双方の主砲が火を吹いた。戦隊旗艦の軽巡は敵軽巡に砲をブツ放し、駆逐艦も正対する駆逐艦にブツ放す。火力による殴り合いをしつつも、魚雷発射のタイミングを計る。

だが、双方射点を取られまいとジグザグ航行で妨害する。

もし、水上機か何か：飛行機ならなんでもいいが…から見たら、日本艦隊の水雷戦隊はまるで蛇が進むが如く確りした戦隊ジグザグ航行である。

対しイタリア側は夜間とゆう慣れない事も有るのか、危なっかしい。

駆逐艦神波

神童

「面舵3分の1」

操舵手

「よーそろ」

第一駆逐隊の最後尾の神波でも、神童の指揮下、艦人一体でタイミングを計っていた。

三基の12.7cm連装砲も乱射し続ける。

もちろん、向こうも撃ってるのだから、直ぐ近くに水柱が上がる。

神童

「神波、まだ？」

神波

「うーん…もう、ちょい」

愛用の六分儀を横にして標準を定める神波。

ちなみに、これで魚雷を当てるんだから凄いものだ。

神波

「……よし、標準完了！」

士官

「艦長！一斉雷撃命令！」

神童

「水雷長！魚雷発射！」

水雷長

『了解！てえ！』

バシユウ！バシユウ！

放たれた魚雷は2本。

理由は駆逐艦相手に高性能な酸素魚雷を大量に使いたく無いのと、今回の作戦がイタリア艦隊の行動力を封じるだけの戦いだからである。

神波

「操舵手！取り舵一杯！」

操舵手

「よーそろ！」

こちらが撃った事にイタリアも気付くはずだ。ならばこちらは素早く回避行動をするのが一番だ。

水兵

「魚雷接近！」

神童

「このまま直進！」

士官

「は！」

ズズーン！

士官

「やりました！命中！」

神童

「敵魚雷は？」

水兵

「は、本艦の真横を通過しました」

神童

「よし、本艦の任務は終了ね」

水雷戦隊同士の殴り合いは場馴れした日本艦隊に采配が上がった。

次号へ

**水雷戦隊同士の殴り合い（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 砲撃戦の結末（前書き）

登場人物

九鬼宮子くきみやこ

階級 大佐 年齢 21歳

重巡洋艦敵傍の女性艦長。日本海軍の数少ない女性運用艦の艦長で、委員長タイプ。

敵傍と相性が良く、乗組員達からの信頼も厚い。

小浜彩希おほはまなほ

階級 大尉 年齢 21歳

重巡洋艦敵傍の砲術長。

女性砲術長として敵傍に配属され、本気を出せば初弾で標的に当てる程。

一時期、戦艦薩摩の砲術副長を勤め、遠地から直接指導を受けた事もある。

## 砲撃戦の結末

さて、日伊の戦艦の殴り合いはとゆこと……

ラフィール

「撃てえ！」

ズガン！ズガン！ズガン！

10門の主砲が敵リットリオ級に向けて火を吹く。

既に射程距離に入ったリットリオ級もお返しにと主砲を撃つ。

しかし、技量において世界最強の日本海軍、かの東郷平八郎元帥が『軍備に制限あれど、訓練に制限無し』『敵の5倍訓練せよ』と言った…本当に言ったかは不明だが…アメリカ相手に数の不利を戦技と練度で補おうとしたのだから、イタリア海軍が敵う筈が無い。だが、例外はいる訳で…

ズガン！

士官

「長官！近江被弾！」

福本

「近江に被害状況を問い合わせろ」

神谷

「はい！」

遠地

「今んとこ、被弾したのは近江だけだな」

福本

「まあ、イタリアは師匠が違うから、予想は出来てたけど……」

マリダ

「……あとの三隻はこちらが撃つ度に砲撃が弱くなっているな」

まるで気弱になったかの様に……

神谷

「長官。近江からです。『我れ主砲塔に被弾せりも被害無し』」

ガガン！

遠地

「お、ローマが被弾したな……さすが和泉と滝沢の酒飲みコンビだ」

福本

「……もう少しマシな褒め言葉は無いのか？」

遠地

「無い」

福本

「おいおい」

こんな会話をしている内に、被弾したローマは戦列を離れ始めた。先程の被弾で第一主砲塔と第二主砲塔の間で火災が発生し、消火の



為に戦列を離れたのである。

次に被弾したのはヴィットリオ・ヴェネト。

河内が撃った46cm砲弾が偶々水中弾になり、ヴェネトの左舷船体を襲った。

イタリアではプリーゼ式水中防御とゆうイタリア独自の防御方式を採用していた……隔壁などに円筒を通し、その中を重油を満たして衝撃を緩和する……が、実験では上手くいったそうだが、実際採用すると衝撃が緩和するどころか、増大したとゆう、防御になつていいのかよく解らない防御方式である。

そんな防御方式に水中弾が襲ったのだから堪らない。二発の水中弾はヴィットリオ・ヴェネトの船体で炸裂、あっという間に浸水が発生した。

これにより速度が低下したヴィットリオ・ヴェネトは戦列を離脱した。

これには流石に敵わないとイタリア艦隊は撤退に移った。  
イタリアとゴリツィアをしんがり殿にして……

### 戦艦播磨艦橋

ジント

「イタリア艦隊、撤退します」

福本

「よし、追撃せよ……フリだがな」

神谷

「はい」

福本の命令に全艦が速度を上げた。  
しかし、直ぐに殿のイタリアが妨害に入る。

神谷

「長官、第三戦隊から打電、殿のゴリツィアから激しい砲火。下手に近付くと……」

福本

「やっぱりな……よし、適当に撃って引き上げる」

マリータ

「了解」

ここまでは福本達の計画通りだった。

後は、イタリア艦隊がタラント軍港に向かってくれればそれで良かった。

だが……

篠森

「ん……！しまった！」

士官

「はい？」

篠森

「ゴリツィアと他戦隊との距離が縮まり過ぎだ！包囲している様に

見える！」

余りにも偶然が重なった結果だった。

当初の計画通り引き上げ進路をとっていた水雷戦隊と偶々舵をそっちに向けたゴリツィアの艦長が包囲されると思い攻撃する。

これに水雷戦隊が応戦し、第三戦隊が援護射撃を加えた為に、大混乱に陥ってしまった。

しかし、当初の通りに水雷戦隊が離脱し、第三戦隊も援護射撃をしながら引き上げた。

そして、ゴリツィアも滅茶苦茶な進路をとって離脱した。

まさか……この何でも無い小競り合いが、ゴリツィアの運命を決めてしまうとは……

次号へ

## 砲撃戦の結末（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ゴリツィアの運命

数時間後……

サブールム艦隊旗艦ワルキューレ艦橋

アルファアーニ

「…………ふあゝ……」

副長と交代してからずっと艦橋に立ち続けるアルファアーニ。  
やはり、疲労は溜まるものだ。

福田

「よう、アルファアーニ」

アルファアーニ

「あ、どうも」

福田

「欠伸が出てるぞ…コーヒー飲むか？」

アルファアーニ

「はい。いただきます」

福田の持っていたカップの内、1つを受け取りゆっくりと飲む。

福田

「ついさっき通信室に寄ったら、イタリア艦隊は引き上げたそうだ」

アルファーニ

「残念でしたね…間に合えばと思い速度を上げたのですが…」

福田

「ま、今回の作戦はイタリア艦隊の撃滅よりも、タラント方面の行動を抑えるのが目的だからな」

わざわざ撃沈するよりも、敵艦隊を封じ込む…今回の『謹慎』作戦もその意味合いが強い。  
低犠牲かつ低コスト…福田長官が出来る限り作戦立案において考える主旨である。

士官

「艦長！司令！」

福田

「どつした！？」

レーダー担当士官の声に直ぐに反応する。

士官

「レーダーに反応！大型艦…巡洋艦クラスが本艦左舷前方にいます！」

アルファーニ

「な、なに！？」

2人が慌てレーダースクリーンを覗き込む。

福田

「……本当だ…しかし、なぜ単艦で…？」

アルファアーニ

「…さあ…敵損傷艦でしょうか？」

福田

「なら…単艦とゆうのが解せん」

イタリア海軍の現状なら大型艦の一隻が日本海軍同様で貴重である。ならば、護衛も付けないで退避させているわけが無い。

アルファアーニ

「…第七艦隊から届いている、戦闘経過をみましょう。何か解るかもしれません」

福田

「そうだな」

直感派な福田と頭脳派なアルファアーニ……連携はとれている。

福田

「…うん…これじゃないかな」

アルファアーニ

「え、どれですか？」

福田

「同期で第三戦隊司令の篠森が送ってきたのなんだがな……ゴリツィアとの戦闘、最後は無茶苦茶で終わった様だし」

アルファーニ

「なるほど…時間経過からいって、丁度合いますね…どうします？」

福田

「見逃すには惜しいが……寄って集って叩くのは好きじゃない…」

アルファーニ

「では、鹵獲しますか？」

福田

「……あつさり言っね」

しかし、福田も半分その気であった。

福田

「よし、ゴリツィアを囲む様に包囲する。レーダーで距離をとりつつな」

アルファーニ

「はい」

艦対艦無線で敵にバレない様に指示を出し、ゴリツィアを包囲する。

ゴリツィア

「ぶっ……」



殿として、敵水雷戦隊と撃ち合い、あっちこっち逃げたゴリツィアはやっと緊張を解いた。

ゴリツィア

「後は…このまま無事にタラント港に帰ればいいのだが」

そう……帰れば……

チカツ！

ゴリツィア

「な…うわ！」

突然、夜の闇を裂いて照明がゴリツィアを照らし出す。しかも……それは四方八方から……

ゴリツィア

「くそ！日本艦隊がまだいたのか！？」

余りの眩しさに腕で目を庇いながら、照射する艦艇を見る。

ゴリツィア

「いや…別動隊か！」

この時、ゴリツィアは自らの愚かさを呪った。敵は第六大陸からの援軍を加え200隻近い艦艇がいる。組織は違う、しかし、協同作戦は出来る。

それに、日本海軍旗を上げる艦艇も、アメリカ艦が殆どだ。

ゴリツィア

「く…サブム艦隊か！」

妙にアメリカ艦に似たシルエット…サブム艦艇の特徴である。だが…そんな事はどうでもいい！

ゴリツィア

「私には…帰らねばならぬ人と場所が有るんだ！」

ワルキューレ艦橋

アルファーニ

「全艦配置に就きました」

福田

「よし、30秒後に一斉に探照灯照射」

アルファーニ

「はい。カウント開始します」

刻一刻と過ぎ去るカウントに、バレないかと緊張する。

アルファーニ

「5…4…3…2…1」

福田

「全艦探照灯照射！」

バシャ！バシャ！バシャ！バシャ！バシャ！バシャ！

配置に就いていた艦艇の探照灯がゴリツィアを照らし出す。

福田

「いいか、こっちは絶対撃つな。下手に抵抗されてケガはしたくないからな」

ドーン！ドーン！

ヒューウ……

ザバーン！ザバーン！

さすがに囲まれた事に気付いたゴリツィアが撃ってくる。

福田

「大丈夫だ。その内、徹甲弾は無くなる」

ゴリツィア

「く、しまった…徹甲弾の残弾が…」

福田の言った通り、徹甲弾の残弾が乏しくなってきた。それに……

ゴリツィア

「ふ…増援に戦艦二隻か………いつたい私一人に何隻を投入する気だ？」

三連装砲二基を搭載した二隻が向かってくる。  
まるで、ドイツのシャルンホルスト級に似ているが…。  
その時……

「君がゴリツィアだな」

ゴリツィア

「…あなたは？」

「私は日本海軍所属の戦艦春日だ」

ゴリツィア

「なるほど…降伏を薦めるの使者とゆうわけですか」

春日

「話が早い…返答は？」

ゴリツィア

「…私には帰るべき場所がある…帰りを待つ人がいる」

春日

「…そうか…残念だ」

帰ろうと春日はゴリツィアに背を…向けなかった。一気に間合いを詰めると、脇腹に強烈な一撃を加える！

ゴス！

ゴリツィア

「！かは……」

倒れるゴリツィアを春日が受け止める。

春日

「すまない……同じイタリア生まれとして……君を殺させる訳にはい  
かない」

それから一時間後……ゴリツィアは包囲していたサブールム艦隊及び  
日本艦隊に降伏した。

次号へ

## ゴリツィアの運命（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

戦い済んで…

3月12日 アレキサンドリア

イオニア海海戦で損傷した艦はドックに入れる艦はドックで、ドックに入れない艦は工作艦三原で修理を受けていた。そんな中、一隻だけドックの周りを日本海軍陸戦隊の厳重な警備を受ける艦がいた。

ゴリツィアである。

サブーム艦隊と日本艦隊の派遣部隊によって回航されたゴリツィアは直ぐにドックに入渠、周りを布で覆われた。

しかし、これはこれで目立つ。

そこで、アレキサンドリアのドック全部を布で覆った。

これなら目立ちはするが、どこにどの艦が入渠しているか解らないし、理由を聞かれても、『軍事機密』で押し通せる。

工作艦三原の部屋

コンコン

福本

「三原。入るぞ〜」

三原

「あ、びびび〜」

許可を得てドアを開けた。しかし、福本は慌てまた直ぐに閉める。

福本

「み、三原！診察中ならそう言ってくれ！」

三原

「あ、あーご、ごめんなさい！」

まったく……診察中だと患者一辺倒で周りが見えなくなるとゆう三原。

まあ、悪くは無いのだが…。

しばらくして……

三原

「はい。福本長官、よろしいですよ」

やれやれ……と思いつつ、ドアを開けると、見慣れた2人と見慣れぬ1人。

三原と神波……そして、診察を受けていたゴリツィア。ちなみに神波はゴリツィアの見張り役だ。

三原

「長官、何のご用ですか？」

福本

「ん、いや、ゴリツィアの様子を聞きに来たんだが…」

本人がいるから聞きにくいし、本人に聞いた方が早い。しかし……悲しかな、イタリア語は喋れない……。

つか、英語自体が苦手なのに……。



三原

「あれ？技官から検査の報告は出されてませんでしたっけ？」

福本

「いやいや、ペーパーじゃ解らない事もあるし……」

神波

「それでは、ゴリツィアの診察も終わりましたので」

三原

「うん、また明日」

そう言つと、ゴリツィアの後ろを歩きながら神波も出て行く。

福本

「……監視は要らないと思うがな……」

三原

「あれ？長官が命じたんじゃ……」

福本

「いや、あそこまで監視しろとは命じて無い……まあ、河内が命じたんだけどね」

福本の言う監視は自爆防止の監視であり、あそこまで監視しようとは思っていない。

なら、弾薬庫を監視すればいい話なのだが……。

福本

「しかし…大丈夫かな？」

ゴリツィアの入渠するドック

今度はゴリツィアと直接話をするため福本はゴリツィアへと足を運んだ。

イタリア語は話せ無いが、筆談ぐらいは出来るだろう。だから、ここへやって来たのだが……

福本

「あれ？河内か？」

なぜ河内がゴリツィアにいるんだ？

今まで、鹵獲艦へ自ら足を運ぶ事はあまり河内はしない。まあ、ただ参謀としての仕事が忙しくて行った事が無いだけなのだが…。

福本

「よお、河内。何してんだ？」

声を掛けると、河内はビクッ！としながら恐る恐る振り返る。

河内

「…福本様でしたか…驚かせないで下さい」

福本

「……普通に声を掛けたただけだが？」

なしてそこまで驚く？

福本

「ところで、河内？何をしている？」

河内

「ん…わ、私は別に…」

ヒラリ

何かが床に落ちた。

ヒョイ広い上げると…なんとなく合点がいった。

福本

「これは…なるほど」

河内

「ち、ち、違います！み、三原のへ、部屋の前で拾ったから、ゴリツィアのだと…」

あまりの動揺に余計な事まで喋る。

福本

「三原の？なら、ゴリツィアのじゃないのか」

こんなイタリア人少女の写真を大手ふって持っているのはゴリツィアぐらいだ。（例外が1人いるが…）

福本

「まあ、とにかく行くとするか」

ゴリツィアの部屋の前には監視役の神波。さすがに部屋の中で監視はキツいだろう。

神波

「長官！参謀長！」

福本

「監視ご苦労様。ゴリツィアは？」

神波

「はい、中です」

福本

「じゃあ、失礼するよ」

ノックの後、入ってみると、椅子に座り、机で何かしている少女…ゴリツィア。

ゴリツィア

「あなたは…先程の…」

福本

「大日本帝国海軍元帥の福本大介です」

河内

「同じく、私は河内だ」

ゴリツィア

「元帥……あなたがあの福本大介元帥……」

福本

「あはは……見えないですよね」

苦笑しつつ、左肘で河内を小突く。

河内

「あ、ああ、そういえば、三原の通路に落ちていたぞ」

ゴリツィア

「え……ああ！イタリアの写真……いつの間に……」

福本

「多分、何かの拍子に落ちたんじゃないの」

さて、真面目な話に……

和泉

「失礼するぞ〜」

フシント  
飛驒

「失礼します」

勇鷹

「同じく、失礼します……」

滝沢

「あはは……失礼します」

神波

「ちよ、長官……」

福本

「お、お前ら……何しに来たんだ？」

和泉

「いや、いくらついこの間まで敵だったとはいえ……なあ？」

飛騨<sup>フシノ</sup>

「親睦は深めたいし、酒は飲みたいし」

勇鷹

「わ、私はイタリア料理の味見を……」

滝沢

「あはは……ただ付いて来ただけです……」

福本

「お前らな……」

少々呆れつつ、ゴリツィアの方を向く。

福本

「ごめんな。うちの部下が親睦会やりたいてっていつてるんだけど……」

ゴリツィア

「え、あ、良いですよ」

河内

「…長官、ゴリツィアは日本語喋ってますが？」

福本

「あ！ほんまやん！」

次号へ

戦い済んで…(後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。



## イタリア・日本の現状

その頃……タラント軍港では……

### 戦艦イタリア艦内

アーキイラは迷っていた。イタリアを心配して部屋の前まで来たが、果たして今イタリアは喋れるだろうか？

否、そんな状況ですら無い。

ゴリツィアとゆう纏め役がいなくなり、軽巡や駆逐艦の艦魂達の士気は大幅に低下、肝心のリットリオ司令以下『アホリットリオ三姉妹』は五月蠅い人間が居なくなつたから、好き放題にやっており、現在唯一の頼りはイタリアのみである。

アーキイラ

「……イタリア、アーキイラだ…入るよ」

「……………」

返事もなく、アーキイラは躊躇いがちに部屋に入る。部屋は……薄暗かった。

窓にはカーテン、電気もついていない。

普段のイタリアの部屋を知るアーキイラはあまりの状況の違いに驚くしかない。

イタリア

「……なに、アーキイラ」

蚊の鳴く様な声にイタリアの姿を探すとベッドが目に入った。  
なぜなら、ベッドは異様に膨らんでいたからだ。

アーキイラ

「大丈夫……な訳ないか」

自分自身が大丈夫じゃないのに、恋人のイタリアが大丈夫な筈がない。

アーキイラ

「…座るよ」

そう言いながら、ベッドの淵に座る。

しかし…何か話そうにも、結局ゴリツィアの話になりそうに話せない。

イタリア

「ねえ、アーキイラ…」

アーキイラ

「ん、なに？」

イタリア

「……天国ってどんな所かな……」

アーキイラ

「…え？なんだって？」

イタリア

「……やっぱり何でもない」

そう言ったきりイタリアは黙ってしまった。  
そして、アーキイラはしつかり聞いていた。

『天国ってどんな所かな?』

アーキイラは悪寒がした。イタリアが早まらない事を心の中で祈るばかりだった。

その頃……ゴリツィアは……

福本

「お前らなあ……」

マリイダ

「あゝあ……」

部屋の現状に呆れる福本と後からやって来たマリイダ。

一言で現状を言うなら……酒飲みどもが死屍累々……と言ったところか?  
その隣で……

河内

「ふゝむ、やはり、自分の気持ちは伝えた方が良いのか……」

ゴリツィア

「やはり、溜め込むのは相手にも自分にも重しになるので」

……恋の先輩ゴリツィアから指導を受ける河内。

春日

「全く…ほら、酔っ払いは早く起きろ！」

そう言うと、酔っ払って寝ている人間や艦魂達を起こす。

ゴリツィア

「あ、あの人は…」

福本

「我らが古参艦の一隻にして、古参艦ガールズの1人の春日さんです」

ゴリツィア

「…あの方はどこの生まれですか？」

福本

「今の船体は日本ですが、元の船体はイタリア製です」

ゴリツィア

「元の船体？イタリア製？」

マリーダ

「ええ、春日と準姉妹艦の日進はイタリアで建造されていたアルゼンチン発注の装甲巡洋艦よ」

ゴリツィア

「まさか…日露開戦前に日本とロシアが競って購入しようとした春

日と日進！」

福本

「「名答！」」

ゴリツィア

「ですが、春日と日進の船体は数年前に解体された筈…それに戦艦とゆうのは…」

マリーダ

「簡単よ。元の船体を解体する時に新しい船体に移ってもらったの」

ゴリツィア

「そんな……思いつかない方法で古参の艦魂を維持させるなんて…」

福本

「いや…そつゆう目的でやったんじゃないかなかったんだけど…」

畝傍

「お〜い、宴会やってると聞いて来たんだが…」

福本

「畝傍さんまで来たよ…」

畝傍

「ん、福本長官もいたのか…ネルソンからワインを預かってたんだが…」

和泉・飛驒  
ワシントン

「もちろん、飲みます!!」

福本・マリダ・春日

「お前ら飲み過ぎだ!!」

次号へ

## イタリア・日本の現状（後書き）

今週は予定を変更し、金曜日・土曜日に『士官候補生異世界奮闘記』  
を更新いたします。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 特別編 バレンタインの襲撃！？

新米士官仮想世界イントラック諸島

昭和（太平洋戦争前）の日本にはバレンタインとゆう行事は無い。まあ、クリスマスを祝うようになったのも日本負けてからだ。しかし、現在の世界とシンクロ（？）しているので、こちらでは別だ。

基地内のある施設

勇鷹

「みんな、出来てますか？」

マリィダ

「うん」

千歳

「さすが、艦隊一の料理上手ね」

ミア

「こういった事は、勇鷹さんが一番ですね」

さて、料理が得意な勇鷹がマリィダ達からこう言われのは訳がある。現在、人艦魂問わず、バレンタインチョコを製作中。



勇鷹

「お姉ちゃんは高杉さんに?」

戦鷹

「あ、あいつの部屋を使っているからな…そ、その、お礼だ」

マリータ

「エターナルは河内に?」

エターナル

「はい!このバレンタインチョコで河内様を落としてみます!」

そう言つて自分の全体像チョコを見せる。

マリータ

「す、凄いわね…」

千歳

「吉野、頼つぺたについてるよ」

吉野

「え…あ!ありがとうございます」

勇鷹

「吉野は断然、伊吹さんだよね」

吉野

「はい、私、伊吹様なら何されても…」

ミア

「あゝ…それ以上はNGね」

このままいったら、ヤバそうなので……

ゴリツィア

「……………」

マリーダ

「あ、ゴリツィア。何してるの?」

ゴリツィア

「え、い、いや、私は……」

千歳

「みんな!ゴリツィアを捕まえなさい!」

「……………はい!……………」

慌て逃げよつとするゴリツィアを捕まる。

マリーダ

「はい、ゴリツィア。バレンタインチョコ製作は誰でも参加オツケーよ」

ゴリツィア

「え、い、いや……」

ミア

「誰か、エプロン持って来て」

その頃……男性陣

戦艦播磨艦橋

福本

「……ひっそりしてるな」

女性陣の居ない艦艇は人員が疎らであり、大型艦はひっそりとする。

ジント

「そうですね。女性陣はみんな上陸しましたからね」

遠地

「まったく、作者の指示で地中海からこっちに来たが…俺達は暇だな」

バレンタインとは無縁な男性陣は暇である。

新米士官

「よう！」

ジント

「噂すればなんとやら…ですか？」

新米士官

「おいおい…しかし、軍艦が静かになるってゆづのも珍しいよな」

福本

「あなたが人員の半分を降ろしてしまったからでしょう」

新米士官

「いや…そんなんだけどな…」

とにかく暇をもて余す男性陣は、自分の趣味や仲間内でのお喋りを始めてしまった。

マリータ

「ねえ、ま〜だ？」

勇鷹

「あと少しで固まりますから、もう少しお待ち下さい」

第一陣のチョコを大型冷蔵庫に入れ、固まるのを待つ間、テイータイムになる。

千歳

「ララはワッケイン中将に？」

ラー・カイラム

「う、うむ……」

ミア

「あ、照れてる〜」

マリータ

「はい、それ以上はダメよ」

神谷

「私は蒼紫様にです 紫音さんは杉田さんに？」

紫音

「……………（カア〜）」

千歳

「顔が真っ赤…凶星ね」

武蔵

「私はお兄ちゃんにです」

マリィダ

「武蔵、大介は私のだからね」

武蔵

「わかってますよ〜」

マリィダ

「まったく…ん？」

ヒュー…………

スコーン！

その時、高窓から何かが投げ込まれた事にマリィダは気が付いた。しかし、時既に遅し…。。

シユー……

マリィダ

「しまった！ガス弾だった……の……ね……」

その頃……戦艦播磨艦橋

新沢

「ちよ、長官！」

福本

「どうした？未来からアメリカ軍が攻めて来たか？」

新沢

「いえ……似た様な物なんです……」

新米士官

「？どうゆう事？」

新沢

「周辺を警戒していた二式大艇から連絡です。『極めて大型双胴の未確認船が接近中。作者の認識表には超兵器双胴揚陸艦デュアルクレイターと思われる』と……それからマリィダ参謀長の居る建物から不審な電波が……」

福本

「（……そういえば……昔、同じ事があったよな……超兵器の接近……不

審な電波…まさか！）新沢！陸戦隊は出撃できるな！？」

新沢

「は、はい！女性陣以外は待機中ですので…」

福本

「よし！出撃可能な艦艇を集める！陸戦隊は重装備で一時間後に集合！」

ジント

「長官！いったいどうゆう事です?!」

福本

「説明は後だ！遠地、艦隊指揮を頼む！」

遠地

「…わかったよ」

新米士官

「…まさか、またそのオチ？」

マリダ

「スピー〜……ん……は！しまった！」

やっと起きたマリダ。

しかし、明らかに部屋の様子がおかしい。

なおかつ……なぜ自分や仲間達が縛られているのか？

「翡翠、終わったよ」

「ええ、あっさり成功したわね」

この声と名前を聞いた瞬間、一発で正体が解った。

マリィダ

「翡翠！また、あなたの仕業ね！」

翡翠

「あら、マリィダ 起きちゃったの？」

「ほう、この人がマリィダさんですか」

マリィダ

「……あなた、誰よ？」

「私は豊後。元はイギリス戦艦クイーンエリザベス」

マリィダ

「…そういえば、翡翠と同じ位ヤバい人が零戦先生の所にいるって聞いた事があるわね」

千歳

「…ねえ、うちの危険人物は？」



ミア

「…そういえば、いませんね」

マリーダ

「…まあ、良いわ。後で大介がどうにかするだろうし……それよりも、あんた達！だいたい何しに来たか解るから訊かないけど、こんな事して無事に済むと思ってるの!？」

翡翠

「あら、私達の心配？もちろん、大丈夫よ」

神谷

「大丈夫って…あのね！この島にはアレキサンドリアから一緒に引き上げて来た陸戦隊三個師団がいるんだよ！」

豊後

「……だから？」

千歳

「だから…って…」

翡翠

「まあ、私はマリーダの裸チヨコが目当てだし〜」

マリーダ

「そ、そんなのするわけないでしょう！するなら、大介1人よ！」

武蔵

「……マリーダお姉ちゃん、それ、NGだと思うけど…」

マリーダ

「……と、とにかく！絶対にやらないからね！」

翡翠

「……まあ、他の子は豊後に任せるわ」

豊後

「りょうか〜い」

翡翠

「安心しなさい。こんな所で裸チヨコなんてやらないから！」

ラー・カイラム

「……安心出来るか」

その頃……

石田

「元帥、建物の周りは正体不明の女性兵と見るからに兵器な兵士に囲まれています」

福本

「……無線、播磨に繋げるか？」

フェルデナント

「はい、もう繋いであります」

福本

「ありがと。あゝ、あゝ、作者？聞こえるか？」

新米士官

『ん、もしもし？現状は？』

福本

「話の又聞きになるから、途中で石田に代わるが、まあ、聞いてくれ」

.....  
10分後.....

新米士官

『なるほど、その装備なら戦場のヴァルキュリア2の人造ヴァルキュリア兵だな』

フェルデナント

「また、面倒な事になりましたね…人造ヴァルキュリア兵の弱点は？」

新米士官

『人体をいじるから、物凄くエネルギーを使うんだ。いったいどうやってんな物を手に入れたか知らないが、近くにエネルギー供給車がある筈だ。それを破壊しろ』

遠地

『ちよつと代われ…おい、福本。例の超兵器デュアルクレイターがこっちに向かっている。多分、タクシーだろうな』

福本

「……遠地、迎撃出来るか？」

遠地

『鉄砲屋を信じろ。頑張ってみるよ』

福本

「頼む…フェルデナント、拡声器あるか？」

福本

『おい！翡翠！聞こえてるか！返事しろー！』

翡翠

「あら、なんで私だってバレたのかしら？」

マリーダ

「福本だから解ったんじゃないの」

翡翠

「さて、答えてあげましょうか……あゝ、あゝ、聞こえてるわよ」

福本

『やっぱりか！今すぐマリーダ達を解放して大人しく帰れ！豊後と一緒に！』

豊後

「あれ？私の事もバレてる？」

海龍

『ごめんなさ〜い！捕まっちゃいました〜！』

翡翠

「あのね！こっちはマリィダの裸チヨコを目当てで来てんの！そうあつさり帰りませんよ〜だ！」

福本

『うるせい！裸チヨコなんぞやらすか！』

豊後

「いいこと教えてあげるわ！今接近中のクイーンエリザベス2には自動機動兵器が搭載されてるわ！まあ…あと二時間で到着ね」

石田

『ちくしょう！人造ヴァルキュリア兵だけじゃなくて、そんな物まです持ってくんじゃねえ！』

福本

『…ちよつと待て！クイーンエリザベス2？デュアルクレイターじゃないのか？』

翡翠

「なんでそんなセンスの無い名前を使うの…まあ、本当は『翡翠はマリィダを愛でる』号に…」

マリィダ・福本

「『悪趣味な名前を付けんじゃない！！』」

翡翠

「…そんなに嫌がらなくても…まあ、無理に突入するなら私の親衛

隊がお相手するわ！まあ、無様にやられなさい！それじゃあ、交信  
終了」

福本

「……………翡翠め、もう許さん!!」

チン！

ついに怒りが限界に到達した福本が愛用の軍刀を抜く。

石田

「げ、元帥！ダメです！死にますよ!？」

福本

「うるさい！まだエネルギー供給車は見つから無いのか!？」

フェルデナント

「はい…少し時間が…」

福本

「解った！そのまま検索を続ける!」

石田

「元帥は?」

福本

「乗り込む！これ以上待てんわ!」

石田

「ですが…あの人造ヴァルキュリア兵の性能が…」

福本

「何時までも待つてられん！」

石田

「あ、元帥！……行っちゃったよ……」

遠地

「出せるのは？」

新沢

「播磨と和泉、飛騨、春日、日進、出雲、畝傍、伊吹、神波他駆逐艦六隻です」

遠地

「少ないな……」

新米士官

「はあ…俺が原因だな……」

ジント

「今さら仕方ありません。では、デュアルクレイター……では無く、クイーンエリザベス2の撃沈の為、出撃します」

遠地

「うん…全艦出撃！なんと少しでも沈めるぞ！」

親衛隊兵

「ほ、報告!!」

翡翠

「どうしたの？」

親衛隊兵

「エネルギー供給車、敵陸戦隊に見付かり撃破されました！」

豊後

「まあ、予想は出来ていましたし、クイーンエリザベス2もあと少しで到着しますしね」

翡翠

「あとはみんなを収容して…ウッフ…ウッフ…ウッフ…」

マリーダ

「…大介…」

親衛隊兵

「ほ、ほ、ほ、報告！報告!!」

翡翠

「はあ、次はなに？」

親衛隊兵

「人造ヴァルキュリア兵一個分隊及び親衛隊二個分隊壊滅！」



翡翠

「な、なんですって!!」

豊後

「バカな！エネルギー供給車の撃破はさっきだぞ！いくら何でも短時間過ぎだ！」

親衛隊兵

「た、た、た、大変です！」

翡翠

「今度はなに!？」

親衛隊兵

「敵兵一名侵入！次々と親衛隊員を峰打ちで張り倒しています!!」

豊後

「…うそ…1人で…？」

マリーダ

「プ…フ…アハハハハ！アゝハハハハ！」

翡翠

「な、何よ！いきなり笑い出して!!」

マリーダ

「ウフフ…翡翠、多分それ大介よ…あんだ、おいたが過ぎたわね！」

翡翠

「まだよ！ここにいる親衛隊はドアを守りなさい！」

親衛隊兵達

「……………はい！……………」

10名の親衛隊兵が二ヶ所のドアを守る。

親衛隊兵

『こちら最終ライン！て、敵兵が次々と隊員を…わ、きゃー！ガッ  
…！ザー……………』

豊後

「ひ、ひ、ひいー！」

翡翠

「う、う、うそ！並みの男なら敵わない筈の女性親衛隊を…いとも  
簡単に…」

親衛隊兵

「き、来ますー！」

コッ…コッ…コッ…コッ…

ゆっくりと、しかし、確実に迫る敵兵。

翡翠

「さあ、来なさいー！」

コッ…コッ…コッ…コッ…

ガチャ！

自動小銃を構える親衛隊兵。  
だが……

ズガーン！

いきなり、片方のドアが吹っ飛んだ。

吹っ飛んだドアの方を見た全員が驚いた。

なぜなら……福本は……

千歳

「…ねえ、あの2門の噴進砲の持ち方…ガンダムのハイパーバズーカ両手持ちに似てない？」

ゴリツイア

「そ、そこですか？」

神谷

「そ、それよりも！ふ、福本長官の顔とオーラ！」

ミア

「あ、あれはかなり怒ってますよ！」

マリーダ

「いえ…あれは完全にキレてるわね」

武蔵

「マリーダお姉ちゃん…ね、冷静過ぎだよ…」

ガシャ！

持っていた噴進砲を捨てると、静かに翡翠・豊後の下に迫る。  
親衛隊兵は、死神でも見ているかの様に恐々としながら見ている。

福本

「…翡翠…豊後…少しやり過ぎたな」

翡翠

「う、う、うるさいわね！こ、こっちだって、可愛子ちゃんと愛でる目的があるのよ！」

しかし、翡翠は段々と腰が引けていた。

何せ、前回感想欄で怒った将斗を見た人間が『死神』と言ったのだが、今福本は『死神』であったからだ。豊後は恐怖の余り、腰が抜け立てなくなっている。

福本

「翡翠…最後の警告だ…今すぐ帰れ」

翡翠

「そんな…人造ヴァルキュリア兵は…」

福本

「ああ、いたな…全員軍刀でぶった切った」

翡翠

「う、うそ……」

石田

「元帥！福本元帥！」

福本

「ん、石田？」

石田

「ここに居られましたか！元帥！クイーンエリザベス2…大破！」

翡翠

「う…そ…」

遠地

「撃てー！」

ズガン！ズガン！ズガン！

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！

翡翠が用意した双胴揚陸艦クイーンエリザベス2は第七艦隊艦艇の  
猛射を浴びていた。

いくらの高速のクイーンエリザベス2でも、上手い具合に妨害進路  
をとり、その巨体に砲弾を当てる第七艦隊艦艇…その攻撃に段々と  
ダメージを蓄積していた。また、駆逐艦や巡洋艦がギリギリまで接  
近し、主砲、高角砲、魚雷、機銃を撃ちまくる。

こうなれば、いくら超兵器と言えど堪らない。  
しかも……

新米士官

「お、やっと来たか！攻撃隊だ！」



新沢

「じゃあ、福本長官にそう伝えますね」

福本

「フーことや、翡翠…もうそろそろ諦めな、今度は首が飛ぶぞ」

そう言うと、愛用の軍刀を翡翠の首筋にあてる。  
ちなみに、顔は不気味な笑顔である。

翡翠

「わ、わかりました！ご、ごめんなさい！許して〜！」

マリィダ

「ダメよ、翡翠」

石田により縄を解かれたマリィダがこれまた笑顔で話す。

マリィダ

「いくら未遂に終わったっていつても、こんな大騒動起こしたんだから、責任とってもらおうよ…もちろん、豊後も」

豊後

「う…わ、私も!？」

千歳

「そつね、まず、外とここの片付けからね」

ミア

「その後で、紅茶入れてもらおうかしら」

神谷

「その次は、お仕置きにまた恥ずかしい写真を撮ってあげましょ  
うね」

翡翠・豊後

「「ひ、ひい」」

福本

「おいおい、余りやり過ぎるなよ。あと、出来るだけ帰る時間も考  
えてやれよ」

マリーダ

「もちろん、わかってる」

福本

「…それなら良いけど…じゃあ、後頼むわ」

石田

「はい」

福本

「ふう〜…今日は大変だったな」

疲れたから長官公室に戻って来た福本。



福本

「まったく…散々な休日だな」

コンコン

福本

「ん、どうぞ」

マリィダ

「じゃあ、入るね」

福本

「マリィダか」

マリィダ

「うん…今日はありがとう…助けに来てくれて」

福本

「と、当然だろう…お前とはパートナーだし、仲間助けるのは当たり前だし…」

マリィダ

「うん…そ、それでね…さっき渡しそびれたけどね…こ、これ…」

渡された物…それはハートの形をしたバレンタインチョコ。

福本

「あ、ああ、ありがとう」

マリィダ

「じ、じゃあ、私、翡翠達どうするか気になるし……い、行くね」

そう言うと、顔を真っ赤にしながら走って行った。

福本

「まったく……逃げなくても良いのに」

翡翠・豊後は散々使われ、恥ずかしい写真を撮られた後、勇鷹にバレンタインチョコの事を訊かれ、慌て帰って行った。  
ちなみに、勇鷹が翡翠に椎名さん用チョコを翡翠の為に忍ばせたのは別の話。

次号へ

**特別編 バレンタインの襲撃！？（後書き）**

えーと、零戦先生、もし翡翠達のキャラや何やらがおかしかったか、  
ごめんなさい！

ご意見ご感想をお待ちしております。

## イタリア復活!!

3月15日 深夜 タラント軍港付近の海中

伊400潜水艦内

二一ナ

「…何時も通り…動きなし」

宮木

「前回海戦で、イタリア艦隊も相当な被害を被りました。撃沈艦は無いにしても、損傷艦は多数、特にリットリオ型三隻はかなり損傷していますから…当分は出て来ないでしょう」

二一ナ

「まあ、その方が楽ね。シチリア島攻略作戦発動間近だし」

宮木

「ええ……そう言えば零の姿が見えませんか？」

二一ナ

「ああ、零なら長官認定の特別任務中」

宮木

「…はい？そんなの私は聞いていませんよ!？」

二一ナ

「それはそうよ。だって艦魂にしか出来ない任務だからよ」

宮木

「…はあ!？」

二一ナ

「ま、私達は何時も通りにするだけよ」

タラント軍港内 空母アーキウラ飛行甲板

アーキウラ

「さて…どうしたものか…」

やっとタラント軍港の艦魂達をどう立ち直らせようかとあれこれ考  
えるアーキウラ。

イタリアはやっとベッドから出てきたが、あの様子では仕事が手  
つけそうに無い。

アーキウラ

「このままだと…イタリア海軍は…」

瓦解…と思った瞬間、自分以外の何者かの気配を感じた。

アーキウラ

「何者だ!出て来い!」

ふと、艦橋の陰から誰かが出て来た。

零

「初めまして、アーキイラ。私は伊400潜水艦の艦魂、零です」

アーキイラ

「日本海軍の艦魂が何をしにきた？いや、何をしている？」

零

「何も。ただ、イタリアがどれか解らなくなったら、私の副官アーキイラに訊け…」とゴリツィアさんに言われて来ただけですけど？」

アーキイラ

「な、なに！？バカな！ゴリツィアは前回の海戦終了後に沈没した筈…」

零

「…と思わせる為に、あえてゴリツィアに関する通信を日本海軍は控えたんです」

アーキイラ

「…まさか…本当に生きているのか？」

零

「はい。ですから、恋人のイタリアに渡す物がある為に私は来ました」

アーキイラ

「…わかった。付いて来い、イタリアの所に案内する」

コンコン

アーキイラ

「イタリア、ちょっといいか？」

イタリア

「…アーキイラ？良いよ」

アーキイラが先に入り、続いて零が入る。

イタリア

「あら、アーキイラ。その隣の子は新人？」

アーキイラ

「違う…イタリア、こちらは日本海軍の潜水艦伊400の零。零、こちらがイタリア」

零

「は、初めまして」

イタリア

「あ、こちらこそ」

……… 本当にお互い敵同士か？

イタリア

「……… ええ！！ゴリツィアが生きてて、私に手紙を？うそ〜！！」

アーキウラ

「いや…さっきまでと随分キャラが変わっているが？」

イタリア

「あ、あれ？そう？…とにかく、ゴリツィアの手紙をみせて！」

零

「あ、はいはい。どうぞ」

受け取ったイタリアは急いで丁寧に折り畳まれた手紙を読む。

イタリア

「『やあ、イタリアとアーキウラ。元気……な訳ないか…今は監視されているが、別に苦にならない。それどころ、勝手に私の所に来て、宴会を始めてしまうような陽気な艦魂達だ。彼女達を見ていると羨ましくなる。駆逐艦や小型艦艇の艦魂達とは騒いだ事があるが、人も艦魂も上下も無く陽気に楽しく騒げる日本海軍は楽しそうだ。』……もう、ちょっとは自分の事を書きなさいよ」

しかし、案外嬉しそうに笑う。

イタリア

「『…聞いた話だと、日本海軍をはじめ、連合国はシチリア島攻略作戦を実施させる様だ。当然と言えば当然だ、イタリア攻略にはシチリア島は重要な根拠地…私の戦闘解析を読んでいた君なら充分に解る筈だ。日本海軍司令長官の話だとアメリカ・イギリスとの合同作戦だから、膨大な戦力を投入するそうだ』……よく聞けたね」

アーキウラ

「いや、その前によく敵司令長官と話ができましたね」



イタリア

「『多分、我々が挑んだところで敵うわけが無い…だが、それを決めるのはイタリア、君だ。あの三姉妹では現状下における決断は無理だ。戦うにしろ、降るにしろ、最後の決定は君に委ねる。ただ、君やアーケイラともう一度会える事を祈っている。では』……ゴリツィア…キザだよ」

アーケイラ

「イタリア……日本海軍はどうゆう意図でこれを？」

零

「意図ですか？ありませんよ。ただ、この手紙を渡す事は福本長官直々の認可を受けての行動なので」

アーケイラ

「……余計に訳が解らない。艦隊指揮官がいくら艦魂とはいえ、敵が味方に書いた手紙を渡す事を認可する？有り得ない事だ」

イタリア

「……アーケイラ、零を丁重にお帰してね」

アーケイラ

「は、はい。わかりました」

零

「あ、忘れるとこだった！イタリア、ゴリツィアがこれを…」

イタリア

「なに、それ？」

零

「この前、みんなでバレンタインチョコを作った時に、一緒に作ったチョコです！ただ、本人は形は歪だし、味は保証出来ないって…」

イタリア

「ありがとう、零。アーキイラ」

アーキイラ

「はい。零、こちらに」

零

「あ、はい」

イタリア

「また…会えるといいですね…零」

零とアーキイラが出て行ったあと、イタリアはゴリツィアの手紙を丁寧に畳み直し、チョコと一緒に胸に抱く。

イタリア

「もう…キザで…散々皆を心配させて…帰ったら許さないからね…」

そう言いながら、イタリアは泣いていた。  
もちろん、嬉し泣きだ。

アーキイラ

「…イタリア？」

イタリア

「あ、アーケイラ…戻ってたの？」

アーケイラ

「え、ええ…しかし、敵の手紙をわざわざ渡す事を認可する指揮官とは…聞いた事は…」

イタリア

「なら…この指揮官は相当な間抜けか余程のお人好しね」

アーケイラ

「え？」

イタリア

「さて、明日から大変よ！敵の動きを見つつ、私達がどう動くか決めないとね！」

アーケイラ

「ええ！」

ゴリツィアが生きていると知り、復活したイタリアだった。

次号へ

イタリア復活!!! (後書き)

ご意見感想をお待ちしております。

## アメリカ艦隊到着セリ

3月16日 アレキサンドリア

第七艦隊と第六大陸艦隊の全員が第一種軍装で整え、軍楽隊はアメリカ国歌を演奏し、到着したアメリカ艦隊を迎え入れた。

戦艦モンタナのタラップから降りて来る司令長官に福本は挨拶する。

福本

「お久し振りです、ハルゼー中将」

ハルゼー

「よう、福本。それと今は大将だ……って言うのは元帥殿には無粋か？」

福本

「やめて下さいよ、元帥はヨーロッパ派遣期間だけの事ですから」

ハルゼー

「あつはつはつは、君も大変だな！まあ、今度は味方として共に戦えて嬉しいぞ！」

乱暴に背中を叩くハルゼー。

痛みながらも苦笑する福本。

すると、モンタナからもう一人重要な人物が降りて来た。

「初めましてミスターフクモト、ミスマリダ。お噂はかねがね…」

福本

「初めまして、アイゼンハワー將軍。これからよろしくお願いします」

アメリカ・ヨーロッパ派遣軍及び連合軍總司令官のドワイト・アイゼンハワー將軍。

戦後、大統領に就任した事でも有名である。

アイゼンハワー

「あなたの事はよく噂で聞きますよ。全戦無敗、無敵の名将だと」

福本

「ああ…それはガセですよ。私にも敵はありますよ。苦手な英語ですがね」

アイゼンハワー

「おや、先程ハルゼー大将と話した時には、そんな事は…」

福本

「…ハルゼー大将からですか…」

その後、戦艦播磨の会議室でアイゼンハワー、ハルゼー、パットンが集まり、簡単な食事会となった。

パットン

「そついやあ、イタリア艦隊は大丈夫なのか？」

福本

「はい。もし、出て来たとしても、出てくる戦力は限られますので大丈夫かと」

まあ、もしかしたら出て来ないかも知れないけど……。

ハルゼー

「確か、マルタ島に日本海軍航空隊が進出したそうだが……」

沖田

「それについては自分が」

航空担当の沖田が前に出て地図を用いて説明する。

沖田

「マルタ島には海軍基地航空隊所属の陣風及び烈風戦闘機隊、少数ですが攻撃機隊として3式陸上攻撃機『靖国』、偵察機、対潜哨戒機が進出しております」

アイゼンハワー

「それでは、大部分の陸攻隊と富嶽はアレキサンドリアからかね？」

沖田

「はい。我々からすれば地中海は水溜まりみたいなものですから」

福本

「アメリカ陸軍の方はどうですか？」

アイゼンハワー

「B17、B24がアレキサンドリアに集められ、今回の作戦に参加します」

福本

「なるほど…」

ハルゼー

「問題はうちの艦隊だ。特に航空隊の練度に不安がある」

福本

「なら、我が艦隊の航空もお手伝いしましょう。いけるか、沖田？」

沖田

「構いませんよ。ただ、戦いながら錬成する事になりますね」

ハルゼー

「…うむ…すまんが頼む」

沖田

「はい」

アイゼンハワー将軍達が帰った後、防空指揮所で話す福本とマリィダ。

マリィダ

「ところで、ナポリのイタリア艦隊はどうする？」

福本



「うん、ワッケイン中将に任そうと思っ」

マリーダ

「旧型戦艦とは言え32cm砲戦艦四隻だからね」

福本

「ああ、まあ、後は向こう次第だけど」

マリーダ

「うん……ねえ、地中海が落ち着いたら、1日はゆっくりしようね」

福本

「ん、そうだな」

次号へ

アメリカ艦隊到着セリ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## シチリア島攻略作戦開始！

3月22日

戦艦播磨

マリイダ

「大介、もうそろそろ…」

福本

「うん…そうだね」

まだ夜も明けぬ中、艦橋は密かな緊張感に包まれていた。よく見ると、後方を進む空母紅龍の飛行甲板には出撃準備を終えた攻撃隊が待機している。

福本

「……よし、やるか！」

マリイダ

「第1航空戦隊に連絡！攻撃隊発進！」

神谷

「了解！」

空母紅龍

甲板長

「発艦命令が出たぞ！発艦始め！」

甲板長の命令に甲板員が急いで待機中の攻撃隊機がカタパルトにのせる。

甲板員

「アリソン大佐、御武運を！！」

アリソン

「オツケー！期待しててよ！」

それを聞いた甲板員達が機体から離れる。

ズバン！

アリソンが乗った烈風が打ち出される。

これに続き、艦戦隊、艦爆隊、艦攻隊が発艦した。

数時間前……

アレキサンドリアの軍用飛行場

沖田（優）

「…時間ね。全機発進！」

沖田優里大佐（派遣により昇進）が直接率いる富嶽隊と3式陸攻

靖国』隊が飛行場を飛び立つ。  
続いて、アメリカ陸軍のB24、B17爆撃機が発進する。  
向かうは……第七艦隊から発進した攻撃隊との合流空域……

アリソン

「もうそろそろなんだけど……」

合流空域に到着した攻撃隊は薄暗い中、合流する爆撃隊を探す。

クレア

『アリソン、こっちは見えないわ』

アリソン

「っう……こっちが早かったかな」

杉田

『アリソン隊長、3時の方向に機影』

見ると、確かに大型の機影が見える。

沖田（優）

『リーダーで機影を確認しました。第七艦隊の攻撃隊ですね』

アリソン

「ええ、あなたが沖田大将の従妹さんね」

沖田（優）

『はい。兄がお世話になっております』

アリソン

「あ、こちらこそ……」

富嶽

『優里ちゃん……任務中だよ?』

沖田（優）

『あ……では、護衛お願いします』

アリソン

「はい、そちらも誘導お願いします」

その頃……

ナポリ港近くの海域

士官

「司令、全艦砲戦用意出来ました」

ワッケイン

「うむ……作戦開始まで後少した。気を抜くな」

士官

「は!」

ナポリ港のイタリア艦隊を抑える任務を受けた連合王国艦隊は比較

的に騒音の低い20ノット前後で航行していた。

まあ、いくら低音航行をしても、いつかは見付かるだろうが…。

ワツケイン

「上陸支援に16隻も必要は無い。まして、アメリカからはモンタナ型やサウスダコタ型計6隻、イギリスはネルソン型にキングジョージ五世型7隻が参加する。それなら、艦隊から何隻か割って敵に対する抑えに使う…合理的だな」

ナポリにはイタリアが第一次大戦前後に建造した戦艦四隻が存在しており、新造戦艦には敵わないが、輸送船団にとっては脅威になりうる。

そう言った意味では、抑え役も充分重要な役割である。

ラー・カイラム

「ワツケイン…今何分だ？」

ワツケイン

「ん…5時30分だよ」

パートナーのラー・カイラムに尋ねられたワツケインの腕時計を見て答える。

ラー・カイラム

「…そうか」

素っ気なく答えたラー・カイラム。しかし、ワツケインは知っていた。

5時30分は…空爆開始時刻だからだ。

富嶽隊

沖田（優）

「全機爆撃用意！」

イタリア本土に侵入した富嶽隊は点在する飛行場の一つを狙っていた。

高度3000メートル、周りにはマルタ島の烈風が護衛している。もちろん、富嶽自身も銃座に就いている機銃員が周りを警戒する。

爆撃手

「ちよい右……行き過ぎ……ちよい左……よし……そのまま……よい……てえー！」

カチツ

ヒューーウ……

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！  
ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！

爆撃手

「爆撃完了！」

沖田（優）

「よし、全機帰投！」

機銃員



『4時の方向より敵戦闘機!』

沖田(優)

「全機上昇!機銃座各個に応戦!戦闘機隊には詳細に連絡!」

その頃……

アリソン

「全機、攻撃開始!」

シチリア島に近い飛行場に攻撃を開始した攻撃隊が一気に降下する。

シュパーン!

ゴワーン!

ヒューウ……

ドワーン!ドワーン!

ダダダダダダ!

ドーン!

一方的蹂躪……とゆう訳にはいかない。

杉田

『アリソン隊長、敵戦闘機です』

アリソン

「戦闘機隊、我に続け！」

何時上がったのか？あるいは別の飛行場の機か？

とにかくイタリア戦闘機と格闘戦になる。

イタリア戦闘機は格闘戦が得意だが、対し第七艦隊はロッテを組んでこれに対抗する。

戦艦播磨

神谷

「敵もなかなかやりますね」

新沢

「しかし、数には敵わない。一騎当千のパイロットでも100機、200機には手も足も出ない」

福本

「後は、こちらの被害をどれだけ抑えられるか…だな」

神谷

「長官、アメリカ艦隊及びイギリス艦隊からも攻撃隊発艦。我が艦隊も第二次攻撃隊を発艦させます」

福本

「うむ、そうしてくれ」

シチリア島攻略作戦は始まったばかりである。

次号へ

## シチリア島攻略作戦開始！（後書き）

予定通り、土曜日・日曜日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新いたします。

ご意見ご感想をお待ちしております。

一筋縄ではいきません

一時間後……

アメリカ・ヨーロッパ派遣艦隊旗艦戦艦モンタナ

参謀長

「ハルゼー長官、日本艦隊より連絡です。イタリア軍より少数ですが、空襲を受けたそうです」

ハルゼー

「そうか、まあ、日本艦隊なら大丈夫だろう。何か言付けはあるか？」

参謀長

「は、『我が艦隊を気にせず、攻撃を続行せよ』」

ハルゼー

「なら、大丈夫だ。第二次攻撃隊を発艦させろ」

参謀長

「はい……しかし、日本艦隊も我を気にせずとは……よほど艦隊に自信がありますね」

ハルゼー

「……参謀長、君は以前どこにいた？」

参謀長

「は、大西洋艦隊です。まあ、艦隊なんて形だけですが」

ハルゼー

「ふむ…あの第七艦隊はほとんどが日本海軍に沿っているが、特注品だからな」

参謀長

「特注品…ですか？」

ハルゼー

「ああ、今までの様に仕様の特化せず、凡庸性を高めた設計だからな。だから戦艦もアイオワ並みに早く、対空火器も充実している」

参謀長

「…だから、あのギルバート諸島沖海戦で敗れたと？」

ハルゼー

「他にも要因はある。だが、1つだけ言える事はあの艦隊は全員が自分達に自信を持っている。だから、あれほど戦える。ああ言った奴らは敵に回せば恐ろしいが、味方にすれば頼もしい」

参謀長

「…なるほど。それが長官の見解ですね」

ハルゼー

「あの福本がいる艦隊だからな。合流海域には無事に来るさ」

士官

「第二次攻撃隊、発艦します！」

空母から第二次攻撃隊が発艦する。

モンタナ防空指揮所

「…第七艦隊が攻撃を受けた…？」

「ええ。でも、あの艦隊の防空能力は世界一だから大丈夫です」

「そうだね。世界一強力な艦隊がマカロニ野郎の爆撃で沈むわけないしね」

さて、この喋っている少女2人。

気付いた人もいると思いますが、艦魂である。

ビーチチェアで寛ぎながら報告を聞いていたのが、モンタナの艦魂、モンタナ。

その隣で真面目に報告しているのが、二番艦のメインな艦魂メインである。

モンタナ

「まあ、あの艦隊を相手になって無事だった例はあまりない」

メイン

「…あの艦隊は指揮する人間も強いからね…ところで姉さん…服着替えなよ」

実はモンタナ、アメリカ海軍の軍服ではなく何故か日本海軍の軍服  
（女性仕様）を着ている。

モンタナ

「だって、これ、凄く着やすいんだよ」

メイン

「あのね…海龍からもらったからって、いつもいつも着ないでよ」

モンタナ

「いいじゃん、私はコスプレ着るのは好きなんだもん」

メイン

「…軍服はコスプレではありません」

少々呆れつつ、姉を補佐する真面目な妹。

……………どこの世界も同じである。

戦艦播磨

神谷

「レーダーに反応！敵機来襲！！」

福本

「少数だから大丈夫だと思っが…」

ラフィール



「見張り員！敵の動きに注意！」

水兵

「了解！」「了解！」「了解！」

ジント

「対空火器戦闘用意！」

12.7cm高角砲、40mm・25mm機銃の操作員が素早く配置に就く。

見張り員

「敵機低空にて来襲！！！」

ラフィール

「弾種！！！」

見張り員

「……わかりません！雷撃、あるいはスキップボバミングの可能性あり！！！」

ジント

「見張り員！投下したら報告！対空火器応戦開始！」

ドン！ドン！ドン！ドン！タンタンタンタンタン！  
ダダダダダダダダダ！

一斉に発射される多数の対空火器。  
しかし、敵もさることながら、対空砲火を潜り抜ける。

カチッ

見張り員

「！敵機爆弾投下！スキップボバミング！」

ラフィール

「操舵手！回避！！」

操舵手

「よーそろー！」

カランカランカラン！

操舵手が冷静に舵を切る。

ポムン…ポムン…ポムン…

バシヤン！

見張り員

「回避成功！」

福本

「油断するな！次が来るぞ！」

シチリア島攻略作戦……まだまだ、時間が掛かる。

次号へ

一筋縄ではいきません（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。



遠地

「圧倒的……なのか？我が軍は？」

福本

「…なんかのネタ？」

マリータ

「米英艦隊、砲撃開始します！」

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！  
ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！……

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！  
ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！

……

第七艦隊の砲撃に続き、米英艦隊も一斉砲撃を開始する。

上空には着弾観測の日米英観測機が空を舞い、護衛の烈風が飛んでいる。

何せ、日英米合わせて戦艦は25隻＋航空戦艦1隻に別行動をとっているが連合王国艦隊戦艦3隻、サブウム帝国艦隊戦艦1隻と膨大な戦艦を投入している。

もちろん、空母、巡洋艦、駆逐艦を合わせればこれまた膨大な数になる。

福本

「……砲撃は圧倒的だな」

遠地

「まあ…参加戦艦は40cm砲艦が多いからな」

実際、アメリカ海軍は40cm戦艦のみで、イギリス海軍は40cm戦艦は2隻、あとは36cm戦艦である。ハワイ攻略作戦の時は日本海軍は36cm戦艦が多く（第七艦隊を除く）あとの五隻が40・46cm戦艦であった。その事を思えば砲撃力は圧倒的である。

福本

「よし。陸戦隊上陸開始！」

『全軍強襲揚陸開始！』

五十嵐

「了解！日本尊武発進せよ！」

ヤマトケルミ  
日本尊武の五十嵐は無線により命令を受け、直ぐ発進する。その後ろを上陸舟艇や揚陸艦が後に続く。

菊華

「…また、凄い光景ね」

五十嵐

「ハワイ攻略作戦以来の上陸作戦だからね」

今や強襲上陸も日本陸海軍の十八番である。抵抗もなく日本尊武は海岸に上陸する。

菊華

「……………静かね」

五十嵐

「…段々不気味になってくるよ」

水兵

「どうします？試しに撃ちますか？」

五十嵐

「……………ああ。25mm機銃を撃つてみてくれ」

水兵

「はい」

ダダダダダダダダダダ  
ダダダダダダダダダダ  
ダダダダダダダダダダ

……………

……………反応なし。

五十嵐

「こちら五十嵐。試しに撃ってみましたが、反応なし。後続の上陸及び航空偵察要請します」

神谷

『了解。少し待って下さい』

福本

『要請は了解した。航空偵察は出すのに時間が掛かるが、後続は直ぐに揚陸する』

五十嵐

「は、了解しました」

石田

「…本当に静かだな」

陸戦隊兵

「ええ」

海上の上陸舟艇で待機していた石田率いる第六中隊は上陸命令により上陸した。

石田

「気よ付けろ、いつ何処から撃ってくるか解らないぞ」

陸戦隊下士官

「はい」

日本尊武の陰に隠れつつ、辺りの様子を伺う。しかし、静かなままだ。そうこうしている内に特野式内火艇が上陸する。



識名

「石田さん。異常はありませんか？」

石田

「無さすぎて怖い位だよ」

キャリー

「まあ、不気味だよね…この静けさわ」

陸戦隊下士官

「中隊長、斥候を出しますか？」

石田

「ああ、敵がいるかいないか位ははっきりしたいしな」

次号へ

砲撃は盛大に（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

それは余りにも……（前書き）

登場人物

モンタナ

アメリカ戦艦モンタナ型一番艦の艦魂。

さばさばした性格で、敵であった日本海軍に関しては余り敵愾心を抱いておらず、逆に海龍に接近し、コスプレのモデルになっているほど。

メイン

アメリカ戦艦モンタナ型二番艦メインの艦魂。

真面目な妹で、さばさばした姉のサポート兼参謀役。日本海軍に關しては蟠りがある様だが、余り表に出さない。それより、姉の現状に頭を痛めている様だ。

それは余りにも……

3月23日

無血上陸に成功した連合軍は半日を掛けて海岸とその周辺を確保し、橋頭堡を築いた。

海岸

福本

「……さて、パットンかモントゴメリーか……やれやれ」

結局、史実同様にモントゴメリーが主役の攻略作戦……にならなかった。

当初、パットンが担当する事になっていたパレルモ占領は宮崎歩兵師団と長野戦車連隊が担当する事になり、パットンはある程度フリーハンドになった。

しかし、モントゴメリーは太平洋の事を引き合いに出し、抑えにまわる事を提案（と言うか要求）してきた。もちろん、パットンは拒否し、17日に行われた作戦会議は紛糾（2人だけ）した。これに宮崎大将（派遣により昇進）がヨーロッパと太平洋の違いを説明し、なおかつ、珊瑚海海戦を引き合いに出してなんとか収めた。

だが……パットンとモントゴメリーとの間の確執は決定的となってしまうった。

マリーダ

「あら、大介が気にする事かしら？」

福本

「気にするよ。あのまま放置しておいたら、別の意味でも大変な事になるし」

マリダ

「まあ、いいんじゃないの、ほつといて。それに作者から聞いたけど、チャーチル首相は彼の事が嫌いだし」

福本

「……本当か？作者？」

はい。

元々チャーチルは彼が嫌いだった様ですね。

なおかつ、モントゴメリーが着任したのも、元々就任する人間が航空事故で足止めくらって着任出来なかったからだし。

福本

「…そうなんだ」

そうなんです。

マリダ

「ところで、私達も前線に行く？」

福本

「…誰かが聞いたら、『元帥が前線に行くなど、もってのほか！』って言うしな」

マリダ

「じゃあ、なんで海岸にいるの？」

新沢

「……その誰かとは本官の事ですか？」

福本

「うお！新沢！いたのか！？」

新沢

「……尾崎さんが前線に行くので、護衛として来ました」

福本

「……ふうん」

マリータ

「……へへえ」

新沢

「……その間はなんですか？」

福本・マリータ

「「いや、別に」「

新沢

「……とにかく行きましょう」

第七艦隊陸戦隊司令部テント

石田

「斥候の報告によりますと、周辺に敵の姿は見えないそうです」

フェルデナント

「……おかしいですね。いくらイタリア兵でも自分の国の首を絞められそうな時ぐらいは向かってくるものですがね」

石田

「艦砲射撃ぐらいでシチリア島を丸々放棄しないでしょ。まあ、あんなのを受けるイタリア兵には同情しますがね」

フェルデナント

「同感です。しかし、この周辺に敵はいないとすると、早期進軍になりますね」

福本

「しかし、それはそれで危ないな。パットン大将みたいに行け行けGOGO…とはなりませんね」

フェルデナント

「…長官ですね。来るなら連絡ぐらいして下さいよ」

マリーダ

「あら、私の事を忘れてない？」

尾崎

「私もいますよ〜」

石田

「ここまでは普通ですね」

新沢

「…………じゃあ、本官は？」

フェルデナント

「…………明日は嵐ですかね？」

石田

「いえいえ、イタリア軍が大挙して来ますよ」

新沢

「おい！なんでそうなる！？」

フェルデナント

「あまりにも珍しい事ですから」

石田

「いや、連絡士官殿も前線に出るのかと……」

新沢

「……………なんだかな〜」

福本

「さて、偵察だ、偵察。じっとしてても、敵は来ないしな」

石田

「はい。では行きましょう」

フェルデナント

「マチルダさんを付けておきます。お気よ付けて」



次号へ

それは余りにも……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 1週間後……

4月3日

シチリア島に上陸して一週間が経過した。

さすがのイタリア軍も、内陸部に進むと地形を利用した遅延戦術で対抗し始めた。

対し連合軍も正確な航空偵察と斥候、シチリアマフィアの協力の下進んでいた。また、4月1日に第七艦隊第三・第四・第五戦隊の援護射撃の下で上陸した宮崎歩兵師団と長野戦車連隊がパレルモを占領、同地付近に展開していたイタリア軍は挟撃を恐れ、北に後退した。

これといった遅延もなく、順調に進むシチリア攻略作戦……だが、これに危機感を感じたソ連のスターリンは、フランスに海軍出撃を要請していた。

播磨艦橋

遠地

「……これは本当か？」

ジント

「スターリンにこんなジョークを捻り出す頭は無いでしょう」

遠地

「…それもそうだな」

留守を預かる遠地はソ連からのフランス艦隊出撃要請を聞いて、一度ボケたがジントは的確に指摘した。

遠地

「で、迎撃はイギリス艦隊が請け負うから、第七艦隊とアメリカ艦隊はこのままシチリア攻略を支援しろと…」

ジント

「どうします?」

遠地

「さすがに活躍し過ぎもダメだろう。今回はイギリス艦隊の言葉に甘えるとするよ」

ジント

「わかりました…福本長官には伝えますか?」

遠地

「すでに転送してある」

ジント

「……いつの間…」

その頃……

前線司令部

福本

「フランスが？それは本当かい？」

優衣

「はい。遠地砲術参謀の転送ですので」

シチリア島内陸部の前線司令部で遠地の転送電を受け取った福本達。

マリーダ

「フランス艦隊がソ連の要請で出撃して、イギリス艦隊が迎え撃つ……ね」

フェルデナント

「なら、ある意味皮肉ですね。ナポレオン戦争の時にネルソン提督率いる艦隊が二度フランス艦隊を敗っています」

福本

「その再来ってわけか。しかも、イギリス艦隊の一隻はネルソンだしな」

石田

「これにフランス艦艇のどれかが、『ナポレオン』と名前があったら、世紀の対決になったかも知れませんね」

マリーダ

「ネルソンvsナポレオン……世紀を越えた対決の結果は？！……新聞のネタね」

尾崎

「え！何かありました!？」

福本

「いや…別に…」

新聞のネタと聞いてどこにいたのか現れた尾崎さん登場。

新沢

「元帥。フランス艦隊が動いたとは本当ですか？」

福本

「ああ、迎撃はイギリス艦隊が行う。だから、今回は陸上部隊の支援に徹する」

新沢

「わかりました。失礼します」

福本

「…あっさり引いたね」

フェルデナント

「最近、新沢さんの様子が変わった様な気がするんですが…」

マリーダ

「…好きな人と毎日一緒にいられるんだから、様子の1つも変わるわよ」

福本

「さて、偵察機ぐらいは出しておこうかな」

次号へ

1週間後……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。



## フランスの現状

さて、余り動こうとしなかったフランスだが、今回艦隊を出撃させたのにはソ連の要請以外にもう1つ要因がある。

それはフランス国内情勢である。

実はフランス国内は第二次大戦前からゴタゴタ続きであり、国内情勢は安定していなかった。

泰仏紛争後、日本他連合国に宣戦布告したフランスであったが余計に国内は混乱し、兵器生産においても影響が出始めた。

なおかつ、アフリカ方面のフランス植民地では、日本に宣戦布告したのを聞いた現地住民の独立運動が頻発。

これを知った第七艦隊は、日本より諜報部の人間を派遣し独立運動家と接触、連合国がこれを支援する事になった。

これによりフランス植民地では暴動が頻発する事になった。

また、フランスにとって厄介な事に、日本軍は南方資源輸送路の確保と後方の憂いを絶つ為に仏印に進攻した。

去る4月1日……夜明け前

空母赤城艦橋

士官

「山口長官。全艦準備完了しました！」

山口中将

「よし！全攻撃隊発艦せよ！」

士官

「は！」

待つてましたと言わんばかりに待機していた攻撃隊が発艦する。そして、夜明けと共に空襲を開始した。

また、陸軍も動いていた。タイから3個師団、中国から2個師団、トンキン湾から1個師団の計6個師団を投入し攻略を開始。

最初はエイプリルフルと思いい信じなかった仏印駐留軍も空襲や攻撃を受けてようやく信じた。

また、日本軍は事前にホー・チ・ミン率いるベトナム独立連盟などと接触し、協力を取り付けていた。

この為、フランス艦隊が出撃した3日にはハイノは陥落しており、泰仏紛争の痛手から回復していない仏印駐留軍はあちこちで押されていた。

それに第一機動艦隊の航空支援と艦砲射撃があつては仏印駐留軍もそうそう動け無いのは当たり前である。

こういった国内外の動揺により、フランスは窮地に立たされていた。

空母紅龍艦橋

沖田

「いつの間にか、山口多聞少将が昇進してるね」

ヴェイル

「まあ、山本長官が元帥になっていきますから、山口長官が中将になってもおかしくありませんよ」

沖田

「そうだな。さて、彩雲を出してネルソンさん達を支援するか」

ヴィル

「はい。ではさっそく」

沖田

「うん、頼むよ」

戦艦播磨艦橋

遠地

「ところで、フランス艦隊の勢力は？」

神谷

「最新の情報によりますと、リシユリユー級戦艦3隻、改リシユリユー級戦艦1隻、ダンケルク級戦艦2隻、ブルターニュ級戦艦4隻、クールベ級戦艦2隻。空母はベアルン他2〜3隻を保有していると思われる」

遠地

「戦艦は12隻……半分を本土防衛に残すとしても6隻か……」

ジント

「ですが、フランス海軍に40cm砲戦艦は無く、リシユリユー級・

改リシユリユー級は38cm砲：それ以外は33cmや34cm、30cmなど中途半端な主砲しか持たない戦艦ばかり……イギリス艦隊が数的にも装備的にも有利だと思われませんが？」

遠地

「確かにイギリスは7隻で、40cmのネルソン級と36cmのキングジョージ5世級だ。だがな……イギリス艦隊はある弱点を抱えている」

ラフィール

「弱点……ですか？」

遠地

「ああ。ネルソン級の速度は？」

ジント

「え、確か23ノット……あ！」

遠地

「そう、速度だ。キングジョージ5世は28ノット。フランス海軍のリシユリユー級は30ノット、ダンケルク級は29.5ノット……どうだ？」

神谷

「ですが、フランス艦隊が高速戦艦ばかり集めてくるとは……」

遠地

「もし、俺がフランス海軍司令で、こんな大規模艦隊に挑む事になったらヒットエンドランに徹するな……それに必要なのは速度だ」

ジント

「……確かに」

遠地

「それにフランスは列車砲王国だ。列車砲の技術が艦砲に活かされている。実際ダンケルク級の33cm砲の最大射程は約4万メートルだ」

ラフィール

「播磨や大和級並みですね」

遠地

「つまり、今度の戦艦同士の殴り合いは、数はイギリスが上だが、性能はフランスの方が上。結果は予想がつかない」

ジント

「総合的に分析すれば互角ですからね。やはり我々が出ますか？」

遠地

「イギリス海軍……ロイヤルネイビーの意地があるからな……下手に介入すると向こうの迷惑だろう」

次号へ

## フランスの現状（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## イギリス艦隊の内情

4月4日

フランス艦隊迎撃の為、分離したイギリス艦隊は一路フランス艦隊へと向かっていた。

戦艦ネルソン、ロドネー、キングジョージ5世、プリンス・オブ・ウェールズ、デューク・オブ・ヨーク、アンソン、ハウを基幹するイギリス艦隊。

ロイヤルネイビーの偉容を見せているが、残念ながら第七独立機動艦隊の偉容には敵わない。

ちなみに、一部の海軍関係者によると、イギリス海軍が第七艦隊と戦ったら、第七艦隊が勝つとゆう意見が大成を占めている。

確かに第七艦隊の艦艇は近年に建造された物が多い。対し、イギリス海軍は戦艦など老朽艦艇も多く、戦った場合、大半が撃沈破されると予想されている。

しかし、この意見に福本は『戦ってみないと解らない』と言って苦笑している。

……話が逸れた。

戦艦プリンス・オブ・ウェールズ

ネルソンはプリンス・オブ・ウェールズに来ていた。ネルソンとしては、サブム戦以来の戦闘であり、『呪い』を未だに気にするプリンスを心配して見に来た。

ネルソン

「…プリンス？」

プリンス

「はい？」

ネルソン

「…久々の戦闘だが、大丈夫か？」

プリンス

「…なんとか」

ネルソン

「そうか」

ネルソンから見れば、サブム戦から帰って来てから『呪い』はな  
りを潜めていると思っている。

だが、周り（特に人間）は未だにプリンスが『呪われている』と思  
っている様だ。まあ、元を質せば海軍上部が勝手に命名した為、艦  
魂本人に責任は無く、文句を言うなら『呪われている』名前を命名  
した海軍上部に言うべきだ。

そう言った意味では日本海軍は堅実である。

世界の海軍が人名を採用する中、日本海軍では規定された命名基準  
に従って艦名を採用する為、人名を採用する事は無い。  
その為、幸運か不運は出来てからの話だ。

ネルソン

「それに比べれば…第七艦隊は羨ましい…」

何故なら、身内の不幸話ならまだましも、鹵獲艦を加えている第七



艦隊内でこれと言った争い事（海龍の件を除く）は聞かない。愉快に飲み交わす彼らには元とは言え『敵同士』と言う『壁』などは感じられない。

これは、日本人氣質……お人好し……な事もあるが、福本元帥の統制力も一因かも知れない。

実際、殺そうとしたエンタープライズに対し、福本も何もしていない。

本人曰く『戦争だから仕方無い。恨まれるのは当たり前』…だそう  
だ。

ネルソン

「だが……彼がああだからこそ、艦隊が上手くいっているのかも知れないな」

自らの艦隊と第七艦隊との違い……それは指揮する人間が違いかもしれない。

2368

その頃……連合王国艦隊旗艦ラー・カイラム艦橋

ワッケイン

「フランス艦隊はトゥーロン……イギリス艦隊はシチリア島付近……その中間は……」

士官

「コルシカ島及びサルデーニャ島ですね」

ワッケイン

「コルシカ島か…ナポレオンが生まれた島だな」

士官

「はい。サルデーニャ島はイタリア領です。どちらにする敵領ですかね」

ワッケイン

「うむ。コルシカ及びサルデーニャ島の沿岸砲台は？」

士官

「不明です。ただ、あると考えた方がよいかと」

ワッケイン

「ならば…この二島付近で海戦が起きるな」

士官

「ですが、司令長官。今回の海戦はイギリス艦隊が迎撃する筈。なぜいきなりこんな事を？」

ワッケイン

「いや…少し気になってな…」

次号へ

## イギリス艦隊の内情（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## イギリス艦隊苦戦ス

4日深夜

水兵

「敵艦隊発見！」

先に発見したのはレーダー先進国のイギリス艦隊であった。直ぐに各艦で戦闘態勢に移行した。

フランス艦隊もその10数分後に月明かりに浮かぶイギリス艦艇を発見、戦闘態勢に移行した。

神のイタズラか？…再び砲火を交える事になったイギリス海軍とフランス海軍。イギリス海軍がトラファルガー海戦を再現するのか。あるいは、トラファルガー海戦の屈辱をフランス海軍が果たすのか。それは誰にも解らない。

戦艦ネルソン

士官

「敵艦に標準完了！」

艦長

「ファイヤー！！！」

ズゴーン！ズゴーン！ズゴーン！

ヒューーウ……

ザバーン！ザバーン！ザバーン！

この砲火が海戦開始の合図になった。

双方の水雷戦隊・巡洋艦戦隊が突撃し、激しく撃ち合う。

フランス海軍には重防衛巡洋艦や37ノットを発揮する超駆逐艦を保有している。（世界一なら日本の島風級）だが、最新機材や実戦経験ならイギリスは上、伊達にロイヤルネイビーと名乗っている訳では無い。

イギリス艦隊はレーダー射撃で駆逐艦・巡洋艦に撃ちまくり、フランス艦隊もお返しとばかりに主砲を乱射する。

そんな殴り合いの中、主力艦同士も徐々に距離を詰めていく。特にフランス艦隊はどの艦も30ノット近い高速艦であるが為にイギリス艦よりも速く距離を詰めてしまう。そして、これが同航戦になるとイギリス艦隊に不利をもたらした。

ネルソン

「！しまった！敵艦は全て高速艦か！」

リシュリユー級・ダンケルク級は最高速度で航行しながら砲撃をするのに対し、イギリス艦隊はネルソン級の23ノットに合わさなくてはならないから、キングジョージ5世以下の戦艦は最高速度の28ノットでは無く、23ノットで航行している。

この為、キングジョージ5世級ならそれ程間が空かない筈なのに段々とイギリス艦隊は離され始めた。

また、レーダー射撃はフランス艦の近くには落ちるが、速度の関係で全く当たらない。

それどころか、フランス艦は速度を微妙に調整しつつ、ネルソンの

頭を抑え始めた。

ネルソン

「くそ！これでは対馬沖海戦のロシア艦隊じゃないか！」

対馬沖海戦……日本海海戦の欧米名称である。

つまり、イギリス主力艦隊はT字戦法をとられフランス主力艦隊に頭を抑えつつある。

もちろん、これを回避する事は容易ではある。

しかし、フランス艦の方が速度的に優位であり、結局は同じ様な繰り返しになってしまう。

本来なら、速度の遅いネルソン級は後ろにやればすむ事だが、キングジョージ5世級は同世代（大和級やビスマルク級など）に比べれば攻撃力不足であり、リシユリユー級とやり合うには今回の様にネルソン級を当てにしなければならない。つまり、イギリス海軍は条約を遵守したのが祟り、それこそ、ビスマルク級や大和級といった戦艦を造らなかつたツケが回ってきてしまったのだ。

これが日本海軍なら、福本の主張もあり機関の載せ換えも出来ただろうが、ネルソン級はその特異な主砲配置により機関スペースが小さいという問題があった。今まで問題は無かつた。

だが、この低速が味方の足を引っ張る事になってしまった。

ネルソン

「ぐ……くそー！！！」

プリンス

「ネルソン姉さん！！！」

未だ40cm主砲は吠え続けているものの、敵艦に頭を抑えられ苦戦するネルソン。それを見たプリンス・オブ・ウェールズは思わずさげぶ。

そして、いつもの禁断症状は……出なかった。

サブム戦の時のままなら彼女は自分のせいだと言って泣き喚いていただろうが、今は違う。

もちろん、表情に出さない代わりに足が震えている。だが、次の瞬間、自分の両手で自分の両頬を5回叩いた。  
しかし……痛そうだ。

プリンス

「いゝゝ……けど！もう泣けない！！」

そう……2年程前にお祓いをしてもらった巫女艦長が言った言葉……

「あなたの場合、呪い以前に弱い自分に負けてるわ。まずは弱い自分に勝つ事。そこからね」

最初はこの意味が解らなかった。

イギリスに帰ってからネルソンに聞いてみると……

「それは日本武道観ではないかな？武道では試合の時に2つの敵と戦っているそうさ。1つは相手。もう1つは自分の中にいる弱い自分だそうさ」

事務仕事をしながらネルソンは答えた。

だから……

だから……

プリンス

「だからこそ！もう……弱い自分に負けたく無い！」

まだまだ……砲戦は続く……イギリスが不利のまま……

次号へ



## イギリス艦隊苦戦ス（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

ラー・カイラム、援護ス

その頃……

コルシカ島・サルデーニャ島の西の海域

戦艦ラー・カイラム艦橋

士官

「イギリス戦艦、フランス戦艦に苦戦中！」

ワッケイン

「やはり、高速艦の利点を活かしていたか」

レーダー画面を見ながらワッケインは呟く。

ふと、彼は思い出す。

50年程前に日本海軍が鎮遠・定遠と挑んだ時は32cm砲の松島級による砲戦よりも、快速を活かし中口径速射砲による砲戦を行っていた。

状況は多少違うが、フランス艦隊は同じ様な事をやっている。

砲術長

『こちら砲術長。砲戦準備完了、何時でもいけます』

ワッケイン

「よし。主砲は敵一番艦の鼻先にくるよう標準定め」

砲術長

『了解』

士官

「…しかし、司令。イギリス艦隊を援護するのは構いませんが、何故堂々とやらないのですか？」

ワッケイン

「下手に堂々とやれば、ロイヤルネイビーの面目が無いからな。向こうに失礼だ。まあ、私ならネルソン級戦艦を失う方が面目丸潰れだと思っがね」

砲術長

『標準定め完了！』

ワッケイン

「艦長…撃ち方始め」

艦長

「は、撃て！」

月夜に浮かぶ怪しい閃光。これを見たのは英仏同時だが、イギリス艦隊はリーダーでラー・カイラムの位置はつかんでいた。しかし、正体の方はつかんでいなかったが……。

ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！

ヒューーウ……………

ザバーン！ザバーン！ザバーン！ザバーン！

士官

「リシュリユー級前方に着弾！！」

艦長

「あの水柱…どの艦の砲撃だ！？」

士官

「艦長！入電です！『我これより援護する ラー・カイラム』」

艦長

「………連合王国艦隊…か」

ネルソン

「ラー・カイラム……援軍か…」

かすり傷をおいながらも、不敵に微笑むネルソン。  
闘志はまだまだ衰えていない。

ネルソン

「さあ、反撃だ！フランス艦隊、今までの借りを返すぞ！！」

ズガン！ズガン！ズガン！

ネルソンの主砲が吠える。

ラー・カイラムの援護射撃により、イギリス艦隊が有利に傾き始め

た。  
ラー・カイラムは3万メートルを維持しつつ、フランス戦艦より優速なのを活かしフランス戦艦の頭を抑え、イギリス戦艦の方に引き寄せる。

イギリス戦艦はラー・カイラムの援護射撃により体勢を立て直し、再びフランス戦艦に挑んだ。

ズダーン！ズダーン！

ズガーん！ズガーん！ズガーん！

ズドーン！ズドーン！ズドーン！ズドーン！

ラー・カイラムの43cm砲12門は一回の砲撃でフランス戦艦の行動を抑えてしまう。

これにお返しとばかりにイギリス戦艦は40cm・36cm砲を撃ち返す。

ガガーん！ガガーん！

ネルソン

「よし！」

数斉射目にリシュリユーに命中する。

イギリス戦艦の立ち直りによりフランス戦艦の被害が増加する。

この頃になると、快速戦隊・巡洋艦戦隊の戦いにも結果が出始めた。フランス艦艇も必死に応戦したが、イギリス艦隊に押されていた。体勢を立て直したイギリス戦艦と撃ち合っていた戦艦も今や守勢。ここまできたと見たフランス艦隊指揮官は撤退を命じた。

士官

「フランス艦隊、反転撤退します」

ララ（ラー・カイラム）

「追撃しないのか？」

ワッケイン

「ララ：お疲れ様」

ララ

「ふっ、別に……質問は？」

ワッケイン

「僕らは援護に来ただけだ。追撃はイギリス艦隊の仕事だ……だが、肝心の戦艦があの子ではな……」

実際、イギリス戦艦は大なり小なり損傷しており、キングジョージ5世級は主砲故障が出始めていた。

ワッケイン

「まあ、今回僕達の仕事はここまでさ……艦長。イギリス艦隊と通信開け。状況を問い合わせてくれ」

艦長

「はい」

次号へ

ラー・カイラム、援護ス（後書き）

明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新いたします。  
ご意見感想をお待ちしております。



## 困惑のフランス内情

海戦後のフランス内情を簡単に言うなら、日本にペリーが来た時の様な状況……と言えば解るだろうか。

コルシカ・サルデーニヤ島沖海戦と命名されたイギリス艦隊VSフランス艦隊の海戦は、フランス艦隊を撃退したものの、イギリス艦隊の損害もあり、イギリスの辛勝……あるいは引き分けといった結果に終わった。

だが……フランス政府にとってはそれ以上の打撃を受けた。

国内内情不安定、植民地の独立運動、仏印への日本軍侵攻……そして、イギリス艦隊との海戦の損害。

これだけでフランス政府には頭がいたかつたのだが、さらに頭を痛める出来事がダブルパンチできた。

11日午前に仏印……フランス領インドシナ……のルアンプラバンで抵抗していた駐留軍が降伏。最終的にはサイゴン攻略の為に海軍陸戦隊を投入し、合計7個師団を使った仏印攻略作戦は終了した。

そして、その午後にはアメリカ軍がシチリア島北部のメッシナを占領、シチリア島攻略作戦も終了した。

イタリアにとつてはシチリア島占領により、イタリア半島に王手をかけられた訳だが、フランスにとつてもシチリア島占領は厄介な話であり、余計に頭痛の種が増えてしまった。

この為、フランスでは講和派と継戦派に別れ、大舌戦が展開されていた。

特に軍関係者は講和派であり、第七独立機動艦隊の規模や練度ではフランス海軍が総掛かりで掛かっても負けると判断していたからだ。陸軍や空軍にしてみても、第七艦隊の実力を認めており、陸戦兵器・航空機共にフランス軍のレベルを越える物を持つ。

対し、フランス軍は航空機の性能的には良いが、未だに機銃の周辺機器不具合が改善されていない。

また、陸軍の方も同様で、今や陸戦の要である戦車に関しても、日本戦車と撃ち合って勝てない……どこるか一方的に負ける。

格好から見て陳腐化しているのではないかと思う様なフランス戦車に、重戦車と同等に撃ち合える中戦車を保有する日本軍と戦えとゆうのは酷である。

それに、フランス軍には泰仏紛争での日本製軽戦車に負けた苦い経験もある。

現在、フランスでも必死に対抗できる戦車を製作しているが、一度兵器開発や技術開発における国際競争で遅れをとると、他国に追い付くのは容易では無い。

これ等の事を踏まえ考えれば講和した方が良い事ぐらい子供でもわかる。

しかし、政府は親ソ派だから、講和の話に中々ならない。

だが、損傷した戦車の修復には損傷の規模にもよるが最低でも1ヶ月、最大でも3ヶ月以上と時間が掛かり、その間の空白を埋めるとなると旧型戦車で埋めるしかない。

しかし、連合艦隊の規模は第七艦隊だけで戦艦は13隻、連合艦隊全体では30隻と根本的に数で負けている。

海戦で損傷したイギリス艦7隻を引いても23隻……。戦力ダウンはしたが、まだ圧倒的だ。

それに戦艦の修理を敵が待ってくれる訳はない。

そんなこんなで、フランス国内では厭戦気分が漂っていた。

それをドイツ諜報部経由で手に入れ、メッシナで報告を受けた福本は、パットンが同席していたのも気にせず、ニヤリと笑った。

次号へ

## 困惑のフランス内情（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

パリ奇襲作戦！！

4月15日

グオングオングオングオングオングオングオン……

地中海を北西寄りに高度一万メートルを飛ぶ富嶽隊。20機の編隊は一路フランスに向かい飛行する。

富嶽隊一番機

沖田（優里）

「ワシントンの次はパリか…私達も最近活躍してるね」

富嶽

「そつだね」

最近、連合軍内での富嶽の評価が上がっている。

今のところ、ヨーロッパ方面にB29は配備されておらず、精々B17やB24の後期型である。

しかし、大型六発機の富嶽はその巨体ゆえに目立ち、その機内外装備は連合軍爆撃機乗り達からは羨ましがられている。

沖田（優）

「我ら海鷲海を越え、狙いし場所は華のパリ」

富嶽

「……なに、それ？」

沖田（優）

「自作曲『富嶽隊』の二番目歌詞」

富嶽

「…一番は？」

沖田（優）

「我ら海鷲海を越え、狙いし場所は、ワシントン。戦終わらずがために、行くぞと我ら、富嶽隊」

富嶽

「…流行るかな？」

沖田（優）

「それは…わかんない」

……作戦中とは思えない陽気な空気である。

さて、フランスの内情を掴んだ福本が考えた……と言うより思い付いた……作戦、それはパリ飛行奇襲作戦、通称『フランス人と政府に富嶽を見てもらおう！』作戦（尾崎春奈名称考案）を富嶽隊に命じた。

これを受けた沖田優里は直ぐに打ち合わせと準備を済ませ、富嶽隊に出撃を命じた。

再び……富嶽隊

操縦士

「司令、フランス国内上空です」

沖田（優）

「そう、予定通りね」

チャート（地図）を見ながら答える。

沖田（優）

「このまま進めばリヨン市ね……そこから北西に300m行けばパリか」

しかし、何度見てもヨーロッパの国境は複雑である。フランス・イタリア国境のフランス寄りにはモナコがあり、スペインとの国境にはアンドラがある。

また、フランス・ベルギー・ドイツの間にルクセンブルクがある。そして、スイスにはリヒテンシュタインがある。

ヨーロッパでは数多くの戦乱が発生し、ああだこうだとしている間にこういった緩衝国の様な形で国が出来たのだろう。

そう言った意味ではポーランドもソ連との緩衝国として独立出来たのだが、今やその国もソ連の支配下である。

しかし、そんな中でもポーランド人は内心では再び独立を取り戻すべく耐えている筈だ。

後は自分達が何処までやれるかだ。

フランスが講和し、イタリアが講和すれば、いよいよ対ソ戦であり、ソ連単独の戦いになり、ソ連支配に苦しむ人々は立ち上がるだろう。

自分達の任務はその切っ掛けを作るだけだ。

士官

「司令！パリです！パリが見えます！」

双眼鏡で見ると、エッフェル塔が見える。

沖田（優）

「全機打ち合わせ通りに降下！本機はエッフェル塔を狙う！」

『『『『『了解！！』』』』』』

ちなみに、沖田の富嶽以外は爆装庫は空である。3000mまで降下すると、富嶽は編隊を解く。しかし、沖田機だけはエッフェル塔に向かう。

富嶽

「地上に人影…投下は慎重に…」

沖田（優）

「オツケー。爆撃手、投下は慎重に」

爆撃手

「了解。爆撃進路に入ります…よーそろ…そのまま…そのまま…よーい…てえー！」

カチッ

ヒューーウ……

爆撃手

「投下完了！」

機銃手

『6時の方向より敵影多数！迎撃です！』

沖田（優）

「任務は完了したわ！全機高度一万まで上昇！各機銃座は各個に応戦！帰るわよ！」

高度一万メートルまで上昇し、迎撃を振り切った富嶽隊は無事アレキサンドリアに帰還した。

ちなみに帰って来た富嶽隊に福本は……

福本

「パリの街並みは見たかね？」

……と質問すると……

沖田（優）

「はい！バッチリと！ですが……今度は街並みを歩いてみたいですね」

……と答えたそつだ。



次号へ

パリ奇襲作戦！！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

新たなる戦局へ（前書き）

新米士官

「新聞やテレビを見た読者の皆様、本日は東京大空襲の日です」

福本

「そつだな」

新米士官

「ふ、もしあの時に烈風や陣風や火龍や震電や飛燕の高馬力型や富嶽の掃射型が多数あったら、B29なんかジユラルミンの塊に変えてやったものを…」

マリダ

「さ、作者、お、落ち着いて…」

新米士官

「あゝ、ルメイはサイパンで焼夷弾で焼いたら良かったかな…」

福本

「うわ…作者の暗黒面が…」

新米士官

「はあ…ルーズベルトは…やっぱり焼けば良かったかな…東京住民9万人の苦しみを味あわせてあげれば良かった…」

ゴッソ！

マリダ

「11、11ね以上はやバそつなので、今回は1111まで〜（・・・）」

## 新たなる戦局へ

4月20日

富嶽によるパリ奇襲作戦は大成功に終わった。  
沖田機が投下した1トン爆弾はエッフェル塔前の広場に命中した。  
しかし、爆発はしない。  
なぜなら、信管も爆薬も抜いた空爆弾だからだ。  
代わりに白ペンキにフランス語でこう書かれていた。

『懸命な者はこの意味が解るだろう』

軍関係者は一発でわかった。  
連合軍が本気を出せばパリを爆撃できる。  
実際、迎撃に出た戦闘機からは、追い掛けたが追い付けず、高度一  
万メートルまで上昇したと報告を受けた。  
連合軍がそんな爆撃機ばかりだとは思わないが、飛来したのは日  
本機である。これには遂にフランス内部も動いた。

4月19日の深夜、いままで準備していたフランス軍一個師団は政  
府関係各所を襲撃、数時間で制圧。  
また同時に、一個分隊程の兵力が政府閣僚を逮捕・監禁しあ。  
翌20日、フランスは世界に向けクーデターの成功と、臨時政府首  
班としてシャルル・ド・ゴール大將が就任した事を世界に報告。  
また、フランス臨時政府は講和を宣言。  
これに対し日本政府他連合国各国も承認。

戦争終結にまた一步近付いた。

その頃……メッシナ

福本

「フランス政府が講和を申し出たか……良かった」

そう言いながら、テーブルのミルクティーを一口飲む。

メッシナではイタリア半島攻略作戦の為、陸軍部隊が集結・準備中である。

また、掃海艦が付近の機雷などの掃海にあたっている。

福本

「海のパットン……陸のハルゼー……か」

パットンとハルゼー……同じ様な性格の2人だが、そんな人間とも仲良くなってしまう自分は凄……のか？

ただ、モントゴメリー将軍の様に物量で攻めるやり方はソ連軍相手には通用しない。

やはり、パットン将軍の様にチャンスとみれば突撃する様な事であれば、あのソ連軍と戦えない。

コンコン

福本

「あ、はい。どうぞ」

パットン

「失礼するぜ」

噂をすればなんとやら……と言ったところか、パットン将軍が来た。

パットン

「聞いたかダイスケ？フランスが講和を申し出たぜ」

福本

「ええ、エッフェル塔の目の前に爆弾を放り込んだのが効いた様ですな」

パットン

「わっはっはっは！確かにな！」

豪快に笑うパットン。

だが、直ぐに真剣な表情になる。

パットン

「地中海は連合国軍が抑えた、イタリアももう直ぐ降伏するだろう。となると次はソ連だ」

福本

「そうですね」

パットン

「大戦初期のポーランドと東プロイセン・リトアニア戦を見る限り、ソ連の機甲戦能力は高い。特にT-34やKV-1戦車の先行量産型を投入している事から見て向こうも機甲戦を重視していると見ていいが……」

福本

「確かに、ソ連はナチスドイツとの密約で戦車の実験や訓練場所を提供していました。その為、機甲戦にはある程度精通していると思えます」

パットン

「うむ…となると、航空打撃に頼る我が軍は不利だな」

確かに、アメリカ軍は戦車より航空機に金を掛けている。

その為か、どうも戦車は大量生産重視で攻撃・防御がいま一つだ。もちろん、M26やM28戦車やM3中戦車を改造した対戦車自走砲など策をことうじているそうだが…。

福本

「ですが、M26・28がアメリカ軍にあります。それである程度は……」

パットン

「…残念ながら、数が無い」

福本

「数的主力はM4シャーマンですからね」

いくら戦訓で強化しているからといっても、シャーマンでは限界がある。

しかも、シャーマンは歩兵支援戦車だから余計かも知れないが…。

パットン

「そこでだ！頼みがある！！」



福本

「はあ？」

パットンが……頼み？

パットン

「君のところには空母の艦型をした、野戦工廠があると聞いた！」

福本

「え、ええ……」

まさか戦車・陸戦兵器の研究開発艦だとは言えない。

パットン

「そこで！我が軍からM4シャーマン2両を渡す！魔改造してくれ！」

ズデーテン！！

パットン

「……大丈夫か？」

福本

「え、ええ……まあ」

転じた。

まさか…パットン将軍の口から『魔改造』と言つ言葉が出るとは！

福本

「で、ですが、現在『未来』はイギリスのクルセイダー戦車とイタ  
リア戦車の改造中で空気が…」

パットン

「今で無くていい。対ソ戦に間に合う様に調整してくれ！」

福本

「は、はあ……担当者と相談してみます……」

……安請け合いだなと思いつつ、野口博士に相談しようと思つ福本  
だった。

次号へ

新たな戦局へ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

イタリア半島へ……

4月24日

13日間の準備を終え、連合国軍はシチリア島からイタリア半島に上陸した。

これを援護すべく、援護射撃と航空攻撃が開始される。

福本

「ありや……敵にも同情するよ」

上陸用舟艇から降りた福本が呟く。

石田

「元帥！あまり前に行かないで下さい！」

福本

「はいよ」

返事をしつつも、周りを見回す福本。

福本

「……人の気配が無い……水際撃退を諦めたか」

シチリア島と同じだ。

つまり、敵は内陸で迎え射つつもりだ。

石田

「元帥？」

福本

「石田。後続を揚陸させる」

石田

「え、あ、はい」

フェルデナント

「…敵がいない？」

石田

「はい。影も形もありません」

司令部代わりに設営したテントで報告を受けたフェルデナント。

福本

「……ローマで何かおきているのか？それなら話は解るが…」

フェルデナント

「ローマで…ですか？」

福本

「そ、ローマで」

シチリア島が占領され、フランスが講和し、地中海の制海権を取ら

れ、イタリア半島に上陸した……なんぞになったら、フランス同様、ヤバイ!となつて講和するなり何なりした方が良く、子供やバカの頭でも解る。

それに、イタリアはムッソリーニの一本筋ではなく、イタリア国王 ヴィトリオ・エマヌエーレ三世が居り、軍首脳や政府内部でも国王派が多い。

……となると……

福本

「……ローマを狙うか」

フェルデナント

「…え？」

福本

「こんな所に上陸して、ローマへ行くのは時間の無駄だ。ティレニア海を突っ切つてローマを狙う！」

フェルデナント

「なあ!!」

石田

「ほ、本気ですか!？」

福本

「『本気』と書いて、マジと読む!史実みたいにドイツが敵じゃあるまいし、ここは一気に決着をつける!」

フェルデナント

「し、史実がどうかは置いて……で、ですが、我が陸戦隊やイギリス軍は上陸したばかり。今から載せるとなると……」

福本

「誰が俺達が行くと言った？こんな作戦が好きな人間がまだ上陸して無いだろ？」

フェルデナント

「……ま、まさか、パットン將軍を！？」

福本

「そう言う事だ。マリーダ、すまないけど、電話回してくれる？」

マリーダ

「ええ、わかったわ」

メッシナ アメリカ軍司令部

士官

「將軍、お電話です」

パットン

「おう、すまない」

士官が持つて来た電話を受け取るパットン。

パットン

「もしもし？パットンだ」

福本

『あ、どうも、パットン將軍』

パットン

「お、ダイスケか。どうだ、そつちは？」

福本

『いや、イタリア軍は何処にいるのか……静かなもんですよ』

パットン

「わつはつはつは！そうか、まあ、日本軍が来ると知って、尻尾巻いて逃げたんだろう」

福本

『そうかも知れません……ところでパットン將軍。モントゴメリー將軍を出し抜きませんか？』

こう言った瞬間、パットンの表情が変わった。

パットン

「…ダイスケ、それはヤバイんじゃないのか？ただでさえ、俺とあいつの仲はヤバイんだ、それに油を注ぐ事になる…連合国軍が瓦解するぜ？」

福本

『そうそう簡単に連合国軍は瓦解しませんよ。それにアイゼンハワー司令官には私が言っておきましょう……どうですか？』

この時、パットンは考えた。



あの偉そうなモントゴメリー將軍を出し抜くのは悪くない。  
それに、ダイスケの事だからインパクトとある提案だろう。

パットン

「…もし、後で問題になったらどうする？」

福本

『その時は私が悪役になりましょう。まあ、私が言い出しっぺですし……それに自分はあなたを相当かっってるんですよ』

パットン

「……よし、その話のつた！で、どうすればいい？」

福本

『はい。では、まず狙い場所ですが……』

福本

「では、お願いします」

そう言うと電話を戻す。

福本

「パットン將軍、快く応じてくれました」

フェルデナント

「なんとまあ……大丈夫なんですか？」

マリーダ

「大丈夫よ。それに、もし何かあっても国際問題にはならないでしょう」

石田

「…ある意味不安ですね」

フェルデナント

「ええ…そうですね」

福本

「次はアイゼンハワー将軍ですね。マリーダ？」

マリーダ

「オツケー！」

アレキサンドリア連合軍司令部

福本

『…とまあ、こんな作戦です。アイゼンハワー将軍』

パットンとの話を織り交ぜ今までの事情を説明していた福本。

アイゼンハワー

「アイクで結構です、元帥…なるほど、ソ連の動きが気になる現状下では一発で決めやすく、パットン中将好みの作戦ですね……です  
がよろしいのですか？」

福本

『なに、世界をスターリンの物にさせない為です。悪役の一回や二回、軽いものですよ…それにのんたらとローマに向かうより効率が良いと思いますか?』

アイゼンハワー

「……わかりました。あなたの策を採用しましょう……お願いします」

福本

『はい…こちらこそありがとうございます』

次号へ

イタリア半島へ……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

早期終結なるか？

4月27日 早朝

連合王国艦隊旗艦ラー・カイルム

ワッケイン

「いやはや……突然の作戦とはいえ、無茶をやりませぬ」

ラー・カイルム（ララ）

「そうだな……まあ、あの長官の場合、陸戦の最前線に行く時点で、無茶をやっているがな」

ローマを突く為、パットン中将率いるアメリカ軍を支援すべく待機する連合王国艦隊。

ナポリ封鎖を第七艦隊へとバトンタッチし、一路ティレニア海を突っ切つて来たのだ。

士官

「司令、第一次攻撃隊準備完了しました」

ワッケイン

「わかった。ネエル・アーガマの銀河隊に発進命令を出せ」

士官

「は！」

装甲空母ネエル・アーガマ飛行甲板

ネエル・アーガマの飛行甲板には意外な物が鎮座していた。  
日本海軍が開発した、陸上爆撃機『銀河』である。

ただ、『銀河』は魚雷も搭載出来るから、純粹に爆撃機とは言い難い。

しかし、問題はそこではなく、なぜ銀河が空母に載っているのか？  
…だ。

実は、ネエル・アーガマに搭載されているのは、連合王国海軍が日本海軍に頼んで開発してもらった銀河32型……通称『銀河』艦上型である。

甲板長

「発進命令だ！銀河隊を出せ！」

甲板員

「……………了解！！……………」

甲板員が銀河をカタパルトまで押し、発進準備をすすめる。

そんな光景を艦橋の最上部、防空指揮所から見て見ている少女が一人。

「やっと、我が長弓を出す刻がきたか……」

この時点でお分かりの方もいるかと思うが、彼女はネエル・アーガマの艦魂、ネエルである。

ちなみに、彼女の格好は他の艦魂達とは違う。

頭には制帽だが、首から下は……なんと甲冑姿。

これに、兜と馬を用意すれば、立派な西洋騎士少女の出来上がりである。

ネエル

「ふん、自分の容姿に興味は無い」

…聞こえてたんかい。

ズドン！

カタパルトにのっていた銀河が打ち出される。

ネエル・アーガマを発進した銀河20機は同空母の烈風隊の護衛を受け、一路ローマに向かう。

そして、ローマ近郊に到着した瞬間、銀河隊は予め定められていた目標に急降下爆撃を仕掛ける。

夜が明けていないだけに、ローマ市民は突然の爆撃に飛び起きる。

また、兵員も慌て飛び起き、対空火器に飛び就く。

しかし、烈風隊がそうはさせじと銃撃とロケット弾で攻撃する。

ただ、ローマ市内の目標は出来るだけ外し、間違ってもバチカン市国への攻撃は回避した。

イタリア軍は急いで近郊の飛行場から戦闘機隊を上げたが、攻撃隊は攻撃を終えてさっさと帰還した。

ラー・カイラム艦橋

士官

「司令。第二次攻撃隊、準備できましたか？」

ワッケイン

「うむ…攻撃隊は発進！飛行場を出来るだけ叩け！」

士官

「は！アメリカ軍を援護する為ですからね」

ワッケイン

「ああ、障害になるなら、ある程度敵部隊を叩け。そうすれば、自然に道は空く」

士官

「はい！」

ローマを占領による早期終結……果たして、吉と出るか？凶と出るか？

次号へ



早期終結なるか？（後書き）

明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新致します。お楽しみに。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

アメリカ軍、アンツィオに上陸セリ！

数時間後……

パットン

「全軍突撃！進め進め進めー！」

専用改造コマンドカーの上で吠えるパットン將軍。

アンツィオに上陸したパットンは、親友のブラッドレー將軍に橋頭堡の守備を任せると、直ぐ様進撃を開始した。

そして、その専用コマンドカーに乗り組んだ2人の男女……。

新沢

「うわ……もう……駄目……」

パットン將軍のハイテンションに付いていけない連絡係の新沢と……

尾崎

「ヤッホー！！行け行けー！」

しっかり付いていける従軍記者の尾崎さん……。

新沢

「あ、あの…パットン將軍？」

パットン

「おう！なんだ？」

新沢

「あ、あの……このまま行ったら、今日中にでもローマに突入しそうな勢いですが……」

パットン

「わっはっはっは！何を言っている？そのつもりで進撃しているのだが？」

新沢

「……………（マジ！？）」

……一番聞きたく無かった答えを笑いながら答えられた新沢。

新沢

「（ダメだ……元帥の前線行きでさえ止められないのに……この將軍なんか、止める以前の問題だ……）」

ちなみに、なぜ新沢が止めようとしているかとゆくと、このまま下手に進めば、味方の誤爆を生む可能性があるし、なおかつ、後続と補給隊が追いつかない可能性がある。

特に補給隊が追いつかないのは大問題である。

しかしだ……この状況下では新沢が止めたところで止まりそうも無い。

アメリカ艦隊旗艦モンタナ艦橋

ハルゼー

「なに！パットンがアンツイオに上陸してローマに向かってると

「!!」

士官

「は、はい!」

報告を聞いたハルゼーは思わず叫んだ。

しかし、次の発言は士官にとっては予想外の発言だった。

ハルゼー

「それで!パットンを援護しているのは、どの艦隊だ!？」

士官

「え、え〜と……第6大陸の連合王国艦隊ですが……」

ハルゼー

「よし、攻撃隊発進!パットンを援護する!」

士官

「……はあ?ですが、援護は……」

ハルゼー

「あのな!アメリカの軍隊を日本の友好国が援護してくれているんだぞ!これ以上向こうに迷惑なんか掛けれるか!アメリカ軍の援護はアメリカがするもんなんだ!解ったらさっさと攻撃隊を発進させる!」

士官

「は、は、はい!」

士官は慌て出ていく。

すると、ハルゼーがニヤリと笑う。

参謀長

「長官。なんで笑っていらしゃるんですか？」

ハルゼー

「ん？なに…ちよつとな」

まさか、福本から今回の事……本人曰く『作戦が少し変わりました』だそうだ……を聞いていたハルゼー。しかし、まさかローマを直接狙うとは……。

ハルゼー

「まったく…あいつには敵わないぜ……」

『アンツイオに連合軍上陸！』

これを聞いたイタリア軍は慌て、混乱した。

そして、その隙を突いたのが日本軍と第6大陸からの派遣軍だった。出来た隙から前線を突破し、電撃戦を展開。

戦車・歩兵・航空機の相互支援でイタリア軍を蹴散らす。

これに対しイタリア軍も抵抗するが、一度抵抗線を破られると、中々埋めるのは難しい。

それに抵抗の激しい所は迂回する等して後続部隊に任せる。

また、パットン將軍の方も順調で、こちらも電撃戦を展開しイタリアの無防備な横腹を食い破る。

結局、パットン將軍率いる部隊は日暮れまでに、ローマまであと一歩の所まで進撃し、夜営に入った。

これが日本軍なら夜襲を敢行しただろうが、残念ながらアメリカ軍は夜襲が苦手である。  
だが、パットンは新沢と尾崎の前で、『明日の夕飯はローマのレストランだな！』と宣言したそうだ…。

次号へ

アメリカ軍、アンツィオに上陸セリ！（後書き）

ご意見感想をお待ちしております。

## イタリアが降伏した日 前編

4月28日 夜明け頃

空母陣龍

ビー！ビー！ビー！

『敵機来襲せり！待機パイロットは迎撃にあたれ！繰り返す…』

士官

「総員搭乗！急げ！」

甲板員が大慌てで陣風をカタパルトまで押し、パイロットも乗り組む。

クリス

「敵機は？」

甲板員

「10機前後ですが、まだ増える可能性も…」

クリス

「オツケー。わかったわ」

機銃員が銃座に就く中、クリス以下パイロット達も、空に舞い上がる。



一体、この攻撃に意味などあるのだろうか？

コックピットからそう思わざるおえない。

噂ではアンツイオにアメリカ軍が上陸してローマに向かっていとか、前線が日本軍に突破されたとか……。なら、陸上部隊を叩けばいいはずなのに、艦隊を攻撃するのは間違っているんじゃないかと思うのは新米だからか？

「はあ………」

しかし、暢気に溜め息を吐けるのもここまでだった。

ズダダダダダ！

いきなりの攻撃。

それをギリギリに回避する。

「く………」

それでも、敵の後ろに付こうとそのまま旋回する。

クリス

「回避したわね」

狙ったマツキMC202フォルゴレのパイロットに感心しながら、後ろを取られまいと旋回する。

そうやって旋回する内に、フォルゴレのパイロットが一瞬だが見えた。

見た限り…自分と同じ年位の青年が驚いている。

まさか、戦っている相手が女だとは思っていなかったのだらう。

ガンガン！

クリス

「っ！当たった」

しかし、ある程度頑丈に作られた陣風の損傷は軽い。

クリス

「…………ごめん」

ズダダダダ！

つつい口から出た謝罪の言葉を述べながら引き金を引く。

ガガガ…ガガガ！

被弾したフォルゴレは海へと落ちていった。

数時間後……

パットン

「全軍！進撃だー！今日中にローマに入れー！」

「「「「「「おうー！」「「「「「」

新沢

「……………付いてこれない」

……………このテンションに。

しかも、これが発射してから延々と続いているのだ……………。  
しかし、ローマに近付いている筈なのに……………銃弾一発たりとも飛んでこない。

新沢

「……………いったい……………どうなっているんだ？」

疑問を持ちつつも、様子を見る事にした新沢。

しかし、何の攻撃もなく、ローマ近郊まで来た時……………

パットン

「！全軍停止！」

いきなり、パットンが停止命令を出した。

見ると、白旗を持った一団が前に居る。

そして、パットンや新沢はある事実を知る事になる。

それは、昨夜の事だった。ムッソリーニは国王ヴィットリオ・エマ

又エーレ三世と謁見した直後、反ムツソリーニ派によって逮捕・監禁された。

その後、ピエトロ・ベドリオ元帥首班の臨時政権が成立。

臨時政府はローマ近郊に近付いていたパットン將軍率いる部隊に停戦及び講和を申し出た。

結局……イタリアはムツソリーニの逮捕と臨時政府の停戦により、イタリア攻略作戦の大部分は終了した。

次号へ

イタリアが降伏した日 前編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

イタリアが降伏した日 後編（前書き）

登場人物

ネエル・アーガマ

装甲空母ネエル・アーガマの艦魂。愛称はネエル。

装甲空母ゆえんか、西洋甲冑で身を包んでいる。

周りとは違う為か、海龍は『騎士少女！』と言って撮影しまくっている。（本人はもちろん知っているが、自分の身なりに無頓着だから放置している）  
得物は太弓。

## イタリアが降伏した日 後編

ムツソリーニの逮捕とローマの臨時政府樹立、そして、イタリアの降伏……。

イタリア臨時政府は各地で抵抗するイタリア軍に戦闘中止を命令したが、やはりどこかには頑固者が居り、散発的な抵抗が続いている。ナポリのイタリア艦隊は連合王国艦隊・アメリカ艦隊に降伏し、タラント軍港も抵抗する素振りはないそうだ。

ローマ近郊のイタリア軍部隊もパットン將軍率いるアメリカ軍に投降しているそうだ。

しかし、ローマより北西：アルプス山脈からローマまでの広大な地域に残存するイタリア軍部隊の武装解除となると大変な時間が掛かると予想され、少なく見積もっても3週間から1ヶ月程の時間が必要とされた。しかし、最終的にはイタリアも正式に講和すればイタリア軍の協力が必要になる為、一時的な武器のお預かりに近い状態になるだろう。

それにギリシャに近い事もあり、早期防空体制の設立の必要から考えても、のんたらとやってはいただろう。

イタリア某所

福本

「となると、シチリア島の航空隊だけじゃあ足りないな……イギリス・アメリカから増援が必要だ」

石田

「ですが、P40やP39では意味ありません。P38を大量配備

して、P47サンダーボルトを投入してくれないと…」

マリーダ

「そうね……って、なんで陸戦隊のあなたがP47の事を知ってるの？」

石田

「いえ…噂でちらほらと……まあ、優衣が教えてくれたんですけど」

フェルデナント

「まったく……それで、本日はどこで夜営しますか？」

福本

「今日中にはナポリに着けるだろう…久しぶりに足を伸ばして寝れるかな」

フェルデナント

「そして、翌日の朝には艦載機に乗って第七艦隊と合流ですか？」

福本

「…ダメか？」

フェルデナント

「タラント軍港に元帥が会いたい人がいらしゃるんですよね？仕方ありませんよ」

福本

「すまん」

マリーダ



「まあ…本来なら私達がいる時点で邪魔なだけだね」

フェルデナント

「いえ、前線に出て頂く方が幾分、陸戦隊員達も安心出来ますので」

福本

「それは良かった…と、言うべきか？」

石田

「それはそうですね」

空母陣龍医務室

クリスは医務室にいた。

それは偶然だったのか…必然だったのか…。

迎撃を終え、母艦に着艦すると大騒ぎになっていた。エセックスに聞くと、エセックスの近くでフォルゴレが不時着し、それを回収したのだ。

すると、パイロットが生きており、早速医務室に担ぎ込んだそうだ。そのパイロットが気になり…今に至る。

エセックス  
陣龍

「クリス……」

クリス

「…え、あ、ごめんごめん。なに？」

エセックス  
陣龍

「…そのパイロットがどうかしたの？」

クリス

「うん……多分、私が撃墜した機のパイロットだから…」

エセックス  
陣龍

「あ…その…ごめん」

クリス

「ううん…しょうがないもん」

…そう、これが戦争なのだ…と再認識させられてしまう。

「ん……ううん……」

エセックス  
陣龍

「！クリス！」

クリス

「あ！ちよつと、あなた、大丈夫？」

「……う、うんは……」

クリス

「ここは日本海軍第七艦隊所属空母陣龍の医務室よ…大丈夫、いま、  
軍医を呼んで来るから！」

そう言うと、クリスは軍医を呼びに行った。

次号へ

イタリヤが降伏した日 後編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## タラント軍港で…

4月30日 タラント軍港

イタリア降伏より2日……福本とマリータ・第七艦隊の面々は沖合いでサブリン艦隊と合流し、タラント軍港に入港した。

福本

「これと言った騒ぎも無く、無事に武装解除が出来て良かったですね」

マリータ

「まあ、武装解除と言っても、形式上の事だからね」

アルファーニ

「ソ連との距離がありますから、イタリア軍の早期復帰が望まれますね」

福本

「まったく。只でさえ、スターリンと戦うのに戦力を集めている最中だからな」

福本

「そういえば、和泉と飛騨の機嫌が良さそうでしたけど…」

福本

「あいつらめ……もう酒盛りの準備しているな」

酒が飲めるとなると、真っ先に宴会支度をするような2人だ。もう始めているかも知れないが…。

マリーダ

「…早めに帰って来て良かったわね」

アルファーニ

「本当ですね」

### 戦艦播磨会議室

和泉

「ではでは！早速宴会…」

ヒヨイ

福本

「あかんぞ」

フシント、  
飛驒

「あ〜！お酒〜（；|；|）」

まさに今始めようとした時、突然現れた福本によって酒瓶を没収された、和泉と飛驒。

和泉

「てー！いつの間になー!？」

マリーダ

「あなたが宴会するだろうと思ってたら、偶々、零に会ったから転移してもらったの」

福田

「お前らの考えは大体解るっの」

和泉・飛驒

「ワシントン……」

福本

「ここにいる全員に命じます。宴会云々は構いませんが、現在人間は仕事中なので飲酒は日が暮れるまで禁止。夜になったら我々も無礼講で騒ぎますので、それまでジューズで我慢して下さい。これは司令長官命令です」

さすがに命令となるとこれは聞くしかない。

和泉

「嫌だ〜！飲む！」

飛驒

「お酒返せ〜！！」

…… 2人を除いて。

福本

「あのな…日が暮れるまで待ってって言ってるだろう」

和泉

「今飲むんだ！こうなれば、実力行使で取り返す！」

ワシントン  
飛驒

「サー、イエス、サー！」

……ダメだこりゃ。

福本

「ごめん、マリダ。酒瓶持っとして……割ると勿体無いから」

マリダ

「はいはい」

和泉・飛驒  
ワシントン

「酒返せー！……！」

そう叫びながら、2人が福本に向かって襲い掛かる。

福田

「……先輩！」

福本

「……我流」

チン

福本

「疾風しゅうふう！」

ヒュン！

和泉・飛驒  
ワシントン

「……！」



パチン

ドサードサー!

和泉・飛驒ワシントン

「い、い、い、痛い〜( < | > )」

福本

「あのな…さっきのでも、力加減してる方なんだぞ…」

アルファーニ

「いや…艦魂だから痛いで済んでるかもしれないけど…普通の人間なら骨折してますよ…」

福田

「…それより、艦魂達の反応が凄い…」

そりゃそうだ。

この部屋にいた艦魂達にしてみれば、軍刀を抜いたのは見えたが、斬ったところは見えなかった。

しかも、艦魂相手にして…撃退しているのだから…。

ゴリツィア

「福本元帥! ……どうしたんですか?」

マリーダ

「あ、何でも無い、何でも無いのよ。それで、なに、ゴリツィア?」

ゴリツィア

「はい。以前話していた私の副官のアーキイラと恋人のイタリアです」

アーキイラ

「お初にお目に掛かります。アーキイラです」

イタリア

「ご紹介にあずかりました、イタリアです。御尊はかねがね」

福本

「あははは、よろしく。僕の紹介は…要らないか」

イタリア

「はい 日本海軍最年少元帥にして第七艦隊を率いる福本大介元帥とパートナーのマリーダ参謀長ですね」

マリーダ

「ええ。よろしく、イタリア、アーキイラ」

イタリア

「はい！」

アーキイラ

「こちらこそ！」

福本

「いや…先走ったバカが自沈なんかさせるんじゃないかと心配してたが…大丈夫そうだな」

ゴリツィア

「はい。そんなバカが行動を起こす前に第七艦隊が入港しましたから」

福田

「多分、イタリア軍は短期間ながら連合国軍の監視を受ける事になりますか……我慢して下さいね」

ゴリツィア

「その監視には第七艦隊も加わるのだろうか？ そうならそれくらいは大丈夫だ。それに、いくら連合国軍でも、日本の意思を尊重しないと対ソ戦も戦えないしな」

福田

「……そうですかね？」

イタリア

「そうですね。だって、スターリンが極東から軍を抽出出来ないのは日本が満州をがちりと握っているからでしょう？」

福田

「そうですね。ですから、日本はある意味リミタリーバランスをとっている……と仰りたいんでしょう？」

ゴリツィア

「はい……そう言えば、宴会すると聞いて来たのですが……」

福田

「ああ、飲酒は夜まで禁止な。それまでは適当にやってくれて構わないから」

次号へ

タラント軍港で…（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

ソ連、満州に侵攻セリ！！

イタリア降伏より2日後の5月2日早朝。  
ついにソ連軍が動いた。

重砲の支援砲撃、ソ連自慢のT-34戦車と重戦車KV-1が前を進み、その後をPPSH43を持った歩兵が続く。  
彼らのいる場所、それは……満州ソ連国境……。

帝都東京 御所内執務室

士官

「陛下！陛下ー！」

明子天皇

「どうしたの？結婚相手でも決まったの？」

士官

「はい お陰様で……じゃなくて！ソ連が満州に侵攻いたしました  
！！」

明子天皇

「…そう…いつか来るとは思っていたけど……いよいよ来たわね！  
スックと立ち上がると直ぐ様命じる。」

明子天皇

「御前会議を開きます！我が日本帝国の総力をもって、各国と連携して迎え撃ちます！」

士官

「はい！！」

その頃……タラント軍港  
戦艦播磨

新沢

「元帥！緊急事態です！！」

マリイダ

「なに？ソ連が満州に侵攻したの？」

新沢

「いいえ！ソ連が満州に………なんで知っていらしゃるんですか？」

福本

「ソ連の動きを見ていれば解る………だが、日本にアメリカ、第6大陸ががちり組めば大丈夫さ」

そう言うと、福本はニヤリと笑った。

どうやら、福本にとっては想定範囲内だからだろう。

福本

「ま、有利なのは最初だけだ。1週間も経てばソ連は苦しくなって、

自壊するぞ」

聞いている内に新沢はふと思った。  
福本にとって、ソ連は掌で踊る人形の様なのかも知れない…と。

福本

「おいおい…俺は神様じゃないんだ。今までの出来事を総合分析して出した結論だぞ」

新沢

「…え？」

福本

「顔に書いてあるぞ」。ソ連が掌で踊ってるみたいだ、てな」

気付かぬ間にバレていたみたいだ。

福本

「まあ、あつちはあつち。こつちはこつちだ。第七艦隊は欧州の事だけ気にしていたらしいさ」

そう言うのと処理する書類に福本は目を戻した。

侵攻したソ連軍は国境沿いの村や街をたちまち占領していった。  
しかし、その村や街は空っぽで人っ子1人居なかった。

実は、日本帝国・満州国は泰仏紛争の頃から避難計画を立て、一ヶ月前より順次避難させており、ソ連軍が国境を越えた時には国境沿いの村や街は空っぽだった。



そして、進軍を続行するとソ連軍は日本軍の要塞や要塞線にぶつかると各地で停滞した。  
ちなみに、日本軍の要塞や要塞線は簡単に迂回出来ない場所に構築しており、これが後々にソ連軍を苦しめる要因の1つとなった。

御所 御前会議場

明子天皇

「石原参謀総長。陸軍の動きはどうですか？」

石原参謀総長

「はい」

質問された石原莞爾参謀総長が立ち上がり答える。

石原参謀総長

「既に陸軍は各要塞線で敵を防いでおります。戦車・航空隊も準備完了で、ソ連軍を打ち倒すべく、出撃しております」

明子天皇

「わかりました。山本軍令部総長、海軍はどうですか？」

山本軍令部総長

「はい」

石原参謀総長に変わり、山本五十六軍令部総長が立ち上がる。

山本軍令部総長

「既に小澤大將率いる連合艦隊が舞鶴・大湊・佐世保などから出撃、基地空は陸軍を支援するべく出撃しています」

明子天皇

「対応が早く、大変結構です…皆さんに質問いたします。この戦、勝つ自信はありますか？」

この質問が出た時、宇垣首相以下参加者全員が一瞬緊張した。しかし、石原参謀総長が口火をきった。

石原参謀総長

「おおそれながら陛下、我らはノモンハン紛争から4年以上かけて準備して参りました」

山本軍令部総長

「それに福本元帥の忠告に従い、野口博士開発の戦車を増産し、アメリカとの戦争を短期間で終わらせ、陸海空戦力・国力を温存してきました」

宇垣首相

「彼の先見の明は叫喚するばかりです…彼は第七艦隊を設立した時点でソ連と戦う事を想定していたと言っているでしょう」

米内海軍大臣

「彼は知っていたのでしよう。ソ連とのリミタリーバランスを取るのには日本だとゆう事を…もし、ここで敗れば、我らだけでなく福本元帥以下彼らの努力を台無しになります」

永田陸軍大臣

「この戦、負けてはなりません…いえ、未来の為に負けられない戦

です。もちろん、全員勝つ気でいます」「

明子天皇

「…わかりました。この戦は皆さんにお任せします。そして……未  
来の為に勝って下さい！」

後に『決意の御前会議』と呼ばれる御前会議であった。

次号へ

ソ連、満州に侵攻セリ！！（後書き）

明日・明後日は定期通り、『士官候補生異世界奮闘記』を更新いたします。お楽しみに。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

軍神、未ダ二健在ナリ！！（前書き）

新米士官

「当然、満州での戦いに視点を移したいと思います」

福本

「まあ、イタリア戦が終わりましたし…満ソ戦はある意味見ものですからね」

マリーダ

「で、活躍するのは？」

新米士官

「加藤建夫少将！栗林忠道中将！西竹一大佐！池田末男大佐！このメンバーです！！」

福本

「……後者の3人にはお似合いの戦場ですね」

**軍神、未ダ二健在ナリ！！**

ソ連が満州に侵攻して1週間後の5月9日。

この間、日本軍は要塞や要塞線で抵抗を続け、ソ連軍の進撃は停滞していた。

所によっては抵抗線を突破された所もあった。

しかし、そういった抵抗線は戦力温存の為に後退、しかも、ちゃんとトラップを仕掛けて後退している。

後退は夜に行われ、闇に隠れながら後退するから、翌日、支援砲撃を行い、トラップに引っかけながら制圧した後、誰も居ない事を知る……といった具合だ。そうやって引き付けられ突出したソ連軍部隊は哀れである。

航空支援を受けられず、また対空火器も少ない中、日本軍や第6大陸派遣軍の航空攻撃の攻撃を受け大損害を出して後退する。

また、抵抗を続ける要塞や要塞線の上空では激しい空中戦を展開していた。

しかし、日本軍と第6大陸派遣軍の戦闘機は今までの戦訓から開発・改良された機体ばかりである。

戦場上空

加藤少将

「…時代も変わったな…」

一対一の格闘戦……それが戦闘機による戦闘の花形だった。

しかし、今や2機一組のロット、無線による相互通信、闇夜の提灯と言われたリーダーとそれを加えた防空体制と迎撃網……これが今

の空戦である。

そして、この変化の元は海軍であり、もっと踏み込んで言えば第七艦隊が根本である。

若き精鋭が揃い、福本元帥の指揮の下、女性を含めた将兵が戦っている。

つい10年前まで「軍に女性とは何事か！」と、特に陸軍では否定的だったが、今や第七艦隊の活躍の前には下火となりつつある。

『こちら、くノ一。加藤少将、敵編隊を発見。距離50キロ』

加藤少将

「了解。全機いつもの手で行くぞ！」

『『『『『了解!!』』』』』』

そして、陸軍の女性進出の先鋒が『くノ一』などの早期警戒管制機のパイロットやオペレーターである。

若い連中は「野郎に誘導されるより、若い女性に誘導される方がいい！」と言って大好評だが、現場指揮官達からも（早期警戒管制機が）好評である。

レーダーを積みにくい単発戦闘機にとってはこう言った機種の情報支援はありがたく、敵よりも先手を取って行動出来るからだ。

『敵編隊は高度3000で飛行中。また、後方から別の編隊が接近中。動きから見て空爆部隊と思われる』

加藤少将

「全機に通達。疾風、旋風、飛燕2型・3型隊は我に続け。爆撃隊の迎撃は連合王国派遣部隊に一任……編隊分かれ」

ちなみに『旋風』とは五式戦闘機の名称で、飛燕3型はエンジンをグリフォンエンジンのライセンス生産版『鷹』に装換した機体だ。

そして、ソ連軍機の裏をかく様に飛行すると……

加藤少将

「見えた……あれだな」

まるで日本軍機が正面から来るのを待ち構えているかの様に飛ぶソ連軍編隊。

しかし、まさか既に『電子の目』レーダーに捉えられ、裏をかいているとは知らないだろう。

加藤少将

「カクカク…手筈通りだ…攻撃開始！」

まず、加藤少将率いる第一陣が一斉に急降下。ソ連軍編隊に上方から攻撃をかける！

加藤少将

「てえ！」

ダダダダダダダダダダ！

ダダダダダダダダダダ！



ガガガガ…ガガガガ！

ゴワーン！

加藤少将が狙ったヤコブレフYak9が銃弾を受け爆発する。  
いきなりの攻撃に大混乱に陥るソ連軍編隊。

しかし、何機かが攻撃した第一陣を追い掛ける。

加藤少将

「引つ掛かったな！」

そう…確かにソ連軍は引つ掛かった。

ズダダダダダダ！

ダダダダダダダ！

篠原弘道少佐率いる第二陣が再度攻撃を仕掛ける！

ゴワーン！ゴワーン！

叩き落とされるソ連軍機。何の事はない、部隊を2つに分けた時間差攻撃である。

しかし、早期警戒管制機の支援と有利な立ち位置、そして奇襲により混乱を起こさせる……このプロセスを確りと踏んだ結果である。

加藤少将

「各機、ロツテを崩さず自由空戦！露助を叩き落とせ！」

そう無線に叫ぶと、加藤少将は疾風をフルスロットで飛ばす。

40歳を過ぎているが、まだまだ軍神加藤建夫少将は健在の様だ。

次号へ

軍神、未ダニ健在ナリ！！（後書き）

ご意見感想をお待ちしております。

虎頭要塞奮闘セリ！！（前書き）

新米士官

「満ソ戦第二弾！！」

福本

「……張り切ってますね」

新米士官

「ふっふっふ……スターリン……史実の満州進攻で亡くなった人々の分まで苦しみがいい！」

マリーダ

「うわ！作者の暗黒面が……」（……）

福本

「さ、作者？」

新米士官

「わっはっはっは！ソ連兵よ！満州は貴様らの墓場だ！恨むならスターリンを恨め！」

福本

「あ……とにかく、どうぞ（……）」

## 虎頭要塞奮闘セリ！！

### 虎頭要塞

満州とソ連の国境…ウスリー川の近くに建設した要塞である。そして……ソ連が満州に進攻、2週間の激戦の末、陥落・破壊され、今なお数多くの英霊が眠る場所である……。

さて、史実ではそうだった虎頭要塞でも激戦が続いていた。

要塞司令として着任した北島騏子雄中將は砲兵出身で、この世界ではノモンハンやハワイ攻略戦で特設砲兵師団長として参加、また、高雄要塞司令や砲兵学校校長を歴任した指揮官だった。

そんな要塞の攻守を知る人間が指揮官だから、この方面のソ連軍は進攻初日から頓挫した。

何せ、虎頭要塞は沿海州方面の防衛拠点であり、いざとなれば進攻する為の攻撃拠点でもある。

何せ、ソ連側から見ればウスリー川を渡れば満州のハルビンは近くであり、日本側から見れば、ウラジオストクが近い。

もちろん、その事を知るソ連軍は大軍で虎頭要塞を攻撃した。

しかし、日本軍も防衛人員定数を越える人員を配置していた。

また、大量の銃砲、そして2つの『奥の手』を持って迎え討った。

### ソ連軍陣地

### ソ連軍少尉

「くそ！ヤポンスキーめ！」

砲兵である事を示す襟章の少尉が不満を洩らす。  
何せ進攻8日を過ぎても虎頭要塞は怯んだ様子は無い。  
それにソ連軍は3つのミスがあった。

1つはウラジオストクから満州・朝鮮半島の付け根部分を遮断すべく出撃した2個師団が日本海軍の艦砲空爆を受けて大損害を被って満朝遮断作戦が失敗した事。

2つ目は虎頭要塞にある試製41cm榴弾砲とその近くにあるフランス製90式24cm列車加濃砲の存在だった。

この2門が火を吹いた事でウラジオストクへの輸送路の大事な1つ、シベリア鉄道のイマン鉄橋が破壊・修理不能となり、物質輸送が行き詰まったのだ。

それを確認した日本軍はその2門でソ連軍砲兵陣地に向けて撃ち始めた。

これを撃ち込まれるソ連軍は堪ったものではない。

戦艦の大砲に陸上の重砲が敵わないのは日本海軍がアメリカ軍相手に実証している。

あっという間に砲陣地も重砲も纏めて吹き飛ばされた。

これだけでも泣きっ面に蜂状態なソ連軍に……

ソ連兵1

「て、敵機来襲！！」

ソ連兵2

「ちくしょー！また、あのデカブツかよー！！」

そんな事を叫びながら、ソ連兵が配置場所を捨てて逃げる。

視点を上空に向ければ、六発エンジンの大型機……富嶽である。

北海道の千歳基地から飛び立った富嶽は日本海を越え虎頭要塞を攻撃するソ連軍に1トン爆弾を降らす。

しかも、富嶽の地上掃射型が降下して20mm機関砲96門で戦車・装甲車両を薙ぎ払う。

そして、こんな空襲が毎日続いている。

本来ならこう成らない様、エアカバー……制空権を確保しなければ成らないのだが、それは不可能だった。なぜなら、担当するウラジオストクの航空隊日本海軍機動部隊の数度の空襲により飛行場ことほぼ壊滅。

生き残った数機が虎頭要塞を攻撃したが、40mm機関砲やVT信管付きの対空砲の射撃を受けて全滅。

この為、富嶽は何の妨害も受けずにソ連軍を攻撃する。これが、3つ目のミスだ。航空機の補充は可能である。

しかし、満州の空戦は徐々に日本軍・第6大陸派遣軍の有利に傾き、航空機の補充量が増加、ウラジオストクへの補充が間に合わなくなっていた。

結局、沿海州方面からの進攻は虎頭要塞によって阻止され、日本軍・アメリカ軍によりウラジオストクを占領、上陸部隊が進撃を開始し、虎頭要塞と挟み撃ちなるまで、ソ連軍は苦しむ事になる。

次号へ

虎頭要塞奮闘セリ！！（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。



チチハルの攻防 前編（前書き）

新米士官

「満ソ戦、第三弾！！」

福本

「いよいよ出ます、勇将3人」

マリーダ

「舞台はチチハル…大変な事になりそうですね」

福本

「では、どうぞ」

## チチハルの攻防 前編

5月11日 チチハル

日本軍司令部

士官

「敬礼!!」

ピシッ!

作戦会議室に入って来た恰幅の良い人物：栗林忠道中将の入室に士官達が敬礼する。

栗林中将

「敵情はどうだ？」

士官

「は！偵察機の報告によりますとソ連軍は戦車・歩兵を率いてチチハル近郊に接近しつつあります」

栗林中将

「ふむ…部隊展開は完了しているな？」

士官

「は！西竹一大佐率いる戦車26連隊、池田末男大佐の戦車11連隊、山崎保代大佐、中川州男大佐の歩兵連隊などが展開・準備を整えております！」



第二線の塹壕で共に籠る4人。

西竹一大佐は栗林中将とのコンビで硫黄島の奮戦で有名である。

池田末男大佐は、史実で日本軍戦車隊最後の戦闘と言われた占守島<sup>しほまつ</sup>…千島列島の最果ての島…で終戦の混乱に乗じたソ連軍を迎え撃ち壮絶な戦死を遂げた戦車士官である。

山崎保代大佐は史実の日本最初の玉砕と認定されたアッツ島指揮官だが、圧倒的なアメリカ軍に対し2週間抵抗、玉砕後昭和天皇が嘉賞電を打っている。

中川男大佐はアメリカ軍が2・3日で攻略出来ると豪語したペリリュー島（現パラオ）を約2ヶ月守りきり、精強を誇る海兵隊一個師団を戦闘不能に陥らせ、陥落・戦死するまで昭和天皇より10回も嘉賞を受けた（過去例無し）指揮官である。  
4人共、史実の大東亜戦争で活躍した面々ばかりである。

中川大佐

「まあ、長くは続かないだろうがな」

確かに続かなかった。

ソ連軍砲兵部隊は第一線の塹壕を集中的に砲撃していたが……元々、囷用に作った塹壕なので誰もいない。そこに砲撃する砲兵部隊は位置を暴露している。

そこに、戦闘機隊に護衛された3式飛龍、100式呑龍、99式軽爆、3式対地襲撃機『征龍』、2式複戦屠龍が襲い掛かる。

飛龍、呑龍、99式軽爆は通常爆弾と3式爆弾を砲兵部隊に叩き込む。

また、征龍：彗星35型の陸軍仕様…と屠龍3型乙…対地襲撃機型…がソ連軍戦車や歩兵に襲い掛かる。  
襲われる方に見れば災厄である。

征龍が30mm機関砲を乱射しながら降下し、ロケット弾や爆弾をばら蒔く。

屠龍は機種に装着した一式47mm機動速射砲を航空用に改造した3式47mm航空砲…または機関砲…をT34やKV-1戦車の上部装甲に命中させる。

ドン！

ゴワーン！

重戦車のKV-1が47mm弾を受けて爆発・炎上・残骸になる。

西大佐

「やはり、制空権の無い陸上部隊は航空攻撃の前には無力ですね」

山崎大佐

「ソ連兵で無くて良かったとほとほと思うよ」

それはそうだ。

ソ連軍なら、下手に活躍すれば消されるし、政治将校はいるし、督戦隊により後ろから撃たれる可能はあるし……平等な国だとかなんとかと程遠い国である。

空爆を終えた攻撃隊が引き上げる。

しかし、ソ連軍も一度の空爆で引き上げる筈が無い。時間は掛かっているが再編成を行い、再び攻めて来る気だ。

池田大佐

「総員、戦闘用意！戦車搭乗員は搭乗車両に搭乗！」

第11、26戦車連隊の兵員達が急いで擬装し、ダックインして  
自分の愛車に乗り込む。  
チチハルを巡る戦いは始まったばかりだ。

次号へ

チチハルの攻防 前編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

チチハルの攻防 後編（前書き）

新米士官

「今度は戦車戦だm（——）m」

福本

「……どうした？」

マリイダ

「バイトで疲れたんですって」

福本

「おいおい……」

マリイダ

「何時もと違う配置場所に応援に行ってたんだってさ」

福本

「………それでは、どうぞ」



## チチハルの攻防 後編

再編を終えたソ連軍が戦車を先頭に進撃する。  
第一線の塹壕に到達したソ連軍は塹壕を制圧し始めた。

ドガン！

バババババババ！

……塹壕に仕掛けたトラップに引っ掛かる。

対し、T34戦車はタンクデサント（戦車跨乗兵）を満載して進撃する。

だが……

ドガン！ゴワン！

対戦車地雷に引っ掛かり爆発炎上するT34が出る。

しかし、他の戦車はまるで他人事の様に進撃して来る。

西大佐

「まだだ…まだ撃つなよ」

戦車兵

「はい」

ノロノロと…日本軍視点…進むソ連軍に誰もが苛立ちつつも我慢する。

既に戦車砲の射程範囲内だが、敵の油断を誘う為に撃たない。  
ジリジリしながら見ていると……いきなり戦車の速度が上がった。

一向に撃つてこないのを見たソ連軍は第二線も日本軍は放棄したと  
思い一気に速度を上げたのだ。

池田大佐

「よし！良いぞ…もつと近付いて来い…」

焦る心を抑え、ソ連軍を誘い込む。

戦車兵

「距離500mを切りました！」

西・池田大佐

「全車、撃てー！」「

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！  
ドン！ドン！ドン！ドン！……

待つてましたとばかりにダックインしていた両連隊の戦車砲が火を  
吹く！

ズーン！ゴォーン！ガガン！ドゥーン！グォーン！……

被弾し搭載していた弾薬で誘爆する戦車、行動不能になり放棄され  
る戦車……これにはソ連軍も驚いた。

西大佐

「カクカク、僚車を援護しつつ、ダックイン解除…討って出るぞ！」

そう無線に叫ぶと、操縦手に命じて壕から出る。  
西大佐の搭乗する四式中戦車二型は車体を金色に塗られ、砲塔には彼の愛馬の名から採った『ウラヌス号』と書かれている。  
ちなみに、他の車両はグリーン標準色である。

西大佐

「カクカク、自由戦闘！ヨーロッパの第七陸戦隊や長野連隊ばかりに手柄を取らせるな！」

池田大佐

「さすが、西大佐だ。オリンピック金メダリストだけはあるな」

そう呟くと、無線に叫ぶ。

池田大佐

「カクカク、敵は一兵残らず殲滅せよ！！」

そう檄と飛ばすとダックインしていた池田大佐搭乗の五式重戦車二型は壕を出る。

ちなみに、第26戦車連隊は四式中戦車中心の編成だが、第11戦車連隊は五式重戦車・四式中戦車・二式軽駆逐戦車の編成である。

第11戦車連隊の所属戦車は砲塔に『士魂』の文字が書かれている。これは漢数字の十一を組み合わせたものだ。

ちなみに、陸上自衛隊の第11戦車大隊が『士魂』の文字をマークとして使っている。

……話が逸れた。

ソ連軍将校

「な、なんだ！？あれがヤポンスキーの戦車なのか？」

聞いていた話と違う事に驚く。

実はソ連軍は満州侵攻作戦の為にヨーロッパ方面の部隊を投入、チハル攻略にはヨーロッパ方面の部隊を使っていた。

彼らはポーランドやドイツ、ギリシャの勝利に驕り、アジア方面の兵士から日本軍の話も聞いても、余り相手にしなかった。

そして……こう言う者が多かった。

「東の果ての日本人が強い訳が無い」

……装備面で優れるドイツに勝ったから言えるのか……あるいは日露戦争やノモンハンの事を忘れたのか……。

これがいけなかった……

ゴワーン！

たちまち、一台のT34が吹き飛んだ。

その後は乱打戦だった。

数で押そうとするソ連軍に対し、日本軍は戦車の性能と戦術で対抗した。

何せ、四式中戦車は速度を活かしてT34を翻弄し、80mm60口径砲を前面・側面・後面に叩き込む。

五式重戦車は四式よりも分厚い140mm装甲と90mm50口径砲で、スナイパーの如く狙い撃つ。

ゴワーン！ズストーン！ドワーン！ドガン！

たちまち破壊され残骸と化すT34が続出する。  
戦車指揮官は慌ててKV-1を自らが率いて出るが……

西大佐

「重装甲騎兵か？殺るぞ！」

池田大佐

「敵は重鈍だ。殲滅せよ！」

怯むどころか、闘志満々で挑む。

まさに、災厄である。

ソ連軍戦車はT34にしるKV-1にしる構造上に問題があった。  
何せ、ソ連戦車は砲塔を回す前に敵に狙われ、砲を撃つても当たらず、当たっても貫通せず弾かれ……逆に四式や五式の戦車砲に破壊される。

それに普通の理屈で作った戦車に奇才野口博士が作り上げた量産型戦車に敵う訳がない。

戦車指揮官

「バカな…日本戦車に…一方的に破壊されてるだど!？」

そう叫ぶ戦車指揮官の前に金色塗装の戦車が狙う。

戦車指揮官

「き、き、き…金色の悪魔…」

ドン…

ゴワーン…!

戦車指揮官の乗ったKV-1戦車の弾薬が誘爆し、数トンある砲塔を宙に飛ばした。

多数の戦車・重砲を失い、タンクデサントも大損害を受けたチチハル攻略部隊は撤退した。  
だが、まだまだ油断出来ない満州方面だった。

次号へ

チチハルの攻防 後編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

**反撃開始！ウラジオストク・ナホトカ占領作戦！！**

5月13日

ソ連軍による満州侵攻開始から11日目。

やっと日本で待機していたアメリカ軍が動き出した。数個師団が海上護衛総隊の護衛の下満州へ向かい、北海道や東京にB29爆撃機部隊が進出、戦闘機部隊は満州方面に向かった。

そして……

日本海……ウラジオストク周辺の海域

朝靄の中、日本・アメリカ海軍の艦艇が集結していた。

今や播磨級戦艦に並ぶ日本の顔となった大和級戦艦の主砲はウラジオストクに向け主砲を向けている。

大和級だけではない。

長門・陸奥・伊勢・日向・扶桑・山城・金剛・霧島・比叡・榛名の日本戦艦とアメリカ海軍のアイオワ級戦艦6隻も主砲を向けている。

戦艦大和艦橋

士官



「艦砲射撃とは……味気無いですね」

小澤長官

「ソ連海軍にロクな艦艇は無い。艦隊決戦は無いだろう……我々はやれる事をやるだけだ」

山本五十六長官の軍令部総長着任により、第1機動部隊長官から、大将昇進と連合艦隊司令長官に着任した小澤治三郎大将。

士官

「ですが…悔しくありませんか？第七艦隊はイタリア艦隊と一戦交えたのですよ？」

小澤長官

「あれは福本の作戦だからな。それにこれからの日本海軍は艦隊決戦よりも通商航路の維持が任務となるだろう」

日本は資源が少なく、資源を輸入に頼っている国だ。日米戦でも、アメリカがドイツを真似て通商航路破壊を実施したが、護衛総隊により被害は極端に少なかった。

しかし、これは事前に準備をしていたからであって、何もしていなかったと思うと……恐ろしい。

士官

「長官。全艦砲戦準備出来ました」

別の士官が報告する。

小澤長官

「よし。全艦撃ち方始め！」

ズガン！ズガン！ズガン！

世界最強の46cm砲が火を吹いた。

今回のウラジオストク・ナホトカ占領作戦：日本軍は『回天』作戦と命名：はソ連の満州侵攻に対する反撃作戦である。

まずは沿海州を確保し、そこから勢力を拡大：逆にシベリアに侵攻しようという作戦である。

これには陸軍特殊船『神州丸』に乗り込んだ、アメリカ・アジア方面軍司令官マッカーサー元帥によって計画が立案された。

ちなみに：この作戦立案には日本諜報部が協力したとか……。

今回の作戦にはアメリカ海兵隊、日本陸戦隊、日本・アメリカ陸軍より数個師団が参加している。

艦砲射撃、日米空母の大空襲……これに戦艦などから取り外し、据え付けた装甲砲塔を破壊する為に3式陸攻『靖国』が誘導弾『桜花』を命中させる。

もちろん、制空権は日米軍が握っている。

だから、攻撃隊は好き勝手にできる。

しかも、手薄になっていたウラジオストクにとっては日米海軍が全力を持って攻めて来たのだから、ひとたまりも無い。

これに海兵隊と陸戦隊が上陸すると、一斉に守備隊は手を上げた。

この勢いでナホトカを占領。

直ぐ様、橋頭堡・飛行場を設営・修繕に入る。

また、日米空母からは満州方面を援護すべく攻撃隊を発進する。

日本軍も2個歩兵師団に1個戦車師団を投入し進撃を開始する。  
反撃の狼煙は上がった。

次号へ

**反撃開始！ウラジオストク・ナホトカ占領作戦！！（後書き）**

明日・明後日は定期通り『士官候補生異世界奮闘記』を更新致します。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

## 虎頭要塞解囲セリ

5月15日

ウラジオストク・ナホトカの占領を終えた日本陸軍は虎頭要塞を救援すべく、2個歩兵師団＋1個戦車師団を向かわせた。さすがにウスリー川に近付くと抵抗してきたが、制空権の無いソ連軍は航空攻撃により沈黙、遂に包囲するソ連軍に攻撃を開始した。

重見中将

「撃て！！」

ズドン！

ゴワーン！！

ウスリー川を押し渡った重見伊三雄中将率いる戦車師団は阻止しようとするT34・KV-1戦車を片っ端から破壊する。

その間に水上源蔵少将・佐藤幸徳中将率いる歩兵師団がウスリー川を渡り、展開する。

ソ連軍にとってみれば対戦車兵器の噴進砲を全面配備した日本兵はハルヒン・ゴール……ノモンハン事変のソ連側名称……以上に厄介になっていた。

シュポーン！

シュルルルルル……

ドガン！

ソ連兵1

「くそ！T34が殺られた！」

ソ連兵2

「ハルヒン・ゴールの時みたいに、火焰瓶持って飛び乗るんじゃないのかよ！？」

ソ連軍下士官

「後退！後退しろ！」

政治将校

「馬鹿者！後退するな！資本主義……」

ガン！

ドサツ！

日本兵の銃弾を頭に受けた政治将校が倒れるが、ソ連兵達は見向きもせずには後退する。

しかし、日本軍も追撃して、追い詰める。

それに、虎頭要塞からも援護射撃も加わって、ソ連軍は進退窮まる。

結局、虎頭要塞と援軍3個師団に挟撃・包囲されたソ連軍は虎頭要塞攻略により疲弊していた事により、遂に降伏した。

その後、要塞司令の北島中将と重見中将・佐藤中将・水上少将がお互いの無事を確認しあった。

その頃……タラント軍港

新沢

「元帥……！」

福本

「なんだ？満州で何か起きたか？」

新沢

「は！虎頭要塞を攻略していたソ連軍を本日包囲・降伏させました！」

福本

「そうか……しかし、反撃作戦は始まったばかりだ……それに、ソ連軍の一角を崩したに過ぎない……油断は出来ないな」

窓の方を向きながら言う。

福本

「……報告はそれだけかな？」

新沢

「あ、はい……失礼します」

そう言うと長官公室を出て行く。

新沢

「ふう…しかし、なぜ元帥はあんな慎重そうな顔だったんだ？」

表情は読めたが、なぜかは読めない新沢。

ヴィル

「あ、新沢さん。報告ですか？」

新沢

「ん、ヴィル副長か。ああ、虎頭要塞が解囲出来たとね……ただ、なぜあんな慎重な顔だったのか…」

ヴィル

「新沢さん…満州攻略作戦の指揮官をご存知ですか？」

新沢

「ん…いや…名前は聞いた事はあるんだが…」

ヴィル

「…多分ご存知ですね。ジューコフ元帥ですよ」

新沢

「…！ノモンハン事変の…総指揮官だな」

ヴィル

「はい…彼は一番日本軍との戦いに慣れていきます…ですから、元帥も警戒しているんだと思いますよ」

新沢



「なるほど……あのスターリンも油断出来ない奴だからな……ある意味厄介だ」

スターリン……そして、ジューコフ……イザとなれば今の方針を変える人間だけに、何を仕出かすか解らない。

新沢

「……元帥が言っていた通り……油断は出来ないな」

次号へ

虎頭要塞解囲セリ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 満州戦線異常ノ兆シアリ

5月25日

満州での戦闘は続いていた。

しかし、ウラジオストク・ナホト力を確保し、虎頭要塞を解囲した事により、ソ連軍の横腹を食い破られていた。

また、ウラジオストクの周辺に滑走路を設営し、そこから飛び立つ日米航空隊やウラジオストクに待機する日米機動部隊が連日出撃し、ソ連軍機と交戦しながら爆弾を降らしていた。

尚且つ、シベリア鉄道を使いハバロフスクを占領、ソ連満州侵攻軍の後ろを取ろうとしている。

チタで指揮を採るジューコフ元帥は現状の悪さに、別方面からの侵攻を検討・スターリンに上奏した程だ。

その頃……タラント軍港

戦艦播磨艦内長官公室

福本

「うーん……」

福本はつい先程届けられた満州方面の報告書を床に置いて、逆立ちしていた。

コンコン

マリーダ

「大介、入る……何してるの？」

福本

「いや…報告書も視点を変えて見ようと思ってさ…逆立ちして見た」

マリーダ

「…あっそ。お客さん、来てるわよ」

福本

「うん？」

見ると、今や連合軍でも知らぬ者はいないと言っていい、イタリア、ゴリツィア、アーケイラの3人。

福本

「や、やあ…へ、変な格好でごめん…」

ゴリツィア

「な、あの長官は変わっているだろう？」

イタリア

「視点を変えるなら逆立ちしなくても…」

アーケイラ

「いえ…あんな発想が出来るから元帥であり、艦隊司令長官だと思っんですか…」

……なんだかな……

福本

「よつと…と…で、何か用？」

マリイダ

「みんなでお茶にしようってよ」

福本

「それもそうだね。じゃあ、行くか」

そう言つと報告書を持って長官公室を出て行く。

播磨士官食堂

福本

「うーん……」

お茶を飲みながら、福本は報告書と睨めっこしていた。

マリイダ

「大介…お茶冷めるよ？」

福本

「あ、うん……」

ゴリツイア

「…公室といい、今といい…何をそんなに熱心に読んでいますか？」

福本

「最近のソ連軍の動きに関する諜報部からの報告書です……見ますか」

そう言うと、報告書をゴリツィアに渡す。

ゴリツィア

「……ヨーロッパ方面から数個師団が引き抜かれた……？」

福本

「ただの満州侵攻軍の増援……と考えるのは浅はかだと思っんですよね」

ゴリツィア

「確かに……満州方面を視点に入れて見ればそうなるでしょう……しかし、イタリア・フランスが脱落した現状下では下手に部隊を引き抜くのは愚です」

マリーダ

「それよりも満州侵攻軍を退いて、急いで再編成、シベリア方面の守備に回す……のが得策だけど、あのスターリンが許可する訳ないか……」

イタリア

「……別方面からの可能は？あのノモンハン事変みたいに」

ゴリツィア

「しかし、結局それも一緒だ。各個撃破されるのがオチだ」

当たり前の様で怪しい数個師団の移動に一同すっきりとしない様子

…。  
そんな時…

アーケイラ

「まさか、中国共産党軍の為の援軍…と言う可能性は無いですよね？」

ゴリツィア

「いきなり、中共軍と戦えと言われて出来たら別だがな…それに重裝備の取り回しが利くか怪しい」

福本

「……中国……」

なぜか引つ掛かった言葉…中国…を基に考えてみる。

福本

「ブツブツブツブツ……（中国共産党軍の援軍…有り得るが…浅い…もっと深い筈だ……なんだ？）」

イタリア

「お姉ちゃんじゃあ無いけど…中華料理って美味しいかな？」

ゴリツィア

「あの食い魔よりはマシだ…しかし、一回は食べてみたいな」

マリーダ

「そうね…今度、補給部隊の間宮に相談してみようかしら」

アーケイラ

「北京ダックは美味しいって聞きましたけど…私はそれで」

福本

「ブツブツブツブツ…（北京ダック…食べたいね…何言っ  
てんだよ…ん、北京？…北京、北京、北京…北京！）そうか！  
北京か！」

マリータ

「キャッ！」

ゴリツィア

「ペ、北京がどうしたのですか？」

福本

「モンゴルから北京は近い…万里の長城を越えれば直ぐそこ…満州  
侵攻も可能だし、中共軍も援護できる！」イタリア

「あ、そっか…北京が取られたら陸路は分断されて大変な事になり  
ますね」

福本

「となれば、善は急げだ！誰か！新沢と神谷を呼んでくれ！」

そう言つと慌て士官食堂から出て行く。

マリータ

「あらら…」

アークイラ

「…ほつといて良いのですか？」



マリィダ

「大丈夫大丈夫。あれ位なら1人でもやれるわ…まあ、終わったらここに帰って来るわ」

その10数分後…マリィダの言葉通り福本は戻って来た。

次号へ

満州戦線異常ノ兆シアリ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。



の引き揚げに尽力した人物である。

岡村大将

「さて…歩兵2個師団、戦車1個連隊、それにサブム帝国からの1個歩兵旅団でどこまでソ連軍を止められるだろうか」

地図には味方を示す青い歩兵の駒が2つ、戦車の駒が1つ。

そして…友軍である緑色の歩兵の駒が1つ。

その頃……

張家口 日本・サブム帝国軍陣地

「あれが…ソ連軍か？」

向かって来るソ連軍を見た襟章に少将の階級章を付けた若者が呟く。

「バドエル少将…間違いなくソ連軍です」

「だがなマイラーノ中佐、あれじゃあ数年前の我が軍だぞ？」

さて、こんな会話をする2人……サブム帝国中国方面派遣軍第68歩兵旅団レオーネ・バドエル少将と副官のマイラーノ中佐である。

ちなみに…バドエルは25歳、マイラーノは24歳。

2人共、数年前のヴィントラント王国・サブム帝国戦争、日本・サブム帝国戦争に参加している。

バドエルはヴィントラントとの戦いでは中佐として参加…多数の部隊を投入した為、士官の数合わせで昇進…着実に功績を上げていたのだが…王弟であり当時の宰相レムスの悪口…まあ、元々素行不良…それに占領地域住民に厚遇した事により宰相レムスの怒りをかい、一兵卒に降格されたのである。

しかし、日本の支援を受けたヴィントラント王国軍が反撃に転じると、彼が配属された戦線では次々と上級士官が戦死し下士官達に回って来た時、バドエルが代わりに指揮を執り、これを数度撃退、講和まで堪え忍んだ。

普通ならこの功績で中佐に戻った…となる筈だった。

しかし、世界情勢がそれだけで終わらさず、親日に転化したサブム帝国の改革路線が拍車を掛けた。

軍の再編を急ぐサブム帝国は貴族出であつても無能な士官は容赦無しで切り捨て、平民出でも優秀な士官は多少の事には目を瞑り、出来るだけ高位に就けた。バドエルもそんな1人であり、平民出では有るもののその優秀さをかわれ少将に任官、同様に昇進した副官で古巣を預かつていたマイラーノ中佐と共に中国方面派遣軍へと配属されたのである。

バドエル少将

「さて…平等だ、何だとアホ抜かす奴らを追っ払うとするか」

マイラーノ中佐

「少将、解つているとは思いますが、無茶はしないで下さいよ。日本軍だつて見てるんですから」

バドエル少将

「ああ、大丈夫だ。それに、日本側の司令官も戦車隊の指揮官も案外頭のキれる人間そうだしな」

マイラーノ中佐

「はあ…まったく…」

…：張家口での戦いが始まるとしていた。

次号へ

張家口ニ敵影アリ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 張家口の攻防 前編（前書き）

### 登場人物

レオーネ・バドエル

男性 25歳 所属 サブルム帝国軍少将

平民出の若き少将。

素行不良ながらも、その人心掌握能力と指揮能力をかわれ、少将に任官。

第68歩兵旅団長として中国に派遣された。

マイラーノ

男性 24歳 サブルム帝国軍中佐

バドエル同様、平民出の中佐。

バドエルとは前戦争で大隊長とその副官として出会い、コンビを組む。

第68歩兵旅団副長として中国に派遣、頭脳面でバドエルをサポートする。



## 張家口の攻防 前編

中国駐留軍にソ連軍の侵攻の兆しがあると警告が届いたのは5月25日……タラント軍港で福本が頭を捻っていた日だ。

そして、最初は第七艦隊の暗号打電文だった。

これを受けた駐留軍司令部は、活躍の多い第七艦隊からの電文に余り感心を示さなかった。

それどころか、「余計なお世話」とか「調子にのるな」等々…邪険に思う人間が多かった。

しかし、司令官である岡村寧次大将は永田鉄山陸軍大臣から福本達の事は聞いており、満州でのソ連軍苦戦とゆう現状から見てもあり得ない話ではなかった。

なおかつ、本土からも永田鉄山陸軍大臣と石原完爾参謀総長の連名で警告電文が届いたのである。

実は、中国駐留軍司令部だけではなく、陸軍省と参謀本部にも同時に多少はしよりながらも説明を入れて打電しておいた。

そして、二通の電文を受けた岡村大将は事前に設定していた避難計画に従い、『避難訓練』の名目で邦人・一般人の避難を実施した。

また、北京に駐留中の部隊から即応出来る部隊を張家口へと派遣した。

ソ連軍は何の妨害も無く進撃していた。

それもそうだ。

満州方面に目がいつて、まさかモンゴルから北京を占領し、満州の後ろに回ろうと考えている…など日本軍に解る筈がない!……とソ連軍は思っていた。

それが浅はかな考えだと解るにはそれほど時間は掛からなかった。

ある防衛陣地にある程度近付いた瞬間、道の左右数カ所から発砲炎が瞬いた。  
徹甲弾の直撃を受けたT34戦車が爆発し、榴弾が無防備な歩兵に襲い掛かる。

ソ連軍戦車士官

「敵の野砲だ！榴弾を叩き込め！」

僚車の爆発を見たT34が慌て敵の隠匿陣地を探す。

その時、また発砲炎が瞬きソ連軍を襲う。

しかし、大体の位置を掴んだその戦車士官は発砲を命じる。

ソ連軍戦車士官

「撃て！」

ドン！

ポワーン！

ソ連軍戦車士官

「よし！直撃…！」

ボン！

榴弾は直撃した……筈の陣地から発砲炎が瞬いた。

普通なら兵員が無事でも、砲が壊れている筈である。

ソ連軍戦車士官

「バ、バカな…！」

「ゴーン！」

徹甲弾の直撃を受けた戦車士官の乗るT34は爆発・炎上した。

陣地の一角

バドエル少将

「よし！第一段階は成功だ！」

自らも99式歩兵銃を撃ちつつ、戦況を見るバドエル。まあ、種明かせば簡単である。

道の左右に入念な擬装を施した隠匿陣地を多数造り、そこに重火器を配置したのである。

もちろん、正面の防衛陣地とは交通壕で繋いである。

マイラーノ中佐

「支援砲中隊のお陰ですね」

バドエル少将

「まったくだ。歩兵部隊に戦車を置こうなんて考えた奴に勲章をやりたいていぜ！」

マイラーノ中佐

「少将：差し出がましい様ですが、戦車では無く自走砲です」

サブム帝国軍第68歩兵旅団には支援砲として2式2型軽駆逐戦車が3個中隊配備されていた。

これでお分かりだろう。

隠匿陣地には2式軽駆逐戦車が配置され、ソ連軍を攻撃していたのだ。

これでは普通の大砲などと違い、装甲に囲まれているのだから榴弾を何発撃つても無駄だ。

それこそ徹甲弾を使わなければダメだ。

それに2式軽駆逐戦車は同様の隠匿陣地に移動し、ヒットエンドランでソ連軍に向けて撃ち続ける。

バドエル少将

「さて、第二段階に移るか？ マイラーノ、信号銃をくれ」

マイラーノ中佐

「はい、どうぞ」

空に向かって信号弾が打ち出された。

しかし、混乱するソ連軍は気付かない。

だが、日本軍はちゃんと気付いていた。

次号へ

張家口の攻防 前編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 張家口の攻防 後編

ヒュルヒュルヒュルヒュルヒュルヒュル……

上へ上へと上がる信号弾を見ながら第29戦車連隊長佐伯静夫大佐は無線に命じる。

佐伯大佐

「カクカク、敵は畏に嵌まった…全車前進！」

ブロロロロン！

巧みに擬装して待機していた第29戦車連隊が動き出す。

佐伯静夫大佐は、史実ではマレー半島攻略戦において、有名なジツトラ・ライン突破を成功させた指揮官である。

第29戦車連隊は機動力を重視し四式中戦車を数的主力としていたが、『切り札』として六式重戦車を1個中隊を配備していた。

そして、擬装を解いた戦車隊は前進を開始した。

ドン！

ゴワーン！

また1台のT34が爆発した。

しかし、今度はソ連軍も敵の正体がわかった。

左右からシルエットのはっきりした戦車が現れたからだ。

ドン！

防衛陣地を蹂躪しようとしていたT34が新手に向けて主砲を撃つた。  
だが……

カーン！

装甲によって弾かれる。

ドン！

ゴワーン！

それどころか、隣を走っていた四式中戦車の主砲が火を吹き、全面装甲を貫いてT34を残骸に変える。

あとは一方的である。

いくら撃つても撃破出来ない四式中戦車はM4戦車を一発で残骸に変える主砲を持ち、その主砲でT34は簡単に破壊される…とゆう構図である。

そして、戦車がある程度片付けると榴弾に切り替え、ソ連兵に対して発砲する。

ソ連軍指揮官

「なに！ヤポンスキーの攻撃で先鋒隊が壊滅しかけているだど！？」

ソ連軍士官

『は、はい！既にT34はほとんど殺られ…歩兵、装甲車も…』

受話器の向こうから爆発音ばかりが聞こえる。  
野戦電話を使って話せているのが不思議なくらいだ。

ソ連軍指揮官

「くそ！ヤポンスキーの分際で…待っている！今すぐ救援を寄越す！」

ソ連軍士官

『りよ、了解！』

ソ連軍指揮官

「急いで救援を送れ！今日中に突破するんだ！重戦車も投入しろ！」

矢継ぎ早に命じる指揮官。もし、突破に時間を掛ければ『サポタージユ』とか『反逆の疑い有り』で、裁判無しで銃殺である。

それに指揮官は重戦車さえ投入すれば日本軍の防衛線も突破出来ると考えていた。

マイラーノ中佐

「少将、敵の新手です！」

双眼鏡で道の向こうを見張っていたマイラーノが新たな土煙を見付ける。

バドエル少将

「先鋒隊をコテンパンに叩いたからな…向こうも本気だぞ…ん？ちよっと待て…あれはなんだ？」



見ると、T34やKV-1に混じって見慣れない新顔がいた。KV-1より一回り小さい車体にT34より大きい砲塔……一番の特徴は長く大口径の主砲。

マイラーノ中佐

「…ソ連軍の新型ですね」

バドエル少将

「…あれは日本軍に任せるしかないな」

佐伯大佐も双眼鏡で新型戦車を見ていた。

情報ではソ連軍に新型戦車が投入されたと聞いている。

ちなみに、これが日本軍…連合軍が初めて見たJS2…スターリン重戦車を戦場で見た瞬間だった。

主砲口径122mm主砲…独裁者の名を与えられた戦車だけに強力である。

もちろん、日本軍もサブルム帝国軍もそんな事は知らない。

しかし、どう見たって強力な戦車である。

そして…こう言うときは目には目を、歯には歯を、重戦車には重戦車をである。

佐伯大佐

「よし…切り札を出せ！」

待ってましたとばかりに、六式重戦車がエンジンを響かせる。

先鋒隊との戦闘ではあえて出さなかったが、重戦車が出て来たのだから出すしかない。

キュラキュラキュラ……

防衛陣地の前に出ると、10台はそこで停止する。  
ソ連軍も気付いたのか停止した。

距離は1000メートル。

双方、相手の出方を見る為に手は出さなかった。  
しかし、それも僅かな時間。

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

スターリン重戦車10台が先手を取って発砲した。

ドワン！ドワン！ドワン！ドワン！ドワン！ドワン！ドワン！ドワン！  
ドワン！ドワン！ドワン！ドワン！ドワン！

10発の内2発が六式重戦車に命中するが200mmもの装甲で弾  
く。

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

ゴワン！

いきなりスターリン重戦車5台が爆発した。

これにはソ連兵全員が驚いた。  
ソ連軍が誇る…スターリンの名を持つ重戦車が敵弾を喰らって爆発  
した……。

政治将校も啞然とする。

そして……先に発砲したのは六式重戦車だった。

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

ゴワーン!!  
ゴワーン!!

スターリン重戦車だけでなく、T34やKV-1まで100mm砲弾を喰らって爆発する。

ソ連軍も夢では無いと気付いて一斉に回れ右で逃げ始めた。

後に初の重戦車同士の戦いと言われる事になる『張家口防衛戦』の初戦はこうして終わった。

そして、この初戦のソ連軍の頓挫はアジア方面ソ連軍全体の攻勢頓挫に繋がり、ソ連軍を色々な意味で苦しめる事になった。

なおかつ、ソ連軍の攻勢はソ連軍が止まらない限り止まる事は無いと言つある種のソ連軍無敵伝説をぶち壊す事にもなった。

次号へ

## 張家口の攻防 後編（後書き）

一応、テイガー2のデータを基にしたので問題は無いかと……命中率は別として……。

定期通り明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新いたします。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 海龍の仕業

満州・中国北部ではソ連・モンゴル軍VS日本・アメリカ・第六大陸軍が加わる連合軍との戦闘が続いていた。

しかし、空を制する者は戦を制するの言葉通り制空権を握った連合軍の空爆と、ソ連軍との戦闘に慣れた日本陸軍の活躍により、ソ連・モンゴル軍を各地で押ししていた。  
そんな中……

6月4日 タラント軍港

戦艦播磨長官公室

トン

軽い音を発てながら判子が押される。  
福本は事務机で書類整理をしていた。

福本

「え〜と、補給の認可ねえ……………（黙読中）……………よし、了解」

トン

…………と、まあ、こんな風に次々と書類を処理していく。

福本

「お次は…何々、コスプレファッションショー開催に関する播磨会議

室使用願い届け？はいはい、了か……………ん!？」

調子にのり、危うく判子を押す寸前で止める。

そして、もう一度読み返す。

福本

「『コスプレファッションショー開催に関する播磨会議室使用願い届け』……………はあ？」

何でこんな物が書類の中に入ってるかはともかくとして、こんな事を提案してくる者は1人しか居ない。

福本

「……………やっぱり海龍か」

そう言うと、その届けを事務機の右端にある『検討処理』と書いてある箱に放り込み、書類整理を続けた。

一時間後……………

空母海龍艦内

ガンガンガン

福本

「おい、海龍。居るかー？」

勇鷹

「…出ませんね」

海龍の部屋の前でノックする福本と勇鷹。  
ちなみに、勇鷹は海龍から大人数調理を頼まれたので、理由と要望が聞きに来ていた。

福本

「…仕方無い。入るぞ、海龍」

ドアノブを握ると鍵は掛かっていなかった。  
そのまま開けて入ると…誰も居なかった。

福本

「なんだ？居ないのか。無用心な奴だ」

勇鷹

「海龍の部屋って…整理整頓出来てるんですね…意外です」

確かに、床にはゴミ一つ無く、本棚もきっちり整理されている。

福本

「あいつ…『月刊 兵器乙女のコスプレ』は創刊号から買ったのか……どつやって買ってるんだ？」

勇鷹

「さあ？」

多分、海龍の独自ルートみたいなのがあって、それを通して買ってるんだと思うが……。

海龍

「にひひひ…わっ！いい、居たんですか！？」

福本

「お、噂をすればか…とところで海龍？お前どこに居た？」

海龍

「え、その部屋に…」

海龍の指差す方を見ると、ちよつとした小部屋があつた。

そして、扉には『現像室』と書かれ、上には『立ち入り禁止』の表示…。

福本

「…お前、撮影した写真を現像してたな」

海龍

「あ、あ、あははは…あ、私に用ですか？」

福本

「用が無ければ部屋には来ない…これ、出したのお前だな？」

そう言つて『コスプレファッションショー開催に関する会議室使用願  
い届け』を出す。

海龍

「あ…（書類に紛れ込ませたのに）…バレた？」

福本

「あのな…普通に渡してくれたら良かったんだがな…で、何が目



的だ？」

海龍

「え？も、目的だなんて…ただ、連合軍同士、友好を深めよう…」

勇鷹

「海龍、コスプレ写真が目的でしょ？顔に書いてあるよ」

海龍

「ガーン（ … ）」

福本

「解りやすいな…まあ、別段悪く無い話だし、ある種の交流会とか親睦会と捉えれば悪く無いから…許可するか」

海龍

「ヤッホー！ラッキー（ ^ - ^ ）v」

福本

「但し！ちゃんと計画書を提出、計画書通りに通してやれ。エッチとか18禁はダメだ」

海龍

「うぎゃあ〜、そんなのあり〜？（ … ）」

福本

「ありだ。あと、当日は俺とマリーダの監視付きだ。変な事をやらん様にな」

海龍

「しぎゅっ〜」

勇鷹

「あ、海龍。料理はどうする？色々考えてきたんだけど…」

福本

「…理由は訊かないんだな」

勇鷹

「さっきので大体理由は解りましたから（^^）」

福本

「そうか…じゃあ、あと頼んだ」

そう言うと福本は海龍の部屋から出て行った。

次号へ

## 海龍の仕業（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## コスプレファッションショー 前編

6月6日 戦艦播磨会議室

海龍

『…と言う事で！第一回連合軍艦魂交流コスプレファッションショーをここに開催します！！』

パチパチパチパチパチ！！

福本・マリダ

「「……………」」

…一体どっからこんなにも集めて来たんだよ…とツッコミを入れたくなる2人。

ゴリツィア

「……………いやはや…凄いと言っか、何と言っか……………」

福本

「その気持ち、よく解るぞ。ゴリツィア」

マリダ

「本当ね…で、出し物は？」

海龍

『まずは！夏も近いので、水着です！』

福本

「……ごめん、俺、帰って良い？」

マリィダ

「なんで？」

福本

「…変態と思われたく無い」マリィダ

「だ、大丈夫よ！あ、あんたが変態じゃあ無いこと位、私が解ってるから！」

ゴリツィア

「(……デレ?)」

そんな2人にお構い無く、金髪の少女…多分、イギリス・アメリカ艦の艦魂…がビキニや競泳水着やスクール水着など着てキヤアキヤア騒ぎながら、通り過ぎて行く。

福本

「お、終わったか？(目を瞑ってる)」

マリィダ

「ま、まだよ！(…やっぱり、今年は水着、イメチェンしようかしら?)」

ゴリツィア

「(福本元帥……大変ですね)あ、終わりましたね」

福本

「…ほ、良かった」

— 安心する福本。

海龍

『次は、ときめきメモリアル4、ダ・カーポなど、ゲーム・アニメ作品の学生服をご覧あれ』

福本

「これは定番だね」

マリーダ

「そ、そうね。(あゝ…一回やってみようかしら…コスプレ…)」

海龍

『それでは、ここでお昼休憩に入ります。午後の部は1330(ヒトサンサンマル)開始といたします』

この放送が入ると、艦魂達は次々と転移していき、5分もしない内に会議室はガラーンとなった。

福本

「海龍…頼むから、次回から季節性ファッションショーは後にしてくれ無いか？夏だけでもいいから…」

海龍

「え？別にかまわないけど…なんで？」

福本

「…理由は訊かないでくれ、軽い自己嫌悪に陥りそうだから…」

海龍

「は、はあ…」

こう言われては海龍も理由は訊けなかった。

福本

「さて、お昼にでも…」

勇鷹・アーキイラ

「「お昼ならここですよ」

そう言いながら転移して来たコック姿の勇鷹とアーキイラ。多分、海龍の仕業だろうが、料理上手の2人だけに……

福本

「2人共、よく似合うぞ」

マリィダ

「ええ、さすが料理の上手い2人ね」

何せ、今や連合軍1・2を争う料理上手。但し、本職の給糧艦間宮には敵わないが…。

福本

「よし、まずは昼食だ」

マリィダ

「そうね…シエフ、昼食の出来栄は？」

勇鷹

「えへへ、もちろん、最高です！」

ゴリツィア

「…アーキイラ。イタリアを知らないか？」

アーキイラ

「はい、朝から今晚の下拵えをしていましたので…存じ上げません」

ゴリツィア

「……残念だ」

海龍

「勇鷹、ご飯ちよ〜うだい！」

勇鷹

「はいはい」

福本

「まったく…上品に食べれんのか」

マリーダ

「まあ、とにかく食べましょう」

そう言うのと、周りにあった椅子や机を引っ付け、そこに昼食を置き、  
食べ始める。

イタリア

「あ、ゴリツィア。頬っぺたにお弁当ついてるよ」



ゴリツィア

「へえ？」

ペロリ

イタリアが『お弁当』を舐めた。

それだけなら、良かったかも知れない。

しかし、問題は……イタリアがメイド服でコスプレしていた事……

ゴリツィア

「……イタリア……」

イタリア

「ん、なーに？」

たらー……

福本

「お、おい、ゴリツィア……鼻血……垂れてるぞ」

ゴリツィア

「ほえ？」

見ると、右手が血で赤くなっている。

バタッ！！

マリーダ

「……ゴリツィア……？」

イタリア

「わあ〜！ゴリツィア〜！」

ゴリツィア

「イ…イタリア…：我、人生悔い無し…ガクツ」

福本

「わあああ！！ゴリツィア！死ぬなああ！！！」

アークイラ

「だ、誰か！衛生兵！衛生兵を呼べ！！」

勇鷹

「うわ〜！大変だよ〜！」

海龍

「…：意外に抜群な効果ねえ…写真に撮ったこ」

マリータ

「海龍！」

その時…

三原

「う〜ん 美味しそうな匂いに誘われて来たよ〜」

第七艦隊の女医、三原登場。

福本

「三原！ちょうど良い所に来た！ゴリツィアが！」

三原

「へえ？…うわ、大変なあ！！ゴリツィア！今助けるからねー！」

次号へ

コスプレファッションショー 前編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## コスプレファッションショー 後編

再び……播磨会議室

福本

「ゴリツィア…大丈夫か？」

ゴリツィア

「は、はい…すみません、」迷惑お掛けして…」

マリーダ

「あゝ、大丈夫大丈夫。翡翠が来るよりマシだから……それより、あなた意外とシャイだったのね」

ゴリツィア

「う……恥ずかしながら…」

イタリア

「ごめんね〜、ゴリツィア〜（＜―＞）」

メイド服から普段の軍服に着替えたイタリアがゴリツィアに謝っていた。

ゴリツィア

「いや…もついい…もついいよ」

海龍

『それでは、続きまして某国の防衛隊のコスプレと、戦場のヴァル

キュリア2のランシール士官学校制服をどうぞ〜』

福本

「微妙にネタばらししてるよな〜」

マリィダ

「まあ…説明しにくいしね…」

零

「あ、福本長官！」

福本

「ん、零か。君も出てたのか？」

零

「はい！あ、女性海上自衛官コスなんです…似合ってます？」

福本

「…似合ってるよ。ただ、これ以上は言えないけどね…」

マリィダ

「あら、私の心配？（くう…こんなじゃなかったら私もしてるのに…）」

ゴリツィア

「（…マリィダ参謀長、なぜか様子がおかしい様な気が…？）」

零

「そうですね？嬉しいです では、また後で！」

福本

「…ああ」

モンタナ

「おお、福本長官にマリィダ参謀長……可笑しな所で会いましたね」

マリィダ

「あ、モンタナ……ランシール士官学校の男物の制服ねえ……意外ね」

モンタナ

「私はコスプレを着るのが趣味ですから……着れば男物でも女物でも何でも……」

福本

「あはは、すまんすまん……メインは女物の制服か」

メイン

「…見ないで下さい。変態長官」

福本

「う……あはは……やっぱりか……」

マリィダ

「ちょっと！海龍が悪さしないように見張つてのに、そんな言い方無いでしょう……」

メイン

「…なんですか？お付きの役職名だけ参謀長？」

マリィダ

「な、なんですって!!」

モンタナ

「あ、すまない…無理矢理出したから、不機嫌に…」

メイン

「…本当の事を言ったままでですが？」

ブチッ!

マリータ

「メイン!表に出なさい!ギッタンギッタンにしてやんよ!!」

メイン

「いいですよ…丁度、暴れたかったところですし」

パチパチ!

…こんな音が聞こえても可笑しく無い状況。

福本

「お、お前ら、まず落ち着け!戦争を勃発させる気か!？」

ゴリツィア

「そうですね、マリータ参謀長!落ち着きましょう!」

イタリア

「メインさんも落ち着きましょう!ね!？」

和泉



「さあ、賭けた賭けた！！マリーダ参謀長か、メインか、どっちが勝つか！ちなみに私はマリーダ参謀長だ」

「フシントク  
飛驒

「メインが勝つと思うなら、私に渡しなさい！」

福本

「こら、そこ！！煽るな！！」海龍

「…え、続まして…」

モンタナ

「いや、待て！続けるんかい！！」

すかさずツツコミに入れるモンタナ。

その後、春日・日進・畝傍の古参艦ガールズと三原・ゴリツィア・イタリア・福本などが両者に入り、和泉・飛驒「フシントク」の両者は強制退室された。

日が暮れて……

海龍

『それでは最後に！コスプレパーティーで閉めたいと思います！』

『！』

福本

「……つまり、晚餐で閉めよう」と……」

三原

「ムグムグ…どうしたんですか、元帥？」

福本

「いや…別に」

先程から、勇鷹・アーキラの料理に延ばす手が止まっていな  
い三原。

零

「あはは、三原さん、さつきから手が止まってませんよ？」

福本

「はあ…じゃあ、零。君のそのお皿の山盛りはなんだ？」

零

「えへへへ…」

……世の中、あまり人の事は言えないものである。

イタリア

「福本長官！」

福本

「お、ゴリツィアにイタリア……なんだ？また海龍に着せられたのか？」

イタリアは何処のお姫様、ゴリツィアは貴族…と言った服装だ。

ゴリツィア

「いえ…まあ、無理矢理押し付けられた…と言いますか…」

福本

「あはは…まあ、また鼻血なんか出して、三原の世話になるなよ」

ゴリツィア

「はい…気よ付けます」

エターナル

「福本げ〜んす〜い！」

福本

「お、エターナルに…河内か！」

河内

「ふ、福本様！」

福本

「あはは！その様子じゃあ、コスプレを押し付けられた上に、エターナルに引つ張り回されてるな」

エターナル

「はい！もう、私はこのまま死んでも悔いは…」

三原

「それは無理。私がそうさせない」

零

「あはは…」

ちなみに、エターナルはお嬢様、河内は男装執事。

モンタナ

「福本長官。マリータ参謀長は？」

福本

「いえ、それが消えちゃって……ですが、案外第一回は成功かな？」

マリータ

「ちょっと！私の事は？」

福本

「ああ、マリ……マリータ！な、なんだ、その格好！！」

モンタナ

「……ウエディングドレス？」

海龍

「翡翠さんに頼まれて、巫女、スク水、ウエディングから選んでもらったんですよ。」

福本

「おいおい……」

海龍

「と、言うわけで！ダンスをお願いします！」

福本

「……はあ！？」

海龍

「はい！ミュージック用意！！」

福本

「…ダンスなんて踊れんぞ」

マリーダ

「うふふ、6年前に一度教えてあげたでしょう？私が練習台になつて」

福本

「6年前か…キツイぞ」

マリーダ

「大丈夫…自信持って」

海龍

「ミュージックスタート!!」

その後、福本・マリーダのダンスを見た艦魂達は口々にこう言った。

「あれがダンスをやった事の無い提督のダンスだろうか？」

……と。

ちなみに、このダンスはちゃんと海龍が撮影していた。

次号へ

コスプレファッションショー 後編(後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 反撃攻勢

6月8日 千手ハル

前線司令部テント

栗林中将

「全部隊に通達！反撃開始だ！」

士官

「は！」

守勢に回っていた栗林中将率いる千手ハル守備隊は虎頭要塞救援を終えた佐藤中将・水上少将の歩兵師団・重見中将の戦車師団の増援を受け、一気に反撃に出た。

これに対するソ連軍は連日の空爆で損耗激しく、攻略軍自体が弱りきっていた。特に戦車・重砲などの重火器は目の敵の様に狙われ、補充しても足りない状況であった。

ヒューウ……

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！……

飛龍、呑龍、99式軽爆が大量の爆弾をソ連軍にばら巻く。小型爆弾ではあるが、落とされた方には堪らない。

重機関銃なんかは一発で破壊され、兵員を破片が襲う。

督戦隊はそれこそ何も知らないから、いい標的となって消滅する。

この空爆にあわせて、日本軍も戦車を先頭に進撃してくる。

ソ連兵には成す術があまり無い。

ソ連軍が誇る76mm師団野砲『ラツチャ・ブム』は真つ先に空爆によつて破壊され、対戦車砲も同様に破壊された。

ソ連兵には対戦車ライフルしか対戦車攻撃兵器が無く、向かつてくる重装甲の日本軍戦車にどう立ち向かえばいいと言うのか？

ノモンハンの時の様に、火焰瓶か地雷でも持って突撃しろ……なんてのはソ連兵には無理である。

それに、地雷ならまだしも、ガソリンエンジンなら効果のある火焰瓶も、主砲・装甲に加え、空冷ディーゼルエンジンに載せ換えた2型シリーズに効果は無い。まあ、出来たとしても、後ろから一式半装軌装甲車やトラックに乗る歩兵によつて蜂の巣にされるのがオチだ。

そして、戦車がソ連軍陣地に突入、歩兵が一式半装軌装甲車やトラックから下車して陣地の制圧に入る。

確かに、穴熊を決めたソ連兵は粘り強い。

だが、その穴が脆くなつていけば話は別だ。

なおかつ、白兵戦で日本軍に敵う軍隊など、そうそう存在しないのだ。

さて、ソ連軍も黙つて陣地を取られて負ける訳にはいかない。

空軍に攻撃を要請……とにかく陣地周辺を攻撃する様に攻撃に命令が出た。

まあ、兵員はそこら辺から徴集すればいい……なんて考えるソ連軍だから、兵員が味方の攻撃に巻き込まれ様がどうしようが、知ったこっちゃない……と考えるのがソ連軍上層部である。



ヤコブレフ Yak 9 やラボーチキン La-5 などの戦闘機を先頭に  
イリユーシン 11-2 シュトルモヴィクやペトリヤコフ Pe 2 が攻  
撃に向かった。しかし、日本軍も抜かりはなかった。

キラキラ！

太陽を背にし、降下するその機体……火龍である。

やっと実戦配備になり、満州の地に先発隊 20 機が送られた。  
そして、10 機づつに別れ、ソ連軍編隊を襲う。

シュパパパパパパン！！

ズガガガガガガガ！

ゴワーン！！

V T 信管付きの 3 式航空用噴進弾と、30・20mm 機関砲で襲撃  
され、何機かが爆発する。

ソ連軍パイロット

「くそ！ヤポンスキーの新型機か！」

慌て追跡しようとした瞬間、彼は驚いた。

ついさつき、自分の横をすり抜けた敵機が目の前にいた。  
敵機はそれほど速い……しかも、プロペラが無い。

ズガガガガガガガ！

ゴワーン！

そう思っている間に火龍の銃撃を受け爆発する。まあ、例え生きていたとしても、その後に疾風、飛燕、旋風の編隊が襲い掛かってきたから……無事だったかは微妙である。

残りの火龍は攻撃隊に襲い掛かった。

イリューシン11-2シュトルモヴィクは重防御：機体重量の17%が装甲が占めている…機体で、史実なら『黒死病』とか『空飛ぶ戦車』とドイツ軍で呼ばれていた。

しかし、航空機はいくら頑張っても戦車にはなれない。

火龍は戦闘機隊を襲った戦法で攻撃隊を襲う。

いくら頑丈が売りのシュトルモヴィクも30mm機関砲や噴進弾を食らえば撃墜される。

なおかつ、火龍からすればシュトルモヴィクもペトリヤコフも止まっている様なものだ。

こちらも、火龍の襲撃に続き、疾風、飛燕、旋風、屠龍が襲い掛かる。

どの機もシュトルモヴィクに対しては、コックピット、エンジンなどの弱点を狙って撃つ。

日本軍の反撃攻勢が開始された。

次号へ

## 反撃攻勢（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ソ連軍の苦しき内情

6月10日 チタ

満州方面攻略軍司令部

ジューコフ元帥

「なんと云う事だ……」

連日の満州方面での戦闘はソ連軍の完全に不利だった。

進攻した当初は進撃に次ぐ進撃に、誰もが満州攻略は成功した……  
と思っていた。

しかし、僅か1週間で戦況が変わった。

チチハルでの進撃頓挫、満朝遮断作戦失敗、虎頭要塞の攻略頓挫、  
ウラジオストク・ナホトカの占領、虎頭要塞攻略失敗、制空権の奪  
取、連日の戦場・補給拠点の空爆、張家口方面攻略頓挫……等々に  
より、ソ連軍の不利に成りつつある。

なぜか？

ジューコフの計算外だったのは日本軍の部隊動員数と第六大陸から  
の支援である。

日米戦が終わり、何個師団かが満州に回される事位はソ連軍上層部  
の誰もが解っていた。

しかし、満州に進攻してみれば予想以上の部隊が満州に配置されて  
いた。

それに、第六大陸の戦力支援はジューコフにとって痛手だった。

航空隊がそのいい例で、日本軍航空隊と第六大陸の航空隊と戦う訳  
だから、戦場で投入される数が違う。

しかも、第六大陸のパイロットも練度が高く……最低限、ソ連軍パ

イロットよりは上……、機体も日本軍と同じだから、あちこちでソ連軍機とパイロットの消耗がうなぎ登りに多くなって、パイロットもヨーロッパから引き抜くか、新米を送り込んでいる状況だ。

対し、日本軍・第六大陸軍は自分達のフィールドで戦うから、パイロットは安心して脱出できるし、機体も大量生産され、時間を掛けて育成したパイロットも居り、どんどん本土から増援が送り込まれているから、直ぐに戦力化できる。

もつとも、ソ連軍はヨーロッパ方面とアジア方面との2方面に戦力を分割しているから余計に苦しく。

これは戦車も同じで、歩兵は歩兵銃かマシンガンを持たせば出来るが、戦車は機械を動かすのだから、それなりに訓練がいる。

しかし、航空攻撃や日本軍の強力な戦車を投入した為、ベテラン戦車兵が少なくなっていた。

歩兵は簡単に補充できる、しかし、陸戦の要、戦車兵は航空機パイロットと同じ位補充が難しい。

これが後々、ソ連軍を大いに苦しめる事になるのだが……。

他にも、ジューコフを困らせていたのは、世界世論だった。

ノモンハン事変で苦い経験をしたジューコフにとって、世界世論も挽回出来るとか以前の問題だった。

ソ連にとって強力な後盾だったアメリカがルーズベルトの死と日米講和により連合国側に移り、フランス・イタリアも連合国と講和、今やソ連だけが戦争を続けている状況だった。

しかし……戦争は終わらない。

なぜなら、この戦争を始めたのはソ連側あり、スターリンが講和を持ち掛けない限り終結は不可能である。だが、スターリンはそんな気は更々無いし、連合国側がスターリンがいるままで戦争を終わらす事はしにくい。

もつとも、ポーランドやギリシャ、フィンランドなどスターリンの策略により占領、領土分割などの酷い目にあつた国々にしてみれば、スターリンを許せる筈がない。

占領地域やソ連領内でも日に日に不満やソ連に対する敵がい心が溜まりつつある。

欧米の新聞・ニュース映画・ラジオも、今や満州での戦いが注目され、見出しは……

『サムライ日本、ノモンハンの再来なるか!?!』

……と、ノモンハン事変で活躍した日本軍が再び、ソ連軍を敗ると期待されていた。

そして、その期待は現実の物に成りつつあり、密かにソ連国内でも噂として広がりつつある。

まあ、こういつた噂はいくら出ない様にしても、『人の口には戸はたてられぬ』の如く、自然に出てきてしまうのだが……。

ジューコフ元帥

「……我が軍は後退に次ぐ後退……既に満州攻略は無理だろう」

参謀

「連日の空爆や空戦で、航空機パイロットや戦車兵が多く消耗がしています……これでは戦えません!」

ジューコフ元帥

「……二正面でなければ、ヨーロッパ方面軍を回し、日本軍を破り、満州を攻略出来るものを……」

ノモンハン以上の戦力を出したが、ノモンハンの時に比べ軍を動か

しにくい状況にあるソ連軍であった。

次号へ

## ソ連軍の苦しき内情（後書き）

定期通り、明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新いたします。

お楽しみに。

ご意見ご感想をお待ちしております。



## 日米英伊主力機集結ス

6月12日 タラント軍港

その日、福本・マリーダ、そして、第七艦隊唯一の民間人尾崎記者は飛行場に来ていた。

尾崎

「うわ〜…戦闘機の見世物市ですか!？」

福本

「…見世物にはなっていないと思うけど…」

まあ、そう言いたくなる理由は解らなくも無い。

なぜなら、飛行場には日米英の主力戦闘機が並んでいるからだ。

イギリスのスピットファイア、テンペスト、モスキート、アメリカ陸軍のP38ライトニング、P47サンダーボルト、海軍のF6Fヘルキャット、F4Uコルセア、日本の烈風、陣風、紫電改2型、敵であったイタリア軍のMC205ヴェルトロ、G55チェンタウロ、Re2005サジタリオが飛行場内で翼を休めている。

尾崎

「よ〜し!今日の新聞は『攻勢近し!?!飛行場に主力戦闘機続々!』に決定!」

マリーダ

「……多分、検閲で引っ掛かるよ?」

福本

「しかも、『攻勢近し』…なんて書いたら、ソ連軍に教えてる様なものだし…」

まあ…既に知られているかも知れないが……

尾崎

「ふみゅ〜m(――)m」

マリィダ

「あのね…こうやって飛行場歩けるだけでも凄いものよ」

普段から警戒厳しい飛行場や播磨に従軍記者とは言え民間人が乗っている時点で驚きものである。

それゆえ、尾崎はスパイにとっては格好の獲物である。

今回だって、福本・マリィダの日本海軍最強コンビが付いているから歩けるのだ。

まあ、当の本人はそんな事に全く気付いていないが…。

福本

「さて…時間的にはもうそろそろなんだけど…」

そう思い腕時計を見た時、マリィダが気付いた。

マリィダ

「あれじゃないの？」

ポツポツ…と青い空に見える小さな黒点。

しかし、その黒点は段々と大きくなり、数も増えていく。

そして……

ブローン！

尾崎

「あ、あれは…？」

福本

「アメリカが開発したP51『ムスタング』戦闘機。アメリカが開発した新型機だそうです。ちなみにムスタングは和訳すると『野生馬』なんだそうです」

尾崎

「…アメリカの…」

福本

「…とアイゼンハワー将軍が言っていました」

ガクン

尾崎

「もお、福本長官…！」

福本

「そ、そんなに声張り上げなくても…：…それに、新型機の事を教えてくれるだけでも、アメリカが日本を信頼している証拠なんですよ」

確かに、アメリカ海軍ならまだマシも、アメリカ陸軍には微妙な空気が未だにある。

しかし、アイゼンハワー将軍の人の良さと、パットン中将の日本に対する受けの良さもあり、表だって出る事は無い。

マリイダ

「117日だけ？約4ヶ月でよく開発できたわね」

福本

「まあ…人間、意欲と努力と根性さえあれば大抵の事は出来てしま  
うからね」

そんな話をする2人と1人を気にする事無く、ムスタングが着陸す  
る。

福本

「…さて、変に長居しては迷惑でしょうし、播磨に帰りますか」

マリイダ

「ええ」

尾崎

「はい」

そう言って立ち去ろうとした時……

「そこにおりますのは、日本海軍元帥福本大介長官と大将マリイダ  
参謀長とお見受けいたしますが…お間違いありませんか？」

福本

「ん…そうだけど…」

答えながら振り向くと、そこには貴族が良いとこ出の服を着た娘さんが立っていた……と書けば読者に解るだろうか？

福本

「俺に聞くな…え、え〜とき、君は？」

明らかに普通の人じゃない。

まず第一にこんな娘さんなら、この飛行場内に入る事自体難しい。となると、フェンスを越えて不法侵入したスパイか物好き、それなりにコネのある人物の娘……と見た方がいい。だが……そんな者では無かった。

「初めて御目にかかります。私はマーリン家からアメリカに養女となって参りました、ムスタングでございます…以後お見知り置きを…」

福本

「む、ムスタング！？じゃ、じゃあ！君はP51ムスタングの飛魂！？」

ムスタング

「はい、その通りでございます…あ、この服は普段着ですので」

尾崎

「けど、マーリン家って…」

マリーダ

「ムスタングはイギリスのマーリンエンジンを使ってるからじゃな

いの  
」

福本

「…まあ、凄く驚いちゃったけど、よろしく」

ムスタング

「はい！よろしくお願いします…！」

次号へ

日米英伊主力機集結ス（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

作戦立案検討会議 前編（前書き）

登場人物

ムスタング

P51ムスタングの飛魂。

エンジンがイギリスのマーリンエンジンを搭載している為、『マーリン家からアメリカに養子に来た』とはそう言う意味で、どちらかと言うとイギリス人ぽい。普段着は良いとこ出のお嬢様服装だが、出撃中は飛行服。



## 作戦立案検討会議 前編

6月14日 タラント軍港

### 戦艦播磨会議室

この日、第七艦隊旗艦の会議室では連合国軍の軍首脳が集まり、会議が行われていた。

アメリカからは、アイゼンハワー大将、パットン中将、ハルゼー大将、イギリスはモントゴメリー大将、日本からはお馴染み、福本、マリーダ、フェルデナント、宮崎大将、ドイツからも数名の将官が派遣されていた。

ちなみに、なぜ播磨の会議室で行われたかとゆくと、陸上の会議室よりも防諜が出来、かつ、戦艦とゆう艦種上、盗聴機などが仕掛けにくいからだ。

それに、元々艦隊旗艦として建造された播磨型の会議室のスペースは広く……コスプレファッションショーやれる位だし……大人数が入れる……まさか、艦魂達が騒げる様に広くとったとは言えない……からだそうだ。

他にも、米英の将校から日本艦の食事は美味しい……食に五月蠅い日本人に合わさなければならなかったからかもしれないが……とゆう評判もあつて決まったらしい。

今回の会議は満州方面で行われるシベリア侵攻作戦に同調し、ヨーロッパ方面からも対ソ作戦を行おうとゆう事で、作戦立案・検討の会議である。

まあ…この設定には別段問題は無かった…のだが、パットンとモントゴメリーが舌戦を始めるまでだった。

モントゴメリー大将

「ソ連軍はいくらアジアに目がいっているとは言えヨーロッパ方面軍も強力だ。ここは戦力を集結させ、敵の2倍になるまで待つべきだ」

パットン中将

「何言つてやがる！ソ連も粗悪品でも大量生産や現地徴兵で戦力を集める筈だ！敵戦力より2倍になるのをちんたら待つてられるか！ここはスピード重視でやるべきだ！」

モントゴメリー大将

「敵を圧倒する戦力で挑むのが戦闘の常道！そうすれば、ソ連軍を一撃で突破出来る！」

パットン中将

「何を言いやがる！ソ連軍が穴熊になった時の手強さは日露戦争で証明されている！戦力の集結は敵に時間を与えるだけだ！」

モントゴメリー大将

「穴熊になったら、その穴を吹き飛ばせばいいだろう！我が連合軍には日本の富嶽や貴国のB29で叩き出せばいい！」

ケンケンガクガクゴウゴウ……

双方一歩も退かずに舌戦を繰り広げる。

この2人の舌戦を止めるのは容易では無い。

調整役のアイゼンハワー大将は苦笑しながら福本の方に顔を向ける。

それに気付いた福本は首を縦に振る。

アイゼンハワー大将

「それではアドミラルフクモト。あなた方の意見はどうですか？」

福本

「本官は海軍士官なので、細かい事は宮崎大将やフェルデナント陸戦隊司令に回しますが、本官としましてはパットン中将とモントゴメリー大将の意見の真ん中：中間案を提示いたします」

アイゼンハワー大将

「中間案…？」

福本

「はい。案については宮崎大将に説明させていただきます」

そう言うと、宮崎大将に役を回す。

宮崎大将

「まず、ソ連領内の環境についてですが、これにモントゴメリー大将が発言する準備期間がいます」

パットン中将

「どう言う事だ？」

福本の介入で舌戦を中断したパットンが宮崎大将に質問する。

宮崎大将

「本官は満州で警備任務にあたっていました。冬になりますとかなりの極寒です。シベリア出兵に参加された方がこの中に居られるか

は解りませんが、最終的に全軍が撤退する事になったのは『冬将軍が原因です』

この言葉が出た時、パットン中将以外の人間は宮崎大将の言っている事が理解出来なかつたらしく、怪訝な顔をした。

パットン中将

「……なるほど、下手に踏み込めば、ナポレオンの二の舞……って訳か」

宮崎大将

「そうですね。下手をすれば、食品が凍り食べれない程……連合軍にそれなりの装備がありますか？」

パットン中将

「イギリスはどうか知らないが、少なくとも我がアメリカ軍にそんな装備はない」

あっさりパットンは認めたが、この会話は会議室の空気を暗くした。なぜなら、過去の範例を出されてようやく自分達の想定違いだと気付かされたからだ。

実際、アメリカ軍の装備は南方中心であり、冬季装備はアラスカの現状に合わせた物で、また数が少ない。それに食品が凍り食べれないとなると、補給品を見直す必要がある。

フェルデナント

「被服や食品の他にも問題があります。アメリカ・イギリスの戦車の多くがガソリン車ですが、ディーゼルエンジンに装換するか、ちやんとした対策を採らないと車両は全く動きません」

パットン中将

「な、なんだと!？」

戦車が動かないと知ったパットン中将が声を荒げた。戦車による機甲戦法を得意とする彼にとって、戦車が動けないのは死活問題だ。

士官

「あ、あの…それでは、機関車もそのままだと使えない…と？」

フェルデナント

「はい。ポーランドまでなら普通に運行出来るかもしれませんが。しかし、冬のソ連領内だと、蒸気機関車は放置しておく、戦車同様に動けない可能性があります。それに、ソ連の鉄道は線路幅がヨーロッパの線路幅より広く、この問題を解決しないと運行は不可能だと…」

多分、補給担当の士官だったのだろう、鉄道が使えないと知ると顔が真っ青になった。

そして……会議室は沈黙してしまった。

次号へ

作戦立案検討会議 前編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 作戦立案検討会議 後編

沈黙した会議室。

ソ連軍以上に厄介な『冬將軍』の影響を聞いて、誰もが言葉が出なかつた。

だが……意外なところから質問がとんだ。

「日本軍からこの様な意見が出たのですから、当然日本軍は何らかの解決策を見出だしている……と思ってよろしいですね？」

今まで発言を控えていた……と言うより、パットンとモントゴメリーが勝手に舌戦していただけなのだが……ドイツ軍代表の方から聞こえた。

福本

「失礼ですが、あなたは？」

「ドイツ陸軍ソ連諜報部長ラインハルト・ゲーレン少将です。アドミラルフクモト」

ソ連諜報部……と言う事は、彼らは最低限、ソ連領内の気候にはそれなりに知っている筈だ。

なおかつ、情報分析力が彼らの得り……僅かな情報でどこまで解読出来るかは作戦、ひいては戦況にも影響する。

そんな彼らだから、福本、フェルデナント、宮崎大将の口調や話した事で何かあると解つたのだろう。

福本

「確かに……ゲーレン少将が申しました通り、極寒地域での活動を  
経験済みの我が陸軍はに対策・装備も整っています。宮崎大将」

宮崎大将

「冬季被服については、既に量産が整い、日本軍、第六大陸派遣軍  
には全員行き届いております。また、欧米軍向けの物を少数ですが  
我々の輸送船団に積み込んであります。なお、既に欧米軍向けの追  
加分はイギリスの各港の倉庫に格納されております」

フェルデナント

「また、鉄道ですが、既に満州での運行経験のある鉄道連隊の派遣  
が決定しており、現在機材と共に輸送船にてヨーロッパに向かって  
いる途中との事です」

アイゼンハワー大将

「……なるほど……」

沈黙していたアメリカ・イギリス軍からようやく、安堵ともとれる  
言葉が出てきた。

アイゼンハワー大将

「つまり、冬季戦準備に時間が必要で、それが完了次第、ソ連領に  
侵攻を開始しよう……と言う事だね」

福本

「はい。モントゴメリー大将の戦力集結より時間は掛かりませんが、  
ソ連軍は我々が冬將軍で参るだろうと考えています……そう言った意  
味では裏をかける可能性もあるかと……」



パットン中将

「俺はその中間案に賛成だ！いくら機動戦がやれても、ナポレオンの二の舞だけは嫌だからな！」

このパットンの言いように、アメリカ・イギリス・ドイツからも賛成と採れる声上がる。

しかし、モントゴメリーは不満そうな顔である。

自分の戦力集結案が半分否定され、パットンの機動戦案がそのまま採用された様な形だからだ。

更に……

福本

「なお、パットン中将指揮下の部隊に冬季被服などの最優先装備の許可をお願いします」

モントゴメリー大将

「な、なに!？」

思わず立ち上がるモントゴメリー大将。

これは極論すればパットンがソ連領侵攻の主役になる……と言う事だ。

モントゴメリー大将

「アドミラルフクモト!いくら何でもアメリカ軍に傾倒し過ぎている!我々イギリス軍……本官の出番が無いではいか!！」

相手はイギリス軍の総指揮官……下手をすれば連合軍が瓦解する。

しかし、福本は容赦無し……

福本

「ならば、貴官の硬直した作戦スケジュールと功名心を抑えて頂きたい!!我々日本軍は戦争の早期終結の為に来ただけであって、あ

なた功名心を満足させに来た訳では無い！」

すっぱりと、かつきっぱりと言い切る。

言い返そうとした瞬間、自分が言った事に気付いた。

「本官の出番」

こんな事を言った時点で、福本から『功名心』と言われて文句は言えない。

それに硬直した作戦スケジュールによって、モントゴメリー大将指揮下の部隊は小回りが効きにくいのも事実で、部下の指揮官達も不満を持っていた。

その顕著な例がイタリア半島攻略戦で、アメリカ軍によるローマ進撃によって発生したイタリア軍の混乱に乗ずる事が出来ず、防衛線が突破出来なかった。

結局、翌日正午のイタリア軍降伏まで膠着状態だった。

そして、史実のマーケットガーデン作戦で大失敗した原因も上記2つの事と無茶苦茶な作戦計画だったと本人が知ればどう思っただろう？

この時になってモントゴメリーは気付いた。

自分を擁護する人間が連合軍どころか、身内のイギリス軍にも居ない事を……………

その後、会議は順調に進んだ。

しかし、数日後、モントゴメリー大将がいきなりイギリス本国に連合軍のイギリス軍指揮官の辞退を申し出た。

理由は『指揮する自信が無くなった』と言う事だった。

そして、この辞退は受け入れられ、新指揮官が派遣された。

イギリス軍将官であり、『イギリス戦車界の父』でもあり、チャー  
チル首相の義弟であるホッジス大将であった。

次号へ

作戦立案検討会議 後編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

パーシ・ホバート大将（前書き）

新米士官

「すみません!!」

福本

「何いきなり謝罪しているんですか？」

新米士官

「実は前号の最後の最後で人名を間違えるとゆう大失敗をおかしました!」

福本

「で、本当の人間が今作の人と……」

新米士官

「はい……ここは責任をとって……」

福本

「核持って自爆は駄目ですよ」

新米士官

「……………」

## パーシ・ホバート大将

パーシ・ホバート大将。

モントゴメリー大将に代わり、イギリス軍指揮官として就任した人物である。

かつ、イギリス軍では一番戦車に精通しており、機甲部隊創立を熱心に説いていた。

そして、彼はチャーチル首相の妹と結婚しており、義兄弟であった。しかし、そんな彼は第二次大戦が始まり、ポーランドでソ連軍にボコボコにされるまで退役・予備役編入され、国民義勇軍伍長として市民兵の訓練係にされていた。

何故か？

これにはイギリス陸軍内部の派閥争いが深く関わっている。

ホバート大将は退役前まで既存の歩兵師団や砲兵旅団を解散し、余剰人員及び装備を戦車隊に回すよう要求していたからだ。

この単刀直入な物言いがイギリス軍上層部は気に入らなかったらしい。

また、騎兵科将校からしてみれば、政府予算で乗馬を楽しめるのだが、ホバート大将は騎兵隊廃止を唱えていて、これも気に入らなかったらしい。

まあ、これは日本海軍の航空派と戦艦派、日本陸軍の戦車派と歩兵派の派閥争いに似ている。

やはり、どこの軍でも派閥争いはあるものだ。

しかし、皮肉にも日本陸軍ではイギリス陸軍よりも早く騎兵隊に見切りをつけ解散し、騎兵科将校は戦車隊に編入されている。

イギリスは変なところで革新的であり、変なところで保守的である。

さて、やっとこさホバート少将（当時）を抑え込んだイギリス陸軍に衝撃的な事件が連続発生した。

まず、ノモンハン事変でソ連軍機甲部隊と日本軍戦車隊が激突した事だった。

この時は日本軍の98式軽戦車が活躍し、ソ連軍戦車に多大な損害を与えた。

次にソ連軍がポーランドに侵攻、第二次世界大戦が開始されイギリス派遣軍が大損害を被り、東プロイセン・リトアニア地方でのドイツ軍機甲部隊の奮戦。

そして、日本軍のサブルム帝国戦での陸戦戦車隊投入と、続く日米戦でフィリピン・南太平洋・ハワイでの陸海軍戦車隊投入。

最近に至っては、日本陸軍戦車隊がソ連軍機甲部隊に終始優位にたっていた事だ。

特にイギリス陸軍にとって衝撃だったのは、ポーランド戦役で無敵と思われたマチルダ2歩兵戦車がソ連軍のT34やKV-1戦車の先生産型に撃破された事だった。

実はホバート少将は軽戦車を無価値と断言し、中戦車は歩兵戦車と快速の巡航戦車に分けて開発するのには疑問を持っていた。

それに、ポーランド戦役での戦車隊敗北の原因が過去にホバート少将が指摘している事だった。

そして、ポーランド戦役後、チャーチル首相によってホバート少将は予備役からの復帰を通過したのである。

これを聞いた陸軍保守派は大いに慌てた。

それこそ、ホバート少将が戦車部隊を管理する要職に就けば報復される……本人にそんな意識は無いが……とか云々を考え、そうならない様、あちこちに転属させたり何なり……単純に言えば裏工作をしていたのである。

そんな事をやっている内に、モントゴメリー大将が『自信損失』を理由に辞表を出し、モントゴメリーを嫌っていたチャーチルはこれ

を承認、新たな指揮官として義弟のホバートを大将に昇進させ指揮官に任命した。

保守派からしてみれば大将にはなったが本人が戦場に行くと言う事で、とりあえず一安心。

ホバート少将もどちらかと言えば、部下や参謀と論議しながら野戦の指揮を執る現場派の人間なので快く承諾し、イタリアに向かった。しかし、保守派は気付いていなかった。

ホバート大将よりも若く、イザとなれば自ら乗り込む事もある、同じ様な人間が日本海軍にいる事を……

#### 戦艦播磨長官公室

福本

「……ふん……」

マリダ

「あら、どうしたの？」

福本

「今度来るホバート大将はチャーチル首相の義弟なんだけど…変わった経歴をもってるね」

チャーチル首相に頼んで提供してもらった経歴書を読んだ福本が呟く。

さすがにモントゴメリー大将が辞表を出すとは思わなかったから、二度とそんな事が起こらない様に、予めホバート大将の事を知っておこうと資料を送ってもらったのだが……。



マリイダ

「……あら、あなただって似た様な者だと思っけど……」

福本

「え？」

資料を読んだマリイダの言葉に福本が反応する。

マリイダ

「だって、ダイスケも同じ様な事やって、柿宮や辻中佐がクーデター起こしたんじゃないか？あなが嫌い？」

福本

「……そうだったね……」

結論。

やっぱり人の事はあまり言えない。（福本）

次号へ

パーシ・ホバート大将（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 中国内情

話を少し変えまして……

今だ、満州・中国北部での戦闘は続いていた。

しかし、初戦の勢いを失い、また、制空権を失い後退に次ぐ後退により連合軍が優位にたっていた。

この時点で、ソ連軍による満州進攻及び中国共産党支援は不可能となっていた。

さて、この頃中国共産党は何をやっていたのか？

本拠点を延安イエンアンに置いていた中国共産党。1939年2月に中国国民党と日本が停戦協定を結ぶと、1936年に結ばれた国共合作は自然消滅し、矛を中国共産党へと向けた。

ここに再び国民党VS共産党の戦いが始まった。

当初、双方一進一退の互角に戦いを展開していたが、停戦協定の条項内の日本からの軍事援助が始まると徐々に国民党が有利に傾きだした。

武器支援……一式中戦車や一式中戦車改、機関銃、航空機など……は勿論の事、軍事顧問団も派遣された。これが後に『白団バイタン』と呼ばれる士官教育団である。

これは当たり前だが、軍を作るにおいて重要なのは装備と人員である。

特に人員においては、指揮官となる士官は大事な存在である。

この頃の中国国民党軍は、士官の質が悪く、これを改善する事は急務であった。白団は蒋介石から士官教育の全権を任せられていたか

ら半端なものでは無い。

まず、士官達は篩に掛けられる。

これにより、四割から六割の士官が脱落。

再教育を受け、卒業試験があるのだが、これがまた凄い。

なんと、部下を与えられ戦場の陣地を1週間から10日間守備するとゆうもの。

無事に守りきり生還すれば合格、陣地放棄及び戦死で不合格……と、運や勘なども……と言つか他の国でやれるような卒業試験ではない。しかし、裏を返せばこれ程の事をやらなければならない程国民党軍士官の質が悪かったとゆう事だろう。

勿論、これに対し抗議もあったが蒋介石は黙殺した。今までの様に、使えない士官を置いておく余裕も何も無いからだ。

そして、空いた士官枠には場数を踏み、有能と認められた下士官を昇進させて穴を埋めた。

また、新規士官も厳しい教育と訓練を行わせ、徹底的に鍛えていた。そして、鍛え直された中国国民党軍は一大攻勢を開始、各地に散らばる中国共産党拠点を潰しに掛かった。戦車を先頭にし、重砲・航空支援の下、抵抗を排除しつつ次々と拠点を制圧していった。

さて、中国共産党軍はと言うと……頭数だけは多かった。

しかし、その編成は歩兵であり、戦車・砲兵は皆無に等しかった。

残念ながら、専門教育を必要とする戦車・砲兵を教育する機関が無く、それ以前にそんな重火器……あって迫撃砲……が無い、と言うよりも必要が無く、歩兵同士の戦いで事は済んでいた。

しかし、日本による武器支援によって戦車が出始めると、中国共産党軍は慌ててソ連に兵器の追加援助を要請した。

しかし、戦車を寄越せと言っても乗れる人間がない。

しかも、ソ連もヨーロッパ・地中海・アジア方面の3方面に軍を展

開していたが、到底中国共産党の支援に回る余裕が無かった。それでも、ソ連の満州進攻作戦が決まると、中国共産党に対する武器支援も決まった……のだが、その頃にはソ連も中国までの輸送ラインは細くなっており、必要な数を必要な所に持ってこれなくなっていた。これでは重砲や戦車の輸送も難しい。そして、そうこうしている内に中国共産党軍は追い詰められていたのである。

6月20日 延安 深夜

ふと、毛沢東は目を覚ました。なぜか、虫の飛ぶ様な音が聞こえたからである。しかし……

ズガン！！

この爆発音で本当に目が覚めた。慌てて外に出ると、見張り台から機関銃が乱射されている。

毛沢東

「馬鹿な！いったい誰が……」

その時、彼は正体を知った。

火災により赤く照らされた夜の空に日の丸マークの双発機が飛んでいた。

飛龍、呑龍、99式軽爆：日本の主力爆撃機が次々に爆撃を投下していた。

実は、富嶽も爆撃していたが、日本の爆撃機も知らない毛沢東が解るわけが無い。

ズガン！ドゴン！ゴワン！……

周恩来

「書記長！早く脱出し、ソ連で捲土重来を期しましょう！」

毛沢東

「糞…小日本め！必ず…必ず貴様らを…」

ズガガン！！！！

富嶽が投下した1t爆弾が毛沢東を直撃し、肉体をこの世から消滅させた。

それだけでは無い。

周恩来や回りにいた部下や兵士を巻き込んで纏めて吹き飛ばした。そんな事も知らず、日本軍は爆撃を続ける。

とにかく、日本軍は延安の拠点を破壊するのが任務だからだ。

……この空爆を境に中国共産党は分裂・崩壊した。

次号へ

## 中国内情（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 建国宣言

6月23日 スボドヌイ

その日の早朝、圧倒的物量と航空攻撃によるアメリカ軍の攻撃により、シベリア鉄道の駅があるスボドヌイは陥落、目立つ所に星条旗が翻った。

これにより、チチハル侵攻軍は補給路を絶たれ、数日後に降伏する事になる。

そして、その日の正午……

ウラジオストク

未だ破壊の跡が残るウラジオストク。

そんな中、ある広場に粗末ながらも壇上があった。

その壇上に1人の男が立った。

レフ・トロツキー。

ロシア革命の指導者の1人であり、スターリンの政敵である。

彼は備え付けられたマイクに力強く言い放った。

『ここに……ロシア共和国の建国を宣言する！』



スターリンが主権を握った後、トロツキーは海外に亡命した。元々、レーニンはスターリンが政権を取る事は危険だとみていて、後継者にはトロツキーなどがなると思われていた。

しかし、スターリンが書記長の地位を利用し、政敵をスキャンダルで叩き落とし主権を握った。

そして、1940年8月20日、亡命先のメキシコでスターリンの放った暗殺者によって殺害された。

……とゆうのは史実の話。

1939年12月に第七艦隊計画を始動した時、福本は既に対米・対露戦の推移を考えていた。

そんな時に、ソ連降伏後の事が問題になった。

下手な放置は第二のスターリンを生みかねない。

となると、イギリス・ドイツ・アメリカ…どうせ味方になると考え、アメリカも入れた…などの連合国が認める人間である必要がある。

そう考えるとスターリンの政敵であり、政策面でも違つトロツキーは適任である。

この事を明子天皇や宇垣首相、永田陸相、米内海相などに相談すると、全員一致で賛成だった。

そして、トロツキーの所在を掴む為に、当時出来たばかりの諜報部が動員された。

諜報部は出来る限り手を尽して行方を搜索、メキシコに居る事を突き止めた。

そして、1940年8月20日。身柄の確保の為に腕利き4名をトロツキーの居る別荘へと向かわせると、スターリンの放った暗殺者と鉢合わせ、銃撃戦の末、1人が軽傷を負ったが、2名を射殺、1人に負傷を負わせ、トロツキーの身柄を無事に保護した。

その後、アメリカ イギリス インド シンガポール 香港…とゆ

う順路で日本へとトロツキーを連れて来た。  
そして、宇垣首相と極秘で会談、協力を願い出た。  
日本からしてみれば、ソ連を内部崩壊を狙えるし、ソ連軍側からの  
投降により、犠牲無しでソ連軍戦力を減らす事が出来る。  
トロツキーにしてみれば、スターリンを追い出す事も出来るから良  
い話である。この秘密会談後、トロツキーは満州に飛び、組織の地  
固めを始めた。  
そして……ロシア共和国建国宣言に至る。

タラント軍港

戦艦播磨長官公室

福本

「さて…これでソ連は慌てますよ」

播磨

「慌てる…のかな？」

先程届いたトロツキーによる『ロシア共和国建国宣言』の内容電文  
を一見した福本の言葉に播磨が疑問を投げ掛ける。

福本

「自分の政敵が連合国の支援を受けて国を建国した…誰だって慌て  
ますよ」

特にスターリンは恐怖政治で反対派も何も抑え込んでいたから、レ  
ーニンの後継者の1人であったトロツキーを担がれるとヤバイ。

なおかつ、トロツキーは自分の裏の事がある程度知っているから、これも困る。そして、スターリンに嫌気がさした軍や政府関係者がトロツキー方についたり、亡命でもされたら、それこそ『ドアを蹴飛ばせば、家が崩壊する』である。

福本

「どんな冷徹な人間でも、焦りや動揺によりミスをおかします。後はミスにどれだけ我々が潰け込めるか……あるいはその焦りや動揺をどれだけ周りに広めれるか……ですね」

静かに言うと、その電文を執務机に放り投げ、小さい側舷窓から外を見る。

見える範囲だが、連合軍艦艇が出港準備に追われていた。

次号へ

## 建国宣言（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

攻勢へ……

7月1日 満州領内

ゴゴゴゴゴゴ……

張家口から出発した、佐伯戦車連隊、サブールム帝国軍1個歩兵旅団は車列を組んでチチハルへと向かっていた。

バドエル少将

「……なあ？」

マイラーノ中佐

「はい？何ですか？」

バドエル少将

「俺達、どこに向かっているんだっけ？」

マイラーノ中佐

「……忘れたんですか？シベリア鉄道の駅があるチチハルです。我が軍は日本軍と協力し、チタを攻略せよ……との事です。東京から来た命令書読みました？」

バドエル少将

「あ、ああ、ちいとはな……しかし、歩兵がトラックに乗るなんざあ、えらく待遇が良くなったな」

マイラーノ中佐

「ええ……ヴィントラント戦や日本戦でも、歩兵は歩きでしたね」

バドエル少将

「それに比べれば楽だな。で、トラックでチタに移動か？」

マイラーノ中佐

「確かに楽になりました…ですが違います」

バドエル少将

「なに！？また歩きか？」

マイラーノ中佐

「…あのですね、なぜチタに行くか解ってます？チタにはシベリア鉄道の駅があるからです。日本軍の説明だと、シベリアでは線路沿いにいないと補給は受けにくいんです。だから、駅を抑えてしまえばソ連軍は例え大軍でも自滅する…だそうです。そして、歩きにしてもトラックにしても、チタに行くには土地が悪いんです！」

バドエル少将

「…じゃあ、鉄道しかないな…ああ？敵の駅に鉄道で移動？矛盾してないか？」

マイラーノ中佐

「知りません。とにかく、チチハルに移動せよとの命令です」

バドエル少将

「はいはい…解ったよ…」

チチハル

チタ攻略軍司令部

栗林中将

「お待ちしておりました。山下大将」

チチハルの司令部でチタ攻略軍司令官山下奉文大将を迎えていた。

山下大将

「うむ：チチハル防衛では、全軍良くやってくれた。しかし、ソ連軍は再び攻勢に出ようと準備しているそうだ。トロツキーの建国宣言はスターリンを慌てさせた様だな」

栗林中将

「はい。ですが、再び日本軍と戦うのは前線部隊です。3個戦車連隊、2個歩兵師団、サブム帝国軍からの歩兵旅団を加えた先鋒隊でチタを攻略してご覧にいきます」

山下大将

「無理はするなよ。第七艦隊の福本元帥ではないが、将兵1人1人が明日の日本を担う者達なのだからな」

栗林中将

「はい。それで、我が軍は？」

山下大将

「まずは、チタまでの数カ所の間駅を一カ所づつ確保する。多分、チタに近付く頃にはソ連軍はチタを攻略されん様に防衛線を張るだろうが、航空支援もある。攻略は可能だろう」

栗林中将

「チタを攻略出来れば、シベリアに残存するソ連軍は干乾しになり、モンゴル政府はソ連の支援が受けられない。そして、戦線はチタ以西に下がる…ですな」

山下大将

「ああ。すでに幾つかの遊撃部隊が中間駅の近くに潜入している。作戦開始と共に駅を確保する手筈だ」

栗林中将

「そういえば、ヨーロッパでも反攻作戦の準備が開始したとか？」

山下大将

「イギリス軍指揮官が辞表を出す事態が起きたが、新指揮官も早期に就任し、混乱も無いそうだ。向こうもソ連領内となると、鉄道しか確実な補給手段は無い。鉄道連隊も参加するそうだ」

栗林中将

「となると、向こうはポーランド奪還から始めますな。こちらも負けてはいられませんね」

山下大将

「ああ…ところで、サブルクム帝国軍の歩兵旅団は使えるかね？」

栗林中将

「大丈夫でしょう。張家口防衛戦で初対戦のソ連軍に対し、先発隊をあそこまで騙せましたから…それに下士官兵の殆どが実戦経験者ですから心配な無いかと」

山下大将



「同盟国の部隊に不信感を抱くのは不謹慎だが…どうもな」

栗林中将

「それは仕方ない事です。ただ、第七艦隊の方は問題も無くやって  
いるので、こちらもし信じれば大丈夫ですよ」

山下大将

「…そうだな。信じるしかないな」

次号へ

攻勢へ……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 打開策無し

通常、戦闘により消耗した部隊（各国によって規模は違うが）は、後方に下がり、再編成を行う。

そして、その部隊の生き残った下士官兵は部隊の中核要員であり、部隊再編の中核を担うのが『常識』であった。

しかし、世の中には彼らを『罪人』と決め付ける国と指導者があった。

それが、ソ連とスターリンである。

スターリン曰く、『戦闘で大損害を被り、そのまま敗退した部隊は、生き残った全員が、敗北の責任を負うべきだ』…なのだそうだ。これは裏返せば、作戦の責任をうやむやにするために当事者の口を封じる為の言い訳に等しい物である。

ちなみに、これを聞いた福本は『責任を部下に負わせる典型的例であり、仮にも一国の指導者がやってはならない大罪事だ』と言っている。

まあ、これは自分の権力を固持しようとする独裁者スターリンと、『指揮官の最大の使命は、1人でも多くの将兵を帰りを待つ人々の下へ帰す事』を心情とする指揮官福本大介の立場上の違いだろう。

まあ、これが従うならどちらか？となると、後者を支持する人間が多いだろう。スターリンの場合スキャンダルで政敵を叩き出した過去があるせいか、有能と知れば肅清するのは赤軍肅清を見れば解る話である。

しかし、人はそれぞれ得意不得意があるのだから、これは仕方無い。反対に福本は英語が苦手だがそれを一向に気にする様子も無く（おいおい！）毎日働いているのが現状だ。

さて、最後は思いつきりズレた話になったが、なぜ前述の事を書いたかとゆつとチタ攻略作戦に係のある事項だからだ。

広い国土から兵を徴集するソ連軍はあまり訓練を行わず新設部隊もを戦場に投入する。

国境警備に就いていた部隊も勿論投入される。

まあ、アジア・ヨーロッパ方面で戦うか睨み合っているソ連軍の現状下では幾ら部隊が有っても足りず軍指揮下の部隊の殆どが戦場に配備されている。

しかし、国境警備は疎かに出来ない。

だが、軍の部隊は戦場で手一杯で国境警備に手が回らない。

では、ソ連はどのようにして国境警備の穴を塞ぐのか？

これは国家保安人民委員部（略称NKGB）所属の国境警備隊である。

しかし、この国境警備隊は戦力不足のソ連軍の穴埋めにも使われていた。

前述した通り、アジアとヨーロッパで戦っているソ連軍は兵力不足であり、戦車や野砲を装備していた国境警備隊は丁度良い存在であった。

ただ、表上の違いは制帽の帯色が赤軍の赤色では無く濃い緑色なのがNKGBの特徴である。

隊員：とゆつよりも、兵隊や将校の個人装備もソ連軍と変わらない小銃や短機関銃である。

しかしだ：幾ら軍隊に似た組織だといっても、基本的に彼らは保安委員：警察官である。

警察官が小銃や短機関銃ならまだまし、戦車や野砲を扱えるか怪しい。

しかも、軍隊と違い本格的な軍事訓練は受けていない。

だから、装備や制服は一緒だが戦闘になれば一気に化けの皮は剥がれてしまう。もちろん、こんな様ではマトモな戦力になる筈がない。しかし、これを根本的に解決しようと思うと、ソ連軍には時間が無い。

何故なら、二正面作戦を採ってしまい、動かせる兵力が不足しているからこんな事になったのであって、突き詰めていえば結局スターリンの責任である。

しかし、今さら認めても打開は不可能に近かった。

それこそ、ヨーロッパ方面軍をアジアに向けるしか方法は無い。

だが、ヨーロッパ方面での連合軍による反攻も近いから動かすわけにはいかない。

結局、ソ連軍はアジア方面は守るしか無い。

しかし、今や強力な日本軍を止められるかは解らない。

次号へ

打開策無し（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 日本軍鉄道部隊

日本軍では戦地での鉄道建設・既存の鉄道を管理運営する部隊として明治から鉄道大隊が存在していた。

その後、明治期に第一連隊、大正期に第二連隊、昭和9年に第三連隊が設立されている。

また、昭和14年に日本・中国国民党と停戦講和した時には、六個連隊に増えていた。

その後、対ソ戦に備えて再編・拡張がなされ、新たに三個連隊増加、再編により九個鉄道連隊は三個鉄道師団に改編された。

ちなみに、ヨーロッパ方面での攻勢には一個鉄道師団を送り込む予定で、既に一個連隊が先発隊として機材と共にヨーロッパへと向かっていた。

7月3日 ハルビン操車場

鉄道師団兵

「あれが新しい装甲列車ですか？」

鉄道師団下士官

「ああ、一部装備と開発は海軍さんがやったと言う異色な物だが、まあ、そんな事は言ってもらえないがな」

鉄道師団兵

「海軍さんが？まあ、装甲列車を『陸上軍艦』なんて言う人がいますか：装甲列車を造れるんですか？」

鉄道師団下士官

「機構の一部は軍艦に似ているそうだ。それに海軍さんにはこうい  
った事が得意な人間が居るからな」

鉄道師団兵

「？居ましたっけ、そんな人？」

鉄道師団下士官

「あのな……第七艦隊の福本元帥はお前も知ってるだろう？」

鉄道師団兵

「それはもちろん！山本海軍元帥と並ぶ人物ですよ！あ、そういえ  
ば第三鉄師（第三鉄道師団）はヨーロッパ方面に行くんですよ？  
羨ましいな〜」

鉄道師団下士官

「仕方無いだろう。この第一鉄師と第二鉄師は既に満州方面に投入  
される事は決まっていたんだ。それに、第三鉄師は今頃英語教育の真  
つ最中だ」

鉄道師団兵

「え、英語教育？」

鉄道師団下士官

「向こうはイギリスやアメリカ相手にしなきゃならないんだ。ある  
程度英語が出来ないと作戦に影響するんだと」

鉄道師団兵

「うわ……あれ、なら、何故自分達は英語習わせないのでですか？」



鉄道師団下士官

「向こうはイギリスとアメリカを常に相手にしなければならぬからだ。しかし、こっちは当分日本軍だけだから……だが、その内、英語教育もしくちやならん時もあるだろ」

鉄道師団兵

「うわ……で、なんで福本元帥の話が出たんですか？」

鉄道師団下士官

「ああ、悪い悪い、話が思いつきりズレてたな。この装甲列車は福本元帥がある意味後ろ楯の野口博士が開発したんだと」

鉄道師団兵

「え……あの、戦車の開発者で有名なあの野口博士ですか？」

鉄道師団下士官

「その野口博士以外に陸海軍を探しているのか？その野口博士だ」

鉄道師団兵

「はあ……けど、大丈夫ですかね？あの人、よく『変わってる人』って言われてますけど……」

鉄道師団下士官

「大丈夫だろう。人と考え違うからこんな造れるんだろ。それに、野口博士の戦車で撃破されたって噂は聞くか？」

鉄道師団兵

「い、いえ……」

鉄道師団下士官

「だろ？それに今更何言ったって乗るのは俺達なんだからさ」

そう言つと、下士官は兵を連れ、配置場所へと戻って行つた。

その頃……チチハルでは…

バドエル少将

「何！？装甲列車でチタに乗り込むだと！？」

マイラーノ中佐

「はい。まあ、鉄道なんですから、別段問題は無いかと」

バドエル少将

「いやいや、待て待て！鉄道だぞ！？爆破されたらどうするんだよ？」

マイラーノ中佐

「それは日本軍が修理するんでしょう。それに、そんな事したら、ソ連軍だって困りますよ」

バドエル少将

「なんでだ？」

マイラーノ中佐

「自分達が反撃する時に線路がそのままでは補給列車が通れますか？」

バドエル少将

「…なるほど、シベリア鉄道は色んな意味で両刃の剣か…」

マイラーノ中佐

「はい。それに、今回の作戦はウラジオストクの方からも日本軍の装甲列車で進撃する予定です。まあ、一方を守れば一方が空く、空いた方から攻める…ですね」

バドエル少将

「チチハルとウラジオストクか…これは競争だな！」

マイラーノ中佐

「…バドエル司令」

バドエル少将

「解ってるよ、マイラーノ。だがな、あと2ヶ月ちよいで雪が降るんだろ？なら、一刻も早くチタを攻略して戦線を下げたい…なら、これは競争だぜ？」

マイラーノ中佐

「まあ…確かに」

バドエル少将

「まあ、俺はそっちの方が面白いがな…で、作戦開始は？」

マイラーノ中佐

「近日中…遅くとも1週間…あるいは明日かと…」

バドエル少将

「ふっ…作戦開始が楽しみだぜ！」

次号へ

日本軍鉄道部隊（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 密かなる侵攻

7月5日

チタでは大騒ぎが起きていた。

防備を固める為、部隊を集結していたチタ。

しかし、いきなりウラジオストクに向かう路線とチチハルに向かう路線の両方からの連絡が途絶えたのである。

これが短時間なら問題はなかった。

今は違うが、冬であれば着氷か強風で架線が切れ鉄道電話が不通になるのは毎年あった事だからだ。

しかし、冬場でも無く、しかも長時間連絡が取れないのは異常事態である。

また、この騒動は連絡の取れない駅でも同様であった。

いきなりチタだけで無く、駅同士の連絡も取れなくなったからだ。

しかも、こういった場合、近くの駅から装軌車がやって来て連絡を取ろうとするのに、そういった様子もない。

普通ならあり得ない事態に各駅では混乱していた。

しかし、この時、戦線や満州から近い駅で発生している事態を知ればたちまち全ての原因が解っただろう。だが、結局は全ての駅でその原因を身をもって知る事になる……。

ある駅

ボタン！

将校

「なんだ？」

いきなりの物音に国境警備隊の将校は慌て外に出た。それがいけなかつた。

ドス！

ドタン！

人体急所の脇腹を何者かに刺された将校が倒れる。

「こいつ、素人か？物音で慌て出て来やがった」

血に染まった銃剣を拭いながら日本兵が呟く。

「半分はあつてます。こいつはNKGB…国会保安人民委員部の国境警備隊員ですよ」

日本兵と同じ格好をしたロシア人が死体の制帽を見せる。

日本兵

「確かに、赤軍は赤帯だったからな」

「軍曹。こいつ、将校ですよ。ほら、拳銃を持っています」

将校の遺体を探っていた、これまた同じ格好の朝鮮人兵が報告する。

日本兵

「よし、なら、中には地図やら書類やらがある筈だ。探すぞ」

ロシア人・朝鮮人兵

「はい」

3人は駅舎に入って行った。

さて、彼らの正体にお気付きの読者もいるかもしれないが、彼らは日本軍の挺身隊……遊撃部隊である。

作戦開始1週間前にそれぞれの確保する駅の近くに一個分隊が潜入し、作戦開始の暗号電と共に駅の確保を開始したのである。

まず、鉄道電話の架線を切り、国境警備隊員が装軌車で出て行った事を確認すると、駅舎を確保する。

もともと、こういった忍者の様に誰にも知られずに潜入、静かな襲撃を得意とするのが日本軍である。

対し、アメリカのレンジャー部隊はカウボーイの様に荒々しく、力攻めのような襲撃をする為、今回の作戦投入は見送られた。

また、挺進隊には亡命ロシア人や朝鮮人などが日本軍として加わっており、日本人と共に活躍していた。

日本兵

「お、来たな」

制圧した駅舎の周りを警戒していた挺進隊一個分隊の前に装甲列車



が滑り込んで来た。

#### 4式装甲列車

野口博士が94式装甲列車の運用データなどを基に開発した新型装甲列車である。

士官

「ご苦労。敵の装軌車は？」

日本兵

「は、残りの者が破壊しました。次に行きますか？」

士官

「ああ。どうやらシベリア本線の方も成功している様だ。ここで立ち止まっている暇も無いしな」

日本兵

「わかりました。分隊！総員乗り込め！」

命令を受けた隊員達が兵員車に乗り込む。

士官

「駅の方は直ぐに後続が来るから大丈夫だろう。よし、出発だ！」

汽笛を鳴らすと装甲列車は発進する。

この時、チタでは日米両爆撃部隊が来襲、迎撃するソ連軍戦闘機と

日米戦闘機の激しい空中戦が起きていたが、早期警戒管制機の管制誘導を受けた日米戦闘機隊が終始優位に立ち、無事敵陸上部隊に対する爆撃を行っていた。

次号へ

## 密かなる侵攻（後書き）

明日・明後日は定期更新の『土官候補生異世界奮闘記』を更新致します。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

## 2つの作戦

7月6日 チタ防衛司令部

司令官

「日本軍の侵攻か……」

参謀

「は。シベリア鉄道、旧東清鉄道の両方から来ています」

司令官

「しかし……いったいどつちが本筋だ？」

どうやらこの司令官はシベリア鉄道と旧東清鉄道のどちらかが囷の侵攻だと思っている様だ。

しかし、これを日本軍が聞いたら苦笑しただろう。

まさか、両鉄道からの攻撃は、双方共に囷であり主攻であるからだ。つまり、隙有ればそこを突く……これが戦術である。

司令官

「……まずは旧東清鉄道の方をどうにかしよう。満州からチタまで、こちらの方が近い」

参謀

「では、シベリア鉄道の方は？」

司令官

「もちろん、手を打つ。とにかく、情報を集めろ」

参謀

「はい」

チタ上空

「やはりか…」

上空から100式司令部偵察機がチタを見ていた。操車場や引き込み線に軍用輸送列車が集まりつつある。どうやら、少しずつだが、ヨーロッパや新設部隊をチタに送り込んでいるのだろう。

「さて…見付かつては意味が無い…引き上げよう」

日本軍輸送列車内

バドエル少将

「…敵がないな」

マイラーノ中佐

「仕方ありません。ここにいた国境警備隊は日本軍の挺身隊によって片付けられました」

バドエル少将

「はあ…早く戦いて〜」

マイラーノ中佐

「まあ、ソ連軍もバカではありませんし、どこかで我々を迎え討つ準備をしているでしょう」

バドエル少将

「頼むからな…せっかく輸送列車で乗り込んだのに、敵が1人も見えない内にチタに着くなんて、真つ平ごめんだぜ」

マイラーノ中佐

「……それはないでしょう」

なぜなら、チタはシベリア鉄道と旧東清鉄道の二本の鉄道路線が重なる場所である。

そんな重要拠点を守るとなれば、拠点の一步二歩手前で防衛線を敷くのが当然である。

これで敷かないのは相当のバカか、何か奇策を思い付いた天才かのどちらかである。

その頃……地中海では……

戦艦ワルキューレ艦橋

福田

「いや〜、久し振りの出番だ!」

アルファーニ

「それを言ったらダメでしょう。( ^ | ^ ; )」

福田

「いや、だってさ、25話ぶりに表に出てきたんだぞ」

アルファーニ

「まあ…それはそうですけど…」

苦笑しつつも同意せざるおえない。

福田

「今頃、シベリア方面は鉄道巡ってドンパチ…で、こっちは…」

アルファーニ

「ダメですよ、司令。我々の作戦目標は今回、全面的に伏せられているんですから」

福田

「別段問題は無いだろう。どうせ、次ぐらいで解るんだから」

アルファーニ

「ダメです。だから、上の場所表記も曖昧な『地中海』にしているんですから」

福田

「はいはい…しかし、さすが先輩だな。イタリア海軍を作戦参加を容認するとはな」

福田の視線の先には、作戦に参加する戦艦イタリア、重巡洋艦ゴリツィア、空母アーキラ…と主要艦艇の艦影が見える。

アルファーニ

「『地中海なら彼らの庭先だ。彼らに参加させるべきだ』…敵であつたイタリア海軍を参加させるとは…さすがだと思います」

福田

「いつまでも敵だと言っているのは、戦後が大変だからね。それについては先輩は早い。海龍のファツションショーだつてその一環だつた訳だし」

アルファーニ

「本人は顔真っ赤でしたけど」

福田

「さて…サブム艦隊とイタリア艦隊、第七艦隊の派遣艦艇だけで、宮崎師団と長野連隊、イギリス軍を援護出来るかな？」

アルファーニ

「…どうでしょうね。ソ連軍の目がアジア方面にいつてるのに合わせた作戦に結果になりましたからね」

福田

「今回の作戦がなんて言うか知ってるか？『窓から侵入』作戦だと」

アルファーニ

「あはは…なるほど、窓ですか…面白いですね」

福田



「笑えるかね、まあ、なる様にしかならないか……」

次号へ

## 2つの作戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ネリチンクス攻略戦

7月8日 チタ

司令官

「なに！？ヤポンスキーがシベリア鉄道ではネリチンスク、旧東清鉄道はタルスカヤの目の前にいるだと！！？」

参謀

「は、はい！」

司令官

「馬鹿者！偵察機や偵察隊は何をやっていた！？」

参謀

「偵察機は出しても敵の迎撃で落とされました！偵察隊は音信不通で……」

司令官

「くそ……とにかく迎え討つぞ！ネリチンスクには部隊がいたな！？」

参謀

「はい、戦車師団と歩兵師団……僅かながらも砲兵部隊も……」

司令官

「よし！その部隊に迎え討たせろ！タルスカヤには自走装甲ワゴンを基点に守りを固めろ！急げ……！」

参謀

「はい!!」

慌て参謀が出て行った。

ネリチンスク郊外

重見中将

「いよいよ来たか…ソ連軍」

ようやく自分達を見付けたのだろう、戦車部隊を先頭にやって来る。まあ、それもそうなる。

常にレーダーで警戒しているからソ連軍偵察機はいち早く発見し、撃墜している。

また、敵偵察隊も挺身隊が先に発見し、処理している。

しかし、わざわざここで立ち止まっているのだから、攻撃してくれなければ困ると言つものだ。

ちなみに重見中将は指揮車に使っている五式重戦車の車外に居た。

まあ、五式重戦車も機械化工兵が掘って擬装された壕の中にある。

この為、外から見れば装甲列車が仮説ホームで警戒しながら増援を待っている様にしか見えない。

しかし、実は丹念に擬装された壕に一個戦車師団がダックインして待っていたのである。

そして……

重見中将

「カクカク…一斉に撃て！」

それは突然だった。

地雷排除の為に10分間の事前砲撃を行って、これでもう安心だろう……と思いきや突撃した瞬間……発砲炎が瞬いた。

しかも、一門や二門ではない。

10門か……20門か……それ以上の発砲炎が一斉に進撃していた戦車部隊に向かって瞬いた。

ゴーン！ドーン！ポーン！ズゴーン！グォーン！……

あっという間に何両かのT34、KV-1戦車が爆発・炎上する。各車の車長が慌て敵を確認しようとするが、一目見ただけでは敵はいない。

ソ連軍戦車長1

「くそ！敵はどこだ!？」

ソ連軍戦車長2

「敵の装甲列車からじゃないのか!？」

ソ連軍戦車長3

「馬鹿な！撃った様子は無いぞ!」

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

ドン！ドン！ドン！ドン！……

そうこうしている内に、日本軍の第二撃目。

ズゴーン！ゴワーン！グォーン！ドォーン！ドワーン！ポワーン！

……

ソ連軍戦車長1

「くそ！ヤポンスキーの奴ら隠れてたな！」

ソ連軍戦車長2

「砲塔を回せ！吹っ飛ばしてやる！」

重見中将

「よし…カクカク…ダックインを解除…相互支援しつつ各自自由戦闘に入れ」

ブロン！

重見中将の乗った五式重戦車が勢い良くエンジンを掛ける。

ズドン！

ゴワーン！

後退で壕から出つつ、発砲する五式重戦車…正面装甲を貫かれるT34…。

今や日本軍戦車がソ連軍戦車に対し圧倒的優位なのは誰もが知る事だ。

なぜなら、同レベルのM4ジャーマンを数両相手に撃ち合えるのが日本軍戦車である。

重見中将

「さて…ひと暴れするか！」

指揮官

「なに！？敵戦車だと！？」

戦車隊指揮官

『はい！ヤポンスキーの戦車部隊です！奴ら、壕を掘って隠れていたんです！！』

指揮官

「くそ…わかった！再度そこを砲撃する！後続部隊も直ぐ前進させる！待っている！」

ここで、砲兵部隊と共に後方にいた指揮官が再度の砲撃を指示した。しかしだ…通常、砲撃は場所を移動するのが普通である。

これは同じ地点で砲撃すれば最初の砲撃で位置はバレている為に攻撃を受ける可能性があるからだ。

しかし、今回は装甲列車だけだと思ったのが間違いだった。

なぜなら…突然上空から多数のロケット弾が指揮官と砲兵部隊、後続部隊を襲ったからだ。

上空では……

日本軍爆撃隊隊長

「よし！大成功だ！」

20機程の飛龍爆撃機がソ連軍の真上を飛んでいた。しかし、ただの飛龍では無い。

開かれた爆装庫をよく見ると、12cm程の穴が多数空いた箱の様な物を3基積んでいる。

これが後に『火矢射ち』と呼ばれる事になる四式爆撃機飛龍『噴進砲掃射機型』である。

これは富嶽爆撃機に多数の機関砲を積んだ地上掃射機型があるので、製造が簡単で、入手しやすい噴進弾を使って面制圧が出来る噴進砲掃射機があつてもいいんじゃないかとゆう意見で設計された物である。

飛龍の爆装庫に12.7cm28連装噴進砲を3基斜め下向きに搭載し、一斉総射するとゆうシンプルな構造。

ただ、開発者の間で難儀したのは、噴射煙をどう逃がすかであつたらしい。

今回は20機の飛龍噴進砲掃射型が参加、風向きが影響する命中率と威力は数でカバー…とゆう事で、一斉に噴進弾を発射した。

総数は28×3×20=1680発……鉄の嵐である。

そして……それを受けた下のソ連軍は堪ったものでは無い。

たちまち、36門の野砲・榴弾砲、砲兵部隊、指揮官と幕僚を消滅させ、後続部隊を壊滅させた。

後続部隊にはタンクデサントを載せた自走砲…SU76軽自走砲やISU122重自走砲、T34やKV-1も一緒に吹き飛んだ。

日本軍爆撃隊隊長

『こちら飛龍隊。敵後続部隊及び敵砲兵部隊は壊滅。障害は排除しました』



重見中将

「よし！カクカク、このままネリチンクスに突入せよ！」

この命令を聞いた全戦車が速度を上げた。

また、装甲列車も動き出す。

ソ連軍も後ろの状況を知ったのか逃げ始めた。

水上少将の歩兵師団は装甲列車で駅に突入、佐藤中将の歩兵師団は重見中将の戦車師団と共にネリチンクスに突入した。

ちなみに、ネリチンクスに残っていたのは僅かなソ連軍部隊と国境警備隊だけ。結局、1時間程の戦闘でネリチンクスは日本軍の手に落ちた。

次号へ

## ネリチンクス攻略戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## タルスカヤ攻略戦

数時間後……タルスカヤ

ソ連兵 1

「おい、聞いたか？」

ソ連兵 2

「なにを？」

ソ連兵 1

「ネリチンクスが落ちたらしい」

ソ連兵 3

「おい！まじかよ！？」

ソ連兵 1

「バカ！声が大きいぞ！」

ソ連兵 2

「しかし…そうなるとヤバイぞ」

ソ連兵 1

「只でさえ旧東清鉄道から来てるんだ……合流されたら終わりだ」

ソ連兵は静かに噂していた。

しかし……まさか、自分達が見られているとは思わなかっただろう。

タルスカヤより数キロ下った地点……の装甲列車

士官

「どうやら、敵はネリチンクスが攻略された事により、かなり動揺していますね」

栗林中将

「うむ…今が好機かも知れん。今夜夜襲を仕掛け一気に奪取しよう」

参謀

「しかし、我々の手勢は挺身隊と山崎大佐の歩兵連隊と、池田大佐の戦車第11連隊のみ……動揺しているとはいえ、MBV2自走装甲ワゴンが6両を配備しています。いくらこちらに装甲列車があるとはいえ多勢に無勢かと……」

バトエル少将

「なんだ？その自走…なんとかってのは？」

マイラーノ中佐

「自走装甲ワゴンです」

参謀

「！誰だ貴様ら！？」

バトエル少将

「サブールム帝国派遣部隊第68歩兵旅団指揮官のバトエル少将だ」

マイラーノ中佐

「同じく、副官のマイラーノ中佐であります」

不良軍人の様に着崩した指揮官とすっかり者の副官……そのまんま。

栗林中将

「君か…張家口防衛戦でソ連軍を手玉にとったのは？」

バトエル少将

「なに、ソ連軍を騙して踊ってもらっただけですよ」

参謀

「こ、こら！いくら派遣部隊の指揮官でも、上官に対して…」

栗林中将

「よいよい。さて、自走装甲ワゴンとゆうのはだな……」

日本やドイツ、ポーランド、ソ連などが当時主な装甲列車運用国であり、それなりの装備があった。

特に、史実でドイツはソ連軍と鉄道の奪い合いをしている。

この時に使用されたのが自走装甲ワゴン（重軌道車）である。

これは本来、鉄道警備用に欧州諸国が保有している物で、多くはディーゼル機関車の車台に装甲車体と旋回砲塔や機銃を搭載した物……簡単に言えば河川砲艦をディーゼル機関車の車台に載つけた物である。

特にソ連軍の自走装甲ワゴンは強力で、MBV2に至っては、車体重量120トン、76〜85mm戦車砲を装備した旋回砲塔三基に多数の機銃を搭載、車体中央部には固定された装甲司令塔……まさに砲艦をそのまま載せた様な化け物である。ただ、車体部装甲は20mm程度……旋回砲塔は70mm以上の装甲を備えている。

バトエル少将

「なるほど…それは厄介な存在ですね」

栗林中将

「うむ、この為、我々は夜襲を決行する。駅は装甲列車で抑える。貴官の部隊は別動隊と共にタルスカヤを抑えてほしい」

バトエル少将

「……マイラーノ、タルスカヤは任せた」

マイラーノ中佐

「……はい？」

バトエル少将

「駅の確保を挺身隊だけにやらすには足りない。なら、旅団を2つに分けて一方をタルスカヤ、一方を駅の確保に当てる」

マイラーノ中佐

「やっぱりですか…了解しました」

参謀

「ま、待て！貴隊はタルスカヤの攻略だ！いくら何でも…」

バトエル少将

「なら、装甲ワゴン6両を相手にするか？一部兵を割いて、一部でも敵戦力を潰せるなら、そちらの被害も少なくなると思うんだが？」

参謀

「ぐ……」

栗林中将

「そうだな。そうしてもらおう」

参謀

「閣下!？」

栗林中将

「手勢が少ない…それに彼の言っている事は理にかなっていると思  
うが?」

参謀

「……わかりました」

渋々承知する参謀だった。

夜……タルスカヤ駅

四式装甲列車指揮車内

士官

「よし!始めるぞ!暗視灯照射!」

兵

「はい!」

指揮車に備え付けられている30cm暗視灯(赤外線式暗視投射灯)

が線路上や待機線にいる装甲ワゴンを照射する。

士官

「第2、第3砲車でえー!!!」

四式装甲列車は先頭から警戒車二両、砲車四両、前方指揮車、機関車、炭水車、起源車、リーダー車、兵員車四両、材料車、後方指揮車、砲車四両、警戒車二両の編成である。

そして、第1砲車と第4砲車は20m機関砲を装備した対空砲車で、第2、第3砲車は12cm連装両用砲を搭載した砲車である。

この二両は指揮車の管制を受けて一斉に発砲した。

ドン！ドン！

ポワーン！ポワーン！ガキーン！ポワーン！

士官

「ち、惜しいな…次弾装填急げ！」

バトエル少将

「始めやがったな！」

装甲列車の砲撃音を聞いたバトエルが叫んだ。

しかも、直ぐソ連軍も応戦し始め乱打戦になる。

バトエル少将

「よし！敵は装甲列車に目がついてるな…今頃挺身隊も動いてるぞ！攻撃開始！」



サブールム兵

「「「「「おお！」「」「」」」」」

雄叫びを上げると駅と線路に乗り込むサブールム兵。

駅舎の周りは既に挺身隊により制圧され、サブールム兵は大部分が駅舎の制圧に向かう。

ちなみに、第68歩兵旅団は4分の3が日本軍と共にタルスカヤ攻略に回し、残りはバトエルの指揮で駅の制圧にまわった。

ゴワーン！

いきなりの爆発音にその方向を見ると、1両の装甲ワゴンが爆発・炎上していた。

しかし、まだ5両も装甲ワゴンは残っている。

バトエル少将

「戦車：じゃなかった、自走砲！どれか適当に破壊しろ！何人が俺に続け！」

バトエル指揮の部隊を援護する為に2式軽駆逐戦車2両まわされていた。

ボン！ボン！

ボワーン！ボワーン！

駆逐戦車が近くにあった装甲ワゴンに砲撃を加えている間に、バトエルと二個分隊が後ろから2つ目になった装甲ワゴンに迫る。そして、中央部にある扉をガンガン叩く。

ソ連兵

「誰だ！忙しい時に！」

そう言つて扉を開けたソ連兵を全員で引き摺り降ろし、開いている扉から100式短機関銃を持ったサブールム兵が中に向かって乱射する。

タタタタタタタタタ

タタタタタタタタタ

タタタタタタタタタ

タタタタタタタタタ

バトエル少将

「今だ！ブン盗つてしまえ！」

ゴワーン！

兵

「第二目標撃破！」

士官

「よし、第三目標に標準変更！」

ボン！ボン！ボン！ボン！……ゴワーン！

士官

「！なんだ！？」

兵

「第四目標、サブム軍の2式軽駆逐戦車が撃破！」

士官

「よし！あと三両だ！とつとと片付けるぞ」

グワン！！

ソ連兵

「3号車爆発炎上！」

ソ連士官

「くそ！前にいる5号車に連絡！逃げるぞ！」

日本軍の装甲列車と撃ち合っていたMBV2は今や5号車と6号車しか生き残っていない。

それだけ、相手の火力が大きいのだ。

しかも、MBV2には砲戦に関して弱点があった。

砲塔は3基だが、その内2基は装甲司令塔の後ろに設置されている。だから、正面には1基しか砲塔は無い。

つまり火力が足りない。

それに、これ程状況が悪くなると逃げるしか無い。

ソ連兵

「！う、うわー！！」

ソ連士官

「どうした!？」

ソ連兵

「く、5号車の砲塔が…」

ドン!

ガキーン!

代わりに答えるかのように放たれた主砲弾が砲塔に当たり弾く。

ソ連士官

「き、気でも狂ったのか!？」

ソ連兵

「うわー!逃げろ!!」

1人が逃げ出すと、車内にいた仲間も逃げ出す。

ソ連士官

「馬鹿者!逃げるな!」

しかし、恐怖にかられた兵士は逃げ出す。

士官も開け放たれた扉から兵士を呼び止め様として外に出た数秒後、6号車が爆発した。

バトエル少将

「どうだ!参ったか!」

ブン盗ったMBV2の中で叫ぶバトエル。  
なんと、素人の歩兵に大砲を使わずとゆう荒業で最後の1両を破壊  
したのだ。

サブルム兵

「…あのく、バトエル少将？」

バトエル少将

「なんだ？」

笑いながら振り向くバトエルに兵士が言った。

サブルム兵

「このままだと…間違っって日本軍の装甲列車に攻撃されますよ？」

バトエル少将

「……………あああ！」

……………ようやく気付いた様子。

バトエル少将

「誰か！装甲列車までひとつ走り伝令行って来い！！」

こうして…タルスカヤ駅は日本軍の手に落ちた。  
そして、翌日早朝…タルスカヤの街も日本軍とサブルム軍と手によ  
って奪取されたのである。

次号へ

## タルスカヤ攻略戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 福本元帥の困惑・もう1つの作戦

7月9日 タラント軍港

戦艦播磨長官私室

既に夜は明けていた。

時間は7時半を過ぎている。

そして……本来なら起きている筈の福本元帥は布団にくるまっていた。  
た。

もちろん……サボろう等とは本人は考えていない。

しかし、思いと体は別。

最近、福本の軽い不眠症に陥っていた。

原因は……

マリィダ

「ダ・イ・ス・ケ」

眠っている福本にマリィダが近付く。

マリィダ

「ダイスケ…朝だよ」

福本

「（……出来れば放つといってくれ……）」



最近眠っていない……だから思いっきり寝たい……それに眠れない原因が彼女だから余計に放つといてほしい……。

マリーダ

「もう、早く起きなさいよ」

福本

「（……無理ッス）」

マリーダ

「うふふ……まだ起きないのね……失礼」

ガサガサゴソゴソ……

福本の寝ている布団に潜り込むと……

マリーダ

「起きてよー　　ダ・イ・ス・ケ」

さすがに布団に入って来られると目を開けるしか……本当は嫌だけど……無い。しかし……目を開けた瞬間……

福本

「うわあああああああ……！！！！m(\_\_\_\_\_)m」

……悲鳴とも採れる叫び声が響き渡った。

30分後……

播磨艦橋

福本

「おはよう……」

ラフィール

「おはようございます」

千歳

「おはよう」

遠地

「よう！この幸せ者！」

福本

「……んな訳あるか……」

遠地

「何言ってるんだよ！で、今日はなんだった？」

ジント

「えーと、記録によりますと、初日はナース、2日目はメイド、昨日はチャイナ服でしたね？」

福本

「……ノーコメント」

遠地・ジント

「で、今日は何だったんだ（ですか）、福本（元帥）！！」

福本

「…………お前ら…ん！？！」

ゴゴゴゴゴゴゴ！

遠地・ジントの後ろで、物凄い形相で怒っている、千歳とラフィール。

そんな2人に福本の顔を見て気付いた遠地・ジント。

遠地・ジント

「「「ご、ご、ごめんなさい！！！！」」」

千歳・ラフィール

「許すか！死ねええええ！！！！」

遠地・ジント

「ぎゃあああああああ！！！！！！」

今度こそ悲鳴だった。

福本

「…………アホらし」

呆れつつも、そのまま、長官席に腰掛ける。

神谷

「どつぞ、眠気覚ましのカフェオレです」

福本

「ありがとう」

出されたカフェオレを受け取り一口飲む。

神谷

「毎朝大変ですね……マリーダ参謀長の必殺コスプレ起こし」

福本

「……なんだそりゃ……」

……と言うよりもあれは悩殺だ……何を言ってるんだか……今更ながら、零戦先生の椎名将斗中佐の苦勞が解る様な気がするな……。

神谷

「ですけど……好きな人に起こされてるですよ、普通なら嬉しいシチュエーションですが？」

福本

「……裸シャツ……」

神谷

「……はい？」

福本

「……今日は裸シャツだった……」

神谷

「え……ええ！？いや……でも、それは……」

福本

「…俺としては何時自分のガタが外れるか怖い…」

神谷

「…あ、だから不眠症なんですね……それは大変で」

福本

「……おい、作者。まさかこの作品、15禁か18禁設定にするつもりか!？」

あほ!!そんな物にするかい!!

神谷

「あはは( ^ | ^ ; ) ……あ、今朝の良いニュースを聞きますか?」

福本

「……聞く」

神谷

「タルスカヤ市と駅を陸軍が落としました。いよいよチタですね」

福本

「そうか…」

タルスカヤはチタの目と鼻の先にある。

多分、1週間以内にはチタの駅は確保されるだろう。

神谷

「あともう一つ、ワルキューレから『トラ・トラ・トラ』の打電が

ありました」

福本

「そうか…もう始めたか…」

ギリシャ近海

戦艦ワルキューレ艦橋

士官

「本艦隊全艦準備完了！」

通信士官

「イタリア艦隊、日本艦隊も準備完了」

福田

「さて、随分待たされたが、一丁派手にいきますか！」

アルファーニ

「はい！全艦主砲撃てええ！！」

ズガン！ズガン！ズガン！

ワルキューレに続き、イタリア、ノースカロライナ、ペンタゴン、アーカンソー、ヒューストン、美濃、飛騨、出雲、箱根、ゴリッ、イアの艦砲が一斉に撃ち始めた。

空母部隊も既に加えた航空隊が付近の飛行場制圧を始める。地中海方面はこれからがソ連の厄日の始まりだった。

次号へ

**福本元帥の困惑・もう1つの作戦（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。



## アテネ解放作戦・甘いですね

地中海方面での戦闘は終局へと向かっていた。

なぜなら、イタリアが降伏し、今や敵と言えばギリシヤのソ連軍だけであった。そして、チタ攻略作戦発動と同時に、ギリシヤ奪回作戦が発動された。

連合軍の第一目標はギリシヤの首都アテネ。

首都を奪回する事により、一気にギリシヤを掌握する。

これが第一段階であった。

ヤマトケルミ  
日本尊武主砲塔ハッチ。

五十嵐

「よし！アテネに乗り込むぞ！」

超水陸両用戦車の日本尊武はアテネの目の前まで乗り込む。

残念ながら、2700トンの日本尊武ではアテネを破壊しきれない。  
港街であるアテネだけに壊せない。

しかし……………

ソ連兵 1

「な、なんだありや!？」

ソ連兵 2

「で…デカ過ぎる!!!」

ソ連兵 3

「ま、魔女の婆さんの呪いだ!!!」

ソ連兵 4

「ば、化け物だ！逃げる！！」

ウィーン……

ソ連兵 1

「うお！」

ソ連兵 2

「なんてデカイ大砲だ……」

ソ連兵 3

「だ、ダメだ！逃げろ……！！」

25cm連装砲を向けられたソ連兵は逃げていった。

菊華

「あゝあ、逃げちゃった」

日本尊武の車魂、菊華が呟く。

五十嵐

「いや……こんな見たら誰だって逃げるよ」

そんな会話をしている間に、上陸舟艇がアテネ港に突入する。

グオングオングオングオングオングオン……

制空権を掌握したアテネの上空に富嶽の輸送機型が乗り込んだ。

空挺隊長

「総員降下！！日本屈指の空挺隊の意地を見せる！」

空挺隊員

「……………おう！！……………」

ギリシャの空にパラシュートの白い華が咲く。

今回の作戦に日本軍は陸海の空挺隊を再編して編成した特別第一空挺連隊2000人を投入した。

アテネ郊外に降下した空挺隊員は小隊・中隊ごとに集合すると、彗星艦爆、流星艦攻が爆装庫からパラシュート付きの重火器を投下する。

これを集めると、空挺隊はアテネ市に突入する。

バタン！

上陸舟艇のランプが下がり、宮崎師団の兵士達が上陸する。

士官

「総員突撃！」

士官が軍刀を振るい命じる。

日本兵

「……………おおお……………」



ソ連軍通信兵2

「ピレウス市から連絡！敵別動部隊が上陸！」

ソ連軍士官3

「敵部隊、戦車を揚陸させました！シルエットからヤポンスキーの物です！」

ソ連軍士官4

「我が守備隊、敵を抑えられません！」

ソ連軍参謀

「司令官！どうしましょう!?!」

ソ連軍司令官

「……………」

沈黙するしかなかった。

今把握出来ている事を一体どうやって片付けるとゆづのか？

元々少なくなっていた兵力をヤバくなったアジア方面に回して手薄となっていたのに……………。

ソ連軍士官1

「た、た、大変です!!!」

ソ連軍参謀

「馬鹿者！この状況以上に大変な事など……」

ソ連軍士官1

「し、し、市民が……市民が蜂起しました!!!」

司令部全員

「……………な、なんだと！！！！」

……………確かに…大変だった……………

戦艦ワルキューレ艦橋

ラジオ放送

『ギリシャ国民よ！ 3年間、よくスターリンの暴虐に耐えてくれた！ しかし…それも今日までだ！ 今、イギリスに亡命していた勇敢なるギリシャ軍は祖国を奪回すべく帰って来た！ 我々にはイギリス軍を含めた連合軍がついている！ しかも、ソ連を幾度も破り、スターリンの犬に成りかけていたアメリカを張り倒した勇敢な日本軍が共に戦ってくれているのだ！ ギリシャ国民諸君！ 共に銃を取り祖国をスターリンの手から奪回しよう！……………』

アルファアーニ

「……………まさか、ラジオ放送で蜂起を呼び掛けるとは……………」

福田

「いくら手薄となつているとはいえ、峡谷などが多い南部地域に敵に籠られると厄介だ」

アルファアーニ

「ならば、蜂起させて各地のソ連軍を抑え様…と」

福田

「機動力ならこちらが上だからな」

アルファーニ

「ところで、何時蜂起の為の武器を？」

福田

「元々、イギリスもギリシヤに諜報員を送り込んでいたらしい。そのツテを使って連絡を取って、小銃や短機関銃、噴進砲などを富嶽で空中投下したり、潜水艦で輸送したそうだ」

アルファーニ

「…よくやりますね」

福田

「イギリスは裏で動く事柄は得意な国だからな…さすが大英帝国、世界一の植民地保有国家だよ」

アルファーニ

「……上手く日本は時流に乗りましたね」

福田

「…元帥がいたからな」

士官

「司令！艦長！敵小型艇来ます！」

福田

「魚雷艇か？…とにかく邪魔だな、駆逐艦と航空機で対応しよう」

アルファーニ

「了解！」

数時間後……お昼頃……

タラント軍港

戦艦播磨後部甲板

神谷

「長官、アテネ・ピレウスが落ちました。さすがに市民まで蜂起するとソ連軍も無理だった様ですね」

福本

「それもそうだろ……まあ、この様子だとギリシャ奪回に時間は掛からないだろう」

神谷

「そうですね。では、失礼します」

報告を終えた神谷が戻って行く。

福本は海の方を向く。

と、その時……

ガバツ……ギユウ……

マリーダ

「だれだ？」

福本



「……それは手で目隠しするのが普通で、抱き付いて聞く事じゃない……マリータ」

マリータ

「よしよし……大丈夫？」

福本

「……朝のあれが無ければ完全に大丈夫なんだけどね」

マリータ

「あら、起こされるのは嫌い？」

福本

「……はつきり言つとく、自分のガタが外れて未来の花嫁を襲いそうで怖いから止めてくれ……」

マリータ

「襲つても良いんだけど……え、未来の花嫁？……ええ！？」

福本

「いや……この小説を18禁にする訳にいかないし……襲つて傷付けたなんて恥だし……そもそも、無理矢理は嫌いだ……」

……顔真っ赤にしながら呟く福本。

ギョウ~~~~

マリータ

「嬉しい……大好き」

福本

「それはどうも……あ、だから、少し自重してくれよ……もしガタが外れたら殴ってくれていいから……」

マリイダ

「別に良いのに……けどわかったわ」

福本

「……あゝ、スッキリした」

後日談

翌早朝……長官私室

福本

「ふわ……いま何時？」

時計は……6時半。

福本

「……早く起きた割には……よく寝れた気がするな……」

やっぱり、昨日スッキリしたのが良かったか？

福本

「……さて、どっしり……」

マリイダ

「おはようー!!」

ガバツ!!

朝っぱらから早々抱き付くマリダ。

マリダ

「今日はシスターコスよ?お気に召した?」

福本

「…なんで起きたの解った?」

マリダ

「愛しき女の勘!」

ニュータイプか!?...とゆうツッコミは置いて……

福本

「この〜、降参言っまで抱きしめやる〜!」

マリダ

「やってみなさいよ〜」

ギュウ〜〜〜

……なんか…逆に幸せになってる、福本とマリダでした。

次号へ

アテネ解放作戦・甘いですね（後書き）

最後はイチャイチャですね……。

明日・明後日は定期更新『士官候補生異世界奮闘記』を更新いたします。お楽しみに。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 近況状況

7月12日 タルスカヤ

日本軍とサブルム帝国派遣軍によって占領されたタルスカヤ。

連合軍はシベリア鉄道・旧東清鉄道の合流地点であるタルスカヤ駅にこの2線を使って大量の資材・機材を送り込んでいた。

アメリカ製・日本製のブルドーザーやシヨベルカーなどを使い飛行場や待避壕、対空陣地、塹壕、対戦車陣地などを作り、敵の襲来に備えていた。

案の定、タルスカヤを取られて慌てたソ連軍はタルスカヤに空爆を開始した。

しかし、装甲列車に搭載されていた対空レーダーや上空に待機していた早期警戒管制機による警戒により、戦闘機用短距離滑走路から発進した戦闘機に終始迎撃され、結局大損害により失敗した。

その後、滑走路は拡張され、重爆撃機の運用・配備も可能となり、チタ攻略作戦の最終段階、チタ攻略の準備が整っていた。

さて…地中海方面最後のソ連軍侵出地域であったギリシャ。

しかし、攻略終了後の兵力転用と満州侵攻失敗により兵力移動の為にギリシャ守備軍は弱体化していた。

そこに陸軍最強と言われる宮崎師団と長野戦車連隊、祖国奪還に燃えるギリシャ軍の猛攻、制空権を奪取した連合軍の空爆の前には逃げるしかなかった。

それに、追撃する連合軍を止める事は出来なかった。足止めは出来

る…1分程なら…しかし、返ってくるのは大量の銃砲弾。

空爆の為、戦車・トラックを放棄したソ連軍はあっという間に連合軍に追い付かれる。

まあ、後は降伏するか、全滅覚悟で戦うかだが……こういった場合、前者である。

そして、あっという間にギリシャ南部の峡谷地域や国境地域に追い詰められた。こうなると後は簡単で、連合軍は早速部隊を展開し、アテネにおいて正式にギリシャ奪還を宣言した。

これを聞いたスターリンは黒海艦隊の尻を叩いた。

魚雷艇、潜水艦を出して輸送船団を攻撃する様命じた。

対し、連合軍は東海などの対潜哨戒機を使い潜水艦を搜索・攻撃した。

また、魚雷艇には航空機やPTボートなどの魚雷艇などを出して対抗した。

まあ、魚雷艇はおいとくにしても、潜水艦は扱う人員の練度に問題があるのか簡単に狩れた。

また、ソ連軍による報復爆撃も行われたが、レーダーや戦闘機の数で爆撃隊を迎撃、こちらでも大損害を出して失敗していた。

結局……現有戦力を消費させるだけに終わった。

## 富嶽爆撃機機内

福本

「…と聞こえは良いが…解せないな…」

沖田（優）

「何がですか？」

ドイツに向かう富嶽の中で、最近の各戦線現状報告書を見る福本の  
眩きに沖田（優）が反応する。

福本

「連合軍にとっては脇腹をチヨイと突つついた程度かも知れないけど、共産主義を掲げるソ連にとっては大事だ……なぜか解る？」

沖田（優）

「……ギリシャが王国だったからですか？」

福本

「簡単に言えばそうなるし、他にも理由はある。スターリンにして  
みれば、ロマノフ王朝の末裔か何かを担ぎ上げられて戦争をおこさ  
れたら国内の反対派や王党派が蜂起する……だから、周辺諸国の小  
国に手を出して共産主義圏を拡げ、ギリシャまで占領した。しかし  
……」

富嶽

「我々や連合軍が満州防衛戦を転機に、チタ攻略作戦やギリシャ奪  
還作戦を手始めに反撃に出ってしまった」

福本

「で、ギリシャ奪還を連合軍が宣言した……これは手中にした小国も  
黙ってはいないだろう。ならば、出る杭は打つのが常識だ。俺なら  
真っ先にギリシャ再占領の為に軍を動かす……筈なんだが……」  
マリーダ

「ヨーロッパ方面軍は動く様子も無い。空爆した航空機の数も全力

の時の数じゃあ無い……だから、解せないって言ってるの。さすが、私のダイスケ！」

ギユウ〜

……わざとらしく、福本に抱き付くマリダ。

福本

「……マリダ、ここ富嶽の中……まあ、マリダの言った通りの理由からソ連軍が動かないのが解せないと言ったのさ」

自らの保身で肅清や紛争を起こす人間が動かない方がおかしい。

福本

「まさか……いや、やめておこつ」

あまり口には出したく無い予想……福本は黙るしかなかった。

次号へ



## 近況状況（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## チタ攻略作戦

7月14日

いよいよ、チタ攻略作戦が開始された。

まず、手始めに日米六（第六大陸）戦闘機隊に護衛された爆撃機隊がチタを空襲。

迎撃したソ連軍戦闘機隊と護衛戦闘機隊が空戦を展開している間に爆撃を行う。市街地に通じる橋を通告不可能にする為、破壊した。

これにより、チタ市守備隊とチタ駅守備隊を引き離す事に成功する。この時点で、駅で何かがあっても、チタ市の守備隊が駆け付けて対処する事は不可能だ。

しかし、チタ駅守備隊も中々の兵力で守っていた。

チタ駅より数キロ手前の線路

四式装甲列車車内

栗林中将

「さて、いよいよ本作戦の最終地点チタ駅及びチタ市攻略を開始する」

山崎大佐

「ソ連軍の事ですから、時間がかかると思いましたが、案外弱くてそれほど時間はかかりませんでしたな」

中川大佐

「我々が銃剣を付けて、「エイ！ヤァー！」と突き出せば、露助は「わあ〜！」と言って逃げるか、手を挙げますからな」

この言葉に、最後の打ち合わせに参加していた指揮官・参謀・将校全員が笑った。

栗林中将

「さて、冗談もここまでだ。我が軍は全力でチタ駅を確保する。長い様で短かったが、チタ攻略がなればその後の事もやりやすい。後はヨーロッパ方面の仕事かもしれんが……手筈通りだ。良いな？」

全員

「「「「「「「はい！」「」「」「」「」「」

栗林中将

「うむ、それでは総員作戦開始だ……明日はチタ市のどこかで祝いの杯を交わそう！！」

始めはソ連軍の予想外の形だった。

まず、味方の自走装甲ワゴンが待機線に入ってきて来ると、ソ連軍兵と将校の格好をした兵が降りて来た。

最初は疑ったソ連兵も、味方の装甲ワゴンだから、偵察にでも行っていたのだろう……と気にしなかった。

しかし、それほど経たない内に今度は軍用輸送列車がチタの駅に入ってきた。

先頭に蒸気機関車の普通の蒸気機関車であった。

しかし、なぜタルスカヤの方角から来たのか？……と警備にあたって

いたソ連兵達は思った。

そして、機関車に近付いた時……それは起きた。

バキッ！！

いきなり降りて来た機関士の持っていた短機関銃に殴られた！

バドエル少将

「今だ、野郎共！一斉に畳み掛ける！！」

同じ様に機関士の服を着ていたバドエルが服を脱ぎ捨てて命じる。それが合図だったかの様に、輸送列車の偽装が外れ……四式装甲列車が現れた。装甲列車は搭載している銃砲火器を周囲に向けて撃ち始める。

そして、兵員車からは次々とサブム兵が飛び出して乱戦になる。ソ連軍守備隊は大混乱に陥る。

バドエル少将

「よっしやあ！偽装作戦大成功だな！」

マイラーノ中佐

「ええ……こんなにも簡単に騙せるとは思いませんでした……」

バドエル少将

「ま、こんなやり方で奪取するとは考えて無いだろな。さあ！行くぞ！」

ソ連兵

「や、ヤポンスキーだ！早く市内の司令部に連絡しろ！」

そう叫びながら通信室に入ったソ連兵は顔を真っ青にした。通信室は最低2人が常駐していたが、2人共急所を刺されて殺されていた。

しかも、ご丁寧は無線機などの通信機器をブツ壊して……。

ソ連兵

「くそ……まさか、ヤポンスキーが潜んでやがったのか!？」

ソ連兵はまた慌て通信室を出た。

通信機器が使えれば、チタ郊外の部隊と連絡を取ってヤポンスキー共を追い出せるかもしれない。

それに、近くの空軍基地に連絡して、空から攻撃出来る……とゆう手段は使えなくなった。

ソ連兵

「くそ!どうやって奴らを止めろってんだよ！」

マイラーノ中佐

「やりましたよ、少将！日本軍の挺身隊が通信機器を破壊。これでソ連軍は援軍を呼べませんよ！」

バドエル少将

「まさか俺達がタルスカヤでブン盗った装甲ワゴンが役に立つとはな……世の中解らん！」

通信兵が背負っていた無線機で挺身隊からの連絡を受けた2人が喋

る。

さて、いつの間に挺身隊が潜入していたかとゆくと、偽装した装甲列車が入る前に待機線に入った装甲ワゴンに挺身隊は乗っていたからだ。

白系（亡命）ロシア人の隊員にソ連軍将校の服を着せ、日本兵達は一般兵の服を着て装甲ワゴンから降り、通信室などを襲ったのだ。しかし、なぜこんな事やってバレなかったのか？

実は、ソ連軍の中にもアジア系兵士はいるから、日本兵がソ連軍の軍服を着ても怪しまれにくいとゆう訳である。

そして、作戦は……成功だった。

バドエル少将

「なら、後はソ連兵をどうやって制圧するかだ」

マイラーノ中佐

「やはり、戦車は要りましたね……予定通りに来てくれれば良いんですけど」

バドエル少将

「忘れたのか、マイラーノ。日本人は輸送列車を秒単位で駅に到着させる奴らだぜ？」

まさにその通りであった。数分後、タルスカヤ方向から土煙を上げながら戦車隊が接近して来た。

そして、戦車隊から一発の信号弾が上空へと発射される。

バドエル少将

「な、言った通りだろ？よし、みんな！戦車連隊と共に駅を一気に制圧する！続け！」

サブর্ম兵

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

結局、僅か40分程度の戦闘で、日本軍とサブর্ম派遣軍はチタ駅を占領下におき、多数のソ連兵を捕虜にした。

また、別路を進んだ日本軍によりチタ市は包囲され、市内の守備隊は住民共々脱出不可能になった。

そして、チタ市が陥落したのはそれから4日後の事だった。

次号へ

## チタ攻略作戦（後書き）

新米士官

「チタが落ちたぞ〜！」

山城

「わかったわかった……そう騒ぐな」

新米士官

「おや、山城。お久し振りで……元気ですよね？」

山城

「当たり前だ！我は侍。日頃の鍛練は怠っておらぬ！」

新米士官

「まあまあ……しかし、次回は大変な事になります」

山城

「何？このまま連合軍のターンでは無いのか？」

新米士官

「あのね、あの狡猾で残忍なスターリンが何か起こさない訳ないでしょう……とにかく次回作を読めば解ります」

山城

「……気になるな……早く書け」

新米士官

「はい……ではご意見ご感想をお待ちしております」





尾崎

「そ、それは本当何ですか!？」

神谷

「はい! 一時間前、ソ連軍はドイツ国内に侵攻を開始! 一部情報にはソ連軍は約50個師団以上を投入したと……」

遠地

「バカな! 100万の大軍をドイツに! ? いったいどうやって……」

ジント

「100万とは限りません。ソ連は本気を出せば100個師団を出せる能力がありますから……」

ラフィール

「数の問題ではないであろう! それよりもソ連軍がなぜ、今、ドイツに侵攻したかであろうかでしょう?!」

ケンケンガクガクゴウゴウ……

いつの間によら、艦橋は討論場と化していた。

福本

「総員落ち着け! 討論している暇があるなら、一刻も早くやらなければならぬ事があるだろう!」

全員

「……………」

福本

「マリーダ、全艦艇の準備は？」

マリーダ

「確認したけど、第七艦隊と陸戦隊搭乗の輸送船団は準備完了、何時でもいけるわ」

福本

「よし…では、第七艦隊及び輸送船団はこれよりドイツに向けて出撃する。全艦総員、一時間以内の出撃を目指せ…以上だ」

全員

「……………了解!!」「……………」

ドタバタしながら一斉に散る。

マリーダ

「……………どう思う？」

福本

「まさかとは思っていたが……………スターリンめ、わざわざ最悪のシナリオを選択しやがって……………」

遠地

「なんだ？ドイツ侵攻を予想してたのか？」

福本

「…ソ連がタルスカヤやギリシャで反撃しないからもしや…」と思っ  
ていたが……………」

遠地

「…あんまり当たりたく無い勘だな（――；）」

福本

「まったくだ…しかし、今はそんな事言ってもらえん…一刻も早く、ドイツへ」

遠地

「次は陸上か…この艦隊の艦砲射撃なら、100万でも一時間で壊滅させれる自信があるんだがな…」

福本

「ある意味凄い自信だな…撃たれる方は堪ったもんじゃないよ」

神谷

「あ、長官！アイゼンハワー司令官よりお電話です。3番でどうぞ」

福本

「おっと、あつちの許可を忘れていたな。はい、福本です」

アイゼンハワー司令官

『大変な事になりましたね。アドミラルフクモト』

福本

「ええ、自分としても最悪のシナリオを選択されました…これより第七艦隊は一時間以内にドイツに向けて出撃します」

アイゼンハワー司令官

『わかりました…我が軍もイギリス軍もいきなりの侵攻で準備が出来ております…頼りはあなた方だけです』

福本

「はい…では、出撃準備がありますので…」

アイゼンハワー司令官

「あ、少しお待ち下さい。パットン中将が先程から話たがっておりますので……」

パットン中将

「おう、ダイスケか？話は聞いた！直ぐに出撃するそうだな？この侵攻はなんだと思う！？」

福本

「確信はありませんが、ドイツを占領し、ヨーロッパの軍事バランスをソ連側有利に転化する事だと思われます」

パットン中将

「ちよつと待て、ヨーロッパの軍事バランスだと？」

福本

「はい。現在陸軍国はフランスとドイツです。ですが、近代戦が戦える国はドイツしかありません。スターリンはドイツを早期陥落させるのが目的です」

パットン中将

「…だが、それだけで軍事バランスを引っくり返せるとは…」

アイゼンハワー司令官

「なるほど、ドイツが落ちれば、ソ連と戦え無いフランスとイタリアは何かしらの手をこうじる……こうじなかつたとしても、ソ連がそのままフランスやイタリアに侵攻すれば良い訳だ」

福本

「ええ、そして、そのままヨーロッパ大陸が赤化したら……これが自分の考えた最悪最低のシナリオです」

パットン中将

『んな事させるか！そこでダイスケ、頼みがある。俺の指揮下にある一部の部隊が出撃可能だ！その部隊は俺の親友のブラッドレーが率いる混成部隊だ！既に準備させている、連れて行ってくれ！』

なるほど……だから連絡したいと言っていたのか……

福本

「わかりました…敵は多いので、僅かとはいえ増援は歓迎します」

パットン中将

『すまん！部隊は既に輸送船団に搭乗済みで、何時でも出港可能だ。存分に使ってくれ』

そう言うと、電話は切れた。

マリーダ

「良いの？」

福本

「正直言って、増援は多い方が良い…それに、まだ宮崎師団や長野連隊の確認もいるしね」

福本

「じゃあ、サブールム艦隊も無理か？」

福田

『すみません、ワルキューレの乗組員もほとんどが上陸しておりま  
す…』

福本

「いや、ギリシャ奪還作戦に出ていたんだ、仕方無い。第2陣に参  
加すれば良い」

ミア

「長官、ハルゼー大将からお電話です。5番に回します」

今や艦隊内で知らぬ者はいない名物オペレーターの声が響く。

福本

「すまん、ハルゼー大将からだ。こっちは第七艦隊と陸戦隊、宮崎  
師団、長野連隊、アメリカ軍の一部を先発隊として先行するから、  
そっちは連行王国艦隊と共に後続を率いて来てくれ」

福田

『わかりました……あと、ミアに気を付けてと言っていたと言っ  
て下さい』

福本

「あほ、それくらい自分で言え…じゃあな」

福田の反論も聞かず、5番のボタンを押す。

福本

「ハルゼー大将ですか？」

ハルゼー大将

『フクモトか。そっちはどうだ？』

福本

「こっちはなんとか全艦行けるそうです。そちらは？」

ハルゼー大将

『恥ずかしい事に、半分以上が動けん。しかし、モンタナやメイン、バンカーヒル、フランクリン、巡洋艦、駆逐艦が数隻動かせる！』

福本

「…無理してませんよね？」

ハルゼー大将

『しとらん！ただ、艦長のケツを蹴っ飛ばして催促してやったのさ！』

それを無理していると言うのでは？…と言うのを引っ込める。

福本

「わかりました…あの艦艇はどうするおつもりで？」

ハルゼー大将

『のろまな奴らは第2陣に回す。のんたらする奴はのんたら来れば良いさ！』

福本



「そ、そうですね…と、とにかくわかりました」

そう言うと電話を切った。

マリダ

「ダイスケ、時間よ」

福本

「よし、神谷。全艦に通達、公海に出たら全速でドイツに向かう…  
全艦出撃せよ！」

神谷

「了解！！」

神谷以下、通信担当の人間が一斉に動き出す。

福本

「さて…間に合えば良いのだが…」

不安を拭いきれない福本だった。

次号へ

**激震！ソ連ドイツに侵攻セリ！！（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ドイツ軍現状

それは人の列だった。

老若男女を問わず彼らは歩いていった。

人々の顔は疲労だけでなく、悲壮感も滲ませている。彼らはドイツ人だ。

ソ連軍によるドイツ侵攻により、彼らはドイツ軍の命令で避難している。

ドイツ軍は防衛線を敷いて必死の防衛戦を展開していた。

これにより、彼らは今のところソ連軍に襲われていない。

しかし、彼らは安心してはいない。

なぜなら…彼らが脅かしているのはあの傍若無人なスターリンとソ連軍だからだ。

元々、このソ連軍侵攻の兆しはドイツ軍ソ連諜報部…ゲーレン機関が察知し、連合軍情報部にもあげられていた。

しかし、ここで担当者があるう事かこの前兆報告を握り潰した。

理由は簡単……アジアやギリシャでも攻めた時は良かったが、今は守勢に回っている。そのソ連軍が攻めて来る訳が無い……と。

後にこれを知ったパットン中将が……

「そいつを連れて来い！俺がブツ殺してやる！！」

……と言って暴れたそうだが……。

しかし、当のドイツ軍はこれを真摯に受け止め、対抗策を立てた。

そして、侵攻開始当日、ソ連軍お得意の大量の重砲とロケット弾による一斉攻撃が開始される。

まあ、結果として偽の防衛陣地に大量の砲弾とロケット弾が降り注いだ。

そして、大損害を出したドイツ軍がいるだろうとソ連軍が来た瞬間…… ほぼ無傷のドイツ軍の反撃を受けた。

第二次大戦当初、東プロイセン・リトアニア地方でソ連軍との戦闘を経験したドイツ軍が、ソ連軍の新型戦車…… T34やKV-1の先行生産型…… に対抗する為、かつ主力と定めていた3号戦車の限界が見えた為、4号戦車の装備強化、5号・6号戦車… パンター・タイガー… 開発・生産が行われた。

この為、ソ連軍のドイツ侵攻開始時点で、国境警備に就いていたドイツ軍には十分な数の4号・5号・6号戦車が配備されていた。

また、3号突撃砲（長砲身）・軽駆逐戦車ヘツツァー・4号駆逐戦車なども配備され、防衛線も堅固な物になっていた。

これは、イギリスと対ソ同盟を組んだ為に、イギリスとその関係諸国が保有する資源が大量に援助されたからだ。

良質な材料が揃えば良い物を造れるのは日本もドイツも一緒である。また、ドイツ軍がヨーロッパ方面でソ連軍と睨み合っていた為、それほど戦闘には参加せず、十分に機甲戦力を充実させる事に繋がった。

これにより、ドイツ軍は何とかソ連軍を防いでいた。しかし、依然厳しい状況には変わらない。

ドイツ侵攻において、ソ連軍は大量の航空戦力を投入した。

いくら損害無視のソ連軍でも、エアカバーが無ければ作戦成功も覚束無いと思うたのだろう。

その代わり、アジア方面やギリシャ方面の航空戦力は手薄になったが……。  
そうまでして集めた航空戦力はドイツ上空で激しい空中戦が行われていた。

ヤコブレフ・ラボーチキンなどが、メッサーシュミット・フォッケンウルフなどのドイツ主力戦闘機が戦っていた。

数のソ連軍と質のドイツ軍ではあるが、やはり時間がドイツ側に有利を誘い込んだ。

4年間も戦っていたソ連軍は戦線の拡大によるパイロットの不足による新米パイロット戦線投入により全体的練度が下がっていた。

これにアメリカとの戦いを終えた日本軍が介入、かつソ連の満州侵攻とアジア方面での防戦でエースパイロットや古参パイロットを数多く投入、大消耗してしまった。

対し、ドイツ軍は東プロイセン・リトアニア地方の戦いを経験したパイロットが数多く生き残っており、4年間かけて多くのパイロットを育成していた。

これにより、数の多いソ連軍とも互角に戦っていた。なおかつ、イギリスから応援部隊とレーダーを保有していた事もあり、徐々にだが制空権を奪還しつつあった。

しかし、こちらも予断を許さない状況には変わりなかった。

次号へ

## ドイツ軍現状（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 先発隊ドイツ二到着ス

7月30日 ドイツ キール

第七艦隊及び第七特別陸戦隊、宮崎師団、長野連隊、アメリカ艦隊一部、アメリカ陸軍一部がキール軍港に到着した。輸送船団を従えた為、19ノットに低下したが、それでも全艦がフル運転で10日間かけて到着した。そして、入港すると直ぐ様揚陸を開始した。戦車、火炮、兵士、武器、各種弾薬、資材……等々目まぐるしく揚陸される。

福本

「やはり…急いで来たのは良かったな」

播磨や日本艦隊…アメリカ艦隊もだが…を見ているドイツ人達の顔がホツとしたり、笑ったりしている。ソ連軍の大軍は来たが連合軍が来たからもう大丈夫……と言つのが彼らの疑わざる心情だろう。

マリーダ

「ええ…でも、止めれるかしら？」

福本

「制空権さえこつちのものにすればいい…どう頑張ったって、戦車は飛行機に敵わないからね」

それにはドイツ軍の協力が必要だ。

その他、協議や情報交換もしたい為、福本・マリーダの他にも、フエルデナント、宮崎大将、ブラッドレー少将、ハルゼー大将が同行する事になっていた。

フエルデナント

「あれ？あのトラック…こっちに向かってませんか？」

福本

「ん…あ、本当だな」

確かに猛スピードでこっちに向かって来る。

そして、そのトラックは福本達の前で止まった。

そして、トラックからドイツ軍ソ連諜報部のレーゲン少将が降りて来た。

レーゲン少将

「アドミラルフクモト！」

福本

「レーゲン少将！諜報部をほつといていいんですか！？」

レーゲン少将

「皆さんを防衛司令部にご案内する為、こちらに来ました。乗って下さい！」

まさかトラックとは…とも福本は思わず、トラックの荷台に飛び乗る。

自分達はドイツを助けに来たのだ…贅沢言ってられる時間も惜しいのだ。



ソ連軍侵攻の情報を受けたドイツ政府・参謀本部は直ぐ様、キールに人員及び機能を移転した。

これは元ポーランド国境から首都ベルリンが近すぎたからだ。

それに、ドイツ国内は平地がほとんどで、敵の妨げになるのは川しかない。

だから、ドイツでは2正面作戦は御法度……なのだが、失敗したのが第一次世界大戦と史実の第二次世界大戦である。

まあ、この世界ではソ連がそうなっているが……。

トラックに乗った福本達が着いたのはホテルか何かを徴収した防衛司令部だった。

まず、レーゲン少将が案内をして、会議室に使われている部屋に入ると、直ぐに入って下さいと言ってきた。

福本が先陣騎つて入ると、巨大な地図に、青・赤の駒、情報処理をする士官達、その情報を基に駒を動かす者……まさに司令部の光景だった。

レーゲン少将

「アドミラルフクモト、こちらが総指揮を執っておられます、フォン・マインシュタイン元帥、隣におりますのは装甲兵総監のハインツ・グデーリアン大将です」

福本

「初めまして、日本帝国海軍元帥の福本大介です。フェルデナントがお世話になりました」

グデーリアン大将

「彼は優秀な一人だったが…日本帝国のお役立てて光栄です」

マインシュタイン元帥

「本来ならあなたのお話を聴きたいが……ソ連が追い出してからにしましょう」

福本

「そうですね…現状をお願いします」

レーゲン少将

「現在、ソ連軍の一部はベルリン近郊で我が軍と交戦中……戦況は厳しいです」

ハルゼー大将

「ベルリンに？何でだ？」

フェルデナント

「首都だからです。中国と違って、首都を落とせばその国は降伏したも当然ですから」

福本

「いくらソ連軍も、イタリアから連合軍の援軍が到着すれば、ソ連の追い込まれた現状を引っくり返す事は無理ですから」

ブラッドレー少将

「ドイツを陥落させて、ヨーロッパの戦況を有利に回すのが作戦目的と考えるなら、スピードが重要ですね。他の地域は後でどうこうすればいいのですから」

マリータ

「何にしる、ドイツには迷惑な話よ」

グデーリアン大将

「だが、我々にとつてはやり易い。なぜなら敵の目指す場所を守ればいいだけだ」

マインシュタイン元帥

「だが、奴らは損害度外視で攻撃して来る…それにあまり戦力を回せないのが正直な話だ」

福本

「それで、反攻の方は？」

マインシュタイン元帥

「現在、ベルリンから避難している国民がこちらに向かっている。彼らを守る為に……」

コンコン

マインシュタイン元帥の話の腰を折るかのようなタイミングでノックの音が聞こえた。

マインシュタイン元帥

「その指揮官が来た様だ。入りたまえ」

「失礼します」

入って来た人物を見て、福本、マリータだけでなく、フェルデナン

ト、宮崎大将、ブラッドレー少将、ハルゼー大将も敬礼した。

グデーリアン大将

「我々の切り札、エルヴィン・ロンメル中将だ」

あえてグデーリアン大将は言ったのだろうが、この中で彼の名を知らない者などいない。

ポーランド侵攻に続く、東プロイセン・リトアニア地方戦役での活躍は新聞報道で誰もが知っている『英雄』である。

ロンメル中将

「初めまして、アドミラルフクモト…あなたやミス・マリーダと共に戦える事を光栄に思う」

福本

「いえいえ、私は只の若僧ですよ。私としてはドイツの英雄と共に戦える事を誇りに思う」

ロンメル中将

「…ご謙遜を」

福本

「…お互い様です」

そう言いながら交わされた握手は固い。

マインシュタイン元帥

「彼にはベルリンから避難する国民の防衛にあたってもらう……ソ連軍は彼らを襲う可能性が高いのでね」

福本

「わかりました。反攻はそれから…ですね」

グデーリアン大将

「我々も何とかするが…反攻はイタリアから連合軍本隊が来てからになる」

フェルデナント

「出発は？」

ロンメル中将

「日本軍やアメリカ軍が同行するのなら、少し打ち合わせがいるかな」

フェルデナント

「わかりました、元帥。少しお休みになられては？」

福本

「おいおい、それはどう言っ…」

フェルデナント

「聞きましたよ。この10日間、艦橋に張り付きっぱなしでロクに寝ていないんでしょう？」

福本

「っ…」

実は福本、イタリアからドイツに向かう間、艦橋に張り付き、徹夜か艦橋の後ろの休憩室で毛布にくるまって2・3時間しか寝ていない。

フェルデナント

「打ち合わせは自分に任せて、休んで下さい。進軍中に倒れたらどうするんですか？」

福本

「…わかった、わかったよ。ただし、ちゃんと起こしに来いよ」

フェルデナント

「ええ、マリーダさんに頼んでおきます」

6時間後……マリーダに起こされた福本は準備の整ったドイツ・日本・アメリカ軍部隊と共に出発した。

次号へ

## 先発隊ドイツに到着ス（後書き）

明日・明後日は定期更新の『士官候補生異世界奮闘記』を更新いたします。お楽しみに。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

## ドイツ防衛戦 1

8月1日

あの独裁者ヒトラーが唯一認められる事をしたと言われるのは高速道路の建設である。

世界恐慌により、アメリカからの支援を宛に出来ない時に首相になったヒトラーは、現在の公共工事による経済回復と、後に行う戦争に際する軍隊の高速移動の為に高速道路を敷いた。

これが後のポーランド戦役やフランス侵攻で役に立つのだが……こちらの世界ではヒトラーがさっさと死んだ為、ソ連が第二次大戦の火蓋を切った。

そして……その道路をドイツ軍と連合軍が走っていた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……キュラキュラキュラキュラ……

戦車、自走砲、対空戦車、牽引砲、装甲車、トラック……等が通り過ぎて行く。それこそ、数えるのが面倒臭くなる程だ。

そして、対空戦車の砲身は上を向いて警戒している。いくら飛んでいないとは言え、何時飛来するか解らない。

福本

「しかし…凄い光景だね」

一式半装軌装甲車に搭乗している福本がふと呟く。



石田

「まあ…ドイツ・アメリカとの共同作戦ですからね。投入車両だけでも凄いかと…」

マリダー

「それでも、連合軍の何割かなんだけどね」

福本

「しかし、ここまで1つに集まる機会は少ないだろうな」

キールから急いで……途中で戦車や車両の点検・整備で時間を食うが……ベルリンに向かう。

整備時間の時に入手した情報によると、ベルリン市内に突入したとゆう未確認情報まであるくらいだ。

福本

「……もうそろそろ、航空隊も動き出しただろうな」

腕時計を見た福本が呟く。

前線上空

「チッ」

いったい今日何度目の舌打ちだろうか？

エーリツヒ・ハルトマン中尉は愛機の黒いチューリップ柄を機首に描いたBf109Gを操りながら思った。

ハルトマン中尉はアドルフ・ガラント大佐率いる戦闘機隊に所属しているルーキーだ。  
しかし、ソ連によるドイツ侵攻から既に12日目に突入した時点で、40機を撃墜していた。

なぜか……ソ連は大量の航空戦力をドイツ侵攻に投入したからだ。何せ、ギリシヤやアジアを手薄にしてまでも、ドイツ侵攻にヨーロッパ方面に航空戦力をかき集めたのだ。スターリンにしてみれば、ドイツ侵攻は自分の首を守る戦いだから当然だろう。ともかくにも、大量の航空戦力を投入したのだから、ドイツ空軍にとっては1日何回も出撃する事になるから会敵回数も自然に増える。  
だから、初陣者でも上手くすれば敵を撃墜出来た。  
しかし、個人の腕はともかく、数を出すソ連空軍にはドイツ空軍と互角に戦っていた。

ドドドドド!

ババババババババ!

ゴワーン!

ハルトマン中尉

「本日3機目と……」

銃弾を受けたYak9が落ちていく。

しかし、周りを見るとうんざりする程敵がいる。

ハルトマン中尉

「ちっ」

……こうなると、舌打ちが癖になってもおかしくない。そう思いつつ、操縦桿を握った時、ある事に気付いた。

自分達よりも上空で光る物に……

ハルトマン中尉

「あれは…敵の新手か？…いや…おかしい」

ソ連機は低空戦闘を得意としている。

だから、高度は6000メートルより上はあまり飛ばない。

しかし、上空の光は6000メートルよりも高い所だからだ。

アリソン

「やってるわね」

クレア

『腕は我がドイツだけど、数はソ連ね』

吉田

『まったく、数だしやいって訳じゃないのに…』

片山

『スターリンにそれを言うのはどうかと…』

杉田

『アリソン隊長。紫音は何時でもいけますよ』

宮本

『同じく、私も烈もいけます！』

紫音

『私は何時でも戦える備えはしてある』

烈

『久し振りの出番です！烈、いきまーす！』

吉田

『マッケンジー少尉。後ろの追っかけイタリア人は付いて来ているか？』

『だから！追っかけじゃないと言ってるじゃないですか！それに、僕にはバーナード・ワイズマンって名前があります！』

吉田

『……誰もお前が追っかけとは言っていないがな……』

クリス

『…私、ほっとかれています？』

クリア

『だめ。気にしてたら面倒な事になるから』

ちなみに、吉田と言いつ争っているのはバーナード・ワイズマン伍長。イタリア戦でクリアが撃墜した機のパイロットで、周りからは『バーニー』と呼ばれている。

まあ、彼の事はまた今度……

ワイズマン伍長

『マジで？』

アリソン

「はいはい…全機、第一撃は我々が掛ける。残りは敵部隊の混乱に乗じて攻撃を開始……間違えて味方のドイツ機を攻撃しないでよ！」

全員

『『『『『『了解！』『』『』『』』』』』』

それは突然だった。

上空から8機の戦闘機が急降下でソ連機に襲い掛かった。

狙われ銃撃を受けたソ連機は翼を叩き折られ……あるいは火を吹いて……撃墜された。

そして、間髪入れず後続がソ連機に襲い掛かる。

ハルトマン中尉

「日本軍か…助かった！」

日本軍の介入で互角だった状況も有利に成りつつある。

ハルトマン中尉

「よし…いくか！」

咄くとフルスロットで空を駆ける。

救援部隊はベルリンや国境から逃げて来た避難民達の列にぶつかり、徐行しながら進んでいた。

石田

「邪魔だから退け…なんて、言えませんか」

福本

「それを平気で言える奴が居たら俺がぶん殴ってる」

先頭を進んでいた福本達は避難民を見ながら話していた。

大沢

「元帥、どうやら不味い事になりましたよ」

停止していたマチルダ戦車から大沢が駆け付ける。

福本

「どうした？」

マリイダ

「ベルリン市内に突入したソ連軍…ベルリンを占領したみたいよ」

福本

「……遅かったか」

石田

「…どうします？」

福本

「…我々は避難民の保護が目的だ。今のところは避難民の保護を優勢する」

悔しみながら福本は言った。

次号へ

ドイツ防衛戦 1 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。



## ドイツ防衛戦 2

ベルリン占領の情報を受けた救援部隊は取り敢えず道路沿いに進み、迂回や車両の点検・整備を行いながらベルリンへと向かっていた。途中、撤退して来たドイツ軍部隊と情報交換や負傷者の手当て、志願が有れば戦力を抽出しながら進んだ。しかし、その部隊達は戦っている内にバラバラになり、たまたま合流した寄せ集まりの様な状態で、指揮系統もバラバラのぐちゃぐちゃだ。だが、そんな状態に成りながらも戦っているのは祖国の危機と認識し、折れる事無い意思を持っているからだろう。

福本

「しかし…酷いものだ…」

避難民の列を見ながら福本が呟く。

何がどう酷いかは説明出来ないが、直感的に出てきた言葉である。

結局、戦争をどう大義名分化しても困るのは無力と言っているいい民達なのだ。

ロンメル中将

「やはりそう思いますか…アドミラルフクモト」

福本

「ロンメル中将」

何時の間にやら、兵士達からも愛用している事で有名なSd.Kfz. 250/3無線指揮車から降りてきたロンメル中将が近づく。

ロンメル中将

「海軍元帥ながら、陸上で戦う人はあなたが始めてでしょう」

福本

「元帥と言っても、無理矢理与えられたものですから……それに、私は現場派の人間なので」

ロンメル中将

「現場派……なるほど……ですが、その若さで将官とゆう時点でああなたが有能な証拠では？」

福本

「若すぎて歳上に対しに気を使わなければなりませんかね」

まあ……それが大変なのだが……。

ロンメル中将

「それは大変そうですね……しかし、あなたはなぜ陸上の戦闘にまで足を運ぶのですか？　ただ現場派とゆう理由だけではないと思いますか？」

福本

「……なんと言いますか……自分の心情ですかね」

ロンメル中将

「心情……どのような？」

福本

「2つあります。1つは『指揮官の心は常に前線の将兵にあれ』、もう1つは『指揮官の使命は如何にして1人でも多くの将兵を帰りを待つ人々の下に帰すか』……これが自分が持つ心情です」

ロンメル中将

「…それは誰かからの教えですか？」

福本

「色々な方々の影響はありますが…自ら見つけ出した答えです」

ロンメル中将

「…やはり、あなたは名将かも知れませんね」

福本

「いえ…只のお人好し士官ですから」

そう福本が言うと、2人は笑い出した。

大沢

「ものすごく、遠い世界に居る様に思っていますが…福本元帥とロンメル中将」

石田

「まあ…あの状態で声は掛けずらいよな」

福本とロンメル中将の会話を遠巻きに見る2人と……

マリーダ

「あれで声掛けれる人は、物凄く大事持った人が、空気読めない人ね」

暇なので、2人の会話に入るマリィダ。

大沢

「何を話しているんでしょうか？」

石田

「名将…あるいは英雄同士しか解らない話とか」

マリィダ

「自分の事でしょう」

フェルデナント

「マリィダさん、元帥とロンメル中将がどこに居るか知りませんか？」

走りながらマリィダに訊く。

その答えをマリィダは指で指して答える。

フェルデナント

「福本元帥！ロンメル中将！新しい情報です！」

福本

「なんだ？」

フェルデナント

「偵察機の報告では、どうやらソ連軍はベルリンを占領した模様」

ロンメル中将

「やはり…欺瞞ではなかったか」

フェルデナント

「はい…それとソ連軍はベルリンから避難中のドイツ国民を追跡している様子…血に飢えていると言って過言ではありません」

福本

「……全部隊、動けるか？」

フェルデナント

「え…あ、はい。既に整備・点検は完了しております」

福本

「ロンメル中将、行きましょう！ドイツ国民を守る為に！」

ロンメル中将

「もちろん、我が愛しの祖国ですからな！」

次号へ

## ドイツ防衛戦 2 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ドイツ防衛戦 3

8月2日

避難民の邪魔に成らない様にしつつ進んでいた。

そんな中、防衛戦を行うドイツ軍の情報を集めた結果、ソ連軍はベルリン付近の防衛線以外の防衛線は突破されてはいなかった。

これから察するに、ソ連軍はベルリン攻略に戦力を集中した様子だ。つまり、ベルリンに向かった戦力が主力であり、これさえ叩き潰せばソ連軍に何らかの影響があるのは間違いなかった。

福本

「それで、後ろを守っているのは、何とか指揮系統を保った部隊なんだな？」

フェルデナント

「はい。無線を傍受して確認しましたから。部隊名は『オルクス隊』です」

ロンメル中将

「オルクス…なるほど」

福本

「…フェルデナント、日本語だと意味は？」

フェルデナント

「『死神』です」

福本

「……今日はソ連軍にとって厄日だな」

宮崎大将

「まったくですな」

フェルデナント

「それともう一つ。オルクス隊の無線符丁『ヴァルキューレ』が存在しています」

福本

「『戦乙女』か……厄日決定だな」

石田

「死神に戦乙女……これに日独の英雄と日本陸軍最強師団と戦女神がおります。ソ連軍にとってこれ程の悪運……厄日もそうそう無いでしょう」

マリィダ

「戦女神……私の事？」

石田

「そりゃあ、もちろん！」

福本

「バカ者」

ボス



軽く手刀で頭を叩く。

その場にいたロンメル中将、ブラッドレー少将以下ドイツ・アメリカ軍将校は何だ？とゆう顔をしたが、フェルデナントが石田の言った言葉を訳して言うと、将校全員が笑う。

宮崎大将

「まあまあ…ですが、確かにソ連軍にとってこれ程悪運が付いた日は無いでしょうな」

福本

「悪運かどうかは兎も角として…まあ、ドイツに手を出したら、連合軍がどうするか見せてやりますか」

偵察機の報告により、ソ連軍が進撃を開始。

緊急度を増した為、第七艦隊から空爆隊が出撃した。

フェルデナント

「攻撃隊、あと数分で上空を通過します」

福本

「……無線、繋げれるか？」

フェルデナント

「そう言つと思いましたが…既に全部隊に繋いであります」

そう言つと、指揮戦車の無線を福本に渡す。

福本

「みんな…義和団事件において北京籠城の指揮を執った柴五郎中佐は知ってるな？」

唐突な事に全員が首を傾げた。

もちろん、義和団事件の事は、日英同盟締結の遠因となる事だから全員知っている。

問題は、なぜ福本それを出したかだ。

福本

「柴中佐…大将になられ、現在でもご存命であられるが、中佐は会津若松のご出身で、戊辰の役の1つ会津戦争では祖母、母、姉、妹を亡くされている。その事が義和団事件の北京籠城における固い決意になったに違いない」

ここまで話すと、ほとんどの人間が福本の言わんとする事が解ってきた。

福本

「現在、ドイツの現状は義和団事件に酷似していると言って過言では無い。ならば、我らがやらねばならぬ事も解る筈だ。それでは命令を下す…全力をもって、ドイツとドイツ国民の生命・未来・希望を守れ！ 以上！」

言い終わるとフェルデナントに無線を返す。

福本

「さて…行くか」

フェルデナント

「はい」

宮本

『アリソン隊長、烈がソ連軍部隊が発見！』

アリソン

「戦闘機隊、半数は上空警戒、半数は対地襲撃。全機掛かれ！！」

クレア

『襲撃隊、我に続け！』

片山

『クレア大佐、無理しないでしょっかね？』

吉田

『その為に杉田を付けたんだ。杉田、頼むぞ』

杉田

『了解。紫音もいますから、大丈夫ですよ』

アリソン

「さて、ソ連機は見付けたら、一機たりとも通さないわよ！」

警戒隊と襲撃隊に別れた戦闘機隊は艦爆隊、艦攻隊と共に降下、地

上で悠然と進撃していたソ連軍地上部隊を襲った。

クレア

「全機、爆弾とロケット弾は直ぐ放て！ その後、銃撃に切り替え……撃て！」

カチッ

ヒューーウ……

ゴワーン！！

クレア機を先頭に、250キロ爆弾を積んだ烈風が先陣をきり爆撃……続いて250キロ爆撃を二発積んだ紫電改が間髪入れず爆撃を行う。

いきなりの襲撃に、混乱に陥ったソ連軍に、今度は後方から襲い掛かる。

杉田

「てえー！！」

シュバババババババ！

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！

薄い上面装甲にロケット弾が命中した戦車や自走砲を破壊し、爆弾が歩兵や車両を吹き飛ばす。

大熊

「野郎共！戦闘機に負けるなよ！？」



ドイツ防衛戦 3 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ドイツ防衛戦 4

周波数の関係で、偶々ソ連軍に対し日本軍が空爆した事実を知った。数日前、キール軍港に日本軍が到着したのは噂程度に聞いていたが……イタリアから先発隊を組んで駆け付けたのか？

いや……そんな事は後で考えればいい。

それよりも……今は……

無線

『全車に告ぐ……お客さんだ。お出迎えの準備だ』

やはり来た。

しかし、日本軍が空爆を実行した……それも10機や20機では無い筈……なのに平気な顔で進んで来る。

やはりソ連は兵士の命などゴミか八工の様にしか思っていないのか？あの広い国土から兵士は雑草の様に集められると？

ソ連では人間の命はそれほど安いのか……。

そんな国の奴らに国や国民が蹂躪されていると考えれば、女の私ですえ……いや、女だからこそ、嫌になっってくる。

だからこそ……と言うべきかは解らないが……ドイツ軍士官として……国を守る軍人として……

「こちらヴァルキューレ01。02、03聞こえているな？ 敵は大軍とは言え、殺れん敵では無い……慎重にいくぞ」

『『ヤー！』』

無線

『敵接近。お出迎え開始!』

「ファイア!」

ドン!

主砲が火を吹いた。

『こちら彩雲。陸戦隊、どうぞ?』

フェルデナント

「こちら陸戦隊。感度良好…状況は?」

『はい。空爆を受けたソ連軍は進撃中…後少しで……いえ、既に敵はドイツ軍と交戦中』

福本

「交戦中のドイツ軍の陣容は?」

『細かいところまでは解りませんが……車種はタイガー戦車1、パンサー戦車2、四号戦車6両ほど…あとは歩兵です』



石田

「……圧倒的に不利ではないですか！」

福本

「だから、我々がここに居るんだ。航空隊の方は？」

フェルデナント

「要請してありますが、給油・給弾で時間が掛かっております」

福本

「ならば、我々が先だな。ヨーロッパで日本にも喧嘩売った事を後悔させてやるか」

フェルデナント

「はい！」

ドン！

ゴワーン！

T34がまた爆発した。

先ほどから何両潰しているか数える暇も無い。

それにしても、潰しても潰してもウジャウジャウジャ出て来る。

数は力だの如く出て来る。間をとる為、後退しながら撃っているが、徐々に苦しくなる。

このままでは……

ドン！

ヒュン！

ゴワーン！

後方からの発砲音……砲弾の飛翔音……そして、砲弾が命中した戦車の爆発音……。  
この瞬間……私は助かったと思った。

大島大尉

「大沢、右だ！」

大沢

「はい！」

一番前を進んでいたマチルダ魔改造戦車は88mm55口径砲が吹いた瞬間、右に進路を変更した。

このまま前に進んでも、ドイツ軍が前にいるからあまりボカス力撃て無い。

ならば左右どちらかに展開すれば、正面より装甲の薄い側面を狙えるし、敵の迂回を防止できる。

まあ、ここまで考えた訳では無いが、このため、第七陸戦隊の戦車隊は自然に右に曲がった。

これを見たロンメル中将は指揮下の戦車隊に左へ展開する様に命じた。

つまり、結果的にソ連軍を引き込みつつ、左右から挟み撃ちになる様な形になった。

これは長野連隊が今まで抵抗していたクルスク隊と交代した瞬間、ソ連軍もようやく自分達が三方から包囲されている事に気が付いた。ここにタイミング良く第七艦隊からの攻撃隊が飛来した。

大島大尉

「攻撃隊も来たな…マチルダ！暴れるぞ！」

マチルダ

「ポーランドでの屈辱…お返しして差し上げますわ！」

ドン！

ゴワーン！

また1両…ソ連軍戦車が吹き飛んだ……。

日独そして、後続のアメリカに包囲され、空から爆撃されたソ連軍は大損害を被って撤退した。これにより、避難民の保護は完了した。しかし、ソ連軍がベルリンを抑えている限り、油断は出来ない。

次号へ

## ドイツ防衛戦 4 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ドイツ防衛戦 5

数時間後……………

フェルデナント

「とりあえず、避難民を追撃して来たソ連軍は壊滅させましたが…」

福本

「状況は変わらん。ソ連軍がベルリンを抑えている限り、外交的にイニシアチブを持っているのは向こうだ」

ロンメル中将

「確かにそうです」

そう言いながら、福本やフェルデナントが入るテントにロンメル中将が入って来た。

ロンメル中将

「先ほど、司令部を通じて外務省から連絡がありました。色々言ってきましたが、簡単に要約すると『ベルリンと占領地を返して欲しければ降伏しろ』…と言った具合です」

マリーダ

「図々しい奴らね。恥も知らないってのはこの事よ！」

…女が怒れば恐いって事をあのスターリンに教えてやりたいものだ。

宮崎大将

「ならば、ここはベルリンを早期奪還すれば、敵は交渉の後ろ楯を失うな」

ノモンハン事件を経験した宮崎大将だけに、福本も頷ける。

福本

「そうですね。今は頑強に粘れますが、その内向こうも色々やってくる筈ですから……参ってくるのも時間の問題でしょう」

今、ドイツに抜けられると連合軍全体が困る上に、ヨーロッパ情勢に多大な影響が出る。

特にドイツを中継基地としてポーランドを奪還し、ソ連領内に攻め込もうと思えば、ドイツの線路や道路は大切な進撃路であり補給路である。

それを軸に反攻作戦を立てた連合軍としては、ドイツに降伏されると、1からやり直しである。

この戦争の間に後々厄介になるソ連とスターリンを葬るとする福本にとっては嫌な話だが、それ以上にドイツをこんな状態のままに終わらす事は心情的にももっと嫌な話だ。

フェルデナント

「…となりますと、我々の手で奪還するのが早いですね」

福本

「戦力は大丈夫か…なんぞ、している訳にもいかんしな」

数は力…とはよく言うが、はっきり言って数だけで勝てるならば、戦術・戦略どころか指揮官も要らない。戦場…戦争では爪先の様な小さい事で戦況がガラリと変わる事があるのだ。

フェルデナント

「…では？」

福本

「ああ…」

福本

「…と言つ事で、このままベルリンをソ連軍の手中にあるのは敵に利するのみ。そこで、このままベルリンを奪還します」

ザワザワザワ……

こんな突拍子も無い…正論ではあるが…発言にドイツ軍側からざわめきがおきる。

一方、イタリア半島攻略戦で福本の突発的な作戦によりローマ占領をやったアメリカ軍はブラッドレー少将以下『やつぱり出た』と言った具合で、予想はしていた様だ。

ロンメル中将

「あんまりにも突拍子で無茶な話かも知れないが、時間を置いては防御を固め、奪還を難しくするだろう。ならば、防御が固まっていない今だからこそ出来ると私は思うのだが…諸君達はどうかね？」  
参謀達が小声で相談するが…それ程時間は掛からず……

参謀

「では、具体的にどうするんですか？」

福本

「まあ、日本軍流で途中までやらせていただきます。後は市街戦になりますかね」

大沢

「…で、結局ベルリン奪還するんですね」

石田

「まあ、あの人の事だからやるとは思ってたけどな」

マチルダ戦車の点検をしながら大沢は石田と喋っていた。

大沢

「それで、元帥はどうやってベルリンを？」

石田

「まずは夜襲で踏み込んで、混乱した所をベルリンから追い出す」

大沢

「警察の一斉捜査みたいな話ですね…だから、総点検の命令ですか」

石田

「だろうな」

そう言ってマチルダの車体に腰掛ける。

大沢

「あ、そういえば、知ってます？ ヴァルキューレの正体？」



石田

「ヴァルキューレの正体？なんだそりゃ？」

大沢

「ほら、無線符丁で『ヴァルキューレ』ってあったでしょう？  
はあれ、タイガー戦車に女性士官が乗ってるからだそうですよ」  
実

石田

「ふん…あ、じゃあ、この後も…」

大沢

「ええ、もしかしたら、一緒に戦えるかも知れませんよ」

石田

「そっか…」

そう返事をしながら横を見た。  
マチルダが物凄く不機嫌な顔をしていた。

次号へ

## ドイツ防衛戦 5 (後書き)

明日・明後日は定期更新の『士官候補生異世界奮闘記』を更新いたします。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

## ベルリン奪還作戦 1

ドイツの首都ベルリン。

ソ連侵攻により政府機能等がキールに移ってしまったが、誰もが認めるドイツの首都である。

史実でも、ヒトラーが自殺するまでベルリンでは一般市民を巻き込んだ市街戦を展開したが……ヒトラーが死んだこの世界ではソ連軍がベルリンに到達した時点で9割の市民が避難を完了していた。

しかし、ベルリン戦において（あくまで一部の人が）首都のお家の前まで戦闘やってたのを誇らしげに語る人がいるが、普通に見て市民まで巻き込んでまで戦闘をやる事自体がおかしい事であり、そうならない様に戦争を終結させるのが政府の仕事である。

まあ、ナチスドイツと日本を比べていいものかと思うが、天皇家の存続出来るかどうかの瀬戸際に、ポツダム宣言を明日の日本の為と受け入れた昭和天皇は凄いと思う。

自身の身よりも国民の為……と受け入れを宣言した昭和天皇を戦犯にするのは間違いでは無かるうか？

……話が逸れた。

ともかくにも、ソ連軍によって占領されたベルリン。

しかし、連合軍……特に救援部隊……は現場判断で奪還作戦を開始しようとしていた。

ベルリンのソ連軍は守備に就いていた。

しかし、夜になるとヨーロッパの軍隊は休む。

これはソ連軍でも一緒である。

ただ、ソ連軍の場合はウォッカを飲むのが大多数である。

その為、酔っ払っている人間が多い。

また、見張りの方も緊張感が足りないのか形だけになっている。これは解らなくも無い。

現在ドイツ軍は防戦一方であり、連合軍も本隊が到着していないから、反撃してこないだろう……と軍上層部から末端の下端兵士まで思っているのだろう。

その為、難なく宮崎師団の夜襲部隊は侵入出来た。

念のため、死体から回収したソ連軍軍服を着て潜入した。

もちろん、ベルリンの地理に詳しい案内人を付けてだ。

まあ、市街戦をやったから建物の特徴が変わっていたり、瓦礫などで道が塞がれている可能性があるかもしれないが……。

普段の夜襲は少数精鋭で行われるが、今回は複数目標の制圧を任務とするので、少数精鋭ながらも、複数の部隊が投入され、それぞれの指定された目標に分かれて向かった。

そして、制圧目標1つであるソ連軍の臨時弾薬庫の爆破を『合図』に郊外に待機する日独米部隊が突入し奪還する。

問題は日本軍が得意とする少数精鋭の襲撃に発生した混乱に乗じて攻撃する今回の襲撃方法を余り夜襲をやらないドイツ・アメリカ軍部隊が日本軍同様に乗じれるかであった。

しかし、この事に関して福本は大丈夫だと言って余り気にはしていなかった。

ベルリン市内に潜入した夜襲隊はゆつくりと、かつ確実にそれぞれの目標に近付いていた。

ある部隊は、通信所の制圧を命じられ案内役のドイツ兵と共に通信所がある建物に近づく。

すると、ご丁寧に歩哨が1人ついていた。すると、指揮を採っていた軍曹が部下を待機させ、酔っ払ったふりをしながら歩哨に近付いた。すると、どうやらその歩哨は若者だったらしく、酔っ払った上官に絡まれて難儀しているといった表情になった。しかし、その表情も直ぐに変わった。軍曹が脇腹に強烈なパンチを加えて歩哨を気絶させる。そして、待機していた部下に命じて、歩哨を縛り猿ぐつわを噛ませると、適当な部屋に放り込み、通信室を襲撃した。

ほぼ同じ頃、他の夜襲隊も制圧目標を静かに襲撃していた。こういった静かに潜入・襲撃する事は日本軍の十八番である。そして、白兵戦になればこれまた日本軍の十八番である。確かにソ連軍は帝政ロシア軍同様陣地に籠ると強い。しかし、陣地内に入られれば弱い。そして、今回は占領した敵の首都で襲われると思って無かったのか、余りにも無警戒の丸腰に近かった。そして……

日本軍工兵

「軍曹殿、準備完了しました！」

日本軍下士官

「よし、長居は無用だ。さっきと同じ手順でここを離れるぞ！」

次号へ

ベルリン奪還作戦 1 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ベルリン奪還作戦 2

ベルリン郊外

日本・ドイツ・アメリカ軍がベルリン郊外で待機していた。未だ合図の爆破を待つ連合軍。そんな中、福本はマチルダ戦車の砲塔の上で目を瞑り胡座を掻いてじっとしていた。

石田

「…声が掛けづらい」

近くに控える石田はマリーダにそう囁いた。

マリーダ

「まあ……あの状態じゃあね」

マチルダ

「……何時まで私の頭に座っている気ですか!?!」

マチルダが憤慨を周りに構わず口に出す。

フェルデナント

「まあまあ、抑えて抑えて…」

それをフェルデナントが宥めている。

本来の宥め役の大沢は戦車の操縦席で待機中だ。

石田

「…合図はまだですかね？」

マリーダ

「あのね、ダイスケだって待ってるの。黙ってね」

……砲塔の上でだが。

その時、福本は目を開けた。

そうかと思うとスツと立ち上がり、フェルデナントに命じた。

福本

「フェルデナント！ 全車にエンジン掛けさせる！」

フェルデナント

「え、あ、はい！」

慌て指揮戦車の無線を掴みエンジンを掛ける様命じた瞬間……

ドゴゴゴゴゴーン！！

大音響の爆発が響き渡った。

爆発した方を見ると、ベルリン中心部がオレンジ色に輝いている。

石田

「まさか、元帥……発破掛けたの解ったんですか!？」

福本

「あのな、そんなの解る訳無いだろう！ なーんか、空気が変わった様な気がしたんだよ！」



マリーダ

「2人共！ 言い合いなら後にして、早く乗りなさい！」

マリーダの声に石田は慌て半装軌装甲車に、福本はマチルダ戦車の砲塔にある手すりに掴まる。

すると、マリーダも慌て乗ろうとしていた半装軌装甲車からマチルダ戦車の方に走る。

福本

「マリーダ!？」

マリーダ

「私だけ放つとくつもり!？」

そう言いながら、福本同様に手すりに掴まる。  
ここまでできたら、いくら何でも止まらない。

フェルデナント

「長官！ 行きますよ!！」

福本

「ああ、構わず行ってくれ！」

フェルデナント

「いえ、構います！ 元帥がけがしたらどうするんですか!？」

…と言いつつもちやつかり全部隊に突撃命令を出すフェルデナントだった。

この爆発は、同様に郊外で待機していたドイツ軍やアメリカ軍にも聞こえた。

この爆発にロンメル中將もブラッドレー少將も日本軍の夜襲が成功した事を確信した。

すると、直ぐに指揮下の部隊に突撃命令を下した。

だからこそ、福本は心配無いと気にしていなかったのだろう。しかし、不安が無い訳では無いのだが……

福本

「総員下車！ 早く下車せんと、上から火炎瓶が降ってくるぞ！」

マチルダ戦車から飛び降りた、福本が叫ぶ。

これに慌てた……訳では無いだろうが、急いで歩兵が降りる。

フェルデナント

「全周警戒！ 物陰やベランダ、窓は特に警戒せよ。狙撃兵が狙っている可能性があるぞ！」

M1ガーラド小銃に初弾を装填しながら叫ぶ。

福本

「なんだ、フェルデナント。今回は俺の真似か？」

フェルデナント

「私もドイツ人ですよ。ベルリン盗られて黙ってはいられませんよ

「！」

マリーダ

「はいはい！ さっさと行くわよ！」

石田

「あの…テンションが上がっているところ申し訳ありませんが…後方からタイガー戦車と四号戦車が来ておりますが？」

3人

「「「え？？」」」

見ると…確かにドイツ軍の四号戦車2両とタイガー戦車がいた。

福本

「…なんか聞いている？」

フェルデナント

「いいえ」

マリーダ

「じゃあ…だれ？」

その時、タイガー戦車の車長ハッチから1人が飛び出して来た。すると、その人物はこちらに向かって走って来る。

「申告します。ロンメル中将の命令でベルリン市内のご案内を承りました、エリーゼです」

名前からして、女性……だった。

マリーダ

「あ、まさか…『ヴァルキューレ』さん？」

エリーゼ

「はい…もともと、自分が決めた訳ではありませんが」

福本

「まあ、いいや。案内よろしく！」

次号へ

ベルリン奪還作戦 2 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

### ベルリン奪還作戦 3

大爆発が起きた瞬間、ソ連兵達は慌て飛び起きた。

いくら酔っ払いでも、爆発の大音響を聞けば、大部分の人間は酔いも吹っ飛びだろ。

そして、弾薬の爆発にソ連兵達の目がいく。

もちろん、これは司令部でも一緒だった。

司令官

「なんだ！？ 何が起きた！？」

参謀

「だ、弾薬が爆発しました！！」

司令官

「なに！？ 馬鹿者！ 何をやっている！？ 早く消せ！」

司令部でもてんやわんやの大騒ぎ。

まさか…日本軍の仕業とも知らずに……。

司令官

「誰か！ 下に行って早く消せと言ってこい！」

士官

「わかりました！」

士官の1人が外に出ようとドアノブに手を伸ばした瞬間、扉が開い

た。  
そして、その士官が次に見たのは、自分の顔面に向かってきた銃床  
だった。

バキッ！

銃床で顔面を殴られた士官が引っくり返る。

その音に気付いた司令官や参謀、士官達が振り向いた時、間髪入れ  
ず日本兵が乱入、100式短機関銃を乱射する！

ダダダダダダダダダダ！

ダダダダダダダダダダ！

ダダダダダダダダダダ！

日本兵の乱入に慌て拳銃やマシンガンに手を伸ばそうとした士官が  
撃ち倒される。

そして、お次は銃剣を装着した日本兵が乱入し、司令室を制圧する。  
ちなみに、文章にすると長いが、この場に居た司令官、参謀、士官  
達にとってはあつという間の制圧劇だった。

ロンメル中将から派遣されたエリーゼ中尉の先導の下、第七陸戦隊  
も少しずつベルリン中央部に近付いていた。

福本

「……………これが、首都ベルリンか……」

数回程、写真でしか見た事はないが、今の現状はとても首都とは言  
えない。

華の都はパリ……と言ったもんだが、ベルリンも中々の街並みである。しかし……それは平和な時のベルリンだが……。

フェルデナント

「……こんな街並みではなかったのですが……」

福本の後ろから付いて来るフェルデナントが呟く。

福本

「……あまり言うな……戦闘が終わってからにしよう」

意気消沈は後ですれば良い……聞こえは悪いかも知れないが……それより今はやる事がある。

そう思った時、誰かが近付いて来る気配を感じた。

直ぐにホルスターのモーゼル大型拳銃に手を伸ばす。しかし、近付いて来たのは宮崎師団の夜襲隊の人間だった。

石田

「どうやら敵さん、中央部に集まっています、こちら辺にはいない様ですね」

対応した石田が福本達に内容を伝える。

福本

「なら、中央部まで一挙に行くか……警戒しながらな」

ベルリン市内のソ連軍は大混乱に陥っていた。

弾薬の爆発により大騒ぎになっているところに、任務を終えた夜襲



隊がロシア語で欺瞞を撒き散らす。

これにより更に混乱し、ある者は消火に向かおうと、ある者は配置に就こうと、右往左往、押し合いへし合いになった挙げ句、喧嘩になつたり……と混乱は収まる気配さえみせない。

それどころか、余計に混乱し統制が執れない様な状況になっていた。そんな時、夜間行動が得意な第七陸戦隊、宮崎師団、長野戦車連隊が踏み込んだ。

ちなみに、第七陸戦隊と宮崎師団・長野戦車連隊は別路でベルリン中央部に進撃していたが、途中で合流してしまったのである。

福本

「ちょうど良い具合に混乱しているな……よし、戦車は歩兵を援護しつつ、手近な敵戦車を破壊！ 向こうは炎で丸見えだが、こつちには全く気付いていない。出来るだけ戦車を盾しろ……配置に就け」

サツと陸戦兵達が戦車を盾にして狙い安い場所に配置に就く。  
一部は窓から撃とうと手近な建物に入る。

フェルデナント

「元帥、無茶は止めて下さいよ」

福本

「それはこつちのセリフでもあるんだが？」

マリーダ

「…極論すればみんなに言える事よ」

呆れた様に呟くマリーダ。

石田

「元帥、いきますよ！」

フェルデナント

「よし、撃て！」

ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！……

この瞬間……ベルリンは再び銃声に包まれた。

次号へ

ベルリン奪還作戦 3 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ベルリン奪還作戦 4

突然の攻撃に、ソ連軍は一挙に大混乱から破綻の坂を転がり始めた。先頭のマチルダ戦車やタイガー戦車を盾にしつつ、ジリジリと前進する。

その陰に隠れて、日本軍は無防備に等しいソ連兵に威嚇銃撃を加える。

そして戦車は道端に停止しているソ連軍戦車に対して砲弾を叩き込んで破壊する。

この時点で、弾薬爆発に意識のいったソ連兵のほとんどが無装備だから逃げるしか無い。

そして漸くこの弾薬爆発が日本軍の仕業だと一部の士官は察した。

その為、近くにあった野戦電話を握り司令室を指示を請う。

しかし、いくら待ってもウンともスンとも言ってこない。

ソ連軍士官

「くそ！ 酔っ払ってるのか！？ 早く出やがれ！」

そして、気付いた……まさか司令部も抑えられたのか！？

「うりゃあ！」

そんな叫び声が聞こえ振り向くと白刃を煌めかせた日本刀が脇腹に叩き込まれた。

福本

「…ん？」

マチルダを盾に99式歩兵銃を撃っていた福本は、士官が野戦電話に手を伸ばしているのに気が付いた。

直ぐに歩兵銃を肩に掛けると、マチルダとタイガーの間を走ってすり抜け、愛用の軍刀を抜いた。

福本

「うりゃあ！」

振り向いた士官が驚愕の表情が見えたが、構わず軍刀を半回転させ峰部分を脇腹に叩き込む。

バキッ！

峰打ちの為、斬った訳ではなく、撲つたに等しい。しかし、どちらにしろただでは済まないのは同じだ。

石田

「元帥！ 余り前に出ないで下さいよ！」

福本

「あははは……またやつちまったな……」

フェルデナント

「危うく、間違つて撃つところでしたよ」

そう言いながらガーランド小銃に次弾を装填するフェルデナント。

福本

「…今さらりと怖い事言わなかった？」

フェルデナント

「…いいえ、別に」

福本

「ほんとか？」

石田

「あの…ここ戦場の真ん中ですから…言い争うのは後にして下さいね」

……そんな3人を後ろから眺めるエリーゼ中尉とマリィダ。

エリーゼ中尉

「…あの3人にここが戦場とゆう認識があるか疑いたくなります」

マリィダ

「…まあ、一見緊張感が無いのは解るけど…」

あれはあれで持っている事は側にいたマリィダはよく知っている。つまり、付き合いの長さの違いだ。

そんな事をいえばイタリア戦線は何れだけ暢気な空気だったか…

そんな会話を福本達が交わしていた頃、日本軍同様にベルリンに突入したドイツ・アメリカ軍もソ連軍に向かって銃砲を撃っていた。夜襲は苦手なドイツ・アメリカ軍も敵が無防備で、混乱しており、かつ弾薬爆発の火災で多少明るくなっているから、それほど妨害さ

れずソ連軍を押ししていた。当のソ連軍にしてみれば、来てないはずの連合軍が何故ベルリンにいるの？…みたいな疑問が持って……暇があったかは知らないが……いただろう。

そして、こういった場合、櫛の歯が1つでも取れば後はなし崩しに取れていく。

まさに今のソ連軍がそうだった。

しかも、反撃の要となる戦車に燃料・弾薬が補給されていなかった。弾薬は爆破され、燃料は日本軍の手に落ち、僅かに動ける戦車や装甲車両は見付けられれば撃破される。

同様に、僅かな人間が銃火器を持って応戦するが、しっかりした戦車の援護を受けれる連合軍の前には、奔流の前の小石にすぎなかった。

そして、時間が経つにつれて銃声は徐々に少なくなっていた。

そして、翌8月3日の早朝……ベルリンの街の一角に昨夜まで立てられていたソ連国旗が降ろされ、ドイツ国旗が翻っていた。

福本

「一晩掛かったが……まあ、よしとすべきだな」

寝不足な目で翻るドイツ国旗を見ながら呟く。

そして、視線を水平に移すと、石田やその指揮下の中隊、ドイツ・アメリカ軍の部隊が投降したソ連兵の見張りに就いている。

一目見ただけでも千や二千では収まらない数の人間がいる。

また、現在、残敵捜索を行っているから、まだこの数は増えそうだ。

福本

「当分、戦後処理が大変だな………いつたい捕虜は何千人………いや、

何万人に成るのやら…」

これからの事を考えると、苦笑するしかなかった。

次号へ



ベルリン奪還作戦 4 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 後始末と面倒事

8月3日 午後

『ベルリン奪還に成功！ 首都は再びドイツ国民の手に！！』

この報告はドイツ・ソ連両軍に瞬く間に知れ渡った。そして、本当かどうか確認した両軍司令部にこれが事実だと解ると、ドイツ防衛司令部では狂喜乱舞し、ソ連ドイツ侵攻司令部では一挙に落胆の表情に変わった。

いつの間に連合軍主力が到着……もちろん、していない……していいたのか、いったいどれ程の兵力なのか……こんな事を直ぐ様調査し、対応策を考えるのが司令部の仕事であるはずなのに、誰も動かない。それもそうだが、このまま圧力を徐々に掛けつつ、ドイツを降伏させ、戦況を挽回しよう……との意図は完全に絶ち切られたのだ。

出来る限り早期にベルリンを占領、連合軍主力到着前にベルリンの守りを固め、外交攻勢に出るシナリオは成り立たなくなった。それはイコール、スターリンの怒りをかう事だからだ……

ベルリン奪還のニュースはドイツ軍の士気を爆発的に高めた。

何度も言う通り、ベルリンはドイツの首都であり、首都を人質に外交交渉が行われていたから、ソ連は交渉する手立てを失ったに等しい。

そして、ドイツ軍にとっては懸念材料がなくなり、更に激しく抵抗しはじめた。また、空の方でも、第七艦隊とアメリカ力艦隊の到着に

より戦闘に余裕が出来た、と思った時のベルリン奪還のニュースにパイロット達は普段以上に奮闘しはじめた。  
これにより、徐々にだがソ連軍が崩壊していく事になるのだった。

プス…プス…プス…プス…プス…プス…

「くそ！ やつとここまで飛ばしたてつえのに！」

エンジンを騙し騙しで飛ばして来たハンス・ウルリツヒ・ルーデル中佐が悪態を吐く。

彼は近くの基地からいつも通りに出撃し、いつも通りに戦車を食いまくりついていた。

しかし、いきなり敵機に襲われ被弾、友軍戦闘機が駆け付けたから良かったものの、被弾した愛機を飛ばして来た。

ルーデル中佐

「ヘルチエル、無事か？」

ルーデルは後方座席の相棒兼銃手のエルヴィン・ヘルチエル上等飛行兵に声をかける。

ヘルチエル上等兵

「ああ…今のところは…無事に着陸出来るか聞きたいな」

ルーデル中佐

「それは無理な話だな」

彼らの乗るAr199C爆撃機……彗星35型ドイツ生産バージョ

ン……はエンジン部分に何発か被弾していて、液冷エンジンで今飛んでいるのが不思議なぐらいだ。

ルーデル中佐

「さて…不時着するにしても、どこにするかな…」

変な所に不時着してソ連軍の捕虜に成るのは真っ平御免である……しかし……

ルーデル中佐

「…ん…あれは…ベルリンか!？」

敵機に襲われた後、無茶苦茶に飛んだから解らなかったが……これについては……

ルーデル中佐

「ヘルチエル、ベルリンの近くに不時着する、いいな？」

ヘルチエル上等兵

「そっちの方が助かるよ、相棒！」

石田は捕虜の見張りを他の部隊と交代し、ロンメル中將から許可を貰い徴発したホテルの一室へと入った。

石田

「失礼します」

福本

「ん、石田か。ご苦労様」

石田

「はい…では、お先に休ませて貰います」

フェルデナント

「ええ、ごゆっくり」

石田

「失礼しました」

そう言いながら、石田は部屋を出た。

福本

「ほとんどの奴が、今は夢の中だろうな」

フェルデナント

「そういえば、マリーダ参謀長は？」

福本

「同じく夢の中だろう…俺の夢でも見てるかもしれないけどな」

フェルデナント

「それは羨ましいですね」

福本

「おいおい、皮肉は止めてくれって」

そう言いながら、机に置いてある報告書を見る。

福本

「ところで、捕虜が10万を越えるかもしれないとは本当か？」

フェルデナント

「はい、まだ正確に数が把握出来ておりませんし、現在も残敵捜索を行っておりますから、増える可能は大です」

福本

「うむ……そんな事があり得るのか？」

フェルデナント

「はい、作者のネタ情報ですと、史実のスターリンググラードの戦いで9万のドイツ兵が捕虜になったのは知ってますね？」

福本

「有名過ぎる話だからな。あの話を聞いて、無理な死守は味方を無駄死にさせる事だと再認識したしな」

フェルデナント

「結構です。では、史実のバルバロッサ作戦でキエフ包囲戦で捕虜になったソ連兵の数を知ってますか？」

福本

「いや、知らん」

フェルデナント

「……驚くなかれ、65万です」

福本

「……疑う訳じゃないが、桁間違えて無いよな？」

フェルデナント

「いいえ、真実です」

福本

「…恐ろしい話だ」

65万と言えば、今回のドイツ侵攻作戦でソ連軍が動員した100万の3分の2に近い数字である。

フェルデナント

「ベルリン占領を主眼に置いていたソ連軍ですから、ここに部隊の集中投入されている事は間違いありません。以上、史実と現状を織り混ぜた結果、捕虜が増える可能性はある…と結論付けます」

福本

「…どちらにしろ、当分暇にはならないな」

まあ、覚悟のうえだが……

コンコン

福本

「ん、どちらさん？」

ヴィル

「ヴィルですよ。元帥」

福本

「ああ、どつどつぞ」

ヴィル

「失礼します」

フェルデナント

「おや、ヴィル少将。向こうはいいんですか？」

ヴィル

「ええ、それよりもベルリン周辺に簡易飛行場を作るから、見て来いと……」

福本

「あははは……うまーく、追い出されたな」

フェルデナント

「あははは、本当に」

ヴィル

「あははは、確かに」

……何故か3人揃って笑っていた。

ヴィル

「ところで、随分ソ連軍の戦車が見受けられましたが……」

福本

「ああ、全部ブン捕ったもんだ」



フェルデナント

「燃料が無くて動けなくなっていたものを鹵獲したんです」

ヴィル

「そうですか：自分はL3/33軽戦車と共に参りましたが……やつぱりデカイですね」

福本

「ああ、あのイタリアのタンケットね」

フェルデナント

「確か、あの豆戦車は救急車に改造されたそうですね」

さすがに弱体過ぎて一線任務には使えないが、後方支援任務には使える為、救急車になったのがL3/33軽戦車『セリエ』である。しかし、一応自衛用の機関銃を積んでいるが……。

福本

「まあ、鹵獲戦車もいつたい何両になるやら……」

捕虜の数さえ、未だ正確に把握出来て無いし……

ジリリリリン！

いきなり、部屋の野戦電話が鳴り響いた。

フェルデナント

「もしもし、なんだ？……なに、彗星が……？　しかし、第七艦隊の攻撃隊は今どこにも飛んでいないぞ」

福本

「どうした？」

フェルデナント

「対空監視からですが…被弾した彗星35型が飛んでいると…」

福本

「…確か、艦隊からは未帰還機の報告は無いぞ？」

この疑問に答えたのがイギリス生まれの航空参謀。

ヴィル

「彗星の設計図はドイツに譲渡され、ライセンス生産しています。ですから、ドイツ製の彗星では？」

福本

「ああ、なるほど…被弾していると言ったな？」

フェルデナント

「はい…不時着するかも知れません。行きますか？」

福本

「行くさ！ ドイツ軍…ロンメル中将に連絡してくれ。ヴィル、付いて来い！」

ヴィル

「はいはい」

次号へ

## 後始末と面倒事（後書き）

明日・明後日は定期更新の『士官候補生異世界奮闘記』を更新致します。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

## 有名人は多種多様

キュラキュラキュラキュラキュラキュラ……

福本とヴィルはL3 / 33 軽戦車改造救急車に乗ってベルリン郊外に来ていた。

ちなみに、編成は救急車2両にトラック2台。トラックには周囲警戒の為に歩兵一個分隊と部品回収後の輸送用である。

ヴィル

「あれですね」

福本

「あれだな」

胴体着陸したドイツ製彗星があった。どうやら火も出ていない。問題は中の人間だが……

福本

「よし、ゴー！」

福本

「……で、搭乗員の方はどうだ？」

軍医

「銃手は軽傷です。ですが……」

そう言うと、パイロットの方を向く。  
見ると、担架の世話になるのは嫌らしく、パイロットが手助けする  
衛生兵を引き剥がしている。

福本

「…元気なパイロットですね」

軍医

「…と思われるでしょうが、逆です。実は右足にひびが入ってます」

福本

「…へ？」

軍医

「もしかしたら骨折しているかも知れません…いや、タフなパイロ  
ットですよ」

いや…待て待て！

ひびか…骨折！？ そんな体調で、手助けしようとする衛生兵を引  
き剥がして、自分の足で歩こうとしているって……タフって話か！？

福本

「…モルヒネ中毒とか…そんな疑いは有りませんか？」

軍医

「無いですね。後でドイツ軍に問い合わせてみて下さい。もしかし  
たら、案外有名かも知れませんか？」

そうしようと、福本は思った。

ドイツ軍臨時司令部

ロンメル中将

「パイロット…ですか？」

福本

「ええ…すみません。お忙しい中なのに…」

福本とヴィルはその足でドイツ軍臨時司令部に向かった。

ともかくにも、パイロットはドイツ空軍所属のパイロットだから、早めに連絡しておく方が良い。

特に今回の様なパイロットは……。

ロンメル中将

「あははは、解りました。部下に空軍へ連絡させておきましょう…  
…アドミラルフクモト、時間が有りましたら、少しここで休憩して  
はどうですか？」

ヴィル

「…どうします、元帥？」

福本

「…じゃあ、確認が取れるまで…お邪魔します」

ドイツ軍士官

「司令官、パイロットの件ですが…」

ロンメル中将

「どうした？」

ドイツ軍士官

「はい、空軍に問い合わせたところ、向こうでは1人しかいないと…」

ロンメル中将

「そうか。で、誰かね？」

ドイツ軍士官

「はい……もしかしたら、司令官もご存知かも知れませんが……ハンス・ウルリッヒ・ルーデル中佐です」

ロンメル中将

「……ああ！なるほど、彼か…なら、彼は常に有名人と会う運命にあるらしい」

ヴァイル

「どう言う事ですか？」

ロンメル中将

「私は彼に一度会っているんだ。東プロイセンでね。今回と一緒に、不時着したところを私の部隊が保護したんだ」

福本

「…なるほど」



……となると、皮肉としか言い様が無い。

福本

「…さて、もうそろそろ退散しますか」

ロンメル中将

「おや、もうお帰りですか？」

福本

「すみません…自分、まだ一睡もしていないんですよ」

ロンメル中将

「そうですね…では、また機会があればアドミラルフクモト」

福本

「ええ…楽しみにしています。ロンメル中将」

おまけ

さすがに疲れた福本はあてがわれた部屋で爆睡していた。陸戦隊の人間達は敢えて福本の部屋には近付かなかった。1人を除いては……

福本

「…………今何時？」

そう言いながら、近くにあった時計を掴んだ。

福本

「…16時40分(ドイツ時間)…………」

え〜と、ここに帰って来てベッドに飛び込んだのが12時半少し前だから…………4時間10分しか寝て無い。

福本

「…………もう少し寝よう…………」

今の内に寝とかなないと、また誰かにとやかく言われそうだし…………。そして、目を睨り寝返りをうつった瞬間…………

福本

「…………？」

おかしいと感じた。

何かある…………と思い目を開ける…………マリータ添い寝していた。

ここまでは良い…………今までも同じ様な事があったからね…………問題はここから。

福本

「(…………あれ…………胸が見えるな…………いや、これは夢だ！ 夢に違い…………無いのか?)」

マリータ

「ん…………あ、おはよう」

……こんな状況でなければこれ程蕩けそうな笑顔も無いだろうが……  
いや、それは置いといて……

福本

「……マリダ、何してるの？」

マリダ

「んう……ダイスケ起こしに来たの」

福本

「……じゃあ……なんで素っ裸？」

マリダ

「それは……翡翠達に対抗してね……ほら、ここ、播磨の外だし……」

福本

「……」

マリダ

「だ、大丈夫大丈夫！ ベッドの中だからバレないし、下は見えて無いし……さすがに何も無しで裸はちょっと……」

……ああ、翡翠……余計な事をやったあいつをどうすれば良いだろう  
か……いや、その前に……

福本

「早く服を着てくれ！ 俺の理性が保っている間に！ 下手したら  
15・18禁越えて20禁にする気は無いし、する気も無いから早

く着てくれ〜！！！！！！！」

福本の叫び声が響き渡った。

次号へ

有名人は多種多様（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## リンとミハエル

ベルリン奪還後の戦局は連合軍側に傾いた。

イタリア方面から富嶽、B17、24、29爆撃機が飛来しソ連軍の頭上に爆撃の雨が降りかかった。

これにより、たちまちソ連軍の作戦行動が細くなった。

今やソ連も得意だった物量戦は、ソ連国内と占領地からの資源輸送を爆撃やレジスタンスの妨害にあって滞っている。

また、ソ連から戦地への輸送において、こちらも妨害が激しくあちこちで補給切れによる進撃が停止する様な事態になっていた。

また、ソ連軍の方でも次の作戦目標をキールにしようとしていたが……まさか海軍の存在を忘れていた訳では無いだろうか？

その頃……

8月4日 キール軍港

ミハエル

「う〜ん…あ〜〜！！ いや〜、第七艦隊の皆と会うのは2年振りだね〜、リン？」

リン

「……………そうだな」

読者諸君は覚えているか解らないので説明を加えると、日佐戦争（日本vsサブルム帝国戦争）時にドイツ派遣艦隊の一員として参加

したミハエルことミハエル・ホルツマン少尉（当時）とリンこと空母の艦魂グラーフ・ツェツペリンである。

2人はその後、無事に本国へと帰還した。

ミハエルは中尉に昇進し、陸上勤務やパイロットの教官など様々な異動話が舞い込んで来たが、頑として受け付けなかった。

今や愛着あるグラーフ・ツェツペリンを離れる気には成らなかったらしい。

ミハエル

「皆元気がなく…クレアやアリソンや吉田や片山…戦鷹や勇鷹に…海龍は相変わらずコスプレに夢中かな？」

リン

「……貴様、嬉しそうだな」

ミハエル

「そりゃあそうだよ。2年間もあつて無かつたんだよ？ それに向こうはアメリカ軍と戦つてたんだからさあ」

リン

「はあ…余りの忙しさに皆忘れていたのでは無いか？…まあ、私達など読者の記憶からも消されているかも知れないが」

ミハエル

「…リン、それは言ったらダメだよ。（…）」

出番あるだけマシなのに……。

若杉

「おう、どっかで聞いた様な声がすると思ったら、ミハエルとリン

「じゃないか」

ミハエル

「若杉に戦鷹！ うわゝ、2人共元気だったか？」

若杉

「元氣じゃあ無かったら、わざわざヨーロッパに来ないよ」

戦鷹

「久しぶりだね、2人共。ミハエルは中尉に昇進した？」

ミハエル

「あはは…昨日付けで大尉に昇進さ。ソ連軍が来たお陰でね」

若杉

「それはおめでとつ」

ミハエル

「ありがとう…しかし、そっちも随分有名になったな！ 今やドイツ国民の中で第七艦隊の名を知らない者はいないと言っても過言じゃないよ！」

戦鷹

「それは誇れる…と言いたところだが、元帥がなんと云うか…」

ミハエル

「あの人は相変わらず前線か…僕には到底出来ないよ」

若杉

「そりゃそつだ…ところで、出撃はどうした？ ドイツ海軍も航空



隊は出してるだろう？」

ミハエル

「愛機の機嫌が悪いのさ。だから出撃を止められた」

若杉

「そうか…なら、今から勇鷹に來ないか？ 勇鷹がカレーの味見をして欲しいそうだ」

ミハエル

「僕は良いよ。問題はリンだけだね」

リン

「…別に私は構わんぞ」

若杉

「じゃあ、決まりだ」

そう言うと、4人は勇鷹へと轉移した。

4人は勇鷹の部屋へと向かった。

中に入ると、若杉と戦鷹には見慣れた顔が2つあった。

若杉

「やあ、クリス少尉にワイズマン伍長。2人も勇鷹の誘いを受けたのか？」

クリス

「はい。人数が多い方が良いと言われたので」

ミハエル

「……アメリカ人とイタリア人？」

リン

「……なんでここに居るの？」

戦鷹

「簡単な話よ。実は……」

戦鷹が2人に代わって説明し始めた。

ちなみに、バーナード・ワイズマンはイタリア半島攻略戦で第七艦隊に攻撃して来た部隊の一機で、クリスが偶々撃墜した機のパイロットである。

その後、陣龍に救助され、治療を受けていたが、イタリアが降伏し（一時的だが）軍が解体、なぜかワイズマンはそのまま外国人志願兵に志願した。

最終的に福本のところまで上げられたが、福本の「別に良いんじゃないの」と言う鶴の一声で認可された。この為、一部では「クリス少尉の追っかけでは無いか」と言われる始末。

ワイズマン

「……作者、余計な事は言わなくていい」

ちなみに、元ネタは解る人は解る筈だ。

6人…勇鷹を加えれば7人…は世間話をしつつ、カレーを食べてい

た。

若杉

「ところで、リンは相変わらずだな」

リン

「…なにが？」

戦鷹

「ツンデレ」

リン

「こんな奴好きじゃない!!」

ミハエルを指差しながら早速否定。

勇鷹

「本当に変わらないね」

若杉

「それに比べたら、うちの参謀長は正直だな」

ミハエル

「マリーダ参謀長が？」

戦鷹

「最近、愛に餓えたのか福本元帥に迫り始めた」

勇鷹

「そうそう、今は何も無いけど、イタリア半島の際はコスプレで朝起こしてたしね」

ミハエル

「うわ…あの人も大変だ」

若杉

「それでも、あんまり周りは騒がないな。茶化しはするけどね……あれはあれで愛の表現だしな」

ミハエル

「あははは…僕にはいないな」

リン

「……………」

……………こんな世間話が続いた。

おまけ（またかい！）

翌朝

ミハエルは自分の部屋で寝ていた。

最近は慣れてしまったが、リンが毎朝毎朝起こしに来る。

彼にとっては目覚まし時計になってしまった朝のリンである。

リン

「こらー！起きなさい、バカミハエル！フライパンか百科辞典落とすわよー！」

今日も今日とて、酷い言い様で起こす。

ミハエル

「はいはい…今起きるから待つてよ……」

心の中で苦笑しながら、目を覚ますミハエル。  
しかし……彼は気付いた……

ミハエル

「……リン…君…服……」

リン

「あ、あんたの為に着たんじゃないんだからね！ 海龍に無理矢理渡されて着てるだけだからね！」

ミハエルは何度も目を擦った。

何故なら、リンがメイド服を着ていたから！

リン

「早く食堂行きなさいよ！ 機体の整備済んでるみたいだし……今日は出撃すると思うから！」

見事なツンデレメイドを見せるとリンは転移した。

残されたミハエルは右頬をつねってみると……痛かった。

ミハエル

「……夢じゃあ…無かったな……」

呆然としながらミハエルは呟いた。

次号へ

## リンとミハエル（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

その後……

8月5日……イタリアから向かっていた連合軍本隊がドイツへと到着した。

8月7日……連合軍はソ連軍によって占領されたベルリン以東のドイツ領土奪還作戦通称『ブーメラン』作戦を開始。

圧倒的な航空戦力を動員して、ソ連軍の頭上に鉄の嵐を浴びせかけた。

また同日、ソ連軍を混乱させるべく、日独英米六（第六大陸）の艦隊が占領されている元ドイツ領東プロイセン・リトアニア地方及び元ポーランド領沿岸に対し陽動作戦『家鳴り』作戦を執行した。

この2作戦によりソ連軍はどちらが本筋か激論を交わしている間にドイツ領内のソ連軍を次々と敗走・降伏させた。

そして、沿岸地域攻撃が陽動であり、ドイツ領内奪還が主眼と気付いた時には何もかもが手遅れであった。既に戦線は消滅し、部隊はバラバラ、指揮系統さえ失われており、どの部隊と連絡をとっているのかも解らない状態であった。

8月9日……元ポーランド領に存在するソ連空軍を弱体化させる為、『サンダーボルト』作戦を執行、ドイツ領空内での連日空戦で体的、精神的、そして戦力的に消耗していたソ連空軍に対抗する術は無く、ほとんどの機体が地上で残骸へと変わった。

この頃になると、史実で活躍したイギリス・アメリカ・ドイツのエンジニアパイロット達が活躍する様になるが、特に目立ったのは皮肉にも第七艦隊であった。

8月12日……ドイツに侵攻していたソ連軍がついにドイツ領内から駆逐された。圧倒的な航空攻撃と疲れていない連合軍の猛攻撃に



ソ連軍は屈した。

ちなみに、侵攻軍100万に対し、無事元ポーランド領内に退却出来たのは約15万であり、残りの約85万は戦死あるいは捕虜となった。

この頃になると、巨人ソ連と言えども長期に渡る戦争の疲労が蓄積し、ボロボロに近い状態であった。

また、国内・占領地域でも不穏な動きやレジスタンス活動が活発化し、今まで力で抑えていたものが戦争の疲労により、弱くなっていた。

8月13日 キール軍港

そんなこんながあつてやっと後方に下がった福本達に日本からある電文が届いていた。  
その内容は……

福本

「『更二砲兵一個連隊ヲ派遣ス』……連絡するの遅いだろっ」

そう言いながら、野戦重砲や特二式砲戦車を揚陸させる輸送船を見る。

「失礼ですが、福本海軍元帥と宮崎大将とお見受けしますが……」

宮崎大将

「うむ。君が指揮官の金光大佐かね？」

「はい。特設欧遣砲兵連隊指揮官金光恵次郎大佐であります！」

金光恵次郎大佐は史実では中国・ビルマ国境に程近い拉孟ラモウという街で1200名と共に守備任務に就き、昭和19年6月2日に数万の敵に対し3ヶ月以上抵抗し玉砕、戦闘後に蒋介石を称賛させた指揮官である。

彼は一兵卒から入隊し、下士官に志願、優秀な下士官を陸軍士官学校に短期入学させて将校に育成させる少尉候補者制度により士官へと昇進した、いわば叩き上げである。

その優秀さに目を付けた永田陸軍大臣と石原陸軍参謀総長が彼のヨーロッパ派遣を決定したのである。

金光大佐

「本官はハワイ攻略作戦で砲兵師団の一員として参加しましたので、皆さんと戦うのは2回目になります」

福本

「では、また、よろしくお願いします」

その頃……モスクワ

スターリンは小部屋で苦々しく報告書を読んでいた。起死回生を狙い決行したドイツ侵攻作戦はベルリンを奪還され、ドイツ侵攻軍は壊滅した。

失敗……大失敗である。

報告書から顔を上げると、壁を見る。

壁には新聞やスパイから入手した写真が貼られている。

宇垣首相、チャーチルなどの連合国の政治家から、山本元帥、永田陸軍大臣、石原陸軍参謀総長、アイゼンハワー、パットン、ハルゼー、ロンメル：などの主要軍人の写真である。

その中で特に目立つ様に貼られた人物がいた。

腰に軍刀、ホルスターにモーゼル大型拳銃、そして、同い年風の青髪的女性を連れた海軍高級将校。

福本である。

スターリンは特に福本が苦々しかった。

写真を見ると、自分の考えが読まれているかの様に思えるからだ。

それに、福本は自分とは真反対で、部下や周りから信頼されている人を信頼しないスターリンとは全く逆である。

だからこそ、スターリンは福本を苦々しく、そして恐れていた。

この直後、スターリンは福本を最重要暗殺目標に指定している。

また、福本に獎金首にされたのもこの頃である。

次号へ

その後……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 海龍プラン

戦後、福本は終戦20周年記念日に自伝を出版した。

自伝はその後、細かく書かれた物が書かれるが、この自伝で艦魂の事も書かれた。

その際、福本は自伝の中で「問題児がいたか?…と問われれば、それに近い艦魂が3人いた」と書いた。

その3人は酒飲みの和泉と飛驒<sup>フシントン</sup>、そして、海龍だと書いている。

特に海龍は「手を焼かされながらも面白い奴だ」と書かれ、ある工ピソードが書かれていた……。

1944（昭和19）年8月15日

キール軍港 戦艦播磨長官公室

福本

「ふう……終わった」

執務机には前線に出ている溜まった書類や報告書の処理済みが置いてあった。

ふと時計をみると、僅か1時間27分で終わらせていた。

福本

「あんなに慣れなかったものが慣れるとは………解らんだな……」

苦笑しつつ、処理し終えた書類や報告書を見る。

海龍

「長か〜ん！ 失礼しま〜す！」

福本

「失礼するんやったら、帰ってな〜」

海龍

「はいな〜……って、長官！」

福本

「……普通に反応したな」

海龍

「まさか、吉本ネタでくるとは思いませんでしたよ！」

福本

「で、用事はなんだ？ 俺の所に来るんだから、余程の事だろう？」

海龍

「え〜とですね〜、この前、何かやる時は自分で許可願いを持って来いって言いましたよね？」

福本

「ああ、言ったな」

普通の物と混ぜられて、気付かずに決裁したら大変な事になるし。

海龍

「と、言うことで！ 自分で届けに来ました！」

福本

「…感心事だな」

明日は雪だな……しかも大荒れ間違い無し。

海龍

「…余程な事、考えませんでした？」

福本

「いいや、なにも」

海龍から受け取った物は多少分厚かった。

ただ、上に認可書、後は今回のプランを纏めた物だろう。

まあ、まずはプランの方を見るのが先だ……どうやら前回の事で多少懲りたらしい。

そう思いつつ、福本はプラン書の表紙を見た。

その瞬間……福本は海龍が余り懲りて無い事を知った。

福本

「…海龍、これ、なに？」

海龍

「え、表紙に書いてあるじゃないですか？」

さて、表紙には……

『海龍映画製作プロジェクト ～コスプレ付き～』

……と書いてあった。

福本

「海龍……ここは東方映画撮影所じゃあ無いんだぞ……！」

艦内中に福本の高音響が響き渡った……

同長官私室（寝室）

マリイダ

「……だから、あんな大声出したの？」

福本

「うん」

クスクス笑いながら、海龍のプラン書を見るマリイダと、アイマス  
ク代わりにキンキンに冷えたタオルを顔にあてて、ベッドに寝転ぶ  
福本。

マリイダ

「で、どうするつもりなの？」

福本

「それを決める為に君を呼んだんだよ」

寝転びながら福本は言った。



マリイダ

「参謀長として？」

福本

「…参謀長として、パートナーとして、愛する人として……では不満かい？」

マリイダ

「…セリフが臭い」

福本

「ごめん…まあ、実際手に余り過ぎる問題なんだよね」

マリイダ

「確かにあなた1人だと、これは採択出来ないわね」

海龍のプラン書を見て苦笑するマリイダ。

福本

「まさか…河内とエターナルを主役するとは……あいつはここを宝塚にする気か…」

やれやれと思いつつ寝転びながら頭に手をあてる。

マリイダ

「それで、大介の意見は？」

福本

「…別段問題は無いから認可しようと思うんだが……大丈夫かな？」

マリダ

「大丈夫大丈夫。何かあったら河内のファンが海龍を襲うから！」

福本

「……………え？」

今、物凄くヤバい事言いませんでした、マリダさん？

マリダ

「それより、僅かな期間で全部撮れるかしら？」

ちなみに、福本やマリダがこんなにゆっくり寛いでいる理由は、次の作戦への準備期間中であるからだ。開始は一週間後である。

福本

「海龍の事だ。許可さえ出れば今日にでも始めそうだよ」

マリダ

「なら、心配しなくても大丈夫ね」

福本

「まったく……………どうなる事やら」

次号へ

## 海龍プラン（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

映画撮影・恩師の来訪

8月16日 キール軍港

戦艦播磨後部甲板

河内は手すりに身を預けていた。  
どこか遠くを見つめるかの様に……

モンタナ

「やあ、河内：何をしている？」

河内

「…モンタナか」

モンタナ

「…また、あの子の事を考えていたな」

河内

「…頼む…その事を言っな」

モンタナ

「愛する者を思い出す…人として当たり前の事だ…例え敵国の人であつたとしてもだ」

河内

「……………」

モンタナ

「やはりか……君は隠し事は下手だ。特に色恋沙汰はな」

河内

「……敵わないな」

モンタナ

「好きになったものは仕方がない。後は心持ち次第さ」

河内

「……君が羨ましい」

モンタナ

「おや、私から見れば、君の方が羨ましい。君は普通に歩くだけで、幾人ものお嬢さん達を虜にしてしまうからね」

このモンタナの発言に河内は笑うしかなかった。そしてつられる様にモンタナも笑った。

海龍

「カート……!」

突然、海龍の声が聞こえた。

見ると、海龍はメガホンを持って指示を出す……監督をやっている。

海龍

「さっすがモンタナさん! コスプレだけじゃなくて、演技力もあつたんですね!」

福本

「海龍…それは失礼だと思うぞ」

モンタナ

「ああ、そんな事、気にしない気にしない！」

……ここまでくれば読者も察しが付くだろう…つまり、前号の海龍プランを認可した映画製作である。

河内

「ふう…」

普段溜め息を吐かない河内が着ている軍服を開襟して溜め息吐く。

マリータ

「お疲れ様」

河内

「あ、ありがとうございます…マリータ様」

マリータ

「も、様付けは無し！」

河内

「は、はあ…」

福本

「よう、やはり慣れないか」

河内

「福本様：あのギャラリーをなんとか出来ませんか？」

福本

「無理」

即答だった。

見ると、第2艦橋や甲板、近くの艦艇などにギャラリーがわんさという。

十中八九ほとんどが河内のファンである。

福本

「君の名前を出せばいいかも知れないけど……俺が出て行くと大変な事に成りかねないしね」

ファンと言うのは時に恐ろしいからね。

マリイダ

「ファンサービスに微笑んでみたら？」

河内

「は、はい……」

立ち上がると、近くのファン達に微笑みかける河内。

バタバタバタバタバタバタバタバタバタバタバタ！！

微笑みかけられたファンの1団が一斉に倒れた。

マリイダ

「……あちゃ〜…圧倒的悩殺力……」

福本

「な…み、三原！ 三原はどこだー！！？」

三原

「はいはいはい！ 今行きます〜！！！」

その場は一時騒然となった……。

福本

「お疲れ様、三原」

三原

「アメリカやイギリスの病院船達が手伝ってくれましたから……まさか、河内のファンを診ることになるとは思わなかったです……彼女がうわ言で何言ってたか解ります？」

福本

「…なんか予想出来そうなんだけど……」

三原

「…多分、予想通りかと…『河内様に微笑みられてあの腕に抱かれるなら、死んでもいい』……と」

福本

「…ああ、恐ろしや河内ファン…下手したら何が起こるか解らんな  
最果て……撮影が終わるまでに、いったい何回こんな事が起きるだろうつか……」



ミア

「長官、お客様です」

福本

「お客様？ 誰？」

ミア

「木村昌福少将です」

福本

「木村教官が？……教官は第二機動艦隊だから本土の筈だけど……  
わかった。マリィダ」

マリィダ

「オッケー。こちらは任しといて」

艦内長官公室

福本

「お久しぶりです、木村教官」

恩師との久々の再会に福本は敬礼で出迎える。

木村少将

「あっはっはっは！ 今は私が先に君へ敬礼をしなければ成らないんだがな」

福本

「いえ、階級は下でも教官は教官です。それに教官の方が年長でありますから」

木村少将

「変わらん」

福本

「変わりたくはありません…ところで、教官は何故ヨーロッパへ？」

木村少将

「日本からの輸送船団護衛の命を受けてな、長駆やって来たわけさ。本土の方は暇になったしな」

福本

「では、次の輸送船団でお帰りになるんですね」

木村少将

「いや、帰らん」

福本

「え!？」

輸送船団護衛で来たのだから、輸送船団護衛で戻ると思ったのだが…違うらしい。

木村少将

「行く命令は受けたが、帰る命令は受けとらん…それどころか、君への命令書を預かってきたぞ」

福本

「はい？」

ますます訳が解らない。

帰りの命令は無く、しかも時間のかかる船舶を使って命令書を木村教官に預ける……意図が解らない。

とにかく、木村教官から命令書を受け取り一読する……と全ての疑問が解けた。

福本

「教官、命令書の中身はご存知ですか？」

木村少将

「いや、知らない。それに命令書は君宛てだ」

福本

「では読んで下さい。教官も関係する事ですから」

受け取った木村少将が一読するとニヤリと笑った。  
ちなみに命令書の中身はこうである。

『木村昌福少将以下指揮下の水雷戦隊を第七艦隊の指揮下に編入する。海軍軍令部総長山本五十六元帥』

木村少将

「なるほど…君なら安心して命を預けられる」

福本

「それは過度の期待だと思えますがね」

木村少将

「いや、本当に君なら命を預けれる。実際多くの仲間が君に命を預けているじゃないか」

福本

「…確かに」

コンコン

その時、ドアがノックされた。

福本

「どうぞ」

神谷

「失礼します」

福本

「神谷…どうした？」

神谷

「はい、また例の『幽霊』です」

福本

「またか…」

木村少将

「『幽霊』？」

福本

「はい。我々はソ連海軍の潜水艦と見ておりますが…」

木村少将

「掃討部隊を出せばいいんじゃないか？」

福本

「そうはしているんですが……2隻以上で張り付いていて……それになかなか尻尾を出さない狡猾な奴です」

木村少将

「そうか……ならばそいつ等は私が退治しよう」

福本

「教官がですか？ ですが…」

木村少将

「我々もただ本土にいた訳ではない。それにそう言った奴と戦うには長年の勘が役に立つ……いいだろう？」

福本

「…わかりました。すみませんが、よろしく願います」

木村少将

「なに、さつき君の指揮下に入ったんだ、遠慮はいらんよ」

次号へ

映画撮影・恩師の来訪（後書き）

明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新いたします。お楽しみに。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 『幽霊』討伐戦

その日（8月16日）の深夜

バルト海

日没直後、キール軍港から木村昌福少将率いる水雷戦隊は出撃した。もちろん、目的は前号で宣言した『幽霊』達の掃討である。

編成は旗艦の軽巡洋艦阿賀野、夕雲型駆逐艦早波、浜波、沖波、岸波、朝霜、早霜、秋霜、清霜の8隻である。

木村水雷戦隊貴下の夕雲型駆逐艦は日本を出発する前に改装が施されていた。

まず、最近開発した最新のソナー・レーダーを搭載、2基ある内の後部に搭載している四連装魚雷発射管と魚雷装填装置、予備魚雷を降ろし、代わりに積めるだけの爆雷をスペースが有る限り1個でも多く積み込んだ。

この為、艦によって搭載数は違うものの、平均70発以上の爆雷を搭載する事に成功した。

阿賀野も同様に魚雷発射管と魚雷装填装置、予備魚雷を降ろし、爆雷を60発を搭載した。

（ちなみに、この世界の阿賀野型巡洋艦は8cm高角砲を4基搭載している。）

また、阿賀野、駆逐艦にもヘッジホッグを装備した。こうして、木村水雷戦隊は対潜兵装を強化し、佐世保を出港、東シナ海 台湾海峡 南シナ海 マラッカ海峡 インド洋 アデン湾 紅海からスエズ運河を抜け、地中海に入る。

そして、地中海からジブラルタル海峡 大西洋 ドーバー海峡 キール運河を抜けた木村水雷戦隊は銃弾一発を撃つ事も無くキール軍

港へ到着した。

阿賀野艦橋

艦橋は薄暗い。

下手に照明を撞けると闇夜に提灯と言うやつで、余りにも目立ってしまう。

だから、余り照明は撞けていない、その為、艦橋は薄暗かった。そんな薄暗い艦橋で木村少将と艦魂阿賀野は定位置にいた。

阿賀野

「『幽霊』と呼ばれる潜水艦は何処を基地にしているんですか？」

木村少将

「フィンランド湾の奥、サンクトペテルブルク軍港を基地にしている。昼間は適当なところに隠れて、夜に現れるそつだ」

阿賀野

「だから『幽霊』なんですな」

木村少将

「まあ、それも今日までだがな」

余裕と言わんばかりに、自慢のカイゼル髭をしごく木村少将。しかし、余裕は持つても油断は名将木村はしていなかった。

現に阿賀野の聴音室ではベテランの古参兵が何も聞き逃さんとばかりの表情で耳のイヤホンに全神経を集中している。

また、見張りの方も何も見逃すまいと暗い海上を見張る。



参謀

「しかし、餌に食い付きますかね？」

木村少将

「単独、しかも低速航行の巡洋艦をみたら、誰だって狙いたくなる。同じ質問を福本にしたら、あいつも同じ事を言うさ。ただ、あいつは戦艦を囷に使うがな」

そう答えると、再び前の暗い海を見る。

確かに、無警戒の戦艦や巡洋艦が前にいれば、誰だって狙いたくなる。

しかし、ベテランや勘の良い艦長は逸る心を抑えつけ慎重になるか、警戒する。ソ連海軍はほとんどが素人連中の集まりである。

何せ史実なら、出撃して無事に帰還すれば勲章ものだった程だ。それほど変わらないこの世界のソ連海軍なら引っ掛かる可能性は大きい。

その報告は夜12時を過ぎた瞬間入った。

士官

『こちら聴音室！ 右舷前方から注水音！』

伝声管から緊張に満ちた報告が届く。

しびれを切らしたか、あるいは格好の獲物と見たか…どちらにしろ、敵は仕掛けてきた。

艦長

「見張りに通達！ 敵は通常の空気魚雷だ！ 雷跡はかなり目立つぞ！」

日本海軍なら同口径でも雷跡が出ず強力な酸素魚雷を使用するが、海軍後進国のソ連海軍がそんな高性能魚雷を作れる筈がない。

水兵

「2時方向より雷跡2本！」

艦長

「全速前進！」

戦艦と違いスピードを重視する軽巡洋艦はそれほど時間がかからずに速度を上げる。

しかも、阿賀野の乗組員は実戦経験者が多い。だから、すんなりと魚雷を回避する。

参謀

「かかりましたね」

木村少将

「駆逐艦の方はどうだ？」

参謀

「撃ち込んだ方向に向かっています」

潜水している潜水艦の海上速度の半分程しか出ない。これで位置がバレれば潜水艦は駆逐艦に嫌と言うほど爆雷とヘッジホッグを叩き込まれる。

参謀

「2隻目は慎重になりますね」

木村少将

「味方が位置を暴露されたんだ、慎重にもなる。長期戦になるな」

しかし、長期戦にはならなかった。

水兵

「前方より雷跡！」

艦長

「面舵一杯！」

どうやら、襲撃を免れて安心したと判断したもう1隻が発射したの  
だろう。

しかし、太平洋はそんな甘ぢょろい戦線では無い。

向かって来る2本の魚雷を紙一重で回避する。

木村少将

「艦長。このまま前進し、潜水艦を沈めるぞ」

艦長

「はい」

元の進路に戻った阿賀野は潜水艦のいると思われる場所に向かう。

士官

『こちら聴音室。僅かですが音波捉えました。しかし、直ぐに機関  
を停止した模様』

敵の考えはこうだ。

爆雷投射機は後ろにある。爆雷を落とすには一度自分の真上を通るしか仕方ない。

その間に、何かに紛れよう……と考えているのだろう。

しかし、そんな考えは今や昔……彼らはそれを直ぐに知るのだ。

艦長

「ヘッジホッグ、てえ！」

バシュ！

前投射式のヘッジホッグは多数を小型爆雷を投射し、一発でも反応すれば一斉に他の小型爆雷も爆発する。これがヘッジホッグである。

ババババババババン！

士官

『こちら聴音室……音波消えました』

数分後に伝声管からの報告だった。

参謀

「各艦から、異常無しの報告がきてます」

木村少将

「そうか……他にいたとしても、立て続けに2隻も沈めれば向こうも警戒するだろう。引き上げるぞ」

阿賀野

「待って下さい」

木村少将

「どうした、阿賀野？」

阿賀野

「上手くは言えません……ただ、左舷に助けを求める思いがあるんです」

木村少将

「艦長、探照灯を撞ける」

艦長

「は、探照灯照射！」

パシャ！パシャ！

夜の闇に伸びる2つの光の筋。

暗い海上を何かを探す為に探照灯が旋回する。

そして、その内の1つが止まる。

水兵

「海上に何かあります！……ボートです！ 大勢乗ったボートがいます！」

見張りの水兵が叫ぶ。

木村少将も艦長も参謀も、左舷に双眼鏡をそちらに向ける。

確かに、大勢の人が乗ったボートが浮かんでいる。

参謀

「…あれは…いつたい…」

木村少将

「艦長、ボートに近付き彼らを収容せよ！」

艦長

「はい！」

直ぐ様、内火艇が降ろされ、内火艇がボートに乗る人間を慎重に乗り移す。

そして、ある程度まで乗り移すと今度はボートにロープをかけてボートを曳航する。

内火艇とボートを回収した木村水雷戦隊はキール軍港へと帰港した。

次号へ

『幽霊』討伐戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 教官と教え子

8月17日 キール軍港

戦艦播磨艦内長官公室

福本

「ありがとうございます、木村教官」

木村少将

「ははは、構わん構わん。命令通り、『幽霊』退治をしたまでだ」

木村少将と阿賀野は播磨の長官公室に来ていた。

福本

「いえ、それにお見事な手腕でしたよ」

木村少将

「構わんと言うのに……ところで、阿賀野に收容した者達は何者だった？」

福本

「ポーランドからの亡命者達でした。それに関してもお礼を言います」

木村少将

「その事なら、礼は阿賀野に言ってくれ。最初に彼らを見付けたのは阿賀野だからな」



福本

「そんなんですか…ありがとうございます、阿賀野」

阿賀野

「あ、え、はい…どうもです」

福本が頭を下げると、阿賀野もつられて下げる。

木村少将

「わっはっはっは、良かったな阿賀野。世界でも有名な福本元帥に頭を下げてもらって」

阿賀野

「…あ〜〜！」「ごめんなさい〜」

福本

「教官…あ、そうだ」

何かを思い出したのか、福本は机の上にある物を取る。

福本

「教官、辞令が届いています。『ヨーロッパ派遣艦隊入りに際し、木村昌福少将を中将に昇進す』とね」

そう言っつて辞令と共に真新しい階級章を渡す。

木村中将（昇進したので）

「…良いのかね？」

福本

「忘れました？ ヨーロッパ派遣艦隊は一階級特進ですよ。今は教官のしか用意出来ませんでした。今日中に指揮下の水雷戦隊全員に一階級特進の辞令と階級章が届きます」

木村中将

「いやはや…海兵（海軍兵学校）の成績がビリだった人間が中将とは…」

福本

「そんな事言ったら、自分はその資格が無いのに元帥ですよ？」

木村中将

「ん？ そうだったか？」

福本

「…当たり前ですよ」

福本は苦笑し、木村中将はそうだったなと言いながら笑う。

木村中将

「ならば、間宮で予約をとっておいて正解だったな」

福本

「間宮で予約……ですか？」

阿賀野

「実は木村中将、ここに来る前に間宮で食事の予約をとっていたんですよ」

木村中将

「昨日は暇がなかったが、久しぶりに教え子と飲む飲も悪く無いと思つてな！ 間宮ですき焼きを予約しておいた！ さあ、行くぞ！」

福本の襟首を掴むと意気揚々と長官公室を出て行った。

給糧艦間宮艦内士官室

給糧艦間宮はもしかしたら、工作艦明石同様に名の知られた特務艦かも知れない。

戦前・戦中に多数の軍属職人達が腕によりをかけて作る『間宮製』は数多の将兵の心を和ませただろう。

そんな間宮は木村水雷戦隊と共にヨーロッパに来ていた。

そして……

グツグツグツグツグツグツ……

ほんわかと漂う美味しそうな匂い、鍋の中で煮えられる牛肉、ネギ、豆腐、糸こんにゃく……近くには定番の卵とご飯……旨そうだ。

福本

「やらんぞ、作者」

わかつとるわい！

マリーダ

「すき焼き、すき焼き」

木村中将

「もう、そろそろだな」

阿賀野

「わーい、いただきまーす」

ちなみに、この士官室は貸し切りなので、余り人が入って来る心配はない。

だから、艦魂が見えない人が入って来て、お箸とお茶碗が浮かんでいるのを見て大騒ぎになる……なんて心配はいらない。

ちなみにマリーダとは上甲板に上がる途中で出会ってそのまま連れて来た。

木村中将

「そう言えば、播磨の方が騒がしかったが…何かやつとるのか？」

マリーダ

「海龍が映画撮影をやっていて、河内目当ての艦魂達が騒いでいるでしょう」

阿賀野

「かひふうさんがへいふあふえすか？（海龍さんが映画ですか？）」

福本

「口の物を呑み込みなよ、阿賀野。まあ、採決したのは自分ですけど」

木村中将

「お前は士官学校の時からそうだったな。他人の趣味には口を出さ

ず、危なくなったら直接関係無くても助けに行っただけ」

福本

「そうでしたっけ？」

木村中将

「そうだった…それに夏になり、街で夏祭りがあると知ると、何人か誘って行っていた」

マリダ

「行きましたね…今年には行けないけど」

木村中将

「……ところで2人は何時結婚するんだ？」

福本・マリダ

「は、はい!?!」

突然の質問に2人の箸が止まる。

木村中将

「なんだ？ 国の戦後は考えても、個人的な戦後は考えてなかったのか」

福本

「あ、当たり前と言うか何と言うか……まだ決まってるませんよ!」

木村中将

「そうか…なら、山本元帥を司会に、私が仲人を勤めようか？」

大笑いしながらそんな事を言った木村中将だった。

次号へ

## 教官と教え子（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ポーランド解放作戦

8月22日 午前4時過ぎ

ドイツ・元ポーランド国境

金光大佐率いる特設ヨーロッパ派遣砲兵連隊は元ポーランド国境に展開していた。

もちろん、日本軍だけでなく、イギリス、ドイツ、アメリカなどの砲兵部隊が国境周辺に展開している。

ポーランド解放作戦……通称『シューティングスター』作戦と名付けられた……で、連合軍は一挙にポーランドを解放し、冬の到来前……出来れば10月前まで……に元ソ連・ポーランド国境までソ連軍を押し戻そうと考えていた。

これは、ソ連軍が再びフィンランドに侵攻する事を察知し、フィンランドに回される兵力を出来るだけソ連・ポーランド国境に回させるとゆう連合軍の意図もある。

そして、金光大佐は腕時計を見た。

午前4時30分……作戦開始まで、あと1時間半あった。

1時間後……バルト海

何もなかった海上に突如、鋼鉄の塊が浮上した。しかも8つ。

そして、ハッチが開き、ニーナと宮木が飛び出す。

第七艦隊指揮下の潜水戦隊……伊400潜隊だ。



二一ナ

「……異常は無いわね。晴嵐用意！ 砲術員は配置に就け！」

バタバタ！

指示の下に担当員が配置に就く。

航空要員は晴嵐を組み立て、砲術員は後部に設置された40口径14cm砲の防水カバーを外し、砲撃準備に掛かる。

宮木

「海中には伊700潜隊があります。例えソ連のバカに見付かっても大丈夫でしょう」

零

「それだと…見付かった私達がバカみたいに聞こえるんですけど…」

宮木

「……気のせいよ」

二一ナ

「まあ、私達の任務は陽動……前が騒なら今回は静のね」

宮木

「『幻惑』作戦と名付けられましたからね。前回の様に艦隊が出て来る…と思わせる作戦」

零

「それなら、通常潜水艦と潜水空母を持つ私達の出番です」

二一ナ

「まあ、私達は私達でやる事をやるだけよ」

女性水兵

「艦長、副長。晴嵐の用意できました！」

宮木

「僚艦からも発進準備が整った様です」

二一ナ

「攻撃隊発進！」

待つてましたとばかりに、晴嵐改や強風改がカタパルトに載せられ射出されていく。

それを作業の為、甲板に出ていた乗組員達が手を振って見送る。全機を射出し、二一ナは腕時計を見た。

午前5時50分だった。

そして……時計の針が午前6時を指した瞬間……国境の砲兵部隊は砲撃を始め、晴嵐改・強風改の攻撃隊と伊400潜隊は陽動攻撃を開始した。

夜が明けると、待つてましたとばかりに、日米英独の艦載機から中型爆撃機までの大編隊が国境沿いの防衛線を吹き飛ばす。

同じ頃、ソ連軍の主要飛行場の上空に富嶽、B17、24、29などの四発重爆が護衛を引き連れ襲い掛かる。

ソ連軍戦闘機が必死に駆け上がるが、独特のエンジン音と共に飛来した火龍に迎撃される。

今までイギリスで慣熟訓練をしてきた火龍のパイロットが先陣をきって襲い掛かる。

レシプロ機も負けるものかと襲い掛かる。

滑走路にクレーターが出来、ソ連軍戦闘機が墮ちてゆく。

連合軍地上部隊が動き始めた。

国境を越え、防衛線があつた場所を通過した。

散発的な抵抗もあつたが、銃弾一発飛んで来た方向に銃砲弾100発以上が飛んで行く。

こんな事をされたらあつという間に制圧だ。

難なく防衛線は陥落した。次はソ連領ポーランドの陥落だ。

次号へ

## ポーランド解放作戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 経過状況（前書き）

なかなか早く書けましたので更新致します。  
次号は特別編の予定です。

## 経過状況

8月29日

ポーランド解放作戦を開始して1週間が経過した。連合軍の進撃は順調である。

それもその筈、制空権は連合軍の手内、補給線の1つである鉄道の確保も順調、また、ポーランド国内のバルチザンやレジスタンスの協力による結果だった。傀儡政権と軍により、ポーランド国内の抵抗勢力は無きに等しい……とソ連軍も考えていた様だが、そんなのは甘い考えである。

一度：ソ連との緩衝とは言え…独立を認められた祖国を蹂躪されて黙っているポーランド人は1人もいない。

彼らは何時かイギリスに亡命したポーランド軍が再び祖国に帰って来る事を固く信じ、地下で準備を進めていた。

そして、ポーランド軍は連合軍を引き連れ…しかも、日露戦争、ノモンハン事件、満州防衛戦と数々の帝政ロシア・ソ連との戦いに勝利してきた日本軍も参加していた。

これに解放された街や村では大手を振って連合軍を迎い入れた。

また、撃墜された爆撃機・戦闘機のパイロットや搭乗員がバルチザンやレジスタンス、一般人により救出されていた事も多々あった。

こうして、ポーランド人の協力は連合軍にとってありがたく、ソ連軍には…言わずとも解ろう。

そんな住民感情の結果はスターリンに伝わる事は無い。

それよりも、ソ連軍敗走とゆう事態にしか目がいかない……と言うよりそつちが重要だからだ。

ポーランド国内

シュナイデミュール

第七陸戦隊はシュナイデミュールとゆう街で小休止していた。

この街に入った時は、通りに人っ子1人もおらず、シーン…静まりかえっていた。

これに対し、持参していた日本・ポーランド国旗と同伴していたポーランド軍が呼び掛けると、漸く安心したのか、あちこちから人々が出て来た。

フェルデナント

「地元住民によりますと、ソ連軍は慌てこの街から撤退したそうです。余程切迫詰まっていたんですね」

福本

「ワルシャワの防備を固めるつもりだろう。ソ連軍ならそうする」

あえてゆうなら、ワルシャワの死守こそがスターリンの至上命令かも知れない。

フェルデナント

「ところで、本日はここまでとし、この街の周辺で休もうと思いますが…」

福本

「それについては君の案件だ。好きな様にしてくれ」

フェルデナント

「わかりました」

そう言うと敬礼してどこかに行ってしまう。

周りを見ると、数台の戦車、装甲車が近くに車体を休めている。

その内の一台、大沢がドライバーを勤める魔改造マチリダがいた。

そして、そのマチリダに物珍しそうに子供達が集まり、盛んに大沢に何か懇願している。

多分、戦車に乗せてくれと言っているのだろう。

大沢の顔が困った様に福本の方を見る。

フツと笑うと、マチリダの方に近付き、男の子を1人マチリダの車体へと乗せる。

乗せた男の子が嬉しそうに笑った。

そのまま同じように子供達を車体へと乗せてやる。

大沢

「すみません」

福本

「いや、いいんだよ」

笑いながら言う。

大沢

「街の人…笑顔ですね」

福本

「そうだな…子供達もな」

大沢

「余程、苦しかったんですね」



福本

「最低限、息苦しかったただろうな…顔を見ればわかる」

それが当たり前になってはダメなのだ…人は笑顔の方が良い。

マチリダ

「だからといって、私の体を遊び道具にされるのは堪りませんわ」

福本

「それを子供達に言うのはどうかね」

今の子供達にとってはかっこいい物にしか写っていないのだ。

マチリダ

「それにベタベタ触られるのも嫌ですわ」

福本

「…文句が多いねえ」

大沢

「ところで、マリーダ参謀長は？」

福本

「近くにいた妊婦さんがたいへんそうだから送ってあげるって、何人か連れて送って行った」

大沢

「付いて行かなかったんですね」

福本

「フェルデナントと話してたんだ」

マリィダ

「大介！！」

福本の下の名前を叫びながら、マリィダ登場。

マチリダ

「…噂をすれば影…」

福本

「なんだ、マリィダ？ そんなに慌て？」

マリィダ

「に、妊婦さんが…産気づいたの！」

福本

「……つまり…産まれそう？」

マチリダ

「産まれそう、じゃなくて産まれるの！」

福本

「……軍医と衛生兵を呼べー！！！」

その後、駆け付けた軍医と衛生兵達の協力により、無事に男の赤ちやんが生まれ、母子共に健康だった。

その時、福本は……

「授かりし

幼き命

ただ思う

平和であれと

切に願わん」

……と、詠んだそうだ。

次号へ

## 経過状況（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 特別編 第七艦隊の異変!?

(この作品は時系列は合わせておりますが特別編なので、本編とは別物とお考え下さい。)

ある日の事……

ドイツ キール軍港

戦艦播磨

福本はぐっすりと寝ていた。

普段、起床ラッパ前に起きては、愛用の軍刀を馴らし程度に振るのが……場合によって中断した事はある……日課である。しかし、その日の目覚めは強制的だった。

ドンドンドンドンドン!

遠地

「福本! 起きろー!」

福本

「……ふがあ?」

長官公室から長官私室に入るドアを乱暴にノックしなければいけない緊急事態でも起きたか?

とにかく、掛けてある上着を着ると長官私室のドアを開ける。

福本

「なんだ、遠地？ こんな朝早く……」

マリィダ

「ダイスケ〜！」

ガバツ！

朝も早い内にマリィダに抱き付かれるとは……しかも、公共前で……しかし、何かおかしかった。よくく見てみると、マリィダは某ロボット漫画の白いプラグスーツ……しかし、何時もなら笑いながら抱き付くのに、今日は助けを求めるかの様な抱き付き方……

福本

「……遠地、はっきり言ってくれ……何が起きた？」

今更ながら気付いたが、遠地の上着を千歳が羽織っている。チラリと見える限りだと、千歳は白のスクール水着……？

遠地

「いや……実はな……女性乗組員の全員が……マリィダや千歳みたいな状況なんだよな〜」

福本

「……………はあ？」

10分後……播磨艦橋

福本

「よし、じゃあ、話を簡単に纏めると……マリィダ、千歳、ラフィール、神谷、ミア、そして尾崎さんは何時も通り服を着て、ラフィール、神谷、ミアは艦橋で、千歳とマリィダは部屋で軍服がそれぞれ着ているコスプレになっていることに気付いたと……」

艦橋に居るジント、新沢を含めた全員が頷いた。

ラフィール

「しかも、予備の軍服までこれに変わっています!」

メイド服を着た播磨艦長ラフィールが持っているメイド服を見せる。

ミア

「私のところも同じです」

巫女服を着たオペレーターのミア。

神谷

「うう……蒼紫様なら良いのに……他の人は嫌です」

忍者家系に生まれといて何を言っただかと思う通信参謀にして、ナース服姿の神谷。

尾崎

「私は従軍記者なのに、何で私も巻き込まれてるんですか!?!」

某非公式部活の団長が通う某高校の制服を着る尾崎。

遠地

「気付いた桜が俺の所に飛び込んで来た時は、正直、お前をおちよくつたのを後悔した」

福本

「そりやどーも……で、どうなってんだ？」

播磨

「原因不明……現在調査中……これだけしか言えません」  
某ガ ダムの某連合軍軍服の播磨。

福本

「男の軍服に異常は無し……さてはて、奇妙な事件だ」

新沢

「あの……海龍の仕業では？」

海龍

「私の仕業じゃありません」  
「今度は阪神電鉄の車掌服（女性用）を着た海龍。」

ジント

「……一番の犯人がリスク上から消えましたね」

いくら海龍もコスプレ関連については嘘は言わない。

福本

「……訳が解んない」



ミア

「あ、長官。作者さんからお電話です。一番でございませう」

福本

「ああ。もしもし、作者？」

新米士官

『…そっちは大変そうだね』

福本

「当たり前だ。で、あんたの仕業か？」

新米士官

『違うわ！ まあ、訳はわからんが、どうやら次元間の接触具合が原因の様だ』

福本

「……………はあ？？」

新米士官

『つまり、次元と言う歯車の噛み具合が問題で、女性や艦魂達の軍服が変化した様だ…まあ、1日経てば元に戻るだろう』

福本

「…わかった。ありがとう。じゃあ」

そう言つと、受話器を元に戻した。

福本

「まあ…何も無い事を祈って1日を過ごすか」

遠地

「その方が良いらしいな」

海龍

「じゃあ、私は各艦を回って永久保存版を写真に収めてきます!!」  
止める暇も無く転移した海龍。

マリータ

「…元気よね」

福本

「コスプレ写真を撮るのが生き甲斐みたいな奴だからな」  
あえて放置する事にした福本達だった。

しかしだ、これで無事に1日なんか過ごせる訳が無く……

ミーア

「……あの、長官？」

福本

「なんだ、ミーア？」

ミーア

「…高速で接近する機影を探知…本艦に向かい接近中」

福本

「本艦に？……どうゆう事だ？」

直ぐに双眼鏡を使い、窓から外を見る。  
すると……一発で相手の正体が解った。

福本

「あれは…翡翠の専用機！　しかし…いったい…！！」

相手の目的が解った瞬間、福本は心の中で舌打ちした。  
今回の様な人為的原因では無かっただけに、まさか翡翠が飛んで来るとは思っていなかったからだ。

福本

「対空戦闘！　翡翠機を近付けるな！！」

ジント

「ダメです！　戦闘配置に就いていない為、撃てません！」

福本

「…くつそー！！」

悲鳴に似た叫びに福本も思わず叫ぶしか無かった。

ミア

「翡翠機、右に旋回…後部甲板に着艦する気です！」

ちなみに、播磨型戦艦は大和型戦艦と同様に後部甲板は航空機運用甲板であり、播磨型はいざというときは空母機も着艦出来る様に造られている。

福本  
「甲板作業員退避！ 艦内に避難せよ！」

遠地

「はぁ…要らん奴は来なくていい時に来るな」

確かにである。

播磨後部甲板

新沢

「……嘘だろ、おい」

新沢の視線の先には着艦したばかりの翡翠機があった。  
新沢は近くの艦橋直通電話に手を伸ばす。

新沢

「こちら新沢…艦橋？」

福本

『新沢？ お前どこにいる？』

新沢

「後部甲板です！ 翡翠が来ましたよ！？」

福本

『俺だっでどうにかしたいよ！ とにかく避難しろ！』

新沢

「了か……!!」

嫌な予感がして振り向くと……翡翠が立っていた。

翡翠

「……あんた、誰だったけ？」

新沢

「に、新沢ですよ……」

本来なら、語気を強めたいところだが…ブラックリストの人間相手に強めれる筈が無い。

翡翠

「それ艦橋と直通なん？」

新沢

「は、はい…そ、そうです…」

持っていた受話器を翡翠に渡すと、新沢は一目散に離脱した。

翡翠

「あ、マリーダ？　そこに居るん？」

福本

『……翡翠か』

翡翠

「ちょっと、福本！ あんたに用はないから、私のマリダに代わりなさい！」

福本

『何が『私の』マリダじゃあ！ お前の本命はマリダとこの艦隊の女の子全員やる！ それに！ マリダは俺のや！』

翡翠

「何ですって！？ 何時そんなの決まってたのよ!？」

福本

『この物語が始まったときからそう決まってる！ 早う出てけ!』

翡翠

「もう怒った！ 艦橋に乗り込むからね！」

そう言うと翡翠は受話器を元のところに戻し、電話を切った。

福本

「ふう…艦内の防水扉を出来るだけ閉めてくれ」

ラフィール

「え、閉めるんですか!？」

福本

「翡翠を暴れさせたいなら、そのままにしろ…あとは頼んだ」

シント

「え、どこへ？」

福本

「翡翠を止めてくる」

そう言つと艦橋を出て行つた。

バタバタバタバタバタ！！

新沢

「何でこうなるんだよ、まったく！」

指示に従い避難する最後部にいる新沢。

その前には、たまたま出会つた尾崎がいた。

尾崎

「私は嫌ですからね！　巻き込まれた挙げ句、翡翠さんにハアハアされるのは！」

新沢

「みんな一緒だよ！」

そんな声が聞こえたからかも知れないが、翡翠の音が聞こえた。

翡翠

「皆さん、私にハアハアされなさい　（特にコスプレの女性陣  
！）」

新沢  
「全力拒否だ！」

そう言いながら、ホルスターの零式拳銃に手を伸ばすが……やめた。こんな戦闘用艦船の中で不用意に銃を乱射するのは……戦車の中で拳銃を撃つ様なものだ。

水兵  
「大尉！ 急いで下さい！ 防水扉を閉めます！」

新沢  
「わかった！ 尾崎さん、スピードアップ！」

尾崎  
「む、無理で……す！」

新沢  
「ああ、もう！」

新沢は尾崎を追い越すと、尾崎の腕を掴んで尾崎を引っ張る。

新沢  
「今だ！ 閉める！」

防水扉がギリギリ人が通れるスペースまで閉まった時に新沢と尾崎は隣の防水区画へと逃げ込んだ。  
水兵達が大慌てで防水扉を閉める。  
しかし……

ガッ！



後少して閉まるとゆうときに、翡翠の手が防水扉を掴む。  
そして……まるで普通のドアの様にガラリと開けた。

新沢

「嘘だろ、おい!!」

翡翠

「さあ、私にハアハアされなさい!」

尾崎

「い、嫌です!!」

手近に居た尾崎に手を伸ばす翡翠。

しかし……

福本

「我流、流星突撃!」

まるで艦攻の雷撃攻撃の様に突っ込んで来た福本に翡翠の手が引っ込む。

翡翠

「もう! あんたはどこまで邪魔する気!？」

福本

「仲間の命を預かってるんじゃない! 地獄の果てまで邪魔するわい!」

そう言うと、新沢に向かい叫ぶ。

福本

「新沢！ここに居る全員を避難させる！翡翠は食い止める！」

新沢

「わ、わかりました！」

新沢は後ろを気にしながら、全員を避難させた。

新沢

『元帥が翡翠を食い止めています！どうしますか！？』

遠地

「マリーダが行ければ別だが……俺達は何人行ったって、邪魔なだけだ」

まあ、主人公の福本なら、勝てないまでも負けないだろう。

ミア

「新たな機影をレーダーに探知！」

遠地

「ち、忙しい時に…伊東先生の大和でも来たか！？」

ミア

「……違います。これは…零戦先生の将斗中佐です！」

遠地

「椎名中佐か！助かった！通話出来るか！？」

ミア

「はい…椎名機より無線通信です。どうぞ」

遠地

「こちら砲術参謀の遠地です。お久しぶりです、椎名中佐」

椎名中佐

『おお、遠地大将！ 久し振りやな！』

遠地

「はい…翡翠さんの事ですよね？」

椎名中佐

『ああ、すまんなく、迷惑かけて』

遠地

「あははは……着艦は後部甲板をお使い下さい……ところで、もう1機はいつたい…」

椎名中佐

『昂や。あと、瑞鶴も一緒やで』

昂

『翡翠姉…朝からウキウキしてると思ったら…』

瑞鶴

『ハーレム予知夢を見たど、私に言っていた』

マリーダ

「予知夢……はた迷惑な話ね」

ラフィール

「まったくです」

遠地

「まあ、とにかく今は翡翠を捕まえよう。ジント、播磨、付いて来い！」

ジント

「了解」

播磨

「はい！」

3人は艦橋を出て行った。

翡翠

「あんた、ほんまにしつこい！」

福本

「伊達に士官学校で暴れて無いし、銃弾の下を潜り抜けて来た訳じゃあないんでね」

福本と翡翠の戦いは互角だった。

お互い日本刀での攻撃だから、一進一退である。

翡翠

「私と互角に戦うんじゃないあ、バレンタインの時、親衛隊は敵わなかった訳ね」

福本

「お褒めに与り、光栄で」

最果て、どうしたものか……下手にやったらヤバいし、だからと言って手も抜けないし……

翡翠

「やあ！」

福本

「とっ！」

キーン！

福本

「危ね〜」

しかし……長期戦はかなり不味い。

我流奥義や奥の手はあるが……使いどころがあるかどうか……

椎名中佐

「ひーすーいー!!」

翡翠

「あ、あれ？ ま、まーくん？」

福本

「椎名中佐……」

見ると他にも昴、瑞鶴、遠地、ジント、播磨の姿。

昴

「翡翠姉、もうそろそろ止めないと、色んな意味で痛い目みるよ?」

瑞鶴

「翡翠、いくらお前でも4対1では勝てないな」

ああ、確かに……無理だわな。

翡翠

「む、せつかく久し振りにハアハアしよう思ったのに」

……まるで子供の様に頬を膨らます翡翠。

それを見た福本は愛用の軍刀を鞘に収めると、壁に寄り掛かる。

福本

「はあ……疲れた」

一時間後……

椎名中佐

「……ほんまにこのまま連れて帰ってええんか?」

福本

「ええ、久し振りに体を動かせましたし」

そう言うと、少しだけ近付いて小声で囁いた。

福本

「（それに、下手に長居したら、海龍が飛んで来ますからね）」

椎名中佐

「…なるほどな。じゃあ、奢るんは今度でええな？」

福本

「出来れば、呼んでもらえると嬉しいんですがね」

こんな会話をしている中で……

海龍

「ねえねえ、瑞鶴」

瑞鶴

「なんだ？」

大きめの紙袋を持った海龍が瑞鶴に近付く。

海龍

「（椎名中佐が高校生時代と中学生時代に着てた制服……欲しくない？）」

瑞鶴

「（な、な、なんだと！？）」

慌て海龍を見る瑞鶴。

海龍

「（闇ルートで手に入れたんだけど…上下夏冬一式…いる？）」

瑞鶴

「（いる！ 欲しい！）」

海龍

「（なら、はい）」

持っていた紙袋を渡す。

海龍

「じゃあ、お幸せに」

そして海龍は翡翠の所へ……

海龍

「（翡翠さん…バツチり撮ったよ！）」

翡翠

「（さすが、海龍！ ここやと味方は海龍だけやわ）」

海龍

「（ヤバい方はネガにしました…普通のと今までののはこっちに現像しておいています。お帰りの途中にお楽しみを！）」

翡翠

「（かいいりゅ〜う、大好き〜！）」



昴

「…翡翠姉、何してんの？」

翡翠

「な、何でも無い、何でも無い！ じゃあ、海龍。またね」

海龍

「は、はい」

……「ううして、無事（？）に椎名達は帰って行った。

おまけ（またかい…）

福本

「疲れた〜」

やっと1日が終わり、長官私室のベッドに飛び込んだ福本。  
ちなみに日は既に沈んでいる。

福本

「はあ〜、寝よ…」

マリイダ

「ダイスケ〜、一緒に寝よ〜」

福本

「……勝手にしてくれ」

白のプラグスーツのまま入って来たマリィダの言葉をさらりと流す。  
福本がベッドに潜り込むとマリィダも滑り込んできた。

ギユ〜

福本

「…俺は抱き枕じゃないぞ」

マリィダ

「良いじゃない。それに翡翠を嫉妬させられるしね」

福本

「…厄介事に巻き込むのは止めてくれ」

そう言うと福本はそのまま寝てしまった。

翌早朝、福本が一度起きた時、抱き付いているマリィダの服が元の軍服になっているのを見て、安心しながらも少し惜しい気が、なぜかした。

次号へ

特別編 第七艦隊の異変！？（後書き）

明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新致します。お楽しみに。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

歩み行く先は……

8月1日

キャー……！！

『悪魔のサイレン』と後に言われる独特のサイレン音を鳴らし、ドイツ軍の急降下爆撃機隊がソ連軍に襲い掛かる。

ルーデル中佐

「行くぞ、相棒！」

ヘルチエル上等兵

「…無茶はするなよ」

検査の結果、足にヒビが入っており、1ヶ月の安静療養を命じられた筈のルーデル中佐は、なんと、病院を抜け出して参加している。移動はもちろん、松葉杖でだ。

ルーデル中佐

「食らえ！」

シュババババババン！

主翼のロケット弾が発射され、ソ連軍の隊列の真ん中で炸裂する。そして、間髪入れずに今度は爆弾を投下する。

ヒューー……

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！

ルーデル中佐

「なんの！ まだまだこれからだ！」

機を反転させ、今度は翼内の30mm機関砲で戦車に向けてブツ放した。

2時間後………

石田

「ドイツ空軍は仕事が早いですね」

福本

「そう言う問題か？」

ソ連軍が爆撃された地点で第七陸戦隊は停止していた。もちろん、空襲を受けたソ連軍は既にはいない。今、陸戦隊はその周辺を検索していた。

福本

「どうですか、軍医？」

軍医

「…残念ながら元帥。回収したのは遺体ばかりです」

残念そうに軍医が報告する。

福本

「やはり…2時間のハンデがあつては…」

軍医

「それもありますが、多分10分後に着てもそれほど変わらなかつたでしょう」

そう言うと軍医は白衣のポケットから何かを取り出し、福本の手のひらにのせた。

軍医

「何が見えますか？」

福本は手のひらにあるそれを掴むと自分の目線のところまで持つてくる。

福本

「大口径銃弾や爆弾、ロケット弾の破片ではないね。破片なら形はバラバラで尖っている筈だ」

そう言うと、持ち方を変えて見てみる。

福本

「…これは弾丸だな。歩兵小銃…ライフルの弾だ」

軍医

「その通りです。遺体の傷口と今までの経験から申しますと、銃弾はモンシ・ナガン小銃の物です」

石田

「ちよ、ちよっと待って下さい！ じゃあ、ソ連軍は重傷者を収容せずに、止めを刺したって事ですか!？」

通常、軍隊なら熟練にしろ新米にしろ、出来る限り兵隊を助けるのが普通だ。

こうなると、ソ連軍が果たして軍隊と言えるか怪しい。

軍医

「その遺体が1体2体ならまだ解ります。ですがそれが10、20と出てくると……どう思います?」

石田

「……くっ、いくら何でも酷すぎる……」

福本

「……多分、督戦隊の仕業だな。普通のソ連兵ではやれない」

まだ助かる見込みのある戦友を撃つのは抵抗がある。こう言った場合、狂信的な共産主義者が多いと言われる督戦隊でないとやれない。

石田

「……元帥……本官には解りません。なぜ人を人と思えない主義が国を形成してしまうのか……」

福本

「要因は色々あるな。国内・国際情勢、指導者、国民意識、メディアの傾向……上げればキリがない。ヒトラーも同種だ。下手をしたらルーズベルトも同種かも知れん」

石田

「…この戦争が終われば、世界はどうなるでしょうか？」

福本

「…どこまで変わるかは解らない。だが、大規模戦争は起きにくくなるだろう。それに、植民地を持つ国は手離さなければ成らない様になる。今回の戦争は余りにも金を使い過ぎたからな」

ヴィル

「福本長官。検索終了したそうです。進撃再開します」

航空参謀の役職を利用（？）して、福本達に付いて来たヴィルが福本に報告する。

福本

「そうか…わかった」

そう言うと、乗って来た一式半装軌装甲車に乗り込む。

マリータ

「どうだった？」

福本

「残念ながら、生存者はいないらしい…軍医の話は聞こえた？」

マリータ

「…銃弾と止めの話だけ」

福本

「…そうか。さて、ワルシャワに向かおう」



歩みを止める訳にはいかない。  
この戦争を終わらそうと思つたら……足を止める事は早々許されない  
のだ。

次号へ

歩み行く先は……（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ワルシャワ蜂起

8月7日 ワルシャワ

元ポーランドの首都ワルシャワ（ソ連軍が占領中の為）は慌ただしかった。

3日前から、ワルシャワ近郊の防衛線に連合軍が激しい攻撃を行っているからだ。

防衛線には空襲等によって撤退した部隊を臨時に再編成するなどして配置した部隊がほとんどである。

それでも多数の部隊を配置した防衛線に連合軍は連日嵐の如く重火砲による一斉射撃と爆撃を加えている。これが連日、しかもワルシャワから目と鼻の先で起こるのだから、ワルシャワ市内は小さい地震の様に揺れる。

しかし、ソ連軍はワルシャワを放棄しようとしな。何故なら、ここには傀儡政府ポーランド人民共和国の首都である。（もちろん、そんな国を連合国はどこも認めていない）

ポーランドが奪還されればソ連領は直ぐそこである。だから、スターリンより死守命令が下っていた。

しかし、言うは簡単、やるは困難…と言うべき通り、撃ち込まれる、あるいは投下される砲弾、爆弾で防衛線は徐々に弱く成っていく。

これに対して、ソ連軍からの応戦は……全く無い。  
重砲は…真っ先に目標にされ吹っ飛ばされた。

航空攻撃も…今やポーランド国内にソ連軍機は一機も存在せず、全機ソ連領内に引き上げ、ソ連領内の飛行場から飛んで来る。

しかし、連合軍…特にアメリカ軍…の土木技術ならば、僅か数時間あれば単発戦闘機や単発爆撃機ぐらいが充分発着できる滑走路を前線の後ろに完成させる。

そんな簡易飛行場があちこちに出来れば、何時でも航空支援を受けられる。

この違いは余りにも大きかった。

ワルシャワ市内

アンドレイ・ウラソフ中将は偶々司令部に来ていた。彼はポーランド進攻（ソ連軍はポーランド『解放』作戦）やギリシャ進攻作戦で果敢な働きをした為、将兵だけでなくスターリンからも信頼されていた。

そんな彼が率いる部隊はドイツ進攻作戦の増援として到着したが、到着前に進攻軍がドイツから追い出され、更に連合軍によってポーランドに進攻されていた。この為、部隊はそのままワルシャワ近郊の防衛線に配備されていた。

彼が来たのは、このままでは防衛線が保たない為、戦略の練り直しの進言に来ていた。

それが、彼の運命を変える事になるとは…………

ポカーン！！

ウラソフ中将

「なんだ！！」

司令部として使っている王宮の司令室に向かっていたウラソフ中将の耳に爆発音が聞こえた。

見ると司令室から黒煙が噴き出している。

慌て引き連れていた幕僚2人と共に司令室に駆け付ける。  
すると、ウラソフ中將もよく知る司令部付きの少尉が黒煙出る司令室から出て来た。

ウラソフ中將

「大丈夫か!？」

少尉

「中將…司令部が…」

頭から血を流しながらも、振り絞るかの声で答える。見るまでも無い。

中は大変な事になっている。

ウラソフ中將

「早く手当てしてやれ…しかし、どうなっている?」

少尉の手当てを命じると、少し考える。

これだけでは終わらないと……

「中將!」

今度は彼の従兵である曹長が走って来た。

ウラソフ中將

「どうした? 何があった!？」

曹長

「わ、ウルシャワの…ウルシャワの市民は蜂起しました!」

幕僚

「なんだと!？」

ワルシャワには5万人以上の市民が残っていた。

イザとなれば、ワルシャワと市民を人質にする為だ。しかし、今回はそれが凶と出た……。

ダーン!ダーン!ダーン!ダーン!ダーン!ダーン!ダーン!ダーン!ダーン!ダーン!……

つい先程まで、静かだったワルシャワ市内に銃声が轟く。

不意を突かれたソ連兵が撃ち倒され、手榴弾を放り込まれた装甲車が爆発、炎上する。

また、戦車や自走砲が奪われ、ソ連兵に襲い掛かる。爆発、銃声、怒号……ワルシャワ市内のあちこちで聞こえている。

連合軍の接近を心待ちにしていたポーランド国内軍……ポーランドの抵抗活動組織……が痺れを切らして蜂起した。

その数5万人以上……一方、ソ連軍はワルシャワ市内に駐留する3万人以上。

数は多いものの、武器が足りない……連合軍も武器支援をしている……国内軍は撃ち倒したソ連兵からマシンガンやライフル、手榴弾、はたまた戦車、自走砲を奪い取る。

国内軍の中には軍人も多数参加していたから出来た話だ。

その時、第七艦隊から発進した彩雲偵察機がワルシャワ上空に飛来

していた。

彩雲はワルシャワに通じる道路の偵察を命じられ、偶々ワルシャワ上空に来ていた。

しかし、搭乗員が見たのはソ連軍の援軍では無く、ワルシャワ市内で瞬く銃火であった。

それも、市内のあちこちでだ。

この事は直ぐ様、打電された。

ヴィル

「元帥!!!」

福本

「どうした?」

鉄兜に陸戦隊用軍服のヴィルが総司令部に使っている大型テントに飛び込んで来た。

この時、連合軍の主だった指揮官達が作戦会議をしている最中だった。

直ぐにヴィルは握っていた紙を福本に渡す。

受け取った福本は神妙な顔付きになる。

アイゼンハワー司令官

「どうしました、アドミラルフクモト?」

福本

「先程、本艦隊から出した偵察機から連絡がありました。ワルシャワ市内で多数の銃火を確認したと」

パットン中将

「なんだ、ソ連軍が見せしめに市民の銃殺でもやらかしたか!？」

福本

「違うと思います。どうやら、ワルシャワ市民が蜂起したと見て間違いないでしょう」

ロンメル中将

「なるほど、それなら多数の銃火の理由も解る」

パットン中将

「なら、今が最大のチャンスだ! アイク、予定を変更して攻勢に出よう!」

パットンが言い放つ。

アイゼンハワーはスツと周りを見る。

福本は微笑み、フェルデナント、宮崎大将は余裕の表情、ロンメル中将もまた余裕の表情、そして、自分ゆり経験のあるイギリス軍のホバート大将を見る。

ホバート大将

「アイゼンハワー大将、パットン中将の言う様に、今が最大のチャンスだ。それにワルシャワ市民を助けなくて、我々の目的は果たせるかね?」

流石、チャーチル首相の義弟で自分より指揮官歴が長いホバート大将だ。

アイゼンハワー大将

「パットン、君の意見を探り入れよう。攻勢を開始する!」



次号へ

## ワルシヤワ蜂起（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ワルシャワの攻防 1

午前10時……ついに連合軍が攻勢に出た。

重火砲の援護を受けつつ、戦車を先頭に防衛線へと雪崩れ込んだ。ポロポロになっていた防衛線は散発的な抵抗を見せたが、それほど時間を掛けずに制圧された。

もちろん、ソ連軍も戦車を繰り出して対抗したが、やっとT34に対抗しうるM26パーシング、M28ブラッグ戦車が大量配備され、攻撃力・突進力が上がっている。

また、航空支援の前にソ連軍の戦車も只の鉄の塊にすぎなかった。

ワルシャワ市内 王宮

ウラソフ中将

「…連合軍が攻勢に出たか…」

幕僚

「はい」

重傷を負った指揮官に代わり臨時指揮官になったウラソフ中将は連合軍攻勢の報告に頭を痛めた。

蜂起と攻勢は計画的とは無い。

それにしても連携が無いからだ。

しかし、絶好のチャンスを逃す程、敵もバカでは無い。

ウラソフ中将

「…ワルシャワ放棄も考えるべきか…」

幕僚

「中将！」

ウラソフ中将

「ここに邪魔な政治将校はいない…それに、そうしなければ我々は全滅する」

下手に拘ればどうなるか……歴史が証明している。

少尉

「…ならば、爆破の件はどうしましょう?」

ウラソフ中将

「…爆破? 何の事だ?」

少尉

「え、聞いておられ無いですか!?!」

手当てを受けて、頭に包帯を巻いている司令部付き少尉が慌てた。

ウラソフ中将

「いや、何も聞いていない」

少尉

「…本官もよくは知りませんが…実はワルシャワ市内の重要箇所にも何時でも爆破出来る様に爆薬を設置せよと同志書記長から命令が…」

ウラソフ中将

「…なんと言う事だ…」

市民を人質にする様にしたにしろ、爆薬を市内に仕掛けたにしろ、連合軍の謀略宣伝に対するネタを与えている様なものだ。

ウラソフ中将

「…やはり撤退しか無いか…」

幕僚

「…スターリン同志が許すでしょうか？」

ウラソフ中将

「とにかく、現状をクレムリンに報告して指示を仰ごう…上手くすれば撤退出来るかもしれん」

少尉

「わかりました」

返事をする、少尉は通信室に向かった。

石田

「元帥、ソ連軍ワルシャワ市内に退却します！」

福本

「不味いな…市内のソ連軍と糾合されたら、ワルシャワ市民の被害が大きくなるぞ」

マリーダ

「なら、追い掛けるまでよ！」

ヴィル

「その意見に賛成です。どうせなら、ワルシャワ市内に突入しまし  
よう！」

福本

「…お前ら、少し過激だぞ…まあ、同意見だな」

フェルデナント

「では、ワルシャワ市内に追撃・突入しますか？」

福本

「マリィダ、ヴィル、石田！ 俺達は別路から侵入して探ってみる。  
フェルデナントはそのまま突入！」

フェルデナント

「了解！」

石田

「はい！ 第6中隊、元帥に続け！」

マリィダ

「もちろん、行くわよ！」

ヴィル

「お供させて頂きます！」

福本

「よし！ じゃあ、フェルデナント、後でな」

まるで寄り道するかの如く気軽な物言いだ。福本は行ってしまった。それをフェルデナントは苦笑しながらも頼もしく見ていた。

少尉

「中将！」

ウラソフ中将

「どうだった、少尉？」

少尉

「ダメです…向こうは死守しろの一点張りです…」

ウラソフ中将

「むづ…こちらの現状は説明したんだな？」

少尉

「はい…」

ウラソフ中将

「私自ら説明してみよう。それまで、全部隊に出来る限り防戦に徹する様に伝えてくれ」

幕僚

「はい」

福本

「なんとまあ…戦車をブン盗ってるよ」

石田

「余程の手練れでもいたんですかね？」

マリーダ

「それとも、ソ連兵が余程間抜けか油断してたのね」

別路から進んでいた福本達は建物の陰からソ連軍とポーランド国内軍の戦闘を見ていた。  
中々双方互角に戦っている。

石田

「どうします？ 参加しますか？」

福本

「いや、ここは大丈夫だろう。別の方を見てみよう」

石田

「わかりました」

そう言うと、福本達と第6中隊160名は移動する。別行動部隊にしては多いが、ワルシャワ市内は銃撃戦が激しい為か今のところ気付かれていない。

ウラソフ中将

「同志、現状は我が軍の不利です…このままではポーランド駐屯軍は消滅します……同志大元帥！」



そう言うと、ウラソフ中將は力無く受話器を置いた。

少尉

「……どうですか？」

ウラソフ中將

「ダメだ…同志スターリンは死守しろと盲目的に言うだけだ…それに…」

少尉

「…それに？」

ウラソフ中將

「…イザとなったら、同志はワルシヤワを爆破しろと言ったよ」

少尉

「…そ、それは…」

ウラソフ中將

「…もう少しだけ、粘ってくれ…私は指揮を執ってくる」

少尉

「わかりました」

次号へ

## ワルシャワの攻防 1 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ワルシャワの攻防 2

銃声が止む事ない……いや、逆に多くなってゆく中、福本達はうまい具合に裏道を通って進んでいた。

福本

「よし、ここで分かれよう。石田、重火器分隊を含めた2個分隊を連れて行く。あとは周りの建物の検索・制圧にあたってくれ……ただし、間違つてポーランド国内軍を撃たない様に注意させる」

石田

「わかりました」

返事をする、小隊長と分隊長を集めて指示を出す。指示を出し終わり、連れて行く2個分隊を残して、部隊が散る。石田の準備完了の報告を聞いた福本は直ぐに前進した。表通りに出ると周りを警戒しつつ、状況を探る。

石田

「…誰もいませんね」

福本

「気よつける、敵はどこに隠れているか解らん」

そう言うと、向かい側の裏道に歩みを進めた。

王宮内

ウラソフ中将

「現状は？」

幕僚

「防衛線の1つが日本軍に突破されました。日本軍はそのままワルシャワ市内に突入した模様……他の防衛線もそれほど保ちません」

ウラソフ中将

「…蜂起した市民の方はどうだ？」

幕僚

「抵抗が激しく、苦戦中です。日本軍に合流されたら余計でしょう……撤退の方はどうですか？」

ウラソフ中将

「ダメだ…同志書記長は盲目的に死守を命じるだけだ。通信室でもう少し粘る様に伝えてある」

幕僚

「…そうですね…」

幕僚も打つ手が無いのだろう、困惑な表情をする。

ウラソフ中将

「（戦っても多くの兵が無駄死になるたがけだ…しかし、撤退すれば書記長は我々を許さないだろう…銃殺は確定だ）」

将官だけにスターリンに対する様々な噂を知るウラソフ中将は頭を抱えるしかなかった。

福本

「…近いな」

銃声の数と音量が近付くにつれ増え、かつ鮮明に聞こえてくる。後ろでは無線機で進行状況を説明しながら、指揮下の部隊に命令を出す石田がいる。

石田

「元帥、第3小隊の第1分隊がこの先で戦闘が行われているのを確認したそうです」

福本

「頭上げて行けるのはここまでか…よし、行こう」

直ぐ様、前進を開始する。そして、裏道を抜けると……まさに戦場だった。

破壊・破損した家屋、砲弾によって出来た穴、壁に出来た弾痕……市街戦の跡だ。

そんな光景を見ながら、進もうとした時…福本は何かが反射した光に気が付いた。

福本

「！伏せる！！」

ピューン！

福本が叫びながら伏せる。僅か数センチ上を銃弾が通過し、石床に命中する。

石田

「狙撃だ！ 総員散開！」

石田の命令に2個分隊の兵員は近くの砲弾によって破損した家や、遮蔽物の陰に隠れる。

福本達も近くの着弾跡の穴に転がり込む。

福本

「狙撃兵か…厄介なのがいるな」

マリーダ

「それより、さっきの狙撃、あなたを狙ってたわ」

石田

「そうですよ。だって、銃弾は元帥の数センチ上を通過しましたからね」

福本

「…こんな若僧狙っても意味は無いと思うけどねえ」

そう呟きながら頭を回転させ、打開策を考える。

ヴィル

「元帥、自分にやらせて下さい」

一緒に転がり込んだヴィルが福本に近付き言った。

福本

「…アリソンから聞いたが、お前射撃大会で入賞した事あるんだよな？」

ヴィル

「はい…6位ですけど」

マリータ

「…大介は射撃成績はトップじゃなかったけ？」

福本

「…それとこれとは話が別だよ…よし、わかった。やってみろ」

ヴィル

「はい！」

返事をする姿勢を低くしながら何処かに行ってしまった。

石田

「大丈夫ですか、航空参謀で？」

福本

「大丈夫さ。それにヴィルが持っているねは38式歩兵小銃の狙撃用だぞ」

狙撃兵には狙撃兵を…これが意味正しい選択である。

ヴィルは近くのアパートらしき建物に忍び込んだ。

そして、ちょうどいい高さの階の部屋に見当を付けると、一直線にその部屋へと向かった。

部屋に着くと、慎重に素早く部屋に入り込み狙撃の準備を始める。

ウイル

「さっきの狙撃は福本元帥を狙ったなら……あの辺り……ビンゴ」

腹這いになり、見当を付けていた場所を探ると確かにいた。

モンシ・ナガン小銃に狙撃スコープを装着した狙撃仕様を構えた狙撃兵だ。

確かにモンシ・ナガン小銃は設計が上手いのか狙撃銃にするのは簡単だった様だ。

しかし、それなら38式歩兵小銃は世界的ベストセラー歩兵小銃である。

ちなみに意外に思える話だが、ヨーロッパ諸国では反動が軽く低伸弾道の6,5mm銃弾の評価は高く、複数の国の企業で狩猟用・スポーツ用として生産販売している。

つまり、口径が大きいからそれでいい……とは単純には言えず、総合的に考えねばならない時がある。

そう言った場合、補給面だと38式歩兵小銃は最良である。

また、殺傷力が弱い6,5mm銃弾は人命を重視するアメリカ軍にとって厄介な存在であり、史実6,5mm銃弾で負傷した負傷兵を回収・後方輸送の為に人員を割かねばならず、結果的に兵力・戦力を減衰してしまったとゆう皮肉な結果を生み出している。

……………思いっきり話が逸れた。

ウイル

「さて、見方を変えれば必中必殺弾の6,5mmはどうかな……」



狙撃スコープを覗いて微調整を加えるヴィルは1人呟く。  
いくら殺傷力の低い6.5mm弾でも人体急所を狙えば別だ。  
そして……

パン！

近くで同じ様に銃声が轟く中、その銃声だけははっきり聞こえた。

石田

「……航空参謀、仕留めましたかね？」

マリイダ

「石田大尉、あなたヴィルを信じられないの？」

石田

「いえ……ただ、狙撃は始めてだと……」

福本

「……大丈夫だ。行くぞ！」

サツと穴から出た福本にまるで合わせるかの如く付いていくマリイダと、慌て付いてくる石田。  
その後ろから2個分隊も続く。

ヴィル

「元帥！」

福本

「お、ヴィル…仕留めたか？」

ヴィル

「だから、走ってるんでしょ？」

福本

「……だな。よし、次行くぞ！」

……本当にこれで大丈夫か？

その頃、司令部ではウラソフ中將は打開策が見えないまま、必死に防戦の指揮を執っていた。

次号へ

## ワルシャワの攻防 2 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

ワルシャワの攻防 3 『ワルシャワは燃えているか?』 (前書き)

新米士官

「ワルシャワ戦はあと一話で終わります。(長くなったので…)」

福本

「…変な副題ついてません?」

新米士官

「気のせい、気のせい」

ワルシャワの攻防 3 『ワルシャワは燃えているか?』

ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！

……

ダダダダダダダダダダ！

ゴワーン！ドガーン！

単発的な発砲音と連続的な銃撃音…それに、手榴弾か砲弾による爆発音が響いている。

そんな激戦区の手前に福本達はいた。

石田

「元帥、第4小隊からの報告だと我々はソ連軍の後ろにいる様です」

福本

「…偶然とは言え、皮肉なもんだな…フェルデナント達は?」

石田

「我々は西から入ったので、西の通りでソ連軍と戦闘中です」

ヴィル

「…どうします? 一戦やりますか?」

福本

「いつの間にか過激化して無いか、ヴィル? さて…もう少し状況を見て…」

マリダ

「それは無理みたいよ。戦車接近、車体はT34だけど、砲塔が様変わりしてるわね」

腹這いになって双眼鏡で辺りを偵察していたマリダが言い放った。

福本

「どれどれ……まあ、あえて言うなら新砲塔チハだな」

石田

「元帥、史実とごちゃ混ぜにしないで下さい」

空かさず石田がツッコミを入れる。

福本

「いいじゃん、別に。まあ、名称は置いといて……あれが加わると厄介だ。戦車を片付けて、国内軍を支援しよう」

石田

「わかりました」

キュラキュラキュラキュラ……

新砲塔T34（仮称）が近付いて来る。

既に重火器分隊が105mm噴進砲を構えて待ち伏せしている。

福本

「まだまだ……まだまだぞ……」

ジリジリと来るT34を引き付ける。

しかし、待ち伏せる時程、敵の動きが遅くなる様でまどろっこしい。

福本

「……よし、今だ！」

脇道からサツと出た噴進砲を持った重火器分隊員が適当に標準を付けて引き金を引く。

パシュウ！

グワーン！

福本

「どうだ！？」

煙が晴れて出てきたT34は破壊してはいなかった……代わりに右キヤタピラーに当たったらしく、走行不能の様だ。

しかし、敵もバカでは無い。

動かなくなった戦車が只の鉄の塊であるから、乗員が次々とハッチから脱出していく。

福本

「石田、あの戦車を盾にするぞ！」

石田

「了解！ 分隊続け！」

乗員が乗り捨てた戦車を盾にし、後続がいるかどうか見る為の前進

だった。

だから、福本とマリーダが車体左側から車体後部に抜けたとき2人はハツとした。

確かに後続はいた、同じ様なT34と随伴の歩兵隊だ。しかし、問題はそれではなかった。

多分、先ほどの戦車の乗員だろう、その内の1人が後続の戦車の前にいた事だ。だが、後続のT34は止まるとしない。

しかも、その乗員は何故か逃げようとしない。

福本

「石田！」

石田

「了解！ 噴進砲、急げ！」

反対側にいる石田の声が聞こえた。

そして、次の瞬間……

シュパウ！

シュルルルル……ボガンー！！

今度はT34戦車の正面装甲を貫通し、爆発・炎上させた。

それを確認する事無く、福本とマリーダは飛び出した。

もちろん、前にいる乗員の所にだ。

福本

「おい！ 大丈夫か！？」

日本語が通じる訳が無いのに、つつい誰何してしまう。



しかも、相手の顔を見た瞬間、また驚いた。  
なんと、男だとばかり思っていた乗員が女だったからだ。  
しかも、それほど歳の離れていなかった。

マリイダ

「大介？」

福本

「…マリイダ、診てやってくれ」

ソ連軍がどうゆう風な教えをしているか知らないが、ここは異性よりも同性に任す方が適切だと判断した。その意図を察したマリイダは直ぐに診る。

そうこうやっている内に石田が分隊を引き連れて来た。

福本

「後続の歩兵はどうした？」

石田

「T34が爆発したのを見て逃げて行きました。念のため、周囲警戒します」

福本

「ああ、そうしてくれ。マリイダ、そっちは？」

マリイダ

「……軍医か衛生兵呼んでもらえる。どうやらこの子、足を捻ったみたい」

石田

「わかりました。それと、元帥。分派した部隊から連絡があり、ソ連軍の抵抗していた陣地を落とし、ポーランド国内軍と接触到に成功。どうやらソ連軍はこの近くの王宮に司令部を置いてる様です」

ヴィル

「それは有益な情報ですね」

福本

「まったく。すまん、ヴィル。先に行って衛生兵を手配してくれないかな。出来れば担架も頼む」

ヴィル

「お安いご用です。では、行って来ます」

そう言うと、ヴィルは行ってしまった。

福本

「よし、俺達も移動しよう。マリィダ、彼女を背負って行ける？」

マリィダ

「大丈夫大丈夫、その為にいつも走らされたんだから余裕よ」

王宮内 司令部

幕僚

「ダメです、司令。郊外の最終防衛線は次々突破されています！」

ほとんど、悲鳴に近い報告である。

ウラソフ中将

「くそ……いったい上は何を考えているんだ！」

彼の目の前には通信室からの返事の紙束がある。

しかし、内容はほぼ同じ『死守せよ』だった。

こんな物をもらっても、何の意味も無い。

既に蜂起から6時間、日本軍が突入して4時間が経過している。

刻々と悪化する状況を出来る限り解りやすく説明させているのに届

くのは意味の無い命令ばかりだ。

ウラソフ中将からして見れば、今後の事もあるからワルシャワを放棄しソ連領に撤退したい。

それに死守したところでスターリンが思っている程時間は稼げないだろう。

何故なら、日本軍が市街地である事を利用して夜襲を仕掛けてきたら、僅かな日数で兵士が疲労困憊でワルシャワは落ちる。

少尉

「中将！」

そんな時、通信室に居たあの司令部付きの少尉が入って来た。

少尉

「同志スターリン書記長直々の打電です」

何故か声も表情もひきつっていた。

受け取ったウラソフ中将も中身を見て驚愕すると共に理由を察した。ウラソフ中将はその紙を幕僚に渡した。

内容は一言……単純明解に……

『ワルシャワは燃えているか？』

幕僚

「中将……」

ウラソフ中将

「……………無理だな」

さすがに彼もここまでくれば決断するしか無い。  
撤退は無理、死守は犠牲が多く無駄、それにワルシャワを爆破した  
ところで何に成るとゆうのか。  
そして、彼は第3の選択肢を選んだ。

ウラソフ中将

「…あとどれ位戦えそうだ？」

幕僚

「それ程保たないかと…」

ウラソフ中将

「…よし、これ以上は無理だ。連合軍に降伏しよう」

この発言が出た瞬間、司令室の空気は緊張したが……

幕僚

「わかりました。しかし、どうやって？」

ウラソフ中将

「少尉、野戦電話を使って出来る限り戦闘を控える様に通達しろ」

少尉

「わかりました」

ウラソフ中将

「後は近くに連合軍の部隊が近くにいれば助かるが…」

曹長

「中将！」

ウラソフ中将の従兵が司令室に入って来た。

ウラソフ中将

「どうした、曹長？」

曹長

「日本軍の1個中隊が接近して来ます！」

ウラソフ中将

「そうか…攻撃はするな。いいな？」

曹長

「え、あ、はい…」

いぶかしみながら返事をした曹長は出て行った。

幕僚

「助かりましたかね？」

ウラソフ中将

「解らん…ただ、日本軍なら大丈夫だろう」

福本達はポーランド国内軍の案内で王宮の近くまで来ていた。ちなみに、保護した女性兵はマリィダと1個分隊を付けて同行させている。

福本

「…静かだな」

ヴィル

「…ですね」

王宮を双眼鏡で見ている福本とヴィル。

ヴィル

「さて、奇襲しますか？」

福本

「いや、石田の方を聞かないと…」

石田

「元帥！」

福本

「噂をすれば影だな。どうした？」

石田

「そ、それが…白旗を持った一団が門の前に…」

福本

「ヴェイル！ 行くぞ！」

ヴェイル

「はい！」

電光石火の如く……では無いが、福本は行動する。石田の案内で王宮の門に急行する。そして、一度陰から様子を見る。

福本

「……本当だな」

ヴェイル

「……畏でしょうか」

福本

「いや、違うな」

否定すると、福本は前に進んだ。白旗を持つ一団へと。相手も気付いたらしく、少し警戒している。

福本

「本官は大日本帝国海軍元帥、福本大介。貴官達の白旗はワルシヤワ近郊に展開するソ連軍の総意か？」

ウラソフ中将

「臨時に指揮を執っているアンドレイ・ウラソフ中将です。我が軍はこれ以上の犠牲を減らす為、連合軍に降伏する」

福本

「なるほど…わかりました。しかし、なぜか？」

ウラソフ中将

「スターリン書記長はワルシャワを爆破しろと命令しているが、そんなバカな事は出来ない。我々は撤退も許されていない。しかし、これ以上の犠牲を我々は出したく無い」

福本

「貴官の意思は理解しました。ありがとうございます！」

福本、ヴィル、石田は敬礼を行った。

対し、ウラソフ中将達も返礼で答えた。

次号へ



ワルシャワの攻防 3 『ワルシャワは燃えているか?』 (後書き)

明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新いたします。お楽しみに。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 雨のワルシャワ

ウラソフ中将の降伏を承認した福本は中隊の無線機を使用してフェルデナントに連絡、フェルデナントは直ぐ様、アイゼンハワーに事の顛末を説明し、戦闘の即時停止と各軍への連絡を進言、無線機のフル稼働が始まった。

ソ連軍側でも、野戦電話をフル稼働させて、連絡の取れる部隊を通じて戦闘停止と連合軍に投降する様に命じた。

この為、日が暮れる頃には銃声は散発的なものとなっていた。

しかし、中には頑強に抵抗する部隊：督戦隊など：があり、完全にワルシャワを制圧出来たのは、2日後の事であった。

ソ連軍降伏のニュースは翌朝には世界各国に発信された。

これに当事者のソ連は驚いた。

スターリンから信頼があったウラソフ中将が死守を命令を無視し降伏した拳げ句、ワルシャワ市内に一般市民が多数存在し人質の様になつていた事や、ワルシャワ市内に爆薬を仕掛けて何時でも爆破出来る様にしていた事を世界に向けて報道したのだ。

まあ、顔面の皮が厚いソ連にとって、そんな報道が堪えた様子は（表向き）なかった。

しかし、スターリンは反論の様な声明を出していた。

『裏切り者と資本主義者の頭上に我が偉大なる共産主義の鉄槌が下るだろっ！』

と……。

8月10日 ワルシャワ市内

福本

「……………」

ポーランド政府の許可を取り借りているホテルの一室で、福本はジツとスターリンの声明が書かれた紙片を見ていた。

石田

「……………どうしたんですか、元帥は？」

ヴィル

「どうも、あのスターリンの声明が気になっている様ですよ」

石田

「只の負け惜しみにしか聞こえないがな」

ヴィル

「まあ、元帥は気にし始めたら、気が済むまでとことん考える人間ですから」

開け放たれたドアの外の廊下で、石田とヴィルはヒソヒソと話していた。

石田

「まあ、元帥のお陰で今、こうしていられるんだけどね」

ヴィル

「それは確かに」

マリィダ

「ねえ、大介は？」

石田

「おや、参謀長。元帥なら先ほどからあの状態ですが」

そう言つて、紙片を眺める福本を指差す。

マリィダ

「むう〜、朝起きてからあの状態よ……」

ヴィル

「…漫才やるつもりはありませんが…参謀長、なんで巫女コスチュームを持ってるんですか？」

そう言つて、小脇に抱える巫女コスチュームに対してツッコミを入れる。

マリィダ

「え、あ、あ〜、な、何でも無いよ〜f(^^)~」

石田

「参謀長。また、元帥に何かやろうとしてましたね」

マリィダ

「えへへ…バレちゃった？」

ヴィル

「バレると言うか…コスチュームを持ってれば嫌でも目立ちますよ」

石田

「それに、イタリアやベルリンの噂は今や知らぬ者は第七艦隊も陸戦隊にもいませんよ」

マリーダ

「あはは…有名人は辛いわね」

石田・ヴィル

「自分が有名にしたんでしょう!」「」

2人にツツコミを入れられた。

石田

「どおせやるなら、普通にやったらどうですか?」

マリーダ

「…普通?」

石田

「そうです。例えば、お茶を持って行くとか…」

マリーダ

「…ああ、なるほど。ありがとう」

そう言つと、マリーダは何処かに行ってしまった。

石田

「…自分、余計な事を言ってますんよね？」

ヴィル

「うーん…普通の事を言っただけだと思うけど…ね（^ー^）」

この後の事を考えると、どうも心配の残る2人であった。

2時間後……

福本

「…うーん、駄目だー！」

あれからもずっと声明の書かれた紙片を見ながら考え続けていた福本はそう叫ぶと座っていたソファに体を預ける。

福本

「普段なら、余りにも聞き慣れた様な事なのに…何故か引っ掛かる」

そう、張家口の時やギリシャ奪還作戦後の時に感じた拭い去れないこの違和感……

福本

「……ダメだ。何か飲んで気分を変えないと……」

マリーダ

「そう思って作って来たわ、はい、アイスティー」

福本

「ああ、ありがとう…って、マリィダ。またか？」

マリィダ

「あら、今回は普通よ？」

福本

「巫女コスで普通と言えるか？　一瞬、コスプレ喫茶にでも轉移したかと思っただよ」

マリィダ

「…何それ？」

福本

「作者に訊いてくれ。で、誰の提案だ？」

マリィダ

「石田君」

ああ、石田…お前に責任は無い…あるのは拡大解釈したマリィダだよ…。

マリィダ

「ところで、朝からず～～～～～～と、あのアホの声明を飽きずに見て…どうしたの？」

福本

「いや…勘が何かしらの警告を発してるんだよ…何かあるって」

マリィダ

「なに、ソ連軍が大反攻にでも出るの？ まあ、今のところは無理ね。ワルシャワの周りは厳重警戒してるんだし」

福本

「まあ……そうなんだけどさ」

しかし、福本はスターリンの声明が『何か』を暗示している様な感じがしていた。

そして、福本は山本元帥が言っていた事が脳裏に過った。

『自分達が考え付かない事をやる……だから奇襲と言うのだ』

……ふと思い出した事も妙に引っ掛かった。

窓の外のワルシャワは雨が降っていた。

次号へ



## 雨のワルシャワ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 雨の中の困惑（前書き）

短いですが案外早く書けたので、2作目更新！

それと、9月の筈なのに間違えて8月になっていました…ごめんなさい！m(\_\_\_\_)m

バシユユユウ！！

（新米士官、波動砲により消滅）

播磨

「出番無いから、波動砲で消えて下さい！」

河内

「お、お姉様、落ち着いて下さい！」

## 雨の中の困惑

9月12日 ワルシャワ

ワルシャワ…と言うよりポーランドは今日も雨だった。

フェルデナント

「今日で3日目ですか…何時晴れますかね？」

福本

「おいおい、俺は天気予報士じゃないんだ。それは担当者に訊いてくれ」

ヴィル

「天気なら、明日には晴れますよ。まあ、今日の雨は降ったり止んだりだそうですね」

福本

「さすが航空参謀。天気確認は怠っていないな」

ヴィル

「航空参謀なんてやってましたから、癖になってしまったんです」

福本

「…そうか、おっと、長居した様だ。失礼するよ」

そう言って福本は部屋を出ていった。

フェルデナント

「……元帥、まだあの声明の事を考えているのですか？」

ヴィル

「ええ…それに、何か自分も気になり出したんですよね」

フェルデナント

「……実を言うと僕もだよ。あれだけ考えるから、何故かしら気に成り始めたんだよ」

そう言うと近くの机にワルシャワ周辺の地図を広げた。

フェルデナント

「現在連合軍はワルシャワから10キロの地点に防衛線、そこから2キロの地点で監視線を張っている。だから、ソ連軍部隊が地中から来ない限り何処かで引つ掛かる」

ヴィル

「航空偵察はこの天気では出来ませんが…これだと、ソ連軍も空爆は出来ない。それに、ソ連領内の天気が悪かったら航空機も飛べません」

フェルデナント

「表向きは大丈夫そうだけど……声明には『頭上から鉄槌が下る』と言っていたな」

ヴィル

「ですが、そんな表記が出来るのは空爆か砲撃ですが……どっちにしたって我々の近くに来なければならぬ」

フェルデナント

「史実でドイツが造ったV1でも撃ち込むなら解るが…ソ連にそんな技術や時間は無い」

ヴィル

「うーん…結局、大丈夫と結論が出せますが…何か引つ掛かるんですよね」

フェルデナント

「確かに、想定出来そうな物は潰した筈なのに…何か見落としてる気がするんですよね」

航空参謀と陸戦隊司令官は地図を睨みながら考えていた。

2人が考えている頃、福本もまた思索していた。

テーブルには何枚かの紙と何かを書いた紙が散らばり、内の1枚はワルシャワと書かれた点、防衛線や監視線と書かれた線、簡単な火砲の絵と弾道線、射程距離数が書かれていた。

そして、福本は部屋の中をグルグルと歩き回る。

福本

「うーん……」

3日間も同じ様に頭を回転させながら数多の手段を考えてみる。

しかし、どれもしつくりとこない。

何かまだ見逃していないかと、何度も思い返し、独自に検討してみる。

それでもダメ。

もしかして、過剰な被害妄想か精神障害にでも陥ったか？……とも思ったが、それでも頭の中で鳴り響く警鐘。

福本

「あの『鉄槌』に何か意味がある筈だ…その意味さえ解ければ突破口になるんだが…」

ソ連軍はポーランドを約4年間占領していたのだから、十分にワルシャワとその周りを調べる時間があった。

ならば、何かしらの手を打っていてもおかしく無い…筈だ。

福本もまた暗闇の中にいる『鉄槌』の正体を掴もうとしていた。

ワルシャワより北東37キロの地点

雨が降る中、多数のソ連兵が何かを準備していた。

「同志、準備に後1時間程頂けませんか？」

「ん……わかった。しかし、1分1秒でも早く終わらせる。同志スターリンはこの成功を心待ちにしておられる」

「は、わかりました」

雨の中、何かを準備しているソ連軍だった。

次号へ

## 雨の中の困惑（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。



## ワルシャワに迫る危機

ワルシャワ市内

福本

「うっ！ 解らん！！」

さすがの福本も引つ掛かる物が解らないだけに、苛々が溜まり、ついつい叫んでしまう。

頭を掻きながら、ふと、机にあるヨーロッパの地図が目にとまった。ロンドン、パリ、ベルリン、ワルシャワ……とヨーロッパの首都の名前が書かれている。

そして、パリに目がいった瞬間、ある事を思い出した。砲術士官である遠地の話を思い出したからだ。

福本

「…そうか…そうかだった！ ちくしょうめ、すっかり忘れていたぜ！」

そう言うと慌て部屋を飛び出した。

マリーダ

「！大介！？ どうしたの！？」

福本

「マリーダ！ やつと解ったんだ！ あの『鉄槌』の意味がさ！」

そう言うとマリーダの腕を掴んでスッ飛ばす。

マリダ

「ちょ……もう、後で何か奢りなさいよ！」

福本

「もちろん！」

ヴィル・フェルデナント

「列車砲による都市砲撃！！！」

福本

「遠地が前に話していたパリ砲の事を思い出したんだよ。いや、まさかそれを失念していたとは……」

マリダ

「けど……ソ連に列車砲なんてあるの？」

福本

「大砲大好き王国のソ連だ。いくらなんでも、試験的に1門か2門は製作しているかもしれない」

ヴィル

「なら、ドイツ軍のゲーレン大佐の諜報部が何か知っているかも知れませ……ロンメル中將を通じて即急に問い合わせて来ます！」

ヴィルは部屋を飛び出した。

フェルデナント

「列車砲の類いと成りますと、12キロの監視線は無駄ですね」

福本

「まあ、それに関しては仕方がないさ」

マリーダ

「それよりも、疑いのある所を探しましょう」

フェルデナント

「そうですね」

再びあのワルシャワ周辺の地図を机に広げる。

フェルデナント

「ワルシャワ以西と周辺12キロは除くとして……となると東一帯が怪しく成りますね」

福本

「ああ……ワルシャワを中心に46cm砲の最大射程である40キロの円を書いたらどうなる？」

マリーダ

「えーと……こうなるかしら」

そう言うとマリーダが定規で長さを計り、コンパスで周囲40キロの円を書く。

フェルデナント

「いくら地図でも、広範囲に成りますね」

福本

「乾し草の中から針探す…とは、よく言ったもんだよ」

フェルデナント

「しかし…くそ、こんな天気でなければ偵察機を出して、付近を捜索出来るんですが…」

窓から未だに降っている雨を苦々しい顔で見ながら、フェルデナントが言った。

マリーダ

「あら、雨だからソ連軍も安心して作戦を実行しようとしてるんじゃないの？」

福本

「言えてる話だ。雨なら航空機が飛びにくいからな」

フェルデナント

「なら、それはそれで物凄く質が悪いですね」

福本

「元々、スターリンの質が悪いんだ。今更始まった事じゃあ無いさ」

そう言うと地図を見た。

ソ連軍が4年間にどんな準備・装備をしたかによって状況が変わるだけに、慎重に成らざるおえなかった。

その頃……ワルシャワより北東37キロの地点

「同志、準備完了しました！」

「うむ、これより、裏切り者と資本主義者に鉄槌下す！ これは同志スターリン大元帥が立案した偉大な作戦である！ これに成功すれば我々は英雄だ！」

「「「「「ウラー！！」「」「」」」」

「よし！ では、これより砲撃を開始する！ 砲弾を装填せよ！」

その頃……ワルシャワ市内

ヴィル

「元帥！ ドンピシャです！」

福本

「やっぱりあつたか！？」

ヴィル

「はい！ たまたまワルシャワにゲーレン大佐が来ていて…早速問い合わせたところ、ソ連は1935年頃、艦砲用18cm砲を列車砲にしたTM-1-180列車砲を開発、最大射程は徹甲榴弾で3

「7、8キロとの事です！」

マリータ

「なら、この東40キロ内の何処かにいる筈ね」

福本

「いや、さっきので大分絞れる。ワルシャワから37キロ以内で、線路があるのは……」

フェルデナント

「…この北東にあるこの線路です！」

福本

「よし、フェルデナント！ 直ぐに出せる部隊で線路を搜索する」

フェルデナント

「はい、我々は敵に3日間の猶予を与えてしまいましたからね」

マリータ

「ちよっと待つてて！ 陸戦服取って来るから！」

ヴィル

「自分も狙撃銃を取って来ます！」

陸戦隊が慌ただしく動き出した。

その頃……

ソ連兵 1

「砲弾の装填完了！」

ソ連兵 2

「砲の仰角修正完了！」

ソ連将校

「わっはっはっは！ 裏切り者も資本主義者め、偉大なるスターリン大元帥の鉄槌を受けるがいい！ よし、撃……」

ズダーン！

突然の銃声……胸を撃ち抜かれた将校が倒れ、全員がハツと思った瞬間、雨降る視界の向こうからパツパツパツ……と何かが瞬き、ソ連兵を襲った……

次号へ

## ワルシャワに迫る危機（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。



## 柵から牡丹餅（前書き）

今回のTM-1-180列車砲のネタは以前二等弱兵さんからの感想による物でした。

二等弱兵さん、ネタ提供ありがとうございます。

## 棚から牡丹餅

石田

「……………嘘だろう？」

キャリアー

「うーん…本当だよ？」

99式歩兵小銃を構えながら呆然と呟いてしまった石田。狙ったは狙った…しかし、まさか一発必中になるなんて！！

キャリアー

「ところでさ、周りはほっといいていいの？」

石田

「と、しまった！ 小隊、一斉射撃開始！！」

ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！……

ダダダダダダダダ！！

石田の命令に99式歩兵小銃と99式軽機関銃が一斉に射撃を始める。

雨が降る中、いきなりの射撃戦が始まった。

石田

「しかし、これは地獄に仏か！？ それとも、棚から牡丹餅か！？」

キャリー

「知らない！」

つい十数分前の事を思い出して、ついつい呟く石田だった……

……回想……

石田

「あゝ、迷ったー！」

雨が降る中、雨合羽の中で頭をガリガリ掻きながら嘆いた。

監視線から外への偵察に来ていた石田率いる小隊（他は留守番）だったが、慣れていない土地だったのと、雨による視界不良が祟って迷ってしまうと言う珍事態に……

石田

「全然解らん！」

キャリー

「あの…まずは落ち着いてみたら？」

石田

「ん……………あ、そうだね」

キャリー

「なんですか、上の間は？」

石田

「き、気にするな」

今思えば、車魂であるキャリーは体である車体が濡れたらキャリーも濡れるのか？……と訊いたら、ぶん殴られそうだから訊かないが、キャリーも雨合羽を着ているのにチラリと見える限り、軍服が濡れて透けていた。

石田

「さて、どうしたもんかな？」

透明な防水パツクに入れた地図から目を離し、双眼鏡で付近を見回す石田。

ふと、双眼鏡が何かを捉えた。

雨の為、シルエットがボヤけて見え難いが何か大きめの物があった。

石田

「なんだありゃ？」

訝しげに呟く。

仕方無く、1個分隊を連れて接近を試みる。

皮肉にも雨のせいで視界が悪く石田達は接近出来た。そして、再度双眼鏡を覗くと、驚愕した。

まるで4式装甲列車の砲車の様に砲塔からニューウと突き出た砲身が見えたからだ。

直ぐに石田は相手がソ連軍の列車砲だと確信した。

そして、数日前から福本がひっきりなしに気にしていた『鉄槌』の意味が解った。

直ぐに伝令を出して、残りの3個分隊とマシンガンキャリアを集める。

石田

「いいか、これよりソ連軍の列車砲を攻撃する…視界が悪いから、合言葉を決めておく、『七』と言ったら『六』と答える…いいな！」

分隊長

「……はい！」「……」

石田

「よし、散開。合図と共に攻撃する！」

そう言うと、分隊長達は各分隊を散開させる。

そして、散開を終えた時、将校らしき人物を見付けた石田は狙いを付けて発砲した。そして……冒頭に至る。

………回想終了………

銃撃戦は石田率いる小隊の有利になりつつあった。

列車砲の警備にあたっていたソ連兵のほとんどがPPSh41・43などのマシンガンであり、99式歩兵小銃・軽機関銃と射程のリーチと自分達を確認出来て無い事を利用して徐々に制圧する。

しかし、石田は焦った。

何故なら、警備の歩兵部隊をいくら倒しても、肝心の列車砲を扱う砲兵を倒さなければ意味は無い。

石田

「……しゃあない、キャリー、援護頼む。総員突撃！」

命令を下したと同時に走り出す。

ダダダダダダダダダダ！  
ダダダダダダダダダダ！  
ダダダダダダダダダダ！  
ダダダダダダダダダダ！

軽機関銃の援護銃撃が加わる。

3時間後……………

ゴゴゴゴゴゴゴ……………

マチルダ戦車を先頭に、福本、マリィダ、ヴィルは線路に沿って進んでいた。  
何時の間にやら、雨は止んでいる。

ヴィル

「！元帥見えま……………した……………あれ？」

福本

「なんだよ、上の変な間は？」

ヴィル

「あの……………列車砲の近くに……………日の丸が……………」

福本

「……………はあ！？」

慌て双眼鏡で見ると、確かに列車砲の近くに日の丸が立っていた。

福本

「…どうなってんだ？」

マリィダ

「狐に騙された？」

ヴィル

「…それは無いでしょう」

そんな会話をしつつ更に近付くと、石田とキャリーが待っていた。

福本

「まさか…石田、お前の仕業か！」

石田

「あはは…その通りです」

マリィダ

「あれ？ 確かあなたは別の方面の偵察に…」

キャリー

「あゝ…実は雨で迷いまして…柵から牡丹餅でこんな事に…」

石田

「キャ、キャリー！(…)」

福本

「あゝ、なるほど」

マリーダ

「ふん、なるほど」

ヴィル

「…なんですか、これ？」

…何故か呆気ない終わり方になったが、ともかく、ソ連軍のワルシヤワ砲撃は阻止された。

次号へ



柵から牡丹餅（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

本土で… 帝都編

9月22日 日本

一機の富嶽が横須賀の滑走路に降り立った。  
そして、慣性を利用して待機場に来ると待機していたタラップが機  
体出入口に立て掛ける。  
出て来たのは……福本とマリイダだった。

福本

「いきなり本土からお呼びだと言われて来たが……なんだろう？」

マリイダ

「う~~~~ん……座り疲れた~~~~」

2人とも各々呟きつつ、待っていた海軍の車に乗り込んだ。

帝都 海軍省

コンコン

士官

「軍令部総長、福本元帥、マリイダ大將が到着されました」

山本軍令部総長

「よし、通せ」

士官

「わかりました。どうぞ」

福本・マリィダ

「失礼します」

事務係の士官の言葉に従い、入室する福本。  
続いてマリィダも入室する。

山本軍令部総長

「やあ、福本元帥にマリィダ大将。向こうはどうかね？ ラブラブかな？」

軍令部総長に就任してから一度も会っていないが、連合艦隊司令官の時とそれほど変わらない出迎え方だった。  
ただ…微妙に茶化しが入っているが……

福本

「お元気そうで何よりです。山本軍令部総長。あと、最後は大いに余計です」

山本軍令部総長

「おお、そうか、余計か…あと、軍令部総長は要らん。長官か…呼びやすいのにしてくれ」

マリィダ

「わかりました、山本長官」

福本

「ところで、山本長官。ほぼ世界の反対側から何故自分達を呼び寄せたのですか？」

山本軍令部総長

「おっと、そうだったな。まずは座りたまえ」

そう言つて、室内のソファーに座る様に促す。

山本軍令部総長

「先に、ギリシャ、ドイツ、ポーランド政府から我が国に対し感謝の意が届いている。祖国奪還・防衛と国民を救ってくれた事に対してだ。私からも礼を言つ。ありがとう」

福本

「頭を上げて下さい、山本長官！我々は軍人としての任務を全うしただけの事です」

山本軍令部総長

「私も同じ事を言つたが、異常な位しつこくてな…まあ、とにかく、向こうが喜んでいたらと伝えておこつ」

マリーダ

「……まさか、山本長官。それを伝える為にわざわざ…」

山本軍令部総長

「わっはっはっは、もちろん違う。実はな、3日前にある国から要請があつた」

福本

「3日前：ポーランド領内のソ連軍残党をソ連領内に追い返し、ポ

ーランド奪還作戦が実質的に終了した19日ですね」

山本軍令部総長

「うむ、それでその国と言うのはだな…フィンランドだよ」

マリーダ

「…ソ連軍がフィンランドを狙っていると聞きましたが…その事についてですか？」

山本軍令部総長

「そうだ。ソ連軍は冬季の間にフィンランドを落とし、北欧一帯を手にするつもりでいる」

山本軍令部総長は事務机に丁寧に折り畳んだフィンランド周辺の地図を持ってきて説明する。

福本

「それについては自分達も聞いております。それで、フィンランドの要請とは？」

山本軍令部総長

「ソ連軍侵攻の前兆があるから、出来れば日本軍の手を借りたいそう」

福本

「…ならば連合軍全体に要請すれば…」

山本軍令部総長

「冬季装備の関係だよ。確かに連合軍なら兵力は増えるが、冬季装備に慣れた部隊は日本軍しかない…そうゆう理由なんだよ」

マリーダ

「なるほど…それを言われると連合軍は自信が無いわね」

残念ながら、冬季装備は日本軍と第六大陸派遣軍以外の連合国はまだまだの様で、時間が掛かる。

福本

「なら、我々が行くしか有りませんね。帰って皆に話してみます」

山本軍令部総長

「そうか…ところで2人は今日何処に泊まるつもりだ？」

福本

「いえ、用事が終わったら真っ直ぐ帰ろうかと…」

山本軍令部総長

「…子供のお使いでは無いんだ。堅苦しい軍服でも脱いで、羽を伸ばしたらどうだ？」

福本

「……あのですね、山本長官……いったいどこで羽を伸ばせと…いや、その前に泊まれて…」

山本軍令部総長

「いや、このまま帰したら、密かなファンがっかりするだろう。あと、泊まるなら帝国ホテルだな」

福本

「いや…密かなファンって…」

山本軍令部総長

「それにだ…武蔵が大変なんだよ」

福本

「武蔵が？ どう？」

山本軍令部総長

「…ヤンデレ系妹に成っているそうだ」

マリィダ

「あちゃ〜、確かに病んでそう」

福本

「いや…なんで山本長官がヤンデレなんて知ってるんですか…」

山本

「天城から聞いた」

福本

「…そうですか…わかりました、呉に行きますよ」

山本軍令部総長

「あ、ついでに小澤君の相手もしてくれ。出来れば酒の相手をな」

福本

「りょーかい…」

マリィダ

「りょ〜かい」

山本軍令部総長

「それと、帝国ホテルの予約は私がとっておこう。ゆっくりしてき  
たまえ」

その時、何故か一瞬悪寒がしたが福本は気にしなかった。

そして、事務係の士官から軍服代わりのスーツと女物の洋服（いつ  
の間に用意したんだ？）を渡された。

それを着ると乗って来た車に乗り、帝国ホテルへと向かった。

帝国ホテル室内

福本はムスーとした顔で帝国ホテルの窓際に居た。

福本

「山本の親父め！ 騙しやがったな！」

予約は取れていた…偽名を使っていたが…。

問題は……相部屋で有ること！

福本

「ああ…明日の朝まで保つかない…色んな意味で…」

マリーダ

「ダイスケ… ご飯食べに行こう、それで… お風呂入って…  
一緒に寝ようね…」



……ダブルベッド……お前を恨む気は無いが……なんでこっぴ成るの？

次号へ

本土で… 帝都編（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

本土で… 呉編

9月23日

帝国ホテルで一夜を過ごした福本とマリーダは、朝早くに横須賀に向かい山本軍令部総長が手配した輸送機へと乗り込んだ。そして、呉に近い山口県内にある岩国飛行場に向かう。

岩国飛行場に着くと、既に連絡がしてあったのか、迎えが来ていた。

少尉

「福本司令長官とマリーダ参謀長ですね。お待ちしております。」  
「どうぞ」

福本

「ああ、わかった」

そう言つと、車に乗り込んだ。

車中

福本

「少尉は神戸か？」

少尉

「はい、今年の4月に卒業し、大和の連合艦隊司令部付きの少尉を承りました」

福本

「そうか、良かったな」

少尉

「いえ、これも元帥や大將が活躍されているお陰です」

一時期、『粗製乱造学校』と揶揄されていた神戸海軍士官学校も、福本達や神戸出の多い第七艦隊の活躍でそんな言葉も言われなくなり、最近では評判も徐々に上がっている。

少尉

「みんな言ってますよ。『第七艦隊に行きたい』とか『福本元帥やマリーダ大將みたいに成りたい』とか……まあ、自分は艦艇配属を希望したら連合艦隊司令部付きに回されましたけど」

マリーダ

「そうなの……まあ、こつこつ頑張れば、何時かはダイスケぐらいになれるわ」

少尉

「あはは、ありがとうございます」

戦艦大和 連合艦隊司令長官室

コンコン

少尉

「小澤長官。福本長官とマリータ参謀長をお連れしました」

小澤長官

「うむ、入れてくれ」

福本・マリータ

「失礼します！」

小澤長官

「やあ、2人とも。久しぶりだな」

福本

「お元気そうで何よりです。小澤長官」

小澤長官

「わっはっはっは、お前達も相変わらずだな…いや、背と髪が少し延びたか？」

マリータ

「流石に半年も会って無いんですから、少しは延びますよ」

小澤長官

「…そうだな、さて「お兄ちゃん」…呼ばんでも良かったか」

まさに噂をすれば影の如く、福本の背中に武蔵が転移して来た。

武蔵

「お兄ちゃん、会いたかったよ〜」

福本

「はははは…聞いたぞ、武威。お前ヤンデレに成ってたってさ」

武威

「うぐ（…）…誰から聞いたの？」

マリーダ

「山本長官」

武威

「うきゅ〜…m（…）m」

福本

「変わらんね〜、お前は」

……とか言っている内に…

山城

「おい！ 福本殿が来るとは本当か！？」

天城

「福本くん、元気だった！？」

伊勢

「おお、福本！ 居ると聞いて酒を何本か銀バエしてきたぞ！」

扶桑

「ちょっと、マリーダ！ あなたいったい向こうで何してたの！？」

大和

「扶桑さん！ 先ずは落ち着いて〜！」

信濃

「福本さん、みんな聞いて来ちゃいましたけど？」

まるで留学していた後輩が帰って来たかの様に、司令官室に雪崩込む面々に、福本も自然と嬉しくなる。

小澤長官

「よし！ 今から宴会をするぞ！」

福本

「あ、あの…酒の相手をしろと言われましたが…さすがに…」

マリーダ

「小澤長官！ ヨーロッパのお酒、大量に持って来ましたから、飲みましょう〜！」

福本

「……いつの間にか」

武蔵

「お兄ちゃん、今日はず〜と充電するから、離さないからね！」

山城

「福本殿、欧州での話を聴かせてくれ」

扶桑

「聞いたけどさ、ゴリツィアとイタリアが恋仲って本当？ あと、

マリーダがコスプレしたって本当なの!？」

……早速、ご要望と質問の嵐に福本は苦笑しながら思った。

……ああ、こりゃ帰れなさそうだな……と。

次号へ



本土で… 呉編（後書き）

明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新致します。お楽しみに。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

何なんでしょう……この振りは？

9月25日 キール軍港

戦艦播磨会議室

福本

「……と言う訳で、我々欧州派遣部隊はフィンランドの要請に応え、フィンランドに行く事になりそうだが……反対意見はあるか？」

この問いにスツと2つの手が挙がった。

マリーダ

「はい、和泉、飛騨」

和泉・飛騨ワシントン

「酒飲める!?!」

ズデーテン!!

会議室に居た艦魂達が全員ずっこけ、椅子に座っていた戦隊司令や幕僚達が一斉に手を頭にやり苦笑する。

福本

「……もう少しマシな意見は無いのかよ!?!」

この酒好き共は……と思いつつながら、質問に答えず先に進める事にした。

遠地

「別にいいぞ。どうせヨーロッパ方面が攻勢を仕掛けるのは来年だし…それに、艦隊の出番も欲しい」

福本

「出番なら、トルコ行きで出番はあると思うがね」

遠地

「なんか言ったか？」

福本

「いや、別に…フェルデナント。陸戦隊の方はどうだ？」

フェルデナント

「昨日、全部隊をこちらに呼び寄せました。一部は既にここに着いているかもしれませんが。まあ、行けと言われれば行きますよ」

福本

「無理強いをさせた様で済まない……反対意見は無いと見るが…いいいな？」

全員が頷いた。

福本

「よし、ではみんな解散してくれ。時間を使わせてしまって、済まないな」

そう福本が言うと、全員ドヤドヤと部屋から出ていく。

福本

「沖田、ちょっと待て」

沖田

「はい、なんですか？」

出て行こうとした空母部隊指揮官の沖田を福本が呼び止める。  
そして、懐から何かを取り出す。

福本

「ほら、姫さんからの預かり物だ」

沖田

「あ、これは…すみません」

渡されて慌てる沖田。

福本

「お前なあ…わざわざ許嫁が日本から手紙を書いているんだからさ…  
返事書けよ」

沖田

「いや、どうも…無事かどうか直ぐに解る地位に…ただ…どうも…」

福本

「それでも書け。これは命令だ。許嫁を泣かせたら、それこそ後々  
大変だぞ」

沖田

「…わかりました、返事を書いて出します…ありがとうございます」

福本

「遠くにいる嫁さんを泣かせるなよ……下手したら女の敵になるから」

沖田

「はい」

そう言うと、沖田は会議室を出て行った。

海龍

「ところで、沖田大将の許嫁さんって誰ですか？」

福本

「気になるか？」

海龍

「はい」

福本

「はははは…マリーダ言って」

マリーダ

「実はね、沖田大将の許嫁さんは……今上天皇陛下よ」

海龍

「……………え？ い、今なんて言いました!？」

マリーダ

「だから、今上天皇の白鶴宮明子陛下が許嫁よ」

これを聞いた瞬間、海龍の顔から驚きの余り顔から血の気が引いて真っ青になっている。

マリーダ

「……海龍、固まっちゃったわよ？」

福本

「うーん、衝撃が強すぎたかな？」

………当たり前だろう、2人共………

播磨 司令長官公室

日進

「沖田君への手紙……ふーん」

福本

「ええ……まあ、許嫁とはいえ、未だ公式発表されていませんから、海龍が固まるのも仕方無いんですけど」

沖田は華族（貴族）出身、だから、釣り合いはとれていると思うが

………

日進

「そうよね……あーあ、装甲巡洋艦時代を思い出すわ。会いたい時に会いたい人と会えたのに……今はヨーロッパにいるのに手紙もくれな  
いなんて！」

福本  
「…いや…さすがに、艦魂に手紙を出してちゃんと届くかも怪しいのに…」

日進

「あら、レディファーストの福本大介元帥が手紙も書かない人の肩を持つんですか？（怒）」

福本

「え、あ、いや…そうゆう訳では…」

やべ…地雷踏んだかも…

アーカンソー  
出雲

「福本長官、お訊きしたい事が…」

福本

「アーカンソーさん？ どうしました？」

グッドタイミングで現れた出雲アーカンソーに内心ホッとする福本。

アーカンソー  
出雲

「いえ、実は…この書物の事で…」

福本

「書物？ 見せて下さい」

そう言って出雲から受け取った本の表紙を見ると題名は『鉢かづき』だった。

そして、邪魔にならないところに『播磨所蔵 図書物』と判子が押してある。

福本

「『鉢かづき』ですか…」

アーカンソー  
出雲

「あ、それは『はちかづき』と読みますか？」

日進

「え…読めないの？」

アーカンソー  
出雲

「いえ…漢字がどうも…」

福本

「なるほど、漢字が多すぎて内容がわからない…と」

まあ、欧米の人間は漢字の様な複雑な文字を使っていないだけに、慣れるには時間がかかるだろう。

ちなみに第七艦隊では各艦艇に図書館を設置し、管理・運営を主計課に任せて本の貸し出しをしている。

まあ、最初は娯楽の一環であつたが……案外好評なのである。

福本

「確かこの物語は、貴族の姫様が母親が死ぬ間に鉢を被せられ、義母がその姫の父親に無いことばかり告げ口して姫を追い出し、追い出された姫は流浪の果てに、これまた貴族の湯殿に迎えられ、その貴族の末っ子と恋に落ちて、駆け落ちしようとしたら鉢が割れて、今まで隠されていたそれは美しい素顔が現れ、割れた鉢からは様々



な宝物が出てきて、家を継いだ2人は幸せに暮らしましたとさ……  
と言う話です」

日進

「最後は随分省略したわね」

福本

「筋は通っていますから」

アーカンソー  
出雲

「ほう……いわゆる恋愛小説ですね……ならば、マリーダ参謀長が鉢かづき姫で、貴族の末っ子が福本長官と……」

日進

「……まあ……間違っでは無いけど……ああ……なるほどね……」

妙に納得した日進と、自分に対して苦笑する福本だった。

次号へ

何なんでしょう…この振りは？（後書き）

ご意見感想をお待ちしております。

何フラゲ？

9月28日 キール軍港

フィンランド行きが決まった第七艦隊と陸戦隊。  
前線から引き上げて来た陸戦隊を息抜きさせつつ、移動準備を進めていた時……………

播磨 長官公室

福本

「……………これは本当か、フェルデナント？」

フェルデナント

「はい…正式かつ公式ルートからの打診……………無理矢理ですけど…ですので、本当かと…」

福本

「講和したから、あんまり言いたく無いけど……………大丈夫なのか？」

事務机の上にあるのは、日本経由で第七艦隊へと送られてきたイタリア政府からの打診書。

フェルデナント

「まあ、名の知れたイタリア軍のアルピー二部隊ですから……………大丈夫かと」

福本

「山岳部隊だから寒さには慣れてると思うが……北欧だぞ？」

フェルデナント

「アルプス山脈だって寒いですよ。あ、これはロンメル中将の入り知恵ですけどね」

福本

「ロンメル中将は山登りが趣味なのか？」

フェルデナント

「山登りでロンメル中将は体を鍛えましたから」

福本

「なるほどね……さて、大丈夫なのかね？」

フェルデナント

「まあ…実際見てみないと解らない…未知数ですね」

……やっぱりそうなるのね。

福本

「うーん……」

福本の前にあるのはフィンランドとその周辺の地図と将棋の駒。ただし、将棋の駒はソ連の方が多く、フィンランドの方は少ない。これは兵力…戦力の違いを表している。

福本

「確かに戦力差ならフィンランドは不利だ。しかし……」

そう言いながら、フィンランド軍の歩を進める。

福本

「彼らにとって国土が最大の武器だ。森の中の一本道はどう頑張ったってソ連軍は損害を被る…彼らの手のひらだからな」

実際、第一ラウンドで彼らはそうやって戦っている。

福本

「問題は……ソ連軍がどう動くか…だな」

何せ、敵も馬鹿じゃないだろし…

福本

「……ん」

ふと、ソ連軍の歩が動いた気がした。

しかし、気付かないフリをする。

そして、歩が動いた瞬間……

バチン！！

先に王で打つ！

福本

「海龍…ふざけるのは止めなさい」

海龍

「ちえ、バレてたんだ」

福本

「気配が漏れすぎだ。今度、変装衣装の相談を受けるついでに、伊賀に気配の消し方を教わったらどうだ？」

海龍

「…その事まで知ってるの!？」

福本

「艦隊司令長官だからな…それに、お前の情報は勝手に入ってくる」

海龍

「…あの…私犯罪者ですか？」

福本

「重要危険人物だな」

海龍

「あっさり!？」

福本

「ああ、だって本当だし」

海龍

「和泉と飛驒は？ 河内は？ ニーナは？ マリーダは!？」

福本

「あの2人は只の酒飲み、ニーナは苦情きてない、マリーダは俺が

我慢すればいいし…河内は問題外だろう…つか、なぜ出す？」

海龍

「ノリです。（ち、今度翡翠さんと相談して、もっとエロいの着させてやる〜）」

福本

「ノリねえ…」

そのノリのせいで河内が大変な事になってんじゃないのかね？

海龍

「ところで、何をしているんですか？ 地図に将棋の駒なんて置いて」

福本

「いや…イタリア軍が来るからさ、ソ連軍がどう動くかシミュレーションしてみようかと思ってね」

海龍

「将棋の駒で!?!」

福本

「ええ、手頃な所がありましたからね」

ちなみに、将棋セット一式は長官公室の正式装備である。（おいおい）

海龍

「うーん…イタリア軍と戦うって本当？」

福本

「はい、フィンランドで」

海龍

「うーん……正直に訊くけど……長官はどっちが上だと思っ？」

福本

「う……正直言うと、フィンランド軍が上かな……まあ、向こうは山岳部隊寄越すって言うてるから大丈夫だと思うけどさ」

海龍

「……不安は隠せない」と

福本

「うん、自信無い」

……本当に大丈夫か？

次号へ



## 何フラゲ？（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## フィンランドへ

10月12日 フィンランド南西部 トウルタ

第七艦隊旗艦から一隻の内火艇が下ろされた。

乗っているのは防寒被服で着膨れした、福本、マリイダ、フェルデナント、宮崎大将の日本軍首脳メンバーだ。

内火艇は岸壁に着くと、4人はフィンランド軍兵の捧げ銃に出迎えられる。

そして、その先にいる人物へと歩を進める。

福本

「大日本帝国海軍第七艦隊司令長官福本大介元帥です」

マリイダ

「同じく艦隊参謀長マリイダ大将です」

フィンランド

「同じく第七特別陸戦司令フェルデナント大将です」

宮崎大将

「日本帝国陸軍欧遣軍司令宮崎繁三郎大将です」

「フィンランドにようこそ。大統領兼最高司令官エミール・マンネルヘイム元帥です。フィンランド国民を代表して、日本軍の方々を歓迎いたします」

エミール・マンネルヘイム元帥は日露戦争時には宗主国であったロシア帝国陸軍士官として参加したため、日本軍と幾度か刃を交えていた。

ロシア革命後の内戦時は白軍…政府軍…側指揮官として戦い、フィンランド内の共産勢力を追い出し、独立を勝ち取った功労者の1人である。

それは冬戦争の最大防衛線の名『マンネルヘイム線』と名付けられている事からもわかる。

そして、現在は8月に辞任した前大統領に代わり大統領に就任、軍・政の最大責任者であった。

マンネルヘイム元帥

「あなた方、日本陸海軍が我が祖国に来てくれた事を感謝したい」

会談場所に指定されていたホテルの一室でマンネルヘイム元帥は静かに話す。

既に70歳を越え、軍・政の最高責任者であるだけにその苦勞は指揮官職に就いている4人には容易に想像がつく。

マンネルヘイム元帥

「本官は日露戦争で君達の先輩と戦った…東洋の小国とは思えない戦いぶりだった。そんな勇猛果敢な日本軍が加わってくれた事は我が祖国にとって誠に心強い」

福本

「我々は国の命令で来たまで……しかし、それでフィンランド国民

が安心出来るのであれば幸いです」

福本が代表して、本心を。語る。

マンネルヘイム元帥

「フィンランドでは東郷元帥・乃木元帥は有名です。そして今はあなた方お二人の様に有名ですな。だから、国民は安心しています」

これに4人は驚いた。

もちろん、自分達がフィンランドやトルコなどで有名なのは知っている。

しかし、まさか軍神2人に並び称される程とは思っていなかったからだ。

特に福本は、自分は若さをたてに暴れているだけだから、軍神に並び称されるのは畏れ多いとこの時思った。

その頃……

ヴィル

「どうですか、石田大尉」

石田

「おや、航空参謀。フィンランド空軍との打ち合わせですか？」

まだ10月ではあるが、北極圏に近いフィンランドの冬は早い。この為、お互い防寒被服で着膨れしている。

ヴィル

「ええ、終わりましたけど。ただ、ソ連軍は最近頻繁に領空侵入しているそうですから、近日中に侵攻して来ますね。準備は？」

石田

「出来てますよ。ソ連軍が何時来ても返り討ちに出来ます……ただ、イタリア軍の実力が未知数なのが懸念ですが」

ヴィル

「そうですか……まあ、やる事をやるだけですけど……」

ふと、フィンランド湾を見た。

石田

「どうしました、航空参謀？」

ヴィル

「いえ……確か、フィンランド湾の奥にレニングラードとクロンシュタット軍港があるんですよね？」

石田

「ええ……それがなにか？」

ヴィル

「いや、こっちの事です。では、また後で」

石田

「はい」

そう言って別れた後、ヴィルは歩きながら考えた。

ヴィル

「……どうやら、あの長官といたせいで、大胆な事を考える様になっ  
てしまいましたね」

……それから8日後、ソ連軍はフィンランドに侵攻を開始。  
後に『継続戦争』と呼ばれる戦いが始まった。

次号へ

## フィンランドへ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 攻撃と防御

10月21日

播磨 長官公室

福本

「航空戦隊を動員して、レニングラードとクロンシュタット軍港を襲いたい？」

ヴィル

「はい」

長官公室で陸戦隊服を着た福本がヴィルの提案を聞いていた。

福本

「なんだ…真珠湾の縮小でもやるうってのかい？」

ヴィル

「あえて言うならそうです。最初は戦艦で殴り込んでみようかと考えましたが、機雷の事を考えて、航空部隊に変えました」

福本

「……内容は？」

ヴィル

「まず攻撃は2回に分け、かつ、11月に入ってから行います」



福本

「2回に分けるのは構わないが…なぜ11月なんだ？」

ヴィル

「それについては、後で長官にお教えしますが…読者公開はちょっと…」

福本

「そうか、まあ、何か考えがあるなら今はいい。それで？」

ヴィル

「まず、昼間に魚雷を搭載した艦攻を加えた攻撃隊を発進させ、クロンシュタット軍港及び飛行場・軍事施設を破壊します。もちろん、港内の艦艇もです」

福本

「久しぶりに航空魚雷の登場だな。大丈夫か？」

ヴィル

「調整はちゃんとしていますから大丈夫です。そして、夜間に第2次攻撃を行います。編成は急降下爆撃機を集中、弾種は6番(60kg)及び25番(250kg)の陸用爆弾或いは焼夷性が高く効果のある3式爆弾を使用します」

福本

「急降下爆撃機と陸用爆弾・3式爆弾…どこを狙う？」

ヴィル

「レニングラード市内の兵器工場を主に狙います」

つまり、ある種の戦略爆撃を実行しようとするのだ。

福本

「だから夜間か？」

ヴィル

「もう一つ理由がありますが、そう考えて構いません」

福本

「うーむ……」

ソ連の事だから、夜間も大量の工員を使って生産活動に入っているかも知れない。

もちろん、反対に工員が少ないかも知れない。

つまり、五分五分。

ヴィル

「自分も出来る限り無差別爆撃をするつもりもありません。ですから、急降下爆撃なら大丈夫だと思います……ただ、結果的に民間人から被害が出るかもしれません……」

確かにこれは難しい判断だ。

福本

「……作戦は来月だったな？」

ヴィル

「え、あ、はい」

福本

「よし、昼間の空爆で逃げてくれたらいいが、念のためにこちらも何かしら手を打とう」

ヴィル

「では…許可出来ますか!？」

福本

「ああ…責任は全て俺が持つ。攻撃隊には民間人への厳禁を徹底してくれ」

ヴィル

「わかりました! 失礼します!」

そう返事をするとう長官公室を出て行った。

福本

「さて…これは俺の影響かな? ……いや、そうだな」

苦笑しつつ、ヴィルの持ってきた作戦計画書をパラパラと捲る。

マリィダ

「うにゅ〜…ヴィル君と何話してたの〜」

なぜか眠そうな目をしてだらしなく軍服が着崩れたマリィダが長官私室から出て来た。

福本

「マリィダ…何してたの?」

マリィダ

「え〜と…大介の寝室に行ったら眠たくなって…さっきまでベッドで寝てたの…」

福本

「…どこから聞いてた？」

マリイダ

「え〜とねえ…レニングラードとクロンシュタット軍港を攻撃したい…ってところかりゃ…」

福本

「全部聞いてるやん。(^.^)」

マリイダ

「けどお…無意識だったかりゃ、理解してないのお…」

…：…今の状態なら完璧に翡翠が襲うな。

福本

「まず、顔洗って、陸戦隊服に着替えてきなさい。俺、遠地にこの事話して来るから。(俺は母親か?)」

マリイダ

「にゃ〜〜い」

福本

「(本当に大丈夫か?)」

心配しつつ、長官公室を出て行った。

石田  
「お待ちしておりました！」

福本  
「すまない、石田。わざわざ迎えに来てもらって」

石田  
「いえいえ、第六中隊の習慣になってしまいました」

防寒被服を着た福本とマリィダはいつもの通り、前線へと向かう。

石田  
「あれ、航空参謀は？」

福本  
「ああ、ヴィルなら私用と公用で後から来る」

石田  
「そうですか。よし、出せ」

福本とマリィダが乗ったのを確認して、石田は兵に車を出す様に命じる。

ちなみに、乗っているのはジープ。

福本  
「どつだ、向こうは？」

石田

「さすがフィンランド軍です。スオメン（森の人）と自らを呼び、自分の祖国をスミオ（森の国）と呼ぶだけあって、森を巧みに利用して戦っています！」

石田の話によると、フィンランドは国土の大部分が針葉樹林の森に覆われており、冬でも葉を落とさない鬱蒼たる針葉樹……クリスマツリーに使う木……の森にある一本道の進撃路をノコノコ通るソ連軍を、神出鬼没のフィンランド軍スキー部隊が前と後ろを襲い進退不能にして、包囲殲滅する戦法……モツティ戦術と言う……を駆使し各地でソ連軍を大混乱に陥れているそうだ。

石田

「皮肉にも、イタリアから派遣された山岳部隊のアルピー二部隊がスキーに慣れていた為、直ぐに戦線に投入されたそうです。名誉心を擽られたのか、アルピー二部隊は奮闘中です」

マリイダ

「まあ、彼らはローマ帝国の末裔だからね」

福本

「まったくだ…他には？」

石田

「現在フィンランド軍で人気は我が軍の噴進砲です。森の中でも小回りが効いて、ディーゼルエンジンのソ連軍戦車を一発で撃破できるからだそうです」

生産のしやすい噴進砲は今や日本・満州・朝鮮・台湾・第六大陸でも行われており、在庫が有りすぎて困っている程と聞いている。それをフィンランド軍に無償提供したところ、案外人気である。

福本

「なら…後は我慢比べだな…さて、どちらが先に根を上げるかな？」

次号へ

## 攻撃と防御（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。



## モツティ戦術

10月23日

ソ連軍が針葉樹林の一本道を進んでいた。  
戦車、装甲車、トラック、歩兵……などがノロノロと進んでいる。  
まあ、一本道なのだから縦列になって進むしかなく、自然にノロノロとなるのは仕方無いのだが……

石田

「（ソ連軍の縦列は長いですね）」

福本

「（ノロノロ進んでいるから余計だ）」

針葉樹林の中で息を殺しながら、ヒソヒソ話す福本と石田。

マリイダ

「（まだ先頭は到達しないの!?!）」

福本

「（…とにかく待て）」

マリイダが我慢に耐えかねて悪態を吐きながら歩兵銃を持つ。  
まあ、待ち伏せとはそうゆうものだ。

実際、福本だって何度銃の引き金に指を掛けかけたか解らない。

しかし、これはフィンランド軍との合同襲撃であり、モッティ戦術にしたがって攻撃するのだから、自分達が勝手にやって、友軍を危険に晒す訳にはならないのだ。

福本

「（…しかし…遅い）」

そう思った時……

ポバーン！ゴワーン！

ゴワーン！

右と左…つまり前と後ろ…で爆発音が響いた。しかし、福本はおかしいと思った。

何故なら、前には陸戦隊の6式重戦車を配置していたが、1両のみだ。

だから、爆発音が2回とゆう事が解せない。しかし、前にいるソ連軍には明らかに動揺している。どっちら、ここで襲撃されるとは思っていなかった様だ。

福本

「よし、撃て！」

石田

「重火器分隊、敵装甲車両を狙え！ 残りは撃ちまくれ！」

ダダダダダダダダダダダ

ダダダダダダダダダダダ

ダダダダダダダダダダダ

ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！ダン！

……

99式軽機関銃が吼え、99式歩兵銃が放たれる。

横合いからの突然の襲撃にソ連軍は混乱に陥っている。

ソ連軍の混乱の始まりは先頭を進んでいた部隊からの報告だった。

なんと、見たことが無い戦車……6式重戦車……が道を塞ぐ様に止まっているとの事だった。

指揮官は1両と聞いて、直ぐに撃破する様に命じた。そこで命令を受けたT34が発砲した。

距離は200m……簡単に撃破は出来ると思った次の瞬間、砲弾は命中した。

しかし……相手はケロリとしていた。

慌てたT34の車長は後ろにいる投入されたばかりのT-34/8

5……日本軍では新砲塔T34……に撃破を依頼した。

しかし、そんな悠長な事をしている間に6式重戦車が発砲……距離が200mだったせいもあって、なんと、撃ったT34の車体を貫通し、後ろにいたT-34/85の前面車体装甲を貫通し、一気に2両を残骸に変えた。

これに驚いている間に横合いからフィンランド軍のスキー部隊に先頭の部隊は襲撃された。

また、最後部でもフィンランド軍は襲撃を開始していた。

福本

「もつそろそろだな……石田、時間だ！ 引き上げる！」

撃ちながら腕時計をチラリと見た福本は石田に向かって叫んだ。  
襲撃は5分と決め、5分経ったら後退すると決めていた。

石田

「はい！ 総員所定の場所に後退！」

命令を聞いた兵達がスキーを履くと素早く移動を始める。  
所定の位置にはフィンランド軍が付けた案内役のフィンランド兵が  
待機している。

石田

「元帥！ 撤収完了！」

福本

「よし、マリーダ！ 行くぞ！」

マリーダ

「ええ！」

しんがり  
殿を引き受け、部隊の撤収を確認した福本は同じく残ったマリーダ  
と一緒に後退した。

しかし、これで終わりでも無い。

撤収位置には案内役と一緒に重火器及び弾薬を載せたソリも待機し  
ている。

フィンランド軍ではソリに武器・弾薬を載せて移動し、襲撃を繰り返す  
返すそつだ。

福本

「さて、ソ連軍はどこまで踏ん張れるかな？」

福本はニヤリと笑いながら所定の位置に向かってスキーを滑らせる。

この様に襲撃する（一部作者の独自解釈だが）モッティ戦術はソ連軍にとって厄介なものであり、一度襲われると大混乱に陥って収拾がつかなかった。

これにはソ連軍自慢の数で押す物量作戦は効かず……それどころか余計に混乱して被害を増やす……また、破壊力の大きいソ連軍の野砲や重火砲も役に立たなかった。

もちろん、ろくな戦闘もしないでゲリラ戦で大被害を出すのだから、モスクワのスターリンは史実のヒトラー並みに怒り狂っていた。しかし、そんなもんは現場を知らずにお山の大将で命令を出すスターリンがある意味悪いのであって、不可抗力である。

また、スターリンにとって意外だったのは日本軍がこの戦闘に加わっていた事……この時点でスターリンは日本軍が冬季装備がきつちりしている事を知らないし、参加している事も知らない……であり、その真実を知るのはフィンランドの奮闘が世界に知れ渡って初めて気付くのであった。

次号へ

## モツティ戦術（後書き）

明日・明後日は定期更新『士官候補生異世界奮闘記』を更新致します。お楽しみに。

ご意見感想をお待ちしております。

## 北欧情勢変化セリ

さて、冬戦争でもそうだったのだが、既にイギリス・ドイツ・アメリカから多数の支援：主に武器弾薬や戦闘機などの航空機：が送られていた。

また、他の北欧諸国では同じくソ連の脅威がある為、予備役や休暇を採った正規兵などで編成した義勇軍を送る手筈であった。

本来なら、正規軍を送り込みたいのだが、ソ連の外交圧力により出せなかったのが事実だ。

今回もソ連政府：と言うよりスターリン：は外交圧力により、ノルウェー・スウェーデン両国共に正規軍を出せない筈：であった。

しかし、その考えは大いに外れ、10月30日、ノルウェー・スウェーデン両国はフィンランド政府に対し正規軍派遣の意思を傳達した。これ知ったスターリンは直ぐにノルウェー・スウェーデン両大使を呼び出し『今すぐ正規軍派遣を撤回せよ！』と恫喝を加え、最終的には実力行使も辞さないと外交圧力をかけた。

しかし、両国大使は頑として受け継げず、反対に『どうぞどうぞ、そんな戦力なんて無いのに』と挑戦的な言葉を残し部屋から出て行った。

これを聞いたスターリンは激怒し、両国に国交断絶を通知した。これが11月1日午前の事である。

しかし、午後にはノルウェー・スウェーデンは連合軍参加及び連合国側に付く事を表面した。

また同日、トルコ政府も連合国側に付く事を発表した。これに対しスターリンは余りの事に驚愕するしかなかった。

この僅か1日……あるいは数時間……の間に起きた一連の出来事は

連合国の工作である。

発端は北欧であるノルウェー・スウェーデンが冬戦争時にフィンランドに対し積極的支援策が取れなかった事である。

これは外交圧力に屈したのが原因であるが、裏を返せばバックとなる国がなかった事がある。

しかし、冬戦争時はイギリス・ドイツ共に必死に戦力回復・増強に力を注いでいた為、仕方ないと言えば仕方ない。

だが、日中戦争で活躍した日本軍が太平洋戦争でソ連の支援国だったアメリカを全面的優勢のまま講和を結んだ事により状況が一変する事になる。

つまり、太平洋のアメリカに戦力と国力を傾けていた日本と、ルーズベルト大統領の下で日本に対してのみ戦力を振り向けていたが、トルーマン大統領に代替わりして政策を見直したアメリカ、そして日本の同盟を結んでいる第六大陸が対ソ戦に力を入れ始めた為、戦力バランスが逆転、連合軍が盛り返し始めた。

さて、長々と前置きが長くなってしまったが、連合国は諜報機関を総動員してポーランド奪還作戦前からソ連の戦力を調査・集計していた。

そして、それを総合した結果、ソ連軍は重大な戦力不足である事が判明した。

さすがに4年以上戦争をやり続け、無茶な作戦、損害無視の正面攻撃、大きく分けて2正面作戦などにより大幅な戦力低下に陥っていた。

特に第七艦隊が欧州戦線に参入してから、ソ連軍の損害は増え続けている。

そして、冬季を利用してソ連軍は戦力回復に努めようとしている。

そこで連合国側はその戦力回復力を少しでも減らす為にノルウェー・



スウェーデン・トルコと交渉を始めた。

つまり、連合国側に付かないか？…と持ち掛けたのである。

もちろん、軍事援助を行う事も付け加えてだ。

そして、水面下でソ連にバレない様に話を進めて行き……11月1日の出来事へと発展していく。

これにより、ソ連は更に戦線に投入する戦力を増やさざるおえない。現在のソ連軍は2正面だが細かく分けると4つの戦線が存在する。

#### 1 フィンランド 北欧戦線

#### 2 南欧戦線（ポーランド・ソ連国境）

#### 3 黒海戦線（ギリシャ、これにトルコが加わる）

#### 4 アジア戦線

つまり、いくらソ連軍が戦力を有していても、どちらにしる戦力を分散派遣するしかない。

しかし、古来から『敵は分散、味方は集中』と兵法で言われているから甚だ不味い状況なのであった。

さて、驚愕から覚醒したコスターリンは激怒、フィンランド侵攻軍に対し、フィンランドを早期攻略する様に司令部の尻を叩き、レニングラードに戦力を集中する様に直々に命じた。また、トルコに対して侵攻作戦の準備を命じた。

次号へ

北欧情勢変化セリ（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 空襲作戦 1

11月10日 バルト海フィンランド沿岸

空母紅龍艦橋

紅龍

「久し振りの出番です」

沖田

「あはは…そうだね」

……妙な始まりだな。

紅龍

「それは作者さんの責任です。司令の私より海龍さんを多く出すからでしょう?」

……仰る通りです。

沖田

「まあまあ…さて、待ちに待ったヴィル航空参謀が提案した作戦が意外な事になったな」

紅龍

「歴史研究者がどう論議するでしょうね?」

沖田

「多分、余りの出来過ぎた話ですから、最初から計画された事と言われるかも知れませんが。最も機密文章や福本長官が自伝を出せばひっくり返るでしょうけど」

紅龍

「なら、沖田司令が陛下に今まで返事を書かなかったのはウブだったからで、初めて返事を書くときに私に相談した事も論議になりますでしょうかね？」

沖田

「あつと…それを言われると…弱ったな…」

苦笑しながら沖田は言った。

紅龍

「それで、航空参謀はどちらに？」

沖田

「下でブリーフィングをしているよ」

搭乗員待機室

ヴィル

「…と、言う事で意外な形に成ってしまったが、近日中に大攻勢に出るソ連軍の出鼻を挫く為、クロシュタット軍港及びレニングラード空襲作戦内容については以上だ…質問は？」

全員

「……………」

ヴィル

「よし…では、これより攻撃を開始する！ 総員掛かれ！」

搭乗員全員が一斉に立ち上がり敬礼するとドヤドヤしながら出て行った。

ヴィル

「…ふう…やっぱり、偉そうにするのは慣れないや」

アリソン

「あら、今までの中で一番貫禄があったわ」

ヴィル

「それはどうも…行かなくていいの？」

アリソン

「もちろん、今からよ。じゃあ、あとでね」

ヴィル

「ああ…あとでね」

20分後…第七艦隊の各空母より第一次攻撃隊が発艦した。

ロシア帝国やソ連が南進したのは不凍港を求めたからである。冬に海が氷により塞がれ港が使用出来なくなるのがソ連領内の港である。

この冬季間は、最低限の乗組員を残し、後の乗組員は陸上にかかる

のが普通だ。そして、今年もそうだった。まだ完全に移動が終わってはいなかったが、それでもほとんどの乗組員が陸上の兵舎に移っていた。しかし……今年はこれがいけなかった。なぜなら、そんな彼らの上空を日本軍攻撃隊を通り過ぎたからだ。

大宮

「よし！ 奇襲成功だ！ 雷撃隊続け！！」

無線に叫ぶと一気に流星を降下させる。

クロシユタツト軍港にはバルト艦隊所属の戦艦ガングート、マラート、巡洋艦キローフ、嚮導駆逐艦（駆逐艦隊を指揮する旗艦用大型駆逐艦）2隻、駆逐艦17隻潜水艦60隻以上が停泊している。しかも、冬季に備えて乗組員のほとんどが兵舎にいた。

大宮率いる艦攻（雷撃）隊は戦艦のガングートを狙う。流星にはこの日の為に調達・調整した91式航空魚雷改二…浅深度魚雷が腹にあった。

大宮

「よゝそろ…よゝそろ…よし…良いぞ…」

自ら握る操縦桿を微妙に動かしつつ、魚雷投下のタイミングを計る。艦船側からの対空砲火は少なく、散発で統制がとれていない。また、陸上の対空火器は戦闘機、彗星艦爆が徐々に制圧させていく。

大宮

「よし…よし…よい、てえ！！」

カチン

ザバン！

シャー……

ドゴーン！

搭乗員

「やりました！ 命中！ 命中です！」

搭乗員の声に振り返ると、命中を示す水柱が上がっている。

また、僚機も次々投下・命中させていく。

大宮は10本目の命中を確認すると命中数を数えるのを止めた。

大宮

「停泊艦隊の攻撃だが……まあ、久し振りの対艦攻撃だからな……それにいくら戦艦でも10本も命中すればお陀仏だな」

一通り見回すと、マラート、キローフなどの艦艇にも確り魚雷を当てている。

また、港湾施設や対空火器、地上の装甲砲台や砲台の攻撃もあらた成功している。

大宮

「よし、クロシユタツト軍港攻撃は成功だな。後は第二次隊に任せて帰還する」

搭乗員

「了解！」



レニンググラード付近のソ連軍飛行場上空

アリソン

「直衛隊が上がってるわね……いいわ、相手してあげる！ 私とクリス少尉の隊は直衛隊を襲撃する！ 後は飛行場を襲撃せよ！ 掛かれ！！」

グイーン……

2手に別れ、それぞれの目標に向かう。

しかし、ソ連軍戦闘機隊は向かってくるアリソン・クリス隊ではなく、降下する襲撃隊の方へと向かい降下した。

多分、直衛隊の存在に気付かずに襲撃隊が降下したと考えたのであるう、奇襲を掛けるべく向かった。

しかし、降下中にアリソン・クリス隊から逆に奇襲を掛けられ、直衛隊は鴨と化してしまった。

降下する内に、段々と飛行場の状況が解ってきた。

飛行場には大攻勢を掛けるべく集めた戦闘機・爆撃機が所狭しと並んでいた。

クレア

「全機、獲物には困らないわ！ 全部燃やすわよ！ 掛かれ！」

上空の敵機に慌て発進しようとするソ連軍戦闘機。  
しかし、飛び上がったばかりの戦闘機、滑走中の戦闘機はただの獲物でしか無い。

パシューーン！パシューーン！

ドカーン！ドカーン！

ズダダダダダ！

ドドドドドドド！

ゴワーン！

飛行場もあつという間に被害がうなぎ登りしていた。しかも、これで終わりではなく、第二次攻撃隊が接近していた。

次号へ

空襲作戦 1 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 空襲作戦 2

紅龍艦橋

沖田

「戦艦ガングート、マラート、巡洋艦キローフは大破着底：これは撃沈判定と推定していいでしょう。後の駆逐艦や潜水艦もこの様子では無事ではありませんね」

紅龍

「ガングート型戦艦やキローフ型巡洋艦の砲塔から流用した装甲砲台や砲台、港湾施設の攻撃も成功しています。また、飛行場の襲撃もそれほどの妨害を受ける事無く、大半を破壊・損傷させた様子です」

沖田

「まあ制空権を失い、二度の攻撃を行われてはレニングラード・クロシユタット軍港の軍事施設は当分の間立ち直らないだろう」

ヴィル

「失礼します」

沖田

「やあ、ヴィル君。第一次攻撃は大成功だね」

ヴィル

「ありがとうございます……と言いたいところですが、遠龍の白河艦長、富田副長経由で杉田上飛曹からの気になる報告がきています」

沖田

「杉田上飛曹が……来ますか？」

ヴィル

「ええ、遠龍さんが送るそうです」

同会議室

杉田

「少し自信がありませんでしたが、ガンカメラに写っていました」

そう言って渡したのは現像された写真だった。

沖田

「…四発機ですね」

杉田

「はい。ソ連軍飛行場を襲撃した時に写した物です」

ヴィル

「杉田上飛曹、その時の事を詳しく」

杉田

「はい、自分は第一次攻撃に参加していました…」

……回想……

杉田

「紫音、行くよ！」

紫音

「ああ、いつでもいいぞ！」

他の襲撃隊の戦闘機と共に降下する杉田飛曹長の乗る紫電改2型。杉田機も他の機同様に敵の戦闘機や爆撃機を狙うつもりだった。

しかし、ふと視線を移してみると、滑走路の隅の方に見慣れぬ機体が置いてあった。

見えるだけで10機：しかも四発機だ。

杉田

「紫音！ 目標を変えるよ！」

紫音

「ん…ああ、わかった！」

直ぐに噴進弾の発射ボタンに手を掛ける。

杉田

「てえ！」

シュパパパパパ！

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！

杉田・紫音

「「食らえ…！」」

ズダダダダダダダダダ！ズダダダダダダダダダダダ！ズダダダダダダダダダダ！ズダダダダダダダダダダ！

杉田が引き金を引くと同時に紫音の双刀が放たれる。一度銃撃しながら四発機の上を通過し、反転、銃撃を繰り返す。

そして、銃弾が尽きた為、杉田機は第二次攻撃隊に後を託した。

……回想終了……

杉田

「……といった経緯です」

ヴィル

「ありがとうございます、杉田上飛曹」

杉田

「それでは、紫音が心配しているかも知れませんが、失礼します」

沖田

「ああ、紅龍。遠龍まで送ってやりなさい」

紅龍

「はい」

そして、杉田と紅龍は部屋から出ていった。

沖田

「知らぬが仏とは、よく言ったものだ…ソ連軍が四発重爆を保有していたとはな…」

ヴィル

「仕方ありません。アメリカ軍の様にそれほど頻繁に出していませんから…ある種の隠し玉です」

沖田

「うむ…それよりも、四発重爆の正体を知りたい…ドイツ・イギリスの諜報部に問い合わせよう」

ヴィル

「はい…それともう一つ」

沖田

「『夜間空襲の目標に飛行場を追加したい』だろうか？」

ヴィル

「その通りです」

沖田

「それについては、君の作戦なのだから、君に任すよ。もっとも、福本先輩も同じ事を言う筈さ」

ヴィル

「あはは、そうですね。では、失礼します」

そう言っつてヴィルは退室した。

沖田

「…四発重爆を出したとゆう事はソ連軍はフィンランドの首都ヘル



シンキも襲うつもりだったな……よほどスターリンは慌ている証拠だ……さて、福本先輩。次はどの様な手を打ちますか？」

誰も居なくなつた会議室で少し微笑みながら沖田は、居たら訊いていた質問を呟いていた。

午後7時頃……第七艦隊の正規空母では明々と照明が点灯していた。夜間空襲隊の流星35型、急遽編成された飛行場攻撃隊の流星と紫電改を加えた攻撃隊は既に発艦準備を終えていた。そして、各艦では発艦可能を示す白旗が振られた。そして、カタパルによって夜間空襲隊は発艦した。

次号へ

空襲作戦 2（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

### 空襲作戦 3

昼間の空襲はバルト艦隊とクロンシュタット軍港・レニングラード付近の飛行場に集中していた航空機は大被害を被ったものの、陸軍軍事施設と飛行場施設は余り被害はなかった。しかし、陸軍軍事施設はヴィルの作戦計画に従い、攻撃を控えていた。そして、夜になり……

グオングオングオングオングオングオング……

ソ連兵

「なんだ？」

歩哨のソ連兵が聞き慣れぬ音に足を止める。その瞬間、上空が光った。いきなりの事に手で目を庇う。その時、上空を通過する航空機が見えた。なんと…翼に日の丸が見えた。

ウウー！！

今さらながら、空襲警報が鳴った。しかし、続いて爆発音。

見ると、敵機が降下して爆弾を投下していた。

ソ連兵

「敵だー！ 敵の空襲だー！！」

彩雲を先行させ、照明弾を投下、目標を確認した彗星隊は爆弾倉に納めてあつた3式爆弾を一気に投下した。

軍事施設を敢えて破壊力の高い爆弾を使わず、焼夷性の高い3式爆弾を使用させたのはヴィルの指示である。

この指示に当初艦爆の搭乗員や整備兵も頭に疑問符を思い浮かべたが、福本元帥が信用する航空参謀であつたから、余り気にせず従つた。

投下された3式爆弾は上空70メートルで炸裂、周りに存在する倉庫、兵舎などの施設に着火し、戦車、自走砲、車両などの武器類にも通常爆弾と共に3式爆弾を投下した。

これにより発生した火災は瞬く間に広まり、中でも弾薬庫は大爆発と共に炎上し始めた。

その為、ソ連兵は空襲警報が鳴り響く中、消火ホースを引っ張り出して来て消火にあつた。

これを炎上する炎越しに見ていた爆撃隊は何もせずに爆撃を終えた機から順次引き上げていった。

レニングラード工場地帯上空

大熊

「ソ連の工場地帯か…」

彩雲によって投下された照明弾により明るくなった空から、ポツリと呟いた。

大熊

「よし、念のためだ。おい、後ろの13mmで探り撃ちをしろ」

搭乗員

「はい」

工場地帯攻撃隊は陸軍施設攻撃より5分程時間を置いて飛来した。これは福本やヴィルの懸念事項であった。民間人が巻き込まれる可能性』を少なくする為である。

史実のアメリカ軍の様に無差別爆撃をしたくない第七艦隊首脳部は、この事が工場地帯爆撃時の最大懸念であった。

その為、軍事施設を先に攻撃し、その際の空襲警報によって工場内の工員を避難させる時間を与え形をとった。

だからといって、時間の与え過ぎはよく無いので5分〜10分の間を開ける事に決められていた。

ダダダダダダダ！

後方の旋回機銃が唸った。地面に着弾を示す土煙が上がった。しかし、これと言った反応は無い。

念のために、二度銃撃したが反応は無かった。

大熊

「よし、野郎共！ 一仕事やるぞ！」

全員

『『『『『『『『おうー！！』『』『』『』『』

ギューーウ……



照明弾によつて照らされた飛行場には真新しい機体が置かれていた。そして、あの四発重爆も……

杉田

「よし、行くか」

500kgまで爆弾を搭載可能な紫電改は今回250kg爆弾2発を装着して参加していた。

先陣きつて降下した杉田機は例の四発重爆に狙いを定める。

杉田

「よーい……てえ！」

カチッ

ドガン！ドガン！

杉田機の攻撃をきっかけに後続の紫電改隊と流星隊が緩降下爆撃と水平爆撃を開始する。

杉田

「よし、攻撃終了。帰還しよう」

帰還する攻撃隊の後ろには燃える機体と格納庫が明々と周囲を照らしていた。

次号へ

空襲作戦 3 (後書き)

ご意見ご感想をお待ちしております。



## 敵損害甚大成り

11月11日 午後 モスクワ クレムリン

スターリン

「…ヤポンスキーめ！！ よくもやってくれたな！！！」

担当官からの報告を受けたスターリンは激怒しながら吠えた。

ここはモスクワ、クレムリンのスターリンの執務室。室内にはスターリンと報告にきた担当官に将軍や閣僚やら云々がいる。

さて、読者は解ると思うが受けた報告はレニングラード・クロシユタツト軍港の被害状況である。

クロシユタツト軍港は港湾施設・砲台を含め壊滅、バルト艦隊はガングート、マラート、キローフなどが撃沈破されほぼ全滅。

まあ、海軍音痴のスターリンにとっては半分どうでもいいことだ。しかし、問題はレニングラードの被害を聞くまでだった。

まず、集結していた戦車、自走砲、車両はほぼ全滅。陸軍基地も火災により壊滅、特に弾薬庫は全てが吹っ飛んだ。

また、工場地帯はほぼ全焼。

飛行場に集結していた空軍戦力も昼夜の空襲で全滅、施設も大損害。更に、レニングラードの駅にあった弾薬・物質が貨車ごと爆撃された。

これだけでスターリンが激怒するのは当たり前。

だが、これだけで終わらず、復旧見込みを聞いた瞬間、更にキレた。なんと、陸軍基地及び工場地帯復旧作業に着手するのに春を待たなければならず、特に工場地帯の完全復旧には更に最低でも半年以上の期間を有すると報告が出た。

何故かと人を殺せる叫びを上げ質問した答えは簡単だった。

日本軍が主に使用したのが焼夷弾（3式爆弾）だったので、火災の発生によりとにかく、水をぶっかけた。

季節は冬、しかも北極圏に近く、厳寒期に入りかけていたから質が悪かった。

つまり、火災消火の為に使った水が一晩経つとカッチンカッチンに凍ってしまったのだ。

まあ、一晩経たなくても、放水後には、その場で凍結する有り様だった。

この為、被害範囲が限られていても、復旧作業はまず放水により凍結した残骸を撤去する必要がある、撤去するには再度火を焚いて凍結した残骸の氷を溶かす必要がある。しかし、火事現場で再度火を焚くのは、ガソリンがこぼれた所で火を焚く様なもので有り、極めて危険かつ困難な事だった。

特に工場では、焼夷弾と共に投下された通常爆弾により生産機器や機材を破壊し、今や世界中相手に戦っているソ連には高性能の外国製機械は入手困難で、自国製の性能面・信頼性に疑いがある物を使うしかない。しかも、弾薬・物質・武器類が一気に、そして大量に失った為、これの都合もつけなければいけない。

だが、2正面4戦線で戦うキツキツなソ連軍にとっては何処かの分を大幅に削る必要がある。

となると、南欧戦線、黒海戦線、アジア戦線の3つの何処から引き抜くしか無い。

しかし、南欧・黒海からは引き抜け無い為、アジア戦線から出すしかない。

しかし、それでも到底足りない。

スターリン

「くそ…ヤポンスキーめ…許さん！ 許さんぞ…」

ちなみに数日後、福本に対する獎金が上がったとか、上がらなかったとか……

11月13日 空母紅龍

司令公室

沖田

「どうやら、君の考えは一寸の狂いも無く的中したね」

ヴィル

「はい」

2人の前にある机には、ゲーレン機関が手に入れた、レニングラード・クロシュタット軍港の被害報告書だった。

沖田

「今頃スターリンは青筋浮かべて激怒しているだろうな。味方に利する筈の冬将軍がこんな形で敵に利用されたんだからな……しかし、どうゆう風に消火放水の水を凍結させて復旧作業着手を遅らすなんて考えたんだい？」

ヴィル

「只単に爆弾を投下すれば、残骸を片付けるだけで復旧作業に入れます。そこでどうしたらそれを遅らせれるか考えたんです。そして、福本元帥の言葉を思い出したんですよ」

沖田

「先輩の？ 何だ？」

ヴィル

「『フィンランド軍は国土を武器に戦っている』とゆうのをです。ならば、こちら自然を利用しようと考え付いたんです」

沖田

「…あつはつはつは！ そうか、先輩の一言か、なるほどね、だから11月、しかも夜の作戦実行か…さて、当然怒り心頭のスターリン、次はどうするか？」

ヴィル

「多分、カレリア地峡のマンネルヘイムラインを犠牲無視で突破しようとするでしょう。それが一番確実克つ心理的影響が多いですから」

沖田

「ならば、忙しくなるぞ。何せ相手は激怒したスターリンだからな」

ヴィル

「大丈夫です。福本元帥が戦場に立ち続ける限り、我々が負ける事はありませんよ」

次号へ

敵損害甚大成り（後書き）

明日・明後日は定期更新の『士官候補生異世界奮闘記』を更新して  
います。お楽しみに。

ご意見・ご感想をお待ちしております。





しかし、上記の事が理由でそれほど被害の無いマンネルヘイムラインは待避壕から出て来たフィンランド兵・日本兵に瞬く間に固められた。  
また、長野大佐率いる戦車連隊も退避場所から直ぐ様駆け付け、ソ連軍を待ち構える。

長野

「ソ連軍のやり方は簡単だ……戦争を教えてやるか」

彼の乗る六式重戦車は車体を白く塗り、砲塔には『666』の数字が書かれている。

長野

「カクカク、散会し各自で仕留める。但し、戦闘開始は本車が撃つまで待て……以上」

無線に一通り命令を出すと、双眼鏡を取り出して、ソ連軍を見る。先頭にJS-2、T34、T34/85、KV-2などの戦車がタンクデサントを乗せ接近して来る。

これに対し、フィンランド兵も日本兵も撃たない。敵を誘き寄せ、あくまでもやられたフリをしている。

長野の六式重戦車はJS-2に狙いを定めた。

そして……

長野

「よし！ 撃てー！」

ドンー！



ズガン！！

塹壕の一步手前まで来ていたJS-2が10cm徹甲弾に貫かれ、砲塔が宙に飛んだ。

同時にタンクデサントも吹き飛ばされた。

それが合図であったかのように……戦車連隊にとっては合図だが……一斉に銃砲が火を吹いた。

五式重戦車の90mm徹甲弾がKV-2を残骸に変え、四式中戦車の88mm徹甲弾がT34系統を一方向的に破壊する。

重軽機関銃が歩兵を足止めし、迫撃砲弾が頭上から襲い掛かる。

幸運にも陣地に接近出来た戦車も至近距離から日本兵やフィンランド兵の噴進砲が炎上する鉄の塊に変えてしまう。

それでも無事に接近出来た戦車は塹壕に落ちて日本兵とフィンランド兵に襲われる。

歩兵は足止めを食らい、戦車はまともな応戦も出来ず残骸と化す。

何せ、ソ連軍戦車は何かしら構造に欠点があり、KV-2戦車に至っては巨大な砲塔を人力で動かす……さすがロシア人！？……為、

砲塔の旋回速度は遅く、四式中戦車の砲弾を受けて撃破されるのが早い位だ。

そんなこんなで、作戦は失敗とみたソ連軍は戦車が先ず後退を始めた。

これには酔っ払っていたソ連兵達が驚いた。

なぜなら、部隊付きの政治将校から『我が無敵の戦車軍団が蹂躪した陣地を制圧すればよい』と言われていたから、期待の戦車軍団が突然後退を始めたから、驚きのあまり酔いが一気に吹き飛んだ。

それに、戦車がわざわざ旋回して後退するわけは無く……旋回すると側面や後面などの戦車の弱点を狙われる……そのままバックして後退する。

車のバックとは訳が違い、鉄で固められている戦車は視界は極端に狭く、後方視界は無に等しい。



兵連隊の餌食となった。

最初に三式弾を撃ち込み、次に通常弾を装填し憂さ晴らしの如く撃ちまくった。今やソ連軍のやり方はパターン化し、それに対する準備さえしていれば容易に撃退する事が出来ていた。

結局、この日の攻勢は大損害を被り失敗に終わった。特に重火砲とカチューシャは砲撃により多くが破壊された。ここに至ってソ連軍は再びマンネルヘイムラインが容易に抜けない事を実感した。

次号へ

マンネル Heimライン攻防戦（後書き）

ご意見感想をお待ちしております。

## フィンランド上空戦

さて、『空を制すれば、戦も制す』と……実際、それでも難しいが……言われている。

地上のマンネルヘイムラインなどで戦っていれば、もちろん、天候が良ければ空でも味方を支援しようと思戦になる。

しかし、ソ連空軍は冬戦争以上にパイロットの消耗が激しく、パイロット不足に陥り、新米が平気に送られて来る程だった。

そんなパイロットに数少ないベテランパイロットは、フィンランド空軍や第七艦隊の場慣れしたパイロットを相手にしなければならなかった。

11月16日

マンネルヘイムライン上空

ソ連空軍の戦闘機隊に護衛された爆撃部隊が丁度前線上空に差し掛かった。

そして、爆弾倉から爆弾を投下しようとした時……

ドダダダダダダダダ!

ドダダダダダダダダ!

ゴワーン!!

降下して来た烈風に一機が主翼を撃ち抜かれ、撃墜された。

慌て周りの僚機が旋回機銃で応戦するが次々と降下する烈風に効いた様子は無い。  
しかも、旋回機銃手らが見たのは、敵戦闘機にいいように撃墜される護衛の戦闘機だった。

そんな光景を見たら、誰だって逃げたくなる。

実際、それを見た爆撃部隊は適当に爆弾を投下すると逃げて行った。烈風隊はそれを追わず、交代の部隊とすれ違いながら母艦へと帰還した。

空母紅龍

ヴィル

「沖田司令、レディ・レックス、シスター・サラより連絡です。烈風隊全機無事帰還した模様」

沖田

「六航戦（第六航空戦隊）の連龍と砂龍からだな。しかし、そんな風な呼び方だったかな？」

ヴィル

「アメリカでのあだ名ですよ。ですが、今やエセックス級に名前をとられちゃいましたけどね」

沖田

「それはそれで複雑な心境だな。まあ、原因は我々にあるのだがな」

ヴィル

「それについては仕方ありません。それにそうしなかったら彼女達

「ここにいませんよ？」

沖田

「…それもそうだな。さて、今はどの航空戦隊が担当している？」

ヴィル

「ビッグEとエセックス…遠龍と陣龍の組んだ五航戦（第五航空戦隊）の紫電改と陣風です」

沖田

「杉田飛曹長と紫音、クリス中尉にワイズマン二飛曹がいるから、まず大丈夫だろう」

ヴィル

「何せ『戦闘機八人衆』の3人がいますからね。安心していいでしょう」

沖田

「うむ、ところで、フィンランド空軍はどうだ？」

ヴィル

「無償提供されたハリケーンなどを使い各地で奮戦しています。冬戦争のEースが健在だからでしょう」

沖田

「そうか…同士討ちの様な事態は起きて無いな？」

ヴィル

「大丈夫です。無線も完備されており、念のための識別空中機動も設定しておりますから」

沖田

「そうだったな…どう思う、最近のソ連軍の動きは？」

ヴィル

「焦っていますね。ソ連軍もスターリンも…それもかなり」

沖田

「我々が欧州に来てからソ連軍の損害はうなぎ登りだとゆう報告もある位だ…特に満州侵攻とドイツ侵攻後の損害から急増気味だ」

ヴィル

「それはパイロットも同じでしょう。アリソン達に訊くと、最近のソ連空軍パイロットは明らかに質が落ちているそうですから」

沖田

「ふむ…そうもなるな」

ヴィル

「ええ…ただ、気になる報告が1つ」

沖田

「…なんだ？」

ヴィル

「ゲレン機関からの情報ですが…向こうも精鋭を出して来る様です」

沖田

「いよいよ…と言うべきかな…しかし、それは予想出来ていた事だ」



るう？」

ヴィル

「只の精鋭なら、自分も気にはしません。問題は中身です」

沖田

「…中身？」

ヴィル

「はい、『平等を唱う共産主義』だからでしょうかね……まあ、第七艦隊では薄いでしょうが…女子航空隊を投入するそうです」

沖田

「…女子航空隊ですか…また厄介な話になりましたね」

ヴィル

「ええ…誠に心苦しい事やってくれましたよ…まったく」

次号へ

## フィンランド上空戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 冬季攻勢

フィンランドでは戦闘が続いていた。

しかし、誰の目にもフィンランド軍と日本軍の優位は確定的だった。何せ、ソ連軍が犠牲無視で防衛線に攻撃しても、たちまち大損害を被って追い返され、敗走する。

対し、フィンランド軍や日本軍はさすがにソ連軍との戦いに慣れていただけあってそれほど被害を被らずに撃退している。

これを見てどちらが優位かと問われれば、一目瞭然である。

だが、ソ連軍は諦める様子は無く、双方にらみ合いの状況になりかけていた。

11月20日 ケーニツヒスベルグ

ソ連軍に占領されていた東プロイセン地方はポーランド奪還作戦中、ワルシャワ解放後に奪還・解放された。

東プロイセン地方はソ連占領前は国際連盟から認められたドイツ領土であり、ロンメル伝説の始まりの地である。

そして、東プロイセン地方の主要港街ケーニツヒスベルグにドイツ軍はいた。

ロンメル中将

「準備は進んでいるな？」

士官

「はい、日本軍の鉄道師団もやる気満々で待機中です」

ロンメル中将

「そうか…兵の方はどうだ？」

士官

「日本軍から提供された冬季被服により、ある程度慣らされました。また、戦車、自走砲、装甲車両も冬季対策を採って整備させています…行けと言われれば何時でも行けます」

ロンメル中将

「うむ…まさか、味方となる冬に敵が攻めて来るとは思っていないだろう」

士官

「ですが、パンターと四号系統車両で大丈夫でしょうか？」

ロンメル中将

「今回はスピードが重要だ。タイガーは残念ながら遅い。しかし、パンターなら走攻守に優れる。大抵の敵の撃破出来るさ」

士官

「そうですね。それに指揮するのはロンメル將軍ですし」

ロンメル中将

「いや、将兵がしっかりとやってくれるからだ。さて、前線に行くか」

士官

「はい…」

その2日後……

11月22日

東プロイセン・リトアニア間ソ連軍防衛線

その日の天気は雪だった。そして、警備に当たるソ連兵にとっては何時もの通り始まる筈だった。しかし……

ドン…ドン…ドン…ドン…ドン…ドン…ドン…ドン…ドン…  
ドン……

ヒュルルルル……

ドガン！ドガン！ドガン！ドガン！ドガン！ドガン！ドガン！  
ドガン！ドガン！ドガン！ドガン！……

ソ連兵1

「な、なんだ!？」

ソ連兵2

「て、敵だ！ 敵の攻撃だ!！」

ソ連兵1

「バカな！ 冬季に連合軍は攻勢出ない筈じゃあなかったのか!？」

キュラキュラキュラキュラキュラキュラキュラキュラキュラ

……

ソ連兵2

「戦車が来たんだ！ 敵の攻勢だ！！」

戦車の大群の前にソ連兵達は持ち場を放棄して逃げ出した。

同時刻

東プロイセン・リトアニアを結ぶ鉄道線路

ソ連兵3

「…なんだ？」

線路を警備していたソ連兵が東プロイセンから接近して来る列車をおぼろ気ながらも発見した。

ソ連兵3

「同志中尉、列車が来ますが…」

ソ連軍中尉

「なに！？」

訝しげながらも双眼鏡で見た……と思ったたら慌てだした。

ソ連軍中尉

「敵だ！ 敵の装甲列車だ！ 線路を爆破しろ！」

近くの兵士に叫んだ瞬間、その中尉が吹っ飛んだ。  
そして、今度は白い擬装外套を着た一団に襲撃された。

ダダダダダダダダ  
ダダダダダダダダ  
ダダダダダダダダ  
ダダダダダダダダ  
ダダダダダダダダ

数分後、日本軍の四式装甲列車が脇を低速で通過した。  
そして、白の擬装外套を着た一団は装甲列車に乗り込んでいた。

ソ連軍防衛線司令部

ドイツ兵

「隊長、司令部の制圧、完了しました」

ソ連兵の格好したドイツ兵が、同じくソ連軍将校の格好をした指揮官に報告する。

ドイツ軍中尉

「第一段階終了ですね。スコルツェニー大佐」

「なに、こんなのは朝飯前さ」

ニヤリと笑う男…『スコルツエニー』の名を聞いて解る読者もいる  
だろ、かの有名な『ヨーロツパ1危険な男』オットー・スコルツエ  
ニー大佐である。

ヒトラーが早々死亡した為、SS…親衛隊…は解散、部隊は国境警  
備隊などにされたが、スコルツエニーは特殊部隊設立の為、ドイツ  
軍に編入された。

そして、今回の作戦がスコルツエニー大佐率いる部隊の初陣だった。

スコルツエニー大佐

「さて、線路の確保も終わっただろう。次に行くぞ」

ドイツ軍中尉

「はい」

次号へ



## 冬季攻勢（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## リトアニア侵攻作戦

ドイツ軍による侵攻はソ連軍にとって意外な事であった。

何せ、ソ連軍の見立てでは冬季に連合軍は攻勢に出ず、来年の攻勢に向けて準備…と予想していた。

もちろん、連合軍はその筈だった。

しかし、レニングラード空襲により状況が変化、アジア戦線への供給量をギリギリまで減らしたが足りず、冬季間に連合軍が攻勢に出ないだろう、と南欧戦線からも部隊を『一時的』に引き抜いた。

だが、連合国の中でもソ連に精通するドイツのゲーレン機関は正確な情報を導き出し、防衛線からかなりの戦力がフィンランド方面に回されている事を連合国軍に報告した。

これを受けたロンメルは連合軍司令部にある提案を進言した。

彼曰く「敵の裏をかき、敵を困らせる作戦」だと…。

ロンメル中将

「進撃は順調か？」

士官

「はい、諜報部の情報通り、敵防衛線は難なく突破出来ました。抵抗は散発的です」

ロンメル中将

「うむ…ここで足止めを食う訳にはいかん。こうしている間にも、北欧戦線が動いているのだからな」

士官

「は！」

今、ロンメルが乗る無線指揮車の周りにはパンター、四号戦車、三号突撃砲（長砲身）、自走砲、ハーフトラック…などなどの車両が展開している。

今回はドイツ軍お得意の電撃作戦である為、機動力のあるパンター戦車、四号戦車・三号戦車系統の装甲車両が使われている。

ロンメル中将

「ところで、日本軍の鉄道部隊とスコルツェニー大佐の特殊部隊はどうだ？」

士官

「装甲列車は順調に北上しています。ですが、スコルツェニー大佐の特殊部隊は防衛線司令部を襲撃したのは確認されていますが、その後の事は何も…」

ロンメル中将

「そうか…まあ、スコルツェニー大佐の特殊部隊のお陰で、我々がリトアニアに侵攻した事にソ連軍が気付くのは遅れる…連絡が無いのは彼らも順調な証拠だろう」

士官

「しかし、侵攻部隊が進撃しつつ、日本軍の装甲列車が補給路の線路を確保する…出来ませうかね？」

ロンメル中将

「出来るさ。その為にスコルツェニー大佐の特殊部隊も投入した。後は我々の頑張り次第だ」

そう言うと、ロンメルは前を見た。

依然雪が降っている中、ドイツ軍は進撃を続ける。

ワルシャワ 連合軍司令部

士官

「ロンメル中将の部隊は順調に進撃中。また、日本軍装甲列車はス  
コルツェニー大佐の分遣隊の支援もあり、線路の確保は順調です」

アイゼンハワー司令官

「うむ…アジア戦線のやり方が、まさかヨーロッパでもやる事にな  
るとは…いや、補給手段である以上、やって当たり前か」

士官

「しかし、アジア戦線よりは状況的に難しいですよ？ それに、ヨ  
ーロッパは平原部が多く、シベリアと訳が…」

アイゼンハワー司令官

「確かにそうだ。しかし、日本軍の活躍は知っているだろう？ 大  
丈夫、彼らは我々の期待に見事に応えてくれるさ」

士官

「はあ…」

コンコン

パットン大将（昇進した）

「入るぜ」

アイゼンハワー司令官

「やあ、パットン。調子はどうだい？」

パットン大将

「調子は良いぜ。だが、ご機嫌は？と訊かれたら、答えはノーだ」

アイゼンハワー司令官

「…パットン、わかっていると思うが…」

パットン大将

「『本格的攻勢の為、アメリカ・ヨーロッパ派遣軍は冬季間、作戦準備に入る』だろう？ わかっているぜ、アイク。たがな、ダイスケがフィンランド、ロンメルがリトアニアで戦ってるんだ、感情的にもなっちゃうよ」

アイゼンハワー司令官

「…そうだな。とにかく春を待ってくれ。春になったら存分に働ける様にする」

パットン大将

「おう、期待してるぜ！ 邪魔したな」

そう言うと、パットンは部屋を出て行った。

士官

「…大丈夫ですか？」

アイゼンハワー司令官

「パットンの事か？ 地中海に居た時より丸くなったと思うがね」

さて、このドイツ侵攻がソ連側が察知したのは22日昼頃、状況把握が出来たのはなんと22日の深夜であった。

その頃には、リトアニアの首都ビリニユス近郊に日本軍装甲列車が進出しており、ロンメル中将率いる軍団もビリニユスまでほぼ目と鼻の先まで迫っていた。

激怒したスターリンはビリニユスの司令部に対し死守命令を出したが、フィンランド戦線に対する抽出で最低限の戦力しか持たないリトアニアのソ連軍はロンメル軍団に対抗出来る訳がなかった。

次号へ

## リトアニア侵攻作戦（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## リトアニア戦

11月23日 フィンランド

最前線

福本

「そりゃ、本当かい？」

ヴィル

「はい、本当です」

冬季被服で着膨れしたヴィルが、同じ様に着膨れした福本に報告していた。

福本

「冬季間は準備期間で、攻勢に出ない筈じゃあ無かったのか？」

ヴィル

「ロンメル中将の提案だそうです。我々のレニングラード空襲作戦でソ連軍が大損害を被り、冬季侵攻が無いと知っている…からだと」

福本

「ふん…まあ、今はフィンランドに居るから何も言えないが、さすがロンメル中将だな。敵の隙を見逃さなかったな」

ヴィル

「はい…ですが、一体何処まで行く気なのでしょう？」



福本

「…俺が思うに、リトアニアだけでは終わらん。可能性としては…バルト三国を一気に解放する…事かな」

ヴィル

「…!!で、ですが…」

福本

「不可能だと思つか?」

ヴィル

「…不可能では無いでしょう…しかし、相当無茶かと…」

福本

「いや、そうは思わなし、思えない」

ヴィル

「…なんでですか?」

福本

「簡単さ。ロンメル中将が装甲列車を出しているからね」

ヴィル

「……え???」

福本

「リトアニアだけなら、装甲列車はいらないさ。ドイツ自慢の機甲部隊だけで事は済む。だが、わざわざ装甲列車を出してきた」

ヴィル

「はあ…？」

福本

「もし、俺がロンメル中将だったら、シベリアと同じ…いや、もう少し突っ込んだ事をやるな」

ヴィル

「……ああ！　そうか、そうゆう事か！」

福本

「わかったようだな。まあ、そこまで考えていた作戦だから、アイゼンハワー司令官も承認したんだろう。さて、マリーダに何か言われ無い内に朝食でも食べるか」

そう言うと、まるで何も無かったかの様に立ち去って行く。

ヴィル

「驚いたな…僅かな情報であそこまで考えるなんて…さすが名将、ロンメル中将の作戦が読めたのかな…いや、同じ名将同士だから解ったのかな？」

そんな事を呟きながら、ヴィルは福本を追い掛けた。

さて、福本達がこんな会話をしていた頃、ロンメル中将率いるドイツ軍も動き始めた。

リトアニアの首都ビリニユス攻略作戦を開始した。

首都ビリニユスはワルシャワ及びケーニヒスベルグに向かう線路が

敷かれており、補給線確保とゆう点から見ても放置出来ない都市であつた。

しかし、数が少なくなつたとは言え、ソ連軍が市街地内に籠られると厄介なので、ロンメルは一計を案じた。

まず、指揮下の部隊を2つに分け、一方が攻撃を仕掛ける。

死守命令を受けているビリニユス駐留のソ連軍はがらむしやに応戦する。

するとドイツ軍はあまりの抵抗に下がり始めた。

これを見たソ連軍は勢い任せに追撃を開始、後退するドイツ軍を追い掛けた。

そして、ある程度ビリニユスから離れた時、もう一方のドイツ軍がソ連軍の背後から襲い掛かった。

この時、ソ連兵の誰もがようやく気が付いた。

自分達が典型的囿にまんまと引つ掛かり、誘い出された事を……。

この時点でビリニユス市内では2つの出来事が発生していた。

まず、駅に日本軍の四式装甲列車が突入し、乗り組んでいたドイツ軍部隊が駅を制圧した。

そして……司令部では……

タタタタタ！

パス！パス！パス！

軽快な速射音と何とも間の抜けた発射音が司令部で響いていた。

一方はドイツが作りあげた最初のアサルトライフルMP44、一方はサイレンサー付き拳銃の発射音。

スコルツェニー大佐率いるドイツ軍特殊部隊『ブランデンブルグ』

師団は、今度はリトアニア駐留軍司令部を襲撃したのである。そして、彼らの仕事は……不謹慎かもしれないが……素晴らしかった。

まず、ソ連兵に変装した彼らは司令部に入り込み、司令室と無線室を襲撃指揮系統をズタズタに引き裂いた。

そして、司令部を制圧しつつ、ロンメル中将に『制圧完了』の暗号電を打っていた。

結局、昼頃にはビリニユスに翻っていたソ連の赤旗は引きずり降ろされ、リトアニア国民に薪代わりに燃やされていた。

次号へ

## リトアニア戦（後書き）

明日・明後日は定期更新『士官候補生異世界奮闘記』を更新致します。お楽しみに。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

## 日本内情（前書き）

今回は日本内情について少し程……決してネタ不足で、ではありません。

## 日本内情

11月28日 帝都東京

午前8時 青山南町 山本五十六自宅

山本軍令部総長

「じゃあ、行ってくる」

山本礼子（奥さん）

「はい、行つてらっしゃい」

奥さんに見送られ、山本五十六は迎いの車に乗り込んだ。そして、車は海軍軍令部に向かって発進した。

車内

山本軍令部総長

「あれから6年…いや、7年か…早いものだ」

窓から見える帝都の町並みを見ながら呟いた。

士官

「はい？ 何がですか？」

山本軍令部総長

「いや、なに…福本達の出会ってから、7年経ったと思っただけ」

士官

「ああ、なるほど。そうですね」

ハンドルを握る若い士官が納得した様子で応えた。

山本軍令部総長

「ああ…そうだな」

町並みを見ながら再び呟いた。

福本と会って7年、彼の口から計画を聞いて6年が経過している。僅かと言えば僅かである、しかし、その期間の間に様々な事が起きた。

ヒトラーの事故死、日英再同盟、中国からの撤兵、ノモンハン事件、第二次大戦が始まり、12・8クーデター、日本・サブールム帝国戦、日米開戦…とゆう歴史に残る数々の出来事…これに日常に起きた出来事を入れれば数え切れない。

山本軍令部総長

「彼らがいなければ…今の日本が存在していたらどうか？」

そう呟きながら、車は海軍軍令部に向かった。

史実の1944年には既にイタリアは降伏、日・独共に防戦一方であった。

日本軍はガダルカナル島から撤退し、2月にトラック島を空襲され、6月のマリアナ沖海戦で大敗し、7月にサイパン島が陥落、10月



にアメリカ軍がレイテ島へ上陸、レイテ沖海戦で海軍戦力はほぼ壊滅した。

また、8月に北九州防空戦が始まり、来月、つまり12月になるとアメリカ海軍機動部隊により南方海上輸送ルートが襲われる様になり、翌昭和20年3月下旬以降海上輸送ルートは閉ざされる事になる。

つまり、史実の1944年…昭和19年は敗戦への下り坂を猛スピードで駆け降りている真つ只中であつた。

しかし、この世界は違う。戦前から練り上げた計画的短期戦と海上護衛総隊の早期創立により、日本はそれほど国力・戦力を失う事無くアメリカと講和し、今は全力をもってソ連と戦っていた。

まあ、戦闘は陸上に移り、海上護衛総隊もほとんどが地中海に派遣され、海軍は艦艇の整理を始めており、人事制度改革も始めていた。また陸軍の方でも、肥大化した陸軍航空隊を海軍基地空と合併し、日本空軍の創立を目指し水面下で動いていた。

更に陸軍省と海軍省、陸軍参謀本部と海軍軍令部を統合した国防省及び統合参謀本部の開設も水面下で検討され、陸軍・海軍の主要人のほとんどが賛成していた。

他にも色々有るが、日本陸海軍は戦後に向けて準備を始めていた。

史実と違い、海上輸送ルートが無傷だった為、余裕有る配給となり、一部食料品は配給制を止め、普通に商店に行けば買える様にもなっていた。

また、衣料品についても、良品質の素材は軍服に回されていたが、こちらでも少しづつながら民間にも回される様になっていた。

ガソリンについても、軍用だけでなく、民間用にも充分行き渡る様になり、配給チケット制から普通にガソリンスタンドで給油が行え

るまでになっていた。  
なおかつ、一部工場では民間用品の生産が再開される事になっていた。

戦後見据えた動きは企業や財閥でも行われていた。

新分野、未開拓分野に進出・投資するところが出始めた。

三菱は航空機で培った技術を自動車に転用出来ないかと模索し始め、中島は富嶽の経験から大型旅客機の開発に乗り出している。

造船業界でも、大型タンカーなどに大和型で培った技術の投入も検討されている。

また、宇宙分野、鉄道分野、家電分野などに志向を向け始めていた。

次号へ

日本内情（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 天皇陛下の不満

11月29日 皇居

執務室

明子天皇

「はあ……」

今上天皇である白鶴宮明子天皇は執務室で溜め息を吐いていた。いくら天皇とはいえ人間である、溜め息を吐く事の1つや2つはあっても不思議では無い。

明子天皇

「はあ……」

また溜め息を吐い。  
溜め息を吐きながら、彼女は執務机にある唯一の私物の写真立てを見た。

そこには、4人の男女が写っている。

福本、マリィダ、沖田、明子天皇の4人組が写った写真。

写真は5年程前に沖田が一度帝都の自宅に戻った時、福本が撮ろうと言って撮った物だ。

明子天皇

「いいな、福本とマリィダは……何時も一緒にいられて……それに比べてこっちは日本とヨーロッパ……遠距離恋愛なんて生ぬるい！

超弩級遠距離恋愛よー!!」

……どつやら、恋の悩みらしい。

明子天皇

「…らしい、じゃなくて、そうなの!!」

いや、そう叫ばなくても……

明子天皇

「誰のせいだと思ってるの！ 誰の!？」

確かに自分ですけど……

明子天皇

「だいたい！ この小説は近距離恋愛多くて、遠距離恋愛は私1人じゃないの!!」

いや、それは物語の仕様ですから……

明子天皇

「仕様!？ なら、なんとかしなさい!!」

いや、ですから設定上の都合で無理で……て、どこから零式拳銃（陸軍では百式）を!!？

明子天皇

「護身用よ、文句ある?」

いや、いらなんでしょう!その前に扱えるの!？

明子天皇

「福本とマリィダに教えてもらったからちゃんと扱えるわよ。だいたい、扱えないと持つてる意味無いでしょう？」

…そうですね…で、それは何で出したんですか？

明子天皇

「命令です。今すぐ沖田光輝大将を日本に戻しなさい！」

無理です！

それに、それは職権乱用です！！

明子天皇

「ふうん、そうなの、あくまで無理で押し通すつもりね」

コンコン

士官

「陛下、失礼……いたしました。あとで参ります」

パタン

おいおい！（・・・）

明子天皇

「さあ、やれ（^・^）」

だから、無理ですー！！

明子

「そう、残念」

パン！パン！パン！パン！パン！パン！

山本軍令部総長

「…だから陛下はご機嫌が悪かったのですな」

明子天皇

「そうだ」

やはり、機嫌が直った様子は無く、ムスーとした顔を明子天皇はしていた。

そんな時に来訪したのが山本五十六軍令部総長であり、先程の士官はそれを伝えに来たのだ。

明子天皇

「そりゃあね、駄々こねたって無理な事は無理よ、確かに……でもね、福本にしろ、椎名中佐にしろ、直ぐ側にいるのよ？ 羨ましいわ〜」

山本軍令部総長

「まあ、福本元帥は置いとくとして、椎名中佐は色々事情が複雑ですから…」

本当に、側に居るのはいいのですが、居すぎますから大変です。

山本軍令部総長

「しかし…良かったな、作者。空砲だから被害はなかったが、実弾

なら確實あの世行きだったぞ」

本当に……危なかった。

明子天皇

「私だって、皇居にいる時は基本的に装弾はしてないわ」

……あの目は本気だった。

明子天皇

「はあ……いつそのこと、マリーダみたいにコスプレして、その写真を一緒に送ろうかしら？」

いや、それは翡翠やその仲間達を誘う様なものですから止めて下さい！！（・・・）

山本軍令部総長

「それはそれで、また大胆な誘い方ですな」

……そこは止めましょうよ、山本長官！

山本軍令部総長

「そういえば陛下。沖田大将よりあなたに送った手紙が私の所に来ていましたよ」

明子天皇

「！！本当！？」

山本軍令部総長

「はい。報告書に混じって送られてきたので気付くのに時間が掛か



りましたが……多分、直接皇居に送るのが気恥ずかしかったの  
でしょう」

明子天皇

「ようやく返事が来たわね……福本元帥に渡しておいてよかったわ……  
手紙は？」

山本軍令部総長

「はい、こちらです」

そう言って懐から便箋を出して渡した。

その後、世間話をした後、山本軍令部総長は軍令部に帰って行った。  
また、侍従達の話によると、その後はとても機嫌が良かったそうだ。

次号へ

## 天皇陛下の不满（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## ヨーロッパの狐

11月30日 フィンランド

福本

「ふわあ〜」

既に年の暮れに近いせいか日照時間も少なくなっていた。しかし、スターリンはなぜこんな寒い中、フィンランドに攻め込もうと考えたのか全く解らない。それは本人に訊くしか無い。そんなこんなで迎えたフィンランドの朝。福本は欠伸をしながら外に出た。

ヴィル

「おはようございます。元帥」

福本

「おはよう、ヴィル。何かあったか？」

ヴィル

「特に何も。ただ、新聞は相変わらずバルト三国の報道です」

そう言って手渡されたフィンランドの新聞を見た福本は……

福本

「……ヴィル」

ヴィル

「あ、すみません。見出しを和訳すると『ヨーロッパの狐、進撃続く』です」

福本

「まあ、バルト三国とろうと思ったら、進撃に次ぐ進撃をするしかないだろう」

ヴィル

「補給が続きますかね？ それにソ連軍も引き返していますから…」

福本

「まあ、補給の為に鉄道を確保しているしな。ソ連軍も当然引き返すだろうが……だからと言って一気に10個師団も戻って来る事は無理だろうな」

ヴィル

「さすがにそれは無理ですよ…ですが、ソ連軍だって相当の部隊を引き返させる訳ですから…」

福本

「到着したばかりの部隊が早速戦場に投入出来るか怪しいな。まあ、スターリンは何と言っているかは知らないが」

ヴィル

「ですが、スターリンは政治家ですよ？」

福本

「史実のヒトラーがいい例だ。負けてきたら、多少無茶苦茶でも反撃しろと言っていた。独ソ戦初期のスターリンだってなりふり構わ

ず反撃しろ言っていたからな。独裁者ほど負けてると現場に口出したくなるんじゃないの？」

ヴィル

「まあ…否定はしませんが…」

福本

「それにロンメル中將がそんな事を考えないで、バルト三国を獲ろうと思うか？」

ヴィル

「……いいえ」

福本

「だろう。まあ、こっちはこっちで頑張るし、向こうは向こうでやってくれるさ…さて、飯食いに行くか」

そう言っつて福本は立ち去った。

ヴィル

「あの人の頭はどうなってるのか…気になるな」

そう呟くとヴィルは福本を追い掛けるかの様にその場を立ち去った。

その頃……ロンメル軍団はとゆつと……

ラトビア国内

ロンメル中将

「現状はどうかね？」

参謀

「は、既に日本軍の装甲列車が既に線路を確保、補給路は繋がりました」

ロンメル中将

「僅か2日で補給路を繋いだか…日本軍も特殊部隊もよくやっつけているな」

参謀

「そして、我々はリガですね」

そう言うのと参謀は前を見た。

そこにはロンメル率いるドイツ軍がリガを包囲していた。

リガはラトビアの首都であり、リガ湾の奥にある港街であったから、連合軍としては無傷で手に入れたい街でもあった。

参謀

「その為に、海軍からビスマルク、ティルピッツ、シャルンホルスト、グナイゼナウの戦艦を出してもらいましたからね」

ロンメル中将

「彼らからしてみれば、出来たらバルト艦隊を相手にしたかっただろうな。残念ながら、日本海軍によってバルト艦隊はレニングラードの軍港で散々な目にあっただけだから…少しは華を持たせたかったのだろう」

参謀

「さて、ソ連軍が留守の時に来ましたが、向こうはどうしますかね？」

ロンメル中将

「陸上・海上共に包囲されてはそれほど保つまい。それに戦艦がいる。威嚇で艦砲射撃をすれば誰だって精神的に参る」

参謀

「まあ、我らは熟したリングゴが落ちてくる待ってればいいだけですからね」

ロンメル中将

「いや、それほど暢気に構えてはいられないぞ。ソ連軍からしてみれば、我々はスターリンの邪魔者だ。躍起になって潰そうとする…あまり長くは構えていられんだろう」

参謀

「もし、そこまで抵抗していましたら、一度包囲を解いてソ連軍を潰しますか？」

ロンメル中将

「そこまで保たんさ。夜間に砲撃を加えれば体力的・精神的に消耗する……出来れば早く終わらせたいものだ」

そう言うと、ロンメルは双眼鏡を覗いた。

次号へ



## ヨーロッパの狐（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

攻勢計画（前書き）

新米士官

「……実は皆様にとって非常に言いにくいのですが……」

福本

「どうしたんですか、あらたまって？」

新米士官

「いや…私は大学生です」

マリダ

「知ってる」

新米士官

「そして、もうそろそろ大学の前期試験がありまして……レポートやら何やらしなきゃいけないんですよ」

海龍

「だから？」

新米士官

「……約2週間の間、土曜日の『士官候補生異世界奮闘記』を除いて、更新を一時停止しようかと……」

全員

「……………な、なんだって?!?!?」「……………」

和泉

「貴様！ 作者の分際で酒を飲まさせん気が！？」

新米士官

「……勝手に飲んでるでしょう」

海龍

「私のコスプレ趣味はどうなるの！？」

新米士官

「知りません。と言うわけで、当分は更新無しとなります。しつこく承  
下さい」

福本

「……ちゃんと単位取れよ？」

新米士官

「うん、わかってる」

## 攻勢計画

12月5日

1日にリガが墜ち、3日にロンメル中将率いるドイツ軍が引き返して来たソ連軍を撃破し、4日にラトビア占領を完了した。そして……5日になった。

ヘルシンキ

福本、マリィダ、フェルデナント、宮崎大將は前線を離れ、ヘルシンキに来ていた。大統領兼フィンランド軍最高司令官マンネルヘイム元帥からの要請があつたからだ。

福本

「…年を越したら、こちらが攻勢に出ると？」

マンネルヘイム元帥

「うむ。現在ロンメル中将率いるドイツ軍がバルト三国攻略中だ。連合軍の本格的攻勢は来年になる。ならば、バルト三国のドイツ軍とカレリア地峡から出て来たフィンランド・デンマーク・スウェーデンの連合軍でレニングラードを占領しようと思うのだが……どうかね？」

直ぐに福本は机にあるフィンランド周辺の地図を見た。

フィンランド湾の奥にあるレニングラードは港、鉄道などの補給ラ

インを形成する上で重要な施設が集中し、政治的観念から見ると、北欧方面に睨みを利かす重要都市である。しかし、裏を返せばここを占領されると、モスクワから近く、反対に威圧を与える事になる。

そう言った意味では絶好の場所にあると言っても過言では無い都市だ。

宮崎大将

「なるほど。確かにレニングラードの占領はソ連軍に大打撃を与えますな」

フェルデナント

「ですが、問題があります。第七陸戦隊と長野連隊だけでは戦車が足りません。となると、フィンランド陸軍からも戦車部隊を出す事になりますか…」

マンネルヘイム元帥

「その事については大丈夫だ。ドイツから四号戦車や三号突撃砲、モッティ戦術で奪い取ったソ連軍戦車がありますからな」

福本

「…となると、ほぼ決定ですね。問題はどうするか、ですが…」

そう言うと、福本は地図にあるカレリア地峡を指差した。

福本

「主力部隊をカレリア地峡のマンネルヘイムラインに集結させましょう。もちろん、他地域からも攻勢に出て、出来る限りソ連軍を追っ払います」

フェルデナント

「……うまくいきますかね？」

福本

「我々の狙いはレニングラードだ。他の地域は敵が頑強なら後退していい」

マリイダ

「なら、ロンメル中将のドイツ軍にも協力を仰いだら？ バルト三国を抑えた後なら挟み撃ちに出来るわ」

フェルデナント

「それなら、アイゼンハワー司令官に連絡しないと…バルト三国侵攻作戦も連合軍司令部にちゃんと許可を取りましたからね」

福本

「そこら辺はすり合わせが必要だ。マンネルヘイム元帥、どうでしょう？」

マンネルヘイム元帥

「ふむ…軍の方に日本軍の提案を話してみよう。多分、ほとんどの者が賛成する筈だ」

フェルデナント

「では、早速その事をアイゼンハワー司令官に……」

福本

「待った。これは非常に重要な事だ。電信や電話で無く、直接人を出して正否を問う」

マリーダ

「どうして？」

福本

「これはあくまでも奇襲作戦の一環だ。ソ連軍にはこちらが防御一辺倒だと思わせておく必要がある。しかし、電話や電信だと余りにも人を介し過ぎる……スターリンの手先が何処にいるか解らない、情報が漏れる可能性がある」

宮崎大将

「なるほど、確かに情報の秘匿性から見て、誰か信の置ける人間を派遣して説明させれば情報が漏れる確率も低い」

マリーダ

「なら、ちょうどぴったりの人物がいるわ」

福本

「新沢だな」

その頃……播磨の一室

新沢

「ハックシヨン！……誰か噂でもしたか？ それとも、風邪でも……な、訳ないか」

フェルデナント

「新沢大尉ですね。確かに連絡将校ですから、うってつけの人物か

と……」

福本

「そうだな。マンネルヘイム元帥は構いませんか？」

マンネルヘイム元帥

「残念ながら、連合軍に顔見知りはおらん。日本軍が取り次いでくれるなら幸いだ」

次号へ



## 攻勢計画（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## クリスマスイブ（前書き）

新米士官

「え、バイトの為、更新が遅く成りましたが、本日より更新を再開致します！」

福本

「さすがに感想以外出番無しの一週間は堪えたな」

マリーダ

「それはおしまい！ 読者の皆さん、本日よりまた毎日更新を再開致します！」

新米士官

「とにかく！ 本編をどうぞ！」

## クリスマススイフ

12月24日 エストニア

ロンメル中将率いるドイツ軍によるバルト三国解放作戦は最北のエストニアに進出、レニングラードより引き返したソ連軍の大軍と激突した。

しかし、そこはヨーロッパの狐、分遣隊を組織し、あちこちに出没させ、敵を分散、その後、分遣隊を加えた全部隊で敵主力軍と交戦、巧みな指揮で弱点を突きソ連軍主力を叩き潰した。後は簡単なもので、頭を失ったソ連軍は敗走するかドイツ軍に降服し、エストニアからソ連軍を追い出し、レニングラードへと後退した。

これが5日前の話である。そして……現在……

タリン ドイツ軍司令部

ロンメル中将は司令官室として使っている部屋で作戦計画書を読んでいた。

コンコン

参謀長

「ロンメル中将、お呼びでしょうか？」

ロンメル中将

「ああ、済まないな。まずはこれを見てくれ」

そう言つてロンメル中将は先程まで読んでいた作戦計画書を参謀に渡した。

受け取つた参謀長は1ページ1ページゆっくりと黙読する。

読み終わると、もう一度読み返し、そして、机に置いた。

参謀長

「…フィンランド軍の一大攻勢に便乗し、連合軍も全力をもって攻勢に出るつもりですか？」

ロンメル中将

「そうだ。最初はフィンランド軍と我がドイツ軍の共同作戦…とゆう話からここまで飛躍した」

参謀長

「しかし、攻勢は春を待つてからのはず…」

ロンメル中将

「シベリアからの報告で変わったそうだ」

参謀長

「シベリア…の？」

ロンメル中将

「うむ、シベリアからの報告では、冬は地面がコンクリート並みに固まるが、春になると地面が泥沼の様になるそうだ」

参謀長

「ああ、なるほど……だから年明けに……」

ロンメル中将

「そうだ。そこで参謀長、今の戦力で可能か？」

参謀長

「閣下の指揮と補給さえあれば、レニングラードは目の前ですから可能です。また、敵は年明け早々攻勢に出ると考えていないなら……  
…もっとやり易いかと」

ロンメル中将

「そうか……この事は機密事項だ。準備は密かにな」

参謀長

「わかりました。あ、そう言えば、今日はクリスマススイブですね」

ロンメル中将

「おお、そうか……さて、フィンランドでアドミラル達は何をしているのかな？」

その頃……フィンランドでは……

福本

「クリスマススイブ？ 今日がか？」

ヴェイル

「はい……気付きませんでした？」

エストニアに部隊を割いた為か、ソ連軍はあまり動かず、前線は膠着状態になっていた。

この為、第七陸戦隊は前線をノルウェー・スウェーデン軍と交代し、首都ヘルシンキに戻って来ていた。

しかし、敵が動こうが動かまいが指揮官として仕事は貯まるのである。んなのは埒外である。

福本

「あのな…書類仕事を片付けなきゃならんのだぞ……そんなの気にしてられるか」

ヴィル

「そうですね…そこなんですが…」

福本

「クリスマスイブだからパーティーやろう…か？ それなら勝手にやってくれ」

ヴィル

「そうですね、なら、許可は降りたとゆう事で」

そう言うとヴィルは敬礼し、立ち去った。

まあ、もう暫くこの戦争は続く様だし、気分転換の1つや2つをやったところでバチが当たる訳でもあるまいし…

福本

「それよりも仕事仕事……あんまり貯めると後がややこしいからな」

3時間後……………

福本

「ふう〜…気持ちい〜い〜…」

書類仕事を終え、アイマスク代わりに冷えたタオルで目に当ててベッドで寝転ぶ福本。

福本

「まったく…なんで書類仕事は何もやって無いのに増えるかね〜。こりゃ考えものだな」

マリダ

「何が考えもの？」

ここで、いつの間に入って来たのかマリダ登場。

福本

「やあ、マリダ。書類仕事の話だよ…で、何か用？」

マリダ

「今夜のパーティーどうする？」

福本

「……………考えてない」

マリダ

「そう…じゃあ、みんなと騒ぐ？ 2人だけで過ごす？」

福本

「後者は魅力的な話だね。だけど、後で翡翠が嫉妬して対艦ミサイルじゃなくて核ミサイルを撃ちそうだから止めとくよ」

マリィダ

「じゃあ、この格好で出るけど…」

福本

「…ええ!？」

慌て飛び起きると………サンタコスを着たマリィダが……

福本

「…マリィダ、パーティーは普通のを着てくれ…パーティーの後、2人で過ごそな」

マリィダ

「オツケー　じゃあ、後でね」

そう言って出て行ったマリィダを見ながら福本はこう思った。  
俺も甘いな…と。

次号へ



## クリスマススイフ（後書き）

予告

遂に連合軍の総力を結集したヨーロッパ方面ソ連領侵攻作戦が開始された！

そして、各戦線はどう動くのか？

次号をお楽しみに。

ご意見感想をお待ちしております。

## 全域攻勢

1945年 1月3日 午前5時25分

ソ連・ポーランド国境

まだ夜も明けていない中、アメリカ軍重戦車M28ブラッグ、M26パーシング他戦車・車両が既にエンジンを掛けて待機している。そんな中、特別仕様のコマンドカーの座席でパットン大將はその時を待っていた。

ちなみにパットンは興奮していた。

輪廻転生説信棒者であり、ハンニバルの生まれ変わりだと信じていたパットンは、戦場・戦争こそが我が生き場所と思っており、ローマ帝国の皇帝ならぬソ連のスターリンに挑もうとするハンニバル……と思うとパットンは興奮もする。

それに、シベリア方面からの報告により春に予定していた侵攻計画を大幅変更して年明け直ぐの実施にしたため、余計にパットンは興奮していた。

パットン大將

「待つてるよスターリン…… 皇帝を殺るのはこの俺だ」

同時刻…… ソ連・エストニア国境

ロンメル大将：昇進した…は愛用の無線装甲指揮車の中で悠然と静かにその時を待っていた。

既にソ連軍によるポーランド侵攻から4年8ヶ月。

東プロイセンから撤退した自分が今や反対の立場になるうとは思っていなかった。

しかも、戦況が僅か1年でこれ程変わったのは日本軍・第六大陸軍のお陰と言わざるおえない。

しかし…ヨーロッパ情勢を考えるとこの年中に終わらすのがベストだ。

もちろん、難しい事ではあるが……

ロンメル大将

「あの若いアドミラルも、これ以上の流血を望むまい……問題はあの独裁者だがな」

これまた同時刻……カレリア地峡

福本はマリィダと共にその時を待っていた。

フェルデナント

「元帥、参謀長」

福本

「よう、フェルデナント。どうした？」

フェルデナント

「それはこちらのセリフです、元帥。いくら後少しとはいえ、油断

は出来ないんですからね」

福本

「わかってるよ…なあ、フェルデナント」

フェルデナント

「なんですか？」

福本

「お前、この戦争が終わったらどうする？」

フェルデナント

「…そうですね。もう日本の生活にも慣れましたからね…まあ、終わったらゆっくり考えます」

そう言うと、フェルデナント敬礼しては立ち去った。

マリイダ

「終わってからか…まあ、私達も一緒なんだけどね」

福本

「そうだね…ただほんの少しは決めてるけどね」

マリイダ

「もうう…今年中には終わらせたいわね」

福本

「ああ…これ以上流血は流したく無いが…あの独裁者次第だな」

福本は前を見詰めた。

覚悟を決めて…進むしか無いのだ…

そして、時計の長針が6を指した：5時30分：時、各戦線で待機していた野戦重砲が一斉に火を吹いた。

特にカレリア地峡では日本海軍の播磨級以下の戦艦が、ソ連・エストニア国境ではドイツ海軍ビスマルク級以下の戦艦がソ連軍防衛線に鋼鉄の嵐を巻き起こした。

そして、鋼鉄の嵐が終わると地響きを鳴らしながら戦車部隊が進撃を開始する。また、まだ夜は明けていないが、天候が良ければ航空部隊がエアカバーを開始する予定だ。

ソ連軍にとってこの奇襲ととれる侵攻は意外であった。

ソ連軍上層部は春に侵攻を開始するとゆう情報スパイからのだった為、まさかドイツ軍だけで無く連合軍が冬、しかも年明け早々から侵攻して来るとは思っていなかった。

特にソ連軍上層部を驚かせたのはフィンランド軍がカレリア地峡を中心に、スウェーデン軍・ノルウェー軍と共同して各地で攻勢に出たとの報告は天と地がひっくり返ったのでは無いかと思わせた程だった。

ここでソ連軍上層部はミスを犯した。

この攻勢が牽制なのか本格的攻勢なのかで大論議となり初期対応が遅れてしまったのである。

これは非常に不味く、そんな論議をやっている内に防衛線は各地で押されるがままの状況になっていた。

結局、これが本格的攻勢と判断されたのはなんと、情報が集まった夕方の事だったそうだ。

次号へ

## 全域攻勢（後書き）

予告

カレリア地峡を中心とした北欧連合軍&日本軍の進撃は止まらない！  
長野連隊長の六式重戦車の主砲が吼え、フィンランド軍のT34/  
85がソ連軍陣地を蹂躪する！

ご意見ご感想をお待ちしております。

## カレリア地峡の進撃

1月5日 ソ連軍（暫定的）防衛線

ドン！

ゴワーン！！

日本軍の四式・五式戦車が前を進み突破口をこじ開け、後続のフィンランド軍が鹵獲し青い鉤十字が砲塔などに塗られたT34/85が防衛線を踏み潰す。

その踏み潰された防衛線を後続のフィンランド兵・スウェーデン兵・ノルウェー兵・日本兵が乗り込み制圧する。

まあ、どうゆう訳かは解らんでも無いがソ連軍の陣地は簡単に墮ちる。

理由としては防戦一方だった筈のフィンランド軍がいきなり攻勢に出たため、急造防衛線や陣地が多く、将兵の士気・練度がかなり低かったからだ。

何せ陣地に突入され、敵兵だと解った瞬間、銃を捨て両手を挙げるソ連兵が各地で見られたからだ。

また、捕虜にしたソ連軍歩兵・砲兵・戦車兵からは砲塔に666（トリプルシックス）の数字が書かれた戦車を『死神が乗る戦車』『悪魔が憑く戦車』と言って恐れおののいていた。

福本

「それで、なんで666…トリプルシックスは嫌われてるんだ？」



捕虜を確保しながら進む福本達の部隊。  
捕虜達から聞いた話を知識を持つヴィルに訊く。

ヴィル

「トリプルシックスはキリスト教では忌み嫌われていますから…いくら共産党が宗教を阿片だと言って禁止しても、ロシア正教がある国ですからね。それにロシア人のほとんどがキリスト教徒ですし」

福本

「なるほどな。日本人だと6は知らないが、基本的にぞろ目は歓迎されるけどな。あと13日の金曜日が苦手なんだっけ？」

ヴィル

「ええ、確かに…そちらも嫌われています」

福本

「そうか…で、当の本人…長野連隊長は？」

ヴィル

「前線でソ連軍と撃ち合っているかと…」

福本

「トリプルシックスの砲塔が見えたら逃げるか、降参しろか…今は冬季塗装だから、『白い悪魔』かな？」

ヴィル

「長官…ガンダムじゃないんですから…」

福本

「まあまあ…さて、完了したら再び出発だ」

ウイル  
「はい」

その頃……前線では……

長野連隊長

「撃て！」ドン！

ゴワーン！

また1輦の戦車が動きを止め爆発した。

何せ史実のタイガー2戦車の強化版として奇才野口博士に作られた六式重戦車は凡人設計士が作り上げた重戦車でさえ簡単に燃える鉄の塊に出来る破壊力を持つ。

その代わり速度は遅いがそれでも切り札や指揮官戦車として運用されている。

そして、六式重戦車はソ連軍戦車の攻撃を弾き、自慢の主砲で次々と戦車を撃破する。

これには防戦に徹していたソ連軍戦車もジリジリと後退し始めた。これを見たソ連兵も銃を捨て、持ち場を放棄して逃げる。

まあ、確かに『死神が乗る戦車』『悪魔が憑く戦車』と戦うなど、端から死に行くようなものだから逃げるのも当然だ。

長野連隊長

「なんだ？ 張り合いが無いな……まあ、進撃出来るからマしか……前進！」

自分のせいとも知らず、長野連隊長率いる戦車隊は進む。

レニングレード ソ連軍司令部

バン！

ジューコフ元帥

「揃いも揃って何をやっている！ 日本・北欧連合軍にいいようにやられ、押されるがままに後退…いや、撤退するとは！？ しかも、昨日1日でカレリア地峡の半分を奪われたのだぞ…！」

フィンランド戦線打開の為、年明け前に前任者と交代したジューコフ元帥はテーブルを乱暴に叩いて、居並ぶ指揮官・幕僚に怒声を浴びせる。

参謀1

「しかし、同志ジューコフ…ヤポンスキーと北欧連合軍の侵攻はまるで雪崩の如くスピードで、急造の防衛線や陣地ではとても…」

ジューコフ元帥

「それでも突破され過ぎだ！ ラジオだと『ソ連兵は連合軍の戦車を見た瞬間、戦車は猛スピードで逃げ、兵士は両手を挙げ降伏するか、銃を捨てて逃げる弱兵だ』と宣伝しておるぞ！」

参謀2

「仕方ありません、同志元帥。『マンネルヘイムラインの悪魔』の噂が広がり、日本軍の戦車と解った瞬間、兵士は恐怖から戦

意が萎えてしまいます」

ジューコフ元帥

「例の666の戦車か？ 我が軍のスターリン戦車を遠距離からでも紙物の様に破壊し、T34戦車を一気に2輜破壊するあれか？」

参謀2

「はい。今回もその悪魔があちこちで目撃されておりす」

ジューコフ元帥

「馬鹿者！ 敵は戦車だぞ！ 死神だろうが悪魔だろうが、集中射撃するなり、歩兵に工兵用爆薬で作った即席爆弾で襲撃するなり、人海戦術を使うなり、何なりあるだろ！！？」

指揮官・幕僚共にやれるなら既にやってるよ………と思いつながら黙って聞いている。

ジューコフ元帥

「ところで、エストニアの方はどうだ？」

参謀3

「今のところ保ってはいますが、徐々に防衛線は縮小されています」

ジューコフ元帥

「くそ……ドイツ軍のロンメルか………皮肉だな、今は反対だ」

次号へ

## カレリア地峡の進撃（後書き）

予告

少し南欧方面に視点をあてたいと思います。  
さて……どうなるやら……

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 攻勢状況

パットン大将率いるアメリカ軍は攻勢開始後すぐにブレストを解放し、そのままの勢いでミンスクを包囲した。

ちなみにガソリンなどの物質補給については日独米の輸送列車が事前に確保した鉄道が役に立ち、パットンはガソリンの心配をする事はなかった。

1月10日 ミンスク近郊

パットン大将

「け、本来ならこんな所で止まる気は俺には無いんだがな」

ブラッドレー中将

「仕方無いさ、ジョージ。ミンスクはポーランドとリトアニアを結ぶ鉄道が集まる都市なんだ。ここを確保しないと君は途中で立ち往生してしまう」

パットン大将

「わかつてるよ、ブラッド。だがな、元騎兵科の俺としては性に合<sup>ウケ</sup>わないんだよ」

ブラッドレー中将

「ああ、わかつてるよ。それで士官学校で大変な事になっただろう？」

パットン大将

「う…いやな事を言うな…」

ブラッドレー中将

「なにせ、君のブレーキ役だからね」

チャーチル首相の義弟であるホバート大將はイギリス軍を率いてウクライナ方面を進んでいた。

ちなみに、バルカン半島はドイツ軍・イタリア軍が担当している。

参謀

「…本当にいませんね。やはり、敵はキエフにいる僅かな居残りしかいないのでしょうか？」

ホバート大將

「早合点は禁物だ。奴らとて馬鹿では無い…何処かに潜んでいるかもしれない」

第一次大戦でも戦車部隊を率いただけにホバート大將はイギリス陸軍の中で戦車に精通していた。

また、実戦経験も豊富であり実戦派・現場派の指揮官である。

ホバート大將

「しかし…ようやく、我が軍の戦車もソ連、ドイツ、日本軍に追い付いた訳だな」

今回、イギリス陸軍は17ポンド砲搭載戦車を多数ホバート大將指揮下の戦車部隊に配備した。

主にM4シャーマンに17ポンド砲を搭載したファイアフライ、17ポンド砲を小型軽量化した（それでもパンターの主砲と同威力）77mm砲搭載の巡航戦車コメットを投入していた。残念ながら、チャーチル戦車は今回の作戦に向かないため、別方面に回されたが……。

代わりにミーティア・エンジンを搭載し、57mm砲から75mm砲を搭載した巡航戦車クロムウェルMk・7・8を大量投入している。

ホバート大将

「ところで、北欧方面はどうかね？」

参謀

「はい。既に日本・北欧連合軍、ドイツ軍による挟撃によりレニングラード近郊で戦闘が発生…ですが、ソ連軍は防衛線の維持も困難な様子です」

ホバート大将

「そうか…やはり、強大だったソ連軍は余りに無理をして拡大し過ぎた為に恐竜と同じ道を歩むか」

栄枯盛衰…これは歴史に付き物である。

ポーランド　ワルシャワ市内　連合軍司令部



アイゼンハワー司令官

「戦況はどうか？」

士官

「はい、ウクライナ、バルカン方面では進撃は順調、ベラルーシ方面はミンスクを包囲中で進撃は停滞していますが、それほど時間は掛からないでしょう」

アイゼンハワー司令官

「ふむ…北欧方面はどうかね？」

士官

「既にレニングラード近郊での戦闘が主になっています。しかし、ソ連軍の弱体化は明らかです。1週間程あれば攻略できるかと…」

アイゼンハワー司令官

「油断は出来んど。東洋には『窮鼠猫を噛む』と言う諺がある」

士官

「きゆうそ？」

アイゼンハワー司令官

「追い詰められたネズミの事だ。まあ、アドミラルフクモト、ゲネラルミヤザキ、ロンメルの3人がいる…いくらソ連軍の名将がいてもそう簡単には抜けられんな」

次号へ

## 攻勢状況（後書き）

予告

日本・ドイツ・北欧連合軍によるレニングレード攻略戦！  
名将達に率いられ、レニングレードどう攻略されるのか？

ご意見ご感想をお待ちしております。

## レニングレード包囲中（前書き）

新米土官

「本日は8月6日です。この日が繰るたびに心中で黙禱をしますが……同時に日本人の平和ボケぶり様々と見せつけられます」

福本

「まあ……危機意識無さすぎだからね……政治家は」

新米土官

「それに、心苦しい事ですが……まず、核廃絶は不可能ですよ。考えれば解る事、お気に入り玩具を捨てると言われて捨てる子供がいるか？……いるわけありませんよ」

マリータ

「ああ、確かにね」

新米土官

「広島市長は核の傘からの離脱を要請すると言っていました……あなた、バカ？ このヒートアップする東アジア情勢解ってるの？ そんな事言っただったら今後の対応策があるんだよな、広島市長！？ 理想論の為に国を滅ぼすわけにやあいかねえんだよ！」

福本・マリータ

「（今年の作者は熱いな）」

## レニングレード包囲中

1月15日 レニングレード近郊

攻勢開始から12日目。

日本・ドイツ・北欧連合軍は目的のレニングレードを包囲していた。さすがにレニングレード近郊に迫ると防衛線も強固になったが将兵の意思は別であり、昼夜問わず砲撃を行い、夜襲で敵陣を襲撃し、天候が回復すれば航空攻撃を加えて、ソ連軍を心身共に消耗させていた。

レニングレード包囲線の最前線

福本

「誉めるべきかは迷うが…よく粘るな」

石田

「しかし、相当参ってますよ。毎日、昼夜も問わず一方的に野戦重砲を浴びる訳ですから」

腹這いになりながら双眼鏡でソ連軍防衛線を偵察する福本達。

ヴィル

「それだと、まず一番レニングレード市民が参ってますよ。なにせ彼らは巻き添えをくっただけですから」

マリーダ

「それに、ソ連軍がともに食料配給しているか怪しいわ」

福本

「中国軍の様に、守るべき民から略奪する事は無いだが……ソ連軍は軍規と風紀の悪さは中国軍に並ぶからな、絶対的には無理だな」

石田

「まったくです」

通信兵

「中隊長、連絡です」

無線機を背負った通信兵が石田に受話器を渡す。

石田

「はい、石田です………はい、わかりました」

そう言つと、受話器を通信兵に返した。

石田

「元帥、鉄道部隊が到着しましたよ」

ヴィル

「駅の確保ですか……いよいよですね」

石田

「それだけじゃありませんよ。装甲列車はもう一つかくし球を持って来ましたから」

マリーダ

「かくし球？ そんなのあったけ？」

福本

「それがあつたんだよ。ソ連製のかくし球がな」

バルト三国の線路を通つて来た五式装甲列車が仮設ホームで点検を受けている隣で例の『かくし球』が同様に点検を受けていた。

青年砲兵1

「しかし、90式列車砲の為に編成された我々がソ連製の列車砲を扱つとは皮肉ですね」

下士官

「なに、我々はあくまで交代要員として編成されたんだ。それに予備員が表舞台に立てたんだぞ？ しかも、ヨーロッパだ！ 上手くすれば新聞に載るぞ！」

青年砲兵2

「では、我々は有名人になれるかもしれませんね！」

下士官

「ああ、そうだ。このTM-1-180列車砲を使っていつちよ、活躍しようじゃないか！」

砲兵達

「「「「「おうー！」「「「「「」

……特設欧遣列車砲兵隊の士気は上がっている。

ドイツ軍陣地

ロンメル大将

「時間は掛かってしまったが…いよいよ、明日か」

参謀

「はい。明日、列車砲の攻撃を合図にレニングラード近郊の防衛線  
を突破…そのまま、レニングラードが大人しく降伏してくれば良  
いのですが…」

ロンメル大将

「……………」

そこが最大に難しい事なのだが……。  
騎士道を重んずるロンメルとしても、市民の犠牲は必要無いと考  
えるだけに、現実の難しさに苦悩している。

福本

「ロンメル大将、お久しぶりです」

ロンメル大将

「おお、アドミラルフクモト！ よくここがわかりましたね？」

福本

「あつはつはつは、今や本官同様にあなたも有名ですから、ドイツ  
兵達に聞けばわかりましたよ」

ロンメル大将

「あはははは、さすがだ。それで、本官に何の用ですか？」

福本

「なに、軽く明日の打ち合わせでもしようかと、参った次第ですよ。そう言うと、後ろにいたマリダがひよこりと出て来てバスケットを見せる。」

ロンメル大将

「いいですな。参謀、少し席を外してくれ」

参謀

「はい」

福本

「…いよいよ、明日ですね」

ロンメル大将

「うむ…問題はレニングラード市民の事だが…」

福本

「防衛線突破後、包囲線を前進する事になりますね。ただ、レニングラードの飛行場、鉄道、軍港は抑えなければなりません」

ロンメル大将

「ふう…難しい課題だな」



福本

「いつもですよ……特に我々指揮官とゆう人種はね」

ロンメル大将

「まったくだ……早くこの戦争を終わらせたいものだな」

福本

「そうですね。だからと言っていい加減に終わらせる訳にはいきませんけどね」

次号へ

## レニングレード包囲中（後書き）

予告

列車砲の砲撃を合図に連合軍が防衛線突破を開始！

一刻も早く戦闘を終わらせる事は出来るのか！？

明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新致します。お楽しみに。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## レニングレード攻略戦 1 (前書き)

新米土官

「本日8月9日は……ニュース等でお知りの通り、長崎原爆投下日です」

福本

「まったく……悲劇は忘れずはいいが、それを悪用する馬鹿がいるから面倒だよな」

新米土官

「確かに……後6日で終戦記念日ですが、菅首相は何を考えているのだから……あれが首相か？ 国をおとしめる首相はさつさと辞めろ」

## レニングレード攻略戦 1

1月16日

TM - 1 - 180 列車砲

士官

「これより、敵防衛線に対するピンポイント砲撃を行う！ 撃て！」

下士官

「撃て！！」

ドゴーン……

午前6時…… 鹵獲したソ連軍列車砲の砲撃がレニングレード攻略作戦は開始された。

これに続き、日独北欧連合軍の野戦重砲が制圧射撃を開始した。また、各軍の戦車・車両のエンジンが掛けられ、動き出そうとしていた。

レニングレード市内ソ連軍司令部

ヒューーウ……

ゴワーン！！

ジューコフ元帥

「なんだ！？」

司令部で連合軍を迎え撃つ為に作戦会議をしていたジューコフに爆発音と着弾による揺れが何かが起こった事を察知させた。

士官

「大変です！ 同志元帥！ 敵の攻撃です！ 敵の列車砲による砲撃です！」

ジューコフ元帥

「なに？ 敵の列車砲だと！？ そんな情報は聞いてないぞ！」

士官

「ほ、本官に訊かれましたも……」

ジューコフ元帥

「くそ！ 列車砲だと…防衛出来るかも怪しいぞ……」

日本軍包囲線

福本

「よし…みんな！ あと一押しで防衛線を落とせるぞ！」

フェルデナント

「防衛線陥落後はレニングラード周辺を包囲する。一般人の被害を

少なくともする為の処置である。しかし、軍港、飛行場、鉄道・駅の確保は最優先とする…質問は？」

第七陸戦隊の司令部テントにいる指揮官達を集め、最後の確認をしていた。

指揮官達

「「「「「……………」」」」」

フェルデナント

「元帥は？」

福本

「みんな、フィンランドからこつち、ここまで良くやってくれた。本来なら1ヶ月の有給休暇を出したいところだが、ソ連・スターリンが諦めていない以上、我々も戦わざるおえない」

その場にいた全員が頷いた。

福本

「レニングラード攻略作戦終了後、我々はトルコに向かう。ソ連軍はこちらを無視し、トルコに侵攻しようとしている。大変だと思いが、本官に付いて来てほしい…以上だ」

そう言うと福本はそそくさと何処かに行ってしまった。

福本

「もつそろそろ、砲撃が終わるな？」

石田

「はい」

福本

「みんな、準備はいいな？」

マリルダ

「オッケー」

石田

「完了しています」

ヴィル

「同じく」

福本

「大尉、マチルダ隊の準備はいいか？」

大島大尉

「はい、準備よろしです」

大沢

「まあ、とっくに出来てましたからね」

それぞれのハッチから顔を出して答えるマチルダの大島大尉と大沢。

福本

「…よし、進軍開始！」





『敵の制圧射撃により、防衛線の維持不可能!』

『敵の空爆により被害甚大! 増援と戦闘機を求む!』

『日本軍の攻撃に防衛線保ちません! 後退の許可を!?!』

『敵の正確な砲撃により、野砲陣地壊滅!』

あちこちから入る野戦電話の報告にジューコフは頭を悩ませた。只でさえ兵士の意味が弱いのに、追い討ちを掛けるかの如く物量で敵は攻めて来る。

士官

「大変です!」

参謀

「馬鹿者! 既に大変だ!」

士官

「こちらはもっと大変です! 鉄道に敵の装甲列車が現れました!」

参謀

「な、なんだと!?!」

タタタタタ！  
パパパパパパ！  
ドドドドドド！

駅やその周辺では激しい銃撃戦が展開されていた。

駅に滑り込んだ五式装甲列車は、搭載機銃でソ連兵を牽制し、搭載砲で戦車を破壊した。

その間に兵員車からドイツ軍のブランデンブルグ師団と宮崎師団から派遣された部隊が素早く散開し、ソ連軍部隊と戦っていた。

しかし、奇襲なうえに装甲列車の火力支援は凄まじく、ソ連軍は駅及び鉄道施設周辺を手離さざるおえなかった。

次号へ

## レニングレード攻略戦 1（後書き）

予告

レニングレード周辺の防衛線を突破する連合軍。  
対し、ジューコフが受けたスターリンの命令とは？

ご意見ご感想をお待ちしております。

## レニングレード攻略戦 2

本来、ソ連兵はロシア帝国時代から陣地に籠って戦う事は得意だ。それは、日露戦争の旅順攻略戦や203高地の戦いで解る事だ。しかし……それは陣地の中に敵がいないとゆう前提の話であり、克つ、どれ程強固な陣地も中に敵が入ってしまえば、脆く崩れる。また、兵士の意志も問われる話であり、どれ程強固な陣地でも、兵士の士気・戦意が低ければ只の宝の持ち腐れである。

ちなみに、203高地が落ちた原因の1つは、犠牲覚悟の日本軍の攻撃にロシア兵が戦意を損失した為である。

また、旅順攻略戦・203高地の戦いでの大消耗を乃木大将愚将論の根拠としているが、当時日本を含めた欧米先進国の中で本格的コンクリート要塞攻略戦は旅順攻略戦が初めてであり、元々、要塞攻略戦では大出血を強いるのは当たり前である。

それでも否定するならば、11年後の第一次世界大戦時におけるベルダン要塞攻略戦で10カ月間も攻め続け、多数の犠牲を払いながら落とせなかったドイツ軍は愚将の集まりなのか……と云う話になつてくる。

……話が思いつきり脱線した、失敬。

とにもかくにも、一度敵兵の侵入を許した陣地は余りにも脆いのだ。

ズダダダダダダダダ!

福本

「まったく……誰かあの小うるさいマキシムを黙らせる!」

マチルダ隊の後ろから続いていた福本達に防衛線からマキシム重機

関銃が行く手を阻んだ。

福本

「ヴィル、狙撃で銃手と装填手を片付ける。重火器分隊、途絶えたら噴進砲を撃て」

ヴィル

「はい！」

真つ先に返事をしたヴィルが、38式歩兵銃（狙撃仕様）を構え狙いを定める。

パン！

銃声と共にマキシムの銃手が倒れる。

カチャン

楯棒を引いて空薬莖を出し、再び元に戻し次弾を装填する。そして、直ぐに射撃体勢に入り狙いを定める。

パン！

今度は装填手が消えた。

福本

「重火器分隊！」

石田

「撃て！」

シュポーン！

シュルルルルル……

ドガーン！

機銃陣地が吹き飛んだ。

福本

「よし、防衛線を制圧する！ 続け！」

マミーダ

「はいな！」

石田

「はあ…大丈夫ですか。これで？」

ヴィル

「無茶は今に始まった事ではありませんから」

石田

「…ですね…元帥と参謀長に続け！ 討たせたら、日本軍の名折れだ！」

ドン！

グワーン！

長野連隊長

「今だ！ 敵防衛線を制圧しろ！」

ソ連軍のダックインした戦車を片付けながら長野連隊は進んでいた。この頃には、何とか抑えて戦っていたソ連兵も後ろにいる戦車が次々撃破されると、急速に戦意が萎え始めた。そして……ついに……

ソ連兵

「う……うわー！ こ、殺されるー！」

1人のソ連兵が武器を捨て逃げると、周りにいたソ連兵も逃げ出した。

隊長が必死に叱咤して止めようとするが、一度崩れた味方を止める事はどんな名将にも難しい事だ。

しかも、やって来る相手は日本軍だから余計だ。

長野連隊長

「よし。ここは大丈夫だな。次に移る」

レニングラード市内司令部

簡単な防衛線を書いた市周辺の地図には敵・味方を示す駒が置かれている。

しかし、ソ連軍を示す青い駒は次々に後退し、連合軍の赤い駒は次々に前進している。

ジューコフ元帥

「前線は何をやっている！ 後退する兵士は銃殺にしろと言っているんだぞ！」

参謀

「ダメです、同志ジューコフ！ 連合軍はそれに気付いて、督戦隊を排除してから前線の兵を攻撃する様になり…兵が簡単に後退する様になりました…」

ジューコフ元帥

「くそ！ 我が軍の弱点を正確に突いている！」

ソ連軍の弱点……それは政治態勢が独裁者による恐怖政治であり、軍の統制方法も恐怖政治のやり方である事だ。

ソ連軍は突撃する兵士が無断で後退した瞬間、後方の督戦隊が兵士を射殺するとゆうやり方である。

しかし、連合軍は既にこのやり方を知っている為、まず、督戦隊を片付けてから前線を攻撃する様に始めた。

これにより、督戦隊が沈黙した瞬間、ソ連兵が後退する光景が見られる様になっていた。

士官

「同志元帥！ モスクワからです！」

そう言って入って来た士官から通信文を受け取り一読する。

参謀

「モスクワからなんと？」



ジューコフ元帥

「……レニングラードを脱出し、モスクワ防衛の任に就けだそうだ」

参謀

「つまり…それは…」

ジューコフ元帥

「とにかく…準備だ」

次号へ

## レニングレード攻略戦 2 (後書き)

予告

スターリンから脱出する様に命令を受けたジューコフはどっやっって脱出するのか？

そして、連合軍は一大チャンスを活かせるのか!？

ご意見ご感想をお待ちしております。

### レニングレード攻略戦 3 (前書き)

新米土官

「鳩ポツポには何の期待もしていなかった。まあ、民主党に期待などしていなかったが……で、今度の菅談話で菅に失望と同時に即刻退陣しろと言いたくなった！」

福本

「いくら何でもあれはダメだろう……また、韓国政府が良いように使うな」

新米土官

「だいたい！ まるで村山談話を出した時と状況一緒やん！ まあ、阪神大震災の時に暢気にテレビ見て、国民を見殺しにした最低首相の村山やからやろうけどな！」

福本

「で、作者はどう……」

新米土官

「『日本国名誉毀損罪（仮称）』でも作って、菅も村山も民主も社民も国外追放にしてみえ！」

福本

「……では、本編をどうぞ……」

### レニングレード攻略戦 3

ソ連軍から奪取した陣地の中で福本達は小休止をとっていた。

福本

「現状は？」

石田

「はい。鉄道と駅は確保完了。ドイツ軍部隊が守りを固めています。軍港では今だ抵抗が続いていますが、徐々に鎮静化しています」

マリード

「それで、飛行場の方は？」

石田

「それが…担当部隊からの連絡ですが、滑走路周辺で抵抗されて、苦戦しております」

福本

「滑走路周辺？ どうゆう事だ？」

石田

「よくは…ただ、敵は滑走路周辺の防備を固めている事は確かです」

福本

「ヴィル、航空参謀としてどう見る？」

ヴィル

「飛行場の維持は解りますが、今や戦闘機はモスクワ、黒海方面に

集中配備されている情報があります。ですから、維持する意味がありません」

マリィダ

「つまり、何かしらの意図がある？」

ヴィル

「断定はできませんがね」

福本

「…よし、交代して飛行場に向かおう。まずはそれからだ」

レニングラード ソ連軍飛行場

ソ連兵

「急げ！ 敵はそこまで来ているぞ！」

急造の陣地で必死に滑走路周辺を確保するソ連軍。そんな中、一機の大型機が引き出されていた。

ジューコフ元帥

「これが最後の大型機か？」

参謀

「はい。ペトリアコフPe-8四発爆撃機。前回の空襲により多数の同型機は殆ど地上破壊されましたが、これだけは無事でした」

ジューコフ元帥

「そうか…とにかく、今は脱出する事を優勢しよう」  
発進準備の為、急いで整備兵達が整備を行っていた。

福本

「どうだ、現状は？」

石田

「はい。どうやらソ連軍は滑走路周辺に急造の陣地を作り滑走路の  
みを確保したい様です」

福本

「滑走路か…何ががある？」

石田

「何もありませんよ？」

福本

「違う、敵の意図だ」

そう言いながら、双眼鏡で滑走路を見る。

ヴィル

「何か見えますか？」

福本

「いや、見えん」

しかし、福本の脳内では何かに対する警報が発せられていた。  
何か…何かある。

放棄しても仕方無い滑走路を確保する事に何か意味がある……と。  
この時、福本は普段なら腹這いになって見ているが、今回はそつちに気をとられ、中腰になっていた。

そして、双眼鏡からの視界の隅の大型機を認めた瞬間、いきなり視界が反転し、空を見ていた。

パン！

次に気付いたのは銃声……ヴィルが使っている狙撃仕様38式歩兵銃の発砲音。

ようやく気が付いた。

狙ったか偶然かは解らないが、敵から狙撃されたのだ。

マリーダ

「ちょっと、ダイスケ！ あなた死ぬつもり!?」

そして、もう1つ…首根っこを掴んで引き倒したのがマリーダだとゆう事も……

福本

「いや…そのつもりは……ああ!」

慌て飛び起き、再び双眼鏡を覗くと……発進態勢に入る大型機が一機……

ヴィル

「あれは…報告書に書いた四発爆撃機です!」

福本

「なに……あ、くそ、そうか！」

石田

「どうしました!？」

福本

「あれにはこの方面軍司令官が乗っているんだ！ だから、滑走路のみを確保しているんだ！」

ヴィル

「なるほど、だから、滑走路の周辺のみを確保したんですね」

マリイダ

「なら、一大チャンスね！」

福本

「その通り！」

石田

「元帥！ 四発機が滑走を始めました！」

福本

「大島大尉、いま滑走している四発爆撃機を撃て！」

大島大尉

「え、滑走する航空機をですか!？」

……そんな命令、前代未聞である。



大沢

「大尉、躊躇ってる暇なんてありませんよ!」

マチルダ

「そうですね! 男なら勝負しなさい!」

大島大尉

「おまえらな…小隊、目標滑走中の四発機、撃て!」

ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!ドン!

撃たれた砲弾の殆どは滑走路の向こうに着弾した。

だが、一発だけは滑走するペトリアコフPe-8の手前に着弾した。爆風か、あるいは衝撃波か、または両方か……それは解らないが、バランスを崩したペトリアコフは引き込み脚を折って、滑走路脇に突っ込んだ。

福本

「……………うそ!?!」

マリーダ

「……………奇跡かしら?」

石田

「……………偶然とは言え…出来すぎです」

ヴィル

「……………珍事ですね」

福本

「…って、こんな事やってる場合じゃない！ あの四発機を確保する！」

ヴイル

「ですが、問題はあの防衛陣地ですよ？」

ピーガ〜…

長野連隊長

『こちら、長野。福本元帥、応援に参りました。陣地はお任せ下さい』

無線機から聞こえてきたのは応援に来た長野連隊長の声。

福本

「よし、陣地は応援に任せて四発機に向かうぞ！」

ソ連兵達も四発機が離陸を失敗しているのを知っているから、一部の部隊がペトリアコフに向かった。

しかし、向かったのは僅かな部隊で、後の部隊は長野連隊・宮崎師団の部隊と、これまた応援のドイツ軍部隊に挟撃され、防戦一方となった。

また、ペトリアコフに駆け付けた部隊も石田中隊、大島小隊の攻撃を受け足止めされる。

福本

「一個分隊は続け！」

福本が真つ先に飛び出し、マリィダ、ヴィル、一個分隊が続く。旋回銃座からの攻撃も無く、ペトリアコフに接近する。

その時、搭乗口から2人の男が降りてきた。

先に降りた男が先頭にいた福本にトカレフを向けた。

パン！

狙っていた様だが、弾は頭をかすめ、何処かに飛んでいく。そのまま突っ走った福本は愛用軍刀『大和の飛龍』（福本命名）を抜き男に峰打ちを喰らわせる。

すると、後ろにいた男がトカレフを抜いたが、福本はそのまま軍刀を右手首に峰打ちを喰らわせ、トカレフを叩き落とす。

この時、遅れてやって来た一個分隊が男を包囲した。

ヴィル

「元帥！ ジューコフです！ ソ連軍のジューコフ元帥ですよ！」

顔を見たヴィルが男の正体を言った。

福本

「なるほどな。ヴィル、ロシア語で……まあ、適当に頼むわ」

次号へ

## レニングレード攻略戦 3 (後書き)

予告

敵将ジューコフを捕らえたものの、レニングレードは未だに落ちない。  
しかし、福本が用意した驚きの秘策を実行する!?

ご意見ご感想をお待ちしております。

## レニングレード陥落

1月18日

レニングレード周辺の防衛線を突破し、また、鉄道、軍港、飛行場の確保を完了した日独北欧連合軍はレニングレードを包囲していた。むろん、モスクワからの増援を警戒して防衛線を張っているが……。

クロンシュタット軍港内海軍司令部

ロンメル大将

「はてさて…困りましたね」

福本

「まあ、確かに」

今や連合軍の司令部として使われている一室でレニングレード周辺の簡単な地図を机に置いて、今後の事を検討していた。

ロンメル大将

「補給路は確保出来ましたが、レニングレードが落ちなければ、後方の憂いが残りますね」

福本

「ええ、いくら少数とは言え、残すと後々厄介ですからね」

そう、問題はそこ。

いくら、ソ連軍一有名な將軍のジューコフ元帥を捕らえたところで、レニングラードが落ちなければこの攻勢の意味は無い。  
ちなみに、ジューコフが捕虜になっているのは連合軍のトップシークレットで、知っているのは各軍の指揮官及び参謀クラス以上の地位の者しか知らない。

あるいは当事者と居合わせた者くらいだが、箝口令を敷いているから、あまり漏れていない。

ロンメル大将

「ジューコフは協力する様子も無い…当然といえば当然ですね」

福本

「こうなれば、仕方ありません。敵を内部崩壊させるしかありませんね」

ロンメル大将

「しかし、そんな方法がありますか？」

福本

「まあ…レニングラードの内情を考えて練りましたが…とにかくやってみますよ」

レニングラード近くの簡易飛行場

ヴィル

「しかし…福本元帥はいつの間到手筈を整えていたんですか？」

マリダ

「さあ…まあ、そこがダイスケの凄いところなのよね」

ヴィル

「…本当ですね」

マリダ、ヴィルの前にあるのは、空母から降ろされた多数の彗星、流星である。

共に、同じく空母から降りた整備兵が出撃前の最終整備にあたって  
いる。

ヴィル

「今回の作戦名…また、凄い名前ですね」

マリダ

「『上杉謙信・武田信玄作戦』が？」

ヴィル

「木村中將から聞きましたけど、2人共、戦国大名でライバルだった  
さそうですけど…なぜこんな名前に？」

マリダ

「戦国時代にライバルだった2人は何度も戦ったわ。上杉謙信は日  
本海側の大名、武田信玄は内陸部の大名だったの。ある時、武田信  
玄は塩が確保出来なくなった」

ヴィル

「…塩？」

マリダ

「当時、塩は非常に重要な戦略物資だったの。今で言う石油並みにね。本来ならこんな時程のチャンスは無い。ライバルなら当然、戦いを仕掛けるわ」

ヴィル

「確かに…相手が弱っている時に叩くのは戦の基本ですからね」

マリーダ

「でもね、上杉謙信は武田信玄に塩を送ったの。多分、最大ライバルだからこそ堂々と決着をつけたかったのね。この話は逸話とも言われているけど、この話から出来た言葉が『敵に塩を送る』よ」

ヴィル

「へえ…マリーダ参謀長、よく知ってますね？」

マリーダ

「エヘヘ、実はダイスケからの受け売りよ。まあ、何故かダイスケから教えて貰った事はよく覚えてるのよね」

ヴィル

「なるほど…さて、成功しますかね？」

マリーダ

「まあ、何かしら効果はある筈よ。その為にダイスケがアメリカにも協力要請したんだから」

そう言った直後、準備を終えた彗星・流星が飛び立った。期待と不安を乗せながら……



正に目と鼻の先程度の距離を飛んだ彗星・流星隊はレニングラード上空に到達した。

両隊はレニングラード上空で爆装倉を開く。

しかし、出てきたのは爆弾では無く、木箱の類だ。

パラシュートが付けられた木箱はレニングラード市内のあちこちに着地した。

最初は爆弾と思い遠目に見ていた市民・軍人も恐る恐る近付くと、中身は……パンや缶詰などの食料品であった。

これに市民・軍人が殺到したのは言うまでも無い。

彗星・流星隊は終日数回に渡って行われ、翌日も行われた。

結局、レニングラードが降伏したのは20日の事だった。

原因は……食料品投下による戦意低下と統制が効かなくなった事……

……内部崩壊が理由であった。

次号へ

## レニングレード陥落（後書き）

予告

レニングレードを落とした日本軍。  
しかし、未だに戦いは終わらない。  
次なる戦場は黒海、友好国のトルコに進路を取る！

ご意見ご感想をお待ちしております。

トルコへ向けて…（前書き）

新米土官

「本日の読売新聞第5面国際欄の記事です」

福本

「いきなりなんだ？」

新米土官

「いや、気になったもんで…戦艦武蔵がフィリピンで沈んでおります」

福本

「はい」

新米土官

「そのフィリピンで…細かく言いますと、シブヤン島・タブラス島ですが…戦艦武蔵で島おこしを計画しているそうです」

福本

「なんか、ちと複雑な心境になる話だな」

新米土官

「まあ、慰霊施設等で日本人観光客を呼び込むそうですがね……なんか、韓国や中国とは大違いな気がね……」

トルコへ向けて…

2月3日 ラトビア

港町であるリガでは第七艦隊と輸送船団の出港準備が進められていた。

レニングラードが陥落し、ヨーロッパ方面が一段落した為、侵攻間近と思われる友好国トルコへ向かう為だ。

ちなみに、ジューコフ元帥が捕虜になっている事も公表され、ある情報筋によると、ソ連軍全体で士気が低下し、戦場によっては戦わずして降伏する例が多数見受けられている。

また、モスクワ周辺に配置されている部隊を脱走した脱走兵がレニングラード周辺に展開するドイツ軍や北欧連合軍に投降する例もある程だ。

どうやら、ジューコフ元帥捕虜のニュースは絶大なる効果があった様だ。

ロンメル大将

「本日中に出港ですか？」

福本

「ええ、ソ連軍のトルコ侵攻は何時行われても不思議ではありませんから」

ロンメル大将

「確かに…今や誰も知らぬ者はいない指揮官とその艦隊ですからな」

福本

「いえいえ…そんな事をいえば、事後処理をあなたに押し付けてしまいましたね」

ロンメル大将

「まあ、私は陸の指揮官ですから……次はどこで会いますか？」

福本

「そうですね…モスクワ近郊でまたお会いしましょう」

ロンメル大将

「そうですね」

福本

「はい。では、また」

そう言って福本はロンメル大将と別れた。

20分後……播磨艦橋

福本

「…で、航路予定は？」

千歳

「キールで連合王国海軍艦隊・サブム帝国海軍艦隊と合流、その後は地中海に入って、イタリアのタラント軍港でイタリア艦隊と合

流、そして、トルコだから……半月から20日ってところね」

福本

「うーん、時間が掛かるのは仕方ないな…さて、全艦準備はいいな？」

遠地

「もちろん、第七艦隊全艦は何時でも出撃可能だ」

福本

「よし、第七艦隊はこれよりトルコへと進路を取る…全艦出撃せよ！」

「……………了解！」

戦艦播磨を中心に第七艦隊はリガを出撃した。

その勇姿は正に威風堂々。向かうはトルコ……黒海方面である。

戦艦播磨防空指揮所

福本

「うーん……久し振りの潮風は気持ちいいな」

ジント

「元帥、まるでおじさんですよ？」

福本

「いいだろう。久々の海だからさ」

ジント

「あははは…早く終わらせたいですね…この戦争を…」

福本

「ああ…その後はどうする？」

ジント

「そうですね…この仕事は体に馴染んでしまいましたからね…約束もありますし」

福本

「約束？」

ジント

「ラフィールと初めて会った時に交わした約束です。『一生、あなたの側に付いて行く』…と」

福本

「なんだ、騎士様がお姫様に一生の忠誠を誓った様な話だな」

ジント

「え、いや…そんな事は…」

ラフィール

「コホン…副長、元帥。何をしているのですか？」

まさにタイミング良く……しかも、これ以上何も言わせないかの様に……出て来た。

ジント

「あははは……何の用ですか、艦長？」

ラフィール

「さっさと仕事に戻れ、副長。油を売っている暇があるならな」

ジント

「了解。それでは」

そう言うと、ジントは下に降りていった。

ラフィール

「お見苦しいところをお見せしてしまい申し訳ありませんでした。

元帥

福本

「いや、別に……案外、貴重な話が聞けてよかったぞ」

ラフィール

「……元帥、ここ（防空指揮所）から落としましょうか？」

福本

「おっと、退散退散」

女性の怒りは食い物の恨み並みに怖いからね……



次号へ

## トルコへ向けて…（後書き）

予告

トルコに到着した第七艦隊。

しかし、出雲のレーダーが破壊者の影を捉える！

果たして、第七艦隊は撃退できるのか！？

明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新致します。お楽しみに。

ご意見ご感想をお待ちしております。

トルコ到着（前書き）

コーン！ コーン！ コーン！

新米士官

「ウツハハハハハハ！ 死ねー、菅、民主党、社民党、売国奴共めー！！」

福本

「…朝もはようから、なに呪いの藁人形を五寸釘を打ってんだよ」

新米士官

「新聞見りゃあ解る！ 何がアジア諸国だ、何が配慮だ、何が違いだ！ 戦う意思も覚悟も無い売国奴共が政権取りやがってー！ 更に質が悪すぎだ！ 売国奴共、呪うぞー！」

マリーダ

「（新聞を見ながら）あちゃー、閣僚は1人も行って無いつてさ」

新米士官

「確かに日本は信教の自由がある！ しかし、過去を生きた人々を供養するのは信教の自由以前の問題だ！ 人道の問題だ！ 人としての問題だ！」

福本・マリーダ

「（今日も朝から熱いな）」

## トルコ到着

リガを出港した第七艦隊はキールで連合王国艦隊・サブムム帝国艦隊と合流、25ノットの速度で地中海に入り、イタリア・タラント軍港に入港した。

しかし、そのタラントで15日、ソ連軍がトルコに侵攻開始を聞いた第七艦隊はイタリア艦隊と早速合流し、一路トルコへと向かった。

2月20日 エーゲ海

戦艦播磨艦橋

ラフィール

「あと数時間で、イスタンブールに到着いたします」

福本

「本来なら、イスタンブールで少しゆっくりしたかったが……この状況では不可能だな」

マリイダ

「不可能以上よ。向こうは大変なんだから」

……まだまだ余裕な第七艦隊長官・参謀長。

ミーナ

「レーダーに反応……2万トンクラス的大型艦です」

オペレーターのミーナの声に艦長が反応する。

ラフィール

「副長、総員戦闘配置に就かせよ！」

福本

「大丈夫だ、ジント。神谷、トルコ側から通信は？」

神谷

「いえ、まだ……あ、今きました！ 『本艦トルコ海軍戦艦』ヤウス・セリム』成り。誘導ス、我ニ続ケ』以上」

福本

「返信『了解ス。出迎エゴ苦労』」

神谷

「了解」

ジント

「トルコ海軍に戦艦があつたんですか？」

福本

「第一次世界大戦時のドイツ海軍巡洋戦艦だがね……ソ連黒海艦隊にとっては脅威だよ」

当時の戦艦は現在の核兵器・核ミサイルと同様……つまり、国が国家予算を注ぎ込み、国内技術を見せ付け、抑止力とする物であった。この為、日英米独伊仏ソ以外にも南米諸国・ギリシャなども旧型戦

艦を購入・保有している。

これはトルコも同様で、第一次世界大戦中、地中海艦隊旗艦で有りながら、イギリス海軍に追い回され、トルコに逃げ込んだ旧名『ゲーベン』をドイツと交渉し引き渡たされている。

これが『ヤウズ・スルタン・セリム』：後にスルタンが外れ『ヤウズ・セリム』となる戦艦である。

この為、彼女は元ドイツ海軍巡洋戦艦である。

そんな彼女も老齢ながらも、ろくな海軍を持たないソ連海軍にとつては厄介以上に邪魔な存在だった。

ヤウズ・セリムの誘導の下、イスタンブールへと入港した第七艦隊＋第六大陸派遣艦隊＋イタリア艦隊。

播磨は内火艇を降ろし、イスタンブール港へと向かった。

見える限り、港では大人・子供問わずに、日本国旗とトルコ国旗を振って出迎えてくれている。

栈橋に着くと、1人の男が護衛の軍人を連れて近付いて来る。

「トルコ共和国第二代大統領のムスタファ・イノニユです。福本大介元帥他日本陸海軍の英雄方を迎えられる事を誇りに思います」

福本

「お国が火急とゆう時に我々をこの様にお迎え頂き、ありがとうございます  
ざいます」

ムスタファ大統領

「いえ、あなた方は二度もロシアと戦い勝利を収めました。また、火急である我が国をこつやって助けに来てくれました。東洋の親友を迎える事は当然の事です」

情けは人のためにならず。50年前の『エルトウル号遭難事件』で起きた悲劇は救助者をトルコまで送った事が契機でトルコとの付きは始まった。彼らは例え何世紀経とう、『エルトウル号遭難事件』を忘れる事が無い限り、日本との交友が失われる事は無いだろう。

新沢

「元帥！」

いざとゆう時の為、連絡係として同行させた新沢が内火艇から飛び出して来た。

マリーダ

「どうしたの!？」

新沢

「出雲より連絡! 北の方角より編隊をキャッチ! 進行方向は推定ですが、ここです!」

福本

「大統領! 急いで一般市民の避難を!」

ムスタファ大統領

「わかりました!」

福本

「新沢、各艦に迎撃態勢! 空母から戦闘機を出せ!」

新沢

「既に第七航空戦隊より戦闘機発進中です！」

マリィダ

「さすが出雲と勝鷹ね！ 対応が早いわ！」

航空戦艦出雲

防空指揮所で出雲は殺気だった視線をまだ見えない敵編隊に向けていた。

下の航空甲板では陣風が発進しようとしている。

アイカシ  
出雲

「殺らせはせぬ！ 例え日本海軍の戦艦に成ろうと…直接関係の無い一般市民は殺らせはせぬ！」

バン！

カタパルトに載せられた陣風が発進した。

軽空母勝鷹

ロンゲアイランド  
勝鷹も同じく防空指揮所に居た。そして、彼女の飛行甲板でも陣風が発進しようとしていた。

ロンゲアイランド  
勝鷹



「目の前で仲間死に姿を見て…死ぬ筈だったところを零に…第七艦隊に…日本海軍に救われた」

だから、今は日本海軍の軽空母として、ここにいる。ならば、自分は何をすべきか…

ロングアイランド

勝鷹

「もう…私の様な人を出したく無い…もう、無力だと思いたく無い」

そして、彼女は飛行甲板の方に向く。  
発進しようとする陣風隊に向けて敬礼をする。

ロングアイランド

勝鷹

「パイロットの皆さん…イスタンブールを守って下さい…私の悲しみを…出さない様に！」

ダン！

カタパルトによって陣風が発進した。

出雲・勝鷹から発進した陣風隊はレーダーの誘導に従い、高度8000メートルを飛行していた。

そして、隊長機が来た方向に向かって進む編隊を発見、国籍表示の赤い星を確認すると攻撃を開始した。

次号へ

## トルコ到着（後書き）

予告

ソ連軍来襲！

出雲・勝鷹の思いは届くか！？

イスタンブールは守りきれぬのか！？

ご意見ご感想をお待ちしております。

## イスタンブール防空戦

グオングオングオングオングオングオング……

ソ連軍のペトリアコフPe-2がヤコブレフYak-9の護衛を受けてイスタンブールに向かって飛んでいた。

これはスターリン直々の命令で、頑強に抵抗するトルコに対する心理的・物理的打撃を与える為のイスタンブール爆撃だった。

本来なら、侵攻開始当日に行われる予定だったが、世界を相手にしているせいか、機体やパイロット、整備部品等の確保に手間取り、また、機体の稼働率を維持する為、整備作業を続けた為、爆撃決行がずれ込んでしまった。

それがよかったかは判らないが、一般人を巻き込むのは戦時国際法違反である。しかし、国際赤十字を資本主義の片割れと言い、パチカン市国を全く相手にしないスターリンにとっては、戦時国際法も無きに等しいものだった。

順調に高度4000メートルで飛行していた爆撃隊は突然、襲撃を受けた。

それは護衛の戦闘機隊も同様で、完璧な奇襲であった。

眼下を飛ぶ編隊を見付けた陣風隊は太陽を背にする様に素早く調整し、一気に敵編隊へと降下した。

そして、20mm×4、30mm×2の計6挺の重火力が売りの1つである陣風は敵編隊に重い一撃を与えた。

20mmでも、当たり所や数発当たれば、撃墜無いし損傷を受ける。ならば、一回り大きい30mm機銃だと……想像出来よう。

それに奇襲だった事も有り、たちまち数機のペトリアコフやヤコブ

レフが墜ちていった。

慌て30機のヤコブレフが……何機か墜ちたが……陣風隊に挑んだ。しかし、悲しいかな相手は今や『空を制した艦隊』と言われる第七艦隊の戦闘機隊である。

ひよっ子では敵わず、あちこちで撃墜される。

しかし、陣風隊の任務は爆撃隊の迎撃である。

さっさと片付けた陣風隊はペトリアコフに再び襲い掛かった。

『敵戦闘機隊を全機撃墜。これより、敵爆撃隊を攻撃する』

『敵爆撃隊は50機程…突入する』

『敵爆撃隊、防衛火力強し！ 接近困難！』

『被弾した…離脱します！』

内火艇に積んでいた無線機で状況を掴んでいたが……どうも、雲行きは怪しい。

福本

「…まさか、こんな時に敵爆撃隊が来るとは……まだまだだな」

こんな時に限って、いつもの警戒心が働かないとは……後悔が残る。

マリーダ

「他の戦闘機隊は!？」

新沢

「ダメです! 入港に備え、配置を解いた為、時間が…」

福本

「…やってしまったな…大統領、市民の避難は？」

ムスタファ大統領

「急いでいますが…残念ながら、間に合いません!」

福本

「く…あとの頼りは…出雲だけか…」

今回はあまりにも偶然が多すぎた。

偶々、第七航空戦隊の停泊が最後になり、偶々リーダーが接近する敵影を捉え、偶々戦闘態勢が取れ、偶々戦闘機も発進出来た。

………そんな事を言ってしまうえば、同期生の艦隊に配属されたのも偶々だが……

士官

「艦長! 島津艦長!」

「ん………すまん、ボ―としていた」

士官

「何をしているんですか！ 敵編隊は直ぐそこまで来ています！」

「わかっている。対空屋をなめるな」

この出雲艦長：島津勇介少将は福本・マリーダ・遠地・千歳と同期生であり、遠地と同じ砲術科の出身。

出雲艦長として第七艦隊に配属される前は古鷹の40mm機銃指揮官、基地隊の対空砲指揮官、標的艦撰津の砲術長に配属されていた。砲術科ながらも対空砲術に関連していた部署に配属され、本人もそれを自負していた。

また、標的艦撰津に配属されていた時は、松田千秋艦長（当時）の下で回避操艦を学び、対空砲術の腕を磨いていた。

この為か、松田少将の計らいと福本と同期生とゆう事から出雲艦長に抜擢されたのである。

島津

「状況はどうだ？」

通信長

「迎撃隊から残弾僅かの報告が先程きました！」

島津

「不味いな……」

いくら発進可能だったとは言え、搭載弾数は最大弾数の半分かそれより少し多いくらいで発進させたから、いくら節約しても限界がある。

そして、問題は頭に血が昇った馬鹿が敵爆撃機に突入して自爆する事が発生しないかどうか。

島津

「（桜のようにパツと散る……日本人だから解らん事も無いが、あいつが許す訳がない）…敵は密集隊形だな？」

士官

「はい。陣風隊の攻撃により、密集編隊をとって防御火力を濃密にしています」

島津

「よし、通信長。陣風隊には弾が無くなっても、攻撃するふりをさせる。但し、頭に血を昇らせて自爆するなと伝える！」

通信長

「了解！」

士官

「攻撃するふりですか？」

島津

「密集編隊を維持させる。その方が効果は上がる」

後は、自分達の腕次第だが……

既に20機程に減っていたペトリアコフも未だにイスタンプールに向かつて飛んでいた。

しかし、陣風隊は残弾ゼロで、攻撃は出来ない。

そんな時に入った島津からの通信の意図に気付いた隊長は自爆を慮



禁させ、指示を実行した。

出雲防空指揮所

士官

「敵編隊、イスタンブールまで3万メートル！」

島津

「砲術長！ トルコは前線で手一杯だ！ 俺達が最終防衛線だぞ！  
ちゃんと当てるよ！」

砲術長

『わかっております！ 艦長こそ、対空屋の意地を見せて下さいよ！  
適切な位置での指示を期待してます！』

島津

「おう！ 任せとけ！」

士官

「目標、2万9000！」

島津

「甲板作業員は退避！ 飛行甲板、主砲発射の衝撃に備えよ！」

士官

「2万8000メートル！」

島津

「まだまだ……」

士官

「2万7000メートル！」

島津

「もうちよい……」

士官

「2万6000！」

島津

「発射用意！！ 陣風隊離脱せよ！」

士官

「2万5000！」

島津

「三式弾、てえー！！」

スガーン！スガーン！

前部配置の36cm50口径三連装砲2基の主砲が吼えた。

離脱命令を受けた陣風隊は直ぐに離脱した。

ようやく諦めたか…と爆撃隊の隊長が思った瞬間、出雲から発射された三式弾が目の前で炸裂した。

密集編隊で飛んでいたペトリアコフの編隊は炸裂した三式弾をもろに浴びた。

V T信管が装着された三式弾は正確にペトリアコフを感知し、目前で炸裂、密集編隊だったのが災いし、あっという間に爆撃隊は全滅した……。

『敵爆撃隊、三式弾により全滅！』

福本

「…なんとか、迎撃出来たか…」

無線機から聞こえた声に、一安心する福本。  
しかし、直ぐに真顔になった。

福本

「申し訳ありませんでした、ムスタファ大統領。我々の気の緩みにより、イスタンブール市民を危険に逢わせる事になるところでした」  
ムスタファ大統領  
「いえ、本来なら我がトルコ軍の任務。あなた方は再びトルコ国民を助けて下さった…ありがとうございます」

福本

「あ、いえ…」

マリイダ

「まあ、なんとか守りきれたし、よしとしましょう」

次号へ

## イスタンブール防空戦（後書き）

予告

いきなりのソ連軍空爆をなんとか防ぎきった第七艦隊。  
続いて、野中五郎中佐率いる陸攻隊が新兵器を持ってトルコに到着  
した！

その新兵器とは！？

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 欧遣陸攻隊（前書き）

しまづゆうすけ  
島津勇介

階級 少将 年齢 25歳

福本達と同期生で、神戸士官学校では遠地と同じ砲術科。

砲術科でも、高角砲や対空機銃の対空砲術を専攻。

卒業後は古鷹の機銃指揮官、基地隊の高角砲指揮官、摂津の砲術長に着任。

摂津では松田千秋艦長の下で、繰艦や対空戦の訓練に明け暮れる。

その後、出雲艦長に着任。実はこれまた福本達同様、艦魂は見えるが、女性に対し奥手、しかし、マリーダとは話せる。

福本が訊いたところ、「半分以上男だからね」と答えた瞬間、マリーダに殴られた。（笑）

## 欧遣陸攻隊

2月24日 イスタンブール近郊

第七艦隊が到着してから数日後……イスタンブール近郊の飛行場に  
福本・マリィダ・ヴィルは来ていた。

マリィダ

「今日よね？ 野中部隊が来るの？」

ヴィル

「はい。2日前に連絡がきましたから……しかし、今になって、なぜ、  
陸攻隊を派遣してきたんですかね？」

福本

「まあ、手数が増えるのは悪く無い……と、来たみたいだ」

ブロooooooooooooン！

三式陸攻『靖国』の編隊が福本達の上空を通過する。そして、一度  
ターンすると飛行場に着陸した。

福本

「上手い……さすが七五二空だ」

着陸した一番機に続き、次々に靖国が着陸する。  
その一番機から1人の将校が降りて来た。

「欧遣陸攻隊隊長、野中五郎中佐です」

福本

「第七艦隊司令長官兼日本海軍代表福本大介元帥です」

……と形式上の挨拶を終えると、普通に戻る。

福本

「遠い所をご苦労様です」

野中中佐

「いえいえ、部下達の間ではヨーロッパ派遣と聞いて大喜びする奴が多いですよ」

福本

「それは良かった。しかし、何故今頃、陸攻隊の派遣を決定したのでしょうかね？」

野中中佐

「いえ、手…本官は知りません」

福本

「いつも通りで構いません。それと、これが貴官と貴隊に出された命令書と通知書です」

小脇に挟んでいた命令書と通知書を野中中佐に渡す。

野中中佐

「……手前を大佐に？」



福本

「現在は戦時です。それに欧遣者は自動的に一階級特進ですから……  
例え昇進から僅か1日しか経っていないくとも」

野中中佐

「なるほど……まあ、給料は増えますな」

福本

「あはは……それでは、装備の確認をお願いします」

野中中佐

「おうよ！……と、すいやせん」

福本

「そのまま、そのまま」

福本・マリィダ・ヴィル・野中中佐は格納庫へと向かった。  
格納庫には先に到着していた七五二空の整備員達が受け入れ準備を  
進めていた。

整備長

「総員作業止め！ 敬礼！」

近づく福本達に気付いた古参の整備長が慌て作業を止める。

ヴィル

「作業続けて下さい。兵器長はいますか？」

兵器長

「はい！」

これまた古参の兵器長が前に出て来た。

福本

「靖国の兵装はどうかね？」

兵器長

「はい、既に輸送船により、必要な3番(30kg)から1トン爆弾まで全て揃っております」

福本

「そうか、それは良かった」

兵器長

「但し…担当者が来るまで開封厳禁の兵装が1つあります」

マリダ

「開封厳禁？ なんなの？」

兵器長

「さあ…魚雷ではありませんが…何でかは…」

ヴェル

「担当者は今日来るのか？」

兵器長

「はい、予定では」

福本

「まあ、来ればわかるさ」

一時間後……

担当者

「つまり、これは音波探知魚雷です」

陸攻搭乗員達と整備員達、そして、福本達の前で担当者が専用台車に載せられた魚雷を説明していた。

福本

「弾頭の小型ソナーで感知したスクリュー音を追い掛ける魚雷だな？」

担当者

「その通りです。さすが開発のきっかけを作ったお人だ」

ちなみに、この『開発のきっかけを作った』とは、誘導弾桜花開発の経緯で語ったと思うが、一時期、戦局不利になった時の為の特攻兵器開発構想があったが、噂を聞いた福本が乗り込み全面的に中止させた。

しかし、回収した資料を読んだ福本は何人かの開発担当者呼び出し、別物に開発させた一例が桜花だった。

マリーダ

「けど、黒海艦隊は規模も小さくて、出て来るか解らないわよ？」

担当者

「ええ、まあ、出て来たら儲け物……魚雷も6本しか運んで来ていませんから」

福本

「で、名前はあるのか？」

担当者

「一応正式採用採用されましたので、四式航空用魚雷：通称『回天』です」

回天……史実なら、酸素魚雷を改造した特攻兵器の名前は、誘導魚雷の名前に使われるとゆう、ちよつとした皮肉だった。

次号へ

## 欧遣陸攻隊（後書き）

予告

第七艦隊・日本欧遣航空隊・第六大陸艦隊・イタリア艦隊、トルコ支援を開始！バルカン半島からはドイツ・イタリア軍が進撃する。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## トルコ・バルカン半島情勢

トルコ軍VSソ連軍の戦いは地形を活かしたトルコ軍の活躍により、ソ連軍は各地で立ち往生していた。

ソ連軍はバルカン半島からの侵攻は無理とみて断念、この為、トルコ北東方面から侵攻したが……トルコ北東は山岳地帯であり、大軍で侵攻したソ連軍は逆に身動きが取りづらくなり、しかも、連合軍として参加した為、日本陸軍から古参兵を中心とした教導隊（書類上だが）を派遣し、地元の木こりや羊飼いなどの志願兵を中心とした山岳部隊を編成、この部隊の活躍にソ連軍は各地で混乱に陥っただけで無く、軍用地図などの重要書類を奪われる失態を犯した。

また、肝心のソ連空軍のエアカバーも、トルコ軍の戦闘機の頑張り確保出来ず、第七艦隊の紫電改、烈風、陣風の戦闘機と歴戦のパイロットを有するだけに、ソ連軍戦闘機は大被害を続出させ、僅か1日で戦闘機連隊が壊滅する程だった。また、空母機や欧遣陸攻隊が連日爆撃に出撃し、陸上部隊に大損害を与えていた。

特に、彗星35型は翼内30mm機銃により、ソ連軍戦車は次々狩られた。

もちろん、ソ連軍も只やられているわけでは無く、マキシム水冷重機関銃を特設四連装銃架に載せた物などを用いて、必死に対空戦を行った。

しかし、高速化した航空機にこれによる抵抗も限界があり、また、多数での同時襲撃や射程外からの水平爆撃を行うと、無力に近かった。

更に、弾薬運搬車や燃料タンク車を守る為にその周囲に多数の対空用マキシムを配置した場合、その守りの固さから逆に護衛目標を狙われるとゆう皮肉な事態が発生した。

結局、侵攻作戦が進展する訳が無く、ソ連軍は作戦は既に頓挫していた。

さて、ソ連軍最高司令部では現状に困り果てていた。奥の手だったジューコフ元帥がレニングラードで捕虜になり、ソ連軍全体の士気に影響していた。

もちろん、ジューコフの下で鍛えられた将官、実戦により鍛えられた将官もいたが、ある大きな点でジューコフと隔たりがあった。

それは日本軍との戦闘を経験していたからだ。

いくらソ連軍上層部やスターリンが否定しても、ここまで短期間に戦局を変えた原因の1つが日本軍である事は否定出来ない事実であった。

何せ、日本兵はヨーロッパ諸国の兵士より手強く、冬季戦ではさも当然の様に戦っていた。

また、航空機も優秀、戦車も少数で多数を返り討ちに出来、海軍は到底敵わない。

そんな別次元の敵にソ連軍上層部はハルヒンゴール：ノモンハン事変のロシア側名称：でのジューコフの報告書を何度も読んだが、余りにも見当たらない日本兵に困惑するしかなかった。これは史実のアメリカ軍も同様で結局は物量で押しきったが、今のソ連軍にはなかった。

そして、ソ連軍上層部とスターリンにとってもう1つの頭痛の種は、暗殺に失敗したトロツキーが建国したロシア共和国で、この噂はソ連国内に広がり、じわりじわりと効果を出しつつあった。

これが後に、ソ連の内部崩壊を引き起こし、スターリンの寿命を縮める事になる。

バルカン半島での情勢は刻一刻とソ連と共産主義には不利になって

いた。

元々、バルカン半島は様々な民族が入り混じり、また、宗教も違っていた。

ソ連は宗教・国境問題などに介入し、バルカン半島を（ナチスドイツ時代で手に入れたドイツ領を除く）赤化していた。

しかし、ギリシャ奪還やドイツ侵攻失敗、レニングラード陥落から共産主義に陰りが見え始め、また、共産主義を支持しない大半の地元住民による抵抗運動が起きていた。

ここにドイツ・イタリア軍が進入し、解放されると、共産主義支持者は逃げ出し始めていた。

また、僅かなソ連軍でドイツ・イタリア軍を防ぐのは無理であり、降伏するか退却するかであった。

現在のところ、バルカン半島で大規模戦闘は起きていないが、未だ余談は許さない状況である。

次号へ



## トルコ・バルカン半島情勢（後書き）

予告

トルコ軍支援の為、第七艦隊・第六大陸艦隊・イタリア艦隊・日本陸軍欧遣部隊はソ連・トルコ侵攻軍の後方に上陸作戦を決行する！

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 後方打撃作戦

3月1日 黒海東沿岸部 港街ノボシースク近郊

その日の朝、いつも通りの朝を迎えるはずだったノボシースク市民にとつては少し変わった朝になってしまった。

朝から少し霧が掛かり、普段より少し視界が利かない中、近くの漁村に住む中年の漁師2人は散歩がてらに海を見ていた。

本来なら漁に出ているもおおしく無いのだが、このご時世だけに、漁の中止命令が出ていた。

しかし、彼らも生きなければならぬ。

その為、密かに船を出し近場で漁をしている。

これは村では公然の秘密である。  
ちなみに、海を見ているのは漁師の勘を忘れない為のトレーニングの様なものだ。

そんな2人が歩いていると、浜辺で謎の一団が漁船の周りを囲んでいた。

その一団に2人は興味本意で近付いた。

その謎の一団の正体は……先発隊として上陸した石田率いる第6中隊の内の2個分隊だった。

彼らは石田に率いられ、霧を利用して浜辺に上陸した。

しかし、自分達を隠した霧が、まさか皮肉にも場所の特定を困難に  
してしまうとは……

陸戦隊下士官

「どうします、中隊長？」

石田

「ぼくとする訳にはいかん。どうかしてノボシースクの位置を…」

陸戦隊兵

「分隊長！ 中隊長！ 誰か来ます！」

この声に陸戦隊員達は百式短機関銃や九九式歩兵銃の安全装置を外し、初弾を装填する。

石田

「馬鹿、早まるな！ 警備のソ連兵とは限らないんだぞ…少尉、付いて来い」

少尉

「了解」

通訳の少尉を同行し、念の為に零式拳銃を所持し、ゆっくり慎重に近づく。

「\*\*\*、\*\*\*\*\*？」

石田

「なんて言ってる？」

少尉

「『おい、船が故障したのか？』です」

石田

「船が……あ、そうか」

多分、上陸用舟艇が漁船に似ていたから、そう訊いたのだろう。

この時点で、石田は相手が漁師だと気付いた。

そして、石田は懐からアメリカのラッキーストライクを2本とマッチを取り出した。

ちなみに、石田はタバコを吸わない。

じゃあ、なんで？…となるが、偶々仲良くなったアメリカ兵にもらったのだ。

（マッチは自分の物）

そして、近付いて来た中年の漁師2人にラッキーストライクをあげて火をつけた。

そして、2人にここは何処かと質問した。

戦艦播磨艦橋

ミーナ

「…きました！ 石田大尉からです！」

福本

「よし、繋いでくれ！」

ミーナ

「はい…繋ぎます。どうぞ」

石田

『すみません、確認に時間が掛かりました…現在のの上陸地点はノボ

シースク近郊の砂浜です』

福本

「ご苦労。神谷！ 全部隊に連絡！ 上陸を開始せよ！」

神谷

「はい！」

石田

『あ！ あと、嗜好品の輸送も許可出来なんでしょうか？』

福本

「嗜好品？ 別に構わないが……なんでだ？」

石田

『あ、いえ……その、お礼と言いますか……』

福本

「わかった。後で、リストにして持ってこい」

石田

『わかりました』

福本

「千歳、霧が晴れるのは何時だ？」

千歳

「あと1時間程……完全に晴れるのはね」

福本

「よし、やれるところまでやる。」

さて、前置きがかなり長くなってしまったが、第七艦隊・第六大陸艦隊・イタリア艦隊・日本陸軍欧遣部隊はトルコを支援しつつ、ソ連軍を痛撃する為、後方打撃作戦を実行した。

現在のソ連軍補給・輸送主体は鉄道であり、これを遮断する為、一番近く直通である都市兼駅のアルマビルを奪取するべく、海上から迂回する作戦に出た。

この為、近くの港街であるノボシースクを確保し、最速速攻でアルマビルを占領する……難しくは有るが、やれない作戦では無かった。艦隊は霧を利用し、ノボシースクに接近、段々と晴れつつある霧の中、上陸用舟艇が浜辺に乗り上げた。

2時間後……ノボシースクは無血開城された。  
拠点を確保した連合軍は次の段階へと移行した。

次号へ

## 後方打撃作戦（後書き）

予告

トルコ侵攻軍の後方に回り込み、鉄道輸送を遮断した連合軍。激怒したスターリンは大軍による撃退を望んだが……。

明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新致します、お楽しみに。

ご意見感想をお待ちしております。

## ソ連の限界（前書き）

新米士官

「高校野球優勝で盛り上がっている沖縄に冷や水を浴びせ掛ける事になりますか……沖縄でちゃんと日本史（特に近現代史）は習っているかね？」

福本

「作者、本土でちゃんと教えてないのに、戦場になった沖縄でちゃんと教えると思う？」

作者

「……すまん、愚問だな」

マリーダ

「どうせ、時間配分も沖縄戦中心で、左翼教師が嘘事とか並べて小學生を洗脳してるんでしょうね。あゝ、やだやだ。戦争は負けない事が大事ね」



## ソ連の限界

3月2日 モスクワ クレムリン

ドン！！

スターリン

「何をしている！ ヤポンスキー共をいとも簡単にトルコ侵攻軍の後ろに侵入させるとは！」

スターリンはテーブルを力任せに叩き、室内の司令官達を睨む。

海軍司令長官

「で、ですが、同志スターリン。敵艦隊はあの第七艦隊でして……」

今まで影の薄かった海軍司令長官が恐る恐る発言した。

スターリン

「アメリカンスキーが『悪魔の艦隊』と呼んだヤポンスキーの艦隊か？」

海軍司令長官

「は、はい……」

スターリン

「馬鹿者！ たかだか艦隊1つではないか！ 我が偉大なる陸軍砲兵軍団で吹き飛ばせばよいだろう！？ あるいは空から爆弾の雨を降らせればいいではないか！？」

……陸軍国ソ連の独裁者故か、どうも海軍に疎い……とゆうか対応策がある意味無茶苦茶である。

確かに、ソ連軍は独ソ戦終結時に砲兵軍団を10個も持っていた。

(まさに化け物……)

しかし、1万トンクラス艦で約2〜3個師団に匹敵する火力を有するとゆう観点から見れば、第七艦隊だけで戦艦12隻、航空戦艦1隻、重巡洋艦9隻、軽巡洋艦10隻、駆逐艦40隻+木村水雷戦隊の軽巡洋艦1隻、駆逐艦8隻……の大艦隊である。

海軍艦艇はクラスによるが、10センチ以上の重砲クラスの主砲を搭載している。しかも、いくら黒海が狭いとはいえ、艦艇は動く。

対し、陸軍重砲は動かない陸地にある陣地や要塞に使用するものである。

この為、動く目標に対する追従能力は低い。

また、牽引式、自走式重砲の当時最大射程は20〜30キロであり、射程外に逃げられれば何も出来ない。

それに播磨型戦艦でなくても伊豆・春日型戦艦の38センチ砲が火を吹けば陸地の重砲など一気に吹っ飛んでしまう。

次にソ連空軍機は航続距離が短く、元々大陸が主な活動場所であり、海上飛行が狭い黒海とは言え出来るか怪しい。

また、現在のソ連空軍の現状では果たしてロクに飛ばせるかも怪しい。

更に第七艦隊の空母搭載の戦闘機や艦艇の対空装備を見て、無事に帰ってこれるかとはなると……無事ではすまない。

スターリン

「まあ、艦隊の事は放っておけ。それよりも、ヤポンスキー共の陸上部隊は追い返せるんだな？」

司令官達

「「「「「」」」」」」

返答を求められた司令官達は何も言わない。

バン！！

スターリン

「なぜ黙っている！ 我が偉大なるソ連陸軍の革命戦士達が…」

参謀

「同志大元帥……残念ながら我が陸軍……国に既に余裕はありません」

スターリン

「なんだと！！？ どう言う事だ！？」

参謀

「戦争を始めて4年以上経過しています…特に昨年一年間の消耗が酷く、国力を圧迫しております」

スターリン

「馬鹿な！ 兵員の補充はどうなんだ！？」

司令官

「いえ…特に兵員の消耗が多く……既に各地で根こそぎ動員しておりますから……」

スターリン

「戦車、車輛、大砲、弾薬の生産はどうだ！？」

参謀

「先程も申しました通り……資源の供給量が減少し、生産数も需要量を下回っております……」

スターリン

「…燃料もか？」

参謀

「はい。既に燃料は各地で不足気味です。どこの部隊も戦車に燃料を集中しています」

スターリン

「……………」

ここに至り、さすがのスターリンも黙るしかなかった。いくら損害度外視の彼も、ここまでくると無視も出来ない。

スターリン

「もう一度訊く。撃退は可能か？」

声のトーンを落として訊いた。

参謀

「……………難しいですが、全力を尽くします」

次号へ

## ソ連の限界（後書き）

予告

限界に成り始めたソ連。

裏をかく第七艦隊・日本陸軍欧遣部隊。

連合軍もこれに便乗し、黒海沿岸制圧を狙う。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 黒海方面初仕事（前書き）

新米士官

「本日の読売新聞の6面、国際欄です」

福本

「……日韓併合の記事だな」

新米士官

「韓国は変わらんよ……いや、時として過激だな。始めて知ったが7月に講演中の日本大使がコンクリート片投げ付けられて日本人女性大使館員が怪我したんだぞ！」

マリーダ

「昔なら、この時点で国際問題決定ね」

新米士官

「犯人の男は竹島の事が気に入らなかった様ですね。供述で『韓国人として当然の事をした』……だって」

マリーダ

「ねえねえ、あの国さ、テロリストを英雄にしちゃったから、英雄観が曲がちゃった？」

福本

「……何せ、日本人の常識が全く通じない国だからな」

新米士官

「はあ……日本は何時になったら覚醒するんだ？」

## 黒海方面初仕事

8月5日

福本

「どうなってんだ？」

敵ソ連軍の逆襲に備え、鉄道線路沿いの丁度良い場所に穴を掘り、二式軽駆逐戦車を潜ませて、近くの漁村から破れるなどして使えなくなつた漁網に色々着けたり貼つたりして工作した擬装網を上から被せた。

ちなみにこの漁網を集めたのは現地の漁村住民と仲良くなつた石田大尉である。そうやって待ち伏せした結果、先発隊と思われる装甲ワゴンに牽引された輸送列車を短距離離着陸機『三式連絡機』が発見、待ち伏せは大成功し、装甲ワゴンを撃破した。

その後、輸送列車を撮取した訳だが………冒頭に至る………

福本

「なんで俺の写真がここにある？」

撮取した輸送列車内を検索中、たまたま落ちていたチラシを拾った福本。

なぜか、福本の写真が印刷されている。

ヴェイル

「あゝ、どうやら新聞写真を使っていますね。内容は……あ、元帥も

人気者ですね」

福本

「はあ？　どういう意味だ？」

ヴィル

「ちゃっかり、スターリンに嫌われた様です。ここにある文章には、『この写真の者を殺害・捕縛・負傷せしめた者は賞金5万ルーブルを与える』と書いてあります」

福本

「……ルーブルの価値っていくらだ？」

ヴィル

「元帥…今のルーブルは紙くずです。タバコが支払いに使われるソ連の現状ですよ？」

福本

「すまん、愚問だな」

ヴィル

「それよりも、5万ルーブルとは価値が低い。ウォッカ5万本の書き間違いですね」

福本

「おいおい、それは過大評価だと…」

マリーダ

「なにが過大評価なの？」



遅れてやって来たマリーダが訊いてきた。  
ヴィルは持っていたチラシマリーダに渡した。

マリーダ

「…ヴィル、ウォッカ5万本でも低いわ。ダイスケならウォッカ50万本よ！ それにこの写真写り悪すぎ！ ちゃんと写しなさいよ！」

福本

「……50万本ね」

ヴィル

「…確かに、5万本でも低いですね」

……おいおい、どうやってらマリーダの意見をそうすんなり肯定出来るの？

福本

「……今度、時間を作ろう」

誰にも聞こえないように呟いた。

列車内の検索を終えた福本達は外に出て、捕虜の移送を見ていた。輸送列車には少年兵や女性兵も含まれており、分けて移送している。

福本

「それで、アメリカ艦隊がイスタンブールに昨日到着したようだね？」

ヴィル  
「はい。ハルゼー大将率いる機動艦隊、イギリス艦隊、ドイツ艦隊も到着し、黒海沿岸制圧を開始するそうです」

マリダー

「なら、オデッサとクリム半島のセバストポリ要塞も攻略するの？」

ヴィル

「はい。ソ連の最大石油供給地ウクライナを抑えなければなりませんから」

福本

「なら、北沿岸制圧が艦隊最後の活躍の場所か」

ヴィル

「そうですね……多分、機雷の敷設されていますから、それに注意する必要がありますね」

福本

「ここにまできて、機雷でボカチンなんてのは泣くに泣けんからな」

マリダー

「ドイツ・イタリア軍は？」

ヴィル

「ルーマニアの辺りで戸惑ってますね。まあ、地形が原因なんですね」

福本

「なら、連合軍に任せてもいいだろ。ソ連軍の黒海艦隊戦力は？」

ヴィル

「戦艦1、巡洋艦5、嚮導駆逐艦3、駆逐艦11、潜水艦44です」

マリィダ

「潜水艦は置いとくとして…また、小規模ね」

ヴィル

「陸軍国ですからね。航空隊で対処出来るかと」

福本

「まあ、そこら辺は柔軟に対応するしかないな」

次号へ

## 黒海方面初仕事（後書き）

予告

いよいよよ、400話ー！

そこで！ 今回は2話連続記念号！ 次号は直前記念号です。さて  
……どうなる事やら……

ご意見ご感想をお待ちしております。

400話直前記念号『相容れぬ思想』（前書き）

え、頑張ってる様にしたけど……難しい。

あと、規定に触れないように頑張ったけど……大丈夫かな？

## 400話直前記念号『相容れぬ思想』

福本

「なんでこうなるかね〜？」

マリィダ

「さあ？」

白い霧の中を福本とマリィダは歩いていった。

マリィダ

「まあ、今回だって、作者の都合なんだし〜」

福本

「……………そうだね」

なにせ、久し振りにゆっくり寝れる！……………と違ってベッドに飛び込んだ……………ここまでは憶えている。

そして……………朝、起きてみると周りは霧だわ、隣にマリィダが半裸でスヤスヤ寝てて嬉しいシチュエーションだったわ！（……………何を言わせてるんだよ！）……………朝から騒がしかった。

そして、よく見てみると、ベッドの近くにあつた机に着替えの軍服とメモが一枚。

内容……………「艦魂界初の試みだけど……………会談、頑張つてね！ by 作者」

……………ふざけんじゃねえよ！なに人の時間を事前説明も無い事に費や

さなきゃならないんだー!!

福本

「…なんて言えないんだよな…」

マリダー

「あゝあ、せつかくティファニーで買い物しようと思ったのに」

福本

「ティファニーって…アメリカだぞ？」

どうやって、（設定上）黒海にいる人間がアメリカで買い物が出るんだ？

………なんて会話を交わしつつ、どこぞの応接室を思わせるソファ  
ーとテーブルのある空間…未だ霧の中だが…で作者が呼んだ人物を  
待つ。

マリダー

「今回は誰が来るの？」

福本

「さあ………ただ、頑張ってこい、としか書いてなかったからな」

………普段なら普通に公表して、全員で迎えるのだが………。  
その時、艦魂が転移する時特有の光が見えた。  
そして………転移してきたのは………

福本

「……嘘……だろう?」

あまりの人物に大抵の場合、こんな事を言わない福本も口から出てしまう。

「……まさか、新米士官の福本とマリィダとは……」

相手の正体は……

マリィダ

「あなただったのね……エリーゼ」

独立機動艦隊『紀伊』で日本軍の敵であるドイツ軍機動戦艦艦魂の1人……エリーゼだった。

3207

福本

「自信は無いが、どうぞ」

エリーゼ

「いただきます」

近くにあった台所から紅茶を入れてエリーゼに渡した。

しかし、返事という言葉はどこか無機質。さすが、うちの艦魂達から『水の艦魂』等と呼ばれるだけある。

しかし、同時に作品の艦魂（特に日本艦）達からは、作品が違うが、帝国海軍が苦戦している事と、やり方の不味さで印象が悪いのも事



実だ。

多分、そこら辺を考慮して、作者は密会の様な形にしたのだろう。  
……作者には恐れている。

エリーゼ

「まさか、敵の艦魂と会うとわ思いませんでしたか？」

福本

「ええ。今朝、知りませんでしたので……そちらはどうですか？」

エリーゼ

「草薙を介して無記名で招待状が届きましたので、誰に会うかも知りませんでした」

……結局、お互いに知らなかったわけだ。  
さて、本来ならこれからの向こう側の作戦を探りたいところだが、エリーゼが察知させる訳が無いし、本編に影響が出るから訊いても無駄だろう。

マリィダ

「ねえ、エリーゼ。1つ相談んだけど……」

エリーゼ

「なんですか？」

相変わらず感情の変化が無い無機質な声。

マリィダ

「スターリンの馬鹿、どうやって殺そうかしら？」

ズルツ！

福本

「マリータ……なんでその話になるの？」

滑りながら、空かさずツツコミを入れる福本。

マリータ

「いいじゃない。作者もどうするか考えてるんだし」

……だからと言って、なぜっついで……

エリーゼ

「…草薙を介して幾つか案を送りましょう」

福本

「…いいのかよ」

エリーゼ

「罰です」

………簡単明瞭な答えで。

マリータ

「さて、そんな話は置いて……」

福本

「置いてくのかよ」

自分から話を振っというて？

マリーダ

「今も時々考えるけど、やっぱり、フレドリクのやり方は賛成出来ないわね」

福本

「……その話か」

……当事者の1人がいるんだぞ、おい。  
しかも、温度が少しづつ下がってるぞ。

マリーダ

「奥さんの……シンシアさんだっけ？ 満州でソ連軍に殺されて、フレドリクが復讐を選択したのは解るけど……明らかにやり過ぎね」

福本

「それは君の発言もだよ」

どんどん下がってるんだよ……温度が。

マリーダ

「それに、なんで大量虐殺する上に世界征服するかなんてもっと解らないわ。だいたい、ドイツによる世界征服が何年も続くとは思えない」

福本

「マリーダ……喧嘩うつて無い？」

こっちはヒヤヒヤしてるんだけど……君とは同意見だけど。

エリーゼ

「1つお訊きしますが…」

その時のエリーゼの声は、福本にはとても冷たく感じた。

エリーゼ

「あなた方の世界は、あなた達によってソ連は崩壊するでしょう。ですが、アメリカ、イギリスは残ります。特にアメリカが現実世界のアメリカの様になる可能性がありますよ？」

福本

「確かに、ありますね。また、そんな野望を持つ国が現れかもしれない」

エリーゼ

「そんな国を出さない為に一国で世界を管理するのです」

福本

「…残念ながら、自分はそれは不可能だと思います。上手くは説明出来ませんが、国の意思を国民に浸透させるのでさえ難しいのに、それを世界規模となれば到底不可能だと思えます」

エリーゼ

「……言いたいことはそれだけですか？」

福本

「はい」

エリーゼ

「……噂通り、甘い人達ですね」

チャキ

どこに隠していたのか拳銃を取り出した。

そして、銃口をマリーダに向けた。

エリーゼ

「何も知らないくせに勝手な事を言わないで下さい」

あの感情の無い無機質の声に……少し感情が入った。

エリーゼ

「……罰です」

パン！

銃声が響いた。

……が、マリーダは射たれていなかった。

なんと、エリーゼが撃った瞬間、福本は愛刀『大和の飛龍』を抜いて発射された拳銃弾を真っ二つにすると、勢いそのままに愛刀をエリーゼに突き付けた。

福本

「……ここは異空間ですからね。艦魂の武器が人に効くなら、その反対もあり得ますよね？」

そう言うと軍刀を鞘に収める。

福本

「確かに、我々は部外者ですから何も知りません。ただ、フレドリクが人としてやっていている事が間違っているとは解ります」

マリィダの無事を確認しながら言った。

エリーゼ

「不愉快です」

そう言うところりと福本とマリィダに背中を向けた。どうやら、帰るらしい。

エリーゼ

「……一つ、未確認情報ですが、教えておきましょう」

ふと、立ち止まったエリーゼが喋った。

エリーゼ

「草薙、伊東の大和などを中心とした変態連合が戦力を再編・拡大して何処かを襲う様です。信じるかはあなた達にまかせますが……それと、マリィダ」

マリィダ

「なに？」

エリーゼ

「……良い人がいて、よかったですね」

そう言うとエリーゼは転移した。

マリーダ

「……羨ましかったのかな？」

福本

「……まあ、人には色々あるからね。」

次号へ

400話直前記念号『相容れぬ思想』（後書き）

予告

敵変態連合宇宙艦隊接近ノ情報有り。

全艦特定宙域集結シ、全力ヲモツテ此レヲ殲滅セヨ。指揮官八福本

大介元帥ナリ……

ご意見ご感想をお待ちしております。



400話記念号『変態連合を撃破せよ!』（前書き）

新米士官

「申し訳ありません!」

福本

「昨日に更新する筈だったけど無理だったって事が?」

新米士官

「その通りです!」

福本

「まあまあ…必死に書いたんだから仕方ないって」

新米士官

「さて…後の問題は扱いがこれで大丈夫かどうか……です」

## 400話記念号『変態連合を撃破せよ!』

新米士官の世界（地球）がある宙域

宇宙戦艦播磨艦橋

福本

「……凄い事になったな」

宇宙艦化改造された播磨の艦橋の窓から眺めながら呟いた。

第七艦隊だけでなく、大和、武蔵、信濃、長門、陸奥、山城、愛宕、雪風などの連合艦隊の艦艇もいる。

相手が相手だけに何隻もってくるか解らない。  
それだけに……

ミーナ

「後方よりイタリア艦隊、ドイツ艦隊が接近」

神谷

「第六大陸艦隊より、到着の打電あり」

マリーダ

「結局、みんな来ちゃうのね」

……日本艦隊だけでは足りないと思い、手当たり次第、連絡が付き  
そうなどころから連絡しまくったのだが……全艦が参加する事に。

ミーナ

「あ、作者さんより通信。回線接続します」

福本

「早かったですね？」

新米士官

『あのな…いきなり電話してきて、「宇宙艦に改造しろ！」と言ってきて、しかも「海龍の代わりが欲しい」って言うもんだからな。で、海龍は？』

福本

「監禁しました。念のため」

新米士官

『……………おいおい……で、海龍の代艦を連れて来たが……どうする？』

福本

「艦の指揮をお願いします」

新米士官

『わかった。代艦のデータは送るから、集結終わるまでゆっくり見といてくれ』

福本

「はい。来たか？」

ミーナ

「来ました。どうぞ」

福本

「どれどれ……艦名は『三河』。波動砲×1、51センチ三連装主砲×3（前部集中配置）、20センチ三連装副砲×4、前部宇宙魚雷発射管×6、両舷ミサイル発射管×8、後部艦底両舷四連装宇宙魚雷発射管×8、パルスレーザー×20、搭載機70機……航空戦艦か」

マリーダ

「ついでに、自分用の航空戦艦でも作ったのね」

福本

「まあ、手勢は多いに越した事は無いし」

ミーナ

「イタリア・ドイツ艦隊合流。米英仏独伊第六艦隊結集しました」

遠地

「壮観だね〜！ モンタナ、メイン、アイオワ、ネルソン、ロドネー、キングジョージ5世、プリンス・オブ・ウェールズ、リシユリユー、ビスマルク、ティルピッツ、リットリオ、イタリア、ラー・カイルム、ワルキューレ……これにお前の指揮があるんだ、変態連合がいくら来ようと追い返してやれるな」

福本

「おいおい……」

神谷

「長官、全艦に通信繋がりました。どうぞ」

福本

「こちら、臨時指揮官の福本だ。変態連合が大艦隊を率いて来る可

能性がある。そこで作戦だが……………」

その頃……………変態連合艦隊

宇宙戦艦大和

大和（伊東）

「なあ、翡翠」

翡翠

『なに、大和？』

艦橋のテレビ電話で会話していた。

大和（伊）

「ブルーノアやコスモパルサーを持って来たという事は……………そんなにマリーダはいいのか？」

翡翠

『もちよ！ だって、彼女は福本にアタックする時にコスプレするのよ。そそられな〜い？』

大和（伊）

「ふむ……………そう聞くと、中々そそられるな。翡翠、その時は私も……………」

翡翠

『つぶつぶ、いいわよ〜』

同じ頃………宇宙戦艦草薙

要塞好き

『いよいよですね。草薙先生』

草薙

「ワハハハ、そうですね、要塞好きさん………前回は大変な事になりましたね〜」

装甲列車宮崎からのテレビ電話で話す草薙先生と要塞好きさん。

要塞好き

『もう二度と鬼婆と追い駆けっこなんてやりたくありませんね』

草薙

「しかし！今回は大丈夫です。大艦隊を揃え、しかも奇襲！新米士官先生も福本もさすがに気付かないでしょう！」

要塞好き

『それを示すかの様に、レーダーに艦船一隻たりとも映っておりません。確かに奇襲は成功ですね！』

草薙

「まあ、今気付いても大艦隊の前には無力でしょうな！」

要塞好き

『そうですね！ワッハッハッハッハ！』

戦艦播磨艦橋

ミーナ

「……と、こんな会話が交わされてますね」

神谷

「しかし、上手くいきましたね！ デブリヤ何やらに盗聴衛星や偵察衛星を潜り込ませるなんて」

福本

「向こうはこちらに情報が漏れていないと考えてますからね。しかも、盗聴されている事も」

マリーダ

「それにしても！ 私のダイスケを貶すなんて万死に値するわ！」

福本

「万死はちょっと……」

遠地

「しかし……艦艇が約5000隻つて、ありなのか？ こっちなんか必死に掻き集めて1000の手前だぞ」

福本

「仕方ないさ。何度も失敗してるからね。今回はやる気だけど」

遠地

「戦法は変えないか？」

福本

「ああ、このままK&R（光学迷彩・レーダー波拡散）シールドを展開させ、敵艦隊を待ち伏せする」

遠地

「戦闘の合図は俺の人差し指か…それまで指揮を頼むぜ」

福本

「わかってるよ、相棒」

一時間後……

ミーナ

「敵艦隊、射程内に接近！」

何も知らずに敵艦隊はこのこと接近してくる。

福本

「波動砲発射カウントダウン開始。発射と同時にK&Rシールド解除、防御シールド展開」

残念ながら、K&Rシールドは姿は消せるが防御能力は無い。この為、戦闘開始直前に防御シールドに切り替える。

マリーダ



「軽巡洋艦、駆逐艦は波動砲発射後の戦艦、航空戦艦、戦闘空母（正規空母・軽空母の改造）、重巡洋艦を援護！」

波動砲を発射すると、主砲発射迄に時間が掛かる。

この為、波動砲を搭載していない軽巡洋艦や駆逐艦がその隙間を埋める。

ミーナ

「残り10秒！ 9、8、7、6、5、4、3、2、1、0！」

遠地

「波動砲発射！」

草薙

「なんだ??」

目的地まであと少しと思われた時、手前の宙域がキラキラと輝いた。

大和（伊）

『しまった！ 全艦回避！！』

一番後方にいた変態連合首脳及び直衛部隊は波動砲到達が遅かった為、ほとんどの艦艇が回避出来た。

しかし、先鋒及び主力部隊は新米士官連合艦隊の波動砲攻撃を直ぐに受け、この時点で変態連合艦隊は半数以上を失った。

大和（伊）

『くそ、抜かった！』

翡翠

『なんで！？ レーダーに反応は…』

要塞好き

『ああ！！ い、今頃レーダーに反応しました！』

草薙

「まさか…情報が漏れていたのか！？」

それなら話は解る。

それなら、今は……

ミーナ

「敵艦隊、波動砲により半数以上を損失！」

福本

「全艦砲戦始め！ 今の内に敵艦数を減らせ！」

マリィダ

「撃て！！」

ズバーン！ズバーン！ズバーン！ズバーン！ズバーン！

軽巡洋艦・駆逐艦が一斉に射撃を開始する。

そして、次は主力艦艇の砲撃……

士官

「味方は約半数が撃沈されました!!」

草薙

「反撃しろ！ 敵は我々の半分以下だ！」

しかし、言うは簡単というやつで、いきなりの波動砲攻撃により、勝ったと浮かれていた事もあり、艦隊は大混乱に陥り、そこに新米士官連合艦隊の一斉射撃が加わり次々と貫かれ、あるいは回避しようとする味方艦同士で衝突し、被害を増やす。

翡翠

「私も出る！ コスモパルサー隊出撃！ 目標は播磨よ！」

要塞好き

「くそ……前進しろ！ この装甲列車宮崎の力を見せてやれ！」

ミーナ

「敵ブルーノアから敵艦載機！ 最新のコスモパルサーです！ また、装甲列車宮崎接近！」

マリーダ

「全艦目標宮崎！ あの馬鹿を吹っ飛ばせ！！ 宇宙魚雷発射管！ 準備いい!?」

『前部魚雷発射管室。特別魚雷発射準備よし!』

遠地

「特別魚雷？」

福本

「聞いてないぞ？」

新米士官

『俺も知らん』

マリーダ

「ウフフ…マリーダ専用特式高速波動魚雷『天誅』！ 撃て！！！」

全員

「……ええ……！！？」

バシュウ！！

ショックカノンの発射音が響きわたる中、何故かこの魚雷発射音は大きく聞こえていた。

要塞好き

「ウツハツハツハ！ 新型ズッキーニ砲、小型デス・レイ発射機  
用意！ 艦隊を……」

ドガガガガガガガガガガガガガガガガン！！

マリーダの命令により向けられた数多の火線が宮崎やその周りにい

た艦艇に命中し、艦艇は火球となり、宮崎は削ぎ削られる。

AI

「新型ズッキーニ砲、小型デス・レイ発射機、多目的転移ミサイル  
他火器使用不能」

要塞好き

「くそく、わざとだな…まあ、いい！ なぜなら、自分専用のパワ  
ースーツがあるからだ！」

ピーピーピー！

AI

「高速魚雷接近」

要塞好き

「迎撃しろ！ 回避だ！」

AI

「火器類使用不能。被弾ニヨリ機動力低下、回避間ニ合イマセン」

要塞好き

「なに！？」

AI

「ジ・エンドデス」

要塞好き

「そんなのあ…」

それ以上、要塞好きは言葉を繋げれ無かった。  
何故なら『天誅』が宮崎に命中、そのエネルギーと破壊力を存分に  
解放し、装甲列車宮崎を宇宙の塵に変えてしまったからだな。  
そして、要塞好きは自動的に自分の世界へ強制退去させられた。

ミーナ

「装甲列車宮崎、消滅！」

マリータ

「感想を早く送らない罰よ！」

遠地

「…怖いな、女は」

福本

「……やり過ぎだよ…マリータ」

ピー！ピー！

ミーナ

「敵航空隊接近！ コスモパルサー隊：先頭に翡翠機がいます！」

福本

「迎撃戦闘機発艦！ 翡翠機は相手するな。他を狙え。全艦対空戦  
闘用意！」

ラフィール

「了解！」

ヴィル

「総員対空戦闘用意！」

翡翠

「待ってなさいよ、マリーダ。白馬のお姉様が連れ去ってあげるから」

フルスロットで右舷側から播磨に向かう翡翠専用機。だが、出迎えたのは猛烈な対空砲火。

パシユシユシユシユウ！

パシユシユシユシユウ！

パシユシユシユシユウ！

パシユウ！パシユウ！パシユウ！パシユウ！パシユウ！

パシユウ！

各艦からのパルスレーザーと対空ミサイルが目標に向かって飛ぶ。しかし、翡翠は自慢の操縦テクニクでパルスレーザーを避け、機銃で対空ミサイルを撃ち落とす。

翡翠

「うふふ！ こんな物、物の数じゃないわ！」

そう呟くと播磨に接近する。

アリソン達戦闘機八人衆が率いる戦闘機隊は紫電改、烈風、陣風（もちろん、宇宙戦闘機）でコスモパルサー隊を迎撃する。しかし、あえて翡翠は相手にするなの命令に従った。翡翠に落とされて、捕まっただうえにはあはあなんかされたくないだろうし……。

ミーナ

「敵コスモパルサー隊、戦闘機隊と交戦中！」

福本

「翡翠機は!?!」

ミーナ

「…真っ直ぐ本艦に接近中！」

遠地

「あいつは本当に人間か？」

マリーダ

「人間でしょう。少し変わった」

福本

「冷静だね」

遠地

「お前も冷静になるな！」

翡翠



「さあ！ 播磨、沈んでもらうわよ！」

対空砲火を潜り抜け、数機の僚機を率いて播磨に迫る。

翡翠

「そのまま…そのまま…」

回避運動もとらず、ただ対空砲火を撃つ播磨……

翡翠

「よし、て…」

パシユシユシユシユウ！

バーン！バーン！バーン！

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！

突然現れた駆逐艦の対空砲火を至近距離で浴びた僚機が爆散し、翡翠機は直撃は避けたが、操縦不能になった。そんな時に、たまたま駆逐艦の艦橋の直ぐ前を通過した翡翠は眩いた。

翡翠

「あの意味はそう言う意味だったのね……いいわ！ マリーダの次はあなた達よ！ 神童！ 神波！」

その後、脱出した翡翠は自動的に零戦先生の世界に戻って行った。

駆逐艦神波艦橋

士官

「やりましたね、神童艦長！」

神童

「それほどの事ではありません」

巫女服に軍帽と一風変わった様子（乗員達の希望）ながらも参加した神童。

その隣には同じく巫女服姿の神波。

事は簡単で、コスモパルサー隊の接近を知った神童はK&Rシールドで姿を隠し、播磨を護衛していたのである。

神童

「さあ、まだ戦闘は終わっていないわ！ 気を抜かずにはやるわよ！」

福本

「神童と神波に助けられたな」

マリーダ

「ほんとうね」

神谷

「元帥！ ラミリーズ、バールム、コンテ・デ・カブール、ダンケルクより通達！ 敵艦の攻撃により損害甚大！ 後退すると連絡！」

福本

「わかった。ミーナ、どの艦か解るか？」

ミーナ

「戦艦草薙の51センチ三連装主砲と戦艦大和の主砲です」

福本

「よし。神谷、別動隊に連絡」

神谷

「了解！」

草薙

「ウハハハハハハハ！ 撃て！ 奴らを殲滅しろ！ そして、女性陣を奪い取るのだ！」

混乱から立ち直った変態連合艦隊は反撃を開始した。既に1200ちよい迄に撃ち減らされていたが、まだまだ多い。

その反撃の要は宇宙戦艦草薙、大和、そしてブルーノア。この3艦からの攻撃は激しい。

大和（伊）

『草薙殿！ こうなれば我々2人で奴らを蹴散らし、色々しようではないかしら！』

草薙

「そうですね！ で、どうします？ プランが幾つかあるんですが……」

おいおい……

異次元空間

異次元潜航艦伊400艦内

二一ナ

「見てみなさい、宮木副長」

宮木

「はい……大物がゴロゴロいます」

零

「久しぶりの出番が宇宙艦隊決戦って運いいよね」

二一ナ

「そうね。まさか、潜水艦を宇宙戦艦ヤマトのネタから出すなんて、さすが福本元帥ね」

宮木

「二一ナ艦長。第七艦隊潜水部隊は全艦準備完了！」

二一ナ

「よし！ 本艦は戦艦草薙を狙う！ 魚雷及び垂直型対艦ミサイル発射管、連続発射！」

零・宮木

「撃て!!!!」

バシューウ！バシューウ！バシューウ！バシューウ！バシューウ！バシューウ！

ピー！ピー！ピー！

草薙

「ん、どうした？」

士官

「高速で魚雷接近！！」

草薙

「なに！？ いったい何処からだ！？」

士官

「わ、わかりません！」

草薙

「とにかく、迎撃だ！ 回避しろ！」

迎撃魚雷やパルスレーザーが放たれるが、大半の魚雷が近付く。  
そして……………

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！

草薙

「被害を報告しろ！」

士官

「船体に3発命中！ 一発は機関室付近に被弾！」

草薙

「くそ……」

ズガガガガガガガガン！！！！

草薙

「！どうした！？」

士官

「ブルーノアが爆沈！！ 魚雷多数が命中！！」

草薙

「な……なんて事だ……」

航空戦艦三河艦橋

士官

「ブルーノア爆沈！ 草薙損傷！」

新米士官

「……同じ作者のよしみだ……止めを刺せ」

士官

「はい。主砲、戦艦草薙。てえー！！」

士官

「敵第2・第3波！ 対艦ミサイルも接近！」

草薙

「迎撃しろ！ 撃ち落とせ！ なんとかしてでも切り抜ける！」

ガガン！！

草薙

「うお！？ 今度はなんだ！？」

士官

「本艦と同じ51センチ砲が命中！ 正体不明艦からです！」

草薙

「なに！ 正体不明艦！？」

新米士官

『草薙先生』

草薙

「うお！ 新米士官先生！？ いったいどうやって？」

新米士官

『草薙先生、あなたは良い作者仲間だったが、所属した組織が悪かった……ここで排除し、帰ってもらいます！』

草薙

「なにを……」

ゴワーン!!

言い返そうとした瞬間、なんと和泉の放った46センチ主砲弾が命中、艦橋を吹っ飛ばした。

そして、三河の集中射撃を受けた宇宙戦艦草薙は爆散、草薙は自動的に克つ強制的に自分の世界に強制送還された。

大和（伊）

「草薙殿もやられたか……仇を取る！ 萌え萌え拡散波動砲用意！  
新米士官の艦隊を一気に無力化する」

オペレーター

「はい」

大和（伊）の隠し玉兼最終兵器萌え萌え拡散波動砲始動……

ミーナ

「大和よりエネルギー反応！ これは…萌え萌え拡散波動砲です！  
現在充填中！」

福本

「なに！ くそ、波動砲撃てる艦はあるか!？」

神谷

「ダメです！ 戦闘でエネルギーを使っっていて、手一杯です！」



遠地

「マリーダ！ さっきの『天誅』は！？」

マリーダ

「ごめんなさい…あの6発で終わり…」

遠地

「うそ〜！」

福本

「全艦、大和に砲撃集中！ 一刻も早く沈めろ！！！」

福本の命中でこれでもか！…と言っぐらい大和に向けて主砲を乱打する新米士官連合艦隊。

しかし、大和はアニメの宇宙戦艦ヤマト並みにしぶとかった。

しかも、大和の周りにいる艦艇め反撃したもんだから、双方激しい乱打戦に発展した。

しかし、大和は沈まなかった。

そして……

ミーナ

「大和、萌え萌え波動砲充填完了！」

福本

「しまった！ 間に合わなかったか！」

オペレーター

「波動砲充填完了」

大和（伊）

「ふっはっはっは！ これでもくらって萌え死にしろ！ あとで草薙殿達を呼んで楽しんでやる。萌え萌え波動砲発…」

オペレーター

「後方上方に正体不明艦隊」

大和（伊）

「なに!?!」

大和が言えたのはここまでだった。

その直後、その正体不明艦隊から放たれた波動砲により、大和は消滅、大和（伊）も強制送還された。

3241

ミーナ

「大和以下残存艦艇撃沈されました」

福本

「しかし……どう言う事だ？ 誰が3発の波動砲を撃ったんだ？」

作者

『あ、まさか…』

遠地

「ん、なんだ作者？ 心当たりでもあるのか？」

ミーナ

「レーダーに反応！ 前方より戦艦1、重巡洋艦1、戦闘空母1、駆逐艦4！」

マリーダ

「敵……にしては少ないわね」

神谷

「その艦隊から通信です。どうぞ」

全員の目がスクリーンに向いた。

『こちら、別動隊の山城です。遅くなりましたが、只今到着しました』

遠地

「ああ、作者の別作品の主人公で、60年後の後輩君か！」

山城

『は、はい。えー、実は2日前に作者からの要請に従い全速力で飛ばして来たのですが……すみません、残存艦隊を波動砲で吹き飛ばすぐらいしか……』

福本

「いや……めちゃくちゃ助かった！ うん、本当に！」

山城

『は、はあ……??』

遠地

「なんだ、作者！ 隠し玉があったんじゃないかよ！」

作者

『まさか、このタイミングで来るとはな…』

山城

『おい、作者。状況を説明してくれ』

マリーダ

「そんなのは後で！ 帰って戦勝会やるわよ！」

和泉・飛驒ワシントン

「酒が飲めるぞ〜！！」

遠地

「おい、誰か、この酒馬鹿を止めろ」

福本

「あっはっは、よし。全艦反転！ 地球に帰って祝宴だ！」

次号へ

400話記念号『変態連合を撃破せよ!』（後書き）

予告

ソ連黒海艦隊出撃!

これに対し第七艦隊は野中大佐率いる陸攻隊に任せる事に!

明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新致します。お楽しみに。

ご意見感想をお待ちしております。

## 黒海艦隊出撃ス

3月10日 早朝

オデッサ近海

ソナー員

「艦長！ ソナーに反応！ スクリュー音多数！！」

伊400潜水艦自慢の女性ソナー員が鋭い声を出す。

二ーナ

「メインタンクブロー！ 潜望鏡深度に浮上！」

ゆっくり浮上する伊400。

偵察の為、3隻一組数日交代でオデッサを見張っている伊400。

二ーナ

「……見て、宮木副長」

宮木

「はい……大型艦と中型艦……小型艦がいる事は……艦隊ですね」

二ーナ

「こんな深夜に出て行くなんて、ろくな事は考えてないわね」

宮木

「例えば……なんですか？」

零

「泥棒さん？」

宮木

「ソ連軍が海から何を盗むの？」

二一ナ

「海からとは限らないわよ。陸地かも」

宮木

「陸地……ですか」

二一ナ

「さて、どうする？ 雷撃するにはいい敵よ」

宮木

「我々の任務は監視兼偵察です。今回は何もしません。それに、敵も駆逐艦を何隻か待機させている可能性があります」

二一ナ

「うふふ、そうね。さて、打電の用意。内容は……」

20分後……

播磨艦橋

神谷

「大変です！ 元帥！」

福本

「なんだ、神谷？ 予定変更か？」

神谷

「二ーナ中将より打電！ 『ソ連黒海艦隊出撃！ 艦隊は戦艦1、巡洋艦5、駆逐艦6以上！』」

マリイダ

「黒海艦隊の全力ね。どうする？」

遠地

「その戦力でこちらに挑む訳ないから…千歳、黒海の地図」

千歳

「はい、これ」

新たに机に広げられた黒海周辺の地図。

遠地

「西沿岸のドイツ・イタリア軍に対する艦砲射撃を実施する為だと思っな。それならだいたいの話は解る」

福本

「夜間の、しかも全力出撃…なるほど」

新沢

「元帥。明朝出撃の攻撃隊の兵装を対地から対艦に転換しましょう！」



連絡将校の新沢が進言した。

福本

「……………予定通り、我が艦隊はトルコ侵攻軍爆撃を実施する」

新沢

「元帥！！ドイツ・イタリア軍を放っておくつもりですか!？」

マリーダ

「よく聞きなさい。『我が艦隊は』よ」

福本

「神谷。野中陸攻隊は出撃可能だな？」

神谷

「はい。本日は緊急出撃には備え整備日になっています」

福本

「野中隊に現状を正確に報告。我が艦隊は航空偵察に徹します」

木村中将

「ほうほう。ならば僕も出るか」

福本

「木村教官!」

何処からともなく恩師木村中将が現れた。

木村中将

「そこにおっいたら、中々面白そうな話が聞こえたからな。それで、

「どうだ、派遣は出来るか？」

福本

「…わかりました。ですが、無理はしないで下さいよ」

木村中将

「なぐに、大丈夫だ。海は長いからな」

福本

「では、お願いします」

更に20分後……

イスタンブール 日本海軍借用飛行場

整備長

「急げ！ 折角の元帥の計らいを無駄にするな！」

少し薄明るくなった飛行場で日本海軍欧遣陸攻隊の整備兵達が慌て担当機の整備にはいり、ある機に爆弾を、ある機に数少ない魚雷を装着し、出撃準備を整える。また、隊付き情報将校は現状を早口で、集まった陸攻搭乗員に説明する。

野中大佐

「整備長！ 野郎どもは何時飛べる!？」

飛行服に身を包んだ野中大佐は、整備長に訊く。

整備長

「あと10分待って下さい！ 兵装の装着は終わっています。後は発動機！ 昨日、寝る前に一度整備しておりますから、後は確認だけです！」

野中大佐

「そうか、兵装長！ 兵装はどうだ！？」

兵装長

「魚雷搭載機は12機！ 例の『回天』も搭載しています。あとは爆装機です！」

野中大佐

「わかった……しかし、これはキツいな」

野中隊の陸攻機数は全力出撃で72機。

しかし、一番の破壊力を持つ魚雷搭載機は12機、残りの60機は80番（800キロ）爆弾か50番（500キロ）爆撃で、水平爆撃となる。

野中大佐

「さて……大丈夫かねえ……」

次号へ

**黒海艦隊出撃ス（後書き）**

ご意見ご感想をお待ちしております。

ソ連艦隊は何処へ？

午前10時 播磨艦橋

福本

「……………いない？」

神谷

「はい。彩雲による索敵網の何処にも引っ掛かっていません！」

ソ連黒海艦隊出撃の報を受けたのが朝4時頃……………今は午前10時……………既に6時間が経過している。

しかし、二段階索敵に引っ掛からないとなると……………

神谷

「ですから、索敵範囲を変更します」

マリーダ

「どうゆう風に？」

神谷

「現在の索敵はこうです」

そう言うとメモ用紙に円を書いて、何本かの線を中心から円の端に向かって書いた。

そして、海、陸、都市と最後に書いて福本達に見せる。

神谷

「今は海を中心に索敵をしています。これを…」

赤鉛筆を取り出し、陸、都市と書かれた場所を通る様に線を引く。

神谷

「この様に、内陸部にも索敵範囲を広げます」

遠地

「おいおい、ソ連艦隊は海の上じゃなくて、陸の上にいるとでも言うのか!？」

神谷

「いえ、沿岸や港内に何かの理由で隠れていると思われれます」

福本

「何かの理由…か」

ここまでできたら、ソ連軍内部でも、いざこざ続きでバラバラになってもおかしくない。

まあ、元々ソ連軍がスターリンによる粛清でマシな組織では無いだろうが……

福本

「いいだろう。好きにやってくれ」

神谷

「ありがとうございます!」

そう言って頭を下げると通信室に向かって行った。

遠地

「航空索敵は沖田の領分じゃないのか？」

福本

「まあ、話は通してあるだろう。なにせ、向こうは未来の天皇陛下の嫡さんだからな」

遠地

「それは何の関係がある？」

福本

「いや…柔軟性と言う意味でだな…」

マリーダ

「ふん…じゃあ、私は？」

何かが気になったらしく、マリーダは福本に訊く。

遠地

「おいおい、人前でイチャイチャは戦争が終わってからにしてくれ」

遠地が呆れた様に言った。

そして、2時間後……

神谷

「見付けました！ 元帥！」

福本

「いたか？」

神谷

「はい！」

艦橋に駆け込んで来た神谷は直ぐに地図の置かれた机に向かった。

神谷

「索敵の結果、敵ソ連艦隊はヤルタにいました！」

福本

「ヤルタ！？ あのヤルタ会談のヤルタか！？」

神谷

「…はい??」

遠地

「おい、福本…それは史実の話だろう？」

福本

「あ、そうだったな…しかし、なんでヤルタにいるんだ？」

神谷

「さあ…そこまでは…」

だいたい、一度出撃しておいて、なぜ別の港で待機している？

下手をしたらレニングラードのバルト艦隊と同じ目に合うかも知れないと言うのに……。



遠地

「それで、俺達は当初の予定通り、対地支援に徹するの？」

福本

「ああ、折角の出番を盗ったら、後々面倒だからね」

遠地

「そうかい」

マリダー

「けど、これじゃあ、向こうが出て来るまで手は出せないわ」

福本

「危険を承知で出て来たんだ。必ず目的を果たす為に出るさ」

……後の調査によって判明したが、オデッサを出撃したソ連黒海艦隊がヤルタにいたのは、上空直衛に自前の海軍戦闘機隊だけでは足りず、空軍に要請している間、待機していたそうだ。

そして……これまた2時間後、見張っていた偵察機がヤルタより出港するソ連艦隊を確認した。  
これを知った福本はこう呟いた。

「さて、野中大佐の出番だ」

イスタンブール 日本海軍借用飛行場

野中大佐

「よし、野郎ども！ 出撃だ！！」

陸攻隊員

「「「「合点承知！！」」」」

バタバタバタ……

陸攻搭乗員が大急ぎで愛機に乗り込む。

そして、陸攻72機はソ連艦隊に向かって飛行場を飛び立った。

次号へ

ソ連艦隊は何処へ？（後書き）

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 野中隊襲撃ス！

今回のソ連黒海艦隊の任務は遠地が予想した通り、ルーマニアに侵攻したドイツ・イタリア軍に対する艦砲射撃である。

しかし、航空支援の要請受諾を確認がとれるまでヤルタで待機し、確認が取れたソ連艦隊は出港した。

そして、ソ連黒海艦隊はヤルタから西沿岸まで真っ直ぐに突っ切る事により、早く任務を終え、オデッサ、あるいはセバストポリ軍港に急いで帰還するつもりだった。

しかし、世の中そう簡単には思い通りにならない。

確かにソ連海軍は空軍からの上空直衛の約束を取り付けた。

しかし、海軍保有の戦闘機隊と空軍の戦闘機隊では航法方法が違っていた。

詳細を記す事は避けるが、あえて簡単に書くと、太陽の位置から計算して現在位置を特定する推測航法と地上の目標物を見て、航空地図で確認して現在位置を特定する地文航法の2つである。

主に海軍航空隊では推測航法、陸軍航空隊・空軍では地文航法が主流だった。

現在では衛星・コンピューターなどの発達により、簡単に解る様になっってしまったが……。

さて、この説明をわざわざ加えたのはいくら狭い黒海とは言え、海である。

ソ連海軍航空隊は推測航法である、しかし、ソ連空軍は地文航法で推測航法は出来ない。

そして、もう1つ……所属の違う者同士が果たして海上でちゃんと合流出来るか……。

グオングオングオングオングオングオングオン……

三式陸攻『靖国』72機は密集編隊で飛んでいた。  
もちろん、敵ソ連戦闘機を警戒してである。

レーダー員

「野中隊長！ 3時の方向より編隊！」

野中隊長

「野郎ども！ 防御態勢！！」

いくら高性能陸軍爆撃機『飛龍』の海軍バージョンとはいえ、爆撃機には変わり無い。

戦闘機に襲われれば一方的になぶり殺される可能性は高い。  
しかし、その必要は無かった。

『こちら、第七艦隊の彩雲。護衛の戦闘機隊を連れてきました』

通信員

「隊長！ 第七艦隊の戦闘機隊です！」

野中大佐

「戦闘機隊のアンちゃん達か！ いい按配だぜ！」

第七艦隊から送られて来たのは戦闘機八人衆を中心とした陣風・烈風・紫電改の混成48機と誘導の彩雲。合流した陸攻隊と戦闘機隊はソ連黒海艦隊へと向かった。

搭乗員

「敵艦隊発見!!!」

目指すべきソ連黒海艦隊が野中隊の前に現れた。

野中大佐

「よし！ 野郎ども、仕置き道具の準備はいいか!？」

「『『『『『委細承知!!!』』』』』」

野中大佐

「編隊分かれ!!!」

この命令に魚雷装備の12機と爆弾装備の60機に分かれる。

また、戦闘機隊は高度7000まで上昇し、警戒に入る。なぜか…  
…敵機はいない。

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

さすがに敵も陸攻隊に気付いて対空砲火を浴びせてきた。

しかし、第七艦隊とアメリカ艦隊の対空砲火を知る野中隊にとって霧雨でしかない。

隊員の間では「七（第七艦隊）は台風、アメ公大雨」と対空砲火を称していた。そんな彼らから見れば、ソ連艦隊は………と言ったところだ。

そして、先に動いたのは水平爆撃隊だった。

80番搭載の9機がガングート型戦艦セヴァトーポリ………現在はパリスカヤ・コムナに向かい、残りは巡洋艦に貼りついた。

もちろん、ソ連艦艇も必死に回避運動を行ったが、猛訓練で鍛えた陸攻隊はピタリと取り付き、指揮官機の爆撃手は三式照準器から敵艦艇を睨む。

そして、爆撃のタイミングは違ったが、指揮官機から爆弾を投下した瞬間、僚機も一斉に投下した。

爆撃完了後、真打ちである12機の雷撃隊が突入した。この時、通常魚雷隊にパリスカヤ・コンムナを任せ、野中隊長機が率いる回天隊はたまたま無事だったマキシム・ゴリキー型巡洋艦モロトフに狙いを付けた。さすがのモロトフも全速力で逃げたが、回天隊は通常より（1000メートル）より手前の1500メートルで回天を投下した。

野中隊長

「ちゃんと走ってるか!？」

後部機銃員

「本機のは走っていますが、2発が水没！ 1発は迷走！」

後部機銃員の目には沈む2本と、周りをぐるぐる回る1本の回天。

野中隊長

「ち、半分か…」

まだ採用されたばかりの音響誘導魚雷だけにこう言ったトラブルは付きものだ。無事な回天は38ノットでモロトフに向かう、しかし、モロトフも早く気付いてさっさと36ノットで回避行動をとった。失敗か……と野中達が思った時、モロトフは回避出来たと速度を落

とした。

回天はスクリュー音を感知し、モロトフに向かって走った。これにモロトフが気付いた時には既に回避不可能な距離だった。そして、3本の回天はモロトフの左舷後部に命中した。

野中隊長

「よし、引き上げる」

ゴワーン！！！！

その直後、爆撃3発、魚雷6本が命中した。パリスカヤ・コンムナは火災により弾薬庫が引火、船体を真っ二つにして沈没した。モロトフも左舷後部から沈み始めていた。

30分後……木村水雷戦隊が到着した時点で、モロトフも沈み、放棄された旧型巡洋艦一隻が浮いているだけだった。

そして、救助作業中に直衛予定だった空軍戦闘機隊が襲来、頭に血が昇った何機かが襲い掛かって来たが、3機を撃墜すると慌て引き上げていった。

次号へ



## 野中隊襲撃ス！（後書き）

予告

時系列を一気に飛ばし、ドイツ・イタリア軍はオデッサを確保！  
しかし、ソ連軍は諦めず、オデッサ以東に防衛線を敷き抵抗。  
支援協議の為、福本はマリーダを連れオデッサへ！

ご意見ご感想をお待ちしております。

海軍参加要請（前書き）

新米士官

「鳩ポツポは小沢を道連れに地獄に行った筈なのに、今度は小沢とお手て繋いで地獄から舞い戻ってきやがった」

福本

「ああ、売国党の幹事長選挙？」

新米士官

「菅は嫌いだ、だが、小沢はもっと嫌いだ。そして、2人とも売国奴だ」

福本

「そして、鳩はピエロだ、民主党の鳩は平和じゃなくて、戦争を運ぶ、なんて言われとるしな」

新米士官

「あゝ、はようせんと日本が中国に盗られてまうで」

## 海軍参加要請

3月15日……トルコ侵攻軍降伏。

第七艦隊・第六大陸艦隊・イタリア艦隊・日本陸軍欧遣部隊・第七陸戦隊・第六大陸欧遣部隊による後方打撃作戦により、物資補給手段を失い、内部崩壊したのが原因であった。

3月20日……ドイツ・イタリア軍、コンスタンツを占領。

これによりルーマニア全土が解放される。

また、同日、ギリシャ・イギリス軍によりブルガリアの北東部の都市バルナを占領。

ブルガリア全土も解放される。

3月26日……第六大陸欧遣部隊、ロストフを占領。また、第七陸戦隊・日本陸軍欧遣部隊はクリミア半島東部ケルチを占領。  
黒海・アゾフ海の通行路を確保。

4月9日……ドイツ・イタリア軍及びキエフから南下していたイギリス軍がオデッサを占領。

黒海主要港はクリミア半島のセバストポリ軍港のみとなる。

また、ソ連軍はオデッサ以東より防衛線を構築、この防衛線は内陸部のハリコフまで延びており、補給路確保の防衛線でもあった。

4月11日 オデッサ

ブロロロン！

日本が誇る高性能飛行艇二式大艇が直衛の烈風を引き連れオデッサの海へ着水した。

上空の烈風隊はオデッサの飛行場に着陸した。

そして、二式大艇からは福本とマリィダが降りて来た。

福本

「オデッサって…ガンダムだろう」

マリィダ

「あれのネタ元は第二次大戦じゃあなかったけ？」

福本

「あゝ…確かに」

…と、微妙に次元の違う話をしながらオデッサ市内を司令部に向かって歩く。

オデッサ 連合軍司令部

士官

「閣下、日本海軍の福本元帥とマリィダ大将をお連れしました」

「入れてくれたまえ」

士官

「はい。どつぞ」

扉を開けると久し振りに会う顔が見えた。

福本

「お久し振りです。マンシュタイン元帥」

マンシュタイン元帥

「うむ…今度はこんな所で再会したね」

マンシュタイン元帥はそう言いながら、福本とマリーダに握手をする。

福本

「本官も、まさかバルカン半島攻略軍指揮官がマンシュタイン元帥とは思いませんでした」

それこそ、（失礼だが）ドイツ軍最高司令官のポストに収まっていたかと思っていたが……

マンシュタイン元帥

「まあ、色々あったがね…さて、この後の我が軍の予定だか…」

そう言うと机の地図に場所を移す。

マンシュタイン元帥

「まずは、ハリコフまで続く防衛線を突破する。ドイツ軍だけでは不可能だから、イギリス軍にも協力してもらおう」

福本

「補給路を途絶し、クリミア半島のセバストポリ軍港を攻略…」

マンシュタイン元帥

「と、言いたいが、セバストポリ軍港の前には君達の先輩達が苦勞した旅順要塞の現在版と言うべきセバストポリ要塞がある。ゲーレン機関の情報だと三重の防衛線は約350キロ、重砲、迫撃砲合わせて約2600門で堅く守られている」

マリダ

「三重の防衛線に火砲2600門!? 異常じゃない!」

確かに異常だ。

三重の防衛線となると、陣地戦が得意なソ連軍なら大量の対人・対戦車地雷を敷設し、大量の機関銃を機関銃陣地に設置しているに違いない。

これではドイツ軍お得意の戦車による電撃作戦は実行出来ない。こうなると、敵火砲を考え同数からそれ以上の重砲を揃えて砲撃戦をやるしか無い。

それに、戦闘爆撃機から大型爆撃機まで動員して爆弾の雨を降らせるなら、効果も高いだろう。

マンシュタイン元帥

「既に本国には多数の重砲と空軍に爆撃機を中心とした航空部隊の派遣を要請している」

福本

「僭越ながら……足りませんか？」

マンシュタイン元帥

「ドイツ中から掻き集めるが……1門しか無いが80センチ列車砲を派遣するそうだが、しかし、足りるかはな……」

福本

「なるほど…」

マリーダ

「…どうせなら、私達も手伝う？ イタリア艦隊も入れたら全周350キロは無理でも沿岸から艦砲射撃で届く範囲なら耕せるわよ？」

まあ、要塞と言つのは穴さえ見付ければ落としやすい物だ。

福本

「なら、制空権の確保は絶対だね。うちの戦闘機だけで足りるかな？」

マリーダ

「足りないなら、アメリカ・イギリスも巻き込めばいいのよ」

福本

「いや…その表現もどうかと…」

マンシユタイン元帥

「海上からの支援もあれば心強い。是非とも要請したい」

福本

「第七艦隊に関しては大丈夫です。他の艦隊に関しては司令官と協議する必要がありますがね」

セバストポリ要塞攻略戦の海軍参加要請はこうして第七艦隊から始まる事になる。

次号へ



## 海軍参加要請（後書き）

予告

制空権確保に動き出した連合国各国艦隊。

しかし、ソ連も最後の抵抗とばかりに最精鋭部隊を送り込み激戦に！  
その中には、あの悲劇のエースも……

ご意見ご感想をお待ちしております。

## セバストポリの大空戦

ドイツ軍指揮官マンシュタイン元帥の要請し、アイゼンハワー元帥兼連合軍総司令官が認可し、福本の仲介により、アメリカ、イギリス、そして、修理がようやく完了したフランス艦隊と話を付け、セバストポリ要塞攻略の下準備を終えた。だが、セバストポリ軍港付近はソ連軍敷設の機雷があり、これを掃海しなければならなかった。それに、セバストポリ要塞攻略には空爆も実施する為、制空権の確保は絶対であった。

これを担当するのは機動艦隊を持つ、アメリカ艦隊・イギリス艦隊・第七艦隊・第六大陸艦隊の四艦隊だった。あとのイタリア艦隊・ドイツ艦隊・フランス艦隊は空母保有数及び搭載数も少ないので艦隊直衛にまわる事になった。

4月22日

ハルゼー大将率いるアメリカ艦隊は新たな空母と搭乗員の追加を得て、全力出撃をかけた。  
しかし……………

ダダダダダダ！

ゴワーン！

セバストポリ軍港の上空は大乱戦になっていた。

そんな中、1機のF6Fが翼を折られ落ちていく。

パイロットは慌てパラシュートで脱出した。

そんな光景がちらほら見られた。

実はアメリカ艦戦隊はソ連軍戦闘機隊相手に苦戦とはいかないものの、てこずっていた。

しかし、数少ない太平洋のベテランやヨーロッパの空でソ連空軍と戦ったパイロット達は直ぐに相手がベテランだと気付いた。

『くそ！ こいつらはベテランだ！』

『スターリンめ！ エースをここ集めやがったんだ！』

『全機に継ぐ！ こいつらはプロだ！ チームを崩すな！ 単機だと喰われるぞ！』

こうなると実戦経験者の対応は早い。

しかし、ルーキーだと遅れ、撃墜される。

ただ、機がダメだと解るとルーキーも躊躇わず機体を棄て、眼下の海にパラシュート降下する。

彼らは出撃前のブリーフィングで、日本海軍の潜水艦が待機している事を知っている。

更に日本艦艇が救助任務に参加する事も通知されていた。

だから、国際法無視のソ連軍に捕虜として捕まらないとゆう安心感はある。

だが、このままでは被害甚大は免れ無い。

その時……

『隊長！ 後方より大編隊！』

『なに！ 敵の新手か！？』

『いえ、違います。機体の感じがどうも…』

『ヤッホー！！ 隊長！ あれはサムライだ！ ジャパンだ！』

『なに……あの第七艦隊からの援軍か！』

アリソン

『全機、増槽投下！ 各自自由戦闘。但し、ロットは崩さないでよ！』

無線に叫ぶと直ぐに増槽を投下し、フルスロットルで仲間を率いて空戦の中に飛び込む。

紫電改、烈風、陣風……日本が誇る艦上戦闘機がソ連軍戦闘機に襲い掛かる。

第七艦隊はハルゼー大将より妙な胸騒ぎから、福本に救援要請を受けた。

元々出撃するつもりで準備していた第七艦隊は時間を前倒しして出撃させた。

そして、救援隊旗艦敵傍のレーダー・無線による情報提供・誘導に



クリス

『な、なんとか……張り付かれました!』

宮本

「く、相棒がいたのね」

杉田

『宮本中尉、今から助けます! いいですね!』

紫音

『烈! 後少し辛抱しろ!』

宮本

「杉田上飛曹! ダメ、1機だと……」

杉田

『ワイズマンー飛曹! クリス中尉は任せました!』

ワイズマン

『了解! やつと出番だ!』

杉田は宮本機、ワイズマンはクリス機を追跡する敵機に向かう。宮本機を追い掛ける機には戦場には似合わない白い花が描かれていた。

次号へ

## セバストーポリの大空戦（後書き）

予告

宮本機を追跡する敵機の正体は？

そして、第七艦隊もジェット機を使い、ソ連空軍を抑え込む！

明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新致します。お楽しみに。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 双方の危機一髪

杉田と別れたワイズマンはクリスを追う機体にまっしぐらに向かった。

ワイズマン

「クリスに手を出すな！」

ズダダダダダダ！

ズダダダダダダ！

クリス機を追跡する敵のラボーチキンLa-5の後ろに付き、20mm機銃の引き金を引いた。

しかし、敵機は間一髪で気付いてギリギリ回避した。しかし、これによりこの敵機はクリス機の追跡を諦め、退避した。

クリス

『ありがとう、バーニー』

ワイズマン

「いえいえ…こちら、ワイズマン。宮本機を援護します、どうぞ」

杉田

「了解。ですが、こちらでなんとかします」

そう言うと無線を置き、宮本機を追跡する敵機を追尾する。

しかし、敵機は余程の手練れなのか、宮本機にピタリと付いて追尾



している。

紫音

「敵なかなりの手練れだぞ、杉田」

杉田

「ああ…慎重にやらないとな」

ここは殺気を極力消して、静かに接近するのが一番だが……

杉田

「紫音。烈と以心伝心出来るか？」

紫音

「ふっ、そんな事は朝飯前だ」

杉田

「よし、今から言う事を烈に伝えてくれ」

烈

「…と言う事です」

宮本

「なるほど…一発勝負ね。あとは杉田君の腕次第ね」

小刻みに回避運動を繰り返しつつ、烈・紫音を介して伝えられた杉田の作戦に頷く宮本。

宮本

「じゃあ、直ぐに始めるわ!」

烈

「りょーかい!」

宮本機は逃げつつ敵機を振る舞わした。

敵機は執念深く追尾し、その後ろから杉田機は静かに追尾していた。それをワイズマン機とクリス機から見ると、宮本機は敵機を上手く誘導していた。

そして、陸地から離れ、海上に出た瞬間、宮本機は急降下に入った。その時、ようやく自分が海上にいる事に気が付いた敵機は宮本機の追尾をストップしてしまった。

そこに、杉田機は機銃の1連射を加えた。敵機は回避した。

しかし、一瞬の動作の遅れが祟り、エンジン部に当たって墜落した。

宮本

「助かった…ありがとう、杉田上飛曹」

杉田

「いえいえ。あ、クリス機も無事ですよ」

ワイズマン

「杉田上飛曹、宮本中尉。空戦は大方終わったみたいですよ。引き上げましょう」

宮本

「了解：烈、帰ろっか？」

烈

「はい！」

その頃、日本軍が占領しているケルチでは、急造された飛行場において、新たに派遣された震電・震電改・火龍の部隊が空に舞い上がった。

セバストポリ上空の制空権奪取の為、出撃したのである。

日本軍はジェット戦闘機を投入し、ソ連空軍を早期消耗させる手段に出た。

なぜなら、これがソ連空軍による最大の抵抗であり、これさえ打ち破れば、ソ連空軍にベテランパイロットを失い、継戦能力を一挙に失う事に成るからだ。

セバストポリ近海

沿岸付近での救助作業は潜水艦に任せ、畝傍率いる第一駆逐隊大波、小波、津波、神波の海上隊は帰還途中で力尽きた機体からのパイロットを救助するのが役目であった。

畝傍艦橋

レーダー員

「対空レーダーに反応。12時の方向」

この方向に九鬼は直ぐに首に掛けている双眼鏡を使った。確かに、低空で不器用に飛んでいる。しかし……

「……あれ、ソ連機ね」

横から千賀ちがみゆき深雪航海長が言った。

九鬼

「そうね。けど、私達の任務は救助。それに、敵味方無しですよ」

水兵

「敵機、着水！」

九鬼

「カッター降ろせ！ 救助用意！」

敵傍から降ろされたカッターは着水した敵機に向かう。その機体には白バラならね白百合の書かれた機体であった……

次号へ

## 双方の危機一髪（後書き）

予告

ソ連空軍エース部隊を打ち破った連合軍。  
制空権を確保し、セバストポリ要塞の空爆・セバストポリ軍港付近  
の掃海を開始する。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 崩壊の予兆

後に『セバストポリ航空戦』と呼ばれる事になるソ連空軍の抵抗は僅か1週間で頓挫した。

何せ、第七艦隊の精鋭達と日本軍の震電、ジェット戦闘機の震電改、火龍と言う新型戦闘機と、海上のアメリカ・イギリス、陸上ではドイツ、イタリアが繰り出す圧倒的な航空機の数にあつという間に消耗したからだ。

特にアメリカは4月22日の空戦で多数のF6Fを失ったが、翌日にはそれを上回る数のF6Fを繰り出してきたからだ。

それに、現時点のソ連空軍に失った数の分を補充する余力は無く、パイロットがいても乗る機体が無い状況だった。

また、補充された機体も質は落ちており、整備兵が1日掛かって整備する事もあった。

更に整備兵も促成になった事もあり、稼働率を維持出来なくなっていた。

それに、エースばかりを引き抜いた為、防衛線全体ではソ連空軍の被害は増えるばかりで、戦争継続不能に陥りつつあった。

この様に制空権の確保に成功すると、日本軍は富嶽、アメリカはB29、イギリスはランカスター…と自慢の重爆撃機を繰り出し、セバストポリ要塞とその周辺に大量の爆弾を雨の如く投下、まさに鉄の嵐…と見ている人間には思えた。

まあ、確かに外周の防衛線には被害を被っていた。

しかし、要塞本体の被害は不明…外からはボコボコに見えるが…で、とりあえず様子見になった。

しかし、それはセバストポリ要塞だけの事であり、他の地域は別だ

った。

それこそ、ドニエプル川下流のカホウカ湖から黒海までの川を防御線にしていたソ連軍は陸・空からの猛攻の前に崩壊し、撤退に次ぐ撤退を繰り返していた。

また、イギリス軍による攻撃によりサポロージエからハリコフの防御線もボロボロになり、持ちこたえるのがやっと、撃退は無理！……な状態であった。

しかも、ウクライナはソ連……と言うより、スターリンによる強制穀物徴収を行い大量の餓死者を出し、その数100〜700万人と言われる程だ。

こんな事をやられて恨まない人間はいない。

実際、連合軍が街や村に來ると住民は大歓迎、ソ連兵は石を投げられる……と言った状態。

また、ウクライナにもレジスタンス組織があり、連合軍から手に入れた武器を使い、ソ連軍や補給線を襲撃しているから、ソ連軍は正に泣き面に蜂状態。

これに対し、ソ連軍・政府上層部は有効な手を打てなかった。

何せ、どういった手段が有るか解らないし、今頃手を打っても効果は期待出来ない。

つまり、端的に言うなら自業自得だった。

そんな中……

5月4日 ケルチ

間借り司令部

福本

「『ソ連軍の弱体化は明らか』……か」

尾崎

「それって、本当ですか!？」

福本

「って、うわ!?!？」

ドシーン!!

椅子に座って、日本軍諜報部からの報告書を読んでいた福本の横から、いきなり第七艦隊唯一の民間人で新聞記者の尾崎が現れ、福本は椅子から転げ落ちた。

福本

「び、びっくりした……心臓が止まるかと思いましたよ……尾崎さん」

尾崎

「大丈夫ですよ、福本長官! 読者の人も言ってたじゃないですか、『福本さんを殺せるのはマリーダだけ』って!」

福本

「……………それ、言っちゃていいんですか?」

尾崎

「いいんですよ! それより、ソ連軍の弱体化は本当ですか?」

福本

「ええ、まあ」



この艦隊に居るせいか、素人よりは軍事知識があり、ちょっとの説明で理解出来る様になってしまった。(恐ろし〜)

福本

「まあ、アジア方面からも攻められちゃあ、終わりだね」

尾崎

「ふ〜ん…あ、そう言えば、マリーダさんは？」

福本

「え、ああ、ちょっとね」

尾崎

「あの女性パイロットの所？」

福本

「耳が良い事で」

尾崎

「新聞記者ですから」

まったく…恐ろしい事で……

次号へ

## 崩壊の予兆（後書き）

時系列を戻し、視点を換えアジア戦線へ！

チタより攻勢出た日本軍はウランウデとモンゴルの首都ウランバートルを第一目標に、そして、イルクーツクを狙う！

ご意見ご感想をお待ちしております。

## アジア方面

1944年12月……ヨーロッパでは、フィンランドを巡りソ連軍とフィンランド・日本軍が北欧で戦い、ドイツ軍のロンメル将軍率いる部隊がエストニアを解放した頃、アジア方面でも攻勢作戦が発令された。

その作戦名『隼』。

作戦内容は、シベリア鉄道の主要駅であるウランウデを攻略、その後、部隊を2つに分け、一方をモンゴルのウランバートル、もう一方をイルクーツク攻略に向ける……と言うものだった。

日本軍としては、まさかシベリア鉄道を使ってモスクワまで行けるとは思っていない為、イルクーツクが攻略限界点だと考えていた。

そして、モンゴルのウランバートル攻略はアジア方面唯一の共産主義国である。まあ、それはノモンハン事件を見れば解るが…。

とにかく、日本としては出来る限りアジアに共産主義国を残したくはなかった。

1944年 12月8日

チタ市内連合軍司令部

コンコン

士官

「栗林中将、トロツキー首相をお連れしました」

栗林中将

「うむ、通してくれ」

士官

「はい。どうぞ」

トロツキー首相

「やあ、栗林中将」

栗林中将

「お待ちしております。トロツキー首相」

現在、トロツキーを首相としたロシア共和国はチタを臨時首都にしていた。

占領後、連合軍…主に日本軍…により前線基地として整備されたチタ。

現在は飛行場も整備され、配給制ながらも住民に対する食糧配分は怠ってはいない。

また、飛行場には富嶽、飛龍、震電、震電改、火龍、烈風、陣風、疾風、五式戦旋風、屠龍……等の爆撃機・戦闘機が集結し、何時でも発進出来る様に整備されている。

そして、市郊外の訓練場には日本軍古参下士官兵に指導を受けるロシア共和国軍の兵士達……。

トロツキー首相

「やはり、日本軍の訓練は厳しいですな」

栗林中将

「厳しさならば何処にも負けません」

訓練場を視察するトロツキー首相と栗林中将。

トロツキー首相

「ソ連赤軍は私が設立しましたから解りますが、やはり質が違います。スターリンが赤軍粛清をする前の赤軍でも日本軍の様にはいきません。まず、規律を確り末端の兵士達が守っています」

栗林中将

「我々は小学校の時から教育勅語や修身により、『人とはこうである』と教わります。だからでしょう」

ちなみに、修身とは今の道德の事。

この為、風紀・規律の面では日本軍は世界中の軍隊の中ではトップクラスだった。

そんな軍隊を、やれ従軍慰安婦だの、レイプ集団だの、虐殺集団だの……と言う輩は何にも知らない馬鹿だと断言出来る。

トロツキー首相

「しかし、僅か数ヶ月で、ここまで兵士を鍛え直すとは……これなら次の作戦に投入出来ます」

元々、ここにいるロシア共和国軍兵士達のほとんどがアジア方面のソ連軍兵士達の志願者によって構成されている。

しかしだ……彼らが訓練を始めた時は、この先大丈夫か？…と心配になった程だ。

何せ戦車の場合、訓練時に最初は動かない、やっと動いたと思ったらバツクしたり、ぐるぐる回る始末……。

歩兵に至っては字が読めないから一苦労、砲兵は直接照準に慣れたせいか、間接照準……観測砲撃になると成績はからっきしだった。

これを直すのは日本軍も一苦労したが、白系（亡命）ロシア人の協力もあり、訓練も順調に進んでいた。

トロツキー首相

「しかし、日本軍がここまで支援してくれるとはありがたい」

栗林中将

「同じ志を持つ国を支援するのは当然です。海軍の福本元帥も同じ事を言うでしょう」

トロツキー首相

「うーむ……アドミラル福本の名前はよく聞きますが、それほどの人物なのですか？」

栗林中将

「ええ、今我々がこうしていられるのも、彼と彼の仲間のお陰と云つていい」

トロツキー首相

「ふむ……ヨーロッパに行った時に会つのが楽しみだ」

次号へ

## アジア方面（後書き）

予告

アジア方面攻勢作戦『隼』開始！

やはり活躍する装甲列車、進撃する戦車部隊、脆くも崩れるソ連軍  
……どうなる！？

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 作戦開始〜ウランウデ陥落

1945年1月3日……ヨーロッパ方面で全域攻勢が開始された日、アジア方面でも『隼』作戦が開始された。

ヨーロッパ方面と違ったのは多数の重火砲による対地制圧射撃などは無く、静かな作戦開始だった。

しかし、静かだからこそ、ソ連軍は気付かなかった。

1月6日 ウランウデ手前の山の中

栗林中将

「敵の動きはどうかね？」

士官

「は、どうやら、ウランウデ手前の耕地に防衛線を敷いています」

西大佐

「山に敵はいないのか？」

士官

「第七艦隊のクロシユタツト軍港・レーニンググライド同時空爆作戦により、集積していた多量の食糧・武器・弾薬等の軍事物資を一挙に焼失しました。この補填の為、アジア方面への物資供給量が大幅に低下しています」

池田大佐



「つまり、あまり兵を散らばせっていると補給が困難になると言う事だな」

士官

「はい。この為、ウランウデ周辺に敵は集中していると思われます」

バドエル少将

「ヨーロッパの事がアジアに響くとはなあ…世界は狭いね」

士官

「また、ソ連空軍もヨーロッパ方面に移動しており、現地に展開しているのは僅かだと思われます」

栗林中将

「今回はロシア共和国軍も参加する。ヨーロッパ方面でも編成される予定だ。我が軍はウランウデ手前の防衛線突破後、ウランウデを包囲する。これは作戦の第一段階だ。次にウランバートル、イルクーツクだ。これを頭に入れてくれ…以上だ」

「……………はい!!」「……………」

翌7日

ウランウデ手前の防衛線

防衛線は朝から空爆されていた。

チタより出撃した飛龍・呑龍・九九式軽爆撃機が疾風・旋風に護衛され、ウランウデ手前の防衛線を空爆していた。本来なら富嶽を投入してもいいのだが、破壊力が有りすぎるので投入しなかった。

しかし、軍事物資の供給量が少なく、弱くなつた防衛線にはこの爆撃だけでも被害は甚大だった。

そして……………

栗林中将

「よし、全部隊行動開始！」

士官

「了解！」

この命令に待つてましたとばかりに、戦車のエンジンが掛かり、前進を開始する。

五式装甲列車も動き始め、防衛線へと向かい始めた。そして、上空には新たに屠龍地上襲撃型が現れた。

屠龍は降下すると健在な陣地に主翼の噴進弾が撃ち込まれ陣地を潰す。

実は一部の陣地にソ連のアハトアハトと呼ばれる85mm高射砲52-Kが配置されていたが、先程の爆撃で大半が破壊された。

だが、まだ一部は生きていた。

そして、日本軍の戦車を待ち構えていた。

しかし、ソ連軍の手の内を知る日本軍はじっくり防衛線を偵察し、高射砲や野砲類を確認すると無線で連絡をとり、屠龍が再び襲い掛かった。

屠龍は機首の47mm砲で高射砲や野砲類の陣地を潰すと、再び防衛線に向け進撃を開始した。

こうなるとソ連軍では手の施しようが無い。

元々物資の少ない中苦勞して造られた防衛線脆く、ここまで叩かれると、ソ連兵の意思も脆くなっていった。そして、戦車と日本兵が乱入した瞬間、防衛線もソ連兵も崩れさった。まあ、その前に、五式装甲列車が防衛線を突破し、ウランウデ駅に向かっていたのだが……………。

結局、ソ連軍の防衛線は容易に突破され、多数のソ連兵が捕虜となった。

その後、ウランウデ市が陥落したのは1月18日。

その11日間、日本軍は航空機による宣伝ビラ、食糧の投下、宣伝放送と心理的攻撃を続けての陥落だった。

次号へ

## 作戦開始〜ウランウデ陥落（後書き）

予告

守勢に回るソ連軍。

これに対し、日本軍は作戦第二段階に移行、モンゴルの首都ウランバートルに向け進撃。

また、あの地で再び戦い火花が飛ぶ!?

ご意見感想をお待ちしております。

満州帝国軍陽動作戦（前書き）

新米士官

「今回は満州帝国軍！」

福本

「史実なら8月に滅ぶからな」

新米士官

「この物語だと60年後も存在しているぞ」

マリーダ

「どうなるかは…お楽しみね」

新米士官

「日本人の意地見せちやる!!」

福本

「おいおい、違っだらう」

新米士官

「明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』更新日！  
いつの間にか一年経ってたよ！（9月1日連載開始）」

マリーダ

「いや、ダメでしょう！ 把握しとかないと！」

## 満州帝国軍陽動作戦

1月25日 満州・モンゴル国境ノモンハン

ゴゴゴゴゴゴ.....

6年前、ソ連・モンゴル軍と日本・満州軍が戦ったノモンハンの地を満州帝国軍第1・第2軽装甲師団と同第12騎兵大隊、同第1・第2・第3機動歩兵師団が進んでいた。

彼らは日本軍のモンゴル侵攻作戦の陽動役として展開している。ちなみに、軽装甲師団と称しているが、中身は戦車師団である。いわゆる言葉のトリックだ。

しかし、戦車師団とは言っても配備されているのは九八式軽偵察戦車改と一式重装甲車、少数ながら四式中戦車二型が配備されているだけだ。

また、第12騎兵大隊も実体は一式重装甲車と騎兵の混成偵察大隊である。

だが、1934年の満州帝国建国から僅か10年で戦車師団や装甲車偵察部隊、機動歩兵師団を保有している事は中々のものである。そんな満州帝国軍軽装甲師団はノモンハンのハルハ河に仮設橋を作り、一式重装甲車、九八式軽偵察戦車改、四式中戦車二型と軽い車両から渡らせ、歩兵師団も別の仮設橋で河を渡っていた。そして、第12騎兵大隊は先発隊として偵察にあたっていた。

この事はもちろん、モンゴル側にも直ぐに知れ渡った。

まず、国境警備に出ていたモンゴル軍騎兵隊がこれを見付け、直ぐ

にウランバートルへと報告が入った。

取り合えず、敵の意図を探る為、モンゴル人民革命軍騎兵師団の装甲車大隊からノモンハン付近にいる部隊が出動した。

しかし、この時点でモンゴル軍・政府は失敗を犯したと言える。

満州帝国軍だったせいも有るだろうが……暢気に意図を探ろうとした事だった。

上記により、最初に砲火を交わしたのはお互いの騎兵隊の装甲車だった。

但し、満州軍にとってやって来た装甲車はソ連軍のBA20軽装甲車やBA10重装甲車はノモンハン事件でも見かけた顔見知りだった。

対し、モンゴル軍は初見参の一式重装甲車だった。

同じ重装甲車とは言え、BA10が10mm程の装甲に対し、一式は40mm、武装もBA10が45mm砲に対し、一式は57mm 68口径砲……と余りに差が有りすぎた。

結果……装甲車同士の撃ち合いは奇才野口博士開発の一式重装甲車によるアウトレンジ攻撃に次々とBA20・10が破壊され、無事だった装甲車は残存部隊と共に撤退した。

満州軍第12騎兵大隊も敵を追撃せず、本隊到着まで周辺偵察のみに止める事にした。

さすがのモンゴル軍・政府、そして、ノモンハン事件以前より駐留しているソ連軍軍事顧問団及び駐留軍は共に慌てた。

満州軍とのこの戦闘で満州軍の意図を知った。

つまり、満州軍による侵攻作戦。

しかし、その考えにある点が抜けていた。  
日本軍がウランウデを占領している事だ。

ノモンハンから何百キロも走るより、ウランウデから鉄道を使い向かった方が早い。

その事に気付かなかったのだろうか？

それはともかく、モンゴル政府・軍とソ連顧問団・駐留軍はモンゴル軍唯一の戦車師団と歩兵師団、ソ連駐留軍の一部を出撃させた。残りのソ連駐留軍はウランバートルに待機していた。まあ、彼らからしてみれば、満州軍だからソ連駐留軍の一部も出せば事足りる…と考えていた。

しかし、満州軍の装備が日本製だと言う事を忘れていた。

また、航空部隊も出動する事になっていた。

ともかくにも、ノモンハン事件、満州侵攻と合わせて三度目の矛を交える事になった満州帝国軍。

初めての満州帝国軍主導の作戦に、果たして勝利出来るだろうか？

次号へ



## 満州帝国軍陽動作戦（後書き）

予告

満州帝国軍の九八式軽偵察戦車改のエンジンが唸り、九二式重機関銃が吠える！上空でも満州帝国軍航空隊奮闘！  
ノモンハンの地で再び砲火が交わる！  
そして、ウランウデより日本軍来襲！

明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新致します。お楽しみに。

ご意見ご感想をお待ちしております。

満州帝国軍奮闘！（前書き）

新米士官

「中国！ 尖閣諸島は日本のものだー！！」

福本

「中国がまた五月蠅いんだって？ あの海保と漁船の衝突事件」

マリーダ

「しかも、排他的経済水域内の調査を中止させようとしたんだって」

新米士官

「今すぐ、はやぶさ型高速ミサイル艇の追加建造をしろ！ 護衛艦も追加しろ！ 潜水艦も！ そして、尖閣諸島に配備だ！！ あと、V／STOL機でもいいから空母を作れー！」

福本

「……まあ、こんな国にならないであろう、満州帝国軍の奮闘をど  
うぞ」

## 満州帝国軍奮闘！

1月28日

ゴゴゴゴゴゴ……

ウランバートルより出動したモンゴル軍・ソ連駐留軍一部は3日掛けノモンハンに到着した。

対し、満州帝国軍はそれほど移動せず、ノモンハンで両軍を待ち構えていた。

これを知ったソ連駐留軍のある士官は……

「奴ら（満州帝国軍）は我々との戦力差を把握しているから、直ぐ逃げられる様にあそこに居るんだ」

……と、部下達の前で発言した。

まあ、この考えが大間違いだった事は直ぐに己の身で解る事になるが……。

まず、攻撃を開始したのはモンゴル空軍・ソ連駐留空軍である。

しかし、その陣容は旧型機ばかりだった。

戦闘機はポリカルポフI-16が多数、ヤコブレフYak1は少数、爆撃機はツポレフSB-2が多数、イリューシンIL-2シュトルモビクの初期・単座型が少数。

まあ、ソ連軍のお下がりばかりだった。

そんな彼らに襲い掛かった死神は満州帝国陸軍航空隊の三式戦闘機飛燕三型、四式戦闘機疾風、五式戦闘機旋風……と現役バリバリの日本陸軍戦闘機。

パイロットは日本人教官や満州防衛戦に参加した満州陸軍航空隊員、

満州、日本の錬成航空隊で1500〜2000時間を飛んだA級、1500〜800時間を飛んだB級新人パイロット達だった。彼ら新人パイロットは日本人教官や実戦経験者とペアを組み今回の空戦に参加していた。

そして……空は一方的殺戮の場と化した。

何せ、軽く見て一世代前の機体ばかりの編隊に現役機に敵わない。

やっとヤコブレフYak1が応戦したが、数に圧され、ポリカルポフI-16は性能で圧された。

そして、爆撃機は……言わずとも解るだろう。

とにかく、空襲は失敗した。

これを見ていた地上部隊は進撃を開始した。

いくら空戦で勝利出来ても地上は違うぞ！……と思ったのだろう。

モンゴル軍・ソ連駐留軍は戦車を先頭にして進撃して来た。

しかし……その戦車もBT-5・7、T-26シリーズが多数、T34が少数……しかも76mm砲型……である。

編成上、満州帝国軍と似たような構図だが……問題はスペック。

前者は九八式軽戦車にノモンハン事件で敵わなかった。

T34は……今や名戦車の栄光は過去の物になり、逆に日本軍の戦車にその栄光が行きつつある。

まあ……知らなかったからだろうが……そんな状況で双方が激突した。

満州帝国軍    モンゴル軍

ドン！                  ドン！

ガキーン！                  ゴワーン！



モンゴル軍も、ソ連駐留軍も撤退した。  
既に出動した戦車の大半が破壊・炎上し、無事な戦車も後退している、これ以上の戦闘は無理だった。  
戦闘開始から3時間後……………モンゴル軍・ソ連駐留軍は撤退、満州帝国軍からは凱歌が聞こえた。

この敗北は直ぐにウランバートルに伝わった。  
満州軍だから……………と調べてみれば、ノモンハン事件時の様に日本軍の陰に隠れていた満州軍とは全く違っていった。  
しかし、次に入った報告にモンゴル政府・軍、ソ連駐留軍が驚愕した。

『日本軍、北方国境より侵攻！ 援軍求む！』

これを聞いてようやく気付いた。  
自分達が日本軍の手のひらで、満州軍が書いた台本通りに踊らせていた事に……………。

次号へ

**満州帝国軍奮闘！（後書き）**

予告

バトンタッチした日本軍・サブルクム帝国第68旅団がモンゴルに侵  
攻！

まあ……何時まで保つかの問題だね……

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 日本軍、モンゴルへ

ノモンハンで満州帝国軍とモンゴル軍・ソ連駐留軍（一部）との戦闘が終盤に差し掛かった頃……日本軍はモンゴル北方国境の防衛線に対し、九九式軽爆撃機・屠龍対地襲撃型に戦闘機隊の護衛を付けて爆撃を開始した。

まあ、元々北方国境は友好国ソ連との国境であり、防衛線自体が簡単な物だった。

そこに、軽爆撃機とは言え本格的爆撃が行われたのだから、堪ったものではない。

爆撃後は待つてましたとばかりに戦車部隊が防衛線を蹂躪、後続の歩兵隊が防衛線を制圧した。

そして、線路を確保した日本軍は第1鉄道師団の五式装甲列車を通過させた。

続々と入ってくる続報にモンゴル軍は完全にお手上げだった。

何せ、ノモンハン事件でまともに日本軍と戦えなかったモンゴル軍が、今や満州帝国軍につきさっきボコボコにされたので参加不能。

そこで、ソ連駐留軍が撃退する事になったのだが……果たして出来るのか？

モンゴル国内北方の街アルタンブラク

バドエル少将



「……って、本当にここは街か？」

マイラーノ中佐

「はい。街です」

装甲列車で途中まで移動し、国境付近で一式半装軌装甲車で防衛線を突破、アルタンブラクに日本軍と共に到着したサブルム帝国軍第68歩兵旅団。

アルタンブラクはウランウデからウランバートルまでのシベリア鉄道支線の駅がある街だが……

バドエル少将

「……言っちゃあ悪いが……街と言うより、大きな村だろう？」

マイラーノ中佐

「仕方ありません。モンゴルは近代化が始まったばかりで、街らしい街はウランバートルのみですから」

バドエル少将

「……いくら、体制が違つとは言え、余りにも違いすぎだろう。満州の駅街でももうちよい活気があつたぞ？」

マイラーノ中佐

「満州は日本が手を加えましたからね。日本人は勤勉で真面目ですからね。だから、僅か建国10数年でも活気があります」

バドエル少将

「……そんな国と戦やつちまつたんだよな……俺達」

マイラーノ中佐

「はい。まあ、良い刺激にはなりましたが」

バドエル少将

「あゝ、暗い！ 暗すぎる！ どうかで酒飲めないかな？」

マイラーノ中佐

「その前に仕事しましょうね。旅団長」

そんな会話が交わされている頃……五式装甲列車内

佐藤中将

「ふむ……やはり、ここは一気に事を片付けた方がいいな」

士官

「はい。イルクーツク攻略作戦も控えております。ですから、明日はダルハンまで南下し、撃退しようとするモンゴル軍・ソ連駐留軍を撃破します」

佐藤中将

「戦車は重見中将に任せるか……歩兵も水上少将やサブルム帝国旅団がいる……イザとなったら、敵中突破となるな」

士官

「ところで中将。上層部はモンゴルをどうするつもり何ですか？」

佐藤中将

「これは山下大将から聞いた話だが……未来を見据えて、満州や仏印

と同じ手でいくそうだ」

士官

「すると…独立を認める代わりに共産主義を捨て、未来の為に日本が協力する…ですか？」

佐藤中将

「ああ」

士官

「そうですか…しかし、上が良くても、国民が納得するでしょうか？ それこそ、日比谷の様な事が…」

ちなみに、ここで士官が言った『日比谷』とは日比谷焼き打ち事件の事。

佐藤中将

「大丈夫だ。既に陛下が直諭を出す事になっている」

士官

「そうですね！ 良かった」

佐藤中将

「まあ…領土を割譲されても、我が国を含めて、受け取る国は無いだろ。それよりも、欧米列強は植民地を整理し始めるだろうな」

士官

「何故ですか？」

佐藤中将

「今回はイギリスもフランスも金を使い過ぎた。財政が苦しくなる。植民地の維持も難しくなるだろう。そして、我が日本が今回の大戦で活躍した。植民地では独立運動が活発化するだろうな」

士官

「……イギリスが手放しますかね？」

佐藤中将

「解らん。しかし、今までの様にいかない事は事実だろうな」

次号へ

## 日本軍、モンゴルへ（後書き）

予告

いよいよ日本軍はソ連駐留軍と対決！  
また、サブールム帝国軍第68歩兵旅団には特命が下る……その特命  
とは？

ご意見ご感想をお待ちしております。

## モンゴル戦終結

1月29日

ゴゴゴゴゴゴ……

日本軍の四式、五式、少数ながら六式戦車がモンゴル北方の狭い草原を走っていた。

この戦車部隊は重見伊三雄中将率いる戦車師団と佐伯静夫大佐率いる戦車連隊である。

その後方から佐藤中将の歩兵師団、水上源蔵少将率いる歩兵師団などが一式半装軌装甲車や九六式自動貨車トラックに乗って続く。日本軍は朝早くにアルタンブラクから出発し、ダルハンに向かっていた。

短期戦を決めた日本軍は撃退しに来るであろうモンゴル軍・ソ連駐留軍を撃破し、ウランバートルに向かう為だ。既に偵察の為、百式司偵が飛んでいる。

通信兵

「中将。ソ連駐留軍を発見。ここから数キロの地点です」

重見中将

「駐留軍だと？ モンゴル軍はおらんのか？」

通信兵

「司偵が見える範囲では駐留軍だけの様です」

重見中将

「ふむ…満州軍との戦いで大損害を出したな…ならば、我々はやり易い」

重見中将はニヤリと笑った。

20分後……重見師団・佐伯連隊はソ連軍と会敵した。まずはセオリー通り、戦車同士の撃ち合いからだ。

重見中将

「カクカク…撃て！」

ズドン！

重見中将の乗る五式重戦車の発砲を皮切りに一斉に撃った。

ゴワーン！ゴワーン！

たちまちT34、T34/85が停止し、あるいは爆発・炎上する。やはり、野口博士の戦車は世界一イイイイ！…である。

ドン！ドン！ドン！

バーン！バーン！ゴワーン！

『こちら金剛小隊3号車！ 左履帯に被弾！ 戦闘可能なれど、回収隊を要請！』

『こちら金剛小隊長車！ 小隊は3号車と回収隊を援護！ 露助を近付けるな！』

『扶桑小隊長車から金剛小隊長車へ。　穴は我々が塞ぐ。　回収に専念してくれ』

『こちら回収隊。　四式回収車を連れそちらに向かいます』

『こちら信濃小隊2号車！　敵戦車撃破！』

無線からは被弾や撃破の音が聞こえる。

既にソ連駐留軍は徐々に日本軍により抑え込まれていた。対しソ連駐留軍は戦車が直ぐ撃破され、後続の歩兵が無意味になってきた。

ちなみに、ソ連駐留軍も師団規模の戦車部隊を保有しており、編成上ソ連軍戦車師団の方が戦車保有数は多い。

しかし、ヨーロッパ同様一度戦闘になると、奇才野口博士が作り上げた戦車は四式中戦車だけでも世界各国の主力戦車と互角以上に戦える。

そして、戦車は鋭い槍の如くソ連駐留軍戦車師団を貫き、その傷口から機械化された歩兵師団が入り込む。しかも、この時になって戦闘機に護衛された屠龍3型乙（対地襲撃型）、九九式軽爆撃機、三式対地襲撃機『征龍』が飛来、後続の歩兵隊に襲い掛かった。

結果、ソ連駐留軍は全兵力の3分の2以上を喪失、残りは撤退した。また、喪失した兵力には追撃などにより降伏した者が随分いた。



つまり、ソ連駐留軍は壊滅したに等しい。  
そして、日本軍はその日の内に目標であったダルハンを確保した。

翌早朝……ウランバートルの駅

ようやく日が昇った頃、駅に一編成の列車が滑り込んで来た。  
徹夜明けのモンゴル軍警備隊は不用意に接近してしまった。  
その瞬間、兵員車の扉が開き、接近していた兵は殴られ、離れてい  
た兵はいきなりの銃撃で追い立てられた。  
しかも、兵員車からは兵士が続々と降りてくる。  
この事態に警備隊は大混乱に陥り、大慌てで逃げ出した。

バドエル少将

「まったく、日本軍は無茶をやるよ！」

マイラーノ中佐

「その割には少将は喜んでますね」

バドエル少将

「当たり前だろ！ 俺達が先陣をきつたんだからな！ 俺達にお似  
合いの特命を出してくれたぜ！」

第68歩兵旅団が日本軍より受けた特命……それは『装甲列車を使  
いウランバートル駅の確保する事』だった。

士官

「少将、中佐。ご命令通り、駅の確保完了しました」

バドエル少将

「よし。防衛陣地を構築しろ。行くぞ、マイラーノ！」

マイラーノ中佐

「……何処にですか？」

バドエル少将

「敵司令部！ 敵は混乱しているからな、正確な数は解って無い。それに相乗りするぞ！」

マイラーノ中佐

「……はゝあ……留守番、よろしく」

士官

「わ、わかりました」

その後、モンゴル軍・ソ連駐留軍司令部にジープで乗り込んだ2人は、『駅には自分達の他にも日本軍3個旅団がいる』とか『あと数時間で日本軍の大航空部隊と地上部隊が到着する』などのハツタリ（主にバドエルが）を言い、見事に両軍を降伏させた。つまり、事実上モンゴルが降伏した事になった。

次号へ

## モンゴル戦終結（後書き）

予告

モンゴル攻略戦を終えた日本軍はイルクーツク攻略作戦を開始する。  
『土』の戦車隊が陣地を蹂躪し、金色の四式中戦車がソ連軍を恐怖  
に陥れる！？

ご意見ご感想をお待ちしております。

## イルクーツク攻略作戦開始

2月10日

レニングラードが陥落し、第七艦隊がトルコへ向かっていた頃、モンゴル戦を終えた日本軍は『隼』作戦の最終目的イルクーツク攻略作戦の準備に取り掛かっていた。しかし……

ウランウデ日本軍司令部

山下大将

「やれやれ…あの御仁にも困ったものだ」

つい先程、アメリカ軍との協議……と言つより一方的要請……を終え帰って来たところだ。

山下大将

「まあ、永田閣下、石原参謀総長の事前情報と君のお陰だよ、マッカーサー参謀」

「そのマッカーサー参謀はそろそろご勘弁願えませんか？ 山下大将」

山下大将

「なーに、フィリピン以来の私と君の仲じゃないか、堀栄三中佐」

堀栄三……史実でも山下大将の参謀に着任、米軍作戦の予想・状況判断を正確に行った事からマッカーサー参謀と呼ばれた人物で、実は台湾沖航空戦の『幻の大戦果』を真つ先に見抜いた人間でもある。しかし、この世界では1943年のフィリピン攻略作戦に山下大将の作戦参謀として着任、直ぐにマッカーサーがマニラを放棄、バターン半島及びコレヒドール島に籠城する事を真つ先に断言。実際そうだったので、山下大将は彼を『マッカーサー参謀』と呼びながらも重宝していた。

山下大将

「しかし、マッカーサーがあんな事を言い出すとは……我々はイルクーツクが限界だと言っておるのに……」

堀中佐

「仕方ありません。このシベリア鉄道を使い、モスクワの裏に回れば彼は英雄ですからね。彼は未だに大統領の座を諦めていませんから」

山下大将

「『シベリア鉄道を使いモスクワへ向かう、そして、モスクワを落とす！』……この広大なソ連の地をシベリア鉄道だけで抜けれるとは到底思えないな」

堀中佐

「確かに、いくら何でもリスクやコストが多すぎますからね。しかも、アメリカが金を出しても……です」

山下大将

「いくら世界の為とは言え、マッカーサーの自己満足に付き合う必

要は無い…やはり頼りになるな、マツカーサー参謀」

堀中佐

「ですから、それはご勘弁願えませんかね？」

苦笑しながら、堀中佐は言った。

……とこんな一幕があつたものの、当初の予定通り、イルクーツクを攻勢限界点と決められたイルクーツク攻略作戦が行われた……

2月13日

ウランウデーイルクーツク間の道路

ゴゴゴゴゴゴ……

シベリア鉄道の線路に沿って通っている道路を日本軍戦車隊が進んでいた。

イルクーツクの近くにはバイカル湖があり、これを渡れたら多少は楽なのだが、重量物は渡す事は出来ない。

この為、道路・鉄道を使う事になり、先ずは道路の確保から始まった。

しかし、ソ連軍もバイカル湖が有ること、ウランウデーイルクーツク間は針葉樹林地帯で有ることからこれを利用して防衛線を敷いていた。

また、バイカル湖には河川砲艦を配置し、バイカル湖から進軍する

日本軍を砲撃しようと考えていた。  
だが……………

つい先程制圧された防衛陣地には『土』の字が書かれた第十一戦車連隊がいた。また、この先の数キロ前には金色に塗られた四式中戦車率いる第二六戦車連隊が小休止していた。

速度が有る第二六連隊が防衛線を突破し、打撃力が有る第十一連隊が陣地を制圧……………といつの間にやら決まったこの役割。

しかし、西大佐の乗る金色四式戦車は既にソ連軍から『金色の悪魔』と呼ばれ、実際、戦車だけでなく湖上砲撃に來た河川砲艦を二隻仕留めている。

また、第十一連隊もその猛烈な攻撃力から、『あの字（『土』の事）が書かれた戦車を見たら逃げる！』と言われた位だ。

まあ、現在のところ、攻略作戦に別段支障は無いと言えるだろう。

次号へ

## イルクーツク攻略作戦開始（後書き）

予告

航空支援もあり、イルクーツクを包囲する日本軍。

また、ロシア共和国軍も遂に動く！

1人でも多くの民を祖国復興と新しい未来の為に……

ご意見ご感想をお待ちしております。



## イルクーツク陥落（前書き）

今回は短め。

次から再びヨーロッパです。

## イルクーツク陥落

2月20日……日本軍は遂にイルクーツクの手前まで到達した。しかし、ソ連兵もここが突破されたら終わりだと解っているから、激しく抵抗する。

僅かな野砲を配置して日本軍に向け砲撃する。

しかし、そこに向かって日本軍航空隊が出て来て爆弾をばら蒔く。バイカル湖の河川砲艦も動員したが、九九式軽爆が急降下爆撃で、あるいはロケット弾や航空機による銃撃で相次いで撃沈した。

これにより、バイカル湖から河川砲艦の姿は消えた。無事だった河川砲艦はイルクーツクなどに隠れ、日本軍の航空攻撃をやり過ぎす様になった。

この為、後方の憂いならぬ、湖上の邪魔者を排除した日本軍は防衛線の攻撃に専念出来る様になった。

これが2月25日の事だった。

2月28日……この日の深夜、日本軍による大規模夜襲が行われた。

島田豊作大佐率いる第一八戦車連隊が合流していた為、第十一、第一八、第二六と三個戦車連隊に栗林中将の歩兵師団、山崎保代大佐の歩兵連隊、中川州男大佐の歩兵連隊など精鋭部隊がこの夜襲に参加していた。この夜襲に、連日の支援空爆や砲撃で士気・休息共に低下していた中での夜襲に最終防衛線は一晩で陥落、日本軍はイルクーツクを包囲する事に成功した。

ちなみに、包囲線構成完了は夜襲成功から4日後、つまり、3月5日の事だった。

そして………現在………包囲する日本軍は攻めるでもなく、ただ単に見張っていると言う表現が適切だった。まあ、包囲しているだけでもイルクーツクからソ連兵や一般市民までが包囲している日本軍に投降して来る。

しかし、余り包囲を続けたく無い日本軍はウランウデのロシア共和国軍に宣伝工作を依頼。

少しずつ続けていたマイクによる宣伝攻撃や航空機によるピラ時き攻撃を本格的・大規模に行い始めた。

これを1週間行った後、今度はトロツキー首相による宣伝放送まで始まった。

これを更に2日行くと、ソ連軍側からトロツキー首相との会談を要求、この会談による説得により、遂にイルクーツクは日本軍の手に落ちた。

これが、3月15日の事だった。

次号へ

## イルクーツク陥落（後書き）

予告

舞台は再びヨーロッパへ！連合軍はセバストポリ要塞攻略作戦を開始！

集めに集めた重火砲を要塞に叩き込む！

明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新致します。お楽しみに。

ご意見ご感想をお待ちしております。

リリヤ・リトヴァク（前書き）

新米士官

「更新遅延、すみません!!! あと、前号後書き予告の内容より大幅変更しています。ごめんなさい!」

福本

「大丈夫だって……で、明日から大学だろう?」

新米士官

「イエス!!! ああ、久しぶりの喋り友達との会話! 何を話そうかな?」

マリーダ

「それによる、更新遅延は……」

新米士官

「あえて断言します。ありません! だから大丈夫です!」

福本

「では、どつぞ」

## リリヤ・リトヴァク

5月20日 クリミア半島南部……ケルチ

日本軍の司令部が置かれているケルチ。

郊外に簡単ながらも飛行場が造られ、警戒も厳しい。この為か、日本軍により治安も安定し、手ぶらの日本兵が歩いてても安心である。

実際、非番の日本兵が町中を歩く姿がちらほら見られる。

そんなケルチの町にある病院の一室に彼女はいた。

リリヤ・リトヴァク。

それが彼女の名前である。この名を聞いてお気付きの読者もいるだろう。

かの有名な『スターリンググラー드의白百合』のリリヤ・リトヴァクその人である。

なぜ彼女がここに居るかと言うと、彼女こそが敵傍によって救助された機体のパイロットであった。

敵傍では同様に救助されたアメリカ軍パイロットとは分けていた。

理由は、アメリカ軍パイロットが腹いせの報復を行う可能性があり、これを避ける為であった。

その後、ケルチに到着すると彼女は救助されたアメリカ軍パイロットが降りてからケルチの病院に収容されたのである。

その後、徐々に回復し、今では（見張り付きだが）外にでも出られる位だった。

そして、そんな彼女の様子を見に来るのが……

マリーダ

「おはよ〜、元気？」

……あろう事か、第七艦隊参謀長御自身でありました。  
もちろん、リリヤ・リトヴァクその事を知る筈がない。  
いや、彼女から見れば女性が普通に男性と肩を並べて軍務に就いて  
いる方が珍しかっただろう。  
実際、いくら女性を早々と軍に入隊させたソ連軍も最初から女性用  
の服が有るわけ無く、男性用を着ていた。  
同様の問題は本格的な女性採用（主に第七艦隊で）に踏み切った日本  
海軍でも発生したが……神戸士官学校の経験が活かされた事は言う  
までもない。

マリーダ

「あら、野花の水替えてもらった？ ちょっと濁ってるわね」

リリヤは首を振った。

花瓶に入った野花は着水した彼女の機体から畝傍の乗組員がリリヤ  
と一緒に『救助』した物で、畝傍の病室からこの病院までちゃんと  
受け渡された物である。

マリーダ

「じゃあ、ちょっと替えて来るね」

そう言うと、マリーダは花瓶を持って病室から出て行った。

同じ頃………間借り司令部

福本

「リリヤ・リトヴァク……ソ連空軍女性パイロット。歳は20代前半。  
16歳の時、親に内緒で飛行訓練を受ける。現在は魔女航空隊に所

属…か…」

神谷から手渡された資料を見る福本。

神谷

「けど…よく長官は宮本中尉を攻撃した人間が彼女とわかりましたね」

福本

「いや、解らなかつたよ。しかし、宮本、杉田、クリス、ワイズマン…この4人の情報を組み合わせ、克つ、畝傍の報告書を読めば大体はね」

神谷

「私なんか、いきなり『ソ連空軍の女性エースを探せ』と長官が言いましたから、マリーダ参謀長から鞍替えするのかわかり…」

福本

「神谷さん…そんな訳ないでしょう…周りから『結婚は何時!?!』なんて訊かれてるんですから!」

神谷

「あはは…それで、この事は参謀長に…」

福本

「俺から言つとく。まあ…マリーダも普通のパイロットとは思ってないからね。案外『ふ〜ん』で終わると思う」

神谷

「(長官と参謀長、そう言った事は直ぐに感知出来るから怖いよね



「それで、この情報は……」

福本

「ソ連側にリークしろ。大々的にな」

神谷

「え！ 流しちゃうんですか！？ 生きてる事を！？」

福本

「ああ、構わない。イザと成ったら、彼女の生の声をラジオで流しても、宣伝ビラを作ってソ連側にバラ蒔いてもいいぞ」

神谷

「そこまでしなくても……それに……報せたら……」

福本

「いや、我々……最低限、私には報せる責任がある」

そう言っつて椅子から離れると、まるで何かを隠すかの様に窓の方を見る。

福本

「彼女の事を心配する仲間が……魔女航空隊にはいるからな」

この時、神谷は察した。

以前、マリィダから聞いた事のある、福本の癖……

神谷

「（悲しい顔する時は誰にも見られ無い様にする……解りやすい）では、ご指示の方、実行します」

福本  
「ああ、頼む」

次号へ

## リリヤ・リトヴァク（後書き）

予告

ソ連空軍の女性エース、リリヤ・リトヴァク生存の情報をリークした日本海軍……大丈夫だろうか？

ご意見ご感想をお待ちしております。

失踪（前書き）

短いです。

## 失踪

5月30日

リリヤ・リトヴァク生存をリークする事に福本が同意して10日、ソ連側にリークしてから5日……特にソ連政府……と言うよりスターリン……からの反応は何もなかった。

しかし、前線では多少の変化はあった。特に日本軍の前線やケルチの上空にソ連空軍機がちらほら見える様になってきた。

しかも、攻撃する事も無く、ただ旋回して飛んでいるだけだから、別段害は無い。

それでも、対空砲火や戦闘機で迎撃し、お帰りになってもらっている。

その報告が来る度に、複雑な表情をしながら聞いていた。

ケルチ 間借り司令部

福本

「今日のこの時点で13機……どうしたもんかな〜」

困った時の福本の秘技……では無いが、逆立ちしながら考える。

ソ連空軍の女性エースリリヤ・リトヴァク生存をリークしたのはいいが、それ以上……例えば彼女を謀略に使つか……はする気は無い。

一度、アメリカの謀略担当者が彼女を謀略放送に使いたいリークした翌日に言っただが拒否した。

彼女が日本軍に救助されたのは偶々、しかも、エースと知ったのはついこの間。それに…謀略に使う為に生存をリークした訳では無い。アングルサクソンは確かに実質的だが、残念ながら、日本人とて譲れぬ物がある。

福本

「チキシヨ〜…どうするかね〜」

…さすがにもうそろそろ苦しくなったか、顔が赤く…

ベシヤ

……力尽きた。

福本

「余計だぞ…作者」

すまんなあ。

しかし…謀略放送を行おうとしていると言っ事は…

福本

「もうすぐで終わらす気だな」

問題は終わらせ方だけだな。

福本

「まったくだ」

大体、史実の日本の様にGHQを置くぐらいなら、なぜロシア共和国政府を連合国が承認したか。

それは、トロツキーと言うスターリンと相反する人間の手によって早期にロシア国内の混乱を収める為の手段。

史実の日本の場合、昭和天皇が終戦日にラジオで肉声を流したからこそ、混乱は無かった。

しかし……現在のロシアに日本の天皇の様な存在は無い。

これを……多少無理矢理にでも収めなければ、それこそロシアは復興さえ出来ない。」

福本

「話がズレてるぞ」

その時……

マリィダ

「た、大変よ！　ダイスケ！」

福本

「どうした、マリィダ？　ソ連軍でも来た？」

マリィダ

「違う！　病室から彼女……リリヤ・リトヴァクが居なくなったの！」

福本

「なに！　病院内は！？」

マリィダ

「居ない！」

福本

「わかった！　しかし……いったいどこだ？」

次号へ



## 失踪（後書き）

予告

リリヤ・リトヴァクはどこへ？  
そして、彼女に迫る危機！？

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 救助、そして危機

ケルチの病院

石田

「看護婦の話だと、参謀長が来られる10分前には居たそうですが……」

福本

「じゃあ、入れ違いか……だが、どこに？」

リリヤ・リトヴァク中尉行方不明とマリィダからの連絡に、病院に駆け付けた福本と石田（石田中隊はいつの間にか福本・マリィダの護衛部隊になっていた）。

石田

「まあ、服については支給した我が軍の制服ですから……見付けるのはどうにも……」

まあ、森に木を隠された……と言う事か？

いや、そんな事よりも……

福本

「ここを抜け出したとしてどうするつもりだ？　ここから近い前線はセバストポリ要塞だが……100キロも先……後は……アゾフ海を渡るか……」

しかし、いくら狭いとは言え、海を渡るのだから……

福本

「ん？」

部屋にあるゴミ箱が目についた。

半分ダメ元でゴミ箱を覗いて見ると……

福本

「……石田、マリィダ。どうやら魔女の皆さんは仲間思いだよ」

マリィダ・石田

「「え??」」

そう言うと、ゴミ箱にあったくしゃくしゃに丸められた紙を2人に渡した。

マリィダ

「あ！ まさか……」

福本

「近くに居るのは畝傍だな……行くぞ！」

渡された紙……それは脱出位置を記した紙……。

その頃……ケルチ郊外の直ぐ近く

リリヤ・リトヴァク中尉は日本軍の軍服を着て、紙に記された場所に向かっていった。そして……記された場所には久し振りに見た親友

の姿……

リリヤ

「カティア！」

「リリヤ！ 早く乗って！」

乗って来たラボーチキンLa-5のコックピットから叫ぶこの女性……リリヤ・リトヴァク中尉の親友エカテリーナ・ブダノワ少尉である。

ブダノワは直ぐにエンジンを掛け、リリヤを乗せると直ぐ様飛び立った。

畝傍艦橋

九鬼

「申し訳ありません！」

福本

「いや……自分の責任だ。気にする必要は無い」

九鬼艦長によると、早朝、レーダーで航空機をキャッチしたが、直ぐに反応が消えた為、報告しなかったそうだ。

しかし、そんな事を言ってしまうば、リークした後に警戒を厳にしなかった自分が悪い。

いや……影響も考えずに……と言い直していいかもしれない。

リーダー員

「！リーダーに反応！ 単機…飛び立ち北上中！」

福本

「行ってしまったか…」

ふっ、実はこうなつて喜んでいる自分がいるとは……指揮官失格だな…と福本が思った時……

通信員

「大変です！ 早期警戒の彩雲より連絡！」

その連絡内容を聞いた瞬間……福本は素早く対応した。

福本

「戦闘機隊を発進させる！ 急げ！」

親友のリーリヤを回収したカティアは一心に北上した。

日本軍の素早さはセバストポリ航空戦で充分に経験済みだからだ。

しかし…敵は後ろからでは無く、前から来た。

最初はリーリヤは味方だと思っていた。

しかし、カティアは気付いていた。

何故なら、今回の事は誰にも内緒、単独で実行した事だからだ。

そして……無線が入った瞬間、確信に変わった。

『やあ、エカテリーナ・ブダノワ少尉。何をしている？』

……この声は魔女航空隊の誰もから嫌われている別部隊の政府上層部上役の息子の声。

『なんだ、答えられないのか、ブダノワ少尉？ ん？』

こいつの場合、リーリヤが日本軍に救助された事を知って盛んに裏切り者だ！…と喚いていた。  
いま、彼女の事を話すのは……。

次の瞬間、カティアは急降下で逃げ始めた。

『やっぱりだ！ 全機逃がすな！ 裏切り者を始末しろ！』

次号へ

救助、そして危機（後書き）

予告

危機に陥りながらも必死に逃げる2人！

そして、彼女達の運命は……

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 運命は如何に？

バカ息子が率いるのは7機 + 自分の乗機。

7機はいつもいる取り巻き共。バカ息子と同じ親が政府上役で、将来を約束されたエリート達だ。

余談だが、こう言った人間が督戦隊に入れられ、後ろから後退する味方を撃つ事になる。

しかし、最近は督戦隊が先に狙われ、戦死する確率が高くなっている。

だが、ソ連兵達にとっては後ろから撃ってくる生意気なエリート小僧が居なくなる事に関しては連合軍に感謝しているという皮肉な話である。

さて、余談が長くなってしまったが、バカ息子は取り巻きに追わせた。

つまり、最後の美味しいところを食べる為に、猟犬役を僚機に負わせたのだ。

しかし、そんな事は実戦経験豊富なエカテリーナ・ブダノワ少尉にとってお見通しだった。

何故なら、彼らは実戦経験に乏しい。

確かに彼らはパイロットだが、出撃しても何もしていない。

そう、彼らも地上の督戦隊と同じ、空で戦うパイロットを見張っているに過ぎないのだ。

そのくせ、帰還したら一機撃墜等と報告していた。

もちろん、それは『幻の戦果』だ。

だからこそ、彼らは実戦経験は無い。

その為、彼らは結果的に銃弾をばら蒔いているだけだ。



発射のタイミングも、実戦経験豊富な人間なら簡単にわかってしまう。

しかし、相手は数を頼りに向かってくるから厄介だった。それを間一髪でヒラリと避ける。

機体は同じだが、腕が違うのだ。

それに、機体なら彼女達の方が精通している。

だから、カティアは回避出来た。

しかし、ずる賢さなら向こうが上だった。

リリヤ

「！カティア！」

エカテリーナ

「！！！」

上からの一撃に気付いたリリヤの声に直ぐ様回避する。

『ち、当たれよ！！』

あのバカ息子の声だ。

大体、無線の周波数を変えて無い時点で無能の証明である。

『こんな事ならサロマーティンの野郎みたいに、機体のどっかを弄つとくんだったぜ！』

この本人にとっては何でも無い一言は、聞いている2人にとってもない衝撃だった。

知っている読者もいるだろうが、リリヤ・リトヴァクは史実でもアレクセイ・サロマーティン大尉と付き合っていた。

ただ、43年に恋人のサロマーティン大尉は事故死、リリヤ、親友のカティアも戦死するのだが、歴史自体が大きく変わっている為、2人は死んでいない。

しかし……アレクセイ・サロマーティン大尉は1944年10月頃、空戦訓練中に事故死した歴史は変わらなかった。

だが…この後、隊内では不気味な噂が囁かれていた。曰く、前々から女性パイロットに対する差別発言が絶えなかったバカ息子にサロマーティン大尉が注意したのを逆恨みし、エンジンを弄って事故死に見せ掛けて殺したのでは無いか……と。

まあ、今も昔も精密機械の塊ではある飛行機は、ネジ1つ緩めておくだけで事故に繋がるから、それほど難しい事では無い。

しかし、戦況の推移が早かった為に、たちまち、消えてしまったのだが……

その噂が本当だと知った瞬間、リリヤもカティアも呆然としてしまった。

しかし、この数秒間の呆然がミスを犯した。

『よし、取った！ 墜ちろ！！』

空戦の鉄則の中に、『三秒以上の水平飛行は厳禁』とある。

カティアはその禁忌を犯してしまったのだ！

そして……バカ息子の乗る機から機銃弾が……

……発射されなかった。いや、逆に……

ドガガガガガガガ！

ゴワーン！！

上空から急降下して来た戦闘機の20mm機銃が発射した銃弾がコックピットの防風ガラスを叩き割り、バカ息子の頭に直撃。ガソリンに引火したか、爆散した。

敵は素人だった。

撃つ時は普通警戒する……しかし、敵は敵機撃墜に目がいて疎かになっていた。

あの様子では戦死確定だ……まあ、敬礼する気にも成らないが……

紫音

「世の中は解らないな……杉田」

杉田

「ああ……紫音」

2人は定時警戒に出ようとした矢先に彩雲から連絡を受けた福本の指示で同じ様に出ようとしていた宮本機、クリス機、ワイズマン機と共に出撃した。

しかも、合流した彩雲は無線傍受機能を持っており、その会話は彩雲のレーダーに映った時から傍受していた。

この無線傍受とレーダー管制により見事に敵の真上に周り込んだ。

その途中、誰もがあの『一言』を聞いていたのである。

そして、杉田が引き金を引いた瞬間、紫音の日本刀による一撃も放たれた。

その後の展開は一方的だった。

あのバカ息子が被弾・爆散してから数分も経たない内に彼らは8機全部を撃墜してしまった。

確かに今はチャンスだった。

しかし……離脱しようにも既に燃料が尽き掛けていた。

これでは海を渡る事も出来ない。

その事を考えている内に……日本軍機が周りを囲んでいた。前に出ていた一機がバンクを振る。

付いて来いの合図だ。

この時、既にカティアは諦めていた。

いま、このまま戻っても……祖国は何をするか解らない。

ただ……日本軍が何もしないとは思えなかったが……やもおえず、日本機に従った。

次号へ

## 運命は如何に？（後書き）

予告

いよいよ、連合軍はセバストポリ要塞攻略作戦を開始！

陸海空より、鉄の嵐が吹き荒れる！

また、日本軍はスターリングラード攻略作戦を開始しようとしていた……

ご意見感想をお待ちしております。

セバストポリ要塞攻略開始・スターリングレード攻略作戦始動（前書き）

新米士官

「……これは何かの報復か？」

福本

「ああ、中国が撮影禁止の場所を撮影した日本人4人を取っ捕まえ  
たって記事？」

新米士官

「……何か…嘘っぽいと言うか…タイミング良すぎと言うか…ま  
あ、何でもいいや…策略の臭いプンプンするんですけど…」

マリーダ

「それはそうでしょう。自称4000年の中国は策略・謀略・暗殺  
…何でも有りなんだし」

新米士官

「……中国大使呼んだらいい。それで国際問題にすればいい。イザ  
となったら自衛隊総動員したらいい」

福本・マリーダ

「」（結局、強硬姿勢ね）」「」

## セバストポリ要塞攻略開始・スターリングラード攻略作戦始動

6月25日 午前7時

セバストポリ要塞周辺

緊迫感ある戦場に日が登った。

陸上では主力のドイツ軍が集めに集めた重火砲がセバストポリ要塞に照準を合わせている。

特に目立つのは、ヒトラーの命令で造られたドイツ軍80cm列車砲、名称『ドロー』。

組み立てに約1ヶ月を掛けた怪物である。

また、小振りながらも日本軍によって鹵獲されたソ連軍18cm列車砲も参加している。

飛行場にはドイツ・イギリス・イタリア空軍、アメリカ軍航空隊・日本海軍欧遣航空隊が発進準備を完了させ、待機している。

モスキート、ランカスター、B17・24・25・29爆撃機……など、史実でも有名な機体ばかりだ。

しかし……従軍記者の注目を何時も浴びるのは日本が誇る超重爆撃機富嶽である。

何せ、日本以外の世界が未だに持っていない六発爆撃機はB29が見劣りする位だ。

それに投入時期がほぼ同じなのに日本機が性能が上と言うから、余計に注目を浴びた。

次に海上に目を移すと世界の海軍から集めに集めた戦艦群がセバストポリ要塞に主砲を向けていた。

従軍記者達からは『戦艦の見せ物市だ』と言われる程だ。

特に目立つはまたも日本海軍第七艦隊の播磨型だ。

高速戦艦でありながら46cm10門の主砲、艦が真っ赤に染まる程の濃密な対空砲火……やはり、注目の的要素たっぷりの艦だ。

### 播磨艦橋

### 神谷

「地上のドイツ軍より通達……攻撃開始です！」

### 遠地

「全艦全砲撃ち方始め！ ヨーロッパ最後の艦砲射撃だ！ 日本海軍砲術の誉を世界に見せる！」

福本から指揮を預かった遠地がここぞとばかりに喝を入れる。

この喝から始まった艦砲射撃や支援砲撃や大空爆は後に『セバストポリ要塞攻略作戦』と言う映画になり、『真珠湾攻撃』『ギルバート諸島沖海戦』『ゴジラ』シリーズなどを作り上げた円谷英二監督が撮影し、世界の度肝を抜いたのは別の話だ。

まあ、映画になる程の攻撃を開始した事により、従軍記者達は僅かな日数で終わると考えていた。

しかし…作戦の指揮を執るマンシュタイン元帥は今までの経験からそう簡単にセバストポリ要塞が墮ちるとは考えていなかった。

この為、マンシュタイン元帥はスケジュールを決めていた。

まず、5日間徹底集中砲撃をセバストポリ要塞と防衛線に浴びせ、1ヶ月を掛けてセバストポリ要塞を攻略するつもりだった。

もちろん、支援砲撃は攻略中は続けるつもりだ。

とにもかくにも、今世紀最大のセバストポリ要塞攻略作戦は始まった。



その頃……福本達は……

ロストフ

福本

「次の作戦だが……我が軍はスターリンググラードを攻略する！」

全員

「……………」

福本

「あれ??」

マリイダ

「ダイスケ……地図が……」

福本

「……あー……！ 地図が作者の地図帳の地図（拡張コピー）と入れ換わったとるー……！」

……………しばらくお待ち下さい……………

福本

「あゝ、元の地図が無いため、作者の地図帳の地図を使う。読者諸君もスターリンググラードの場所が知りたければ、地図帳を引っ張り出して言う通りに探せば大体の位置が解るぞ。では、フェルデナン

ト、位置説明頼む」

フェルデナント

「では、まずは地図の黒海周辺から我々がいるロストフを見付けて下さい……………見付かりましたね。北東にチムリヤンスク湖があります。無い方はロストフから見て北にあるドン川、あるいは南にあるポルガ川を探して下さい。ありましたら近くにボルゴグロードがあると思いますが、それが元スターリンググロードだった都市です」

福本

「簡単なから説明ありがとう、フェルデナント。さて、我が軍が何故スターリンググロードを攻略するか……………ヴィル、答えてくれ」

ヴィル

「はい。それは名前が示す通り、スターリンが名付けた名前であり、一番スターリンの権威を示しているからです」

福本

「そうだ。ここを陥落させれば、ソ連軍は特に精神的ダメージを負う事になる。また、スターリンの権威は完全に地に堕ちる…これが狙いだ」

そう言つて、室内の海軍関係者を見る。

ちなみに、陸軍とは宮崎大将とは話については話している。

ヴィル

「また、スターリンググロードの付近にある飛行場を拡張し、富嶽を配備すればモスクワ後方を脅かす事が可能です」

……………正に目的たつぷりのスターリンググロード攻略作戦である。

ヴィル

「元帥」

福本

「お、ヴィル。さっきはご苦労さん」

ヴィル

「いえいえ……先程は言いませんでしたが、魔女航空隊の居場所が解りました」

福本

「そうか……で、どこだ？」

ヴィル

「はい……スターリンググレード防空任務に回されたそうです」

福本

「やはりか……正直、あまり彼女達と戦いたくは無いが……」

ヴィル

「その事ですが、本官に任せて下さいますか？」

福本

「……別に構わないが……策はあるのか？」

ヴィル

「はい。出来る限り無傷で……計画書は後で提出します」

福本

「わかった。また航空参謀が何を出すか楽しみだよ」

次号へ

セバストポリ要塞攻略開始・スターリンググライド攻略作戦始動（後書き）

予告

ヴィルの策が入ったスターリンググライド攻略作戦開始！

先ずは制空権を確保せよ！

明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘機』を更新いたします。お楽しみに。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## スターリングレード攻略開始前夜（前書き）

新米土官

「日本政府に進言します。今すぐ、尖閣諸島問題を国際司法裁判所に訴え、克つ、全護衛群に臨戦態勢を命じて下さい！」

福本

「まあ、案外強硬態度の中国も少しはマシになるかもな」

新米土官

「それに腹立たしいのは、釈放された船長が英雄の様に扱われている事だ！ それに、何で中国関係者が船長と簡単に会えてるんだ！ しかも、会った後に船長の供述が一変してるし！」

福本

「あちゃ〜…それはダメだろう…」

新米土官

「今すぐ、石原東京都知事と田母神閣下をお呼びしろ！ 意見を聞いてみたい！」

福本

「では、本編をどうぞ」

## スターリンググライド攻略開始前夜

6月29日 深夜

日本軍は動き出した。

ヴィルはその日の内に計画書を提出し、2日後には部隊及び装備の手配を終わらせていた。

これを知った福本は「俺の真似か？」と苦笑したそうだが、そのままGOサインを出した。

夜間に敵飛行場を制圧し、制空権を奪取、スターリンググライド攻略を優位に持ち込む作戦……名称『夜烏』。

まあ、実際は身内の管理が出来ず、それによって引き起こされた戦力低下をスターリングが逆ギレして、口封じで左遷された魔女航空隊こと第296戦闘機連隊他女性航空隊がスターリンググライド守備に就いている事を知った福本による先手を打った作戦だった。

そして、ヴィルの作戦は実行された。

今回、ヴィルはギリシャ奪還作戦で投入された特別第一空挺連隊を使う事にした。

特別第一空挺連隊はギリシャ戦後、イギリスに向かい、現地でアメリカ軍・イギリス軍空挺部隊と共に装備改変による訓練を連日行っていた。

これを以前から知っていたヴィルは、魔女航空隊の搜索指令が福本から出た時、直ぐに特別第一空挺連隊と『蒼空』輸送機隊に連絡し、下準備は既に終わっていたのである。

その後、魔女航空隊がスターリンググライドに居る事を突き止めた時、

ヴィルは直ぐに部隊と装備の輸送を準備させ、作戦許可が降りた直後、輸送機は黒海へと飛び立ったのである。さて、前置きが長くなってしまったが、これが作戦開始前の動きだった。

そして………29日深夜。

日本軍特別第一空挺連隊は行動を開始した。

29日2100時、富嶽・二式大艇・蒼空・靖国は『AS58ホルサ2グライダー』を曳航しながら離陸した。

今回の『夜烏』作戦は敵飛行場にある航空機を破壊する為、爆薬・重火器・輸送用ユニバーサルキャリアーを搭載していた。

2130時、曳航機はグライダーを切り離し、特別第一空挺連隊は『着陸』、装備やユニバーサルキャリアーを降ろしていた。

その頃………福本達は………

マリーダ

「スー…スー…スー…」

一式半装軌装甲車の中で心地良さそうに毛布にくるまり眠っている。

福本

「…まあ、仕方ないか」

寝顔を見て、安心した様に荷台から降りる。



ヴィル

「参謀長はお休みですか？」

福本

「ああ…よく寝てるよ」

ヴィル

「あはは、良いですね。アリソンなんか、寝相悪くって…何度もえらい目にあいましたけど」

福本

「おいおい…さて、もうそろそろ、特一空連（特別第一空挺連隊）が着陸した頃だな」

ヴィル

「はい。後は彼らに任せるしかありません」

福本

「……こんな事を言うのはなんだが…敵にここまで同情するのは指揮官として失格かもな」

夜のせいで感情的に成ったのかぼつりと呟いた。

ヴィル

「……我がイギリスはドイツの脅威の為、天文学的數字の賠償金をドイツに要求しました。ドイツの人員的・工業的ダメージを無視してです」

福本

「ああ…それが巡り巡ってナチスやヒトラーを登場させる事になっ

たな」

ヴィル

「はい……今までなら『如何にして多くの敵を殺すか?』を考えるのが指揮官の役目でしたが……もしかしたら、『如何にして多くの犠牲を抑え、戦争を終わらすか?』が指揮官に求められる様になるかもしれません」

福本

「……だと、良いがな」

ヴィル

「だから、元帥の出現は非常に大事な一石を投じたのかも知れませんが……また、だからこそ、自国民を簡単に粛清するスターリンを未来に残す訳にはいきません!」

福本

「……だな。さて、仮眠でもとるとしよう。明日1日はもしかしたら、寝れないかもしれないからな」

次号へ

## スターリングレード攻略開始前夜（後書き）

予告

遂にスターリングレード攻略を開始！

史実で手こずったスターリングレードをどう攻略するのか？

ご意見ご感想をお待ちしております。

## スターリングレード攻略開始

日付が変わろうとする頃、特一空連は飛行場に潜入した。

彼らは駐機する機体に時限爆弾を仕掛けつつ、兵舎に麻酔ガス弾を放り込み、ドアを塞いでいく。

こうして、特一空連は密かに飛行場を確保していった。

そして……翌早朝

フェルデナント

「全車、スターリングレードを包囲せよ！ 発進！」

ブロロン！

まだ夜も明けきらぬ0510時、日本軍及び第六大陸派遣軍は進撃を開始した。

数日前から密かにスターリングレード付近に接近していた。

そして、6月30日早朝に日本軍・第六大陸派遣軍は本格的に攻勢を開始した。

もちろん、空母機によりエアカバー付きでだ。

福本

「さて、夜が明けないと解らないが……成功している事を祈るよ」

マリィダ

「大丈夫大丈夫！ ダイスケの強運を持ってすれば、鬼神も逃げちゃうって！」

石田

「いや…それは流石に無理かと…」

マリーダ

「何ですって!?!」

石田

「うわゝ、なんでこうなるゝ!?!」

福本

「やれやれ…」

同乗しているヴィルは苦笑し、乗っている一個分隊は笑いを堪えるつつ、クスクス笑っている。

夜が明けた……しかし、ソ連機は飛んで来なかった。特一空連により無抵抗の内に制圧された飛行場は直ぐに日本軍本隊が到着して女性兵の保護に忙しい。

この女性兵の保護には日本から海軍陸戦隊で採用された女性隊が担当している。今回はそこら辺で福本は苦労したが……軍規厳正の為に、日本の将来の為に、ソ連側の心理的影響を少なくする為なら苦労はする。それに……結局、指揮官は苦労する者である。

『日本軍、スターリングラードに向け進撃を開始!』

この連絡にモスクワのスターリンはスターリングラード死守を現地部隊に命じた。

やはり、自分の名前がついている（つけた？）都市だけに、大慌てでモスクワ待機の部隊の一部をスターリングラード増援に回すように命じた。

しかし、既に八方の内五方で連合軍と戦っているのが現状である。そんな現状で兵隊回せとは、流石に無茶苦茶だった。しかし、スターリングラードが獲られると、スターリンの権威は一気に失墜し、内部崩壊を発生させる。

だからこそ、スターリンは増援到着まで、スターリングラード死守を命じたのだ。

しかし、これは福本が考えた罠であった。

福本はスターリンがスターリングラードを死守するだろうと読んでいた。

それはつまり、結果的に市街戦になる可能性があった。

だが、福本は市街戦をやるつもりなどなかった。

それよりも……死守せよとの命令で現地指揮官が周辺の部隊をスターリングラードに集中すると睨んでいた。

この為、彼はわざとソ連軍をスターリングラードへと逃がしたのである。

なぜか？…簡単な事だ。

大規模な都市には大勢の人間がすんでいる。

ちなみに、この作戦を聞いた宮崎大將は……

「なるほど、太閤豊臣秀吉公のやり方ですな。しかも、小田原攻めの戦法……よく考えましたな」

……と。

ヴィル

「まさか、安土・桃山時代の戦いを参考にするとは……」

福本

「まあな。時には先人の知恵を借りなければならない。そう言った意味では歴史はちゃんと知っておいた方がいいぞ」

マリーダ

「ダイスケなんか、士官学校時代は休み時間になると本ばかり読んでたからね」

福本

「兵法書は読んでいた方がいいぞ。色々役に立つからな」

次号へ

## スターリンググライド攻略開始（後書き）

予告

スターリンググライド攻略作戦開始………の筈が、日本軍・第六大陸派遣軍も包囲するのみ！？

代わり大活躍はイタリア軍魚雷艇隊！

ご意見ご感想をお待ちしております。





「ええ…まさか、我々が城攻めの方法を生かして陥落させようとは思っていないでしょう」

そう言いながら、双眼鏡でスターリンググランドを眺めながら言葉を交わす。

フェルデナント

「史実のドイツ軍は市街戦をやってもスターリンググランドを攻略しようとしましたが…まさか、その裏をかくとは…」

福本

「だが、市街戦となると地の利は向こうにある。その利を消す方法はこちらの利に相手を誘う事だ」

マリーダ

「その利の一つが補給ね？」

福本

「ああ、スターリンググランドは大都市と言っていい。そこに短期間で人を集めたら…後は簡単だ」

宮崎大将

「太閤豊臣秀吉公の城攻めは水攻め、包囲攻めなどで敵を心理的に参らせる事が得意でしたからな」

石田

「『鳴かぬなら 鳴かしてみせよう ホトトギス』と、詠われたぐらい創意工夫が得意でしたからね」

福本

「先人の知恵は大切にされた方がいいな。『温故知新』と言う諺があるくらいだ」

マリーダ

「これに大阪城攻めの連日連夜の砲撃と、定期的ヒット・エンド・ラン夜襲を繰り返せば、確かに敵も参るわね」

そう……日本軍は無理に攻めず、こうして敵を包囲し、向こうが精神的・肉体的に参るのを待っているのだ。

スターリンググラードの防衛指揮官は皮肉にも史実でスターリンググラード防衛を果たしたヴァシリ・チュイコフ大将が指揮を執っていた。

もちろん、彼はスターリンの命令に従い死守するつもりだった。

その為、市街地に兵を置き、来るであろう日本軍・第六大陸派遣軍を市街戦で粘り、援軍を待つつもりだった。

が……ここで全ての計算が狂ってしまった。

なんと、日本軍・第六大陸派遣軍は包囲するばかりで一向に市街地へと兵を進めなかった。

その代わりに包囲してから連日連夜の砲撃……半分が空砲だが……され、夜間には日本軍の夜襲隊による攻撃で振り回され続けていた。特に夜襲隊の攻撃は厄介だった。

チュイコフ大将も上官だったジューコフ元帥から日本軍の事を聞いていたが……見ると聞くとは大違い。そして、攻めて来ないが振り回され続けている内にチュイコフ大将は気付いた。日本軍・第六大陸派遣軍はスターリンググラードを包囲して陥落させるのでは無いか……と。

そして……攻めて来ないのは敵が市街戦に持ち込まれ無い様にする為

だと確信した。

また、ようやく気付いたのだが……防衛の為に集計させた部隊により、スターリンググラードの食糧事情が怪しくなっていた。

何せ、ついこの間までスターリンググラードの住民と駐留部隊を養うには充分だった筈の食糧が、日毎に段々と怪しくなってきたからだ。まあ、食糧事情は置いとくとして……チュイコフ大將はようやく日本軍の恐ろしさが解った。

とにかく、こちらの常識が通用しない。

特に夜襲は意外だった。

兵士達の肉体的・心理的影響は計り知れない。

夜襲により休めない、何時襲われるか解らない恐怖……静かに近付き静かに去る日本軍の夜襲は兵士達の間では『悪魔が地獄に連れて行く』として『など』と噂していた。

確かに……今の日本軍はソ連軍にとって悪魔だった。そんなところに舞い込んで来たのが……セバストポリ要塞の陥落だった。

次号へ

## スターリンググレード包囲戦（後書き）

予告

え〜……予定よりズレましたが、今度こそイタリアが大活躍！？  
小型艇はイタリア海軍の十八番だから？

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 河川の戦い

さて、陸では日本軍・第六大陸派遣軍VSソ連軍によるスターリングラード包囲戦は、双方にらみ合いの様な状態になっていた。

しかし、戦後チユイコフ大将などの証言によると案外これがキツかった様だ。

何せ、敵が攻めて来るなら多少はマシであっただろうが、連日連夜砲撃に曝され、夜襲を受けるだけの一方的状態下にあつては兵士達の士気も下がる。

そして、最も困つたのが食糧事情だった。

死守命令に従い、周辺の部隊をスターリングラードに集中した為、消費量が多くなり市内の備蓄が少なくなってきた。

この為、スターリングラードに接する河川より包囲網を抜け食糧を補給する手段をとった。

しかし、島国ながらも河川が多く、中国でも河川砲艦や河川輸送を経験した日本軍が気付かない訳が無い。だが……あいにく日本軍も第六大陸派遣軍も河川砲艦もなければ河川で運用できそうな魚雷艇も無い。(大発は有るが、戦闘に不向き)

これが昼間だけなら航空攻撃で沈めるなり、追い返すなりは出来るが……制空権が無いことは敵が一番よく解っているから、夜間にスターリングラードへと接近する可能性が高い。

しかし、こういった事は作戦前から解っていたから、既に日本軍は手を打っていた。

つまり……無ければ手近なところから調達する……とゆう事だ。

7月10日……深夜

この夜も、スターリンググライドからの要請で河川貨物船3隻がエンジン出力を絞ってスターリンググライドへと接近していた。

しかも、今回は同数の武装機動艇（通称BKA）1124型の護衛付きでだ。

何せ、3日前の夜からこの食糧輸送が行われていたが、一度も成功していない。なぜなら、『通り魔』が出没するからだ。

そして……通り魔はやって来た。

ポン！ポン！ポン！

先ず最初に照明弾が夜の闇を照らした……その方向から3隻の高速艇が高速で接近して来た。

ソ連兵

「奴らだ！ イタリア海軍の高速艇だ！！」

ソ連下士官

「撃て！ 奴らを近付けるな！」

BKAはT34系統戦車の砲塔を搭載しているため、火力は大きい。しかし、砲塔はレバーを回して旋回させる為、目標追尾能力は低い。それを知っているのか、イタリア海軍高速艇は高速で突っ込んで来る。

実はこの高速艇は、本来なら魚雷艇として運用されているMAS魚雷艇だった。しかし、河川では魚雷が使え無いので降ろし、変わりに後方設置のブレダM35 20mm機関砲を前に設置し、元の設置場所にはボファース40mm機関砲を搭載した。この改装は日本軍…工作艦三原が行っている。

そして、3隻のMAS魚雷艇はBKAの脇を通過する際にありった

けの武器を使いBKAを攻撃した。

噴進砲、ブレダ、ボファース、なんと手持ちのベレッタマシンガンをイタリアマフィアよろしく撃ちまくる。

魚雷艇が通り過ぎた時、3隻のBKAの内2隻が炎上していた。そして、魚雷艇は後方の河川貨物船の方に向かった。

ソ連下士官

「……助かったか？」

炎上していないBKAの下士官は呟いた。

しかし、気付いていなかった……後ろにいるのは2隻……では、あと1隻は？」

ダダダダダダ！

ソ連下士官

「な、なんだ!？」

ソ連兵

「イタリア兵だ！ イタリア兵が乗り込んで来やがった!」

ソ連下士官

「な、なに!？」

彼らの聞いているイタリア兵は直ぐに降伏する弱兵だとゆう話だ。

しかし……連合軍の間では『イタリア海軍将兵の勇敢さは乗艦の排水量に反比例する』と言われているから、別段弱兵では無い。

まあ、それは置いて、いきなり乗り込んで来たイタリア兵はベレッタ拳銃やベレッタマシンガンを乱射して、見事にBKAを鹵獲した。



そして、食糧輸送を見事に阻止してみせた。

後に事の詳細が書かれた報告書を添えられ、福本の元に届くと福本は苦笑したそうだ。

実は日本軍からは連絡役の中尉1人と夜間視力が良い水兵が魚雷艇数と同数配置されていた。

まさか、鹵獲に至った原因が1人のイタリア兵の『ブン盗っちゃいましょう!』と言う事だとは……………

福本

「……………イタリア政府に要請して、勲章を授与させるべきかな……………今度、イタリア兵がどうすれば勇敢になるか考えるのも一興かな?」

……………とマリィダに語ったそうだ。

そして、同じ頃、福本とは反対に頭を抱えている人物がモスクワにいた。

スターリンである。

何せ、スターリングラードからの報告だと、まるで敵はこちらの意図を全て読んでいたかの様に対応している。

また、セバストポリ要塞がこれ程早く陥落するとは思っていなかった。

何せ、あの堅固な要塞に何とかかき集めた3万の兵力が籠っていたからだ。

しかし……………現状はそんな生易しい物ではなかった。

5日間の集中陸海空攻撃……………海には大量の戦艦、空には超重爆撃機

群、陸には列車砲を含めた大量の重火砲……により要塞の被害は大きく、80cm列車砲『ドーラ』が要塞の砲台1つを一撃で破壊、富嶽による爆撃は要塞の強度を落とし、艦砲射撃は外周防衛線を耕し、地雷源を纏めて吹き飛ばした。

こんな攻撃を5日間：夜もブツ通しで行われたら大抵の兵士は参る。だから、その後10日も保ったのはまだいい方である。ともかくにも、セバストポリ要塞が陥落した為、隣接するセバストポリ軍港も使える様になった。

そして、今やスターリンググランド包囲戦が注目されていた。

しかし：スターリンに死守出来るかは自信がなかった。

何故なら、相手が日本軍だったからだ。

次号へ

## 河川の戦い（後書き）

予告

河川輸送途絶により食糧の供給を減らすスターリンググライド……完  
全に主導権を握った日本軍・第六大陸派遣軍にスターリンの援軍が  
遂に姿を見せる！

ご意見ご感想をお待ちしております。

夜襲＋捕虜確保（前書き）

新米士官

「3人が帰って来たね……1人拘束中だけどな！」

福本

「明らか〜に、外交カードに使いますね…昔なら緊張状態＋緊急動員だよ」

新米士官

「いつになったら、あの暗黒国家の腹黒さが解るんだよ！ 外務省はバカか!？」

福本

「いや、事無かれだろう……では、本編」

## 夜襲＋捕虜確保

6月12日 深夜

この日の夜は久し振りに日本軍・第六大陸派遣軍の砲兵部隊は夜間砲撃を止め、惰眠を貪っていた。しかし、ある一隊は今夜の任務に出ていた。それは……

陸戦兵

「石田大尉。敵はすっかり油断しています」

石田

「いや、解らないぞ。もしかしたら前線の警戒部隊だけかも知れない……まあ、日本軍が簡単に寝させてはやらないがな」

腹這いになって偵察に出ていた陸戦兵と小声で話す第七艦隊陸戦隊第六中隊の夜襲隊。

陸戦下士官

「寝たかったら、さっさと日本軍に降伏しろ……と、敵指揮官に言っただけですわね」

石田

「ははは、そうだな、出会えればな……さて、行くぞ」

匍匐前進で敵警戒線に近付く。

そして、地雷の有無や鉄条網の切断を素早く行い、警戒線内部へと

侵入する。

石田

「さて……夜襲の前に福本元帥からの任務も終わらすか」

そう呟いて、出撃前の事を思い出した。

……回想……

福本

「石田、今夜は君の隊や夜襲に出る日だな？」

石田

「はい、そうですが……なにか？」

出撃直前に福本が石田の所にやって来た。

福本

「うむ、実は今夜の夜襲で出来れば……無理はしなくていいから、出来るだけ1人捕虜にして連れて帰ってきてくれ」

石田

「しかし、元帥。ソ連兵はあまり敵情を探るには……」

福本

「いや、探るのはスターリングラードの内情だ。予想よりも、捕虜を連れて来た方がよく解る」

石田

「ああ、そうゆう事ですか…解りました。出来るだけやってみます」

福本

「そつか…無茶はするなよ」

……………回想終了……………

陸戦下士官

「元帥は何故、捕虜を？」

あ、既に捕虜の件は夜襲隊に通達済み。

石田

「元帥はスターリングラードの内情が知りたいんだ。特に食糧事情をね」

陸戦下士官

「はあ…食糧事情…ですか？」

石田

「何で元帥がスターリングラードを包囲するだけに止めている理由は、後々ロシア人に禍根を残さない為だ。市街戦になって街を破壊し、人を殺すより、包囲して手前で着弾する様に砲撃するだけなら影響は少ないだろう？」

陸戦下士官

「まあ、確かに」

陸戦兵

「大尉、あそこに丁度良い奴が居ますよ」

そう言う陸戦兵の指差す方を見ると、確かに1人のソ連兵が壁に身を預け寝ていた。

しかし、見たところ、年端もいかない……15・6歳の少年兵の様だ。

あんな少年まで出して戦うつもりなのか！……と、憤慨したくなるが……人の事が言えないと言うか……自分達のせいであると思うと、なんとも複雑な思いになる。

しかし、今回は殺すのではなく生かして捕らえるからまだマシと言えはマシである。

石田

「よし、行くぞ」

翌13日

石田

「元帥……おはようございます……もう起きてたんですか？」

福本

「ああ、4時頃に……今、何時？」

石田

「8時です……4時間も起きてたんですか？」



福本

「そう言う事になるな…で、用事は？」

石田

「はい。昨夜の夜襲は成功、時限爆弾と監視所に手榴弾数個を投げ込み引き上げました」

福本

「そうか…で、捕虜の方は？」

石田

「はい。別に尋問の必要も無く…聞いただけで全部話してくれました。食事に出したパンとシチューもお代わりしましたし…」

福本

「で、内部事情は？」

石田

「食事は1日2回、中身も少なくなっているそうです。また、大半の人間は寝不足だと」

福本

「そうか…あと一押しだな」

石田

「一押し…ですか？」

福本

「ああ、その…」

マリーダ

「ダイスケ！ 航空偵察から報告よ！」

福本

「その一押しが来た様だ。行くぞ」

次号へ

## 夜襲＋捕虜確保（後書き）

予告

日本軍・第六大陸派遣軍迎撃部隊VSソ連救援部隊激突！  
スターリンググラードの運命は！？

明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新致します。お楽しみに。

ご意見感想をお待ちしております。

## スターリンググライド陥落

スターリンググライド救援軍接近の報に、日本軍・第六大陸派遣軍は直ぐに待機していた撃退部隊を投入、また、航空隊も出撃した。そして……………

ヒューー！ ヒューー！ ヒューー！

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！

航空隊による爆撃が部隊の先頭を進む戦車隊に向け爆弾を投下する。それを阻止しようとする連軍戦闘機が突っ掛かるが、護衛の烈風、陣風、紫電改がこれを追い返す。

それどころか、護衛の戦闘機が対地攻撃に参加している。

それでもなお、前進を続けるソ連軍。

対し、日本軍は……………

長野連隊長

「カクカク、全車撃て！」

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！

T34/85の砲塔が宙を舞い、車体に穴が空いた戦車から戦車兵が逃げ出す。

日本軍・第六大陸派遣軍戦車は順調にソ連軍戦車を片付けて行く。

だから最近、日本兵達からはこう言われる。

『露助の戦車はブリキだぜ!』……と。

『連隊長殿! 敵の新型! 噂のスターリンの新型です!』

『噂の亀戦車か!? 余程スターリンの野郎は慌ててるな』

長野連隊長

「カクカク、気を付けろ! スターリンの新型は油断すると六式でもヤバイぞ!」

『『『『『了解!』』』』』

まあ、そんなバカはいないだろうが……と、長野連隊長が思った瞬間、航空隊も見付けたらしく一気に多数の機が降下してきた。やはり、『亀』と呼ばれただけあって、あのシルエットは目立つ。

長野連隊長

「よし…敵は…動いてはいるが、腕はどうか? 撃て!」

ゴワーン!

1輻のJS-3がいきなり爆発した。

実はこの部隊に配備されているJS-3はやっと完成したばかりの30輻のみ。

しかも、その大半は先程の航空攻撃で破壊されていた。だから、あと10輛あるかどうか…。

『畜生！ 今度は敵戦車だ！』

『おい！ あれを見る……あの数字は……！？』

『…間違い無い！ 666…西の悪魔だ！』

『うそだろう！ 死神の乗る戦車が、何でスターリンググライドの近くにいたんだよ！？』

『忘れたのか！ あれはヤポンスキーの戦車だぞ！ ヤポンスキーが居るんだから、居て当たり前だ！』

『後退…後退だ！ あんなのがいたんじゃあ、死に行く様なもんだ！』

『うわ！ 奴は俺を狙ってる！ 総員、脱出しろ！』

……と、やっと使えるレベルになった無線機で、JS-3の戦車長達はこんな会話を交わしていた。

正にこの時、戦車の外、つまり歩兵の間でも、『死神』・『悪魔』が居る事に気が付いた歩兵達も恐怖に駆られ後退していた。本来なら、ここで督戦隊のマキシム重機関銃とモンシナガンライフルが後退する歩兵達を撃つどころだが………そんな奴らは既に目ざとい航空攻撃を受けて居なくなっている。そうこうしている内に日本軍・第六大陸派遣軍の一斉反撃が始まり、スターリンググラード救援軍は撤退した。

日本軍司令部<sup>テント</sup>

フェルデナント

「元帥、敵救援軍は撤退した模様！」

福本

「よし、ヴィル、ピラ蒔き開始！」

ヴィル

「了解！」

スターリンググラード市内

チュイコフ大将

「なに！？ 救援軍が！？」

参謀

「はい…司令、これ以上は無理です！ 食糧は保つてしょうが、肉体的・精神的疲れには敵いません！」

チユイコフ大将

「うむむ…しかし…」

士官

「大変です！ 敵編隊が市内に大量のビラを蒔いています！」

チユイコフ大将

「なに…ま、まさか!？」

士官

「はい…内容は救援軍が撤退した事です…」

結局…スターリングレードは昼間に掲げられた白旗により終了した。

そして…この事は福本の読み通り、ソ連内部のスターリン権威が落ちた事は言うまでもない。

次号へ



## スターリンググラード陥落（後書き）

予告

スターリンググラードを陥落させた連合軍。

ここで連合国首脳がヤルタに集まり、戦後協議を行う事に。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 会話前の日本側

6月25日

スターリンググラードを陥落させた日本軍・第六大陸派遣軍は前線を固定させた。そして……と行きたいところだが、ここである……まあ、前々から言われていたが……情報が福本の所に届けられた。それが後に『戦後世界のバランスを決めた会議』と歴史の教科書に書かれる事になるヤルタ会議である。

今回は、そんな会議前に交わされていた日本側の会話である。

ヤルタ近くの飛行場

ヴィル

「来ましたね」

福本

「本当に富嶽で来たよ……」

マリーダ

「よく誰も文句を言わなかったよね」

沖田

「多分、世界最強の男女コンビが護衛に付くからだと思えますけど」

石田

「ええ、あり得ますね」

福本・マリータ

「何か言った??」

沖田・石田

「いいえ、何も」

ヴィル

「あの2人を見ると、なんだかあの話が本当だと思える」

石田

「何がですか?」

ヴィル

「元帥の賞金なのですが…最近100万ルーブルに上がったそうです」

沖田

「あの紙くず金で100万…うん、大変だね、先輩も」

マリータ

「ヴィル、その話、本当?」

ヴィル

「え、ええ…多分…」

マリータ

「もう! 100万ルーブルじゃあ無いでしょう! 500万よ! それも、ルーブルじゃなくて、ウォッカ! スターリンって本当に人を見る目無いわね!」

沖田

(…ウオツカ500万本?)

石田

(いくらルーブルが紙くずでも……ウオツカは無いでしょう)

ヴィル

(いや…その前に……参謀長が敵で無くて本当に良かったです)

沖田

(言えてるな)

石田

(言えてますね)

福本

「お前ら、なに3人でこそこそしてるんだ?」

降りてきた二機の富嶽から次々とアジアからの出席者が降りてくる。中国の蒋介石、満州帝国代表者、ロシア共和国首相トロッキー、第六大陸からは連合王国のウェールズ王・シャルロット女王、ヴィントランド王国のブリーシア女王、サブウム帝国のセシリー女帝……などなど。

そして……やっぱり出て来る日本代表、この3人。

福本

「お久し振りです。宇垣首相」

宇垣首相

「うむ、君達の活躍、日本国内でも知れ渡っているよ」

宇垣一成首相に……

山本軍令部総長

「元氣そうで何よりだな」

山本五十六軍令部総長……それに……

マリィダ

「あれ？ 陛下は……」

明子陛下

「私はここよ〜」

ヴィル・石田

「え……って、うわー!」

福本

「陛下……貴方は怨念か何かですか……しかも、いつの間に沖田の後ろに?」

明子陛下

「仕方ないでしょう、超弩級遠距離恋愛のせいで、欲求不満なの!」

石田

(……危なくありません?)

ヴィル

(参謀長と同じぐらいね…)

沖田

「こ、これはこれは陛下、」機嫌麗しゅう…」

明子陛下

「麗しく無い！ 未来の旦那さんと久しぶりに会えたのに、何で堅苦しい挨拶な訳!？」

福本

「あの〜…ここ、公共面前なんですけど…」

マリーダ

「まあ、取り敢えず、落ち着きましょう、明子さん」

明子陛下

「うう…マリーダ、後で私の愚痴に付き合って〜」

マリーダ

「はいはい」

福本

「沖田…その後で嫁さんの相手しろよ」

沖田

「わかってます」

山本軍令部総長

「いや、君達を見てると楽しくなるね」

福本

「茶目つ気たつぷりで言わないで下さいよ」

……と、会議前の日本側代表の間で交わされていた会話だった。そんな会話を第七艦隊唯一の民間人・従軍記者の尾崎が案内兼護衛兼身元保証人の連絡将校新沢と話していた。

尾崎

「……流石に……あれは写真に出せませんよね？」

新沢

「……止めといた方が賢明だと言う事は明らかですね」

2人共、苦笑しながら一步下がった所で見ている。

尾崎

「けど、皆さん個性的ですね」

新沢

「……あれを個性が見えると言えるんでしょうかね？ まあ、個性が濃いキャラは集まっているのは確かですけど」

尾崎

「さて、取材の続きに行きますよ」

新沢

「はいはい」

次号へ



## 会話前の日本側（後書き）

予告

ヤルタ会議により、更に追い込まれたソ連・スターリン！  
内部崩壊も始まり、前線でもソ連兵が投降して来る事態に……

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 連合軍、モスクワへ

7月10日……ヤルタ会議後、既に決まっていた10日に連合軍は各地で一斉攻勢に出始めた。

西方面はドイツのロンメル大将、アメリカのパットン大将の部隊を主力に、南西方面はイギリスのホバート大将、ドイツのマンシュタイン元帥の部隊を主力に、南東方面はスターリンググランドから日本軍・第六大陸派遣軍+トルコ軍（一部）が参加し、攻勢を開始。また、トロツキー首相認可の下、1月攻勢より参加していた元ワルシャワ防衛指揮官ウラソフ中将を中心とした東方大隊が東方軍に命名を変更、100万以上の元ソ連兵が各方面に散りながらも参加していた。

7月13日……日米英の戦略爆撃部隊がウラル山脈にあるソ連軍兵器工場を爆撃。残念ながら戦果は不明。しかし、この後も日米英が交代してウラル山脈のソ連軍兵器工場に戦略爆撃を継続している。

そんな中……

7月15日

南東方面前線

福本

「……………」

ヴィル

「どうしたんですか、元帥？」

福本

「ああ、ヴィルか…実はこれの事でな」

ヴィル

「これは…沖田司令から…あのリリヤ・リトヴァク中尉の事ですか？」

福本

「…正直言つて…彼女の気持ちは解らなくも無い…しかしな…」

実はリリヤ・リトヴァクはスターリンググランド攻略戦前に自分をパイロットの一員に加えて欲しいと直談判して来ていた。

理由は福本も直ぐにわかった…彼女はソ連に復讐する気だと。

しかし、福本は直ぐに『間に合っている』と言って丁重に引き下がってもらった。

福本

「既に彼女は充分苦しんだ…これ以上、彼女に重荷を背負ってほしくない…自己満足かもしれないがな」

ヴィル

「…いえ、普通の人なら誰だってそう思いますよ」

フェルデナント

「元帥、情報通り、敵は2個師団でした。ですが、東方軍の説得により、敵は投降して来ました」

福本

「そうか、ご苦労さん」

ヴィル

「最近、敵に関する情報がいやに正確になってきましたね」

福本

「多分、スターリンググランド陥落やヤルタ会議のせいで、ソ連内部で崩壊が始まったんだろう」

ヴィル

「つまり、保身…ですか？」

福本

「ああ…まあ、そんな事を言ってしまうえば、前線のソ連兵達もだな」  
フェルデナント

「前線のソ連兵達も幹部達も気付いてますよ…スターリン体制が終わりに近付いている事に」

福本

「問題はそのスターリンだな。あいつがさっさとくたばってくれな  
いかね？」

ヴィル

「元帥…それは我々が直接行って殺った方が早いかと…」

福本

「ふむ……ならば、考えてみるか」

フェルデナント

「元帥……まさか本当に……」

ヴィル

「それ以上、突っ込まない方がいいかと……」

苦笑しながら言うヴィルの声を聞きながら、福本はモスクワのある方向を見ながら……

福本

「スターリン……貴様は絶対に逃がさん」

その頃……モスクワ……

スターリンは困惑していた。

それもそうだ、既に連合軍はモスクワに進撃を開始し、政府内部の崩壊も始まっている。

特に前線の部隊が連合軍にそっくりそのまま降伏する事態である。

しかし、『鉄の男』は諦めていなかった。

イザとなれば、ウラル山脈に籠り連合軍と戦うつもりだ。

まあ、そんなところまで付いて行く人間がいるがどうかだが……。

その前に……既に国民から見捨てられている。

しかし……この男、ウラル山脈に逃げる為にある策を持っていた。

何せ、自国民を大量死させても、何も感じない人間だ。

つまり、反撃作戦に出る気であった。

次号へ

**連合軍、モスクワへ（後書き）**

予告

スターリン、最後の反撃開始！？

国民を犠牲にした時間稼ぎに福本はスターリン殺害作戦を練る！

ご意見ご感想をお待ちしております。

ソ連軍、反攻ス(前書き)

新米士官

「よっしゃー!!! ノーベル賞じゃあー!!!」

福本

「…朝からハイテンションだね…」

新米士官

「当たり前じゃ〜! 最近は暗いニュースばかりだったけど、久しぶりの誇れるニュースだ!!!」

マリダ

「まあ…気持ちは解らなく無いけど…」

新米士官

「ふっはっはっは! 中国、韓国! 一度ぐらい、ノーベル賞受賞者ぐらい取ってみい!!! 世界に認められるぐらいの事をな!」

福本・マリダ

( (敵作る事は止めてくれ〜) )



## ソ連軍、反攻ス

7月20日

福本

「……これは本当か？」

フェルデナント

「はい、間違いありません」

マリーダ

「ソ連軍が……反撃？」

フェルデナント

「西方面前線で大規模に、南西方面で小規模。なぜかここは静かですが」

ヴィル

「時間稼ぎのつもりでしょうか？」

福本

「多分……な」

福本にその報告が入ったのは野戦食で朝食を終えた時に入ってきた。それは西方面にて敵の大規模攻勢が開始されたとの緊急電だった。それを聞いて司令部テントに入ると今度は南西方面でも敵の攻勢が開始されたそうだと緊急電が入ったところだった。

石田

「ですが、今更時間稼ぎをしても、何も……」

福本

「果たしてそうかな？ スターリンは史実で息子を見捨てた人間だぞ？」

……本当に親かと世界中のご両親になぶり殺しにされても文句は言えない。

フェルデナント

「まさか……彼らを犠牲にして、ウラル山脈に籠る気……だと？」

福本

「奴ならやりかねん」

マリーダ

「そんな奴は人じゃない！ 血も涙も無い悪魔……いえ、魔帝よ！」

ヴィル

「ですが……そこまでして、一体なにを守ろうと？」

福本

「あいつはスキャンダルや粛清で権力を手に入れたからな……まあ、普通の人間が理解するのは到底無理なレベルにスターリンはいつてるんだらうな」

フェルデナント

「あ、ところで、なぜこちらは静か何でしょうか？」

福本

「動員部隊に限界があつたか……あるいは友軍の危機を聞いた俺達が進撃を停止して、援軍を送ると思つたか……だな」

まあ、後者はあり得ないだろう。

南西方面ならいざ知らず、西方面はいくら何でも移動手段が少なく、距離が長い。

さすがにバカでも、わざわざそんな遠距離の友軍を助けに行くと考えていないだろう。

フェルデナント

「それで、和が軍はどうします？ 何もしない訳は無いですか？」

福本

「西方面は裏をかくのが得意なロンメル大将がいるし、パットン大将の補佐役、ブラッドレー中將もいる。また、南西方面もホバート大将とマンシュタイン元帥がいる。いくらソ連軍でもこれだけの名將揃いなら、充分撃退は出来るだろう。こっちは進むだけさ」

フェルデナント

「わかりました」

福本

「ヴィル、偵察機を出して、ここからモスクワまでを一通り調べてくれ」

ヴィル

「畏の可能性がありますか？」

福本

「ああ、いくらソ連軍でも、兵は出せないが何処かで防備を固めて

いる可能性がある。何処か解らずに進んで罠に嵌まるより、何処か危ない所が無いがある程度解っていた方がいい」

ヴイル

「了解」

その頃……西方面前線

ドイツ軍士官

「全軍後退！ 急げー！」

士官の命令にドイツ兵達は防戦しつつ、徐々に後退していく。対し、ソ連軍は前線に空いた穴に殺到し、行け行けドンドン……とばかりドイツ軍を押しに行く。

これを見たアメリカ軍担当の部隊もドイツ軍の方へと雪崩れ込む。対し、アメリカ軍は物量でソ連軍に対抗、ソ連軍を抜けさせない様になっている。この為、自然にソ連軍はドイツ軍の方へと流れて行く。図にすると……

後退

独軍

— 米 — 米 — 軍 — 軍 — —

前線

?

?

?

?

ソ連軍

と……解るかどうか解らない図解であるが、こんな感じである。  
しかし……ソ連軍は気付いていなかった。  
自分達が『魔女の婆さんの大釜』に自ら入り込んでいる事に……。

次号へ

## ソ連軍、反攻ス（後書き）

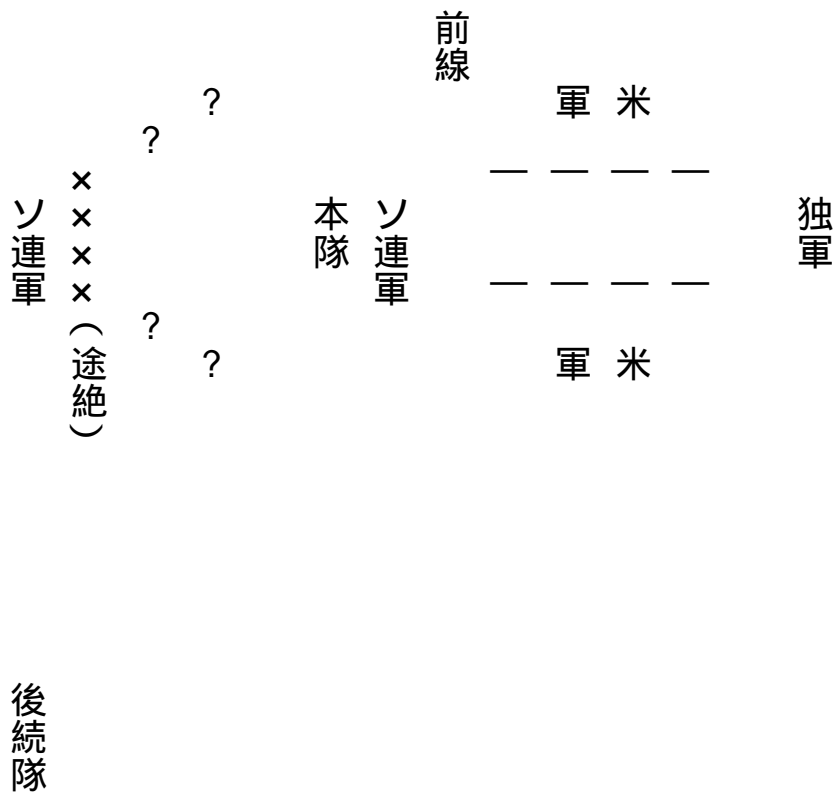
予告

反撃を開始した西方面！ モスクワに迫る日本軍主力の南東方面と  
イギリス・ドイツの南西方面！  
そして、焦るスターリン！？

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 連合軍攻勢状況

7月21日……ロンメル大将指揮の下、遅延後退……あるいは戦術的後退……を続けていたドイツ軍は後退を停止し、反撃を開始。また、パットン大将指揮下のアメリカ軍はドイツ軍を追撃して前線内に入ったソ連軍をとりあえず無視し迂回、前線外の隊列の細い後続・補給隊を両方から挟撃し、途絶させた。つまり……



……と、また解りにくい図解になってしまったが、このような形でソ連軍を包囲した。

この事にドイツ軍と戦っていた本隊が気付いた時には後続隊と完全に切り離され、敵中で孤立していた。

しかも、かけなしの燃料を集めても不足していた状況にも関わらず

スターリンの命令で攻勢を開始した為、戦車を初めとした車両はたちまちなくなり、また後続隊と引き離され為、燃料補給を受けられず立ち往生してしまった。

結局、ソ連軍最後の攻勢は1日で頓挫、それどころか防衛に当たらせる部隊を攻勢に出した為、大部隊が敵中で孤立・包囲された。

つまり、攻勢の結果はソ連軍に『凶』の目が出てしまった。

この報告を受けたスターリンは愕然とした。

何故なら、この攻勢で最低10日は連合軍の進撃を遅らせる……との見込みが完全に崩壊したからだ。

また同日、南西方面の攻勢部隊も撃退された。

7月25日……西方面のソ連軍攻勢部隊、連合軍に降伏。

西方面ソ連軍の抵抗力大幅減少。

7月26～30日……ソ連政府一部高官がモスクワより脱出。中には航空機を奪って逃げる者も。

また、高官達は雲隠れするか、そのまま連合軍に投降・亡命した。

この中にスターリン直属の秘書官があり、スターリンに関する内部情報が連合軍に明らかとなった。

8月1日……南西方面軍、トゥーラを占領。

同日、西方面軍はトペリを占領。



そして……8月2日……  
南東方面軍、リヤザニ占領。

福本

「……あれがモスクワ手前の……最後の障壁か」

フェルデナント

「はい。この川を抜ければ、モスクワは直ぐそこです」

ヴィル

「いよいよ、敵の……スターリンがいるモスクワですね」

マリータ

「けど、敵もそう簡単には通してくれなさそうね」

石田

「確かに……KV-2の化け物やT34/85の改良型みたいなのが少数ですが見えますね……あとは見たことある物ばかりですね」

5人仲良く……では無かろうが……多分……腹這いになり、双眼鏡で偵察している。

フェルデナント

「ここは正攻法でいきましょう。重火砲をこちら側に並べ、航空攻撃で徹底的叩く……いつもの手で」

福本

「まあ、そうだな…さて、引き上げよう」

既に南東方面軍は『連合軍の中で最もモスクワに近い』と言われ…  
…実際リヤザニを占領した時点でモスクワまで100キロちよい…  
…ていた。

まあ、実際のところはそれほど圧倒的距離差がある訳でもないのだが…。

しかし、あと僅かな距離である事は間違い無く、多くの人間はモスクワが落ちれば戦争も終わると思っていた。

しかし、現場と各国政府上層部の人間はスターリンが手を挙げなければ戦争は終わらないとゆう認識で一致しており、スターリンの動きに注意を払っていた。

とにもかくにも、終結まであと一歩である事に変わりはなかった。

次号へ

## 連合軍攻勢状況（後書き）

予告

南東方面軍、対岸制圧開始。

そして、スターリンはモスクワ放棄の準備開始！？

明日・明後日は『士官候補生異世界奮闘記』を更新いたします。お楽しみに。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 難関突破

8月5日

士官1

「サブラム帝国軍より、砲兵隊準備完了の報あり」

士官2

「グイントラント王国軍より、砲兵隊用意よろし」

士官3

「連合王国軍砲兵隊準備完了です」

士官4

「我が陸戦砲兵隊、用意出来ました」

陸軍士官

「宮崎大将。金光砲兵隊準備出来ました」

宮崎大将

「うむ、ご苦労。いよいよだな」

フェルデナント

「はい。ここが最後の難関です。ここを突破すれば、あとはスターリンのみです」

宮崎大将

「ああ…とここで、彼はどうしたのかね？」

フェルデナント

「福本元帥なら、いつも通りに」

宮崎大将

「なら、今頃は双眼鏡片手に前線だね」

フェルデナント

「はい…時間です。始めましょう」

宮崎大将

「ああ…各隊に伝達、砲撃開始！！」

金光砲兵連隊配置場所

士官

「金光連隊長！ 司令部より砲撃開始の命令！」

金光大佐

「よし、各自、打ち合わせ通りだ。日本陸軍砲兵の誉れを見せろ！  
撃て…！」

ドンドン…ドンドン…ドンドン…ドンドン…ドンドン…ドンドン…ドンドン…  
ドンドン…ドンドン…ドンドン…ドンドン…ドンドン…ドンドン…ドンドン…

ビューーウ……………

ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！  
ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！ゴワーン！  
ゴワーン！ゴワーン！………

日本軍を中心とした南東方面軍による対岸制圧射撃は正に鉄の嵐であり、その連続着弾は地震の如く周囲の地面を揺らした。それほど砲弾を浴びるソ連兵達は堪ったものではない。誰もが早く砲撃が終わってくれと思っただろう。そして……唐突に砲撃が止んだ。

士官

「連隊長！ 時間です！」

金光大佐

「全砲撃止め！ 一時砲撃止めー！！！」

え、なぜ砲撃を止めるかって？  
それは……

士官

「海軍サン、上を通過します！」

そう……砲撃下による爆撃は効率が悪いと思われたので、砲兵隊は一時休憩。  
バトンタッチした爆撃隊が襲い掛かった。

唐突に止まった砲撃に、ソ連兵は恐る恐る退避壕から頭を出した。確かに砲撃は止まった……しかし……

ソ連兵

「て、敵機だ！！」

この叫びにソ連兵達は慌て再び退避壕に逃げ込んだ。

前線

福本

「まあ、解ってたけど……あれじゃあ、頭を上げあれ無いよな」

石田

「それどころか、退避壕から外にも出れませんよ」

マリイダ

「これを1日中続けられたら……キツイわね」

ヴィル

「仕方ありませんよ。砲撃と航空攻撃のローテーションですから」

つまり、攻撃隊が飛来するまで砲撃で叩き、攻撃隊が到着すると砲撃を止め、航空攻撃に任せる。

そして、航空攻撃が終わると砲撃を再開する。

石田

「あ、航空攻撃が終わった様ですね」

マリーダ

「なら、次は砲撃ね」

マリーダが言い終わった瞬間、砲撃が再開された。

結局、このローテーション攻撃でソ連軍は一方的に叩かれ、午後3時に対岸より白旗が掲げられ、南東方面軍は無事に渡河する事が出来た。

この報告を受けたスターリンは流石に焦ったか、モスクワ周辺の防衛線を強化する様に軍に命じた。

しかし……既に疲弊しているソ連軍にこれをどうこう出来る体力はなかった。

だからと言って、無いと言うわけでは無い。

その方法とは……それはスターリンの怒りをかうが……ウラル山脈でスターリンと共に籠城する部隊をモスクワに回すしかない。

しかし……制空権さえ満足に確保出来なくなった現状ではそれも難しい。

だが、それはまだモスクワを市民もろとも放棄するよりマシな方である。

まあ、南東方面軍が対岸に渡ったと報告を受けたスターリンは直ぐにモスクワ放棄の準備を始めた。



次号へ

## 難関突破（後書き）

予告

いよいよ最終局面へ！

モスクワ攻略作戦発動！？待ち構えるスターリン…対する福本は？

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 最終作戦協議

後に『オカ川対岸制圧戦』と呼ばれ戦いを終えた南東方面軍は対岸に渡ると停止し、戦線整理及び他の方面軍到着を待った。

そして、8月6日に西方面・南西軍の戦線構築が完了し、いよいよソ連を倒すべく最後の作戦の協議の為、8月8日、各国軍の司令官達が連合軍司令部のあるトペリに集まった。

トペリ……連合軍司令部

パットン大将

「アイク、いよいよスターリンの居るモスクワに乗り込むんだな！？」

やる気満々で訊いたパットンとは反対に、アイゼンハワーは神妙な顔付きになって語った。

アイゼンハワー総司令部

「実はその事だが…判断に迷っている。いくらスターリンが居るからとはいえ、歴史的建造物があるモスクワに砲弾を撃つてよいものかとね」

パットン大将

「いや、それは…」

アイゼンハワー総司令官

「それに、モスクワ市内には多数の民間人が生活している……女性・子供を含めてだ」

パットン大将

「……………」

流石にここまで言われると、南部の名門生まれのパットンだけに言い返す言葉が無い。

ちなみに、こちらの世界では無かったが、歴史的建造物云々に関してはアメリカ軍が失敗した一例がある。それがイタリアのモンテ・カッシーノの戦いである。イタリアの高台にある修道院にドイツ軍が砲撃着弾観測施設があると云って……実はドイツ兵なんて一人も居なかった……爆撃、修道院は破壊するわ、バチカンも怒るわ、それどころかドイツ軍の抵抗拠点にされるわ、加えて謀略宣伝に使われるわ……等々で連合軍が大苦戦したのである。

ちなみに、この戦いで日系人で編成された第100大隊が参加していた。

もう少し知りたい方は最近発売されたワック出版『歴史通 11月号』をお読み頂きたい。

他にも色々載っていて面白いですよ。(＊^^＊)

……って、めちゃくちゃ横道に逸れてるし……

パットン大将

「わからねえでも無いが……仕方ないだろう？」

明らかに声のトーンが落ちた。

マンシュタイン元帥

「だが、ただ闇雲に包囲するだけでは効果は無い」

ホバート大将

「それこそ敵に利するぞ」

ロンメル大将

「だからと言って、力攻めすればこちらの被害も大きい」

アイゼンハワー総司令官

「……非常に難しい」

ドレスデンは？…東京は？…日本は？…とツッコミたいところだが、まあ、史実とは色々違うから置いときましょう……

福本

「……なら、方法は一つ…スターリンを殺るのが一番ですね」

全員

「」「」「」「」「」「」

その場が集まっていた全員が福本の方を見た。

フェルデナント

「元帥……この場でそれはどうかと……」

福本

「……やっぱり？」

やっぱり？…では無いと思うが……

アイゼンハワー総司令官

「それは……どうゆう事ですか、アドミラルフクモト？」

恐る恐る…と言った心境でアイゼンハワーが訊く。

福本

「モスクワは攻撃したく無いし、被害は抑えたい…だからと言って、時間はかけたたくない…と、なれば、スターリンをとつと殺るのが一番でしょう」

ロンメル大将

「だが…スターリンはモスクワの中だ。そんな人間をどうやって…」

福本

「なら、モスクワから出てってもらいましょう。それなら市街戦の必要も無い」

パットン大将

「…どうやってだ？」

福本

「まあ、まずはモスクワから出てってもらいましょう。その後はウラル山脈までの何処かで待ち伏せて、一気に殺ります」

マンシュタイン元帥

「…まさか、君の口からそんな大胆な事が出るとは…」

福本

「…大胆か？」

フェルデナント

「充分大胆です」

宮崎大将

「だれそれを暗殺すると言ってる様なものだ」

ホバート大将

「だが、その後のソ連内部は大丈夫かね？」

福本

「大丈夫でしょう。スターリンがいなくなれば砂城です。ですが、こんな状況では誰かをたてても向こうは戦いを終わらせるでしょう」

アイゼンハワー総司令官

「……アドミラルフクモト、あなたがここまで言われるなら、既に策を考えていると判断してよろしいですね？」

福本

「ええ……ただ、参考程度に聞いて下さい。他にも策があるかもしれませんので」

次号へ

## 最終作戦協議（後書き）

予告

最終作戦発動！？

モスクワに日米英の重爆撃機が迫る！

スターリンは！？

ご意見ご感想をお待ちしております。





一向に反応しない同僚に、近くにいた無線手が肘で軽く突つついた。

航法士

「え、あ、は、はい！ あ、あと15分程です！」

沖田（優）

「大丈夫？ 疲れてるなら、副航法士に交代しなさいよ」

航法士

「は、はい！」

返事はしたものの、どうも気まずい雰囲気……

機長

「沖田司令、この任務の事ですが…元帥自らが作成したと言つのは本当ですか？」

沖田（優）の隣に座る機長の中尉が慎重に言葉を選びながら訊いた。

沖田（優）

「ええ、連合国軍総司令官の承認付きよ」

機長

「…モスクワ爆撃とは本当ですか？ 今までの元帥なら反対の事をやってきたのに…」

沖田（優）

「（ああ、その事か…だからこんな気まずい雰囲気だったのね…まあ、いつか）ああ、出撃前のブリーフィングね。あれは嘘よ」

機長

「はあ…嘘ですか…出来れば嘘であって欲し…ええ！　嘘！！  
??」

沖田（優）

「ええ、真つ赤な大嘘よ。騙された？」

沖田（優）は微笑みながら言ったが、乗っていた全員が驚愕した。

航法士

「いや、だって、ブリーフィング始まって早々『モスクワを爆撃する！』って本気顔で言ったじゃないですか!？」

沖田（優）

「ああ、あれ？　だって、あれぐらいの事しないと本当と思わないじゃない。それだとこの作戦が成り立たないし」

機長

「え…じゃあ、我々が騙される事は作戦だったんですか!？」

沖田（優）

「そうよ。『敵を騙すには先ず味方から』と言う諺もあるでしょう？　福本元帥はこの爆撃行が敵に漏れる様にこんな事をしたのよ」

機長

「じゃあ…我々の真の目的は？」

沖田（優）

「モスクワからスターリンを叩き出す役よ。追い出し役ね」

爆撃手

「ですが、わざわざこんな大編隊にする必要も無いのでは？」

沖田（優里）

「そこが味噌よ。これだけの大編隊が飛行場で爆撃準備をしている事はどう頑張っても秘密に出来ない。だから、何かしらのルートを通ってスターリンの元に届く…セバストポリ要塞の事は知ってる筈だから、当然スターリンは警戒する。それで情報通り大編隊の重爆撃機隊が来襲したら？」

機長

「……まさか…そんな事まで元帥は計算していたんですか!？」

沖田（優）

「さすがに私も呼び出された時は驚いたわ。けど、同じ様に説明されて、ようやくわかったけどね」

爆撃手

「じゃあ…爆弾は…」

沖田（優）

「バカがない限り、どの機も積んで無いわ。まあ、精々嗜好品が生活用品、食糧の入った爆弾型ケースか箱のままでもスクワの街に落ちるくらいね」

これを聞いた搭乗員達はホツとした表情になる。

航法士

「司令、モスクワまであと5分！」

沖田（優）

「全機総員警戒。これよりモスクワに入る。コースそのまま」

操縦士

「よーそろ」

モスクワ市内では空襲警報が響き、市民は防空壕に飛び込み、兵士は高射砲に飛び付く。  
しかし、高空を飛ぶ重爆撃機隊に聞いた様子は無い。そして、富嶽を先頭に全機一斉に爆装庫の扉を開いて。  
そして、爆装庫の物を排出した。

爆撃手

「『爆撃』終了！」

沖田（優）

「操縦士、モスクワの操車場に向かえ」

操縦士

「帰還コースから外れますか？」

沖田（優）

「元帥直々の命令で操車場の確認よ」

操縦士

「わかりました」

コースを変え、操車場を双眼鏡で見た沖田（優）は直ぐに指示を出した。

沖田（優）

「通信士、連合国軍総司令部に打電。『巢二雛八一羽シカ居ラズ』」

通信士

「了解」

任務を終えた一番機は僚機と合流し、帰還した。

次号へ

モスクワ『爆撃』（後書き）

予告

モスクワを脱出したスターリン……待ち受けるは……

ご意見ご感想をお待ちしております。

スターリン死す

『爆撃』より一時間程前……

モスクワ クレムリン

秘書官

「スターリン書記長！ 連合軍の爆撃隊が基地から発進しました！」

スターリン

「よし、専用列車の所に向かう！」

秘書官

「はい！」

秘書官が慌て出ていく。

それから40分後、モスクワ市内では空襲警報が鳴り響く。  
そんな中を一台の車が操車場の方へと走って行った。

そして……『爆撃』終了より10分後……

スターリン専用列車内

スターリン

「バカな連合軍め。今頃は市民と兵士しかいないモスクワを爆撃している頃だな……あとでたっぷりと宣伝に使わせてもらおう」



どうせ、スターリンにとっては市民や兵士達は消耗品である。まあ、そんな消耗品が宣伝に使う事も彼にとっては何の躊躇いも無い。それにスターリンは最初からモスクワとそこに居る市民・兵士達を時間稼ぎに使うつもりだったから、どこも痛くも痒くも無い。まさに血も涙も無い魔王の様な男である。

さて、スターリンを乗せた専用列車は一路ウラル山脈へと向かっていった。

実はこの専用列車は同様の物があと2編成存在している。

内分けとしては、1編成がスターリンを乗せ目的地へ、1編成が囷として別の方向へ、1編成が予備として残る……と言うものだった。今回もスターリンはそうしていた。

また、この事はスターリンとその周りにいる一部の者しか知らない事だった。

しかし、既にこの事は亡命していた秘書官などによって連合国軍にしっかりと知られていた。

だからこそ、福本は沖田優里司令に操車場の確認をさせたのである。そして、ここまで解れば、後は簡単な話であった。

日付は変わり……14日午前0時半頃

ドガン！

キキイイイイ！

突然の爆発音といきなりの急ブレーキに、椅子に座っていたスターリンは勢いで前に投げ出された。

スターリン

「な、何事だ!?!」

秘書官

「さ、さあ?？」

突然の事に疑問符を浮かべる秘書官。

そこに……

ガシャーン!ガシャーン!ガシャーン!ガシャーン!

窓ガラスが割れ、モクモクと煙が広がる。

トトトトトトトトトト!

トトトトトトトトトト!

ダダダダダダダダ!

ダダダダダダダダ!

車両の外から連続した射撃音が聞こえてきた……その合間には悲鳴や怒号が聞こえる。

ようやく、スターリンはこれが襲撃だと気付いた。

しかし、相手が解らない。ここに連合軍はいない……なぜなら、連合軍はモスクワを包囲しているからだ。

だが、集団脱走兵達による襲撃や反乱では無い。

なぜなら、射撃音が違うし、余りにも統制がとれすぎている。

ここまではスターリンはわかったが、そこから先はスターリンも解

らない。

スコルツエニー大佐

「MGは続けてソ連兵、M2は客車に向け撃て!!」

ドドドドドドドドド!

ドドドドドドドドド!

ダダダダダダダダ!

ダダダダダダダダ!

M2を操るアメリカ兵が客車に銃身を向け、MGを操るドイツ兵がソ連兵に向け引き金を引く。

その後ろで日本兵が擲弾筒が発煙弾や通常弾を撃ち込んで攻撃する。今回の襲撃にはスコルツエニー大佐のブランデンブルグ師団、アメリカ・イギリスのレンジャー部隊、日本の空挺連隊より5人づつを選抜し、明るい内に襲撃地点付近に降下、スターリンの専用列車を待ち受けていたのである。

「グワッ!」

「グエッ!」

いきなり客車に向けられた機銃掃射により、護衛の兵達が叫び声をあげながら倒れる。

スターリンは伏せて縮こまっているから解らないが、突然、バタリ

と秘書官が死体となって目の前に倒れてきた。

スターリン

「ひいひい!!」

思わず悲鳴をあげた。

スコルツエニー大佐

「よし…粗方掃討出来たな…客車に乗り込むぞ!」

外を見張る為、各隊2名づつ残し、日本・ドイツは前から、アメリカ・イギリスは後ろから順次客車に乗り込んだ。

日本兵は百式短機、ドイツ兵はMP44、アメリカ兵はトンプソン、イギリス兵はステンを持ち、入る前に2・3個手榴弾を放り込み客車を次々に制圧していった。

スターリンは近くにあったPPSh43を持って壁にもたれ掛かっていた。

あの後から小規模の爆発音ばかり…時々銃声はするが…で、一向に味方は誰も来ない。

本来なら逃げるべきなのだが、ここがどの地域のどこなのか解らない。

と、その時…前の客車から足音が聞こえてきた。

そして、ドアが開いたと思うと何かが放り込まれた。それは何かと確認しようとして体を屈めた瞬間、目の前で爆発した……

ドガン！！

棒付き手榴弾を次の客車に放り込み、爆発した。

そして、スコルツエニー以下ドイツ兵・日本兵が突入した。  
しかし、スターリンは居ない。

スコルツエニー大佐

「ち、既に脱出したか？」

ドイツ兵

「大佐、そこに死体があります」

見ると、確かに死体がある。

よく見ると、軍人とは違う格好の人物……

スコルツエニー大佐

「こいつがスターリンか？」

日本軍将校

「……ああ、格好や体格からして間違い無い。残念ながら、爆発で顔は無茶苦茶だがね」

スコルツエニー大佐

「そうか……よし、任務は完了だ。手筈通り、この客車にはガソリンを掛ける」

ガソリンを掛けた後、襲撃隊は手榴弾を放り込み引き上げた。  
この襲撃での生存者は機関車を動かしていた人間達と数名の護衛の  
ソ連兵だけであった。  
これはスターリンの殺害が目的であり、取りこぼしがあっても別段  
問題はなかったからだ。

次号へ

スターリン死す（後書き）

予告

スターリン死亡……戦争終結ス。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 大戦終結

1945年8月14日午前0時半……後に『スターリン暗殺作戦』と有名になる作戦は成功し、襲撃隊は全装備を持って全員が無事に帰還した。

ちなみに、この作戦が世の中に出たのは、1965年に大戦中の機密事項が機密解除を受け、一般に公開されてからであった。

そして、連合国軍は……何もしなかった。

ここは一挙に！……といきたいところだがソ連側の動きを見るため、全軍に厳戒態勢をとりつつ、1日様子を見る事にした。

それに、ゲーレン機関やロシア共和国等の情報通を通じ既に反スターリン派が動いている事を連合国軍は知っていたからである。

しかし、それでも何か無ければ連合国軍は午前8時をもってモスクワ周辺の防衛線に対して攻撃を開始する予定だった。

とにかく、ひたすら連合国軍は待つしか無かった。

そんな中、モスクワでは反スターリン派が動いていた。

彼らはスターリン襲撃成功の知らせをゲーレン機関から受けるとモスクワに残っていたスターリン派の人間を逮捕・監禁した。

特にNKVD（内務人民委員部）のラヴレンチー・ベリヤは必ず逮捕しなければならない人物（独自の戦闘部隊を保有していた事もあるから）であり、反スターリン派の将校指揮の2個中隊を差し向け逮捕した。

また、関係各部署を素早く固め、機能の集約を行った。



14日を丸々1日使い、下準備を整えたのである。

そして、14日深夜、ソ連臨時政府はロシア共和国を通じて連合国に対し『講和の用意がある』と伝えた。

これを前線の連合国軍が知ったのは日付が変わった15日午前1時頃、最も早かったのは日本軍であった。

これにより、相手の意思を確認した連合国軍はソ連臨時政府が指定した15日午前8時（現地時間）に連合国軍とソ連軍司令官同士の停戦・武装解除に関する協議が行われ、午前9時に双方合意の報告がソ連軍側司令官よりソ連臨時政府にされると、臨時政府は改めて世界に『ソ連臨時政府は連合国の講和条件を全面的に受け入れる』と臨時政府フルシチョフ臨時書記長はラジオに宣言。

これは直ぐ様世界中に知れ渡り、連合国各国で号外が刷られ、ラジオは緊急放送を行った。

そんな中で特異だったのは日本だった。

あまり国民を熱狂させない為に戦争関係…大本営発表等…を控え、国民向けの放送に切り換えていた。

しかし、15日早朝から『本日正午より特別放送あり。業務を停止し、静聴するように』と全国各地（南洋諸島、台湾、朝鮮、旅順。

満州は大使館を通じて）に通達があった。

この為、正午前には業務が停止され、正午と同時に玉音放送が開始された。

こうして、1945年8月15日……1940年5月10日から5年3ヶ月（+5日）の長きに渡る大戦は終結した。

次号へ

## 大戦終結（後書き）

予告

第七艦隊の日本帰還までを書く予定です。

ご意見ご感想をお待ちしております。

## 帰還 + 宴会

8月20日……モスクワに連合軍到着。  
しかし、モスクワには入らず、郊外での駐屯となった。

8月21日……連合軍及びソ連臨時政府関係者を含めた合同慰霊祭を結構。  
日本陸海軍もちろん参加。

8月22日……ソ連臨時政府の要請に従い連合軍による治安維持任務開始。  
特に日本陸海軍は重要所の警備を任された。

9月1日……モスクワにて連合軍とソ連臨時政府による講和条約調印式。  
この日よりソ連臨時政府はトロツキー首相のロシア共和国に編入され、トロツキー首相に全権移行。

9月2日……ロシア共和国軍による治安維持任務開始。  
徐々に連合軍は治安維持任務を委託させる。

9月15日……日本陸海軍、ロシア共和国軍に担当区域治安委託を終了。  
日本軍引き上げへ。

9月25日……日本欧州派遣軍、オデッサ・セバストポリより出港。  
同日、第6大陸派遣軍も日本軍と共に出港。

10月5日……日本欧州派遣軍・第6大陸派遣軍、アレキサンドリアに入港。  
給油・補給開始。

10月10日……両派遣艦隊出港。  
これに合わせ、アレキサンドリアに入港していた護衛総隊及び輸送船団、日本等に移住を希望する人間を乗せた客船等が派遣艦隊と共に同時出港。

10月30日……両派遣艦隊+輸送船団、シンガポールに入港。

11月4日……両派遣艦隊+輸送船団、シンガポールを出港。

11月7日……フィリピン近海で第6大陸派遣艦隊と分離。  
ちなみに、第6大陸派遣艦隊の本国到着日は11月18日だった。

11月12日……日本欧州派遣艦隊……もとい第七艦隊、呉に到着。  
第七艦隊……任務終了。

12日夜 呉軍港

戦艦播磨艦内会議室

大和

「それでは！ 第七艦隊全艦無事帰還と戦争終結を祝って…乾杯！  
！」

全員

「……………乾杯！！……………  
……………」

日本海軍艦魂恒例…と言うべきか、スペースの広い播磨の会議室を  
使い、戦勝宴会。

和泉・飛驒

ワシントン

「酒持って来い！！」

赤城

「負けないからね！ 私も頂戴！」

金剛

「やれやれ…まあ、負けはしないがな」

天城

「それでね、赤城ったら、顔真っ赤にしてさ」

扶桑

「それなら山城もそうよ、愛宕の事になると…」

播磨

「うう、書類がありすぎ」――」

近江

「お姉ちゃん、別に今やらなくても…」

河内

「はあ……」

土佐

「河内はどうしたの？」

加賀

「彼女が国別とゆう悲劇ね」

ノースカロライナ  
美濃

「これからどうなっちゃうんでしょうかね？」

アーカンソー  
出雲

「まあ、我々が考えたところで仕方がない」

遠地

「まったく、お前の出番は一回だけだったな」

島津

「うるさい、お前の回数が多いだけだ！」

福田

「もう、せつかくの宴会をぶち壊す気ですか？」

ミア

「私はこのまま日本にいいんですよね？」

神谷

「大丈夫大丈夫！ もう正式な海軍士官なんだし…あ！ 蒼紫様」

「

篠森

「……………」

楠木

「あなたね…少しは応えてあげたら？」

篠森

「…必要はない。操もわかっている」

ラフィール

「ジントゥ…スー…スー…」

ジント

「ラフィール…完全に寝ちゃったよ」

ヴィル

「そちらは良さそうですね」

……と、やんやん周りは騒いでいる。

そんな中、福本は隅っこの方でそんな情景を見ている。

山城

「…そんな所に居てよろしいのですか、福本殿？」

福本

「山城さん…いいんですよ」

そう言いながら、酒を燻らす。

山城

「まったく……主役がこんな隅っこでチビチビと……」

福本

「酒を勧められますから…隅っこでいいです」

愛宕

「山城さ〜ん、敵傍さん達が呼んでますよ〜」

山城

「では、福本殿。あとで」

福本

「はい」

山城が行くと、福本は再び杯を燻らす。

長門

「なーに、一人で飲んでのん？」



福本

「長門さん…それに陸奥さん」

陸奥

「む…眼鏡は要らないか…」

そう言つて陸奥は眼鏡を外す。

福本

「もしかして…陸奥さんつてだて眼鏡だったんですか？」

長門

「ええ、そうよ」

福本

「陸奥さん…眼鏡外したままの方が良いですよ」

陸奥

「え？眼鏡？」

福本

「ええ…外した方が良いかと…」

武蔵

「お兄ちゃん、おでんにする？ 鍋にする？」

福本

「…任せるよ」

武蔵

「オツケ〜！」

長門

「すっかり懐かれてしまったわね」

福本

「生きてる内にちゃんとさせますよ」

何時までも生きてる訳でもないし…。

……こうして、宴会は深夜の深みを増してゆく……

次号へ

帰還＋宴会（後書き）

予告

次号……言わずもがな、最終話。

ご意見ご感想をお待ちしております。

**最終話 未来へ…（前書き）**

以外と早く書けたので更新致します。  
だけど……終わるとなると寂しいな……

あ、後書きも見て下さい、本当に見て下さい！（大事な事なので二度言いました）

最終話 未来へ…

日付が変わった頃……

播磨艦内会議室

死屍累々……これ程この言葉が似合う場面である。  
酒で、あるいは食べ物でつぶれた艦魂・人間があちこちに倒れ、酒  
瓶や皿が散乱している。  
そんな場面をつぶれていない艦魂や人間が片付けていく。

長門

「…あら？」

武蔵

「どうしたんですか、長門お姉ちゃん？」

長門

「…さっきまで福本くんが居ただけど…」

そう言いながら、福本が居た隅っこを見る。

居た場所には…杯と皿と箸が置かれているだけだった。

播磨甲板

福本

「マリーダ」

マリーダ

「あら、呼んでおいて遅いんじゃない？」

福本

「ん、そうか？ 丁度かと思うけど…」

マリーダ

「うそうそ、真に受け過ぎ〜」

福本

「…一本取られました」

呆れつつも、普段と変わらぬマリーダに安心した福本。

マリーダ

「それで、用事ってな〜に？」

福本

「あ、いや〜な…アレキサンドリアからこつち、色々考えてさ…  
戦争も終わった事だし…だからと言って、暇になる訳でもないし…  
…」

マリーダ

「それで？」

福本

「いや…まあ、この平穩も一時だからな…それに、周りも色々とうるさく成るしな…」

マリイダ

「だ〜か〜ら？」

福本

「……今の内にけ、結婚しといた方がいいかな〜……なんてさ…」

マリイダ

「それは良いわね。で、誰と？」

福本

「……………今夜は意地悪だね」

マリイダ

「誰かさんが確り言わないからでしょう？」

なんだ…お見通しなのね……

福本

「…マリイダ！ 結婚してくれ！ 一生…いや、百回生まれ変わっても大事にするから！！」

マリイダ

「…ずーと待ってたのよ。大好きなダイスケがそう言ってくれるのね」

福本

「…返事だよな？」

マリダ

「もっと解りやすい返事がある？」

福本

「いや、もう一度…かな」

そう言つと、福本は自らの唇をマリダの唇にゆっくりと押し付ける……

マリダ

「…返事は要らないわね」

福本

「さっきので良いよ」

顔を離れた福本が照れくさそうに笑つ。  
その時……

ドタドタドタドタドタ!!

何かが崩れる音がして、2人がそつちを見れと、一部を除く人間と艦魂達が、まるで組体操で崩れた時の様に折り重なる姿……

福本

「……何やってんだ、おまえら？」

福田





海龍

「に、逃げなきゃ…殺される〜!!」

ドタバタドタバタドタバ!

海龍の一言で……全員が何処かに逃げ散った。

福本

「…逃げたな」

マリーダ

「そうね…雰囲気ブチ壊されたわ」

山本軍令部総長

「まあまあ、せつかくの夜だ。許してやりなさい」

福本

「……普通に会話に加わらないで下さい。その前に、いつの間にかここに来てたんですか!?!」

山本軍令部総長

「いや、艦橋で日進達と」飲んでいた」

マリーダ

「…知らなかった」

福本

「いや、神出鬼没だよ」

山本軍令部総長

「まあ、それは置いてだな…結婚するんだな？」

福本

「…新手の意地悪ですか？」

山本軍令部総長

「なぐに、告白はしても、結婚式はどいつするかは決めてないだろう…そうゆうのは僕に任せろ」

福本

「……変な事はしないで下さいよ？」

山本軍令部総長

「なに、任せておけ」

そして……1945年12月15日……横須賀軍港

播磨甲板

福本

「…だから、あの親父に任したく無かったんだ！」

木村中将

「まあまあ、せっかくの結婚式をブチ壊す気かね？」

遠地

「木村教官の言う通りだ。せつかくの結婚式…」

福本

「俺が言いたいのはそこじゃない！ 何で陛下からの預かり物の戦艦で結婚式をするんだよ！ ある意味失礼だぞ！？」

福田

「その陛下が認められている事ですし…良いんじゃないですか？」

福本

「福田…もう少し疑問に思えよ…」

島津

「まあ、お前の為にモンタナ、ネルソン、ビスマルク、ワルキューレ、ラー・カイラム…とお祝い艦が来てる事だし」

福本

「……出来れば、静かに結婚式がやりたいよ」

全員

「…………それは無理だ…………」

福本

「…ツッコミ入れられたし」

沖田

「ですが、以外でしたね。第一砲塔前が式場だったのは変とは思いませんでしたが、ウエディングドレスは海龍に任すなんて」

福本

「…マリィダが任すって言っちゃたしな…海龍め、いつの間に裁縫が得意になっただんだ？」

福田

「コスプレのせいでしょう」

福本

「……そうだな」

世の中怖いね。

石田

「元帥！ 出番ですよ！」

福本

「礼儀用軍服で結婚式か……緊張するな」

遠地

「ほら、主役が今さら緊張すんなよ」

福本

「…無理だ」

後に… 『世界最強の夫婦』 『アドミラル夫婦』 と世界から言われる事になる夫婦の結婚式の始まりだった。

……そして……時は流れて64年後……

2004（平成16）年4月6日

神戸海軍士官学校埠頭……練習艦陸奥艦内

陸奥

「ん……う……ん……しまった！ 寝ちゃった！」

福本とマリィダの結婚式写真が入ったアルバムのページを開けて寝ていた陸奥が慌てて壁の電子時計を見る。  
時計は……午前8時半を指していた。

陸奥

「確か……入学式は10時からよね」

練習艦となり、神戸士官学校に配備され、日進の様に生徒の入学・卒業を見てきた。

陸奥

「今年はどんな生徒が入学するのかしらね」

そう言い、埠頭側の舷窓を開けた。

その時……

「おゝい、やっぱり、じいちゃんが言った通りだぞ」

「当たり前だ。お前のじいちゃんと俺のじいちゃんが編入させたんだからな」

2人の生徒……話具合からして新入生……が埠頭に居た。

「砲術科としては、戦艦の主砲に勝る物は無いな」

「その気持ちには同意だな」

陸奥

(あの口調……どこかで……)

「じいちゃんみたいに、戦艦で砲戦の指揮を執ってみたいな!」

「残念ながら、最低あと10年先だぞ」

「なら、当然お前の指揮下だな。じいちゃんみたいに」

「よせやい」

陸奥

(間違いない！ あの2人にそっくり！)

何より…… 1人は手ぶらだが…… 1人は黒鞘の日本刀を持っている。

陸奥は慌てて転移した。

見えるかどうかは解らない……しかし、それでも……とゆう気持ちがあった。

まるで……日進に昔聞いた3人の出会いの様だったから……

END



最終話 未来へ…（後書き）

新米士官

「『異世界日本近代史』第七独立機動艦隊奮戦記』…この作品をもつて最終話となりました！（涙）」

遠地

「長かったな」

千歳

「開始から約2年…よく連日更新出来たわね」

新米士官

「そう言われると…ちょっと…」

福本

「…なあ、最後のあれはなんだ？ まるで何かの複線…」

新米士官

「あ…実は続編の構想があるんだよね」

マリーダ

「どんな？」

新米士官

「詳しくは無理です。まあ、ヒントとしては、『宇宙人が攻めて来る』？」

山城

「作者、ネタバレだぞ」

作者

「う、うるせい！」

遠地

「ところで…俺らはどうなる訳？」

山城

「む、そんな事を言えば、私と愛宕はどうなる！？」

マリィダ

「私達の結婚式は！？」

新米士官

「そ、それらこの作品で語れなかった物は『外伝』にして…」

全員

「……………外伝構想があつたんかい！」  
「……………」

新米士官

「は、はい」

福本

「……………当分はどうする？」

新米士官

「えーと、『士官候補生異世界奮闘記』を連日更新にして、『外伝』を土・日更新にするか、反対にするか、ごちゃ混ぜにするか…正直



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3636f/>

---

異世界日本近代史～第七独立機動艦隊奮戦記～

2010年10月18日17時33分発行